板　付

―市営住宅建設にともなう発掘調査報告書―

1971～1974

福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集

上　巻

本　編

1976

福岡市教育委員会

板　付

―市営住宅建設にともなう発掘調査報告書―

1971～1974

福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集

上　巻

本　編

1976

福岡市教育委員会

板　付

—市営住宅建設にともなう発掘調査報告書　1971～1974—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集

1976年3月31日発行

編集　福岡市教育委員会文化課板付遺跡調査事務所
福岡市博多区板付2丁目11の1

発行　福岡市教育委員会　©
福岡市中央区天神1丁目8の1

印刷　㈱チューエツ福岡工場
福岡市博多区東比恵2丁目9番1号

序　　文

近年、福岡市周辺は人口増加に伴う宅地開発が急増し、弥生時代初頭の農耕集落遺跡として知られている板付遺跡もその例にもれず、往年の農村的環境をほとんど失いつつあります。

昭和46年、板付台地西側の水田地帯に公営住宅を建設することが、福岡市建築局において計画され、福岡市住宅供給公社が団地造成をすることになりました。この地域には弥生時代の農耕生産遺構の存在が予想されたため、福岡市教育委員会文化課が同年8月から調査を実施いたしました。昭和48年板付遺跡調査事務所を設立し、調査と併行して板付遺跡を保存整備するため、用地の買い上げを実施して今日に至っております。

調査は昭和49年3月まで行いましたが、縄文時代早期の包含層、弥生時代の各期にわたる生産遺構や、それに伴う生産用具の出土を見、また、一部台地上の生活遺構や墓地なども検出され、弥生時代の社会を知るための多大な成果を挙げることができ、重要な生産遺構の一部が保存されることになりました。

これは、福岡市建築局、福岡市住宅供給公社、地元各位の埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力の賜物であり、深甚なる謝意を表するものであります。

本報告書が、埋蔵文化財に対するご理解と保護の一助となり、学術研究の分野においても一資料としてご活用いただくことを願ってやみません。

昭和51年3月　　福岡市教育委員会　教育長　古村澄一

例　　言

1. 本書は、福岡市建築局が福岡市博多区板付2丁目・3丁目に計画した板付市営住宅地の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査・報告書の作製は福岡市教育委員会文化課が行った。
3. 本書は本編と付編とにわけ、本編を発掘調査の報告とし、付編を調査にともなって専門家に依頼した諸調査・鑑定の報告とする。
4. 本報告書は全体を上・下2巻にわけ、上巻に本編の第1章～第7章を、下巻に本編図版と付編をおさめる。大きな挿図は別添付図とする。
5. 挿図の番号は章ごとにあらためる。Fig.3•4、Fig.5•10はそれぞれ第3章の4番目の挿図、第5章の10番目の挿図を示す。
6. 出土遺物には以下の記号と番号を付した。縄文式土器J、弥生式土器Y（本書では夜臼式土器も弥生式土器として扱う）、土師器H、須恵器Su、瓦器G、陶磁器C、石器S、石製品Ss、土製品D、滑石製品K、木製品・木材Wとする。弥生式土器と木製品・木材は記号のあとに第1区は1001から（第1区の弥生式土器は1から）、2区は2001から、第3区は3001から、第4区は4001から番号を付す（ただし第1区竪穴出土の弥生式土器は各竪穴ごとに1から番号を付した。P64－7は第64号竪穴出土弥生式土器の7番）。土師器、須恵器、瓦器、陶磁器は、記号のあとに第1区は101から、第2区は201から、第3区は301から、第4区は401から番号を付す。石器は、第3区・第4区は1から、第2区は1001から、第1区の竪穴は2001から4000代の、第1区の土坑墓・甕棺墓埋土中出土品は5001から、その他は6001から7000代の番号を付す。それ以外の遺物は出土位置にかかわりなく記号のあとに1から番号を付す。上記以外の遺物については記号・番号を付さない。

番号を付した遺物は、土器類(陶磁器も含む)は図示したもののみ、他は出土品すべてである。

表中では次のような遺構の記号を用いた。竪穴P、甕棺墓K、土坑墓・木棺墓D、柱穴状小竪穴SP。

7. 遺物の整理は主として土器を沢、土師器・須恵器・瓦器・陶磁器を横山、石器・石製品・滑石製品・土製品を横山・山口、木製品を後藤が担当した。遺物の実測は上記4人の他に玉永光洋・浜石哲也・原俊一・小林義彦・野尻雄三・山本雅靖・渡部明夫が行い、一部九州大学考古学研究室学生が行った。現場での実測は調査参加者が分担して行い、一部文化課の山崎純男・松村道博が行った。現場での写真撮影は後藤が行い、一部横山・沢が担当した。遺物の撮影は斉藤博明が担当し、一部後藤が行った。

8. 本報告書本編の執筆は後藤・沢・横山・山口が分担し、一部古川博恭、三島格、浜石、野尻、原が担当した。担当部分に明記し責任を明らかにする。

付編は各専門家の執筆になる。付編第10は文化課の田坂大蔵氏の協力をえた。

9. 本報告書の構成・編集は後藤が立案し、編集作業は第3章第3節を沢が、他を後藤が担当した。

10. 本報告書作製の事務は楢崎幸利、草場九男、安田正義が担当した。

本　文　目　次

本　編

〔上巻〕

第1章　調査の経過 …… 1
第1節　板付遺跡の調査研究略史 …… 1
第2節　調査にいたる経過・組織 …… 3
1　経　過 …… 3
2　組　織 …… 3
第3節　調査経過 …… 7
1　区の設定 …… 7
2　各年度の調査概要 …… 8
第4節　調査にともなう諸調査・鑑定 …… 15
第2章　地質・地理的環境 …… 17
第1節　地形・地質 …… （古川博恭）17
1　地形 …… 17
2　地質 …… 19
第2節　周辺の遺跡と歴史的環境 …… 27
1　先土器時代の遺跡 …… 27
2　縄文時代の遺跡 …… 27
3　弥生時代の遺跡 …… 27
4　古墳時代・歴史時代の遺跡 …… 31
第3節　周辺調査の概要 …… 32
第3章　第1区の調査 …… 35
第1節　概観 …… 35
第2節　沖積地の調査 …… 36
1　層位 …… 36
2　遺構と出土遺物 …… 38

(1) 弥生時代の遺構と出土遺物……38

a 溝……38

b E－17グリッドの小竪穴と杭列……41

c F－17グリッドの矢板……44

(2) 古墳時代以後の遺構と遺物……45

3 包含層出土の遺物……51

(1) 弥生時代の遺物……51

a 土器……51

i）D－17bトレンチ出土土器……51 ii）E－17グリッド出土土器……58
iii）F－17グリッド出土土器……71 iV）D－17aトレンチ出土土器……72
V）D－16トレンチ出土土器……74 Vi）C－14bトレンチ出土土器……82
Vii）C－14aトレンチ出土土器……93 Viii）C－13グリッド出土土器……104
iX）E－14グリット出土土器……105 X）H－16グリット出土土器……105

b 石器・土製品……106

(2) 古墳時代以後の遺物……119

i）C－14bトレンチ黒色粘質土層（第7層）出土の土師器……119 ii）C－14bトレンチ暗灰褐色粘土層（第5層）出土の土師器……122 iii）C－14aトレンチ黒色粘質土層出土の土師器・須恵器……123 iV）E－17グリッド耕土層出土の古銭……124

第3節 台地上の遺構と遺物……127

1 遺構の種類と分布・現状……127

2 弥生時代の遺構と出土遺物……127

(1) 竪穴と出土遺物……127

(2) 甕棺墓……266

a 小児用甕棺墓……266

b 成人用甕棺墓……297

(3) 土坑墓・木棺墓……326

3 古墳時代以後の遺構と遺物……357

(1) 住居址……357

(2) 井戸状遺構……361

(3) 溝・柱穴・杭……365

4 耕土層・包含層の遺物……367

(1) 弥生式土器……367

(2) 石 器……372

(3) 土師器・須恵器・瓦器・片口・瓦……378

(4) 陶磁器…… 383
(5) 滑石製品…… 386
第4節 第1区調査のまとめ…… 386
第4章 第2区の調査…… 395
第1節 概 観…… 395
1 層 位…… 395
2 遺構・遺物の分布…… 396
第2節 遺構とそれにともなう遺物…… 398
1 弥生時代前期の遺構と遺物…… 398
(1) J－22トレンチの矢板列…… 398
(2) J－23トレンチの矢板列…… 399
(3) J・K－25トレンチの矢板列…… 401
(4) J－26トレンチの矢板列…… 403
(5) J－21トレンチの杭…… 405
(6) 出土遺物…… 406
a 土 器…… 406
b 木製品…… 407
2 弥生時代中期の遺構と遺物…… 412
(1) 台地際の遺構と遺物…… 412
a G－24トレンチ…… 413
b G－25トレンチ…… 413
c G－26トレンチ…… 414
d G－24・G－25・G－26トレンチの遺構出土の遺物…… 416
i）土器…… 416 ii）木製品…… 422 iii）石器・土製品…… 429
(2) 旧河岸の遺構と遺物…… 429
a J－23トレンチの中期土器群…… 429
b J・K－25トレンチの旧河岸中期土器群…… 430
c J－26トレンチの中期土器群…… 430
d 出土遺物…… 431
i）土器…… 431 ii）木製品…… 451
3 弥生時代後期の遺構と遺物…… 452
(1) J・K－25トレンチの畦状遺構…… 452
(2) 畦状遺構出土遺物…… 453

a　土　器…… 453
b　銅　鏃…… 458
c　木製品…… 458
4　その他の遺構と出土遺物…… 468
(1)　H－21トレンチの杭群…… 468
(2)　H－23トレンチの流木群…… 468
(3)　H－21トレンチとH－23トレンチ出土の杭・流木…… 468
第3節　包含層の出土遺物…… 469
1　G－25・G－26トレンチの弥生時代前期包含層の遺物…… 469
(1)　土　器…… 469
(2)　石　器…… 471
2　G－24・G－25・G－26トレンチ客土層の遺物…… 471
(1)　弥生式土器…… 471
a　G－24トレンチ…… 471
b　G－25トレンチ…… 484
c　G－26トレンチ…… 495
(2)　石器・石製品…… 502
(3)　金属器…… 505
3　その他の包含層出土遺物…… 505
(1)　J・K－25トレンチ耕土下包含層出土弥生式土器…… 505
(2)　その他の包含層出土弥生式土器…… 510
(3)　石　器…… 511
(4)　須恵器・陶磁器…… 520
(5)　瓦…… 524
第4節　第2区調査のまとめ…… 524
第5章　第3区の調査…… 543
第1節　概　観…… 543
1　層　位…… 543
2　遺構と遺物の分布…… 544
第2節　遺　構…… 547
1　旧河岸の堰状遺構…… 547

(1) 第1号遺構…… 547
(2) 第2号遺構…… 548
(3) 第3号遺構…… 550
2 溝と杭列…… 551
(1) 北東側の溝と遺構(1)…… 551
(2) 北東側の溝と遺構(2)…… 556
(3) 南東側の溝と遺構…… 561
(4) 西側の旧河川支流…… 564
3 縄文式土器の出土状態…… 568
第3節 遺 物…… 570
1 遺構出土の遺物…… 570
(1) 弥生式土器…… 570
(2) 木製品・木材…… 581
(3) 石 器…… 596
2 その他の遺物…… 597
(1) 縄文式土器と石器…… 597
(2) 弥生式土器…… 602
(3) 土師器…… 611
(4) 須恵器…… 614
(5) 陶磁器…… 614
(6) 石 器…… 617
(7) 滑石製品…… 617
第4節 第3区調査のまとめ…… 618
第6章 第4区の調査…… 629
第1章 概 観…… 629
1 層 位…… 629
2 遺構・遺物の分布…… 630
第2節 遺 構…… 630
1 M－8・9区の杭列と溝…… 630
2 0－6区・P－7区の杭列と溝…… 631
3 P－3区の杭列と溝状遺構…… 634

第3節　遺　物…… 634
1　弥生式土器…… 634
2　土師器・須恵器・瓦器・磁器…… 638
(1)　遺構出土の瓦器・青磁器…… 638
(2)　包含層出土の土師器・須恵器…… 639
3　木製品・木材…… 641
4　石　器・その他…… 641
第4節　第4区調査のまとめ…… 642
補　先土器時代の遺物 …… 644
第7章　調査のまとめ…… 645
第1節　遺　構…… 645
1　生産遺構…… 645
2　生活遺構…… 647
3　墓　地…… 649
第2節　遺　物…… 655
1　弥生式土器…… 655
2　石　器…… 657
3　木製品…… 663
第3節　板付遺跡　――あとがきにかえて―― …… 666

文　献…… 676

付　編

〔下巻〕

付編第1　板付遺跡の地質……古川博恭…… 1
付編第2　土壌……青峰重範……25
付編第3　板付遺跡の花粉分析学的研究……中村　純・畑中健一……29
付編第4　板付遺跡におけるplant opal分析 ……藤原宏志……53
付編第5　木材の材質……嶋倉巳三郎……67
付編第6　板付遺跡出土の種子について……粉川昭平……89
付編第7　Cucumio melo（マクワウリ・シロウリなど）の出土種子について……藤下典之…… 105
付編第8　板付遺跡出土の籾・炭化米等について……佐藤敏也…… 113
付編第9　ボーリング調査結果…… 133
付編第10　板付遺跡の古記録…… 142

写真図版目次

PL. I　板付遺跡周辺航空写真（1974年２月撮影）

PL. II　板付遺跡全景（航空写真、1974年２月撮影）

PL. III　板付遺跡発掘地全景（西から）

PL. IV　第１区主要部全景（航空写真）

PL. V　１．第１区から第２・第３区をみる（航空写真）
　２．第１区と御笠川（航空写真）

PL. VI　１．Ｅ－17グッド　杭列と小竪穴
　２．Ｅ－17グリッド小竪穴

PL. VII　１．Ｆ－17グリッド矢板状木材出土状態
　２．Ｆ－17グリッド木材・土器片出土状態

PL. VIII　１．第１区台地南側おちこみ状態
　２．Ｄ－18トレンチ東壁断面

PL. IX　１．Ｄ－17ｂトレンチ南壁中央部断面
　２．Ｄ－17ｂトレンチ石錘・土器出土状態(1)
　３．Ｄ－17ｂトレンチ石錘・土器出土状態(2)

PL. X　１．Ｃ－14ｂトレンチ全景
　２．Ｃ－14ｂトレンチ土師器出土状態

PL. XI　１．Ｃ－14ｂトレンチ内第２号ピットと土師器出土状態
　２．Ｃ－14ａ・ｂ両トレンチ間第17号ピット

PL. XII　１．第１区古墳時代住居址
　２．第１区古墳時代住居址内土器出土状態

PL. XIII　１．第１区台地上遺構群　２．井戸
　３．第９号竪穴　４．第９号竪穴内土器出土状態

PL. XIV　１．第３号竪穴　２．第24号竪穴
　３．第32号竪穴　４．第64号竪穴
　５．第58号竪穴　６．第71号竪穴

PL. XV　１．第36号竪穴　２．第40号竪穴
　３．第63号竪穴　４．第49号竪穴
　５．第70号竪穴　６．第81号竪穴

PL. XVI　１．第80号竪穴　２．第102 号竪穴　３．第91号竪穴
　４．第94号竪穴と第41号土坑墓　５．第103 号竪穴
　６．第95号竪穴　７．第106 号竪穴

PL. XVII　１．第２号甕棺墓　２．第３号甕棺墓　３．第12号甕棺墓
　４．第17号甕棺墓　５．第31号甕棺墓　６．第22号甕棺墓
　７．第23号甕棺墓

PL. XVIII　１．第24号甕棺墓　２．第37号甕棺墓　３．第53号甕棺墓
　４．第27・28号甕棺墓　５．第52号甕棺墓

PL. XIX　１．第38号甕棺墓　２．第49号甕棺墓
　３．第44号甕棺墓と第41号竪穴　４．第58号甕棺墓

5．第44号甕棺墓・第41号竪穴・第20号木棺墓
6．第26・27・28土坑墓
PL. XX　1．第２号木棺墓　2．第２号木棺墓（完掘前）
3．第３・４木棺墓　4．第６号木棺墓
PL. XXI　1．第９号木棺墓　2．第11号木棺墓　3．第13号木棺墓
4．第14号木棺墓　5．第15号木棺墓
PL. XXII　1．第16号木棺墓　2．第20号木棺墓
3．第23号木棺墓　4．第21号木棺墓
PL. XXIII　1．第40号木棺墓　2．第24号木棺墓
3．第41号木棺墓　4．第25号木棺墓
5．第15号・25号木棺墓
PL. XXIV　第１区出土弥生式土器
PL. XXV　第１区出土弥生式土器・土師器
PL. XXVI　第１区出土土師器・中世土器
PL. XXVII　第１区出土石器(1)・土製品(1)・骨角器
PL. XXVIII　第１区出土石器(2)
PL. XXIX　第１区出土石器(3)・土製品(2)
PL. XXX　第１区出土石器(4)
PL. XXXI　第１区出土石器(5)
PL. XXXII　1．Ｊ－23トレンチ、Ｊ・K25－トレンチ発掘状況
2．Ｊ－22トレンチ矢板列
PL. XXXIII　1．Ｊ－23トレンチ矢板列付近木材出土状態
2．Ｊ－23トレンチ矢板列付近木材・土器片出土状態
PL. XXXIV　1・2　Ｊ－23トレンチ矢板列
PL. XXXV　1．Ｊ－23トレンチ矢板列（南側拡張後）
2．Ｊ－23トレンチ矢板列（南側）
PL. XXXVI　1・2　Ｊ－23トレンチ矢板列（部分）
3．Ｊ－23トレンチ中期土器群出土状態
PL. XXXVII　1．Ｊ－23トレンチ矢板列と柵状遺構(1)
2．Ｊ－23トレンチ矢板列と柵状遺構(2)
3．Ｊ－23トレンチ柵状遺構
PL. XXXVIII　1．Ｊ・K－25トレンチ東側全景
2．Ｊ・K－25トレンチ東側矢板列
PL. XXXIX　1．Ｊ・K－25トレンチ西側矢板列付近
2．Ｊ・K－25トレンチ弥生時代中期河岸杭
3．Ｊ・K－25トレンチ西側矢板列
PL. XL　Ｊ・K－25トレンチ旧河岸の中期土器群出土状態
PL. XLI　1．Ｊ・K－25トレンチ畦状遺構全景(1)
2．Ｊ・K－25トレンチ畦状遺構全景(2)
PL. XLII　1．Ｊ・K－25トレンチ畦状遺構
2．Ｊ・K－25トレンチ畦状遺構断面

PL. XLIII　J・K－25トレンチ畦状遺構内・付近遺物出土状態
PL. XLIV　1．J－26トレンチ北壁断面　2．J－26トレンチ杭列
3．J－26トレンチ土器出土状態　4．J－26トレンチ土器出土状態
PL. XLV　1．G－24トレンチ全景　2．G－24トレンチ台地上小竪穴
3．G－24トレンチ客土層土器出土状態
PL. XLVI　1．G－25トレンチ木器出土状態(1)　2．G－24トレンチ又鍬出土状態
3．G－24トレンチ杭列・木材出土状態
PL. XLVII　1．G－25トレンチ木器出土状態(2)
2．G－25トレンチの加工木に挿入された小加工木
3．G－25トレンチ木器出土状態(3)
PL. XLVIII　1．G－25トレンチ木器出土状態(4)　2．G－25トレンチ木器出土状態(5)
3．G－25トレンチ木器出土状態（部分）・杭列
PL. XLIX　1．G－25トレンチ木器出土状態(6)　2．G－25トレンチ網枠出土状態（部分）
3．G－25トレンチ木椀片出土状態
PL. L　1．G－26トレンチ東壁断面　2．G－26トレンチ鋳型出土状態
3．G－26トレンチ土器片出土状態　4．G－26トレンチ木製鍬出土状態
5．G－26トレンチ石斧柄末成品出土状態　6．G－26トレンチ土器出土状態
PL. LI　1．J－23トレンチ矢板列付近出土土器片　2．G－25トレンチ木器群伴出土器
3．G－26トレンチ下部砂層出土土器
PL. LII　第2区出土土器(1)
PL. LIII　第2区出土土器(2)
PL. LIV　第2区出土土器(3)
PL. LV　第2区出土土器(4)
PL. LVI　第2区出土土器(5)
PL. LVII　第2区出土土器(6)
PL. LVIII　第2区出土土器(7)
PL. LIX　第2区出土土器(8)
PL. LX　第2区出土土石器(1)
PL. LXI　第2区出土石器(2)・土製品(1)
PL. LXII　第2区出土石器(3)・土製品(2)・銅鏃・稲束
PL. LXIII　第2区出土木器製品(1)
PL. LXIV　第2区出土木製品(2)
PL. LXV　第2区出土杭(1)
PL. LXVI　第2区出土杭(2)
PL. LXVII　1～3　P－19aトレンチ第3号遺構
PL. LXVIII　1．P－19aトレンチ第3号遺構
2．P－19aトレンチ第3号遺構内土器出土状態
3．P－19cトレンチ第1号・第4号溝
4．P－19dトレンチ第1・4・5・13・14号溝
5．P－19bトレンチ第1号溝と第5号遺構

PL. LXIX　1．P－19bトレンチ第2・3号溝
2．O－19cトレンチ縄文式土器出土状態(1)
3．O－19cトレンチ縄文式土器出土状態(2)
PL. LXX　1．P－20aトレンチ第2号遺構(1)
2．P－20aトレンチ第2号遺構(2)
PL. LXXI　1．P－20aトレンチ第2号遺構(3)
2．P－20aトレンチ第2号遺構内土器出土状態　3．P－20bトレンチ全景
PL. LXXII　1．P－20bトレンチ北壁断面　2．P－20cトレンチ第6号遺構
3．P－20cトレンチ第23号溝内石斧出土状態
PL. LXXIII　1．P－20cトレンチ第6号遺構(1)　2．P－20cトレンチ第6号遺構(2)
3．P－20cトレンチ第6号遺構(3)
PL. LXXIV　1．Q－20dトレンチ第21号溝と杭列　2．Q－20dトレンチ第28号溝断面
3．Q－19bトレンチ杭列　4．Q－19bトレンチ杭打ち込み状態
PL. LXXV　1．Q－21トレンチ第1号遺構(1)
2．Q－21トレンチ第1号遺構(2)
PL. LXXVI　Q－21トレンチ第1号遺構細部(1)
PL. LXXVII　1．Q－21トレンチ第1号遺構細部(2)
2．Q－21トレンチ第1号遺構と木器出土状態
PL. LXXVIII　1．Q－22d・Q－21トレンチ流木群(1)
2．Q－22d・Q－21トレンチ流木群(2)
3．Q－21トレンチ第1号遺構付近木器出土状態
4．Q－22d・Q－21トレンチ流木群内二又鍬出土状態
PL. LXXIX　1．Q－22d～Q－22aトレンチ第34・35号溝と第9号遺構(1)
2．Q－22d～Q－22aトレンチ第34・35号溝と第9号遺構(2)
PL. LXXX　1．Q－22d～Q－22aトレンチ第9号遺構内三又鍬出土状態
2．R－19bトレンチ杭出土状態
PL. LXXXI　1．R－20aトレンチ流木出土状態
2．S－24トレンチ黒色土落込み状態
PL. LXXXII　1．S－22aトレンチ黒色土落込み状態と北壁断面
2．R－22cトレンチ全景
PL. LXXXIII　第3区出土土器(1)
PL. LXXXIV　第3区出土土器(2)
PL. LXXXV　第3・4区出土石器・土製品
PL. LXXXVI　第3区出土木製品(1)・杭(1)
PL. LXXXVII　第3区出土木製品(2)・杭(2)
PL. LXXXVIII　第3区出土杭(3)
PL. LXXXIX　1．M－11グリッド北壁断面
2．P－7トレンチ東壁南側断面
PL. XC　1．P－3bトレンチ杭列
2．S－7グリット南壁断面

挿　図　目　次

地図1　板付遺跡の位置と周辺の遺跡（25000分の1）……28
地図2　板付遺跡（1971～74）調査地全体図……付図1
地図3　板付遺跡周辺の弥生時代遺跡（20000分の1）……付図2
地図4　板付地区旧地形と周辺調査地点図（5000分の1）……付図3
地図5　板付遺跡周辺調査地点……33
地図6　板付台地地図……付図3
地図7　板付遺跡環溝図……付図3

Fig.2•1　福岡平野一般地質断面図……18
Fig.2•2　P－20cトレンチ南壁地質断面図および^{14}C年代測定結果……20
Fig.2•3　洪積世末～沖積世の海水準変動と板付遺跡一帯の地史……21

Fig.3•1　第1区発掘地平面図……付図4
Fig.3•2　第1区土層図……付図4
Fig.3•3　D－17bトレンチ溝内出土土器実測図……39
Fig.3•4　E－17グリッド平面図・土層図……40
Fig.3•5　E－17グリッド小竪穴実測図……41
Fig.3•6　E－17グリッド小竪穴出土土器実測図……42
Fig.3•7　F－17グリッド平面図・土層図……43
Fig.3•8　C－14a・bトレンチ平面図……45
Fig.3•9　C－14bトレンチ1号ピット出土土器実測図……46
Fig.3•10　C－14bトレンチ2号ピット出土遺物実測図……48
Fig.3•11　C－14a～bトレンチ間17号ピット出土遺物実測図……50
Fig.3•12　D－17bトレンチ帯淡青黒灰色粘土層（第19層）出土土器実測図(1)……52
Fig.3•13　D－17bトレンチ溝直上の黒色粘質土層（第17層）出土土器実測図……53
Fig.3•14　D－17bトレンチ黒色粘質土層（第17層）出土土器実測図(1)……55
Fig.3•15　D－17bトレンチ黒色粘質土層（第17層）出土土器実測図(2)……56
Fig.3•16　D－17bトレンチ暗灰～暗褐灰色粘土層（第13•14層）•黒灰色粘土層（第16層）出土土器実測図(1)……57
Fig.3•17　D－17bトレンチ暗灰～暗褐灰色粘土層（第13•14層）•黒灰色粘土層（第16層）出土土器実測図(2)……58
Fig.3•18　E－17グリット灰青色砂質土層（第15層）•灰黒色粘質土層（第13層）下部出土弥生式土器実測図(1)……59
Fig.3•19　E－17グリット灰青色砂質土層（第15層）•灰黒色粘質土層（第13層）下部出土弥生式土器実測図(2)……60
Fig.3•20　E－17グリット灰黒色粘質土層（第13層）上部出土弥生式土器実測図(1)……63
Fig.3•21　E－17グリッド灰黒色粘質土層（第13層）上部出土弥生式土器実測図(2)……65
Fig.3•22　E－17グリット灰黒色粘質土層（第13層）上部出土弥生式土器実測図(3)……66
Fig.3•23　E－17グリッド灰黒色粘質土層（第13層）上部出土弥生式土器実測図(4)……67
Fig.3•24　E－17グリッド灰黒色粘質土層（第13層）上部出土弥生式土器実測図(5)……68
Fig.3•25　E－17グリッド耕土～褐灰色粘質土層出土弥生式土器実測図……70
Fig.3•26　F－17グリッド出土弥生式土器実測図……71
Fig.3•27　D－17aトレンチ出土弥生式土器実測図(1)……72

Fig.3・28　D－17 a トレンチ出土弥生式土器実測図(2)……73
Fig.3・29　D－16トレンチ黒色粘質土層出土弥生式土器実測図(1)……75
Fig.3・30　D－16トレンチ黒色粘質土層出土弥生式土器実測図(2)……76
Fig.3・31　D－16トレンチ黒色粘質土層出土弥生式土器実測図(3)……77
Fig.3・32　D－16トレンチ黒色粘質土層出土弥生式土器実測図(4)……79
Fig.3・33　D－16トレンチ黒色粘質土層出土弥生式土器実測図(5)……80
Fig.3・34　D－16トレンチ黒色粘質土層出土弥生式土器実測図(6)……81
Fig.3・35　C－14 b トレンチ黒色粘質土層（第7層）出土弥生式土器実測図(1)……83
Fig.3・36　C－14 b トレンチ黒色粘質土層（第7層）出土弥生式土器実測図(2)……84
Fig.3・37　C－14 b トレンチ暗褐灰色粘質土層（第5層）出土弥生式土器実測図(1)……87
Fig.3・38　C－14 b トレンチ暗褐灰色粘質土層（第5層）出土弥生式土器実測図(2)……88
Fig.3・39　C－14 b トレンチ暗褐灰色粘質土層（第5層）出土弥生式土器実測図(3)……89
Fig.3・40　C－14 b トレンチ暗褐灰色粘質土層（第5層）出土弥生式土器実測図(4)……91
Fig.3・41　C－14 b トレンチ第5層西側と暗褐色砂層（第3・3a～3a層）出土弥生式土器実測図……92
Fig.3・42　C－14 a トレンチ弥生式土器実測図(1)……94
Fig.3・43　C－14 a トレンチ弥生式土器実測図(2)……96
Fig.3・44　C－14 a トレンチ弥生式土器実測図(3)……97
Fig.3・45　C－14 a トレンチ弥生式土器実測図(4)……99
Fig.3・46　C－14 a トレンチ弥生式土器実測図(5)……100
Fig.3・47　C－14 a トレンチ弥生式土器実測図(6)……102
Fig.3・48　C－14 a トレンチ弥生式土器実測図(7)……103
Fig.3・49　C－13グリッド出土弥生式土器実測図……104
Fig.3・50　E－14グリッド出土弥生式土器実測図……105
Fig.3・51　H－16グリッド出土弥生式土器実測図……105
Fig.3・52　第1区沖積層出土石器実測図(1)……107
Fig.3・53　第1区沖積層出土石器実測図(2)……108
Fig.3・54　第1区沖積層出土石器実測図(3)……109
Fig.3・55　第1区沖積層出土石器実測図(4)……111
Fig.3・56　第1区沖積層出土石器実測図(5)……112
Fig.3・57　第1区沖積層出土石製品実測図……114
Fig.3・58　第1区沖積層出土石製品・土製品実測図……115
Fig.3・59　第1区沖積層出土石器実測図(6)……116
Fig.3・60　第1区沖積層出土石器実測図(7)……117
Fig.3・61　C－14 b トレンチ黒色粘質土層（第7層）出土土師器実測図……120
Fig.3・62　C－14 b トレンチ暗褐灰色粘質土層（第5層）出土土師器実測図……122
Fig.3・63　C－14 a トレンチ黒色粘質土層出土土師器・須恵器実測図……123
Fig.3・64　E－17グリッド耕土層出土古銭拓影……124
Fig.3・65　第1区台地上遺構分布図……付図5
Fig.3・66　第1号竪穴実測図……128
Fig.3・67　第1号竪穴出土土器実測図……129
Fig.3・68　第1号竪穴出土土器・石器実測図……130

Fig.3•69　第２号竪穴実測図…… 131
Fig.3•70　第２号竪穴出土土器・石器実測図…… 132
Fig.3•71　第３号竪穴実測図…… 133
Fig.3•72　第４号・５号竪穴および出土土器・石器実測図…… 134
Fig.3•73　第６号・７号・８号竪穴および出土土器実測図…… 135
Fig.3•74　第９号竪穴および出土土器実測図…… 136
Fig.3•75　第10号竪穴実測図…… 137
Fig.3•76　第11号竪穴実測図…… 138
Fig.3•77　第11号竪穴出土土器・石器実測図…… 139
Fig.3•78　第12号竪穴および出土土器実測図…… 140
Fig.3•79　第13号・14号竪穴および出土土器実測図…… 141
Fig.3•80　第15号竪穴および出土土器実測図…… 142
Fig.3•81　第16号竪穴実測図…… 143
Fig.3•82　第17号竪穴および出土土器実測図…… 144
Fig.3•83　第17号竪穴出土石器実測図…… 145
Fig.3•84　第18号竪穴および出土土器実測図…… 146
Fig.3•85　第19号・20号竪穴実測図…… 147
Fig.3•86　第21号竪穴および出土土器・石器実測図…… 148
Fig.3•87　第22号竪穴および出土土器実測図…… 150
Fig.3•88　第23号竪穴および出土土器実測図…… 151
Fig.3•89　第24号竪穴および出土土器実測図…… 152
Fig.3•90　第24号竪穴出土土器・石器実測図…… 153
Fig.3•91　第25号竪穴および出土土器実測図…… 155
Fig.3•92　第25号竪穴出土土器実測図…… 156
Fig.3•93　第26号・27号竪穴および出土土器実測図…… 157
Fig.3•94　第28号竪穴および出土土器実測図…… 159
Fig.3•95　第28号竪穴出土土器・石器実測図…… 160
Fig.3•96　第29号竪穴および出土土器・石器実測図…… 161
Fig.3•97　第30号竪穴および出土土器実測図…… 162
Fig.3•98　第31号竪穴および出土土器実測図…… 163
Fig.3•99　第32号竪穴および出土土器実測図…… 165
Fig.3•100　第32号竪穴出土土器・石器実測図…… 166
Fig.3•101　第33号竪穴および出土土器実測図…… 167
Fig.3•102　第34号竪穴および出土土器実測図…… 168
Fig.3•103　第35号竪穴および出土土器実測図…… 170
Fig.3•104　第36号竪穴および出土土器実測図…… 171
Fig.3•105　第37号竪穴および出土土器実測図…… 172
Fig.3•106　第38号竪穴および出土土器実測図…… 173
Fig.3•107　第39号竪穴および出土土器実測図…… 174
Fig.3•108　第39号竪穴出土石器実測図…… 175
Fig.3•109　第40号竪穴および出土土器実測図…… 176

Fig.3•110　第40号竪穴出土土器・石器実測図…… 177
Fig.3•111　第41号・42号竪穴および出土土器実測図…… 179
Fig.3•112　第43号竪穴および出土土器実測図…… 180
Fig.3•113　第44号竪穴および出土土器実測図…… 182
Fig.3•114　第45号竪穴および出土土器実測図…… 183
Fig.3•115　第46号竪穴および出土土器実測図…… 184
Fig.3•116　第47号竪穴および出土土器実測図…… 185
Fig.3•117　第48号竪穴および出土土器実測図…… 187
Fig.3•118　第49号竪穴および出土土器実測図…… 188
Fig.3•119　第49号竪穴出土土器・石器実測図…… 189
Fig.3•120　第50号・51号竪穴実測図…… 190
Fig.3•121　第50号・51号竪穴出土土器・石器実測図…… 191
Fig.3•122　第52号・53号竪穴出土土器実測図…… 193
Fig.3•123　第54号竪穴実測図…… 194
Fig.3•124　第55号竪穴および出土土器実測図…… 195
Fig.3•125　第55号竪穴出土土器・石器実測図…… 196
Fig.3•126　第55号竪穴出土土器実測図…… 197
Fig.3•127　第56号・57号竪穴および出土土器実測図…… 198
Fig.3•128　第58号竪穴および出土土器・石器実測図…… 199
Fig.3•129　第59号竪穴実測図…… 200
Fig.3•130　第60号・61号竪穴および出土土器実測図…… 201
Fig.3•131　第62号竪穴および出土土器実測図…… 203
Fig.3•132　第63号竪穴および出土土器・石器実測図…… 205
Fig.3•133　第64号竪穴および出土土器実測図…… 206
Fig.3•134　第65号竪穴および出土土器実測図…… 207
Fig.3•135　第65号竪穴出土土器・石器・土製品実測図…… 208
Fig.3•136　第66号竪穴および出土土器・石器実測図…… 211
Fig.3•137　第67号・68号竪穴および出土土器実測図…… 212
Fig.3•138　第67号・68号竪穴出土石器・土製品実測図…… 213
Fig.3•138　第69号・70号竪穴および出土土器・石器実測図…… 214
Fig.3•140　第71号竪穴および出土土器実測図…… 216
Fig.3•141　第71号竪穴出土土器・石器・石製品実測図…… 217
Fig.3•142　第72号竪穴および出土土器実測図…… 219
Fig.3•143　第73号竪穴および出土土器実測図…… 220
Fig.3•144　第74号竪穴および出土土器・石器実測図…… 221
Fig.3•145　第75号竪穴および出土土器実測図…… 223
Fig.3•146　第76号・77号竪穴および出土土器実測図…… 224
Fig.3•147　第78号・79号竪穴および出土土器実測図…… 226
Fig.3•148　第80号竪穴および出土土器実測図…… 227
Fig.3•149　第81号竪穴実測図…… 228
Fig.3•150　第82号竪穴および出土土器実測図…… 229

Fig.3•151 第83号竪穴実測図……230
Fig.3•152 第84号・85号竪穴および出土土器実測図…… 231
Fig.3•153 第86号竪穴および出土土器実測図…… 232
Fig.3•154 第87号竪穴実測図…… 233
Fig.3•155 第88号竪穴および出土土器・石器実測図…… 234
Fig.3•156 第89号・90号竪穴実測図…… 235
Fig.3•157 第91号竪穴および出土土器実測図…… 237
Fig.3•158 第92号竪穴および出土土器実測図…… 238
Fig.3•159 第92号竪穴出土土器・石器実測図…… 239
Fig.3•160 第93号竪穴実測図…… 240
Fig.3•161 第93号竪穴出土土器・石器実測図…… 241
Fig.3•162 第94号竪穴および出土土器・石器実測図…… 242
Fig.3•163 第95号竪穴および出土土器実測図…… 243
Fig.3•164 第96号竪穴および出土石器実測図…… 244
Fig.3•165 第97号・98号竪穴実測図…… 246
Fig.3•166 第99号竪穴および出土土器実測図…… 247
Fig.3•167 第100号・101号竪穴および出土土器・石器実測図…… 248
Fig.3•168 第102号竪穴および出土土器実測図 …… 250
Fig.3•169 第103号竪穴および出土土器実測図… …… 251
Fig.3•170 第104号竪穴および出土土器・石器実測図 …… 252
Fig.3•171 第105号竪穴および出土土器・石器実測…… 254
Fig.3•172 第106号竪穴および出土土器実測図 …… 256
Fig.3•173 第106号竪穴出土土器実測図 …… 257
Fig.3•174 第107号・108号竪穴実測図…… 258
Fig.3•175 第９号・11号甕棺墓および甕棺実測図…… 267
Fig.3•176 第12号・13号甕棺墓および甕棺実測図…… 269
Fig.3•177 第14号・15号・16号甕棺墓および甕棺実測図…… 270
Fig.3•178 第18号甕棺墓および甕棺実測図…… 271
Fig.3•179 第19号・20号甕棺墓および甕棺実測図…… 273
Fig.3•180 第23号・25号・26号・29号甕棺墓実測図…… 274
Fig.3•181 第23号・25号・26号・29号甕棺実測図…… 275
Fig.3•182 第27号甕棺墓および甕棺実測図…… 277
Fig.3•183 第31号・32号・33号甕棺墓および甕棺実測図…… 278
Fig.3•184 第34号・35号・36号甕棺墓および甕棺実測図…… 280
Fig.3•185 第37号・40号・42号甕棺墓および甕棺実測図…… 282
Fig.3•186 第43号甕棺墓および甕棺実測図…… 283
Fig.3•187 第46号甕棺墓および甕棺墓測図…… 284
Fig.3•188 第47号甕棺墓および甕棺実測図…… 286
Fig.3•189 第49号甕棺墓および甕棺実測図…… 287
Fig.3•190 第51号甕棺墓および甕棺実測図…… 288
Fig.3•191 第53号甕棺墓実測図…… 289

Fig.3•192 第53号甕棺実測図…… 290
Fig.3•193 第56号甕棺墓実測図…… 291
Fig.3•194 第56号甕棺実測図…… 292
Fig.3•195 第57号・58号甕棺墓実測図…… 293
Fig.3•196 第57号・58号甕棺実測図…… 294
Fig.3•197 第60号・61号・62号甕棺墓および甕棺実測図…… 295
Fig.3•198 第1号甕棺墓および甕棺実測図…… 298
Fig.3•199 第2号甕棺墓および甕棺実測図…… 299
Fig.3•200 第3号甕棺墓および甕棺実測図…… 300
Fig.3•201 第4号・5号甕棺墓および甕棺実測図…… 302
Fig.3•202 第6号・7号甕棺墓および甕棺実測図…… 303
Fig.3•203 第8号・10号甕棺墓および甕棺実測図…… 304
Fig.3•204 第17号・21号甕棺墓実測図甕棺…… 305
Fig.3•205 第17号・21号甕棺実測図…… 306
Fig.3•206 第22号・24号甕棺墓および甕棺実測図…… 308
Fig.3•207 第28号甕棺墓および甕棺実測図…… 309
Fig.3•208 第30号甕棺墓および甕棺実測図…… 311
Fig.3•209 第38号・39号甕棺墓実測図…… 312
Fig.3•210 第38号・39号甕棺実測図…… 313
Fig.3•211 第41号・44号・45号甕棺墓実測図…… 315
Fig.3•212 第41号・44号・45号甕棺実測図…… 316
Fig.3•213 第48号・50号甕棺墓および甕棺実測図…… 318
Fig.3•214 第52号・54号甕棺墓および甕棺実測図…… 319
Fig.3•215 第55号甕棺墓および甕棺実測図…… 321
Fig.3•216 第59号・63号甕棺墓および甕棺実測図…… 322
Fig.3•217 第1号土坑墓実測図…… 326
Fig.3•218 第2号木棺墓および出土土器実測図…… 327
Fig.3•219 第3号土坑墓・4号木棺墓・5号土坑墓実測図…… 328
Fig.3•220 第6号・7号木棺墓実測図…… 329
Fig.3•221 第8号・9号木棺墓・10号土坑墓および出土土器実測図…… 331
Fig.3•222 第11号・12号木棺墓および出土土器実測図…… 332
Fig.3•223 第13号・14号木棺墓および出土土器実測図…… 334
Fig.3•224 第15号・16号木棺墓および出土土器実測図…… 335
Fig.3•225 第17号木棺墓実測図…… 336
Fig.3•226 第18号・19号土坑墓および出土土器実測図…… 337
Fig.3•227 第20号木棺墓および出土土器実測図…… 338
Fig.3•228 第21号木棺墓および出土土器実測図…… 339
Fig.3•229 第22号木棺墓および出土土器実測図…… 340
Fig.3•230 第23号木棺墓実測図…… 341
Fig.3•231 第24号木棺墓および出土土器実測図…… 342
Fig.3•232 第25号・26号木棺墓、27号土坑墓および出土土器実測図…… 344

Fig.3•233 第28号・29号土坑墓実測図…… 345
Fig.3•234 第30号・31号・32号土坑墓実測図…… 346
Fig.3•235 第33号・34号・35号・36号土坑墓実測図…… 347
Fig.3•236 第37号・38号土坑墓実測図…… 348
Fig.3•237 第39号土坑墓、40号・41号木棺墓実測図…… 349
Fig.3•238 第42号・43号土坑墓実測図…… 350
Fig.3•239 第44号・45号・46号土坑墓実測図…… 352
Fig.3•240 第47号土坑墓、48号木棺墓、49号土坑墓実測図…… 353
Fig.3•241 第50号土坑墓、51号木棺墓および出土土器実測図…… 354
Fig.3•242 古墳時代住居址実測図…… 358
Fig.3•243 古墳時代住居址出土土器・土製品実測図…… 359
Fig.3•244 井戸状遺構実測図…… 362
Fig.3•245 第1号井戸状遺構出土土器実測図…… 363
Fig.3•246 第2号井戸状遺構出土 遺物実測図…… 364
Fig.3•247 柱穴状小ピット出土弥生式土器実測図 …… 368
Fig.3•248 台地上包含層出土弥生式土器実測図(1)…… 369
Fig.3•249 台地上包含層出土弥生式土器実測図(2)…… 370
Fig.3•250 台地上包含層出土弥生式土器実測図(3)…… 371
Fig.3•251 台地上包含層出土石器実測図(1)…… 373
Fig.3•252 台地上包含層出土石器実測図(2)…… 374
Fig.3•253 台地上包含層出土石器実測図(3)…… 376
Fig.3•254 台地上包含層出土石器実測図(4)…… 377
Fig.3•255 台地上包含層出土土師器実測図…… 379
Fig.3•256 台地上包含層出土須恵器実測図…… 380
Fig.3•257 台地上遺構埋土出土片口・土師器・瓦器実測図…… 381
Fig.3•258 台地上遺構埋土出土瓦・須恵器実測図…… 382
Fig.3•259 台地上包含層出土片口実測図…… 383
Fig.3•260 台地上包含層出土瓦実測図…… 383
Fig.3•261 台地上包含層出土陶磁器実測図…… 384
Fig.3•262 台地上包含層出土石製品実測図(1)…… 385
Fig.3•263 台地上包含層出土石製品実測図(2)…… 386

Fig.4•1 第2区主要部平面図……付図6
Fig.4•2 第2区土層図(1)（J－21・J－22・J－23・J－26トレンチ）……付図7
Fig.4•3 第2区土層図(2)（G－24・G－25・H－21トレンチ）……付図7
Fig.4•4 J－22トレンチ矢板列実測図…… 398
Fig.4•5 J－23トレンチ主要部平面図…… 400
Fig.4•6 J－23トレンチ矢板列・柵状遺構実測図……付図8
Fig.4•7 J・K－25トレンチ平面図・土層図……付図8
Fig.4•8 J・K－25トレンチ東側矢板列実測図 …… 402
Fig.4•9 J・K－25トレンチ西側矢板列・中期土器群実測図……付図9

Fig.4•10　J－26トレンチ平面図…… 404
Fig.4•11　J－26トレンチ矢板・杭列実測図…… 405
Fig.4•12　J－22トレンチ・J－23トレンチ矢板列付近出土土器実測図…… 407
Fig.4•13　杭・矢板材作製方法模式図 …… 408
Fig.4•14　J－23トレンチ矢板列・柵状遺構出土木製品実測図…… 410
Fig.4•15　J・K－25トレンチ、J－26トレンチ矢板列・中期土器群出土の矢板・杭実測図…… 411
Fig.4•16　G－24トレンチ平面図……付図10
Fig.4•17　G－25トレンチ木器出土状態実測図……付図10
Fig.4•18　G－26トレンチ平面図…… 415
Fig.4•19　G－24トレンチ台地上竪穴出土土器・土製品実測図…… 417
Fig.4•20　G－25トレンチ木器包含層土器実測図…… 419
Fig.4•21　G－26トレンチ木器包含層出土土器実測図…… 420
Fig.4•22　G－24トレンチ・G－25トレンチ木器包含層出土杭・木材実測図…… 423
Fig.4•23　G－24・G－25・G－26トレンチ出土木製品実測図(1)…… 425
Fig.4•24　G－25・G－26トレンチ出土木製品実測図(2)…… 426
Fig.4•25　G－24・G－25トレンチ出土木製品実測図(3)…… 427
Fig.4•26　J－23トレンチ中期土器群出土土器実測図…… 433
Fig.4•27　J・K－25トレンチ旧河川砂層出土土器実測図(1)…… 436
Fig.4•28　J・K－25トレンチ旧河川砂層出土土器実測図(2)…… 437
Fig.4•29　J・K－25トレンチ旧河川砂層出土土器実測図(3)…… 428
Fig.4•30　J・K－25トレンチ旧河川砂層出土土器実測図(4)…… 440
Fig.4•31　J・K－25トレンチ旧河川砂層出土土器実測図(5)…… 441
Fig.4•32　J・K－25トレンチ旧河川砂層出土土器実測図(6)…… 442
Fig.4•33　J・K－25トレンチ旧河川砂層出土土器実測図(7)…… 443
Fig.4•34　J－26トレンチ旧河川砂層出土土器実測図(1)…… 446
Fig.4•35　J－26トレンチ旧河川砂層出土土器実測図(2)…… 447
Fig.4•36　J－26トレンチ旧河川砂層出土土器実測図(3)…… 448
Fig.4•37　J－26トレンチ旧河川砂層（下部）出土土器実測図(4)…… 449
Fig.4•38　J・K－25トレンチ畦状遺構 実測図……付図11
Fig.4•39　J・K－25トレンチ畦状遺構出土土器実測図(1)…… 454
Fig.4•40　J・K－25トレンチ畦状遺構出土土器実測図(2)…… 455
Fig.4•41　J・K－25トレンチ畦状遺構出土銅鏃実測図…… 458
Fig.4•42　J・K－25トレンチ畦状遺構出土木製品実測図(1)…… 460
Fig.4•43　J・K－25トレンチ畦状遺構出土木製品実測図(2)…… 401
Fig.4•44　J・K－25トレンチ畦状遺構出土杭実測図(1)…… 463
Fig.4•45　J・K－25トレンチ畦状遺構出土杭実測図(2)…… 464
Fig.4•46　J・K－25トレンチ畦状遺構出土木器実測図(3)…… 464
Fig.4•47　H－21トレンチ平面図・H－23トレンチ流木群実測図…… 467
Fig.4•48　G－25トレンチ・G－26トレンチ木器包含層下出土土器実測図…… 467
Fig.4•49　G－24トレンチ客土層出土土器実測図(1)…… 472
Fig.4•50　G－24トレンチ客土層出土土器実測図(2)…… 473

Fig.4•51　G－24トレンチ客土層出土土器実測図(3)…… 476
Fig.4•52　G－24トレンチ客土層出土土器実測図(4)…… 477
Fig.4•53　G－24トレンチ客土層出土土器実測図(5)…… 479
Fig.4•54　G－24トレンチ客土層出土土器実測図(6)…… 480
Fig.4•55　G－24トレンチ客土層出土土器実測図(7)…… 481
Fig.4•56　G－24トレンチ客土層出土土器・土製品実測図(8)…… 483
Fig.4•57　G－25トレンチ客土層出土土器実測図(1)…… 486
Fig.4•58　G－25トレンチ客土層出土土器実測図(2)…… 487
Fig.4•59　G－25トレンチ客土層出土土器実測図(3)…… 488
Fig.4•60　G－25トレンチ客土層出土土器実測図(4)…… 490
Fig.4•61　G－25トレンチ客土層出土土器実測図(5)…… 491
Fig.4•62　G－25トレンチ客土層出土土器実測図(6)…… 494
Fig.4•63　G－25トレンチ客土層出土土器・土製品実測図(7)…… 495
Fig.4•64　G－26トレンチ客土層出土土器実測図(1)…… 497
Fig.4•65　G－26トレンチ客土層出土土器実測図(2)…… 498
Fig.4•66　G－26トレンチ客土層出土土器・土製品実測図(3)…… 499
Fig.4•67　G－26トレンチ客土層出土鋳型実測図…… 504
Fig.4•68　G－26トレンチ客土層出土鉄斧実測図…… 505
Fig.4•69　J・K－25トレンチ耕土下包含層出土弥生式土器実測図(1)…… 507
Fig.4•70　J・K－25トレンチ耕土下包含層出土弥生式土器実測図(2)…… 508
Fig.4•72　J・K－25トレンチ耕土下包含層出土弥生式土器実測図(3)…… 509
Fig.4•72　第2区包層出土弥生式土器実測図…… 511
Fig.4•73　第2区出土石器実測図(1)…… 512
Fig.4•74　第2区出土石器実測図(2)…… 513
Fig.4•75　第2区出土石器実測図(3)…… 514
Fig.4•76　第2区出土石器実測図(4)…… 515
Fig.4•77　第2区出土石器実測図(5)…… 517
Fig.4•78　第2区出土石器実測図(6)…… 518
Fig.4•79　第2区出土石器実測図(7)…… 519
Fig.4•80　第2区出土須恵器・陶磁器実測図…… 522
Fig.4•81　G－24トレンチ客土層出土瓦実測図…… 523

Fig.5•1　第3区東北部平面図……付図12
Fig.5•2　第3区東南部平面図……付図12
Fig.5•3　第3区西側平面図……付図12
Fig.5•4　第3区土層図(1)（P－19a・eトレンチ、O－19d・fトレンチ）……付図12
Fig.5•5　第3区土層図(2)（P－20a・b・cトレンチ）……付図13
Fig.5•6　第3区土層図(3)（Q－20d・e・fトレンチ）……付図13
Fig.5•7　第3区土層図(4)（Q－22、Q－21、P－23、Q－23トレンチ）……付図14
Fig.5•8　第3区土層図(5)（S－24a、R－22c、T－17トレンチ）……付図14
Fig.5•9　第3区・第4区黒色粘質土層上面推定等高線図…… 545

Fig.5•10　第１号遺構（Ｑ－21・Ｑ－22ｄトレンチ）実測図……付図15
Fig.5•11　Ｐ－20ａ・ｂ・ｃトレンチ内遺構実測図……付図16
Fig.5•12　第３号遺構（Ｐ－19ａトレンチ）実測図……付図17
Fig.5•13　Ｏ－19区．Ｐ－19区溝実測図……付図17
Fig.5•14　第４号遺構（Ｐ－19ｄトレンチ）実測図…… 553
Fig.5•15　第５号遺構、第１～４・６・７号溝（Ｐ－19ｂトレンチ）実測図…… 554
Fig.5•16　Ｑ－20ｄトレンチ第21号溝東側杭列実測図…… 558
Fig.5•17　Ｑ－19ｂトレンチ第21号溝東側杭列実測図…… 559
Fig.5•18　第９号遺構、第34・35号溝実測図……付図17
Fig.5•19　Ｐ－23ａトレンチ平面図…… 563
Fig.5•20　Ｓ－22ａトレンチ平面図…… 565
Fig.5•21　Ｒ－22ｃトレンチ平面図…… 566
Fig.5•22　Ｓ－24トレンチ平面図…… 567
Fig.5•23　縄文時代早期土器出土状態実測図（Ｏ－19ｂ・ｃトレンチ）…… 568
Fig.5•24　第３区遺構・溝・旧河川出土弥生式土器実測図(1)…… 571
Fig.5•25　第３区遺構・溝・旧河川出土弥生式土器実測図(2)…… 574
Fig.5•26　第３区遺構・溝・旧河川出土弥生式土器実測図(3)…… 575
Fig.5•27　第３区遺構・溝・旧河川出土弥生式土器実測図(4)…… 577
Fig.5•28　第３区出土木製品実測図(1)…… 582
Fig.5•29　第３区出土木製品実測図(2)…… 584
Fig.5•30　第３区出土木製品実測図(3)（Ｐ－20ａトレンチ第２号遺構の杭①）…… 586
Fig.5•31　第３区出土木製品実測図(4)（Ｐ－20ａトレンチ第２号遺構の杭②）…… 587
Fig.5•32　第３区出土木製品実測図(5)（Ｐ－20ｃトレンチ第19号溝・第６号遺構の杭①）　589
Fig.5•33　第３区出土木製品実測図(6)（Ｐ－20ｃトレンチ第19号溝・第６号遺構の杭②）　590
Fig.5•34　第３区出土木製品実測図(7)（Ｐ－20ｃトレンチ第19号溝・第６号遺構の杭③、Ｑ－20ｄ・Ｑ－19ｂトレンチ第21号溝東側杭、Ｑ－22ｄトレンチ第34号溝・第９号遺構の杭①）…… 591
Fig.5•35　第３区出土木製品実測図(8)（Ｑ－22ｄトレンチ第34号溝・第９号遺構の杭②、Ｐ－23ａトレンチ第41号溝の杭、Ｑ－20ａトレンチ第26号溝の杭、Ｑ－21トレンチ第１号遺構の杭）…… 594
Fig.5•35　第３区溝内出土石器実測図…… 596
Fig.5•37　第３区出土縄文式土器実測図(1)…… 598
Fig.5•38　第３区出土縄文式土器実測図(2)…… 599
Fig.5•39　第３区出土縄文式土器実測図(3)…… 600
Fig.5•40　第３区出土縄文式土器（Ｊ18～Ｊ23）推定復元図…… 601
Fig.5•41　Ｐ－23ｂトレンチ黒色粘質土層出土石錐実測図…… 602
Fig.5•42　第３区包含層出土弥生式土器実測図(1)…… 604
Fig.5•43　第３区包含層出土弥生式土器実測図(2)…… 605
Fig.5•44　第３区包含層出土弥生式土器実測図(3)…… 609
Fig.5•45　第３区包含層出土土師器・須恵器実測図(1)…… 612
Fig.5•46　第３区包含層出土土師器・須恵器・陶磁器実測図(2)…… 613

Fig.5•47　第３区包含層出土石器・土製品実測図…… 616
Fig.5•48　第３区包含層出土滑石製品実測図…… 617

Fig.6•1　第４区主要部平面図……付図18
Fig.6•2　第４区土層図（Ｐ－３ｂ・Ｏ－６ａ・Ｐ－７・Ｋ－８・Ｍ－８ａトレンチ）付図18
Fig.6•3　Ｍ－８区・Ｍ－９区杭列実測図……付図18
Fig.6•4　Ｏ－６ａトレンチ・Ｐ－７トレンチ平面図…… 632
Fig.6•5　Ｐ－３ａ・３ｂトレンチ、Ｏ－３トレンチ平面図…… 633
Fig.6•6　第４区出土弥生式土器実測図(1)…… 635
Fig.6•7　第４区出土弥生式土器実測図(2)…… 637
Fig.6•8　第４区溝出土瓦器・青磁器実測図…… 639
Fig.6•9　第４区出土土師器・須恵器・瓦器・青磁器実測図…… 640
Fig.6•10　第４区出土杭実測図…… 641
Fig.6•11　入れ歯（写真）…… 641
Fig.6•12　Ｐ－７トレンチ耕土層出土寛永通宝拓影…… 641
Fig.6•13　先土器時代石器実測図…… 644

Fig.7•1　第１区台地上竪穴分布図…… 648
Fig.7•2　第１区台地上墓地時期別分布図 …… 650
Fig.7•3　第１区台地上墓地長軸方位図…… 651
Fig.7•4　出土土器編年図……付図19

表　目　次

Tab.1•1　^{14}C年代測定結果一覧……16

Tab.2•1　一般地質層序表（古川博恭作製）……23
Tab.2•2　板付遺跡と日本各地の沖積層の対比表（古川博恭作製）……25
Tab.2•3　板付遺跡周辺の弥生時代遺跡（沢皇臣作製）……30

Tab.3•1　第１区沖積層出土弥生式土器挿図対照表…… 124
Tab.3•2　第１区沖積層出土石器・石製品挿図対照表…… 125
Tab.3•3　第１区沖積層出土石器数量表…… 126
Tab.3•4　第１区台地上竪穴一覧…… 259
Tab.3•5　第１区台地上竪穴出土石器・石製品数量表…… 264
Tab.3•6　第１区甕棺墓一覧…… 324
Tab.3•7　第１区土坑墓・木棺墓一覧…… 355
Tab.3•8　第１区台地上出土弥生式土器挿図対照表…… 390
Tab.3•9　第１区台地上出土石器・石製品挿図対照表…… 391

Tab.3•10　第1区台地上包含層・遺構埋土内出土石器・石製品数量表…… 392
Tab.3•11　第1区出土土製品一覧…… 393
Tab.3•12　第1区出土木製品・木材一覧…… 393

Tab.4•1　第2区出土弥生式土器挿図対照表…… 526
Tab.4•2　第2区出土石器・石製品挿図対照表…… 531
Tab.4•3　第2区出土石器数量表…… 533
Tab.4•4　第2区出土土製品一覧…… 534
Tab.4•5　第2区出土木器品・木材一覧…… 534

Tab.5•1　第3区出土縄文式土器一覧…… 620
Tab.5•2　第3区出土弥生式土器挿図対照表…… 620
Tab.5•3　第3区・第4区出土石器・石製品挿図対照表…… 621
Tab.5•4　第3区出土石器数量表…… 622
Tab.5•5　第3区出土木製品・木材一覧…… 622

Tab.6•1　第4区出土土師器・須恵器・瓦器・陶磁器挿図対照表…… 643
Tab.6•2　第4区出土木製品・木材一覧…… 643

Tab.7•1　弥生時代出土石器数量表…… 659
Tab.7•2　弥生時代石鎌出土遺跡地名表（横山邦継作製）…… 668
Tab.7•3　弥生時代環状石斧出土遺跡地名表（山口譲治作製）…… 670
Tab.7•4　弥生時代銅鏃出土遺跡地名表（山口譲治作製）…… 673
Tab.7•5　弥生時代鋳型出土遺跡地名表（沢皇臣作製）…… 675

第 1 章

調 査 の 経 過

第１節　板付遺跡の調査・研究略史

板付遺跡にかんするもっとも古い記録は1867年（慶応３年）にさかのぼる。すなわち、環溝遺跡上に所在する通津寺の過去帳に記された、地下三尺余から銅矛５口が村民源七により掘り出されたという記録である〔板付遺跡保存会1968〕。この銅矛の出土地点は明らかでなく、現物も所在不明である。過去帳のこの記載については本報告書付篇第10にかかげた。

その後、1916年に通津寺南隣の小字田端で、細形銅剣・細形銅矛各３口が発見され、翌年中山平次郎氏が報告した〔中山1917ａ〕。これらの銅利器は、同時に出土した甕棺片から、弥生時代前期末の甕棺墓に副葬されていたと推定される。その正確な出土地点は明らかではないが、現在の板付地区公民館の小道をはさんだ東側あたりと思われる。(地図3、第7章第1節3参照)。この時の銅剣・銅矛は東京国立博物館蔵品になっている。これが、板付遺跡がひろくしられたはじめである。

本遺跡の本格的な学術調査がはじまったのは戦後のことである。中原志外顕氏は本遺跡で縄文晩期土器と弥生前期土器とを採集し、縄文時代から弥生時代への移行のあり方をこの遺跡が示すであろうことが予想された。これが契機となって、日本考古学協会弥生式土器文化総合研究特別委員会の発掘調査が行われることになった。調査は1951年～54年に行われた（地図７の第１～４区)。この調査により、環溝遺跡の西側が明らかになり、夜臼式土器と板付Ｉ式土器との共伴が確認された。検出された遺溝は、環溝の西側（弧状溝）とその内側の溝（弦状溝)、井戸・貯蔵穴・甕棺墓である〔森・岡崎1961〕

その後10数年を経て、1968～69年に日本考古学協会農業史部会による調査が行われ、環溝のひろがりが追求された（地図７の第５～10区)。この調査によって環溝が、径 100ｍ内外の楕円形をなすことがほぼ確認された。この環溝にかこまれた部分には住居址等の存在が予想された。

環溝内部の調査は通津寺墓地移転のための事前調査として、福岡市教育委員会が1969年に行った。調査地点は環溝の東北隅で、溝・井戸・住居址などが発見され、環溝内部で弥生時代前期の小貝塚もみつかった〔下條1970〕。

翌70年には、通津寺と板付地区公民館の間を通り、環溝南端を横切る県道の拡幅工事の事前調査が、福岡県教育委員会により行われた（地図７の第11～17区)。この調査で袋状竪穴２基と環溝南端部の位置が明らかになった。その結果、県道は環溝南側を迂回することになった。この調査結果は本報告書付篇におさめる予定であったが、都合により収録できなかった。

この頃から板付遺跡周辺にも開発の波が及びはじめた。すでに台地上はほとんど宅地となり、点々と空地が存在するにすぎなくなっており、台地周辺の水田が住宅・倉庫・事務所等の用地にかえられはじめた。そのため、板付遺跡とその周辺では次々に事前調査を行う必要が生じてきた。その最初のそして最大規模のものが、ここに報告する環溝西方の水田地に計画された板付市営住宅建設にともなう調査である。この調査地は「板付水田遺跡」と称され、1971～74年に調査した。(註) この調査のあと、1975年8月には杉原荘介氏が環溝最南端部を確認するための調査を行った（地図7の18区）。

1973年度からは板付遺跡の保存整備のために福岡市教育委員会文化課に板付遺跡調査事務所が設けられ、保存整備事業とともに、遺跡周辺の宅地造成・建築に際する事前調査をすすめている（地図4、5）。

なお、この間における市民の板付遺跡に対する関心にもふれておかねばならない。それは板付遺跡保存会の発足で、会報〔板付遺跡保存会1968〕によれば、板付環溝遺跡の発見者である中原志外顕氏や公民館・町自治会・通津寺などが中心になって1967年に発足し（当時の代表者は石田辰己氏）、板付遺跡の重要性と保存を訴えたのである〔板橋1973〕。那珂公民館では成人文化講座で、郷土史についての講座を開き、1966年～70年にかけて「郷土の歴史を語ろう・資料」第1～第5集を刊行している。この中でも板付遺跡の意義を論じ、その保存を訴えている。この他にも板付公民館・板付小学校・板付北小学校などのいくつかの活動の中で本遺跡がとりあげられている。

（三島格・後藤直）

註）今回の調査地は、当初から「板付水田遺跡」とよんできた。しかし発掘地の近くに「水田（みずた）」なる小字のあること、発掘の結果これまで「板付遺跡」とよばれてきた台地上の環溝遺跡と一体のものであるとみられることなどから、「板付遺跡」という名称を台地全域とその周囲の沖積地にまでおよぼし、今回調査地も板付遺跡の一部とみなすことにする。今後「板付水田遺跡」という名称は用いない。したがって「板付遺跡」を総称とし、必要な場合は環溝部分は「板付環溝遺跡」、今回調査地は「板付市営住宅遺跡」、「板付北小学校遺跡」とよび、その他周辺調査地は、地点名をつけて「板付G－5a地点遺跡」というようによぶ。

第2節　調査にいたる経過・組織

1　経　過

板付台地西側の水田地帯に、福岡市建築局が市営住宅建設を計画し、福岡市住宅供給公社が1971年度に土地の買収を行った（地図1）。当該地は、板付環溝遺跡にともなう生産遺跡の存在が予想されたので、福岡市住宅供給公社と福岡市教育委員会との間で数次にわたり交渉がもたれた。その結果、事前調査を実施することになり、1971年7月12日に福岡市住宅供給公社と福岡市の間に発掘調査委託契約が結ばれた。

調査対象地は南北 620m・東西 420m、総面積 157,800㎡に及び（地図2）、契約時の発掘面積は事前調査 4,500㎡・本調査 3,000㎡で、調査期間は1972年度まで、整理が1973年度までであつた。その後契約の変更を行ない、1973年9月末まで調査を行った。予算は1971年度 1,445万円、1972年度 1,000万円、1973年度755万円、1974年度190万円、1975年度110万円、計 3,500万円であった。

一方、1973年度には、当該地内の小学校建設地の調査を、1973・1974・1975年度あわせて 1,430万円余の予算で行った。

発掘調査は1971年8月16日にはじまり、1974年4月10日に終了した。以後出土品等の整理、報告書作成を行い、本報告書発刊に至った。

2　組　織

福岡市住宅供給公社の委託を受けて、発掘調査を担当したのは福岡市教育委員会文化課文化財係であったが、翌年以降文化課内に、埋蔵文化財係（1972年）、板付遺跡調査事務所（1973年）が新設され、担当係に変更があった。直接の作業は文化課技術職員、調査員、調査補助員（各大学学生）、作業員（地元）があたった。また調査指導委員会を設け、適宜指導・助言を受けた。

以下に関係者名を記す。　（後藤）

福岡市建築局

安田哲郎（建築局長、前任）
中村楠郎（建築局長）
樋口辰美（建築部長、前任）
平岡龍助（建築部長）
前山典昭（建築計画課長、前任）
吉武　満（建築計画課長、前任）
旗生良和（建築計画課長）
三善康男（建築計画課計画係長、前任）
浦田　実（建築計画課計画第1係長）
藤木政美（建築計画課計画第2係長）
美山彰生（建築計画課員、前任）
川副了造（建築計画課員）

福岡市住宅供給公社

柳原弥之助（理事長、前任）
豊島延治（理事長）

篠原豊秋（常務理事、前任）
原　正夫（常務理事、前任）
矢野士津雄（常務理事、前任）
水上信照（常務理事）
下川與八（常務理事）
三原茂二（計画部長、前任）
青柳利枝（計画部長、前任）
久羽忠明（計画部長）
市丸　亨（事業部長）
浜口康男（計画課長、前任）
名古屋守成（計画課長、前任）
大石　篤（造成課長、前任）
藤岡健三（計画課造成第2係長）
中野秀臣（造成課造成第2係長）
高山昭雄（計画課員）
藤野真人（造成課員、前任）

調査指導委員会（各年度に出入があるが、一括して記す、肩書は現在）

鏡山　猛（考古学、九州歴史資料館長）
森貞次郎（考古学、九州産業大学教授）
杉原荘介（考古学、明治大学教授）
岡崎　敬（考古学、九州大学教授）
西谷　正（考古学、九州大学助教授）
細川隆英（植物学、第一薬科大学教授）
太田清六（建築学、早稲田大学教授）
永井昌文（解剖学、九州大学教授）
浦田英夫（地質学、九州大学教授）
永松士己（育種学、九州大学名誉教授）
高島良正（放射化学、九州大学教授）
坂田武彦（冶金学、九州大学助手）
山本輝雄（建築学、九州大学助手）
佐藤　浩（建築学、九州大学文部技官）
上田充義（建築学、九州大学講師）
日野尚志（地理学、佐賀大学講師）
西田民雄（花粉分析学、佐賀大学助教授）
大村　武（育種学、九州大学助教授）
青峰重範（土壌学、九州大学名誉教授）
畑中健一（花粉分析学、北九州大学教授）
古川博恭（地質学、農林省中国・四国農政局計画部）
藤原宏志（農作業管理学、宮崎大学助教授）
粉川昭平（植物学、大阪市立大学教授）
中村　純（生物学、高知大学教授）
島倉巳三郎（地質古生物学、暁学園短期大学教授）
佐藤敏也（古代米、国分寺市文化財専門委員）
和田光史（農芸化学、九州大学助教授）

発掘調査団（福岡市教育委員会文化課）

正木利輔（教育長、前任）
古村澄一（教育長）
山崎義治（教育次長、前任）
柴田勝男（教育次長、前任）
結城一義（教育次長）
志鶴幸弘（主幹）

1971年度

青木　崇（文化課長、現社会教育部長）
三島　格（文化課文化財主事、現福岡市立歴史資料館々長）
清水義彦（文化課文化財係長）
福田征一（文化課職員、事務担当）
飛高憲男（文化課職員、技術担当、調査主任）
後藤　直（　　同　　）
高倉洋彰（文化課嘱託、九州大学大学院生、現九州歴史資料館）
岩崎次郎（調査補助員、九州大学学生、現九州大学大学院生）
渡部明夫（　　同　、現香川県教育庁）
光枝房敏（調査補助員、福岡教育大学学生）
荒木　誠（調査補助員、立正大学学生）

沢　皇臣（文化課調査員）
横山邦継（　　同　　）
村岡和雄（　　同　　、現山口県文化課）
新田栄治（　　同　　、東京大学学生）
鷹野光行（　　同　　、東京大学学生）
横尾義昭（　　同　　、明治大学学生）

1972年度

青木　崇（文化課長）
三島　格（文化課文化財主事）
石橋　博（文化課埋蔵文化財係長）
福田征一（文化課職員、事務担当）
後藤　直（　　同　　、技術担当、調査主任）
沢　皇臣（　　同　　）
横山邦継（文化課調査員）
荒木　誠（調査補助員、立正大学学生）
横尾義昭（　　同　　、明治大学学生）
浜石哲也（　　同　　、　　同　　）
新田栄治（　　同　　、東京大学学生）
鷹野光行（　　同　　、　　同　　）

1973年度

清水義彦（文化課長）
楢崎幸利（文化課板付遺跡調査事務所長）
草場九男（文化課職員、事務担当）
安田正義（　　同　　）
後藤　直（文化課職員、技術担当、調査主任）
沢　皇臣（　　同　　）
横山邦継（　　同　　）
山口譲治（　　同　　）
横尾義昭（調査補助員、明治大学学生、現久留米市嘱託）
浜石哲也（　　同　　、明治大学学生）
江浜明徳（　　同　　、現博多工業高校教諭）
稲富和裕（　　同　　、法政大学学生）
野尻雄三（　　同　　、東洋大学学生）

現場作業員

大泉正義、大部茂久、沖政雄、梶原栄子、永松伊都子、岸原松枝、谷口きくの、舎川キチエ、中道七々枝、野村シマ子、屋山利久、今村スミ子、岡沢キミエ、萩林静枝、奥田三郎、合庭祥子・岸原信一、岸原藤雄、中島鈴子、野村美恵子、半田ハルヨ、半田フミカ、福留義則、副島三好、藤タマ子、松尾エミ、山本敏子、吉次トヨ子、明石利男、荻林千代子、永原保範、山中茂幸、森征四郎、柴山泰生、杉山勇、諏訪光行、沢豊久、田中公人、野口悟、赤司正弘、石原正敏、他学生アルバイト多数

整理作業

山田美幸（旧姓深沢）、深沢千幸、柳沢チサヨ（旧姓五反田）、小島豊子、河津和代、青木みどり、山田雪代、添田純子、木村良子、永松伊都子、山下美智枝、山本貴恵子、日吉加代子、幡磨周子、田辺郁代、島津昭子、土田佳代子、横尾尚子、花房信二、杉本英俊、椿智子、筑紫敦子、入江昭子、秋根邦子、松田伴子

玉永光洋（東洋大学学生）、原俊一（福岡大学学生）、草場啓一（別府大学学生）、小林義彦（明治大学学生）、山本雅靖（岡山大学学生）、藤口健二、呉明勲、武末純一、俵由利子（旧姓茂田）（以上九州大大学学生）

地元協力者

柏木誠之助（板付校区公民館長）
合庭士雄（板付校区自治連合会長、前任）
高野貞巌（通津寺住職）
中牟田周造
　他地元の方多数

調査協力者

中原志外顕、渡辺文吉、池本政雄（筑紫野史学研究会）
宮小路賀宏（福岡県教委文化課）
下条信行（福岡市立歴史資料館、現九州大学助手）
島津義昭（福岡市教委文化課、現熊本県教委文化課）
松村道博（福岡市教委文化課調査員、現熊本県教委文化課）
山崎純男、折尾学、塩谷勝利、力武卓治、柳田純孝、柳沢一男、二宮忠司（以上福岡市教委文化課技術職員）
瓜生忠弘（那珂公民館主事、現西花畑公民館主事）

第3節　調査経過

調査対象地は、当時しられていた環溝遺跡の西方・北方の水田地で、調査着手の数年前に耕地整理が行われ、水田面は碁盤目状に区画されていた（地図２）。この水田地一帯に環溝集落にともなう生産遺跡の存在が予想された。また、弥生時代集落が環溝集落の範囲以上にひろがることが考えられ、それにともなう墓地のあり方も把握しうるとみられた。

こうした調査対象地の性格と、それまでの調査結果をふまえ、調査上の問題点として次の諸点があげられた。

1 弥生時代前期における集落規模と単位

集落規模――ａ）住居址、ｂ）袋状竪穴、ｃ）墓地

2 弥生時代前期における土地利用

(1)可耕地の自然科学的な諸問題

(2)水田耕作規模

3 共同体と土地との関係

4 福岡平野における板付遺跡の位置

これらの問題は、発掘調査により直接にとらえうるものと、発掘結果からの理論的考察の範囲に属するものとにわけられる。

こうした調査上の問題点について、どれだけのことを明らかにしたかは、以下の記述によつて判断しうるが、調査を担当したわれわれの評価は、不十分ながら第７章でふれるであろう。

なお条里遺構も調査の対象として考えていたが、結果的には発掘調査によりそれを確認するにはいたらなかった。弥生時代以降の溝はいくつか出たが、耕地整理前の旧水路に一致するものが大部分で、それ以外の少数の溝はきわめて浅く、痕跡的でしかない。

１．区の設定（地図２）

発掘調査にあたって、対象地域を20ｍ方眼に区切った。この方眼は地図２のＱラインとＲラインの間の道路に20ｍ間隔で打たれていた住宅供給公社の基準杭（方向は北約32°西）とその他の杭をもとにして組んだもので、東から西へＡ～Ｖ、北から南へ１～31の番号を付し、個々の方眼をアルファベッドと数字の組合せに「区」をつけてよぶことにした（例えばＫ－20区、Ｓ－14区……）。アルファベッドもしくは数字を付された南北もしくは東西にのびる幅20ｍの帯状の区画は各々ライン（もしくは列）とよぶ（例えばＮライン、Ｑ列、８ライン、25列）。なおＡラインは調査地東端にわずかにひつかかるだけである。

この区の中に掘ったトレンチ・グリッド名は区名の次に、原則として発掘順にａ・ｂ・ｃ…をつけてよぶことにする。予備調査（初年度）で掘った４×４ｍ、４×２ｍの発掘坑はグリッドとよび、他はトレンチとよぶ（例えば、Ｅ－17グリッド、Ｃ－14ａトレンチ・Ｑ－20ｄトレンチ……）。東西もしくは南北が２つのラインにかかるときは、Ｊ・Ｋ－25トレンチ、Ｎ－24・

25トレンチというようによぶが、そうでない場合もある。なお、最初に組んだ方眼に若干の狂いが後に発見されたため、それ以前の発掘坑の中には2つの区にわたるものがあるが、それは当初の呼称でよぶことにする。

発掘の進展にともない、遺構の分布がいくつかにまとまることが明らかになつたので、そのまとまりに応じて、調査地を第1区・第2区・第3区・第4区の4地区に大別した。この大別は、当初は便宜的なもので、相互の境はルーズであったが、作業の都合上次のように厳密に区わけした。すなわち第1区はIラインより東・18ラインより北、第2区は19ラインより南・Lラインの東、第3区はMラインの西・17ラインの南、第4区はJラインの西・16ラインの北である。ただしM－17グリッドは第4区に入れる。調査地全体の中で、第1区は北東部、第2区は南東部、第3区は南西部、第4区は北西部にあたる。

2　各年度の調査概要

発掘調査は1971年8月16日に開始し、1974年4月10日に終了した。調査期間は正味32カ月におよんだ。初年度は地層のあり方、遺構の存在の有無と分布をしるために、ある程度機械的に一定の間隔で各区に4×4mもしくは4×2mのグリッドを設けて調査した。その結果、地層の一定のあり方を把握し、遺構の分布についてもある程度のメドがついたので、翌年度から全域を4区にわけてよりくわしい調査を実施した。

発掘地は、それまで水田であり、耕作土層下は氾濫による砂質土・砂・粘土の互層となっていて、地表下50cmほどで湧水する。そのためトレンチ壁は容易に崩壊し、作業終了後、翌朝までにトレンチ内は満水状態になるなど、作業の進行を遅らせる原因となった。排水を考えれば小規模のトレンチ発掘にせざるをえず、遺構の面的ひろがりを十分把握しえないこともあった。第2年度以降発掘地北側（第4区）が市営住宅建設のため盛土されると、それまでの農業用水路は機能麻痺し、大雨のあとには地表上は10～30cm冠水し、なかなかひかなくなる。そのため調査を断念せざるをえない場所もでた。したがって完璧な調査にはほど遠く、整理作業の過程で、当然掘るべきところを掘れなかったことに気付くということもあった。

最終的な発掘面積は第1区 2,430㎡、第2区 1,260㎡、第3区 2,400㎡、第4区 1,176.5㎡、計 7,266.5㎡であり、調査対象地のわずか 4.6％にすぎない。

なお、この調査については、調査中に概略を発表したり、個別的な遺物について報告したこともあるが〔後藤1972、三島・後藤1973〕、それらは調査途中のものであり、不十分な点が多々ある。本遺跡の調査に関しては、本報告書をもつて正式のものとする。

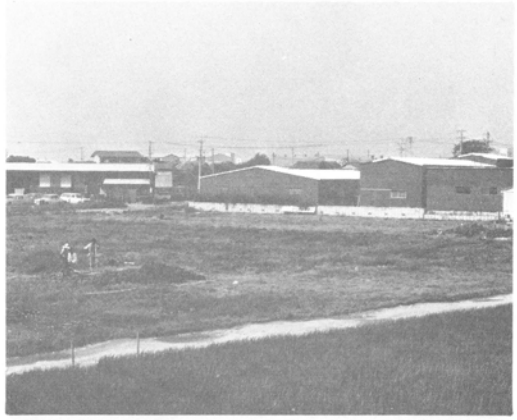
(1)1971年度の調査概要

第1区から第2区・第3区・第4区の順で、4×4mないし4×2mのグリッドを一定間隔で設定し、地層のあり方・遺構の有無をしらべた。

1971年8月

16日に調査を開始、はじめは方眼設定、草刈りを行なう。下旬に入って発掘を開始。

F－17・C－17・E－17グリッドを設定し調査した。最初4×2mの大きさであつたが、湧水のため壁が崩壊し、結局4×4mの大きさのグリッドに変更した。



第1区の調査（右：C－17グリッド、左：E－17グリッド）1971年8月

9月

8月にひきつづき、第1区にグリッドを設定して調査をすすめ、C－16区のトレンチで小竪穴を確認し、1区に台地北端がのびていることがわかった。

第1区の調査（F－17グリッド）1971年8月

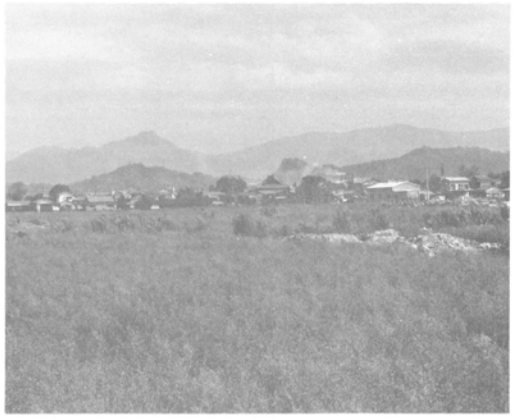
10月

第2区で、I－23・K－23・K－25・J－23等のグリッドを掘り、また第3区にもN－23・N－25・O－25・S－29・S－19・S－16・Q－25等のグリッドを掘った。その結果鍵となる層が黒色粘質土層であることが予想されるようになった。

11月

第3区から第4区へグリッドを設定してゆく。部分的に長いトレンチも設定した。

S－13・10・7・4・2、P－7・10、M－8・11・14、R－18、J－9、U－29等のグリッド・トレンチを掘る。第3区のQ－21トレンチで丸太遺構が出土した。第3区では黒色粘質土層とそれにつづく砂層の境をさがすためにO－19a、P－19a、R－22等のトレンチを方眼に対し斜め方向に入れる。



調査地と通津寺　1971年10月

12月

11月につづき、第3区、第4区部分の調査

を続行。第4区のM－8～9区で杭列を検出。旧河川中のN－14、O－14トレンチ、P・Q－10トレンチ等を調査。第3区O－19cトレンチの黒色粘質土層中から押型文土器、無文尖底土器等の縄文早期土器が出土した。

1972年1月

ふたたび第1区・第2区にもどり、F－11トレンチを調査。下旬から第2区にG－24、G－25トレンチを設定した。第4区ではK－8トレンチを調査し、その北端で黒色土の落ち込みを確認。

2月

第3区にN－24・25トレンチを設定し、第4区でもK－8トレンチ等の調査を続行した。第2区のG－24・25トレンチで、台地西端部が出、その落ち込み下で木器群が出土。この月はほとんど第2区に集中した。

3月

福岡市建築局から、第4区部分から近く盛土を開始する旨の通知を受け、急據第4区の調査に全力をあげることにする。N－8・O－7・P－6・P－7・K－13・K－16区にトレンチを設定して旧河川砂層と黒色粘質土層との境のあり方を追求する。中旬よりQ－8・Q－9区・P－7区の調査を行なう。この結果、黒色粘質土層の縁辺は一定程度明らかになつた。4月初旬に第4区の調査を終えた。しかしきわめて不十分な調査で、くわしいことはほとんど明らかにならなかった。

この年度には2月～3月にボーリング調査を実施した。

朝、作業のはじまる前のひととき　1972年1月

第2区の調査（G－25トレンチ）1972年2月

休憩時間　1972年3月

(2)1972年度の調査概要

前年度の予備調査の結果から、重点的な調査に移る。この頃には建築局との間で、第1区の台地北端部の保存がほぼ了解されていた

ので、第1区の調査は除外していた。

1972年4月

17日より新年度の調査を開始した、まず換地先となる第2区南側のH・I・J－27・28区の調査を行った。I－26・I－27・J－28トレンチを調査した。砂層のみで、遺構はなかった。その後、第2区における旧河川砂層の縁辺部を確認するためにJ－23トレンチを設定し、また木器包含層と旧河川との間の状態をしらべるためにH－23トレンチの調査をはじめた。

5月

その結果J－23トレンチで前期はじめとみられる矢板列が出土したので、J・K－25トレンチ、J－21、J－22トレンチの調査を行った。5月中はJ－23トレンチの調査を続行し、下旬からJ・K－25トレンチの調査をはじめた。

6月

J－23、J・K－25トレンチの調査を続行するとともに、J－21・J－22トレンチの調査も行った。また当時保存予定地となっていた第1区の保存地外にあたるC－14トレンチの調査をはじめた。

7月

C－14トレンチの調査を続行し、第2区ではJ・K－25トレンチを西にのばして調査をはじめた。

8月

J・K－25トレンチの調査を続行。トレンチが深いため、毎日作業開始後約2～3時間は排水に費された。盆休み明けから、第3区調査のために、前年度調査の際の排土を移動させる。

9月

第3区の調査をはじめる。第3区北東部か

作業風景（第4区O－6bトレンチ）1972年3月

作業風景（第2区J－23トレンチ）1972年5月

作業風景（第2区J・K－25トレンチ）1972年7月

らはじめた。Q－20a、P－20a、Q－20b、Q－20c、Q－20d、Q－19a、Q－19b、Q－20dトレンチを設定し、調査する。黒色粘質土層中の溝、杭列が出土。

10月

第3区北東部調査続行。Q－19c、O－19d、O－19e、P－19a、O－19f、P－20bの各トレンチを調査。

11月

第3区北東部調査を続行。P－19c、P－19dトレンチ。下旬より南東部の調査をはじめた。Q－21トレンチを拡張して前年度出土遺構を精査。Q－23a、Q－22bトレンチを調査。

12月

第3区調査を続行。Q－22bトレンチを調査し、P－20a、P－20b、P－20c、Q－21トレンチの調査を続行。

1973年1月

第3区東側の調査を続行。Q－20e・fトレンチ等。

2月

第3区東側調査の続行。Q－22cトレンチとともに、前年度調査のQ－22トレンチを北側に拡張。

3月

第3区東側の調査を続行。

この間、第1区とともに第2区の保存も計画したが、建築局との折合いがつかず、両地区とも保存することは困難になる。また第2区を保存するにしても、南側の幅8mは道路を作るために除外せねばならないので、G－26、L－26両トレンチを調査することになる

17日に今年度の発掘を終了。

作業風景（第3区）1972年10月

作業風景（第3区、O－19・P－19区）1972年10月

作業風景（第3区Q－21トレンチ）1972年12月

(3) 1973年度の調査概要

1973年4月

13日に調査を再開、第3区をひきつづき調査。この頃第4区は盛土が終了し、市営住宅の建設が行われている。そのため第3区西側は冠水し、調査ができず毎日排水。P－19e、P－19fトレンチ、Q－22d、P－23aトレンチの調査。

5月

第3区東南側の調査を続行。第3区西側は水がようやく引いたので、月末から調査にかかる。また第1区のC－14トレンチ調査結果を補うために、C－14aトレンチを調査した（C－14トレンチを以後C－14bトレンチとよぶ)。

6月

第3区西側の調査を行なう。S－21b、R－21a、R－22c、R－20a、R－20b、R－19a、R－19b、S－22a、T－18等のトレンチを調査。26日と28日夜の大雨で、西側北半は再び冠水。水がひく見込みはまつたくたたなくなる。一方、第1区は、地元の強い要求で板付北小学校建設地に決まり、その調査をはじめねばならない。したがって、第3区北西側の調査続行は不可能と判断する。

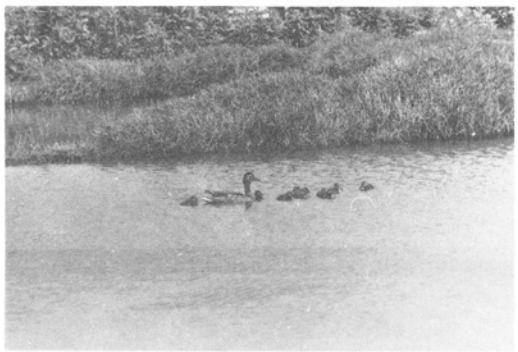
7月

第3区西側南半の調査を続行、S－23a、S－24トレンチ。第1区の調査にかかる。台地上には多数の遺構の存在が予想され、ブルドーザーで耕作土を除く。

30日豪雨、31日調査地一帯洪水。調査事務所も床下浸水。調査地は北側（第4区）の盛土のため水がなかなかひかない。

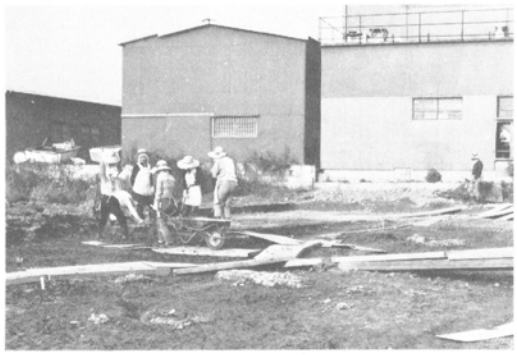
8月

第3区北東側各トレンチ間の壁を一部除去して、溝のつながりをしらべる。主力は第1



第3区のトレンチ内を泳ぐ水鳥の親子（トレンチにたまった水辺に巣を作り、かわいい雛が生まれた）1973年6月

作業風景（第1区）1973年10月



作業風景（第1区）1973年10月

雪の日の遺跡（第Ⅰ区）1974年2月26日

同上

区に移る。29日第3区調査を断念。以後第1区の調査を行う。

9月・10月・11月・12月

第1区の調査、台地上の遺構（竪穴・甕棺墓・土坑墓・木棺墓等）はきわめて多い。雨が降れば一面冠水し、作業は遅れる。沖積層の調査は3本のトレンチを入れただけで、進展しない。

1974年1月～3月

第1区調査続行。予算切れのため1月いっぱいで作業員は来なくなる。3月14日第1区調査終了。27日第2区（保存地区）南側の道路部分に最後のトレンチを入れ（J－26トレンチ）、4月10日終了。長い発掘は終った。

その後、1974年4月から整理作業を行なった。周辺遺跡の調査も加わり、しばしば中断されたが、約1年半の整理作業を終って本報告書を作成した。　（後藤）

第４節　発掘にともなう諸調査・鑑定

考古学的調査の他に以下にのべる諸調査・鑑定を行なった。その成果は付編に収めた。

(1)ボーリング調査

1972年２月～３月に、地層のあり方を把握するために川崎地質株式会社九州事務所に委託して行った。16・17ライン間に調査地を横切るように20ｍ間隔で21本（ボーリングＩ－０～22)、その南に６本（ボーリングII－１～４、ボーリングIII－１・２）、北側で11本（ボーリングIV－１～７、ボーリングV－１～４）の合計37本である（地図２)。各深度は２～7.5ｍで､総131.8ｍである。結果は付編第９に掲げた。

(2)　地質調査

古川博恭氏（農林省中国・四国農政局）に依頼した。発掘調査時に現場にたびたび来ていただき、また各トレンチ・グリッドの土層図・土層カラースライドをもとに考察した（本編第２章第１節、付編第１参照)。

(3)　土壌調査

青峰重範氏（九州大学農学部教授）に依頼し、Ｊ・Ｋ－25トレンチ北壁東側と、Ｐ－20ｂトレンチ北壁西側で調査した（付編第２参照）

(4)　出土木材の樹種鑑定

島倉巳三郎氏（暁学園短期大学教授）に出土した木器・杭・材・流木等の大部分にあたる800余点の小切片を送付し、鑑定を依頼した（付編第５参照)。

(5)　種子の鑑定

粉川昭平氏（大阪市立大学理学部教授）に依頼した。各トレンチの遺構部分を主として採土し、これを水洗し、中に含まれている種子を採集した。水洗に際しては１㎜角の網の上に土をおいて水にひたしてくだき、網に残った種子を採った。場合によっては茶こしによって採ったこともある。こうして得た種子を粉川氏に鑑定してもらった。

採土にあたっては、現在の種子が混じらぬよう十分注意した。採土の量は、場所によって差があり、一定ではない。この点は不十分だったと反省している。したがって採取した種子には数量的な意味はない。種子鑑定結果については付編第６にのせた。種子のうちウリ類については藤下典之氏（大阪府立大学教授）による（付編第７)。

(6)　炭化米

土器中に入っていたものの他に、上記の水洗作業で出たものがある。また籾痕のある土器も鑑定した。ただし、これには、その後の調べでもれているものが若干あった。佐藤敏也氏（国分寺市文化財専門委員）に調査を依頼した（付編第8）。

(7) 花粉分析

中村純氏（高知大学文理学部教授）・畑中健一氏（北九州大学教授）と西田民雄氏（佐賀大学講師）に依頼した。また藤則夫氏（金沢大学教授）は採土・分析を申込まれ、J・K－25トレンチ南壁で試料を採られた。中村・畑中両氏共同の成果を付編第3に掲げた。

(8) プラント・オパール分析

藤原宏志氏（宮崎大学農学部助教授）に依頼した（付編第4）。

(9) 年代測定とその結果

坂田武彦氏（九州大学工学部助手）に出土材2点を依頼した。また古川博恭氏は地質調査の必要上、土と出土杭の測定を学習院大学に依頼された。その結果を以下に記す。（Tab. 1・1）

（後藤）

Tab. 1・1　^{14}C 年代測定結果一覧

試				伴出土器による時期	測定年代（B.P.）	測定結果による実年代	Code No.
区	トレンチ	層位・位置	試料				
2	G－25	木器包含層	流木	中期中葉	2050± 40	100B.C.	KURI 0091
	J－23	矢板列付近	黒色粘質土1（標高5.86m）	—	3430± 95	1480B.C.	Gak 4551
			〃 2（標高6.16m）	—	2630± 80	680B.C.	Gak 4552
			〃 3（標高6.46m）	—	2880± 105	930B.C.	Gak 4553
			〃 4（標高6.76m）	—	2810± 100	860B.C.	Gak 4554
			〃 5（標高7.06m）	—	2640± 95	690B.C.	Gak 4555
		矢板列	矢板（W2116）	前期前葉	2120± 90	170B.C.	Gak 4556
3	P－20C	第19号溝際	黒色粘質土 1（標高7.54m）	—	3440± 100	1490B.C.	Gak 4546
			〃 2（標高7.00m）	—	6540± 140	4590B.C.	Gak 4547
			〃 3（標高7.27m）	—	8860± 260	6910B.C.	Gak 4548
		第19号溝	杭（W3158）	中期後葉	2110± 100	160B.C.	Gak 4549
		〃	杭（W3161）	〃	1920± 80	30A.D.	Gak 4550
		第19号溝もしくは第23号溝	杭片（出土後折れて浮く）	〃	2218± 45	268B.C.	KURI 0093

第　2　章

地質・地理的環境

第1節　地形・地質

1　地　形

板付市営住宅遺跡は福岡市南部御笠川左岸の沖積平野上に位置している。この遺跡の立地する御笠川一帯は、東端の右岸に沿って標高100～200ｍの花崗岩類・変成岩類によって構成される丘陵が北方へゆるく頂面高度を下げてのびており、この丘陵の南方延長は、二日市・宝満山の花崗岩山地へのびている。

西方および南西方では、遺跡西方４km付近を平行して北流する那珂川との間に、頂面標高60～ 100ｍの侵食の進んだ丘陵が分布し、春日丘陵と呼ばれている。遺跡南方では、福岡－二日市低地沿いの沖積平野が段丘をともないながら連続し、遺跡南方約10km付近で南流する宝満川との分水嶺がある。遺跡より北方へは段丘の分布はなく、広く沖積平野が広がる位置にあり、約10kmで博多湾に達している。この福岡平野には、周辺の山地をのぞけば、平野およびその周辺に高位・中位・低位の大きく３段に区分される段丘群と平野の主要な面をつくる沖積面とがある。

高位段丘は、主として遺跡南西の春日丘陵一帯で標高50～80ｍの起伏に富んだ平坦面を形成しており、平坦面は基盤岩類の侵食された侵食平坦面の場合が多い。浦田〔1962〕により春日面と命名されており、赤色化作用をうけ、堆積物は「くさり礫」の場合が多い。この面は、ゆるく北へ傾斜しており、北九州沿岸一帯の高位段丘に共通した性格をもっている。

中位段丘は、平坦面の高さと堆積物の特徴から、Ⅰ面・Ⅱ面の２つに細分される。中位Ⅰ面は須玖面と呼ばれており〔浦田1962〕、標高30～20ｍの平坦面をつくり、那珂川中流右岸の須玖一帯を模式地とし、砂礫層を主とした段丘堆積物より構成されている。

御笠川一帯では、その面の発達は弱く、左右両岸に点々と小規模に分布するにすぎない。河岸段丘的性格が強く、地形面はいずれも北方下流側へ緩傾斜で延びている。

中位段丘Ⅱ面は、特殊な平坦面で福岡地方では、御笠川・那珂川の谷沿いに標高30～10ｍの面を形成して分布するのみで、多々良川・室見川などの河川沿いには分布しない。九州中央部の阿蘇火山のカルデラ形成期に噴出した火砕流によって形成された面であり、噴出当時の谷部・低地部に沿って流下して来たもので、Aso－Ⅳ火砕流とよばれており、佐賀県伊万里市、北九州市小倉区などとともにこの火砕流分布の北限をしめしている。この火砕流は一部灰石様であるが大部分は、白色粘土（八女粘土層）と黄褐色軽石質火山灰（鳥栖ローム層）として分布している。遺跡付近では、諸岡遺跡一帯標高20ｍ前後の台地および板付遺跡の

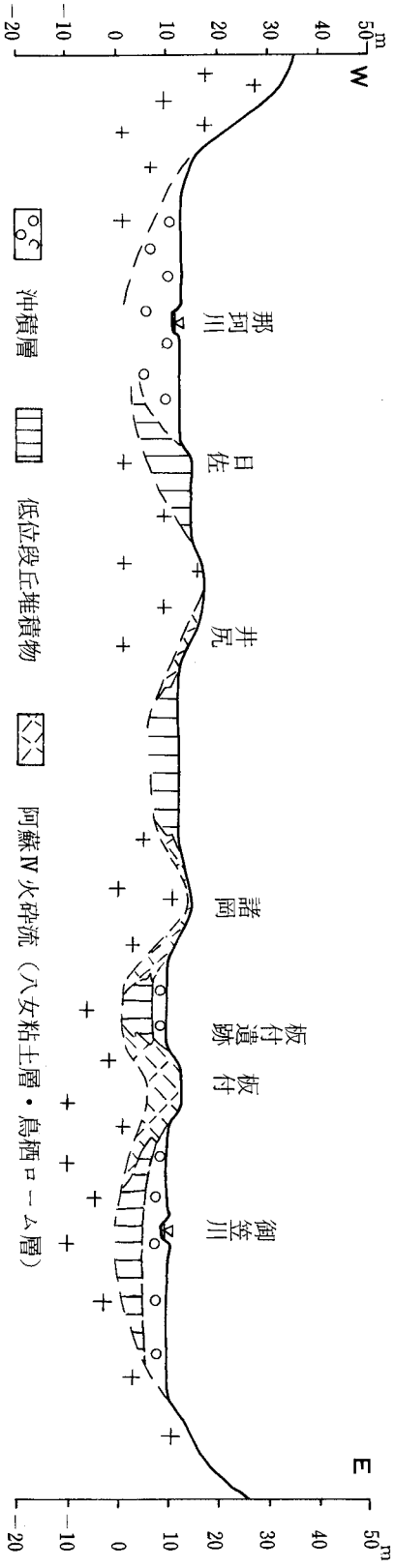


Fig. 2・1　福岡平野一般地質断面図

立地する面（標高10～12m）も同様にこの中位II面である。このように那珂川に比較して遺跡周辺の中位II面の平坦面標高が低いのは、博多－二日市構造線に沿う沈降地帯の影響による低地の形成が、この火砕流堆積前にあったものと推定される。

この面は、遺跡より北側では沖積面下に没している。この面の形成時代は、堆積物（八女粘土層）の絶対年代測定結果から約3万年前であることが明らかになっている。

板付遺跡の立地する中位II面は、ここ板付付近では、約3万年前から侵食も、また新しい堆積物にもおおわれたことのない安定した平坦面であったといえる。

低位段丘は、那珂川右岸沿いの日佐一帯に模式的に発達しており、浦田〔1962〕により日佐面と命名されている。沖積面との比高1～3mで段丘崖は連続し、平坦面標高は福岡市上日佐で15m前後、五郎丸で25m前後である。主として砂礫層より構成された河岸段丘で、北に向って緩傾斜でのびており、末端では沖積面下へ没する。御笠川沿いでは、板付遺跡より約1km上流の麦野付近から上流へ向って左岸沿いに点々と分布し、平担面標高は麦野一帯で15m前後、二日市一帯では20m前後になる。一方、遺跡付近より下流では、低位段丘面の分布は認められず、沖積面下に没するものとみられる。

沖積面は、御笠川などの河川のはんらん原堆積物と沖積世初めからの気候の温暖化に対応した海水準の上昇による海成層の堆積作用により、礫・砂・粘土を堆積させて形成されたものである。福岡平野の大部分を占めている。御笠川は、遺跡付近まで段丘群が河川の両岸に分布しており、沖積面は段丘を切った低地部や現河川沿いに段丘群と雑居している。主要な流路もこの板付付近までは、平野の東側に沿って流れ、遺跡付近で流路を西へ変え、さらに北流するようになる。

御笠川沿いの沖積面の平坦面標高は、板付市営住宅遺跡付近で7～9m、現河床との比高1～1.5mであるが、約3km上流の大野城市仲島・畑付近では、標高15m、大野城市筒井付近では標高20mの平坦面をつくり、地形面勾配は、1／800程度である。一方、遺跡付近より下流では、地形面勾配は1／1000程度であり、沖積面のみが分布する福甫平野の主体となる。

このように、遺跡付近は、沖積面勾配の変換点にもあたり、福岡平野における主要な地形的変換点にあたるということがわかる。

すなわち、遺跡付近より上流側は、低位・中位の段丘群が分布し、沖積面との比高も数m程度のものが多く、段丘崖線は複雑な出はいりを示し、それに沿って沖積面が幅せまく入り込んで分布する。このような沖積面は、縄文末期から弥生にかけての小海退期に湿地が形成されて段丘面上の住居跡と関連させても、水田耕作のよい条件となり得たということがいえよう。

2　地　質

遺跡およびその周辺の地質は、これまでのべてきたような地形によく対応して分布している。

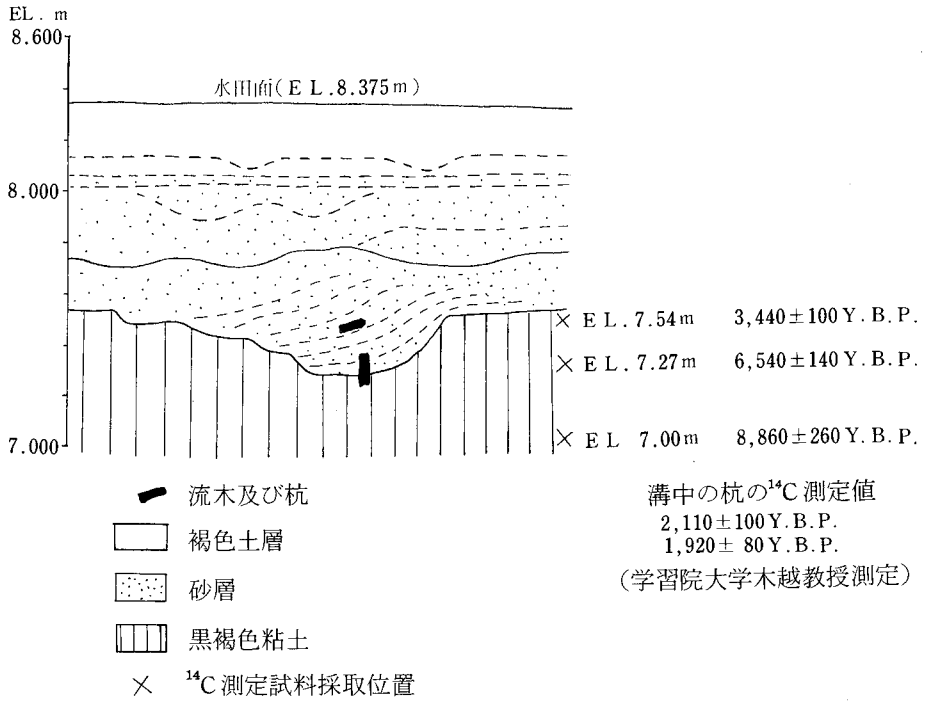


Fig. 2・2　P－20cトレンチ地質断面図及び C年代測定結果

御笠川の左右両岸山地を形成するものは、右岸山地に主として分布する三郡変成岩類と両岸および平野の地下に基盤として分布する花崗岩類である。とくに花崗岩類は、遺跡付近の地下6～7m深所には広く分布し、大部分は風化してマサ状になっている。そのため、御笠川沿いの第四紀層は花崗岩質の礫と砂がもつとも多い。

御笠川沿いの低地は、博多－二日市構造線と呼ばれており、北九州に特徴的な朝鮮方向のNW－SE方向の構造線と調和的で、この構造線の活動によつて形成された低地を御笠川は流れている。その構造線の活動後、第四紀になり、洪積世中期から後期にかけて大きく3段に区分される段丘形成にともなう堆積物の堆積と沖積世における海岸平野の形成にともなう沖積層の堆積があった。

春日面をつくる高位段丘堆積物は、主として砂礫層より構成される。礫は中～小礫を主とし、後背地の花崗岩・変成岩礫で亜角礫で淘汰は悪い。基質は砂質な部分が多く、一部には、レンズ状の粗砂～シルトの薄層をはさむことがある。礫は風化が進み、ほとんど礫種を問わず「くさり礫」となっており、基質と一体化している場合が多く、スコップ等で容易にけずることができる。層厚は数m程度の場合が多く、多くは、侵食面上の薄層として風化花崗岩を凹凸ある不整合面をもっておおっている。平坦面全域に広い範囲で分布する場合はまれで、大部分は小規模な扇状地状の堆積物としての分布を示すことが多い。表層は例外なく赤色化作用をうけ、かなりの深部まで赤色化が進んでいる。この赤色化は、高位段丘砂礫層の堆積後の湿潤温暖気候下に形成されたものといわれている〔松井1963〕。

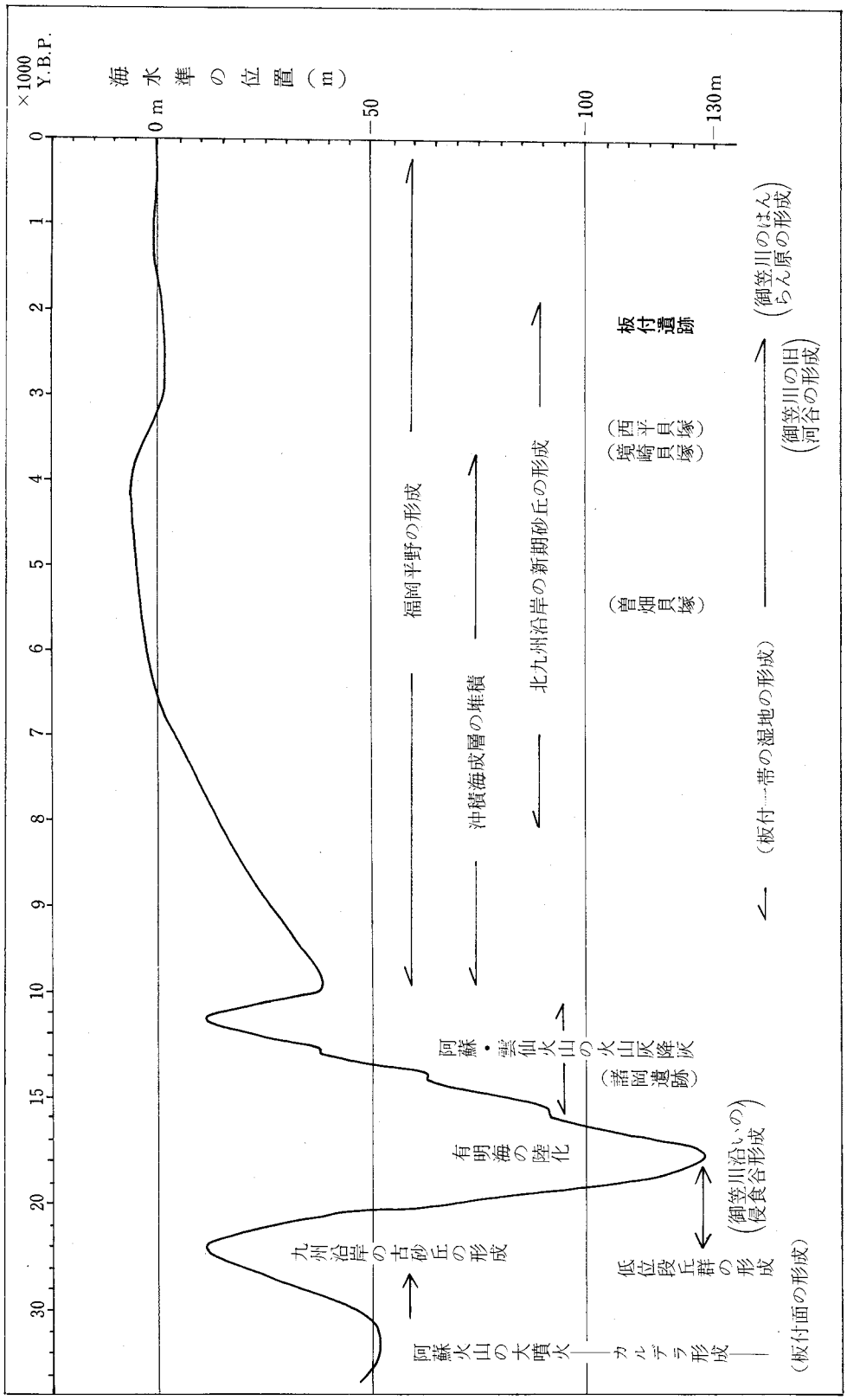


Fig. 2・3　洪積世末～沖積世の海水準変動と板付遺跡一帯の地史

中位段丘砂礫層は、御笠川沿いには主として上流の二日市以南に分布しているが、福岡地方の模式地である須玖一帯では、標高30～20mの中位段丘I面を形成して分布している。砂礫層は、中～小礫を主とし、砂質な基質より構成され、礫種は花崗岩・変成岩の亜角礫よりなっている。那珂川西方、長住・若久一帯ではシルトのレンズをはさむ淘汰のよい砂層が分布している。表層近くは赤褐色化して、やや風化が進み、礫も半ぐさりのものが多い。砂礫層の上位には、一般に黒褐色土と褐色火山灰質粘性土をのせており、一部は、Aso—Ⅳ火砕流（八女粘土層・鳥栖ローム層）におおわれることもある。

那珂川沿いの日拝塚等では、中位段丘砂礫層をおおってAso－Ⅳ火砕流の灰石および八女粘土層におおわれる。

中位段丘II面を構成する堆積物はAso－Ⅳ火砕流である。この堆積物は、板付遺跡付近、諸岡一帯の丘陵、那珂川右岸沿いの白水・五郎丸一帯に分布し、一部那珂川沿いの中原・日拝塚一帯では灰石質のものがあるが、大部分は白色粘土化した「八女粘土層」である。層厚は変化に富み、八女粘土層の堆積時の低地を埋積して流下してきたことを示しており、一部では、山地・丘陵を越えて分布している熱雲流堆積物としての性格を示す。この八女粘土層の直上には、八女粘土層との境界が不規則な形を示し、一見、不整合状にみえるオレンジ色軽石質火山灰がおおっている。層厚は、30～50cm程度の場合が多く、主として下部にマンガンをコアとして、卵状の白色団塊が含まれている。これは鳥栖ロームと呼ばれており〔郷原ら1964〕、八女粘土層の堆積直後の堆積物で噴出源も阿蘇火山とみられている。この八女粘土層と鳥栖ローム層の堆積年代は、放射能炭素による絶対年代測定により、八女粘土層が$33,000\pm^{3000}_{2200}$Y．B．P．（Gak－282）、鳥栖ローム層が30,600 ± 3,000Y．B．P．（Gak－283）を示しており、洪積世末のウルム氷期IIに対比できる。地形の項でものべたように、板付遺跡の立地する通津寺の面は、この八女粘土層と鳥栖ローム層の堆積原面を示しており、地形面形成時は、現在の地形面よりさらに広い面であったと推定されるが、その後の侵食作用により、ほぼ現在の地形面まで縮少されたものである。このことは、板付遺跡の今回調査地の下位にも一部八女粘土層が分布していることからも明らかである。遺跡地点より下流側へは沖積面下へ没し、地形面を形成しない。沖積面下では、洪積層にはさまれて点々と分布していることが明らかになっており、遺跡北方1kmの東那珂一帯の御笠川右岸では、現地表面下8m（標高±0m）付近にはさまれている。これらの事実からみると福岡地方においても、八女粘土層の堆積時には、海水準は現在の海水準より低かったと考えられ、当時の福岡平野は現在より10m近く低い低地帯を形成していたものとみられる。

低位段丘堆積層は、那珂川右岸、下日佐・五郎丸一帯に模式的に分布している。この一帯の堆積物は、中～小礫を主とし、礫は新鮮な礫が多く、ルーズな場合が多い。一部には斜交層理のよく発達した砂層とシルト層がはさまれることがある。この地層は日佐砂礫層〔浦田1962〕と呼ばれている。御笠川沿いでは、板付遺跡より約1km上流の麦野付近から上流に点々と分布している。主として砂礫と砂により構成されており、遺跡より下流では地形面を形成せず、沖積面下に埋没しているものと推定され、遺跡北方約1km付近では沖積層直下の砂質堆積物（N

Tab. 2・1　一般地質層序表

時代	地層名	地質断面	特徴	地形面
沖積世	**沖積層**		砂および粘土より構成されており、遺跡付近では層厚6～7mである。上部は砂層よりなり、下部は粘土層を主とする。砂層と粘土層の境界は3,000Y.B.P.前後とみられる。	**沖積層** （0～10m）
洪積世	**日佐砂礫層**		御笠川沿いでは沖積面下に没し、那珂川沿いには、標高10～15mの平坦面を形成する。砂礫層を主とし、一部二次ロームにおおわれる。	**低位段丘面** （10～15m）
	鳥栖ローム層 **八女粘土層**		Aso－Ⅳ火砕流の北方末端相をしめしており、粘土質軽石流である。中位Ⅰ面をおおったり、沖積面下に没したりする。 ^{14}C年代：33,000Y.B.P.	**中位段丘Ⅱ面** （12～30m）
	須玖層		標高20～40mの平坦面をつくり、粘土質砂礫層。表層は、赤褐色粘土（赤色土）によっておおわれる。	**中位段丘Ⅰ面** （20～40m）
	春日層		凹凸に富む地形面で、表層は赤色土によっておおわれる。砂礫層よりなり、礫は風化くさり礫の場合が多い。	**高位段丘面** （30～60m）
先第四紀	**北九州花崗岩類**			

（　）内は、平坦面標高。

値20～30）がこの低位段丘堆積層に対比されるものとみられる。この低位段丘堆積層の年代は明らかでないが、有明海周辺の低位段丘堆積層は、洪積世最末期のウルム氷期最盛期の約2万年前のものであることが明らかになっている。

沖積層は、御笠川の沖積面をつくるもので板付遺跡付近で標高7～9mの平坦面をつくる。遺跡より上流へは、段丘群が共存するが、下流へは沖積面のみが広がり、海岸をつくるようになる。この沖積層は、御笠川により運搬・堆積したものと完新世初期からの気候の温暖化にともない、それに対応して、完新世初期より約40m上昇してきた海水準に対応して堆積した海成沖積堆積物とがある。

この縄文海進にともない福岡平野でどこまで海がはいって来たのであろうか。

板付遺跡の下流約1kmの東那珂一帯では、深度5～6m付近（標高3.00m前後）まで軟弱な砂まじり粘土～青灰色粘土（N値5以下）が分布し、沖積海成粘土層とみられる。

この粘土層は、東那珂一帯より上流への分布は明らかでなく、これより上流での沖積面でのボーリング結果では、厚さ数mの砂層～礫まじり砂層があり、御笠川の河成堆積物であるとみられる。このことから、福岡平野の縄文海進は、標高3m前後まで海面が上昇した可能性がつよい。この縄文海進のピークの時期は縄文前期～中期といわれているが、この頃に福岡平野では、遺跡地点から北方1km付近まで海進があり、古博多湾の湾入があったとみられる。このことは、遺跡の黒色粘土層より産したハマナツメなどの種子からも海岸線が現在より近かったことが裏付けられる。遺跡一帯は、J－23トレンチの板付I式・夜臼式の産出する粘土層の下底が標高5.86mであり、また、P－20cトレンチの6,540±140Y.B.P.（Gak－4547）の絶対年代を示す黒色粘土の層準も標高7.32mである。これらの事実からみると縄文海進は、遺跡地点まで及ばなかったことは明らかであり、もっとも接近した時でも海岸線から約1km近くあったと推定される。P－20cトレンチの黒色粘土層の最下部は放射能炭素による絶対年代測定結果によると8,860±260Y.B.P.（Gak－4548）の値を示し、完新世の基底を示す年代である。このことは、この粘土の最上部の絶対年代が3,400±100Y.B.P.（Gak－4546）を示し、縄文後期に対比されることから、縄文早期の完新世初期から縄文後期まで連続して堆積した粘土層であり、その期間を通じてP－20cトレンチ付近一帯は湿地であったことは明らかである。

この遺跡西部は、縄文後期には標高7.55m付近まで黒色粘土の堆積があったが、板付遺跡のある中位段丘II面に近いJ－23トレンチ付近は、同じ縄文後期頃には、地盤標高5m前後で水面標高7.50m前後の沼地であったらしく、この沼地は水深2.50mにも達するものであったと推定される。このことは、J－23トレンチの黒色粘土層の花粉分析の結果から下部層準約50cm区間に*Trapa*（ヒシ）の存在が認められることから裏付けられる。

この沼地は、縄文後期（3400Y.B.P.）直後の海水準の低下に対応して形成されたもので、その後、弥生前期頃までかけて急速に埋積されていったということができる。とくにJ－23、J・K－25トレンチ一帯のように台地に近い沼地では、周辺の黒色粘土層の洗い出しによる再堆積により黒色粘土層が砂のレンズをはさみながら堆積しており、この黒色粘土層中に弥生前

Tab. 2・2　板付遺跡と日本各地の沖積層の対比表

×1000 Y.B.P.	^{14}C年代測定値	板付遺跡	有明海周辺	大分平野	大阪平野	濃尾平野	東京周辺
	910± 150 (Gak－518) 950± 80 (〃－1239) 1,470± 110 (〃－3148) 1,570± 100 (〃－3142) 1,920± 110 (〃－3143) 1,920± 80 (〃－4550) 1,990± 100 (〃－4549) 2,120± 90 (〃－4556) 2,580± 80 (〃－4552) 2,640± 95 (〃－4555) 2,690± 160 (〃－616) 2,750± 100 (〃－4554) 2,760± 105 (〃－4553) 2,960± 100 (〃－1236) 3,090± 120 (〃－2599) 3,230± 110 (〃－2598) 3,370± 95 (〃－4556) 3,380± 95 (〃－4551) 3,620± 100 (〃－1220) 3,680± 100 (〃－1237) 3,720± 110 (〃－1238) 6,540± 140 (〃－4547) 6,730± 100 (〃－2600) 8,340± 250 (〃－4548) 8,700± 200 (〃－2603) 8,730± 270 (〃－3144) 9,300± 240 (〃－2977) 9,550± 150 (〃－817) 9,610± 180 (〃－3526) 10,220± 190 (〃－1930) 10,500± 500 (〃－2601) 11,400± 300 (〃－2602) 15,350± 320 (〃－494) 16,700± 500 (〃－2980) 17,100± 290 (〃－2979) 18,200± 500 (〃－2978) 19,600± 550 (〃－918) 20,850± 750 (〃－3525) 23,200± 750 (〃－1931) 25,900± 1,100 (〃－381) 26,350± 1,100 (〃－284) 30,600± 3,000 (〃－263) 33,000± 3,600 2,200 (〃－262)	砂 有機質粘土 青灰色粘土・砂層 （日佐砂礫層） 鳥栖ローム層 八女粘土層	有明粘土層上部：砂 有明粘土層下部：粘土～シルト 低位段丘砂礫層 （岱明層 保田窪砂礫層 託麻砂礫層 大江貝層etc） 鳥栖ローム層 八女粘土層	沖積層Ⅰ：砂～泥 沖積層Ⅱ：砂～泥 赤川砂礫層 延命寺砂礫層 八女粘土層	沖積層上部：砂／砂礫／砂 粘土～シルト 沖積層下部：砂泥互層 伊丹礫層 伊丹粘土層	南陽層上部：砂 南陽層下部：粘土～シルト 濃尾層：砂泥互層 第1礫層 鳥居松礫層 小牧礫層	有楽町層上部：砂～シルト質砂 有楽町層下部：粘土～シルト 七号地層：砂泥互層 青柳礫層 立川礫層 山手礫層

●：筆者らの行った各地の14C年代測定値　　×：今回の板付遺跡で行ったもの

期の杭や矢板が認められる。

J－23トレンチにおける ^{14}C年代測定結果からも、このことを示しており、標高7.00～7.50mまで急速に埋積されたものとみられる。その後、さらにこの黒色粘土層を切って砂層の堆積があり、この砂層中または、黒色粘土層最上部に打込んだ杭や矢板が認められる。これらの杭や矢板に伴なう土器は弥生中期～後期を示している。このことは弥生前期直後にも一時的な侵食の時期がありこの黒色粘土層を切っている。

このように、縄文後期以降2回の侵食が認められ、諸岡川の旧河床の形成があった。

この旧河床は、2区の南方からと3区の西南方からの大きく2つの線が考えられる。

この弥生中期～後期を通じて、標高7.50m前後の高さで河川が流れており、周辺は、湿地として残り、その湿地に水田耕作が行なわれていたものであろう。

その後、古墳時代になって海水準はほぼ現在の高さに回復し、それにともない諸岡川のはんらん原堆積物である4～5枚の砂層が遺跡全域をおおった。この砂層の層厚は50～80cm程度で、下部粗粒砂で上部になるほど細粒になる傾向がある。この砂層中には、下部で須恵器や土師器などが含まれており古墳時代以降のものであることは明らかである。　（古川博恭）

文　献

有明海研究グループ（1965）有明・不知火海域の第四系、地団研専報11、1－86
――――――（1969）九州地方の第四系、地団研専報15、411－427
古川博恭・満塩博美（1965）熊本県長洲町付近の第四系、九大理研報vol.8、No.2、83－100
郷原保真・新掘友行・鈴木康司・野村哲・小森長生（1964）北九州の第四紀層に関する諸問題、資源研彙報No.62、83－108
満塩博美・畑中健一（1973）平尾台上の八女粘土層－新期阿蘇溶結凝灰岩－、北九州市文化財調査報告書第13集、57－66
首藤次男（1962a）九州の最新統諸層の吟味－対比の基礎、地質学雑誌vol.68、301－312
――――（1962b）九州の最新統諸層の対比、地質学雑誌vol.68、481－486
――――（1962c）九州の最新統地史の問題点、地質学雑誌vol.68、522－536
鳥山武雄（1932）筑紫平野及び其四近の地質に関する造構造史的考察、地球vol.18、No.5、323－333
――――（1933）北九州における近生代地殻変動について、地球vol.19、No.5、337－376
浦田英夫（1962）福岡市付近の平担面の地史学的研究、九大教養研報No.8、1－45
矢部長克（1925）第三紀及び其の直後における九州地史の大要、地理評vol.2、No.1、1－16
松本達郎（1951）北九州・西中国の基盤地質構造概説、九大理研報vol.3、No.2、37－48

第2節　周辺の遺跡と歴史的環境

第1節にのべたような地史・地質的条件のもとで、板付遺跡の周辺にはどのような遺跡が分布しているのだろうか（地図1・地図3）。

1　先土器時代の遺跡

遺跡は少ない。板付遺跡では今回の調査で石器4点が出土した。二次堆積の状態で出土し、本来の包含状態は明らかでない（本報告書第6章末尾補参照）。

板付遺跡南西約 0.7kmの諸岡遺跡（地図1・3の6、以下遺跡名のあとの№は地図1・3の遺跡№と一致する）のA・C地点では、ナイフ形石器・トラピーズ・彫器・削器・使用痕ある剝片などからなるナイフ形石器文化終末期の包含層が確認された〔横山編1974、後藤・横山編1975〕。包含層は中位段丘II面とされる標高20mあまりの独立丘陵の鳥栖ローム層にある。

板付遺跡西方約 1.5kmの五十川高木遺跡（48）B地点の沖積層ではナイフ形石器1点が出土し〔塩屋・折尾1975〕、須玖岡本遺跡南西の標高50mあまりの日佐原遺跡でもナイフ形石器が採集されたことがある〔福岡市教育委員会1971〕。最近新幹線車輛基地の調査で先土器時代包含層が見出された。

2　縄文時代の遺跡

この時代の遺跡も少ない。板付遺跡では、今回の調査で、第3区の黒色粘質土層中から、原位置を保つとみなされる状態で、山形押型文を施す尖底土器、無文尖底土器など（早期）と、条痕文・刺突文・短沈線文を施す破片（前期）が出土した。

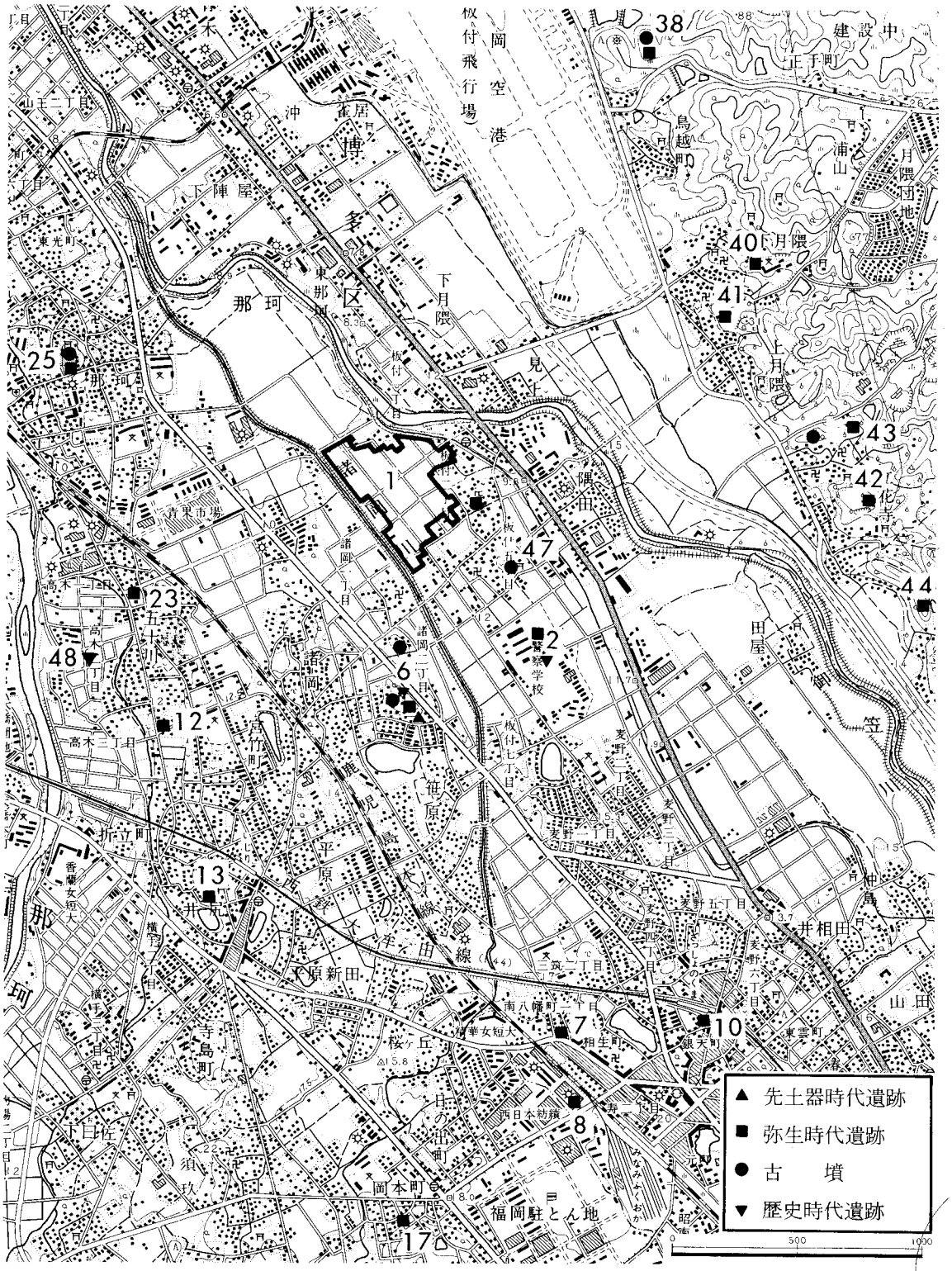
諸岡遺跡C地点では楕円押型文を施す小片2点が出土した。本来の包含層は失われたとみられ、遺構は明らかでない〔後藤・横山編1975〕。弥永遺跡B地点では、後期・晩期土器片が出土している〔塩屋・折尾1975〕。その他に、板付遺跡南の麦野でサヌカイト製石匙が採集されている（東京国立博物館蔵）〔福岡市教育委員会1971〕。

那珂川の上流域右岸では、新幹線車輛基地建設にともなう調査等で、縄文時代遺跡の存在が知られている。

御笠川、那珂川流域の福岡平野に縄文時代遺跡が少ないのは、第1節でのべた地質的条件によるとみられる。

3　弥生時代の遺跡（地図3、Tab. 2・3）

弥生時代遺跡の分布は縄文時代遺跡とは比較にならないほど稠密である。自然条件の面からみれば縄文時代の海進とそれにつづく海退によって泥湿地であった沖積地が、水田耕作に適す


▲ 先土器時代遺跡
■ 弥生時代遺跡
● 古　　墳
▼ 歴史時代遺跡
0
500
1000

る条件を整えたからである。

遺跡の分布をみると、1、板付低台地から南方、須玖遺跡等のある春日丘陵へのびる低台地、2、御笠川右岸の月隈丘陵、3、御笠川と那珂川がもっとも近ずく部分で、両河川にはさまれた那珂低台地、4、その南の那珂川右岸沿いの井尻付近の低台地にわけることができる。これらの西方に分布する遺跡も含め、遺跡分布と地形との関係は地図3からよみとれよう。周辺の弥生時代遺跡についてはTab. 2・3にまとめた。

月隈丘陵では金隈遺跡(44)が前期末からはじまる墓地遺跡として知れている〔折尾1970・1971〕。甕棺墓多数の他に、土坑墓、石蓋土坑墓があり、磨製石剣・石鏃・貝輪が出土している。その北方の宝満尾遺跡(38)では、前期とみられる袋状竪穴、中期後葉の甕棺墓、後期の土坑墓、石蓋土坑墓が調査された〔山崎1974〕。副葬品として明光鏡、鉄製素環頭刀子、ガラス小玉多数等が出土している。

他に甕棺墓地としては上月隈遺跡(41)・下月隈遺跡(40)・宝満尾東遺跡(39)・丸山遺跡(45)、上臼井遺跡があり、平尾遺跡(36)・上ノ浦池遺跡(37)・上園遺跡(42)・谷頭遺跡(43)、金隈遺跡南方の昭和農園遺跡・持田ヶ浦遺跡で後期土器片等が採集されている〔福岡市教育委員会1971等〕。その南の丘陵麓、御笠川近くには中・寺尾遺跡がある〔浜田・酒井1971〕。これは前期から中期中葉にいたる墓地遺跡で、土坑墓66基、甕棺墓31基が調査され、その中には板付Ⅰ式・Ⅱ式の小形壺を副葬するものがある。

月隈丘陵では北端の上臼井遺跡から中・寺尾遺跡まで、点々と墓地遺跡が存在し、各々の集落は丘陵麓にあったとみられる。

那珂の低台地は、那珂川と御笠川とがもつとも近づく部分にあり、標高は10～5 mである。ここには多くの遺跡が在存していたが、現在は完全に市街地と化している（24～34）。

最も古い遺跡は春住遺跡である〔筑紫野史学研究会1972〕。この遺跡は標高約6 mにあり夜臼式・板付Ⅰ式土器を出す袋状竪穴が見出され、他に甕棺墓もあった。その他中期・後期の土器・石器も採集されている。中期以後の遺跡は多い。環溝にかこまれた住居址・甕棺墓のある比恵遺跡は古くから著名である〔鏡山1956〕。

この地域では他に、那珂町宮口・宮下、竹下西町・白土(28)、小林町、山王公園(33)などで、中期～後期の土器、石器が採集されており〔福岡市教育委員会1971〕、竹下駅北方の竪穴では炭化米の出土が報じられている〔中山1923〕。また東光寺町(27)、小林町、扇町(34)では中期の甕棺墓が知られている。那珂八幡遺跡(25)では、古墳裾部より銅戈鋳型が出土した〔水野・樋口・岡崎1953：65、福岡市教育委員会1971：30〕。

←地図1 板付遺跡の位置と周辺の遺跡（この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の 2.5万分の1地形図を複製したものである。承認番号昭50九複、第306号）

1 板付遺跡（1971～1974調査）　2 警察学校遺跡　6 諸岡遺跡　7 南八幡遺跡　8 渡辺鉄工所遺跡　10西鉄雑餉隈遺跡　12井尻栄町遺跡　13井尻地緑神社遺跡　17須玖岡本遺跡　23妙楽寺遺跡　25那珂八幡遺跡　38宝満尾遺跡　40下月隈遺跡　41上月隈遺跡　42上園遺跡　43谷頭遺跡　44金隈遺跡　47板付八幡古墳　48五十川高木遺跡

（No.は地図3、Tab. 2・3と一致する。）

Tab. 2・3　板付遺跡周辺の弥生時代遺跡（No.は地図1、3と一致する、（　　）内は旧地名）（沢皇臣作製）

No.	遺跡名	所在地	時期	遺構・遺物	文献
1	板付	福岡市博多区板付2～5丁目	前～後期	環溝・住居址・墓地・井戸・水田址・貯蔵穴・細形銅矛・細形銅剣・銅矛・銅鏃・銅釧・土器・石器・木器多数	森・岡崎1961、下條1970
	墓地 田端	〃　〃　2丁目（筑紫郡那珂村大字板付字田端）	前期末～中期	甕棺墓・細形銅矛3・細形銅剣3	中山1917 a
	墓地 G－5 a	〃　博多区板付2丁目	〃	甕棺墓・木棺墓・土坑墓、磨製石剣切先	1976年報告書刊行予定
	墓地 D・E－9	〃　〃　〃5丁目	前期末	木棺墓	後藤・横山1974
	墓地 第1区台地上	〃　〃　〃2丁目	前期末～中期	甕棺墓・木棺墓・土坑墓、滑石製勾玉（副葬品）	
2	警察学校（高畑）	〃　〃　〃6丁目（筑紫郡那珂村大字板付字田端南方田字高畑）	中期か	散布地	中山1917 b
3	麦野1丁目	福岡市博多区麦野1丁目	後期	包含地	福岡市教委1971
4	〃　3丁目	〃　〃　〃3丁目	〃	〃	〃　〃
5	〃　6丁目	〃　〃　〃6丁目	〃	〃	〃　〃
6	諸岡	〃　〃　諸岡	前期～後期	竪穴遺構・墓地、朝鮮系無文土器・貝輪・細形銅剣・鉄戈	横山1974、後藤・横山1975
	墓地 A地点	〃　〃　〃字岡ノ前	中期～後期	甕棺墓・土坑墓、貝輪	横山1971
	墓地 B地点	〃　〃　〃　〃	前期～中期	甕棺墓、細形銅剣・銅戈・貝輪	後藤・横山1975、三島1968
7	南八幡	〃　〃　南八幡町1丁目	後期	墓地：石蓋土坑墓・甕棺墓	中山1931、福岡市教委1971
8	雑餉隈	〃　〃　相生町（筑紫郡那珂村麦野）	〃	住居址・墓地	中山1916
	墓地 雑餉隈	〃　博多区相生町1丁目	〃	墓地：箱式石棺	福岡県教委1963
	墓地 渡辺鉄工所	〃　〃　〃	〃	墓地：甕棺墓、鉄斧	福岡市教委1971
9	新和町	〃　〃　新和町		墓地：箱式石棺	宮小路1969
10	西鉄雑餉隈駅	〃　〃　銀天町1丁目			
11	井相田	〃　井相田	後期	包含地	福岡市教委1971
12	井尻栄町	〃　南区井尻栄町	中期	散布地・墓地：甕棺墓	〃　〃
13	井尻地縁神社	〃　〃　〃	〃	住居址、鉄鎌	原田1954、宮竹公民館1968
14	井尻熊野権現	〃　〃　〃（筑紫郡日佐村井尻）		銅矛鋳型	青柳種信、中山1924 a
15	井尻	〃　〃　〃（　〃　）		墓地：甕棺墓・土坑墓・石蓋土坑墓	中山1927 b、鏡山1953 a
16	須玖	春日市須玖		墓地：甕棺墓	福岡県教委1962
17	須玖岡本	〃　〃　岡本	中期	墓地：甕棺墓、鏡・壁・銅剣・銅矛・勾玉・玉・銅矛鋳型・銅戈鋳型・銅釧鋳型	中山1927 a、浜田・島田・梅原1930、福岡県教委1962
18	三宅	福岡市南区三宅		散布地	福岡市教委1971
19	岩野	〃　〃　県営大橋住宅（岩野1246）	中期	墓地：甕棺墓、細形銅矛	〃　〃
20	和田天満宮	〃　〃和田	前～中期	包含地、墓地：甕棺墓	〃　〃
21	野間	〃　〃野間　東和大学・筑紫ヶ丘中学構内	中～後期	包含地、墓地：箱式石棺	〃　〃
22	五十川	〃　〃五十川	中期	墓地：甕棺墓	高山1969
23	妙楽寺	〃　〃　〃	中～後期	銅矛鋳型・石剣他	中山1929、水野・樋口・岡崎1953
24	竹下駅東北方	〃　博多区那珂竹下（筑紫郡那珂村大字竹下竹下駅東北方）	〃	散布地・墓地(?)	中山1917 b、中山1920
25	那珂八幡	〃　〃　那珂宮園	〃	銅戈鋳型	水野・樋口・岡崎1953、渡辺文吉1969
26	沼口	〃　〃　那珂本町沼口	〃	散布地・墓地	那珂公民館1966、福岡市教委1971
27	東光寺	〃　〃　那珂東光寺	中期	墓地：甕棺墓	那珂公民館1966
28	竹下白土（竹下農学校）	〃　〃　竹下2丁目（筑紫郡那珂村大字竹下）	中～後期	散布地	中山1917 b、福岡市教委1971
29	平田	〃　〃　博多駅南5丁目（筑紫郡住吉村大字平田）	前～中期	散布地、墓地：甕棺墓	中山1917 b、中山1920
30	春住	〃　〃　〃（春住町）	〃	包含層、竪穴	筑紫野史学研究会1972
31	平田東方	〃　〃　〃（筑紫郡住吉村平田の東方2～3町の畑地）	中期	筒形土器	中山1917 b
32	比恵	〃　〃　博多駅南4丁目一帯（大字比恵字古賀および小林）	中～後期	環溝集落、墓地：甕棺墓、銅鏃	中山1917 b、鏡山1956、坂本1969、福岡市教委1971
33	山王公園	〃　〃　山王1丁目	〃	包含地	福岡市教委1971
34	扇町	〃　〃　扇町	中期	散布地、墓地	那珂公民館1966、福岡市教委1971
35	那珂東南新開畑	〃　〃　那珂本町		墓地：甕棺墓	中山1920
36	平尾	〃　〃　東平尾（筑紫郡席田村大字平尾）	中～後期	包含地	中山1917 b
37	上ノ浦池	〃　〃　大字下月隈字宝満尾		包含地	山崎1974
38	宝満尾	〃　〃　〃　〃	前～後期	貯蔵穴（前期）、墓地：甕棺墓（中期）、土坑墓・石蓋土坑墓・箱式石棺（後期）、前漢鏡・素環頭刀子・玉・鉄鏃	〃　〃
39	宝満尾東	〃　〃　〃　〃		墓地：甕棺墓	〃　〃
40	下月隈	〃　〃　〃　〃	前～中期	墓地：甕棺墓（消滅）・袋状竪穴利用の石蓋土坑墓、石剣	折尾1971
41	上月隈	〃　〃　大字上月隈	中期	墓地：甕棺墓、細形銅剣(?)・鉄刀	山崎1974
42	上園	〃　博多区大字金隈字上園		包含地	福岡市教委1971
43	谷頭	〃　〃　大字立花寺字谷頭		〃	〃　〃
44	金隈	〃　〃　大字金隈字日焼	前～後期	墓地：甕棺墓・土坑墓・箱式石棺墓・石蓋土坑墓、貝輪・石剣・玉	折尾1970・1971、橋口・折尾1971
45	丸山	〃　〃　〃　字丸山		墓地：甕棺墓	福岡市教委1971
46	上ノ山	〃　南区上日佐上ノ山	後期末～	包含地、鉄鏃	〃　〃

この地域の南側、井尻付近でもいくつかの遺跡が知られている。井尻地緑神社遺跡⒀では中期の住居址から鉄鎌が出土した〔原田1954〕。井尻栄町遺跡⑿では石鎌が採集され、また甕棺墓もあった。井尻熊野権現付近⒁では銅矛鋳型出土した〔中山1924、1927〕。五十川妙楽寺境内㉓では銅矛鋳型、石剣などが出土している〔水野・樋口・岡崎1953：65〕。

板付遺跡南西の諸岡遺跡(6)には、前期～後期の遺跡がある〔横山1974、後藤・横山1975〕。遺跡のA・B地点には中期の甕棺墓を主とする墓地が営まれており、甕棺墓の中には貝輪を出すものがある。かつて頂上部に忠魂社が建てられた際には副葬品とみられる細形銅剣や貝輪が発見された。C・D地点では板付II式土器とともに朝鮮系無文土器を出す小竪穴多数が調査された。1975年に調査した丘陵東南裾部（F地点）の沖積地との境には、夜臼式土器のみを包含する層が見出された(「板付周辺遺跡調査報告3」として報告書準備中)。

板付台地の南南東方向にのびる麦野の低台地でも遺物が採集されている。中山平次郎氏によれば、板付の銅剣・銅矛出土地の南約5町の台地で中期土器が採集されている〔中山1917:678〕。これはわれわれが警察学校遺跡(2)と呼ぶところだろう。その南の麦野（3～5）でも後期の遺物が採集されている。雑餉隈周辺では、雑餉隈遺跡(8)に箱式石棺墓があり〔福岡県教育委員会1963〕、南八幡町遺跡(7)では後期の甕棺墓、石蓋土坑墓がしられ〔中山1931〕、渡辺鉄工所遺跡(8)では、甕棺墓があり鉄斧が採集されている。

その南の春日丘陵には、須玖岡本遺跡⒄をはじめ多数の遺跡がある。

以上のように弥生時代遺跡は、沖積平野内の低台地とそれをかこむ丘陵に分布する。遺跡の時期的変遷をみると、前期前葉の遺跡は少なく、生活址としては板付・春住をあげうるにすぎない。前期後葉～末から生活址・墓地とも増加し(板付・諸岡・春住・宝満尾・金隈等)、中期からは面的なひろがりを示し始める。各低台地、丘陵には数多くの集落・墓地が営まれ、その周辺の沖積地が生産の場として利用されていた。今回の調査によれば、前期には沖積地はまだ不安定な状態であったが、中期以後にはかなり安定したとみられる。こうした自然条件も、中期以降の遺跡の拡大をもたらした一因であろう。これらの遺跡群は、中期以降、春日丘陵を中心に形成される政治社会を構成する諸集落であり、その墓地であった。その中で板付遺跡は前期から後期まで存続した遺跡である。

4　古墳時代・歴史時代の遺跡

板付台地南端には板付八幡古墳㊼がある。墳丘は失われ、大破した石室が残る。諸岡遺跡(6)には5基の円墳があり、うち2基は完全に残り、2基は石室が露出し、1基は完全に破壊されている。

那珂地域では、円筒埴輪、形象埴輪を出す那珂八幡古墳㉕〔那珂公民館1969〕と、横穴式石室をもつ全長60mの剣塚古墳がある。山王町には須恵器、土師器の包含地が知られている。板付遺跡南東の井相田にも須恵器・土師器の包含層がある。

月隈丘陵上には円墳が点在する。宝満尾遺跡㊳では円墳(?)1基が調査された。下月隈・上月

隈・立花寺文珠谷・谷頭(43)・金隈日焼・丸山・影ノ浦・堤ヶ浦・大府に横穴式石室をもつ円墳が多数存在する。金隈遺跡南東の持田ヶ浦古墳群では 100基以上が確認され、そのうち2基が調査された〔別府大学1971〕。

歴史時代遺跡としては、諸岡遺跡(6)で土坑・小竪穴・柱穴・地下式横穴が調査され、青磁器・白磁器・瓦器・土師質土器等が出土した。五十川高木遺跡(48)では住居址、溝・柱穴・井戸等の遺構、土師器・黒色土器・瓦器・陶磁器・瓦・元豊通宝等の中国貨幣が出土している〔塩屋・折尾1975〕。

那珂中学校遺跡では土師器が出土し、奈良時代と推定されている。警察学校遺跡(2)では、瓦・礎石・古銭が、麦野の日吉神社遺跡では土師器・須恵器・青白磁器が採集されている〔福岡市教育委員会1971〕。

条里の遺構は板付周辺では確認されていないが、鏡山猛氏は、御笠川左岸の旧席田村の坪の遺名などから条里の存在を推定し、これを那珂条里とよび、これが水城を基線として画されたとのべている〔鏡山1936・37〕。明治時代の地形図には御笠川の右岸、板付遺跡の北方一帯に条里の跡がよく示されている(地図3)。今回の調査で、条里と認めうる遺構は発見されていない。

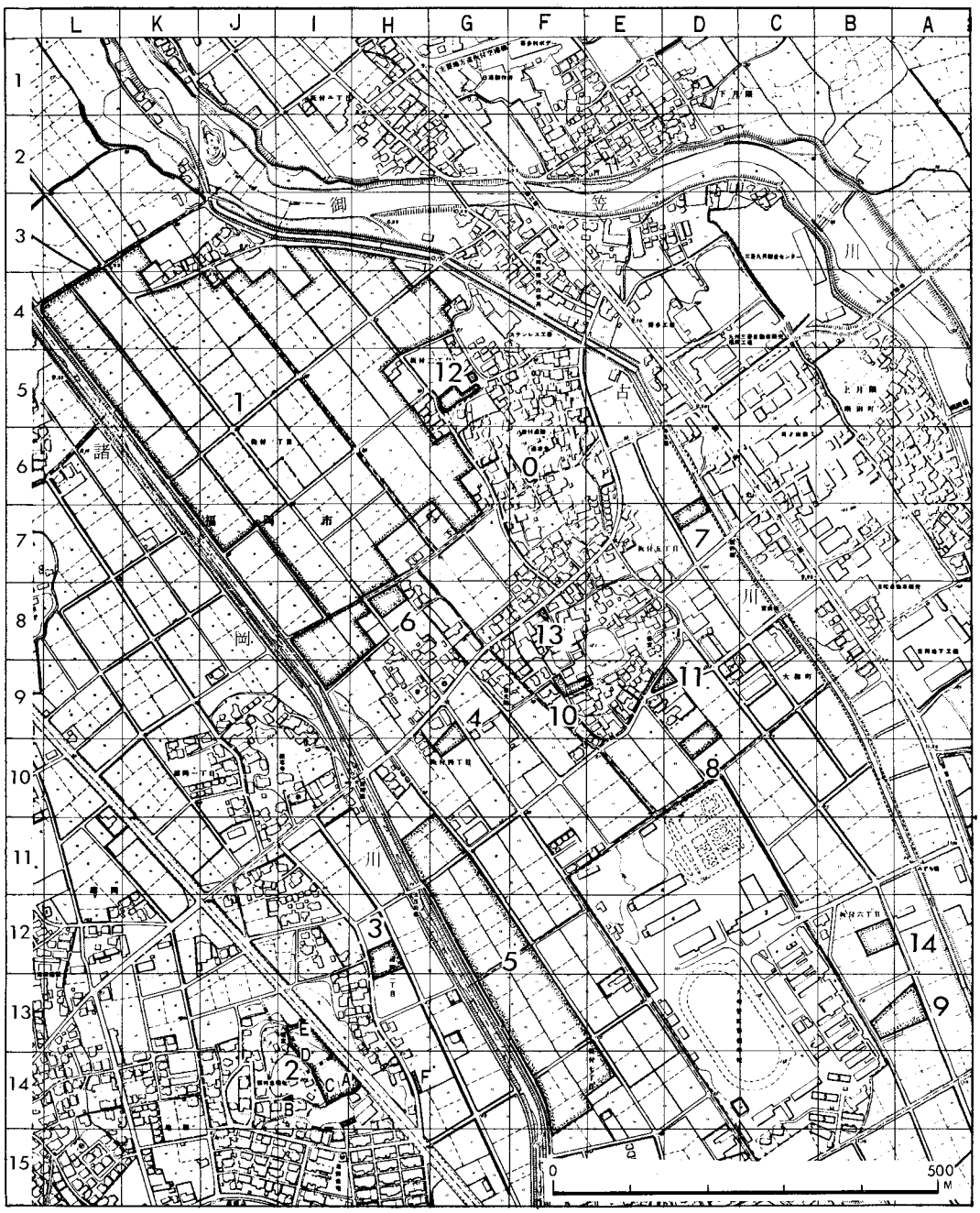
（後藤・沢皇臣・横山邦継）

第3節　周辺調査の概要（地図4・地図5）

すでにのべたように、1973年度に板付遺跡調査事務所が設けられ、保存整備の準備に入るとともに、板付遺跡周辺遺跡調査もはじめられた。この調査は、国庫補助を受けて、板付台地とその周辺部における宅地造成、家屋新改築等の事前調査として行い、板付遺跡のひろがりと、周辺地の地質、地理、歴史的環境を明らかにすることを目的としている。すでに1973年度・74年度・75年度の3か年度にわたって調査を実施し、『板付周辺遺跡調査報告書』として2冊の報告書を出した。またこれに先立ち、1972年度に2ヵ所で行った試掘と、1973年度に実施した諸岡川沿いの板付第2市営住宅地調査も周辺調査の一環とみてよい。以下にその概略をのべる。

第2節でたびたび言及した諸岡遺跡（地図5の2）は1973～75年に調査した。これは板付遺跡南西約 0.7kmにある独立丘陵上の遺跡で、弥生時代はじめから板付遺跡と併存していた遺跡である。この丘陵は、沖積地中の独立丘陵であったが(地図6)、現在は裾部が削られ道路や宅地となり、南側は大きく削られて失われている。F地点で、夜臼式土器包含層が見出され、興味ある問題をなげかける。C・D地点では板付II式土器（新しい方に属し、前期末に比定される）と、朝鮮系無文土器の共存する小竪穴群があった。A・B地点には中期～後期の甕棺墓地があり、丘陵頂部の古墳の下にもつづくことが予想される。詳細は報告書をみられたい。

1972年に調査したH－12・13地点地図5の(3)、G－9・10地点(4)は沖積氾濫層であった。H－12・13地点は諸岡川と諸岡遺跡の間にあり、標高約 9.1mの地表下には礫・砂・砂質土が厚く堆積し、ごく少量の弥生式土器小片が出土した。標高8m前後以下は青色・緑色をおびる粘土層になる。G－9・10地点は、今回発掘地第3区の黒色粘質土層（後述）のつづきの有無を確認するため



地図５　板付遺跡と周辺調査地点

０板付遺跡（環溝）　１板付遺跡（市営住宅建設にともなう調査1971～74）　２諸岡遺跡（Ａ地点：1973年調査、Ｂ～Ｄ地点：1974年調査、Ｅ・Ｆ地点：1975年調査）　３Ｈ－12・13地点　４Ｇ－９・10地点（以上1972年調査）　５板付第２市営住宅建設地　６Ｈ－８地点　７Ｄ－６・７地点　８Ｄ－９・10地点　９Ａ・Ｂ－13地点（以上1973年調査）　10Ｆ－９ａ地点　11Ｄ・Ｅ－９地点（以上1974年調査）　12Ｇ－５ａ地点　13Ｆ－８ａ地点　14Ｂ－12地点（以上1975年調査）

に調査したが、灰褐～暗灰色粘土層があるのみで、黒色粘質土層はない。遺物も出土していない。

1973年には、警察学校台地周辺を調査した。板付第2市営住宅建設地(5)ではトレンチ2ヶ所を掘り、ボーリング調査を9ヵ所で行った。結果は諸岡川の氾濫原であることが確認されただけで、警察学校台地上の遺跡に関連する遺構・遺物は見出されなかった。A・B－13地点(9)は警察学校台地東側にある(地表標高10.5～10.6m)。台地近くのトレンチでは砂層の堆積が確認され、流れ込みの土器小片若干が出た。その東側のトレンチでは標高 9.5m以下にかたくしまった厚い黒色粘質土層があり、土師器とみられる土器小片が出土した。警察学校台地と板付台地の間のD－9・10地点(8)は、激しい湧水のためさほど掘り下げられなかったが、耕土下は厚い砂層のみで（地表下約 1.5mまで、それ以下は不明）、急激な氾濫堆積状態を示している。

H－8地点(6)は、今回発掘地の南に接しており(地表標高8.75m前後)、標高 7.5m以下に第3区と同様の黒色粘質土層があった。この層は、第3区で中期後葉の地表をなしていた層である。D－6・7地点(7)は板付台地の東側、古川沿いの場所である。ここも砂・礫・粘土層が厚く、氾濫原であることを示していた。

1972・73の両年度のこれらの地点の調査によって、台地からはなれた地点、現河川近くは氾濫原で、たとえ遺構があったにしても、すでに失われていると判断した。

1974年度には諸岡遺跡の他は板付台地南端の2ヶ所で調査した。F－9a地点(10)は、台地南端の標高約12mの高まりの西側裾部近くである。ここでは、板付II式土器を出す袋状竪穴4基と、中世の溝が見出された。D・E－9地点(11)は、台地南端と沖積層の境にあたり、弥生時代前期とみられる小溝が、台地と沖積地とを画するように南西－北東へ走るのが確認され、それより台地側には、埋土中に前期後葉の土器を含む木棺墓1基があった。また土師器を出す小竪穴2基もみつかっている。

これらの点から、板付遺跡のひろがりが、台地全域におよんでいることが明らかになった。

1975年度に調査した各地点は近く報告書を出すが、台地西側に接するF－8a地点(13)は客土層下は砂層であり、沖積層とみられる。G－5a地点(12)は、環溝遺跡の北側にあたり、前期末～中期中葉の甕棺墓・土坑墓が群集していた。B－12地点(14)は、A・B－13地点の北側、警察学校台地の東側にあたる。以前の地図でみると(地図3・4)、この地点の北西側に台地が張り出している。調査の結果杭列・溝がみつかり、杭間から弥生時代終末の土器若干と土師器多数が出土した。

以上のような調査によって、板付遺跡の周囲の状況がある程度明らかになり、板付台地上の遺構のひろがりの一端を把握しえた。　　（後藤）

第 3 章

第 1 区 の 調 査

第1節 概　　観

第1区は調査地の北東部のB～I．8～18区である(**地図2**、**PL.Ⅳ**、Ⅴ)。地表標高は8.55～8.3mで、南東部から北西部へ低くなる。板付台地の北端部が第1区東側にのびている。台地を形成する鳥栖ローム層はC－14・C－15・D－16・D－17・D－18区の東側にあり、その西方～北方は沖積層となっている。

台地上は板付北小学校運動場に予定されたためほぼ全面を調査し、沖積地ではC－13グリッド、C－14a・bトレンチ、D－17a・bトレンチ、E－14グリッド、E－17グリッド、F－11トレンチ、F－12グリッド、F－15グリッド、F－17グリッド、H－12グリッド、H－14グリッド、H－17グリッドを調査した。発掘面積は台地上が1760㎡、沖積地が 670㎡、計約2430㎡である(**PL. 4・5**)。

台地はかなり以前に削平されているが、弥生時代前期末の竪穴（貯蔵穴） 108カ所、前期末～中期中頃までの甕棺墓63基、土坑墓・木棺墓51基、古墳時代住居址1、歴史時代の井戸2、その他柱穴状の小穴多数が出土した。台地北端の沖積層との境では古墳時代前期の小竪穴群を確認した。遺構の現状からみて台地の削平は1m近かったろう。

沖積層ではE－17グリッドで小竪穴1、杭列1、F－17グリッドで矢板(?)が出土し、台地西側縁辺を通るとみられる弥生時代前期の小溝1本を確認した。C－14a・bトレンチでは小竪穴が確認され、土師器・青磁器などが出土した。

台地南側には、ローム層とその下の八女粘土層を切る古い流れとみられる厚い砂の堆積がある。この部分では、ローム層と八女粘土層は急激な落込みを示し、人工的な掘削の可能性が強い。

以下第2節で沖積層について、第3節で台地上についての調査結果をのべる　　（後藤）

第2節　沖積層の調査

1　層　　位(Fig. 3・2)

第1区の東部は板付台地北端部で、その西方に広い沖積地がある。台地は鳥栖ローム層からなり、その上には砂質土層、耕作土層がのる。厚さは50cmほどである。これらの層は沖積層上にものびている。ローム層の下に白色～白褐色の八女粘土層が堆積している。鳥栖ローム層上面標高は、後世にかなり削られていて、(註) 現在約8mである。この層は北と西へ層厚を減じつつ低くなり、C－15区・D－15区・D－16区・D－17区で消えている。八女粘土層はその外にまでひろがり、C－12グリッド・E－14グリッド・F－15グリッド・F－17グリッドを結ぶ線の西～北側で消えるらしい。Fig. 3・65に示した等高線は台地上ではローム層上面の、トレンチ内では八女粘土層上面の高さを示す。八女粘土層上面標高をみると、C－14a・bトレンチでは東(7.5m) から西(6.7m) へ低くなり、C－13グリッドで6.44m、E－14グリッドで6.5m、F－15グリッドで6.3m、F－17グリッドで6.6mである。沖積地ではこの層の上に黒色粘質土層がのり、そのひろがりは八女粘土層よりひろいが、F－11トレンチ、F－12グリッドには認められない。この層の上面標高はC－13グリッドでは7.25m、H－12グリッド・H－14グリッドでは6.7m、E－14グリッドでは7.1m、F－15グリッドでは6.7mである。この黒色粘土層は、台地に近い部分ではかなり細かにわけられ、多くの遺物を包含している。

D－17bトレンチ南壁(Fig. 3・2、PL. Ⅸ)では、褐灰色砂礫層(10層)までの各層はほぼ水平に堆積し、最下部にある八女粘土層が東から西へ低くなってゆく(7.5m→6.85m)。10層以下、八女粘土層までは粘質土・砂層が堆積している。八女粘土層上には淡黒～黒色腐植土（20層・21層）がある。この層に溝が掘られ内部に粘土・砂の層がある(23・24層)。この上を黒色粘土層（17層)がおおい、その西方に帯淡青黒灰色粘土（第19層、やや礫を含む）が20層上にのり、その上に17層がのる。17層の上には黒灰色粘土（16層）・暗灰～暗褐灰色粘土（13・14層）がのっている。これらの各層に土器を主とする遺物を包含している。

溝内の23・24層からは夜臼式・板付Ⅰ式・板付Ⅱ式の弥生時代前期土器のみが出土する。溝際の21層と20層には遺物は含まれず、20層西側にはごく少量の前期土器が含まれる。21層出土土器も弥生時代前期土器が大部分で、少量の中期土器を含む。19層には前期土器のみが包含されており、17層には中期中葉頃までの土器片が入っている。16層の土器片も中期までのものだけである。その上の13・14層になると土師器・須恵器・青白磁器片も含まれるようになる。その上の各層には各時代の土器・陶磁器片も包含されている。19層が弥生時代前期の包含層で、20層出土の前期土器は19層から入りこんだ可能性がある。17層は中期中葉までの包含層、16層は中期末までの包含層、その上は各時代の遺物が混在する包含層となる。したがって、D－17bトレンチ西側では、弥生時代前期の地表は7.0～7.2m、中期中葉の地表は7.4m、中期末の地表は7.5mとみることができる。しかし、台地に近い方では、こうした明瞭な層毎の包含土器の相違は認められない。これは台地の削平と関係があろう。

こうした包含状態はD－16トレンチ、D－17aトレンチにも認められる。E－17グリットでは(Fig. 3・4)、15・16層が前期土器片を包含し、D－17bトレンチの19・20層に相当する。また11層・13層がD－17bトレンチの16・17層にあたる。10層はD－17bトレンチの10層のつづきであろう。

F－17グリッド（Fig. 3・7）ではD－17bトレンチの19層に相当するE－17グリッドの15はなく、前期包含層（16層）上にすぐ中期の包含層の13層がのっている。その上の12層は、E－17グリッドにはそれに相当する層はないが、その上をおおう9層からは土器器・須恵器等も含まれるようになる。

C－14a・bトレンチ(Fig. 3・2）では、八女粘土層上に2枚の弥生時代包含層がある（5・7層)。この層は、上から掘り込まれた古墳時代の竪穴にあらされ、その時に入り込んだものらしい土師器も含まれている。しかし、弥生式土器に限れば、下の黒色粘質土層（7層）では前期の土器片が多量に出土し（一部は中期のもの）、その上の暗褐灰色粘土（5層）からは前期土器の他に中期土器も多量に出土している。3層からは土師器・須恵器等が出土する。

D－16トレンチでも、八女粘土層は標高7.4m（東側）から6.5m（西側）へとゆるやかに下り、その上の黒色粘土層とやや青味をおびる黒灰色粘質土層から弥生時代前期土器片が出土するが、台地から離れるにつれ少なくなり、西端部ではほとんど出土しない。その上の黒灰色粘質土層を中期の包含層とははっきり確認できなかったが、それをおおう白色礫を多量に含む粘質土層より上からは各時代の遺物が混在して出土する。ここでもD－17a・b両トレンチ同様、台地に近い方では層毎の包含土器の相違ははっきりしない。

このように、沖積層下部の黒色粘質土層と一括する層は、主に弥生時代中期までの包含層をなし、下位が弥生時代前期、上位が中期までの包含層となっていて、多量の土器片を出土する。その上は、他の区と同様、各時代の遺物を包含している。

台地南側では、この台地を切った流れの跡がある。台地のこの切れ目は蛇行している。この台地を切る流れは厚い砂の堆積である(Fig. 3・2、PL.Ⅷ)。この砂層は八女粘土層を切り、標高6.2mないしそれ以下までつづいている。砂層下部（16層）には多量の流木が埋没している。砂層中には点々と各時代の土器片、陶磁器片が包含されている。この砂層が西方の沖積層でどうなるのかは、調査できなかった。また南側の立ちあがりは調査地内では確認できなかった。地質学的な分析は付編第1を参照のこと。　（後藤）

註）1975年に調査したG－5a地点(地図2、5、6)は環溝遺跡の北、第1区の南約60mにある。ここでは江戸時代の甕棺墓が見つかったが、その上面は削平により失われている。したがって台地の削平は江戸時代末以降ともみられる。ただし、第1区での削平と、G－5a地点での削平が同じ時期と断定することはできない。

2　遺構と出土遺物（PL.Ⅵ～Ⅸ）

(1) 弥生時代の遺構と遺物（PL.Ⅵ～Ⅸ）

a　溝（Fig. 3・1、PL.Ⅸ－1）

D－17a・D－17b・D－16各トレンチで検出され、台地縁辺を画するように走る溝である。平面的には部分的にしかとらえられず(D－17bトレンチ南壁際)、各トレンチの南、北両壁の断面によってはっきりした遺構である。

八女粘土層上の黒色粘質土層を掘り込んだ溝で、幅は 1.4m近い。D－17aトレンチでは東端部にあらわれ、E－17グリッドとの間壁に入り込む、溝上端標高約7.4m・溝底標高約7.1m。D－17bトレンチでは、南壁際の長さ1mほどが平面的にとらえられたが、溝内埋土と両壁の土層とは明瞭に区別しがたい。溝は第20層・第21層上から掘り込まれ、深さ20～30cmである。溝上端標高7.3～7.4m、溝低標高7.1m、D－16トレンチでは溝上端標高約7.3m・溝底標高7.0m。

溝底は八女粘土層上面にあり、推定長約40mで、方向は北18°東で、ほぼ南北である。この方向は八女粘土層上面標高約7.0mの等高線とほぼ一致する。

D－17bトレンチではこの溝の周囲の八女粘土層上に杭先端の痕跡が多数みつかった。溝の推定線の両側に多く、溝内には少ない。いずれも杭先端が八女粘土層に到達してできた丸いくぼみであり(深さ2～10cm)、杭そのものは全く残っていない。溝の両岸を補強するためのものであろうか。D－16トレンチでは溝の東2mの八女粘土上面の 7.0m等高線上で、マツの丸木杭1本（W1012）が出ているが、溝との関係は明らかでない。D－17aトレンチでは杭・杭列とも検出できなかった。

溝内からは夜臼式・板付Ⅰ・Ⅱ式土土器片が出土する。溝が掘り込まれた層（黒色粘質土下部）の両側にはほとんど遺物が出土しないが、溝から離れると、とくに西側で遺物の出土が多くなる。D－17bトレンチの場合、第20・第21′層にはまったくといってよいほど遺物は含まれていないが、第19・20層には多くの遺物が含まれている。

埋土出土の土器片からこの溝は弥生時代前期と考えられるが、その機能は明らかでない。南側と北側とにどうつづくか明らかではないが、台地と沖積地とをわけるように走っている。この溝が用いられていた時期の東側台地は、現在より1m近く高く標高9m近かったとみられ、単なる区画だけの意味で設けられたのでないことは明らかである。さらに、溝内には何らの遺構もなく、人工的に掘さくされたとも断定できない。（後藤）

出土遺物（Fig. 3・3）

出土遺物は土器片だけである。これらの土器片（Y726～738）は溝内埋土のうち上層（暗灰色粘土、第23層）でとくに多く出土し、下部では少ない。南壁近くの長さ1mほどの部分で出土したもので、出土器片は 110片あまりである。溝内の他の部分で出土した土器片は、溝が平面的にとらえにくかったため、各トレンチの最下部黒色粘質土層出土として一括せざるをえなかった。

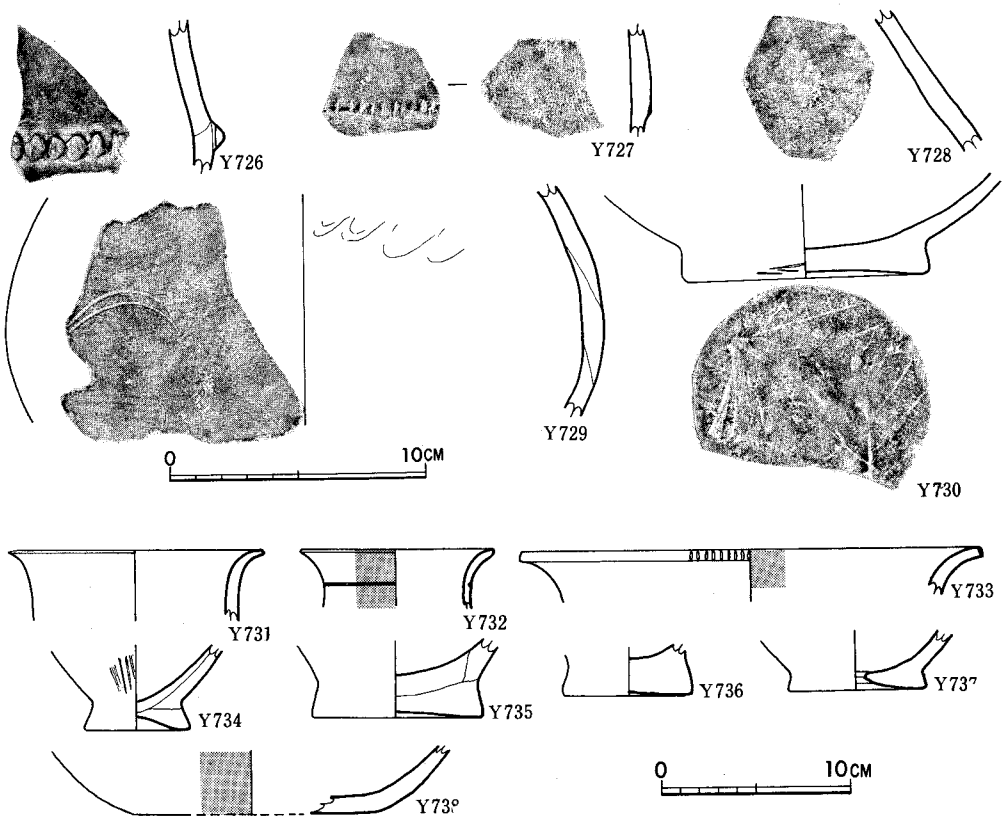


Fig. 3・3　D－17ｂトレンチ溝内出土土器実測図

甕（Y726・727・733）　Y726は胴接合部に刻目をもつ土器で、内面横なで調整。外面には煤の付着が認められる。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良く、淡褐色を呈する。夜臼式であろう。Y727も胴部破片で、外面に段がつき、その段に刻目が施される。内外面とも刷毛目調整で、内面には丹の痕跡が認められる。Y733は、外反するいわゆる如意状口縁の端の縦一杯に刻目がつけられ、横なで調整。内面に丹の痕跡がみられる。ともに胎土に石英粒砂を含み焼成良好。黄褐色（Y727）、淡褐色（Y733）を呈する。板付Ⅰ式である。

壺（Y 728・729・731・732）　Y731・732は外反する口縁部をもつ。Y732は口縁下に一条の沈線がまわる。Y731は横なで調整。Y732は外面丹塗りで、篦磨研。胎土に石英粒砂、砂を含み、焼成良好。褐色を呈する。Y731は夜臼式、Y732は板付Ⅰ式であろう。Y728・Y729は胴部破片である。Y728は外面に条痕がみられ、また丹塗りである。Y729は篦磨研で下弦重弧文が描かれる。内面は指の押圧調整痕が残る。石英粒砂（Y728）・砂（Y729）を胎土に含み、焼成良好。灰褐色（Y728）・暗褐色（Y728）を呈する。Y728は夜臼式、Y729は板付Ⅱ式であろう。

底部（Y730・734～738）　Y730・738は壺、他は甕であろう。Y738以外は上げ底を呈する。Y730は篦磨研され、底面に木葉痕がつけられる。Y734は外面条痕。Y737は、底部に焼成後

穿孔があり、甑として利用されている。Y 738は外面丹塗りである。胎土に石英粒砂を含むものが多いが、砂を含むもの（Y738)もあり、焼成は良好。黒褐色（Y730・737）・灰褐色（Y734)・褐色（Y735・735）・淡褐色（Y738)を呈する。Y734・735は夜臼式、Y730・737は板付Ⅰ式の特徴をもつ。　（沢）

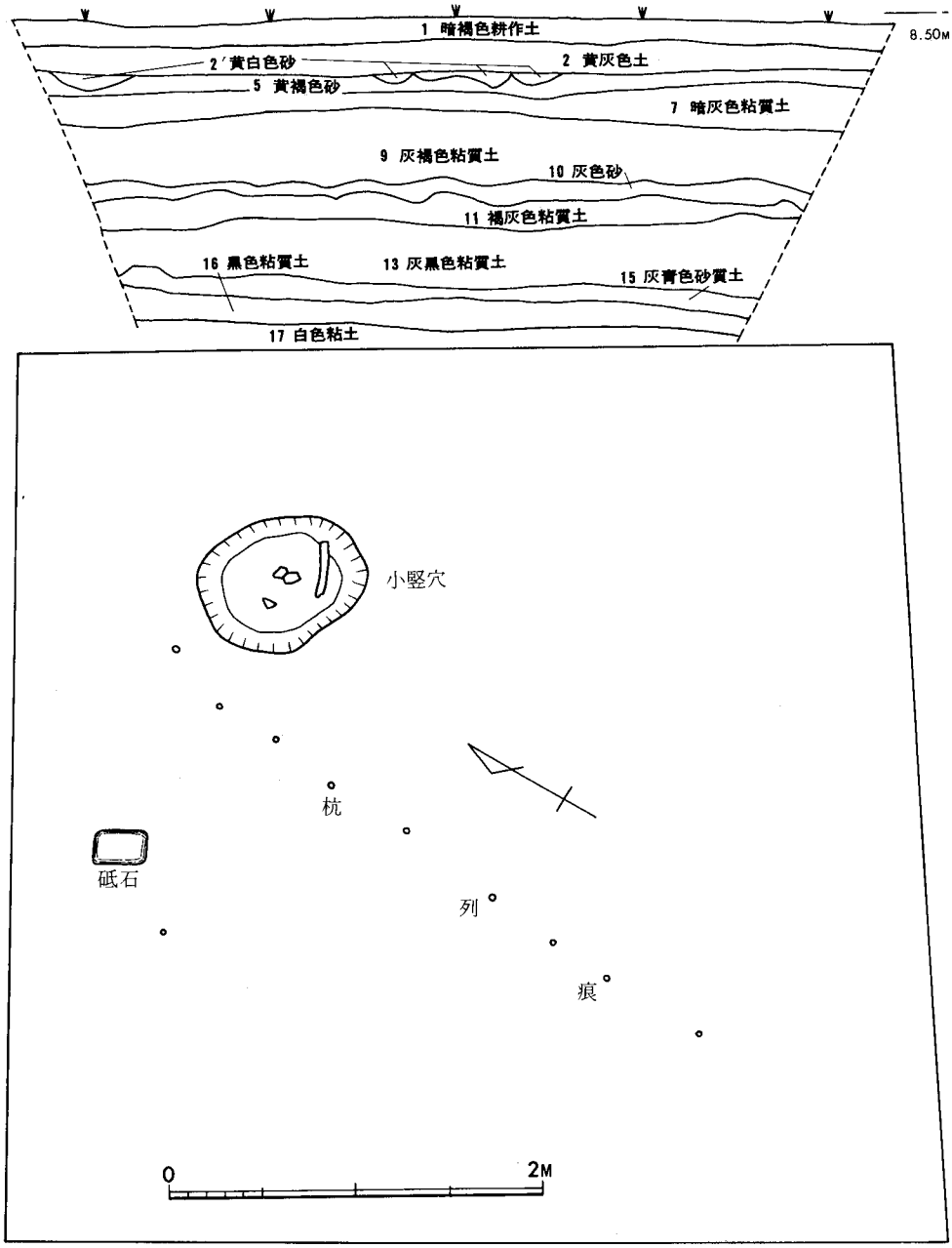


Fig. 3・4　E－17グリッド平面図・土層図

b　E－17グリッドの小竪穴と杭列（Fig. 3・4～3・6、PL. Ⅵ）

基盤層をなす八女粘土層に掘り込まれた小竪穴と、八女粘土層に若干入り込んだ杭列先端の痕が1列になっているのが検出された。

小竪穴

グリッドの北東端にある。埋土が八女粘土層上の黒色粘質土層と区別できないため、掘り込んだ層は明らかでなく、八女粘土層に掘り込まれた部分しかわからない。不整楕円形で、上縁は90×70cmを計る。深さは八女粘土層上面から20cm前後で、底面の標高は6.62～6.63mである。この残存する深さや八女粘土層上の層位からみて第15層より上から掘り込まれたとみられる。

竪穴内埋土からは木（W1015）と土器片19片および炭化米10数粒が出土した。土器片は型式不詳の1片を除いてすべて夜臼式土器片（Y1159～1177）で、この小竪穴は弥生時代前期初頭とみてよい。

この竪穴は明らかに沖積層に掘られたものであるが、他に同様の竪穴があるのかないのかは、沖積地の発掘面積が少ないために、明らかでなく、その使用目的もはっきりしない。

杭列

小竪穴西に北端を接してほぼ南北方向の杭列が検出された。杭は標高約 6.8mの八女粘土層にまで打ち込まれた先端部5cm末満が確認されただけで、すでにひどく腐蝕している。杭列は9本が35～60cm間隔で1列に打たれていて、1本だけが西に約1m離れている。杭の上部は腐って失われていて、打ち込まれた層を確定することは困難である。杭の本来の長さが30～40cmとすれば、上端は標高7.1～7.2mほどに来ることになり、第15層か第13層下部より打たれた

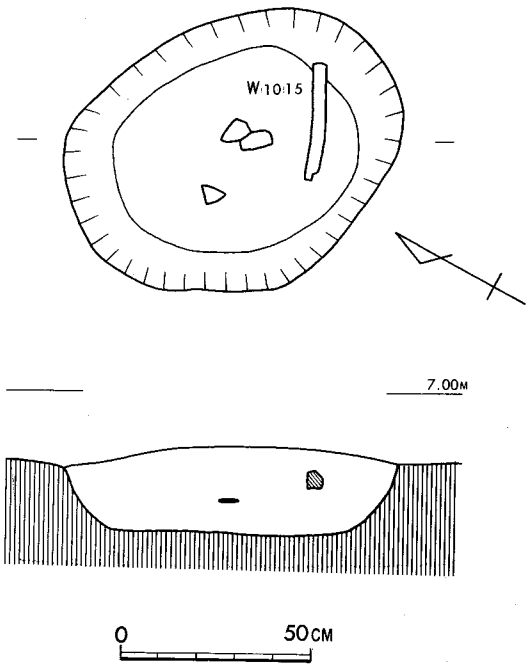


Fig. 3・5　E－17グリッド小竪穴実測図

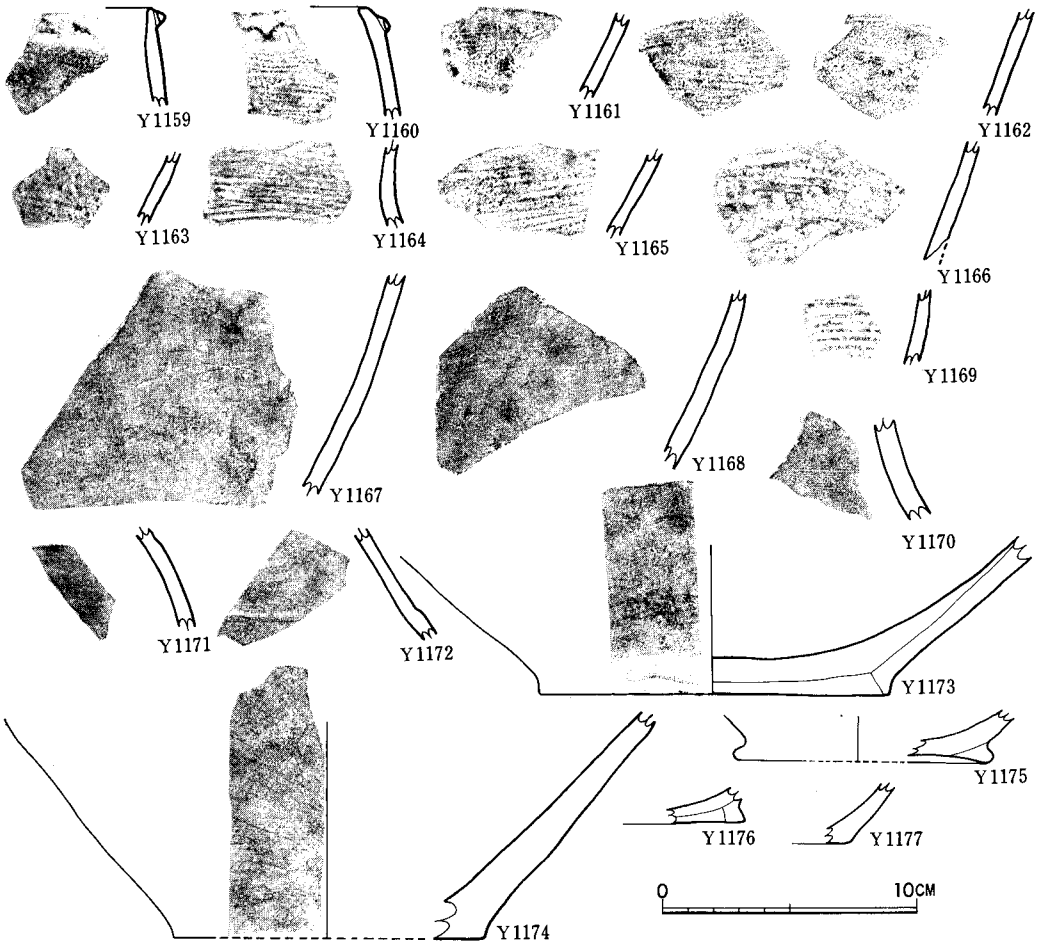


Fig. 3・6　E－17グリッド小竪穴出土土器実測図

と考えられ、弥生時代前期土器を包含する第15層に打ち込まれ、下端が八女粘土層に至ったとみて、その時期は弥生時代前期か、やや遅れる中期はじめ頃とも推定できるが、小竪穴と関係あるとすれば、もっと古くなろう。

この杭列が設けられた目的は明らかでない、杭列付近には溝その他の施設を示す土層の変化はない。小竪穴や、D－17bトレンチなどにみられる溝との関係の有無も不明である。

なおFig. 3・4に示した砥石は標高7.5m付近の第11層で出土したものである。　（横山）

竪穴出土の遺物（Fig. 3・9　Y1159～1177）

土器

甕（Y1159～1166・1169）　Y1159・Y1160は口縁部、他は胴部破片である。Y1159・Y1160は口縁端より下がった位置に刻目突帯がつけられる。Y1160～1166・1169は条痕が施される。1165には外面に煤の付着が認められる。いずれも石英粒砂を胎土に含み、焼成は良好。暗褐色を呈する。

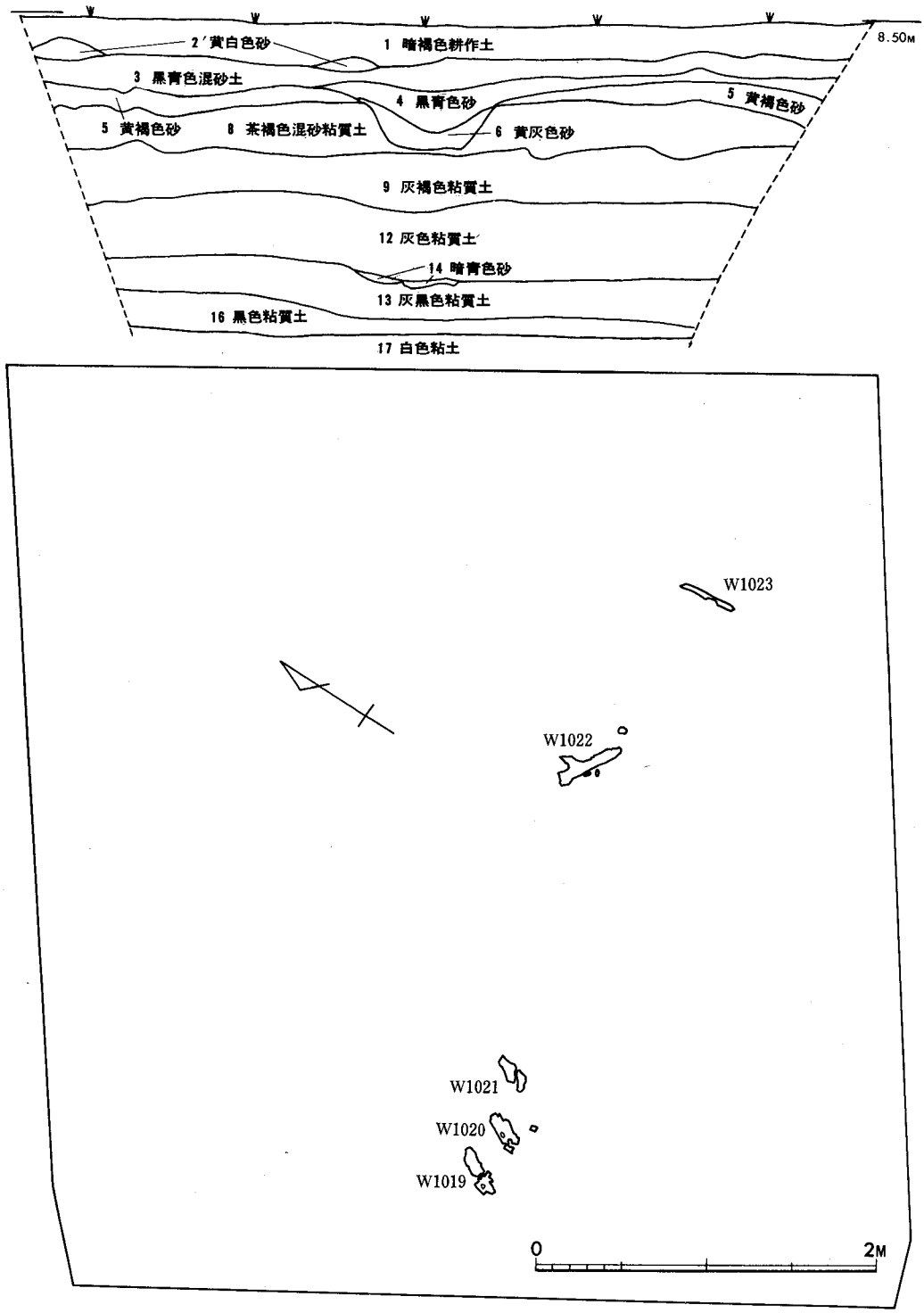


Fig. 3・7　F－17グリッド平面図・土層図

壺（Y1167・1168・1170～1172）　いずれも篦で磨研されている。1170は外面丹塗り。1167の外面には煤の付着が認められる。いずれも砂を含むが良好な胎土で、焼成も良好。暗褐色を呈する。

底部（Y1173～1177）　Y1174は甕の底部で他は壺であろう。Y1173は磨研、Y1174は篦で条痕状に調整している。Y1174の外面には煤の付着が認められる。胎土に石英粒砂（Y1173・1174)、砂（Y1175～1177）を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。

これらの土器はY1177の底部に若干の疑問が残るが、他はほとんど夜臼式であり、この小竪穴の時期は弥生時代前期初頭に位置づけられよう。（沢）

木　材

大きな自然木（W1015）の他に数点の小木片が出土した。いずれも加工痕はない。樹種不明。（後藤）

C．F－17グリッドの矢板（Fig. 3・7、PL. Ⅶ）

このトレンチではほぼ東西に打ち込まれた矢板列が検出された。検出時にはほぼ垂直に打ち込まれていたが、グリッド壁の崩壊のために倒れた。矢板とみられる材（W1019～22）は腐蝕がはなはだしく、本来の形状や加工方法は判別しえないが、幅10cm前後、現存長20～30cmである。いずれも樹種はクスノキである。この矢板列東側で出土した杭状の木片（W1023）はヒノキである。出土した位置は標高 7.1m前後の第12層（灰色粘質土）下部から第13層（灰黒色粘質土）上部であり、その時期は弥生時代前期～中期はじめとみられる。

この矢板列の周辺には、矢板にともなうとみられる土層の変化は認められず、その性格は明らかでない。またこの矢板列出土層には多くの土器片が出土するが、矢板列にともなうのか単なる包含土器かは判断できない。

これら矢板の上の灰褐色粘質土（第9層）で、矢板状の材が出土している（W1025)。一端が焼けている。（横山）

このほかにD－16トレンチ内の八女粘土層上面標高 6.8mのところに、八女粘土層に掘り込まれた不整形の竪穴があった。上面は 160×70cmの不整楕円形で、スリバチ状に掘り込まれており、底面はせまく不整形である。深さ50cm。内部には暗灰色の固結粘土がつまり、遺物は出土していない。人工のものかどうか不明。時期不詳。H－16グリッドの青灰色砂層では杭と自然流木が出土しているが（W1031～34)、グリッド壁崩壊のため遺構の有無は不明。（後藤）

(2)古墳時代以後の遺構と遺物（Fig. 3・8～3・10、PL. X・XI）

沖積層部分では、C－14a・b両トレンチで古墳時代とそれ以後の小竪穴が見出された。

C－14a・bトレンチはC－17トレンチなどで知られた鳥栖ロームよりなる台地端の確認のために設定した。まず東側のC－14bトレンチの調査を行った。第3層(Fig. 3・2)である暗褐色砂層あたりから遺物が出土しはじめ、第5層の暗褐灰色粘土層、第7層の黒色粘質土層は多量の遺物が出土した。黒色粘質土層中に弥生前期の土器に混じって、部分的に集中して土師器が出土したが、

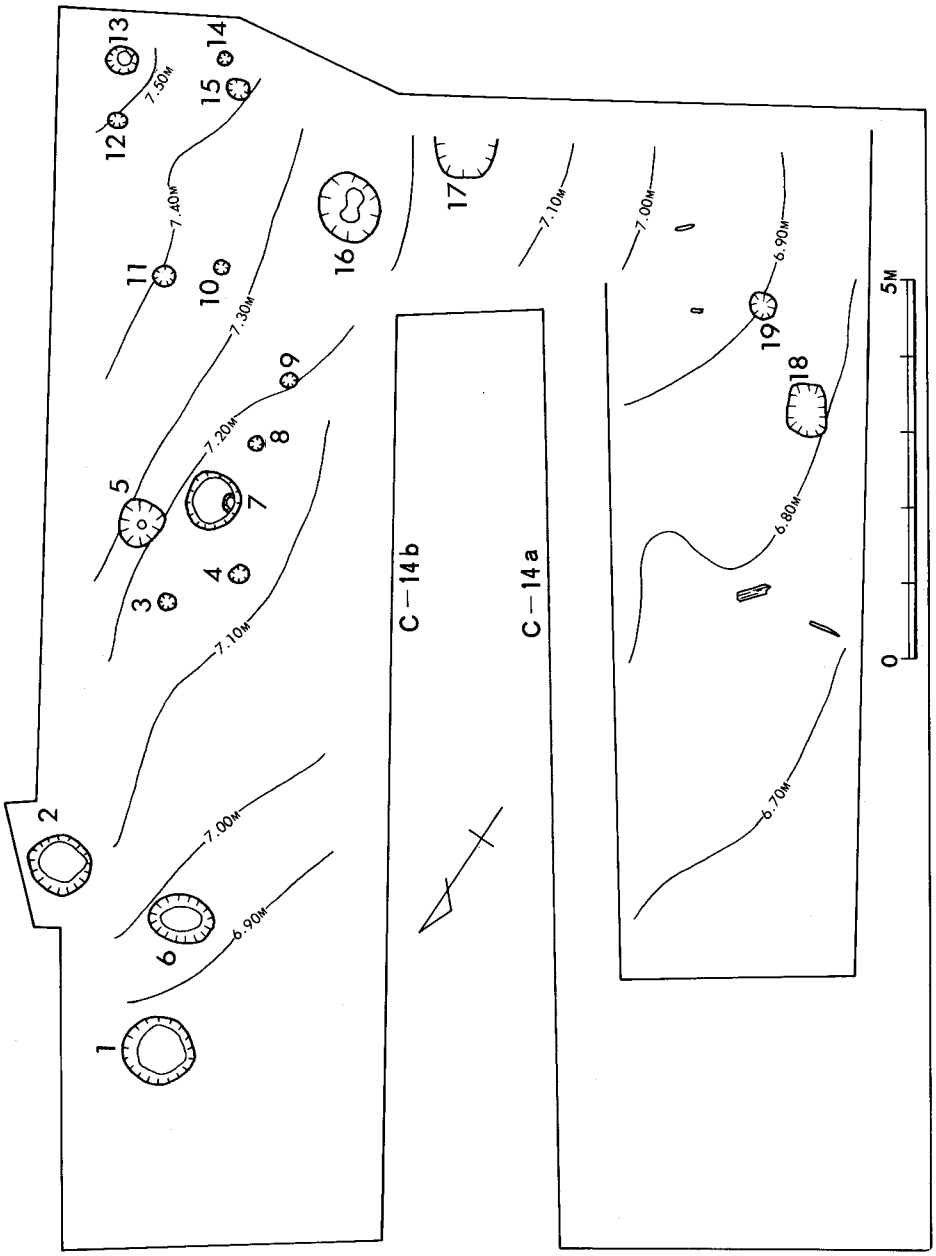


Fig. 3・8　C－14a・bトレンチ平面図

湧水のため、土色の変化が認められず、そのまま掘り進んだところ、地山である八女粘層が現れた。そこに黒色粘質土の充満したピット数個が検出され、その中の第1号・第2号と命名したピット中から小型丸底壺を含む土師器の一群が出土し、このピットが弥生前期の包含層である黒色粘土層を切って掘り込まれたと推定された。また八女粘土層は北西方向へ傾斜しており、明らかに台地端であることを示していた。これはC－14aトレンチについても同じである。ピットはC－14bトレンチで計16個、C－14aトレンチで2個、両トレンチの間をつないだトレンチで1個の計19個が確認された。このうち古式土師器を出土するのは前述したように第1号・第2号のみであるが、第5号・第6号・第7号・第16号・第18号などもこの時期の可能性が強い。第17号は両トレンチをつなぐ部分にあり、南半は未掘であるが、中から平安時代の土師器甕口縁と青磁器椀が出土した。他のピットは柱穴状のものである。ピットは上面がほぼ円形で、直径は1号が0.9～1m、2号が0.8～0.9m、17号は0.8m以上である。八女粘土層上面からの深さは1号が73cm、2号が95cm、3号が7cm、4号が6cm、5号が21cm、6号が9cm、7号が11cm、8号が41cm、9号が31cm、10号が5cm、12号が3cm、13号が24cm、14号が5cm、16号が73cm、18号が7cm、19号が11cmである。17号は八女粘土層上面からは55cmほどだが、土層をみれば（Fig.3・2)、少くとも第7層上面から掘り込まれており、深さ97cmになる。

以下に第1・2・17号ピット出土遺物についてのべる。

第1号ピット出土土師器（Fig. 3・9．PL. XXVI）

甕（H101～H104）　H101は「く」の字状に外反する口縁をもつ甕で、口縁部はわずかに内彎する。口縁端は沈線状に凹み、口縁部は指の横なで調整。胴部外面は上部が横刷毛目調整、それ以外は斜めの刷毛目調整。煤の付着も認められる。内面には指の押圧調整痕が残る。胎土に砂を含み、焼成は良好。黒褐色を呈する。H 102も「く」の字状に外反する口縁をもち、

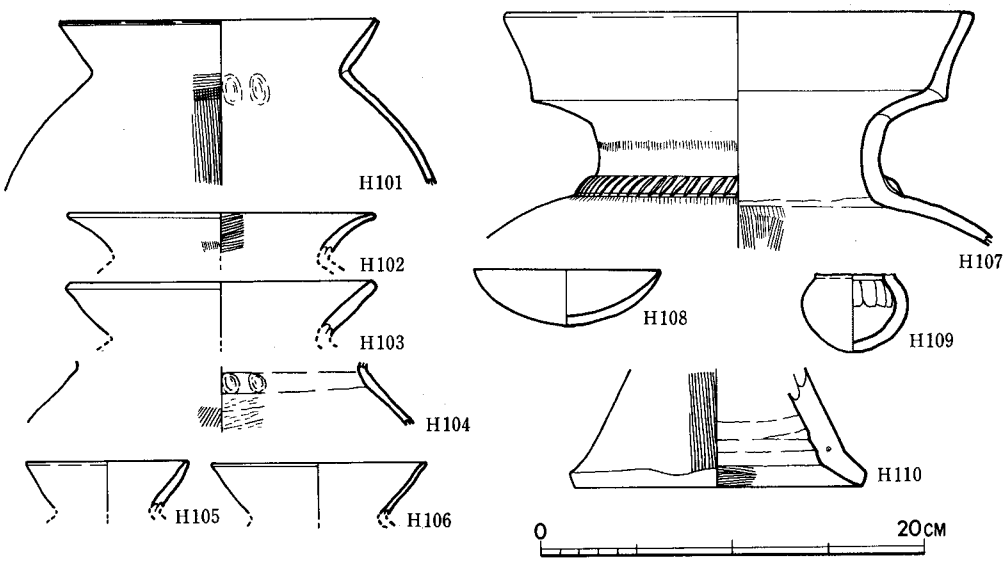


Fig. 3・9　C－14bトレンチ1号ピット出土土器実測図

これは口縁部が外彎する。口縁外面は指の横なで調整。外面には縦刷毛目調整。内面は横刷毛目調整。胎土に砂を含み、焼成は良好。黒褐色。H103も同様の口縁であるが、内彎も外彎もしない。口縁部は指の横なで調整。胎土に砂を含み、焼成は良好。黒色を呈する。H104は胴上半部で、外面は頸部近くは指の横なで調整、それ以上は斜めの刷毛目調整。内面は頸部に指の押圧調整痕があり、それ以下は篦削り。胎土には石英粒砂を含み、焼成は良好。暗黄褐色を呈する。

小型丸底壺（H105・H106・H109） H105は口縁部で、わずかに内彎する。指の横なで調整。胎土に砂を含み、焼成は良好。淡赤褐色を呈する。H106も同様の口縁部で内彎する。指の横なで調整。胎土は若干の砂を含むが良好なもので、焼成は良好。淡褐色。H109はミニチュアの壺で、口縁部を欠く。胴部は球形で、外面指のなで調整、内面には指の押圧調整痕がみられる。胎土に砂を含み、焼成は良好。淡赤褐色を呈する。

壺（H107） いわゆる二重口縁の壺である。口縁部は外彎しながら外反し、頸部の付け根に刻目突帯を巡らす。口縁部は横なで調整。頸部には縦刷毛目調整で、突帯もその後に貼り付け、横なで調整を行う。突帯の刻目は篦状の工具で斜めに施される。内面は胴部上半に縦刷毛目調整。口縁内面には煤らしいものの付着も認められる。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。暗赤褐色を呈する。

鉢（108） 内彎しながら開く浅鉢である。内面は篦で磨研される。胎土砂を含み、焼成は良好。淡黒褐色を呈する。

器台（H110） 器台の下半部である。外面は縦刷毛目調整。内面は裾部に横刷毛目調整。それ以上は篦で削る。胎土は石英粒砂を混じ、焼成は良好。暗赤褐色。

以上の土器は、古墳時代前期のもので、5世紀初頭代のものであろう。

第2号ピット出土土師器（Fig. 3・10、PL. XXV、XXVI）

甕（H111～H117）　H111は「く」の字状に外反する口縁をもつ甕である。口縁部は外彎する。口縁外面は横刷毛目調整。頸部は斜め、胴部は縦刷毛目調整で、口縁部の下半と胴の上部は指の横なで調整でその刷毛目を消している。口縁内面も指の横なで調整。胴部内面は斜めおよび縦の刷毛目調整。胎土に砂を含み、焼成は良好。灰褐色。H112は胴上半部の破片で外面は縦・横の刷毛目調整。内面は篦削りで、煤の付着も認められる。胎土に砂を含み、焼成は良好。淡赤褐色を呈する。H113も「く」の字状の口縁部をもつ甕で、外彎する。口縁端は沈線状に凹み、口縁部横なで調整。外面に煤の付着が認められる。胎土に砂を含み、焼成は良好。赤褐色。H114も同じく「く」の字状の口縁で、外彎している。口縁外面は縦刷毛目調整の後、指の横なで調整。煤の付着も認められる。内面は斜めの刷毛目調整。胎土に砂を含み、焼成は良好。暗褐色。H115も「く」の字状を呈する口縁部で、外面横なで調整。内面は横の刷毛目調整。胎土に砂を含み、焼成は良好。黒色を呈する。H116も同様に「く」の字状の口縁部で、外面は横の刷毛目調整で煤の付着が認められる。内面は指の横なで調整。胎土に砂を含み、焼成は良好。淡暗褐色を呈する。H117も同様に「く」の字状となるが、外反が強い。指の横なで調

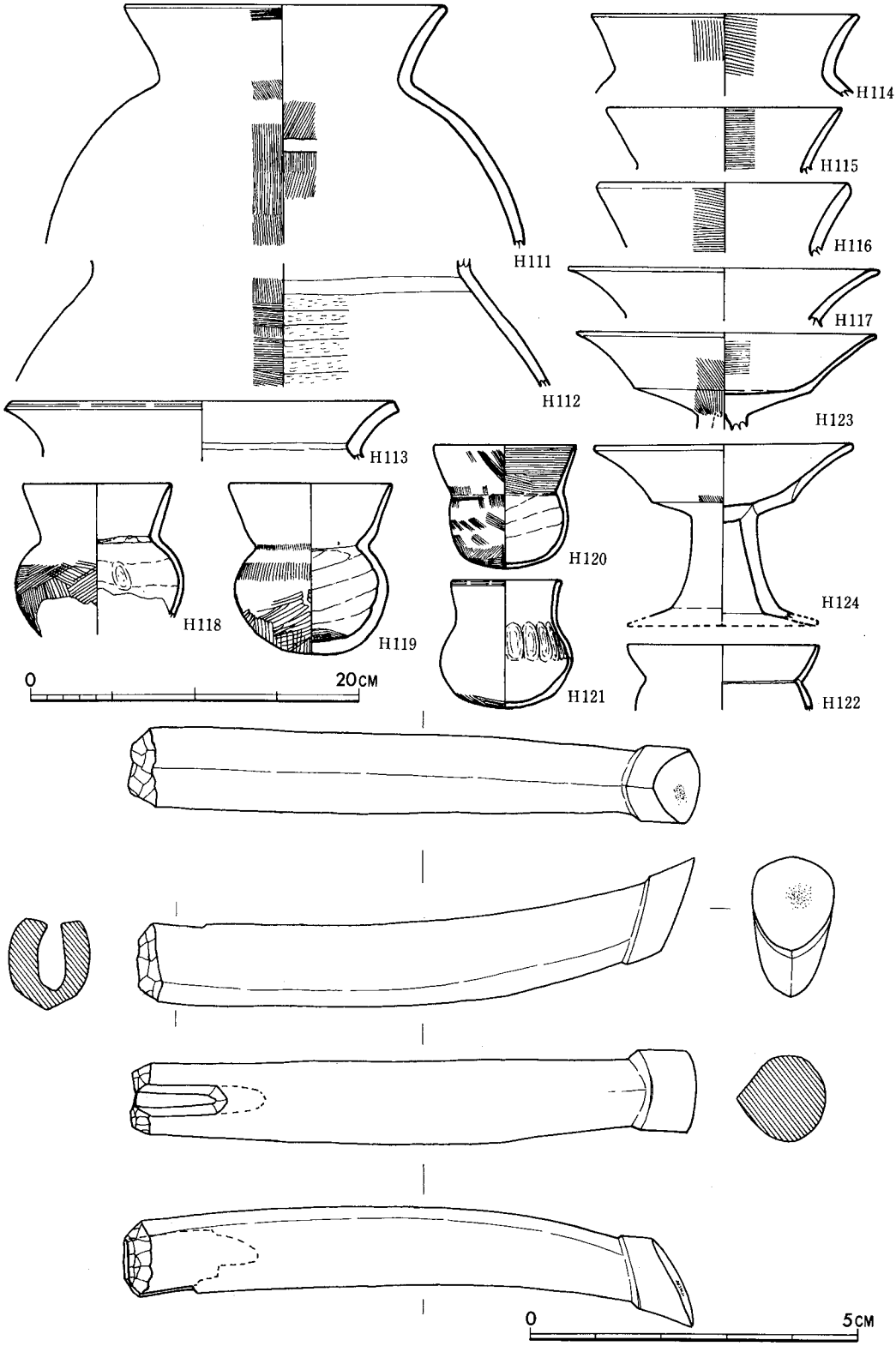


Fig. 3・10　C－14 b トレンチ 2 号ピット出土遺物実測図

整。胎土に砂を含み焼成は良好。淡赤褐色を呈する。これらの甕の口縁部の先端は肥厚しない。

小型丸底壺（H118～122）　H118 は若干外反する口縁部と球形の胴部をもち、底部を欠く。口縁部と胴上半部外面は指の横なで調整。それ以下は粗い刷毛目調整。胎土に砂を混じ、焼成は良好。赤褐色。H119も外反する口縁と球形の胴部をもつ。口縁部は頸部近くの外面でゆるい稜をもつ。口縁部は指の横なで調整。胴上半は縦の刷毛目調整で、一部指の横なでで消している。胴下半部は粗い刷毛目で不規則に調整。内面も底部近くは刷毛目調整で、それ以上は指のなであげ調整。胎土に砂を含み、焼成は良好。赤褐色を呈する。H120も外反する口縁部をもつが、胴部の張りは弱い。外面には不規則に刷毛目調整を行い、その後指の横なで調整で消している。内面は口縁部が横刷毛目調整。胴部は指のなで上げ調整。胎土には砂を含むが良好。焼成も良好で暗褐色を呈する。H121は若干異なる器形で、口縁部はわずかに外反するがほぼ直立に近い。口縁部は先端近くで肥厚し、指の横なで調整。底部は篦削りの後粗い刷毛目調整。内面は指のなで上げ痕が残る。胎土には若干の砂を含み、焼成は良好。淡赤褐色を呈する。H122は外反する口縁部をもつ。指の横なで調整を受けている口縁部は内彎しており、肥厚はしない。胎土に砂を含み、焼成良好。黄褐色を呈する。

高坏（H123・H124）　H123は高坏の坏部で、胴中央部で屈折する。上部は外反する。外面は斜めおよび縦の刷毛目調整。内面上部は横の刷毛目調整。脚接合部には片側に寄って小さな突起をつける。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。淡赤褐色を呈する。H 124は脚裾部を欠く。同じく坏部は胴部で屈曲するが、H 123ほど強くはない。坏上部はやはり外反する。脚部は裾近くで屈曲する。外面は縦の刷毛目調整の後、横なで調整を行う。坏内面も横なで調整。脚内面には篦削りがみられる。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。坏部は赤褐色、脚部は黒褐色を呈する。

これらの土器も第1号ピットと同様5世紀初頭前後の土器であろう。

第2号ピット出土鹿角製刀子柄（Fig. 3・10、PL. XXVII）

鹿角を利用して製作した刀子柄である。着装部以外は全面磨研され、作りの良好のものである。着装部は削り面をそのまま残す。柄の先端には造り出しを有する。全長8.6cm、径1.4cm。第2号ピット出土の土師器に伴うものである。

第17号ピット出土遺物（Fig. 3・11、PL. XXVI、H 193、C 101）

H 193は土師器の甕である。ゆるく外反する口縁部と長い胴部をもつ。口縁の内外面ともに横なで調整。口縁下に、その横なで調整が上下に強いため隆起している場所がある。胴部外面は粗い縦の刷毛目調整。接合痕も認められる。内面は斜め、横の刷毛目調整で、胴部上位以下は上への篦削り。一部に篦による強いなでのため切れ目状の溝がつく。煤の付着も認められる。胎土には多量の砂を含み、焼成は良くない。暗褐色を呈する。C 101は青磁の高台付埦で、高台は外に拡がる。口縁部は体部からそのままに開く。体部には五ヶ所に縦の浅い沈線状の切れ目が入る。釉は淡緑色を帯びるが、底部には施されない。胎土は淡灰色を呈する。

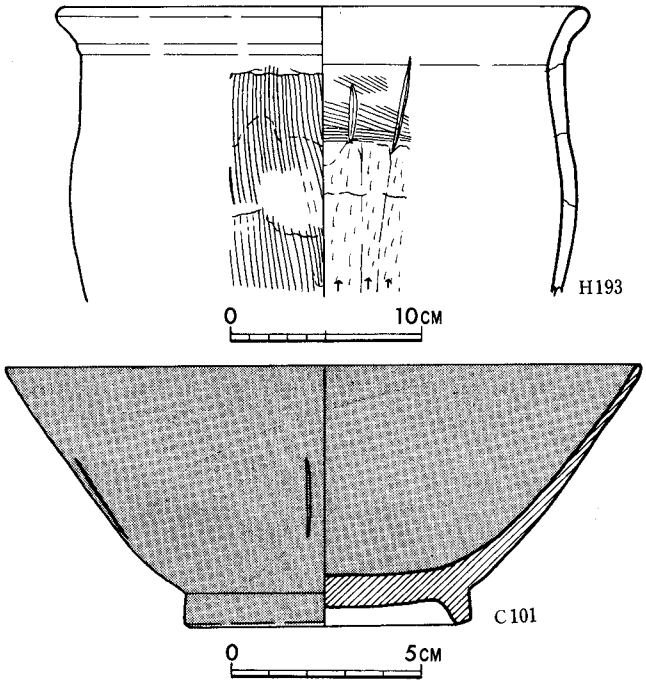


Fig. 3・11　C－14 a～b トレンチ間17号ピット出土遺物実測図

これらの土器は平安時代のものであろう。　（沢）

3　包含層出土の遺物（Fig. 3・12～3・64）

第1区の沖積層出土の遺物について以下にのべる。

(1) 弥生時代の遺物

a土　器

i）D－17b トレンチ出土土器

D－17b トレンチ出土土器の層ごとの時期差についてはすでにのべた。ここでは包含する土器に時期的な限定のある各層の出土土器についてのべる。

（イ）帯淡青黒灰色粘土層（第19層）出土の土器（Y636～669, Fig. 3・12）

甕（Y636～642・646～649）　Y636～640は刻目突帯をもつ土器であり、Y636～638は口縁部である。いずれも内傾する口縁部をもち、Y636・638の突帯は口縁端よりやや下がる位置につけられる。Y637は口縁端に接し、下向する斜面をもつ。Y639・640は胴接合部に刻目突帯をつけた破片である。Y637・639・640は条痕がつけられる。Y636・638・640は横なで調整。Y641・642は外面条痕がつけられ、丹の痕がある。

胎土には石英粒砂（Y636～640）、砂（Y641・642）を含み焼成は良い。淡褐色（Y636・637・641・642）、褐色（Y638～640）を呈する。夜臼式であろう。Y646は外反する口縁部の端の縦一杯に刻目が施され、口縁下の接合部で強い段がつき、そこにも刻目がつけられる。Y647・648は外反するいわゆる如意形口縁をもち、その口縁端の縦一杯に刻目を施す。器表内外面とも刷毛目調整（Y648）、外面刷毛目調整（Y646・647）で、すべて横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。淡褐色（Y646・647）、褐色(Y648)をを呈する。板付Ⅰ式であろう。Y649は外反する口縁部の上部に粘土を貼付けて肥厚させ、口縁下内面に段がつく。口縁の上下両端に刻目がつけられる。内外面とも丹塗りで、横刷毛目調整整がある。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。淡褐色を呈する。板付II式であろう。

壺（Y645・650～657）　Y652は外反する口縁部をもち、篦なで調整を行う。Y645・653は肩部で、Y645は篦の横なで調整。Y653は外面丹塗りで、内外面ともに篦で磨研されている。胎土は石英粒砂（Y645)、砂（Y652 ）を含むものと、精良な粘土を用いるもの（Y653）があり、焼成はいずれも良好。淡褐色（Y645・652)、褐色（Y653）を呈する。夜臼式土器であろう。Y655～657は外反する口縁部をもち、粘土を貼付けて肥厚させるもの（Y655・657）と、肥厚しないもの（Y656）があり、前者でも口縁下外面に段のつくもの(Y655）と、つかないもの（Y657）がある。Y657は内面丹塗りで、外面は横刷毛目調整。Y655・656は横なで調整で、Y656の内面には刷毛目調整もある。Y650・651・654は肩部や胴部の破片で、Y650は二本の平行横線文・Y 651は下弦重弧文が描かれる。Y650は篦なで調整。Y654は外面丹塗りで、篦で磨研される。胎土には砂か石英粒砂を含み、焼成は良い。淡褐色(Y650・651・654・657)、黒褐色（Y655)、灰褐色（Y656）を呈する。板付Ⅰ式（Y654

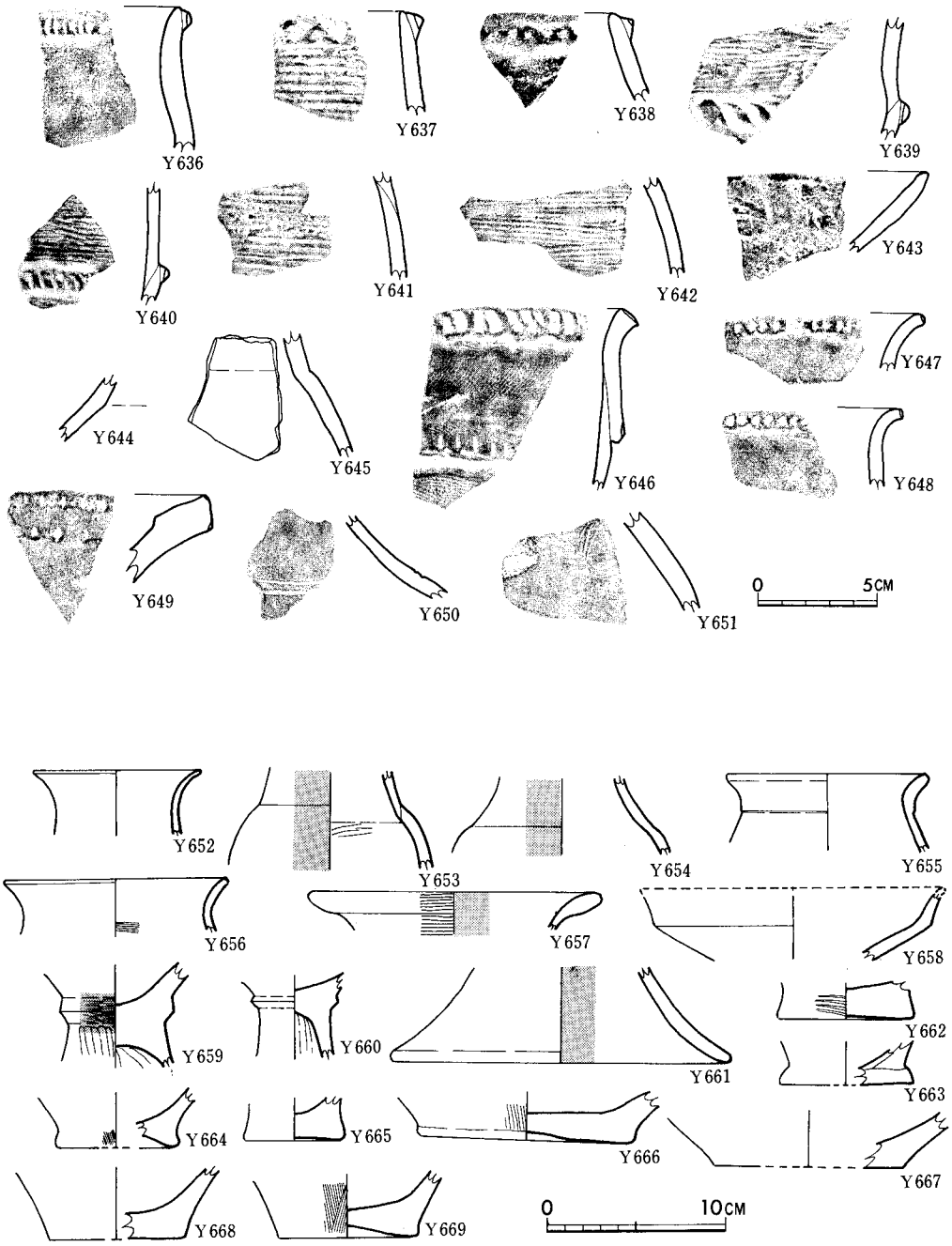


Fig. 3・12　D－17 b トレンチ帯淡青黒灰色粘土層（第19層）出土土器実測図

・655・657）、板付II式（Y650・651・656）であろう。

鉢（Y643・644・658）　Y643は段のつかない、Y644は胴部に強い稜のつく鉢と思われる。Y658は口縁端を欠失するが、外反する口縁部から逆「く」の字状に屈折する。横なで調整。Y658は、あるいは高坏の坏部かもしれない。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。黒褐色（Y643）、淡褐色（Y644・658）を呈する。これらは夜臼式のものであろうか。

高坏（Y659～661）　Y659・660は坏と脚の接合部、Y661は脚部である。Y659・660は三角突帯を巡らす。Y659の一部は丹塗りで、篦なで調整。Y660は外面なで調整で、内面はしぼりがある。Y661は外面篦磨研され、内面は丹塗りで横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。淡褐色（Y659・661）、褐色（Y660）を呈する。板付I～II式の高坏であろう。

底部（Y662～669）　Y667は壺、他は甕であろう。Y662・664～666・669は上げ底である。Y662の外面には条痕、Y664・666・669は外面刷毛目調整。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。淡褐色（Y662・667）、褐色（Y663・665・666）、暗褐色（Y664）、灰褐色（Y668・669）を呈する。Y662・663・665は夜臼式のものであろう。

（ロ）溝直上の黒色粘質土層（第17層）出土の土器（Y739～742, Fig.3・13）

出土土器片は50～60片である。

甕（Y739～741・743・746） Y739・741は刻目突帯をもつ胴部破片である。いずれも条痕を、外面（Y739）、内外面（Y741）にもち、胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。淡褐色（Y739）、褐色（Y741）を呈する。夜臼式である。Y740・743は外反するいわゆる如意形口縁をもち、Y740はその上下両端、Y743は下端に刻目を施される。いずれも横なで調整で、外面刷毛目調整。Y743は外面に煤の付着が認められる。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。灰褐色（Y

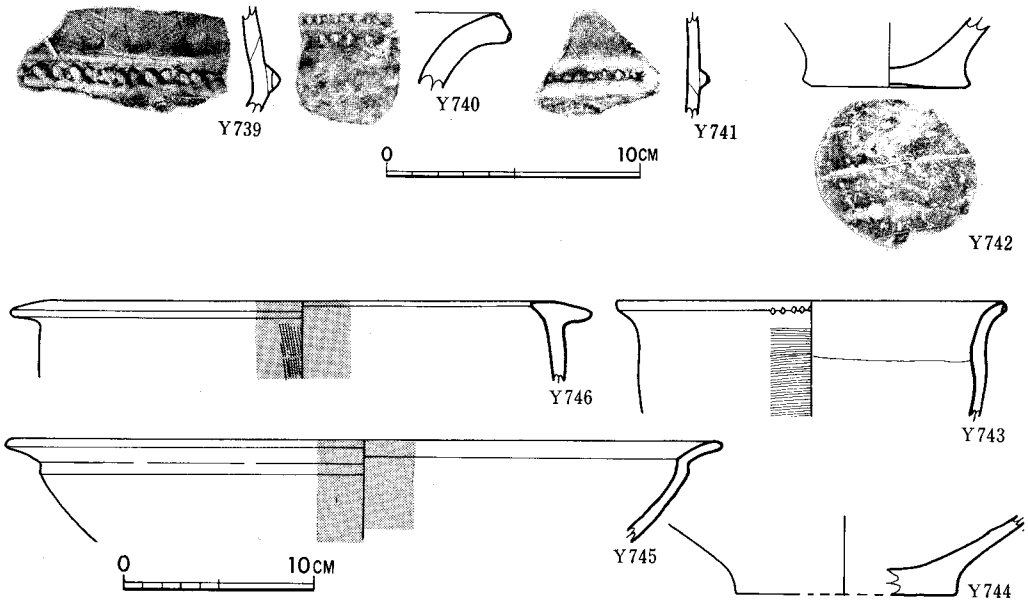


Fig.3・13　D－17bトレンチ溝直上の黒色粘質土層（第17層）出土土器実測図

740)、淡褐色（Y743）を呈する。板付II式であろう。Y746はいわゆる「T」字形口縁をもつ甕で内外面とも丹塗りで横なで調整。外面刷毛目調整。胎土に砂を含み、焼成良好。褐色を呈する。中期中葉のものであろう。

高坏（Y 745）　外反する口縁部をもつ高坏の坏部で、全面丹塗りで横なで調整。胎土に砂を含み、焼成良好。褐色を呈する。板付I式。

底部（Y742・744）　Y742は甕、Y744は壺の底部であろう。Y742は上げ底で底面に何か不明ではあるが圧痕がある。胎土に石英粒砂を混じ、焼成は良い。灰褐色（Y742)、黒褐色（Y744）を呈する。

（ハ）黒色粘土層（第17層）出土の土器（Y670～703, Fig.3・14, 3・15）

溝の西側の第17層出土土器で、出土破片は400点をこえる。

甕（Y670・676・677・682～684・690・691）　Y683・684・670は刻目突帯をつける土器である。口縁は内傾するもの（Y670・684）とそうでないもの（Y683）とがあり、刻目突帯はいずれも口縁端に接して下向の斜面をもつものである。横なで調整でY670・683は外面に条痕。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。暗褐色（Y670)、黒褐色（Y683)、淡褐色（Y684）を呈する。これらは夜臼式であろう。Y690・691は外反するいわゆる如意形口縁をもち、その端の縦一杯に刻目を施したもので、横なで調整。Y691の外面には煤の付着が認められる。胎土に石英粒砂を混じ、焼成は良い。暗褐色（Y690)、淡褐色（Y691）を呈する。板付I式である。Y676・677は外反する口縁をもつ大形の甕で、Y677はその上部に粘土を貼付けて肥厚させ、口縁下内面に段がつけられる。ともに口縁の上下両端に刻目が施されるが、Y677は口縁内側の段にも刻目がつく。いずれも横なで調整で、Y677は内外面とも、Y676は外面のみ刷毛目調整。Y682は刻目突帯を胴部にもつが、夜臼式のものに比べてかなり整然としており、刻目も小さい。器表外面に横刷毛目調整。煤の付着が認められる。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。黒褐色（Y676)、褐色（Y677)、暗褐色（Y682）を呈する。板付II式であるが、Y682はいわゆる亀ノ甲タイプのものであろう。

壺（Y673～675・678～681・685～689・692～694）　Y685～687は内傾する口縁の先端が外反する。いずれも丹塗り土器で、横なで調整。胎土には石英粒砂を含み、焼成良好。暗灰色（Y685)、褐色（Y686)、淡褐色（Y687）を呈する。夜臼式であろう。Y694は短く外反した口縁の直下に一条の沈線が施される。内面の一部丹塗りで、横なで調整。Y689は丹塗り土器の肩部で横なで調整。ともに石英粒砂を含み、焼成は良好。淡褐色を呈する。板付I式であろう。Y673～675・692・693は外反する口縁部で、口縁部外側に粘土を貼付けて肥厚させ、ほとんどが口縁下外面に段がつくが、Y673は段がつかない。内外面とも丹塗り（Y674・692)、外面丹塗り（Y673)、内面の一部に丹痕（Y675）で、Y673以外は横なで調整。胎土に砂か石英粒砂を混入し、焼成は良好。淡褐色を呈する。これらは板付II式である。Y678～681は胴部破片で、Y678は肩部外面に段がつき、その下に複線八字形文らしい文様がつけられる。Y680～681も複線の斜行文が描かれる。Y680～681は篦なで調整。Y679は三本の平行横線文の下に

下弦重弧文が施文される。外面は丹塗りで篦磨研される。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。淡褐色（Y678・679)、灰褐色（Y680・681）を呈する。Y 678・680・681は板付Ⅰ式、Y 679は板付Ⅱ式であろう。

鉢（Y671・672・688）　Y671は胴部が逆「く」字状に反転する部位で、篦磨研されている。Y672は内外面とも条痕調整で浅鉢であろう。Y688も浅鉢と推定されるが、あるいは高坏の坏部かもしれない。短く外反する口縁が、胴部で屈折するが弱い。外面丹塗りで横なで調整。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。暗褐色(Y671）、黒褐色（Y672)、淡褐色（Y688）を呈する。すべて夜臼式であろう。

高坏（Y695・696）　Y695は坏部で外反する口縁部が直立に近い程屈折し、さらに反転する。全面丹塗りで、横なで調整。Y696は坏と脚の接合部で一条の三角突帯が巡らされる。ともに胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。褐色（Y695)、淡褐色（Y696）を呈する。板付Ⅰ式のものであろう。

底部（Y697～703）　Y697・700・702は壺、他は甕であろう。Y697・698・700は上げ底。Y699は外面刷毛目調整で、内面に煤の付着が認められる。Y702には内面に刷毛目がみられる。胎土は石英粒砂を含むものが多く、砂を含むが精良なもの（Y697)もある。焼成は良く、淡褐色（Y697・702)、褐色（Y698・701)、灰褐色（Y699)、黒褐色（Y700)、暗褐色（Y703）を呈する。Y697は板付Ⅰ式のものであろう。

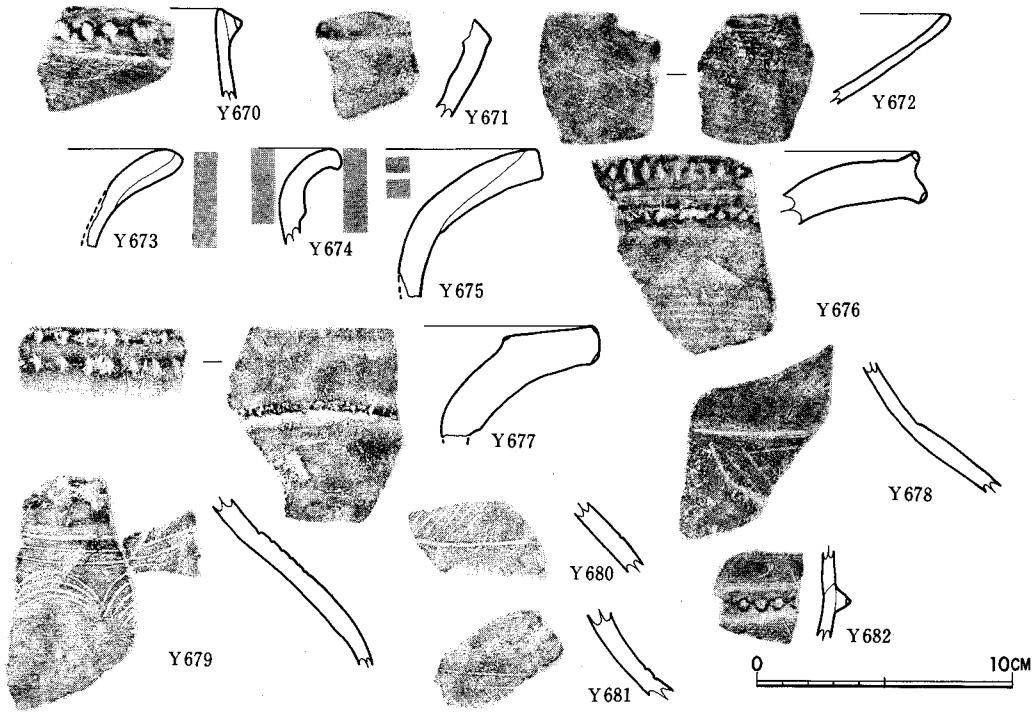


Fig. 3・14　D－17bトレンチ黒色粘質土層（第17層）出土土器実測図 (1)

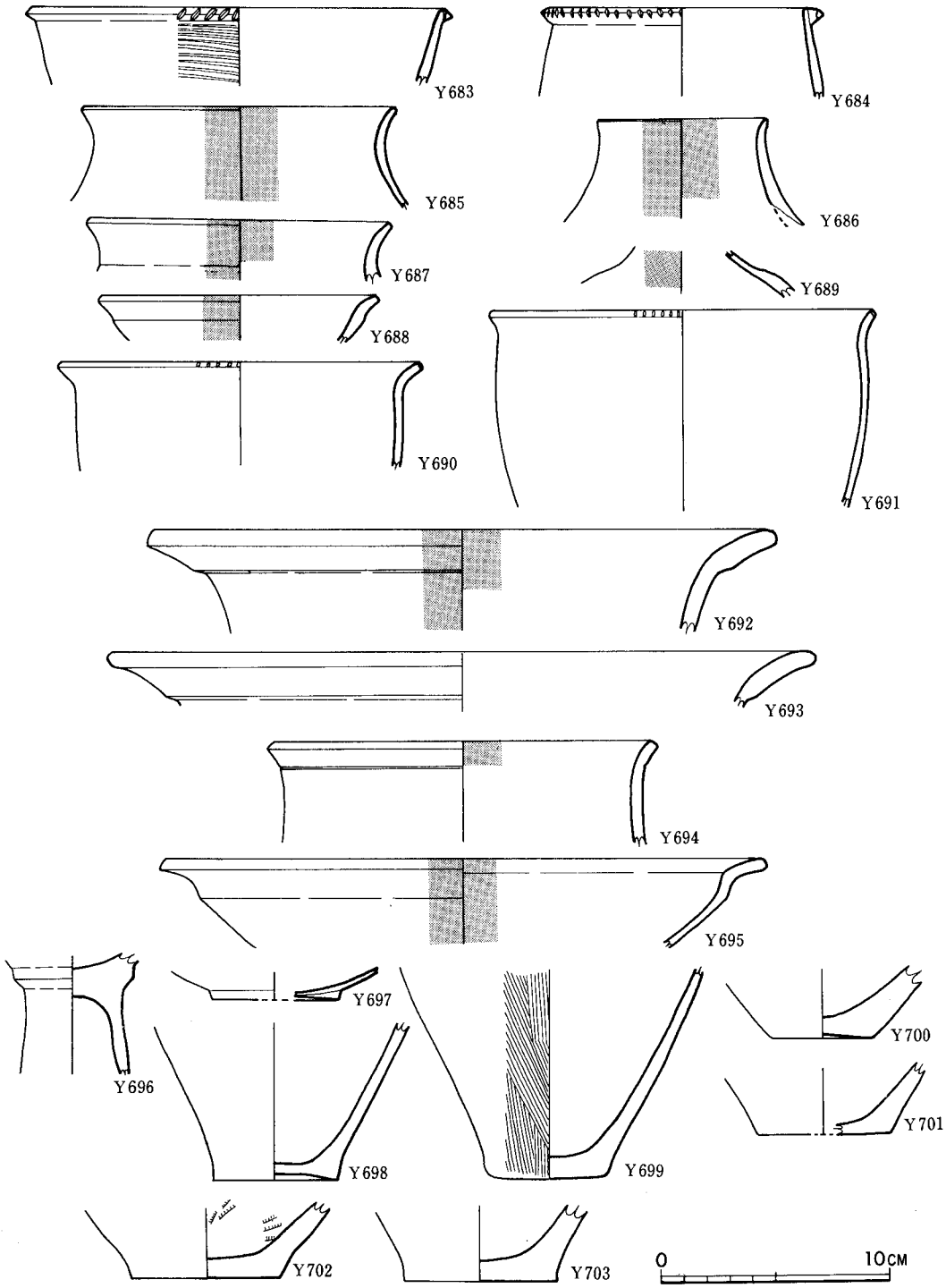


Fig. 3・15　D－17 b トレンチ黒色粘質土層（第17層）出土土器実測図 (2)

㈡暗灰～暗褐灰色粘土(第13・14層)と黒灰色粘土(第16層)出土の土器(Y704～725、Fig. 3・16. 3・17)

出土土器片は 200片近い。第13・14層では須恵器・土師器・陶磁器も出土したが、それは後述する。

甕（Y704・705・707・708・712・714）　Y704・705は刻目突帯をもつ土器で、Y712も突帯を欠落するが同様のものであろう。Y704の突帯は口縁端から下がった位置につけられるが、Y705・712は口縁端に接して下向の斜面をもつものである。Y704・705は条痕、Y712は横なで調整。いずれも石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色(Y704)、灰褐色（Y705)、褐色(Y712)を呈する。夜臼式であろう。Y707は外反するいわゆる如意形口縁の下端に刻目を施す。外面刷毛目調整。Y708も先端を欠失するが、如意形口縁をもつと考えられる。口縁下に一条の刻目突帯を巡らす。外面横刷毛目調整で、横なで調整。石英粒砂を胎土に混じ、焼成良好。暗褐色（Y707)、褐色（Y708）を呈する。板付II式であろう。Y714は逆「L」字状の口縁をもち、外端が下がる。外面刷毛目調整で、口縁部は横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。淡褐色を呈する。中期中葉のものであろう。

壺（Y706・713）　ともに胴部破片である。Y706は外面丹塗りで、胴部は球形でなく稜がつく。胎土は砂を含み、焼成良好。灰褐色を呈する。夜臼式であろう。Y713は肩部に三本の平行沈線文を巡らし、その下にいわゆる複線弧状八字形文を描く。篦なで調整。胎土・焼成とも良好で、淡褐色を呈する。板付I式。

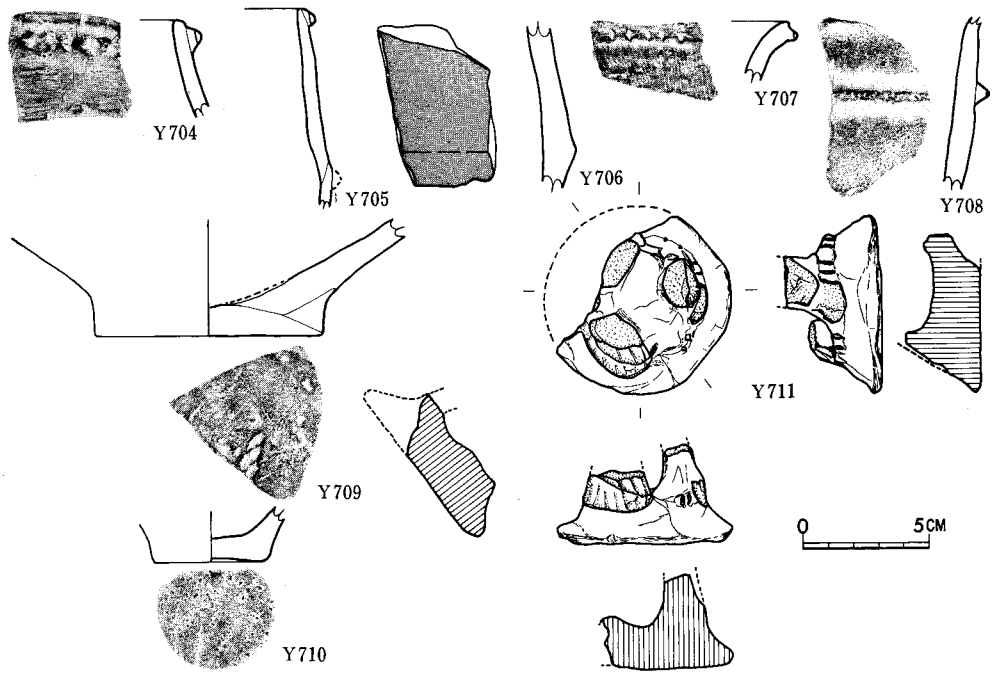


Fig. 3・16　D－17bトレンチ暗灰～暗褐色粘土層(第13・14層)・黒灰色粘土層(第16層)出土土器実測図 (1)

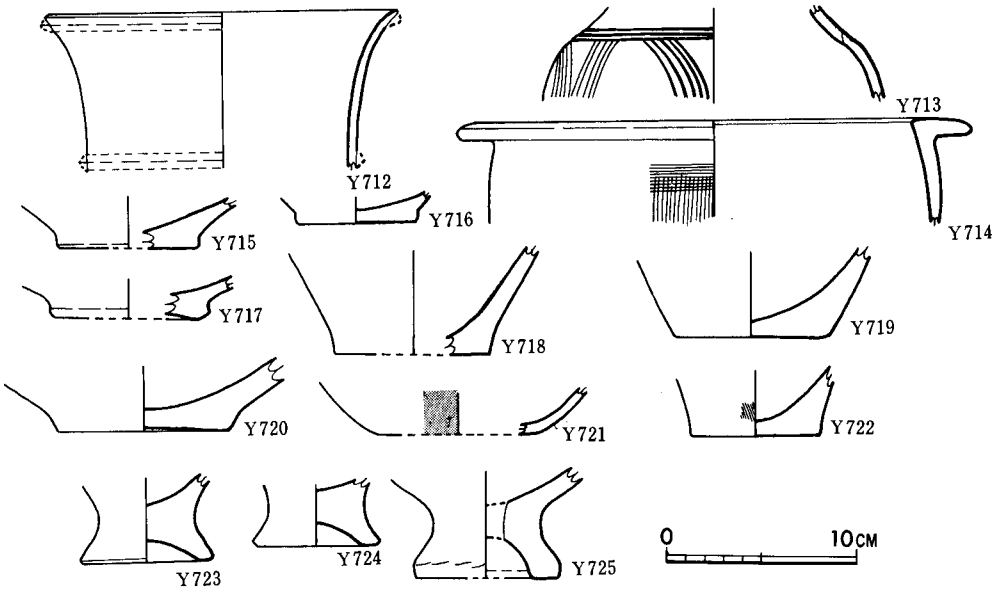


Fig. 3・17　D－17bトレンチ暗灰～暗褐灰色粘土層(第13・14)・黒灰色粘土層(第16層)出土土器実測図(2)

底部（Y709～711・715～725）　Y711(PL.XXⅣ)は特異な形状をもつ底部で、三ヶ所が透し状に作られ、その下部に刻目突帯が巡らされる。全体的な作りは雑であるが、箆なで調整。Y709は籾痕、Y710は木葉痕らしいものがつけられる。Y710・715・717・720・723～725は上げ底。Y709は箆磨研、Y721は外面丹塗り、Y722は外面刷毛目調整。Y711を除いて、Y709・710・715～717・719～721は壺、他は甕であろう。いずれも胎土は石英粒砂を含み、焼成は良い。褐色（Y709～711・718・720～725)、黒褐色（Y715)、灰褐色（Y716)、淡褐色（Y717・719）を呈する。Y711は夜臼式、Y709・715～717は板付Ⅰ式、Y723～725は中期初頭の特徴をもつ。（沢）

ii）E－17グリッド出土土器

(イ)灰青色砂質土層(第15層)・灰黒色粘質土層(第13層)下部出土土器(Y747～829. Fig. 3・18, 3・19)

第13層下部と第15層出土土器をとりあげの際に完全に弁別しえなかったので、一括して述べる。ただし、調査時の所見によれば、第15層出土土器には前期土器しか含まれていなかった。

甕

夜臼式（Y747～763・803・804）　Y747～758・803・804は口縁部である。Y803は内傾する口縁部が胴部で反転する。口縁端に接して下向する傾斜面をもつ刻目突帯と、反転部にも刻目突帯をもつが、突帯は器表外面の条痕調整後に貼付けられている。内面は横なで調整で、外面に煤の付着が認められる。Y804は口縁端と同高の刻目突帯と、胴部反転部にも刻目突帯をもつ。外面は細い横条痕で、煤の付着が認められる。突帯の刻目は小さい。その他は、口縁部

が内傾するものが多いが、そうでないもの（Y751・753・757）もある。刻目突帯は、口縁端より下がって付けられたもの（Y749・751・756・757）、口縁端に接して下向する傾斜面をもつもの（Y747・748・750・752～755・758）がある。Y747～749は器表外面に条痕調整。Y747・749は煤の付着が認められる。Y759～763は胴部反転部に刻目突帯が巡らされた破片である。Y759・763は器表外面に条痕調整。胎土には砂を含むものが多いが、石英粒砂を含むもの（Y748・754・757）もあり、焼成は良い。ほとんどが暗褐色を呈するが、黒褐色（Y748・761・763）、黒色（Y759）、褐色（Y760）のものもある。

板付Ⅰ式（Y772～776・785）　Y772～776は外反するいわゆる如意形口縁の端の縦一杯に刻目を施すものである。Y773・774・776は横なで調整、Y773・775・776は器表外面刷毛目調整。Y776の刻目は貝状の工具で施され、外面には煤の付着が認められる。Y785は若干外傾する口縁の端に刻目を施す。胎土には砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈するが黒褐色（Y773）を呈するものもある。

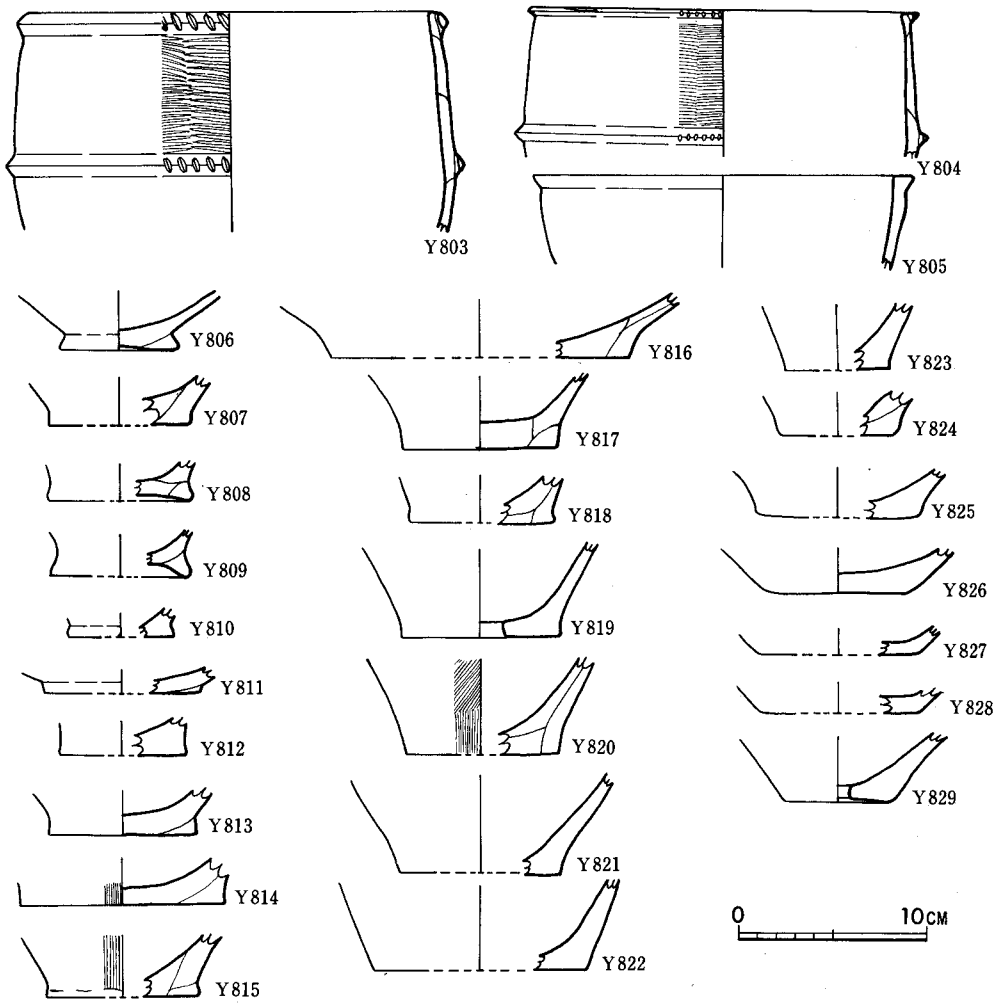


Fig. 3・18　E－17グリッド灰青色砂質土層（第15層）・灰黒色粘質土層（第13層）下部出土弥生式土器実測図（1）

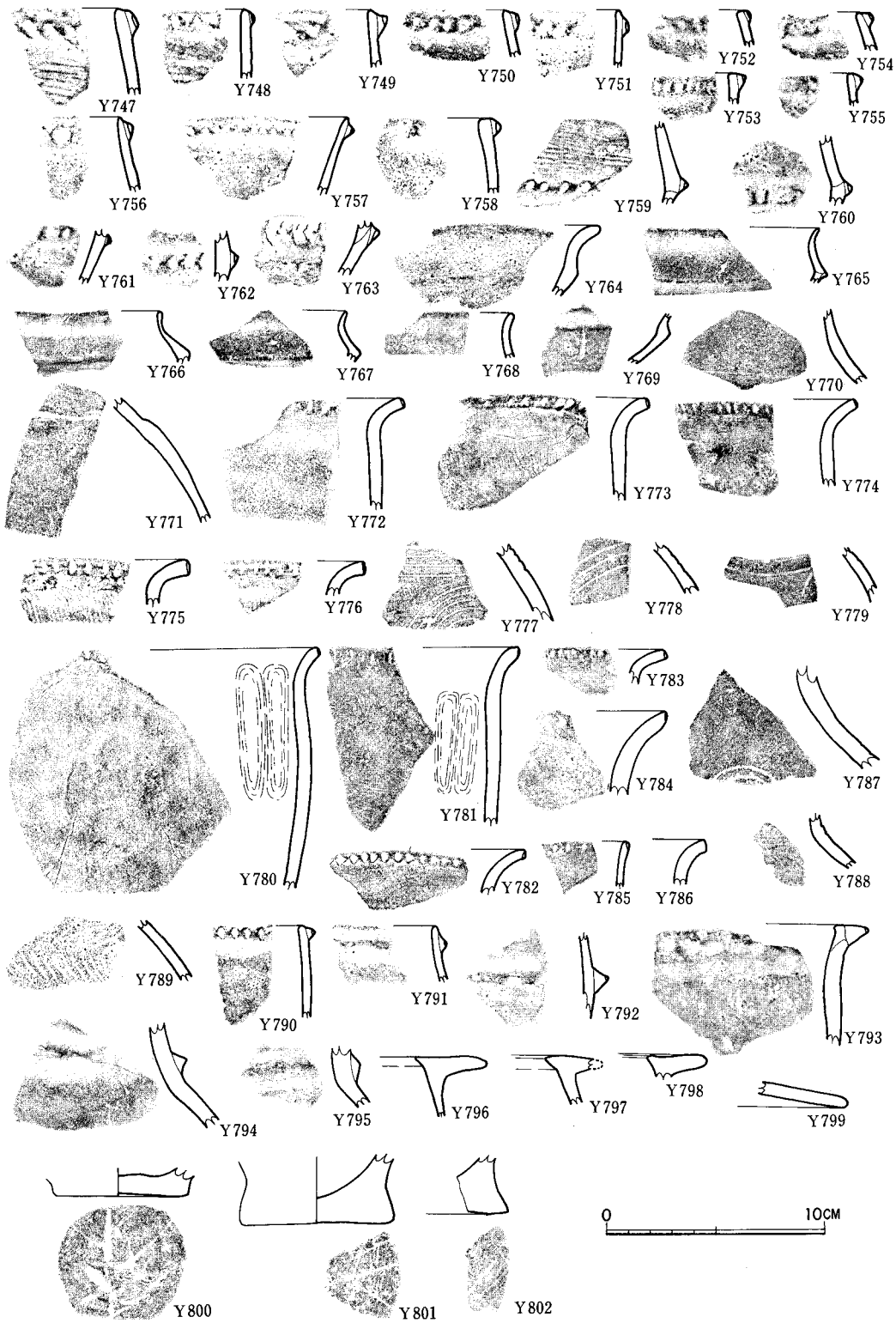


Fig. 3・19　E－17グリッド灰青色砂質土層(第15層)・灰黒色粘質土層(第13層)下部出土弥生式土器実測図 (2)

板付II式（Y780～784・786・790～792）　Y780～784・786は外反するいわゆる如意形口縁をもち、Y780以外はその口縁下端に刻目が施される。Y780の口縁部は横なで調整、内面は指の押圧調整。Y781は器表外面に刷毛目調整で、煤の付着がみられ、内面には指の押圧調整痕が残る。Y784にも煤が付着している。Y786には刻目がつかないが、口縁端が「コ」の字状を呈している。Y790～792はいわゆる亀ノ甲タイプと呼ばれるものであろう。Y792の胴部破片には刷毛目調整が、器表内外面に認められる。これらの土器は胎土に砂を含むものが多いが、石英粒砂を含むもの（Y780・781・783)があり、焼成はすべて良好である。Y791が灰褐色、Y792が褐色を呈する以外はすべて暗褐色を呈する。

板付III式（Y793・805）　いずれも口縁部が外側に張り出し、上端に平坦面を作る。Y793は、口縁の内外両面とも横なで調整で、口縁外端に刻目をつける。Y805には刻目はつかない。ともに胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。暗褐色を呈する。

中期中葉の土器（Y796～798）　いずれも逆「L」字状口縁をもつ。Y 798の口縁上端はすこしへこむ。この土器はあるいは中期前半に位置するかもしれない。胎土に砂（Y796・797)、石英粒砂（Y798）を含み、焼成は良好。それぞれ、褐色(Y796)、赤褐色(Y797)、暗褐色（Y798）を呈する。

壺

夜臼式（Y768・770・771）　Y768は内傾し、口縁上部が外反する。全面磨研されている。Y770・771は胴部破片で、Y770には条痕がつけられる。Y768の胎土は緻密だが、Y770は砂、Y771は石英粒砂を含む。焼成はすべて良好で、Y768は黒色、他は暗褐色を呈する。

板付I式（Y779）　胴部破片で、複線山形文か、複線八字形文を施していると考えられる。胎土・焼成ともに良好、暗褐色を呈する。

板付II式（Y777・778・787～789）　いずれも胴部破片である。Y777・778・787は下弦重弧文が描かれる。Y788は二本の沈線、Y789には無軸羽状文が施されている。胎土には砂を含むものが多いが、石英粒砂を含むもの（Y789）もあり、焼成はすべて良い。褐色（Y777・787)、赤褐色（Y778)、暗褐色（Y 788・789）を呈する。

板付III式（Y794・795）　いずれも肩部に一条の三角突帯を巡らす。胎土は石英粒砂を含み、焼成は良好、暗褐色を呈する。

浅鉢（Y 765～767・769）　Y765～767は内傾した口縁の上部が小さく外反し、胴部では逆「く」の字状に反転する土器で、Y769とともにいずれも磨研されている。いずれも胎土に若干の砂を含むが緻密であり、焼成も良好、暗褐色から黒褐色を呈する。これらはいずれも夜臼式のものであろう。

高坏（Y764）　外反する口縁部をもつ坏部で、胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、黒褐色を呈する。板付I式であろう。

蓋（Y799）　胎土に砂を含み、焼成良好、赤褐色を呈する。時期は不明。

底部（Y800～802・806～829）　Y806・811・813・816・826～828は壺、他は甕であろう。Y800・802・806・808・809・829 は程度の多少はあるが上げ底を呈する。Y819と829は甑で、

焼成後の穿孔。Ｙ814・819・820は外面刷毛目調整。Ｙ８０６は磨研されている。Ｙ800～802は底面に木葉痕。Ｙ816・817・820は内面に煤の付着が認められる。胎土は石英粒砂を含むものが多いが、砂を含むもの（Ｙ806・808・810・811・825～828）や、緻密で良好なもの（Ｙ829）もある。それぞれ黒褐色（Ｙ800・806・821）、赤褐色（Ｙ801・808・809・814・817・825・826）、褐色（Ｙ802・810・811・815・822・828）、暗褐色（Ｙ807・812・813・816・818・820・823・824・827）、黄褐色（Ｙ829）を呈する。

㈡灰黒色粘質土層（第13層）上部出土の土器（Ｙ830～1136，Fig.３・20～３・24）

第13層の中位以上に包含されていた土器である。

甕

夜臼式土器（Ｙ830～888）　Ｙ８７１以外は、いずれも口縁部および胴部に刻目突帯をもつ土器である。Ｙ830～871は口縁部で、突帯が口縁端より下るもの（Ｙ840・847・853・856～858・862～866・868～870）、口縁に接して下向の傾斜面をもつもの（Ｙ830・832～836・838・839・841～843・846・848・850～852・854・855・859～861・867）、口縁端と同高で口縁端にやや覆いかぶさる感じのもの（Ｙ831・837・845・849）などがあり、Ｙ８７１は直口する口縁の外端に刻目をつけたものである。口縁部が内傾して胴部に反転部をもちそこにも刻目をつけると思われる器形が多いが、そうでないもの（Ｙ850・857）もある。Ｙ872～888はその胴反転部に刻目突帯を巡らしたものである。器面内外ともに条痕をもったもの（Ｙ872・881）、外面に条痕をもつもの（Ｙ830～832・845・846・850・852～854・856・858～860・867・870・875・877・879・882・884・887）、横なで調整を行うもの（Ｙ841・855・860・880）があり、煤の付着が認められるもの（Ｙ830・831・840・845・855・867・872）もある。ほとんどが、胎土に砂か、石英粒砂を含み、焼成は良い。褐色（Ｙ830・841・846・867・877・880）、黒褐色（Ｙ833・854）、淡褐色（Ｙ837・844・847・855・874・876・881・883・884）、赤褐色（Ｙ838・882・887）、黄褐色（Ｙ842・861・869）で、他は暗褐色を呈する。

板付Ｉ式（Ｙ896～909・1030）　Ｙ909を除いて、いずれも外反する。いわゆる如意形口縁をもち、その端の縦一杯に刻目をつける。Ｙ９０９はわずかに内傾する口縁部の端が丸味を帯び、その外端に刻目を施す。内外面とも刷毛目調整のもの（Ｙ８９７）、器表外面に刷毛目調整を行うもの（Ｙ896・898・899・1030）、横なで調整のもの（Ｙ901・904・1030）、内面に指の押圧調整痕のあるもの（Ｙ898・1030）、煤の付着が認められるもの（Ｙ896～898・904・905）がある。いずれも砂か石英粒砂を胎土に混入し、焼成は良好。暗褐色を呈するものが多いが、黒褐色（Ｙ869・897）、褐色（Ｙ８９８）、黒色（Ｙ９０７）、黄褐色（Ｙ９０８）、淡褐色（Ｙ９０９）を呈するものがある。

板付II式（Ｙ910～961）　Ｙ910～940は外反する、いわゆる如意形口縁の下端に刻目を施したものである。Ｙ944～946は如意形口縁ではないが、やはり外反する口縁部の下端に刻目を施したもので、Ｙ９４３も同様であるが、これは上下両端に刻目をつける。Ｙ941・942は口縁下に

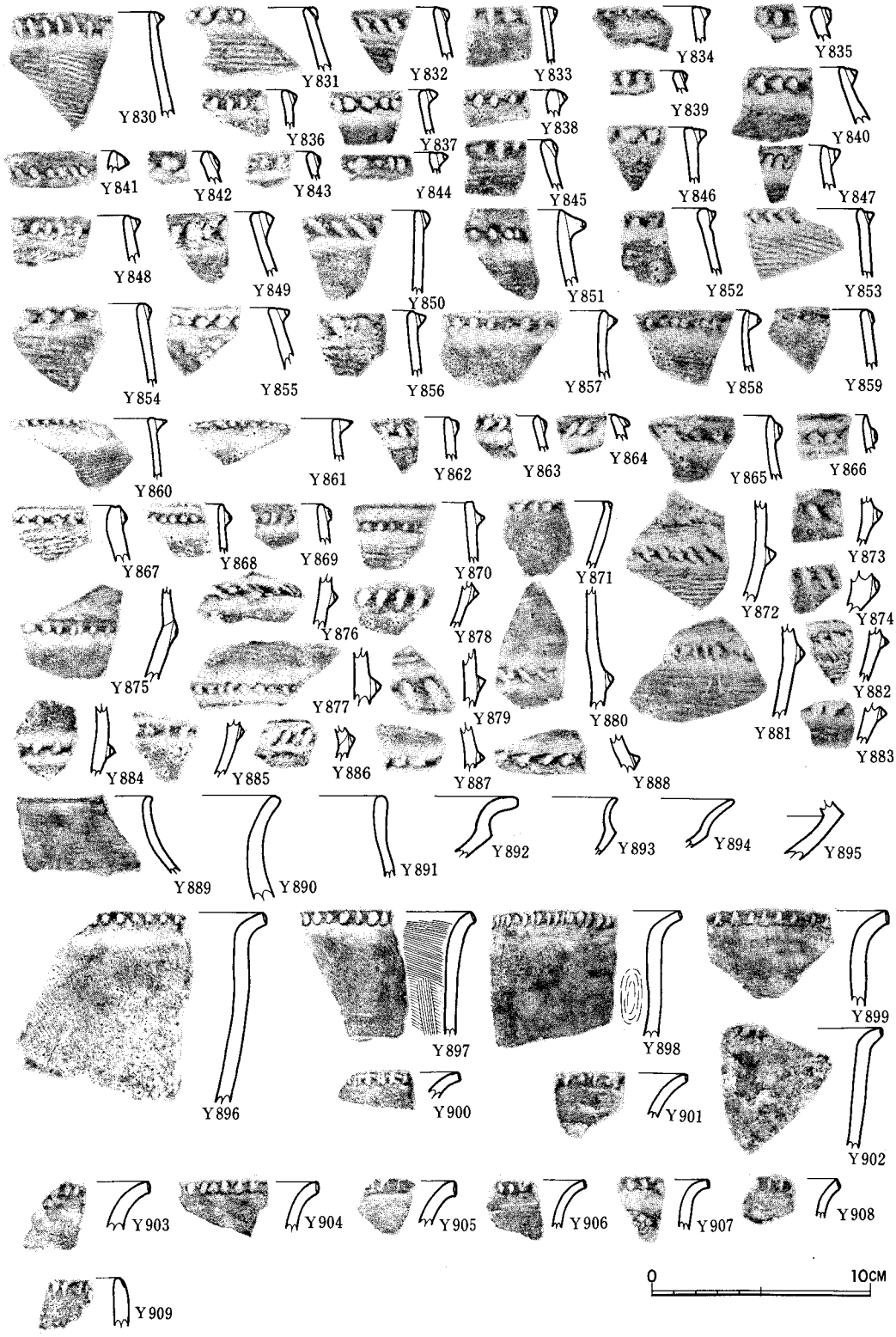


Fig. 3・20　E－17グリッド灰黒色粘質土層（第13層）上部出土弥生式土器実測図（1）

一条の沈線が巡る。Y948～954は如意形口縁であるが刻目はつかない。Y955～958はいわゆる亀ノ甲タイプであろう。Y955～958は口縁部に、Y958は胴部に刻目突帯をもつ。Y959～961も胴部に刻目突帯をもつ。内外両面に刷毛目調整を行うもの（Y914・927・939)、外面刷毛目調整のもの(Y912・915・923・932・933・937・941～943・945・959)、内面に刷毛目調整（Y938)、横なで調整（Y946）があり、Y914の刻目は貝状の工具で行われる。煤の付着が認められるもの（Y910・915・920・927・937・941）もある。ほとんどは砂か、石英粒砂を胎土に混入し、焼成は良い。灰褐色（Y912・914)、赤褐色（Y913・937・947・950・952)、黒褐色（Y915・942・951)、黄褐色（Y922・931・935・939・945)、褐色（Y946・949)で、他は暗褐色を呈する。

板付Ⅲ式（Y962～964）　いずれも口縁部外側に粘土を貼付けている。Y962はその外端に刻目を施すが、他はない。Y964は内側に指の押圧痕がある。Y963は煤の付着が認められる。胎土に砂を含み、焼成は良い。暗褐色を呈する。

中期の土器（Y967～974・1032）　Y967～973・1032はいわゆる逆「L」字状口縁をもつ。Y972は口縁下に一条の三角突帯を巡らす。Y967・968・970・973は口縁部が内傾、Y969・1032は外傾する。Y972の内面には丹の痕跡がある。Y974は胴部に複合三角突帯、いわゆる「M」字形突帯をもつ。Y1032は外面刷毛で、口縁部横なで調整。胎土に砂か、石英粒砂を混入し、焼成は良好。暗褐色（Y967・970・971・974・1032)、赤褐色（Y968・969)、淡褐色（Y972)、黄褐色（Y973）を呈する。 Y967～972・974は中期中葉、Y973は中期前葉のものであろう。

壺

夜臼式土器（Y889～891・1031）いずれも内傾して、上端が外反する口縁部をもつ。Y889・1031は篦で磨研されており、Y890は横なで調整。Y889・890・1031は胎土が緻密で、Y891は砂を含む。焼成は良く、黒褐色（Y889)、黄褐色 （Y890)、暗褐色（Y891・1032）を呈する。

板付Ⅰ式土器（Y975～982・988～997・1033～1035）　Y975～982・1033～1035は外反する口縁部で、Y975～980・982・1033・1035は口縁外側に粘土を貼付けて肥厚させる。Y988～997は胴部の破片で、Y988・989・992・993・994は複線の斜線文、Y990・991は有軸羽状文、Y991は沈線、Y996・997は肩部に段を有する。Y997は磨研、Y1033・1035は横なで調整。胎土には砂や石英粒砂を含むものが多いが、精良な胎土をもつもの（Y988・993・996・997）もあり、焼成は良い。黄褐色（Y975・976・981)、赤褐色（Y977・979・1034)、暗褐色（Y978・982・990・991・993・997・1033・1035)、黒褐色（Y980・995)、黒色（Y988)、褐色（Y989・992)、淡褐色（Y994)、灰褐色（Y996)を呈する。

板付Ⅱ式土器（Y983～987・998～1027・1036～1038）　Y983～987、998～1027は外反する口縁部である。Y984・985のように肥厚して口縁下に段をもつものもあるが、概して肥厚しない。一部は時期の下がるものもあろう。Y984・986・1036・1038は横なで調整で、Y1036は外面横刷毛目調整。Y998～1027は胴部破片である。Y998～1001は無軸羽状文、Y1002～1019

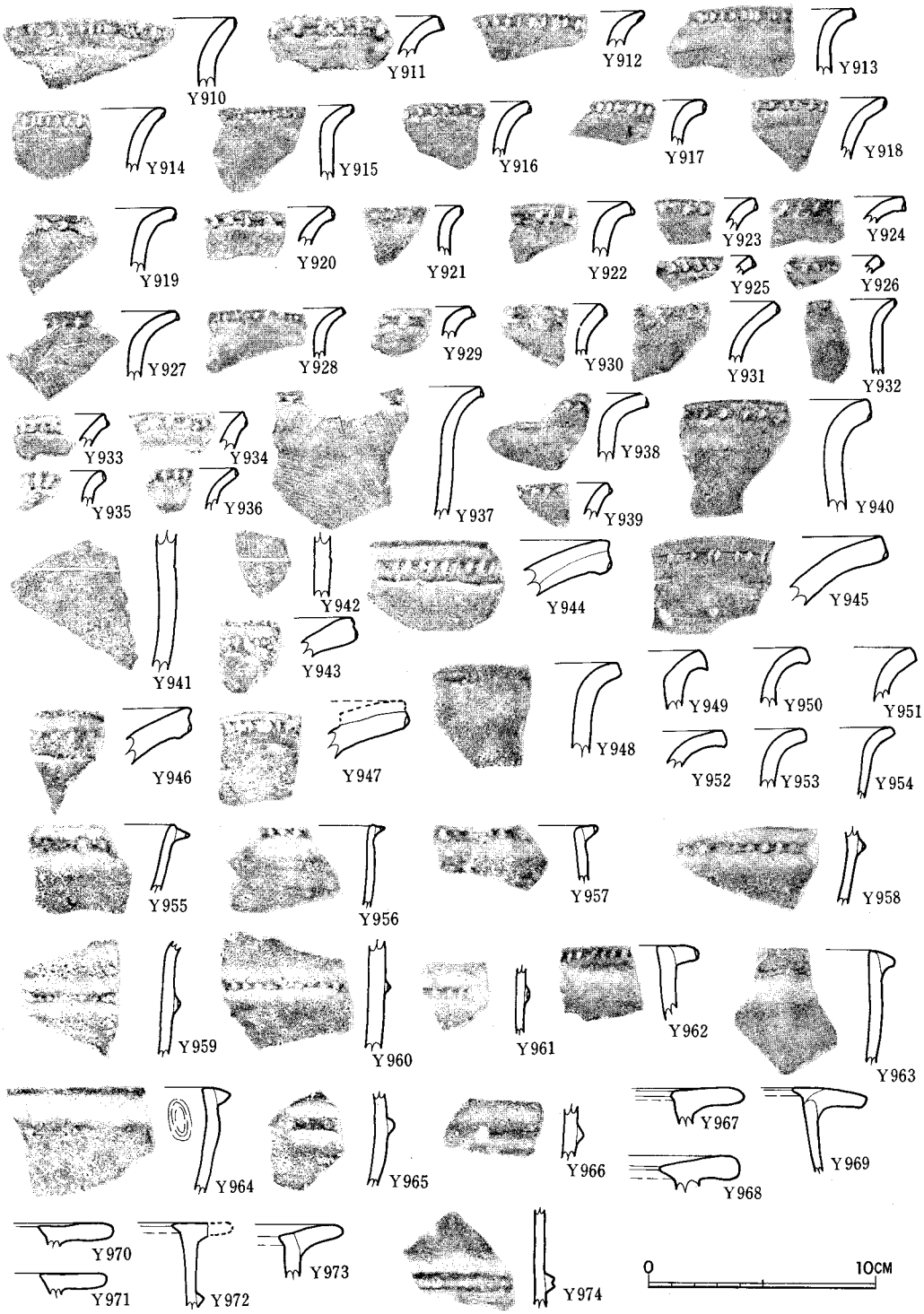


Fig. 3・21　E－17グリッド灰黒色粘質土層（第13層）上部出土弥生式土器実測図 (2)

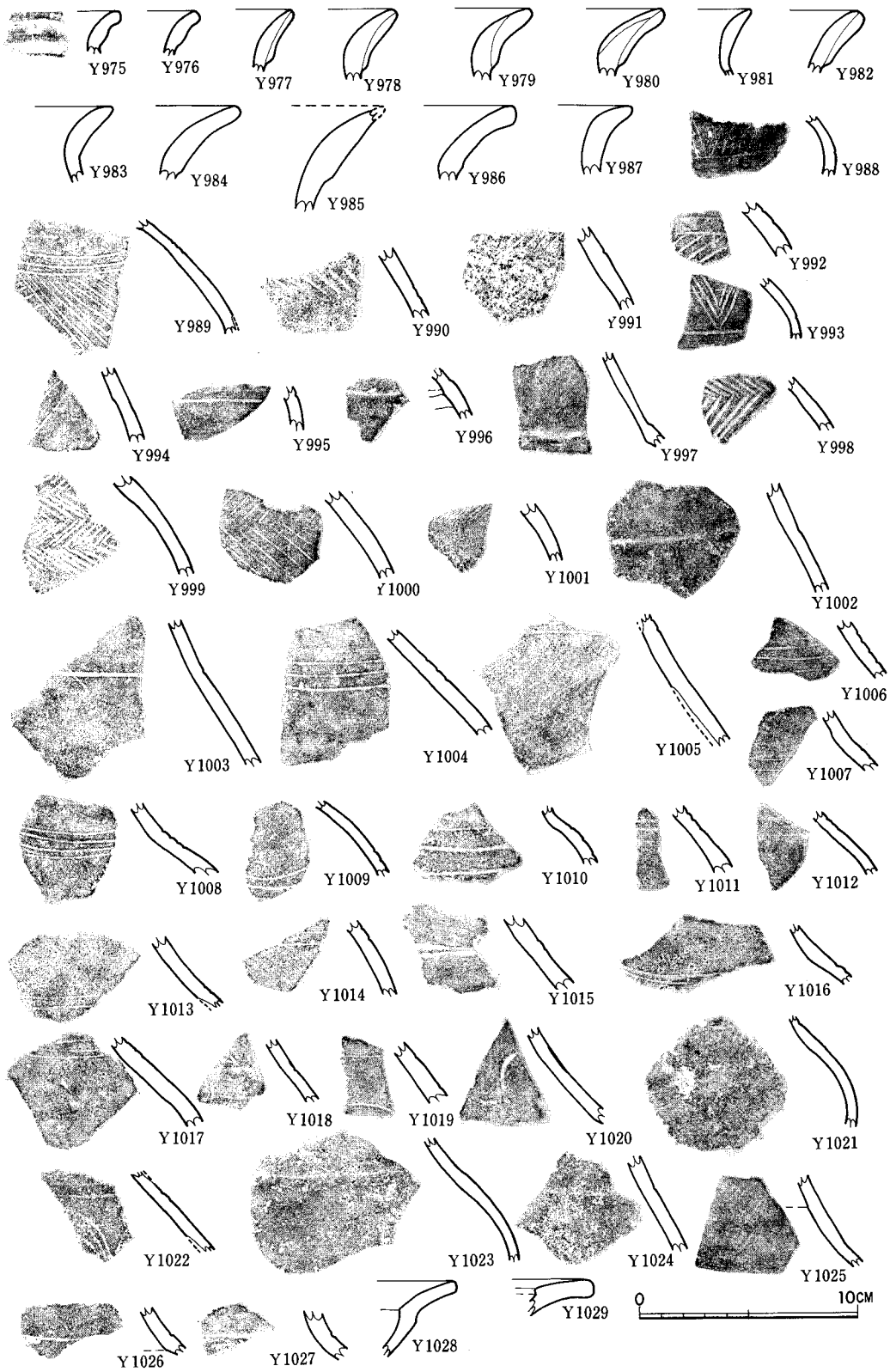


Fig. 3・22　E－17グリッド灰黒色粘質土層（第13層）上部出土弥生式土器実測図 (3)

・1024・1026・1027は1～4本の沈線が施される。Y1022は下弦重弧文であり、Y1001と1022は貝殻腹縁によって施文されている。Y1020とY1025は丹塗り土器である。Y1010・1017・1021は内面に指の押圧調整痕、Y1023は内外とも一部に刷毛目調整がみられる。ほとんどが胎土に砂や石英粒砂を含むが、Y1020・1025は精良な胎土である。いずれも焼成は良い。黄褐色（Y985・1005・1026・1037）、黒褐色（Y986・1004）、赤褐色（Y998・1002・1007・1009・1013・1025）、褐色（Y999・1014・1016）、灰褐色（Y1010）、淡褐色（Y1015・1020）で、他は暗褐色を呈する。

板付Ⅲ式（Y965・966・1029）　Y965・966は三角突帯をもつ胴部破片である。Y1029は外反する口縁の外端に粘土を貼付けて肥厚させ、内面口縁下に段をつける。横なで調整。胎土に石英粒砂（Y965）、砂（Y966・1029）を含み、焼成は良好。暗褐色（Y965・966）、褐色（Y1029）を呈する。

中期の土器（Y1039）　いわゆる鋤状口縁をもつ。横なで調整を行い、口縁上端は外傾する。胎土は精良で、焼成良好、淡褐色を呈する。中期中葉であろう。

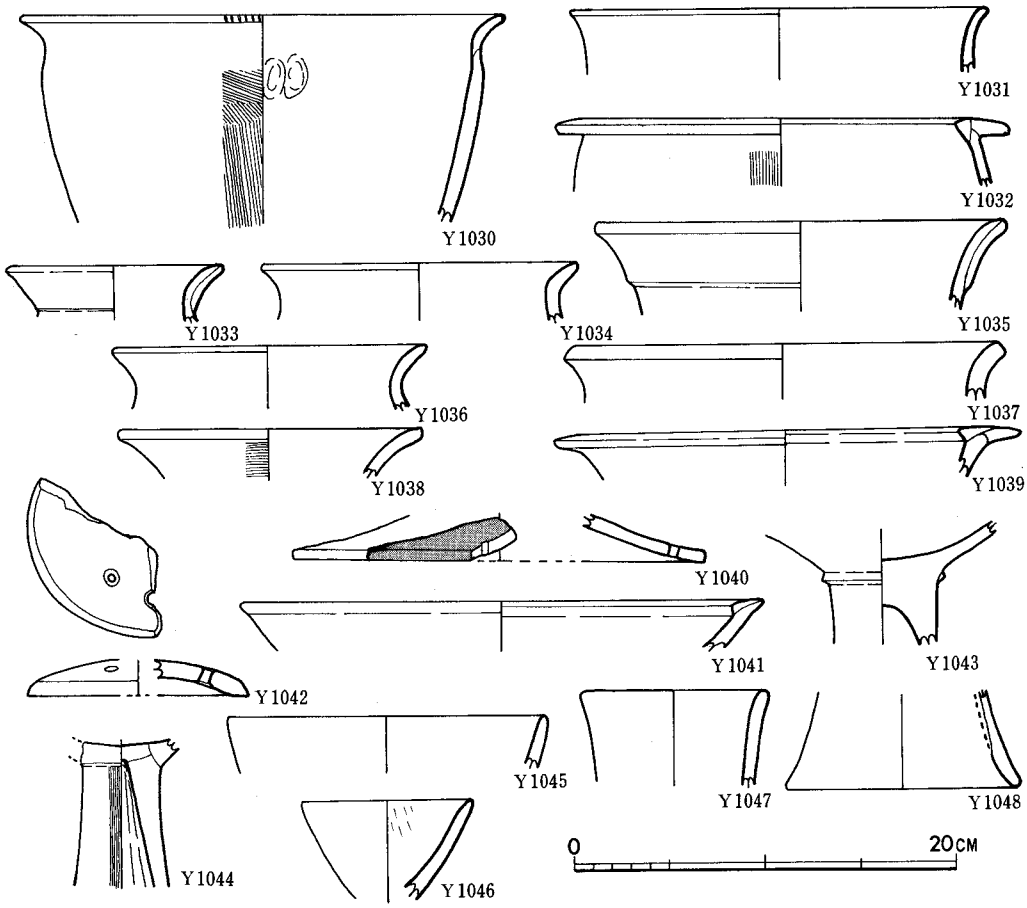


Fig. 3・23　E－17グリッド灰黒色粘質土層（第13層）上部出土弥生式土器実測図（4）

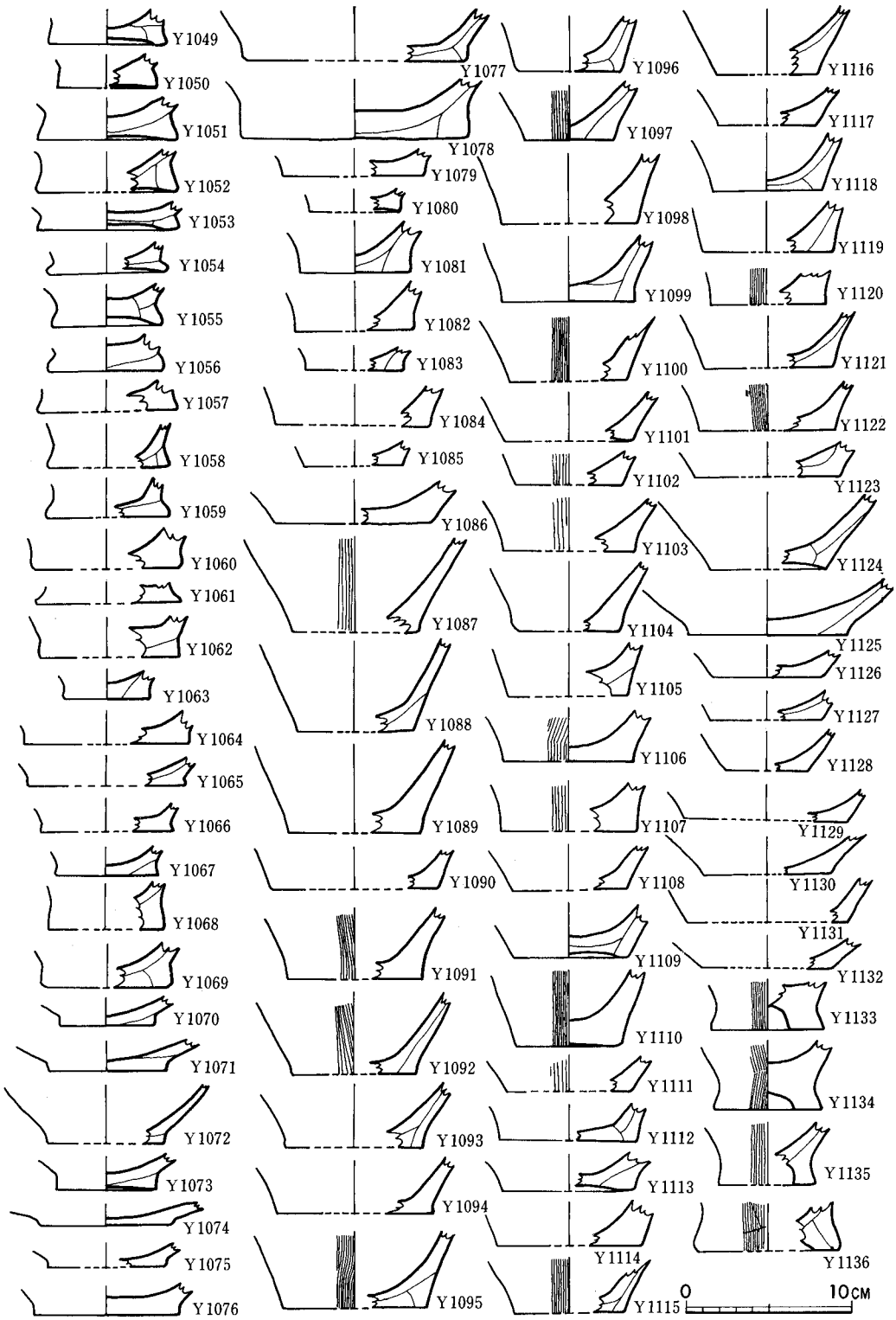


Fig. 3・24　E－17グリッド灰黒色粘質土層（第13層）出土弥生式土器実測図 (5)

高坏（Y892・1028・1041・1043・1044）　Y892・1028・1041は坏部、Y1043・1044は脚部と坏部の接合部である。Y892は横磨研、Y1041は横なで調整、Y1044は外面に刷毛目調整、内面にしぼりがある。Y1043には三角突帯が付けられる。Y892・1028・1043は板付Ⅰ式、Y1041は中期前葉、Y1044は中期中葉のものであろう。

浅鉢（Y893～895）　Y893・895は外反する口縁部と逆「く」の字状に屈折する胴部、Y895は逆「く」の字状に屈折する部位の破片である。いずれも胎土に砂を含み、焼成良好。淡褐色（Y893・894)、黒褐色（Y895）を呈する。夜臼式のものである。

鉢（Y1045・1046）　ともに直口口縁をもつ。Y1046は内部に擦痕がみられ、横なで調整。いずれも胎土に砂を含み、焼成良好。暗褐色（Y1045)、褐色（Y1046）を呈する。中期のものであろう。

蓋（Y1040・1042）　Y1040は丹塗り磨研土器で、おそらく無頸壺の蓋であろう。焼成前に穿孔された孔がある。Y1042も同様であるが、Y1040に比べてやや内彎している。砂(Y1040)、石英粒砂（Y1042）を胎土に含み、焼成良好。淡褐色（Y1040)、暗褐色（Y1042）を呈する。Y1042は前期、Y1040は中期中葉～後葉のものであろう。

器台（Y1047・1048）　Y1047は上部、Y1048は下部の破片である。胎土に、石英粒砂（Y1047)、砂（Y1048）を含み、焼成良好。赤褐色を呈する。これらは中期中葉～後葉のものであろう。

底部（Y1049～1136）　Y1070～1076・1124～1132は壺、他は甕の底部であろう。Y1049～1055・1080・1101・1109・1113・1117・1124・1133～1136は上げ底を呈する。Y1057は図示しなかったが底面に木葉痕がつけられる。Y1071・1079は箆の磨研がみられる。器表外面に刷毛目調整(Y1087・1091・1092・1095・1097・1100・1102・1103・1106・1107・1110・1111・1115・1120・1122・1133～1136)、内面刷毛目調整（Y1177）などの器面調整があり、煤の付着も内外両面（Y1103・1121・1134)、外面（Y1086・1125)、内面（Y1069・1087・1089・1092・1093・1095・1097・1099・1106・1112・1114・1116・1124）に認められる。胎土は砂か、石英粒砂を含むが、精良な粘土を用いたもの（Y1070～1070・1074・1130）もあり、焼成はおおむね良好である。灰褐色（Y1050・1071・1074・1079)、赤褐色（Y1052・1056・1057・1060・1068・1069・1088～1090・1093・1094・1096・1097・1099・1101・1104・1105・1108・1114～1116・1124・1131～1133・1135)、褐色（Y1054・1085・1106・1127)、淡褐色（Y1059・1072・1075)、黒褐色（Y1063・1130)、黄褐色（Y1065～1067・1110・1119・1126）を呈するものがあり、他は暗褐色を呈する。これらの土器は、Y1049～1062が夜臼式、Y1070～1075が板付Ⅰ式、Y1133～1136は中期初頭の底部の特徴を良く示している。

(ハ)耕作土～第11層出土の土器（Y1137～1158, Fig.3・25）

弥生式土器の他に土師器・須恵器をはじめ近世の陶磁器片まで含まれる層である。

第1層～第7層出土（Y1137～1149）

甕（Y1137～1139・1143～1145）　Y1137～1139は刻目突帯をもつ土器である。Y1137は口

縁部、Y1138・1139は胴部でY1138の突帯はほとんど欠落している。Y1138は条痕調整。いずれも胎土に砂を含み、焼成良好。暗褐色（Y1137・1138）、赤褐色（Y1139）を呈する。夜臼式である。Y1143～1145は外反するいわゆる如意形口縁をもち、Y1145はその下端に刻目をもつが、他は持たない。いずれも口縁端は「コ」の字状を呈する。胎土に砂（Y1143・1145）、石英粒砂（Y1144）を混入し、焼成は良い。暗褐色（Y1143・1145）、灰褐色（Y1144）を呈する。これは板付II式であろう。

壺（Y1141・1142・1146）　Y1141・1142は内傾する口縁部の上端が短く外反する。横なで調整を行い、胎土は砂を含むが良い。焼成も良好で、暗褐色（Y1141）、褐色（Y1142）を呈する。夜臼式であろうか。Y1146はいわゆる鋤形口縁をなすが、口縁内外両端張り出しは強くない。胎土は精良な粘土を用い、焼成良好。暗褐色を呈する。中期前葉のものであろう。

底部（Y1147～1149）　Y1147は夜臼式、Y1148は円盤貼付けの部位で剝落しており、板付

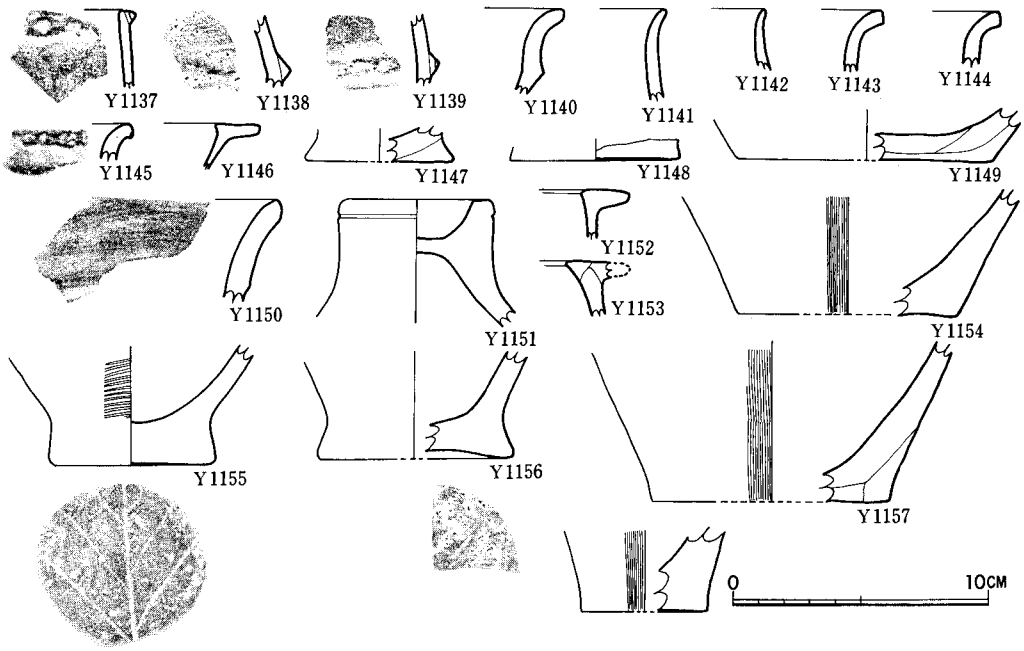


Fig. 3・25　E－17グリッド耕土～褐灰色粘質土層弥生式土器実測図

Ⅰ式の特徴を示している。いずれも胎土に砂を含み、焼成良好。赤褐色（Y1147)、黒褐色（Y1148）を呈する。Y1149は胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。赤褐色を呈する。

第11層出土（Y1152・1153）

ともに逆「L」字状口縁をもつ甕でY1152は口縁部内側張り出しはほとんどみられない。いずれも砂を含み、焼成良好。褐色（Y1152)、赤褐色（Y1153）を呈する。前者は中期前葉、後者は中期中葉のものであろう。

第9・10層出土（Y1150・1151・1154～1158）

Y1150は外反する壺の口縁部で口縁下外面に段がつけられる。外面は箆で磨研され、内面は横なで調整。胎土に砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。板付Ⅱ式であろう。Y1151は蓋のつまみで、一条の沈線が巡る。内部に煤の付着が認められることから、この土器が煮沸時の甕、あるいは甑の蓋に用いられたことが推定される。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。板付Ⅱ式であろう。Y1054～1158は底部である。Y1155は底面に木葉痕がみられ、外面には条痕。内面には煤の付着が認められる。Y1156も同様に木葉痕と、煤の付着をみるが、条痕は認められない。これらは夜臼式の甕の底部であろう。Y1154・1157・1158は外面に刷毛目調整を行う甕の底部で、Y1154・1157は内面に煤の付着が認められる。胎土は石英粒砂を含み、焼成は良い。暗褐色を呈する。（沢）

ⅲ）F－17グリッド出土土器（Y1178～1191、Fig. 3・26）

灰色粘質土層(第12層)・灰黒色粘質土層(第13層)・黒色粘質土層（第16層）出土の土器を一括してのべる。第9層以上には土師器等も包含されていた。

甕（Y1178～1181・1183）　Y1178～1181は刻目突帯をもつ土器である。Y1178は口縁部で、外面は条痕調整し、煤の付着が認められる。内面は横なで調整。Y1179～1181は反転する胴部に刻目突帯を付したもので、Y1181は内外面、他は外面に条痕がみられる。いずれも石英粒砂

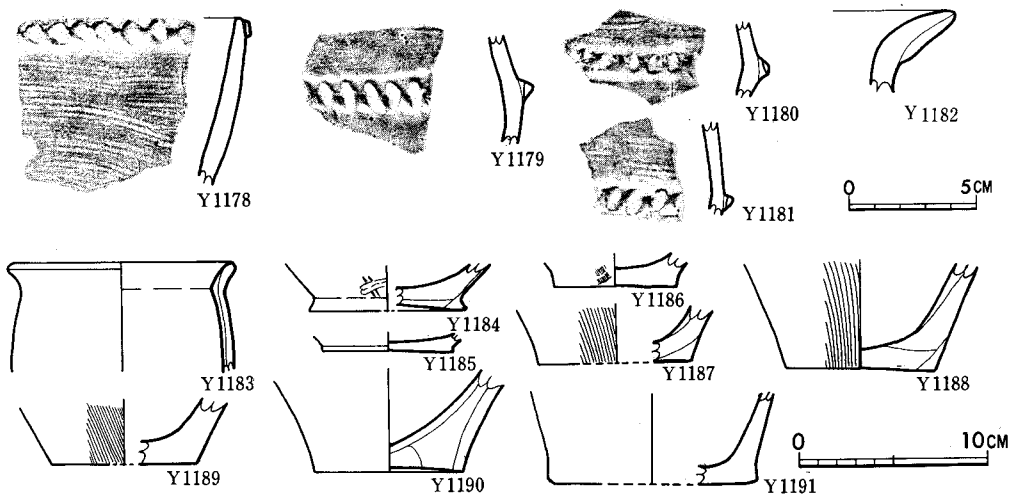


Fig. 3・26　F－17グリッド出土弥生式土器実測図

を胎土に含み、焼成は良好。黒褐色を呈する。夜臼式土器であろう。Y1138は口縁部が「く」の字状に外反する。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良くない。褐色を呈する。弥生時代後期前葉の土器であろう。

壺（Y1182）　外反する口縁外側に粘土を貼付けて肥厚させる。胎土・焼成とも良好であり、暗褐色を呈する。板付Ⅰ式であろうか。

底部（Y1184～1191）　Y1184・1185は壺、他は甕の底部であろう。Y1184・1190は若干の上げ底を呈する。Y1184は条痕状の調整を箆状の工具でなでて消している。底面には刷毛目調整がみられ、煤が付着する。Y1186～1189は外面刷毛目調整。Y1189にも煤の付着が認められる。胎土はY1185は非常に良く、精選されているが、他は石英粒砂を含む。焼成は良く、暗褐色を呈するものが多いが、黒褐色（Y1185）、赤褐色（Y1190）もある。　（沢）

iv）D－17ａトレンチ出土土器（Y617～634、Fig. 3・27、3・28）

溝の東側の黒色粘質土層（八女粘土層にのる）出土の土器片である。溝に近い部分にはほとんど遺物は含まれていない。この層はD－17ｂトレンチの第21層に相当し、上にある砂礫層（D－17ｂトレンチの第10層と同じ）からは古墳時代以降の土器片も出土する。

甕（Y617～621・627・629・630）　Y627は口縁部と胴部に刻目突帯をもつ土器で、特徴的

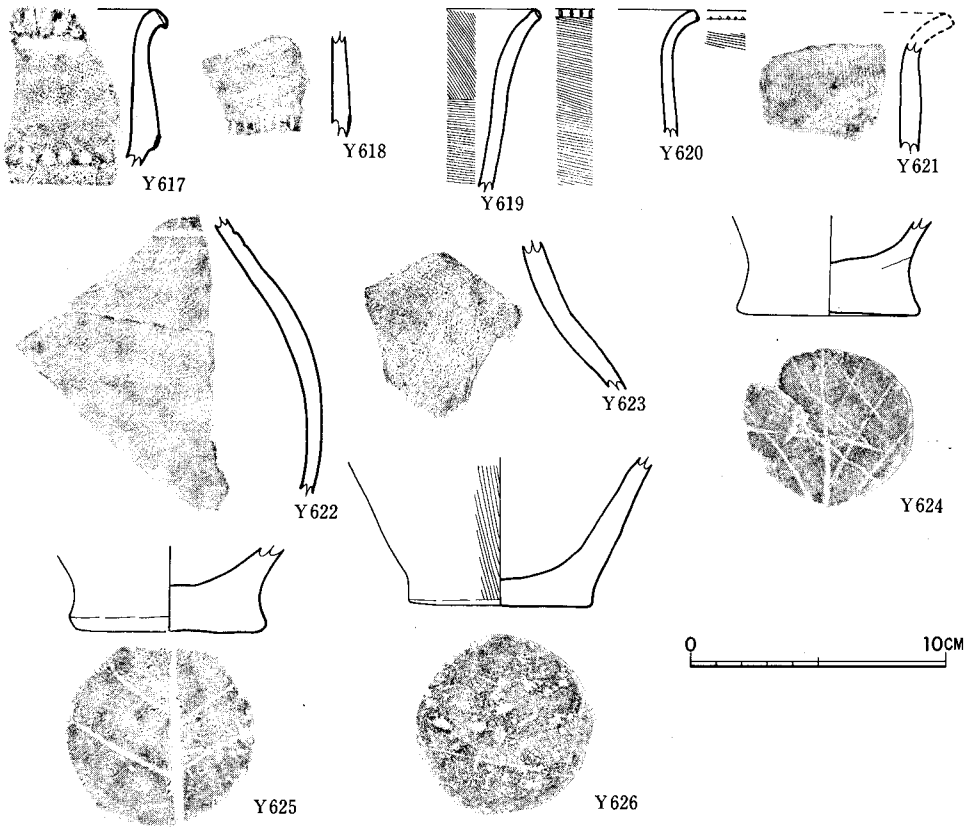


Fig. 3・27　D－17ａトレンチ出土弥生式土器実測図(1)

な胴部反転はない。口縁部の突帯は口縁端に接して、下向の斜面をもつ。器表外面は擦痕が著しい。内面横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。褐色を呈する。夜臼式であろう。Y617は外反する口縁の端の縦一杯に刻目を施し、口縁下肥厚部に段がつき、そこにも刻目を施す。Y618も同様のものの胴部破片で外面刷毛目調整。Y619・629は外反する口縁部をもつが、いわゆる如意形口縁とは言い難い。その口縁端の縦一杯に刻目を施す。Y619は器表内外面とも刷毛目調整。Y629は口縁内面下には横刷毛目調整、内面には指の押圧調整痕が残る。横なで調整。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。灰褐色（Y617・619・629)、褐色(Y618)を呈する。板付I式であろう。Y620・630(PL.XXⅣ)は外反するいわゆる如意形口縁の下端に刻目をもつ。Y621は口縁部を欠失するが、おそらく同様であろう。いずれも口縁は横なで調整。Y620・630は外面刷毛目調整。Y621は内外面とも刷毛目調整。Y630は甑であり、底部の穿孔は焼成後に外から為されている。底部付近には指の押圧痕が残る。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。褐色を呈する。板付II式である。

壺（Y622・623・631）　ともに胴部破片であり、Y622は平行横沈線文の下に複線八字形

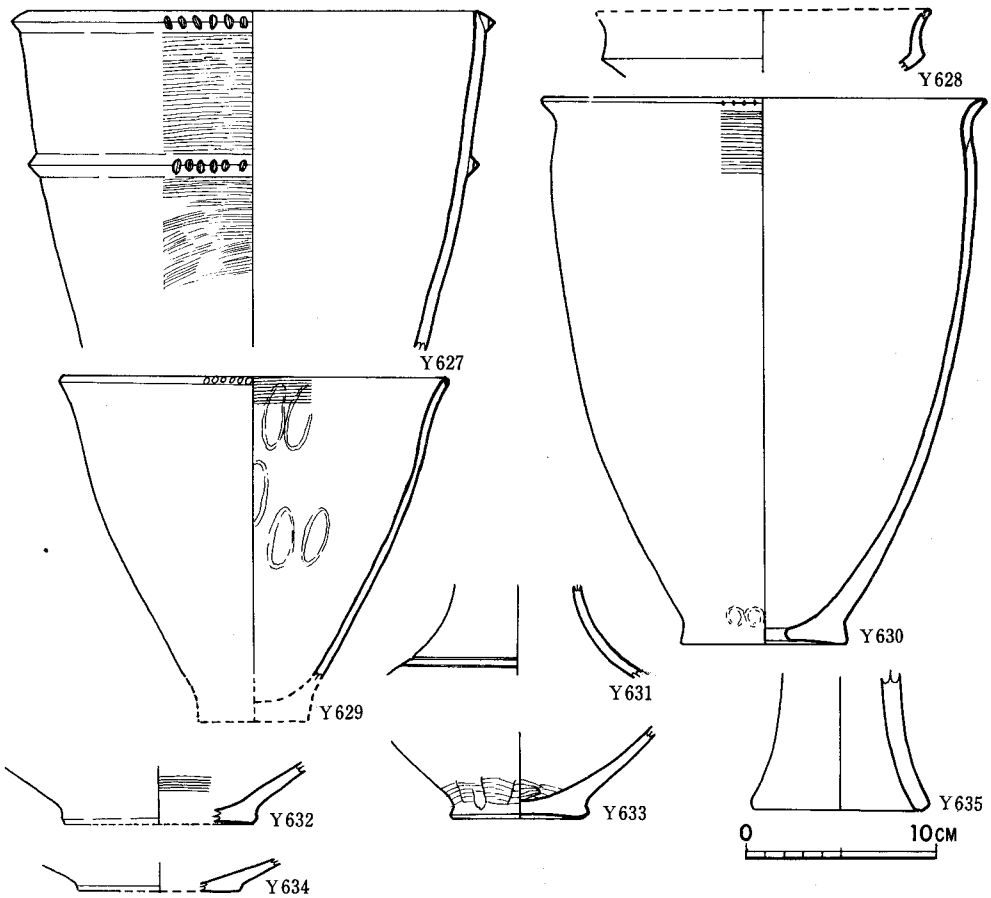


Fig. 3・28　D－17aトレンチ出土弥生式土器実測図(2)

文を、Y631は二本の平行横線文を描く。Y623の拓影は内面のもので、外面は箆で磨研され丹塗り。内面は刷毛目調整。Y622・Y631も箆で磨研される。胎土には砂（Y622・623)、石英粒砂（Y631 ）を含み、焼成は良い。褐色を呈する。Y622は板付Ⅰ式、他は板付Ⅱ式であろう。

浅鉢（Y628）　口縁端を欠くが、短く外反する口縁部は逆「く」の字状に反転する。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良く、黒色を呈する。夜臼式であろう。

器台（Y635）　器台の下半部である。外面はなで調整で、胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。弥生時代中期中葉以降のものであろうか。

底部（Y624・626・632～634）　Y624～626は甕、Y632～634は壺の底部であろう。Y624・625には木葉痕、Y626には籾痕が底面に付いている。Y626は外面刷毛目調整。Y632は内面に刷毛目調整。Y633は内面に箆の調整痕が残る。胎土に石英粒砂を含むが、砂を含むもの（Y634）もある。焼成は良く、褐色（Y624・625・632・634)、淡褐色（Y626）、黒褐色（Y633）を呈する。　（沢）

V）D－16トレンチ出土土器（Y500～616、Fig.3・29～3・34）

八女粘土層上にある黒色粘質土層出土土器である。D－17bトレンチのように層位の細分と層毎の出土土器の時期差を完全には把握できなかった。この層の西側では上にやや厚い礫層（D－17bトレンチの第10層のつづき）がのり、東側ではこの礫層にかわって灰色粘土層がのる。この礫層・灰色粘土層以上には土師器等時期の降る土器片も含まれている。　（後藤）

甕

夜臼式土器（Y500～504・540～544）　いずれも刻目突帯をもつ土器である。Y504は胴部で、他は口縁部である。口縁部は内傾するもの（Y500～502・540・542）とそうでないもの（Y503・541・543・544）がある。刻目突帯は、口縁端より下る位置に付けられるもの（Y503・540・542・544)と、口縁端に接して下向する斜面をもつもの（Y500～502・541・543）がある。器外表面に条痕をもつもの（Y501～504・540・542～544)、内面横なで調整のもの（Y500・501・503・504・540～544)がある。Y541の刻目は貝か櫛状のもので施される。胎土には石英粒砂（Y500～504・543)、砂（Y540～542・544)を含み、焼成良好。暗褐色（Y500・503)、灰褐色（Y501)、黒褐色（Y502)、褐色（Y504・540・543)、淡褐色（Y541・542・544)を呈する。

板付Ⅰ式土器（Y506・507・552～557）　いずれも外反する口縁をもつが、Y506・557はほとんど口縁端が屈折せず、他はいわゆる如意形口縁となる。Y506・557も含めて、その口縁端の縦一杯に刻目がつけられる。器表内外とも刷毛目調整（Y553～556)、横なで調整（Y507・552・557)、内面横なで調整（Y553・554)、指の押圧調整（Y550)などが行われ、Y555の刻目は貝か櫛状の工具によって施される。胎土には石英粒砂か砂が混入され、焼成は良好。褐色（Y506・552～554・556・557)、淡褐色（Y507)、黒褐色（Y555)を呈する。

板付Ⅱ式土器（Y511～514・516～522・559～562）　Y511～518・559～561は外反するいわ

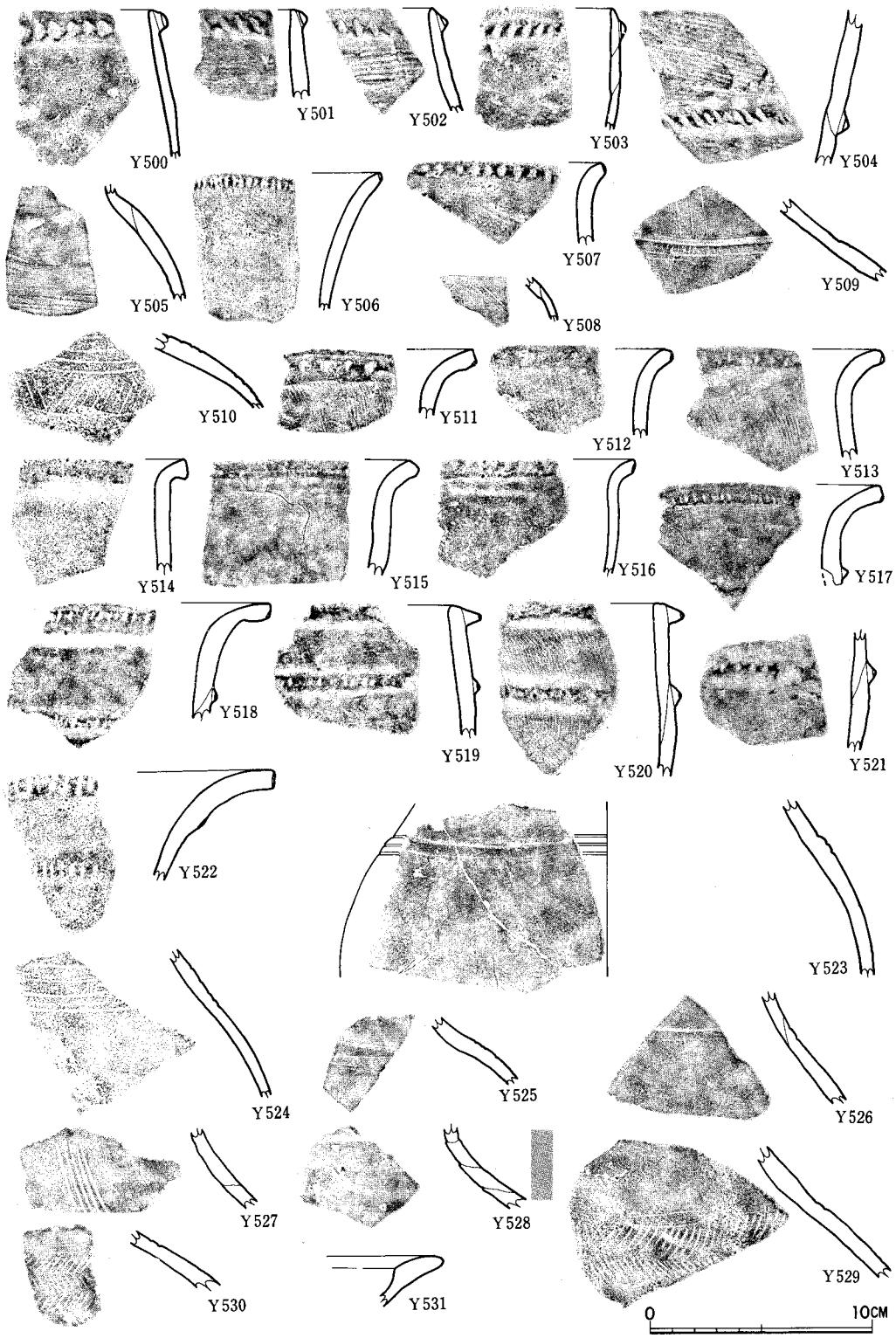


Fig. 3・29　D－16トレンチ黒色粘質土層出土弥生式土器実測図(1)

ゆる如意形口縁をもち、口縁下端に刻目をつけるが、Y514には刻目はない。Y517・518は口縁下にも一条の刻目突帯が巡る。Y517はその突帯部が少なく刻目の有無はよくわからないが、他の例からみて、刻目突帯であろう。Y519・520・562は直立する口縁端外側に断面三角形の突帯を貼付け、その先端に刻目を施したもので、上端は平坦化せず、また口縁下にも一条の刻目突帯を巡らす。Y521はその胴突帯部片であろう。Y522は口縁部の外反が強く、その端の縦一杯に刻目が施されるが、口縁下に段のつく部位があり、そこにも刻目がつく。器形はある

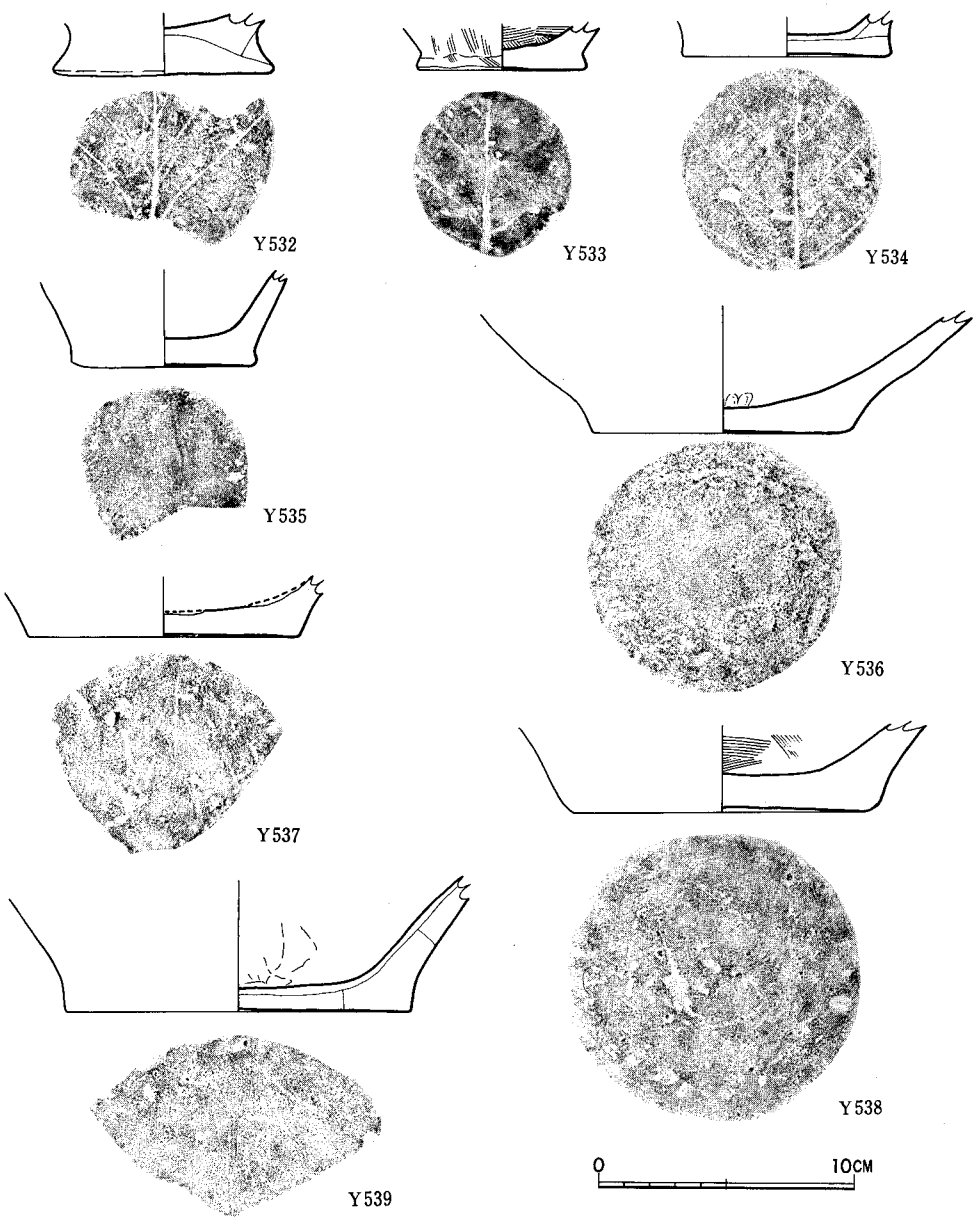


Fig. 3・30　Ｄ－16トレンチ黒色粘質土層出土弥生式土器実測図(2)

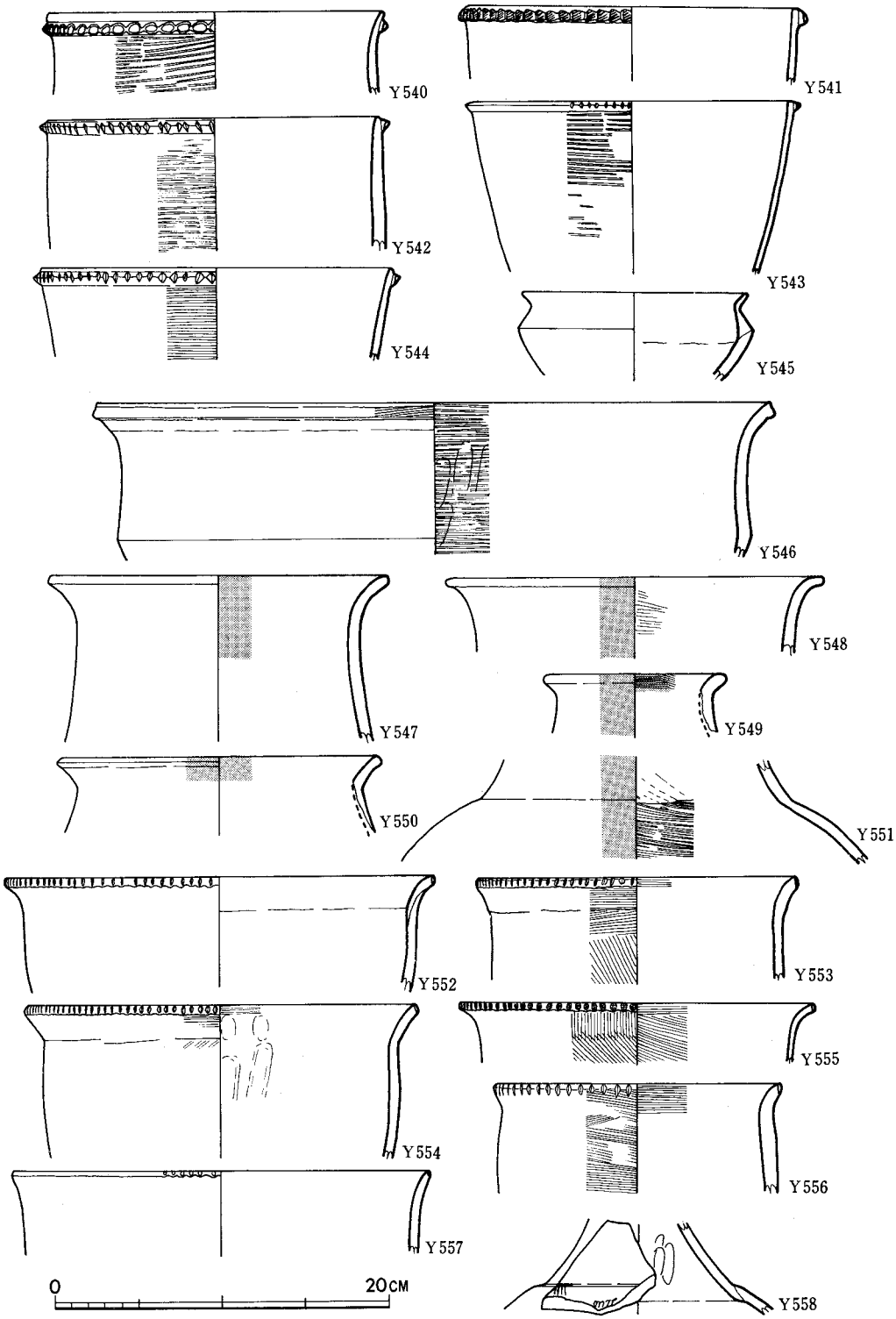


Fig. 3・31　D－16トレンチ黒色粘質土層出土弥生式土器実測図(3)

いは甕ではなく鉢であるかもしれない。器面調整は、内外面とも刷毛目調整（Y518・559)、外面刷毛目調整（Y511～513・517・560～562)、横なで調整（Y511～514・516・517・559・560・562)、内面に指の押圧調整（Y557～561）などがある。胎土に砂や石英粒砂を含み、焼成良好。灰褐色（Y511・513・518・561)、褐色（Y512・514・559・560・562)、淡褐色（Y516・517）を呈する。

中期の土器（Y563・576）　Y563は胴部に一条の三角突帯を巡らしている。刻目はない。横なで調整。Y576は逆「L」字状口縁をもつが、内側張り出しはなく、外側への張り出しも弱い。器表外面には篦なで、内面は刷毛目調整。ともに胎土に砂を含み、焼成は良い。暗褐色（Y563)、褐色（Y576)を呈する。ともに中期前葉のものであろう。

壺

夜臼式土器（Y505・547・550・551）　Y505は肩部片で、篦磨研されている。Y547・550は内傾する口縁部の先端が外反する。Y547は内面に丹痕があるが、外面は器面があれているために不明。Y550は口縁部の内外面丹塗り。いずれも横なで調整。Y551も肩部片で外面は丹塗り。内面は条痕調整。胎土には砂を含むもの（Y547・550)、精良な粘土を用いたもの（Y505・551）があり、焼成は良好。黒褐色（Y505・547)、褐色（Y550)、淡褐色（Y551)を呈する。

板付Ⅰ式土器（Y508～510・527・548・549・558）　Y508～510・527は胴部破片である。Y508・527は複線八字形文、Y510は平行横沈線文の間に反対方向を向く複線の斜線文を描く。Y509は三本の縦の複線文の下の胴・頸を画する2本の沈線の間に刻目状に短沈線を斜めに入れたものである。Y508は篦磨研、Y509は横なで調整である。Y548・549は口縁部で、Y548は外面、Y549は内外面に丹塗り。ともに内面刷毛目調整である。Y558も肩部で、接合部の段が内外とも著しい。胴上面には丹で暗文が描かれる。胎土に砂を含むが、石英粒砂を含むもの（Y510）もある。焼成は良い。淡褐色（Y508・510・549)、褐色（Y509・548）を呈する。

板付Ⅱ式土器（Y523～526・528～530・564～574）　Y523～526・528～530・573・574は胴部破片である。Y523～526・573・574は横位の平行沈線文、Y529・530は無軸羽状文である。Y578は外面丹塗りで、内面には接合部の痕が段となって残っている。Y564～572は外反する口縁部で、粘土を貼付け肥厚するものが多いが、外側に貼付け、口縁下外側に段のつくもの（Y564・567・569～572）と、内側に貼付けを行い、口縁下内側に段がつけられるもの（Y565）がある。またY566・568は肥厚部はない。Y568は口縁下に二条の沈線が巡る。Y564は肩部に三条の平行横位沈線文が描かれ、Y565・572は内外とも丹塗り。Y523・525は篦磨研、Y526は外面刷毛目調整、Y569は内面刷毛目調整、また横なで調整の行われているもの（Y529・564～568・571・572・574)、篦でなで調整のもの（Y528・569)、内面に指の押圧調整のあるもの（Y570・573）がある。胎土に砂か石英粒砂を含み、焼成は良い。暗褐色（Y523・524・565)、黒褐色（Y525)、褐色（Y526・569)、黒色（Y528)、淡褐色（Y529・530・567・568・570・572)、灰褐色（Y564・566・571・573・574)を呈する。

中期の土器（Y577）　いわゆる無頸の壺である。短い口縁部が強く「く」の字状に屈折し

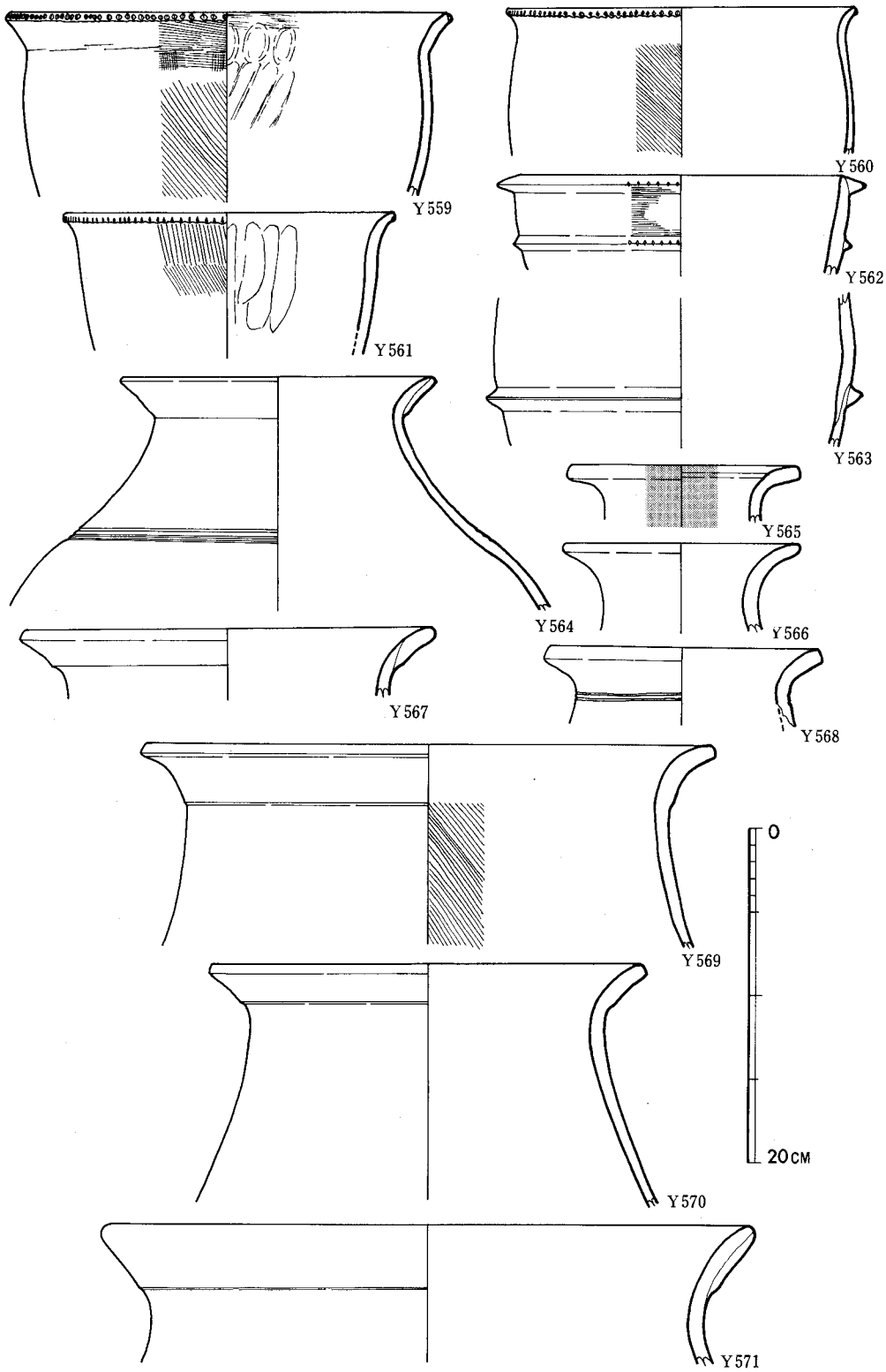


Fig. 3・32　D－16トレンチ黒色粘質土層出土弥生式土器実測図(4)

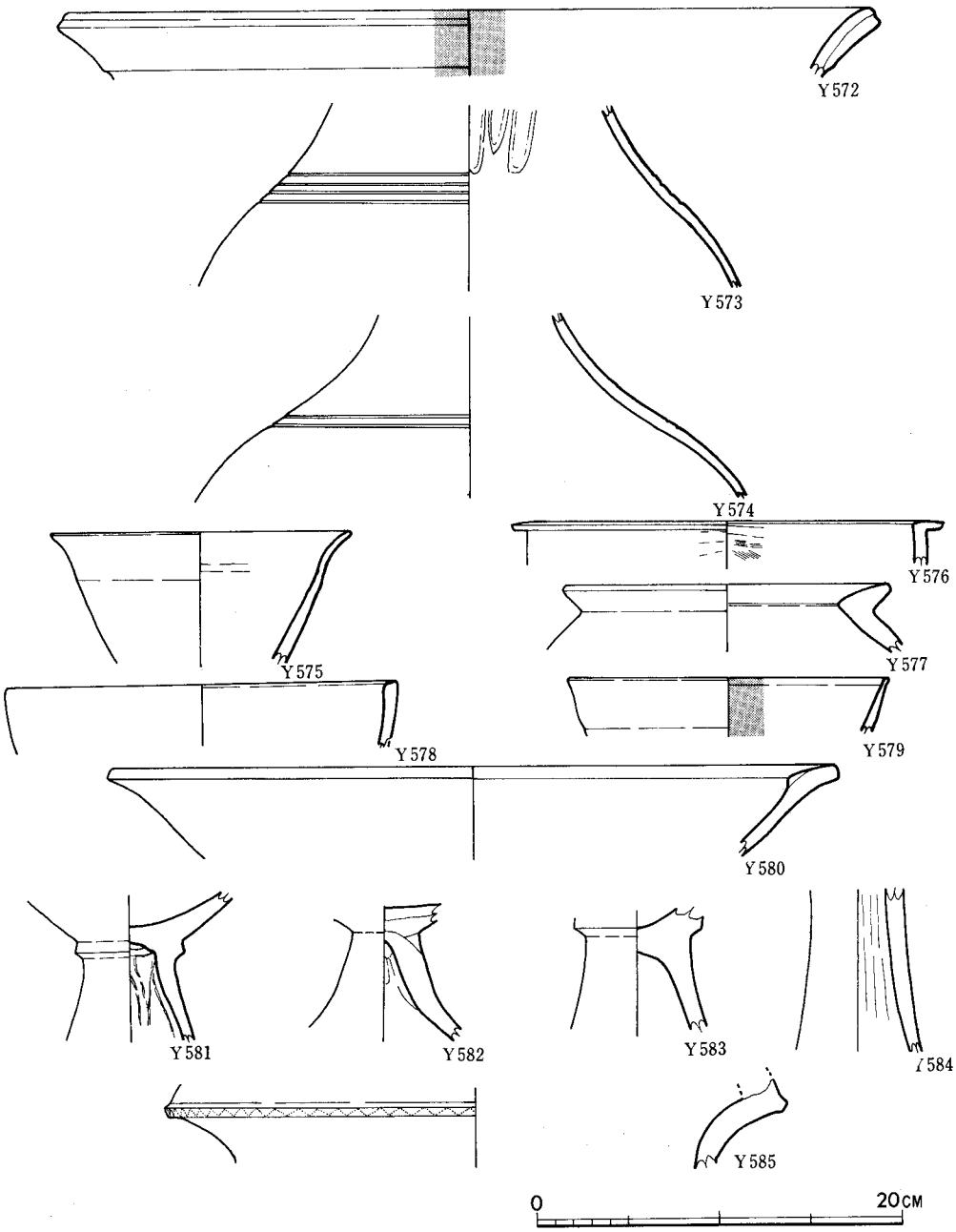


Fig. 3・33　D－16トレンチ黒色粘質土層出土弥生式土器実測図(5)

ており、横なで調整。胎土に砂を含み、焼成良好。灰褐色を呈する。中期中葉～後葉のものであろう。

後期の土器（Y585）　逆「く」の字状のいわゆる二重口縁を呈する壺と思われる。屈曲部の外側に櫛状の工具で山形文を施している。胎土・焼成とも良好で、褐色を呈する。

鉢（Y515・545・546・575・578・579）　Y545は短い外反する口縁部が「く」の字形に屈曲し、胴部で今度は逆「く」の字状に屈折する。横なで調整である。Y546は外反する口縁部が、胴部で逆「く」の字状に屈折するが、屈曲はあまり強くない。口縁端に刷毛目横なで調整があるが、内面は指の押圧調整の後、条痕調整。Y515もY546と同様な器形をもつが、外面に丹塗りの痕があり、横なで調整。これらは胎土に砂を含み、焼成は良好。淡褐色(Y515・546)、褐色（Y545)を呈する。夜臼式であろう。Y575は外反する口縁部が胴部で弱く逆「く」の字状に屈折する。横なで調整。Y578は直立する口縁部をもつ。横なで調整。Y579は内面丹塗り。いずれも胎土に砂を含み、焼成良好。淡褐色（Y575・578)、灰褐色（Y579）を呈する。Y575・579は前期、Y578は中期のものであろう。

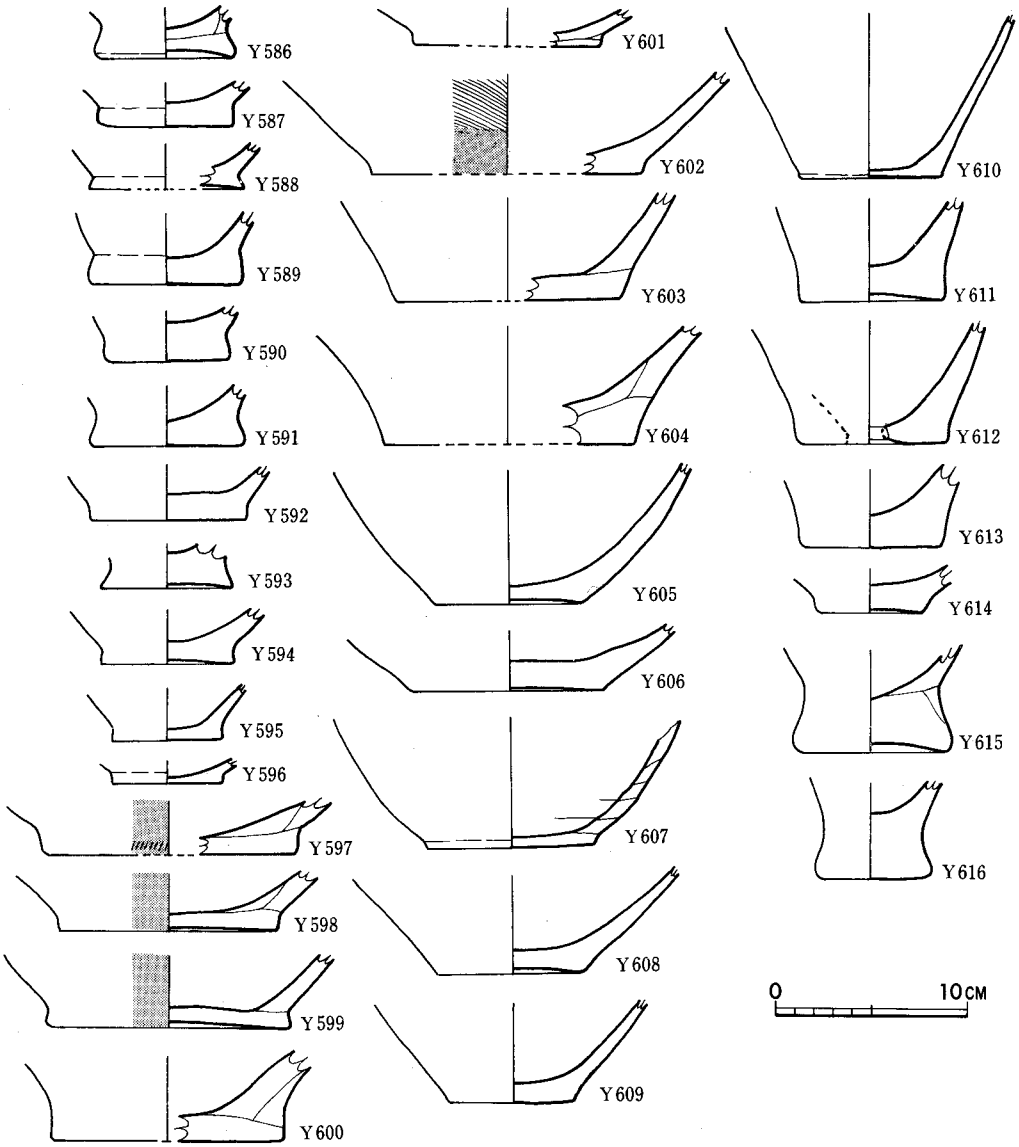


Fig. 3・34　D－16トレンチ黒色粘質土層出土弥生式土器実測図(6)

高坏（Y531・580～584）　Y531・580は坏部である。ともに外反する口縁部の上部に粘土を貼付けて肥厚させ、そのために内側口縁下に段がつく。Y581～583は坏と脚の接合部、Y584は脚部である。Y581・583は三角突帯が巡らされる。すべて横なで、あるいはなで調整で、Y581・584は内面しぼり。Y582の内面は箆状のもので調整した痕が残る。いずれも胎土に砂を含み、焼成良好。淡褐色（Y531・582・584）、褐色（Y580・581）、赤褐色（Y583）を呈する。Y531・580～583は 前期、特にY531・580は板付II式であろう。Y584は中期のものと思われる。

底部（Y532～539・586～616）　Y536～539・592・594～609は壺、他は甕の底部であろう。Y532～534は底面に木葉痕、Y535～539は籾痕を有する。上げ底を呈するもの（Y534・535・586・588・598・599・605・606・608・611・614・615）があり、また外面丹塗りのもの（Y536・597～599）もある。器面内外面とも刷毛目調整（Y533）、内面刷毛目調整（Y538）、外面刷毛目調整（Y597・602）、箆磨研のもの（Y535・607・616）、内面が指のなで調整のもの（Y598・599・602・605・609）がある。Y612は甑であり、穿孔は焼成後、内面に煤の付着が認められる。いずれも胎土に砂か石英粒砂を混入し、焼成は良好。褐色（Y532～534・536・586～588・590～594・596・598・602・603・612・613・616）、灰褐色（Y535・537・610・614）、淡褐色（Y538・539・589・599・600・605～607・609）、暗褐色（Y595）、赤褐色（Y597・615）、黒褐色（Y601）、黄褐色（Y604・608・611）を呈する。これらの底部はY532・586・588～591・593は夜臼式、Y533・534・587・592・594～601・610～613は板付I式、Y602～609・614は板付II式、Y615・616は中期初頭のものであろう。　（沢）

Vi）C－14bトレンチ出土の弥生式土器（Y277～499, Fig.3・35～3・41）

このトレンチの弥生式土器包含層は、すでにのべたように2つある。下の黒色粘質土層（第7層）からは前期を主とし、若干の中期のものもまじえる土器片が出土し、上の暗褐灰色粘土層（第5層）には前期の土器とともに中期の土器も多量に包含されている。また土師器も含まれているが、これは土師器出土ピットの時期の撹乱によるとみられる。　（後藤）

（イ）黒色粘質土層（第7層）出土の土器（Y277～350, Fig.3・35, 3・36）

甕

夜臼式土器（Y277～296・299～307）　Y277～296は口縁部である。口縁部が内傾し、胴部で反転し、その部位にも刻目をつけると推定されるものが多いが、Y284～288のように、口縁部が外傾し、胴部の張りの少ない器形もみられる。口縁部の刻目突帯は、森・岡崎両氏の分類〔森・岡崎1961〕にしたがえば、「口縁端より下るもの」（Y271～284・286～289）、「口縁に接して下向の傾斜面をもつもの」（Y285・290～292・294・295）、「口縁端と同高であり、口縁端にやや被いかぶさる感じの蒲鉾形断面のもの」（Y293・296）となる。器面の内外に条痕をもつもの（Y277・278）、外面に条痕を施すもの（Y283～285・287・288・290・292・293・296）があり、煤の付着の認められるもの（Y277・279・283・285・288・289）も存在する。Y299～307は刻目突帯をもつ胴部反転部の破片であるが、Y299・305のように、反転せずに

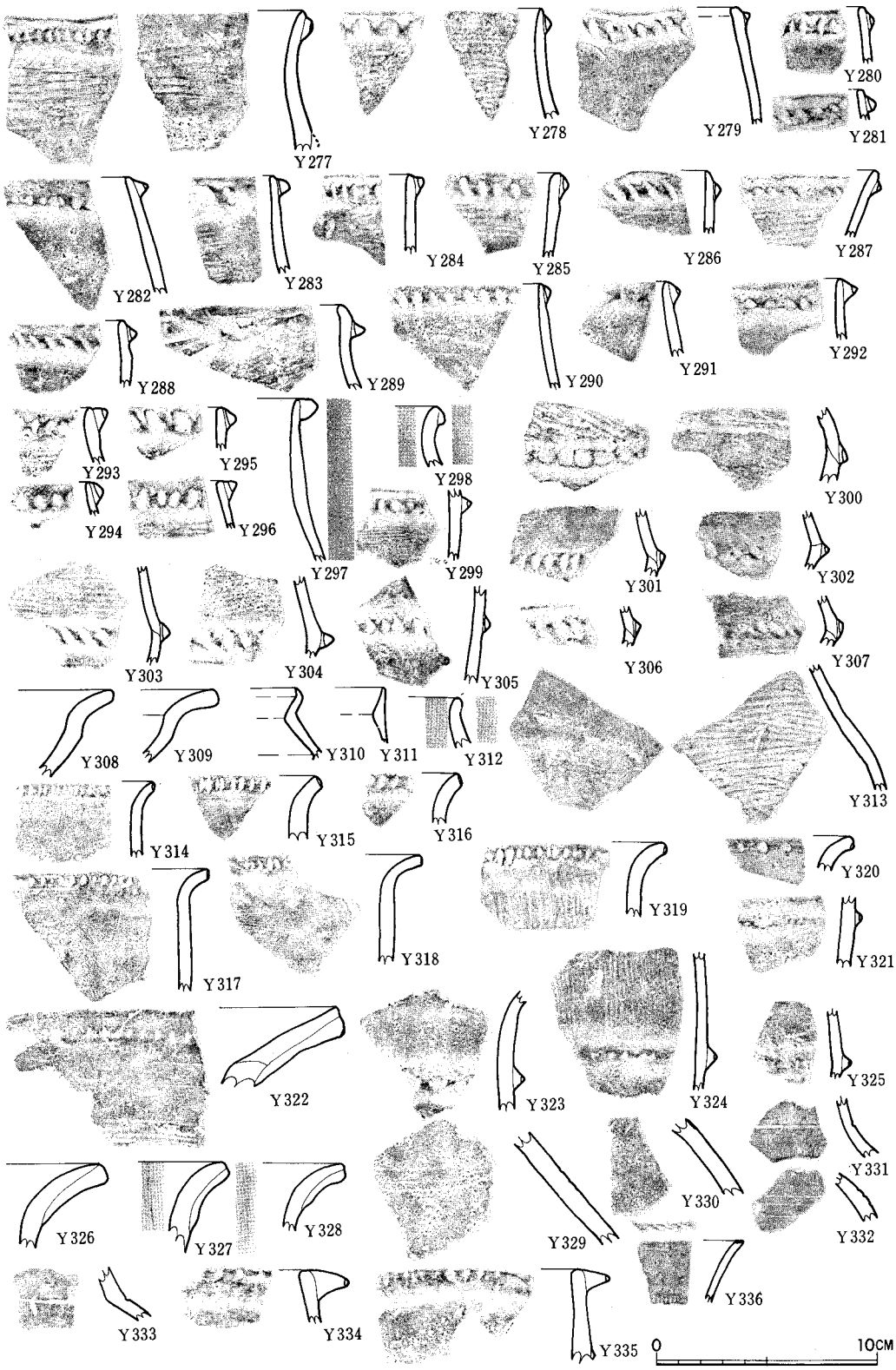


Fig. 3・35　C－14 b トレンチ黒色粘質土層（第7層）出土弥生式土器実測図（1）

突帯をもつものもある。器面内外が条痕（Y300)、外面が条痕（Y299・303～305)で調整されるものがある。Y300とY302には煤の付着が認められる。これらの土器は胎土に砂か石英粒砂を含み、焼成は良い。暗褐色を呈するものが多いが、黒褐色（Y279)、赤褐色（Y281・282・284・285・287・290・291・306)、黄褐色（Y286・301)、褐色（Y292・293・302・304)、灰褐色（Y303)を呈するものがある。

板付Ⅰ式（Y314～318）　外反するいわゆる如意形口縁をもち、その口縁端の縦一杯に刻目を施し、胴部の張りは少い。Y314の刻目は貝状の工具で施される。Y315・317・318は横なで調整。Y317・318は外面に刷毛目調整を行い、煤の付着も認められる。いずれも胎土に砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。

板付Ⅱ式（Y319～325）　Y319・320は外反するいわゆる如意形口縁の下端に刻目を施したものである。Y319 の外面には粗い縦刷毛目調整が行われる。Y 322 は外反する口縁部をもつ大形の甕で、やはり口縁下端に刻目を施す。横なで調整で、内面横刷毛目調整。Y321・323～325は胴部に刻目突帯をもつ。この刻目突帯は夜臼式のものと比べて三角形に近く、また刻目は小さい。Y323・324は外面縦刷毛目調整。胎土には石英粒砂か砂を混入し、焼成は良い。暗褐色（Y319・320・323・324)、黄褐色（Y321)、褐色（Y322・325）を呈する。

板付Ⅲ式土器（Y334・335）　口縁端に接して、断面三角形の大きな突帯を貼付け、口縁端に平坦面を作る。その外端には小さな刻目がつけられ、Y335は口縁下に細く低い三角突帯が巡らされる。胎土には石英粒砂（Y334)，砂（Y335)を混入し、焼成は良好。黒褐色（Y334）、暗褐色（Y335)を呈する。

不明の土器（Y336）　外傾する器壁の薄い口縁部の上端に細い刻目を入れ、また口縁下にも刻目が施されるが、その部位にも肥厚はみられない。横なで調整を行う。胎土に砂を含み、焼成良好。赤褐色を呈する。

壺

夜臼式土器（Y297・298・312・313・333）　Y333を除いていずれも丹塗りであり、Y297

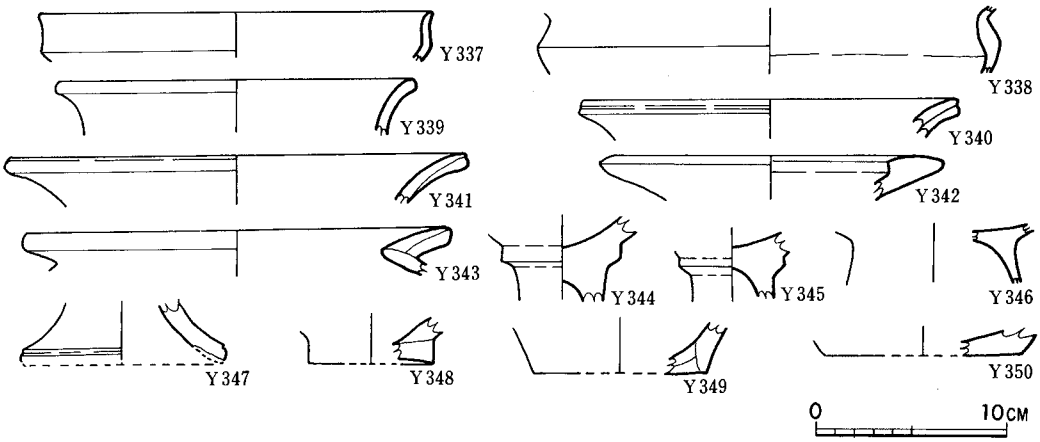


Fig. 3・36　C－14bトレンチ黒色粘質土層（第7層）出土弥生式土器実測図（2）

•313は外面のみである。Y297は口縁端に沿って突帯を貼付けており、断面図のみでは甕とさして変らないような感じをうける。Y298も口縁外側に粘土紐を貼付けている。Y312には横の磨研がみられる。Y313は肩部で、内面には整然とした条痕が施される。胎土に石英粒砂（Y297)、砂（Y298・312・313)を含むが、Y313は特に良好である。いずれも焼成は良く、赤褐色を呈する。Y333は肩部に一条の沈線が入る。砂を含み、焼成良好。黒褐色を呈する。

板付Ⅰ式（Y326～328）　いずれも粘土を貼付けて、口縁部を肥厚させる。Y327は丹塗り。Y326は磨研されている。Y327・328は横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色（Y326・328)、赤褐色（Y327)を呈する。

板付Ⅱ式土器（Y329・332・339～341）　Y339～341は朝顔状に開く口縁部で、Y340・341は粘土を貼付けて肥厚させているが、段はつかない。Y341は横に磨研している。これらの土器は板付Ⅱ式というより、あるいは板付Ⅲ式に入るものかもしれない。Y329・332は三本、Y331は一本の沈線を巡らす。Y330は貝殻で羽状文を施す。胎土に、石英粒砂（Y329・339～341)、砂（Y330～332）を含み、焼成は良い。それぞれ黄褐色（Y329)、褐色（Y330・332・341)、黒褐色（Y331)、暗褐色（Y339)、赤褐色（Y340)を呈する。

中期の土器（Y342・343）　Y342は外反する口縁部の上部に粘土を貼付けて肥厚させるが、内外とも張り出しは強くない。Y343は「く」の字状に強く外反する短い口縁部を持ち、無頸壺に近い。横なで調整。胎土に砂（Y342)、石英粒砂（Y343)を含み、焼成は良い。暗褐色（Y342)、赤褐色（Y343)を呈する。中期初頭～前葉の土器と思われるが、Y 343は、時期が下る可能性もある。

鉢（Y310・311・337・338）　Y310は短く内反した口縁部が内側に折れ、その下で「く」の字状に屈折し、胴部で逆「く」の字状に反転する特異な器形をもつ。横なで調整。Y311は外側は直線化しており、内側は肥厚して稜をもつ。これも特異な器形である。Y337は短く外反する口縁部が、逆「く」の字状に反転する。Y338も同様な器形をもつと考えられるが、口縁部の外反はY337にくらべて強い。内側に横なで調整。砂（Y310・311・337)、石英粒砂（Y338)を胎土に含み、焼成は良好。暗褐色（Y310・337)、黒褐色（Y311)、赤褐色（Y338)を呈する。Y311以外は浅鉢であろう。すべて夜臼式と考えられる。

高坏（Y308・309・344～347）　Y308・309は外反する口縁をもつ坏部で、Y308は外面に、Y 309は内面に稜がつく。Y309は横磨研。Y344～346は坏と脚の接合部である。Y344・345は三角突帯が巡る。Y346は突帯がなく、脚の胴径が大きい。坏部に刷毛目調整。Y347は脚部で先端に沈線がつく。胎土に砂（Y308・309・347)、石英粒砂（Y344～346）を含み、焼成は良好。褐色（Y308)、暗褐色（Y309・344・345)、赤褐色（Y346・347）を呈する。Y308は板付Ⅰ式、他は板付Ⅱ式であろうか。Y346は時期不明。

底部（Y348～350）　Y348・350は壺、Y349は甕の底部である。Y348は若干の上げ底を呈するが、いわゆる円盤貼付け手法を用いている。胎土に石英粒砂（Y348・349)、砂（Y350)を混入、焼成良好。黒褐色（Y348)、赤褐色（Y349)、黄褐色（Y350)を呈する。Y348は板付Ⅰ式であろう。

(ロ)暗褐灰色粘土層（第5層）出土の弥生式土器（Y351～470，Fig.3・37～3・40）

甕

夜臼式土器（Y351～404）　Y351～386は口縁部である。口縁が内傾し、胴部が逆「く」の字状に反転すると考えられる土器が多く、Y351・358はその反転部にも刻目突帯をもつが、Y357・378・381・383等は口縁が外傾し、胴部は反転せず、刻目突帯もつかない可能性が強い。前者の中でも、口縁部が外反するものと、そうでないものとがある。口縁部の刻目突帯は、森・岡崎両氏の分類〔森・岡崎1961〕にしたがえば、「口縁端より下がるもの」（Y351・352・358～367・378～300)、「口縁に接して下向の傾斜面をもつもの」（Y356・357・368～377・381・382・385)、「口縁端と同高であり、口縁端にやや被いかぶさる感じの蒲鉾形断面のもの」（Y353～355・383・384・386)に分けられる。内外とも条痕の施されるもの（Y352・360)、外面に条痕のあるもの（Y353・359・363・364・367・370・372・374・377・379・380・382～384・386)、内面に指の横なで調整のあるもの(Y355)などがあり、煤の付着の認められるもの（Y356・363・368・374・379）もある。Y387～404は逆「く」の字状に反転した胴部に刻目突帯をもつものである。内外面に条痕を施すもの（Y393・396・399)、外面に条痕のあるもの（Y387・389・391・394・397・398・401・402)がある。刻目はほとんど篦状か、棒状の工具で施されるが、Y398は貝か櫛状の工具によって刻まれている。ほとんどが胎土に砂か石英粒砂を含み、焼成は良い。暗褐色を呈するものが多いが、黄褐色（Y352・361)、褐色（Y353・356・372～374・387・395)、淡褐色（Y358・356・388・389)、赤褐色（Y370・375・378・386・396)、黒褐色（Y376・381・404)、暗赤褐色（Y399)を呈するものもある。

板付Ⅰ式（Y417・418）　外反する口縁部の端が丸味を帯び、張りの少ない胴部へと続く。Y417は外面は縦及び斜め、内面は横及び斜めの刷毛目調整、内外ともに丹塗り。石英粒砂（Y417)、砂（Y418)を含み、焼成は良好。赤褐色（Y417)、黄褐色（Y418)を呈する。

板付Ⅱ式（Y409・420）　Y409は外反する口縁の上部に粘土を貼付けて肥厚させる。Y420は外反する口縁部の端が「コ」の字状となり、張りの強い胴部へと続く。ともに胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。赤褐色（Y409)、暗褐色（Y420)を呈する。

中期の土器（Y410）いわゆる「T」字形口縁をなす。上端はやや外傾する。口縁下に一条の三角貼付突帯が巡ると思われるが、欠失している。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。黄褐色を呈する。この土器は甕棺の口縁部であり、中期前葉～中葉のものであろう。

壺

夜臼式土器（Y406）肩部から胴上半部にかけての張りが強い土器である。外面接合部には明瞭な段がつき、内部には指の押圧調整痕が残る。外面は篦状のもので磨研している。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。

板付Ⅰ式（Y411）　小さく外反する口縁部をもつが、段はつかない。外面頸部下半に刷毛目調整があり、内面には指の押圧調整痕が残る。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。黄褐色を呈する。

Fig. 3・37　C－14bトレンチ暗褐灰色粘質土層（第5層）出土弥生式土器実測図（1）

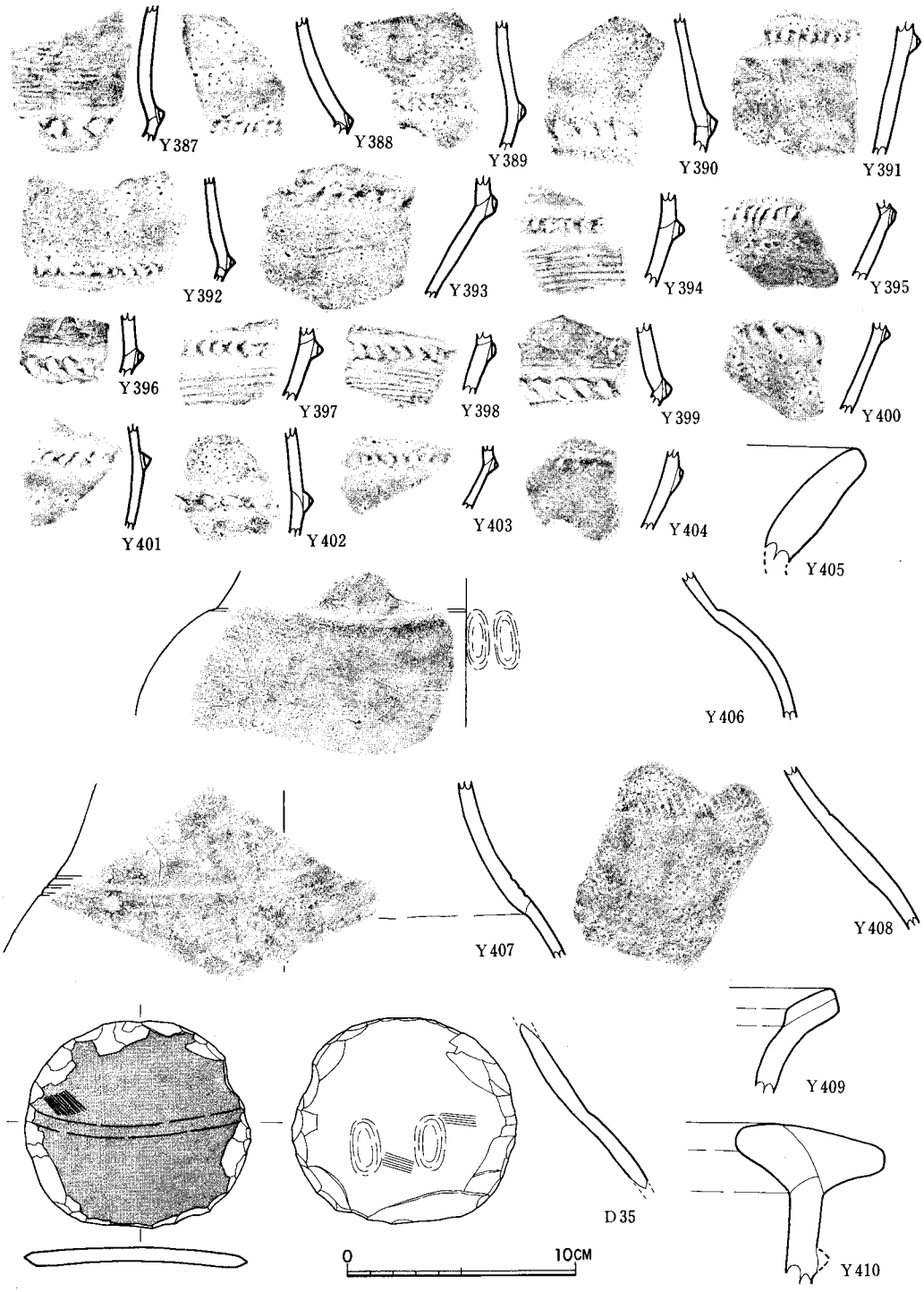


Fig. 3・38　C－14 b トレンチ暗褐灰色粘質土層（第5層）出土弥生式土器実測図 (2)

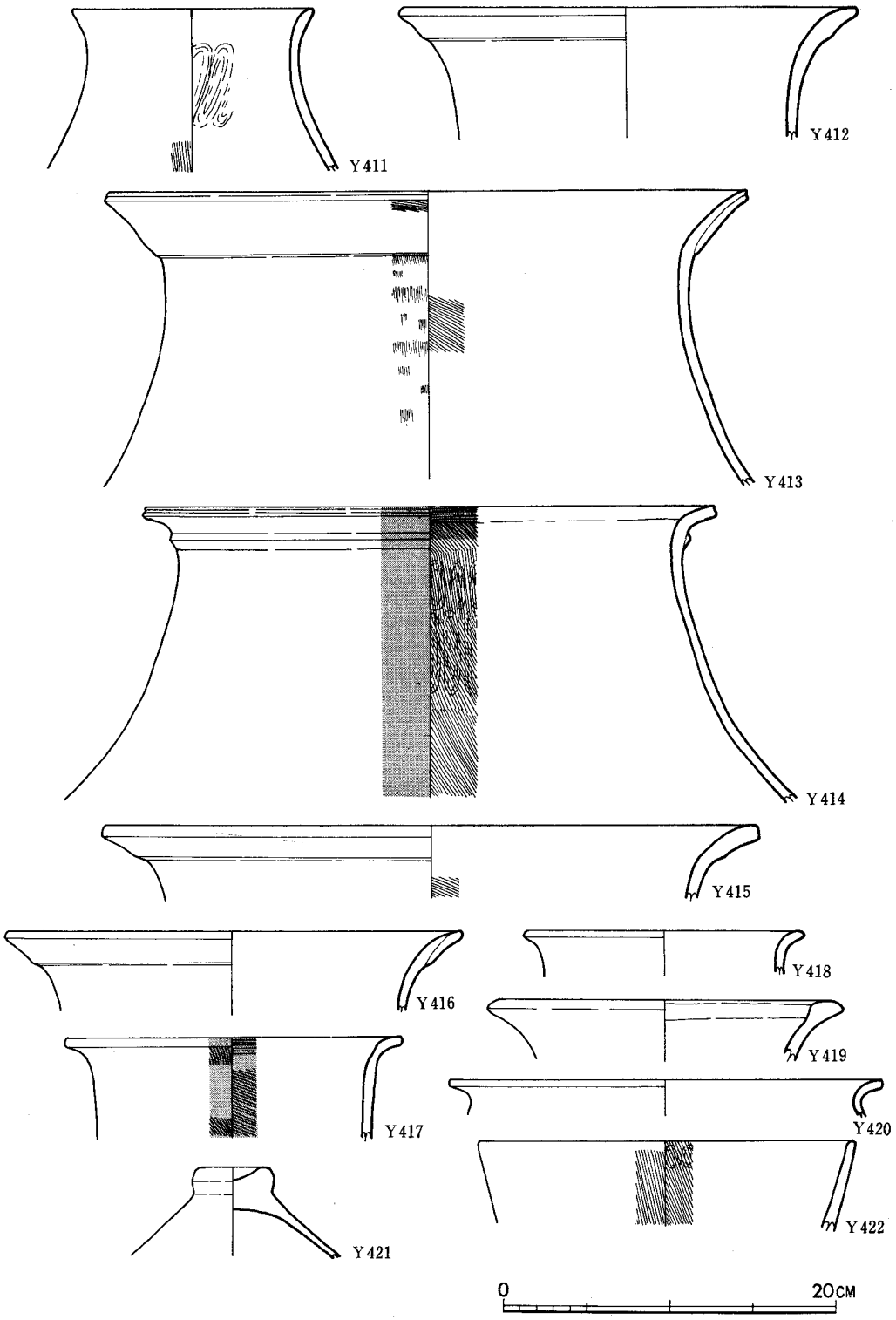


Fig. 3・39　C－14 b トレンチ暗褐灰色粘質土層（第5層）出土弥生式土器実測図 (3)

板付Ⅱ式（Y405・407・408・412～416）Y407・408は肩部から胴上半部にかけての破片である。Y407は肩部に三本の沈線が巡る。Y408は、いわゆる無軸羽状文が描かれる。内面には指の押圧調整。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。褐色を呈する。Y405・412～416は外反する口縁部をもつ土器で、ほとんどが粘土を貼付けて肥厚させるが、Y414は肥厚せず、かわりに口縁下に一条の三角突帯を巡らす。Y414・416の口縁内面には篦状の工具での磨研、Y413～415には横なで調整が認められる。Y413は内外面とも刷毛目調整であるが、磨研されているためにところどころ消えている。Y414は外面と口縁内側に丹が施される。内面は指の押圧調整の後、斜め刷毛目調整。Y415の内面にも刷毛目調整が認められる。Y414は胎土に砂を含むが、他は石英粒砂を含む。焼成はいずれも良好。褐色（Y412・415・416）、暗褐色（Y413）、赤褐色（Y405・414）を呈する。

中期初頭の土器（Y419）　外反する口縁部の上面に粘土を貼付けて肥厚させるが、内外とも張り出しは著しくない。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。暗褐色を呈する。

蓋（Y421）　蓋のつまみ部である。胎土に石英粒砂を含み、焼成はあまり良くない。赤褐色を呈する。板付Ⅱ式のものであろう。

鉢（Y432）　内外とも刷毛目調整を行ない、内面には指の押圧痕もみられる。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。暗褐色を呈する。中期のものであろうか。

高坏（Y425～428）　Y425は坏部で、他は坏部との接合部から脚部にかけての三角突帯をもつ。Y428は坏部に刷毛目調整が施される。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成はY425だけを除けば、他は良い。赤褐色（Y425）、黄褐色（Y426）、暗褐色（Y427・428）を呈する。いずれも板付Ⅱ式であろう。

底部（Y429～470）　Y429・430・432～435・436～441・447～449・452～455・457～459・462・464～468は甕、他は壺の底部であろう。Y443・444・450は外面丹塗りである。器面調整は、内外面条痕（Y429）、内面刷毛目調整（Y432・446）、外面刷毛目調整（Y445・455）、内外面とも刷毛目調整（Y441）、外面に指の押圧調整（Y441・443・446・449）である。内面に煤の付着の認められるもの（Y435・437）もある。Y429・431・432・435・438・449・450・457・458・461・468は上げ底であるが、特にY449は特徴的である。ほとんどが胎土に石英粒砂を含むが、緻密なもの（Y431・470）や、砂を含むもの（Y436・439・442・444・446・450・464・469）もある。焼成はY437・445を除いて良好。暗褐色を呈するものが多いが、赤褐色（Y431・435・443・460・462・464・466～468）、灰褐色（Y432）、黄褐色（Y437・439・450・451・457）、褐色（Y440・441・444・449・452・454・459）、黒褐色（Y463）を呈するものもある。

（ハ）C－14ｂトレンチ第５層西側出土土器（Y471～491、Fig.3・41）

第５層の西側につづく暗灰色粘質土層出土土器である。この層はC－14ａトレンチの第６層につづくかもしれないが、確実でない。

甕（Y471～475）　Y471は刻目突帯をもつ。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。暗褐色を呈する。夜臼式。Y472～474はいずれも外反する如意形口縁の下端に刻目を施す。Y472・

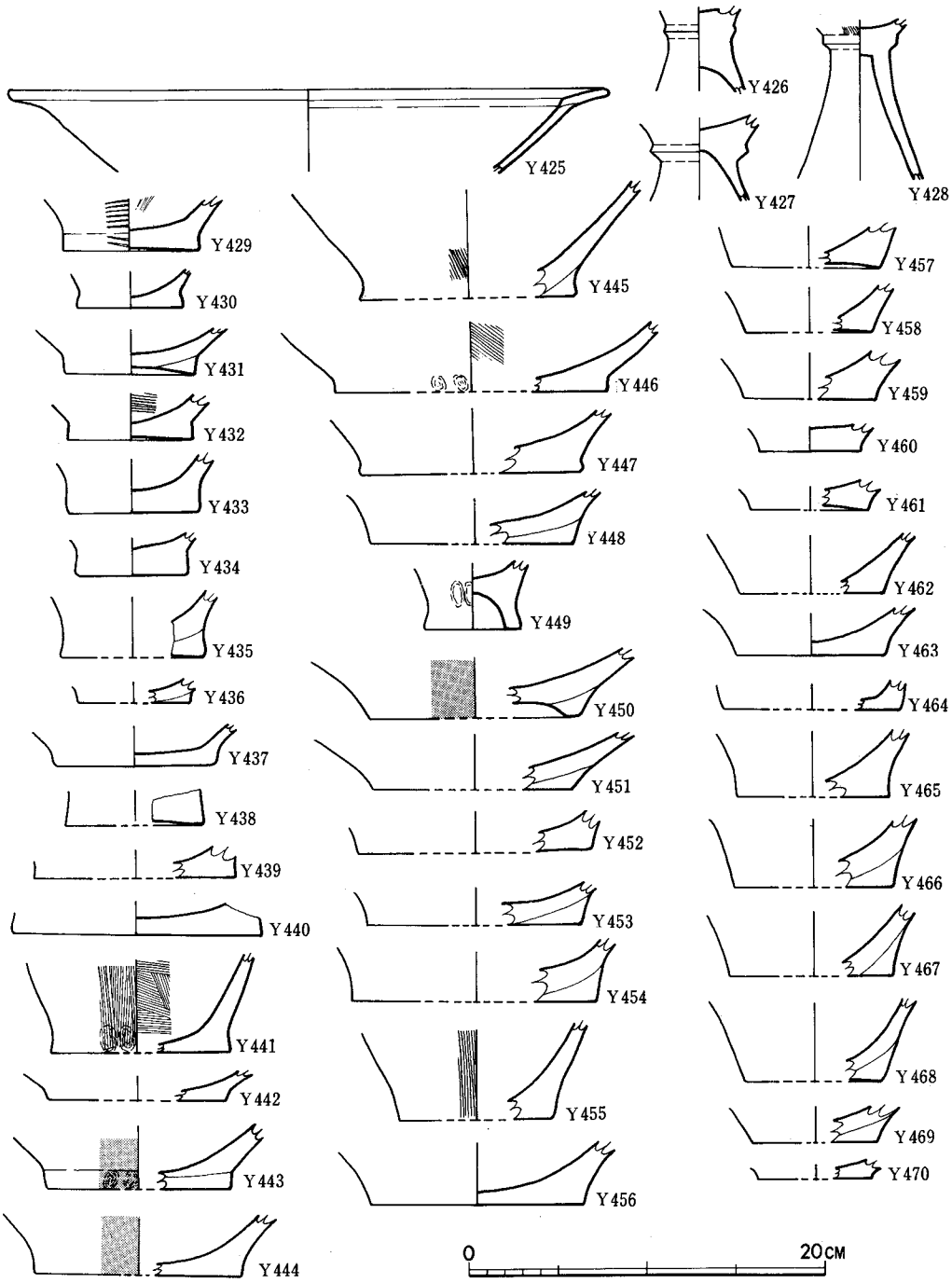


Fig. 3・40　C－14bトレンチ暗褐灰色粘質土層（第5層）出土弥生式土器実測図（4）

473は外面に縦刷毛目調整。いずれも口縁部横なで調整。Y 473は口縁端が凹む。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。淡褐色（Y472）、淡暗褐色（Y473）、赤褐色（Y474）を呈

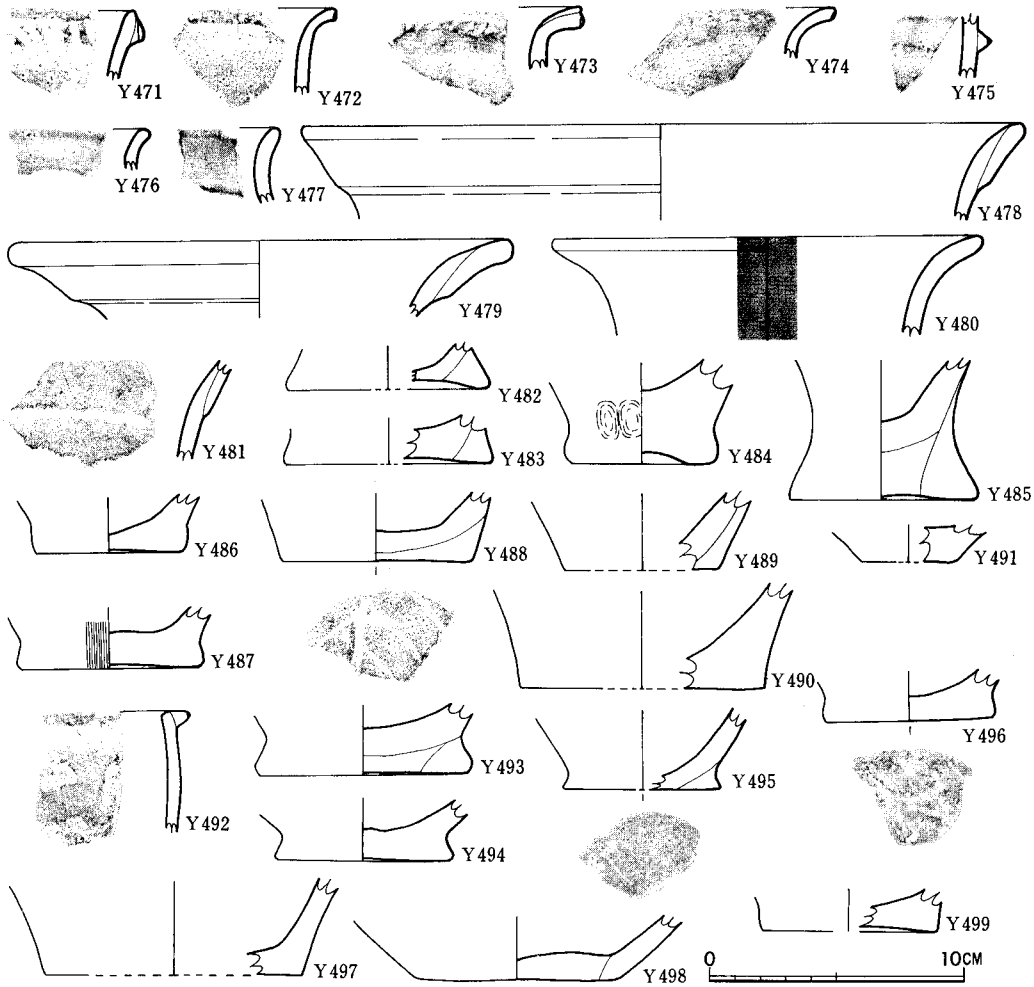


Fig. 3・41　C－14ｂトレンチ第５層西側と暗褐色砂層（第３・３ａ～３ｄ層）出土弥生式土器実測図

する。Y475は胴部破片で、鋭い稜をもつ刻目突帯が巡る。胎土に砂を含み、焼成良好。暗褐色。Y472～475は板付II式のものであろう。

壺（Y476～481）　Y476・477は外反する口縁部である。いずれも横なで調整。胎土に砂を含み、焼成は良好。淡暗褐色（Y476）、黒色（Y477)を呈する。夜臼式であろう。Y478・479・481は外反する口縁外側に粘土を貼付けて肥厚させたもので、口縁下に段を有する。いずれも横なで調整。胎土に砂（Y478)、石英粒砂（Y479・481）を含み、焼成は良好。淡赤褐色（Y478・481)、淡黒褐色（Y479)を呈する。板付I～II式。Y480は単純に外反する口縁部で、内外とも丹塗り。胎土に砂を含み焼成良好。前期末～中期初頭か。

底部（Y482～491）　Y482・483はいずれも底部が断面三角形に張り出しており、上げ底を呈する。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。褐色（Y482)、暗赤褐色（Y483)を呈する。夜臼式の甕の底部であろう。Y484・Y485はともに肥厚した底部で、ともに上げ底。Y484は外面に指の押圧調整痕。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。淡褐色（Y484)、暗赤褐色（Y485)を呈する。いずれも甕の底部である。Y486～490も甕の底部で、Y486・487は若干上げ底。Y487は外面に縦の刷毛目調整。Y488は底面に木葉痕がある。胎土に砂（Y489・490)、石英粒砂（Y486～488）を含み、焼成は良好。淡褐色（Y486)、暗褐色（Y487～489)、淡灰褐色（Y490)を呈する。Y491は壺の底部で胎土に砂を含むが緻密なもので、焼成は良い。淡灰褐色を呈する。

（二）暗褐色砂層（第3・3a～3d層）出土の弥生式土器（Y492～499, Fig.3・41）

甕（Y492）　口縁外端に粘土胎を貼付けて突帯として小さい刻目をつける。横なで調整。土に石英粒砂を含み、焼成は良好。暗褐色を呈する。

底部（Y493～499）　Y495・Y498は壺、他は甕の底部であろう。Y493・498は若干上げ底を呈する。Y495・496は底面に木葉痕。胎土に砂（Y496・497・499)、石英粒砂（Y493～495・498)を含み、いずれも焼成は良い。赤褐色（Y493・498)、暗褐色（Y494・495)、暗黄褐色(Y494・496・497)、黒色（Y499)を呈する。（沢）

Vii）C－14aトレンチ出土土器（Y10～276, Fig.3・42～3・48）

C－14aトレンチでは、八女粘質土層上に黒色粘質土層が、その上に暗褐灰色粘土層があり、それぞれC－14bトレンチの第7層、第5層のつづきにあたる。このトレンチの南側では両層の間に黒灰色粘土層（若干砂質）がある。包含土器の時期的な差はC－14bトレンチの場合と同じである。以下、両層出土土器を一括してのべる。

Fig. 3・42　C－14 a トレンチ出土弥生式土器実測図(1)

夜臼式土器

甕・壺・鉢などの器形がある。その中でも甕形土器が多数出土した。

甕形土器（Y10～58）　甕形土器は口縁部の突帯断面の観察によって3つに分類されてきた〔森・岡崎1961〕。それにもとづけば、突帯が口縁端より下るもの(Y10～18)、突帯が口縁に接して下向の傾斜面をもっもの(Y19～47・54)、突帯が口縁端と同高のもの（Y48～51・53・56）と大まかに分類ができる。またこれとは別に口縁端にやや上向きに突帯がつき、口縁上面が内部に下向するもの（Y52・55）がある。突帯のついた口縁は外びらきまたは直立で、一条の突帯をめぐらす胴部（Y57・58）へと続く。口縁が胴部に内向するもの（Y11・50）もある。これはほとんど張らない胴を形成し、胴部に突帯を持たず、有田〔九州大学考古学研究室1968〕・宇木汲田遺跡〔九州大学考古学研究室1966〕などにみられる甕形土器の類型のものと考えられる。これら甕形土器の器面調整は篦、あるいは貝殻腹縁を用いて条痕を施すが、まれに刷毛目を用いたもの(Y22・32)も見られる。Y20の外面は条痕調整を施した上に丹塗り痕跡がある。突帯には篦・棒・指頭などによる刻目が施される。櫛状器具を用いたもの(Y32・42)もある。刻目施文の際、雑に行なわれたため、胴部にまで刻目がおよぶもの（Y21・22）が見られる。突帯部に全く刻目をもたないもの（Y28・42）もある。Y42の場合は内外面とも条痕による調整が施されているが、Y28にはそれがなく、弥生前期後葉の亀ノ甲タイプの可能性が強い。これら甕形土器は一般に暗褐色、黄褐色、暗黄褐色を呈するものが多い。胎土には雲母を混えた多量の砂粒が含まれており、焼成は大多数が良好である。

壺形土器（Y59・157）　直線的に内傾してのびる頸部がその上端付近で丸く反転し、小さな口縁部を作り出している。Y59は多くの砂粒を含み焼成は良好、明るい灰褐色を呈する。口縁の外反は非常にゆるやかである。Y157は黄白色の器表上に丹を外面全体と内面口縁下に施したもので、胎土にはφ1～3㎜の砂粒を混え、焼成は余り良くない。頸部はふくらみ、しまりがない。

鉢形土器（Y60～67・155・156）浅鉢と深鉢に分類できるが、Y61が深鉢の可能性があるほかは浅鉢と考えられる。Y61は胴部が内反し、直線的に口縁端までつづく。胎土に多くの砂粒を混え、焼成良好、黒色を呈する。浅鉢は屈折部より口縁が外反するもの（Y64～67)、口縁が内向し口縁付近でわずかに外反するもの（Y62・63・155)、口縁がほぼ直立するもの（Y60・156)に分類できるが、夜臼式以前の浅鉢に比べてその器形形態が単純化している。胎土には微砂を混え、焼成は一般に良好である。黒色・暗褐色などの色調を呈する。ほとんどの土器がなでによる器面調整を施している。

高坏・底部（Y169・68・69・176～195）

Y 169は脚部つけ根付近に一条の突帯をめぐらした高坏破片で、内・外面とも条痕による調整を施しているので夜臼式に属するものではないかと考えられるが、突帯はその大半を欠き、刻目があったかどうか明確でない。胎土には微砂粒を多く混え、焼成良好、赤褐色を呈する。夜臼式の特徴を備える底部として、Y68・69・176～195があげられる。断面台形状の貼付円盤の底部で、やや上げ底のものもみられる。Y68は甕形土器、Y69は壺形土器の底部と思われ

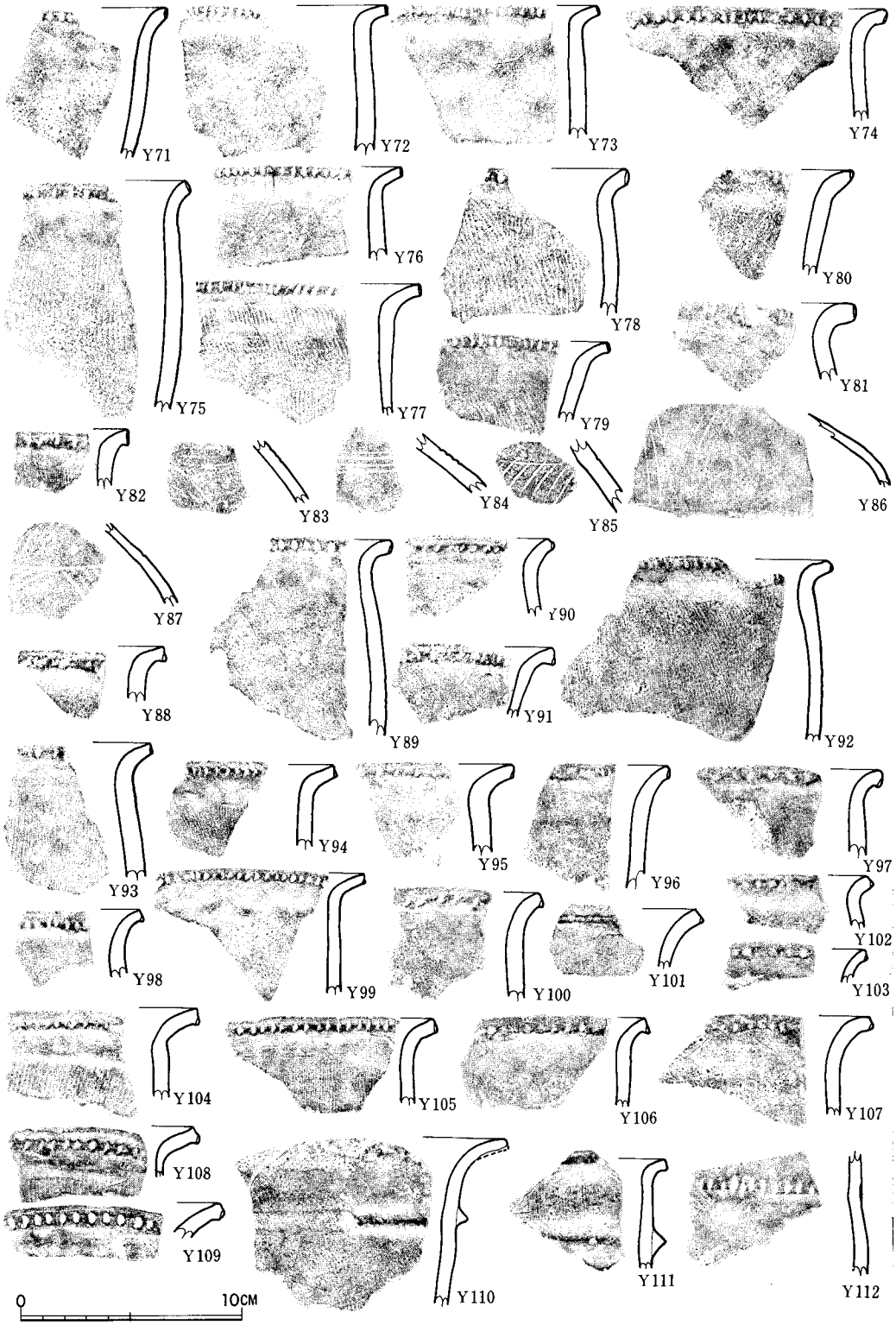


Fig. 3・43　C－14 a トレンチ弥生式土器実測図(2)

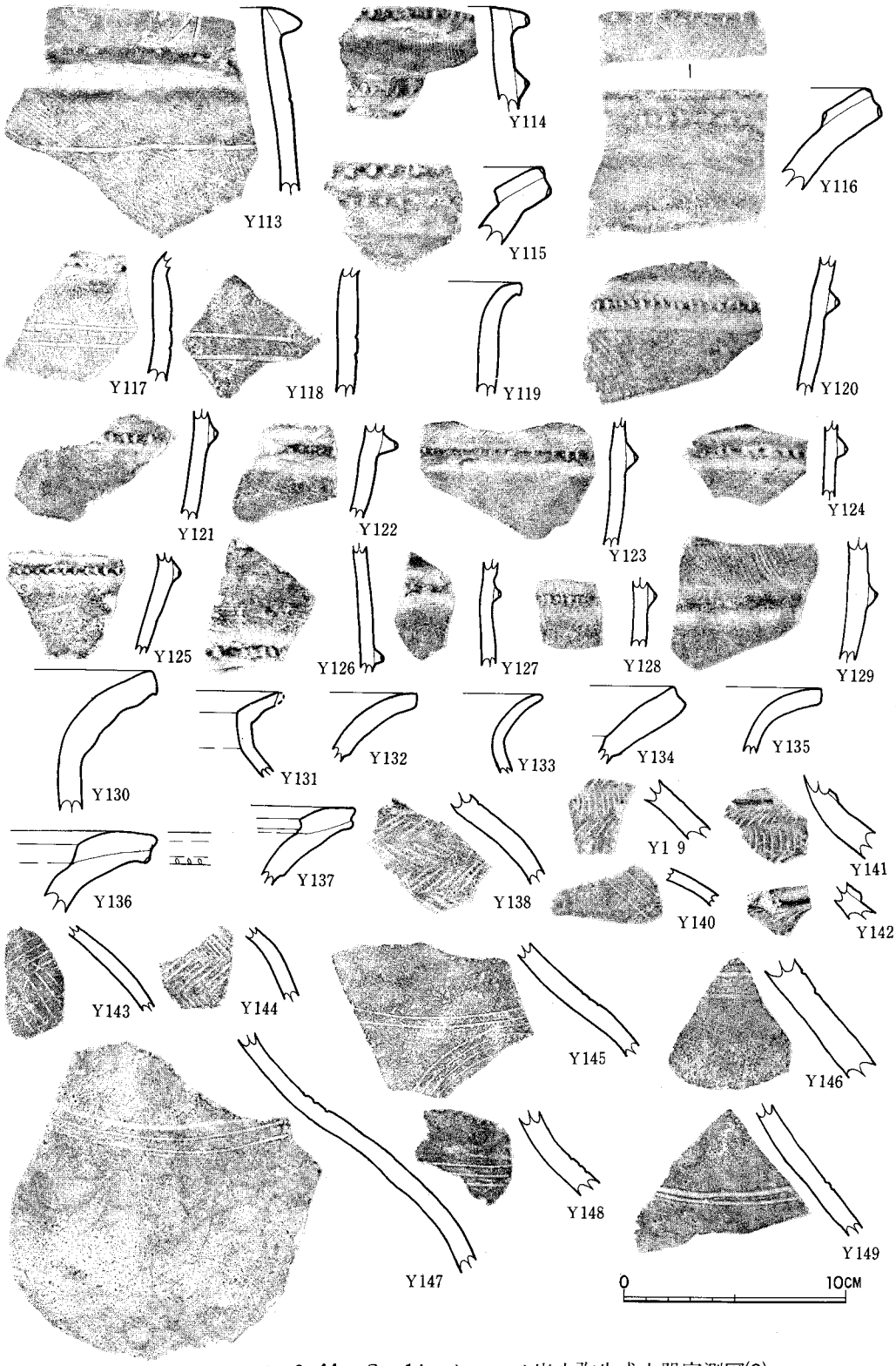


Fig. 3・44　C－14ａトレンチ出土弥生式土器実測図(3)

る。両者共底面に木葉圧痕が見られる。Y186には籾痕がある

弥生時代前期土器

甕形土器

Y71～82は口縁がわずかに外反するいわゆる如意形口縁をなし、丸い口唇いっぱいに篦状器具による整然とした刻目を持つ。口縁の外反が少し強くなって口唇が「コ」の字状にに近いもの（Y72・73・76・77）もあるが、やはり口唇の幅いっぱいに刻目が施されている。まれに櫛状器具によって刻目を施したもの（Y77）もある。胴部にはほとんど張りがなく、直線的な感じで円盤貼付け状の平底底部（Y207・208など）につながる。Y81は器壁が肥厚し、口縁形態も丸味をもちふくらんだ胴部へ続くようで、他の甕形口縁と異なるが、口唇全体に刻目を施す。これらの甕形土器には、外面に縦刷毛目による器面調整が見られ、極端に間隔の細い刷毛目（Y82)、条痕を思わせる粗刷毛（Y78）があるが、細めで整った刷毛のものが多い。内面はナデによるものがほとんどである。いずれも胎土に雲母を混えた砂粒を多く含み、焼成は良好、暗褐色、暗赤褐色など暗い褐色系統の色調を呈する。外面に煤が付着するものも少なくない。以上いずれも板付Ⅰ式に相当しよう。

Y112は胴部破片であるが、粘土接合部と思われる場所に篦による刻目を入れている。この類型は板付遺跡でもすでに出土しているし、春住遺跡〔筑紫野史学研究会1972〕などでもその出土が見られ、板付Ⅰ式に相当すると考えられる。胎土には多くの砂粒を混え焼成良好、黄褐色を呈する。

Y88～ 109は如意形口縁の口唇下端に小さく整然とした刻目をもつ土器である。器形・形態的には口唇全体に刻目を施したものと大差はない。口縁端がやや垂れ下った感じで、その部分に刻目を施したもの（Y88・91・93・97・98・100・104・106・108・109)が多い。外面は、口縁下にはなで、胴部には縦あるいは斜めの刷毛による器面調整がなされている。刷毛は粗いもの（Y104など）と細いもの（Y105など）を用いており、その比は明確でない。内面はほとんどがなでによる器面調整であるが、まれに口縁下に横刷毛を施するもの（Y97・104)もある。これらの土器は、雲母混りの砂粒を多く含んだ胎土で(Y92・105は微砂を少量混えただけである)、焼成は一般に良好とみられる(焼成が良くないのはY103のみ)。器面色調は暗褐色・茶褐色・赤褐色など褐色を基調とするものが多く、他に黄白色(Y98)、灰白色（Y103)などを呈するものがある。Y94は外面全体に煤が付着しており、もとの色調は明確でない。Y88・89・93・99も部分的に煤が付着する。いずれも板付Ⅱ式に比定できる。

Y119は直線的な胴部が外反して如意形口縁を作り出しているが、「コ」の字形に近い口唇は刻目を持たない。内・外面ともナデによる器面調整を行っている。微砂粒を少量混えた胎土で焼成は良好、黒味をおびた茶褐色を呈する。外面胴部には煤が付着している。Y168はほとんど張りがなく底部に収束するような胴部から、口縁が不明瞭な稜を作って外反するが、その外反度は大きくない。口唇は斜に向き、一条の沈線をめぐらす。内外面ともナデによる調整を施す。微砂粒をやや多く胎土に含み、焼成良好、色調は暗褐色である。外面の口縁下が煤け

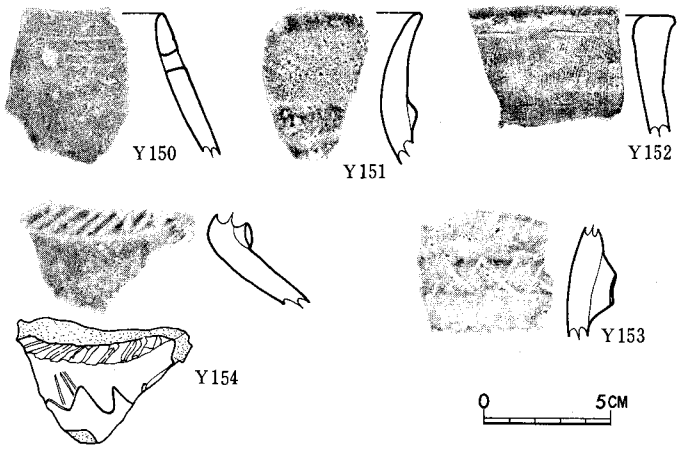


Fig. 3・45　C－14ａトレンチ弥生式土器実測図(4)

ている。Y119・168ともに板付II式に比定できよう。

Y117・118は胴部に二条の横沈線を有するもので、口縁は欠損するものの如意形と考えてよいだろう。Y117は胎土中に多くの砂粒を混え焼成良好、外面黄白色、内面橙色をなす。Y118は微砂粒を少量含んだ胎土で、焼成良好、外面赤褐色、内面灰色味をおびた赤褐色を呈する。Y117は縦刷毛、Y118は横刷毛によって外面調整している。やはり板付II式である。

Y110・111・167は如意形口縁をもち、胴部に一条の三角突帯をめぐらせたものである。ただし、Y167は口唇下端および突帯上に刻目を持つが、他はまったく刻目を持たない。Y110は外面縦刷毛、内面口縁下に横刷毛による器面調整を施し、微砂を多く混えた胎土で焼成良好、灰茶褐色をなす。Y111は外面縦刷毛、内面ナデ調整を施し、砂粒の多い胎土で焼成良好、暗茶褐色を呈する。Y167は外面突帯より上部には縦刷毛、下部には篦による縦の器面調整を施している。胎土には雲母を混えた多くの砂粒を含み焼成良好、外面は黒味おびた茶褐色、内面は黄褐色をなす。板付II式の亀ノ甲タイプとされる。

Y113・114・120～129の土器片は如意形口縁のかわりに、直立した口縁部と胴部に三角突帯を貼り付けた普通「亀ノ甲タイプ」と呼称される一群である。Y113は胴部突帯のかわりに一条の沈線をめぐらし、口縁突帯には刻目がない。外面一面に縦・横・斜に方向の不規則な短い刷毛調整が施されている。Y114は突帯上に篦状器具による整った刻目をもち、突帯間には細い縦刷毛を持つ。ともに砂粒を多く含んだ胎土で焼成良好、暗褐色を呈する。Y120～129はいずれも突帯を持った胴部の破片である。外面には細い縦刷毛を施すものが多いが、横刷毛のもの(Y126)もある。内面はすべてナデによる調整である。外面に煤を付着するもの(Y120・121)もある。いずれも胎土に多くの砂粒を含み、Y124を除いて焼成は良好、器面は黄褐色、暗褐色、灰褐色など褐色系統の色調である。

Y115・116・136・137・166は外反した口縁部上面にさらに粘土帯をめぐらし肥厚させたもので、普通甕棺として用いられる大形甕である。口唇と上端と下端に小さな刻目をもつもの（Y115・166)、それに加え突帯で口縁上面を肥厚させ内面端に刻目をもつもの（Y116)、口唇

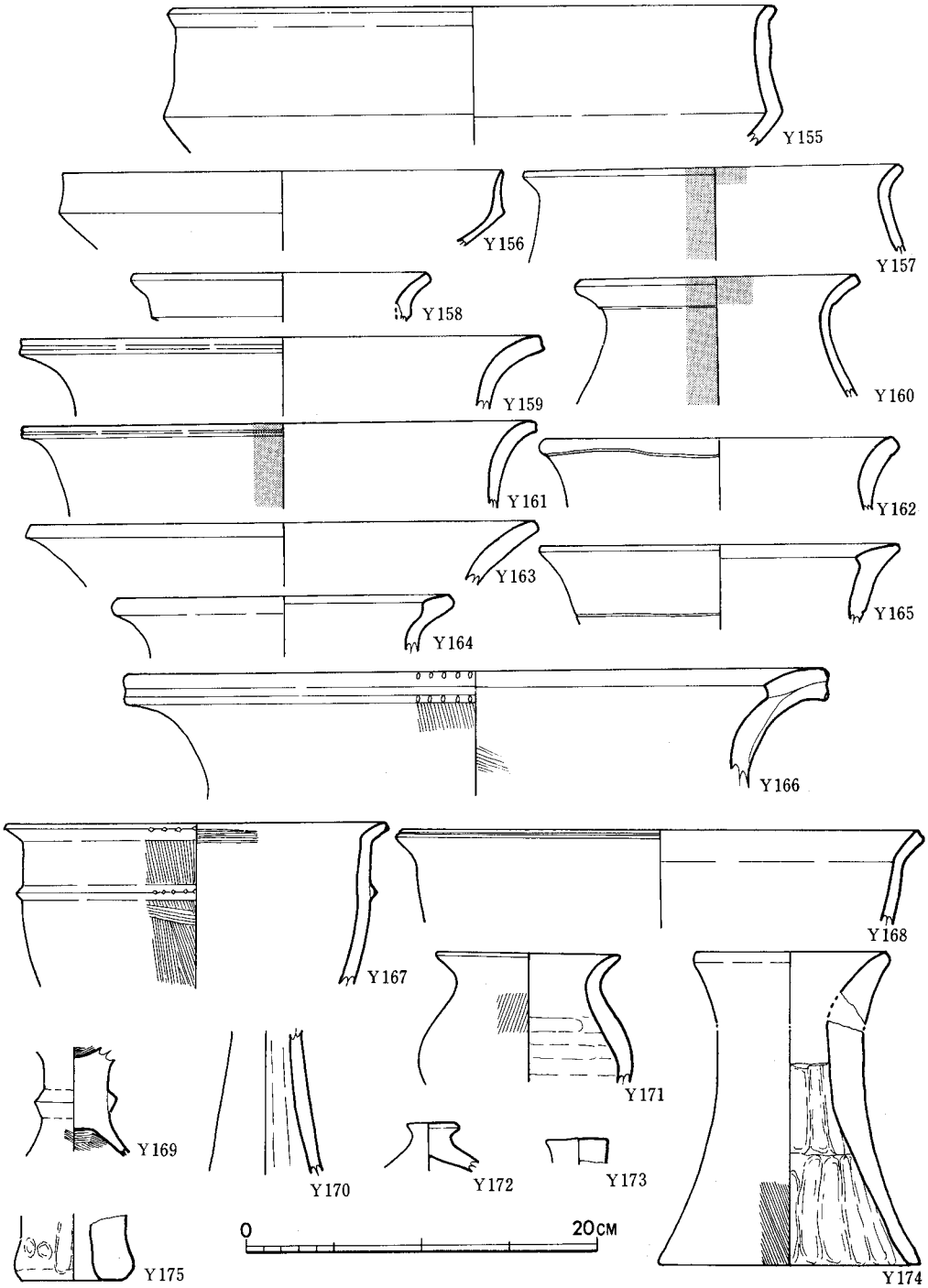


Fig. 3・46　C－14 a トレンチ出土弥生式土器実測図(5)

下端にのみ刻目をもつもの（Y136)、刻目がまったくないもの（Y137)がある。いずれも器壁が厚くY116が内外面にわずかに刷毛目の痕跡を残し、Y137が箆なでを施している以外は、明確な調整痕は見られない。胎土には多くの砂粒を混えており、Y115を除けば焼成良好、赤褐色（Y115)、黄褐色（Y116)、明灰褐色（Y136)、褐色（Y137)、暗黄褐色（Y166)を呈する。前期末の時期に相当するもので、板付II式の範疇に属するものである。

Y151はゆるやかに外反する口縁の反転部に三角突帯を貼り付けたものである。剝落が著しく器面調整は明確でない。胎土には砂粒を多く混え、焼成は不良、黄色をおびた灰色を呈する。Y152はやや内向する直線的な口縁をもち、口縁上面は平坦、口縁上部付近は器壁が肥厚し突帯を付けたような様態を示す。外面には細かい縦刷毛目が施されている。多量の微砂粒を胎土中に混え、焼成良好、暗褐色を呈する。Y151・152は他に類例をみないが、上にあげた諸性質から、前期の甕形土器と考えられる。

壺形土器

Y83～87は肩部破片で、Y83・87は複線八字形文、Y84は四条の平行横線文、Y85は有軸羽状文、Y86は重弧文を箆によって施している。Y84が胎土に多くの砂粒を混える他は、微砂粒を少量含むだけで焼成良好、黄色味をおびた褐色を呈する。文様からみて、板付I式に相当すると考えられる。

Y130～135・138～149・158～165は口縁、肩部などの破片で、いずれも前期後葉の時期に位置づけられるものと思われる。口縁形態にもバラエティがあり、頸部から丸く外に反転するもの（Y130・135・159・161～163)、外反した口縁部がやや肥厚し、段・沈線をもって頸部へ続くもの（Y132・134・158・160)、口縁内面に粘土を貼り付けたもの(Y164・165)、胴部から頸部が直立し、さらに明確な稜をもって口縁部が外反するもの（Y131)がある。胴部破片は形態的にはほとんど分類できないが、Y141・142のように肩部に突帯を有するものがある。文様には無軸羽状文、二条もしくは三条の沈線を有するもの（Y146～149）が多く(Y138・139・141～144)、複線八字文（Y140)、二本の沈線の下に重弧文を配するもの（Y145)もある。文様には箆によって施されている。これら壺形土器にはY130・147・159～163のような大形化したものも見られる。ほとんどの土器が内・外面ともなでによる器面調整を施しているが、箆による磨研を行なったもの（Y145・160）もある。特にY160は外面と内面口縁下に丹を塗り、器形そのものも端正である。Y161も外面に丹を施す。胎土には微砂粒を多量に混えるものがほとんどで、焼成は良好である（Y141は不良)。器面の色調は、灰褐、赤褐、暗褐、黒褐、暗黄褐色など褐色系統のものが主となっているが、灰褐色をなすものが多く、赤色を帯びたものも少なくない。他に黄白色、灰白色など白っぽい色のものも見られる。

Y150は直線的に内向する口縁部に三条の箆による沈線を施し、さらに両面から穿孔した無頸壺の破片である。多量の砂粒を胎土に混え、焼成良好、外面灰褐色、内面暗黄褐色を呈する。類例を見ないが、上記の特徴から前期に属すると考えられる。

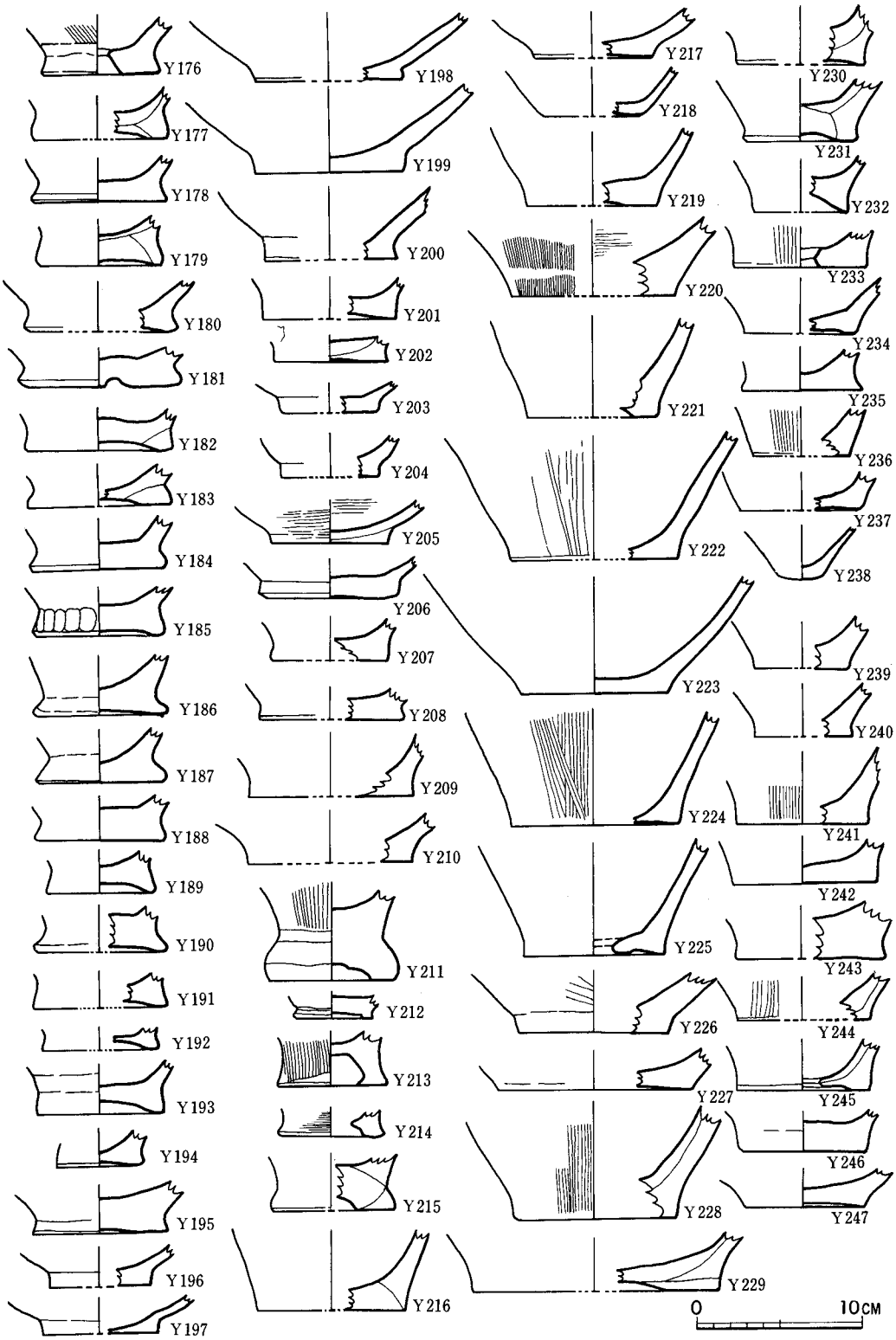


Fig. 3・47　C－14 a トレンチ弥生式土器実測図(6)

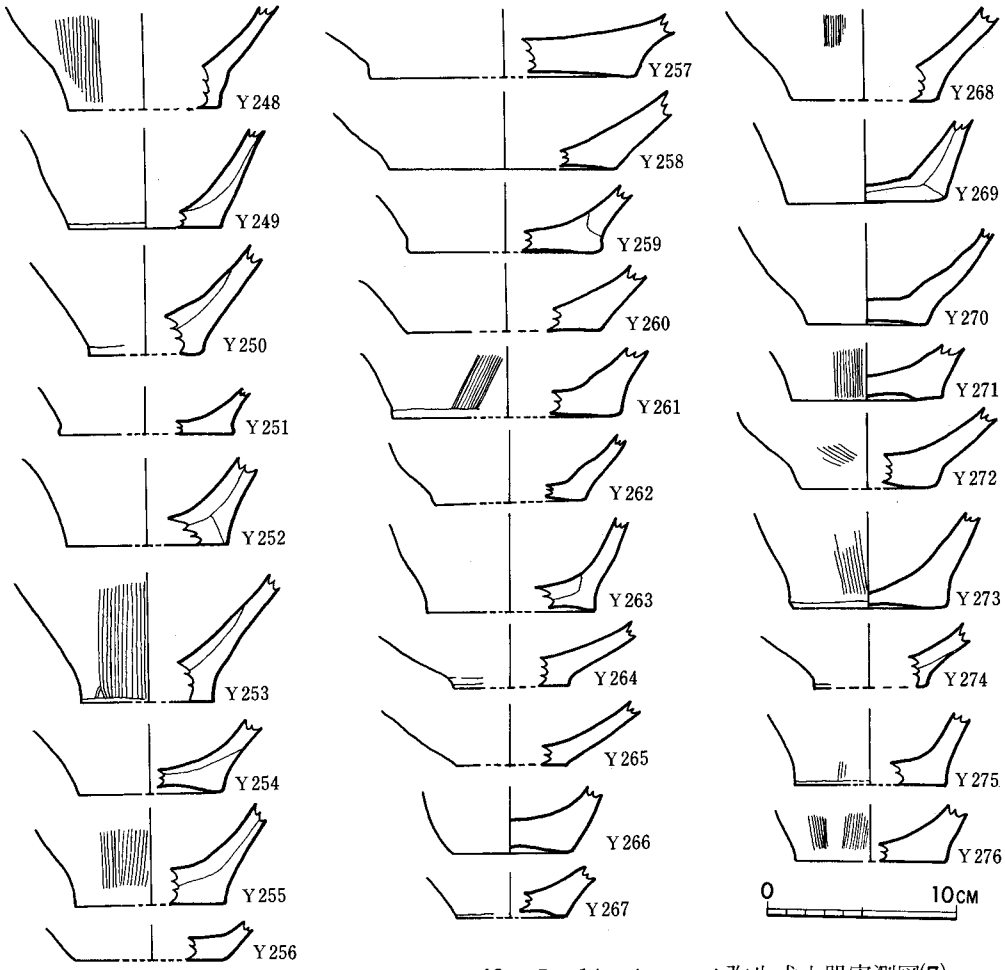


Fig.3・48　C－14ａトレンチ弥生式土器実測図(7)

蓋・底部

Y172・173は器蓋のつまみ部分である。ともに微砂粒を少量混えただけの良好な胎土を用い焼成良好、Y172は灰褐色、Y171は暗褐色を呈する。前期甕形土器の蓋と考えられる。

底部の識別は困難であるが、円盤貼付の平底をもつY196～208は板付Ⅰ式の底部の特徴をそなえている。Y70は底面に木葉痕を残し、壺形土器の底部と考えられる。Y220・233・238などは胴部がふくらむようで、板付Ⅱ式の甕形土器の特徴をもち、Y264・265などは、壺形土器の特徴をそなえている。Y211・213～215が深い上げ底で中期初頭の底部の特徴をそなえているのを除けば、この層から出土する土器が前期を主体としていることを考えあわせて、他の底部も前期土器のものがほとんどであるといってよいであろう。Y209は籾痕を有する。

中期以降の弥生式土器

中期以降の土器はわずかに見られるのみである。Y153は壺形土器の胴、もしくは肩部にあたる部分で、断面台形状の突帯を持ち、その上に「X」字状の刻目をもつ。砂粒を多く混えた胎土で灰褐色を呈する。G－24のY2035と同様の器形と考えられ、後期中葉のものであろう。

Y154は肩部に一条の突帯をめぐらした壺形土器の破片である。突帯上には篦による斜の刻目をもつ。突帯からややさがった胴部に篦による細く不規則な波状の文様を施している。φ１～２㎜の微砂粒を混えた胎土で焼成良好、暗黄褐色を呈する。後期の土器と考えられる。Y171は小形の壺で、張った胴から丸く口縁が反転している。外面口縁にはなで、胴部には横刷毛目、内面には横の篦削りで器面を調整している。多量の砂粒を混えた胎土で焼成良好、暗褐色を呈する。後期のものと思われるが、土師器の可能性もある。Y170は高坏の脚破片で、内面に篦削を施している。微砂を極く少量含んだ良質な胎土で焼成良好、暗黄褐色を表す。中期中葉で、宝台Ｉ式に相当すると考えられる。Y174は反転部が上部にある器台で、外面底部に刷毛目、内面下部に指によるなで調整を施すが、そのつくりは粗雑で、器壁は一定でなく、土器表面も凹凸が著しい。φ１～５㎜の砂粒を多く胎土に混え、焼成は不良、暗赤褐色を呈する。中期後葉～後期前葉の時期に比定できよう。Y175も器台であるが、小形で器壁が厚く、手捏ねの感がある。外面には指押えが見られる。後期前葉のものと考えられる。　（浜石）

Viii）Ｃ－13グリッド出土土器（Ｙ１～９，Fig.3・49）

各層から土器が出土しているが、ここでは灰色粘質土層と黒色粘質土層出土土器についてのべる。前者は層上面が7.5～7.6ｍで、層厚は25㎝ほどである。その下に灰色粘質砂層があり、ついで黒色粘質土層がある。その層上面標高は 7.2ｍ、層厚は70～80㎝で、八女粘土層上にのっている。　（後藤）

灰色粘質土層出土の土器（Ｙ１）　Ｙ１は口縁端にかぶさる様に刻目突帯がつけられており、内外ともに条痕がみられる甕で、夜臼式である。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、暗褐色。

黒色粘質土層出土の土器（Ｙ２～９）　Ｙ２は甕、Ｙ３～５は壺、Ｙ６～９は底部である。Ｙ２は外反する口縁部の端の縦一杯に刻目を施したもので板付Ｉ式であろう。Ｙ３・４は胴部破片で、板付II式のものであろうか。Ｙ５は外反する壺の口縁部で、横なで調整。板付Ｉ式であろう。Ｙ６は壺、Ｙ７～９は甕の底部である。Ｙ７の外面は刷毛目調整。これらの土器はいずれも、胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈するが、Ｙ６は黒褐色。　（沢）

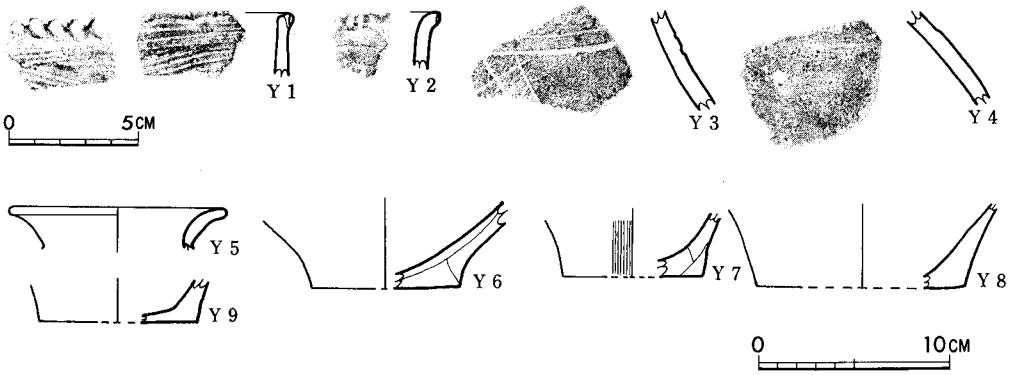


Fig.3・49　Ｃ－13グリッド出土弥生式土器実測図

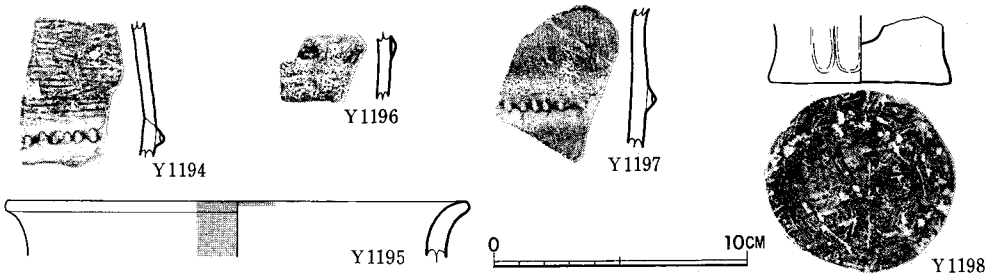


Fig. 3・50　E－14グリッド出土弥生式土器実測図

iX）E－14グリッド出土土器（Y1194～1198）

八女粘土層上の黒色粘質土層（層上面標高7.3～7.1cm）出土のものについてのべる。この層では下位には土器は少なく上位に多い。

Y1194・1196・1197は甕である。いずれも刻目突帯をもつ胴部破片であるが、Y1194は外面に貝殻条痕をもち煤の付着が認められる。Y1197は口縁先端が欠損するが、外反するいわゆる如意形口縁をもつと考えられる。横なで調整で、外面刷毛目調整。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、暗褐色を呈する。Y1194・1196は夜臼式、Y1197は板付II式であろう。Y1195は外反する口縁をもつ壺で丹塗りの土器である。横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。赤褐色を呈する。板付II式であろう。Y1198は底部で外面に指の調整痕がある。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。（沢）

X）H－16グリッド出土土器（Y1192・1193、Fig. 3・51）

このグリッドは壁崩壊のため土層図を作製できなかったが、以下にのべる土器の出土した灰色粘質土層はH－14グリッドの第5層、黒褐色砂層は第7層に相当する（Fig. 3・2）。

Y1192は灰色粘質土層、Y1193は青灰色砂層の出土である。Y1192は高坏の脚で、胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。黄褐色を呈する。Y1193は甕の底部で、胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好、暗褐色を呈する。これらはいずれも時期は良くわからないが、前期末のものであろうか。（沢）

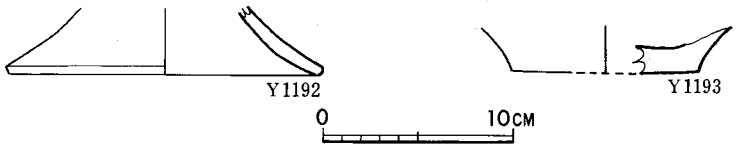


Fig. 3・51　H－16グリッド出土弥生式土器実測図

b　石器・土製品（Fig. 3・52～3・60、PL.XXVII～XXXI、Tab. 3・2、3・3）

第1区沖積層に設けたトレンチ出土の石器と土製品について種類別にのべよう。

石庖丁（Fig. 3・52、PL.XXIX）

C－14 a トレンチ：S 6319は硬質砂岩製の半月形石庖丁で、直線的な背部を持ち、刃は片刃で、紐孔は両側から穿孔されたとみられる。黒色粘質土層下部出土。S 6696は硬質砂岩製の半月形石庖丁で、背部はやや外彎し、刃部は片刃で、紐孔は両側から穿孔されているが、ややかたよつている。黒色粘質土層（第7層）出土。

D－16トレンチ：S 6601は背部が直線で、刃部は外彎する。両刃。体面・刃部とし研磨されているところから、穿孔中に破損したとみられる未製品である。S 6608は頁岩質の石材を用い、片縁に二次加工が加えられ、刃部がつくりだされている未製品。削器か？　二点とも黒色粘質土層出土。

D－17 a トレンチ：S 6713は砂岩製で、大まかな剝離加工敲打によって背部・刃部をつくり出し、石庖丁の原形をつくる。敲打による両面穿孔が試みられているが貫通していないので、穿孔中に破損したと考えられる未製品である。黒色粘質土層出土。

D－17 b トレンチ：S 6734は粘板岩製の杏仁形石庖丁未製品で、刃は両刃で外彎し、体面・刃部は研磨されているが、紐孔の穿孔はなく、背部は未研磨である。帯淡青黒灰色粘質土層（第19層）出土。

E－17 グリッド：S 6015は頁岩製で、片刃の刃部は研磨されているが、直線の背部や体面は未研磨である。灰黒色粘質土層出土。S 6009は砂岩製で、直線の背部をもっているが、破片のため形状は分らない。黒色粘質土層出土。S 6036は頁岩製半月形石庖丁で、刃は片刃で外彎し、紐孔は両側から穿孔されているが片方にかたよっている。出土層は不明。

石　鎌（Fig. 3・52、PL.XXIX）

2点ともE－17グリッド出土。S 6006は砂岩製で、破片のため形状はわからない。灰黒色粘質土層出土。S 6003は背部が若干外彎し、刃部は直線で両側から研磨され、体面から背部にかけても入念に研磨された先端部破片である。黒色粘質土層最下部出土で、弥生時代前期とみてよい。

石　斧（Fig. 3・52～3・53、PL.XXIX～XXXI）

C－14 a トレンチ：S 6302・6304・6485は今山産出玄武岩製の太型蛤刃石斧の頭部で、敲打整形後研磨している。S 6310・6314は、頁岩質砂岩製の蛤刃石斧の刃部であり、S 6529は胴部の側縁片である。S 6317は頁岩質砂岩製で、敲打によつて整形されている胴部片である。いずれも黒色粘質土層（第7層）から出土し、S 6304以外は最下部出土で、弥生時代前期のものとみられる。

C－14 b トレンチ：S 6128は　粘板岩質の石材をもちい剝離加工で整形後、両側面は研磨しいる。刃部形態はわからない。暗褐灰色粘質土層出土。S 6101・6113・6116・6118・6320は硬

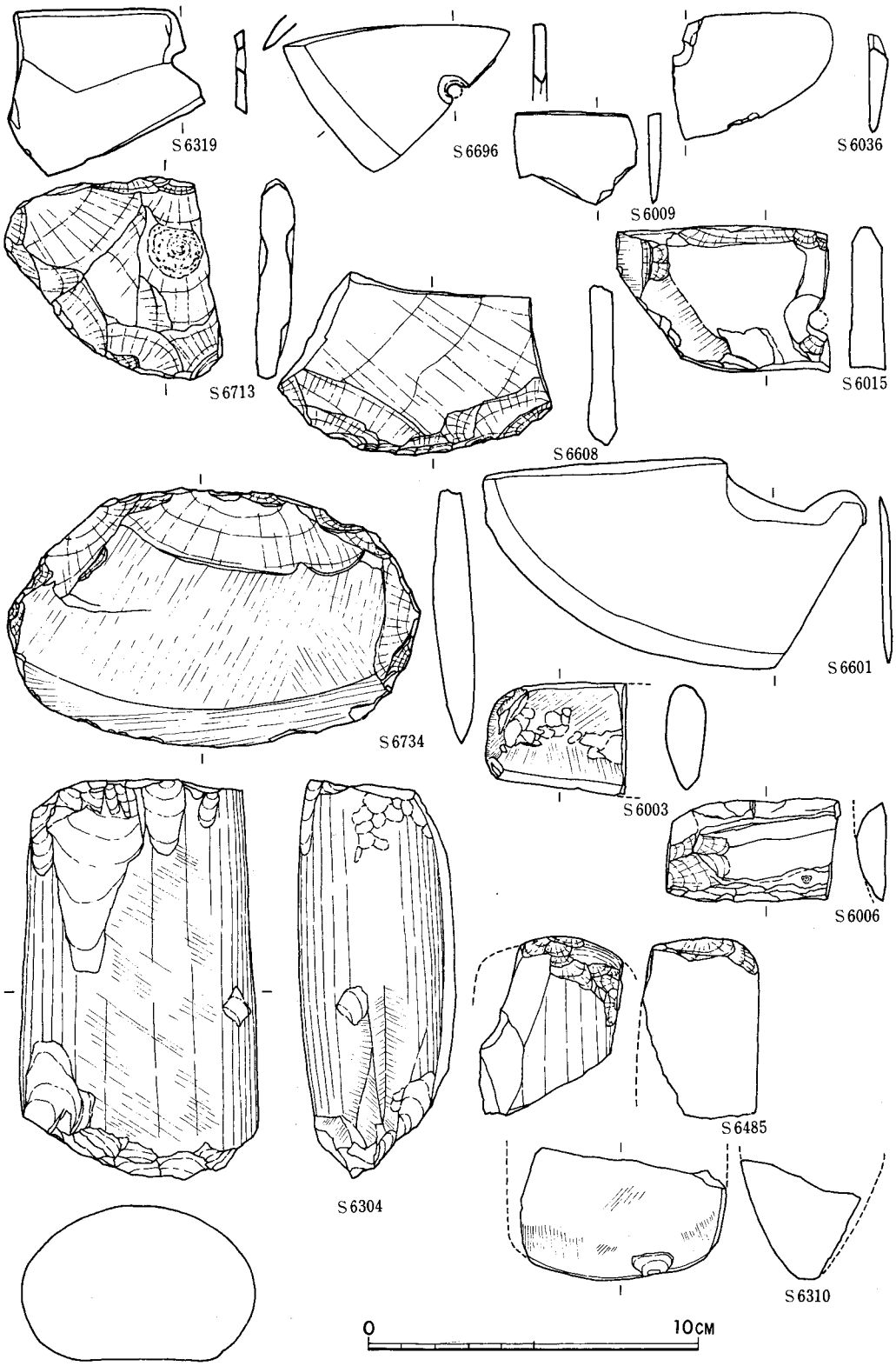


Fig. 3・52　第1区沖積層出土石器実測図 (1)

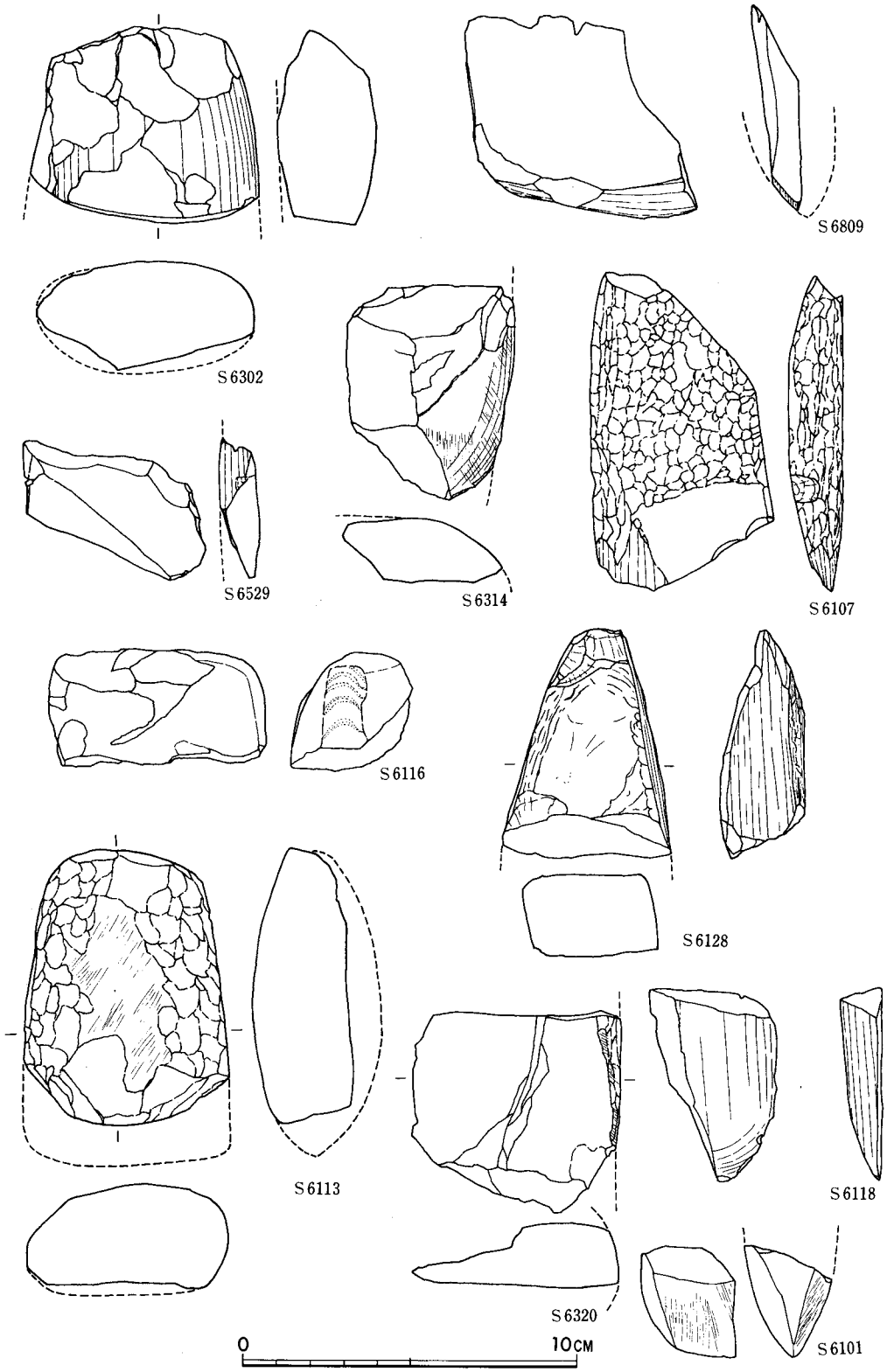


Fig. 3・53　第1区沖積層出土石器実測図 (2)

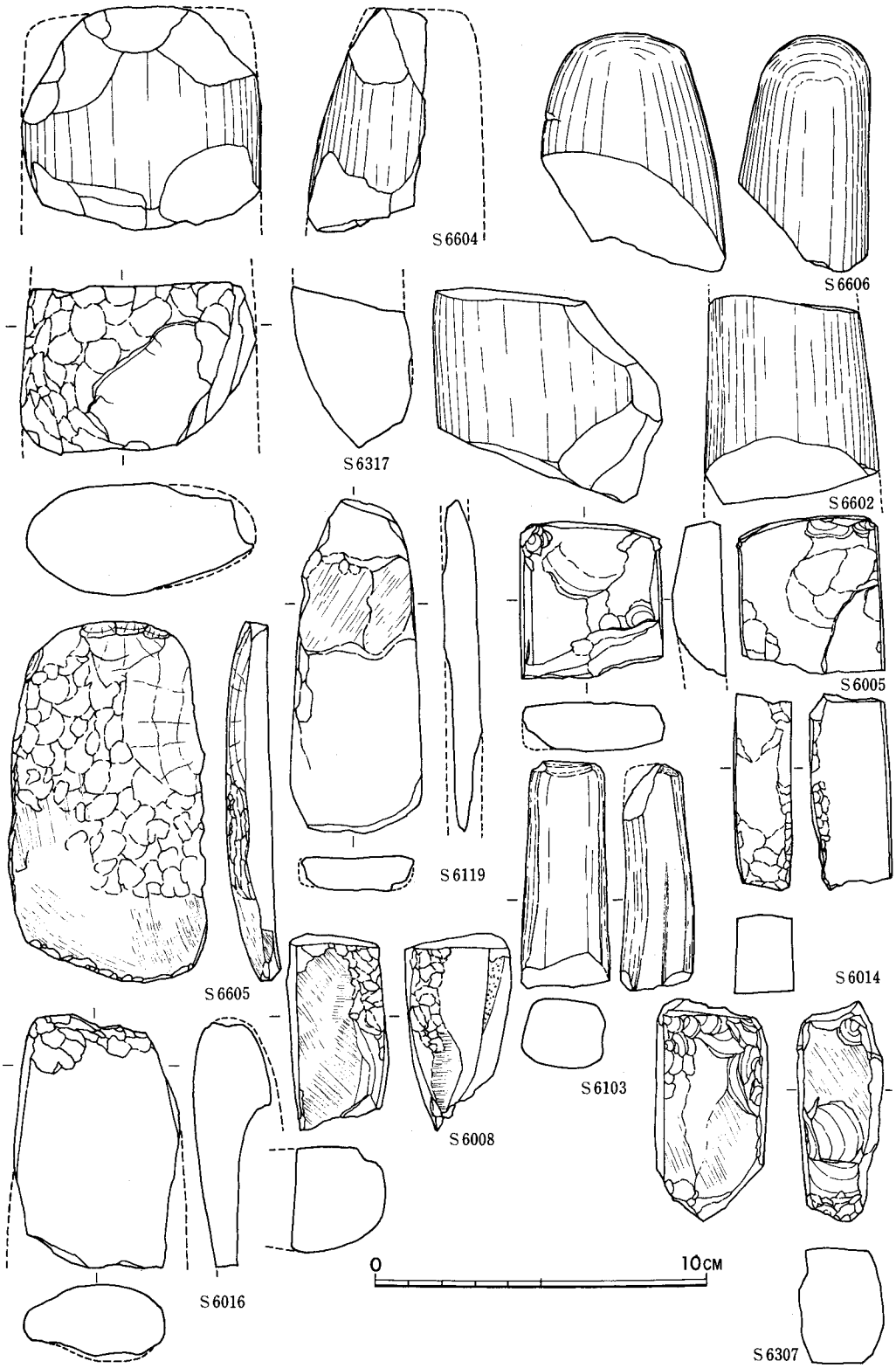


Fig. 3 •54　第1区沖積層出土石器実測図 (3)

質砂岩製の蛤刃石斧である。S6101・6118は刃部片で、入念に研磨されている。S6113は敲打整形後、胴部は研磨しているが、刃部・裏面は欠損している。S6116は頭部片で、敲打整形後研磨されている。S6320は、胴部側縁片で研磨している。以上5点は黒色粘質土層出土。

D－16トレンチ：S6605は砂岩製の蛤刃石斧で、敲打整形後刃部のみ研磨しているが、裏面は剝落している。黒色粘質土層出土。S6602・6604は今山産出玄武岩製の太型蛤刃石斧で、研磨されている。S6602はS6805と同一個体であり、S6604は頭部である。S6606は閃緑岩製？の頭部片で器面は入念に研磨されている。この3点は黒色粘質土層出土。

E－17グリッド：S6016は玄武岩製の石斧頭部で、器面は研磨されているが、頭部は未研磨である。今山産出玄武岩とは異なる。黒色粘質土層出土。

方柱状片刃石斧（Fig. 3・54、PL.XXXI）

C－14bトレンチ：S6307は油質頁岩製で、刃部は欠損している。黒色粘質土層出土。S6103は砂岩製で、器面は全て研磨されているが、刃部は欠損している。暗灰褐色粘質土層出土。

E－17グリッド：S6014は粘板岩製で、敲打整形後研磨しているが、刃部は欠損している。灰黒色粘質土層出土。S6008は頁岩製で、敲打整形後、裏面・側面は研磨されており、刃部は欠損している。方柱状片刃石斧と考えられる。黒色粘質土層出土。

扁平片刃石斧（Fig. 3・54、PL.XXX）

E－17グリッド：S6005は変成岩製で、敲打整形後、頭部・側縁は特に入念に研磨されている。黒色粘質土層出土。

扁平磨製石斧（Fig. 3・54、PL.XXX）

C－14bグリッド：S6119は頁岩製で、研磨されているが、器面は剝落しており、刃部も欠損しているため原形はわからない。黒色粘質土層出土。

磨製石鏃（Fig. 3・55、PL.XXXI）

C－14aトレンチ：S6767は粘板岩製の有茎磨製石鏃で、先端部は欠損している。黒色粘質土層最下部で出土し、前期とみてよい。

E－17グリッド：S6073は粘板岩製の有茎磨製石鏃で、中央に鎬が入り、断面は菱形で先端部には刃こぼれがみられる。黒色粘質土層出土。35g。S6767とS6037は茎の短い点は同じだが、前者は身部が細長く、後者は幅広である。

打製石鏃（Fig. 3・55、PL. XXVIII）

C－14aトレンチ：S6554はサヌカイト製で、表裏とも入念に調整加工が加えられているが、先端部と基部は欠損している。耕土下層出土。S6433は黒曜石製で、ファースト剝片を用い、表皮に剝離加工を加え、裏面も二次加工によって打瘤を削除し、二等辺三角形に整形している

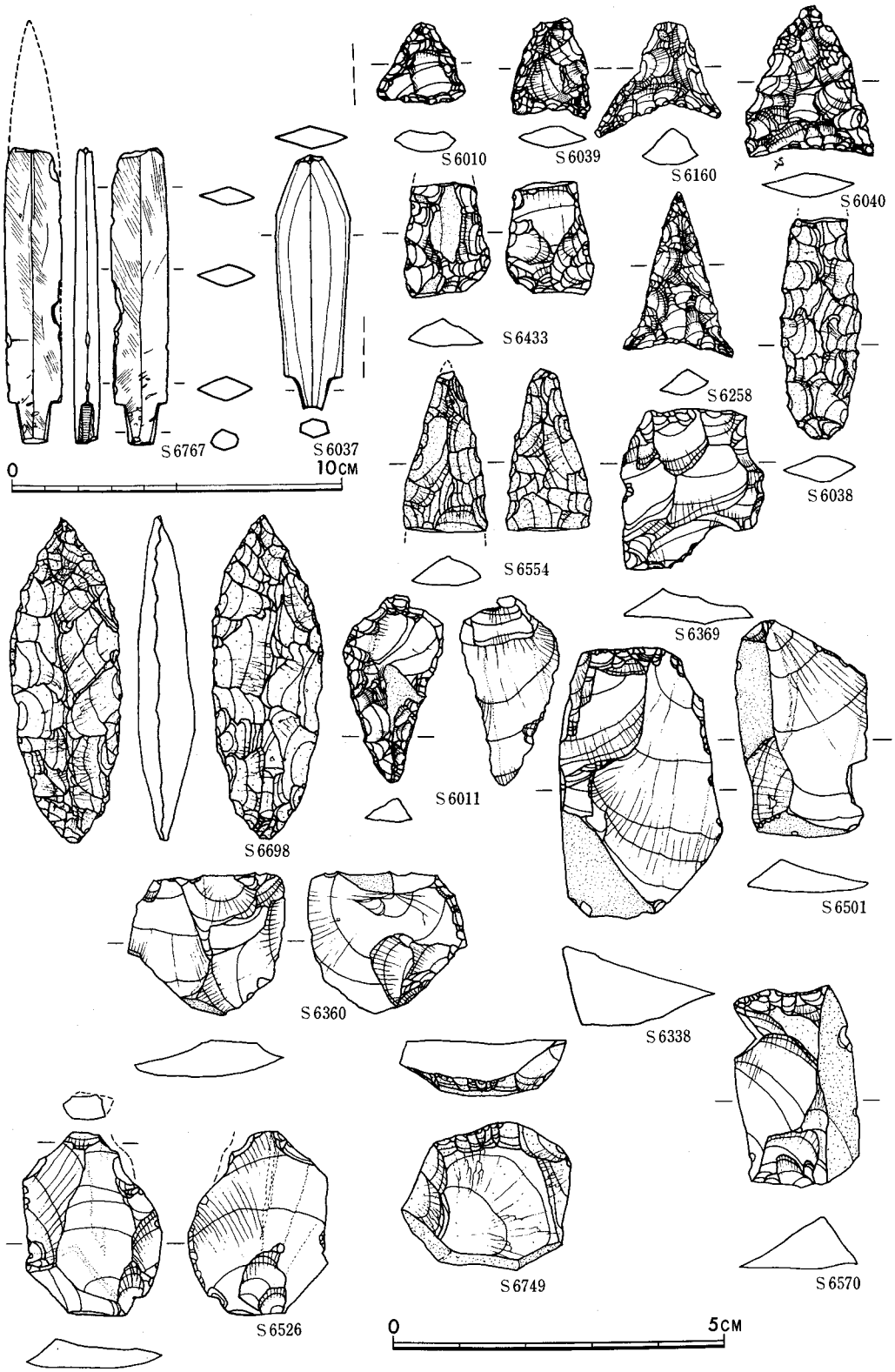


Fig. 3・55　第1区沖積層出土石器実測図 (4)

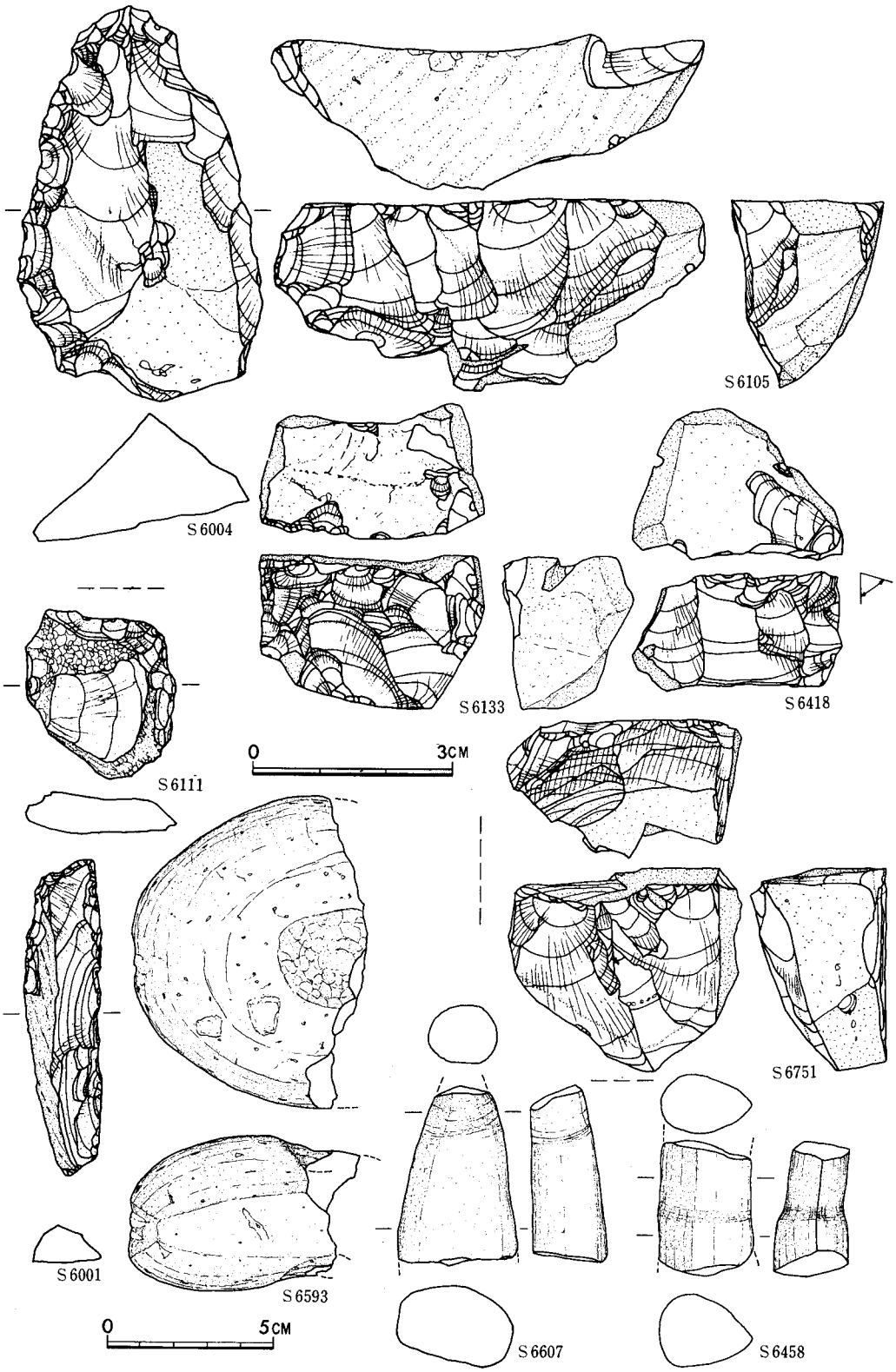


Fig. 3・56　第1区沖積層出土石器実測図 (5)

が、先端部は欠損している。黒色粘質土層下部出土。

C－14bトレンチ：S6160は黒曜石製で、基部には抉りが入る。中央の稜線は高く、先端部は未加工で、左脚が長いところから、組合せ具として使用されたと考えられる。黒色粘質土層出土。S6258は黒曜石製石鏃で、表裏とも入念に調整加工を加え、基部はやや内彎している。出土層不明。

E－17グリッド：S6039は黒曜石製局部磨製石鏃で、粗い二次加工で整形し、稜部に研磨を加え、基部はやや内彎しているが、先端部は欠損している。表面採集。S6040は黒曜石製で、表裏とも入念に調整加工が加えられているが、先端部は欠損している。灰黒色粘質土層（第13層）出土。S6010は黒曜石製の三角鏃で、表裏とも粗い二次加工で整形している。黒色粘質土層出土。

石　錐（Fig. 3・55）

E－17グリッド：S6011は黒曜石製で、剥片の先端部に二次加工を加えて錐部としている。石鏃未製品の転用か。灰黒色粘質土層（第13層）出土。

石　槍（Fig. 3・55、PL. XXVII）

C－14aトレンチ：S6698はサヌカイト製で、入念に調整加工を加え木葉形に整形し、基部と先端部は特に意識的につくりだしている。一見縄文時代早期に盛んに作られた石槍に類以しており、押型文土器共伴の可能性も考えられるが、出土地点から一応弥生時代の産物としておく。第7層出土。

剥片石器（Fig. 3・55、PL. XXVIII）

剥片に刃こぼれ、使用痕のあるものを剥片石器として扱う。

C－14aトレンチ：S6369は黒曜石製剥片の打面を除く縁辺に使用痕がみられる。黒灰色粘質土層出土。S6360は黒曜石製不定形剥片の裏面の一部に二次加工を加え、他の辺には使用痕がみられる。S6338は黒曜石製の縦長剥片の縁辺に使用痕がみられる。以上2点は黒色粘質土層上部出土。S6501は黒曜石製の不定形縦長剥片の縁辺に使用痕がみられる。黒色粘質土層下部出土。

つまみ形石器（Fig. 3・55、PL. XXVIII）

C－14bトレンチ：S6526は黒曜石製の剥片石器であるが、通称「つまみ形石器」と呼ばれているので、ここでも器種名としてあげた。縦長剥片の基部で、裏面には打瘤が残り、裏面から抉りを入れてつまみ形に整形しており、縁辺には使用痕がみられる。この石器は北部九州の縄文時代後期の遺跡で多量に出土するが、これは黒色粘質土層最下部で出土し、弥生時代前期のものである。

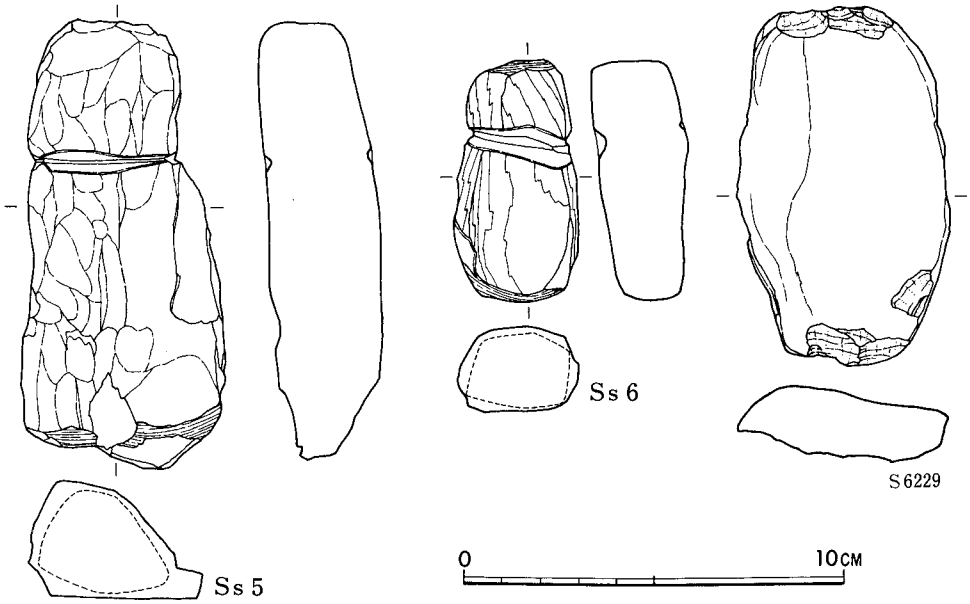


Fig. 3・57　第1区沖積層出土石製品実測図

削　器（サイド・スクレイパー）（Fig. 3・56、PL. XXXI）

E－14グリッド：S6001は玄武岩製の縦長剥片の縁辺に二次加工を加え鋭いエッジをつくつている。出土層不明。

E－17グリッド：S6004は黒曜石製の幅広の縦長剥片を素材とし、片方の縁辺に二次加工を加えエッジとしている。黒色粘質土層出土。

掻　器（エンド・スクレイパー）（Fig. 3・55、6・56）

C－14aトレンチ：S6570は黒曜石製縦長剥片の先端部に二次加工を加えエッジとしている。黒色粘質土層（第7層）下部出土。

C－14bトレンチ：S6111は玄武岩製剥片を素材として、周辺に二次加工を加え鋭いエッジをつくっている。表面には一部自然面を残している。暗褐灰色粘質土層（第5層）出土。

D－17bトレンチ：S6749はサヌサイト製の厚い小剥片を素材として、縁辺に刃潰し状の二次加工を加えエッジとしている。帯淡青黒灰色粘質土層（第19層）出土。

石　核（コア）（Fig. 3・56）

C－14aトレンチ：S6418は黒曜石の小角礫を素材とした石核で、剥片剥離面は一面であり、最終剥出は左端で、1.5cm内外の寸づまり剥出している。黒色粘質土層下部出土。

C－14bトレンチ：S6105は黒曜石の角礫を素材とした石核で、長さ2.5cm内外の剥片を剥出している。第2号ピット出土。古墳時代の撹乱でピット内に落ち込んだのであろう。S6133は黒曜石の角礫を素材とした石核で、剥片剥離面は一面で、打面は上下にある。石鏃製作剥片のた

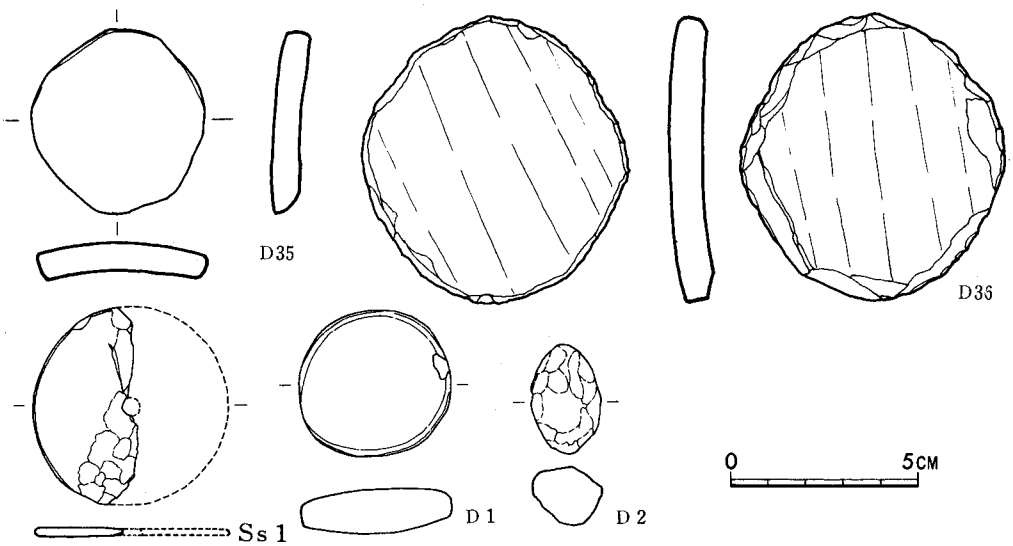


Fig. 3・58　第1区沖積層出土石製品・土製品実測図

めの石核と考えられる。暗褐灰色粘質土層（第5層）出土。

D－17 b トレンチ：S 6751は黒曜石の角礫を素材とした石核で、2.8cm内外の剝片を剝出している。黒色粘土層（第17層）出土。

凹　石（Fig. 3・56）

C－14 a トレンチ：S 6593は花崗岩の円礫を用い研磨している。凹部は中央部の表裏に敲打によって1cm内外の深さでつくられている。また周縁には打痕がみられる。黒色粘質土層出土。

石　刀（Fig. 3・56、PL. XXIX）

C－14 b トレンチ：S 6458は花崗岩製で、入念に研磨され、握頭をつくりだす。背部は直線で、刃は鈍くやや内彎している。しかし、小破片のため石刀とは断定できない。黒色粘質土層下部出土。

穿孔具（Fig. 3・56、PL. XXIX）

D－16トレンチ：S 6607は砂岩製で、棒状に研磨し、先端部は回転磨痕がみられるが、先端部が欠損しており用途は断定できない。黒色粘質土層出土。

石　錘（Fig. 3・57、PL. XXXI）

C－14 b トレンチ：S 6229は安山岩質の長楕円形礫を素材として、長軸両端を打欠いているが、糸懸け痕は無い。重さは 155 g。暗褐灰色粘質土層出土。

D－17 b トレンチ：Ss 5は滑石を素材として敲打によって直方体に整形し、上部に糸懸け痕がめぐり、下端は研磨している。重さは 280 g。なお裏面には人面状の切り込みがみられ岩偶の可能性もある。Ss 6もSs 5同様に整形しており、上下端が研磨されている。重さは 100 g。

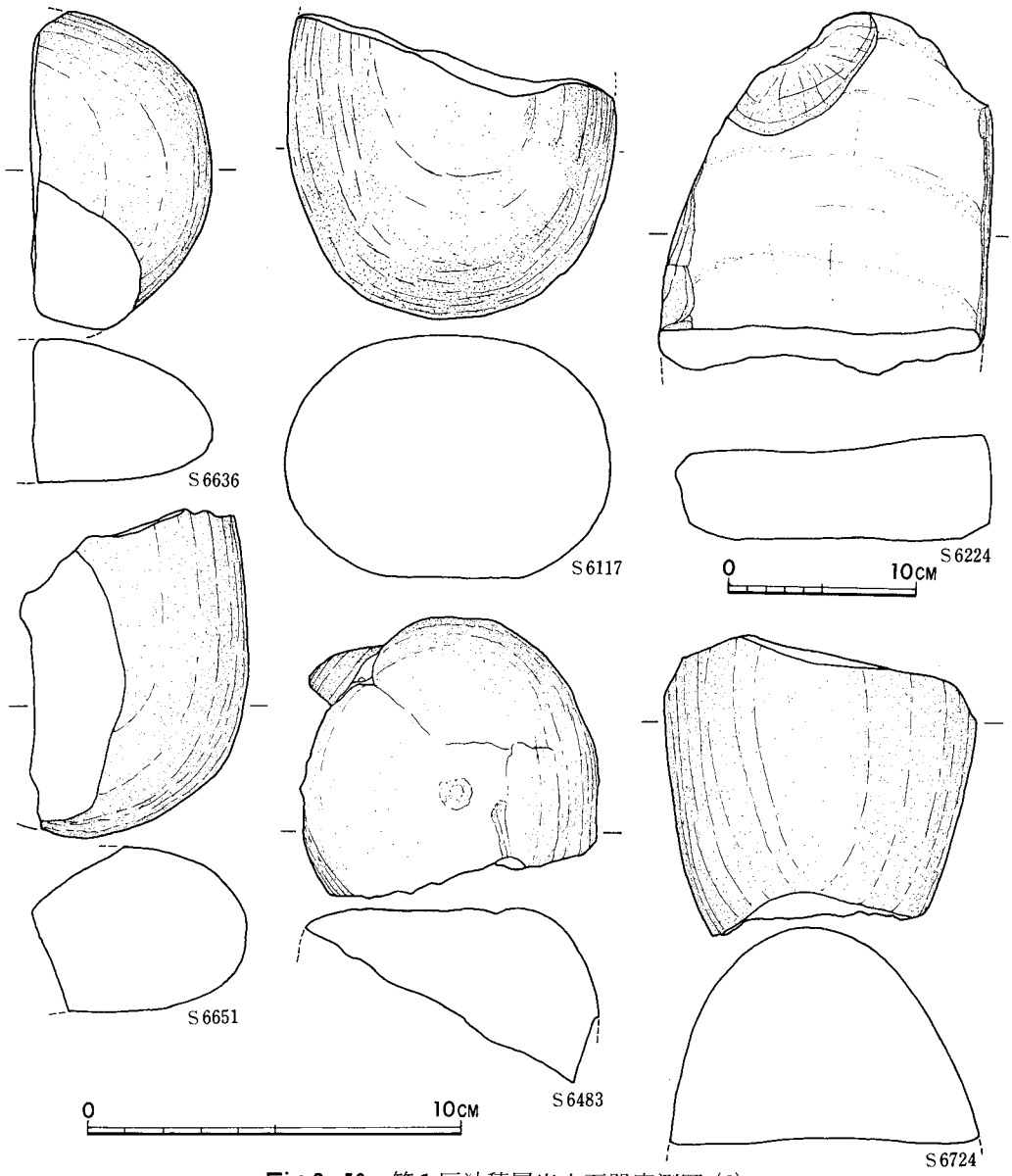


Fig.3・59　第1区沖積層出土石器実測図 (6)

2点とも帯淡青黒灰色粘土層（第19層）出土で弥生時代前期のもの。

紡錘車（Fig.3・58、PL.XXIX）

E－17トレンチ：Ss1は頁岩製で、周縁は入念に研磨されているが、表裏とも剝落し、半分欠損しているので穿孔の状態はわからない。黒色粘質土層（第16層）出土。

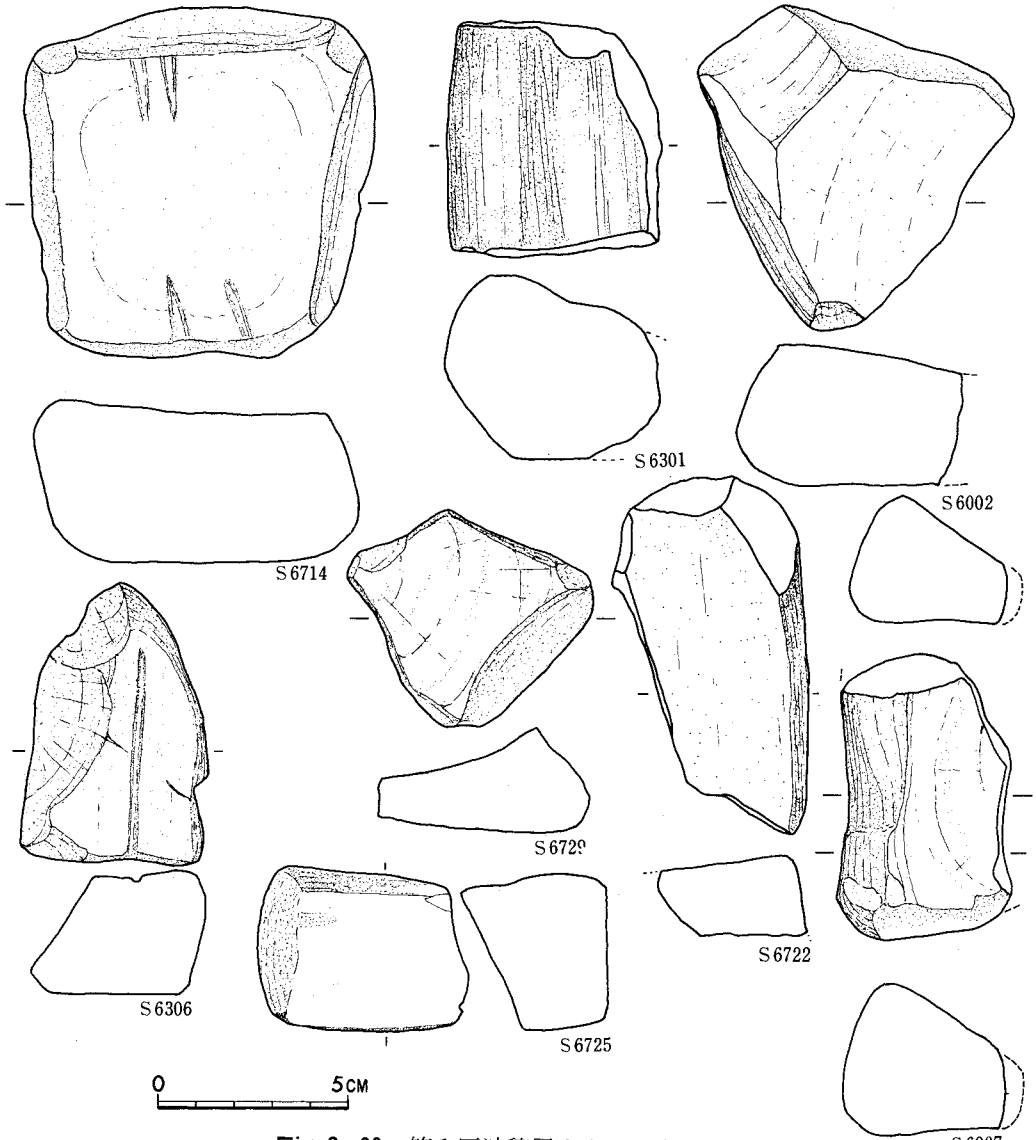


Fig. 3・60　第1区沖積層出土石器実測図 (7)

土製円盤 (Fig. 3・58、PL. XXIX)

F－17グリッド：D 1は手づくねによって扁平な円形に整形し、焼成は良好で黒灰色を呈している。青色粘質土層出土。

D－17 b トレンチ：D34は壺の胴部破片の縁辺を打ち欠いて、円盤状にしたものである。胎土に砂を含み、焼成は良好。褐色を呈する。黒灰色粘土層出土。

C－14 b トレンチ：D35(Fig 3・38) は壺の肩部破片の縁辺を打ち欠いて円盤状に整形したものである。原形の壺は肩部に段がつき、外面丹塗りである。内外面とも所々に刷毛目調整が施され、内面には指の押圧調整痕が残る。胎土に砂を含み、焼成良好。赤褐色、内面は褐色を

呈する。板付II式のものであろうか。

C－14aトレンチ：D36は土器片の周囲を打ち欠いて円盤形に整形したものである。表面は磨研された壺形土器片の利用とみられる。胎土は良好で、焼成もよい。

投　弾（Fig. 3・58、PL. XXIX）

C－14aトレンチ：D2は土製で紡錘形に整形しており、焼成は普通で黄褐色を呈しているが磨滅している。黒色粘質土層下部出土。

石　皿（Fig. 3・59）

C－14bトレンチ：S6224は砂岩製で、側面を打ち欠き、研磨によって長方形に整形し中央部が窪んでいるが、半分は欠損している。第2号ピット出土。古墳時代の撹乱による落ち込みか。

磨　石（Fig. 3・59）

C－14aトレンチ：S6483は砂岩の転礫で、全面に磨痕がある。礫はもろく、煤が付着しており火を受けたと思われる。黒色粘質土層下部出土。

C－14bトレンチ：S6117は花崗岩の楕円形礫の全面に磨痕がみられる。黒色粘質土層出土。

D－16トレンチ：S6636は花崗岩の円礫で、全面に磨痕がみられる。重さは約440g。黒色粘質土層出土。

D－17bトレンチ：S6724は花崗岩製磨石の約1/5で、研磨したように磨痕がみられる。黒色粘質土層出土。

H－16グリッド：S6651は安山岩質の円礫に磨痕がみられる。青灰色砂質土層出土。

砥　石（Fig. 3・60）

C－14aトレンチ：S6301は砂岩で、表面の中央に砥面があり、他の面は研磨されているが、大半は欠損している。出土層不明。S6306は砂岩製で、砥面は表面のみであり、中央部に幅3㎜・深さ2㎜の溝状の磨痕がある。黒灰色粘質土層出土。

D－17aトレンチ：S6714は砂岩製で、砥面は一面のみで、相対する方向から各2本の溝状の磨痕がある。黒色粘質土層出土。

D－17bトレンチ：S6725は砂岩製で、砥面は二面あり、他の面には磨擦痕がみられる。帯淡青黒灰色粘質土層出土。S6722は砂岩製で、砥面は正面と側面にみられるが欠損している。S6729は砂岩製で、砥面は表面が主で窪んでいる。この2点は黒色粘質土層出土。

E－14グリッド：S6002は砂岩製で、表面に砥面があり窪んでいる。出土層不明。

E－17グリッド：S6007は砂岩製で、砥面は表裏と二面あり、他の面は研磨されている。なお、指頭状のつくり出しがあり石製模造品の可能性もある。黒色粘質土層出土。　（山口）

(2)　古墳時代以後の遺物

沖積層の各トレンチ・グリッドの上層からは、土師器・須恵器・陶磁器片が出土している。ここではC－14a・b両トレンチの古墳時代以後のピットに関係あるとみられる土師器・須恵器についてのべる。他のトレンチ・グリッド出土のそれらは小片で、以下にはのべない。陶磁器については第3節4の(3)でのべる。

C－14a・b両トレンチの黒色粘質土層（第7層）と暗褐灰色粘土（第5層）からは多くの土師器片が出土したが、これらはピットが掘られた際の攪乱で入り込んだもの、あるいはピット内に入っていたものが、ピット内埋土と第7層とが区別しえなかったために、第7層包含とされたものであろう。これら土師器は第1号・2号ピット付近でとくに多く出土した。また須恵器も若干出土した。

i）C－14bトレンチ黒色粘質土層（第7層）出土の土師器（H144～160、Fig.3・61）

甕（H146～152）　H146は外反する口縁と球形に近い胴部をもつ。口縁部は若干内彎し、口縁外端はわずかに膨らむ。胴上部には一本の明瞭な波状沈線が巡らされる。胴部は横・縦に規則的に刷毛目調整が行なわれ、特に胴上半部から最大径部までの四本単位の縦の刷毛目は暗文風に描かれる。口縁部は内外面とも指の横なで調整。胴部内面は上から横・斜め上へ、逆方向の斜め上へと篦削りが行われる。胴部外面下半部には煤の付着も認められる。胎土に砂を含み、焼成は良好。暗褐色を呈するが、胴部に一部焼成時の黒変がある。H147もH146ほど強くはないが外反する口縁と球形の胴部をもつ。口縁部は若干内彎しており、先端は平担である。口縁内外とも指の横なで調整。胴部外面は縦の刷毛目調整で、煤の付着も認められる。胴部内面は上部に指のなで上げ調整痕、底面には不規則に刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。上半は赤味がかった黄褐色、下半は灰褐色を呈する。H148は口縁部と底部を欠くが、外反する口縁をもつと推定される。外面は縦・斜めに刷毛目調整。内面は横あるいは斜め上へと篦削り。外面と内面の下部に煤の付着。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。外面黒褐色、内面褐色を呈する。H149は胴部中央以下を欠失する。外反する口縁部は先端部が肥厚する。胴部も球形に近いものと推定される。口縁外面は指の横なで調整。口縁内面は横刷毛目調整。胴部外面は縦・横・斜めの不規則な刷毛目調整。胴部内面は上部は横、以下は斜め上への篦削り。外面には口縁部の一部と胴中央部付近に煤の付着が認められる。胎土石英粒砂を含み、焼成は良好。赤褐色を呈する。H150は胴下半部であるが底部を欠失する。やはり球形に近い胴部をもつ。外面には粗い刷毛目調整。内面は斜め上へ篦削りを行ない、一部に篦により深い切れ目状の痕がつくところもある。内外面とも煤の付着が認められる。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。暗褐色を呈する。H151は外反する口縁部で、先端が肥厚する。指の横なで調整が行なわれる。胎土に砂を含み、焼成は良好。淡黄褐色を呈する。H152は小形の甕で、やはり外反する口縁をもつ。胴部は楕円形に近い。口唇部は凹み、口縁部外面は凹凸がつく。口縁部は指の横なで調整。胴外面上部は横刷毛目調整。それ以下は斜めを主体とした不規則な刷毛

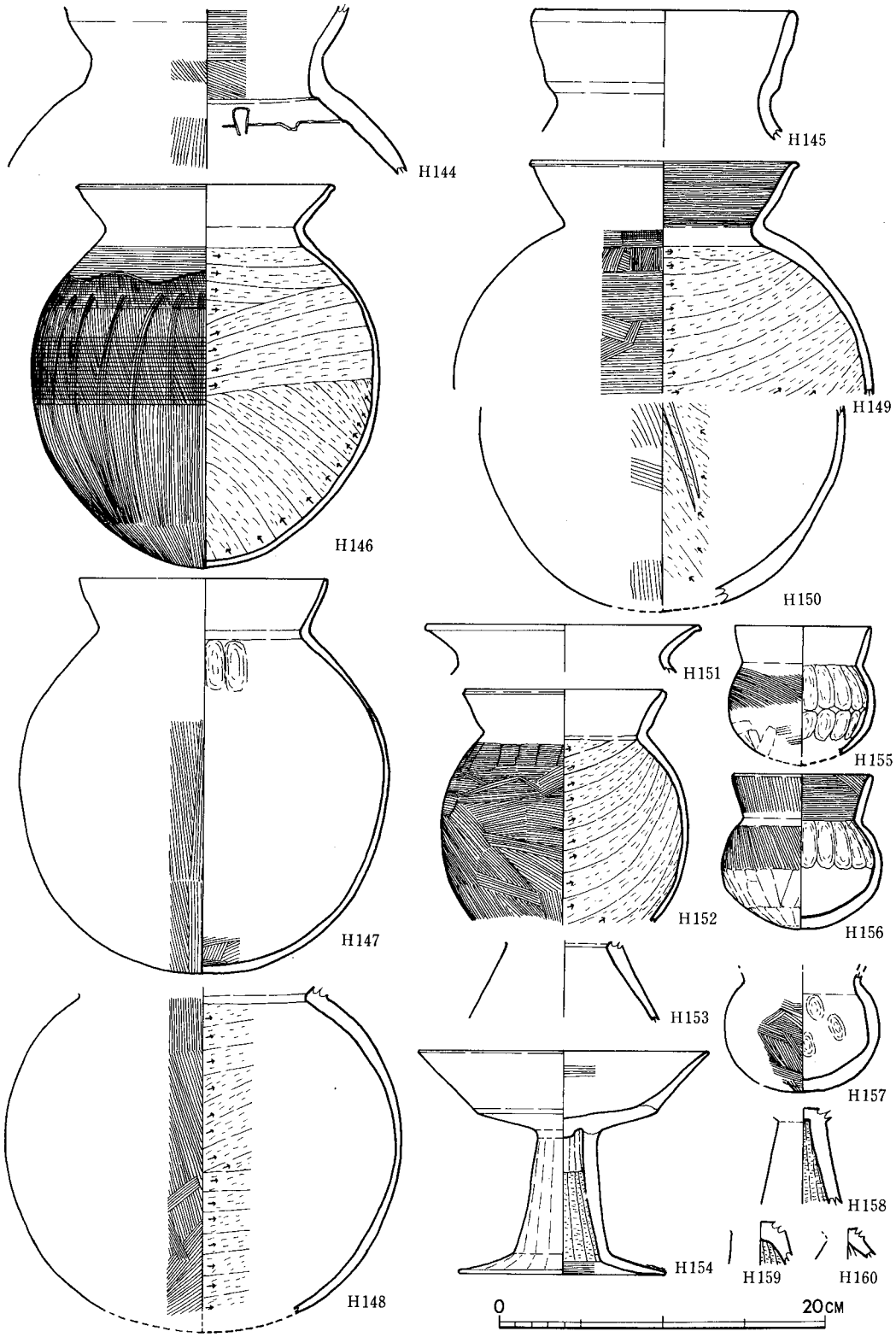


Fig. 3・61　C－14bトレンチ黒色粘質土層（第7層）出土土師器実測図

目調整。胴部内面は斜め上への篦削り調整。外面胴部最大径以下に煤の付着。胎土に砂を含み、焼成良好。赤褐色を呈する。

壺（H144・145）　H144は口縁先端を欠くが、ゆるい稜がついているので、二重口縁の退化した口縁部がつくと思われる。外面は斜め、縦の刷毛目調整の後横なで調整。内面頸部は横・斜めの刷毛目調整。接合部には内面に段がつき、一部に小粘土塊を貼付けて接合を強化している。胎土に石英粒砂を混じ焼成は良好。暗褐色。H145は口縁部で、退化した二重口縁を呈する。外面は凹凸が激しく、口縁内外面ともに指の横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。暗赤褐色を呈する。

小型丸底壺（H155～157）　H155は底部を欠く。わずかに外反する口縁部とやや上下に偏平な球形の胴部をもつ。口縁部は内外面とも指の横なでで調整。胴部上半は斜めの刷毛目調整。それ以下も一部に粗い刷毛目調整がある。底部近くには篦削りが施される。内面は指の調整が行なわれる。胎土は若干の砂を含むが良好で、焼成も良い。赤褐色。H156も同様な器形であるが、H155に比べ器壁が厚い。口縁部は外面は斜め、内面は横または斜めに粗い刷毛目調整。頸部には指の横なで調整。胴部上半は斜めの粗い刷毛目調整。内面は指の調整。胴部下半から底部にかけては篦削りが行なわれる。胎土には砂を含み、焼成は良好。赤褐色を呈し、胴部の一部に焼成時の黒変。H157は口縁部を欠くが、同様の器形をもつ。外面は粗い刷毛目調整が不規則に施され、内面は指の押圧調整。胎土に石英黄粒砂を含み、焼成は良好。暗赤褐色を呈する。

器台（H153）　器台の下半部である。器面のあれが甚しいために調整は不明。胎土に若干の砂を含むが、精選された粘土を用いており、焼成は良好。黄褐色を呈する。

高坏（H154・158～160）　H154は全体を知り得る。坏部は中途で屈折して外反する。脚部は細く、除々に裾広がりとなり、裾近くで屈折して強く開くが、坏部口縁径よりは裾径が小さい。坏部の外面は器面があれているため調整不明だが、内面には横位の粗い刷毛目調整が一部にある。坏部内面底は指の横なで調整。脚部の外面は縦のなで調整。内面はしぼり痕が上部にみられ、その下は篦削り。裾内面は横の刷毛目調整。坏と脚の接合部には坏の底を凸出させている。胎土に若干の砂を含み、焼成は良好。淡赤褐色を呈する。H158は脚部で、内面篦削り。胎土に砂を含み、焼成良好。淡褐色。H159も同様内面篦削り。胎土は若干の砂を含むが良好で、焼成も良い。赤褐色。H160は若干開きぎみの脚で、内面にしぼり痕がみられる。胎土に砂を含み、焼成は良好。暗黄褐色を呈する。以上の土器は一部を除いてほぼ同一時期と考えられ、おそらく第1号・第2号ピットと同様の性格をもつピット内の土器と推定されるが、黒色粘質土層内に掘り込んであり、湧水が多いために遺構としては確認できなかった。大半のものは、小型丸底壺の定形化、甕の口唇部の肥厚および、内彎ぎみの口縁部、胴部最大径がほぼ胴中央に来ること、退化しているとはいえ二重口縁の壺の存在、H146における波状沈線などから5世紀初頭～前半に位置するものと推定される。（沢）

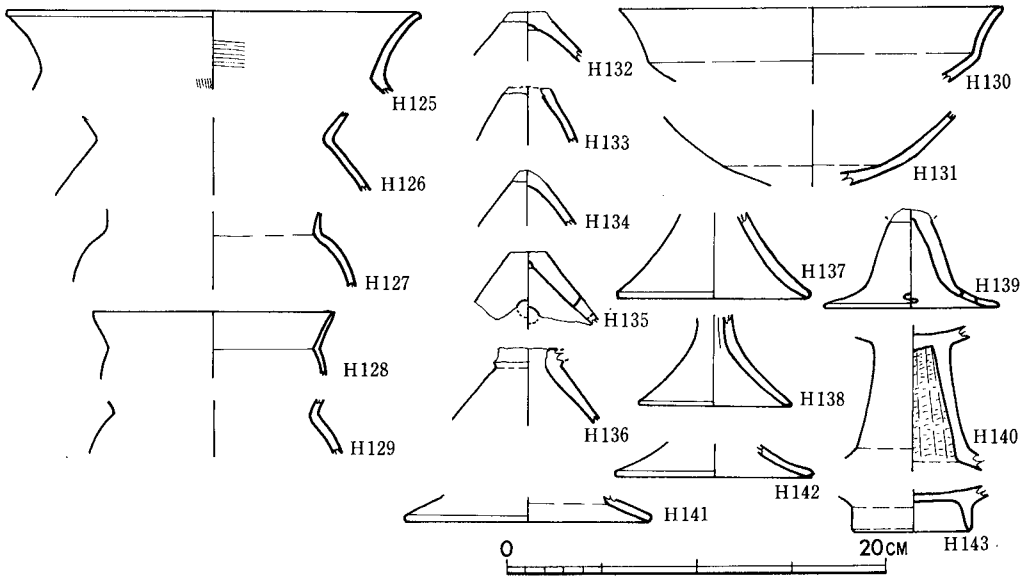


Fig. 3・62　C－14ｂトレンチ暗灰褐色粘土層（第5層）出土土師器実測図

ii）C－14ｂトレンチ暗灰褐色粘土層（第5層）出土の土師器（H125～H143、Fig. 3・62）

甕（H125～129）　H125は口縁部で外反する。口唇部は肥厚するが、口縁部そのものは外湾している。外面頸部以下に縦刷毛目、口縁部内面には一部横刷毛目調整。胎土に石英粒砂を混じ、焼成は良好。褐色を呈する。H126は口縁先端を欠く。「く」の字状に外反しており、器面調整は器面のあれのため不明。胎土に砂を含み、焼成良好。淡褐色。H127も同様口縁先端を欠くが、口縁はH126に比べかなり直立に近い。器面調整は不明。胎土は砂を含み緻密で，焼成はあまい。褐色を呈する。H128は非常に薄い器壁をもつ。調整は不明だが、口縁部は若干内彎する。胎土に砂を含み、焼成は良好。黒褐色を呈する。H129は口縁部を欠く。器面調整も不明。胎土に砂を含み、焼成は良好。暗褐色を呈する。

器台（H133）　器台の下半部であろう。器面のあれが甚しい。胎土に石英粒砂を含む。焼成は良く淡赤褐色。

高坏（H130～132・134～142）　H130は坏部で中央で屈折する。口縁部は外反し、横なで調整。胎土は砂を含み、焼成は良い。褐色。H131は坏の下半部で屈折は弱い。胎土・焼成・色調はH130と同様。H131は脚部で、裾が開く。胎土は砂を含むが、焼成は良い。淡褐色。H134も同様で色調は淡赤褐色。H135も器形は同様だが、焼成後に4個の小孔を穿つ。胎土・焼成・色調はH134と同様。H136も同様。H137は裾部で、胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。淡暗褐色。H138も脚部であるが、これは高坏の脚というより、脚付鉢の脚かもしれない。内面にしぼり痕がある。胎土に砂を含み、焼成は良好。褐色を呈する。H139は内彎しながら下に行くに従って開く脚部で、裾部が急に開くが、稜はつかない。器面が磨耗しているため器面調整は不明。裾部に焼成後の穿孔が4個存在する。胎土には砂を含むが良好で、焼成も良い。褐色を呈する。H140は下半が開くが直線的であり、裾部は急に開く。内部は篦削りで、

胎土に砂を含み、焼成は良好。赤褐色。H141はH140と同様の器形の裾部らしい。胎土に砂を含むが、胎土そのものは緻密である。焼成は良く、淡赤褐色。H142は胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。褐色を呈する。H143は高台付のもので、高台は細く高い。胎土に砂を混じ、焼成は良好。淡黄褐色を呈する。

以上の土器はH143を除いては、5世紀代の前半のものとみてよいであろう。　（沢）

iii）C－14aトレンチ黒色粘質土層出土の土師器・須恵器（H189～192、Su101～105、Fig. 3・63）

土師器（189～192）　H189は高坏の脚部である。内面にはしぼりの痕がある。胎土に多量の砂を含み、焼成は良好。黄褐色を呈する。H190は脚付鉢の脚部と思われる。内面にはしぼりの痕がみられる。胎土に砂を含み、焼成は良好。暗黄白色を呈する。H191は坏で、口縁は外反する。口縁下に若干の凹みがある。胎土は緻密で焼成は良い。黄白色。H192は器高の低い坏で皿というべきかもしれない。内外面とも凹凸が甚しい。胎土に砂を含み、焼成は良好。灰褐色。

須恵器（Su101～105）　Su105は坏蓋で、口縁部を欠く。つまみをもち、内外面ともロクロ痕がつく。胎土に砂粘を含み焼成は良好。灰色を呈する。Su102も坏蓋で、口縁部のみである。胎土に若干の砂を混ぜ、焼成は良好。青灰色。Su103は坏の身で、口縁部は直立に近い。内外面とも指の横なで調整。胎土は緻蜜で焼成は良好。青灰色。Su104は高台付埦の高台部である。高台は裾拡がりとなる。内外面とも横なで調整。胎土に砂を含み、焼成は良好。黒色に近い。Su105も同様に高台付埦の高台部であまり拡がらない。胎土に砂を含み、焼成は良好。灰白色を呈する。

以上、C－14aトレンチ黒色粘土層は、C－14bトレンチの同層よりも、後世の撹乱が甚しく、歴史時代の遺物まで出土している。しかし、これらの撹乱は、層そのものの撹乱ではなく、確認はできなかったが、ピット等の掘り込みによるものであろう。

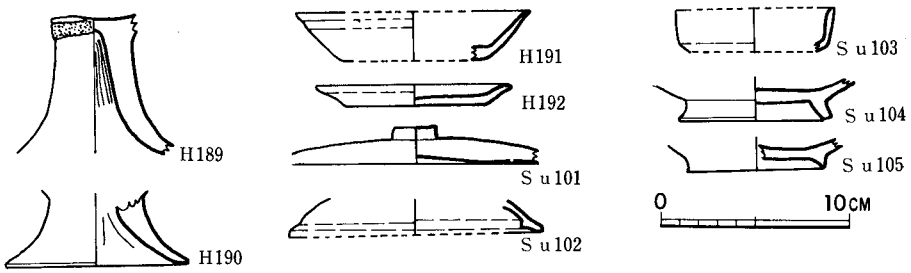


Fig. 3・63　C－14aトレンチ黒色粘質土層出土土師器・須恵器実測図

iV）E－17耕土層出土の古銭（Fig. 3・63）

1は元豊通宝、2は寛永通宝で、1は銅銭、2は鉄銭である。元豊通宝は北宋の神宗の時代に鋳造されたもので、1078～1085年代のものであろう。　（沢）

Fig. 3・64　E－17グリッド耕土層出土古銭拓影

Tab. 3・1　第1区沖積層出土弥生式土器挿図対照表

No.	トレンチ グリッド	層　　位	Fig.
Y 1 ～ 9	C－13	灰色粘質土層・黒色粘質土層	3・49
Y 10～276	C－14 a	第5～第7層	3・42～3・48
Y 277～350	C－14 b	第7層	3・35, 3・36
Y 351～470		第5層	3・37～3・40
Y 471～491		第3～3d層・第3層下部	3・41
Y 492～499		暗褐色砂層	
Y 500～616	D－16	黒色粘質土層	3・29～3・34
Y 617～635	D－17 a	〃	3・27, 3・28
Y 636～669	D－17 b	第19層	3・12
Y 670～703		第17層	3・14, 3・15
Y 704～725		第13・14・16層	3・16, 3・17
Y 726～738		溝内	3・3
Y 739～745		第17層（溝直上）	3・13
Y 747～829	E－17	第15層，第13層下部	3・18, 3・19
Y 830～1136		第13層上部	3・20～3・24
Y 1137～1149		第1～7層	3・25
Y 1150・51・54～58		第9・10層	
Y 1152・53		第11層	
Y 1159～1177		小竪穴内	3・6
Y 1178～1191	F－17	第12・13・16層	3・26
Y 1192・93	H－16	灰色粘質土層	3・51
Y 1194～98	E－14	黒色粘質土層	3・50

Tab. 3・2　第1区沖積層出土石器・石製品挿図対照表

No.	器種	石材	トレンチ	層位	備考	Fig	PL
S 6001	削器	玄武岩	E−14	不明		3・56	XXXI
S 6002	砥石	砂岩	〃	〃		3・60	
S 6003	石鎌	〃	E−17	第15・16層	直線刃	3・52	XXIX
S 6004	削器	黒曜石	〃	〃		3・56	
S 6005	偏平片刃石斧	変成岩	〃	〃	頭部片	3・54	
S 6006	石鎌	砂岩	〃	第13層		3・52	
S 6007	砥石	〃	〃	第15・16層	石製模造品	3・60	
S 6008	方柱状片刃石斧	頁岩	〃	〃	刃部欠損	3・54	XXXI
S 6009	石庖丁	砂岩	〃	〃		3・52	
S 6010	石鏃	黒曜石	〃	〃	三角鏃	3・54	XXVIII
S 6011	石錐	〃	〃	第13層		3・55	
S 6014	方柱状片刃石斧	粘板岩	〃	〃	刃部欠損	3・54	XXXI
S 6015	石庖丁	頁岩	〃	〃		3・52	
S 6016	石斧	玄武岩	〃	第15・16層	刃部欠損	3・54	XXX
S 6036	石庖丁	頁岩	〃	不明	半月形	3・52	XXVII
S 6037	磨製石鏃	粘板岩	〃	第15・16層	有茎式	3・55	XXXI
S 6038	石鏃	サヌカイト	〃	第13層	柳葉形石鏃	〃	XXVIII
S 6039	〃	黒曜石	〃	表採	局部磨製石鏃	〃	XXVIII
S 6040	〃	〃	〃	第13層		〃	XXVIII
S 6101	蛤刃石斧	砂岩	C−14b	第7層	刃部片	3・53	
S 6103	柱状片刃石斧	〃	〃	第5層	刃部欠損	3・54	
S 6105	石核	黒曜石	〃	第2号ピット		3・56	
S 6107	蛤刃石斧	砂岩	〃	第7層	胴部片	3・53	
S 6111	掻器	玄武岩	〃	第5層		3・56	
S 6113	蛤刃石斧	砂岩	〃	第7層	刃部及び裏面欠損	3・53	XX[illegible]
S 6116	〃	〃	〃	〃	頭部片	〃	XXX
S 6117	磨石	花崗岩	〃	〃		3・59	
S 6118	蛤刃石斧	砂岩	〃	〃	刃部片	3・53	
S 6119	偏平磨製石斧	頁岩	〃	〃		3・54	XXX
S 6128	石斧	粘板岩	〃	第5層		3・53	
S 6133	石核	黒曜石	〃	〃		3・56	
S 6160	石鏃	〃	〃	第7層		3・55	XXVIII
S 6224	石皿	砂岩	〃	第2号ピット		3・59	
S 6229	石錘	安山岩質	〃	第5層	重さ 155g	3・57	
S 6258	石鏃	黒曜石	〃	不明		3・55	XXVIII
S 6301	砥石	砂岩	C−14a	〃		3・60	
S 6302	太型蛤刃石斧	玄武岩	C−14a	第7層	今山産出玄武岩・頭部片	3・53	XXX
S 6304	〃	〃	〃	〃	今山産出玄武岩刃部欠損	3・52	XXX
S 6306	砥石	砂岩	〃	第6層		3・60	
S 6307	方柱状片刃石斧	頁岩	C−14b	第7層	刃部欠損	3・54	XXXI
S 6310	蛤刃石斧	砂岩	C−14a	〃	刃部片	3・52	XXX
S 6314	〃	〃	〃	〃	〃	3・53	
S 6317	〃	〃	〃	〃	胴部片	3・54	
S 6319	石庖丁	硬質砂岩	〃	〃	半月形	3・52	
S 6320	蛤刃石斧	砂岩	C−14b	〃		3・53	
S 6338	剝片石器	黒曜石	C−14a	〃		3・55	
S 6360	〃	〃	〃	〃		〃	
S 6369	〃	〃	〃	第6層		〃	
S 6418	石核	〃	〃	第7層		3・56	XXVIII
S 6433	石鏃	黒曜石	〃	〃	三角鏃	3・55	
S 6458	石刀？	花崗岩	C−14b	〃		〃	XXIX
S 6483	磨石	砂岩	C−14a	〃	煤付着		
S 6485	太型蛤刃石斧	玄武岩	〃	〃	今山産出玄武岩・頭部片	3・52	
S 6501	剝片石器	黒曜石	〃	〃		3・55	XXVIII
S 6526	つまみ型石器	〃	C−14b	〃		〃	XXVIII
S 6529	石斧	砂岩	C−14a	〃	側縁片	3・53	
S 6554	石鏃	サヌカイト	〃	耕土下層		3・55	XXVIII
S 6570	掻器	黒曜石	〃	第7層		〃	
S 6593	凹石	花崗岩	〃	〃	半分欠損	3・56	
S 6601	石庖丁	砂岩	D−16	黒色粘質土層	未成品	3・52	
S 6602	太型蛤刃石斧	玄武岩	〃	〃	含山産S 6605と同一個体	3・54	
S 6604	〃	〃	〃	〃	今山産出玄武岩・頭部片	〃	XXXI
S 6605	蛤刃石斧	砂岩	〃	〃	裏面欠損	〃	XXX
S 6606	〃	閃緑岩？	〃	〃	頭部片	〃	XXX
S 6607	穿孔具	砂岩	〃	〃	先端部欠損	3・56	XXIX
S 6608	石庖丁	頁岩質	〃	〃	未製品	3・52	XXIX
S 6636	磨石	花崗岩	〃	〃	推定重量440g	3・59	
S 6651	〃	安山岩質	H−16	青灰色砂質土層		〃	
S 6696	石庖丁	硬質砂岩	C−14a	第7層	半月形・半分欠損	3・52	XXXI
S 6698	石槍	サヌカイト	〃	〃	木葉形・縄文時代早期?	3・55	XXVIII
S 6713	石庖丁	砂岩	D−17a	黒色粘質土層	未製品	3・52	
S 6714	砥石	〃	〃	〃		3・60	XXIX

No.	器種	石材	トレンチ	層位	備考	Fig	PL
S 6722	砥石	砂岩	D—17b	第17層		3•60	
S 6724	磨石	花崗岩	〃	〃		3•59	
S 6725	砥石	砂岩	〃	第19層		3•60	
S 6729	〃	〃	〃	第17層		〃	
S 6734	石庖丁	粘板岩	〃	第19層	杏仁形、未製品	3•52	XXIX
S 6749	掻器	サヌカイト	〃	〃		3•55	

No.	器種	石材	トレンチ	層位	備考	Fig	PL
S 6751	石核	黒曜石	D—17b	第17層		3•56	
S 6767	磨製石鏃	粘板岩	C—14a	第7層	有茎式	3•55	
Ss 1	紡錘車	頁岩	E－17	第16層		3•58	XXIX
Ss 5	石錘	滑石	D—17b	第19層	重さ280g	3•57	XXXI
Ss 6	〃	〃	〃	〃	重さ100g	〃	XXXI

Tab. 3・3　第1区沖積層トレンチ出土石器数量表

トレンチグリッド	層位	蛤刃石斧		方柱状片刃石斧	扁平片刃石斧	石庖丁(砂岩)	石庖丁(頁岩質)	石鎌	磨製石鏃	打製石鏃		掻器			削器		剥片石器	石槍	石錐	石核		剥片			削片		磨石	砥石	その他
		玄武岩	その他							ob	sa	ob	sa	その他	ob	sa				ob	sa	ob	sa	その他	ob	sa			
C—13	耕土・包含層																					1							
	黒色粘質土層																1								2				
C—14b	表採・耕土層									1										1					1			1	
	包含層												1				2			3		1			8			4	磨製石器小片2、打製石器片1
	第2号ピット	1															1			4					3		1		磨製石器小片1、石皿1、抉入石器(ob)1
	第5層		1	1		1							1	1			3			10		6			26			3	石錘　1、打製石器未成品3、角礫2、小円礫13
	第7層		6	1						1							2			6		8			10		2	1	扁平磨製石斧1、打製石器未成品(ob)2、小円礫13、石刀？1
C—14a	耕土・包含層										1							1	1					1				2	
	第6層																1			3		19						1	
	第7層	3	6	1		4			1	1		1				1	12	1		48		15	1		120		1	13	磨製石器小片2、つまみ形石器1、打製石器未成品(ob)3、凹石1、礫7、小円礫36
D—16	黒色粘質土層	2	3			2														2		5			5		2	2	穿孔具1、磨製石器小片1、小円礫16
D—17a	〃	1	1			1														3		1			7			2	
D—17b	第13～17層														1		1			1		1			5		1	4	礫2、小円礫4
	第17層(溝上部)																								3				小円礫2
	第19層	1				1							1			1	1			1		5			1			1	石錘2、小円礫7、石庖丁は粘板岩製
E—14	不明														2													1	削器の1点は玄武岩製
E—17	表採・耕土・包含層					1				1		1																1	
	第13層			1				1		1	1	1			1				1						4				扁平礫1
	第15・16層	1	2		1	4		1	1	1		1								5					5			1	原石(ob)1、紡錘車1
F—17	第12～16層																					1			1				
H—16	青灰色砂層下部																										1		
合計		9	19	4	1	14		2	2	6	2	4	3	1	4	2	24	2	2	87		63	1	1	201	1	8	37	

obは黒曜石、saはサヌカイト

(註)包含層は耕土下の各時代遺物混在層をさす。D－16、D－17a、D－17bトレンチの包含層出土品は、台地上耕土・包含層出土品と一括(Tab. 3•10)

第3節　台地上の遺構と遺物

1　遺構の種類と分布・現状（Fig. 3・65）

遺構は、台地上の全面に分布している。前述したようにこの台地はかなり削平されており、遺構の遺存状態は若干のものを除きあまり良くない。貯蔵穴とみられる竪穴は、斜面にかかる調査区北西隅と、北東側の一部、南東側の一部を除き、ほぼ全面に分布する。墓地も全面に分布するが、特に北東側の一部は竪穴と同じく径15mほどの範囲には全く存在しない。木棺墓は調査区中央より北側に、土坑墓は南東部に多い。甕棺墓は前期のものは中央東寄りに集中しており、中期前葉では南側にひろがる。中期中葉以降は少ないが、散らばって分布する。古墳時代の住居址は調査区北西隅に存在した。また柱穴状の小ピットが多数分布する。

南側で台地は切れて砂層が厚く堆積する。この部分で切られた竪穴があること、台地落込み際に新しい丸木杭が打たれていることから、この台地の切れめと砂層（流れ？）は弥生時代のはるか後に形成されたとみられ、それによって失われた遺構もあろう。

2　弥生時代の遺構と出土遺物

(1)竪穴と出土遺物

計 108基検出された。ほとんどが上部を削平されている。

第1号竪穴（Fig. 3・66～3・68）

調査区中央やや北寄りに存在する。第87号竪穴と第36号竪穴の一部を切っている。南北約219cm、東西約222cmの不整な円形を呈する。深さは現存で約58cm。内部に4ヶ所のピットがあるが、柱穴といった類のものではない。残存部の壁は袋状でない。

出土土器（Fig. 3・67、3・68）

甕　夜臼式（1～10・37）1～9・37は口縁部で、1～7は刻目突帯をもつ。胴部中央が「く」の字に反転する器形の口縁部と思われるもの、（1～5・8・9・37）と、口縁部からそのまま底部へとすぼみながら続くもの(6)、ゆるやかに胴部が張り、胴部中位に突帯をもち底部へとすぼまると思われるもの(7)がある。1・2には横位の貝殻条痕が施される。10は「く」の字に反転する胴部で、刻目突帯が施される。8・9・38は刻目はみられない。ともに石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色（1・5・6・10）、黄褐色（2・3・37）、褐色（4・7・9）、黒褐色(8)を呈する。

板付Ⅰ式（11～14、16～18、20・38）いずれも口縁部で、短い如意形口縁をもち胴の張りの少い器形と推定される。口縁外端の縦幅一ぱいに刻目が施されているもの（11～14、16・17・38）と、刻目のないもの（18・20）がある。いずれも石英粒砂を含み、焼成は良好。暗褐色(11・14・16)、赤褐色（12・13・18）、黄褐色（17・20）、を呈する。刷毛目調整のあるもの(16)、煤の付着したもの(38)などもある。

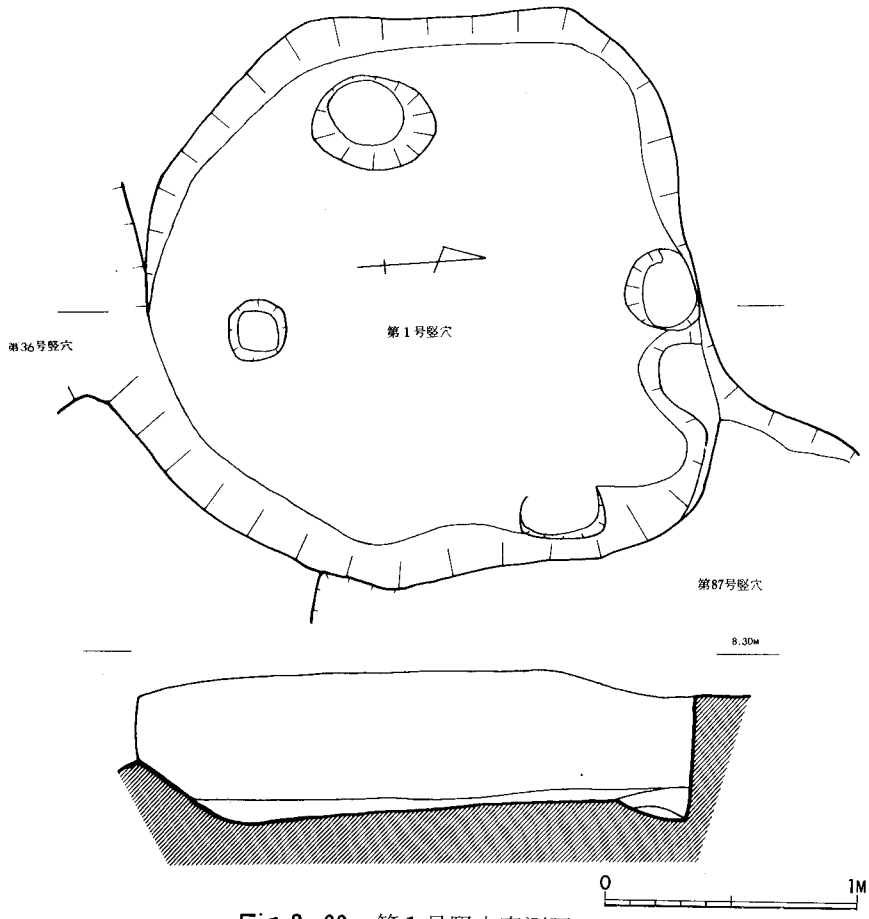


Fig. 3・66　第1号竪穴実測図

板付II式（15・19）如意形口縁をもち、わずかに胴の張る器形をもつ。15は口縁下端に刻目をもつ。19は刻目はなく口縁外端に一条の沈線が巡る。石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色(15)、黄褐色(19)を呈する。

壺　板付I式(22・39)　若干肥厚した外反する短い口縁をもつ。口縁の内外は横なで調整。石英粒砂を含み焼成良好。暗黄褐色を呈する。

板付II式(21・23、～27・32・34～36)　口縁は肥厚し、発達した外反する口縁をもつもの（21・23・32）と、肥厚せず外反する口縁をもつもの（24・25～27）がある。胴部は、肩部接合部に沈線をもつもの（25・27）と羽状文を施すもの(26)がある。ほとんどが石英粒砂を含むが、25は砂、雲母を含む。焼成は良好。赤褐色(21・25)、褐色(23)、暗褐色(24)、黄褐色（25～27・32・34～36）を呈する。口縁内外横なで調整のもの（24・32）と内面刷毛調整のもの(21)がある。

鉢　夜臼式(28)　残く外反した口縁部から胴部で「く」の字状に反転する。石英粒砂を含み、焼成良好。黒色を呈する。

板付II式(29・30)　29は外反し肥厚した口縁部から急速に底部へとすぼまる器形をもつ。外面には斜めの刷毛目調整。内面には指の調整痕が残る。胎土に砂を含み、黄褐色、焼成良好。

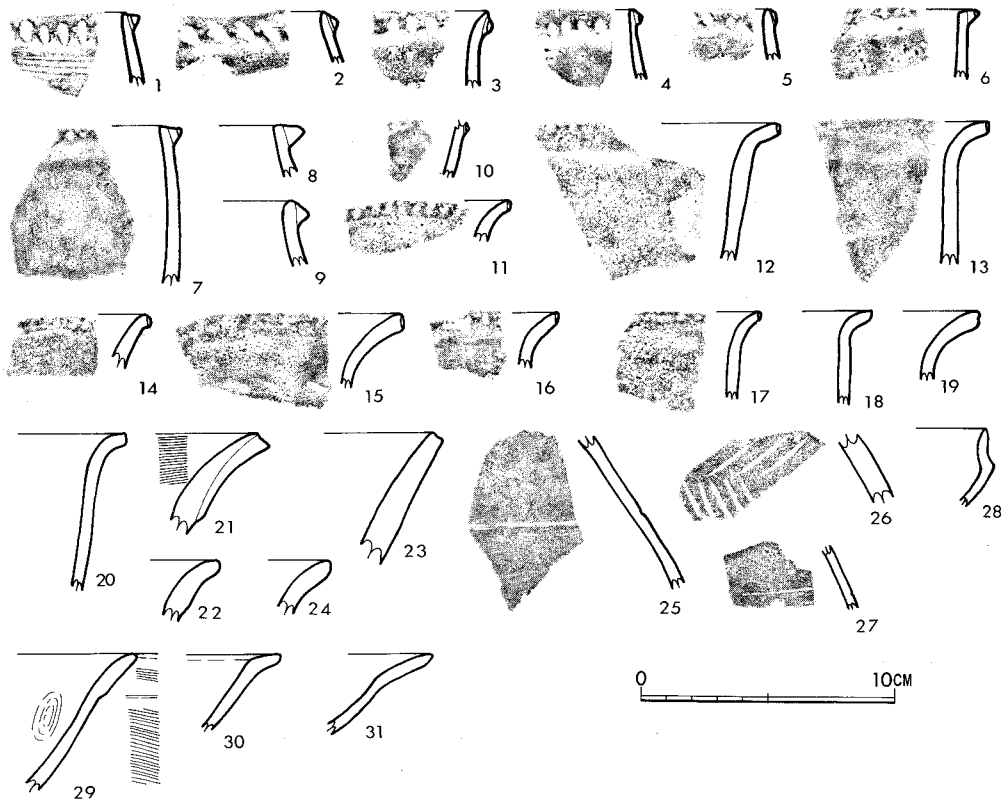


Fig. 3・67　第1号竪穴出土土器実測図

30は、短く外反する口縁をもつ。石英粒砂を含み、焼成良好、淡赤褐色を呈する。

高坏　板付II式(31・39)　ともに石英粒砂を含み、焼成良好。赤褐色(31)、褐色(39)を呈する。

蓋　(40)　甕の蓋と思われる。石英粒砂を含み、焼成良好、淡赤褐色を呈する。

底部　(41～50)　甑の底部(41・42)、壺の底部(43・49・50)、甕の底部（44～48）がある。49・50が板付I式で他は板付II式であろう。甑の41・42の穿孔は焼成後、42・43の外面は刷毛目調整。上げ底のもの（44・45・47・49）もある。49は、いわゆる円盤貼付けと思われる。いずれも石英粒砂を含む、焼成良好。赤褐色、暗褐色、黄褐色を呈するものが多い。煤の付着しているもの(46)もある。

出土石器（Fig. 3・68）　S2001は砂岩製砥石である。

以上の所見より、この竪穴は板付II式の時期と推定される。

第2号竪穴（Fig. 3・69、3・70）

南北約183cm、東西約135cmの長方形を呈する。深さは現存で約25cmで残存部の壁は袋状を呈さない。調査区中央やや南寄りに検出された。

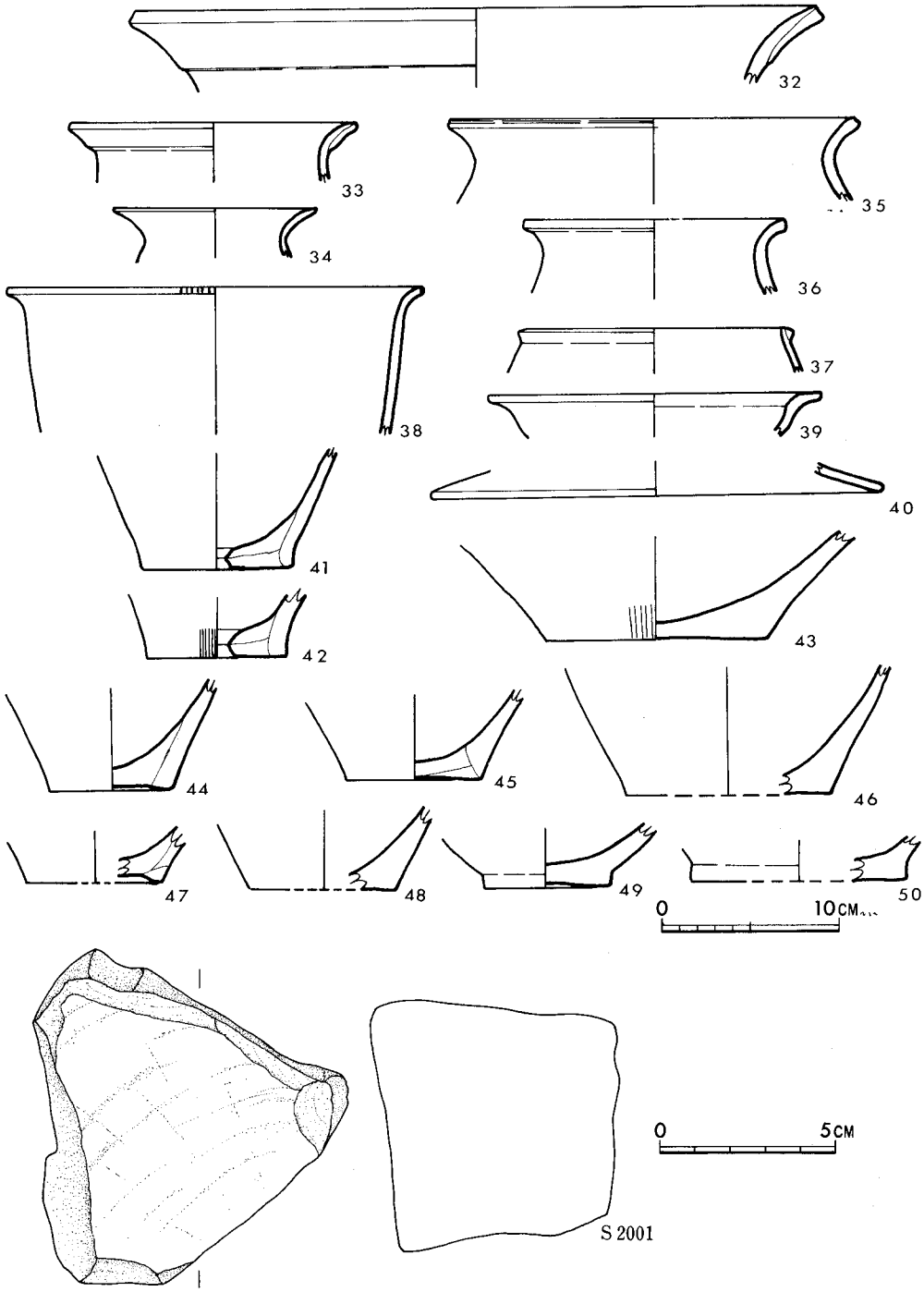


Fig. 3・68　第1号竪穴出土土器・石器実測図

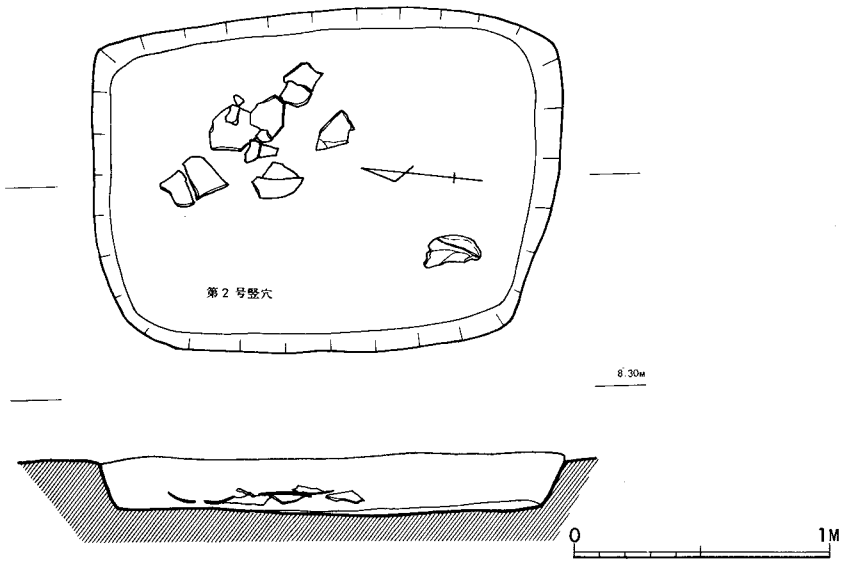


Fig. 3・69　第2号竪穴実測図

出土土器（Fig. 3・70）

甕　（1～3）　いずれも如意形口縁をもつ。1は外反する口縁の下端に刻目を施す。いずれも石英粒砂を含み、焼成良好。暗黄褐色を呈するが2の外面と3の内面は黒褐色を呈する。

壺　（4～7）　4は口縁部、5・6は肩部、7は底部で、6と7は同一個体である。4は外反する口縁部で、横なで調整。石英粒砂を含み、焼成良好、黄褐色を呈する。5は肩部に段がつく。石英粒砂を含み焼成は良好。外面赤褐色、内面黄褐色。6は肩部に一条の貼付三角突帯を巡らし、胴部が張り、若干上げ底の底部へと続く。石英粒砂を含み、焼成良好、黄褐色を呈するが、外面の一部焼成時の黒変。

底部　（8～11）　8～10は甕、11は壺の底部と考えられる。8は厚い底部が若干上げ底となり、外面は刷毛目調整。9も、若干の上げ底で外面刷毛目調整。いずれも石英粒砂を含み、焼成良好。ほとんどが黄褐色を呈する。10は暗褐色。

これらの土器は板付II式の範疇に入るものであるが、壺（6・7）や底部(8)などから、前期後葉の所産と考えられる。

出土石器（Fig. 3・70）

磨製石剣　（S 2026）　頁岩製で、片面は偏平で鎬をもたない。有柄式磨製石剣片である。

磨製石斧　（S 2027）　玄武岩製の胴部破片である。

砥石　（S 2028）　砂岩製で、砥面が内彎する。

第3号竪穴（Fig. 3・71）

東西約156cm、南北約111cmの長方形を呈する。現在の深さ29cm、残存部では壁は袋状を呈さ

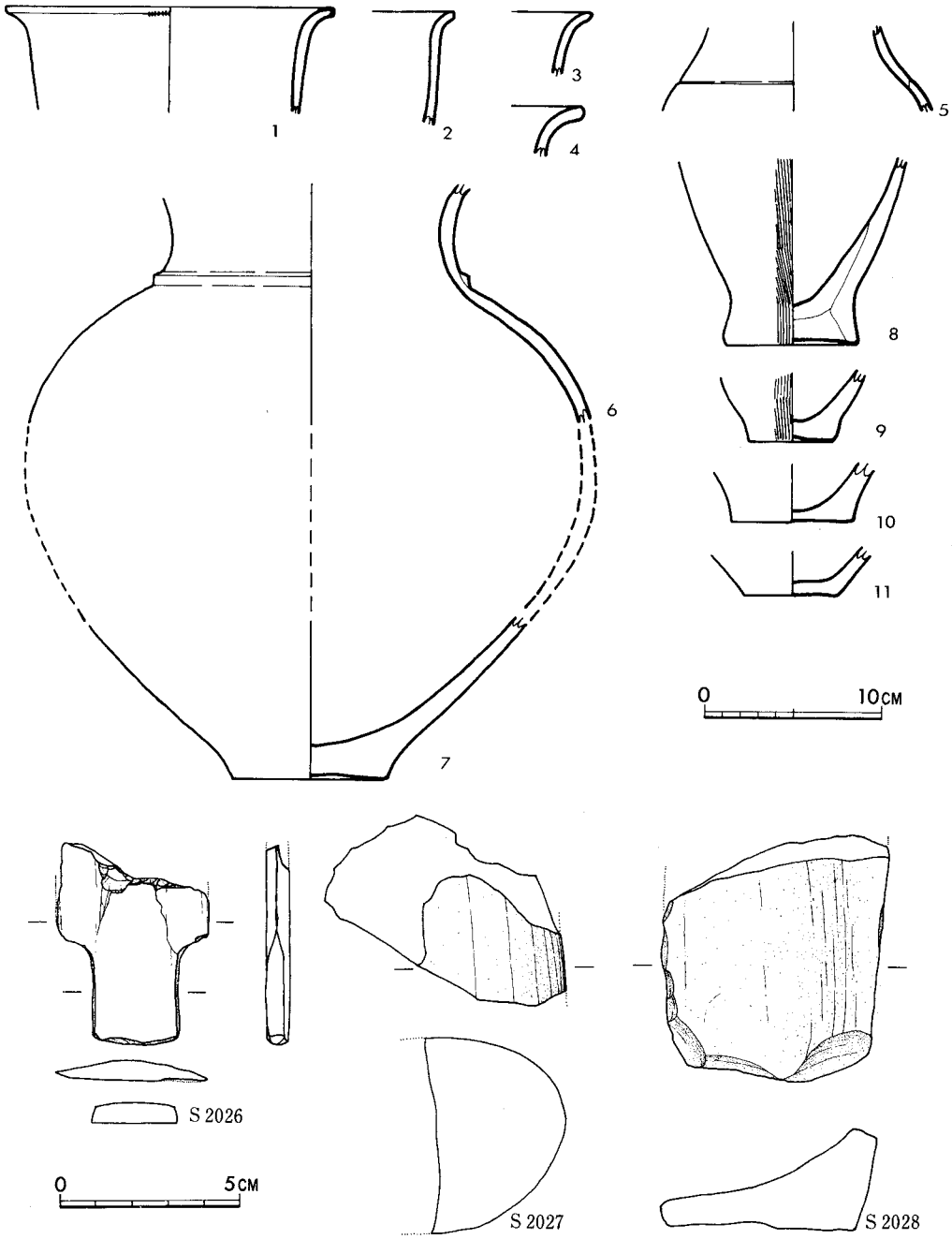


Fig. 3・70　第2号竪穴出土土器・石器実測図

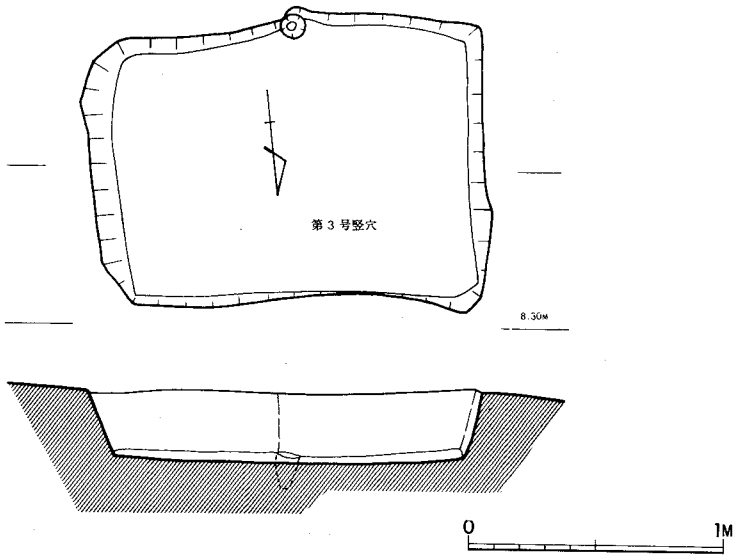


Fig. 3・71　第3号竪穴実測図

ない。南壁に沿って、小さなピット1個が存在した。遺物はほとんど出土しなかった。

第4号竪穴 (Fig. 3・72)

長方形を呈し南北約119cm、東西95cm、現存の深さ36cmをはかる。残存部では袋状を呈する。北西側にピットが存在する。第5号竪穴を切っている。

出土土器 (Fig. 3・72)

鉢 (1) 肥厚した口縁部が外反し、ゆるやかな曲線をもちながら底部へと急速にすぼまる。全面を磨研している。胎土に砂を混入し、焼成良好。外面赤褐色、内面黒色を呈し、外面の一部に焼成時の黒変がある。

壺 (2) 肩部に段がつく。胎土は砂を混入するが良好、焼成も良好、赤褐色を呈する。

底部 （3～5） 3は、断面三角形を呈する厚い底をもつが、上げ底ではない。甕の底部であろう。4は壺の底部と思われる。6は甕の底部で外面に指の調整圧痕が認められる。いずれもも砂を含み、焼成は4・5は良好、3は若干不良。3は外面暗褐色、内面黒色、4・5は淡褐色を呈する。

これらの土器からこの竪穴は前期後葉のものと思われる。

出土土器

柱状片刃石斧 （S 2076）刃部破片で、頁岩製である。

第5号竪穴 (Fig. 3・72)

調査区南側に存在する。第4号竪穴に西側を切られ、第6号竪穴の北西側を切り、張り床を作っている。西北約160cm、東西推定で約130cmの不整な長方形の平面プランをもつ。現存の深

さは27cm、残存部で壁は袋状をなさない。内部に小さく浅いピット2個がある。遺物はほとんど出土しなかった。

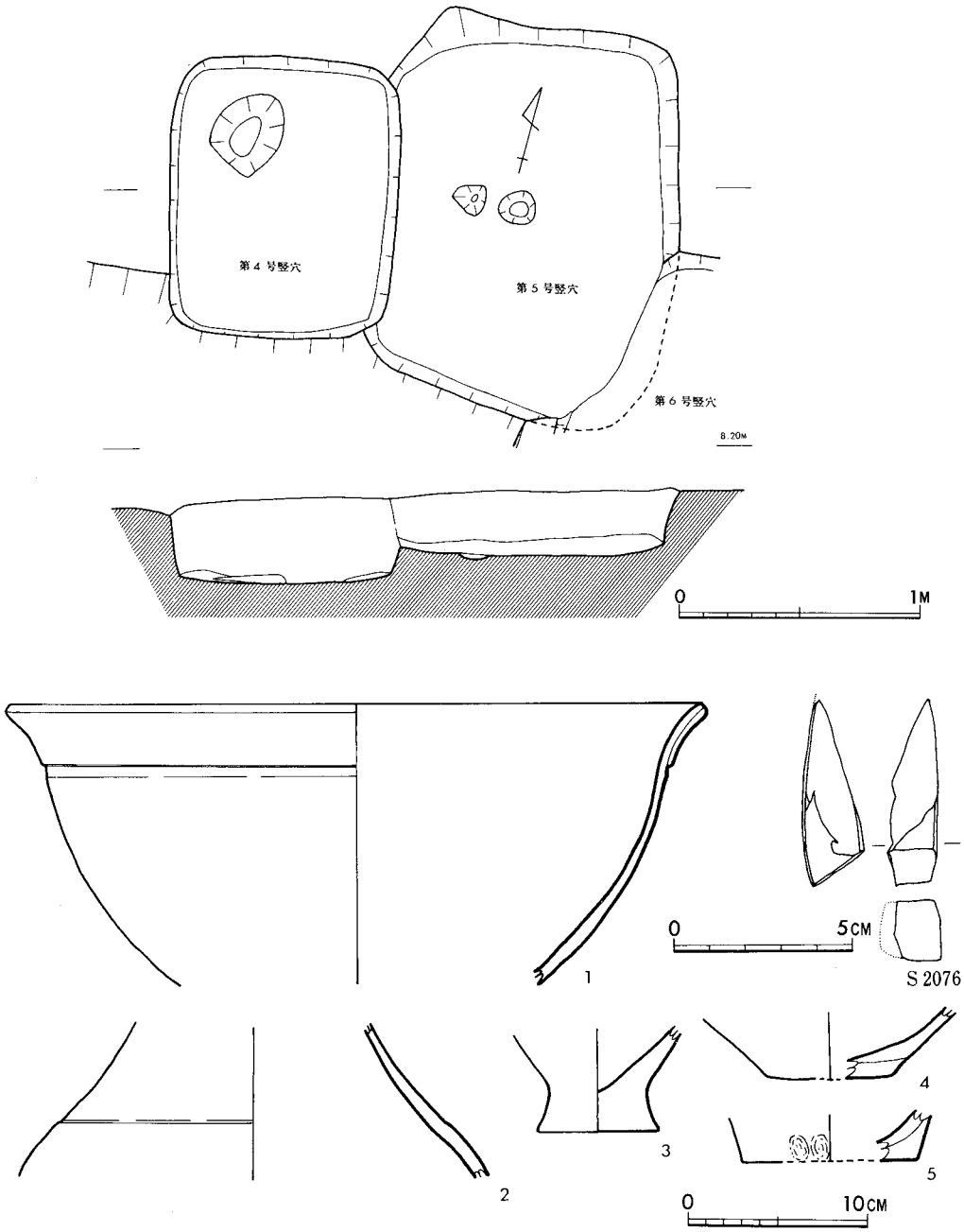


Fig. 3・72　第4号・5号竪穴および出土土器・石器実測図

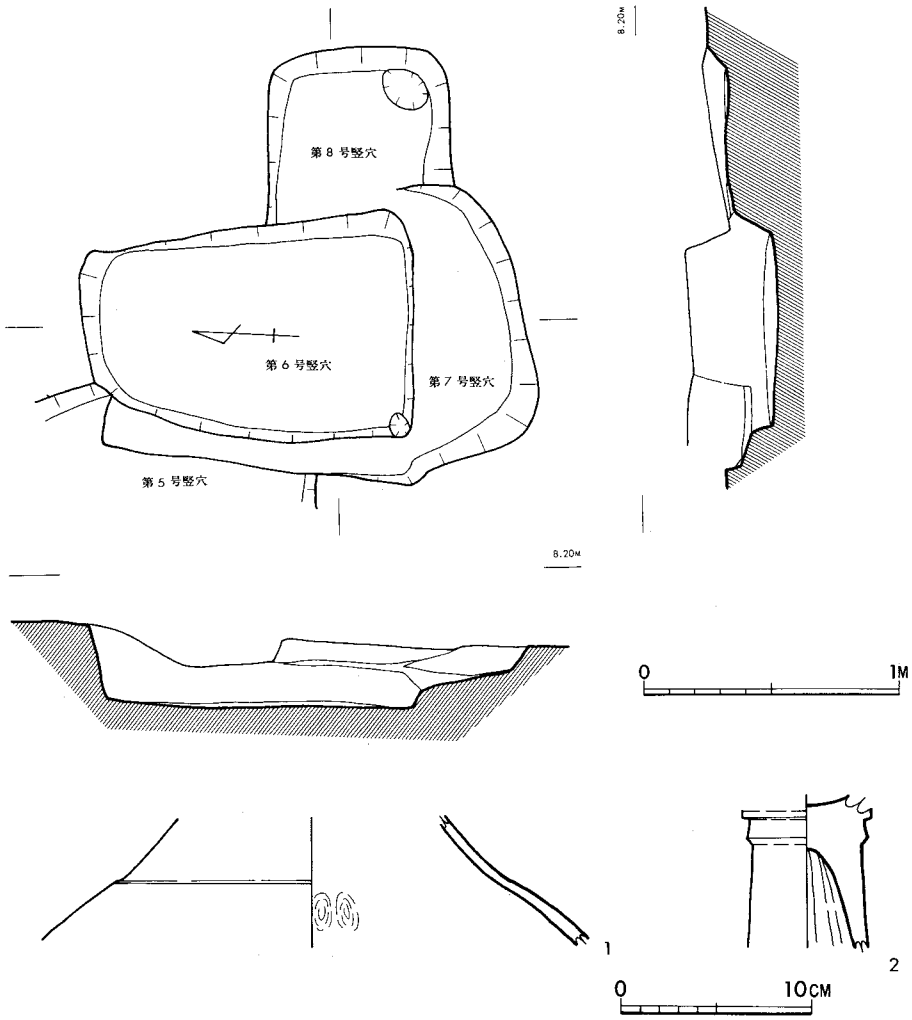


Fig.4・73　第6・7号・8号竪穴および出土土器実測図

第6号竪穴（Fig.3・73）

第5号竪穴の張り床の下にあり、第7号竪穴と第8号竪穴を切って作られていた。南北約130cm、東西約88cmのやや北側が狭い長方形プランをもつ。現存の深さは30cm、残存部での壁は袋状を呈していない。南西隅に小さく浅いピットがある。

第7号竪穴（Fig.3・73）

第6号竪穴に北側の大部分を切られているが、第8号竪穴を切って作られていた。南北は不明だが、東西は約112cm、現存の深さ14cm。残存部では壁は袋状になっていない。遺物は何も出土していない。

第8号竪穴（Fig. 3・73）

第7号竪穴、第6号竪穴に西側を切られている。南北71cm、東西は不明、現存の深さ10cm。残存部での壁は袋状をなしていない。南東隅に浅いピットがある。

出土土器（Fig. 3・73）

壺　(1)　肩部の接合部と思われる所に段がつく。内部には指の押圧痕が残る。胎土には石英粒砂を含み、焼成は良好、暗黄褐色を呈する。

高坏　(2)　脚と坏の接合部のみである。脚の上部に三角突帯が巡る。脚内部にはしぼりの痕が残る。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。外面赤褐色、内面黒褐色を呈する。

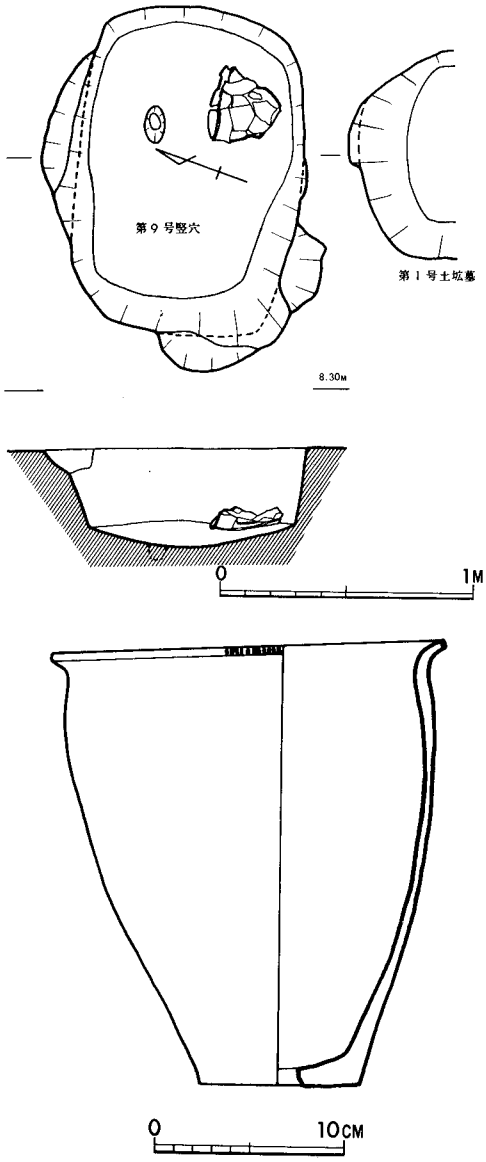


Fig. 3・74　第9号竪穴および出土土器実測図

この他小円礫1個が出土した。この竪穴の時期は弥生前期中葉であろう。

第9号竪穴（Fig. 3・73）

調査区南側に検出された。若干の撹乱があるが、南北約90cm、東西約130cmの隅丸長方形に近いプランをもつ。現存の深さ40cm、残存部の壁では袋状は呈していない。内部には小さな浅いピットがある。南東隅、床面近くで甕一個体分が出土した。

出土土器（Fig. 3・73）

甕　短く外反する如意形口縁から張りの少い胴部へと続き、底部へとすぼまる。口唇部には上下端一杯に、貝殻と思われる工具で刻目を施している。胴部には一部煤の付着が認められる。底部には、焼成後の穿孔がみられ、甑として利用されたものであろう。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、赤褐色、黄褐色を呈する。板付Ⅰ式に比定され、この竪穴は前期前葉であろう。

第10号竪穴（Fig. 3・75）

調査区南側に存在し、南側半分は、後世、台地南側落ち込みに切られている。直径約180cmの円形プランをなし、現存の深さ28cm。残存部の壁は袋状をなしていない。遺物はほとんど出土していない。

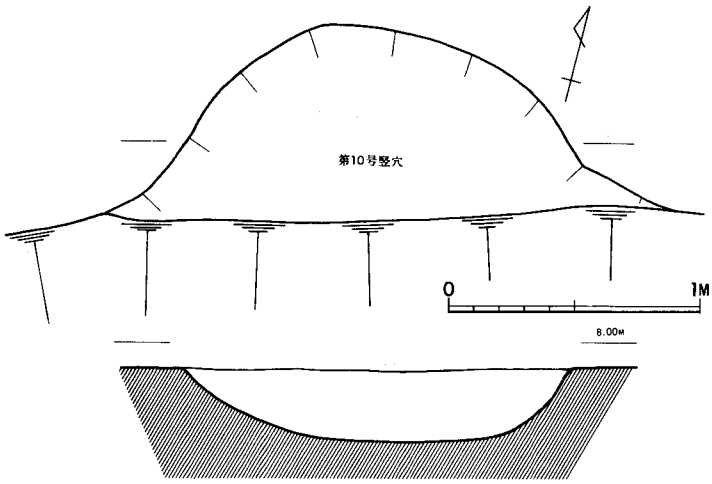


Fig. 3・75　第10号竪穴実測図

第11号竪穴（Fig. 3・76、3・77）

調査区中央に存在し、北東側を第23号木棺墓に切られている。東西約265cm・南北約190cmの長方形プランを呈する。現存の深さ約50cm、残存する壁では袋状をなしていない。南西隅に小さく浅いピットと、竪穴床面から約52cmの深さをもつピットがある。なお北西にも楕円形状の撹乱部がある。

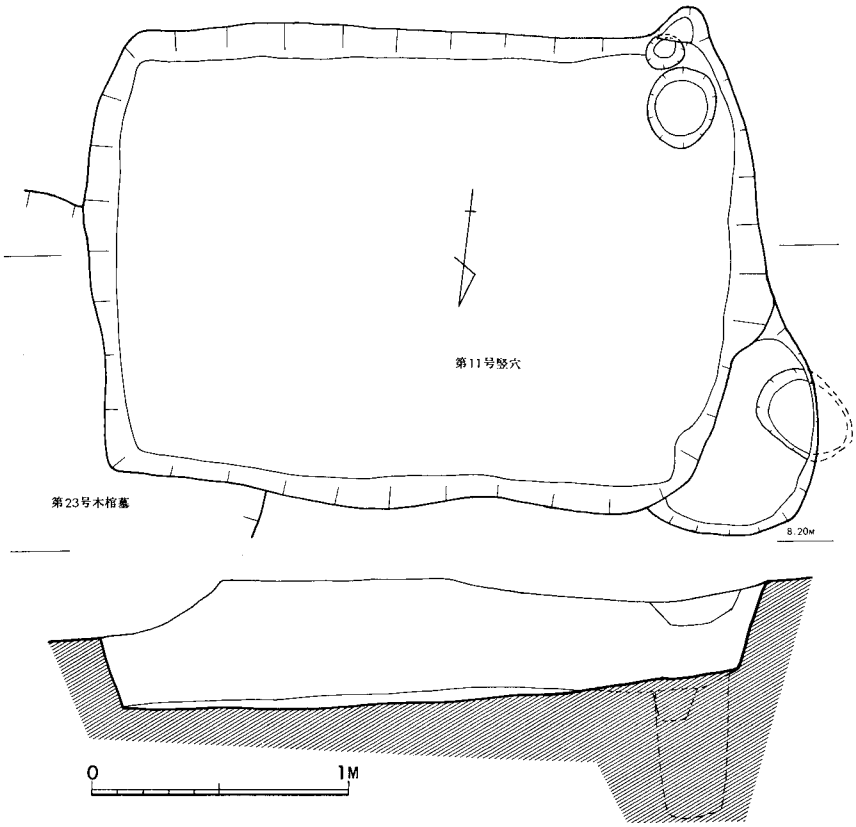


Fig. 3・76　第11号竪穴実測図

出土土器（Fig. 3・77）

甕（2・4）　ともに如意形口縁をもつ、2は口縁に刻目をもたない。内部に指の押圧痕が残る。4は、口縁端一杯に刻目を施す。口縁内外は横なで調整。ともに胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色(2)、褐色(4)を呈する。これらは板付Ⅰ式に比定できよう。

壺（1）これは、北西の楕円形の攪乱中より出土したものであり、この攪乱ピットに伴うものと考える方が妥当であろう。肩部に一条の三角突帯を巡らす。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。黄褐色を呈する。中期前葉あたりであろう。

底部（3）若干上げ底の底部である。胎土に石英粒を含み、焼成良好。外面暗褐色、内面黄褐色を呈する。

以上の所見より、この竪穴は前期前葉と推定される。

出土石器（Fig. 3・77）

石核（S2251）　黒曜石の角礫を素材とし、2.5㎝前後の剝片剝離が行われている。

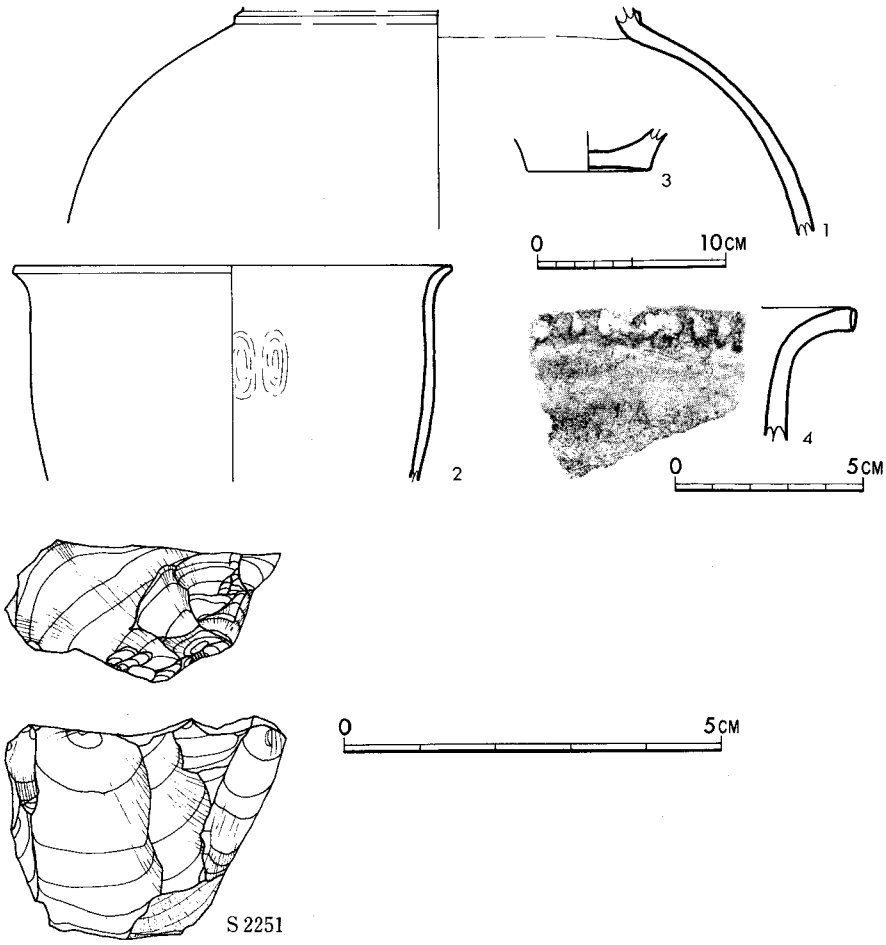


Fig. 3・77　第11号竪穴出土土器・石器実測図

第12号竪穴（Fig. 3・78）

調査区中央やや東側に存在する。西側の浅い不整形なピットを切って作られている。内部には、北側から東側にかけて一つの段がつく。東側には小さく浅いピットが3個存在する。南北約98cm、東西約119cmの不整な長方形に似たプランをもつ。現存の深さ約31cm、残存部の壁の一部に袋状を呈する部分がある。削平面近くではあるが、甕一個体分が出土した。

出土土器（Fig. 3・78）

甕　短い如意形口縁から、張りの少ない胴部へと続くが、底部は欠失している。口縁の内側は横なで調整。外面は深い刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、外面暗褐色、一部焼成時の黒変。内面赤褐色を呈する。板付Ⅰ式であろうか。

この竪穴は前期前葉と考えられる。

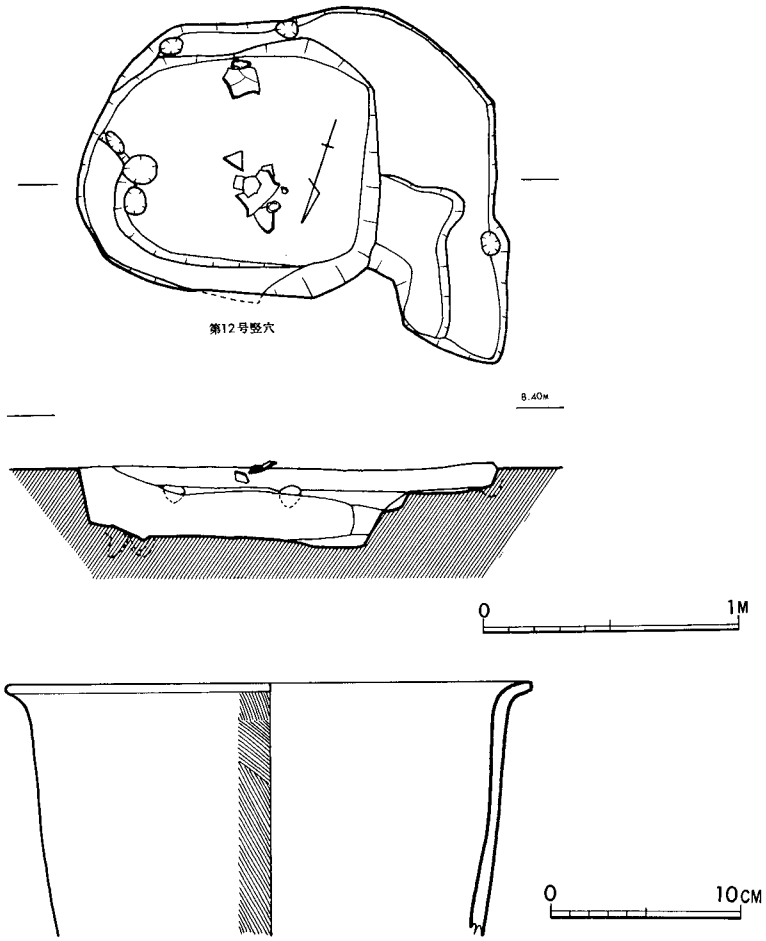


Fig. 3・78　第12号竪穴および出土土器実測図

第13号竪穴（Fig. 3・79）

調査区東側に存在する。長さ約145cm、幅約130cmの北西側が突き出した不整な長方形に近いプランをもつ。現存の深さ約35cm、残存部の壁は袋状になっていない。北側には後世のピット3個がある。内部には東側が段がついて高くなる。南隅には床面から約36cmの深さをもつピットがある。

出土土器（Fig. 3・79）

壺（1・2・5）　1は口縁部で肥厚せず外反する口縁をもつ。2は肩部に羽状文を施す。1は焼成良好だが、2はやや不良。5は肩部に一条の三角突帯が巡る。焼成良好、赤褐色を呈する。

甕（3・4）　ともに口縁部である。ともに如意形口縁ながら、3は口縁部下端に刻目を施し、4は口縁端が「コ」の字形になる。3は口縁内外面横なで調整で外面には粗い刷毛目調整。

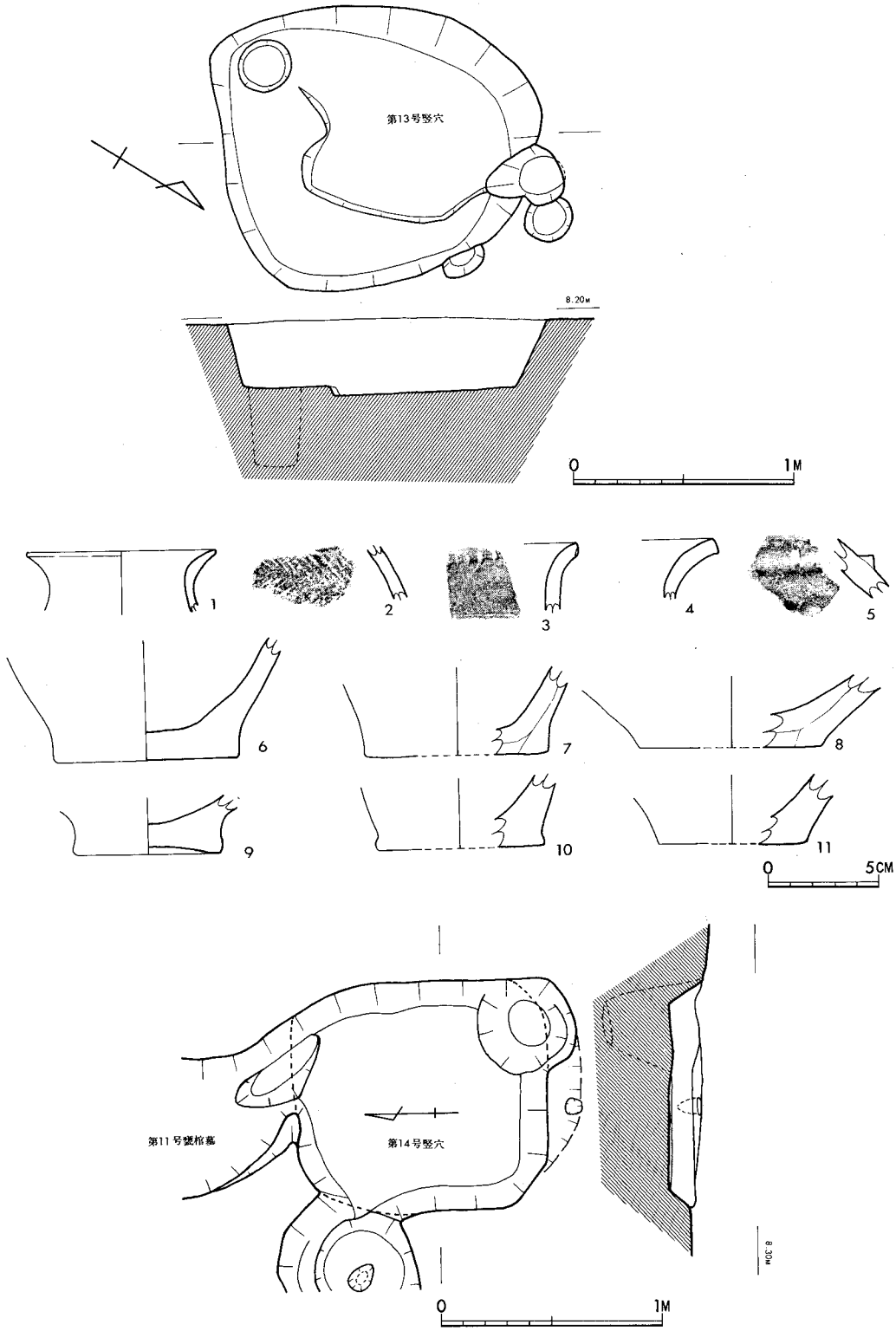


Fig. 3・79　第13号・14号竪穴および出土土器実測図

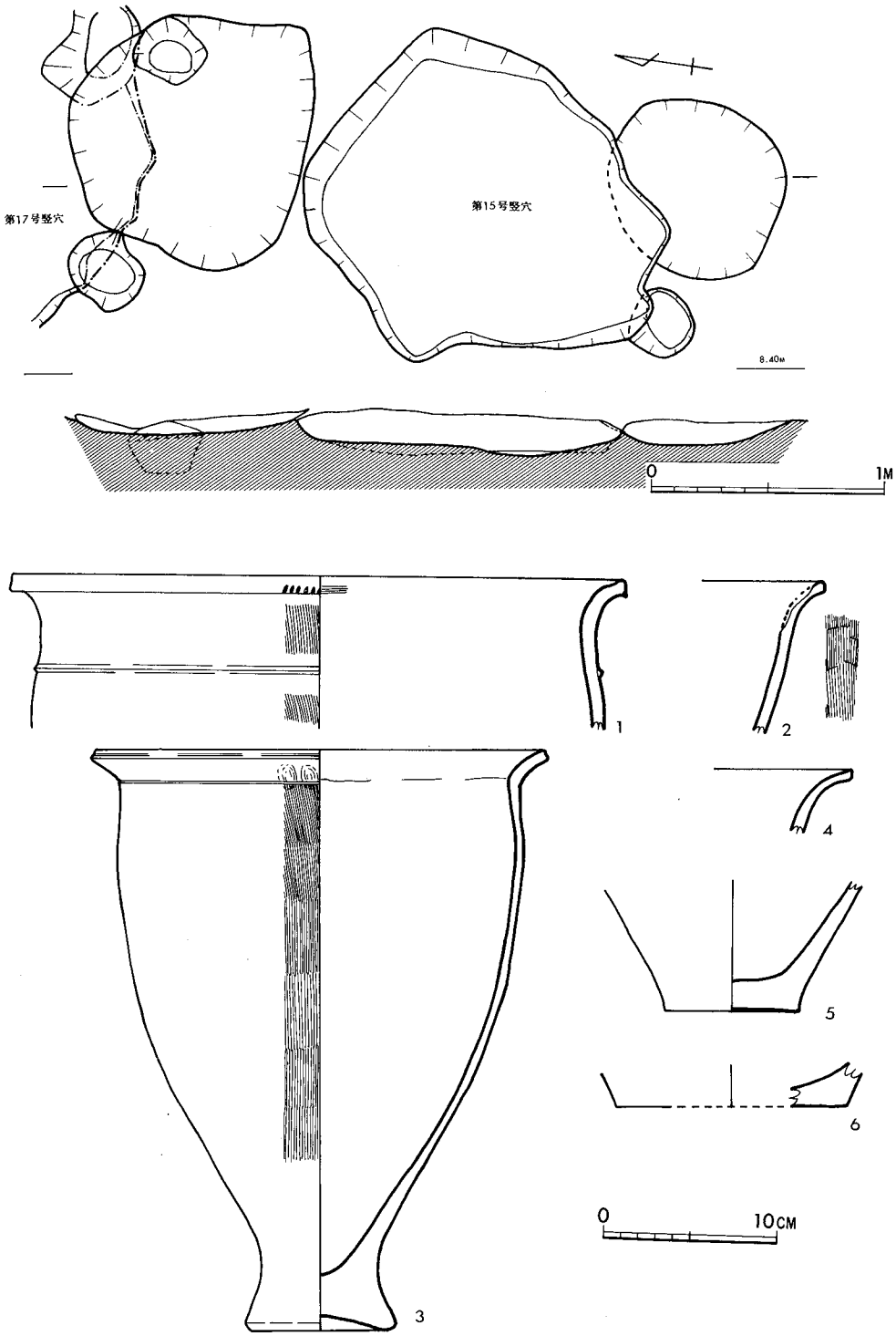


Fig. 3・80　第15号竪穴および出土土器実測図

ともに石英粒砂、砂を含む、焼成良好。赤褐色(3)、灰褐色(4)を呈する。

底部(６～11)　ほとんどが平底だが、上げ底のもの(9)もある。８、11は壺、他は甕と思われる。石英粒砂を含み、焼成良好、褐色(6)、赤褐色(７・９・11)、暗褐色（８・10）を呈する。

以上の土器は板付Ⅱ式の範疇に入るもので、この竪穴は前期中葉のものであろう。

第14号竪穴（Fig.3・79）

調査区南側に存在する。第11号甕棺墓に北側の一部を切られ、北西および南東側にも後世のピットの撹乱がある。南北約114cm、東西約105cmの方形に近いプランを持つ。現存の深さは約15cm、残存する壁では袋状をなしてはいない。遺物はほとんど出土していない。

第15号竪穴（Fig.3・80）

調査区ほぼ中央に検出された。南側を後世のピットによって切られている。南北約160cm、東西約135cmの不整形を呈する。現存の深さ約18cm、残存壁は袋状をなしていない。

出土土器（Fig.3・80）

甕　（１～３）　１は外反する口縁の下端に刻目を施す。口縁直下には一条の三角突帯を巡らす。口縁部周辺と突帯貼付部は横なで調整だが、口縁内側は少し凹む。外面は縦刷毛目、内面は横刷毛目調整。２・３も外反する口縁をもつが刻目はない。２は口縁内外とも横なで調整。外面は縦刷毛目調整。３は口縁直下に一条の沈線が巡る。口縁外端にも沈線状に凹みがみられる。張りの強くない胴部から、厚い上げ底の底部へと続く。口縁周辺は横なで調整だが口縁下に指の押圧調整痕が残る。沈線下は刷毛目調整。胴部に煤の付着が認められる。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。赤褐色(１・２)、暗褐色(3)を呈する。

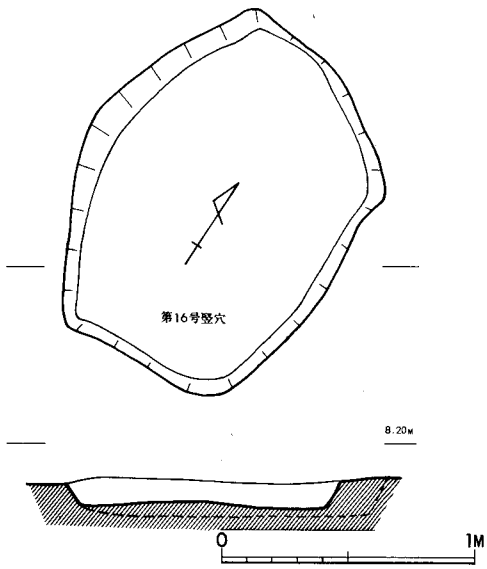


Fig.3・81　第16号竪穴実測図

壺　(4)　肥厚せず外反する壺の口縁部であろう。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。外面褐色、内面黒褐色を呈する。

底部　（５・６）　５は若干上げ底。石英粒を含み、焼成良好、褐色を呈する。６は平底、胎土に砂を含み、焼成は不良、淡赤褐色を呈する。

これらの遺物は、３の甕の底部がいわゆる城ノ越式の底部に類似しており、その口縁部の形状から、前期末から中期初頭への移行期のものと考えられ、竪穴の時期も中期初頭と考えても良いだろう。

第16号竪穴（Fig. 3・81）

調査区ほぼ中央に存在する。埋土中に第36号甕棺墓が営まれていた。南北約142㎝、東西約114㎝の長方形に近い不整形のプランをもち現存の深さ約15㎝。残存部の壁は袋状をなしていない。遺物は出土していない。

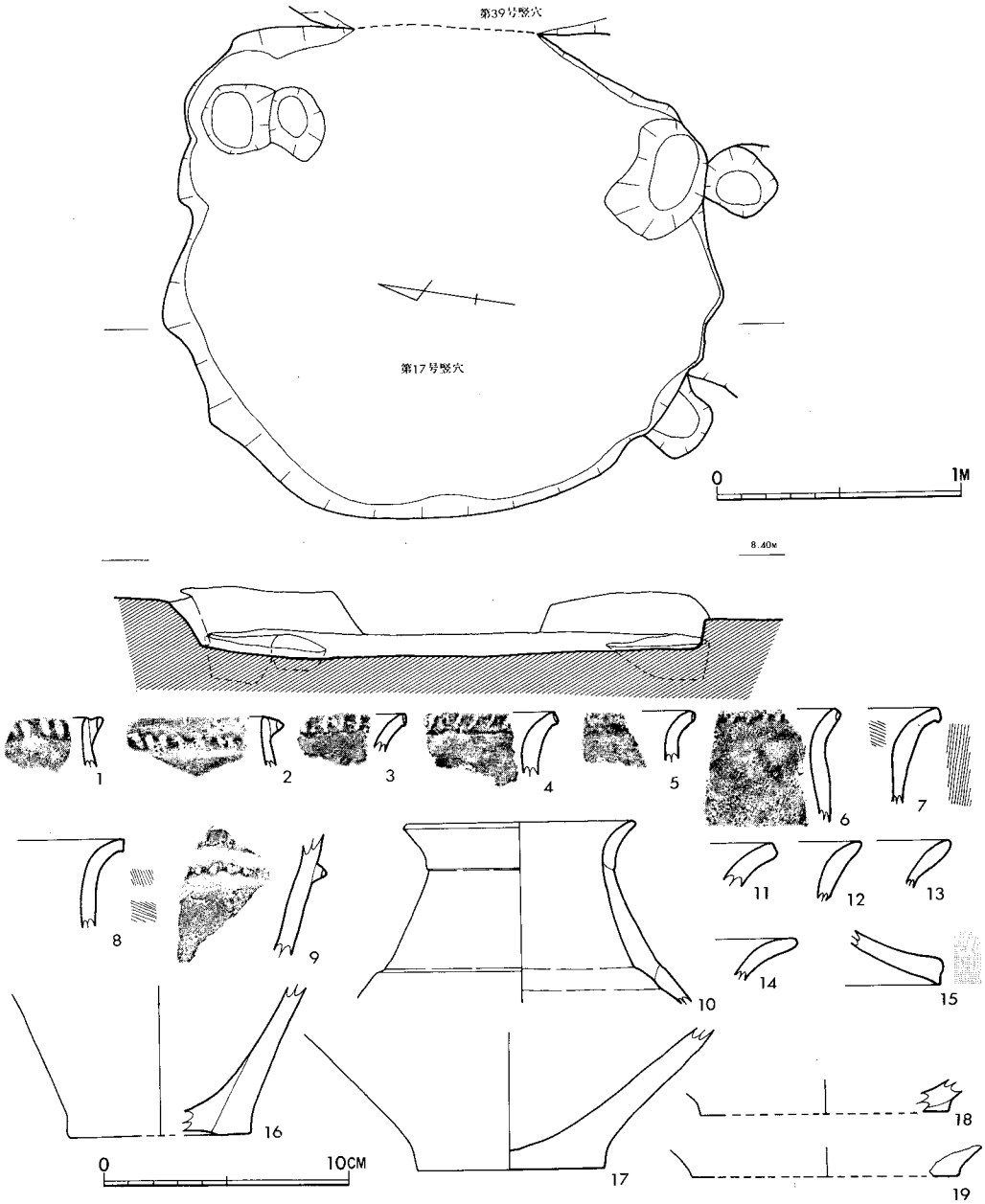


Fig. 3・82　第17号竪穴および出土土器実測図

第17号（Fig. 3・82、3・83）

調査区ほぼ中央部に位置する。東側の一部を第39号竪穴と切り合っていたが、調査時に新旧関係を知ることは出来なかった。不整形ではあるが基本的には直径約220cmほどの円形と考えられる。現存の深さは約27cm。南側の一部は、後世のピットに切られ、埋土中には第40号甕棺墓が埋置されていた。内部にある3個のピットは竪穴に伴うものと思われるが、用途は不明である。壁残存部は袋状をなしていないが、南側の壁の様子から袋状竪穴であると推定できる。

出土土器（Fig. 3・82）

甕　夜臼式（1・2）　ともに刻目突帯をもつ口縁部である。2の突帯貼付部の上部は横なで調整。ともに石英粒砂を含み、焼成良好、赤褐色、黄褐色(1)、褐色(2)を呈する。

板付Ⅰ式（3～5）　ともに外反する口縁（如意形口縁）の端一杯に刻目を施す。4の口縁内外は横なで調整。すべて石英粒砂を含み焼成良好。暗褐色（3・4）、褐色(5)を呈する。

板付Ⅱ式（6～9）　6・8は外反する口縁（如意形口縁）をもつ。下端で刻目をもつのも(6)、外端が「コ」の字に近いもの（7・8）がある。7は内面の一部と外面、8は外面に刷毛調整、8は口縁内外横なで調整で、煤の付着も認められる。9は胴部で刻目突帯を巡らしている。胎土は石英粒砂を含むもの（6～8）と砂を含むが良好なもの(9)がある。焼成はともに良好。暗褐色（6・7・9）、黄褐色(8)を呈する。

壺　板付Ⅰ式（10・12）　外反する短い口縁部は口縁直下と、肩部で段がつく。肩部の接合部内側にも段がつき、その部位は横なで調整。12も口縁直下に段のつく外反する口縁部である。ともに胎土は石英粒砂を含むが良好。赤褐色(10)、暗褐褐色(12)を呈し焼成も良好。10は器面があれているため丹塗りであるかどうかは不明

板付Ⅱ式（11・13・14）　いずれも口縁部である。胎土に石英粒砂を含むもの(11)と、砂を含むが

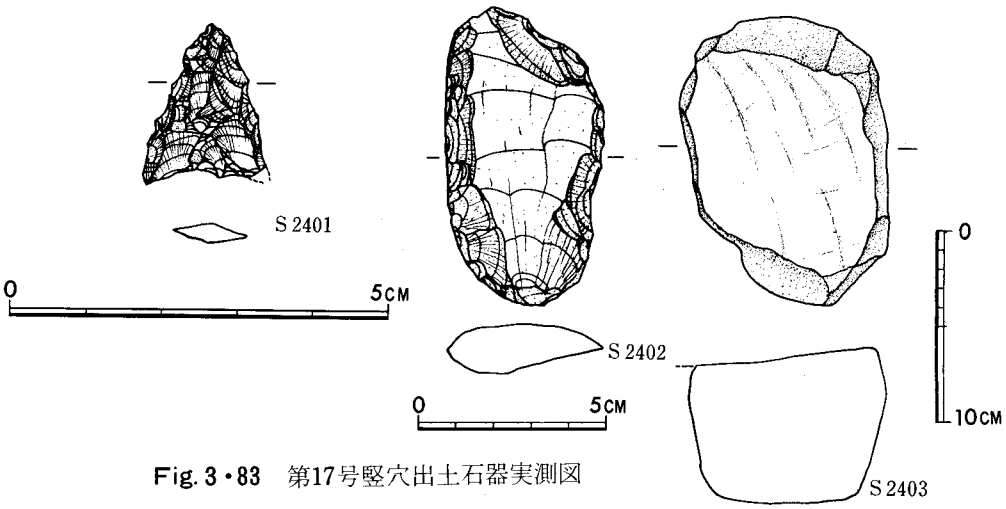


Fig. 3・83　第17号竪穴出土石器実測図

良好なもの（13・14）がある。焼成はともに良好で、赤褐色(11)、黄褐色(13)、褐色(14)を呈する。

底部　（16～19）　16は甕、17～19は壺であろう。16は若干上げ底を呈する。ともに石英粒砂を含み、焼成は良好。外面赤褐色、内面暗褐色(16)、黄褐色(17)、暗褐色(18)、黒褐色を呈する。

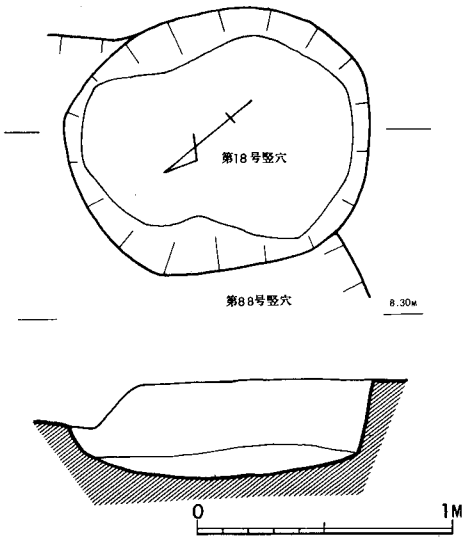
以上の所見より、この竪穴は板付II式の時期かそれより新しいと思われ、前期中葉～後葉のものと推定される。

出土石器（Fig. 3・83）

打製石鏃（S 2401）　黒曜石製で、基部が凹入し、表裏面をていねいに剝離する。0.9 g。

掻器（S 2402）　サヌカイト製の縦長剝片の縁辺に表裏から2次加工が加えられている。

砥石（S 2403）　砂岩製破片である。



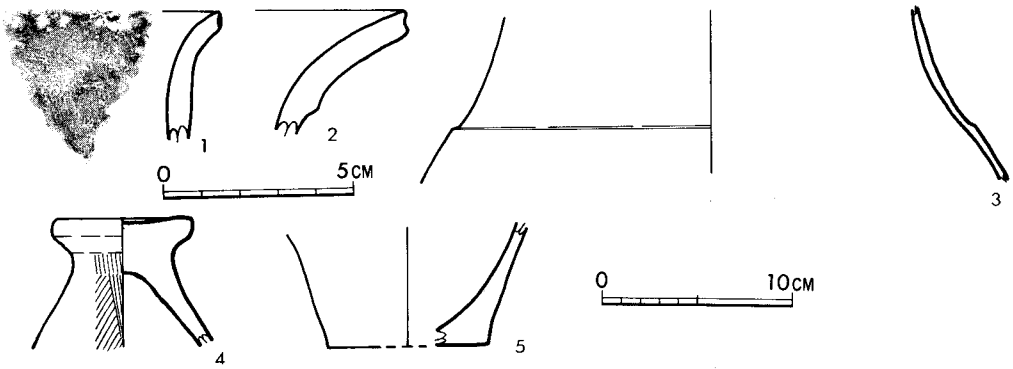


Fig. 3・84　第18号竪穴および出土土器実測図

第18号竪穴（Fig. 3・84）

調査区中央西側に位置する。第88号竪穴を切って作られている。南北約118cm、東西約104cmの楕円形を呈する。現存の深さ約38cmで、残存壁は袋状ではない。

出土土器（Fig. 3・84）

甕（1）外反する口縁の下端に刻目を施す。石英粒砂を含み、焼成はややあまい。外面暗褐色、内面暗黄褐色を呈する。

壺（２・３）２は外反する口縁端が沈線状に凹み、口縁直下に段がつく。口縁内外とも横なで調整。３は肩部で、接合部の外面に段がつき、内面には段がつかない。胎土に石英粒砂を含み、２は焼成良好で暗褐色。３は焼成はややあまく、外面暗赤褐色、内面黄褐色を呈する。

蓋（4）甕の蓋であろう。上面はやや凹み、外面は粗い刷毛目調整。石英粒砂を含み、焼成は良好。外面黄褐色、上面と、内面は灰褐色を呈する。

底部（5）平底の甕の底部である。胎土に石英粒砂を含み、外面淡赤褐色、内面暗黄褐色。焼成良好。

出土遺物は板付Ⅱ式の範疇に入るもので竪穴の時期も前期中葉～後葉と推定される。

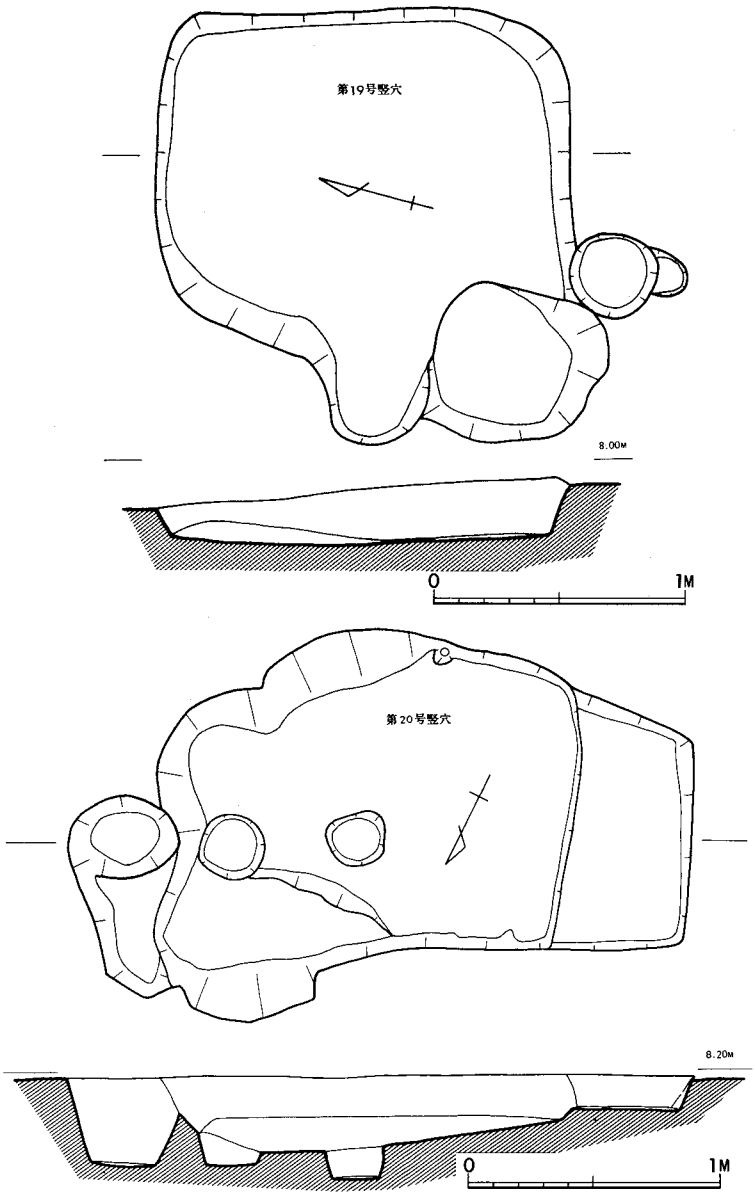


Fig. 3・85　第19号・第20号竪穴実測図

第19号竪穴（Fig. 3・85）

調査区南側で検出された。東壁中央に円形に近い張り出し部があるが基本的には南北約165cm、東西約140cmの長方形を呈するものと思われる。現存の深さ約24cm、残存部の壁は袋状をなしていない。南西部を後世のピットに切られている。出土遺物はまったくなかった。

第20号竪穴（Fig. 3・85）

調査区ほぼ中央に存在する。西側や、東北部などにかなりの撹乱をうけている。東西約165cm、南北約128cmの不整形を呈するが、西側の形状からみて方形あるいは長方形とも考えられ

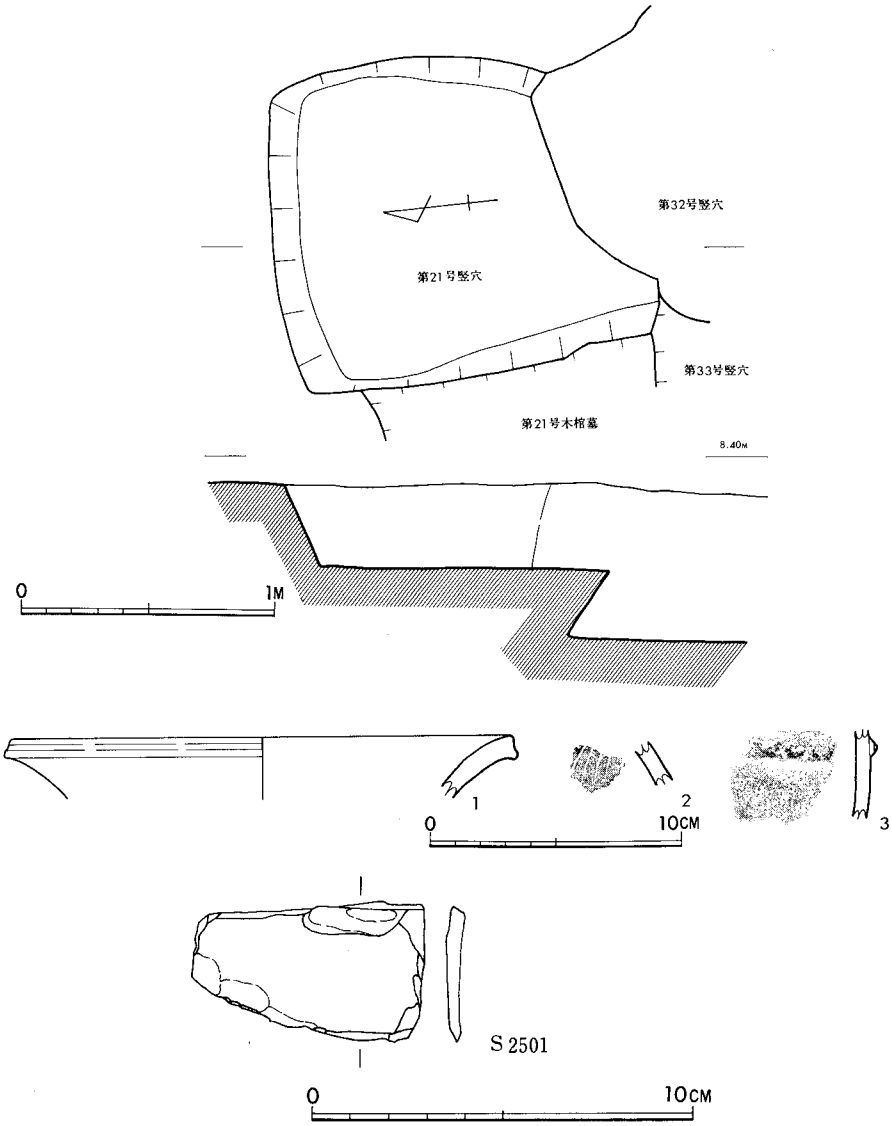


Fig. 3・86　第21号竪穴および出土土器・石器実測図

る。内部に存在するピットも後世のものである。現存の深さ約30cm、壁残存部は袋状をなしていない。

第21号竪穴（Fig. 3・86）

調査区中央東側に存在する。第32号竪穴に南側を切られ、第21・32号竪穴埋没後に第39号甕棺墓が埋置されていた。南北はわからないが、東西約130cmの長方形を呈するものと思われる。現存の深さ約33cm、残存した壁は袋状を呈していない。

出土土器（Fig. 3・86）

壺　（1・2）　1は外反する口縁端が凹む。口縁内外は横なで調整。2は肩部で小破片で不明だが羽状文でもあるのであろう。ともに石英粒砂を含み、焼成良好。赤褐色を呈する。

甕　(3)　甕の胴部である、刻目突帯一条を巡らし、外面は粗い刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。

これらの土器板付II式の範疇に入るものでこの竪穴の時期も前期中葉～後葉であろう。

出土石器（Fig. 3・86）

石庖丁　（S 2501）　未製品と思われる。磨研までは至っておらず外彎刃部は打裂によって成形され、背部は直線をなす。頁岩質の石材である。

第22号竪穴（Fig. 3・87）

調査区東側で検出された。東半部を欠失している。南北約110cmの不整形を呈するが基本的には胴張りの長方形か方形と推定される。内部南西隅に一個のピットが存在する。現存の深さ約16cm、残存部の壁は袋状ではない。

出土土器（Fig. 3・87）

甕　（1～4）　1・2は口縁部、3・4は胴部破片である。1は肥厚し外反する口縁の上・下両端に刻目を施し、その間は凹む。上端から外面残存部一杯に横なで調整。2は外反する口縁下端に刻目を施し、破片全体に横なで調整。3は刻目突帯、4は刻目のない突帯を巡らす。3は粗い刷毛目調整。石英粒砂を含み、焼成良好。それぞれ外面灰褐色、内面黄褐色(1)、外面淡暗褐色、内面赤褐色(2)、赤褐色(3)、淡暗褐色(4)を呈する。

壺　（5～7）　5は外反する口縁部上端内面に貼付けを行って肥厚させたものである。6は肥厚し外反する口縁が口縁下に段をもち頭部から肩部へとゆるやかに開く器形をもつ。7は外反する口縁が若干肥厚するが6の様に明瞭な段はつかない。器面磨研。胎土は砂混(5)、石英粒砂混（6・7）で焼成は良好。それぞれ黄褐色(5)、褐色(6)、外面淡褐色、内面黒褐色(7)を呈する。

鉢　(8)　直口し外に開く口縁の端が凹み、外面には刷毛目調整。石英粒砂を含み、焼成良好、暗赤褐色を呈する。

底部　（9～12）　9・10・12は甕、11は壺の底部である。9は底部に焼成後の穿孔があり、甑として利用されたものであろう。10は上げ底を呈する。11はいわゆる円盤貼付けの底部と思

われる。石英粒砂を含み、焼成良好。赤褐色(9・12)、褐色(10)、黒色(11)を呈する。

以上の土器は、若干古さを示すもの(11)や、若干新しさを示すもの(5)など存在するが、基本的には板付II式の新しい方の範疇に入るもので、前期後葉〜末の時期と考えられる。

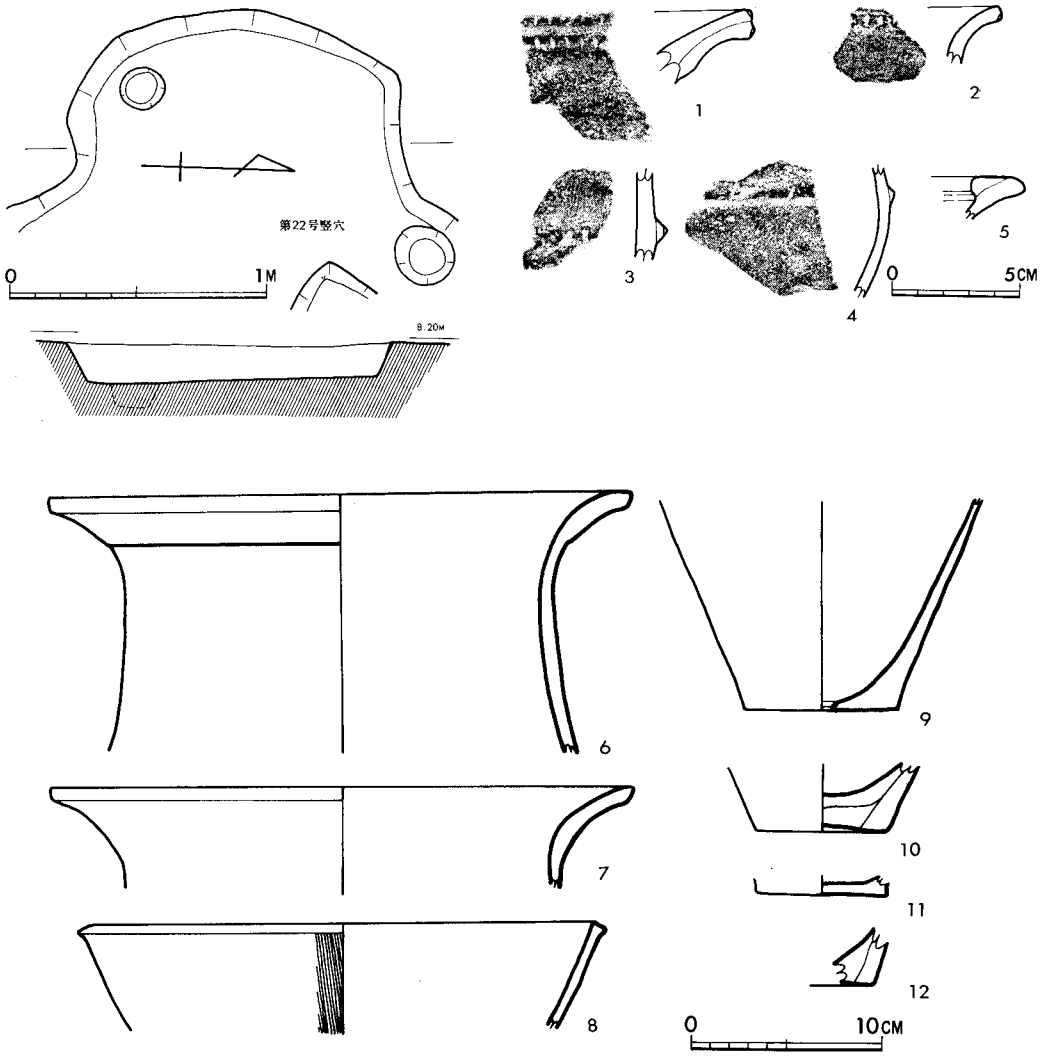


Fig. 3・87　第22号竪穴および出土土器実測図

第23号竪穴（Fig. 3・88）

調査区東側に位置する。東半分を第29号土坑墓などにより削平されている。東西は不明だが南北約237㎝の長方形であったと推察される。床面は北側の方が低くなる。西壁中央際に一個のピットが存在する。現存の深さ約28㎝、残存部の壁は袋状ではない。

出土土器（Fig. 3・88）

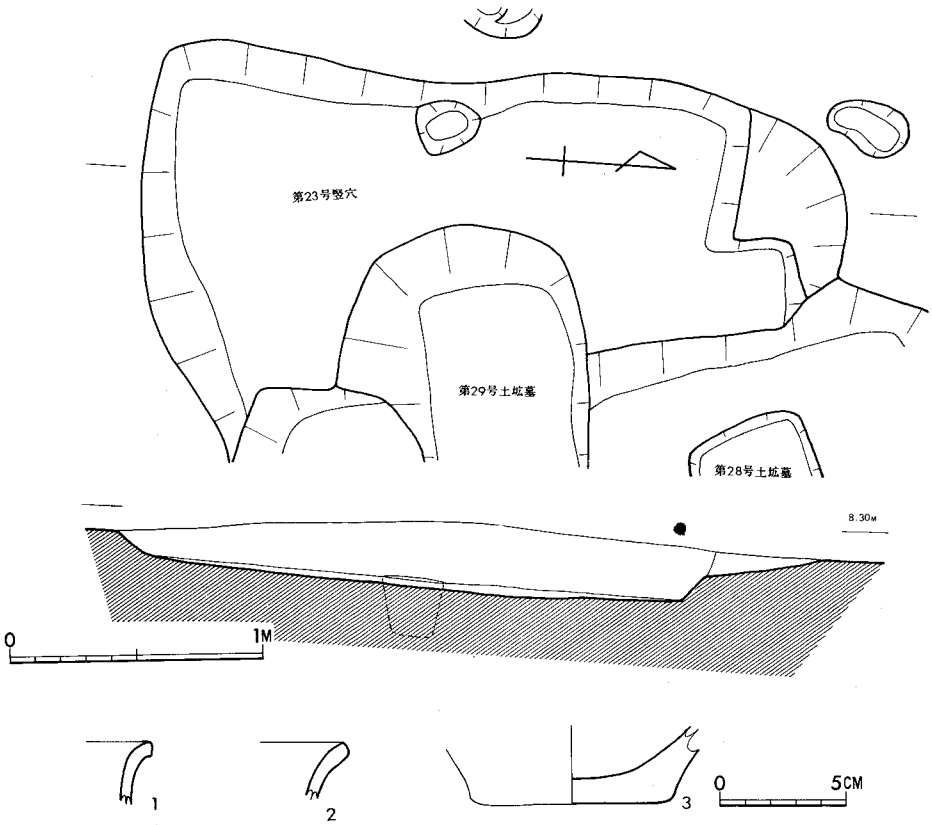


Fig. 3・88　第23号竪穴および出土土器実測図

甕　(1)　外反する口縁端が「コ」の字状になる。石英粒砂を含み、焼成良好。外面赤褐色、内面黄褐色。

壺　(2)　外反し、肥厚しない口縁部である。石英粒砂を含み、焼成良好。外面淡暗褐色、内面淡赤褐色を呈する。

底部　(3)　甕の底部と考えられる。石英粒砂を含み、焼成良好、暗黄褐色を呈する。

これらの土器は積極的に時期を決定するには、心もとない資料ではあるが、板付II式の範疇に入るものであり、前期中葉～後葉でもあろうか。

第24号竪穴（Fig. 3・89、3・90、PL. XIV）

調査区東側に位置する。本竪穴埋没後に、第63号甕棺墓、第8号木棺墓、第48号木棺墓が埋置されており、第63号甕棺墓が前期末であることから、それ以前のものと考えられる。南北約263cm、東西約290cmの、やや楕円に近い円形を呈する。現存の深さは約35cm、残存部の壁で袋状をなすところがあり、本来は袋状竪穴であったことが知られる。

出土土器（Fig. 3・89、3・90、PL. XXIV）

甕　夜臼式土器（1・2）　1は刻目突帯をもつ口縁部、2は貝殻条痕を施す胴部破片である。

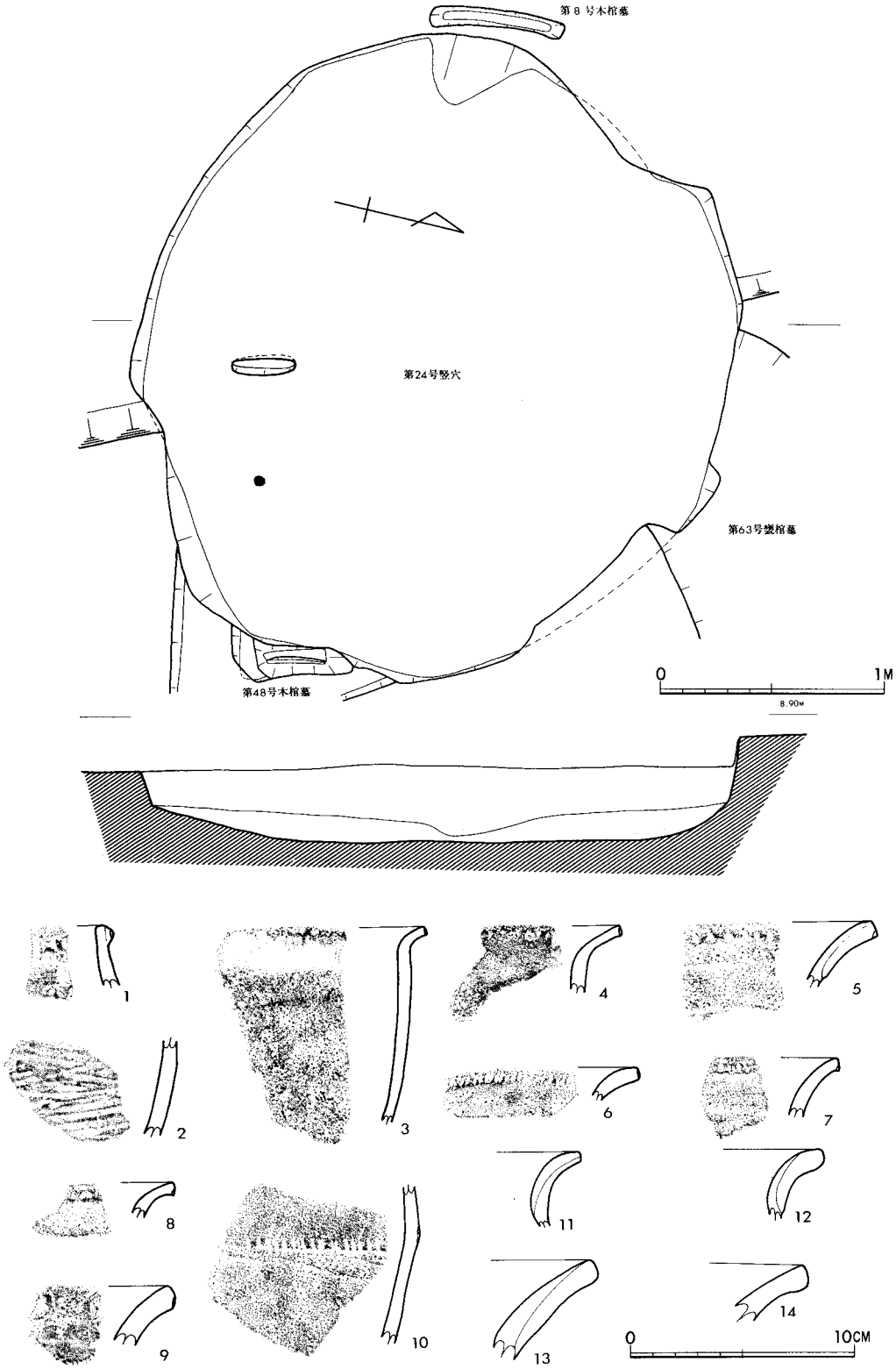


Fig. 3・89　第24号竪穴および出土土器実測図

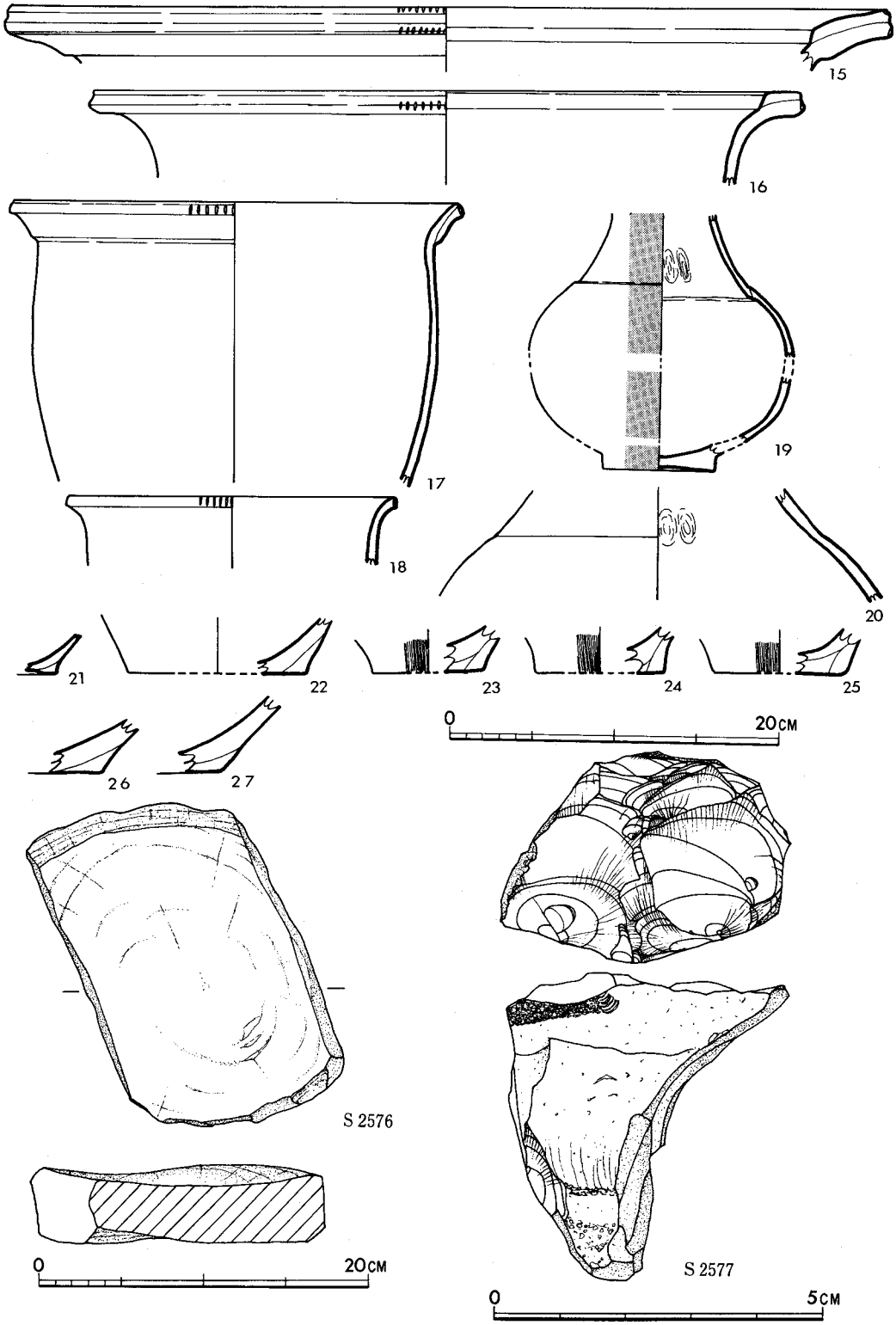


Fig. 3・90　第24号竪穴土器・石器実測図

1の突帯下にも条痕を施す。石英粒砂を含み、焼成良好、褐色を呈する。

板付Ⅰ式土器(6・10・18)　6・8は外反する口縁端縦一杯に刻目を施す。18は口縁内外に横なで調整。10は胴部破片で、浅い段状部がつき、そこに刻目を施す。ともに石英粒砂を含み、焼成良好。それぞれ赤褐色(6)、外面淡暗褐色・内面赤褐色(10)、外面黒褐色・内面暗褐色(18)を呈する。

板付Ⅱ式(3～5・7～9・15～17)　3～5・7～9は、外反する口縁の下端に刻目を施す。内外面に細い刷毛目調整をしたもの(7)や、口縁の外側に粘土を貼付け、口縁下に段をつけるもの(5)がある。15・16は大型の甕でともに外反する口縁上部に粘土を貼り付け、それぞれ口縁上、下両端(15)、下端(16)に刻目を施す。15の口縁上部は横なで調整。15は口縁下に段がつくが16はつかない。17は外反する口縁外側に粘土を貼付けたもので、口縁下の貼付け部に段がつく。口縁外端の刻目は貼付け部より下につけられる。やや張りのある胴部をもつ。

壺　板付Ⅰ式(11・12・19)　11・12は外反する口縁部でそれぞれ口縁内側(11)、外側(12)に粘土を貼付け肥厚させている。19は一部を欠失するが頸部以下の壺で、肩部の接合部の内・外両面に段がつき肥厚している。球形の胴部から、若干上げ底の円盤貼付けの底部へとつづく。頸部内側には指の押圧調整痕が残り、外面は丹を塗った形跡がある。胎土は石英粒砂混(11・12)、砂を含むが良好(19)で、焼成はすべて良好。暗褐色(11・12)、赤褐色(19)を呈する。

板付Ⅱ式(13・14・20)　13・14は大形の壺の口縁部であろう。20は肩部の接合部には内外ともに段は明瞭でない。内部には指の押圧痕が残る。石英粒砂を含み、焼成良好。淡褐色(13・20)、赤褐色(14)呈する。

底部　(21～27)　21・26・27は壺、その他は甕の底部と思われる。21は上げ底。外面に縦刷毛目調整のあるもの(23～25)がある。21は砂を含むが胎土良好。他は石英粒砂を含む。焼成は良好。それぞれ、暗褐色(21・22)、赤褐色(25・26)、外面赤褐色・内面暗褐色(23)、外面淡暗褐色・内面黒褐色(24)、外面黄褐色・内面と底部黒色(27)を呈する。

以上、夜臼式、板付Ⅰ式などの出土もあるが、基本的には板付Ⅱ式の出土が多く、甕棺墓との切り合いにより、この竪穴は前期中葉のものといえよう。

出土石器(Fig.3・90、PL.XXVIII)

石核　(S2577)　細長い黒曜石角礫を素材とし、3cm前後の剥離を行っている。

石皿　(S2576)　砂岩製のもので、中央のへこんだ部分の破片である。

第25号竪穴(Fig.3・91、3・92)

調査区中央やや南東側に存し、東側は未掘である。第77号竪穴と切り合っているが、調査中には新旧関係はつかめなかった。径約180cmの円形と推定される。現存の深さ約37cm、残存の壁は袋状をなしていない。なお西側、南西側のピットは後世のものである。

出土土器(Fig.3・91、3・92、PL.XXV)

甕　夜臼式土器(1)　1は刻目突帯を巡らす口縁部で、胎土に若干の砂を含み、焼成良好、褐色を呈する。

板付Ⅰ式(6)　短く外反する口縁から、張りの少い胴部へと続き鉢に近い器形をもつ。外面には粗い刷毛目調整。石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。

板付Ⅱ式（2・3・5）2は外反する口縁の下端に刻目を施す。内面上部は刷毛目調整。3は口縁部を欠くが、口縁下に一条の沈線が巡り、外面は縦刷毛目調整。煤の付着が認められる。5は外反する口縁から、わずかに張る胴部へと続く。口縁下に指の押圧調整痕が残る。以下の外面は刷毛目調整。ともに石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈するが、5の内部は赤褐色。

壺　板付Ⅱ式(4)　4は胴上半部の破片で、肩部に若干の段がつき、その下に浅い三本の沈線が巡る。さらにその下にいわゆる下弦重弧文が施される。胎土は若干の砂を含むが良好、赤褐色を呈し、焼成も良好。

中期初頭～前葉の土器（7～9）　これらの土器は埋土中に見いだされたもので本竪穴に伴うものかどうかは疑問が残る。7は胴部で上半部と中位にそれぞれ一条の三角突帯が巡る。突帯貼付部位は横なで調整。8は、いわゆる鋤状口縁の初期的な形状を有し、やや外傾する。胴部の最大径部位に一条の三角突帯を巡らす。口縁周辺と、突帯貼付部位は横なで調整。頸部は棒状の工具で縦なで調整。肩部内側には指の押圧調整。突帯下に、焼成後外からの穿孔がある。

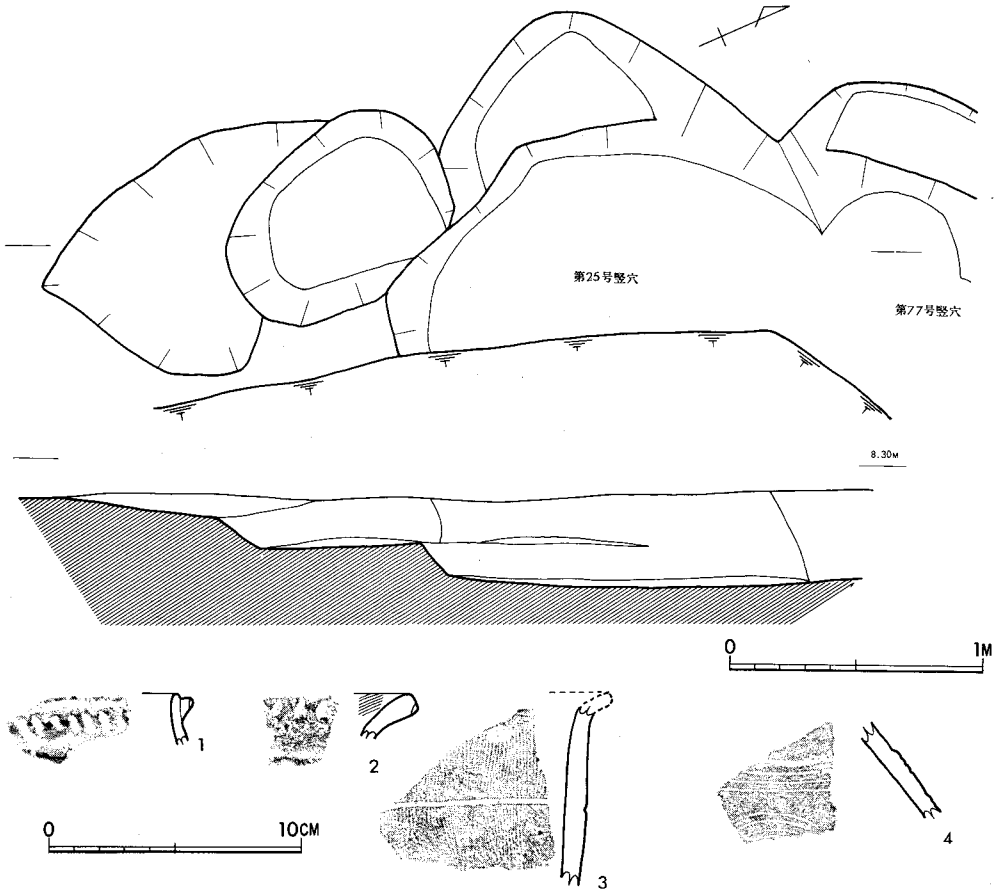


Fig. 3・91　第25号竪穴および出土土器実測図

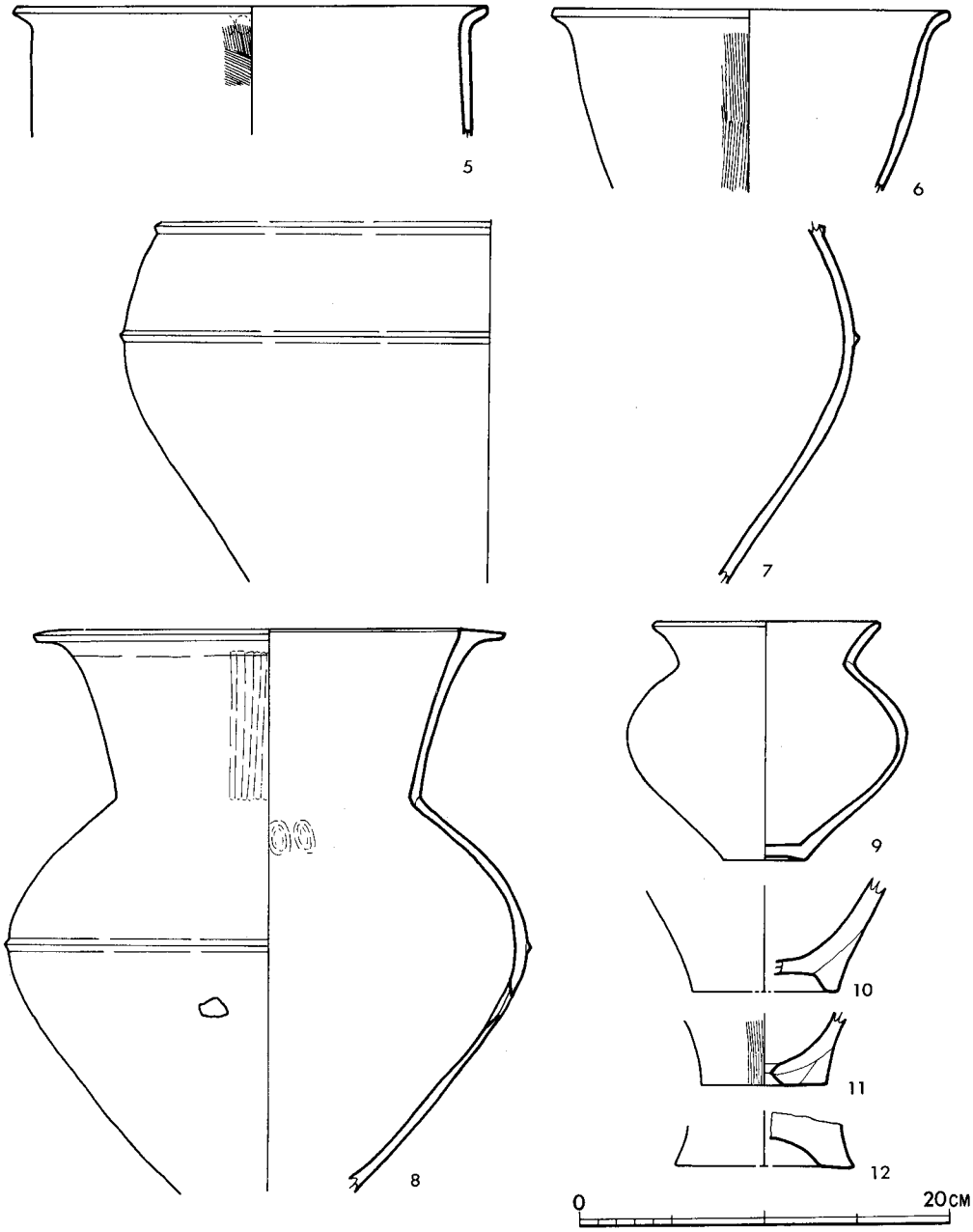


Fig. 3・92　第25号竪穴出土土器実測図

9は短く外反する口縁から、胴部が張り、若干上げ底の底部へと続く小形の壺である。胎土は7・8が石英粒砂を含み、9は砂を含むが良好。焼成も良好。暗褐色、赤褐色(7・8)、黄褐色(9)を呈する。これらの土器は前述したように本竪穴に伴うものとするには躊躇する。特に8は胴下半部に焼成後の穿孔をもち、あるいは甕棺とも考えられる。その場合9は、金隈27号甕棺墓の例(註)などから副葬品とも推察されるが、地山削平の際の撹乱が甚しいためにいずれと

も言い難い。

底部（10～12）10・12は上げ底、11は甑である。11の穿孔は焼成後のものであり外面は縦刷毛目調整。砂（10・11）と石英粒(13)を含み、焼成良好。それぞれ、褐色(10)、暗褐色(11)、赤褐色(12)を呈する。

註　1970年に調査された金隈29号甕棺墓は小児用壺の単棺であり墓坑中に三個の壺が副葬されていた〔折尾1971〕。

第26号竪穴（Fig. 3・93）

調査区北側に存在する。第74号竪穴と切り合っている。新旧関係は、はっきりとつかめなかったが、第74号竪穴の方がやや新しい様でもある。南北約141cm、東西約124cmの方形に近いプ

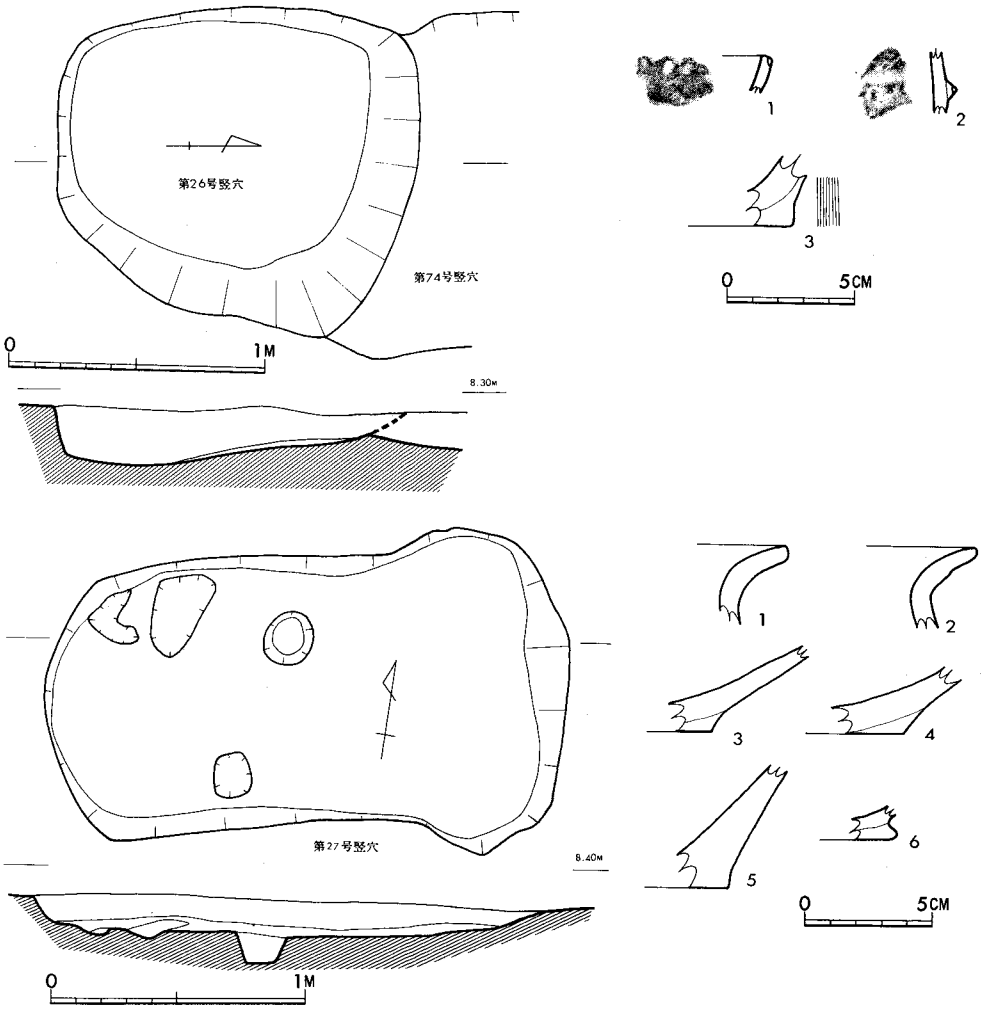


Fig. 3・93　第6号・7号・8号竪穴および出土土器実測図

ランをもち、現存の深さ約23cm、南側の床面の方が低い。残存の壁は袋状をなしていない。

出土土器（Fig. 3・92）

甕　（1・2）　1は直口する口縁外端に刻目を施したものである。2は胴部破片で刻目突帯を巡らす。いずれも夜臼式のものであろう。

底部　(3)　3は甕の底部で、外面が刷毛目調整。板付Ⅰ式のものであろうか。

以上よりこの竪穴は前期前葉のものと考えられる。

第27号竪穴（Fig. 3・93）

調査区中央北寄りに位置する。平面プランは東側が広くなり「T」字形に近い。東西約205cm、南北約108cm、東側の広くなった部位で約130cmであり、現存の深さは約15cm。残存の壁では袋状はなしていない。内部にピットが4個ほどあるが中央に近いものの他は浅い凹み程度のものである。

出土土器（Fig. 3・93）

甕　（1・2）　ともに強く外反する壺の口縁部で、2は外端に近い方が細くなり、その部位で段がつく。1・2ともに横なで調整。石英粒砂を含み、焼成良好、暗褐色を呈する。

底部　（3～6）　3・4は壺、5・6は甕の底部と思われる。胎土に石英粒砂（3～5）、砂(6)を含み、焼成良好。それぞれ、外面暗赤褐色、内面黄褐色(3)、外面淡黒褐色、内面黄色(4)、外面赤褐色、内面黄褐色(5)、外面黒褐色、内面黄褐色(6)を呈する。

これらの遺物は板付Ⅱ式の範疇に入るもの（6を除く）で、時期も前期中葉以降のものであろう。

第28号竪穴（Fig. 3・94、3・95）

調査区ほぼ中央に位置する。第55号竪穴と切り合うが、調査中には新旧関係は不明であった。南北推定約210cm、東西約160cmの長方形をなし、現存の深さは約38cm。残存の壁は袋状をなしていない。

出土土器（Fig. 3・94、3・95）

甕　夜臼式(1)　口縁に接して一条の刻目突帯を巡らす土器で、胎土に砂を含み焼成良好、暗褐色を呈する。

板付Ⅱ式(2)　胴部に一条の刻目突帯を巡らし突帯から上は縦刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。外面黒色、内面赤褐色を呈する。

壺　夜臼式（3・16）　外反する口縁部で、内面に丹塗りの痕が残る。外面は器面があれているため不明。胎土に砂を含み、焼成良好、赤褐色を呈する。16は肩部に沈線が入り、その部位が肥厚する。胎土・焼成は3と同じだが外面暗褐色、内面黒褐色を呈する。

板付Ⅰ式(12)　外反する口縁下に二条の沈線を巡らし、接合部である肩部には、内外面とも段を有し張りの強い胴部へと続く。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。黄褐色を呈するが、内外面とも一部黒褐色。

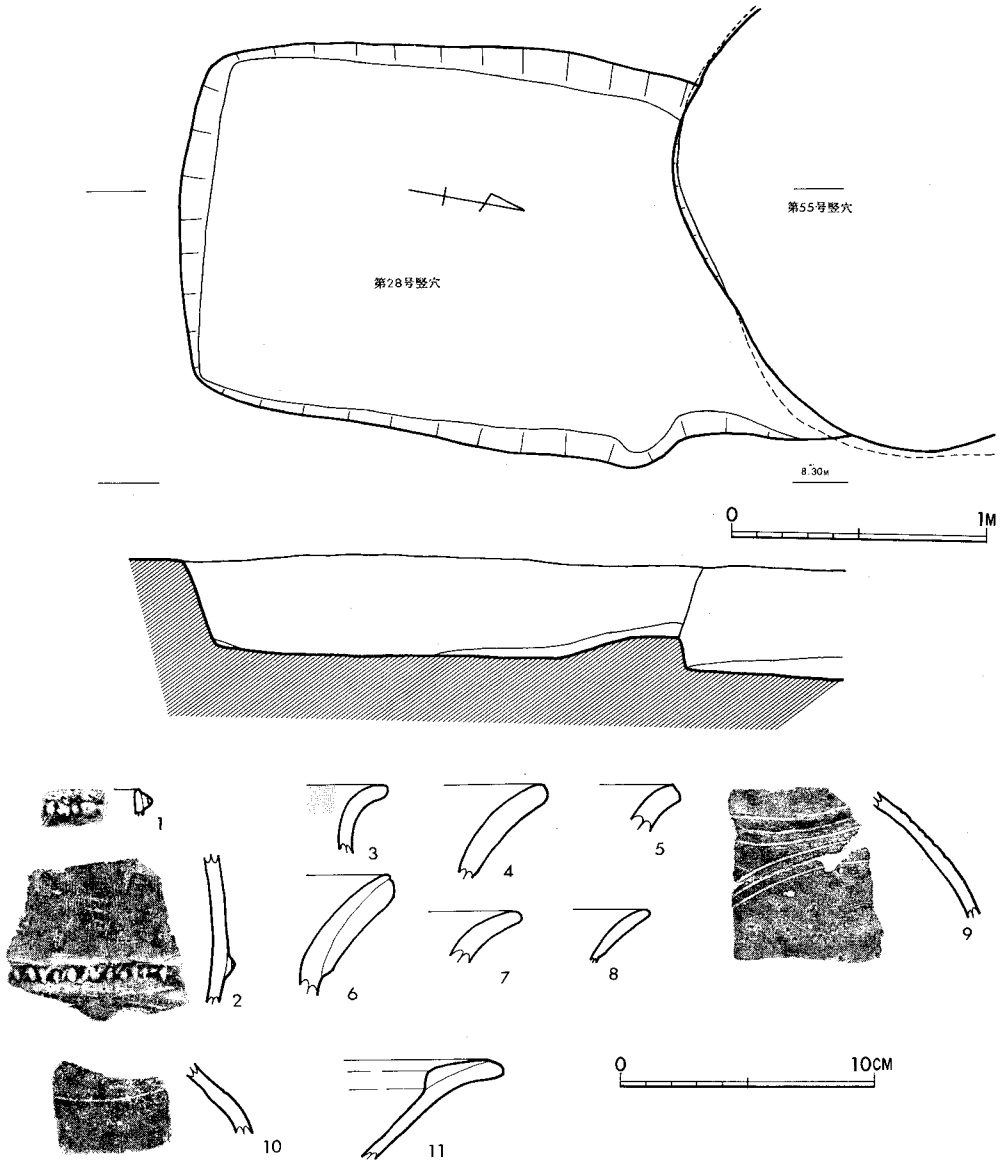


Fig. 3・94　第28号竪穴および出土土器実測図

板付Ⅱ式(4～9・13)　4～8・13は外反する口縁部で、外面に粘土を貼付けて肥厚させたもの（6・13）とそうでないもの（5・7）がある。4・8は貼付け部は明確ではないが、口縁下に段がつくのであるいは前者の類であろうか。ともに胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。それぞれ褐色(4・8)、暗褐色(5・7)、黄褐色(6)、赤褐色(13)を呈する。9は胴上半部破片で、三本の沈線を巡らした下に三本単位の下弦重孤文を施している。胎土は砂を含むが良好。焼成も良好。外面黒色、内面赤褐色を呈する。

底部　（14～16）　14は壺、15・16は甕と思われる。16の外面は刷毛目調整。ともに石英粒砂を含み、焼成良好。それぞれ、外面暗褐色・内面淡暗褐色(14)、外面暗褐色・内面赤褐色(15)、外面赤褐色・内面暗褐色(16)を呈する。

高坏　(11)　外反する口縁上部に粘土を貼付けて肥厚させている。石英粒砂を含み、焼成良好。外面黄褐色、内面暗褐を呈する。板付II式であろう。

以上の所見より、この竪穴の時期は、前期後葉に比定できよう。

出土石器（Fig. 3・95、PL. XXVIII）

尖頭状石器　（S 2676）　サヌカイト製である。石鏃の下半部が欠失したような形状をもつが、

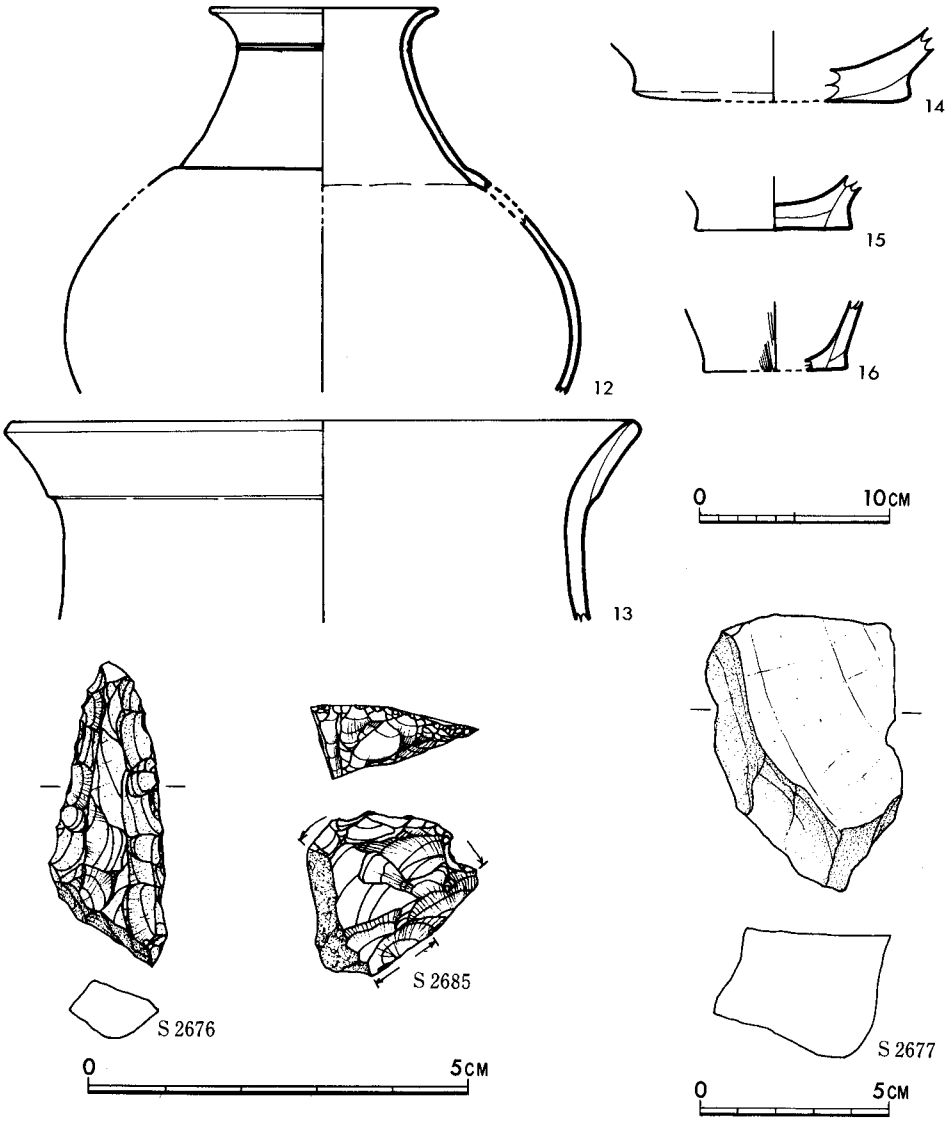


Fig. 3・95　第28号竪穴出土土器・石器実測図

他例に、同様な形に調整したものもあり、尖頭器のような役割を果たしたのであろう。

掻器　（S 2685）　良質の黒曜石の剝片を使用している。表面には一部自然面が残り、先端に二次加工が加えられ、エッジは磨耗している。裏面の打面近くには使用痕らしいものがみられる。

砥石　（S 2627）　砂岩製である。

第29号竪穴（Fig. 3・96）

調査区やや北寄りに位置する。ほとんどを削平されているため大きさなどは不明。北壁の東寄りを第45号甕棺墓によって切られている。現存の深さは約14cm、残存の壁は袋状をなしていない。

出土土器（Fig. 3・96）

壺　(1)　肩部に二条の浅い沈線を巡らす。接合部は若干肥厚する。胎土は砂粒を含むが良好。

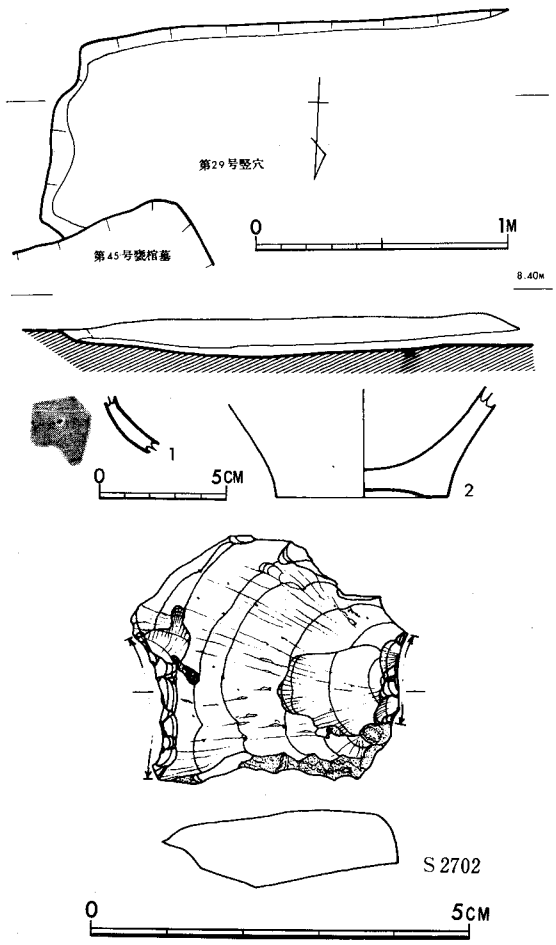


Fig. 3・96　第29号竪穴および出土土器・石器実測図

焼成も良好。赤褐色を呈する。

底部 (2) 上げ底の底部で甕であろう。石英粒砂を含み、焼成良好。外面赤褐色、底面の一部黒褐色、内面黒色を呈する。

この竪穴の時期は出土土器が少いためにはっきりしたことはいえないが、前期中葉〜後葉であろうか。

出土石器 (Fig. 3・96)

剝片石器 (S 2702) 黒曜石の剝片を利用し、打面と、先端に内彎するように二次加工を加えている。

第30号竪穴 (Fig. 3・97)

調査区南側に位置する。南北約193cm、東西約148cmの不整形を呈する。現存の深さ約18cm、残存の壁は袋状をなしていない。

出土土器 (Fig. 3・97)

甕 短い外反する口縁からゆるい張りのある胴部へと続く甕で口縁端は「コ」の字に近い。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。外面黒色、一部暗黄褐色、内面褐色を呈する。板付II式の範疇に入るものであろう。

この竪穴の時期は前期中葉のものであろう。

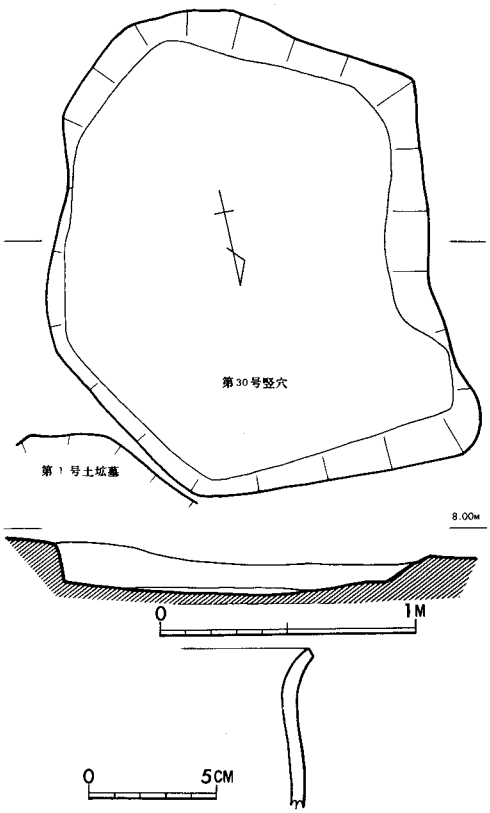


Fig. 3・97　第30号竪穴および出土土器実測図

第31号竪穴（Fig. 3・98）

調査区南側に存在する。南北約285cm、東西約165cmの隅丸長方形のプランを呈する。現存の深さ約23cm、残存部の壁は袋状をなしていない。西壁南寄りと、内部南壁寄りに後世のピットがある。

出土土器（Fig. 3・98）

甕　(1)　1は直口する口縁外側に粘土紐を貼付け、その上に刻目を施したもので、胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、暗褐色を呈する。

底部　(2)　甕の底部と思われる。石英粒砂を含み、焼成良好、暗褐色を呈し、内面は煤の付着のため黒褐色を呈する。

以上の土器は板付II式でも新しい範疇に入るもので、前期後葉～終末のものであろう。

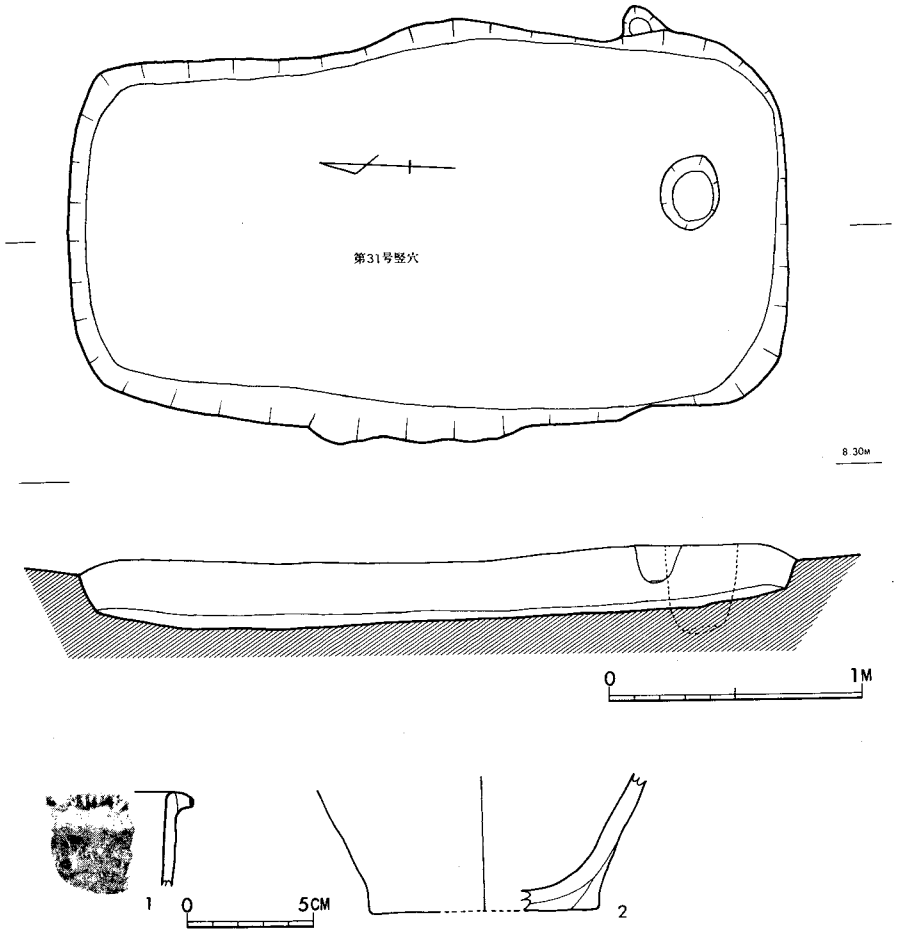


Fig. 3・98　第31号竪穴および出土土器実測図

第32号竪穴（Fig. 3・99、3・100、PL. XIV）

調査区中央やや東寄りに位置する。第33号竪穴、第35号竪穴、第21号竪穴を切って作られており、一部を第39号甕棺墓に切られている。底面で径約180cmの円形をなし、現存の深さ約53cm。壁は袋状をなす。

出土土器（Fig. 3・99、3・100）

甕　板付Ⅰ式(1)　外反する口縁の端の縦一杯に刻目を施し、外面は刷毛目調整。内面の口縁下には指の横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。外面暗褐色、内面黄褐色を呈する。

板付Ⅱ式（2～7・9・10・12）　すべて石英粒砂を含み焼成は良い。2～4・6は外反する口縁の下端に刻目を施す。2は外面横なで調整。内面は刷毛目調整。暗褐色を呈する。3は口縁下に一条の刻目突帯を巡らし、外面は縦刷毛目調整。内面は上部のみ横刷毛目調整。突帯貼付部は横なで調整。暗褐色を呈する。4は外面横なで調整、内面は刷毛目調整。外面赤褐色、内面黄褐色を呈する。6は口縁上部に粘土を貼付けて肥厚させている。赤褐色を呈する。5は口縁外側に高い三角突帯を貼付け、その上に小さな刻目を施す。その突帯貼付部から内面にかけては横なで調整。外面突帯下は縦刷毛目調整。暗褐色を呈する。7は器面のあれが著しいが、口縁部と胴上半部に突帯を貼付けたもので、刻目があるかどうかは不明。暗褐色を呈する。9は刻目突帯一条を巡らしている胴部破片で、外面は刷毛目調整の痕が残る。外面暗褐色、内面赤褐色を呈する。10は6の口縁部に似るが、刻目はつかない。淡黄褐色を呈する。器面があれているため調整は不明。12は器形は3に似るが、口縁端の刻目が口縁一杯につけられ、胴部突帯の刻目も、3に比べて深い。外面刷毛目調整後　突帯を貼付け、その後に横なで調整。内面口縁下に斜めの刷毛目調整。外面褐色、内面赤褐色を呈する。

壺　(8)　外反する口縁で、全体的に篦磨研が施され、胎土は石英粒砂を含むが良好。焼成も良好で赤褐色を呈する。板付Ⅱ式であろう。

鉢　(11)　外反する口縁からゆるやかに反転してすぼまる。口縁下端に刻目を施し、胴の反転部にも一条の刻目突帯を巡らす。口縁端と突帯貼付部は横なで調整だが、その間と、内面の上部は刷毛目調整。外面の突帯より下部は篦状の工具で磨研している。石英粒砂を含み、焼成良好。外面赤褐色～暗褐色、内面灰褐色～黒褐色を呈する。板付Ⅱ式のものであろう。

底部　(13～17)　13～16は甕、17は壺の底部である。14の外面は刷毛目調整、17の外面は篦で磨研されている。ともに石英粒砂を含み、焼成良好。黒褐色(13)、褐色(14)、外面黒色、内面褐色(15)、赤褐色(16)、外面赤褐色、内面黒褐色(17)をそれぞれ呈する。

この竪穴は出土遺物と、切り合いにより、前期後葉～終末と考えられる。

出土石器（Fig. 3・100）

磨製石斧　（S 2776）　磨製石斧頭部破片で、今山産玄武岩製である。

砥石　（S 2777・S 2782）　ともに砂岩製の砥石片。

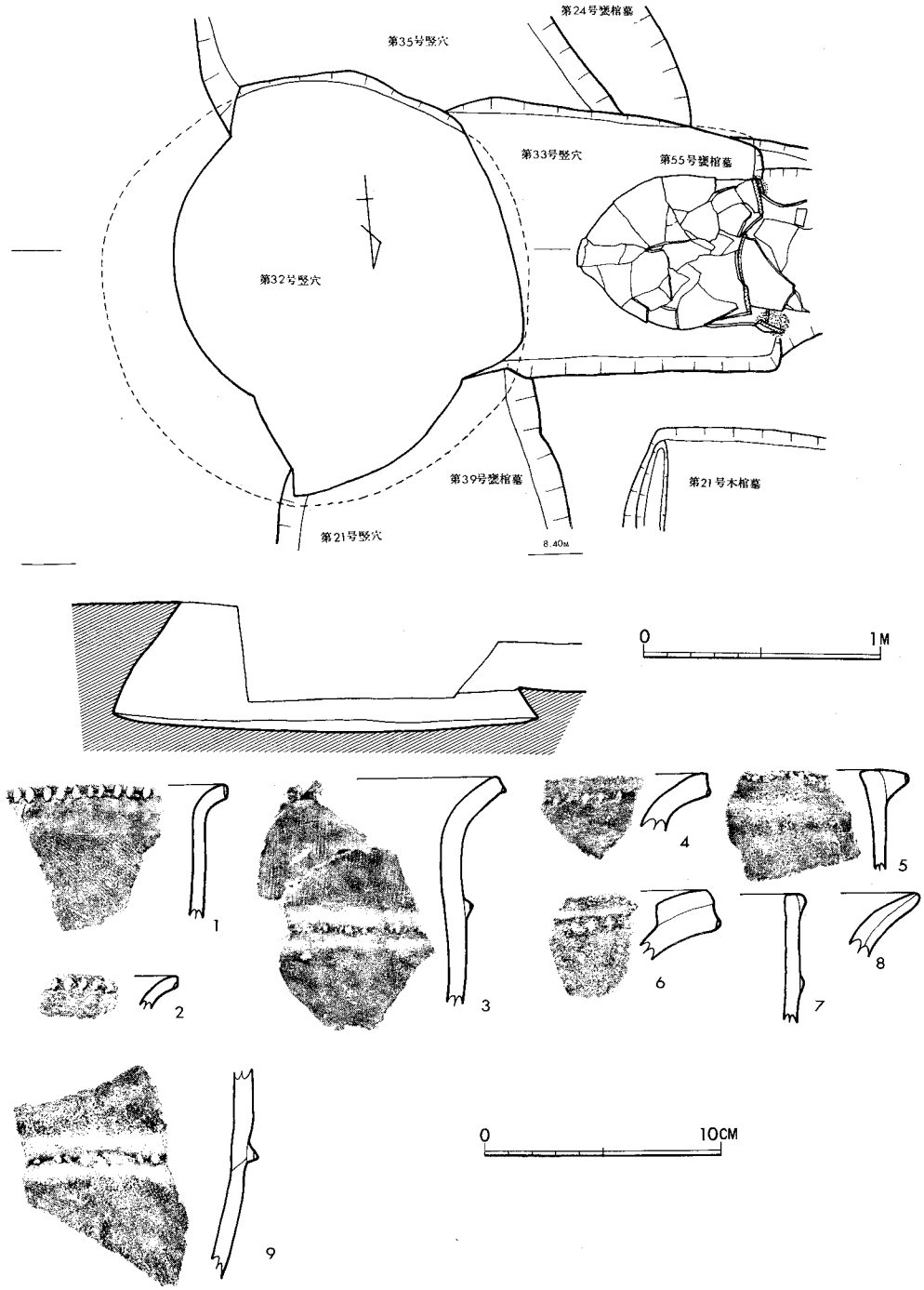


Fig. 3・99　第32号竪穴および出土土器実測図

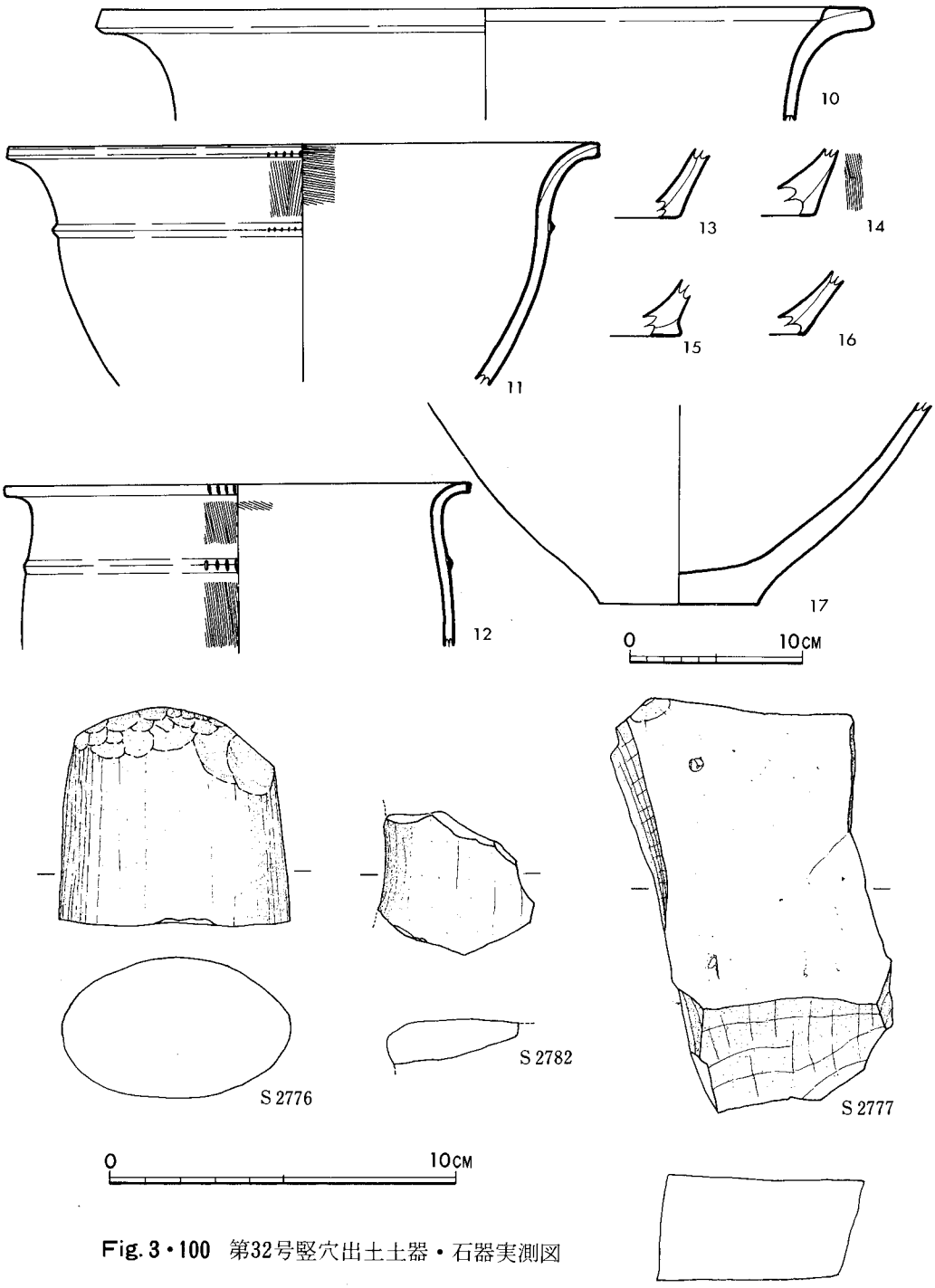


Fig. 3・100　第32号竪穴出土土器・石器実測図

第33号竪穴（Fig. 3・101）

調査区中央東側に存在する。第35号竪穴を切り、第32号竪穴、第21号木棺墓、第39号甕棺墓、第55号甕棺墓に切られていた。東西はわからないが、南北113cmの長方形をなすようである。現存の深さは約41cm、南西部の壁は袋状になっている。この竪穴の床面を掘り凹めて前述した第55号甕棺墓の下甕を埋置していた。

出土土器（Fig. 3・101）

甕（１・２・４）いずれも外反する口縁上部に粘土を貼付けて肥厚させ、口縁下端に刻目を施す。２はやや小形で、内面に横刷毛目調整。いずれも石英粒砂を含み、焼成良好。それぞれ黄褐色(1)、外面黄褐色・内面赤褐色(2)、赤褐色(4)を呈する。

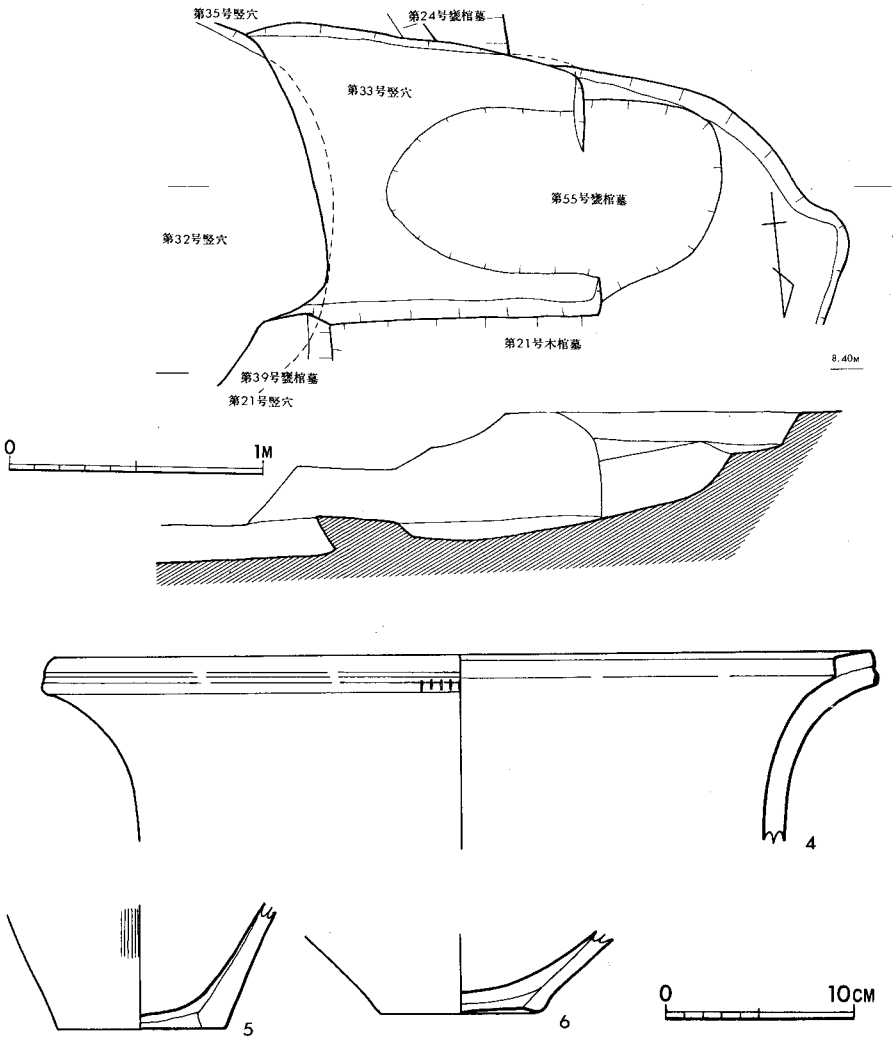


Fig. 3・101　第33号竪穴および出土土器実測図

甕　(3)　外反する口縁外側に粘土を貼付けて肥厚させ、外面は篦磨研、内面は横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、赤褐色を呈する。

底部　（5・6）　5は甕、6は壺の底部であろう。5は平底で外面刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。外面赤褐色・一部黄褐色、内面淡黒褐色・一部黄褐色を呈する。6は若干上げ底を呈する。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。黒色。

この竪穴は出土土器と、その切り合いにより、前葉後葉～終末の時期と考えられる。

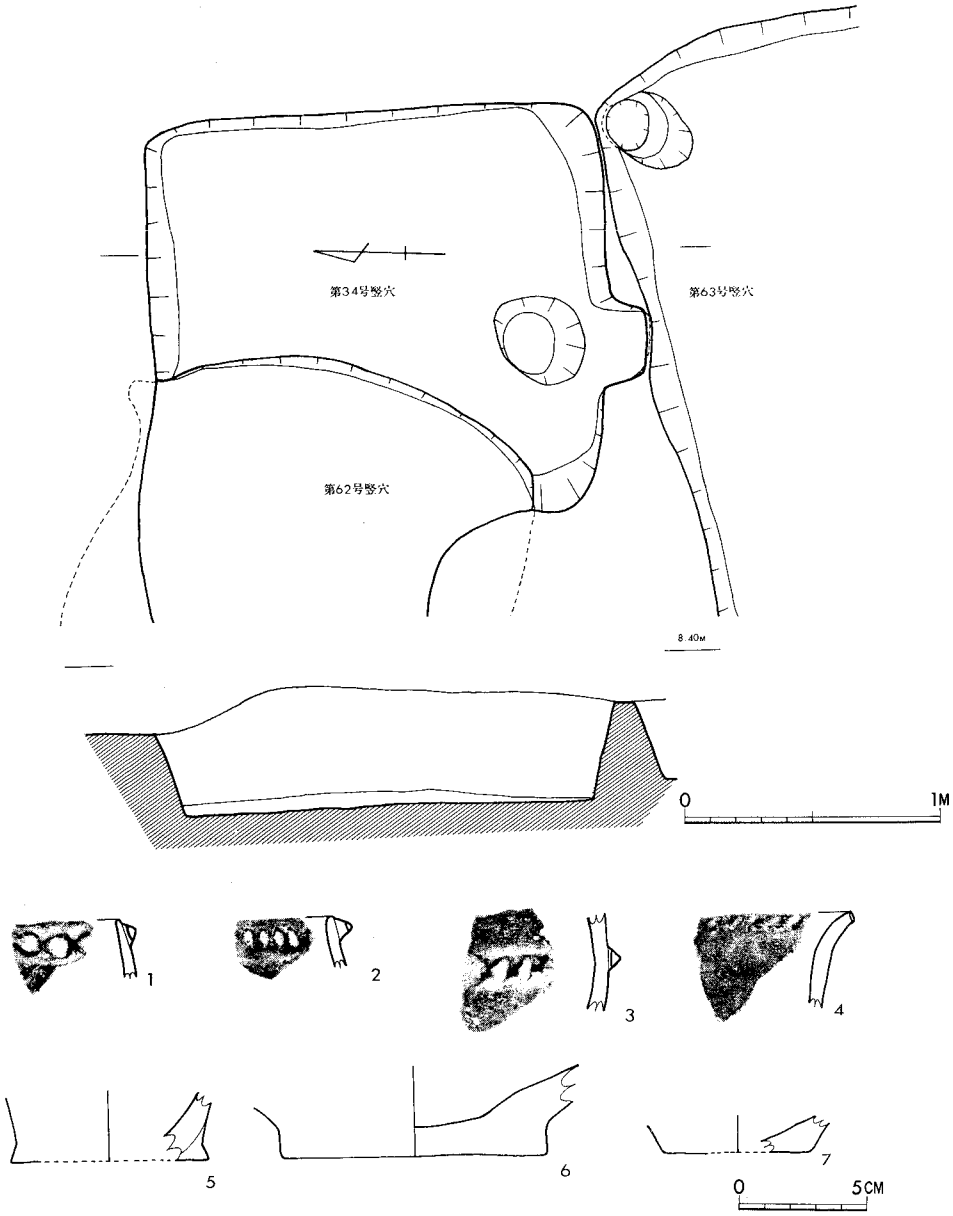


Fig. 3・102　第33号竪穴および出土土器実測図

第34号竪穴（Fig. 3・102）

調査区中央やや西側に位置する。南側で第63号竪穴に接し、西側を第62号竪穴に切られる。東西約162cmの方形に近いプランをもつ。南壁中央付近に約30cmの方形の張り出しがありその壁は一部袋状をなす。南北約181cm、張り出し部近くの内部にピット1個が存在する。現存の深さ約60cmをはかる。

出土土器（Fig. 3・102）

甕　夜臼式（1～3）　1・2は口縁に接して外側に突帯を貼付けて刻目を施したものである。3は胴部破片で、突帯を巡らしそれに刻目を施す。ともに石英粒砂を含み、焼成良好、暗褐色(1)、赤褐色（2・3）を呈する。

板付Ⅰ式(3)　外反する口縁端一杯に刻目を施す。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好・暗褐色を呈する。

底部　（5～7）　5は甕、6・7は壺の底部と思われる。ともに胎土に石英粒砂を含み、焼成は良いもの(5)と、あまりよくないもの（6・7）がある。褐色(5)、赤褐色（6・7）を呈する。

以上の遺物よりこの竪穴は前期前葉のものであろう。

第35号竪穴（Fig. 3・103）

調査区中央東側に位置する。第85号竪穴を切り、第46号土坑墓、第32号竪穴、第33号竪穴、第24号甕棺墓に切られている。南北はわからないが、東西約147cmの長方形プランをもつ。現存の深さ約46cm、残存の壁は袋状をなしてはいない。南壁際内部にピット1個が存在する。

出土土器（Fig. 3・103）

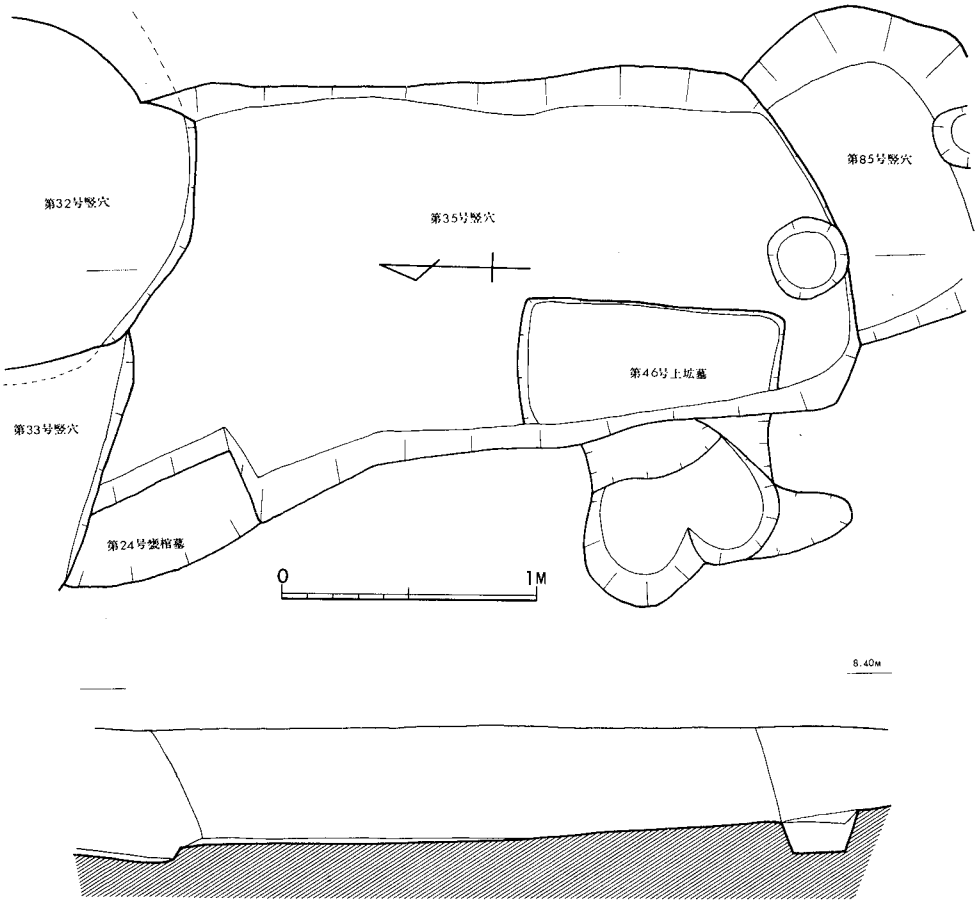
壺　夜臼式(1)　壺の胴上半部片である。外面は磨研され、内面は条痕。胎土には砂を含むが、焼成とともに良好。黒色を呈するが、外面の一部と内面は灰褐色を呈する。

板付Ⅰ式（2～4）　外反する口縁端一杯に刻目を施す。2は口唇部に沈線状に凹みがあり、横なで調整。3は、内面刷毛目調整。4の外面は横なで調整。胎土は石英粒砂を含むもの(2)、砂を含むもの（3・4）があり、焼成も良いもの（2・3）と、あまり良くないもの(4)がある。それぞれ暗褐色（2・3）、褐色(4)を呈する。

板付Ⅱ式（5～7）　5・6は外反する口縁端が「コ」の字を呈する。6は内面横なで調整。7は刻目突帯を巡らす胴部破片で、突帯貼付部は横なで調整。石英粒砂を含むもの（5・7）と若干の砂を含むもの(6)があり、焼成はともに良好。それぞれ外面黄褐色・内面赤褐色(5)、暗黄褐色(6)、外面暗褐色・内面褐色(7)を呈する。

底部　（8～10）　8・9は甕、10は壺の底部であろう。8は、若干上げ底で、木葉痕がつく。9も上げ底で外面に刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含むもの（8・9）と砂を含むが良好なもの(10)があり、焼成は良好。暗褐色(8)、外面褐色、内面は煤付着のため暗褐色から黒褐色(9)、赤褐色(10)を呈する。

以上の出土遺物と、切り合いにより、本竪穴は前期中葉に比定できよう。



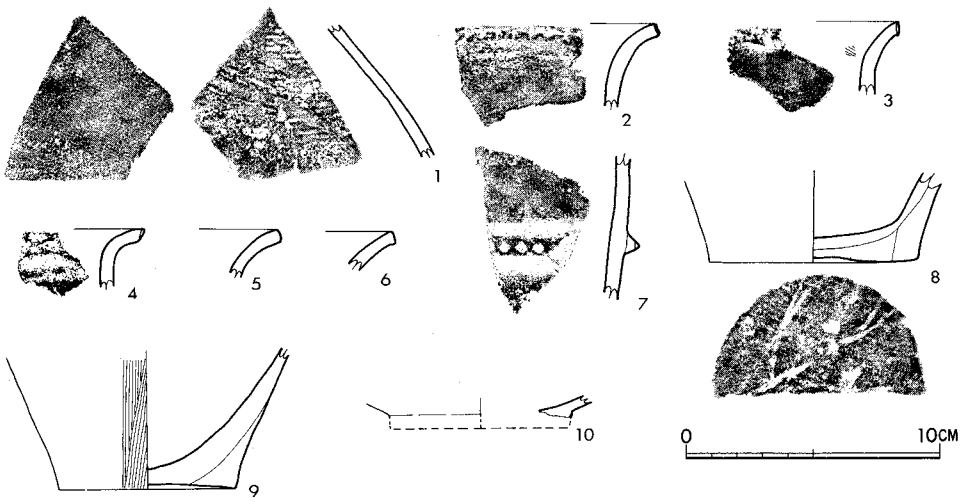


Fig. 3・103　第35号竪穴および出土土器実測図

第36号竪穴（Fig. 3・104、PL.XV）

調査区中央西寄りに存在する。南東隅を第19号土坑墓に切られている。北東隅も第1号竪穴から切られている。東西約320cm、南北約170cmの長方形を呈する。現存の深さ約37cm、残存の壁は袋状をなしていない。南壁には後世のピットがある。内部の北東隅には方形のピットが存在する。

出土土器（Fig. 3・104）

甕　(1)　胴部破片である。逆「く」の字形に反転する接合部に刻目突帯をつけたもので、器

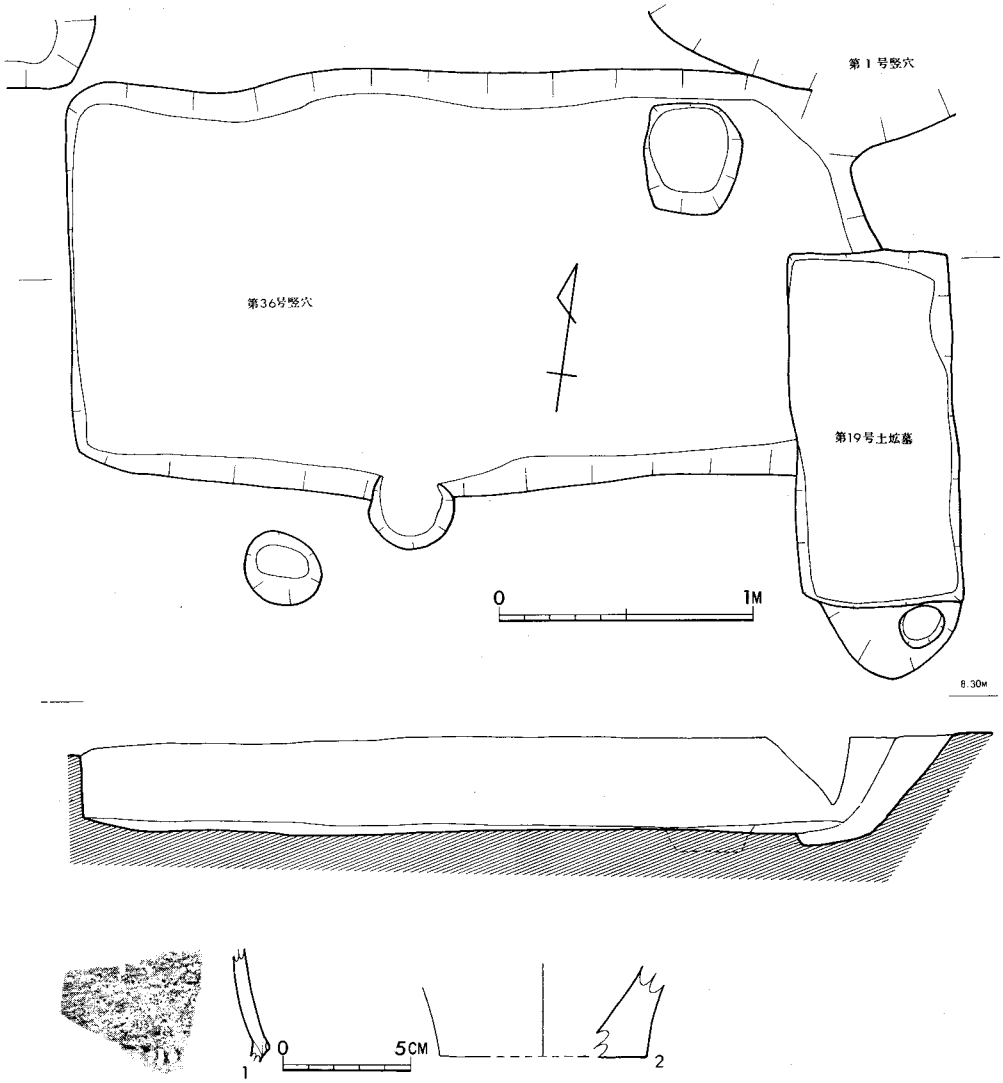


Fig. 3・104　第36号竪穴および出土土器実測図

表外面は貝殻条痕。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、暗褐色を呈する。夜臼式。

底部　(2)　甕の底部であろう。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。外面褐色、内面淡暗褐色を呈する。

この竪穴は前期前葉以降のものであろう。

第37号竪穴（Fig. 3・105）

調査区中央やや南寄りに位置する。東壁の一部を第14号甕棺墓に切られている。全体に撹乱が甚しく、東南隅や、北東隅、南壁東側から中央へかけての円形ピットなどは後世のものである。竪穴に伴うピットとしては、北東隅、南東隅のものも含めて四隅のものが、それである。南北約161cm、東西約260cmの長方形プランをもち、現存の深さ約11cm、残存の壁は袋状をなしていない。

出土土器（Fig. 3・105）

壺　(1)　壺の胴上半部片である。いわゆる有軸羽状文を施しており、石英粒砂を含み、焼成良好。外面黄褐色、内面黒褐色を呈する。板付Ⅰ式である。

底部　（２・３）　２は断面三角形の張り出しをもつ。３は上げ底である。ともに甕の底部である。石英粒砂を含み、焼成良好。外面赤褐色・内面黄褐色(2)、外面暗褐色・内面黄褐色(3)、を呈する。２は夜臼式の底部であろう。

この竪穴は前期前葉のものであろう。

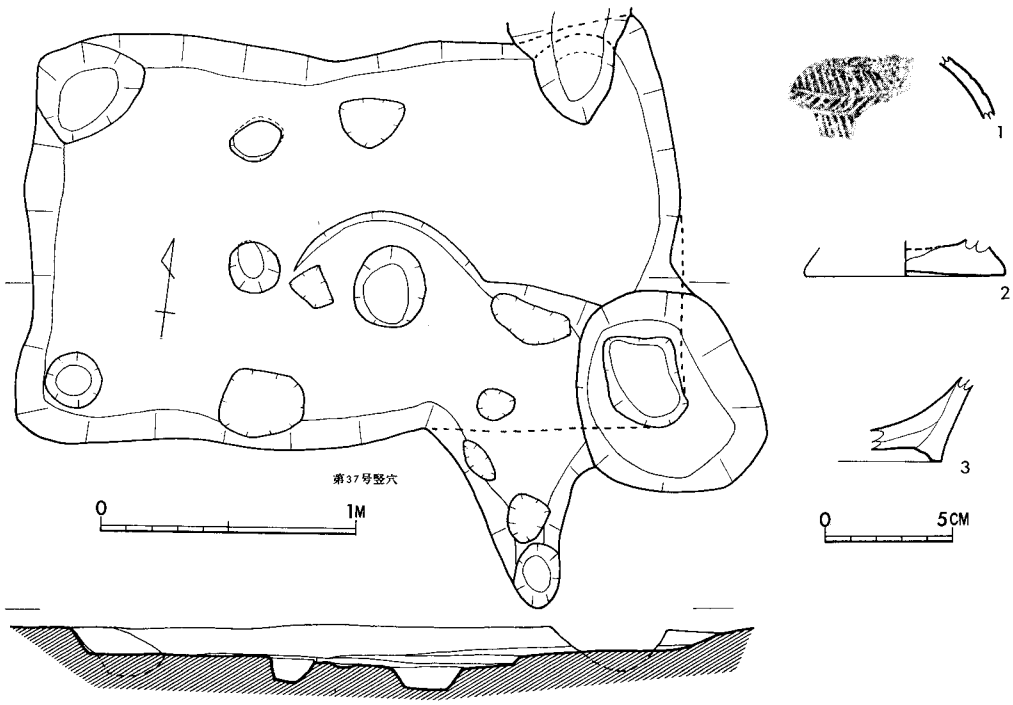


Fig. 3・105　第37号竪穴および出土土器実測図

第38号竪穴（Fig. 3・106）

調査区ほぼ中央やや東寄りに位置する。まわりに後世のピットが3個ほど存在する。第38号竪穴は南北約100cm、東西約120cmの不整形を呈する。現存の深さ約31cm、残存の壁は袋状をなしていない。内部南西隅に1個のピットが存在する。

出土土器（Fig. 3・106）

甕（1・2）　1は外反する口縁の下端に刻目を施し、口縁周辺は横なで調整。外面は縦刷毛目調整。2は外反する口縁が肥厚し、口縁下に段をもつ。口縁下端には刻目が施され、外面横なで調整。内面は横刷毛目調整。ともに石英粒砂を含み、焼成良好。淡暗褐色(1)、赤褐色(2)を呈する。

壺（3）　肩部で3本の浅く細い沈線が巡る。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。赤褐色を呈する。

この竪穴は前期中葉のものであろう。

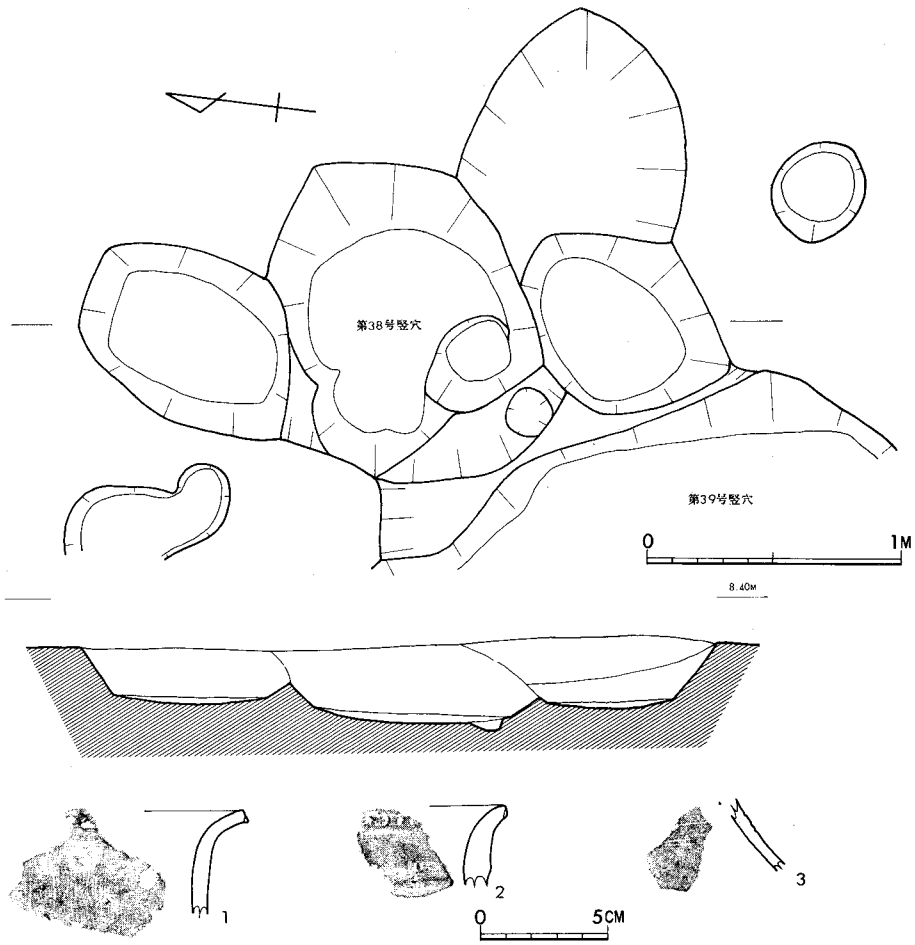


Fig. 3・106　第38号竪穴および出土土器実測図

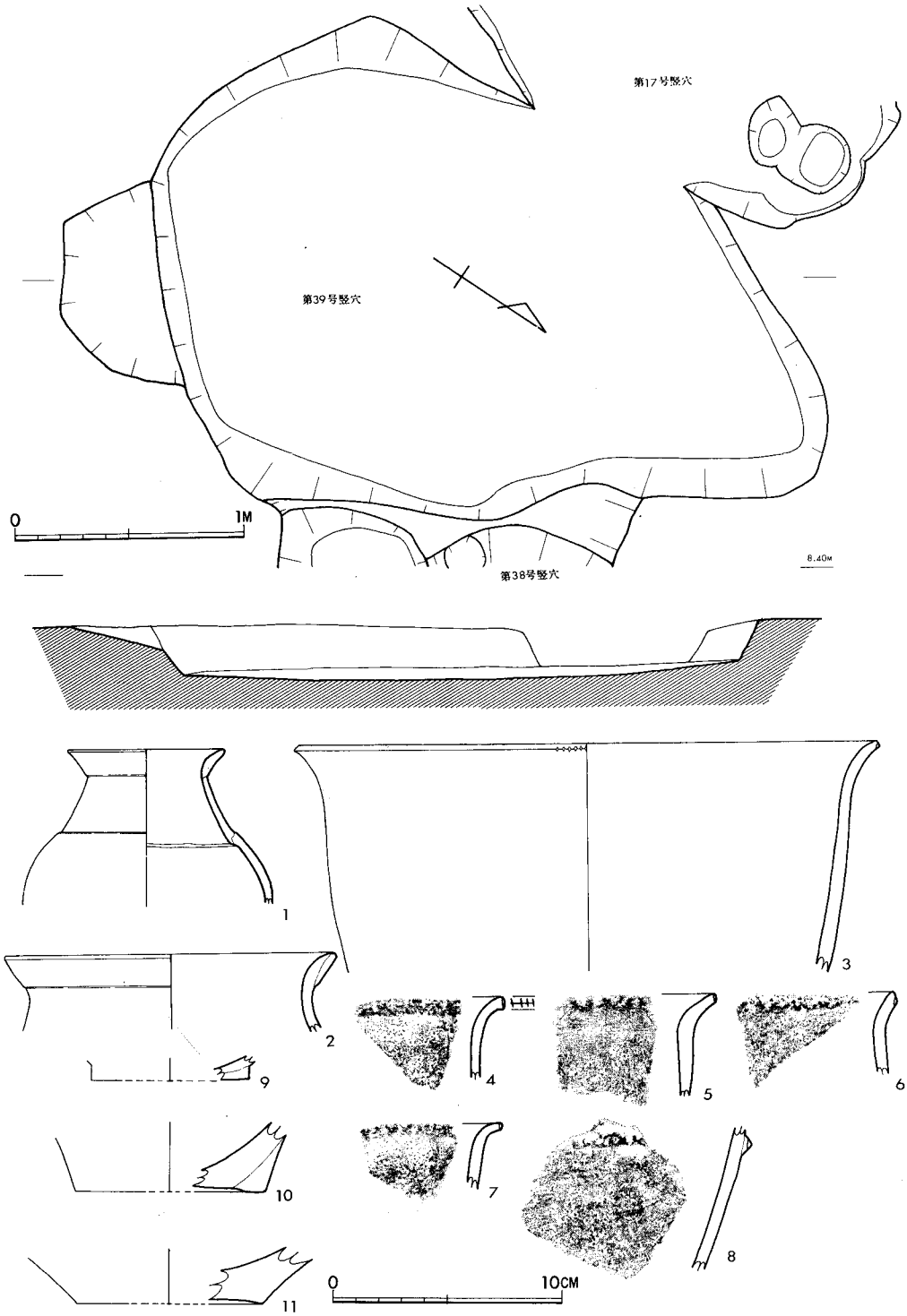


Fig. 3・107　第39号竪穴および出土土器実測図

第39号竪穴（Fig. 3・107、3・108）

調査区ほぼ中央やや東寄りに存在する。西側で第17号竪穴と切り合っているが、新旧関係は不明である。長径約250cm、短径約200cm前後の不整長方形に近いプランをもつ。現存の深さ約24cm、残存の壁は袋状をなしていない。

出土土器（Fig. 3・107）

甕　夜臼式(8)　刻目突帯をもつ胴部破片である。器表外面は条痕調整。石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。

板付Ⅰ式（4・5・7）　外反する口縁の端の縦一杯に刻目を施す。4は口唇部に沈線状の凹みがはいる。5の外面の口縁直下まで横なで調整。ともに石英粒砂を含み、焼成良好。それぞれ黒褐色(4)、暗褐色(5)、赤褐色(7)を呈する。

板付Ⅱ式（3・6）　3・6は外反する口縁の下端に刻目を施したものである。ともに器面があれているために調整は不明。石英砂を含み、焼成良好。外面暗褐色、内面赤褐色を呈する。

壺　板付Ⅰ式（1・2）　1は短く外反した口縁部から頸部がしまり、球形に張る胴部へとつながる。器面があれているため器面調整は不明だが接合部の内外に段がつく。2も短く外反した口縁の、外面に粘土を貼付けて肥厚させ、下に段をつける。胎土に石英粒砂を含むが、1は良好。焼成はともに良好。黄褐色(1)、赤褐色(2)を呈する。

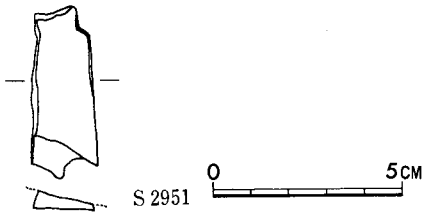


Fig. 3・108　第39号竪穴出土石器実測図

底部（9～11）　9・11は壺、10は甕の底部であろう。9はいわゆる円盤貼付けで、10・11は上げ底を呈する。9は砂を含むが胎土は良好。10・11は石英粒砂を含む。ともに焼成は良好。そ　ぞれ外面黒褐色・内面暗褐色(9)、外面赤褐色・内面灰褐色(10)、褐色(11)を呈する。

この竪穴は前期中葉の頃であろう。

出土石器（Fig. 3・108）

磨製石器（S 2951）　磨製石器破片であるが、何であるかは不明。頁岩質のものである。

第40号竪穴（Fig. 3・109、3・110、PL. XV）

調査区中央西寄りに位置する。竪穴埋没後南東隅付近に第47号甕棺墓が埋置される。南北約184cm、東西約140cm。現存の深さ約41cmで、ほぼ長方形のプランをもつ。南東側の壁の一部は袋状をなしている。内部には中央やや南東寄りに一個のピットが存在する。

出土土器（Fig. 3・109、3・110）

甕　夜臼式（1・2）　1・2とも刻目突帯をもつ胴部破片で器面のあれが著しい。1は外面

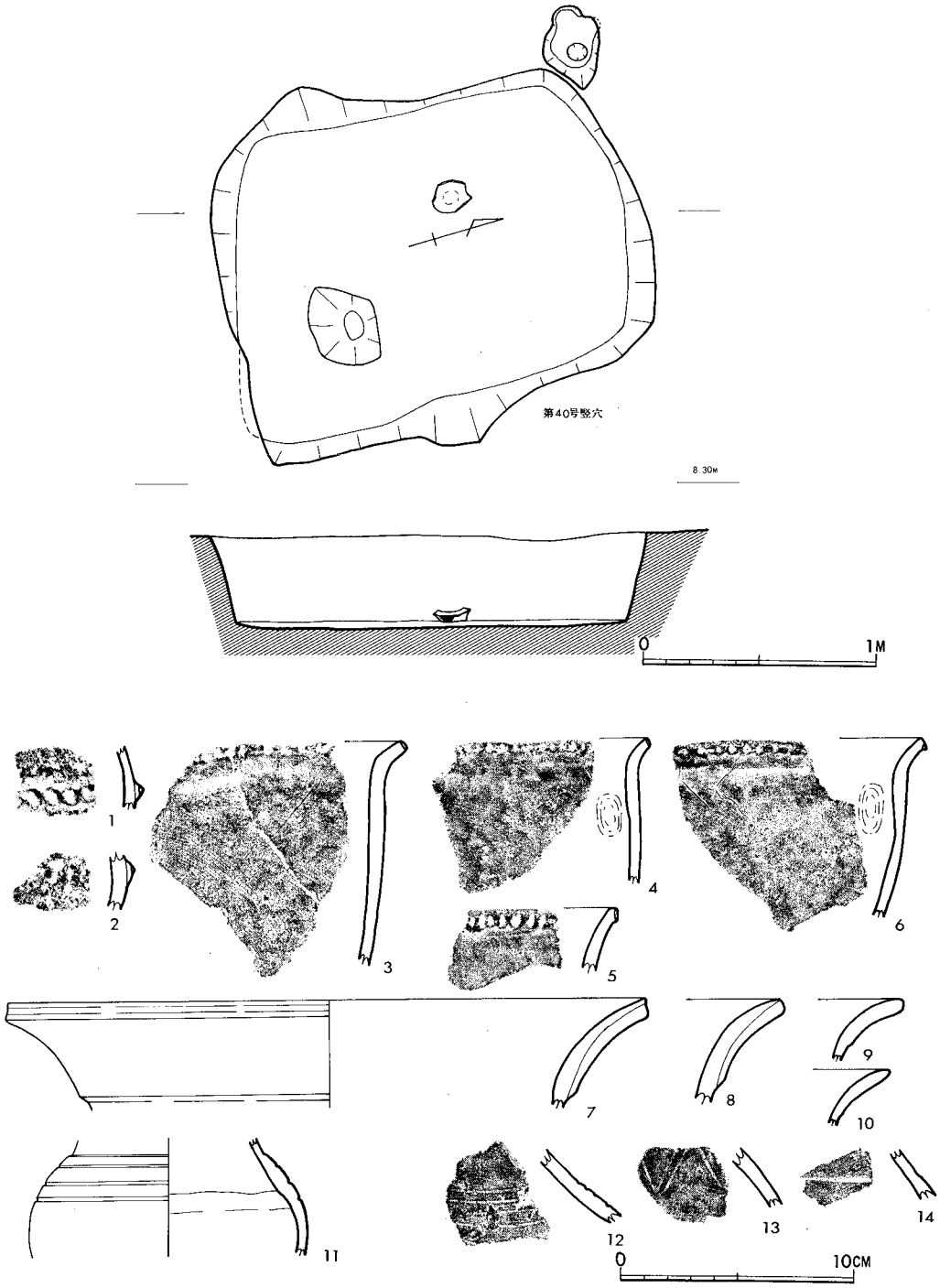


Fig. 3・109　第40号竪穴および出土土器実測図

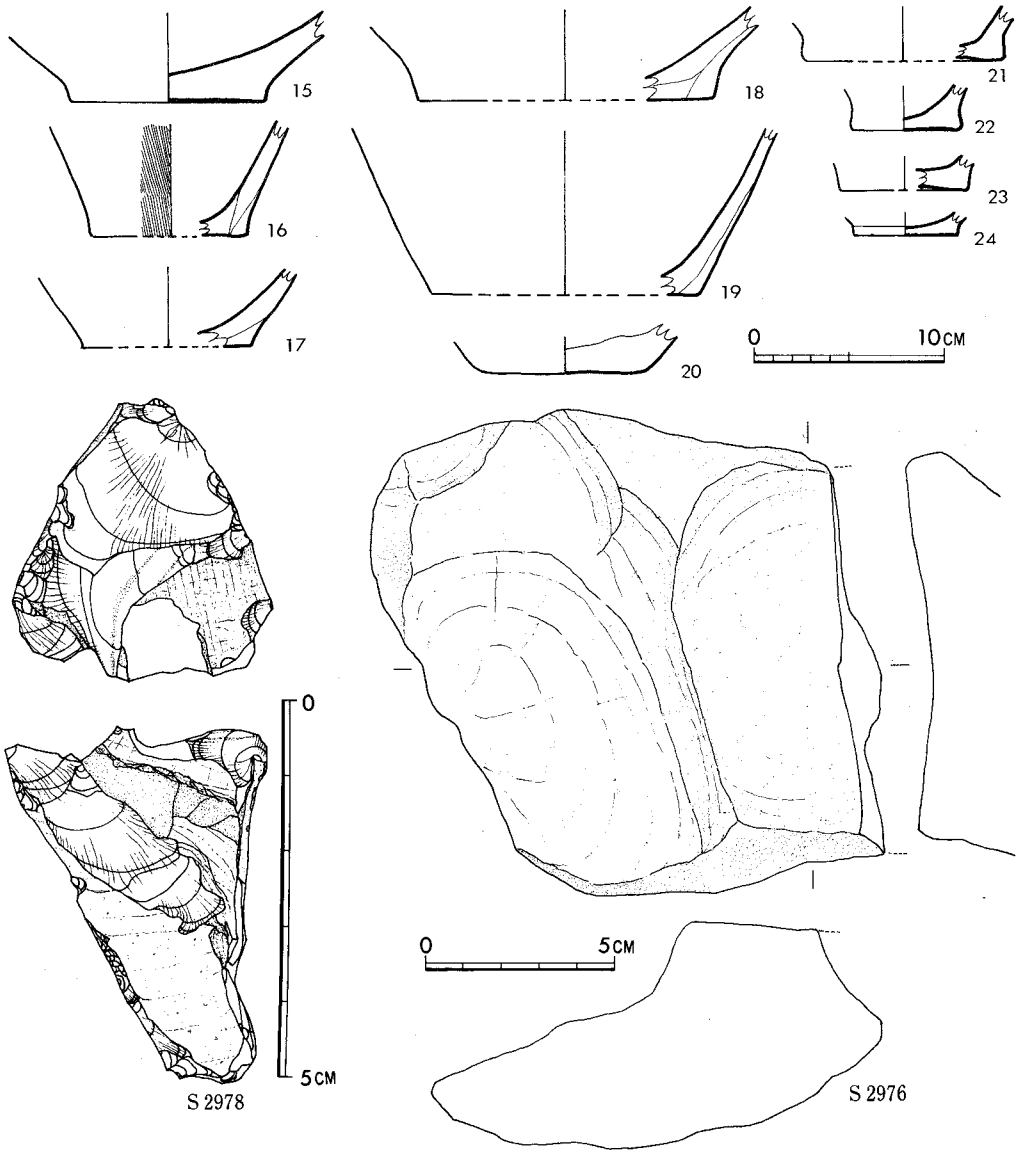


Fig. 3・110　第40号竪穴出土土器・石器実測図

に条痕がつく。胎土は砂混(1)・石英粒砂混(2)で、ともに焼成は良く、暗褐色を呈する。

板付Ⅰ式（3～5）　外反する口縁の端の縦幅一杯に刻目を施したもので、3・4の口縁端は丸味を帯び、5の口縁は短い。3の口縁部は横なで調整、外面は刷毛目調整。4も同様であるが、内面に指の押圧調整の痕が残る。5の外面も刷毛目調整。石英粒砂を含むもの（3・4）、と砂を含むもの(5)があり、焼成も良いもの（4・5）とややよくないもの(3)がある。ともに暗褐色を呈する。

板付II式(6)　外反する口縁の下端に刻目を施すもので、口縁端は「コ」の字形に近くなる。口縁部は横なで調整、内側口縁下に指の押圧調整痕が残る。石英粒砂を含み、焼成良好。赤褐色、暗褐色を呈する。

壺　板付I式(11・13)　11は肩部から胴上半部にかけて4本の沈線を施し、接合部の内・外面に段がつく。13は複線山形文を施文する胴部破片である。ともに砂を含むが胎土・焼成とも良好。灰褐色(11)、黄褐色(13)、を呈する。

板付II式(7－10・12・14)　7～10は口縁部で、いずれも口縁下に段がつく。7・8は外反する口縁外側に粘土を貼付けて肥厚させている。7の内面は横なで調整。12・14は肩部破片で、12は4本の浅い沈線が巡るが接合部は肥厚しない。14は接合部外側に段がつくが、内側にはつかない。胎土に石英粒砂を含むもの(7～9・12)が多いが、砂を含むもの(14)、砂を含むが良好なもの(10)があり、焼成はともに良い。それぞれ外面赤褐色、内面灰褐色(7)、暗褐色(8・14)赤褐色(9)、暗黄褐色(10)、黄褐色(12)を呈する。

底部　(15～24)　15・17・18・20・21・24は壺、16・19・22・23は甕の底部であろう。15・21・23は上げ底、16は外面刷毛目調整。15の底面には多数の籾痕がついている。18の外面は縦の篦みがき。ほとんどが石英粒砂を含み、24は砂を含むが胎土は良い。焼成はすべて良好。それぞれ赤褐色(15)、外面赤褐色・内面暗褐色(16)、外面暗褐色・内面黒褐色(17)、暗褐色(18・20・22・23)、褐色(19)、暗黄褐色(21)黄褐色(24)を呈する。

出土土器では板付II式が最も新しい。この竪穴は前葉中葉のものであろう。

出土石器 (Fig. 3・110)

石核　(S 2978)　黒曜石角礫を素材とし、剥片剥離はほとんど行われていない。

石皿　(S 2976)　石皿片で、砂岩製のものである。

第41号竪穴 (Fig. 3・111)

調査区中央やや北寄りに存在する。大半を前期末の第44号甕棺墓によって切られており、また西隅も後世のピットに切られている。長径約140cm、短径は不明だが、長方形プランと考えられる。現存の深さ約14cm、残存の壁は袋状をなしていない。

出土土器 (Fig. 3・111)

1片のみ出土した。刻目突帯をもつ甕の胴部破片で、石英粒砂を含み、焼成良好。赤褐色を呈する。板付II式の範畔に入るものであろう。

この竪穴の出土土器は一片のみであるが板付II式であり、前期終末の第44号甕棺墓に切られていることにより、前期中葉～後葉のものであろう。

第42号竪穴 (Fig. 3・111)

調査区中央やや東南寄りに位置する。第78号竪穴埋没後に作られたものであるが、調査の不手際のために第42号竪穴の規模その他は不明であるが、推定で約150cm～160cmの円形プランを呈するものと考えられる。現存の深さ約23cm、残存の壁では袋状をなしてはいない。

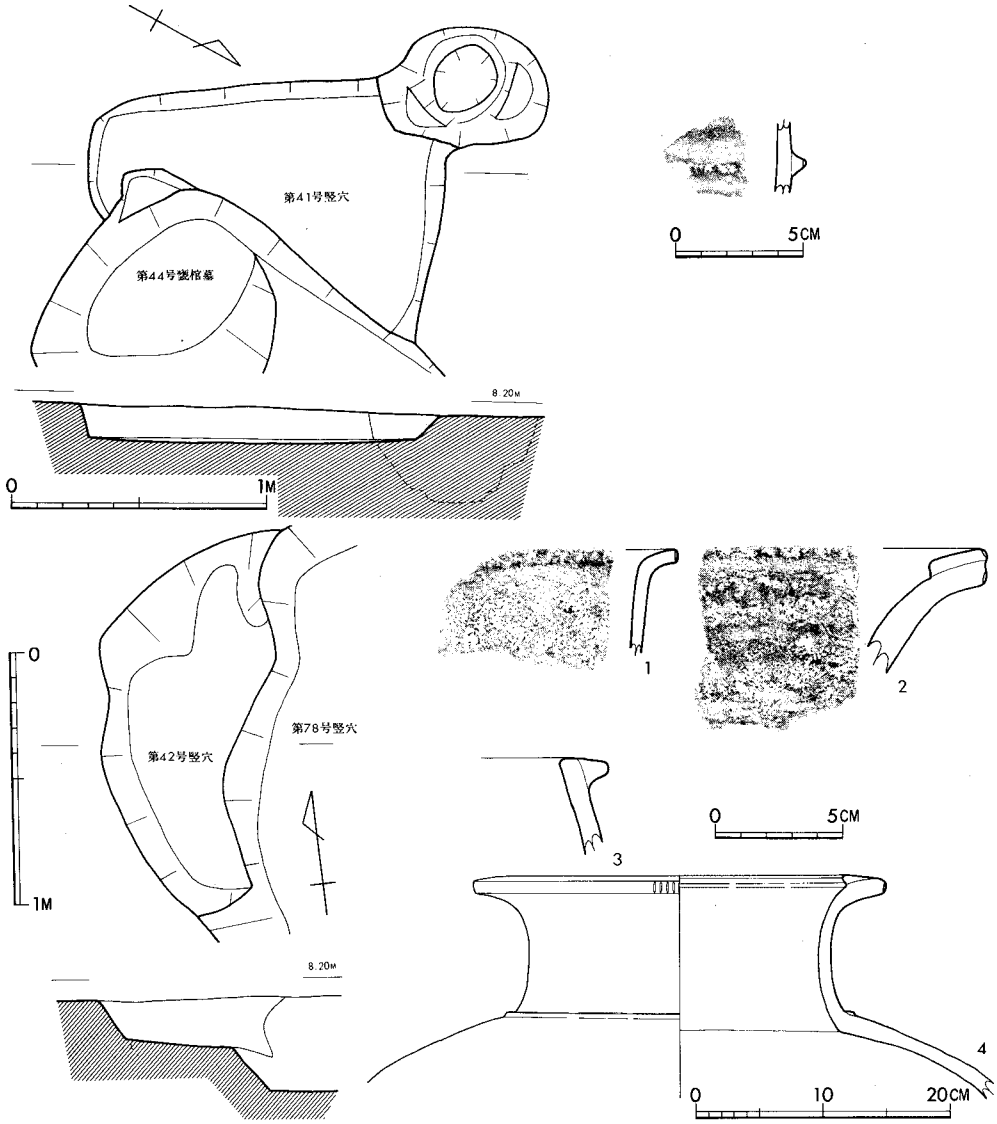


Fig. 3・111　第41号・42号竪穴および出土土器実測図

出土土器（Fig. 3・111）

甕　（1～3）　1は外反する。やや丸味を帯びた口縁端の縦幅一杯に刻目を施している。2は外反する口縁上部に粘土を貼付けて肥厚させ、口縁上下端にそれぞれ刻目を施す。3は内傾する口縁の外側に粘土帯を貼付けて突帯としたもので上部が平坦化する。ともに石英粒砂を含み、焼成は良好。暗黄褐色(1)、赤褐色(2)、外面赤褐色・内面黄褐色(3)を呈する。1は板付Ⅰ式、2は板付Ⅱ式でも新しいもの、3は前期末～中期初頭のものであろう。

壺　(4)　外反する口縁上部に粘土を貼付け、内側に三角形に近い張り出しを作る。口縁外端には刻目を施す。肩部には一条の貼付け三角突帯を巡らす。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。黄褐色一部赤褐色を呈する。中期初頭のものであろう。

この竪穴は出土土器より中期初頭のものと考えられる。

第43竪穴（Fig. 3・112）

調査区中央やや北寄りに存在する。2個のピットが切り合ったような形をしているが、同一時期のものである。全体は東西約190㎝、南北約100㎝の長楕円に近い形状をもつが、西側の深い部位は径約100～120㎝の円形をなす。東側の現存の深さ約30㎝、西側は約40㎝。西側の内部に一個の浅いピットがある。

出土土器（Fig. 3・112）

甕　夜臼式(1)　内傾する口縁外側に粘土紐を貼付けて突帯とし、それに刻目を施す。外面器表には貝殻条痕がみられる。石英粒砂を含み、焼成良好。外面黒褐色・内面赤褐色。

板付II式（2～4）　2・3はいわゆる亀ノ甲タイプの範疇に入るものである。口縁外側に粘土紐を貼付けて突帯とするが、刻目はない。3は口縁部横なで調整。外面は口縁下から縦刷毛目調整。4は外反する口縁下端に刻目を施す。口縁外端は凹む。ともに石英粒砂を含み、焼成良好。それぞれ黒色(2)、外面暗褐色・内面赤褐色(3)、暗褐色(4)を呈する。

この竪穴は前期後葉のものであろう。

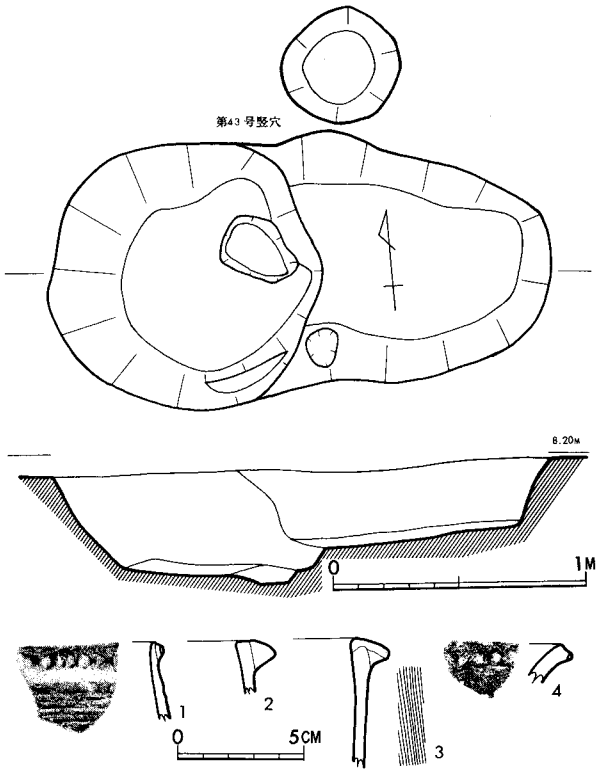


Fig. 3・112　第43号竪穴および出土土器実測図

第44号竪穴（Fig. 3・113）

調査区中央西側に位置する。北側を第58号甕棺墓、西側を第24号木棺墓、南側を第53号竪穴によって切られ、また内部もピット4個から切られていて、ほとんど失われているが、かろうじて残っている。東壁から方形とみられる。規模はわからない。現存の深さは約24cm。

出土土器（Fig. 3・111）

甕　夜臼式（1・2）　1・2とも口縁外側に粘土帯を貼付けて突帯とし、刻目を施したもので、1は口縁端に接するが2はやや下がる。1の突帯下外面には条痕がみられる。ともに焼成は良いが、1は胎土に石英粒砂を含み褐色を呈し、2は砂を含み赤褐色を呈する。

板付Ⅰ式（3～6）　外反する口縁の端の縦幅一杯に刻目を施すが、6は刻目があるかどうか不明。口縁端周辺は横なで調整。ともに石英粒砂を含み、焼成は良好。暗褐色（3・4）、褐色(5)、赤褐色(6)を呈する。

不明の土器(11)　口縁部外端に粘土紐を貼付けて低く幅広く丸味を帯びた突帯とし、ゆるやかにふくらむ胴部へと続く器形をもつ。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。外面赤褐色、内面黄褐色を呈する。この土器は口縁下以下を欠失するが、器形そのものは弥生式土器とは異なり、むしろ諸岡遺跡出土の朝鮮系無文土器に近い〔後藤・横山1975〕。第2区G－25トレンチで口縁部破片が出土している。朝鮮系無文土器とすれば、型式的には諸岡例よりおくれるとみられるが、撹乱のためどの遺物に伴うかはっきりせず、時期の確証はない。

壺　板付Ⅰ～Ⅱ式（7～10・12）　7・8はともに外反する口縁外側に粘土を貼付け、肥厚させたもので口縁下に段がつく。10は逆に口縁内側に粘土を貼付けて肥厚させる。12は肩部に沈線をもつ破片である。9を除いて胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。9は砂を含むが胎土は良好、焼成はやや不良。灰褐色(7)、赤褐色(8)、外面暗褐色・内面淡褐色(9)、黒褐色(10)、外面赤褐色・内面暗褐色(12)を呈する。9・10・12は板付Ⅱ式であるが、7・8はあるいは板付Ⅰ式かもしれない。

高坏脚部　(13)　胎土に石英粒砂を含む。焼成は良く、外面暗褐色・内面黒褐色を呈する。

底部　(14～19)　16・18は壺、他は甕であろう。18をのぞいて、胎土に石英粒砂を含む。18は砂を混じる。焼成はすべて良好。赤褐色(14・15・19)、黄褐色(16・18)、外面黄褐色、淡赤褐色・内面淡赤褐色(17)を呈する。

この竪穴の出土遺物は夜臼式から板付Ⅱ式まで出土しているが、撹乱が多く、時期ははっきりしない。しかし第53号竪穴に切られていることや、甕に板付Ⅰ式が多いことから前期前葉と推定される。

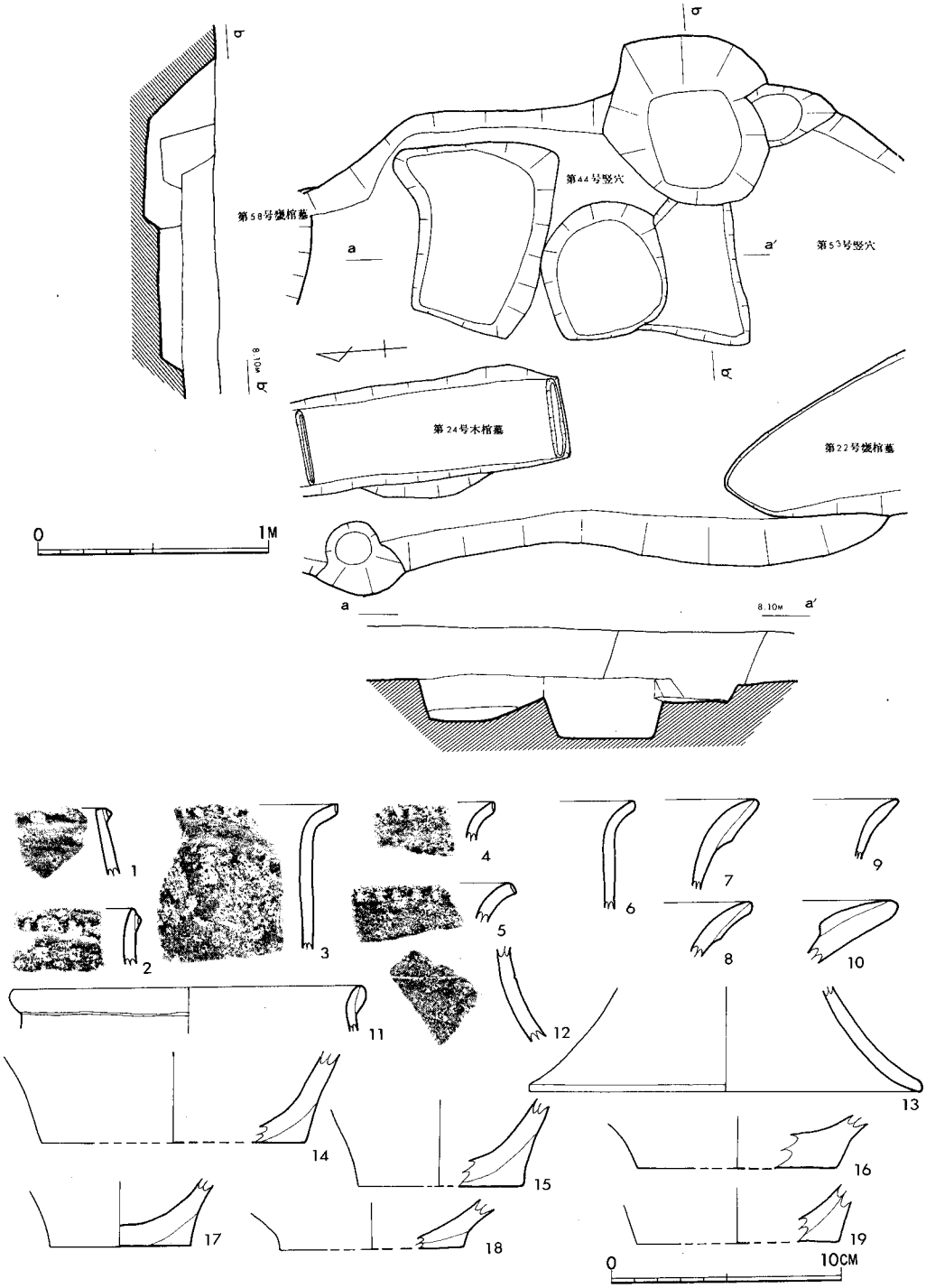


Fig. 3・113　第44号竪穴および出土土器実測図

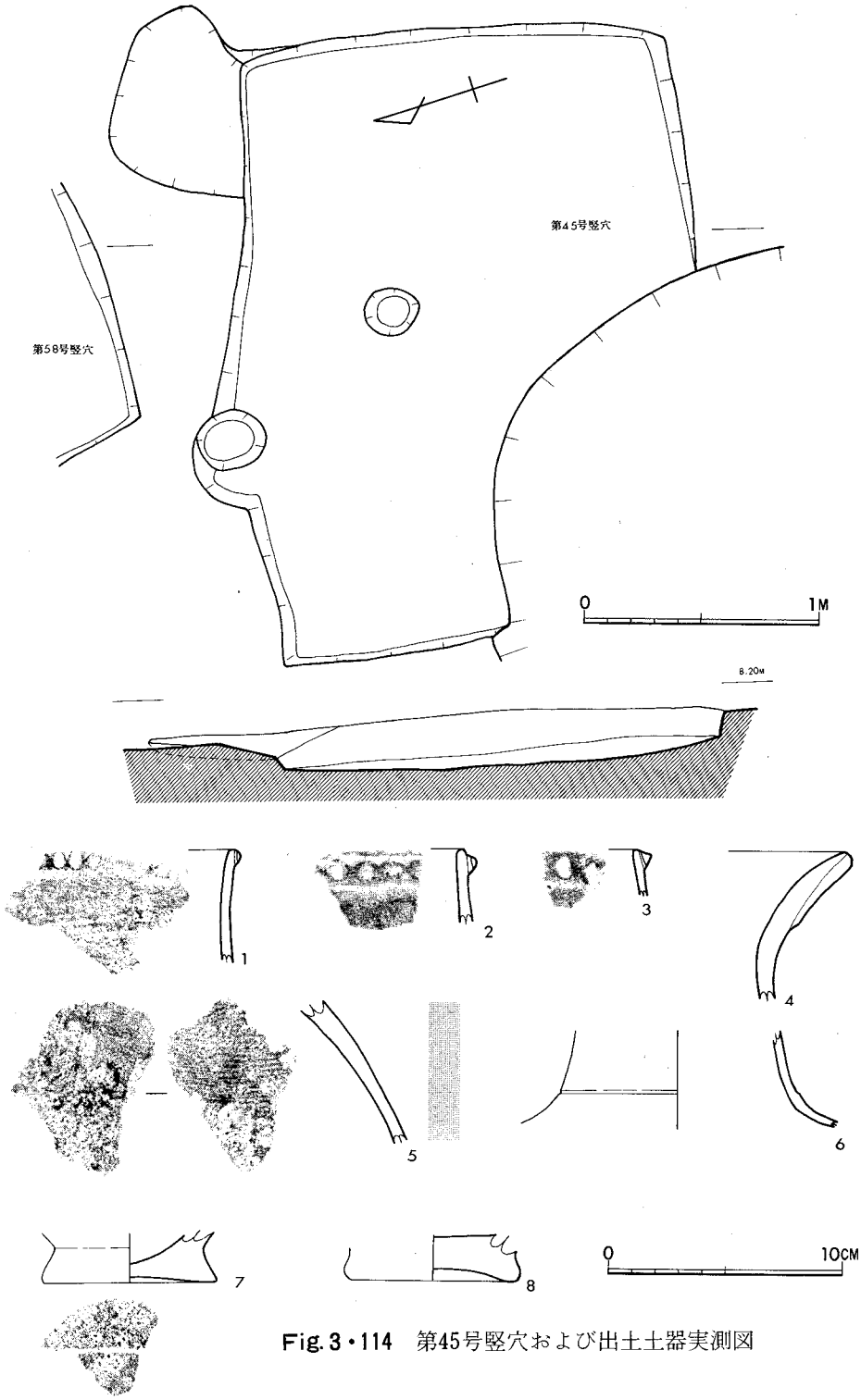


Fig. 3・114　第45号竪穴および出土土器実測図

第45号竪穴（Fig. 3・114）

調査区ほぼ中央西側に位置する。南西側を歴史時代の井戸状遺構第2号に切られているが、南北約195cm、東西約266cmの長方形プランをもつ。床面は北側が低くなるが、現存の深さ約24cm。残存の壁は袋状をなしてはいない。内部に2個のピットが存在するがいずれも後世のものである。

出土土器（Fig. 3・114）

甕（1～3）　ともに口縁外側に粘土帯を貼付けて突帯とし、その上に刻目を施したもので、突帯が口縁帯に接するもの（1・3）と、若干下がるもの(2)とがある。1は突帯下に条痕が認められる。ともに石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色（1・2）、赤褐色(3)を呈する。夜臼式である。

壺（4～6）　4は外反する口縁側に粘土を貼付けて肥厚させたもので口縁下に段がつく。5は胴部破片で、外面には丹が施され、内面は整然とした条痕がつく。6は肩部外面に沈線状に段がつき、内面接合部も若干肥厚する。ともに石英粒砂を含み、焼成良好。淡褐色(4)、赤褐色(5)、褐色(6)を呈する。4は板付Ⅰ式かⅡ式、5・6は夜臼式であろう。

底部（7・8）　7・8ともに甕の底部で、底部外側が断面三角形となり、夜臼式の底部の特徴をもつ。7は底面に木葉痕がある。ともに石英粒砂を含み、焼成良好、黄褐色を呈する。

この竪穴の時期は、4にやや疑問の余地が残るが、前期前葉とみて大過ないと思われる。

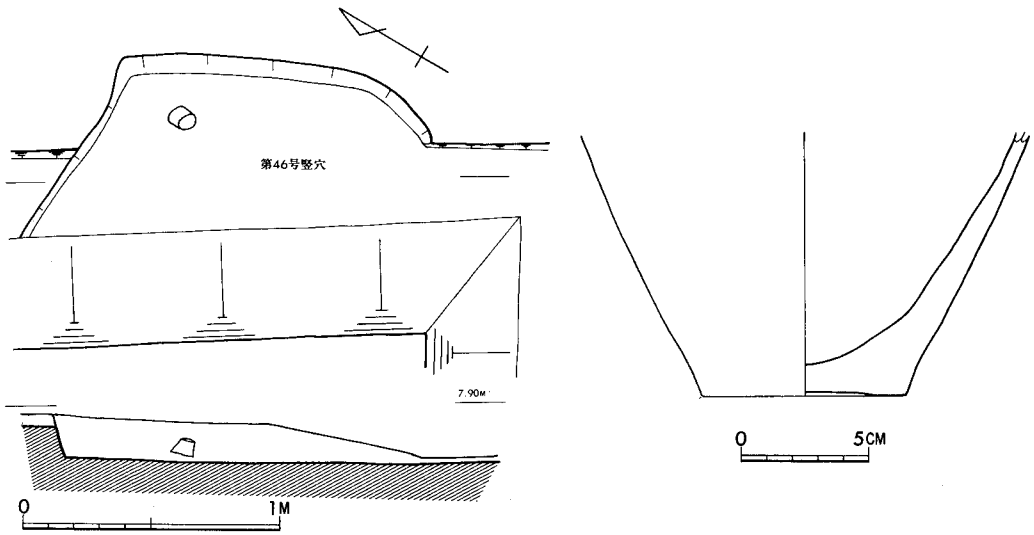


Fig. 3・115　第46号竪穴および出土土器実測図

第46号竪穴（Fig. 3・115）

調査地南側西寄りに位置する。西半分は未掘であるが、すでに傾斜面にかかっており、全掘してもその規模は不明と思われる。現存の深さは約17cm。

出土土器（Fig. 3・115）

甕の底部である。若干の上げ底を呈する。石英粒砂を含み、焼成良好、暗褐色を呈する。板付II式であろう。

この竪穴の時期は前期中葉～後葉であろう。

第47号竪穴（Fig. 3・116）

調査区南側に位置する。南西隅を後世のピットから切られている。南側約163cm、東西約125cmの長方形プランである。現存の深さ約30cm。現存の壁は袋状をなしてはいない。内部には北壁に沿って3個、東南隅に1個のピットが存在する。

出土土器（Fig. 3・116）

甕（1・2）　1は外傾、2は内傾する口縁外側に粘土帯を貼付けて突帯とし、その突帯に刻目を施す。いずれも突帯は口縁端に近い。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。それぞれ暗褐色

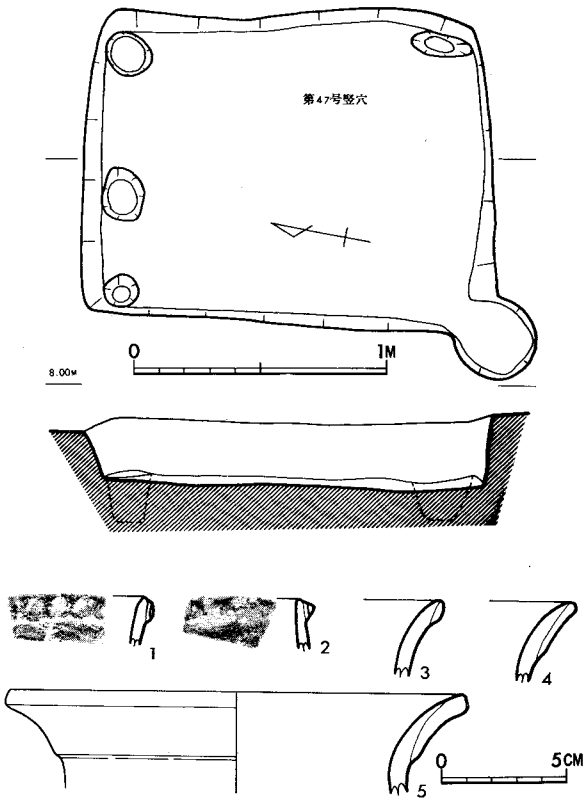


Fig. 3・116　第47号竪穴および出土土器実測図

(1)、外面赤褐色・内面黒色(2)を呈する。いずれも夜臼式である。

壺　（3～5）　3は外反する口縁外端に粘土を貼付け、丸味をもたせたものである。4・5は外反する口縁外側に粘土を貼付けて肥厚させたもので、口縁下に段がつく。ともに石英粒砂を含み、焼成は良い。それぞれ、灰褐色(3)、赤褐色(4)黄褐色を呈する。3は夜臼式、5は板付Ⅰ式、4は板付Ⅰ式かⅡ式であろう。

この竪穴は前期前葉～中葉のものであろう。

第48号竪穴（Fig. 3・117）

調査区中央西寄りに位置する。北西部の形に異常があるが、基本的には南北約346cm、東西約268cmの長方形プランの住居址としてもよいような大きさをもつ竪穴である。現存の深さは約15cm。南東壁と西壁上にかかるピット以外は竪穴に伴うものと考えられる。

出土土器（Fig. 3・117）

甕　（1・2）　1は内傾する口縁部外側に粘土帯を貼付けて突帯とし、それに刻目を施したものである。突帯は口縁端に接している。2は外反する口縁の端が「コ」の字状に角張り、その下端に刻目を施す。横なで調整。ともに石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色(1)、赤褐色(2)、を呈する。1は夜臼式、2は板付Ⅱ式である。

壺　（3・4）　3は外反する口縁部で肥厚しない。4は肩部で、内面に刷毛目調整。接合部は肥厚しない。石英粒砂(3)、砂(4)、を含み、焼成良好。淡赤褐色(3)、黄褐色(4)を呈する。ともに板付Ⅱ式である。

鉢　(5)　短く外反する口縁部から胴部で「く」の字状に反転する。器面があれているために調整は不明。石英粒砂を含み、焼成良好。外面黄褐色・内面黒褐色を呈する。夜臼式であろう。

底部　(6)　大型の甕の底部であろう。上げ底を呈する。石英粒砂を含み、焼成良好。外面赤褐色・内面暗褐色。板付Ⅱ式のものであろう。

この竪穴は前期中葉のものであろう。

第49号竪穴（Fig. 3・118、3・119、PL.XV）

調査区南側、西寄りに位置する。かなり多量の土器が出土した。南北約145cm、東西約115cmで、南側の方がわずかにひろくなる隅丸の長方形と楕円形の中間の様な平面形をもつ。現存の深さは約26cm。北東の壁の一部が袋状をなす。本来は袋状の竪穴であったのであろう。

出土土器（Fig. 3・118、3・119）

甕　（1・2・4～7）　1は口縁外側に粘土帯を貼付けて突帯とし、それに刻目を施したもので、突帯は口縁端より少し下がる。石英粒砂を含み、焼成良好。突帯上部は黒色、外面黄褐色・内面赤褐色を呈する。内外面とも条痕が認められる。夜臼式。2・4～6は外反する口縁の端が「コ」の字状となり、2はその下端に刻目を施す。口縁下に一条の三角突帯が巡らされ、それにも刻目がつけられる。器面があれているため器面調整は不明。4は口縁端一杯に刻目がつけられ、口縁下には一条の沈線が巡る。5の口縁端は刷毛目の横なで調整。口縁部

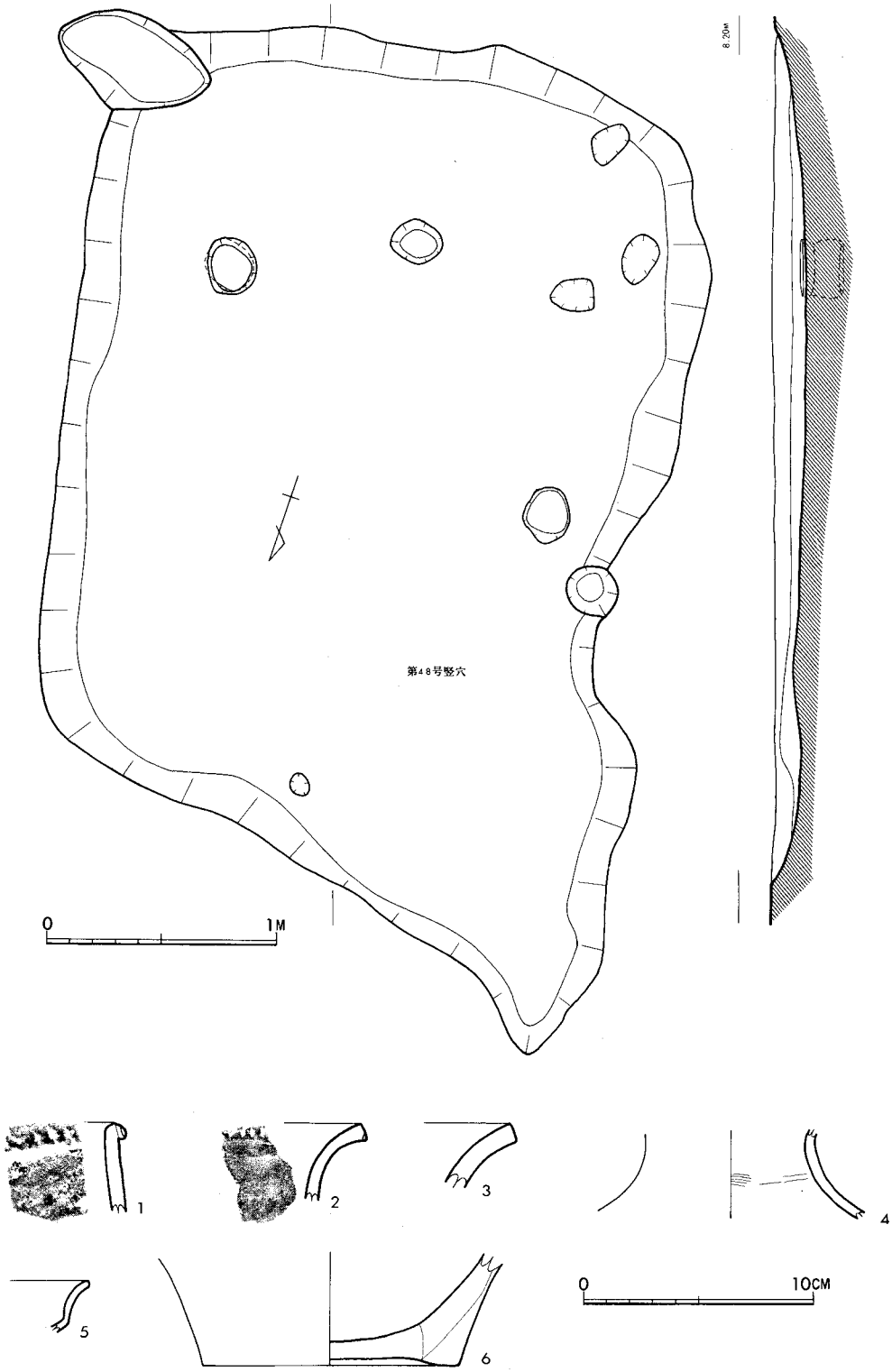


Fig. 3・117　第48号竪穴および出土土器実測図

は指の横なで調整。外面は縦の刷毛目調整。内面は指の押圧調整痕が残る。6は口縁部を欠失するが、鉢に近い器形をもつ。底部は上げ底。7は胴部の張りが他よりわずかに張る。いずれも石英粒砂を含み、焼成良好。それぞれ、黒色(2)、外面赤褐色・一部黒変・内面黄褐色(4)、大部分黒褐・一部黄褐色(5)、灰褐色・黄褐色(6)、赤褐色(7)、を呈する。これらは板付II式である。

壺　（3・8・9）　3は胴部破片で、肩部と胴部の沈線の間に羽状文を施す。8は肥厚した口縁部が外反し、口縁下に段がつく、9はともに石英粒砂を含み、焼成良好。それぞれ外面黄褐色・外面の一部と内面黒褐色、(3)、赤褐色・黄褐色(8)、黄褐色(9)を呈する。これらはいずれも板付II式である。

底部　（10～13）　10・11は壺、12・13は甕の底部であろう。11はいわゆる円盤貼付けの手法を残しているが、わずかに鋭さが少くなる。13の外面は刷毛目調整。いずれも石英粒砂を含み、焼成良好。それぞれ、暗褐色(10・11)、外面黄褐色・内面暗褐色(12)、褐色で一部黒変(13)、を呈する。

この竪穴は前期中葉のものであろう。

出土石器（Fig. 3・119）

磨製石器　（S 3227）　磨製石器の破片であるが、小形の扁平片刃石斧かもしれない。粘板岩である。

砥石　（S 3226）　砂岩製である。

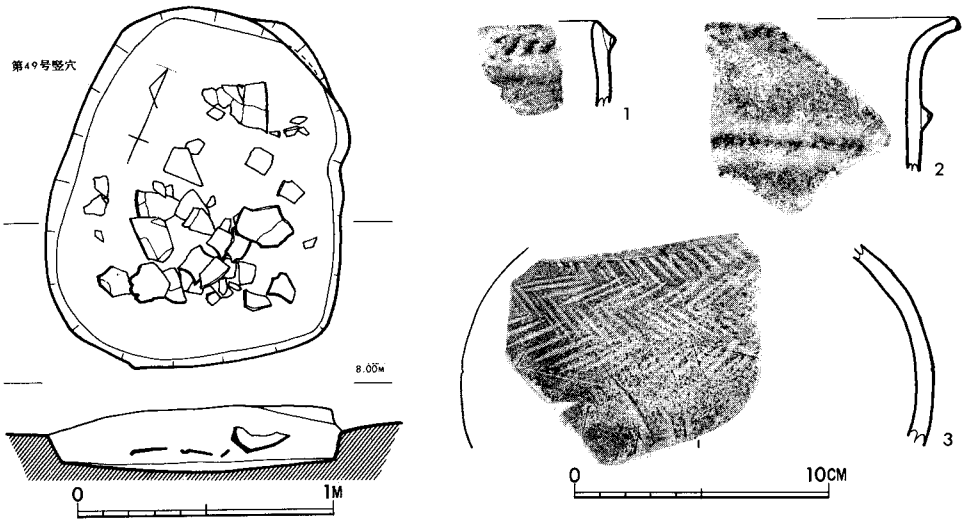


Fig. 3・118　第49号竪穴および出土土器実測図

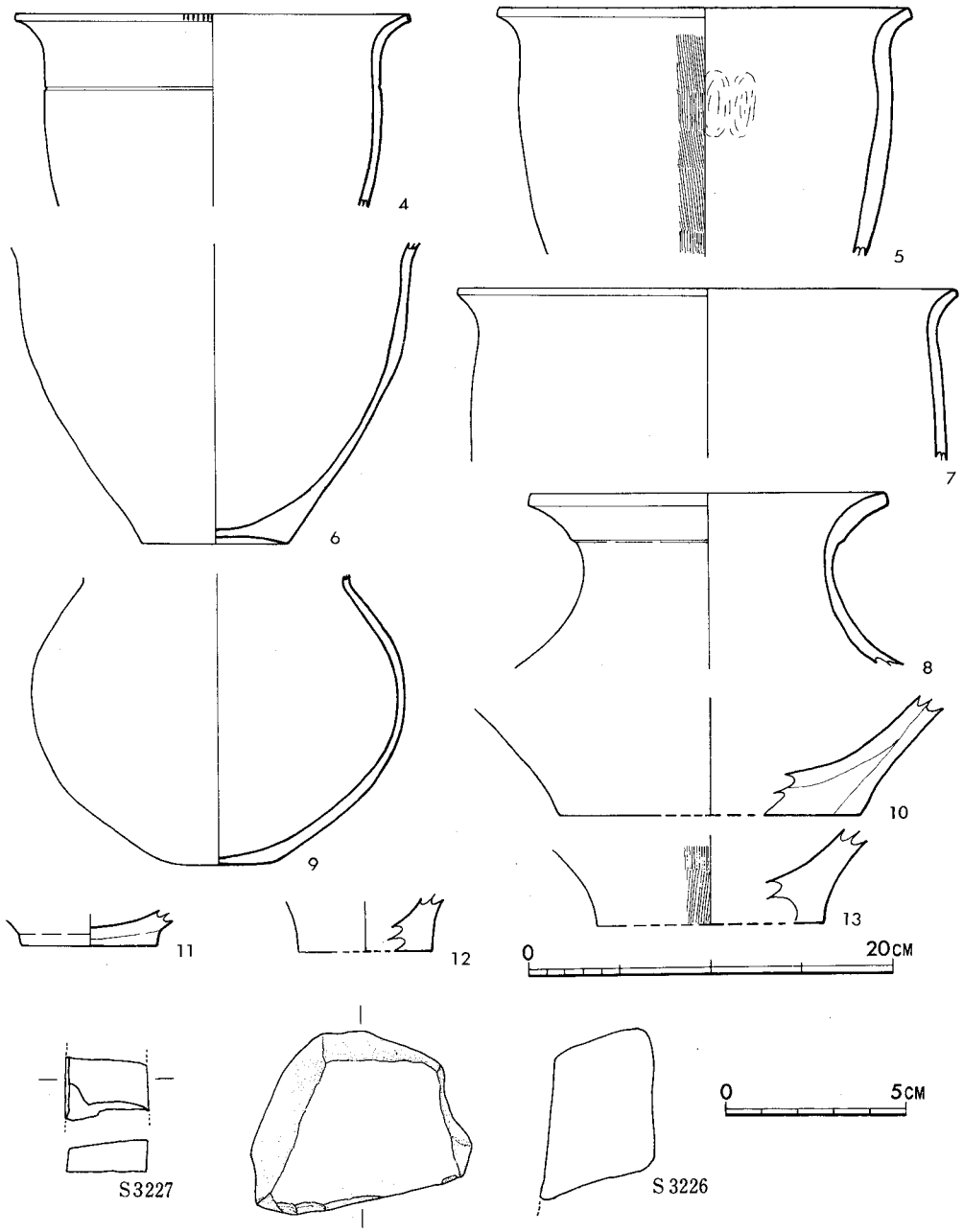


Fig. 3・119　第49号竪穴出土土器・石器実測図

第50号竪穴（Fig. 3・120、3・121）

調査区南側、西寄りに位置する。南西部を第51号竪穴に切られている。南北約200㎝、東西約140㎝の隅丸長方形をなす。現存の深さ約19㎝、残存の壁は袋状をなしていない。中央に二段堀りのピットが存在する。南壁上にかかるピットは後世のものである。

出土土器（Fig. 3・121）

壺　(1)　短く外反する口縁部で、口縁部が若干肥厚し、口縁下に段がつく。石英粒砂を含み、焼成良好。外面赤褐色、内面淡黒褐色を呈する。

甕　（2～4）　いずれも外反する口縁の端が丸味を帯び、胴の張りは弱い。2・4は口縁端の縦幅一杯に刻目が施され、4の内面口縁下には指の押圧調整痕がある。3は刻目はないが内面に刷毛目調整と押圧調整の痕がみられる。ともに石英粒砂を含み、焼成良好。それぞれ黄褐色(2)、外面褐色・内面暗褐色(3)、暗褐色(4)を呈する。

底部　（5・6）　ともに壺の底部であろう。5は若干の上げ底を呈する。ともに石英粒砂を含み、焼成良好。それぞれ、外面淡灰褐色・内面暗褐色(5)、黄白色(6)を呈する。

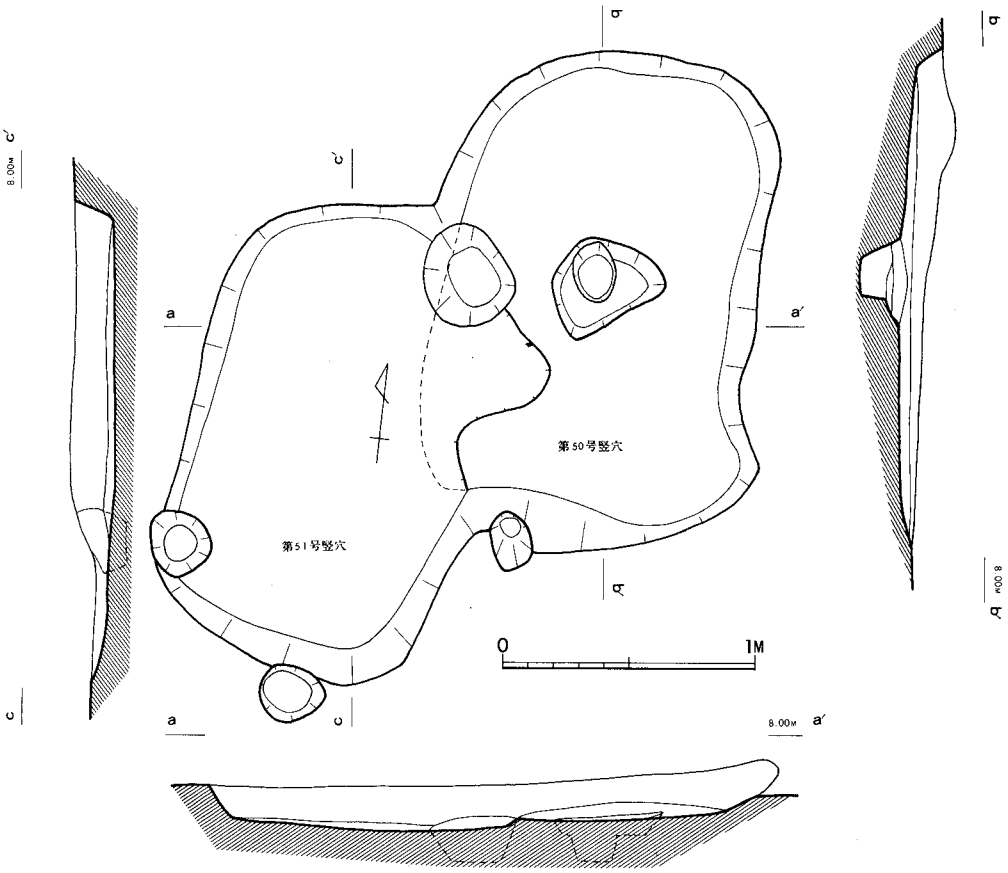
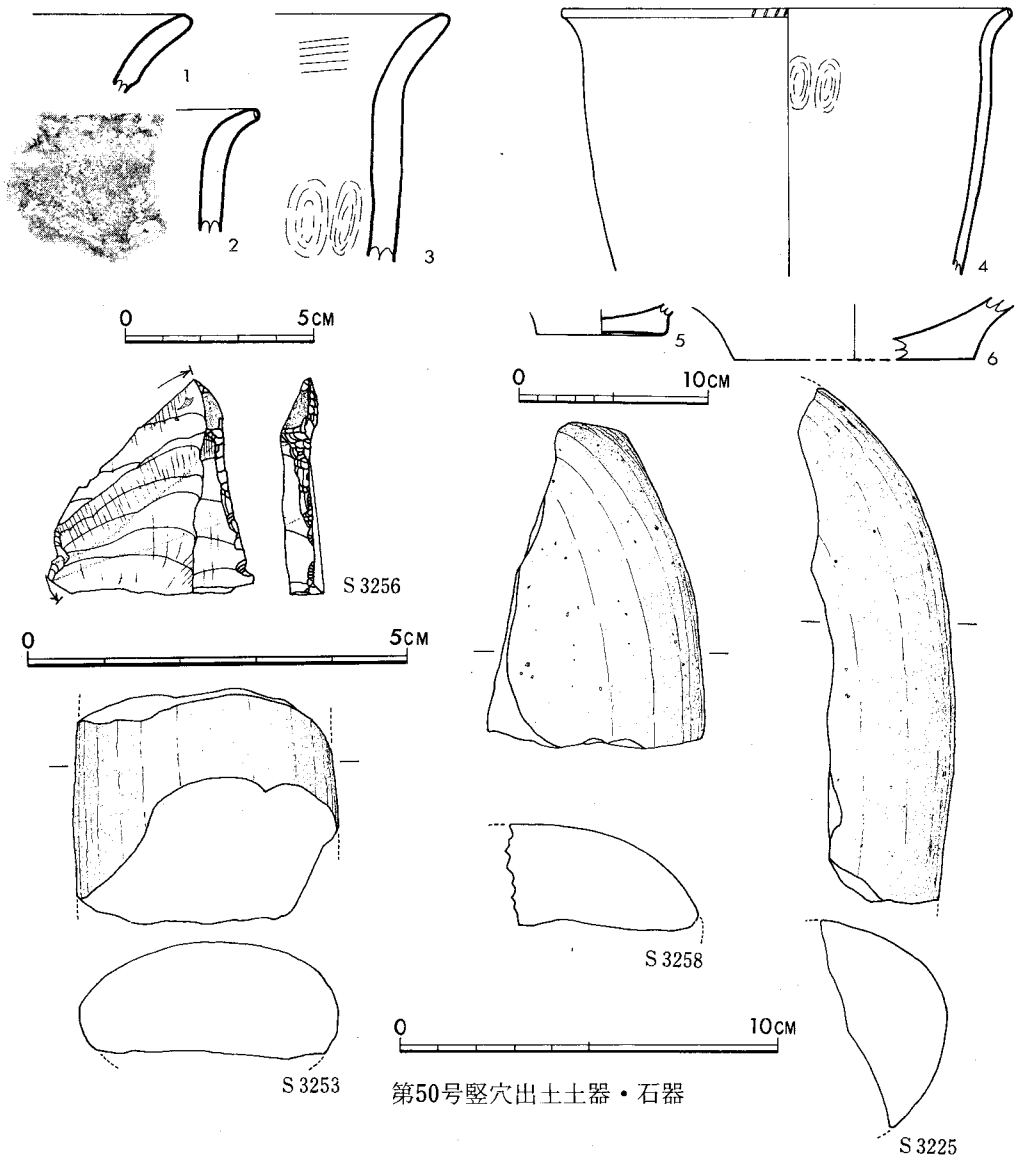
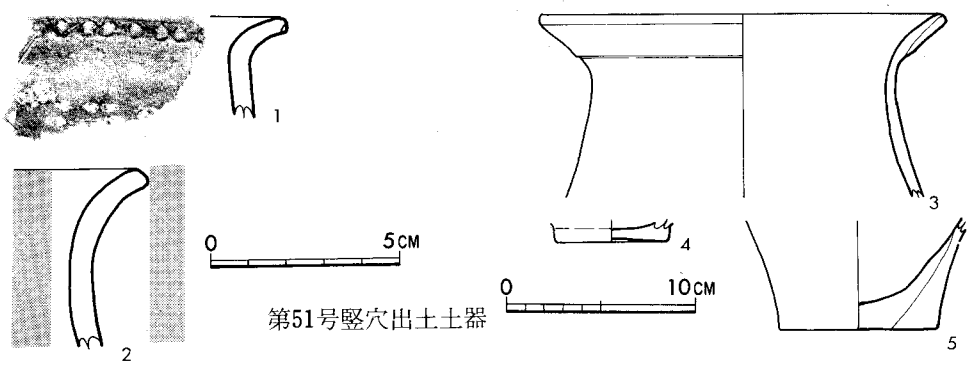


Fig. 3・120　第50号・51号竪穴実測図



第50号竪穴出土土器・石器



第51号竪穴出土土器

Fig. 3・121　第50号・第51号竪穴出土土器・石器実測図

これらの土器はいずれも板付Ⅰ式と考えられ、この竪穴の時期は前期前葉であろう。

出土石器（Fig. 3・121）

剝片石器　（S 3256）　黒曜石の剝片を利用した石器で、表面の右先端に一部自然面を残し、それより下には二次加工が加えられる。刃部として使用される左辺は、裏面に使用痕か、二次加工の痕がみられる。

磨製石斧　（S 3253）　今山産玄武岩製の磨製石斧片である。

磨石　（S 3258・3255）　ともに磨石片であり、S 3258は変石岩、S 3255は花崗岩製である。

第51号竪穴（Fig. 3・120、3・121）

調査区南側西寄りに位置する。第50号竪穴を切って作られていた。南北約190cm、東西約130cmの隅丸長方形プランをもつ。現存の深さ約18cm、現存の壁は袋状をなしてはいない。第51号竪穴にかかるピットは全部後世のものである。

出土土器（Fig. 3・121）

甕　(1)　外反する口縁の端は「コ」の字状となり、その下端に刻目を施す。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。外面暗褐色、内面黒色を呈する。板付Ⅱ式。

壺　（2・3）　2はゆるく外反する口縁が一度すぼまり、肩部にかけてふくらみはじめる。全面に丹が塗られた痕が残り横なで調整。3は外反する口縁外側に粘土を貼付けて肥厚させ、口縁下に段がつく。ともに石英粒砂を含み、焼成良好。黄褐色を呈するが、2は夜臼式、3は板付Ⅱ式であろう。

底部　（4・5）　4は壺、5は甕の底部であろう。4は若干の上げ底を呈する。ともに石英粒砂を含み、焼成良好、それぞれ赤褐色(4)、黄褐色(5)を呈する。

この竪穴は夜臼式式一片(2)が混じているとはいえ、他の土器より、前期中葉のものであろう。

第52号竪穴（Fig. 3・122）

調査区南側西寄りに位置する。南北約133cm、東西約102cmの隅丸長方形に近い不整形である。現存の深さ約10cm、残存の壁は袋状をなしていない。西側に床面から約5cm程の高さの造り出しがある。遺物は全く出土せず、遺物による時期決定は不可能である。

第53号竪穴（Fig. 3・122）

調査区中央やや西寄りに位置する。第44号竪穴を切り、第24号木棺墓、第22号甕棺墓に切られている。西側および東南側の壁の一部しか残っていないが、径約210cm程の円形プランをもっと推定され、現存の深さ約24cm。

出土土器（Fig. 3・122）

壺　(1)　厚味のある口縁部が外傾し、内側に断面三角形の張り出しがつく。石英粒砂を含み、焼成良好。褐色を呈する。この土器は中期前半のものと考えられ、おそらく竪穴に伴うものではなく、甕棺墓、木棺墓埋置の際の流入であろう。

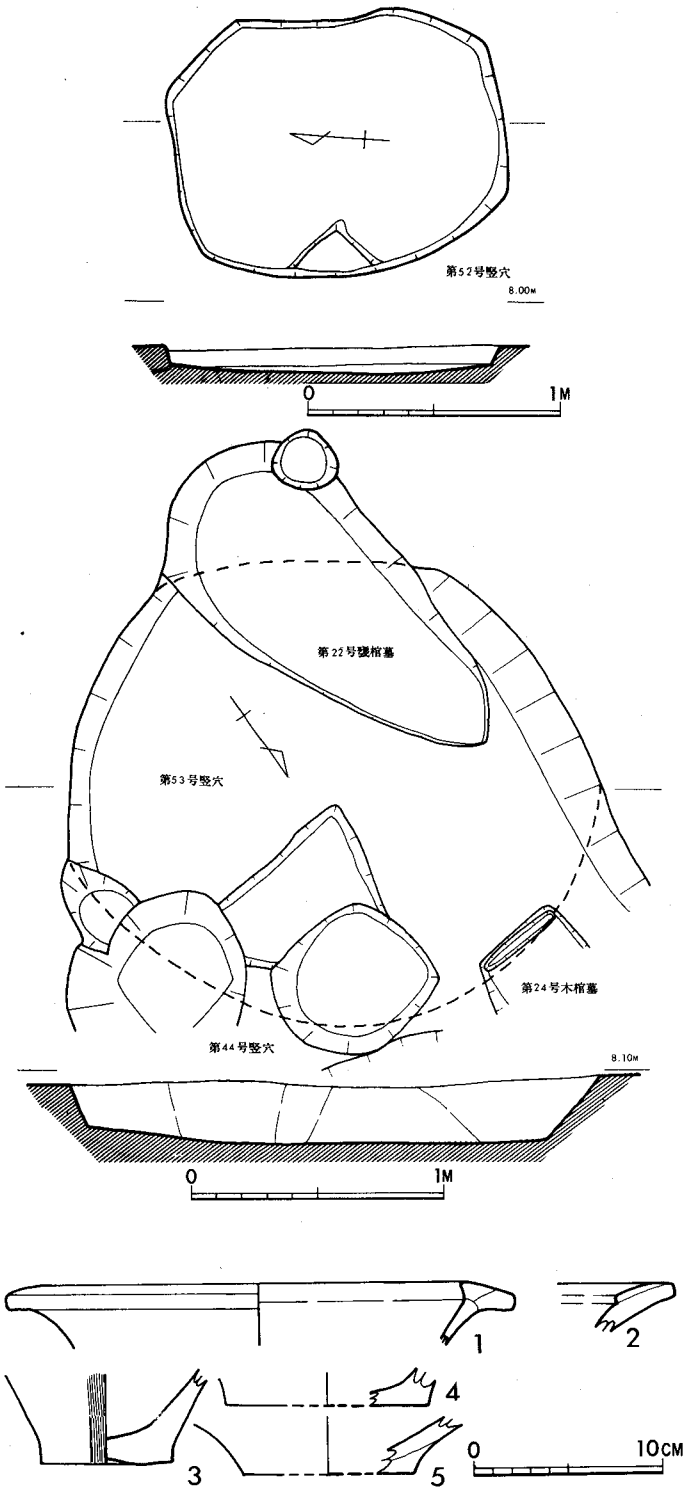


Fig. 3・122　第52号・53号竪穴および出土土器実測図

甕　(2)　外反する口縁部内部に粘土を貼付けて肥厚させる。石英粒砂を含み、焼成良好。淡い赤褐色を呈する。板付II式であろう。

底部　（3～5）　3・4は甕、5は壺であろう。3は若干の上げ底で外面は縦刷毛目調整。ともにすべて石英粒砂を含み、焼成は3がややよくないが、4・5は良好。それぞれ、外面赤褐色・内面暗褐色(3)、外面赤褐色・内面黄褐色・底面は黒変(4)、外面黄褐色・内面黒褐色(5)を呈する。

本竪穴は甕および底部より前期後葉のものであろう。

第54号竪穴（Fig. 3・123）

調査区ほぼ中央に位置する。内部北側にもう一段の掘り込みがあるが、同一時期のものである。南北約140cm、東西約114cmの不整形で、内部の堀り込みは長径約108cm、短径約68cmの楕円に近い不整形である。現存の深さは約15cm、掘り込みは約21cmである。遺物は何も出土せず、時期決定は不可能である。

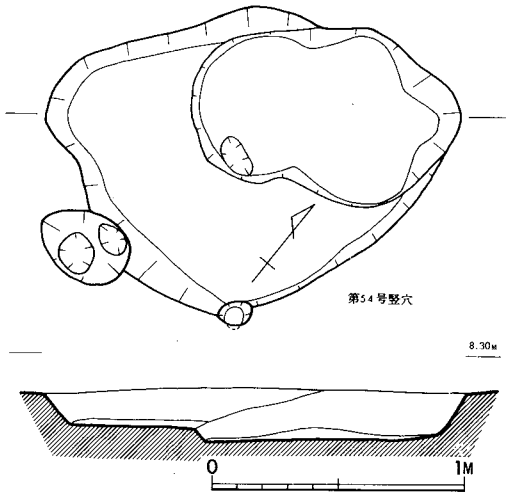


Fig. 3・123　第54号竪穴実測図

第55号竪穴（Fig. 3・124～3・126）

調査区ほぼ中央やや南寄りに位置する。南側で第28号竪穴と切り合っている。底径南北で約222cmの円形プランをなす。現存の深さは約47cm、袋状をなしている。遺物もかなり出土したが、この竪穴に伴うと考えられる物には、完形の(21)がある。

出土土器（Fig. 3・124・125）

甕　夜臼式（1・2・18）　1・2はともに刻目突帯をもつ胴部破片である。外面は条痕。石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈するが、1の内側は黄褐色。18は外反する口縁部外側に粘土を貼付けて突帯とし刻目を施す。口縁部内側には接合部の痕がつく。胴部は逆「く」の字

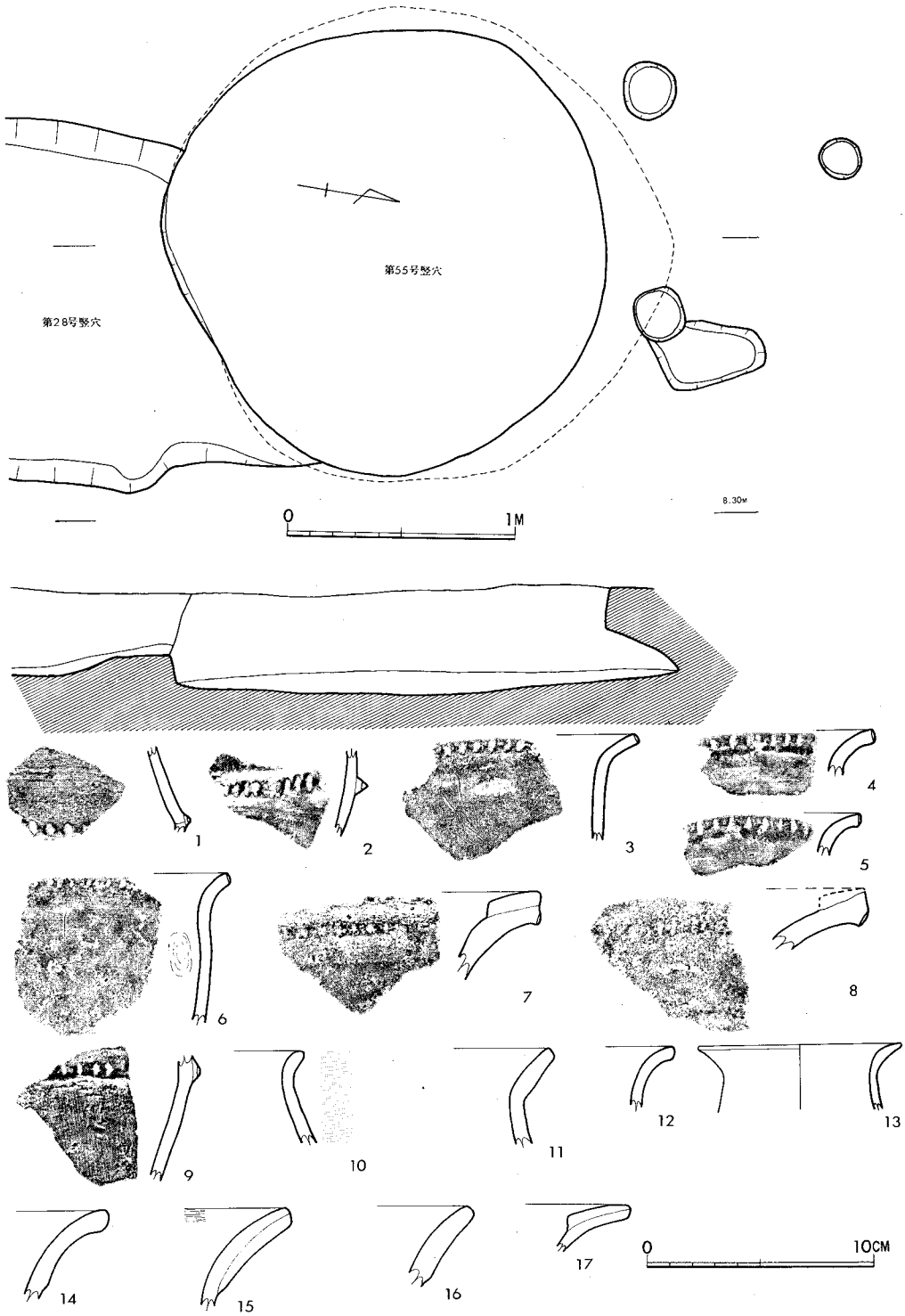


Fig. 3・124　第55号竪穴および出土土器実測図

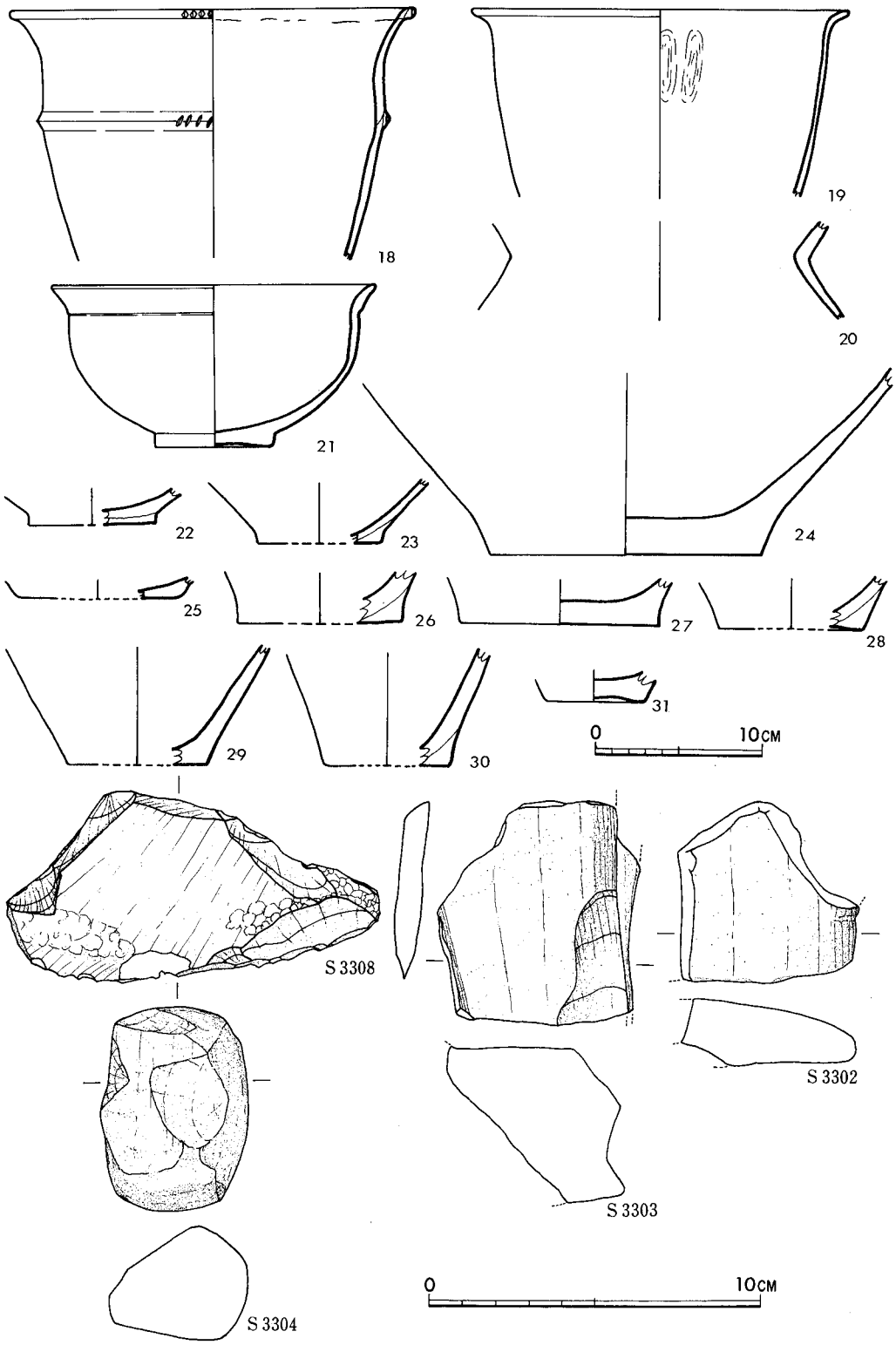


Fig. 3・125　第55号竪穴出土土器・石器実測図

状に反転し、その反転部にも貼付け刻目突帯がつけられる。胴反転部の内外および口縁部の周辺は横なで調整。胎土に石英粒砂を含み焼成良好。外面暗赤褐色・暗褐色、内面黄褐色を呈する。

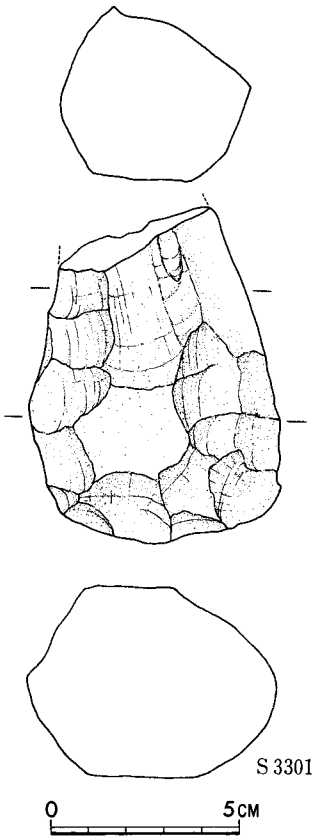


Fig. 3・126
第55号竪穴出土石器実測図

板付Ⅰ式(3～6・19)　3～6は外反する口縁の端がやや丸味を帯び、その口縁端の縦幅一杯に刻目が施される。3の内面には刷毛目調整、4～6は口縁部横なで調整。6は内面に指の押圧調整痕が残る。ともに石英粒砂を胎土に含むが、3・6は焼成良好、4・5はややあまい。それぞれ、外面黒褐色・内面暗褐色(4)、暗褐色(3・5・6)を呈する。19も外反する口縁部が丸味を帯び、張りの少い胴部へと続く。口縁外面は横なで調整。内面には指の押圧調整痕が残る。石英粒砂を含み焼成良好、暗褐色を呈する。

板付Ⅱ式(7～9)　7・8はともに外反する口縁の上部に粘土を貼付けて肥厚させ、口縁下端に刻目を施すもので、8はその貼付部が欠失している。9は胴部に刻目突帯をもち刷毛目調整。ともに石英粒砂を含み、焼成良好。それぞれ赤褐色(7)、淡赤褐色(8)、外面黒褐色・内面赤褐色(9)を呈する。

壺　夜臼式(10)　短く外反する口縁をもつ。外面には丹痕。石英粒砂を含み、焼成良好。赤褐色を呈する。

板付Ⅰ式(11・20)　11は肥厚せず外反する短い口縁をもつ。20も同様であるが、口縁端を欠く。ともに焼成は良好。11は石英粒砂混で暗褐色、20は砂を含み、褐色を呈する。

板付Ⅱ式(12～16)　いずれも外反する口縁部である。12は肥厚しない。13は若干肥厚するが段がつくほどではない。14～16は口縁外側に粘土を貼付けたもので口縁下に段がつく。15は内面上部に刷毛目調整。胎土は砂を含んで良好なもの(12・13)、と石英粒砂を含むもの(14～16)があり、焼成はすべて良好。それぞれ赤褐色(12・13)、外面黄褐色・内面暗褐色(14)、黄褐色(15)、褐色(16)を呈する。

高坏　(17)　外反する口縁上端に粘土を貼付け、その後に横なで調整。石英粒砂を含み、焼成良好。淡褐色、黒褐色を呈する。板付Ⅱ式であろう。

鉢　(21)　本竪穴唯一の完形品である。短く外反する口縁下に段がつく。底部は若干の上げ底であり、円盤貼付けと思われる。砂を含むが胎土、焼成とも良好。黄褐色を呈する。板付Ⅰ式の新しい方か、板付Ⅱ式の古手であろう。

底部　(22～31)　22～25は壺、他は甕であろう。22はいわゆる円盤貼付けである。28・31は

上げ底を呈する。22・23・25は砂を含むが良好、他は石英粒砂を含む。焼成は良好。それぞれ褐色(22)、黄褐色一部黒変(23)、暗褐色(24・31)、灰褐色一部赤褐色(25)、赤褐色(26)、褐色で一部灰褐色(27)、外面褐色・内面暗褐色(28)、外面赤褐色・内面暗褐色、(29・30)を呈する。

この竪穴は21の鉢より、前期前葉〜中葉と推察される。

出土石器（Fig. 3・125、3・126）

磨製石器　（S 3308）　砂岩質の石材を用いる。刃部も一部が磨き出されており、石包丁の様な用途をもった磨製石器の破片であろう。

砥石　（S 3302・3303・3304）　いずれも砂岩製の砥石で、3304は完形品である。3302の側面には、浅い凹みがつけられる。3304は周辺に打痕があり、重量 130 g。

敲石　（S 3301）　砂岩製のものである。

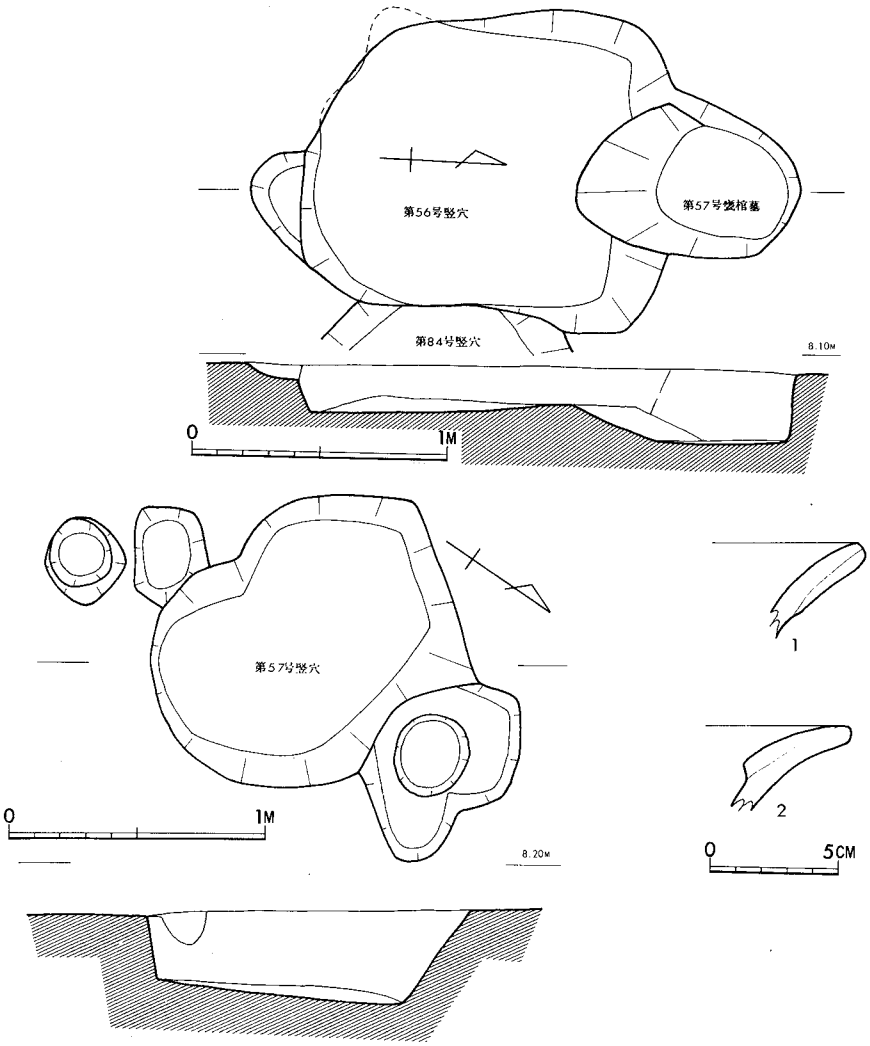


Fig. 3・127　第56号・57号竪穴および出土土器実測図

第56号竪穴（Fig. 3・127）

調査区ほぼ中央やや南寄りに位置する。埋没後にその凹みを利用して第57号雍棺墓が営まれており、また東壁は第84号竪穴を切っている。南北約144cm、東西約119cmの方形に近いプランを有する。南西隅の壁の一部が袋状をなしている。現存の深さ約19cm。

この竪穴の時期は前述の切り合いより、前期前葉～中期前葉の間としかいえない。

第57号竪穴（Fig. 3・127）

調査区ほぼ中央やや東寄りに位置する。北と南に後世のピットが存在するが、南北約100cm、東西約132cmの不整形を呈する。袋状をなしてはいないが、現存の深さ約37cm。

出土土器（Fig. 3・127）

壺　(1)　外反する口縁部外側に粘土を貼付けて肥厚させる。そのために口縁下に段がつく。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。褐色を呈する。

甕　(2)　外反する口縁の上部に粘土を貼付けて肥厚させる。胎土に石英粒砂を混じ、焼成は良好。外面褐色。内面黄褐色で一部黒褐色を呈する。

この竪穴の時期は前期後葉と推定される。

第58号竪穴（Fig 3・128、PL. XIV）

調査区中央西側に位置する。南北約139cm、東西約154cmの方形に近いプランを有する。床面は北側が低くなる。現存の深さは約19cm、残存の壁は袋状をなしていない。北壁および東壁上にかかるピットは後世のものである。

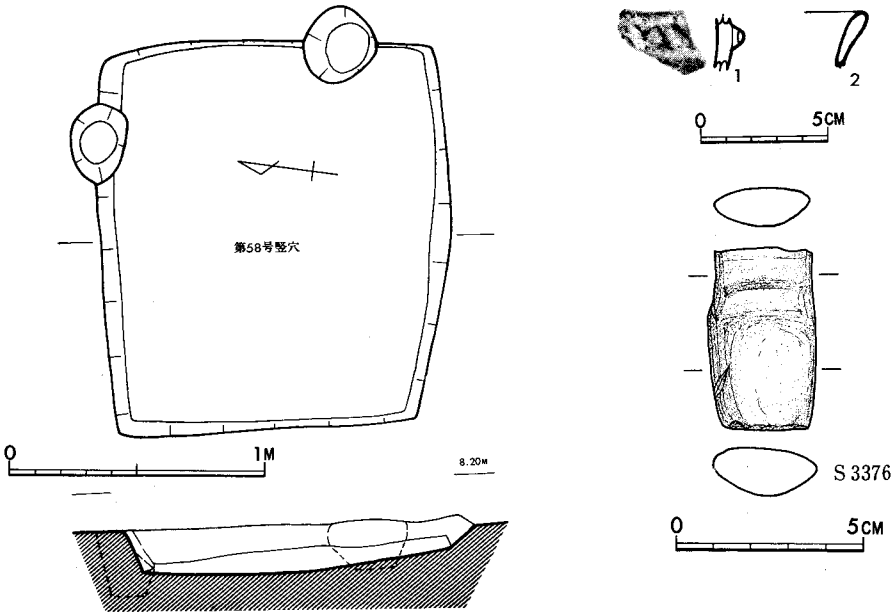


Fig. 3・128　第58号竪穴および出土土器石器実測図

出土土器（Fig. 3・128）

甕　(1)　刻目突帯をもつ胴部破片である。石英粒砂を含み、焼成良好。褐色外面の一部黒色を呈する。

壺　(2)　やや外反する口縁端が丸味を帯び、先端から除々に器壁が薄くなる。砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。

この竪穴は前期前葉と考えられる。

出土石器（Fig. 3・128、PL. XXVII）

砥石　（S 3376）　砂岩製である。

第59号竪穴（Fig. 3・129）

調査区最南端に位置する。南北約135cm、東西約108cmの長方形ランプを呈する。現存の深さ約22cm、残存の壁は袋状をなしていない。西壁上のピットは後世のものであるが、中央のピットはこの竪穴に伴うものである。床面からの深さ約20cm。出土土器はなく、時期不詳。

第60号竪穴（Fig. 3・130）

調査区中央西側に存在する。西壁で第61号竪穴を切っている。南北約 115cm、東西は北壁で約85cm、南壁で約118cmの台形に近いプランをもつ。床面は西側が低くなる。現存の深さ約30cm、残存の壁は袋状をなしていない。

出土土器（Fig. 3・130）

甕　夜臼式(1)　内傾する口縁の端に接して粘土帯を貼付けて突帯とし、その突帯に刻目を施す。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。外面暗褐色、内面黄褐色を呈する。

板付II式(2)　外反する口縁の端が「コ」の字状を呈し、その下端に刻目が施される。胎土に石英粒砂を含み、焼成はややあまい。暗褐色を呈する。

壺　板付I式(3)　外反する口縁外側に粘土を貼付け肥厚させる。そのため口縁下に段がつく。口縁部は短い。石英粒砂を含み、焼成良好。外面黄褐色、内面黒褐色を呈する。

板付II式（4～10）　4～6は外反する口縁部で、4は口縁下に段がつく。5は口縁端に接合の痕が沈線状に残り、外面は丹塗りの痕がある。7～10は肩部破片で、外側に段がつくが、内側は肥厚しない。ともに石英粒砂を含み、焼成良好。それぞれ褐色(4)、外面黄褐色・内面黒褐色(5)、外面赤褐色・内面黄褐色(6)、黄褐色（7・9）、外面暗褐色・内面黄褐色(8)、

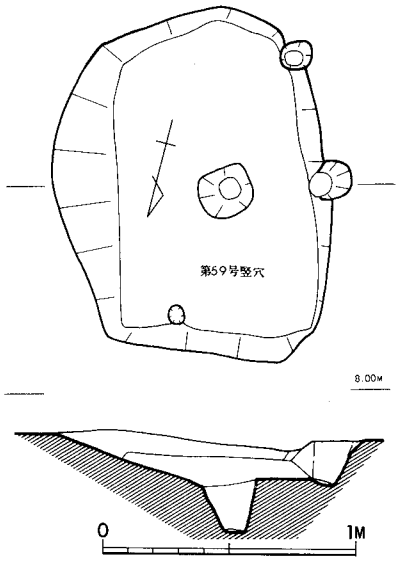


Fig. 3・129　第59号竪穴実測図

外面赤褐色・内面灰褐色(10)を呈する。

底部　(11)　大形の土器の底部である。石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色をを呈する。

この竪穴は弥生前期中葉であろう。

第61号竪穴（Fig. 3・130）

調査区中央西側に位置する。東壁を第60号竪穴によって切られている。南北約91cm、東西約

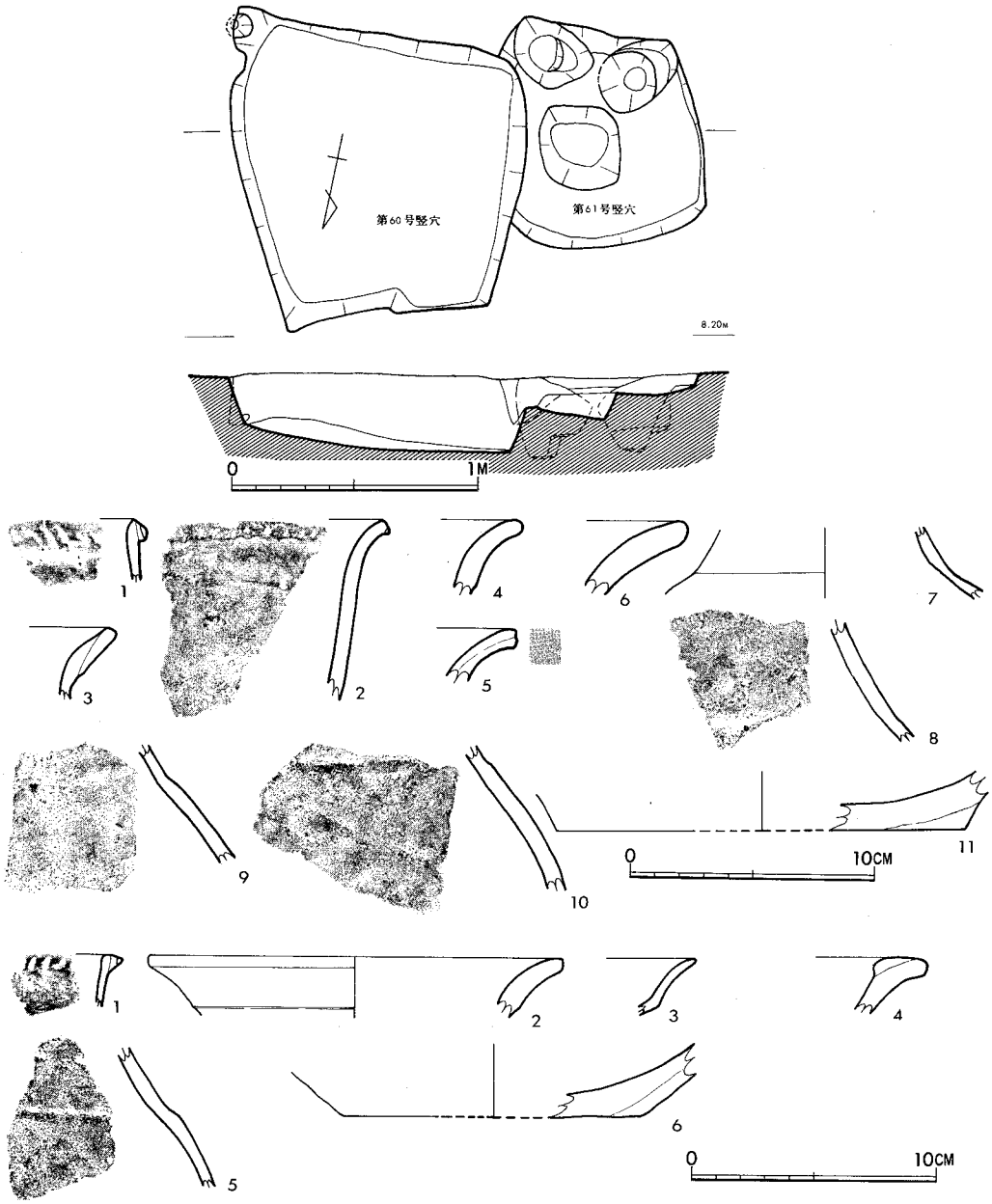


Fig. 3・130　第60号・61号竪穴および出土土器実測図

85cmの方形に近いプランをもつ。現存の深さ約8cm、内部にピットが3個存在する。

出土土器（Fig. 3・130）

甕　(1)　外傾する口縁の端に接して刻目突帯を付ける。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。夜臼式であろう。

壺　（2・4・5）　4は上部出土であり、伴うものではない。2は外反する口縁部で、口縁下に段がつく。口縁は短い。4は外反する口縁上部に粘土を貼付け肥厚させる。5は肩部で、外面に段がつき、内部も若干ながら肥厚する。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。黄褐色を呈する。2は板付Ⅰ式、4は中期初頭のものであろう。

鉢　(3)　短く外反した口縁部から逆「く」の字状に反転する胴部へとつづく。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、灰褐色を呈する。夜臼式であろう。

底部　(6)　壺の底部であろう。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、外面赤褐色・内面暗褐色を呈する。

この竪穴は弥生前期前葉のものであろう。

第62号竪穴（Fig. 3・131）

調査区やや北寄りに位置する。第34号竪穴を切って作られている。底径南北約174cm、東西155cmの隅丸方形に近いプランをもつ。現存の深さ約51cmで、壁は袋状をなす。床面は西側の方がわずかに低い。

出土土器（Fig. 3・131）

甕　夜臼式（1～9）　いずれも刻目突帯をもつ土器であるが、1～5は口縁部、6～9は胴部である。口縁部のうち2～4は口縁端に接して刻目突帯が付けられるが、1・5は口縁端より少し下がって付けられる。7～9は条痕がつけられる。8の接合部内面には段がつく。胎土は石英粒砂を含むもの（1～3・6～8）と砂を含むもの（4・5・9）があり、焼成はすべて良好。それぞれ暗褐色（1・2・4～6・9）、赤褐色（3・9）黄褐色(8)を呈する。

板付Ⅰ式(10～12)　外反する口縁の端が丸味を帯び、その口縁端が縦幅一杯に刻目を施す。12は刻目は貝殻での施文と思われる。胎土は石英粒砂を含むもの(10)と砂を含むもの（11・12）がある。焼成はともに良好。暗褐色を呈する。

板付Ⅱ式？(13)　刻目突帯をもつ胴部破片で煤の付着が認められる。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。暗褐色を呈する。上部よりの出土で、伴うものではないと考えられる。

鉢　(14)　内傾し、外反する口縁部で胎土に砂を含み、焼成良好、褐色を呈する。夜臼式であろう。

壺　（15～17）　ともに外反する口縁部であるが、15・16は口縁下に段がつく。16は内外面とも丹痕、ともに石英粒砂を含み、焼成良好、それぞれ、外面暗褐色・内面赤褐色(15)、赤褐色(16・17)。板付Ⅰ～Ⅱ式であろう。

底部　（18～21）　いずれも甕の底部であろう。18は上げ底となる。いずれも石英粒砂を含み、焼成良好。それぞれ、外面赤褐色・内面灰褐色(18)、褐色（19・21）、外面褐色・内面暗褐色(20)を

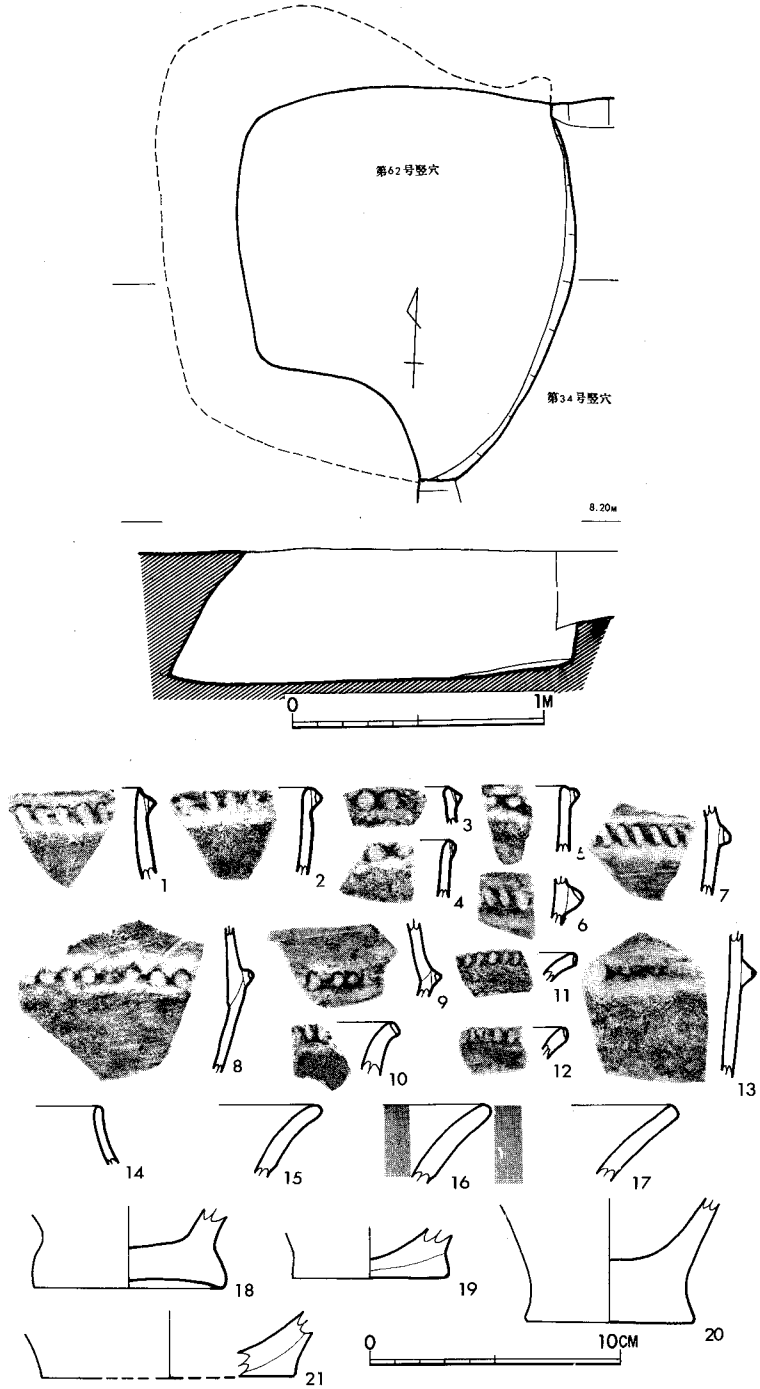


Fig. 3・131　第62号竪穴および出土土器実測図

呈する。

この竪穴は弥生前期前葉のものであろう。

第63号竪穴（Fig. 3・132）

調査区西側に存在する。第34号竪穴とほとんど接して作られている。東西約285cm、南北約156cmの長方形フランをもつ。現存の深さ約41cm、残存の壁は袋状をなしてない。内部に5個のピットがあるが、いずれも竪穴に伴うものである。東南隅のものが小さいが、他の隅のものはいずれも内側に傾いているのであるいは屋根的なものを考えてよいかもしれない。

出土土器（Fig. 3・132）

甕　夜臼式（1・2・9）ともに刻目突帯をもつ土器で、1・2は口縁部、3は胴部である。1は条痕がつく。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。それぞれ、外面褐色・内面黄褐色（1）、外面暗褐色・内面褐色（2）、褐色（9）を呈する。

板付Ⅰ式（6・7）・外反する口縁の端の縦幅一杯に刻目を施す。ともに石英粒砂を含み、焼成は良い。外面灰褐色・内面暗褐色（6）・暗褐色（7）を呈する。

板付Ⅱ式（8）　外反する口縁の端が「コ」の字状を呈し、その下端に刻目が施される。石粒砂を含み、焼成良好。黄褐色を呈する。

壺（3～5）ともに外反する口縁部で、4・5は口縁下に段がつく。ともに石英粒砂を含み、焼成良好。それぞれ、外面赤褐色・内面淡褐色（3）、黄褐色で一部黒変（4）、赤褐色（5）を呈る。3は夜臼～板付Ⅰ式、4・5は板付Ⅰ～Ⅱ式であろう。

底部（10～12）　10・12は壺、11は甕であろう。12は上げ底、10はいわゆる円盤貼付けであり、外面横に研磨の痕がある。胎土に石英粒砂を含み、焼成は10がややよくないが、他は良好。それぞれ、黒色（10）、赤褐色（11）、褐色（12）を呈する。

この竪穴は弥生前期前葉のものであろう。

出土石器（Fig. 3・132、PL. XXVⅢ）

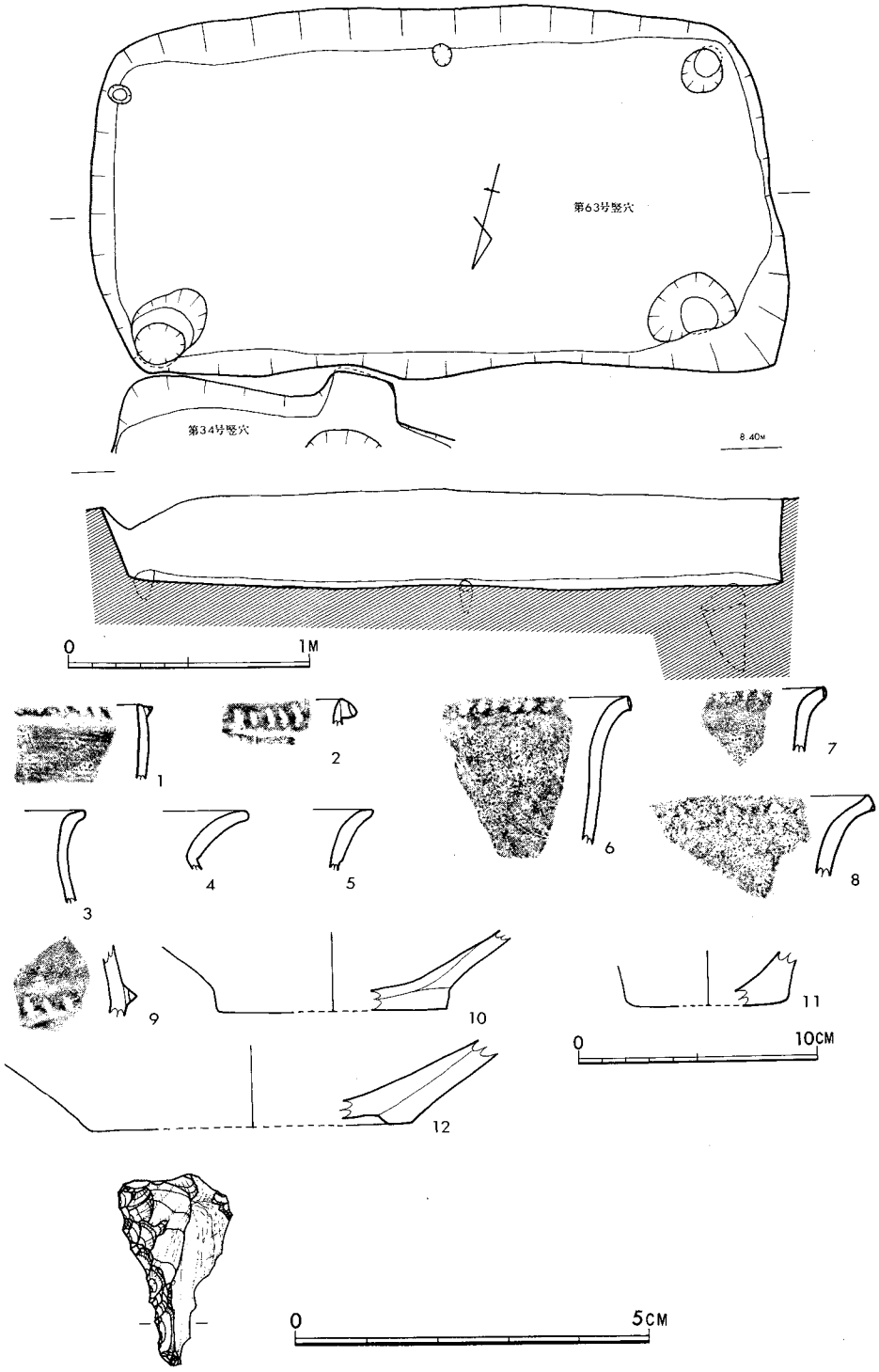
石錐（S 3501）　黒曜石の剝片を利用して作られている。表面の右辺は自然面が残る。

第64号竪穴（Fig. 3・133、PL. XIV）

調査区北側南寄りに位置する。南北約276cm、東西約175cmの長方形フランをもつ。現存の深さ約35cm、残存の壁は袋状をなしていない。ピットは5個あるが、いずれも竪穴とは関係がない。

出土土器（Fig. 3・133）

甕　夜臼式（8～8）　1～5、7・8は刻目突帯をもつ土器である。6は突帯をもつが刻目をもつかどうかは不明。4・5は口縁端より若干下がる位置に突帯がつけられる。8は外面には条痕がみられる。1は砂を含むが、他は石英粒砂を胎土に混じる。焼成はすべて良好。それぞれ暗褐色（1・7）、赤褐色（2・5）外面黒褐色・内面黄褐色（3）、黄褐色（4・8）、黒色（6）を呈する。



S 3501

Fig. 3・132　第63号竪穴および出土土器・石器実測図

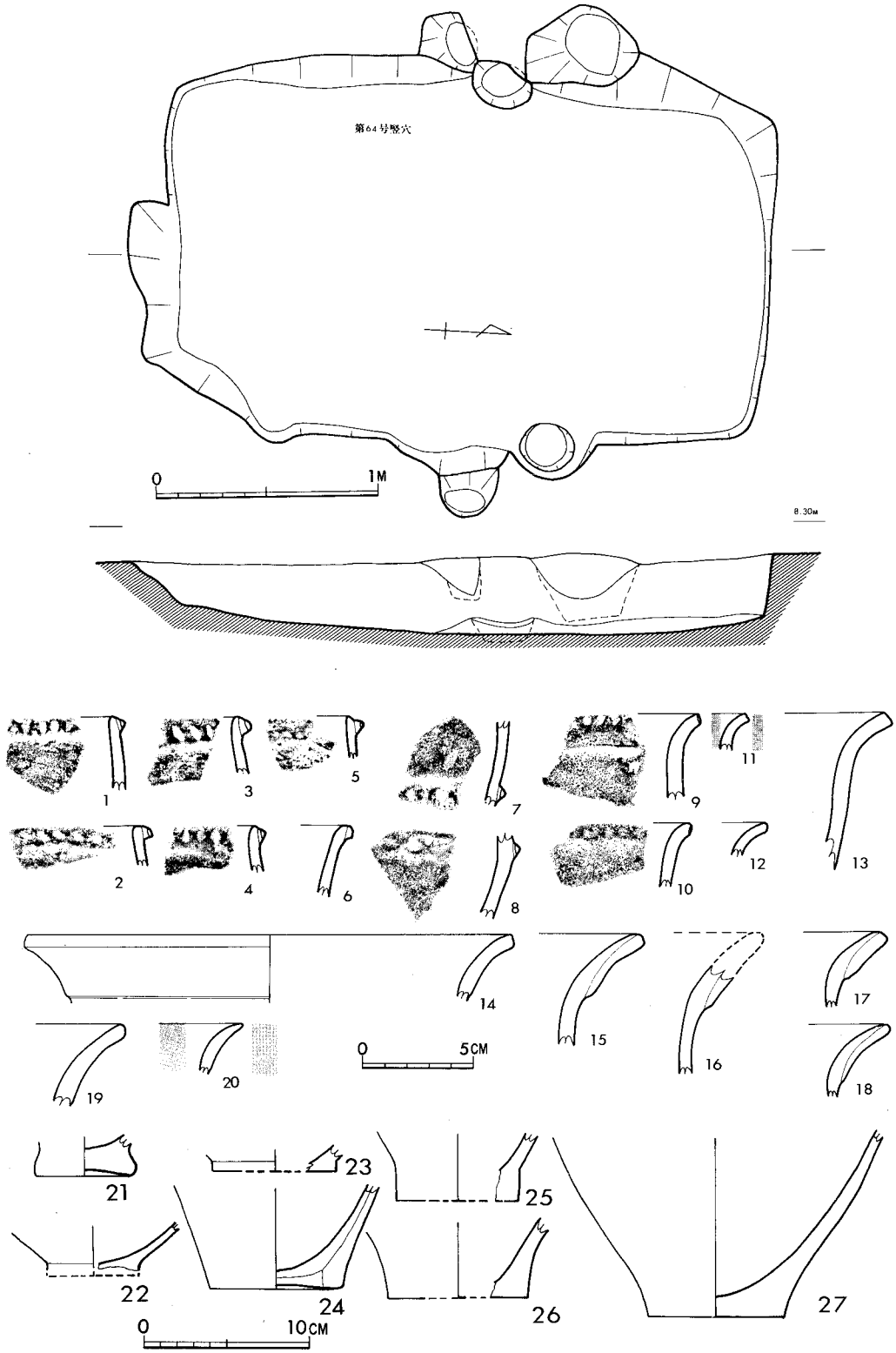


Fig. 3・133　第64号竪穴および出土土器実測図

板付Ⅰ式(9・12)　ともに外反する口縁の端が丸味を帯びる。9はその端の縦幅一杯に刻目を施す。ともに石英粒砂を含み、焼成は良好。それぞれ外面暗褐色・内面赤褐色(9)、黄褐色(12)を呈する。

板付Ⅱ式(10・13)　いずれも外反する口縁をもつ。10は口縁端がやや丸味をもつが、刻目は下端のみにつけられる。12は口縁端が「コ」の字状となる。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。それぞれ黄褐色(10)、外面暗黄褐色・内面黒色(13)を呈する。

壺(11・14～20)　いずれも外反する口縁部で11以外は口縁下に段がつく。特に15～18は口縁外側への粘土の貼付けが良く認められる。11・20は丹の痕跡が認められる。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成も良好。それぞれ赤褐色(11・20)黄褐色(14・17・18)、外面黄褐色・内面褐色(15)、褐色(16)、外面黄褐色・内面淡黒褐色(19)を呈する。これらは板付Ⅰ～Ⅱ式のものであろう。

底部(21～27)　22・23は壺で、他は甕であろう。21・24は上げ底を呈する。21は夜臼式、22・23は板付Ⅰ式のものであろう。いずれも石英粒砂を含み、焼成良好。それぞれ黄褐色(23)、外面褐色・内面黄褐色(25)、外面暗赤褐色・内面暗褐色(26)、外面赤褐色・内死暗褐色(27)呈する。27の内面には煤の付着が認められる。

この竪穴は弥生前期中葉のものであろう。

第65号竪穴（Fig. 3・134、3・135）

調査区若干北側に位置する。平面形では北側に造り出し状のものがあるが、本来は底径約190cmの円形プランをもつ竪穴である。現存の深さ約47cm。北から西にかけての壁は袋状をなす。もともとは袋状の竪穴であったのであろう。

出土土器（Fig. 3・134、3・135）

甕　夜臼式(1～3)　1は口縁部、2・3は胴部破片である。1・2は刻目突帯をもつ。いずれも条痕が認められる。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。

板付Ⅰ式(7)　外反する口縁の端が丸味を帯び、その口縁端の縦幅一杯に刻目が施される。石英粒砂を含み、焼成良好、赤褐色を呈する。

板付Ⅱ式(4～6・8～10)　4～6は外反する口縁の下端に刻目を施す。8は外反する口縁上端に粘土を貼付けて肥厚させ、その上下両端に刻目を施す。9は突帯をもつ胴部破片。10も胴部破片で篦状の工具で刻目を入れる。10の外面に煤の付着が認められる。ともに石英粒砂を含み、焼成も良好。それぞれ外面褐色・内面暗褐色(4)、黄褐色(5)、褐色(6・8)、暗褐色(9・10)を呈する。

壺　(11～14)　11は外反する口縁外側に粘土を貼付けて肥厚させる。そのため口縁下に段がつく。口縁部から頸部にかけての屈曲は強い。12～14は肩部および胴部破片で、12は弧状八字形文を施文する。13・14は接合部内側が若干肥厚するが、段がつくほどではない。外面には13は三本、12・14は一本の横沈線が施される。いずれも石英粒砂を含み、焼成は良い。それぞれ外面暗褐色・内面褐色(12)、黄褐色(11)、褐色(13・14)を呈する。11・12は板付Ⅰ式、他は板

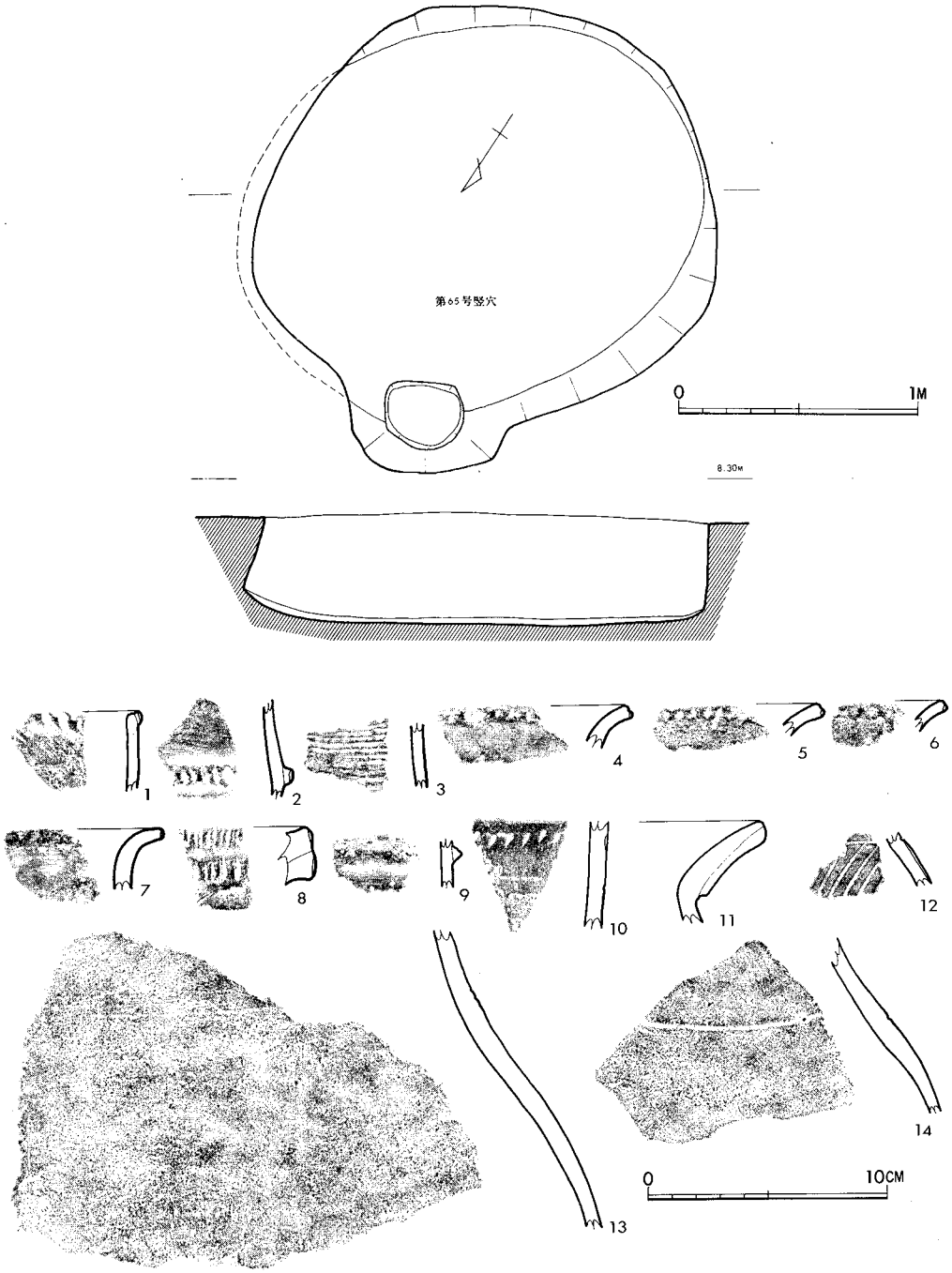


Fig. 3・134　第65号竪穴および出土土器実測図

板付II式であろうか。

蓋(15)　ほぼ完形の蓋で、上部上面は凹む。外面は縦の細い刷毛目調整で、一部指の横なで調整で、刷毛目を消している。内部は横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。外面赤褐色・内面暗褐色を呈する。板付II式であろう（PL.XXⅣ）。

底部　(16～19)　17・18は壺、16・19は甕の底部であろう。16の外面は縦の刷毛目調整。いずれも石英粒砂を含み、焼成良好。それぞれ、外面赤褐色・内面暗褐色(16)、外面褐色・内面黄褐色(19)を呈する。

この竪穴は弥生前期中葉～後葉であろう。

出土土製品（Fig.3・135）

投弾　（D３）　投弾片である。胎土・焼成ともに良好で、赤褐色を呈する。

出土石器（Fig.3・135、PL.XXVⅢ）

打製石鏃(S3551)　凹基無茎式のもので黒曜石製。先端を欠失する。重さ0.85ｇ。

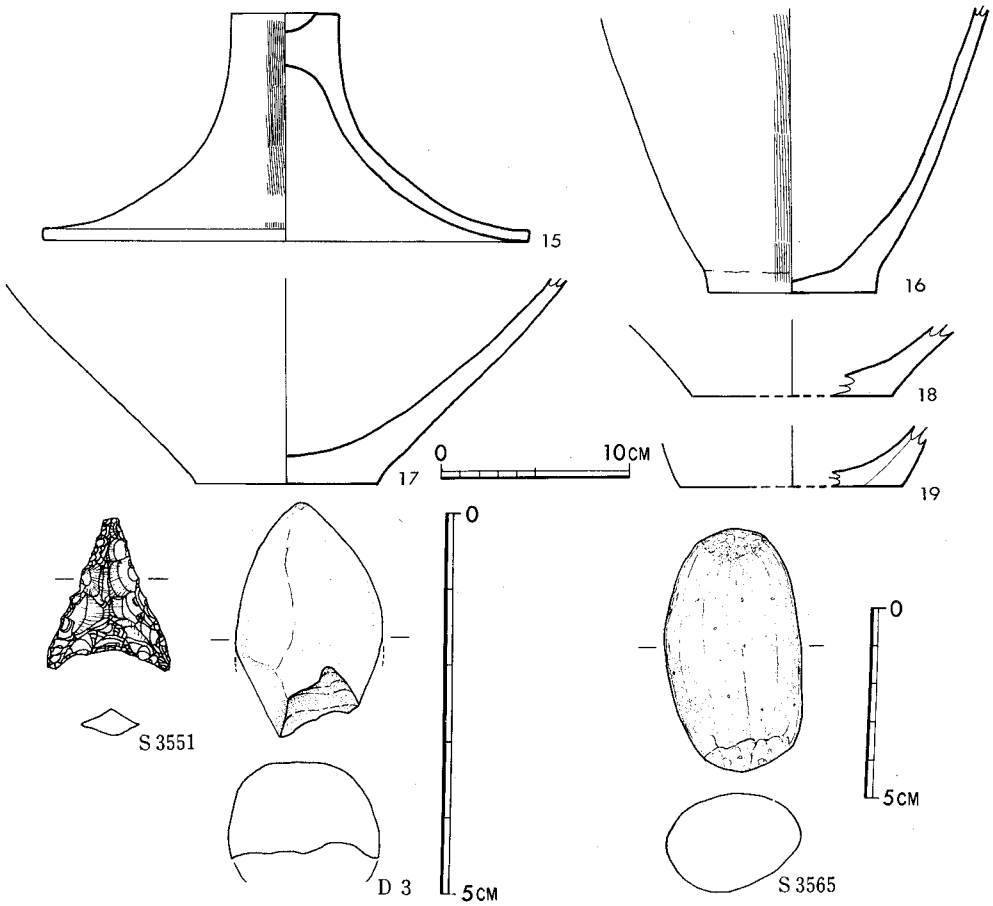


Fig.3・135　第65号竪穴出土土器・石器・土製品実測図

敲石　（S 3565）　砂岩の小形長円礫の両端に打痕がある。重さ90 g。

第66号竪穴（Fig. 3・136）

調査区中央西側に存在する。第41号甕棺墓、第42号甕棺墓によって北側が切られている。南側にも張り出し状になる部分があるが、本来は南北約220cm、東西約197cmの長方形に近いプランをもつと思われる。現存の深さ約29cm。残存の壁は袋状をなしていない。

出土土器（Fig. 3・136）

甕　（1・2）1は外反する口縁の下端に刻目を施す。2は刻目突帯をもつ胴部破片であり細い条痕がみられる。ともに石英粒砂を含み、外面黒褐色・内面黒褐色(1)、外面暗褐色・内面黒色(2)を呈する。1は板付II式、2は夜臼式であろう。

底部　（3）　甕の底部である。石英粒砂を含み、焼成良好。赤褐色を呈する。

この竪穴は弥生前期中葉のものであろう。

出土石器（Fig. 3・136）

削器　（S 3576）　黒曜石の不定形剝片の縁辺に二次加工を加えている。

第67号竪穴（Fig. 3・137、3・138）

調査区北側に存在する。第68号竪穴を切って作られており、第47号木棺墓から切られている。底径約153cmの円形プランをもち、南西壁の一部は袋状をなす。現存の深さは約30cm。

出土土器（Fig. 3・137）

壺　（1～3）　1は外反する口縁部、2は外反する口縁内側上部に粘土を貼付けて肥厚させたものである。3は肩部破片で、羽状文？を施したものである。胎土には石英粒砂混（1）と砂混だが良好（2・3）があり、焼成はいずれも良好。それぞれ外面暗褐色・内面褐色（1）、赤褐色（2）、外面赤褐色・内面黄褐色(3)を呈する。この中で2は第47号土坑墓のものの可能性が強い。

脚部　（4）　高坏の脚であろう。内面横なで調整。胎土に砂を含み、焼成良好。外面暗褐色・内面黒褐色を呈する。

底部　（5～7）　5・7は壺、6は甕の底部であろう。6は上げ底。7は外面箆の磨研がある。いずれも石英粒砂を胎土に含むが、焼成は5・6がややあまく、7は良い。それぞれ暗褐色（5）、黄褐色（6）、赤褐色（7）を呈する。

これらの土器は板付II式のものであり本竪穴は弥生前期中葉～後葉のものであろう。

出土石器（Fig. 3・138）

石核　（3601）　黒曜石角礫を素材として半截面を打面とし、剝片を剝出している。

第68号竪穴（Fig. 3・137、3・138）

調査区北側に存在する。西側を第67号竪穴、第67号土坑墓、東側を第49号土坑墓によって切られているが、南北の底径約206cmの円形プランをもつと推定される。現存の深さは約18cm、

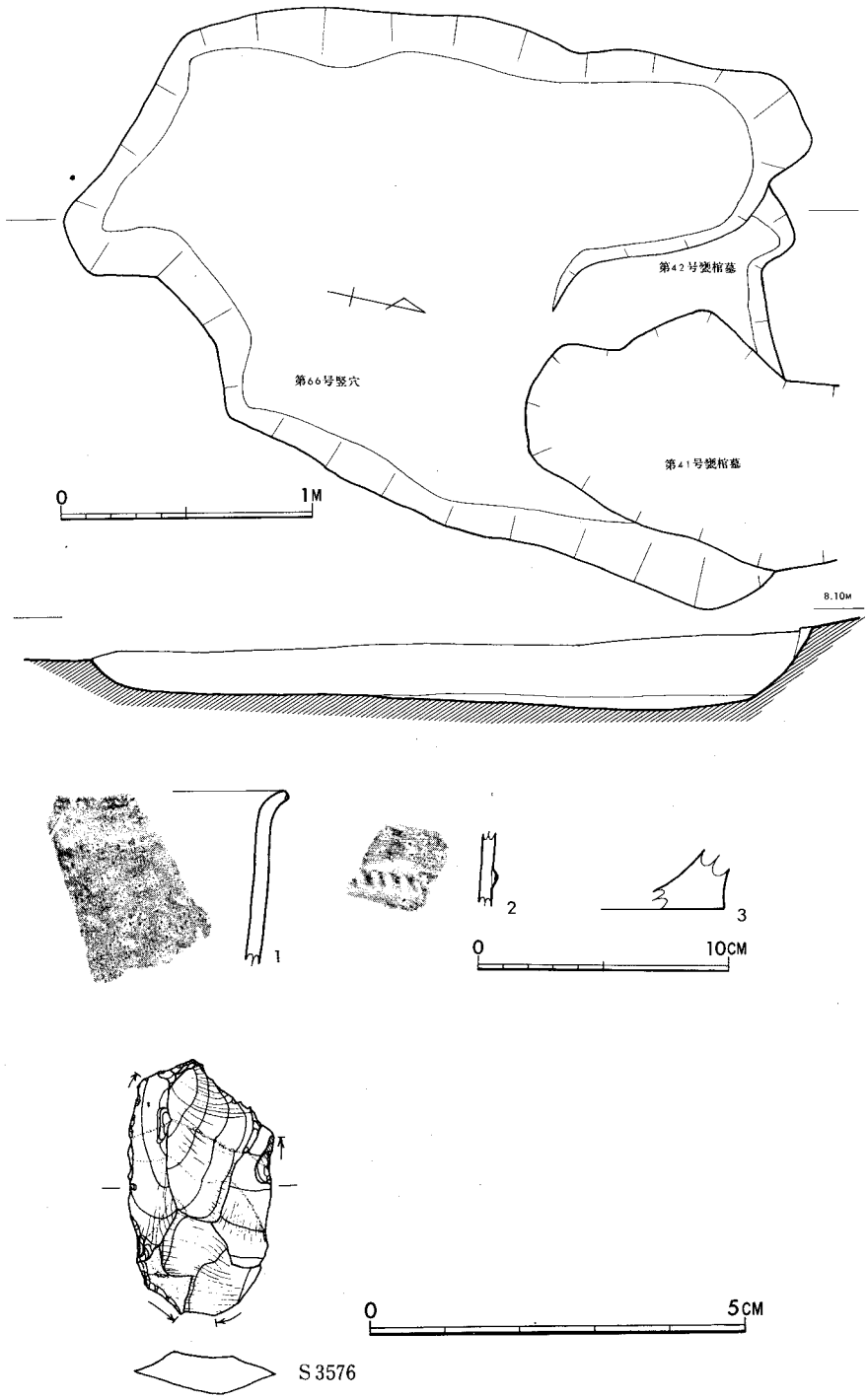


Fig. 3・136　第66号竪穴および出土土器・石器実測図

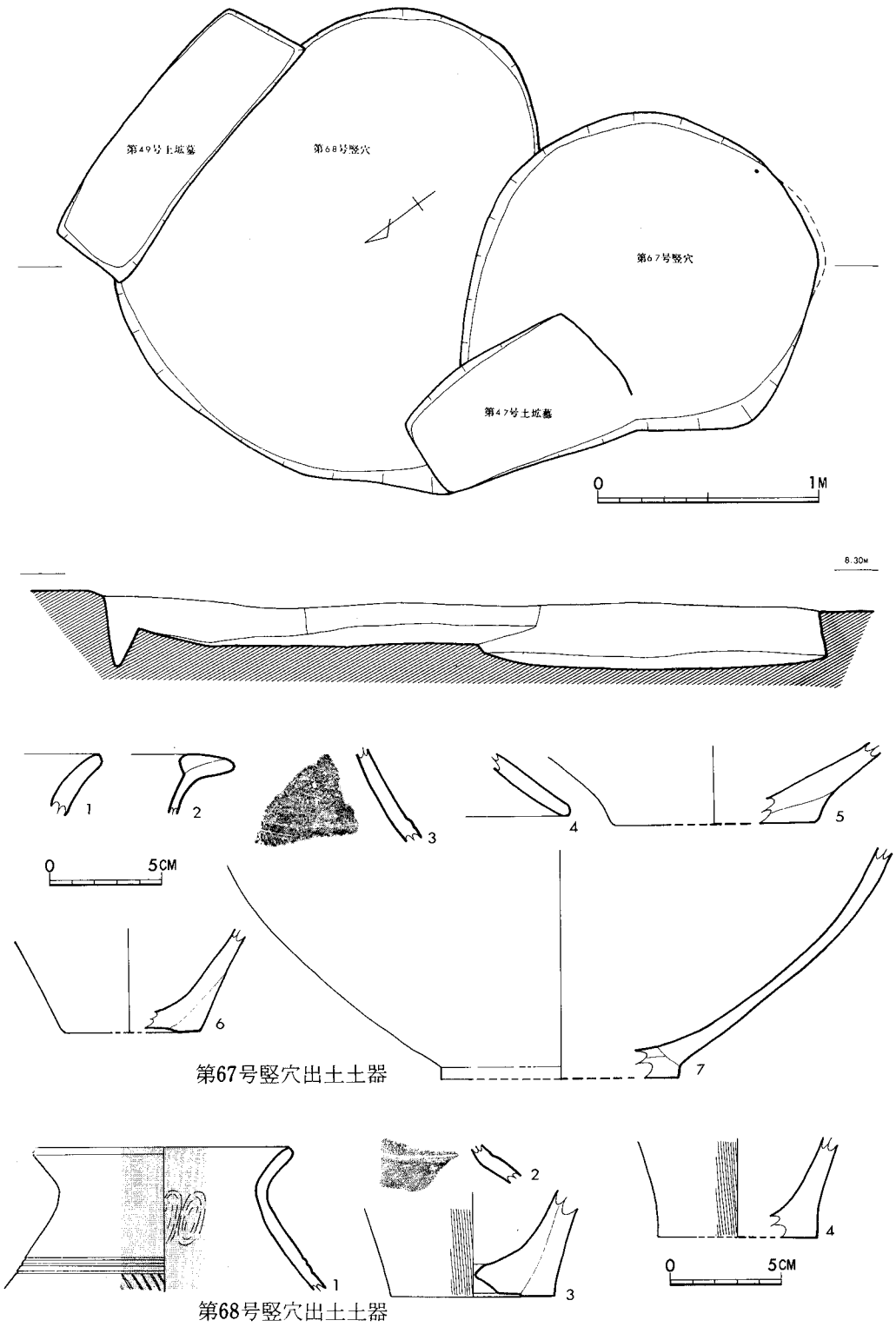


Fig. 3・137　第67号・68号竪穴およびおよび出土土器実測図

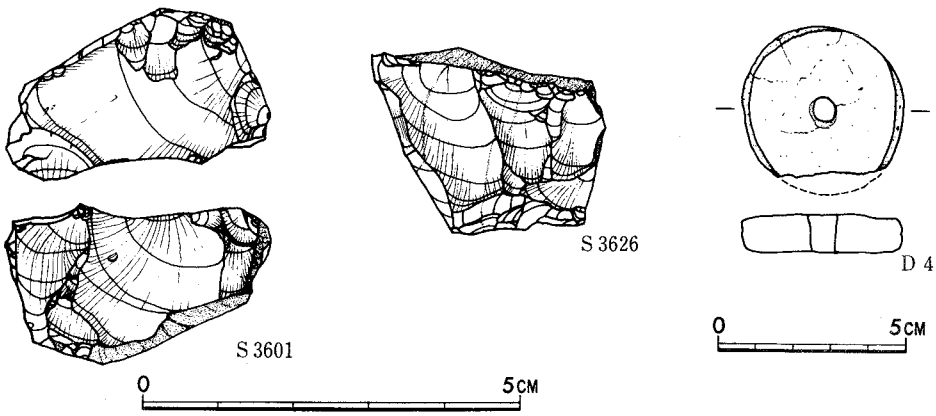


Fig. 3・138　第67号・68号竪穴出土石器・土製品実測図

残存の壁は袋状をなしてはいないが、本来は袋状の竪穴であったと考えられる。

出土土器（Fig. 3・137）

壺　（1・2）　1は外反し、肥厚しない口縁をもつ。肩部に三本の沈線が巡らされその下におそらく羽状文と思われるが、箆によって施される。頸部内側には指の押圧調整痕が残る。全面丹塗。2は肩部で、外面に段がつき、内側も若干肥厚はするが段がつくほどではない。胎土に1は石英粒砂、2は砂を含み、焼成は良好。赤褐色（1）、外面暗褐色・内面黄褐色(2)を呈する。

底部　（3・4）　いずれも甕の底部であるが3は甑である。3は上げ底で底部の穿孔は焼成後。外面は縦刷毛目調整。4の外面も縦刷毛目調整。いずれも石英粒砂を胎土に含み、焼成は良い。それぞれ、外面赤褐色・内面黒褐色(3)、外面赤褐色・内面黄褐色(4)を呈する。

この出土土器は板付Ⅰ～Ⅱ式のもので、本竪穴は弥生前期前葉～中葉のものであろう。

出土土製品（Fig. 3・138）

紡錘車　（4）　側面に沈線が巡る。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。黄褐色を呈する。一部を欠失する。22g。

出土石器（Fig. 3・138）

石核　（S 3626）　黒曜石角礫を素材とし、平坦な自然面を打面として、2cm前後の剥片が剥出されている。

第69号竪穴（Fig. 3・139）

調査区中央やや南東寄りに位置する。第76号竪穴を切り、第77号竪穴に南側を切られている。中央部で東西約110cmの北が広く南が狭い台形プランをなすものと推定される。内部に段がつくが、最深部での現存の深さは約27cm。内部のピットは2個存在する。

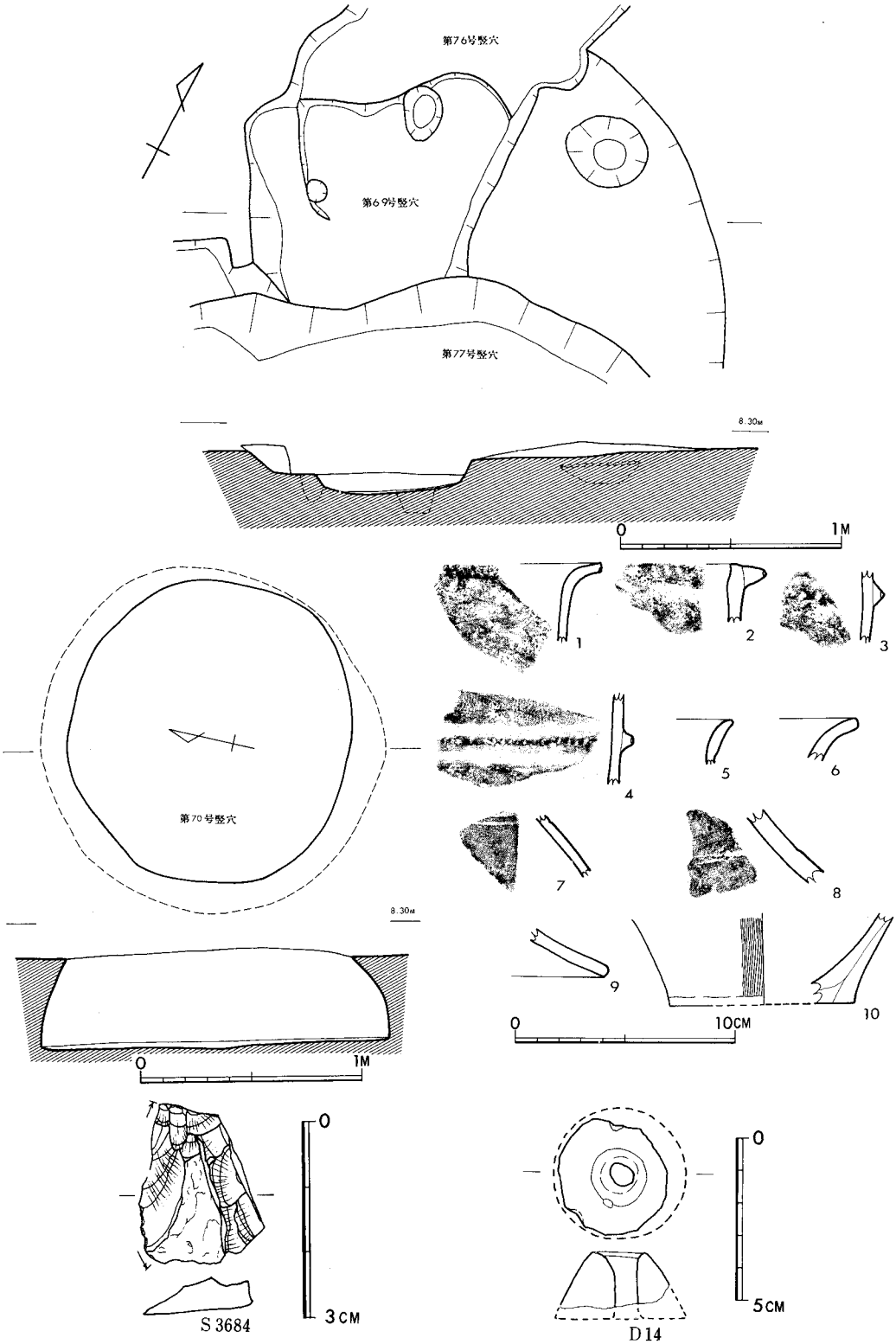


Fig. 3・139　第69号・70号竪穴および出土土器・石器土製品実測図

第70号竪穴（Fig. 3・139、PL.XV）

調査区北側に位置する。本遺跡中では残りの良いものの一つで底径約157cmの円形プランを呈する。現存の深さは約45cmで、壁は袋状をなす。

出土土器（Fig.3・139）

甕　（1～4）　1・2は口縁部、3・4は胴部である。1は外反する口縁の下端に刻目を施す。2は口縁端に接して、外側に粘土を貼付けて高い突帯とし、それに小さな刻目をつける。3・4は刻目突帯をもつ。4は縦の刷毛目調整がみられる。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。それぞれ赤褐色(1)、褐色(2)、暗褐色(3・4)を呈する。

壺　（5～8）5・6は外反する口縁部で、5は口縁下に段がつく。6は内面篦磨き、外面面は横なで調整。7・8は肩部で7は沈線が巡り、8は外側に段がつく。いずれも内側は肥厚しない。5は若干の砂を混入するだけだが、他は石英粒砂を含む。焼成はすべて良好。それぞれ赤褐色(5)、暗褐色(6・7)、外面暗褐色・内面赤褐色(8)を呈する。

蓋　（9）　9は蓋の破片であろう。内面は横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。外面赤褐色、内面暗褐色を呈する。

底部　（10）　甕の底部である。外面に縦の刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。外面暗褐色、内面黄褐色を呈する。

この出土遺物は板付II式のものであり、竪穴の時期は弥生前期中葉のものといえよう。

出土石器（Fig.3・139）

剝片石器　（S3684）　硅質頁岩の剝片の左側片縁に使用痕がみられる。

出土土製品（Fig.3・139）

紡錘車　（D14）　截頭円錐形の土製紡錘車である。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色。下部を欠く。

第71号竪穴（Fig. 3・140、3・141、PL.XIV）

調査区北側に位置する。南西側に長方形の張り出し状のものがあるが、本来は東西の底径約187cmの円径プランをなす。現存の深さ約30cm、北側から東側にかけての壁が袋状をなす。もともとは袋状竪穴であったのであろう。

出土土器（Fig.3・140、3・141）

甕　（1～4・9・12・15・17）　1は内傾する口縁端から若干下がった位置に刻目突帯を付す。2～4は外反する口縁の下端に刻目を施す。9・12は大形の甕で、外反する口縁を粘土貼付けで肥厚させ、内外両面とも口縁下で段がつく。両者とも横なで調整を行うが、12は口縁上端にのみ刻目がつき、内面の段下には刷毛目調整。15・17も外反する口縁をもつが刻目はつかない。17は胴部の張りが強い。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。それぞれ、外面暗褐色・内面褐色(1)、暗褐色(2)、赤褐色(3)、黒色(4)、黄褐色(9・12・17)、灰褐色で一部黒変(15)を呈する。1は夜臼式、他は板付II式であろう。

壺　（5～8・10・11・13）　5～8は肥厚せず、外反する口縁部である。10も外反するが、

口縁上端に粘土を貼付けて肥厚させる。13も肥厚し、外反するが、口縁端は凹み横なで調整。11は胴部破片で、下弦重孤文が描かれるが、かなり乱雑である。いずれも石英粒砂を含み、焼成は良い。それぞれ、黄褐色(5・7・10・11・13)、赤褐色(6)、黒色(8)を呈する。これらはいずれも板付II式であろう。

鉢 (14・16) いずれも外反する口縁から、ゆるやかに底部へと続く器形をもつ。いずれも石英粒砂を含み、焼成良好。14(PL.XXⅣ)は完形品で、内面に煤が付着する。16は暗赤褐色を呈する。これらも板付II式である。

底部 (18〜23) 18・20は壺、他は甕の底部であろう。いずれも石英粒砂を含み、焼成良好。

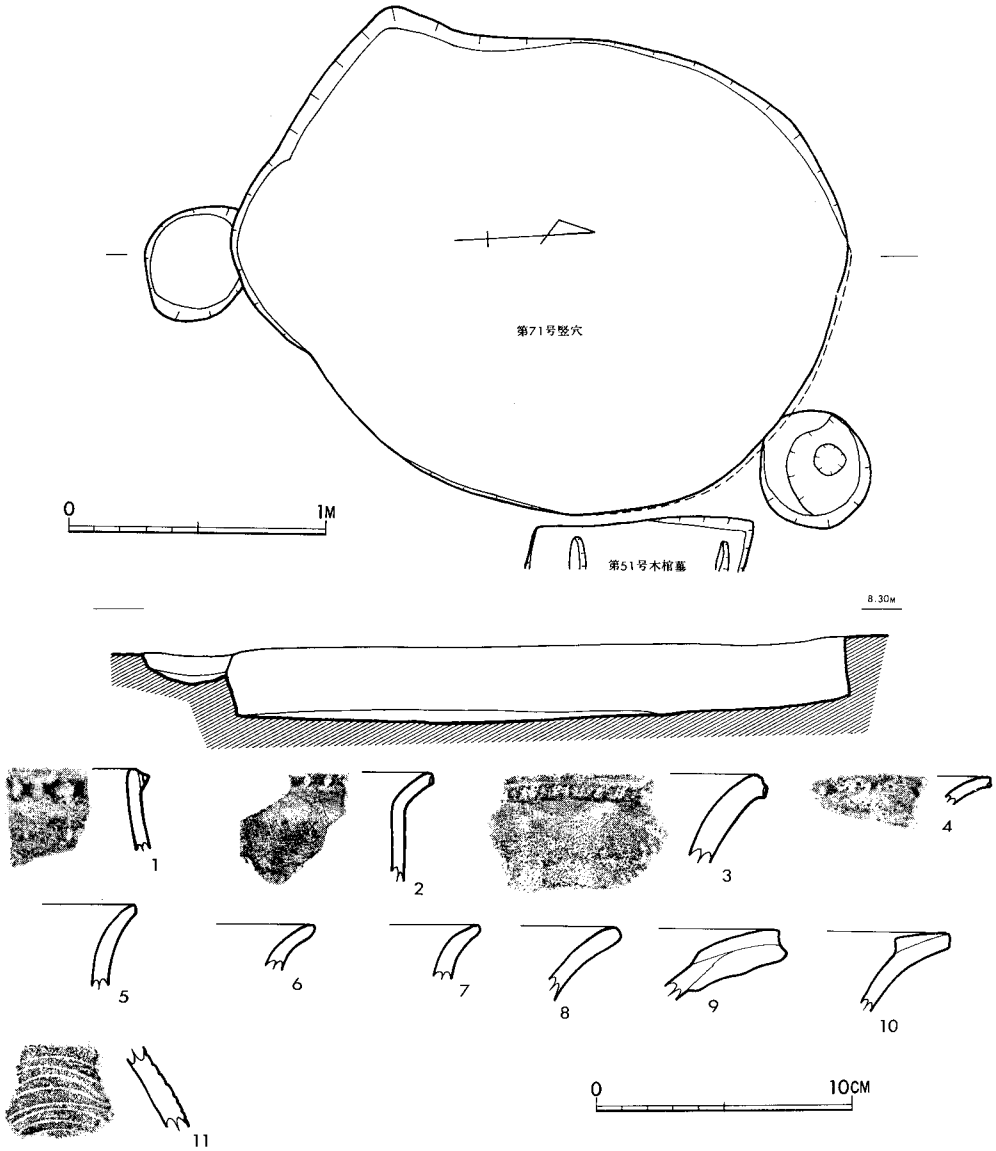


Fig. 3・140 第71号竪穴および出土土器実測図

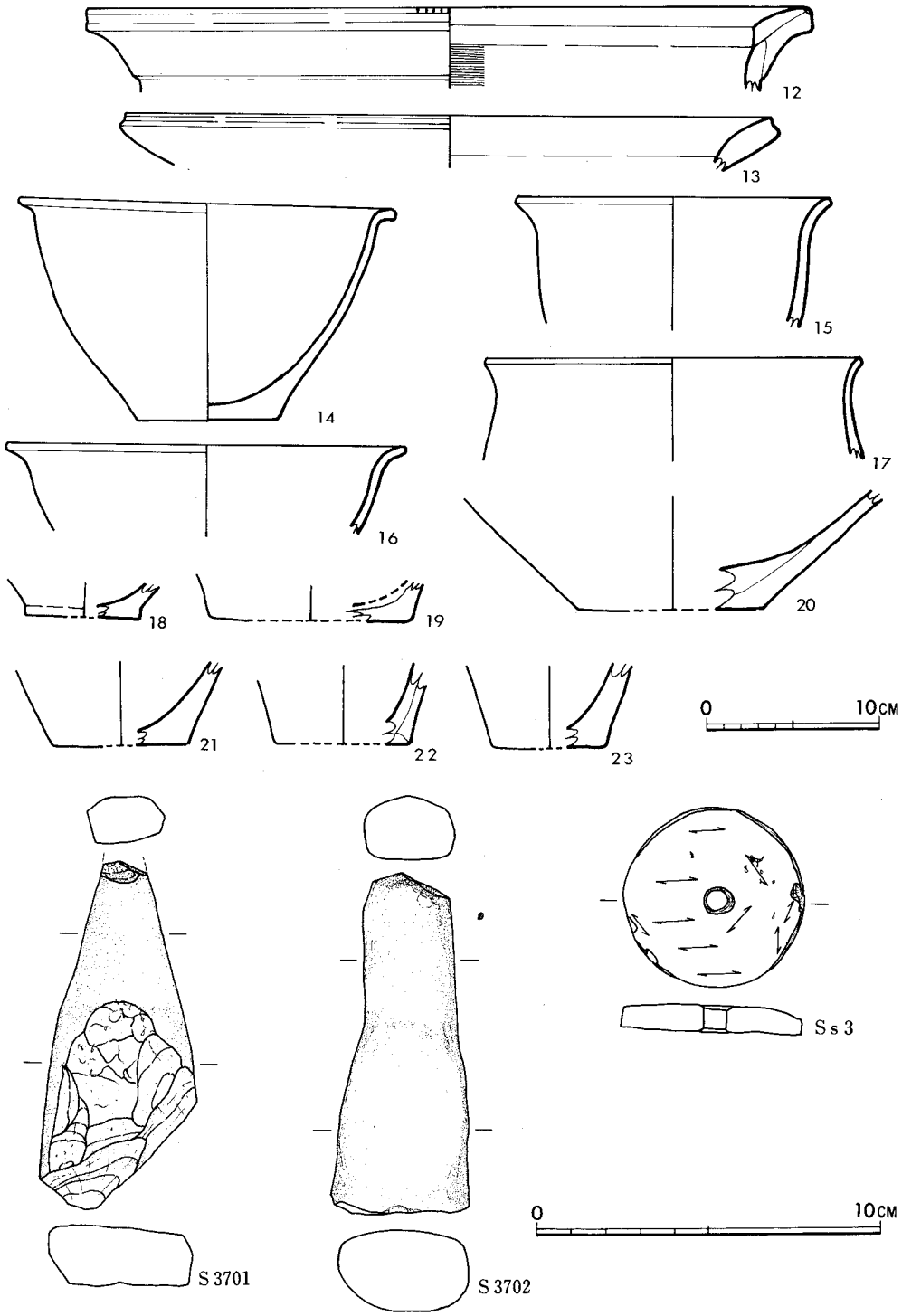


Fig. 3・141　第71号竪穴出土土器・石器・石製品実測図

それぞれ、黒色(18)、赤褐色(19)、外面黄褐色・内面黒褐色(20)、外面黄褐色・赤褐色で内面は煤の付着のため黒色(21)、外面赤褐色・内面暗褐色(22)、外面褐色・内面黒褐色(23)を呈する。

この竪穴は弥生前期中葉～後葉のものであろう。

出土石製品（Fig. 3・141、PL. XXVII）

紡錘車　（S s 3）　結晶片岩製で、重さ60 g。なお実測図中の矢印は研磨の方向である。

出土石器（Fig. 3・141、PL. XXVIII）

穿孔具状石器（S 3701・3702）　ともに砂岩製で砂岩製で、先端部が細く、穿孔に用いられたとみられる。

第72号竪穴（Fig. 3・142）

調査区北側に位置する。南北約223cm、東西約133cmの長方形プランをもつ。現存の深さ約27cm。残存の壁は袋状をなしていない。もともと袋状の竪穴でなかったのであろう。

出土土器（Fig. 3・142）

甕　（1・2・5）　1は刻目突帯をもつ胴部破片である。2・5は外反する口縁の端が丸味を帯び、その口縁端の縦幅一杯に刻目が施される。5は内面に横刷毛目調整と指の押圧調整の痕が残り、接合部も明瞭である。外面には煤の付着が認められる。いずれも胎土には石英粒砂を含み、焼成良好。それぞれ暗褐色(1)、黄褐色(2)、外面黒褐色・内面暗褐色(5)を呈する。1は夜臼式、2・5は板付Ⅰ式であろう。

壺　（3・4・7）　3は内傾、4は外反する口縁部、7は肩部破片である。4は丹塗土器である。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。それぞれ黄褐色(3)、赤褐色(4)、外面赤褐色・内面暗褐色(7)を呈する。これらも板付Ⅰ式であろう。

鉢　(6)　外反する口縁部から胴部へゆるく反転する。胎土に石英粒砂を混じ、焼成は良い。外面赤褐色、内面黄褐色を呈する。板付Ⅰ式であろう。

本竪穴は弥生前期前葉のものであろう。

第73号竪穴（Fig. 3・143）

調査区北側西寄りに位置する。東西約270cm、南北約190cmの長方形プランをもつが、床面が2段になっているため、あるいは2個の竪穴の切り合いであったかもしれない。そうなると浅い方はわからないが、深い方は東西約190cmとなり、方形に近いプランとなる。現存の深さは、浅い方で約22cm、深い方で約36cm。残存の壁は袋状をなしてはいないが、東壁はほとんど垂直に近い。浅い方の両隅にあるピットはこれに伴うものである。

出土土器（Fig. 3・143）

甕　（1・2・7・8）　1・2は刻目突帯をもつ。1は口縁部で口縁端から少し下がった部位に突帯はつけられる。2は胴部である。8は外反する口縁の端が丸味を帯び、その口縁端の縦幅一杯に刻目が施される。7も外反し、口縁端が丸味を帯びる。いずれも石英粒砂を含み、焼成は良い。それぞれ、外面赤褐色・内面黒褐色（1・7）、暗赤褐色(2)、暗褐色(8)を呈する。1・2は夜臼式、7・8は板付Ⅰ式であろう。

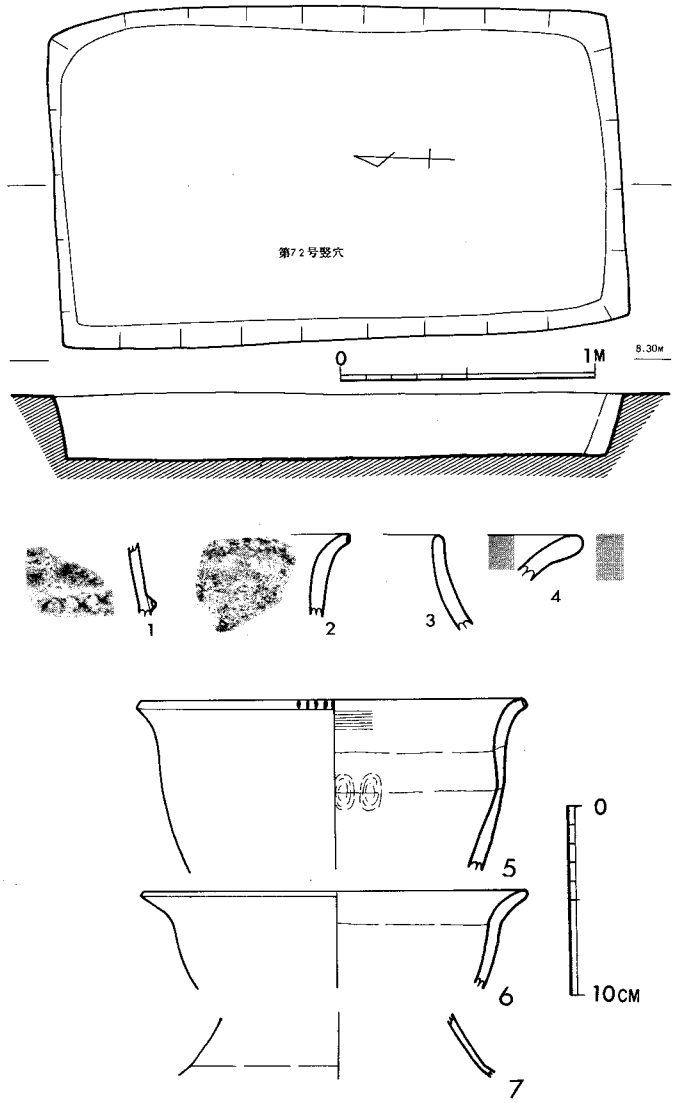


Fig. 3・142　第72号竪穴および出土土器実測図

壺　（3・5・6・9）　3は内傾しながら外反、5・6は外反する口縁部である。6は丹塗土器で、横なで調整。9は肩部で、外面に段がつく。3は夜臼式、他は板付Ⅰ～Ⅱ式であろう。

鉢　(4)　小さく外反する口縁部と反転する胴部をもつ。内側には横の条痕が認められ、接口部の痕も明瞭である。胎土には若干の砂を含み、焼成は良い。黒色を呈する。夜臼式の浅鉢であろう。

底部　(10・11)　10は壺、11は甕の底部であろう。ともに石英粒砂を含み、焼成良好。それぞれ暗褐色(10)、赤褐色(11)を呈する。

本竪穴は弥生前期前葉のものであろう。

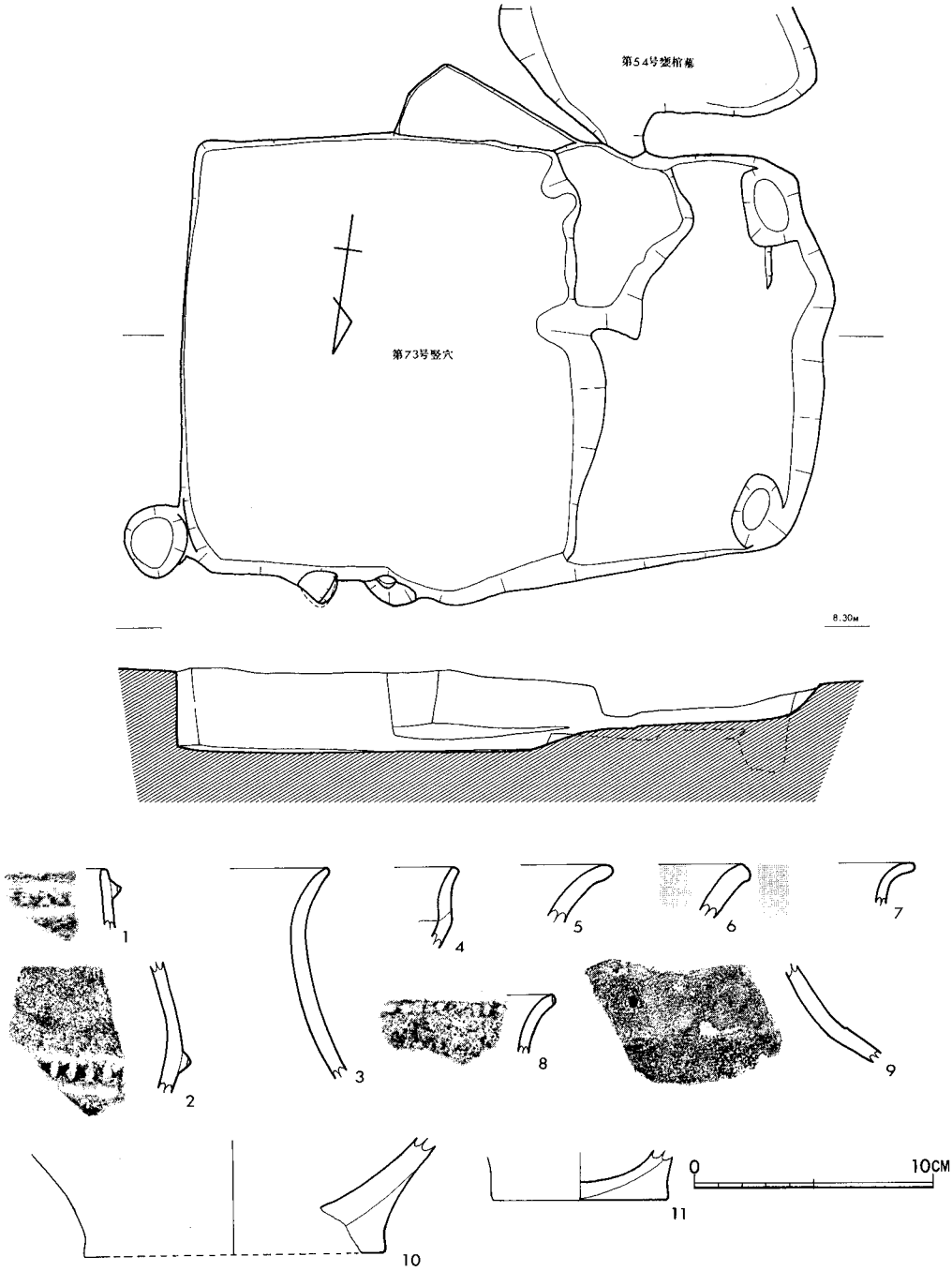


Fig. 3・143　第73号竪穴および出土土器実測図

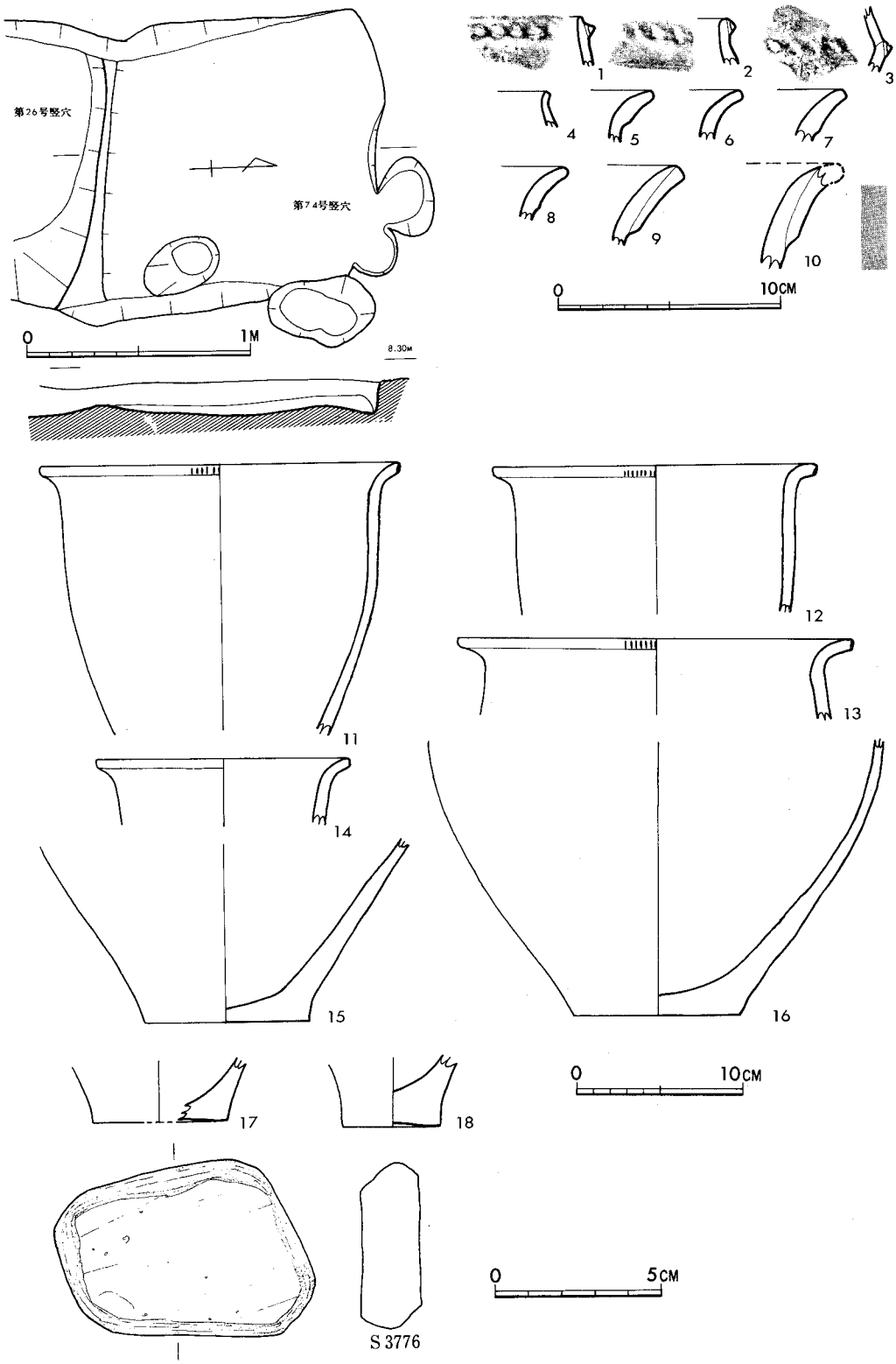


Fig. 3・144　第74号竪穴出土土器石器実測図

第74号竪穴（Fig. 3・144）

調査区北側に位置する。南側で第26号竪穴と切り合っている。新旧関係は確認できなかったが、第74号竪穴の方が新しいようである。南北約123cm、東西約131cmの方形に近いプランをもつ。現存の深さは約15cm、残存の壁は袋状をなしてはいない。図中のピットはいずれも後世のものである。

出土土器（Fig. 3・144）

甕（1～3・11～15）　1～3は刻目突帯をもつ土器で、1・2は内傾する口縁部、3は胴部である。1の突帯は口縁端より少し下がった部位、2は口縁端に接して付けられる。11～14は外反する口縁部をもち、口縁端も丸味を帯びる。11～13は口縁端に刻目をもつが、口縁端一杯ではなく若干下端に近くつけられる。13は胴部の張りが強い。11～14とも口縁部は横なで調整。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。それぞれ暗褐色（1・2・11）、赤褐色(3)、黄褐色（12～14）を呈する。1～3は夜臼式、11～14は板付II式の古いものであろう。

壺（5～10）　いずれも外反する口縁部である。5・7～10は口縁部が肥厚し、口縁下に段がつく。6・9・10は横なで調整。10の外面は丹塗り。いずれも石英粒砂を含み、焼成は良い。それぞれ、黄褐色（5・7）、暗褐色(6)、赤褐色（8・10）、黒色(9)を呈する。これらも板付I～II式のものであろう。

浅鉢（4）　内傾する口縁の上部が短く外反する。胴部で逆「く」の字状に反転するものとみられ、石英粒砂を含み、焼成は良い暗褐色を呈する。夜臼式であろう。

底部（15～18）　15・16は壺、17・18は甕の口縁部である。17・18は若干の上げ底を呈する。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。それぞれ、外面赤褐色・内面黒褐色(15・17)、外面褐色(16)、黄褐色(18)を呈する。

この竪穴は弥生前期前葉のものであろう。

出土土器（Fig. 3・144）

砥石（S 3776）　砂岩製である。

第75号竪穴（Fig. 3・145）

調査区北側東部に位置する。東西約199cm、南北約122cmの長方形プランをもつ。現存の深さ約70cm、北・西・南壁の一部が袋状をなしており、本来袋状の竪穴である。

出土土器（Fig. 3・145）

甕（1・2）　1は刻目突帯をもつ土器である。口縁端より少し下がって突帯が付けられ、横なで調整。条痕が認められる。2は外反する口縁部の外側に粘土を貼付けて肥厚させ、さらに突帯状に粘土を貼付け、そこに刻目を施す。外見上は、口縁下端に刻目を施す土器とあまり差はない。口縁下には段がつく。内面には刷毛の斜め調整がある。ともに石英粒砂を含み、焼成は良い。それぞれ暗赤褐色(1)、暗褐色(2)を呈する。1は夜臼式、2は板付II式であろう。

壺（3～5）　3は短く外反する口縁部で丹塗りである。4は外反する口縁部の外側に粘土を貼付けて肥厚させ、口縁下に段がつく。横なで調整。5は肩部で、接合部の外・内両面に段

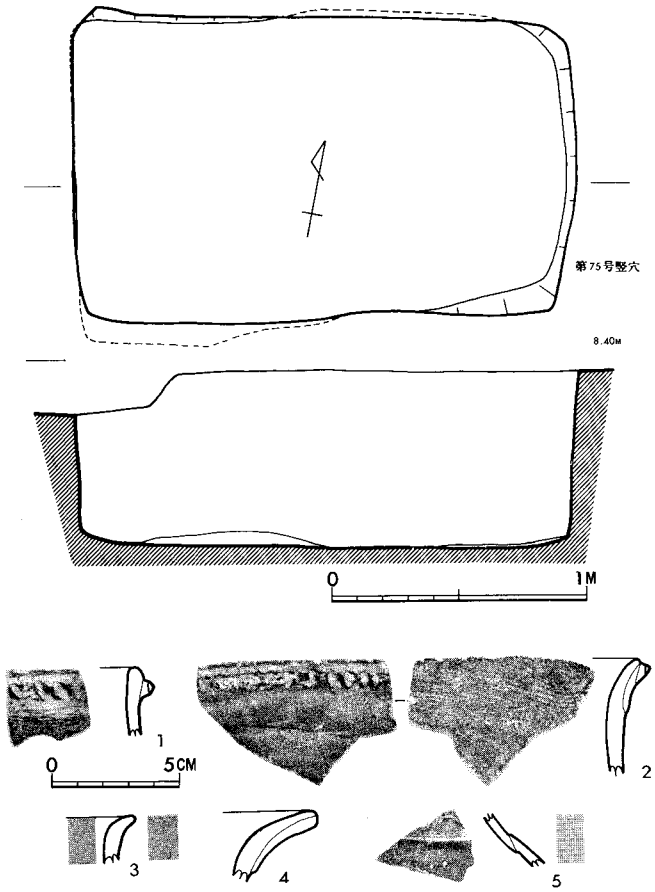


Fig. 3・145　第75号竪穴および出土土器実測図

がつき、外面は丹塗り。3・5は砂を含み、4は石英粒砂を含むが、焼成はいずれも良好。それぞれ、褐色(3)、暗褐色(4)、外面赤褐色・内面黄褐色(5)を呈する。3・5夜臼式か板付Ⅰ式、4は板付Ⅱ式と考えられる。

この竪穴は弥生前期中葉のものであろう。

第76号竪穴（Fig. 3・146）

調査区中央に位置する。北側を第28号甕棺墓、南側は第69号竪穴によって切られている。南北はわからないが、東西は約119cmの長方形プランをもつ。西壁下に段のつく場所があり、もし、この場所で竪穴が終わるものなら、南北約120cmほどになり方形に近いものとなる。現存の深さは約17cm、床面は西側が低くなる。内部東壁に沿ってピットが一個存在する。

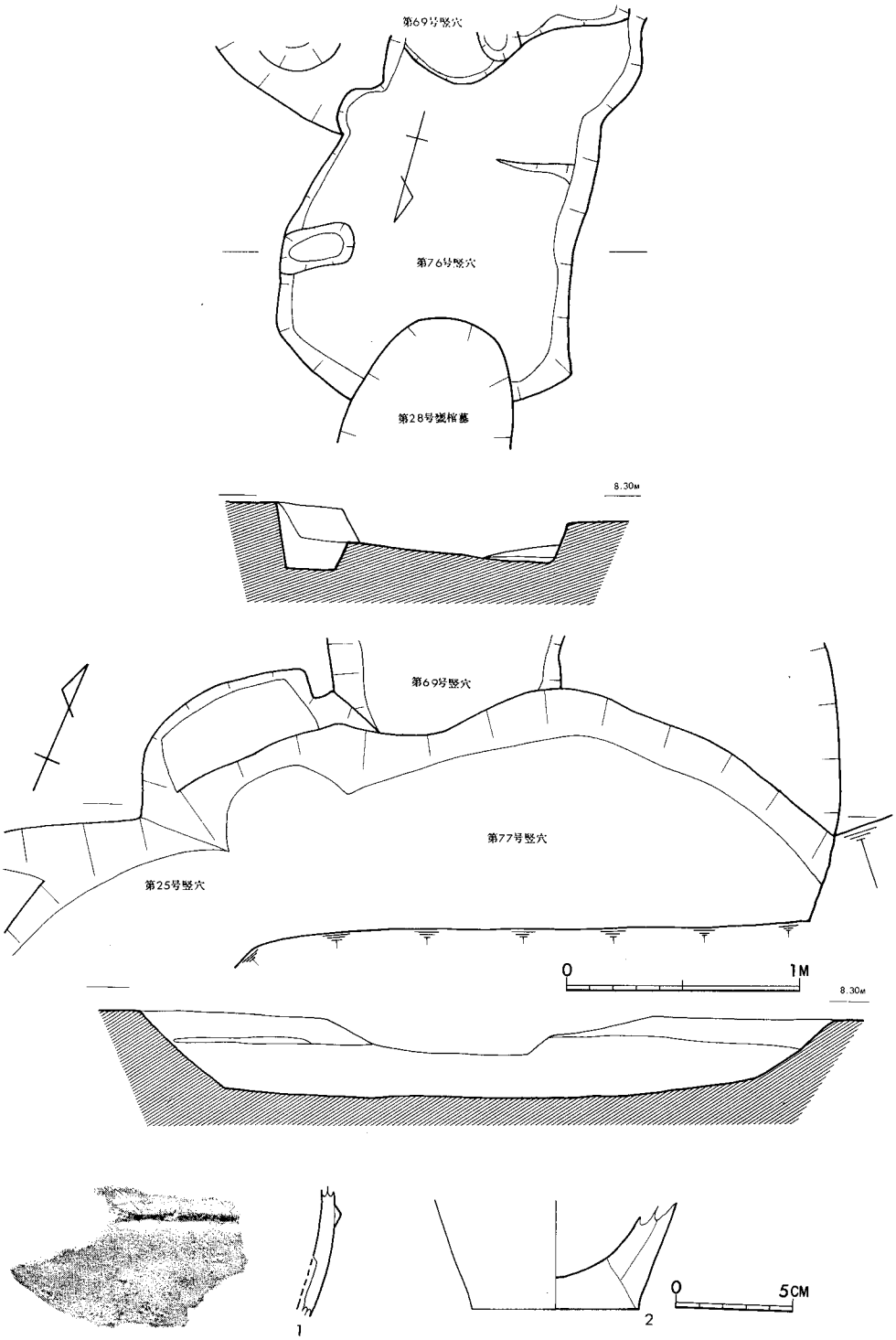


Fig. 3・146　第76号・77号竪穴および出土土器実測図

第77号竪穴（Fig. 3・146）

調査区中央南東側に位置し、南半は未堀である。第69号竪穴を切り、また第25号竪穴とも切り合っているが、それとの新旧関係は不明である。規模はわからないが、おそらく円形プランをもつものであろう。現存の深さ約37cm。残存の壁は袋状をなしてはいない。

出土土器（Fig. 3・146）

壺　(1)　胴部に一条の貼付け三角突帯をもつ。突帯貼付部は横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。外面赤褐色、内面灰褐色を呈する。中期初頭のものであろう。

底部　(2)　甕の底部である。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、黄褐色、暗褐色を呈する。

1はこの竪穴に伴うものかどうか不明で、確実でないが、本竪穴の時期は弥生前期末～中期初頭のものであろうか。

第78号竪穴（Fig. 3・147）

調査区中央東側に位置する。西側を第42号竪穴によって切られている。南北約253cm、東西約220cmの不整形なプランをもつ。現存の深さ約36cm。残存の壁は袋状をなしてはいない。西側の壁にかかってピットが1個存在する。

出土土器（Fig. 3・147）

甕　（1～3）　1・2はあるいは同一個体であろう。ともに口縁端に接して刻目突帯を付す。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好、黄褐色を呈する。夜臼式であろう。3は外反する口縁の端の縦幅一杯に刻目を施して、指なで調整を行う。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、褐色を呈する。板付Ⅰ式であろう。

壺　(4)　外反する口縁部である。横なで調整。胎土に砂を含み、焼成良好、暗褐色を呈する。板付Ⅰ式であろう。

底部　(5)　壺の底部であろう。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。外面黄褐色、内面黒色を呈する。

この竪穴は弥生前期前葉のものであろう。

第79号竪穴（Fig. 3・147）

調査区北東部に位置する。西半分を欠失しており、東西は不明だが南北約122cmの長方形をなすものと考えられる。現存の深さ約15cm、内部東壁沿いに2個のピットが存在する。

出土土器（Fig. 3・147）

壺　(1)　外反する口縁の外側に粘土を貼付けて肥厚させ、口縁下に段がつく。横なで調整を行い、胎土に砂を含み、焼成は良好。外面黒褐色、内面黄褐色を呈する。

甕　（2・3）　ともに外反する口縁の下端に刻目を施したもので、胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。それぞれ、暗褐色(2)、外面黄褐色、内面赤褐色(3)を呈する。

これらの土器は板付Ⅱ式のもので、この竪穴は弥生前期中葉のものであろう。

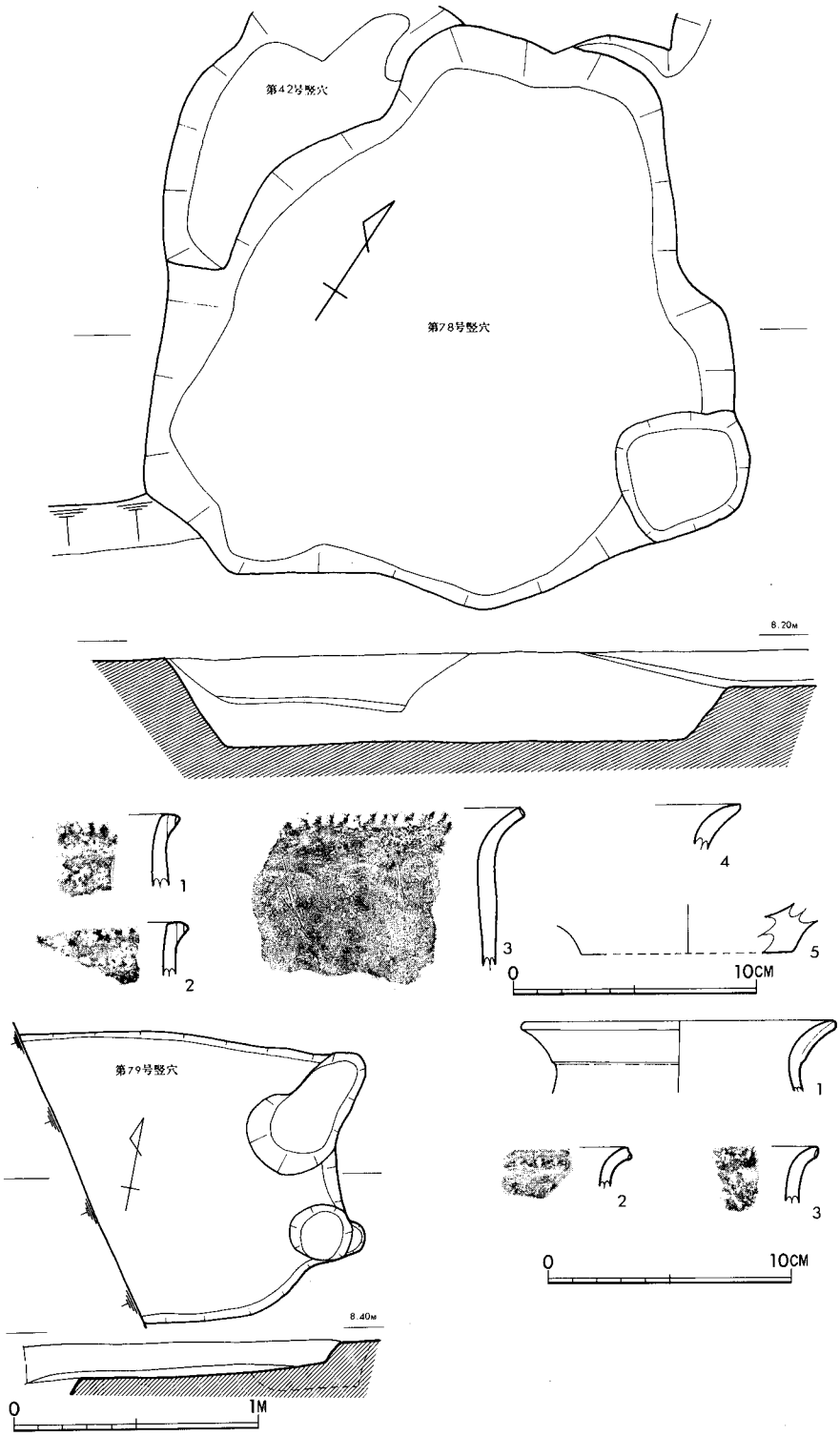


Fig. 3・147　第78号・79号竪穴および出土土器実測図

第80号竪穴（Fig.３・148、PL.XVI）

調査区東側に位置する。西壁の一部を第７号木棺墓、南側を第81号竪穴に切られている。南北約290cm、東西約172cmの隅丸長方形プランをもつ。現存の深さは約42cm。北壁の一部が袋状をなしており、本来は袋状の竪穴であったのであろう。南東部のピットは第81号竪穴に伴い、北壁にかかるピットは後世のものである。南西にあるピットはこの竪穴に伴うものであろう。

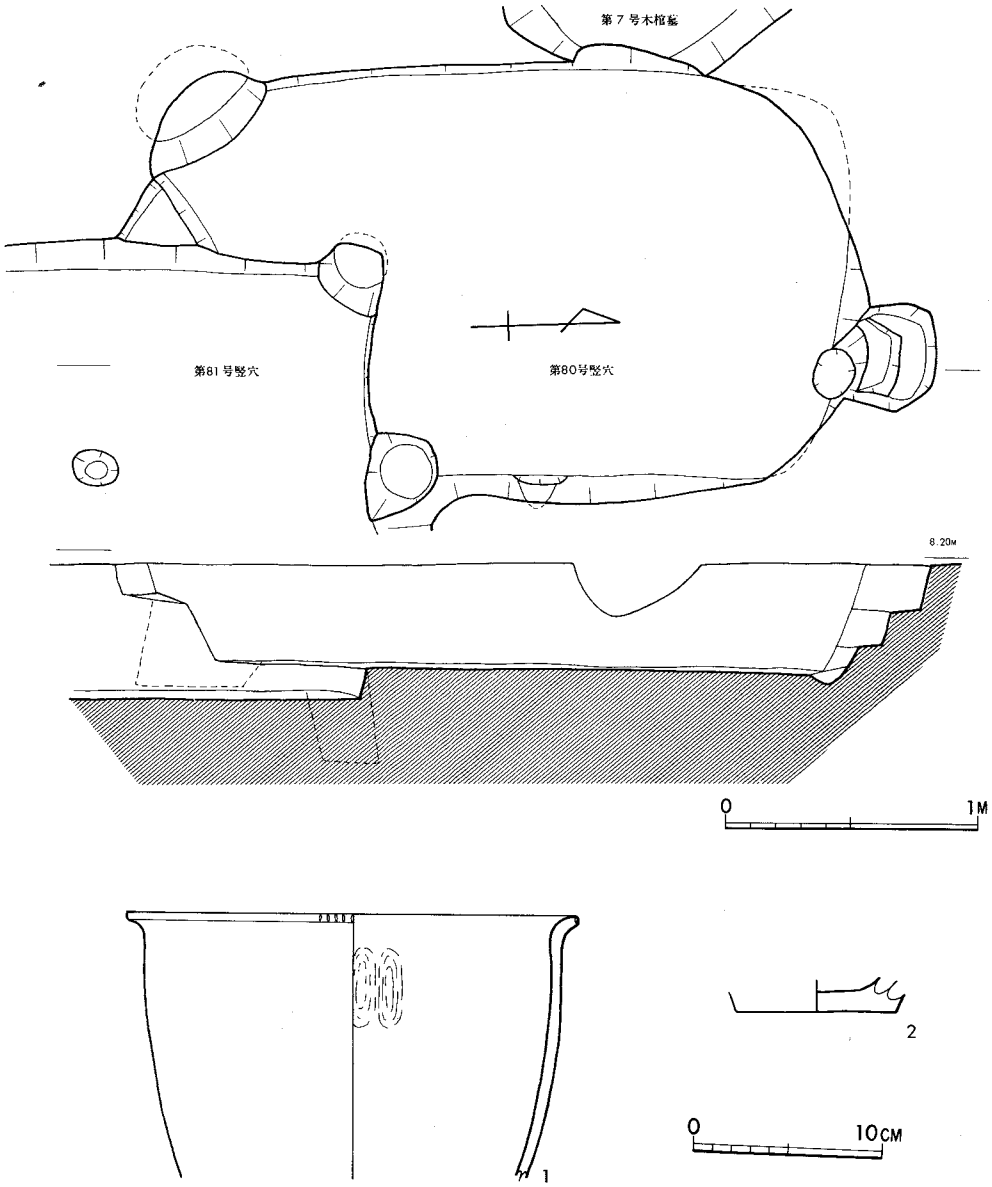


Fig.３・148　第80号竪穴および出土土器実測図

出土土器（Fig. 3・148）

甕　(1)　外反する口縁の端が丸味を帯び、その口縁端一杯に刻目を施す。内面に指の押圧調整痕が残る。胴部の張りはあまりない。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。褐色を呈するが内面の一部は黄褐色。板付Ⅰ式であろう。

底部　(2)　甕の底部である。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。暗褐色を呈する。

この竪穴は弥生前期前葉のものであろう。

第81号竪穴（Fig. 3・149、PL. XV）

調査区東側に位置する。第80号竪穴を切って作られており、埋没後に第25号甕棺墓と第27号甕棺墓が埋置される。南北約310cm、東西約137cmの長方形プランを有する。現存の深さ約48cm、残存の壁は袋状をなしておらず、もともと袋状を竪穴ではないのであろう。内部には四隅に各1個、北・南壁中央に各1個、東壁中央に1個、内部中央に1個の計8個のピットが存在し、あるいは屋根的なものが考えられる。

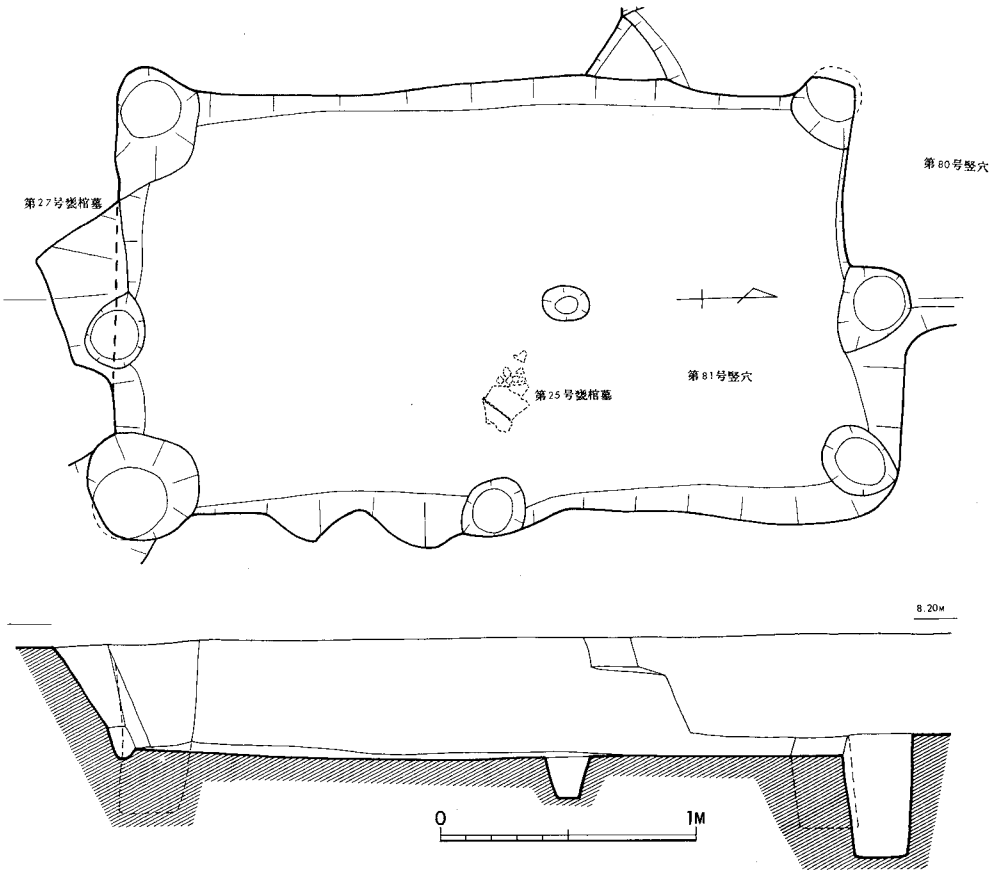


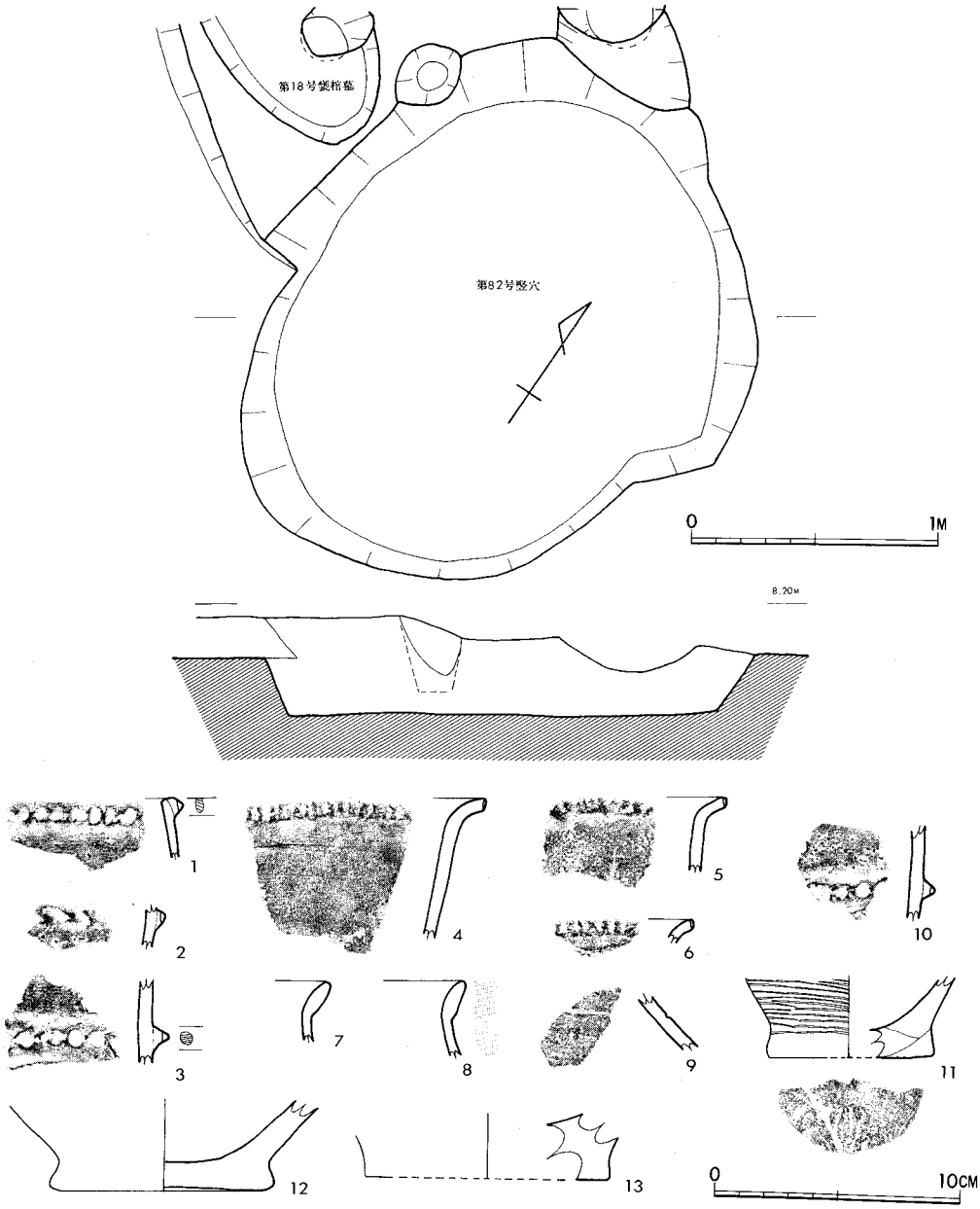
Fig. 3・149　第81号竪穴実測図

第82号竪穴（Fig. 3・150）

調査区東側に位置する。南北約230cm、東西約200cmの楕円に近い円形をなす。現存の深さ約40cm、袋状になっていない。西側壁上にかかるピットは後世のものである。

出土土器（Fig. 3・150）

甕（１～６・10）　１～３・10は刻目突帯をもつ。１は口縁部で口縁端に接して突帯がつけられる。２・３・10は胴部破片である。１・３の刻目施文の工具は貝状のものである。１には



条痕も認められる。4～6は外反する口縁の丸味を帯びた端一杯に刻目が施される。4・5は横なで調整。6は胎土に砂を含むが、他は石英粒砂を含む。焼成は良く、それぞれ暗褐色（1・3・10)、褐色（2・4～6）を呈する。1～3・10は夜臼式、4～6は板付Ⅰ式であろう。

壺（7～9）　7・8は短く外反した口縁部が肥厚する。7は横なで調整。8の外面は丹塗りである。9は肩部で、外面に一条の沈線が巡る。いずれも石英粒砂を含み、焼成は良好。それぞれ、外面黄褐色・内面赤褐色(7)、赤褐色(8)、暗褐色(9)を呈する。板付Ⅰ式であろう。

底部（11～13）　11は甕、12・13は壺であろう。11の底面には木葉痕が認められる。外面は条痕で、夜臼式の特徴をよく表わしている。12は若干上げ底である。いずれも石英粒砂を含み、焼成も良い。暗褐色を呈するが内面は黄褐色(11)、褐色(12)となる。

本竪穴は弥生前期前葉のものであろう。

第83号竪穴（Fig. 3・151）

調査区中央やや東寄りに位置する。不規則な平面形をもつ。南北約148cm、東西約90cmで、現存の深さは約27cm。遺物は出土せず、時期も不明。

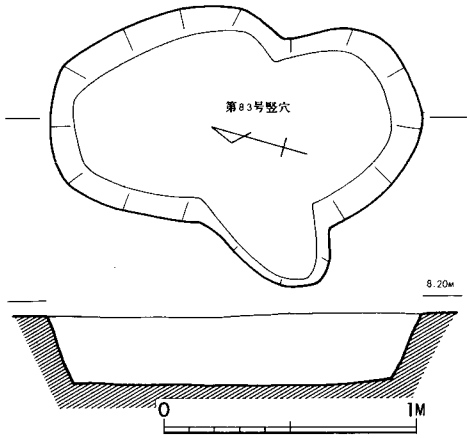


Fig. 3・151　第83号竪穴実測図

第84号竪穴（Fig. 3・152）

調査区中央やや南側に位置する。西側を第56号竪穴によって切られている。北東～南西約130cm、南東～北西約120cmの方形に近い平面プランをもつ。現存の深さ約34cm、残存の壁は袋状はなしてはいない。内部やや南寄りに、床面から約22cmの深さのピットが存在する。

出土土器（Fig. 3・152）

底部　壺の底部か甕の底部か不明であるが、底面には木葉痕が押される。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。外面赤褐色、内面黒色を呈する。

この竪穴は弥生前期前葉のものであろう。

第85号竪穴（Fig. 3・152）

調査区東側に位置する。北側を第35号竪穴に切られている。南北は不明だが、東西約130cmの方形か、長方形を呈するものであろう。現存の深さ約40cm。袋状はなしていない。南壁にかかって2個のピットがあるが後世のものであろう。

出土土器（Fig. 3・152）

甕（1・2）　外反する口縁の端が丸味を帯び、その端一杯に刻目を施す。口縁部は横なで

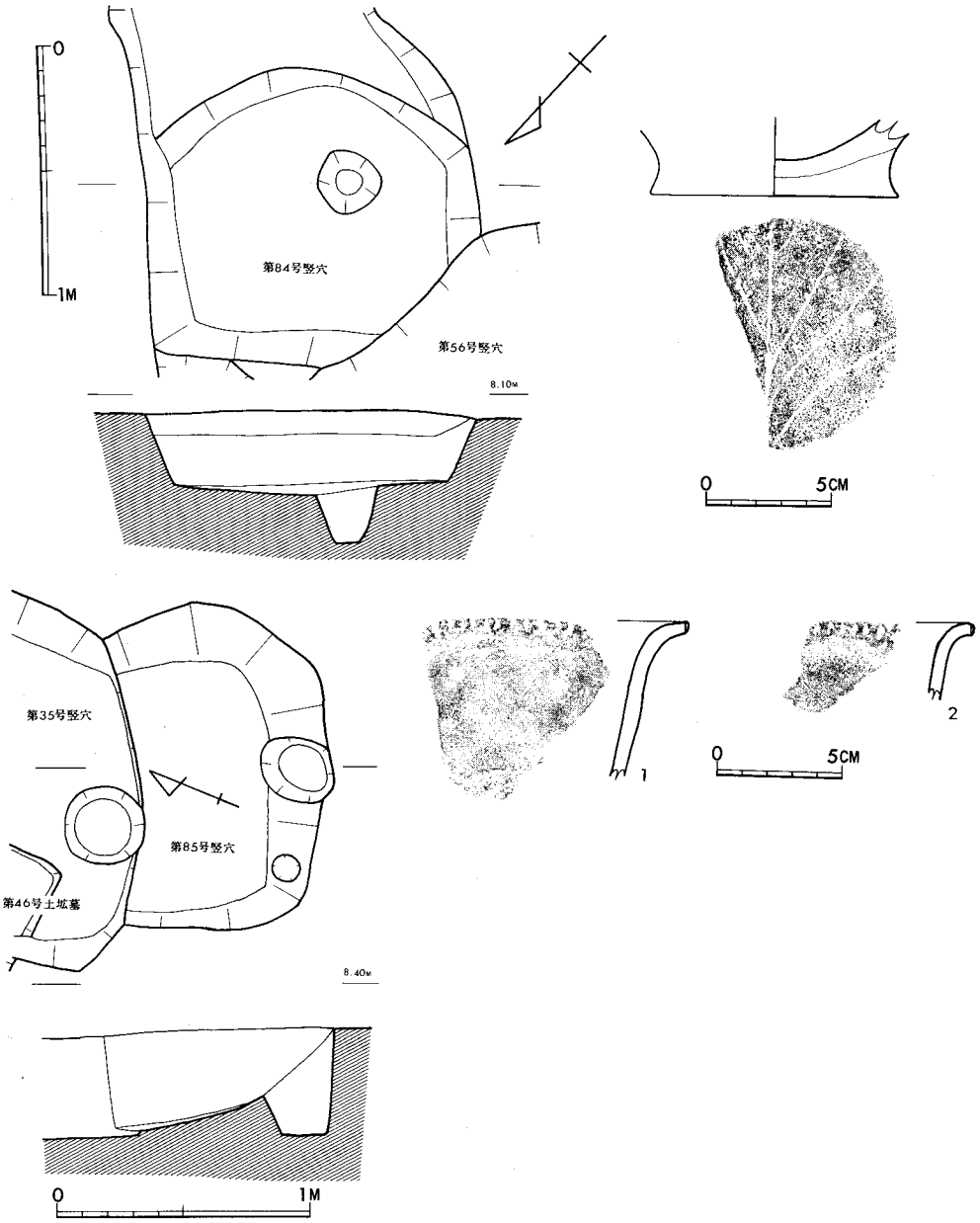


Fig. 3・152　第84号・85号竪穴および出土土器実測図

調整。1は外面に煤の付着が認められる。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。1は暗褐色で、煤の付着部は黒褐色。2は外面淡褐色、内面黄褐色を呈する。板付Ⅰ式であろう。

本竪穴は弥生前期前葉のものであろう。

第86号竪穴（Fig.3・153）

調査区最東端に位置する。東西約166cm、南北約142cmの長方形を呈する。現存の深さ約27cm、袋状をなしていない。床面は西側の方が底い。

出土土器（Fig.3・153）

壺（１・２）　１は、肥厚せず外反する口縁部と、張りの強い胴部をもつ。底部は上げ底。外

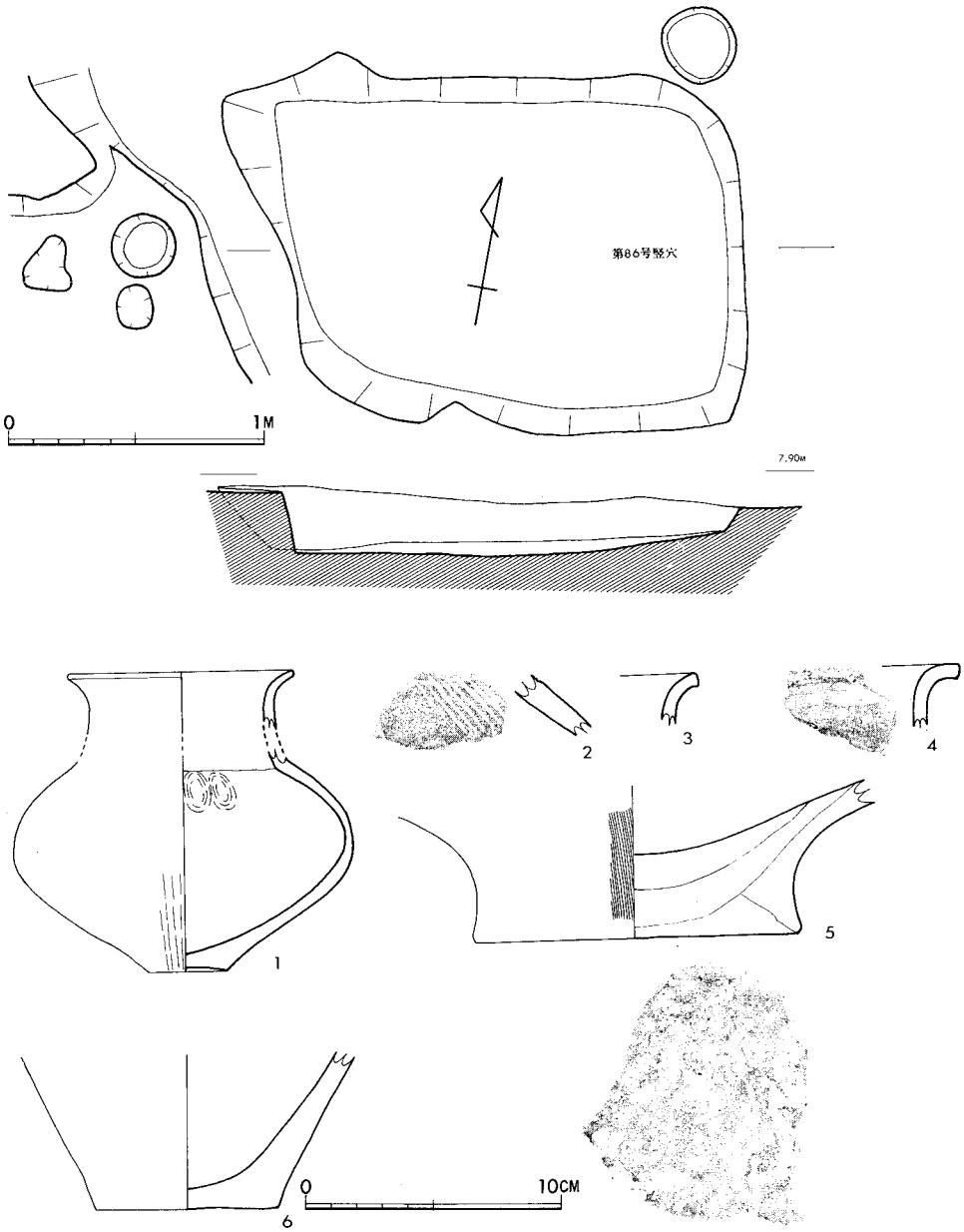


Fig.3・153　第86号竪穴および出土土器実測図

面の底部近くは、箆の縦みがきが顕著である。肩部の内側には指の押圧痕がある。口縁部は横なで調整。２は胴部破片で、斜めに八本以上の平行沈線を施す。ともに石英粒砂を含み、焼成は良好。１は外面褐色、赤褐色、暗褐色を呈し、底部近くには焼成時の黒変がある。内面は赤褐色、暗褐色。２は暗褐色を呈する。

甕（３・４）　ともに外反する口縁の端が「コ」の字状となり、４はその下端に刻目が施され、両者とも横なで調整される。４の外面には刷毛目調整。石英粒砂を含み、焼成良好。それぞれ褐色（３）、暗黄褐色を呈する。

底部（５・６）　５は大形の壺か甕の、６は甕の底部であろう。５の外面には細い縦刷毛目調整。底面には籾痕らしいものが付いている。両者とも胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。ともに外面黄褐色、内面黒色を呈する。

以上の土器は板付II式のものと考えられ、この竪穴は弥生前期中葉のものであろう。

第87号竪穴（Fig.3・154）

調査区中央やや北寄りに位置する。西側を第１号竪穴によって切られている。南北約212cm、東西は推定で約140cm前後の長方形プランをもつものと思われる。現存の深さ約22cm、袋状をなしてはいない。南側に方形の造り出し状のものがみられるが、竪穴に伴うものではない。

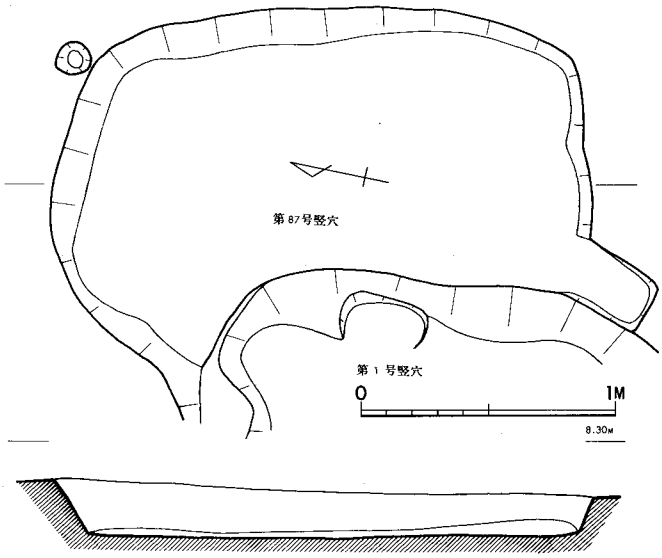


Fig.3・154　第87号竪穴実測図

第88号竪穴（Fig.3・155）

調査区中央西側に位置する。南側を第18号竪穴によって切られている。北壁などに乱れがあるが、東西約256cm、南北約190m前後の長方形に近い平面プランをもつ。現存の深さは約30cm、袋状をなしていない。内側に12個のピットがあるが、いずれも浅いものである。

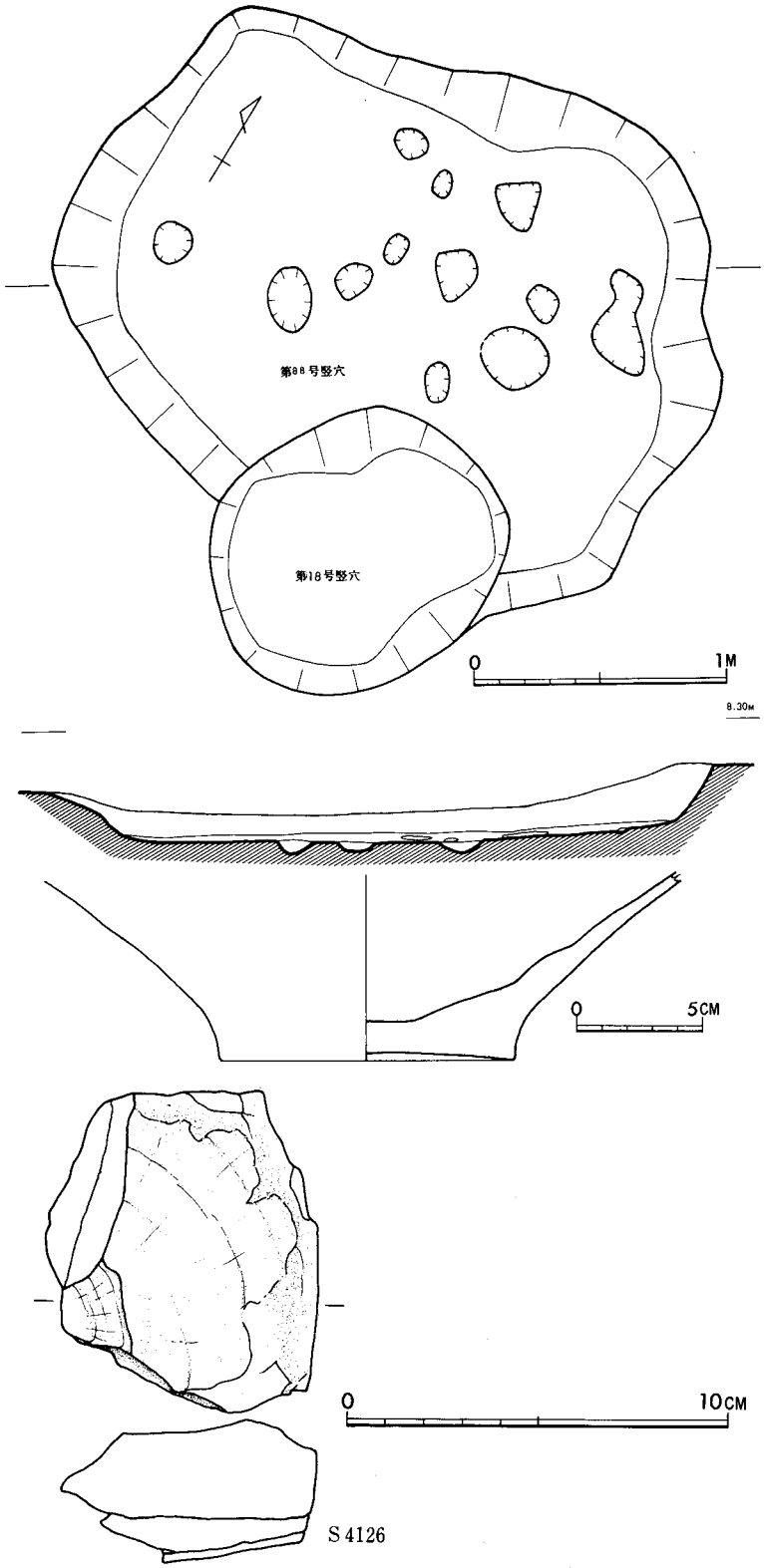


Fig. 3・155　第88号竪穴および出土土器石器実測図

出土土器（Fig.3・155）

底部（１）　上げ底をもつ壺の底部である。器面があれているため器面の調整は不明。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。外面灰褐色、内面暗褐色を呈する。

この竪穴は第18号竪穴に切られていることにより弥生前期前葉～中葉のものと推定される。

出土石器（Fig.3・155）

砥石（Ｓ4126）　砂岩製で、砥面は１面である。

第89号竪穴（Fig.3・156）

調査区ほぼ中央に位置する。埋没後に、南側を切って第43号甕棺墓が埋置される。かなり不整形であるが、本来は南北約115cm、東西約142cmの長方形プランであったと推定される。現存の深さは約19cm、袋状をなしてはいない。内部南壁に沿って、不整形な浅いピット１個が存在する。

第90号竪穴（Fig.3・156）

調査区北側に存在する。竪穴廃棄後にその凹みを利用して第52号甕棺墓が埋置されたと考えられるが、あるいは、第52号甕棺墓の墓拡である可能性も無視できない。南北約192cm、東西約176cmの楕円形を呈する。現存の深さ約29cm、袋状でない。

第91号竪穴（Fig.3・157，PL.XVI－3）

調査区北側寄りに位置する。比較的原形の残っている竪穴の一つで、底径東西約158cm、南北約132cmの隅丸長方形を呈する。現存の深さは約60cm、袋状の竪穴である。

出土土器（Fig.3・157）

壺（１）　丹塗り壺の口縁部で外反する。肥厚はしない。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。褐色を呈する。

底部（２）　甕の底部である。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、外面暗褐色、内面黒色を呈する。

これらの土器は板付Ⅰ～Ⅱ式のもので、本竪穴は弥生前期前葉～中葉のものであろう。

第92号竪穴（Fig.3・158，3・159）

調査区南側に位置する。北西の一部が未堀であるが、東西約172cm、南北推定で約130cm前後のやや胴張りの長方形プランをもつ。床面は中央が最も低く、現存の深さ約39cm。西壁の一部が袋状をなしており、本来は袋状の竪穴であったと思われる。

出土土器（Fig.3・158，3・159）

壺（１・３）　ともに外反する口縁をもつ。１は口縁部が肥厚し、口縁下に段がつく。よく整った器形をもつ土器である。３は口縁端下に一条の沈線が巡る。ともに胎土焼成は良く、黄褐色を呈する。

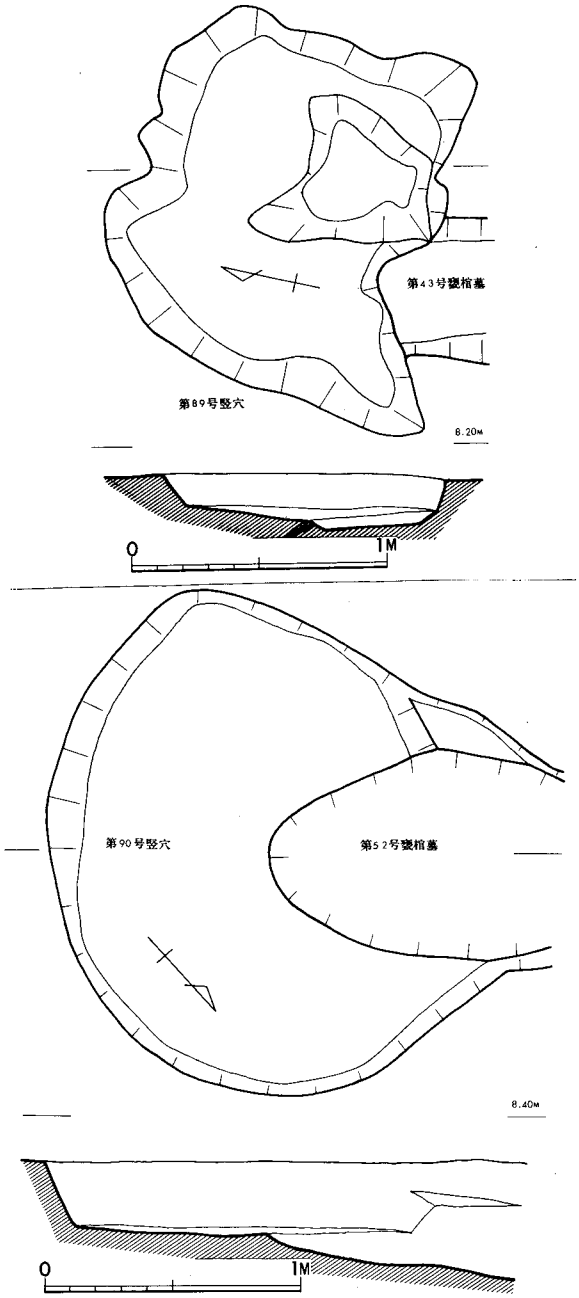


Fig.3・156　第89号・90号竪穴実測図

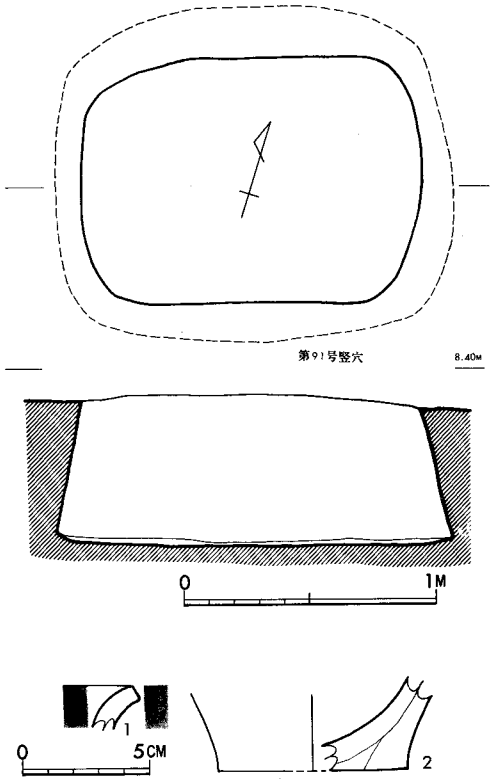


Fig.3・157　第91号竪穴および出土土器実測図

甕（２・４）　ともに外反する口縁の端が丸味を帯び、その端一杯に刻目がつけられる。ともに外面刷毛目調整。４の口縁の屈曲は強く、胴部もかなり張る。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、赤褐色を呈する。

底部（５～８）　５～７は甕、８は壺の底部である。５は細い刷毛目、７も刷毛目調整。いずれも石英粒砂を含み、焼成良好。それぞれ，外面赤褐色，内面暗赤褐色（５）、外面赤褐色、内面暗褐色（６）、外面赤褐色、内面黒褐色（７）、暗褐色（８）を呈する。

以上の土器は板付Ｉ式の特徴を備えてはいるが、４の甕の胴の張りの強さと口縁の屈曲の強さで板付Ｉ式でも新しいか、板付II式の範疇まで入る可能性もあり、本竪穴は弥生前期前葉～中葉のものであろう。

出土石器（Fig.3・159）

石核（Ｓ4226）　サヌカイト角礫を素材として、大形の剥片剥離が行なわれている。

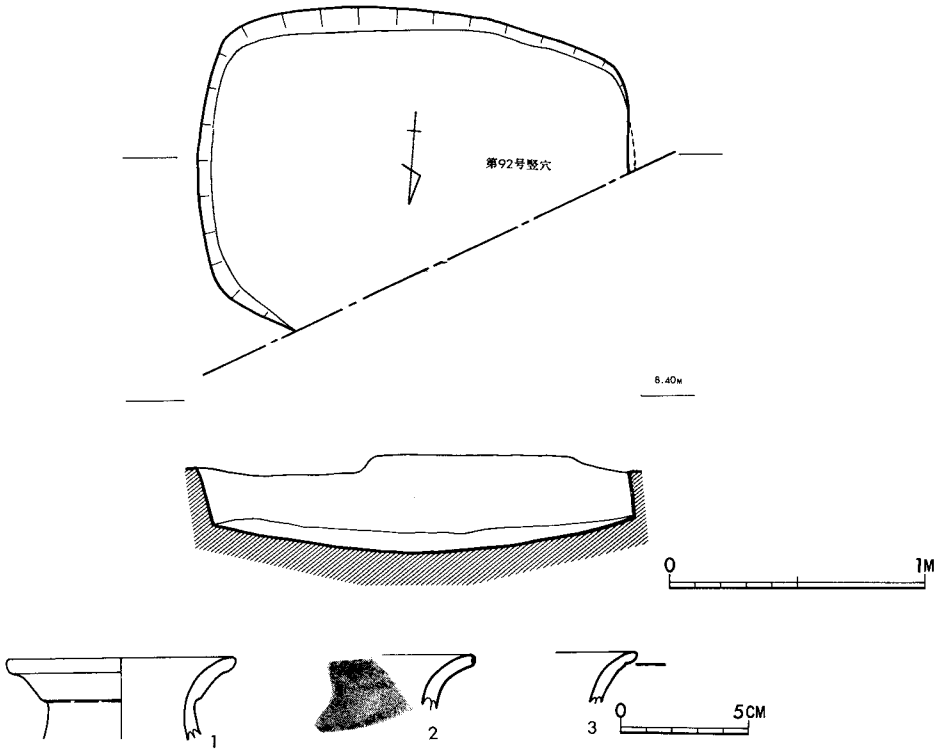


Fig.3・158　第92号竪穴および出土土器実測図

第93号竪穴（Fig.3・160, 3・161）

調査区南側東寄りに位置する。南西側の壁を第21号甕棺墓によって切られ、また東側にも後世の撹乱がある。東西約200cm、南北約122cmの長方形プランをもち、床面は西側が低くなるが現存の深さ約34cm。内部には西壁寄りと、北東隅にピットがある。

出土土器（Fig.3・161）

甕（１～３・９）　１は完形品である。外反する口縁の端が凹むが、その端一杯に刻目が施される。胴部の張りは弱く、底部は平底となる。内外面とも刷毛目調整を行い、内面には指の押圧調整痕が残る。外面には煤の付着が認められる。２・３も同様に刻目を付けるが、２は貝殻状の工具で施文する。２の外面は刷毛目調整。２・３の口縁端は丸味を帯びる。９は刻目突帯をもつ胴部破片である。いずれも胎土に石英粒砂を混入し、焼成は良好。それぞれ、暗褐色（１・２）、淡褐色（３）、赤褐色（９）を呈する。１～３は板付Ⅰ式、９は夜臼式であろう。

壺（４～６）　４は外反する口縁をもち口縁下に一条の沈線が巡る。肩部外面には段がつき、全面箆で磨研される。口縁部は横なで調整。５・６は短く外反する口縁をもつ。５の内側には指の押圧調整痕が残る。ともに口縁部は横なで調整。焼成は良好だが、４は胎土が精製されており良好で、赤褐色を呈する。５は石英粒砂を含み、赤褐色。６は砂を混入し、黒色を呈する。

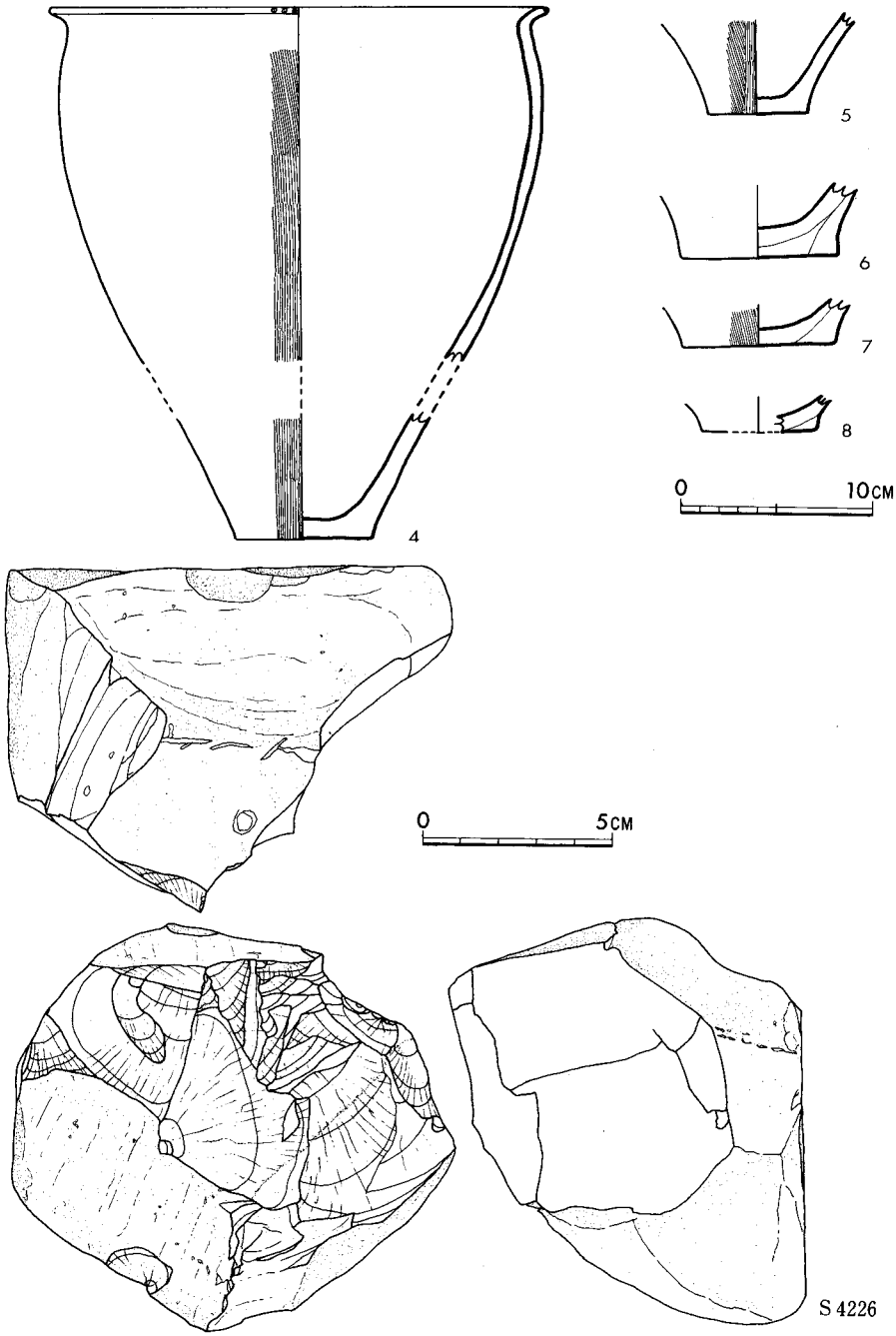


Fig.3・159　第92号竪穴出土土器・石器実測図

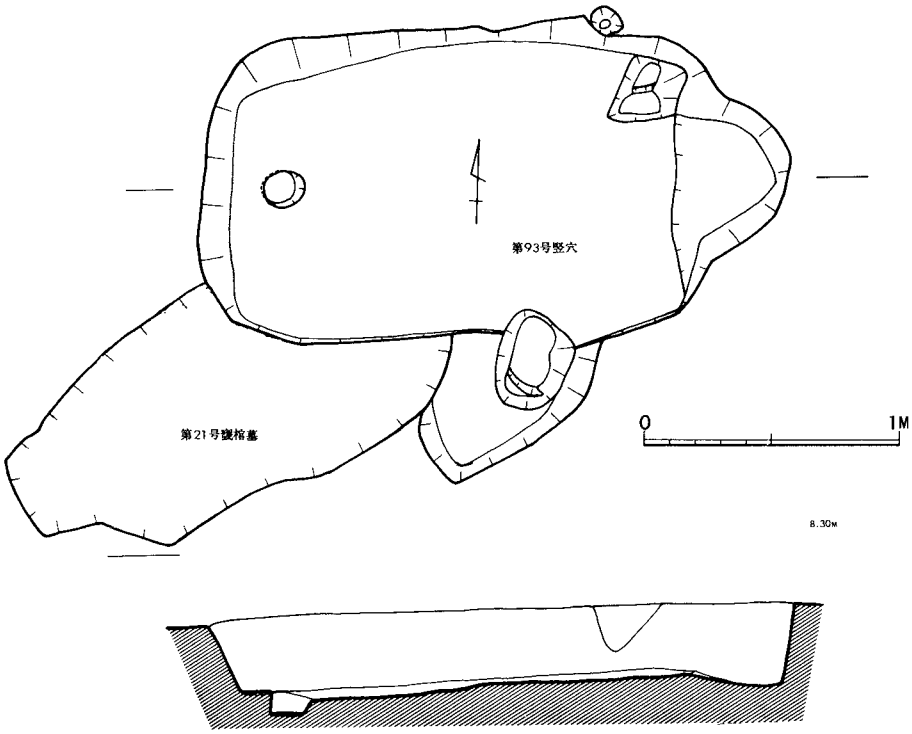


Fig.3・160　第93号竪穴実測図

4は板付Ⅰ式、5・6は夜臼式であろう。

底部（7・8）　7は壺，8は甕の底部である。ともに石英粒砂を含むが、焼成は8は良く、7は若干あまい。7は暗褐色、8は外面赤褐色、内面黒褐色を呈する。

この竪穴は弥生前期前葉のものであろう。

出土石器（Fig.3・161）

石包丁（S4251）　半月形を呈する石包丁片であり、背部は若干外彎する。頁岩質の石材を用いる。

剥片石器（S4264・4266）　ともに一部の自然面を残した剥片を利用した石器である。S4266は左辺に二次加工が加えられる。

第94号竪穴（Fig.3・162, PL.XVI－4）

調査区北側に位置する。西側の壁を第41号木棺墓に切られている。南壁が直線状になるが、他は東西径約165cmの円形プランをもつ。南北約140cm。現存の深さ約27cm、残存の壁は袋状をなしてはいない。

出土土器（Fig.3・162）

甕（1～5）　1～3は刻目突帯をもつ。1・2は口縁部、3は胴部破片である。4・5は外反する口縁部をもつ。4は口縁端一杯に刻目を付し、横なで調整。5は刻目がつかず、口縁

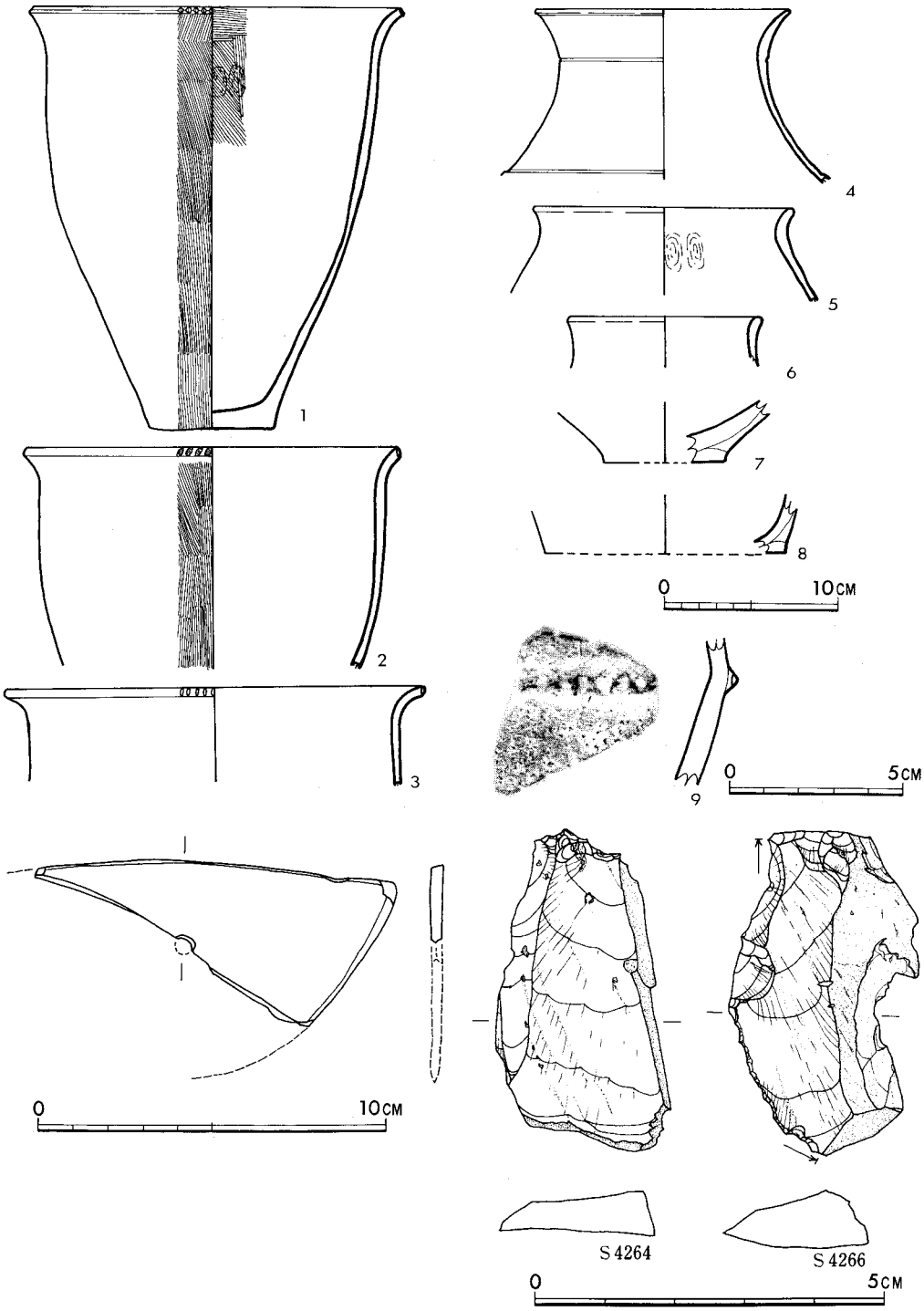


Fig. 3・161　第93号竪穴出土土器・石器実測図

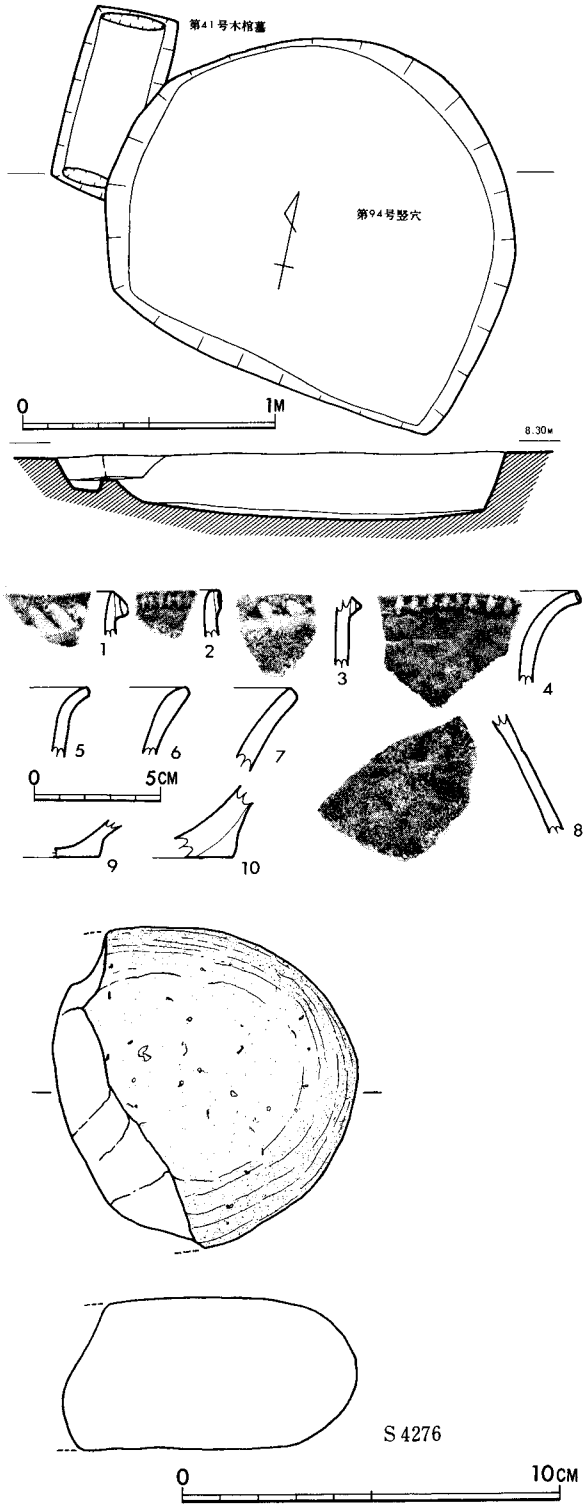


Fig.3・162　第94号竪穴および出土土器・石器実測図

の外反部は短い。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。それぞれ、淡褐色（１）、暗褐色（２・４），黄褐色（３・５）を呈する。１～３は夜臼式、４・５は板付Ｉ式であろう。

壺（６～８）　６・７は外反する口縁部で肥厚しない。８は肩部破片で沈線を巡らす。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。それぞれ外面淡褐色、内面黄褐色（６）、赤褐色（７・８）を呈する。板付Ｉ～II式のものであろう。

底部（９・10）　９は壺、10は甕の底部である。９は砂、10は石英粒砂を胎土に混入し、焼成は良好。暗褐色（９）、赤褐色（10）を呈する。

本竪穴は弥生前期中葉のものであろう。

出土石器（Fig.3・162）

磨石（Ｓ4276）　磨石破片で，花崗岩製である。

第95号竪穴（Fig.3・163，PL.XVI－6）

調査区東側に位置する。南北約242㎝、東西約128㎝の長方形プランをもつ。現存の深さ約57㎝、西壁の一部が袋状を呈している。南東隅が一段低くなり、ピットも内部に４個ほど存在する。

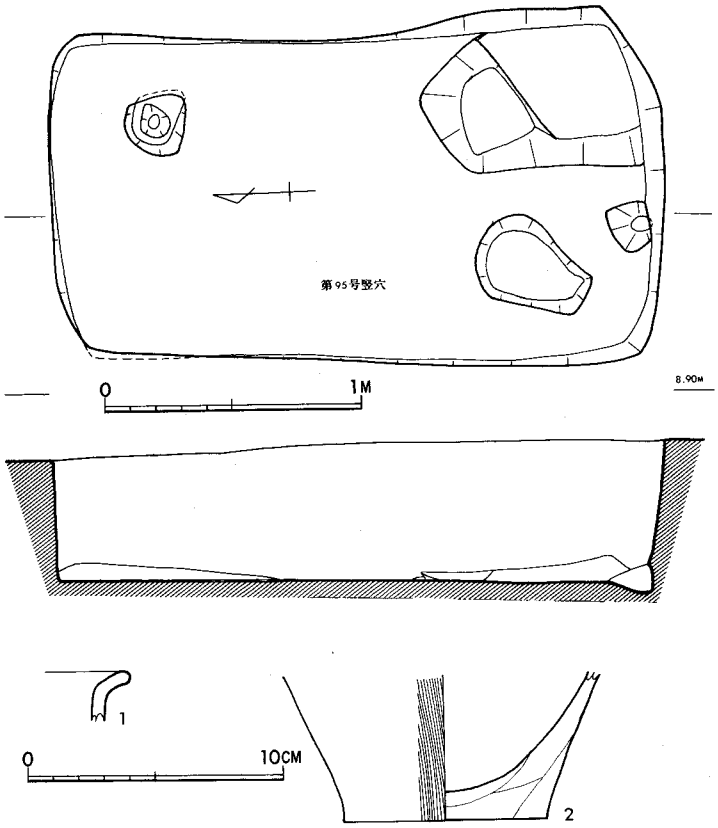


Fig.3・163　第95号竪穴および出土土器実測図

出土土器（Fig.3・163）

甕（１）　外反する口縁部で、端が丸味を帯びて横なで調整。胴部の張りは強くない器形であろう。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。赤褐色を呈する。板付Ⅰ式であろうか。

底部（２）　甕の底部である。外面は縦刷毛目調整。内面に煤の付着が認められる。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、赤褐色を呈するが煤の付着部は黒褐色を呈する。

本竪穴は出土遺物も少なく、時期決定は困難であるが、弥生前期前葉のものであろうか。

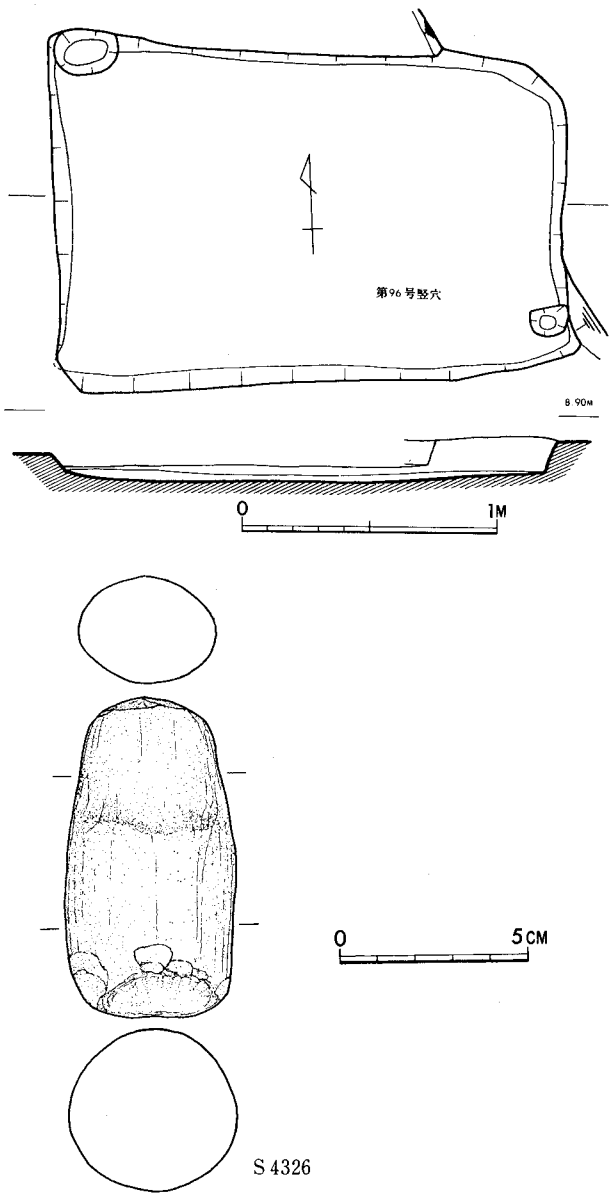


Fig.3・164　第96号竪穴および出土石器実測図

第96号竪穴（Fig.3・164）

調査区東側に位置する。南北約201cm、東西約131cm、現存の深さ約15cmの長方形プランをもつ。南西隅のほんの一部が袋状を呈するが、本来袋状の竪穴であったかどうかは不明である。内部には北西と南東各１個のピットが存在する。

出土石器（Fig.3・164）

穿孔具状石器（Ｓ4326）　砂岩製で、錐先端部は欠損しているが、上半部に回転磨痕がある。

第97号竪穴（Fig.3・165）

調査区中央南寄りに存在する。北側を第30号甕棺墓、南壁を第23号甕棺墓によって切られている。南西約190cm、南北推定約142cmの隅丸長方形プランをもつ。現存の深さ約32cm、残存部では袋状になってはいない。

第98号竪穴（Fig 3 ・165）

調査区中央南寄りに位置する。埋没後の凹みを利用して、第23号甕棺墓が営まれている。東西約135cm前後、南北約152cmの方形に近い不整形なプランをもつ。現存の深さ約32cm。袋状をなしてはいない。

第99号竪穴（Fig.3・166）

調査区南側に位置する。廃棄後の凹みを利用して第17号甕棺墓、埋土中に第37号甕棺墓、南壁を切って第６号甕棺墓が営まれている。東西は不明だが、南北約200cmの長方形プランをもつと考えられる。現存の深さ約29cm、袋状をなしてはいない。

出土土器（Fig.3・166）

甕（１～３）　１は外反する口縁の外端に接して刻目突帯を付するもので、外面は刷毛状のもので調整。２は外反する口縁の下端に刻目を施したもので横なで調整。３は刻目突帯を巡らす胴部破片で、突帯の稜は鋭く、刻目は小さい。いずれも石英粒砂を含み、焼成は良い。暗褐色（１・２）、黄褐色（３）を呈する。１は刷毛目状のものがあるが、夜臼式であろうか。２・３は板付Ⅱ式。

壺（４）　壺の胴部破片で、四本の沈線が巡る。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。赤褐色を呈する。板付Ⅱ式。

本竪穴は弥生前期中葉のものであろう。

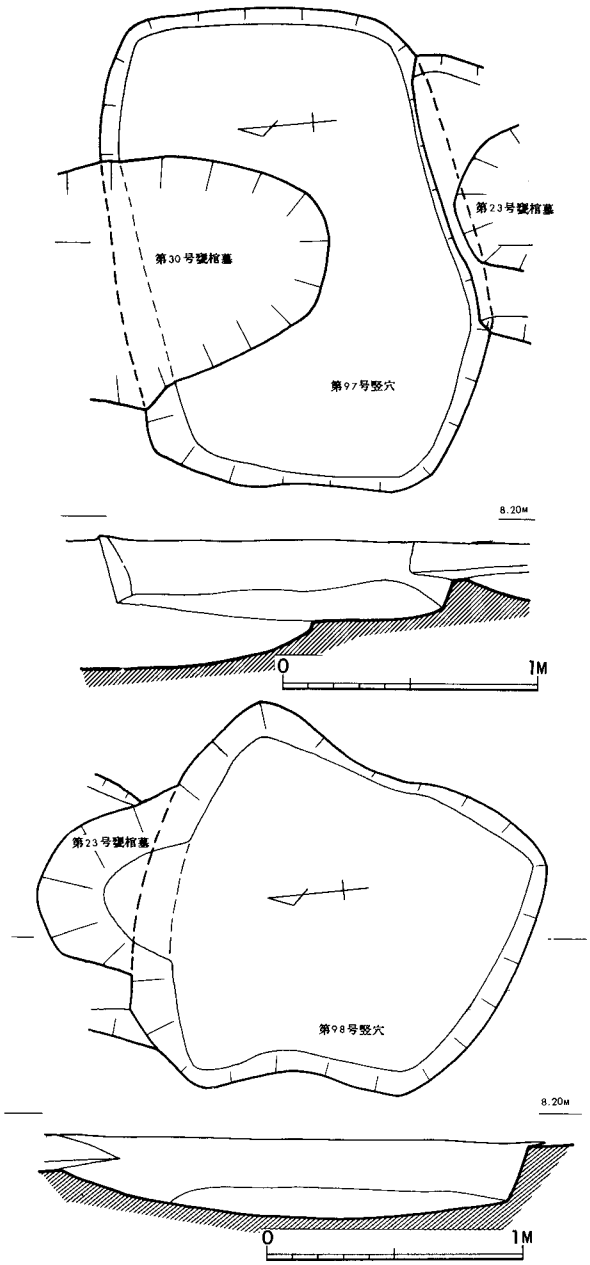


Fig.3・165　第97号・98号竪穴実測図

第100号竪穴（Fig.3・167）

調査区最北端に位置する。西側で第101号竪穴を切って作られている。約4分の1程しか調査していないが、推定底径300cm前後の円形プランであろう。現存の深さ約28cm、袋状をなす。東側にある円形のピットは中世のものである。

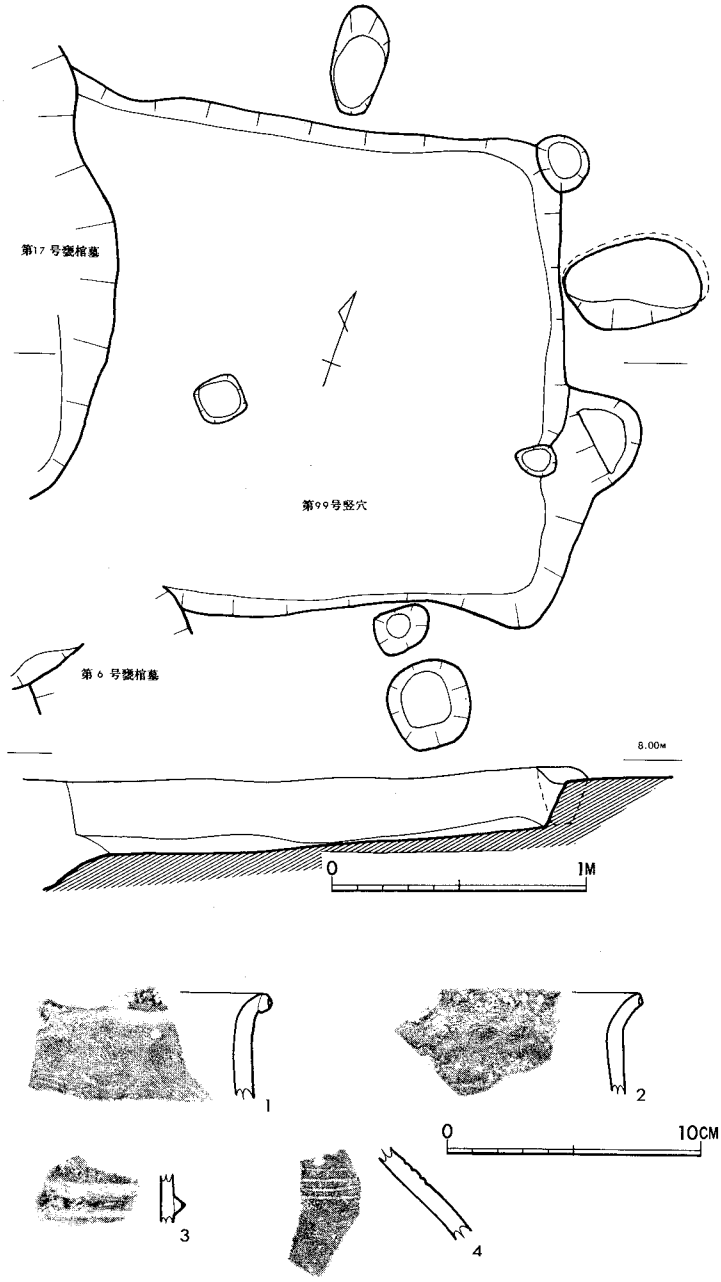


Fig.3・166　第99号竪穴および出土土器実測図

出土土器（Fig.3・167）

甕（１・７・11）　１は外傾する口縁の外端に接して刻目突帯を施す。２・３は外反する口縁の端一杯に刻目が施される。３は口縁下の接合部が肥厚し、そこにも刻目がつけられる。4・５は外反する口縁の下端に刻目がつけられる。ともに横なで調整で、４は内面に刷毛目調整が

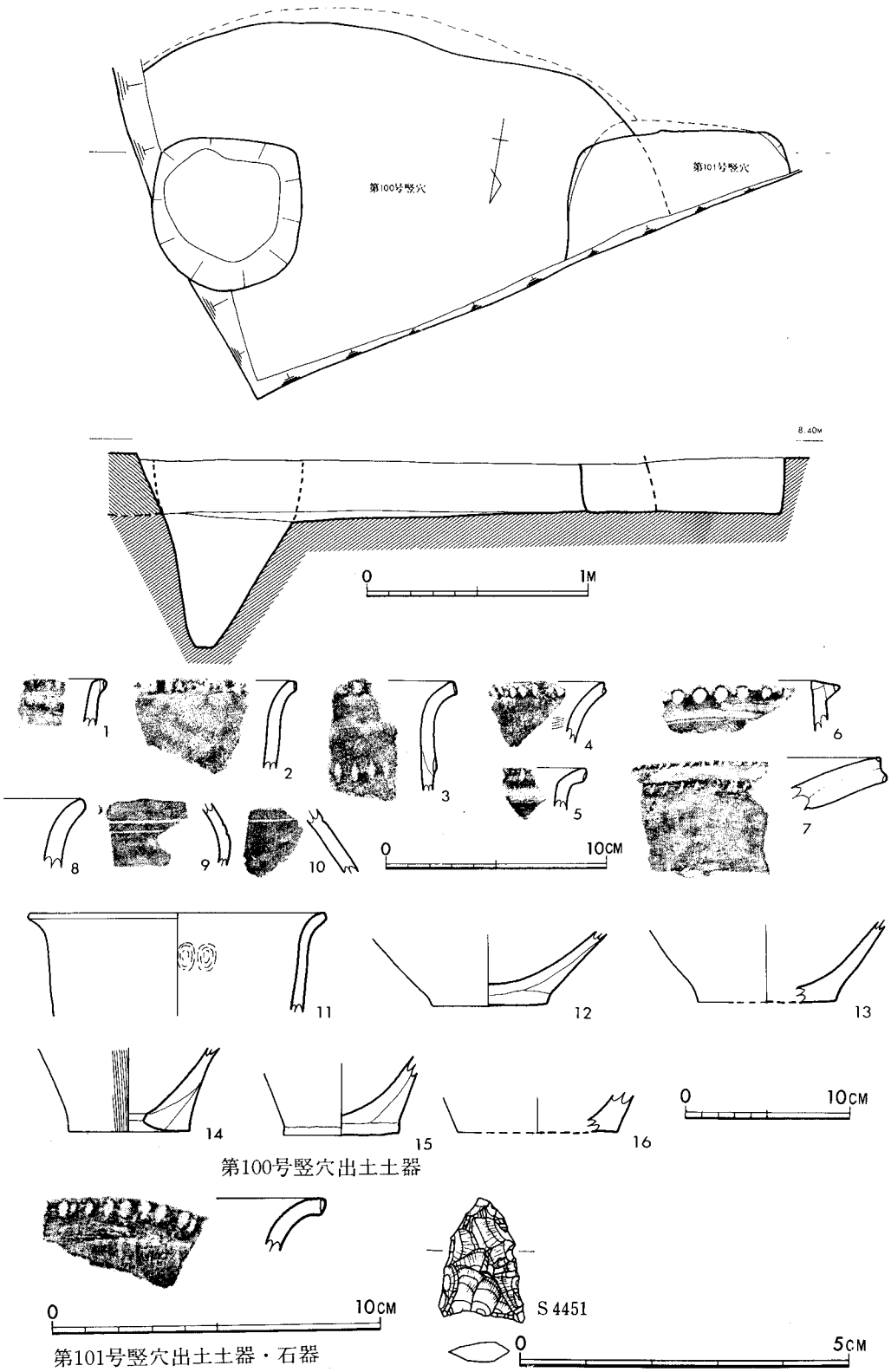


Fig.3・167　第100号・101号竪穴および出土土器・石器実測図

みられる。6は内傾する口縁の外端にも粘土の貼付けがある。突帯の稜は鋭く、横なで調整。外面刷毛目調整。7も外反する口縁であるが、粘土を貼付けて肥厚させ、口縁の上・下端にそれぞれ刻目をつける。横なで調整。11は外反する口縁の端が丸味を帯び、刻目はない。横なで調整で内面には指の押圧調整痕がある。いずれも石英粒砂を含み、焼成は良い。それぞれ、外面黄褐色、内面赤褐色（1）赤褐色（2・5・7）、外面暗褐色、内面赤褐色（3・6）、外面黒色、内面暗褐色（4）、外面暗褐色、内面褐色（11）を程する。1は夜臼式、2・3・11は板付Ⅰ式、4～7は板付Ⅱ式、特に6はいわゆる亀ノ甲タイプものであろう。

壺（8～10）　8は外反する口縁で肥厚しない。横なで調整。9は胴部に二本の沈線、10は肩部に一本の沈線が巡る。8・10は石英粒砂、9は砂を胎土に含み、焼成は良好。それぞれ、褐色（8）、黄褐色（9）、暗褐色（10）を呈する。

底部（12～16）　12・13は壺、14～16は甕であろう。14は甑で、底部の穿孔は焼成後、外面は縦刷毛目調整。いずれも石英粒砂を混じ、焼成は良好。それぞれ赤褐色で内面暗褐色（14）、外面黄褐色を呈する

本竪穴は弥生前期後葉のものであろう。

第101号竪穴（Fig.3・167）

調査区最北端に位置する。東側を第100号竪穴によって切られている。北側大部分が未堀であり、南北は不明だが、東約110cm前後の隅丸長方形プランをもつ。現存の深さ約25cmで、袋状をなしている。

出土土器（Fig.3・167）

甕（1）　外反する口縁の端が丸味を帯び、その端、縦一杯に刻目がつけられる。横なで調整を行い、外面は縦の刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、暗褐色を呈する。板付Ⅰ式であろう。

本竪穴は弥生前期前葉のものであろう。

出土石器（Fig.3・167）

打製石鏃（S4451）　凹基無茎式の石鏃で、黒曜石製。重さ0.8g。

第102号竪穴（Fig.3・168, PL.XVI－2）

調査区北側に存在する。東側半分が未堀であり，北側の一部を第59号甕棺墓によって切られている。推定底径約290cm前後の円形プランをもち、袋状をなしている。現存の深さ約28cm。

出土土器（Fig.3・168）

甕（1）　ほぼ直立する口縁の外端に接する部位と胴上部に各一条の刻目突帯をもつ。突帯は、稜が鋭く、刻目は小さい。横なで調整を行い、胴部突帯以下は縦の刷毛目調整。内面には指の整形痕が残る。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈するが、外面の一部は黄褐色。いわゆる亀ノ甲タイプである。

この竪穴は弥生時代前期後葉のものであろう。

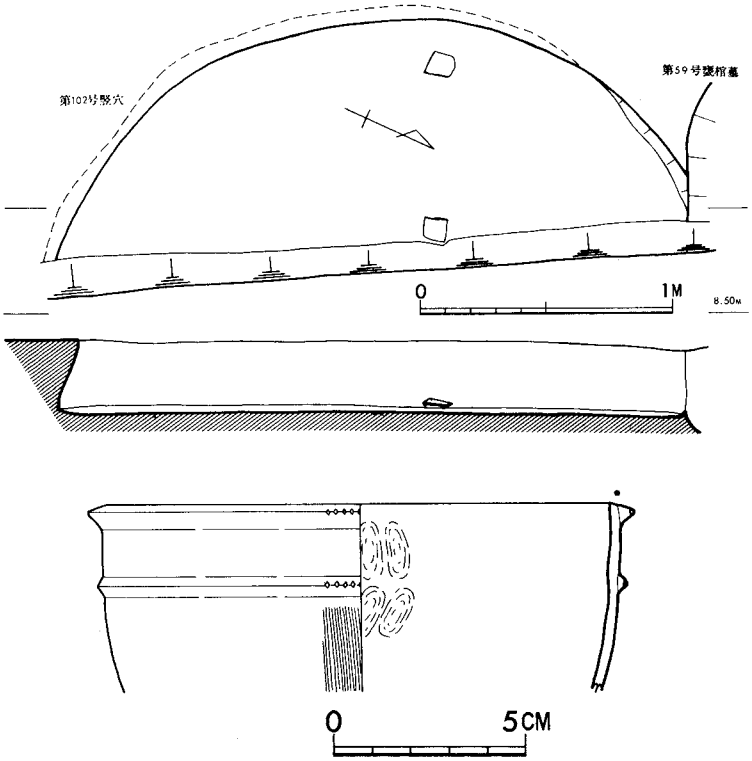


Fig.3・168　第102号竪穴および出土土器実測図

第103号竪穴（Fig.3・169, PL.XVI－5）

調査区東側に存在する。底径約260cm前後の円形プランをもつ。現存の深さは約34cm、北壁が袋状をなし、本来は袋状の竪穴であったであろう。

出土土器（Fig.3・169）

甕（1～6）　外反する口縁の端が「コ」の字状となる。2～4は下端に刻目がつけられる。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。それぞれ褐色(1～3、5)、外面褐色、内面暗褐色(4)、外面赤褐色、内面黒褐色(6)を呈する。

壺（7・8）　7は外反する口縁部で肥厚しない。8は肩部で、外面に段がつき、内側は肥厚しない。7は胎土に砂、8は石英粒砂を含み、焼成は良好。7は黄褐色、8は赤褐色を呈する。

高坏（9）　突帯をもつ坏と脚の接合部である。石英粒砂を含み、焼成良好。外面黄褐色、内面灰褐色を呈する。

底部（10）　甕の底部である。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。淡褐色を呈するが、内面は煤の付着が認められ黒褐色となる。

これらの土器は板付II式であり、本竪穴は弥生時代前期中葉のものであろう。

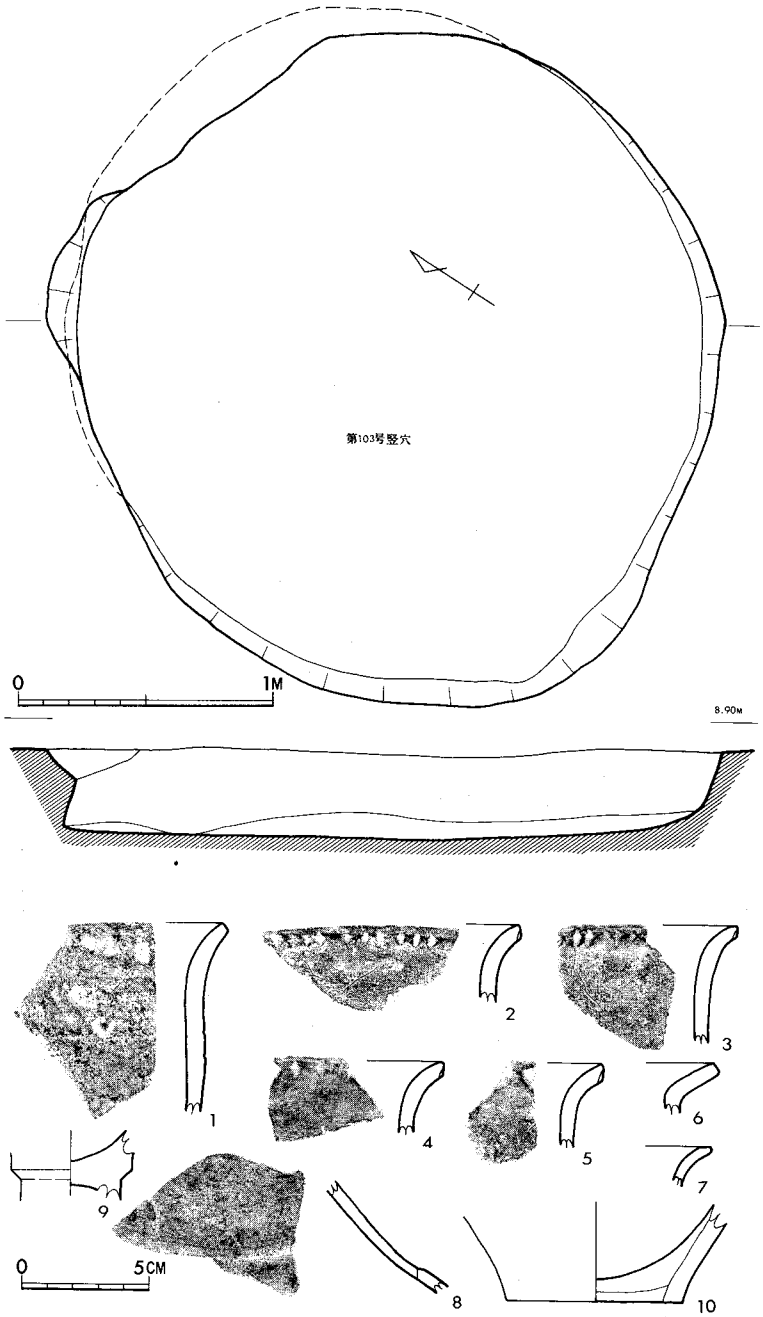


Fig.3・169　第103号竪穴および出土土器実測図

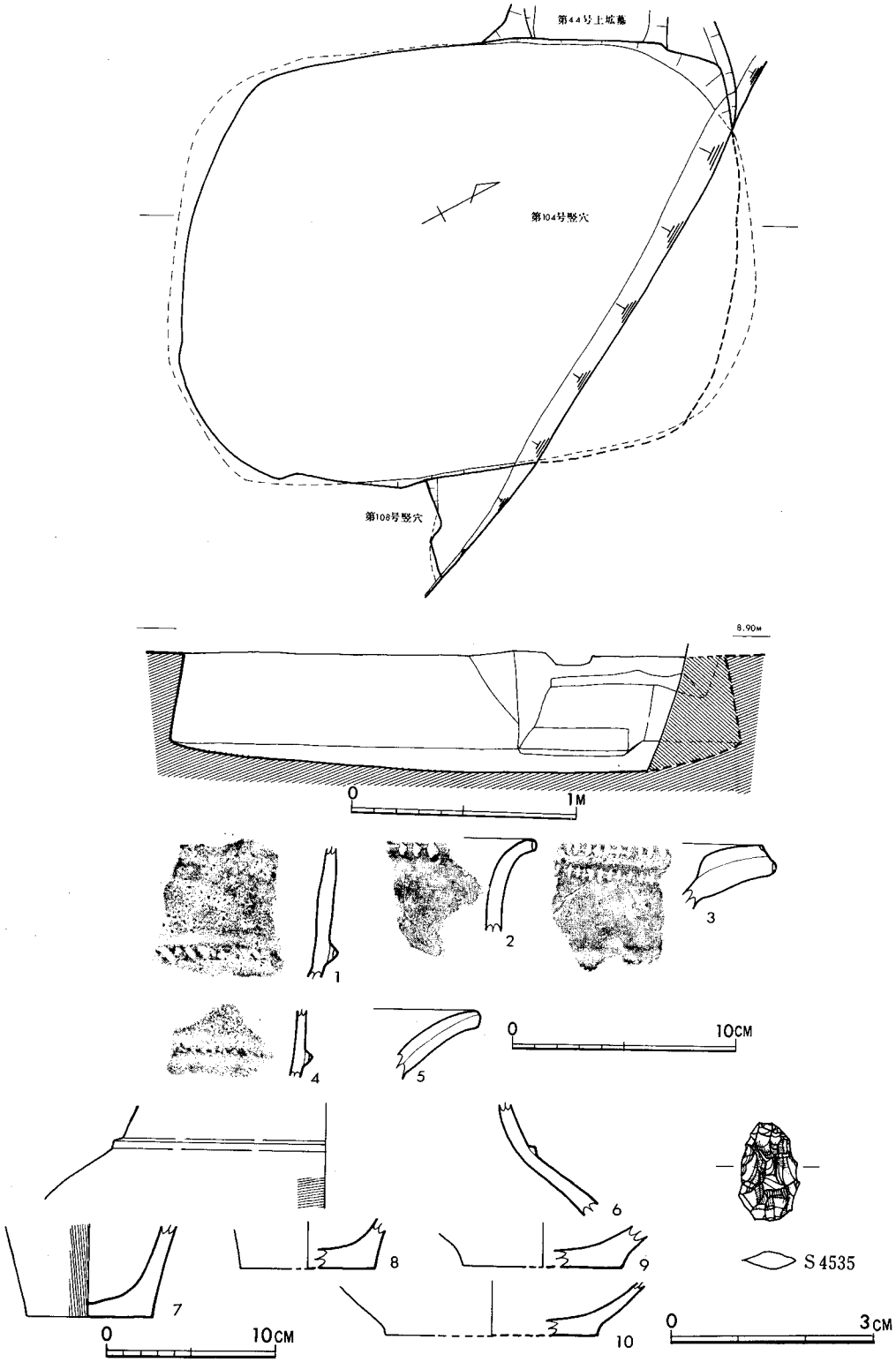


Fig. 3・170　第104号竪穴出土土器石器実測図

第104号竪穴（Fig.3･170）

調査区東側に存在する。北側を第44号土坑墓、西側を第48号木棺墓に切られ、埋土中に第60号甕棺墓が営まれる。また東側で第108号竪穴に切られている。北東の一部は未堀であるが、底径南北で推定約260cm前後、東西で約193cmの隅丸長方形プランをもつ。現存の深さ約54cm、袋状の竪穴である。

出土土器（Fig.3･170）

甕（１～４）　１・４は刻目突帯をもつ胴部であるが、４の突帯は稜が鋭く、刻目も小さい。２は外反する口縁の丸味を帯びた端一杯に刻目を施し、横なで調整。３は外反する口縁の上部に粘土を貼付けて肥厚させ、その上下両端に刻目をつける。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。それぞれ、外面暗褐色、内面黄褐色(１)、暗褐色(２・３)、赤褐色(４)を呈する。１は夜臼式、２は板付Ⅰ式、３・４は板付Ⅱ式であろう。

壺（５・６）　５は外反する口縁部で粘土を貼付けて肥厚させる。箆の横みがき。６は肩部に三角突帯をもつ。外面に横の刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。褐色(５)、暗褐色(６)を呈する。板付Ⅱ式であろう。

底部（７～10）　７・８は甕、９・10は壺の底部である。７の外面に縦刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。それぞれ、外面褐色、内面赤褐色、暗褐色、内面黄褐色(８・９)、暗褐色(10)を呈する。

本竪穴は弥生時代前期後葉のものであろう。

出土石器（Fig.3･170）

打製石鏃（Ｓ4535）　小形の偏頭形の石鏃である。黒曜石製。重さ0.5ｇ。

第105号竪穴（Fig.3･171）

調査区東側に位置する。北西壁を第45号土坑墓に切られ、また南半を削平されて欠くが、径約160cmの円形プランをもつ。現存の深さは約27cm、袋状をなしていない。内部にピットが２個存在する。

出土土器（Fig.3･171）

甕（１～３）　１は刻目突帯をもつ内傾する口縁部である。２は外反する口縁とやや胴の張る器形をもつ。口縁端は「コ」の字状となり、下端に刻目を施す。口縁外側は横なで調整。口縁内側は斜め、胴部外側は縦の刷毛目調整。内側には指圧調整痕が残る。３も外反する口縁の端が「コ」の字状となり，その下端に浅い刻目がつけられる。胴部には一条の三角突帯が巡るが、刻目があるかどうかは不明。外面口縁下と、突帯貼付部は横なで調整。口縁端と口縁内側横、外面は縦の刷毛目調整。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。赤褐色(１)、暗褐色，黄褐色(２)、外面暗褐色、内面黄褐色(３)を呈する。

底部（４～７）　４～６は甕，７は壺の底部である。４・５は上げ底となる。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。それぞれ黄褐色(４)、外面赤褐色、内面黒褐色(５)、褐色(５)、黒色(７)を呈する。

本竪穴は弥生時代前期中葉のものであろう。

出土石器（Fig.3・105）

砥石（S4551）　砂岩製である。

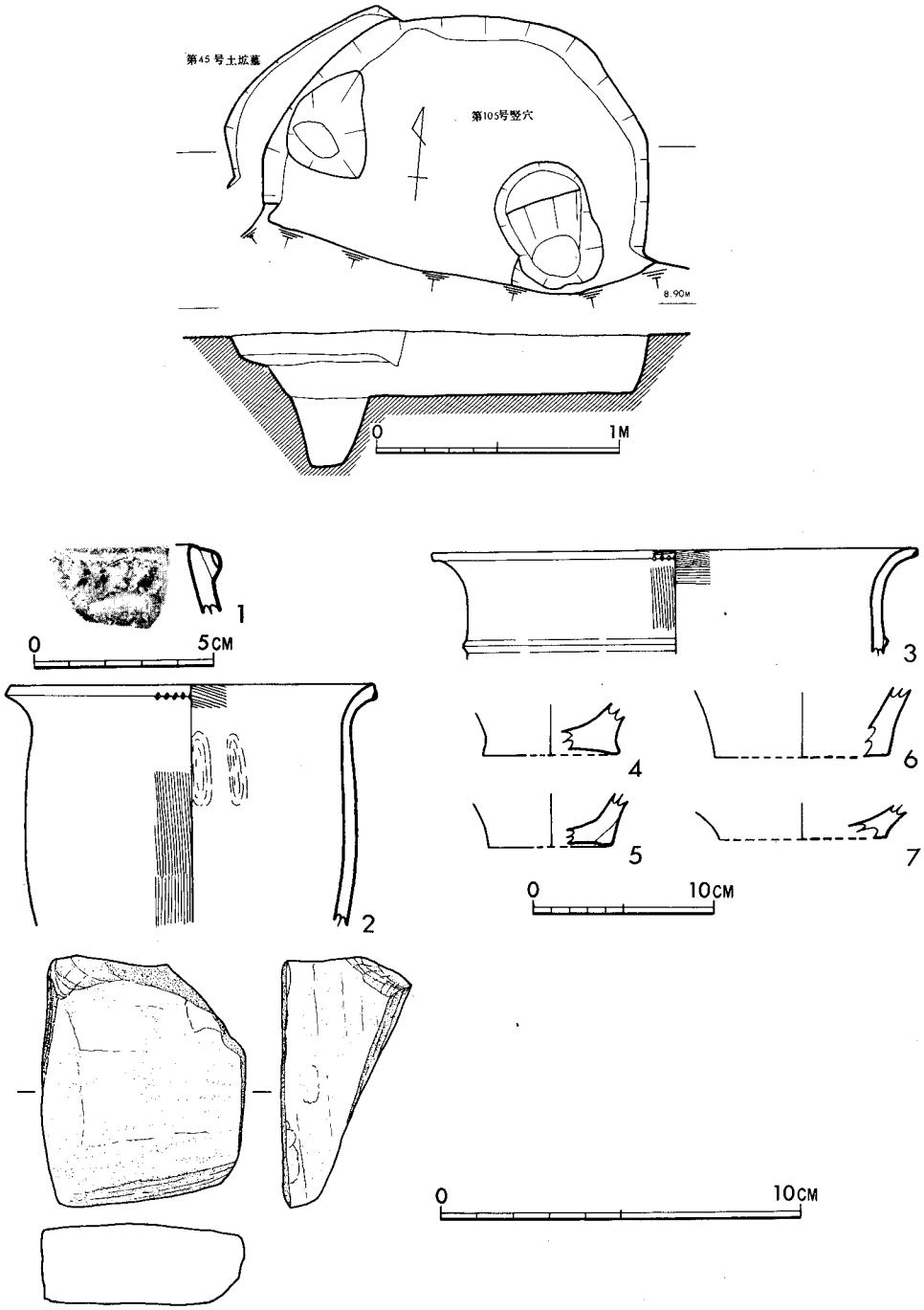


Fig.3・171　第105号竪穴および出土土器・石器実測図

第106号竪穴（Fig.3・192, 3・193, PL.XVI－7）

調整区中央西側に位置する。南北約228cm、東西約144cmの長方形プランをもつ。現存の深さ径17cm、袋状をなしていない。内部に3個のピットがある。

出土土器（Fig.3・192, 3・193）

甕　夜臼式（1～4）　1～3は刻目突帯をもつ。4は刻目のつかない突帯をもつ。1・2・4の突帯は口縁端に接するが、3は少し下がった位置につけられる。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。それぞれ、暗赤褐色(1)、暗褐色(2)、暗黄褐色(3)、黄褐色(4)を呈する。

板付Ⅰ式（6～8・32）　外反する口縁の端一杯に刻目をつける。いずれも石英粒砂を含み、焼成良好。赤褐色(6・7・32)、黒褐色(8)を呈する。

板付Ⅱ式（5・9～12・31・33）　12以外は外反する口縁の下端に刻目をつける。12は突帯をもつ胴部破片で、突帯に刻目はつかない。31・33は内側に指の押圧調整の痕がある。いずれも石英粒砂を含み、焼成良好。それぞれ外面暗褐色、内面黒褐色(5・9)、黒色(10)、暗褐色(11)、黄褐色（12）外面淡い灰褐色、内面黄褐色(33)、外面赤褐色、内面黄褐色(31)を呈する。

壺（13～21・24～30）　13は、外反する口縁の外側に粘土を貼付ける。15も口縁下外面に段がつく。14・16・17・24～26は肥厚せず外反する。18～21、27～30は肩部～胴部破片である。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。それぞれ、黄褐色(14・18～21・24・27)、暗褐色(15・16)、褐色(17)、外面赤褐色、内面黄褐色（25）、灰褐色、黄褐色（26）、黒褐色、黄褐色(28)、外面暗黄褐色、内面黄褐色、黒褐色(29)、暗褐色、黄褐色で一部黒変(30)を呈する。板付Ⅰ～Ⅱ式のものであろう。

鉢（22）　外反する口縁部をもつ。石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色・黄褐色を呈する。板付Ⅱ式か。

高坏（23・34・35）　23・34は坏部、35は突帯をもつ。坏と脚の接合部である。23・34は屈折し外反する口縁をもつ。34の脚もおそらく突帯をもつものであろう。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色(23)、赤褐色(34)、褐色(35)を呈する。板付Ⅱ式。

底部（36～40）　36は壺、他は甕の底部である。38の内面には煤の付着が認められる。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。灰褐色(36)、外面暗褐色、内面黄褐色(37)、黄褐色で煤の付着部は黒褐色(38)、外面暗褐色、内面灰褐色(39)、暗褐色(40)を呈する。

この竪穴は弥生時代前期中葉のものであろう。

第107号竪穴（Fig.3・174）

調査区南側に存在する。西側を第4号甕棺墓、東側を後世の攪乱で乱されているが、本来は、南北約160cm前後、東西は推定で、約100cm前後の長方形プランをもつものと思われる。現存の深さ約20cm、袋状をなしていない。

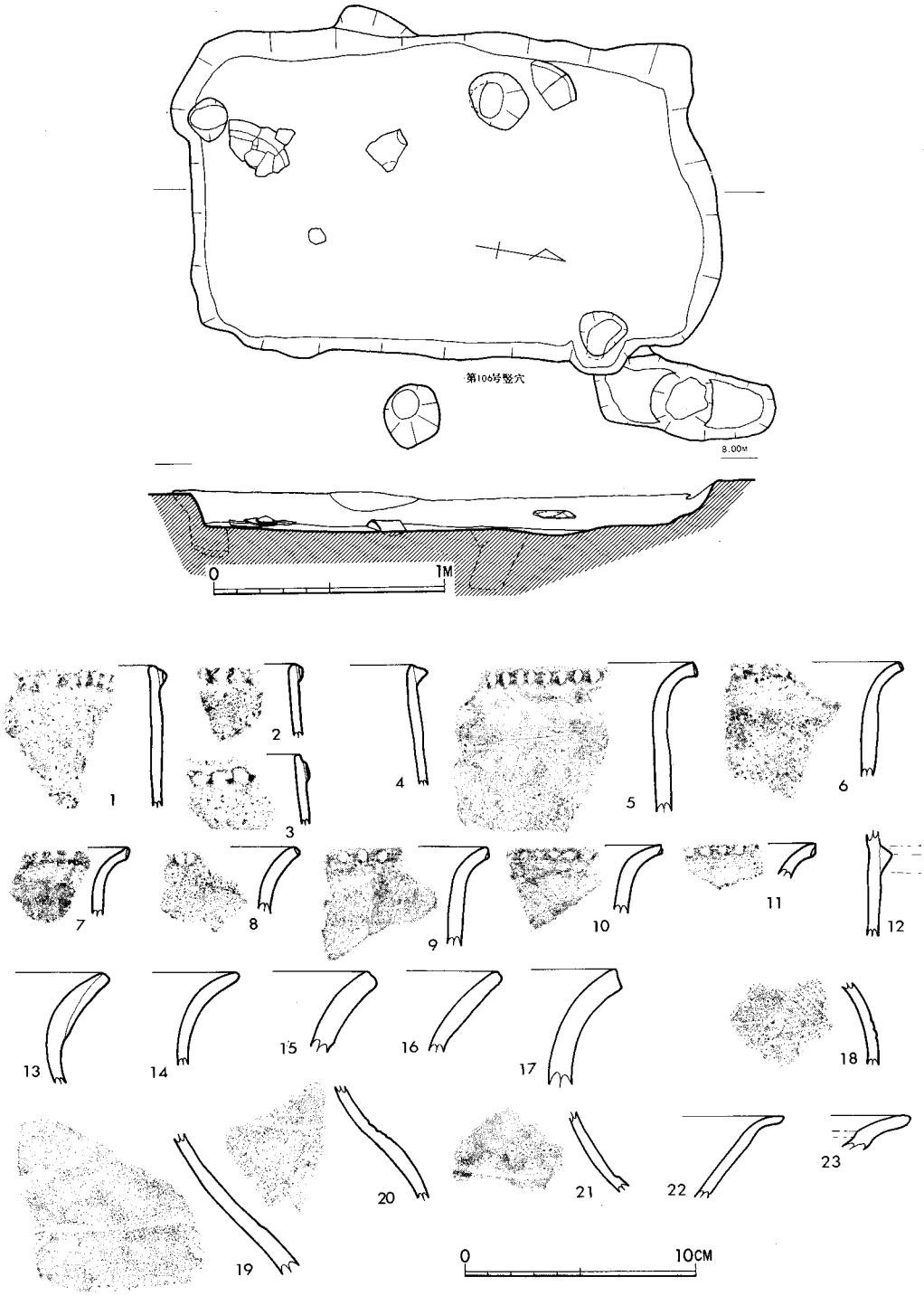


Fig.3・172　第106号竪穴および出土土器実測図

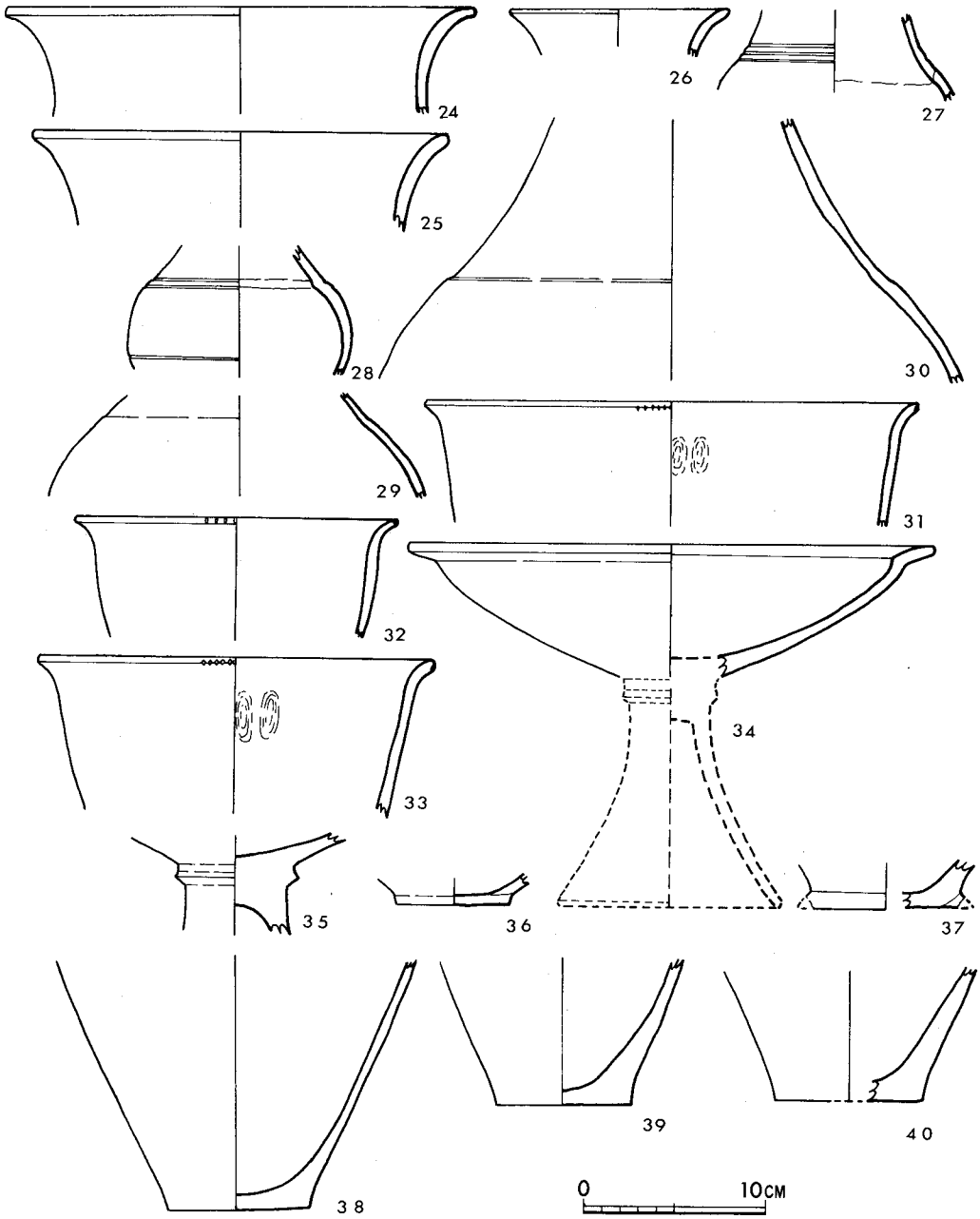


Fig. 3・173　第106号竪穴出土土器実測図

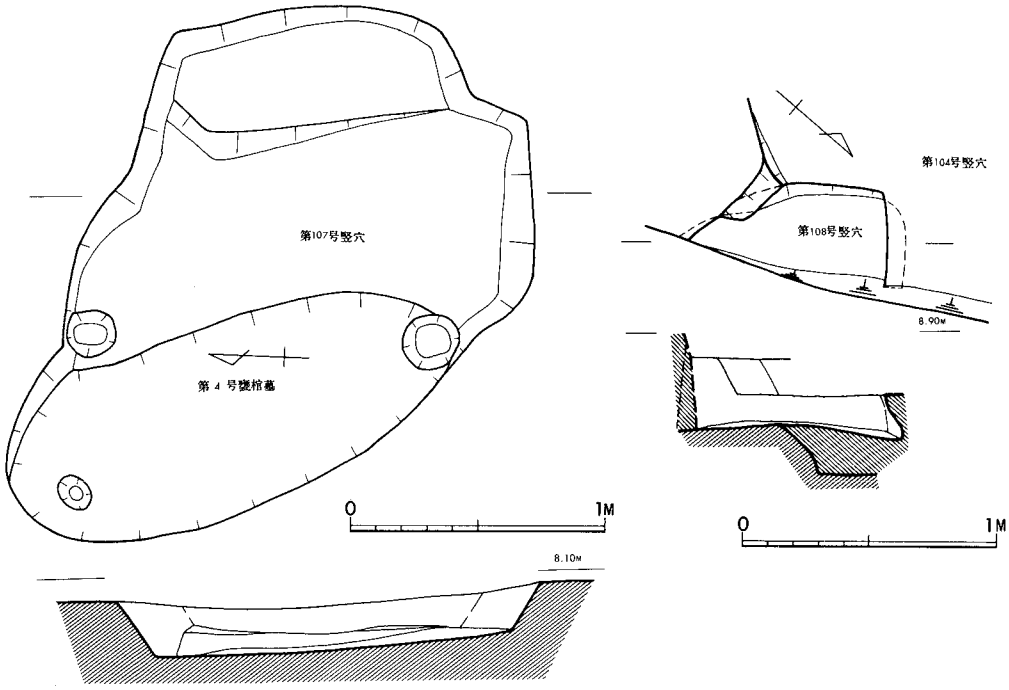


Fig.3・174　第107号・108号竪穴実測図

第108号竪穴（Fig.3・174）

調査区東側に位置する。第104号竪穴を切って作られているが、大部分が未堀であるため、平面プランや大きさは不明。現存の深さ約28cmで、袋状の竪穴である。　（沢）

Tab.3・4　第１区台地上竪穴一覧

No.	時期	形状	底辺径	深さ	出土遺物	備考
第１号	前期後葉	不整円形	219cm×222	cm 58	弥生前期土器片、剥片２、砥石１、削片２、小円礫１	37号・86号より新しい。4個のピット
第２号	〃	長方形	183×135	25	弥生前期土器片、磨製石剣１、削片１、磨製石器１、磨製石斧１、砥石１	
第３号		〃	156×111	29		小ピット１
第４号	前期後葉	〃	119×95	36	弥生前期土器片、柱状片刀石斧１、鉢１	５号より新しい 袋状竪穴 ピット１
第５号		不整長方形	160×(130)	27	黒曜石原石１	４号より古い ６号より新しい 小ピット２
第６号		長方形	130×88	30	削片１	５号より古い 7･8号より新しい 小ピット１
第７号		〃	112×(?)	14		６号より古く、８号より新しい
第８号	前期中葉	〃	71×(?)	10	弥生前期土器片、小円礫１	６・７号より古い
第９号	前期前葉	隅丸長方形	130×90	40	甑１	小ピット１
第10号		円形	180×(?)	28	石核２、削片２	後世の溝状のものに切られる
第11号	前期前葉(?)	長方形	265×190	50	弥生前期土器片、石核２、弥生中期土器片（攪乱）不定形（剥片）石器１	23号木棺墓より古い、小ピット２
第12号	前期前葉	不整長方形(?)	119×98	31	甕１、削片３、小円礫１	袋状竪穴、段あり 小ピット
第13号	前期中葉	〃	145×130	35	弥生前期土器片、剥片２、敲石1	段あり 小ピット１
第14号		長方形	114×105	15		11号甕棺墓より古い
第15号	中期初頭	不整形	160×135	18	甕１、弥生前期土器片	
第16号		長方形(?)	142×114	15		36号甕棺墓より古い
第17号	前期後葉	円形(?)	220×220(?)	27	弥生式土器片、打製石鏃１、掻器１、砥石1、剥片11、剥片石器1	39号と切り合う、袋状竪穴か、40号甕棺墓より古い
第18号	〃	楕円形	118×104	38	弥生前期土器片、削片1、円礫１	88号より新しい
第19号		長方形	165×140	24		張り出し部あり
第20号		長方形(?)	165×128	30	石核1、剥片1、削片７、円礫１	
第21号	前期後葉	長方形	130×(?)	33	弥生前期土器片、石庖丁未製１、石核２、削片１、礫１	32号より古い、39号甕棺墓より古い
第22号	〃	長方形(?)	130×(?)	16	弥生前期土器片	半欠、小ピット１

No.	時期	形状	底辺径	深さ	出土遺物	備考
第23号	前期後葉	長方形	237cm×(?)	cm 28	弥生前期土器片、石斧１、石核１、削片２、剥片石器１	29号土坑墓より古い、小ピット１
第24号	前期中葉	円形	290×263	35	弥生前期土器片、石核２、石皿１、削片７、剥片石器１	袋状竪穴、63号甕棺墓、8号木棺墓、48号木棺墓より古い
第25号	中期初頭(?)	〃	180×180(?)	37	壺２、弥生前期、中期土器片、削片２	東半未掘、77号と切り合う
第26号	前期前葉	方形	141×124	23	弥生前期土器片	74号より古い？
第27号	前期中葉(?)	「T」字形に近い	205×108	15	弥生前期土器片	小ピット４
第28号	前期後葉	長方形	(210)×160	38	弥生前期土器片、尖頭状石器１掻器1、砥石1、削片７、円礫１	55号と切り合う
第29号	〃	?	?	14	弥生前期土器片、剥片石器１、石核１	45号甕棺墓に切られる
第30号	前期中葉	不整形	193×148	18	弥生前期土器片	
第31号	前期後葉	隅丸長方形	285×165	23	弥生前期土器片、円礫１	
第32号	〃	円形	180×180	53	弥生前期土器片、磨製石斧１、削片１、剥片石器１、砥石２、石核１、剥片１	21号・33号・35号より新しい、39号甕棺墓に切られる、袋状竪穴
第33号	〃	長方形	113×(?)	41	弥生前期土器片	35号より新しい、21号木棺墓、39号甕棺墓、55号甕棺墓、32号より古い、袋状竪穴
第34号	前期前葉	方形	162×181	60	弥生前期土器片、剥片１、削片２、円礫１	袋状竪穴？、張り出し、小ピット１
第35号	前期中葉	長方形	147×(?)	46	弥生前期土器片、剥片２、削片６、小円礫１	85号より新しい、24号甕棺墓、46号土坑墓、32号、33号より古い、小ピット１
第36号	前期前葉(?)	〃	320×170	37	弥生前期土器片、石核１、削片１、角礫１	19号土坑墓、21号より古い、小ピット１
第37号	前期前葉	〃	161×260	11	弥生前期土器片、石核１、壺１	14号甕棺墓より古い、小ピット
第38号	前期中葉	不整形	100×120	31	弥生前期土器片、石核1、削片4	小ピット１
第39号	〃	不整長方形	250×200	24	弥生前期土器片、磨製石器１削片２、砥石１、円礫１	17号と切り合う
第40号	〃	長方形	184×140	41	弥生前期土器片、石核１、石皿１、剥片７、削片20、円礫１、台石１、剥片石器１	袋状竪穴、小ピット１、47号甕棺墓より古い
第41号	前期後葉(?)	〃	140×(?)	14	弥生前期土器片、削片２	44号甕棺墓より古い
第42号	中期初頭	円形(?)	(150×160)	23	弥生前期、中期土器片	78号より新しい
第43号	前期後葉	長楕円	190×100	40	弥生前期土器片、磨製石斧１、削器１、石核１、剥片１、礫１土製品１	小ピット１
第44号	前期前葉(?)	方形(?)	?	24	弥生前期土器片	24号木棺墓、58号甕棺墓、53号より古い、攪乱激しい
第45号	前期前葉	長方形	195×266	24	弥生前期土器片１、石核１、削片３、砥石１、礫1、剥片石器１	小ピット２、井戸状遺構２号に切られる

No.	時期	形状	底辺径	深さ	出土遺物	備考
第 46 号	前期中葉(?)	長方形	136cm × (?)	cm 17	弥生前期土器片、砥石１	半掘
第 47 号	前期前葉(?)	〃	163 × 125	30	弥生前期土器片、磨製石器１	小ピット４
第 48 号	前期中葉	〃	346 × 268	15	弥生前期土器片、石核1、削片10	小ピット
第 49 号	〃	隅丸長方形	145 × 115	26	弥生前期土器片、磨製石器１、砥石１	袋状竪穴
第 50 号	前期前葉	〃	200 × 140	19	弥生前期土器片、剥片石器１、磨製石斧１、磨石２、砥石２、石核１、削片２	小ピット１、51号より古い
第 51 号	前期中葉	〃	190 × 130	18	弥生前期土器片、削片２	50号より新しい
第 52 号		〃	133 × 102	10		造り出し
第 53 号	前期後葉	円形	(210 × 210)	24	弥生前期土器片	44号より新しい、22号甕棺墓、24号木棺墓に切られる
第 54 号		不整形	140 × 114	15		内部掘り込み
第 55 号	前期中葉	円形	222 × 222	47	鉢１、弥生前期土器片、磨製石器１、砥石３、敲石１、削片２剥片２、円礫１	28号と切り合う、袋状竪穴
第 56 号		長方形	144 × 119	19		84号より新しい、57号甕棺墓より古い
第 57 号	前期後葉	不整形	100 × 132	37	弥生前期土器片、削片１	
第 58 号	前期前葉	長方形	139 × 154	19	弥生前期土器片、砥石１	
第 59 号		〃	135 × 108	22		小ピット
第 60 号	前期中葉	台形	115 × 85・118	30	弥生前期土器片、石核１、剥片１、削片１	61号を切る
第 61 号	前期前葉	方形	91 × 85	8	弥生前期土器片、磨製石斧１、削片１	60号に切られる小ピット３
第 62 号	〃	隅丸長方形	174 × 155	51	弥生前期土器片、削片７、円礫１	袋状竪穴、34号を切る
第 63 号	〃	長方形	284 × 156	41	弥生前期土器片、石錐１、石核３、剥片２、削片６、台石１	小ピット５個
第 64 号	前期中葉	〃	276 × 175	35	弥生前期土器片、石核2、削片6	
第 65 号	前期後葉	円形	190 × 190	47	蓋１、弥生前期土器片、投弾１打製石鏃１、敲石１、石核４、削片９、円礫１	袋状竪穴、造り出し
第 66 号	前期中葉	長方形	220 × 197	29	弥生前期土器片、削器１、打製石鏃１、削片１、砥石１	41号甕棺墓、42号甕棺墓に切られる
第 67 号	前期後葉	円形	153 × 153	30	弥生前期土器片、石核２、剥片１、削片２	袋状竪穴、47号木棺墓、67号竪穴から切られる
第 68 号	前期中葉	〃	206 × 206	18	弥生前期土器片、紡錘車１、石核２、削片３、円礫１	67号から切られる

No.	時期	形状	底近径	深さ	出土遺物	備考
第69号		台形	110cm×(?)	cm 27		76号を切る、77号から切られる、小ピット2個
第70号	前期中葉	円形	157×157	45	弥生前期土器片、剥片石器1、紡錘車1、石核1、剥片1、削片7、円礫2	袋状竪穴
第71号	〃	〃	187×187	30	弥生前期土器片、紡錘車1、穿孔具状石器2、磨石1	袋状竪穴
第72号	前期前葉	長方形	223×133	27	弥生前期土器片、石核1、削片3	
第73号	前期前葉(?)	〃	270×190	36	弥生前期土器片、剥片1、削片3	床面2段
第74号	前期中葉	方形	123×131	15	弥生前期土器片、砥石1、石核1、削片3	26号より新しい(?)
第75号	〃	長方形	199×122	70	弥生前期土器片、石核1、削片8	袋状竪穴
第76号		〃	119×(?)	17		小ピット1、28号甕棺墓、69号に切られる
第77号	中期初頭(?)	円形(?)	?	37	弥生中期土器片、削片3	南半未掘、25号と切り合う、69号を切る
第78号	前期前葉	不整形	253×220	36	弥生前期土器片	42号に切られる、小ピット1
第79号	前期中葉	長方形	122×(?)	15	弥生前期土器片、石核1、削片3	西半欠失 小ピット2
第80号	前期前葉	隅丸長方形	290×172	42	弥生前期土器片	袋状竪穴、小ピット、7号木棺墓、81号に切られる。
第81号		長方形	310×137	48		80号を切る、25号甕棺墓、27号甕棺墓に切られる。小ピット8
第82号	前期前葉	円形	230×200	40	弥生前期土器片、石核2、剥片1、削片7、礫1	
第83号		不整形	148×90	27		
第84号	前期前葉	方形	130×120	34	弥生前期土器片、敲石1	56号に切られる
第85号	〃	長方形(?)	130×(?)	40	弥生前期土器片	35号に切られる
第86号	前期中葉	長方形	160×142	27	弥生前期土器片	
第87号		〃	212×140	22		1号に切られる
第88号	前期中葉(?)	〃	256×190	30	弥生前期土器片、砥石1	小ピット12、18号に切られる
第89号		〃	115×142	19		43号甕棺墓に切られる。小ピット1
第90号		楕円形	192×176	29	削片1	52号甕棺墓に切られる
第91号	前期中葉	隅丸長方形	158×132	60	弥生前期土器片、石核1、削片2	袋状竪穴

No.	時期	形状	底近径	深さ	出土遺物	備考
第92号	前期中葉	長方形	172cm×(130)	39cm	弥生前期土器片、石核1	袋状竪穴、一部未掘
第93号	前期前葉	〃	200×122	34	弥生前期土器片、石庖丁1、石核2、剥片4、削片8、剥片石器1	小ピット2、21号甕棺墓に切られる
第94号	前期中葉	円形	165×140	27	弥生前期土器片、磨石1、円礫1	41号木棺墓に切られる
第95号	前期前葉	長方形	242×128	57	弥生前期土器片、石核1	小ピット4
第96号		〃	201×131	15	穿孔具状石器1	小ピット2
第97号		隅丸長方形	190×(142)	32	剥片1、削片1	30号甕棺墓、23号甕棺墓に切られる
第98号		不整形	135×152	32		23号甕棺墓に切られる
第99号	前期中葉	長方形	200×(?)	29	弥生前期土器片	6号甕棺墓、17号甕棺墓、37号甕棺墓に切られる
第100号	前期後葉	円形	(300×300)	28	石核1、削片3	¾未掘、101号を切る、袋状竪穴
第101号	前期前葉	隅丸長方形	110×(?)	25	弥生前期土器片、打製石鏃1、削片1	100号に切られる。袋状竪穴
第102号	前期後葉	円形	290×(290)	28	弥生前期土器片、削片2	東半未掘、59号甕棺墓に切られる。袋状竪穴
第103号	前期中葉	〃	260×260	34	弥生前期土器片、石核1、剥片1、削片1	袋状竪穴
第104号	前期後葉	隅丸長方形	260×193	54	弥生前期土器片、打製石鏃1、石核1、削片6、円礫1、剥片石器2	袋状竪穴、44号土坑墓、48号木棺墓、60号甕棺墓、108号に切られる、一部未掘
第105号	前期中葉	円形	160×(?)	27	弥生前期土器片、剥片石器1、砥石1、削片15、石核1	小ピット2、45号土坑墓に切られる半欠失
第106号	前期中葉	長方形	228×144	17	弥生前期土器片	小ピット3
第107号		〃	160×(100)	20		4号甕棺墓に切られる。
第108号				28		104号を切る、大部分未掘、袋状竪穴

Tab.3・5　第1区台地上竪穴出土石器数量表

竪穴No.	蛤刃石斧（玄武岩）	片刃石斧	方柱状	石庖丁（頁岩質砂岩）	磨製石剣	穿孔用石器	打製石鏃 ob	石錐	削器 sa	掻器	剥片石器	石核 ob	石核 sa	剥片 ob	削片 ob	削片 sa	磨石	敲石	砥石	その他
1														2	2				1	小円礫1
2					1										1				1	
4		1																		
5																				ob.原石
6															1					
8																				円礫1
10													2			2				
11											1	2								
12															3					礫1
13											1			2	2			1		
17							1			1	1			2	11				1	
18															1					円礫1、ob原石
20												1		1	7					円礫1
21				1								2			1					礫1
23	1									1	1	1			2					
24											1	2			7					石皿1
25															2					
28															7				1	円礫1
29											1	1								
31																				円礫1
32	1										1	1		1	1				2	
34														1	2					
35														2	6					円礫1
36												1			1					
37												1								
38												1			4					
39															2				1	円礫1
40											1	1		7	20					円礫1
41															2					
43	1											1		1	1					
45											1	1			1	2			1	
46																			1	
47																				
48												1			10					
49																			1	肩平片刃石斧？1
50	1											1			1		2		2	
51															2					
55														2	2			1	3	礫1
57															1					
58																			1	
60												1		1	1					
61	1														1					
62															7					円礫1
63								1				3		2	5	1				
64												2			6					
65							1					4			9			1		円礫1
66									1					1			1		1	

竪穴No.	蛤刃石斧（玄武岩）	片刃石斧	方柱状	石鏃（頁岩質砂岩）	磨製石剣	穿孔用石器	打製石鏃 ob	石錐	削器 sa	掻器	剥片石器	石核 ob	石核 sa	剥片 ob	削片 ob	削片 sa	磨石	敲石	砥石	その他
67												2		1	3					円礫1、ob原石1
68												2			3					打痕ある礫1
70											1	1		1	7					円礫2
71																	1			
72					2							1			3					
73														1	3					
74												1			3				1	
75												1			8					
77															3					
79												1			3					ob原石
82												2		1	7					礫1
84																		1		
88																			1	
90															1					
91												1			2					
92												1								
93				1							1	2		4	8					
94																	1			円礫2
95												1								
96						1														
97														1	1					
100												1			3					
101							1								1					
102															2					
103												1		1	1					
104							1				2	1			6					
105											1	1		1	3				1	
計	5	1	2	1	3	4	1	1	2	14	48	2	36	203	5	5	4	20		

obは黒曜石、saはサヌカイトの略号

(2)　甕棺墓

甕棺墓は63基出土した。小児用37基、成人用26基である。

a　小児用甕棺墓

第9号甕棺墓（Fig.3・175）

第9号甕棺墓は大部分を削平された状態で検出された。棺は甕2個の接口で、墓坑の下部面にほとんど接して埋置されていた。N－75°－Eに位置し、3°の傾斜をもつが、ほぼ水平である。

両甕ともに同様な器形をもつ。逆「L」字状口縁で上面がくぼみ、内唇が下がる。下甕の方に口縁部の発達が若干認められる。口縁下に一条の三角突帯を巡らし、口縁上端から突帯下まで指の横なで調整。それ以下の外面は縦の刷毛目調整。煤の付着が認められる。日常用具からの転用であろう。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。上甕は外面淡暗褐色、暗褐色、内面黒褐色。下甕は外面暗褐色、内面淡黄褐色、黒褐色。上甕の推定口径47cm。下甕は推定45.6cm。以上の所見より本甕棺墓は弥生中期前葉に比定することができよう。

第11号甕棺墓（Fig.3・175）

第14号竪穴の埋没後、第13号甕棺墓の墓坑を切って埋置されている。大部分を削平されている。棺は甕2個の接口で主軸はN－43.5°－Wに位置し、11°の傾斜をもつ。

上甕は逆「L」字状口縁をもち上面がくぼむ甕で口縁部周辺は横なで調整。突帯は無く、外面は刷毛目調整。底部は上げ底となる。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、褐色を呈するが、内面底部近くは暗褐色。口径31.8cm、高さ37cm。下甕も、逆「L」字状口縁をもつ甕で、上面がくぼむ。口縁下に一条の三角突帯が巡り、口縁周辺から突帯下まで横なで調整。それ以下の外面は刷毛目調整。若干の上げ底を呈する。器面はあれている。石英粒砂を含み、焼成良好、外面褐色、内面灰褐色を呈する。口径36cm、高さ40cm。中期前葉に比定できよう。

第12号甕棺墓（Fig.3・176，PL.XVII－3）

上半を削平されている。残存部で長さ100cm、幅55cmの墓坑内に2個の甕を接口させ、主軸N－17.5°－W、傾斜14.5°で埋置している。

上甕は逆「L」字状口縁をもち、内唇の発達は認められないが、外唇が若干下がる甕である。口縁下に一条の三角突帯を巡らす。口唇部には刻目を施す。口縁周辺から、突帯下まで横なで調整。それ以下の外面刷毛目調整。底部は特徴的な上げ底。煤の付着が認められる。石英粒砂を含み、焼成良好、暗褐色を呈すが、内面の一部暗灰褐色。口径34cm、高さ42cm。下甕も逆「L」字状口縁をもつ甕だが、内唇の発達はみられず外唇の発達もそれほどではない。内端が下がる。口縁周辺は横なで調整。口縁下に一条の三角突帯を巡らす。突帯貼付後なでつけている。口縁直下から縦刷毛目調整。一部に斜めの刷毛目もはいる。底部は上甕と同様、特徴的

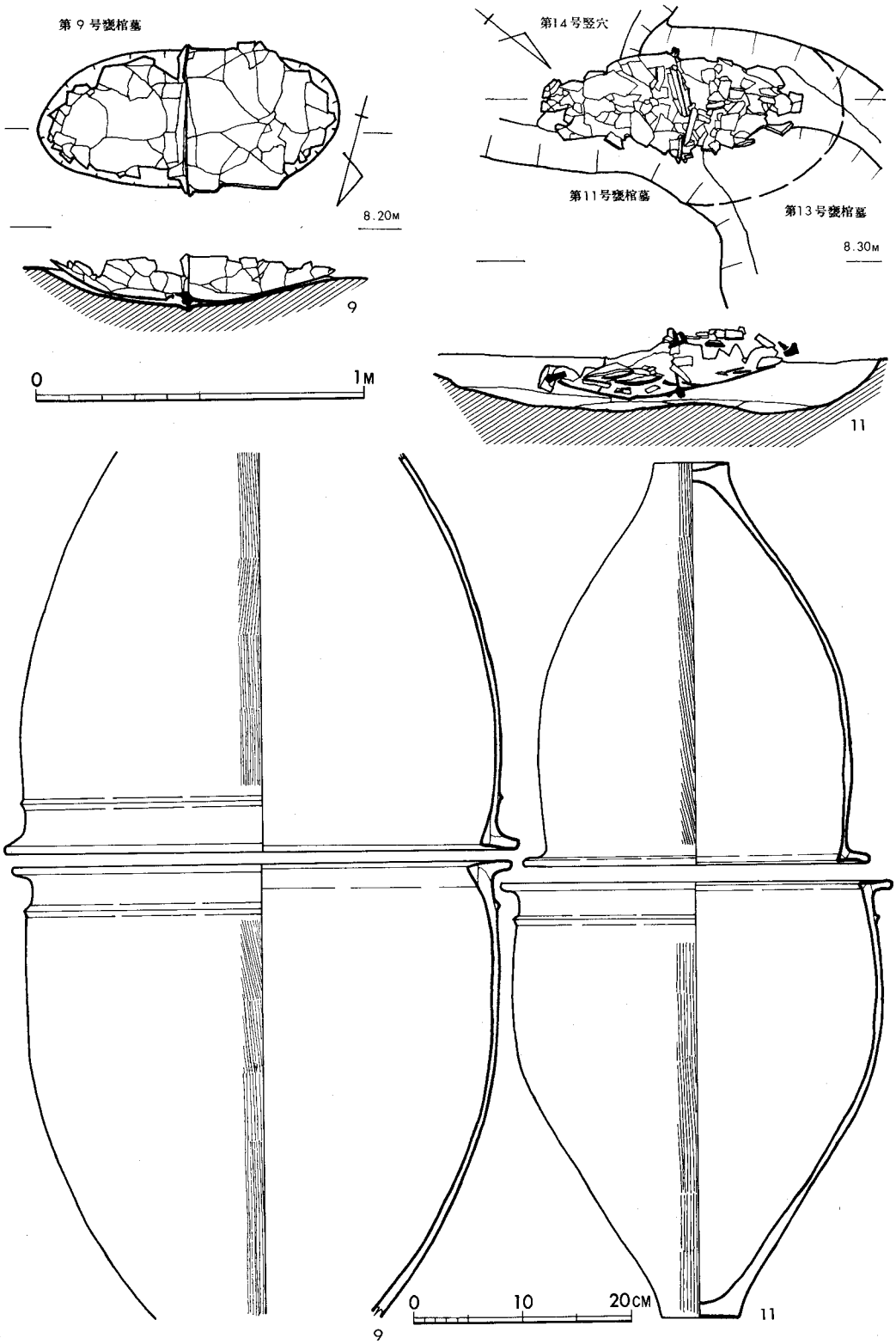


Fig. 3・175　第９号・11号甕棺墓および甕棺実測図

な上げ底を呈する。石英粒砂を含み、焼成良好、暗褐色を呈するが内面の一部暗灰褐色。煤の付着が認められる。口縁33.8cm、高さ41.7cm中期初頭に位置づけられよう。

第13号甕棺墓（Fig.3・176）

墓坑が第11号甕棺墓の墓坑から切られている。大部分削平されており、棺は壺と甕の接口である。上甕である壺は後世のピットによりほとんど現形をとどめていない。主軸はN－39°－Wで傾斜は－2°である。

上甕は胴上部から上を打ち欠いた壺で、胴部に一条の三角突帯を巡らす。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、外面は黒色で一部黄褐色。内面は黄褐色。

下甕は逆「L」字状口縁をもつ甕で上面がくぼむ。口唇部に刻目を施し、口縁下に二条の三角突帯を巡らす。口縁周辺から突帯下まで横なで調整。それ以下の外面縦刷毛目調整。煤の付着が認められる。底部は上げ底。石英粒砂を含み、焼成良好。外面暗褐色、一部黄褐色内面は黄褐色を呈する。中期前葉であろう。

第14号甕棺墓（Fig.3・177）

壺であるが、大部分削平されているために復元不可能。

第15号甕棺墓（Fig.3・177）

大部分を削平されている。棺は甕2個の接口で、墓坑底面にほとんど接して埋置されている。主軸をS－Nに向け、2°の傾斜をもつ。

上甕は逆「L」字状口縁をもつ甕で内唇が下がる。口縁下に一条の三角突帯を巡らすが、他の甕と比べて突帯の位置が若干下がり気味である。底部も口縁部と比較して大きく、全体としてずんぐりとした印象を与える。石英粒砂を含み、焼成良好，赤褐色を呈するが一部黒褐色。器面があれているため、調整はよくわからない。口径34.6cm、高さ37cm。

下甕はやや厚めの口縁が逆「L」字状を呈する甕で内唇は未発達で若干下がる。口縁直下に一条の三角突帯を巡らす。口縁周辺から突帯下まで横なで調整、それ以下は刷毛目調整。煤の付着が認められる。底部は上げ底。石英粒砂を含み、焼成良好、外面暗褐色、内面赤褐色を呈する。中期前葉。

第16号甕棺墓（Fig.3・177）

大部分削平されている。棺は上甕が壺、下甕が甕の呑口で、墓坑の底面にほとんど接して埋置されている。主軸はN－4°－Wの方向で、5°の傾斜をもつ。

上甕は壺の肩部以上を打ち欠いたもので、胴部に一条の三角突帯を巡らす。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、外面暗褐色、内面黒褐色を呈する。推定径打ち欠き部で20.4cm、胴部最大34.6cm。器面があれているため器面調整は不明。

下甕は，逆「L」字状口縁をもつ甕で、上面がくぼむ。内唇に若干の発達を認めるが、中期

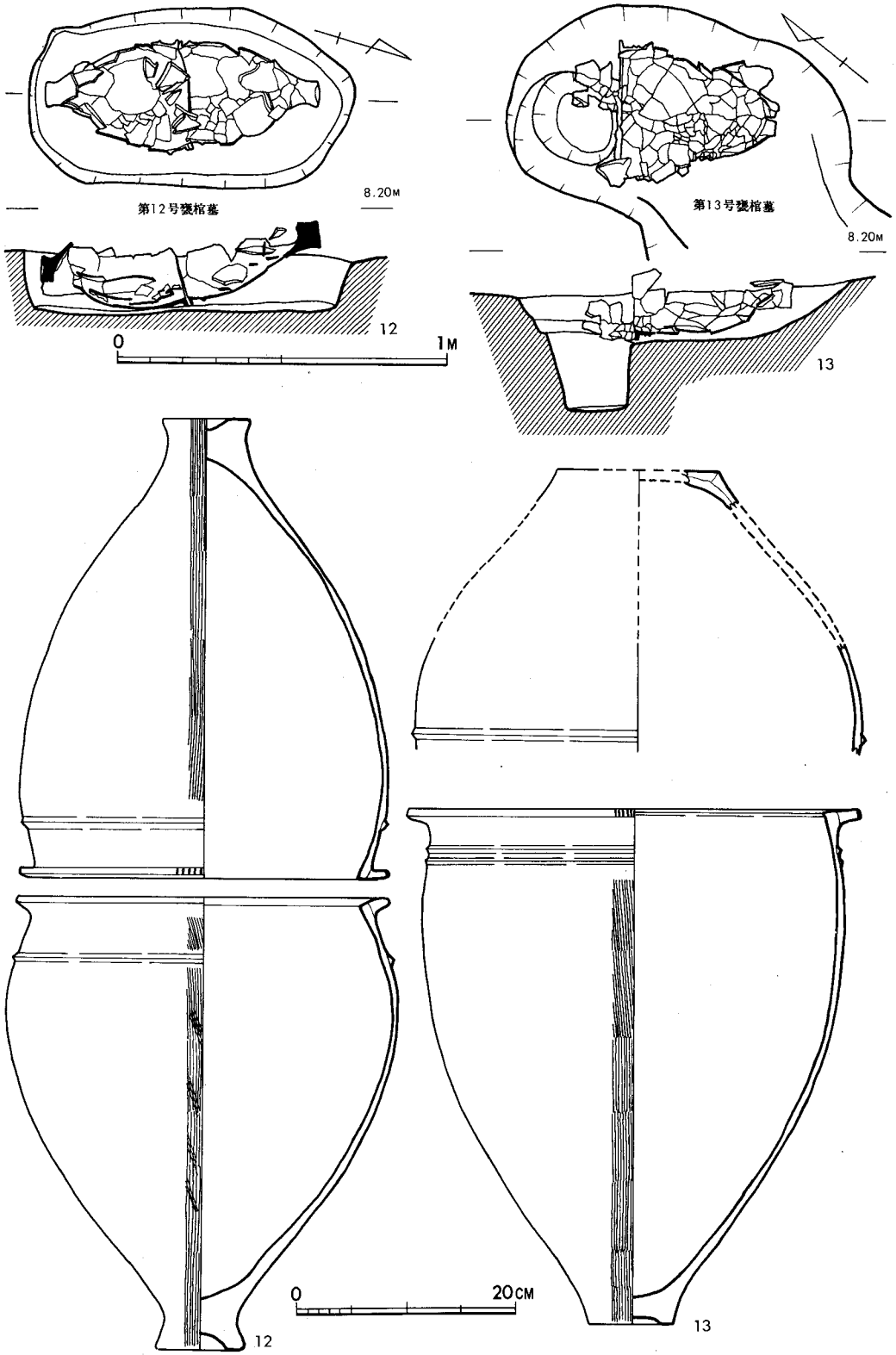


Fig.3・176　第12号・13号甕棺墓および甕棺実測図

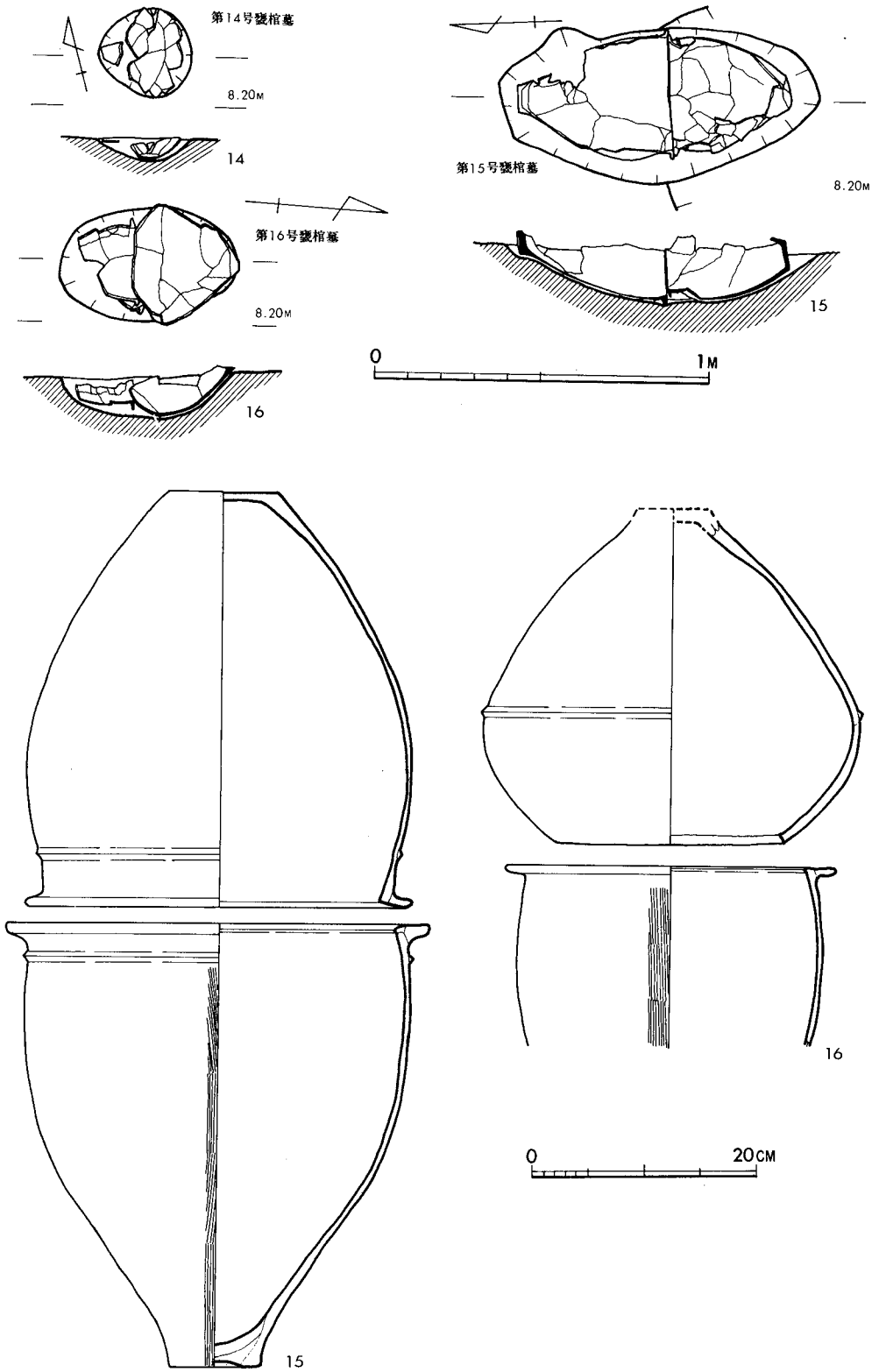


Fig. 3・177　第14号・15号・16号甕棺墓および甕棺実測図

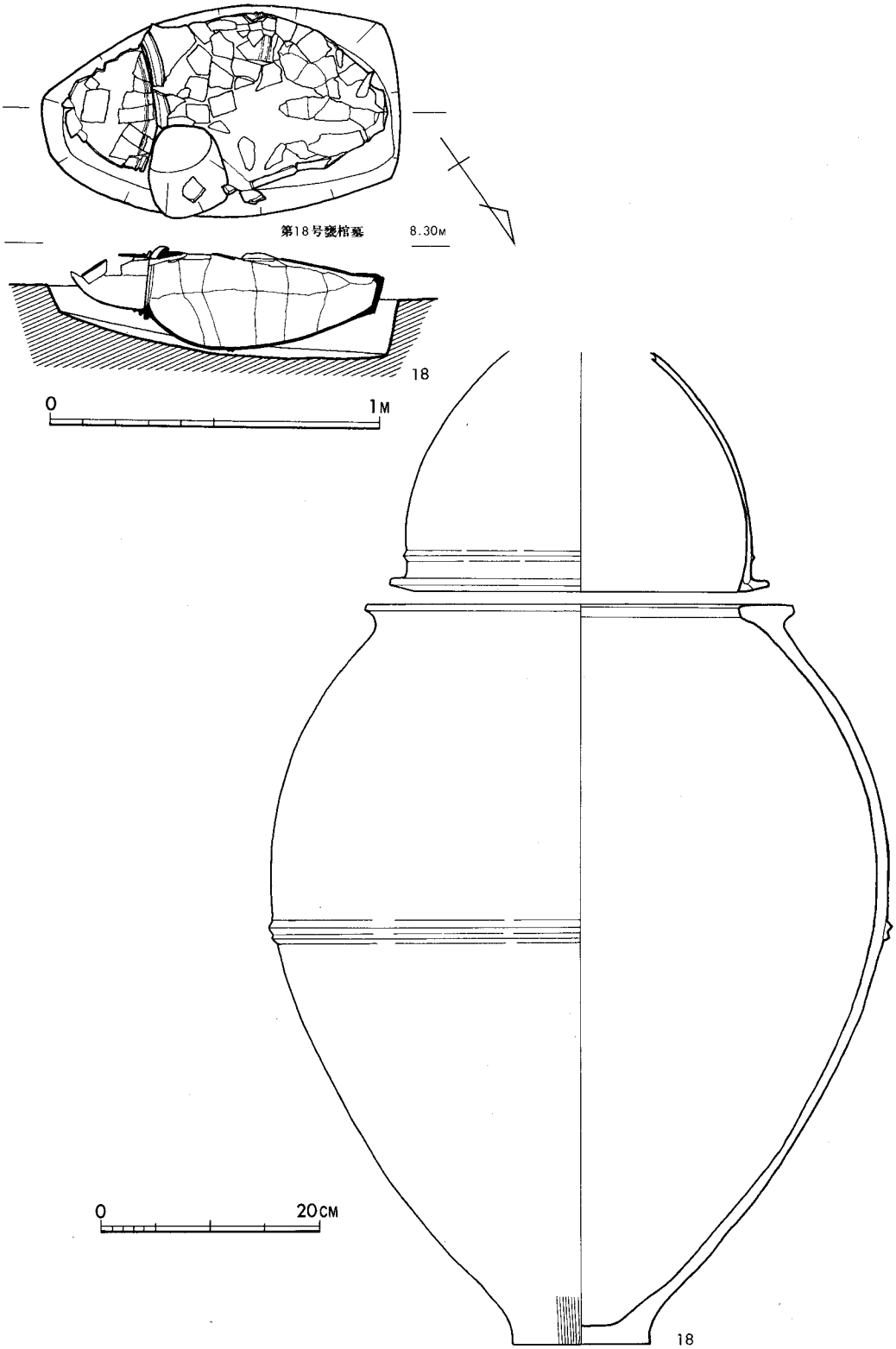


Fig. 3・178　第18号甕棺墓および甕棺実測図

中葉の甕ほどではない。口縁周辺は横なで調整、それ以下は縦刷毛目調整。石英粒砂を含み、焼成良好、外面赤褐色内面淡褐色。中期前葉。

第18号甕棺墓（Fig.3・178）

墓坑の大部分と、上甕の底部を削平され、また下甕の一部を後世のピットによって攪乱されている。棺は鉢と甕の接口で、主軸をＳ－56°－Ｅに向け、傾斜4.5°で埋置される。

上甕は逆「Ｌ」字状口縁をもつ鉢で、口縁外唇が下がる。口縁下に三角突帯一条が巡る。口縁周辺から突帯下まで横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、赤褐色を呈し、焼成良好。口径34.2cm。

下甕は口縁がすぼまり胴部の張る器形をもつ甕で、口縁内唇が発達する。胴部には一条の複合突帯、いわゆる「Ｍ」字状突帯が巡る。口縁部周辺と、突帯貼付部は横なで調整。底部付近は縦刷毛目調整。胎土に砂、石英粒を含み、焼成良好。外面は褐色、赤褐色暗褐色で一部黒変。内面は黒色で一部灰色。口径39cm、胴部最大56cm、高さ68.9cm。中期中葉であろうか。

第19号甕棺墓（Fig.3・179）

第１号甕棺墓の墓坑埋土中に存在する。Ｓ－12°－Ｗを向くと推定されるが、大部分を削平され甕の胴部のみ残存するために復元不可能。第１号甕棺墓が中期中葉であるため、この甕棺は中期中葉か、それ以降のものであろう。

第20号甕棺墓（Fig.3・179）

後世のピット攪乱のため原位置には底部のみしか残存しない。口縁部は後世ピットの中から出土した。甕の単棺と推定されるが、定かではない。Ｓ－29°－Ｗを向き、５°の傾斜で埋置される。

甕は胴部を欠失するが、口縁内唇は下がるが発達していない。外面は刷毛目調整。底部は上げ底。石英粒砂を含み、焼成良好、赤褐色を呈する。推定口径32cm、推定高36cm。中期前葉であろう。

第23号甕棺墓（Fig.3・180，3・181，PL.XVII－7）

本遺跡では比較的残存度の良いものである。第98号竪穴の埋没後に埋置されたもので、墓坑の一部は第97号竪穴の一部を切っていた。棺は同じような甕２個を接口させたもので、方向はＳ－11°－Ｗを向き、傾斜は２°でほぼ水平に近い。

両甕ともにやや肥厚した口縁が逆「Ｌ」字状を呈し、上面は若干くぼむ。口縁下に一条の三角突帯を巡らし、上甕は口縁下に縦刷毛目調整し口縁周辺と、突帯の貼付部を横なで調整。そのため、口縁と突帯の間に刷毛目が残る。下甕は口縁周辺から突帯貼付部まで横なで、その下は縦刷毛目調整。両甕とも胴部に煤の付着が認められ、底部は上げ底を呈する。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。上甕は赤褐色、黄褐色。下甕は赤褐色、暗褐色。上甕口径38.6cm、高

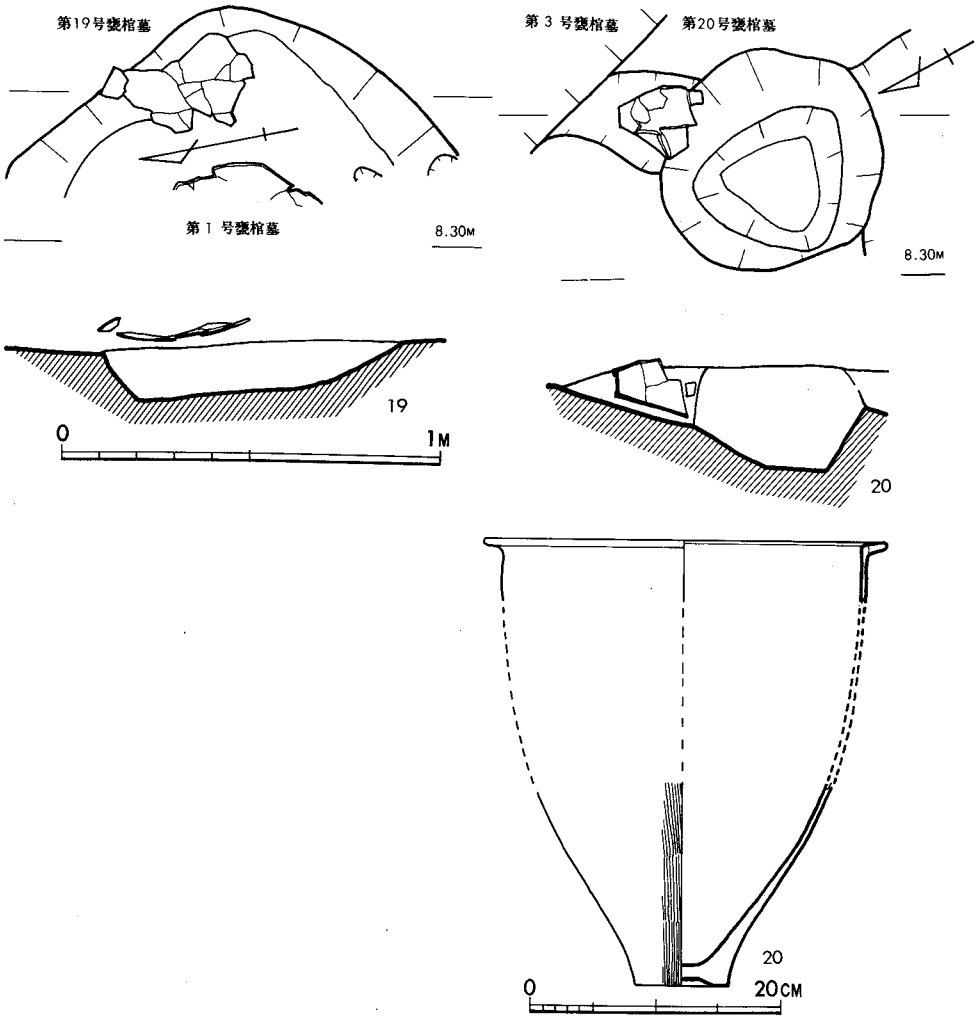


Fig.3・179　第19号・20号甕棺墓および甕棺実測図

さ51.7cm。下甕口径41.6cm、高さ52.5cm。中期中葉に比定されよう。

第25号甕棺墓（Fig.3・180, 3・181）

第81号竪穴埋没後に埋置されたものである。ほとんど削平されており、２個の甕の接口部の一部しか残存していない。方向はＳ－53°－Ｅを向き、５°の傾斜をもつ。

上・下甕とも同様な器形をもつ。口縁内唇のわずかに発達した逆「Ｌ」字状口縁で、口縁外唇が下がる。器面があれているため調整不明。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好，赤褐色を呈する。推定口径は上甕が29.4cm、下甕30cm。中期中葉であろうか。

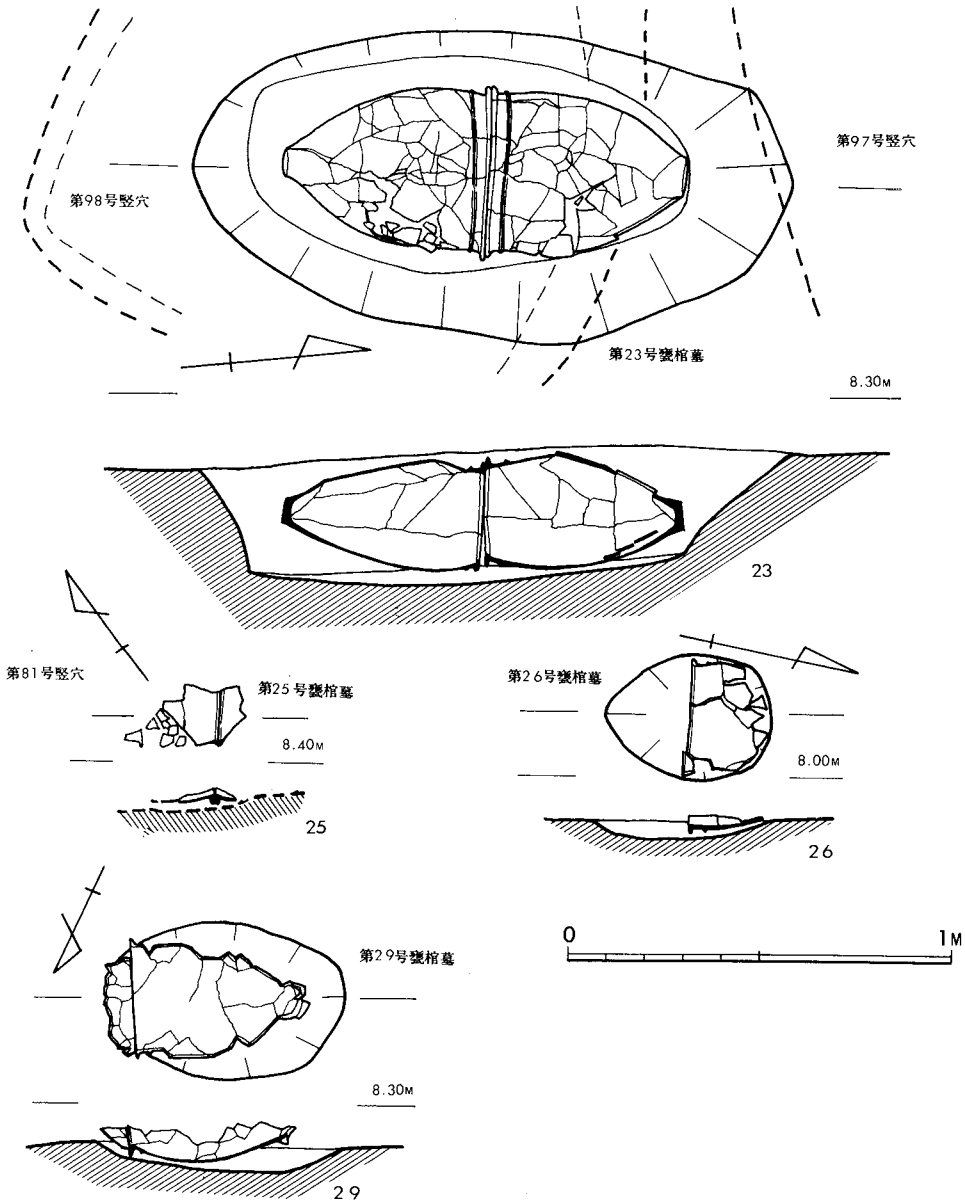


Fig.3・180　第23号・25号・26号・29号甕棺墓実測図

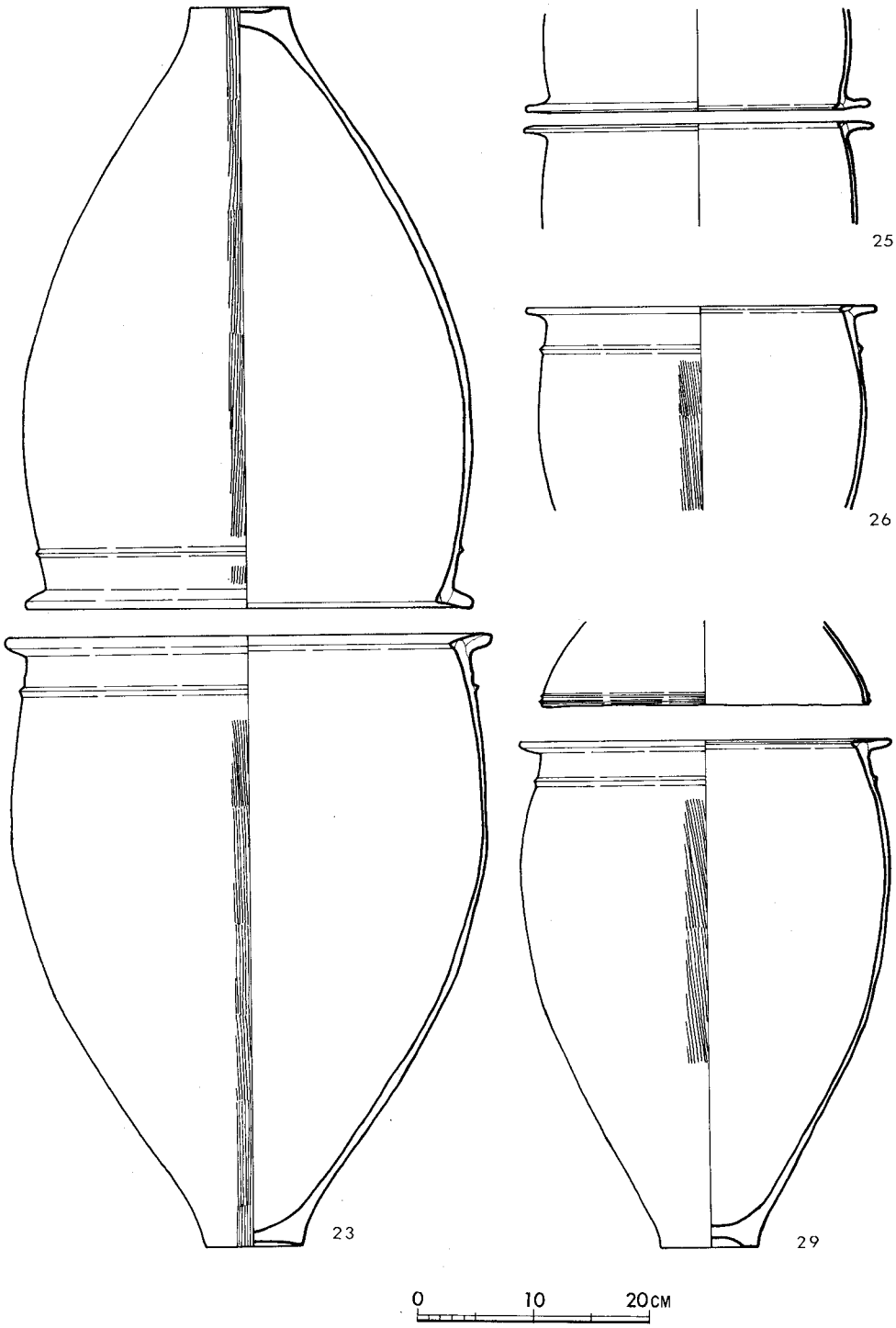


Fig.3・181　第23号・25号・26号・29号甕棺実測図

第26号甕棺墓（Fig.3・180, 3・181）

大半を削平されている単棺の甕である。方向はS－12°－Eを向き、ほぼ水平に埋置する。

甕は逆「L」字状口縁をもち、口縁内唇がわずかに発達する。口縁上端は水平となる。口縁下に一条の三角突帯が巡り、口縁周辺から突帯貼付部まで横なで調整。それ以下は縦刷毛目調整。石英粒砂を含み、焼成良好、暗褐色を呈する。推定口径29.8cm。中期中葉のものであろう。

第27号甕棺墓（Fig.3・182, PL.XVIII－4）

第81号竪穴埋没後に、上甕に甕、下甕に壺を接口にして埋置している。上甕の胴下半部下には、他の甕の口縁部破片を差し込んでいた。上甕のその部位が破損していたわけではなく、底部を持ち上げるためのものと推定される。主軸はS－84.5°－Eを向き、傾斜は19°。

上甕は、未発達の口縁部外唇に刻目を施し内唇の下がる甕で、全体に箆で研磨調整した痕が残る。若干の上げ底を呈する。石英粒砂を含み、焼成良好、外面暗褐色。口径28cm、高28.6cm。

下甕は外反する肥厚した口縁をもつ壺で、口縁外唇の上下端に刻目を施す。口縁外面は横なで調整。肩部には二条の低い三角突帯を巡らす。頸部、胴部および内面口縁下は刷毛目調整。底部は上げ底。石英粒砂を含み焼成は若干良くない。淡赤褐色で一部黒変。口径31cm、胴部径48.6cm、高さ44.2cm。

上甕下にあった甕は、未発達の口縁部をもち、口縁下は縦刷毛目調整。石英粒砂を含み焼成良好、外面暗褐色、内面黄褐色。推定口径27.2cm。中期初頭。

第29号甕棺墓（Fig.3・180, 3・181）

大半を削平されている。胴上半部打ち欠きの壺と、甕の接口で、N－63°－Eの方向、ほぼ水平の位置に埋置されている。

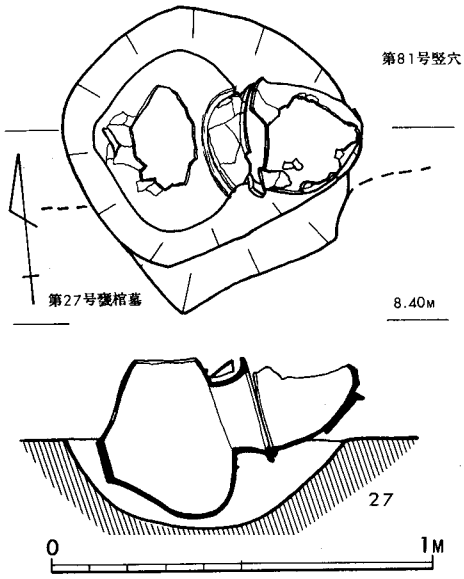
上甕の壺は胴部に巡らされた二条の低い三角突帯より上部を打ち欠く。器面があれているために器面調整はわからない。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。淡褐色を呈する。推定径打ち欠き部で28cm。

下甕は、逆「L」字状口縁をもち、上面はくぼむ。口縁内唇は若干発達し、やや下がる。口縁下に一条の低い三角突帯を巡らし、口縁周辺から、突帯貼付部まで横なで調整。それ以下は刷毛目調整。煤の付着が認められる。底部は上げ底を呈する。石英粒砂を含み、焼成良好、暗褐色を呈する。推定口径32cm、高さ44cm。中期中葉であろう。

第31号甕棺墓（Fig.3・183, PL.XVII－5）

墓坑は黒色土層の中にあったためほとんど確認できなかったが、棺自体の残存状態は良い。上甕が鉢、下甕が甕の接口で，S－50°－Eの方向に傾斜37°で埋置されている。

上甕は鉢で逆「L」字口縁をもち、口縁外唇が下がる。口縁下に一条の三角突帯が巡る。口縁周辺から、突帯貼付部まで横なで調整。若干の上げ底をなす。胎土は石英粒砂を含み、焼成良好、褐色を呈し、一部焼成時の黒変がある。口径40.6cm、高21.8cm。



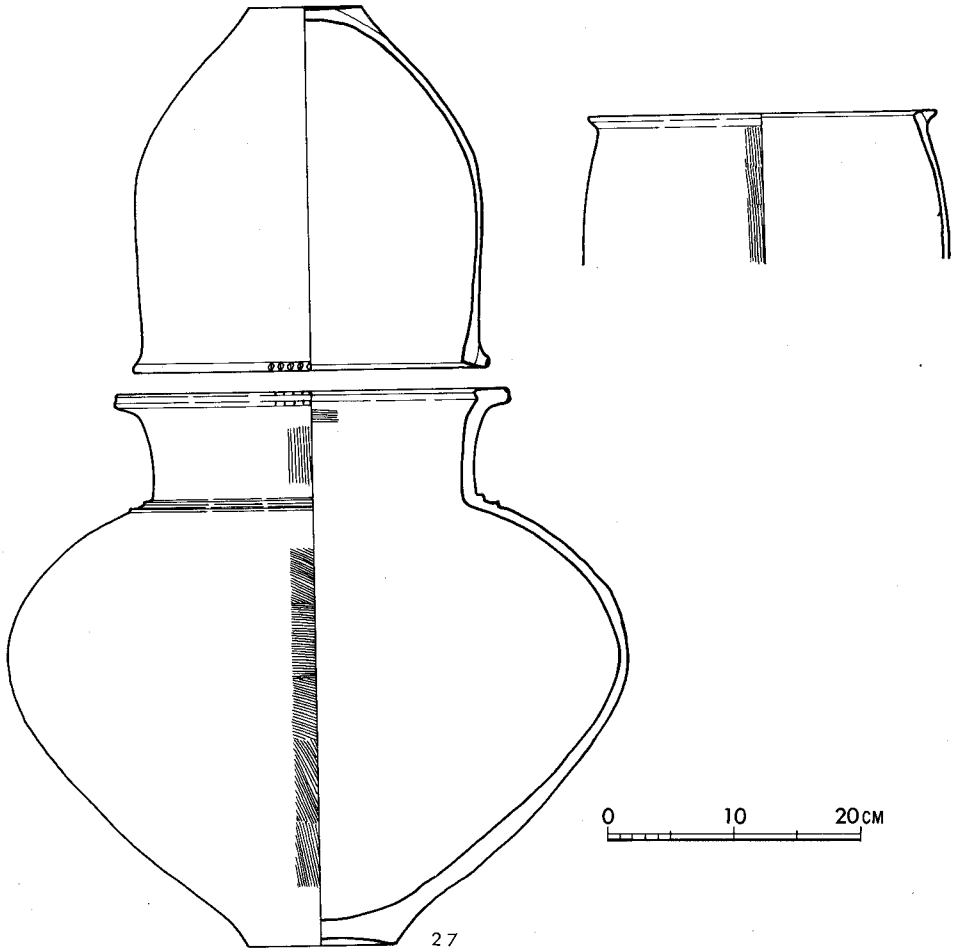


Fig.3・182　第27号甕棺墓および甕棺実測図

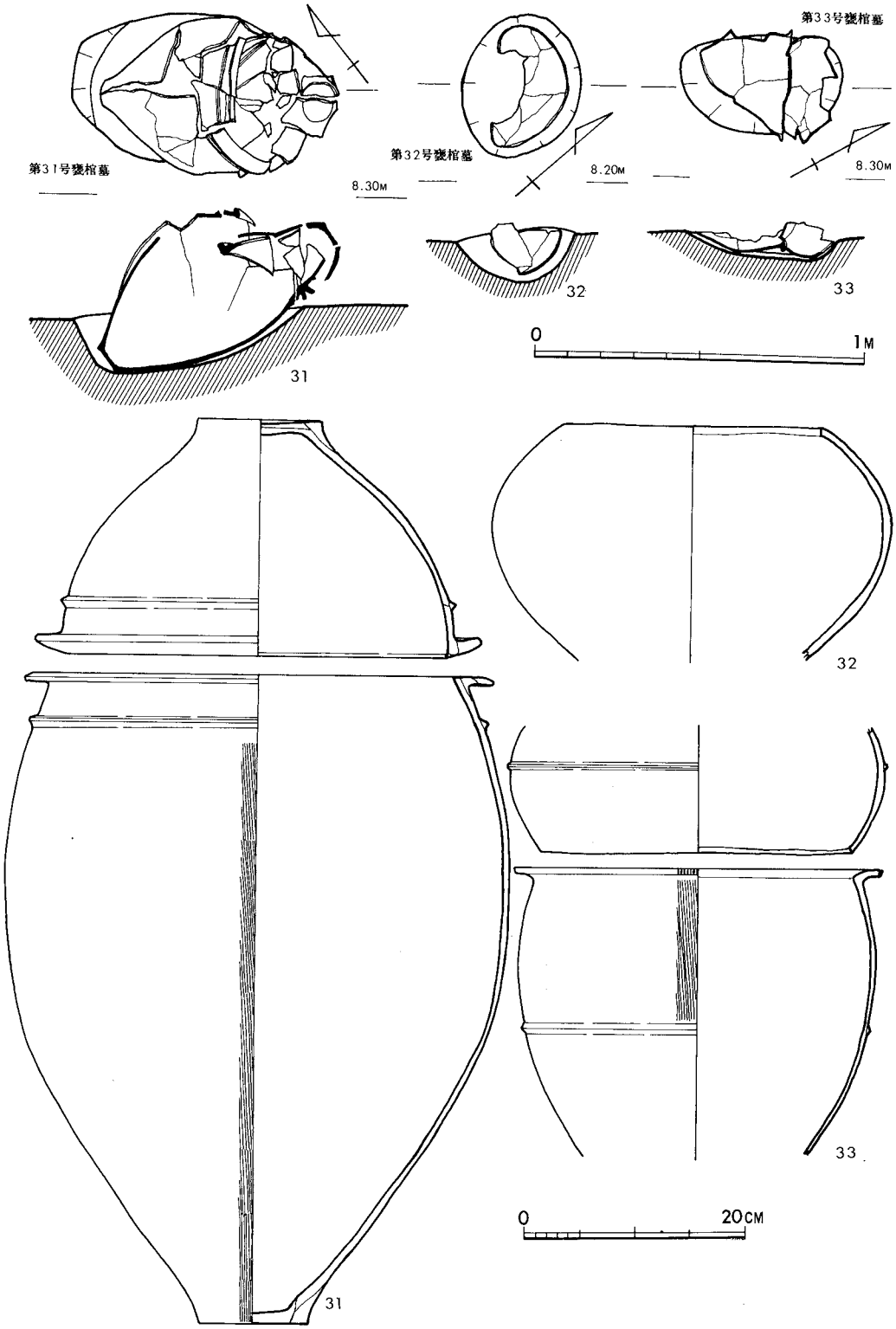


Fig.3・183　第31号・32号・33号甕棺墓および甕棺実測図

下甕は逆「Ｌ」字状口縁の口縁外唇が若干下がり、胴部の張りの強い甕形土器である。口縁下に台形に近い一条の突帯が巡る。口縁周辺から突帯貼付部まで横なで調整。それ以下は刷毛目調整。煤の付着が認められる。底部は平底である。石英粒砂を含み、焼成良好。外面暗褐色,一部赤褐色、内面赤褐色、灰褐色。口径42.6cm、高さ60cm。中期中葉であろう。

第32号甕棺墓（Fig.3・183）

ほとんど削平されている。肩部以上を打ち欠いた壺の単棺と推定される。Ｓ－42°－Ｗの方向で、－15°の傾斜で埋置されていた。

壺は肩部以上を打ち欠いている。突帯はみられない。石英粒砂を胎土に含み、焼成はやや不良。暗褐色を呈するが、一部焼成時の黒変。推定口径打ち欠き部で24cm、胴部最大36cm。中期前葉のものであろう。

第33号甕棺墓（Fig.3・183）

大部分を削平されている。上甕の打ち欠きの壺と下甕の甕を接口させ、Ｎ－30.5°－Ｅの方向で、ほぼ水平に埋置されている。

上甕は肩部以上を打ち欠いた壺で、胴部に一条の三角突帯を施すが、器面があれているため台形に近い形状となっている。突帯貼付部位は横なで調整。石英粒砂を胎土に含み、焼成良好、暗褐色を呈する。推定口径打ち欠き部で28.8cm、胴部最大径35cm。

下甕は強く屈折して外反する口縁外唇に刻目を施し、胴部には一条の低く幅広い三角突帯を巡らす。外面は刷毛目調整。器面があれているため突帯より下は不明。胎土に砂、石英粒砂を多量に含み、焼成もあまり良くない。外面赤褐色、内面灰褐色を呈する。中期前葉であろう。

第34号甕棺墓（Fig.3・184）

大部分を削平されている。甕２個を接口させて、主軸をＮ－Ｓに向け、傾斜４°で埋置する。

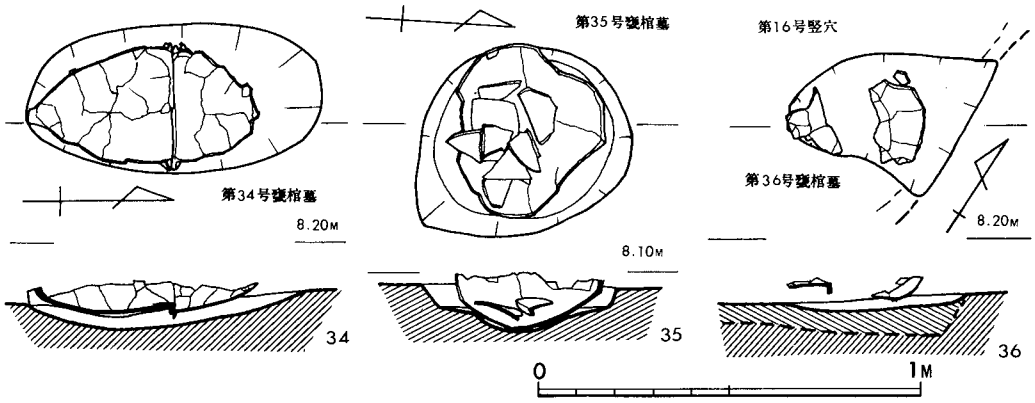
上甕は逆「Ｌ」字状口縁をもつが口縁内唇は未発達。胎土には細砂粒を含み、焼成は少しよわい。黄灰色を呈する。推定口径30cm。

下甕も口縁内唇未発達の逆「Ｌ」字状口縁をもつ。口縁部周辺は横なで調整。口縁部直下からは縦刷毛目調整。外面全体と内面口縁下まで丹塗りの痕跡がある。細砂粒を含み、焼成は良くない。淡黄褐色を呈する。推定口径52.2cm、推定高35.5cm。中期前葉か。

第35号甕棺墓（Fig.3・184）

上が甕、下が壺で接口と推定されるが、大半が削平されているため、下甕が原位置に残っているだけで、上甕は口縁の一部が下甕の中に落ち込んでいる状態で検出された。主軸はＳ－３°－Ｅを向き、傾斜４°で埋置されていた。

上甕は内唇の発達しない逆「Ｌ」字状口縁をもつ甕で、内唇が下がり、胴部の張りが強い。口縁周辺は横なで調整。外面は縦刷毛目調整。石英粒砂を含み、焼成良好。外面暗褐色、内面



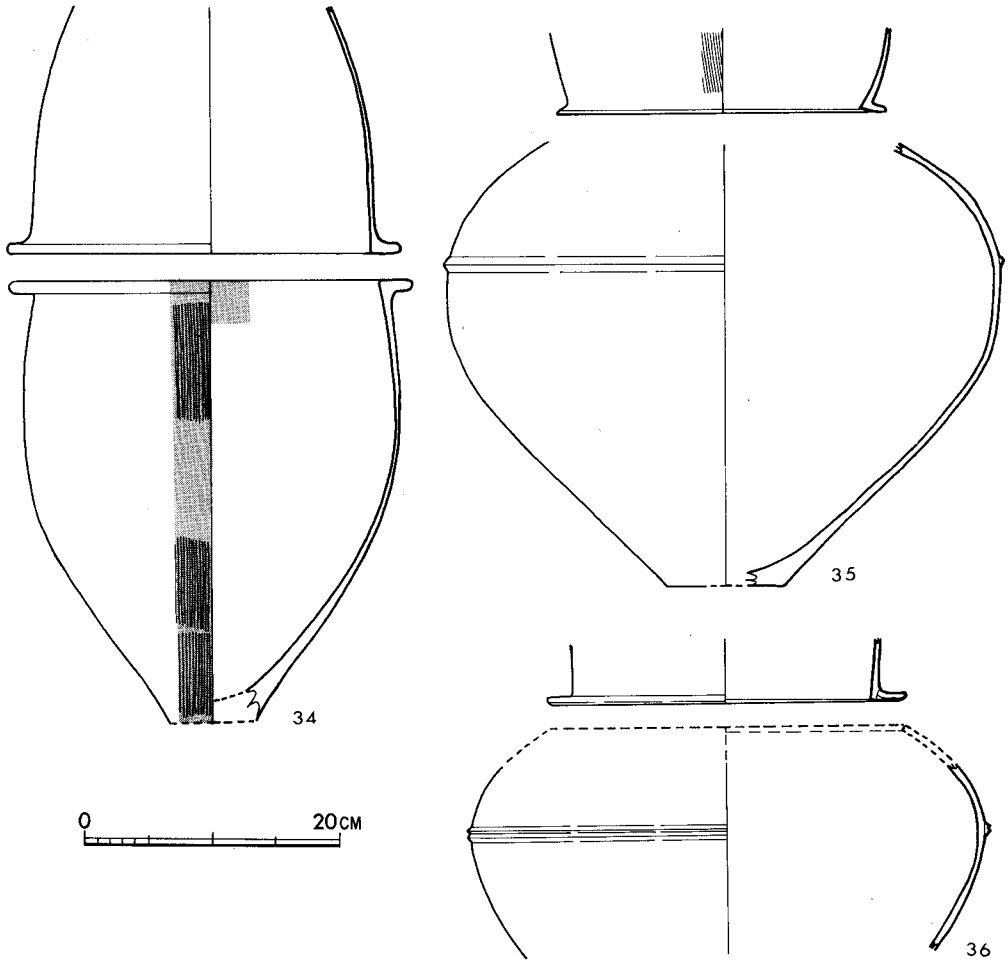


Fig.3・184　第34号・35号・36号甕棺墓および甕棺実測図

は上部黄褐色、下部黒褐色。口径推定26cm。

下甕は、肩部以上打ち欠きの壺で、胴部に一条の三角突帯が巡る。器面があれているため調整は不明。石英粒砂を含み、焼成良好。外面赤褐色、一部黒褐色。内面淡赤褐色。推定最大胴径44cm。中期前葉か。

第36号甕棺墓（Fig.3・184）

第16号竪穴のの埋没後に埋置されている。大半を削平されているために、残存状態では上甕と下甕は離されてしまっているが上に甕、下に壺をおそらく接口にして埋置したと思われる。方向はＳ－42°－Ｗを向き、傾斜はほぼ水平である。

上甕は、内唇未発達の逆「Ｌ」字状口縁をもつ甕で、外唇が下がる。口縁周辺は横なで調整。石英粒砂を含み、焼成はややあまい。赤褐色を呈する。推定口径28cm。

下甕は胴上半部を打ち欠いた壺であるが、打ち欠き部も欠失していた。胴部に一条の「Ｍ」字状突帯を巡らす。石英粒砂を含み、焼成良好。外面暗褐色、内面淡暗褐色を呈する。中期中葉であろう。

第37号甕棺墓（Fig.3・185，PL.XVIII－2）

墓坑の大部分を削平され、下甕の中央部に後世のピットが営まれていた。上は壺、下は甕を、Ｓ－25°－Ｅの方向と傾斜2.5°に接口させて埋置していた。

上甕は、壺の肩部以上を打ち欠いたもので、張った胴部から、直線的にすぼみ、若干丸味を帯びた底部へつながる。石英粒砂を含み、焼成良好、暗褐色を呈するが一部焼成時の黒変。口径打ち欠き部で22.4cm、胴部最大37.2cm、高さ30cm。

下甕は、内唇未発達で下がり、外唇もそれほど発達はしない逆「Ｌ」字状口縁をもつ甕である。口縁直下に一条の三角突帯が巡り、口縁周辺から突帯貼付部まで横なで調整。それ以下縦刷毛目調整。煤の付着が認められる。底部は特徴的な上げ底。石英粒砂を含み、焼成良好。赤褐色、暗褐色を呈するが、内面の一部黒褐色。中期初頭であろう。

第40号甕棺墓（Fig.3・185）

第17号竪穴埋没後に埋置されていた。大半を削平されているが、上に甕、下に打ち欠きの壺を、覆口の状態でＳ－37°－Ｅの方向に、４°の傾斜で埋置する。

上甕は口縁が逆「Ｌ」字状を呈する甕で、内唇の発達はそれほどなく、外唇は若干下がる。口縁周辺は横なで調整。それ以下は縦刷毛目調整。石英粒砂を含み、焼成良好。外面暗褐色、内面淡暗褐色で一部黒褐色。

下甕は胴部の上半部肩部寄りを打ち欠いた壺で若干の上げ底を呈するが、器面があれているため調整はよくわからない。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、黒褐色を呈する。口径打ち欠き部で19cm、胴部最大径22.6cm、高さ21cm。中期前葉。

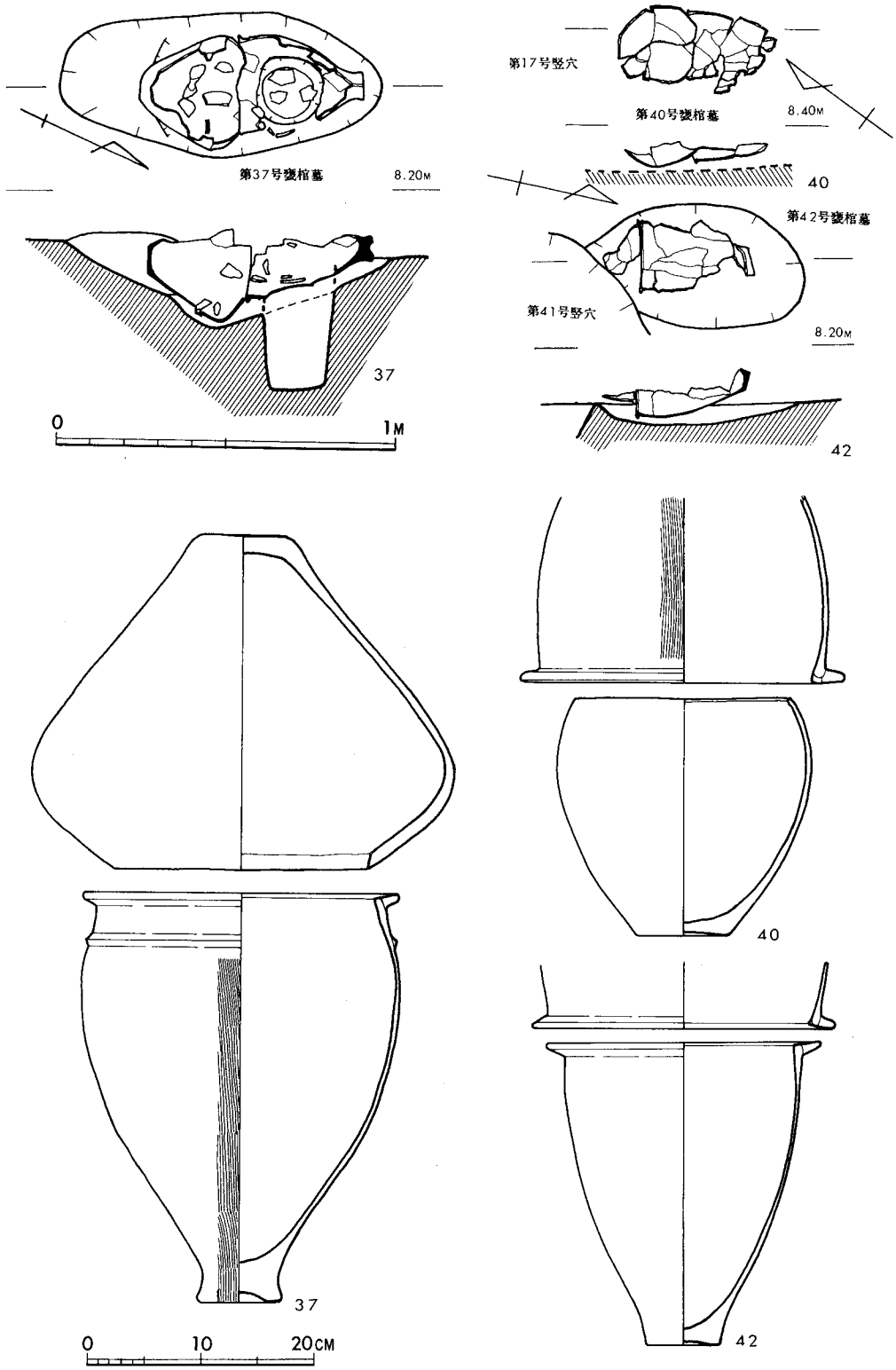


Fig.3・185　第37号・40号・42号甕棺墓および甕棺実測図

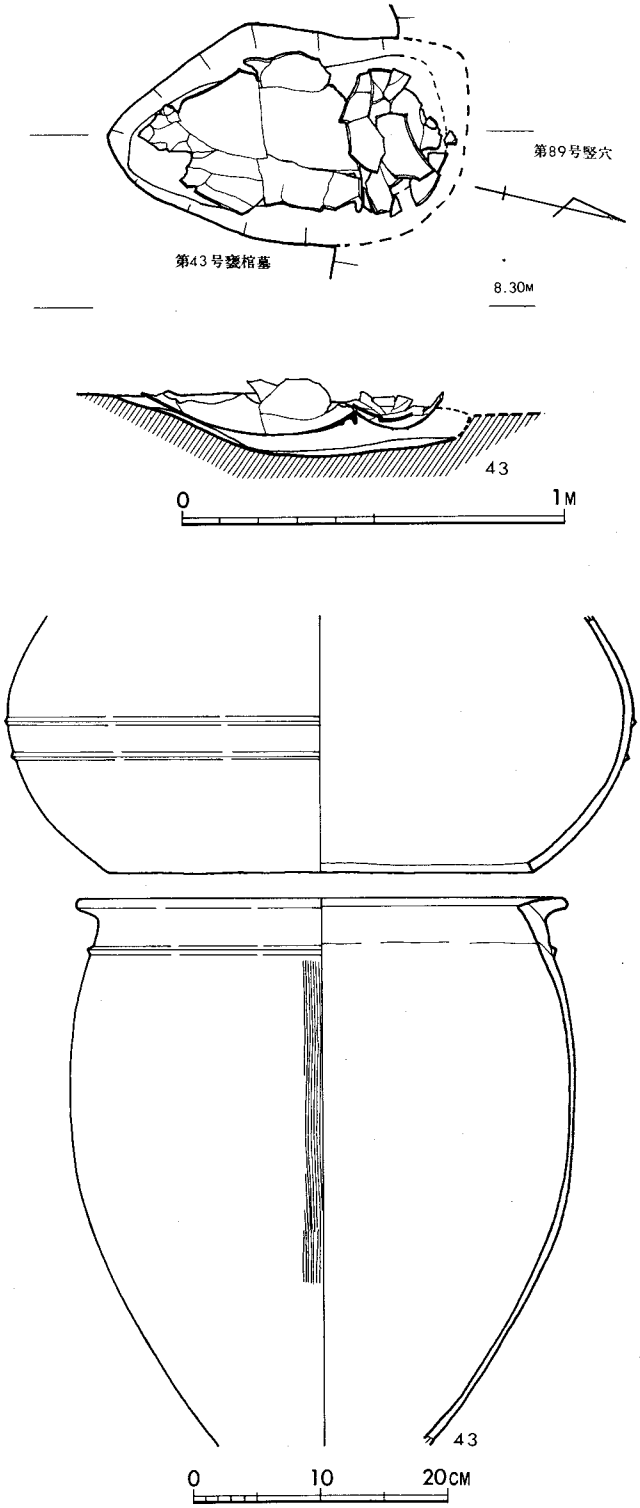


Fig. 3・186　第43号甕棺墓および甕棺実測図

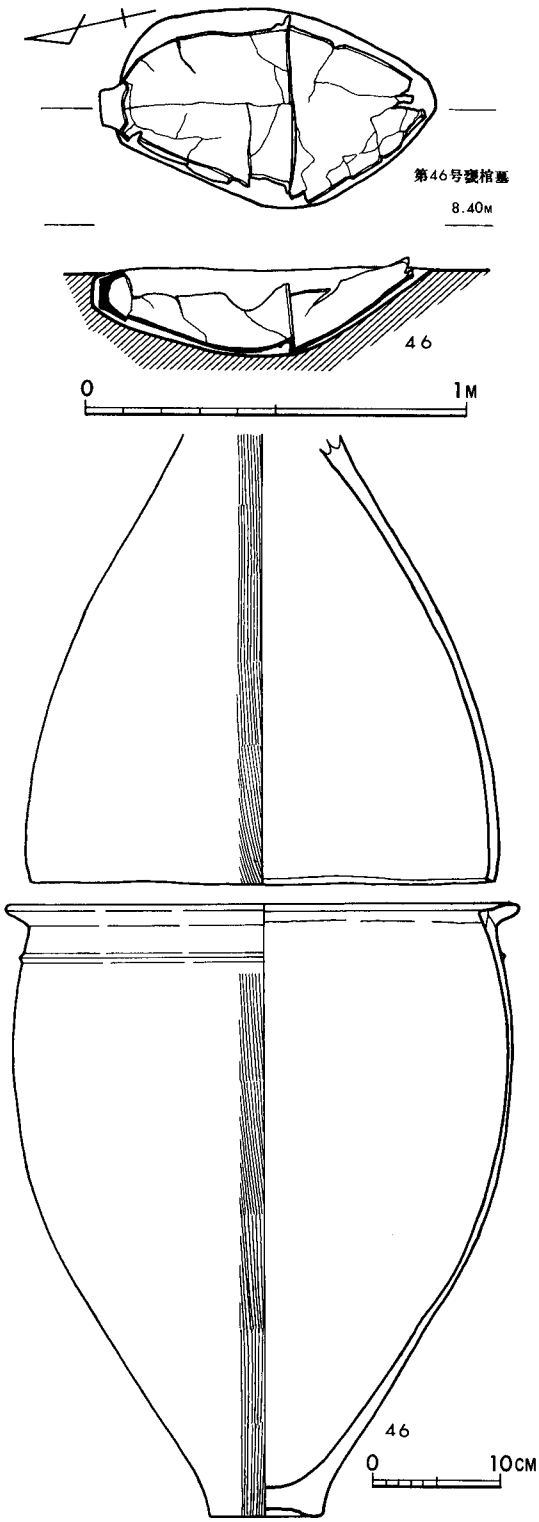


Fig.3・187　第46号甕棺墓および甕棺実測図

第42号甕棺墓（Fig.3・185）

大部分を削平されている。第41号甕棺墓の墓坑と一部が切りあっているが新旧関係は不明であった。甕２個を接口させて、Ｓ－13.5°－Ｅの方向、３°の傾斜で埋置させている。

上甕は、逆「Ｌ」字状を呈する口縁の内唇が若干下がり、未発達である。胴部は張る。石英粒砂を混じ、焼成はややあまい。褐色を呈する。器面があれているため調整は不明。

下甕は、口縁外唇が強く屈し、内唇は未発達で，若干下がる。底部は上げ底を呈する。石英粒砂を含み、焼成はややあまい。褐色を呈する。推定口径24.4cm、高さ27cm。中期前葉であろう。

第43号甕棺墓（Fig.3・186）

第89号竪穴の埋没後に、上を打ち欠きの壺、下を甕の接口にして、方向はＮ－13°－Ｗを向き、ほぼ水平に埋置されている。ほとんど大半を削平されている。

上甕は肩部以上を打ち欠いた壺で胴部に二条の三角突帯が巡る。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。淡暗褐色、赤褐色、黄褐色を呈する。推定口径33.2cm、胴部最大49.2cm。

下甕は、口縁内唇が下がる逆「Ｌ」字状口縁をもつ甕で、口縁下に一条の三角突帯を巡らす。口縁周辺から、突帯貼付部まで横なで調整。それ以下は縦刷毛目調整。煤の付着が認められる。胎土に石英粒砂を含み、外面暗褐色、内面黄褐色を呈する。焼成は良好。推定口径38.6cm。中期前葉か。

第46号甕棺墓（Fig.3・187）

ほとんど削平されている。甕２個（上甕は打ち欠き）を接口させて、Ｓ－12.5°－Ｗの方向、５°の傾斜で埋置している。

上甕は甕の口縁下を打ち欠いたもので、外面縦刷毛目調整。煤の付着が認められる。胎土に石英粒砂を混じ、焼成は良好。外面は暗褐色、黒褐色、淡赤褐色、内面は黒色を呈する。推定口径打ち欠き部で36.6cm。

下甕は，逆「Ｌ」字状口縁をもち、上面が凹み、内唇の下がる甕である。口縁下に一条の三角突帯を巡らし、口縁周辺から突帯貼付部まで横なで調整。それ以下は縦刷毛目調整。煤の付着が認められる。底部は上げ底。石英粒砂を含み、焼成は良好。外面は暗褐色、暗黄褐色、内面は暗黄褐色を呈する。推定口径40cm、高さ48.6cm。中期前葉か。

第47号甕棺墓（Fig.3・188）

第40号竪穴の埋没後に、上を打ち欠きの壺、下を甕の覆口で、Ｓ－17°－Ｗの方向に４°の傾斜で埋置している。

上甕は胴上半部打ち欠きの壺で、胴部に一条の三角突帯を巡らす。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。外面暗褐色、内面灰褐色を呈する。器面があれているため調整は不明。推定口径打ち欠き部で44cm。

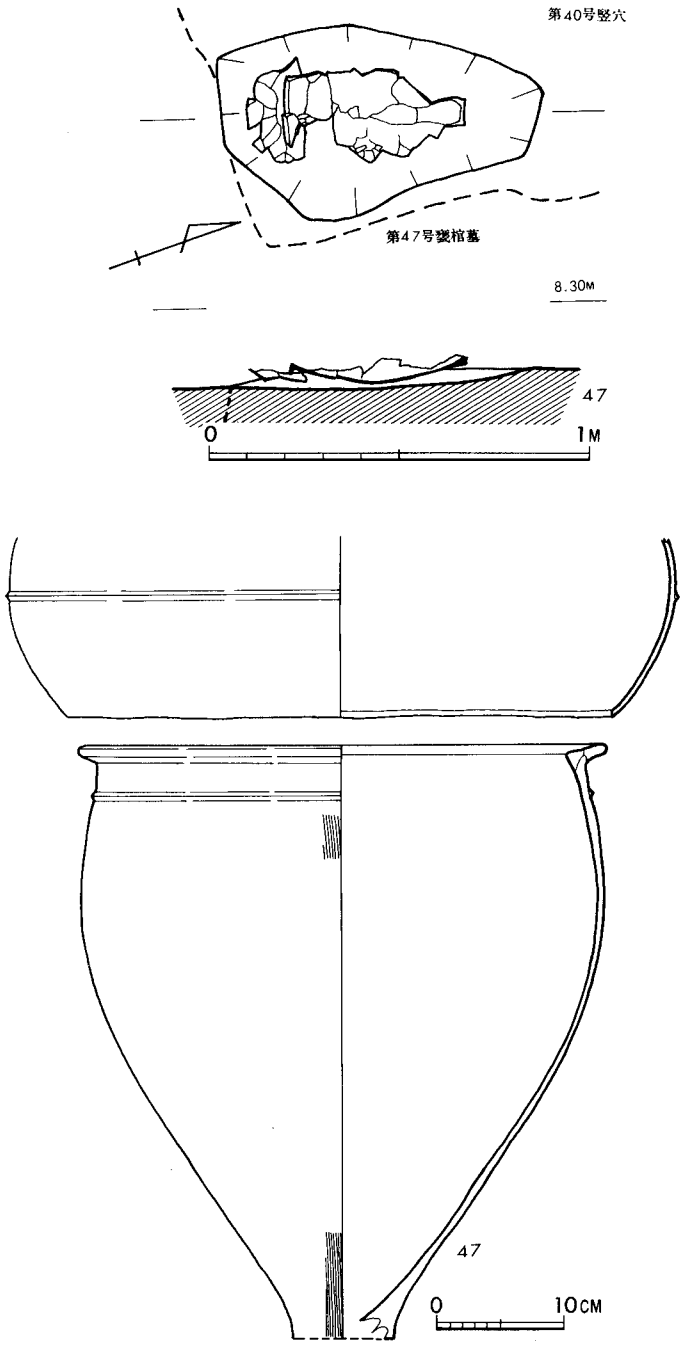


Fig.3・188　第47号甕棺墓および甕棺実測図

下甕は、逆「L」字状口縁をもつ甕で、口縁内唇が下がり、口縁上面は凹む。口縁下に一条の三角突帯を巡らし、口縁周辺から、突帯貼付部まで横なで調整。外面は縦刷毛目調整だが、器面があれているため胴部中頃は不明である。底部は欠失しているが、上げ底と考えられる。石英粒砂を含み、焼成良好。外面暗黄褐色、淡赤褐色、黄褐色、黒褐色、内面黄褐色、黒褐色を呈する。推定口径41.6cm、高さ47cm。中期前葉であろう。

第49号甕棺墓（Fig.3・189, PL.XIX－2）

長さ110cm、幅87cmの隅丸長方形の墓坑内に、胴上半部打ち欠きの壺を倒立させて埋置したも

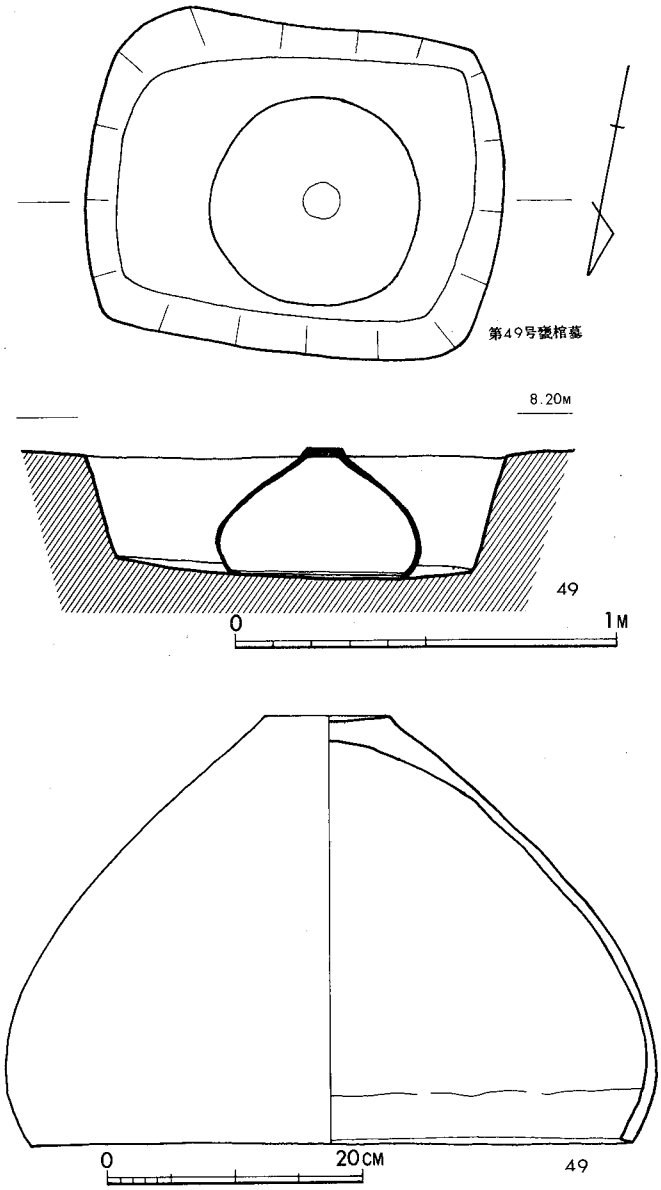


Fig.3・189　第49号甕棺墓および甕棺実測図

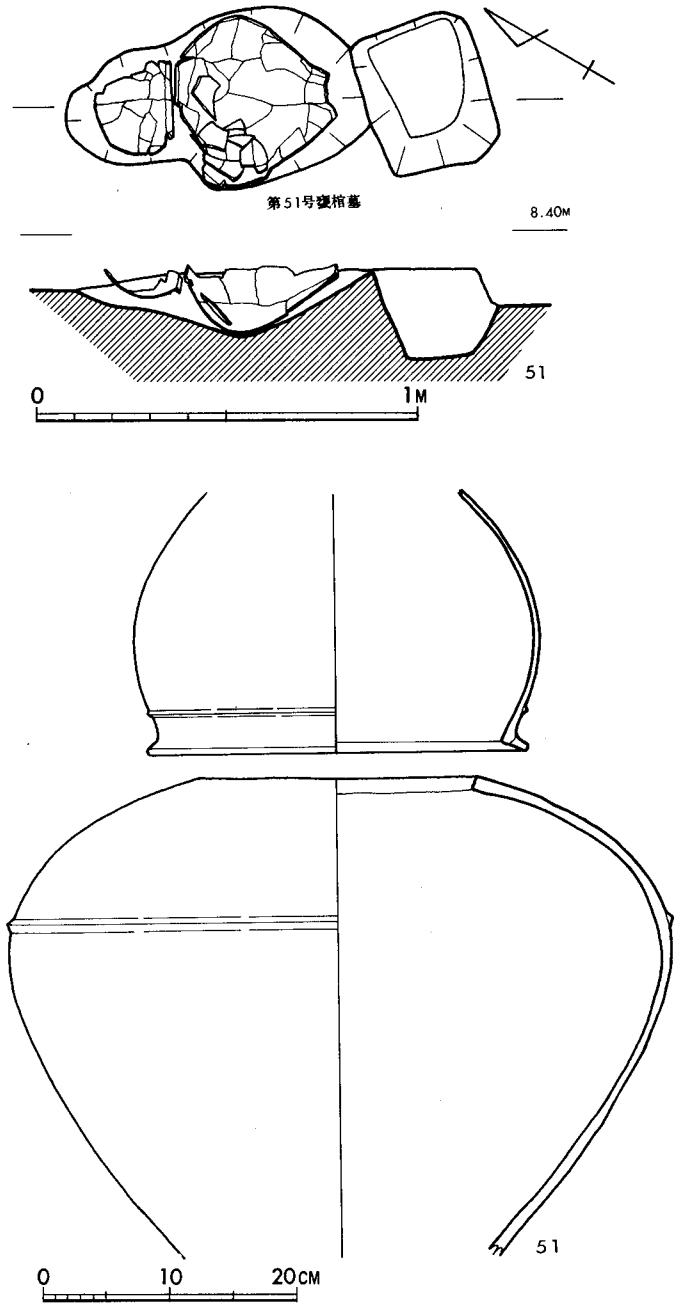


Fig.3・190　第51号甕棺墓および甕棺実測図

のである。墓拡の長軸はＮ－83°－Ｅを向く。壺の下には何らの施設もみられなかった。

壺は、胴上部を打ち欠いたもので、器面は磨研されている。底部は若干上げ底。胴部内面に接合の痕跡である稜が残る。石英粒砂を混じるが胎土は良好。焼成は良好、外面黄褐色、内面赤褐色を呈する。口径打ち欠き部で径46.8cm、高さ34.4cm、胴部最大径51cm。中期前葉と思われる。

第51号甕棺墓（Fig.3・190）

大半を削平されている。また墓坑南端を後世のピットによって切られている。棺は上が鉢、下が打ち欠きの壺でＮ－12.5°－Ｗの方向にほぼ水平に埋置されていた。接口と思われる。

上甕は、逆「Ｌ」字状の口縁と球形の胴部をもつ鉢で、口縁内唇は未発達で下がる。口縁下に一条の三角突帯が巡る。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、黄褐色を呈する。推定口径30cm。

下甕は、肩部以上を打ち欠いた壺で、胴部に一条の三角突帯を巡らす。器面は横篦磨研。胎土に石英粒砂を含み、外面暗褐色、内面淡暗褐色を呈し、焼成良好。推定口径打ち欠き部で22cm、胴部最大径52.4cm。中期前葉か。

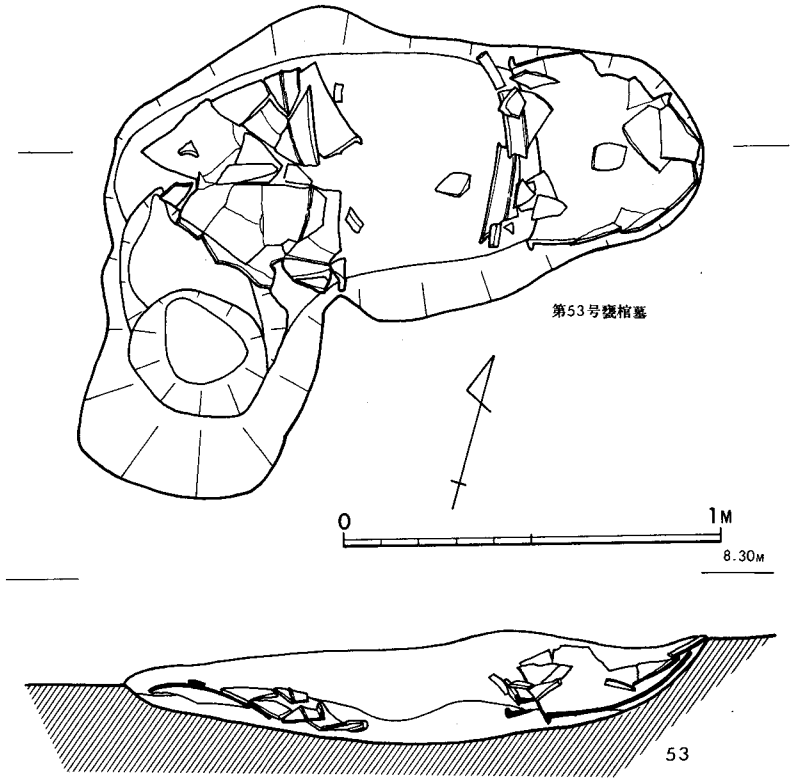


Fig.3・191　第53号甕棺墓実測図

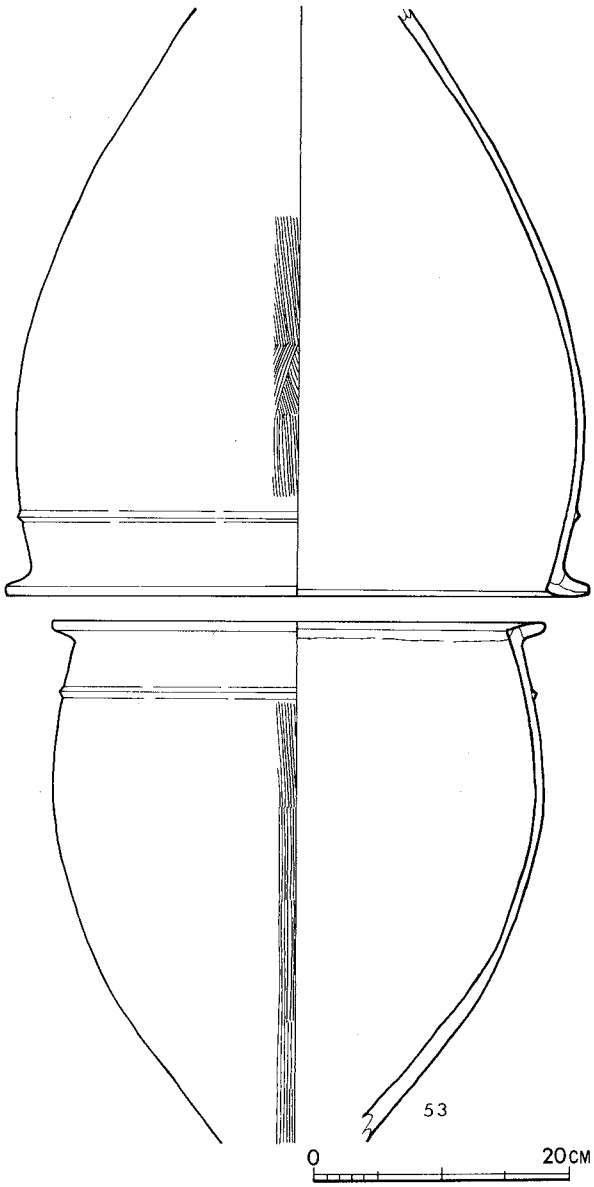


Fig. 3・192　第53号甕棺実測図

第53号甕棺墓（Fig. 3・191, 3・192, PL. XVIII－3）

棺は甕2個であるが、接していなくて約45cm離れている。間には粘土も何も存在しなかった。N－74.5°－Eを向くが、傾斜は上下甕で違うために不明である。

上甕は、逆「L」字状口縁をもつ甕で内唇は発達せず、若干下がる。口縁下に一条の三角突帯が巡る。口縁周辺から突帯貼付部まで横なで調整。それ以下は刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、黄褐色を呈する。焼成は良好。推定口径46cm。

下甕も、逆「L」字状口縁をもち、内唇の発達しない甕で、やはり内唇が下がる。口縁下に一条の三角突帯を巡らし、口縁周辺から突帯貼付部まで横なで調整。それ以下は刷毛目調整。一部に煤の付着が認められる。石英粒砂を含み、焼成良好、黄褐色を呈する。推定口径38.4cm。中期前葉であろう。

第56号甕棺墓（Fig.3･193，3･194）

墓坑の大半を削平されている。棺は甕２個の接口で、Ｓ－２°－Ｅの方向に２°の傾斜で埋置されている。

上甕は肥厚した口縁が逆「L」字状を呈し、若干発達した内唇はやや下がる。口縁下に一条の三角突帯が巡る。外面は縦刷毛目調整だが口縁周辺と突帯貼付部は横なで調整。煤の付着が認められる。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、外面暗褐色、内面灰褐色。口径32.6cm。

下甕は、逆「L」字状口縁をもち、かなり発達した内唇は下がる。口縁外唇には一条の横沈線と刻目を施す。口縁下には二条の三角突帯が巡る。口縁周辺から突帯貼付部まで横なで調整。それ以下は縦刷毛目調整。煤の付着が認められる。底部は上げ底。石英粒砂を含み、暗褐色を呈する。焼成は良好。口径44cm、高さ51.7cm。中期中葉の所産であろう。

第57号甕棺墓（Fig.3･195，3･196）

第56号竪穴埋没後に、甕２個を接口させ、Ｓ－4.5°－Ｅの方向に、11°の傾斜で埋置させて

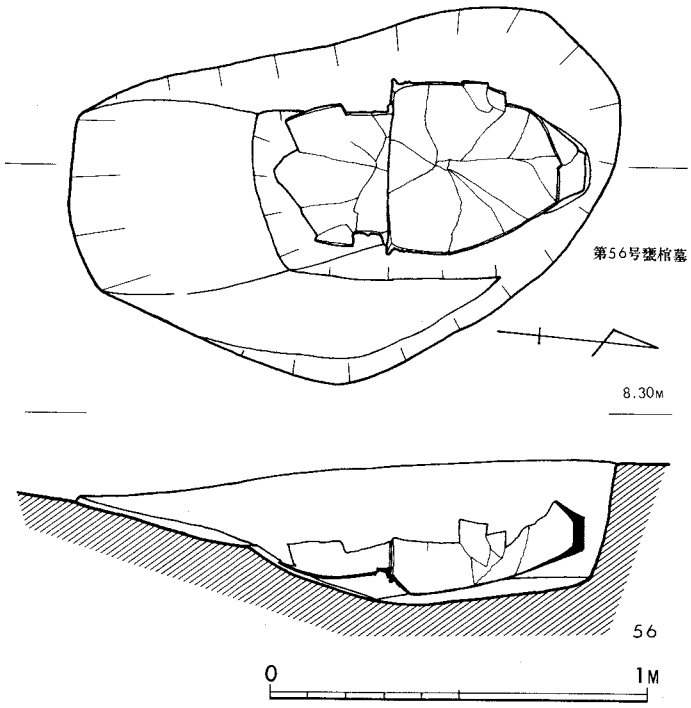


Fig.3･193　第56号甕棺墓実測図

いた。墓坑の大半は削平されているが、棺そのものの残りは良い。

上甕は、内唇未発達の逆「L」字状口縁をもち、内唇は下がる。口縁下に一条の三角突帯を巡らす。口縁周辺から突帯貼付部まで横なで調整。それ以下は縦刷毛目調整。胴部は器面があれているために調整不明。若干の上げ底を呈する。胎土に石英粒砂を含み、淡褐色を呈する。

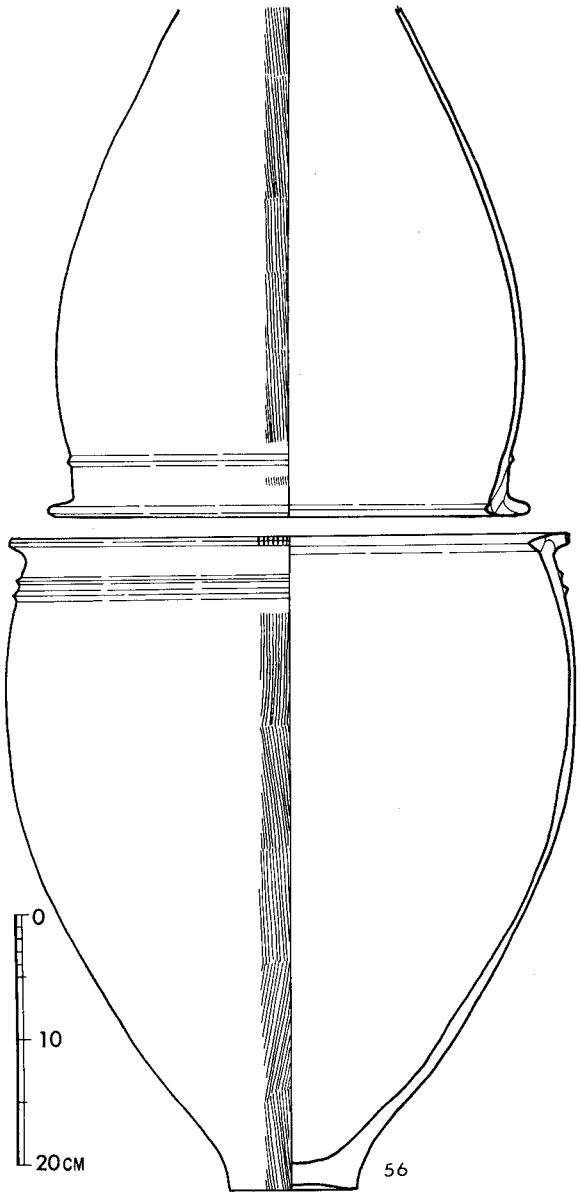


Fig.3・194　第56号甕棺実測図

焼成良好。口径40.2cm，高さ45cm。

下甕も、逆「L」字状口縁をもつが、下がり気味の内唇は、若干発達する。口縁下に一条の三角突帯が巡り、口縁周辺から、突帯貼付部まで横なで調整。それ以上は縦刷毛目調整。底部は上げ底。石英粒砂を含み、暗褐色を呈する。焼成良好。口径39.2cm、高さ46.6cm。中期前葉であろう。

第58号甕棺墓（Fig.3・195，3・196，PL.XIX－4）

第44号竪穴と第24号木棺墓埋没後に甕２個を接口させ、Ｓ－10°－Ｅの方向と、４°の傾斜でで埋置したものである。

上甕は、逆「L」字状口縁の上面が凹み、内唇が下がる甕で、口縁周辺は横なで調整。外面

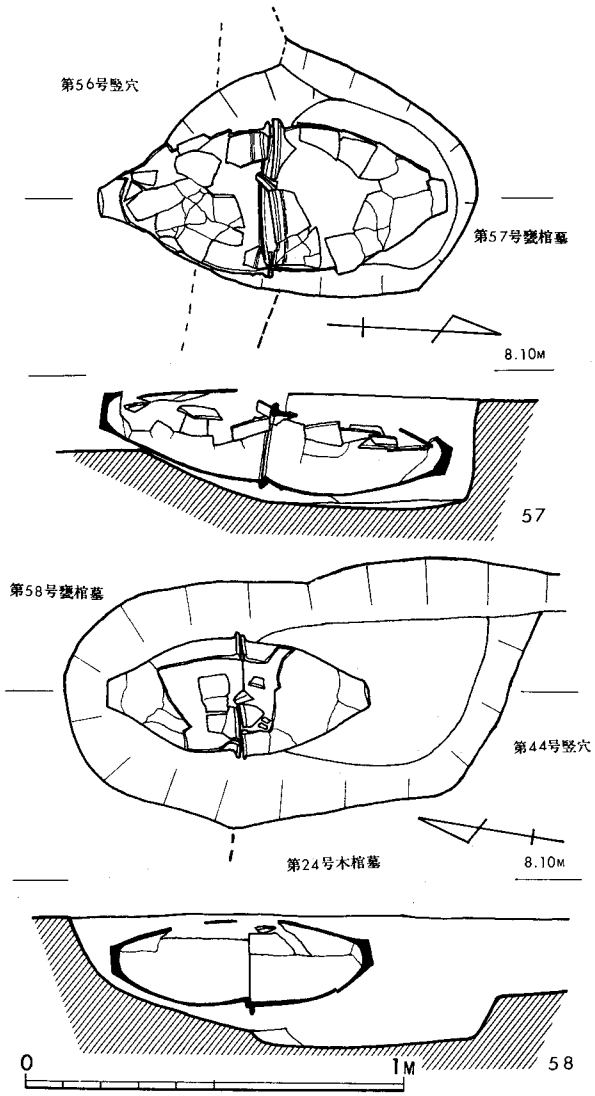


Fig.3・195　第57号・58号甕棺墓実測図

は縦刷毛目調整。煤の付着が認められる。若干の上げ底を呈する。胎土に石英粒砂を含み、外面暗褐色、赤褐色、内面暗褐色、黄褐色を呈する。焼成良好。口径32cm。器高33cm。

下甕は、口縁外唇がわずかに下がる逆「L」字状口縁をもつ甕である。口縁周辺は横なで調整。外面縦刷毛目調整。底部は平底。胎土に石英粒砂を含み、赤褐色を呈する。焼成良好。口径28.6cm、器高33cm。中期中葉のものであろう。

第60号甕棺墓（Fig.3・197）

第104号竪穴埋没後に埋置されている。そのために墓坑などは不明であった。壺の単棺である

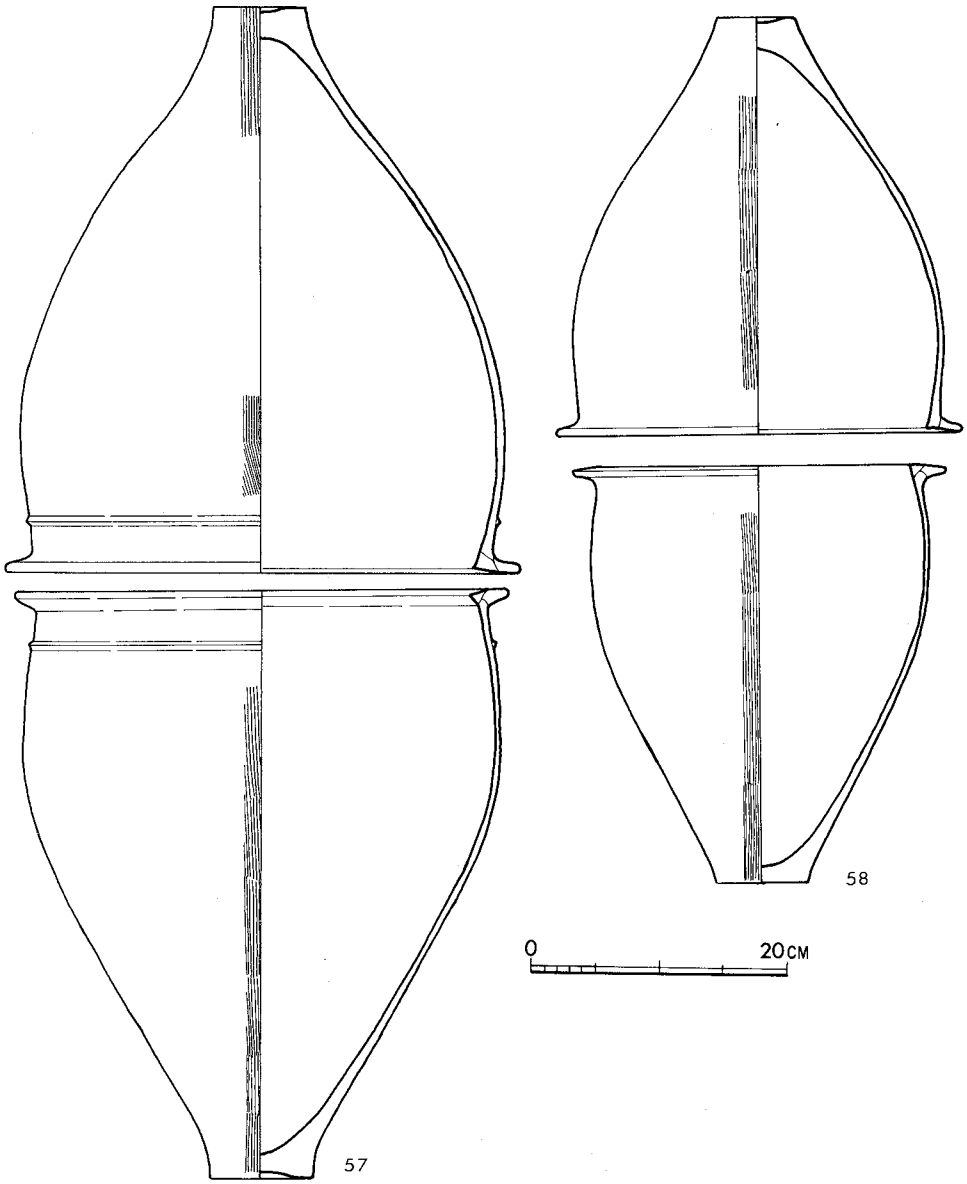
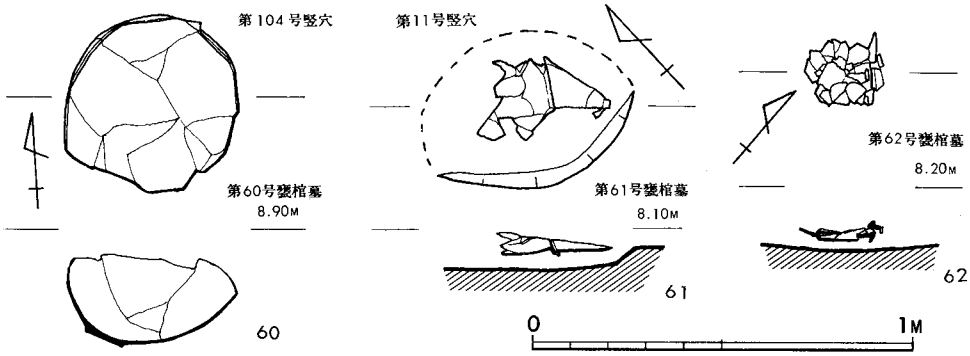


Fig.3・196　第57号・58号甕棺実測図

かどうかも不明。Ｓ－86.5°－Ｅを向き、68°の傾斜をもつ。

棺は、壺の胴上半部以上を欠失している。外面は刷毛目調整を行っているが、胴部では横、斜め、底部附近では縦方向となっている。胎土に砂粒を含み、焼成良好。外面灰褐色、一部黒変。内面は淡灰色を呈する。胴部の最大径は49cm。前期末の所産であろう。



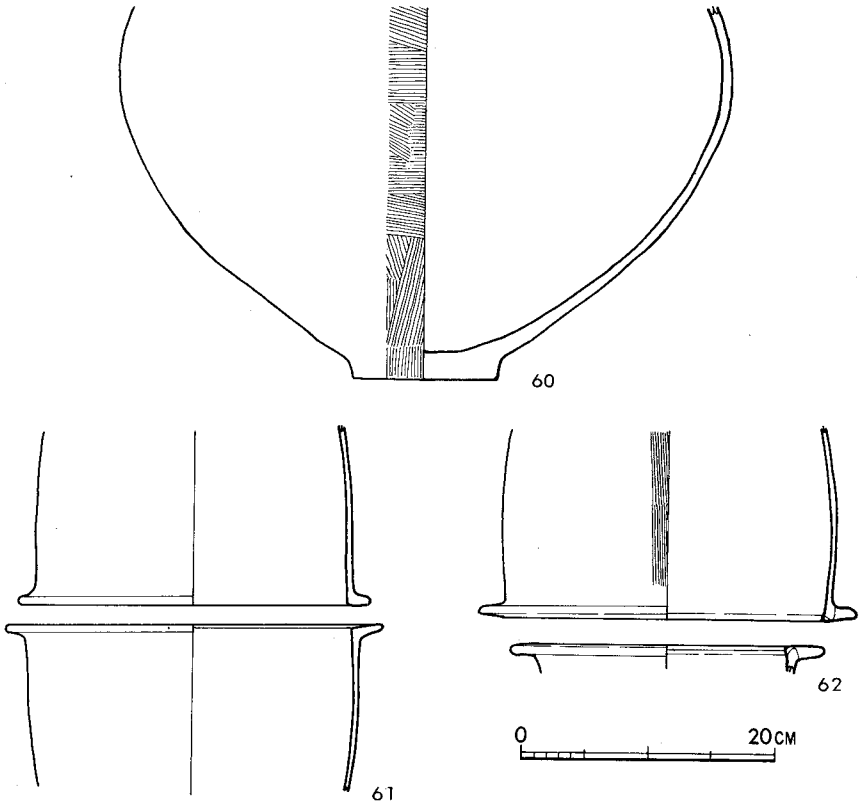


Fig.3・197　第60号・61号・62号甕棺墓および甕棺実測図

第61号甕棺墓（Fig.3・197）

第11号竪穴埋没後に、甕2個を接口させ、S－61°－Eの方向、3°の傾斜で埋置させている。ほとんど削平されて、接口の部分が残るのみである。

上甕は、未発達の口縁をもつ甕で、器面があれているため調整は不明。胎土に石英粒砂を含み、暗褐色を呈するが焼成はあまい。推定口径28cm。

下甕も、未発達な口縁をもつが、内唇は下がる。器面があれているため調整などは不明。胎土に石英粒砂を含み、暗褐色を呈するが、焼成は若干あまい。推定口径30cm。中期前葉であろう。

第62号甕棺墓（Fig.3・197）

ほとんど削平されている。甕2個の接口でN－50°－Eの方向で、6°の傾斜をもって埋置されている。下甕は原位置には残存しない。

上甕は、逆「L」字状口縁をもち、外唇の下がる甕で、口縁周辺は横なで調整。外面は縦刷毛目調整。石英粒砂を含み、焼成良好、暗褐色を呈する。推定口径30cm。

下甕も逆「L」字状口縁をもつ甕で、内唇に若干の発達が認められる。石英粒砂を混じ、焼成良好、暗赤褐色を呈する。推定口径24.8cm。中期中葉と考えられる。（沢）

b　成人用甕棺墓

第１号甕棺墓（Fig.3･198）

上半分を削平されているが、現存部で120cm×130cmの隅丸に近い墓坑を堀り、横に穴を穿って下甕をさし込んでいる。棺は甕２個で、上甕の口縁部が下甕の内部に入る、いわゆる呑口である。Ｓ－27.5°－Ｅを向き、傾斜は9.5°で埋置される。なお、墓坑内に小児甕棺第19号甕棺墓が埋置されている。

上甕は、口縁がすぼまり、胴部の張る甕で逆に「Ｌ」字状というより強い「く」の字状に近い口縁をもつ。口縁周辺は横なで調整。胴部最大径部より下に二条の三角突帯を巡らす。胎土には石英粒砂を含み、外面赤褐色、内面黄褐色を呈する。焼成は良い。推定口径43.5cm、胴部最大径57.8cm。

下甕は、内側への張り出し部が強く、わずかに外傾する「Ｔ」字形口縁部を最大径として、ゆるやかに底部に向かってすぼまっていく甕である。胴部中位に二条の三角突帯が巡る。口縁の内外唇ともに凹む。口縁周辺と、突帯貼付部は横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、暗赤褐色を呈する。焼成良好。推定口径67cm。器高87cm。中期中葉。

第２号甕棺墓（Fig.3･199, PL.XVII－1）

大部分を削平されている。上を口縁下打ち欠きの甕、下を甕の接口にしてＮ－48°－Ｅの方向に、傾斜11°で埋置されていた。下甕の口縁部外側張り出し部が、墓坑の床面にあたる部位は堀り凹められていた。

上甕は口縁下打ち欠きの甕で、胴部に一条の三角突帯が巡る。胎土には石英粒砂を含み、焼成良好。外面赤褐色、内面黒褐色を呈する。

下甕は、肥厚した口縁部の内、外両端が張り出したいわゆる「Ｔ」字形口縁をなし、胴部には一条の三角突帯を巡らす。底部は上げ底を呈する。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。外面赤褐色、黄褐色、内面淡黒褐色、黒褐色を呈する。推定口径68.4cm、器高95.3cm。中期前葉であろう。

第３号甕棺墓（Fig.3･200, PL.XVII－2）

大半を削平されている。棺は甕２個を接口させ、Ｓ－12.5°－Ｅの方向に、－４°の傾斜で埋置していた。接口部の外側張り出し部に当たる床面は堀り凹んでいた。

上甕は、口縁部が肥厚して、いわゆる「Ｔ」字形をなす。口縁は外側張り出し部より内側張り出し部の方が強く、若干外傾する。口縁外端は凹む。口縁周辺は横なで調整。胴部には一条の三角突帯が巡る。石英粒砂を含み、焼成良好。外面赤褐色、内面灰褐色、口縁上端の一部焼成時の黒変。推定口径74.2cm。

下甕も、口縁内側張り出しが強いが、「Ｔ」字形口縁を呈し、わずかに外傾する。胴部中央に一条の三角突帯を巡らす。口縁周辺と突帯貼付部は横なで調整。底部は平底。胎土に石英粒砂

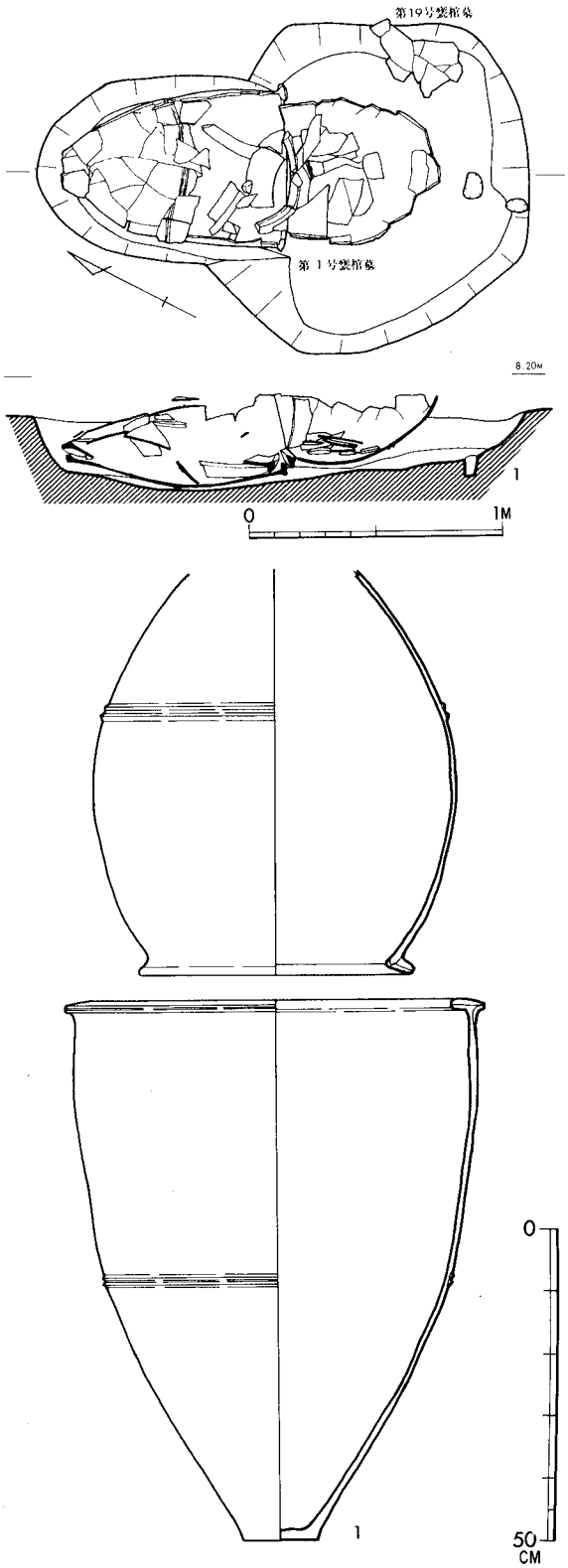


Fig.3・198　第1号甕棺墓および甕棺実測図

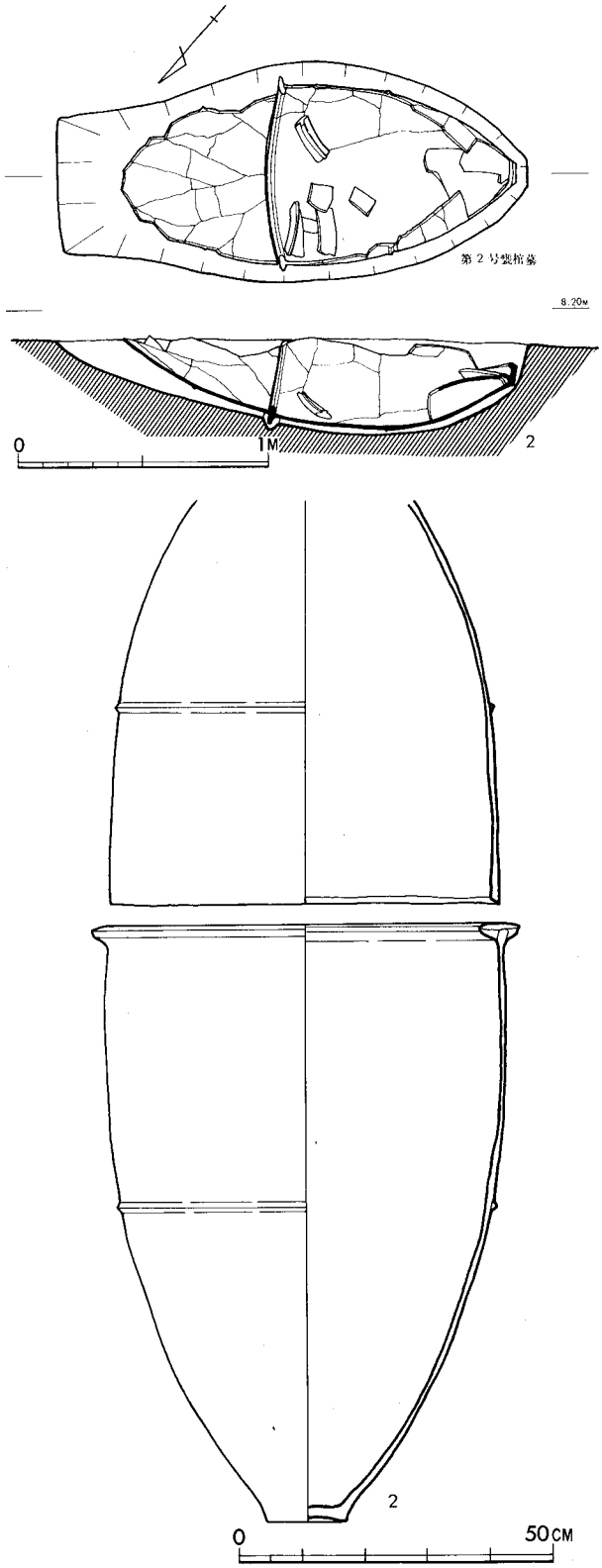


Fig.3・199　第２号甕棺墓および甕棺実測図

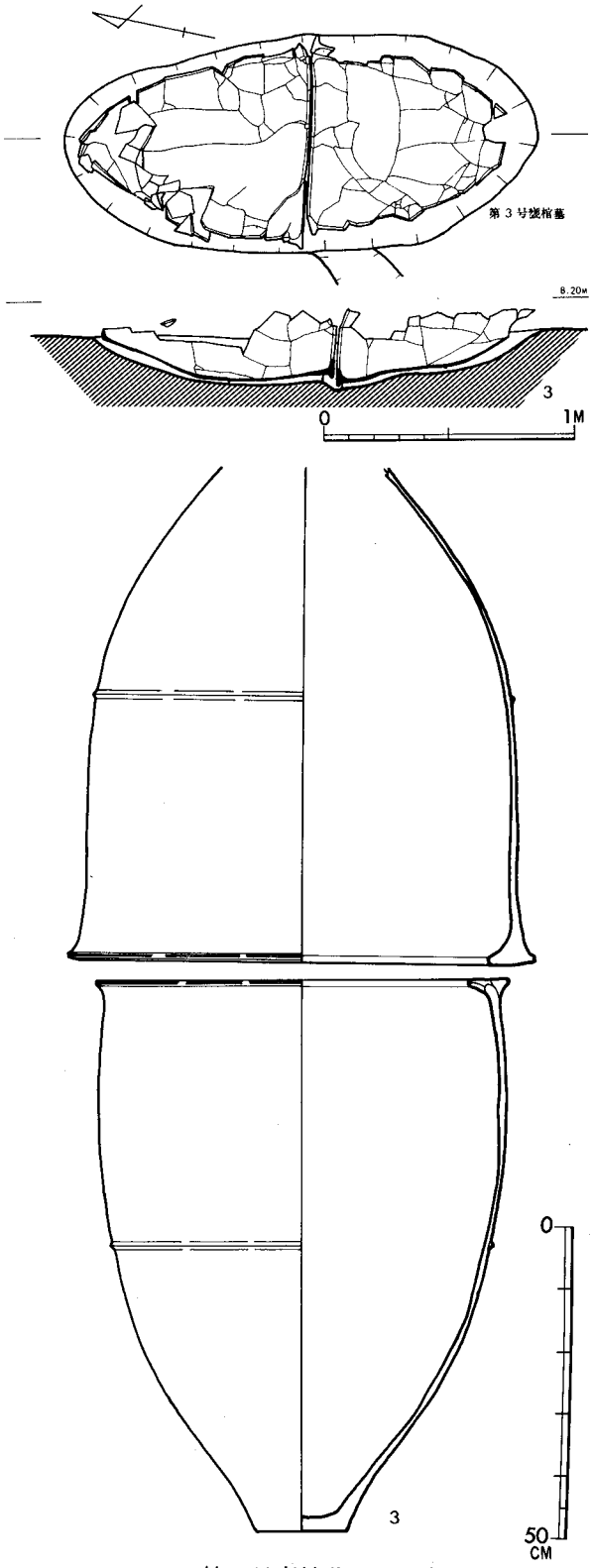


Fig.3・200　第3号甕棺墓および甕棺実測図

を含み、焼成良好。暗赤褐色を呈するが口縁部付近一部焼成時の黒変。推定口径66.4cm、器高88.3cm。中期前葉であろう。

第４号甕棺墓（Fig.3･201）

第107号竪穴埋没後に、大形の甕2個を接口させ、S－27°－Eの方向で、5°の傾斜に埋置させていた。大部分は削平されており、下甕底部付近と上甕胴下半部あたりに後世のピットの攪乱がある。

上甕は、肥厚した口縁部が「T」字形を呈する甕で、若干外傾する。口縁外端は凹む。胴部中央わずかに下寄りに二条の三角突帯を巡らす。口縁周辺と、突帯貼付部は横なで調整。石英粒砂を含み、焼成良好。外面赤褐色、内面黄褐色を呈する。推定口径63.4cm。

下甕も「T」字形口縁を呈する甕で、口縁外端は凹み、口縁部は若干内傾する。胴部ほぼ中央に二条の三角突帯が巡る。口縁部周辺と突帯貼付部は横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、赤褐色。黄褐色を呈する。焼成は良好。推定口径76.6cm、器高93cm。この甕棺墓は上甕の特徴より、中期中葉に比定されよう。

第５号甕棺墓（Fig.3･201）

大部分を削平されているが、単棺と考えられる。棺は甕でN－15.5°－Eを向き、21°の傾斜で埋置されていた。蓋の種類、存否は削平が著しいために不明。

棺は、口縁部が未発達ですぼまり、胴上半部で最大となり、底部へとゆるやかな曲線をもつ甕で、胴部最大径下に一条の三負突帯を巡らす。底部は上げ底を呈する。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈するが一部焼成時の黒変がある。推定口径63cm。器高74cm。中期前葉であろう。

第６号甕棺墓（Fig.3･202）

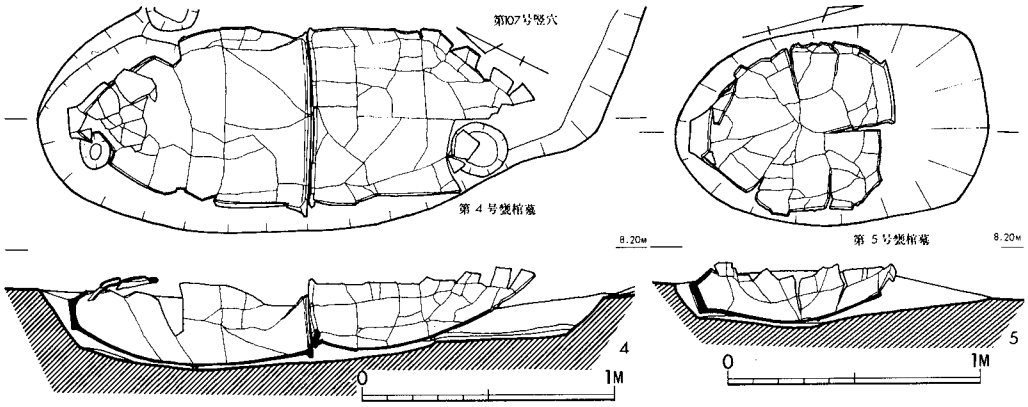
大部分を削平されている。第99号竪穴を墓坑の一部が切っている。棺は大形の甕2個を接口させ、S－18°－Eの方向に、傾斜1.5°で埋置する。

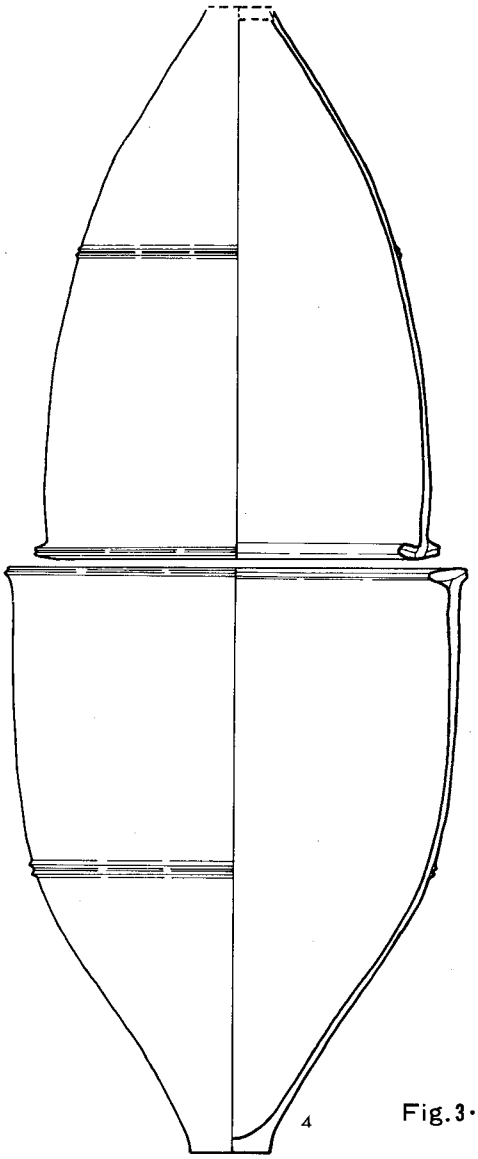
上甕は、外傾する「T」字形口縁をもつ甕で、口縁内側の張り出し部の発達は著しい。胴部中位には三角突帯一条が巡る。口縁周辺および突帯貼付部は横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。赤褐色を呈するが内面の一部は黒変。推定口径73cm。

下甕も上甕と同様の器形をもつ。口縁周辺と突帯貼付部横なで調整。底部は平底。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。赤褐色を呈し一部焼成時の黒変。推定口径72cm、器高87.6cm。中期前葉か。

第７号甕棺墓（Fig.3･202）

上半部を削平されている。棺は大形の甕を接口させ、S－9°－Eの方向に、傾斜9.5°で埋置する。接口部の口縁外側張り出し部が、墓坑床面と接する部分の床面は堀り凹められている。





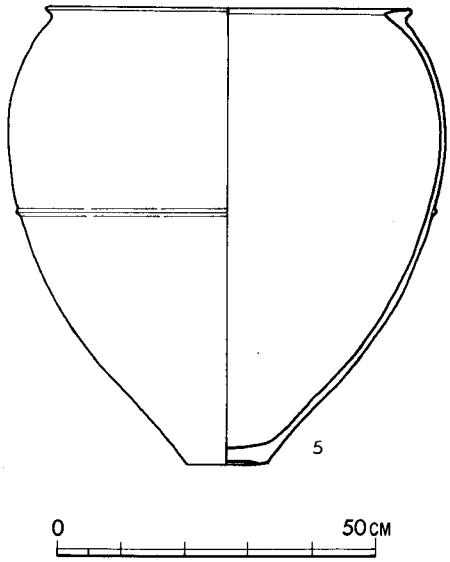


Fig.3·201　第4号・5号甕棺墓および甕棺実測図

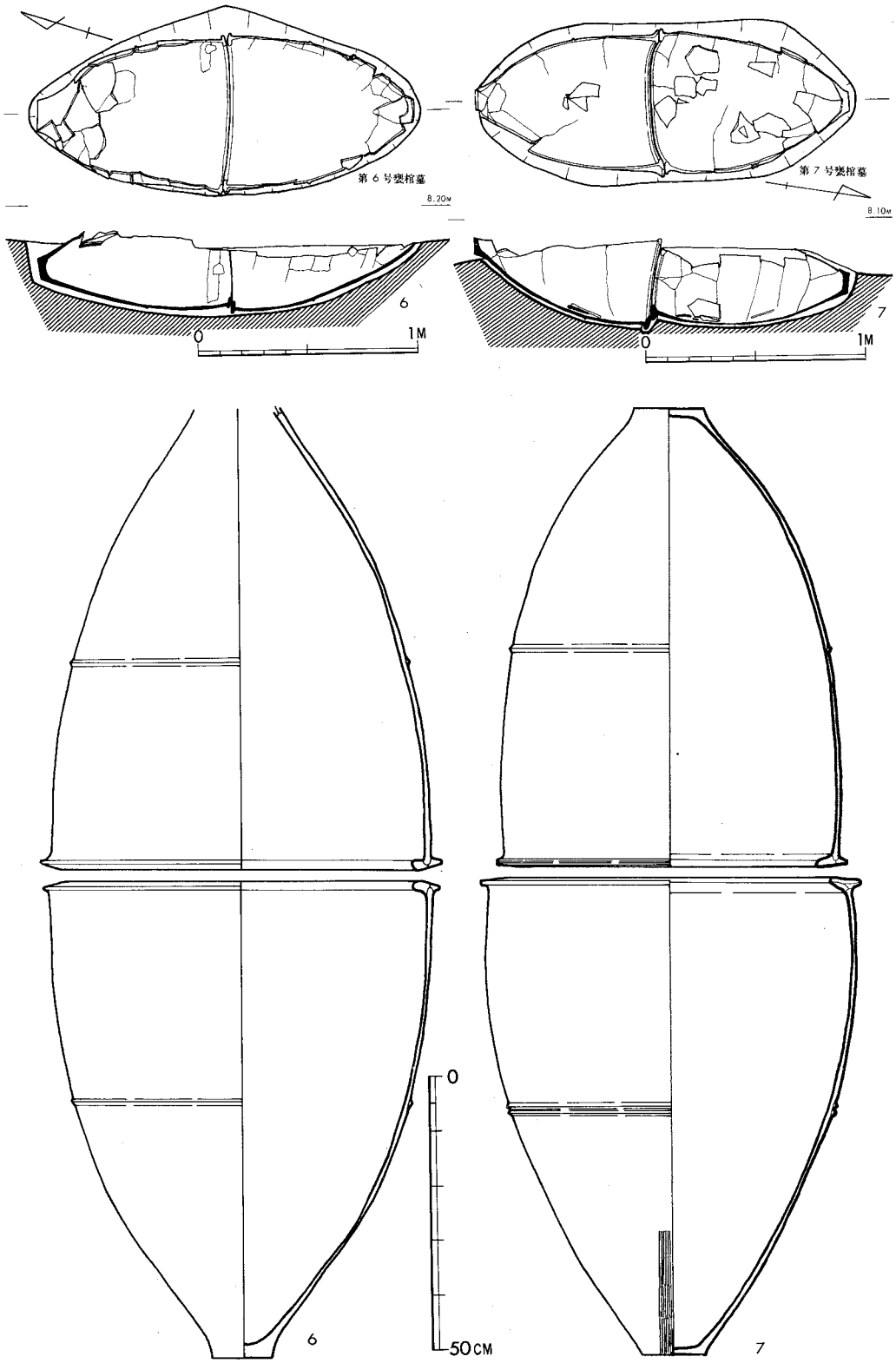


Fig.3·202　第6号・7号甕棺墓および甕棺実測図

上甕は「Ｔ」字形口縁が若干外傾する甕で、口縁部の内・外の張り出し部は、内側の発達が著しい。胴部中位に一条の三角突帯が巡る。口縁部の外端は凹む。口縁周辺と突帯貼付部は横なで調整。器面のあれが著しい。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。赤褐色を呈し一部焼成時の黒変。推定口径63.8cm、器高84cm。

下甕も同様な器形をもつが、外端の凹みはない。胴部中位の三角突帯も二条が巡る。口縁周辺と突帯貼付部は横なで調整。胴下半部から底部へかけて縦刷毛目調整。石英粒砂を含み、焼成良好。黄褐色を呈し、一部焼成時の黒変。推定口径69cm、器高88cm。中期前葉か。

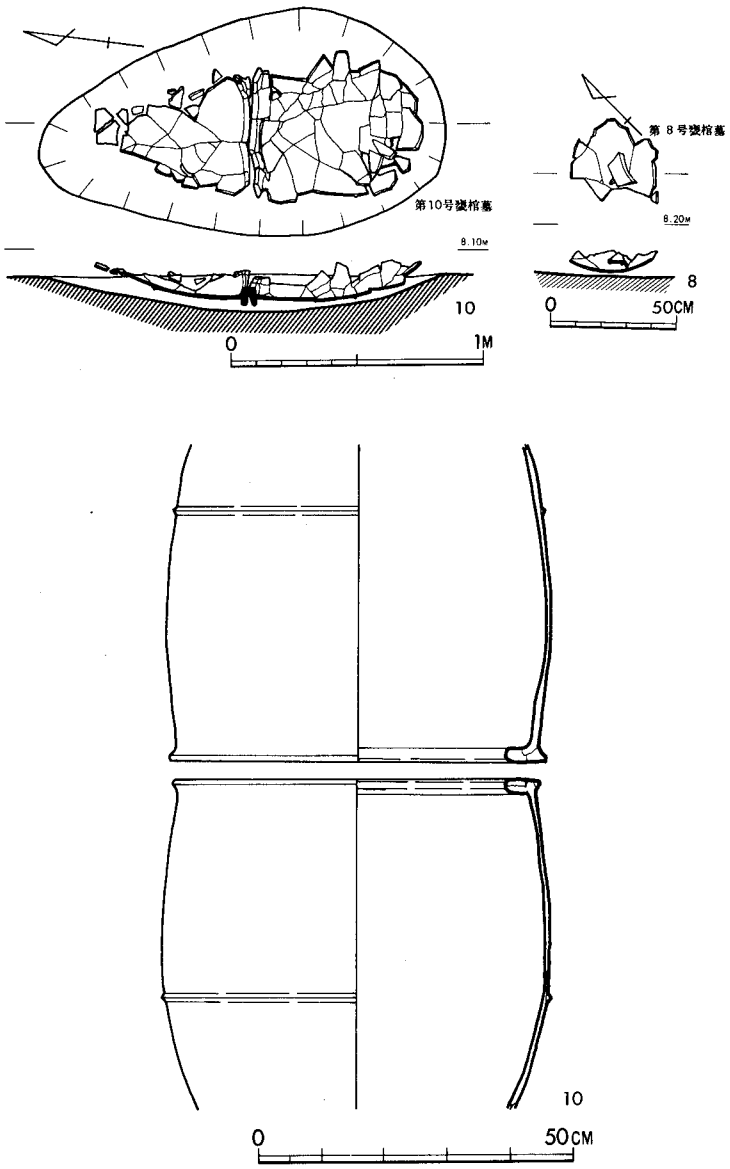


Fig.3･203　第８号・10号甕棺墓および甕棺実測図

第８号甕棺墓（Fig.3･203）

ほとんど削平されており、大形の壺の胴部しか残っていなかった。単棺かどうかも不明。復元もできなかったが中期中葉であろう。

第10号甕棺墓（Fig.3･203）

大部分削平されており、上・下甕とも胴下半部以下は完全に欠失していた。棺は大形の甕２個を接口させ、Ｎ－７°－Ｗの方向に、３°の傾斜で埋置する。

上甕は、「Ｔ」字形口縁で内側張り出し部の発達が著しい甕で、胴部に一条の三角突帯を巡らす。口縁周辺と、突帯貼付部には横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。外面暗褐色、

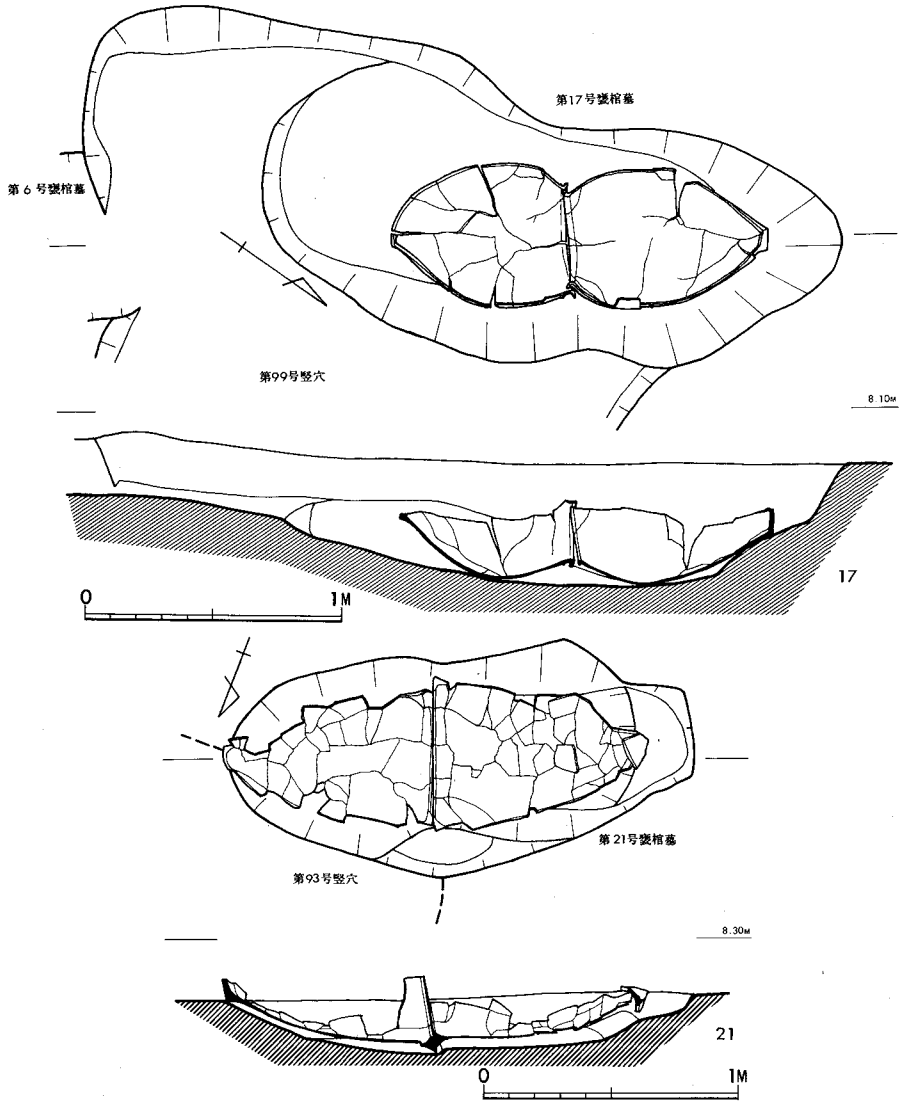


Fig.3･204　第17号・21号甕棺墓実測図

内面黄褐色を呈する。推定口径60cm。

下甕も上甕と同様な器形をもつ甕である。口縁周辺と突帯貼付部には横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。外面赤褐色、内面淡灰褐色。推定口径58.6cm。中期前葉。

第17号甕棺墓（Fig.3・204, 3・205, PL.XVII—4）

第99号竪穴の放棄後の凹みを利用して墓坑を堀ったと推定される。墓坑の床面は、第99号竪穴の床面より深く堀られている。棺は、大形の甕を呑口に、方向S－36°－E、傾斜5°で埋置していた。上・下甕とも口縁内側張り出し部を打ち欠いているが、特に下甕の場合は、それで上甕を挿入するのを容易にしている。

上甕は、口縁部がすぼまり、胴部最大径の甕で、口縁内部張り出し部を打ち欠いている。胴部に一条の三角突帯が巡る。口縁外側の張り出し部は未発達だが外端が凹む。外面口縁下は横

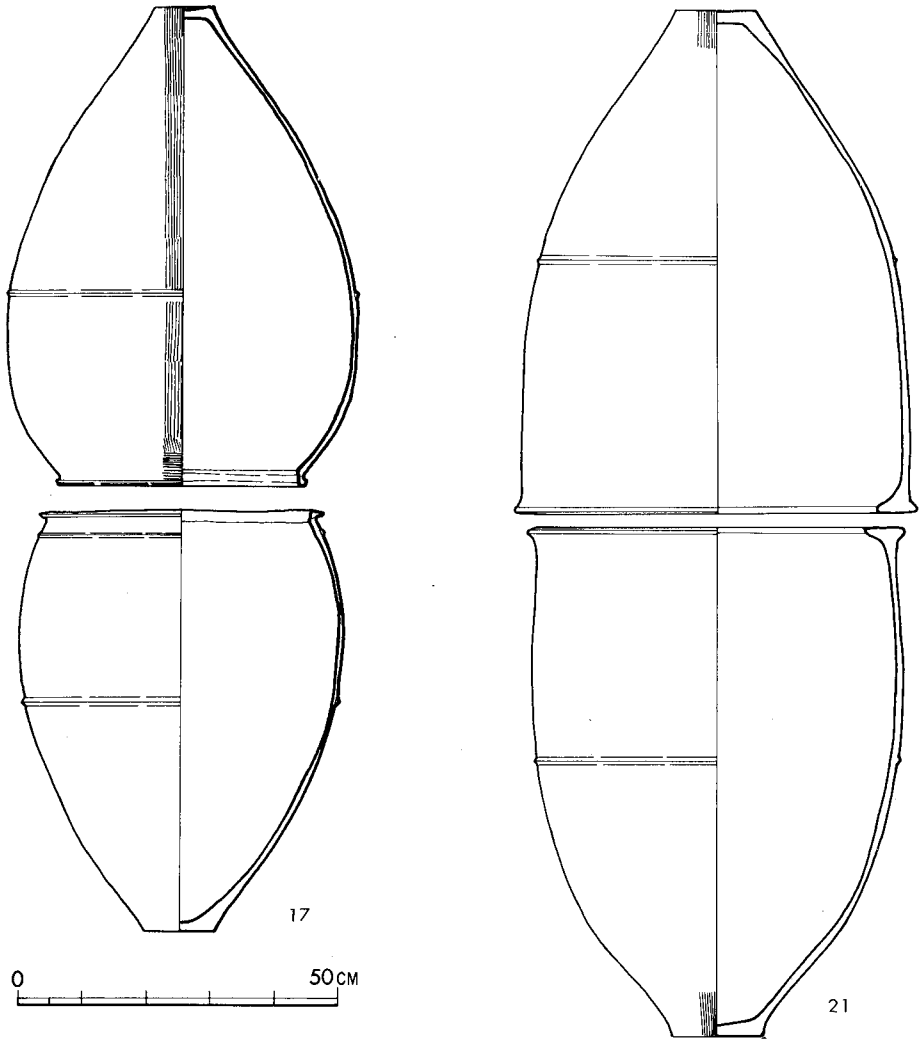


Fig.3・205　第17号・21号甕棺実測図

刷毛目調整。それ以下は縦刷毛目調整。突帯は、刷毛目調整の上に貼付けられ、横なで調整。底部は上げ底。石英粒砂を含み、赤褐色、焼成良好。口径39cm、器高76.5cm。

下甕も、同様の器形をもち、口縁内側張り出し部が打ち欠かれている。若干下り気味の肥厚しない外側張り出しの外端の凹みはない。口縁下と胴部にそれぞれ一条の三角突帯が巡る。口縁下のものは細く低く、後者は幅広く低い。刷毛目調整はみられない。底部は平底。石英粒砂を含み、黄褐色を呈するが一部焼成時の黒変がある。焼成良好。口径45cm、器高67.6cm。中期前葉。

第21号甕棺墓（Fig.3･204，3･205）

第93号竪穴埋没後、その南西側の一部を切って埋置されていた。大半が削平されているが、棺は甕２個の接口で、S－68°－Wを向き、8°の傾斜で埋置されている。墓坑の床面は接口部の外側張り出しの接する部位が堀り凹められていた。

上・下甕とも同様の器形をもつ大形の甕である。口縁部は内側張り出し部の発達が著しく、若干肥厚気味の「T」字形口縁をなす。胴部中位に一条の三角突帯を巡らし、底部は平底を呈する。口縁周辺と、突帯貼付部には横なで調整。底部付近の外面は縦刷毛目調整。胎土には石英粒を含むが良好、焼成も良好。色調は上甕が赤褐色で底部は一部焼成時の黒変。下甕は暗褐色を呈する。上甕口径63cm、器高80cm。下甕の口径59cm、器高80.5cm。中期前葉であろう。

第22号甕棺墓（Fig.3･206，PL.XVII－6）

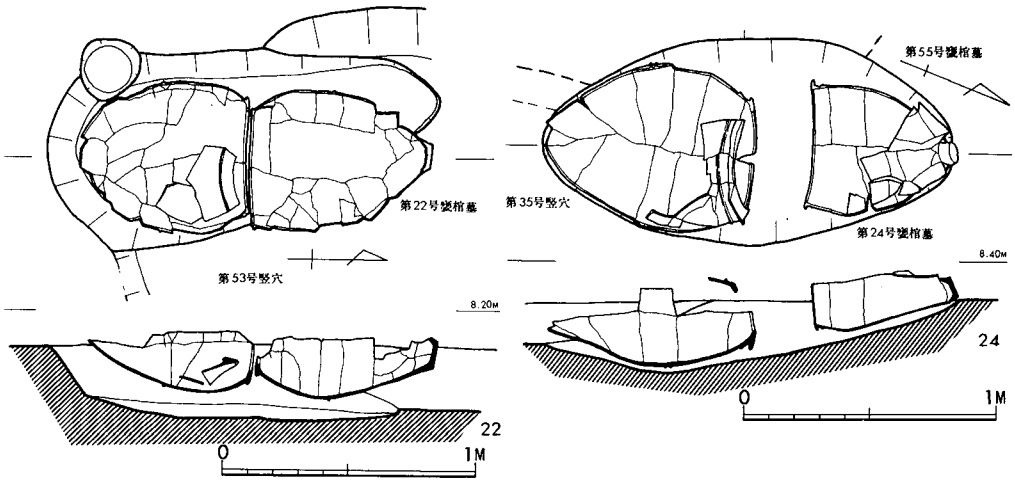
第53号竪穴埋没後に作られていた。棺は甕２個で、若干離れてはいるが、基本的には接口であろう。粘土などはみられなかった。方向はS－2°－Wを向き、10°の傾斜をもって埋置されていた。墓坑北西側に後世のピットが存在する。なお、本棺は第53号竪穴廃棄後の凹みを利用したものとも推察される。

上甕は頸部がすぼまり、胴部の張る甕形土器で、口縁部内側張り出しが発達し口縁自体は内傾する。口縁外唇は凹む。胴部中位には一条の三角突帯が巡る。石英粒砂を含み、焼成良好。黒褐色、淡赤褐色を呈する。推定口径46cm。

下甕も、内傾する口縁部の内側張り出しの発達が著しく、外唇は沈線状に凹む。口縁部すぼまり、胴部が張り、若干の上げ底を呈する底部をもつ。胴部中位に一条の三角突帯を巡らす。石英粒砂を含み、焼成良好。外面赤褐色一部焼成時の黒変、内面黄褐色を呈する。推定口径40.8cm、器高69.1cm。中期前葉であろう。

第24号甕棺墓（Fig.3･206，PL.XVIII－1）

第35号竪穴と第33号竪穴埋没後に埋置されているが、特に第33号竪穴の廃棄後に、その凹みを利用して埋置されていた第55号甕棺墓の棺上部に本棺の上甕がほとんど接していた。第55号甕棺は前期末であるため、その埋没後に、第24号甕棺を作っている。棺は上甕に中形の甕、下甕に大形の甕を使用しており、両甕の口縁部の大きさは接口させるに便利な大きさであるが、



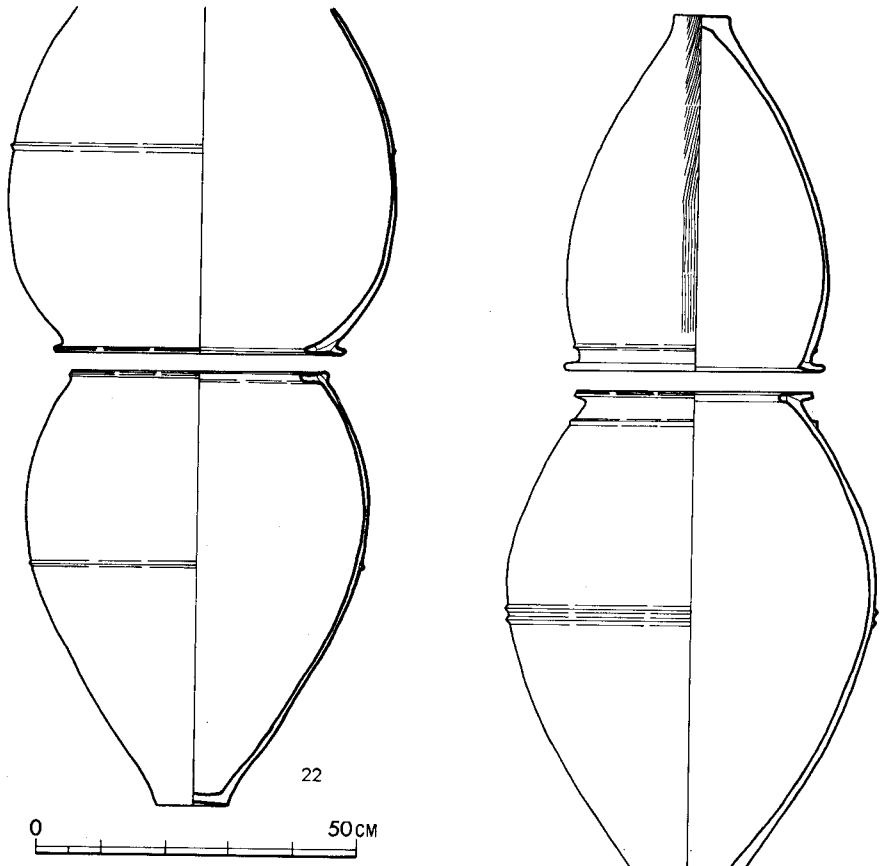
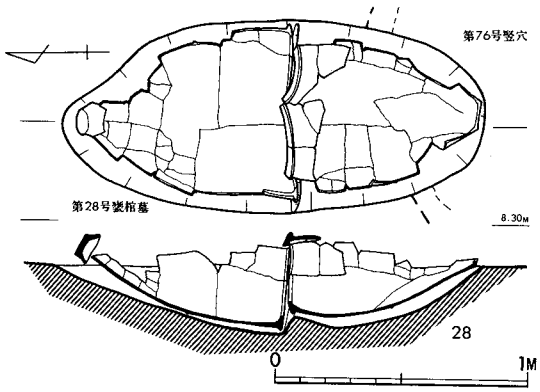


Fig.3·206　第22号・24号甕棺墓および甕棺実測図



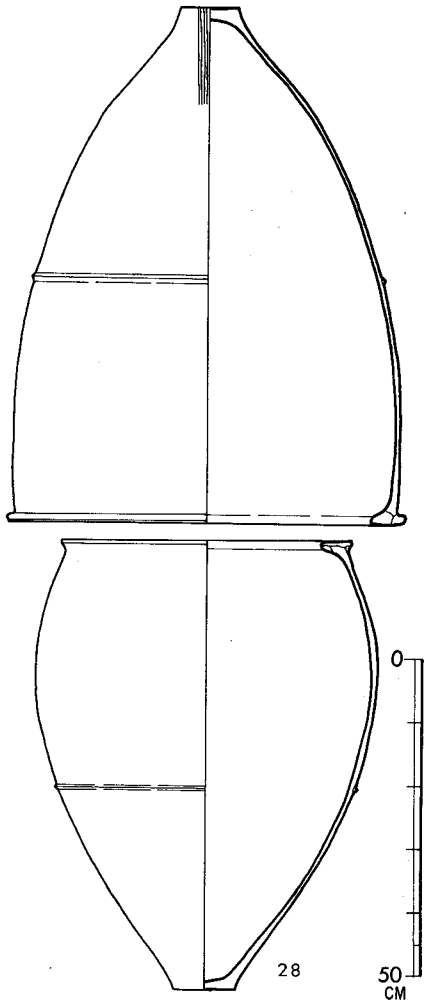


Fig.3・207　第28号甕棺墓および甕棺実測図

両口縁部は約23cm程離れており、間には粘土などもみうけなかった。N－20.5°－Wの方向を向き、傾斜は4°であった。

上甕は、中形の甕を利用している。口縁部逆「L」字状を呈し、若干内傾する。内唇の張り出しがわずかにみうけられる。口縁下に一条の三角突帯が巡る。口縁周辺より突帯貼付部まで横なで調整。それ以下は刷毛目調整。胴部に煤の付着が認められる。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈するが、外面の一部に焼成時の黒変。口径38.6cm、器高51.7cm。

下甕は，口縁がすぼまり、胴部の張る大形の甕で、若干内傾する「T」字形に近い口縁をもつが、外側張り出しの発達が著しく、その外唇は沈線状に凹む。口縁下に一条、胴部中位に二条の三角突帯を巡らす。口縁周辺から口縁下の突帯貼付部と、胴部の突帯貼付部は横なで調整。石英粒砂を含み、焼成良好。赤褐色を呈するが、外面の一部焼成時の黒変。口径37.2cm、胴部最大径59cm、器高81.3cm。中期中葉であろう。

第28号甕棺墓（Fig.3・207，PL.XVIII－4）

第76号竪穴埋没後に、下甕の一部がそれを切って営まれているが、竪穴廃棄後の凹みを利用したものではない。棺は大形の甕2個で、上甕の口径が大きく、容易に覆口の状態となるはずであるが、下甕を上甕中には挿入していない。下部の部位は床面に段をつけて調整しているが、上は不明である。あるいは粘土でも充塡したものであろうか。ただ、下甕の口縁上部は残っていたが、粘土の痕跡はなかった。方向はN－1°－Wとほぼ北を向き、傾斜は4.5°であった。

上甕は肥厚した「T」字形口縁をもつ甕で、胴部に一条の三角突帯を巡らす。口縁周辺と、突帯貼付部は横なで調整。外面底部付近は縦刷毛目調整。石英粒砂を含み、焼成良好。赤褐色、黄褐色を呈し一部焼成時の黒変。推定口径64.4cm、器高82.6cm。

下甕は、口縁すぼまり、胴上部に最大径をもつ甕で、内側張り出し部の発達が著しい「T」字形口縁に近い。胴部中位若干下寄りに一条の細く低い三角突帯を巡らす。口縁周辺と突帯貼付部は横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。外面淡赤褐色、暗褐色、内面黄褐色を呈する。口径46.6cm、器高71.2cm。中期前葉であろう。

第30号甕棺墓（Fig.3・208）

第97号竪穴埋没後に営まれている。棺は大形の甕2個を接口にして、方向をN－10°－W、傾斜7°に埋置される。接口部の下部は粘土を巻いていたが、上部は不明。

上甕は、内傾する「T」字形口縁で、内側張り出しの発達が著しく、肥厚している。外側張り出しは未発達だが、外唇は沈線状に凹む。わずかに張る胴部には一条の三角突帯を巡らす。口縁周辺と突帯貼付部は横なで調整。石英粒砂を含み、焼成良好。赤褐色、一部黄褐色、黒色を呈する。推定口径64.8cm。

下甕も、口縁内側張り出しの発達肥厚が著しい「T」字形口縁をもち、外側張り出し部の外唇は、沈線状に凹む。ゆるやかにふくらむ胴部には一条の三角突帯が巡らされ、若干上げ底の底部へと続く。口縁周辺と突帯貼付部は横なで調整。底部付近外面には縦刷毛目調整。石英粒

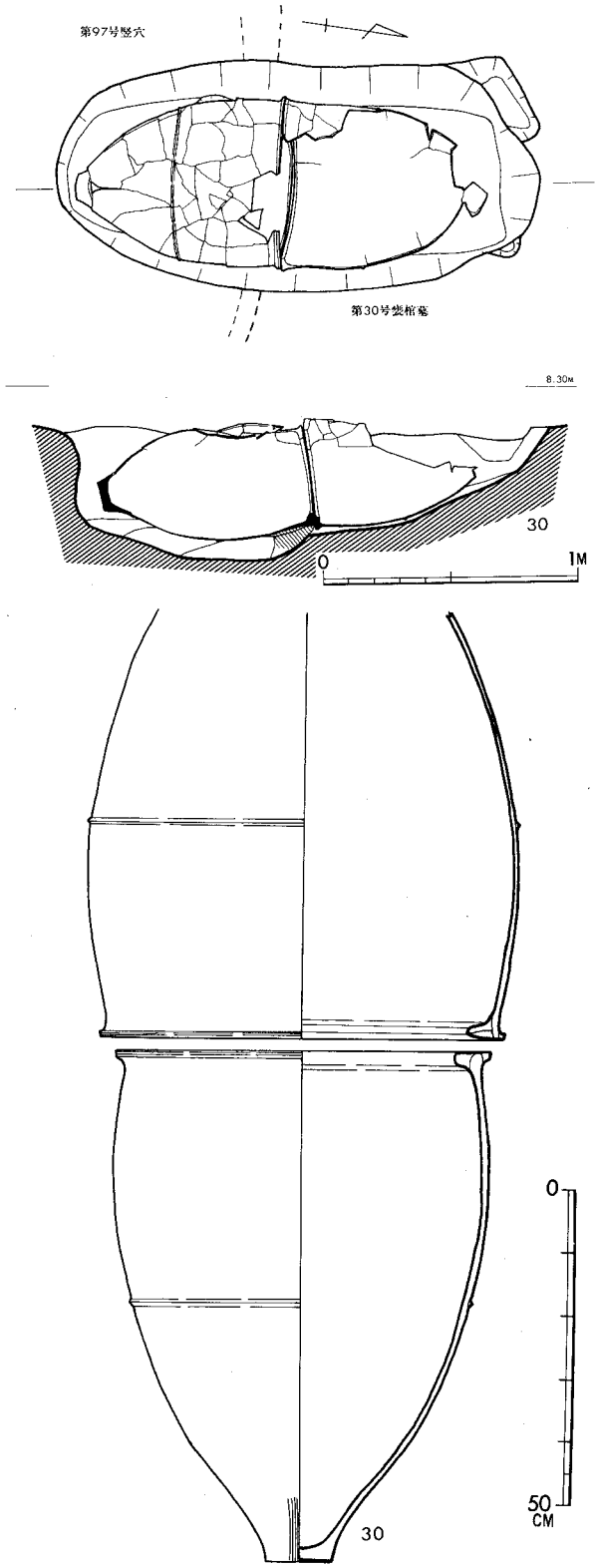


Fig.3・208　第30号甕棺墓および甕棺実測図

砂を含み、焼成良好。外面赤褐色、暗褐色で一部焼成時の黒変。内面は黄褐色を呈する。口径60cm、器高80.5cm。中期前葉であろう。　（沢）

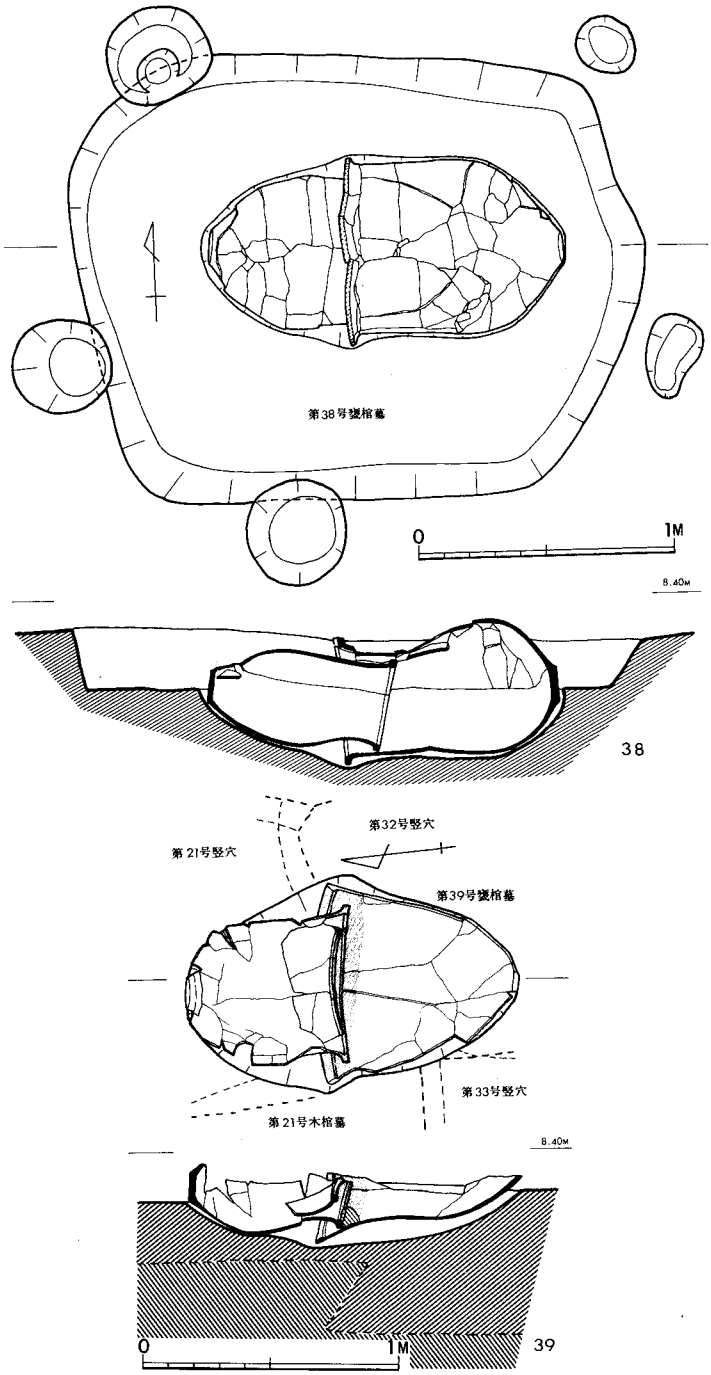


Fig.3・209　第38号・39号甕棺墓実測図

第38号甕棺墓（Fig.3･209，3･210，PL.XIX－1）

墓坑は削平されているが、ほぼ隅丸方形状に広く堀り込んでおり、西側部分で３つの小竪穴が切っている。棺の埋置坑は床部では必要最小限度に堀り込まれ、無駄がない。棺は成人用で長軸がN－89°－Wの方向をとり、ほぼ東西を向き、水平より2°の傾斜を保つ。埋置方法は呑口式合口甕棺である。

上甕は甕形土器を用い、頸部より肥厚する口縁部にかけて外反し、口縁上面は内傾する。口縁外側上下端には刻目をめぐらしており、胴部中位よりやや下が最大径となり、やや上げ底気味の底部へ向かって大きくすぼまる。肩部においては接合の際の段を認める。推定口径57cm、高さ70cm、胴部最大径60.4cmを測る。赤褐色を呈し、胎土に石英粒砂を含み、焼成はややよくない。

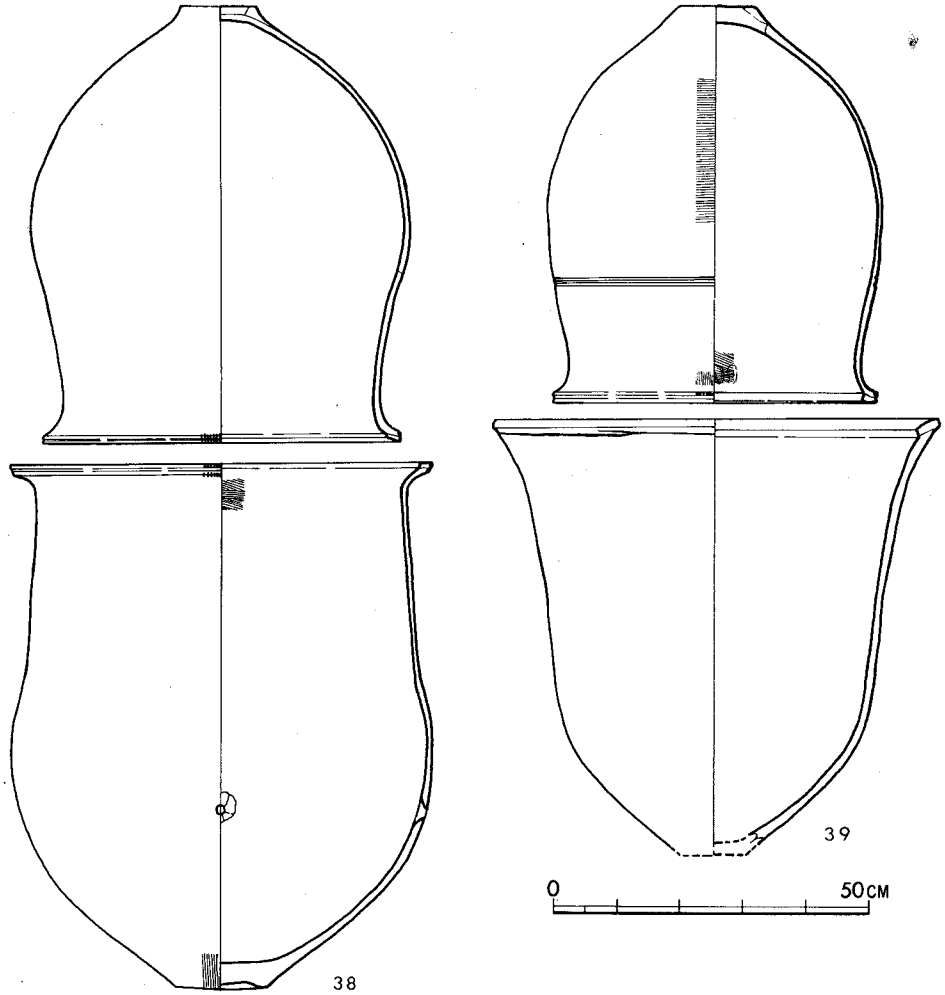


Fig. 3 ･210　第38号・39号甕棺実測図

下甕は甕形土器を用い、外反する口縁部の肥厚する口縁上面は平坦をなし、外側上下端に刻目を有する。胴部に向かってはやや広がりをみせながら、胴部中位よりやや下で最大径となり、直下には焼成後の穿孔を有する。胴下半部は大きく内弯し、わずかに上げ底をなす厚みのある底部へ続く。外側底部付近に縦刷毛目、口縁部内外には横なで、口縁内側直下に横刷毛目を認める。推定口径68cm、高さ83.3cm、胴部最大径67.6cmを測る。器壁内外とも赤褐色を呈し、外側胴下半部で一部黒変がある。胎土にわずかの砂粒を含み、焼成は良好である。前期末。

第39号甕棺墓（Fig.3・209，3・210）

墓坑は第21号竪穴、第32号竪穴、第33号竪穴の埋土の上から掘り込んであり、上部は削平され、棺の埋置坑は床部では必要最小限度に掘り込んでおり、無駄がない。

棺は成人で長軸がＮ－6°－Ｅの方向をとり、水平より－8°の傾斜を保つ、覆口式合口甕棺である。２つの甕の空間には粘土を用いている。

上甕は甕形土器を用い、外反する口縁部の肥厚する口縁上面は平坦を保ち、内側端が少し垂れる。外側上下端の間は凹みをもち、下端に刻目を巡らしている。胴上部には２条の沈線が走り、ほぼ胴部中位で最大径となり、厚みのあるやや上げ底気味の底部に向かって大きくすぼまる。外側口縁直下には縦刷毛目、胴下半部には粗い横刷毛目を走らせる。推定口径62cm、高さ63cmを測る。全体に黄褐色～赤褐色を呈し、外側胴部に一部黒変がある。胎土には石英粒砂を含み、焼成は良好である。

下甕には甕形土器を用い、口縁部で最大径となり、肥厚のある口縁部の口縁上面は内傾する。外側口縁端直下には粘土接合の痕を認める。外反は胴部下半まで伸び、底部にかけて大きくすぼまる。底部は欠いている。口縁部に横なで。推定口径70cm、外側は赤褐色～暗褐色を呈し、胴上半部に一部黒変がある。内側は暗褐色である。胎土には石英粒砂を含み、焼成は良好である。前期末。

第41号甕棺墓（Fig.3・211，3・212）

墓坑は上部が削平されており、西側で北甕の一部と墓坑を小竪穴に切られている。小竪穴からは、土師器の甕の破片が一片出土している。棺の埋置坑は床部では必要最小限度に掘り込まれている。

棺は成人で、長軸がＳ－6°－Ｗの方向をとり、水平より4°の傾斜をもつ、接口式合口甕棺である。

上甕は鉢形土器を用い、「Ｔ」字状に近い口縁部の口縁上面は内傾し、外側端でわずかに垂れる。内側の張り出しは未発達ながら、明確な陵を有する。口縁直下には断面三角形の突帯を一条めぐらし、突帯の少し下で胴部最大径となり底部へ向ってすぼまる。底部は欠損がある。突帯部分より口縁部にかけて横なでを有する。推定口径58cm、高さ44.7cm、全体に黄褐色を呈し、胎土には石英粒砂を含み、焼成は良好であるが、器面は荒れている。

下甕は甕形土器を用い、「Ｔ」字状に近づく口縁部の口縁上面は内傾し、少し凹む。口縁内

外の張り出しは明僚となり、稜をはっきりもつ。胴上半部の中位程で最大径となり、少し下ったところに断面三角形の突帯を一条めぐらしており、少し上げ底となる底部へすぼまる。口縁部と突帯付近に横なでをみせる。推定口径64.2cm、高さ84.2cmを測る。器壁は外側赤褐色、内側灰白色を呈し、底部に近く黒灰色～黒色となる。外側底部も黒色となる。胎土焼成ともに良好である。中期前葉。

第44号甕棺墓（Fig.3･211，3･212，PL.XIX･3･5）

墓坑は上部の削平はあるが、ほぼ長方形状のプランをもち、西側で第41号竪穴を切り込んでいる。南側壁で立ち上りは鋭く、北側はゆるい傾斜をもつ。棺の埋置坑は床部では必要最小限度に掘

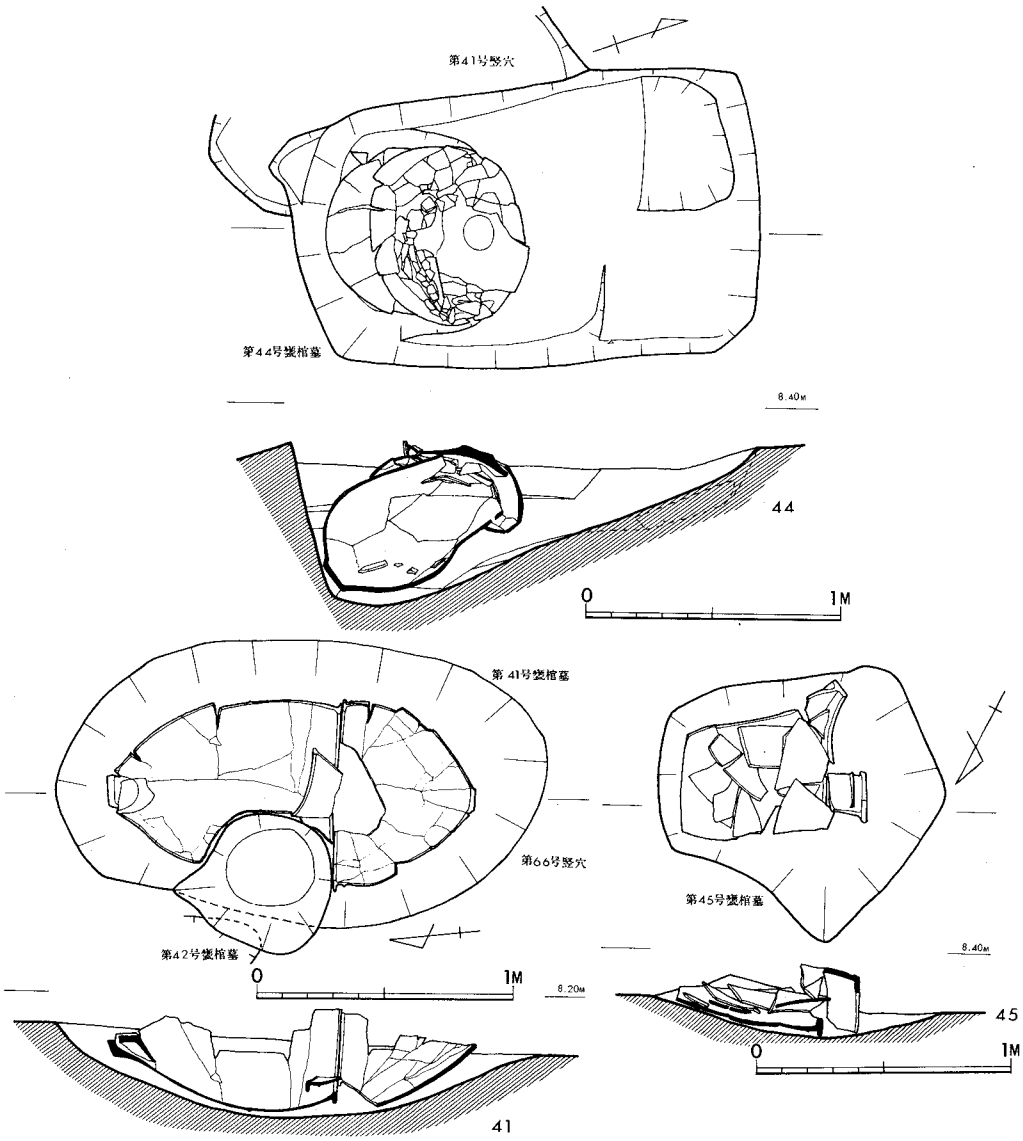


Fig.3･211　第41号・44号・45号甕棺墓実測図

り込まれ、北側に空間を保つ。棺は成人で，長軸をN－19°－Eの方向をとり、水平より37°の傾斜をもつ、覆口式合口甕棺である。

上甕は壺形土器を用いているが、甕形土器ともとれる。胴部上半から打ち欠いている。厚みのある底部は平底で、胴部最大径に向かって大きくふくらみ、打ち欠き部分まで少しすぼまる。最大径は68cmを測る。全体に淡黄褐色を呈し、底部近く灰白色となる。胎土には砂粒を多く含む、焼成はややもろい。

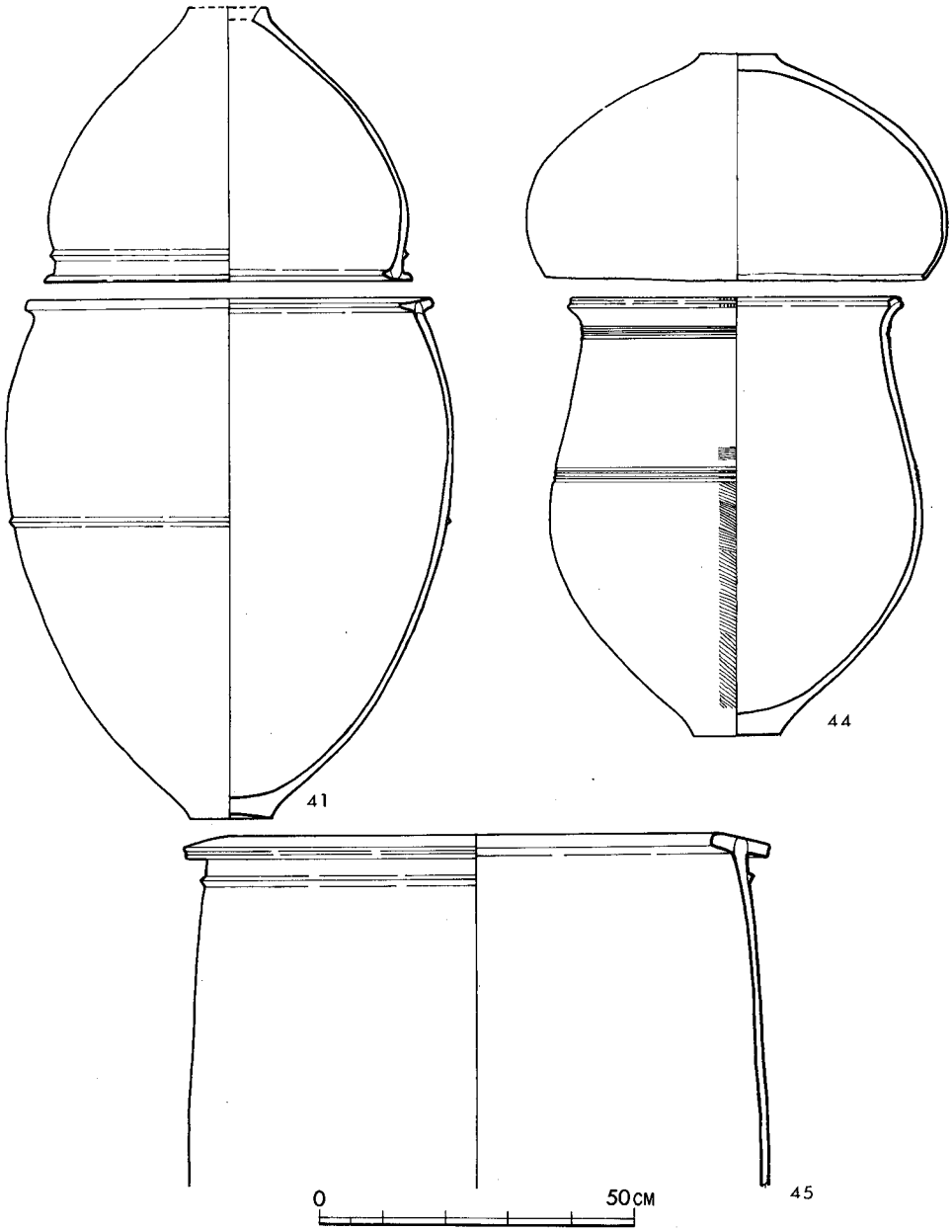


Fig.3·212　第41号・44号・45号甕棺実測図

下甕は甕形土器を用い、外反する口縁部の肥厚した口縁上面は内傾する。外側上下端には刻目をめぐらし、口縁直下には三条の沈線を有する。胴部最大径の少し上にも同じような三条の沈線を有する。最大径は胴部中位近くに位置し、厚みのある平底へ向かって大きくすぼまる。外壁に一部丹塗を認める。底部直上から胴部沈線直上へは斜め刷毛目、胴部沈線付近は刷毛目の上から横なでの調整をしている。推定口径52.6cm、高さ71cm、胴部最大径59.6cm。器壁は暗褐色～赤褐色を呈し、外側胴部沈線付近一部黒変がある。前期末。

第45号甕棺墓（Fig.3･211，3･212）

墓坑は上部削平が大きく、プランの確認はほとんどできない。西側部分の墓坑に空間をもつが、棺の埋置坑は床部では必要最小限度の掘り込みをもち無駄はない。棺は成人の単棺である。主軸はＳ－64°－Ｗの方向を向く。

大形の甕形土器を用い、「Ｔ」字状に近い口縁部は張りがあり、口縁上面は外傾し、外側端で少し凹みをもつ。口縁直下の一条の断面三角形の突帯は貼付け前に上下に２条の沈線を目印に引いている。胴部は最大径に向かってややふくらむ程度であるが、ほぼ垂直に底部へ向かって伸びている。口縁部分と突帯部分に横なでをもつ。胴下半部は欠損している。推定口径93.4cm、器壁は赤褐色を呈し、胎土に砂粒含む。焼成は良好。中期中葉。

（原　俊一）

第48号甕棺墓（Fig.3･213）

墓坑および棺の大半を削平されているが、現存部で、南北約125cm、東西約150cmの墓坑の北側に横穴を掘り、下甕を挿入した成人棺である。上甕は鉢、下甕は大形の甕を接口させている。もっとも、上・下甕の口径が異なり、そのままでは上甕が下甕の中にはいってしまうが、棺の下側を接口させ、現存はしていないが上側の間隙は粘土等によってうめられたものと推定される。棺はＳ－14°－Ｅの方向を向き、5°の傾斜をもって埋置されていた。

上甕は、わずかに外傾する逆「Ｌ」字状口縁をもつ鉢で、内側張り出しは細いが強い。外側張り出しは強く、その外唇は沈線状に凹む。口縁下に一条の「Ｍ」字形突帯を巡らす。口縁周辺から突帯貼付部まで横なで調整。石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。推定口径65cm。

下甕は、外傾の強い「Ｔ」字状口縁をもつ大形の甕で、やはり外唇は沈線状に凹む。内外両張り出し部とも発達が著しい。口縁下に一条の三角突帯、胴部中位わずかに下寄りに二条の台形状突帯が巡る。口縁周辺と、突帯貼付部は横なで調整。石英粒砂を含み、焼成は良い。外面は赤褐色で、一部焼成時の黒変。内面は赤褐色、黄褐色を呈す。推定口径83.4cm、器高106.7cm。中期中葉。

第50号甕棺墓（Fig.3･213）

墓坑が第17号木棺墓を切っている。大部分が削平され、甕の胴部のみしか残存しておらず、

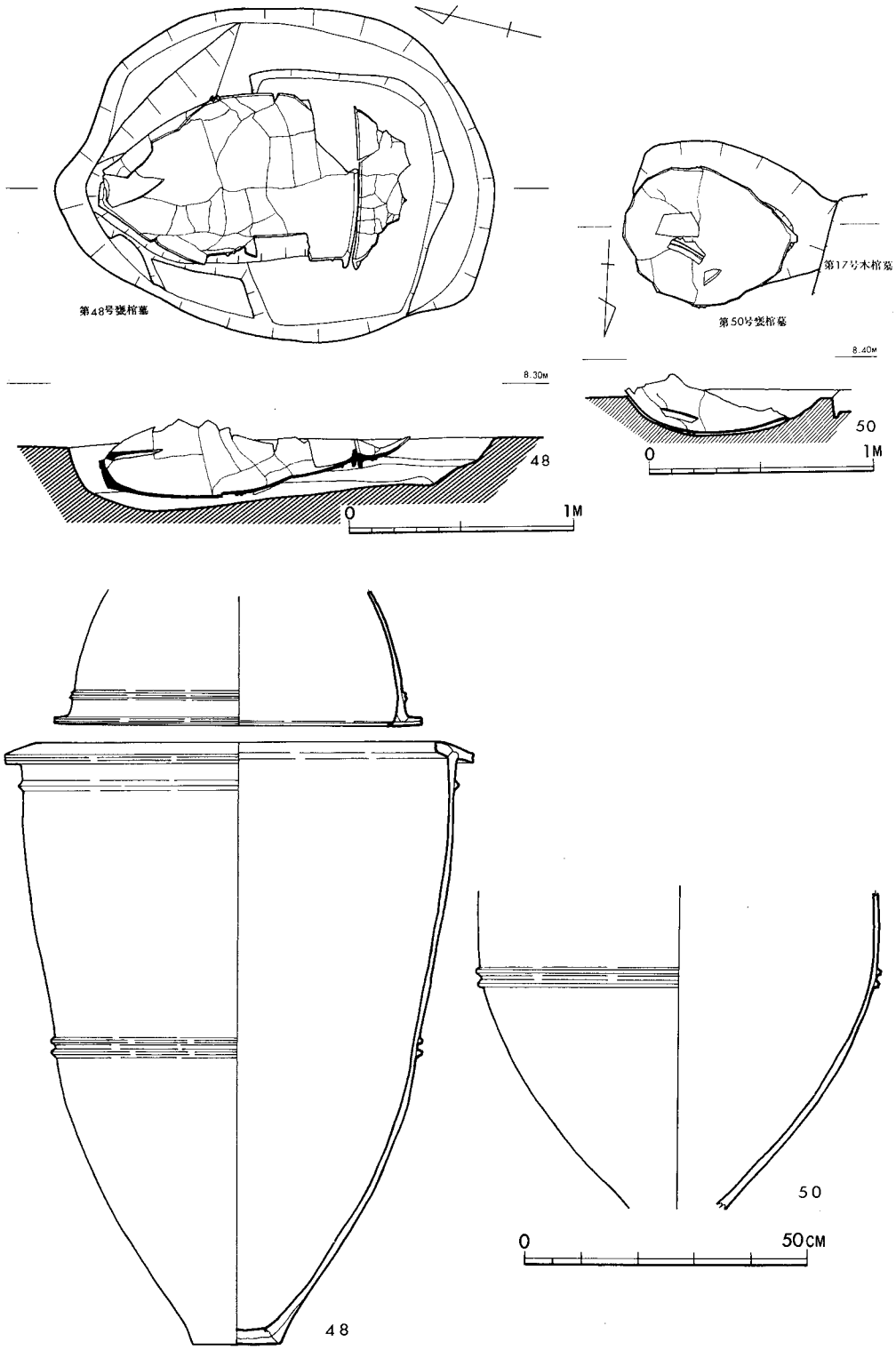


Fig.3・213　第48号・50号甕棺墓および甕棺実測図

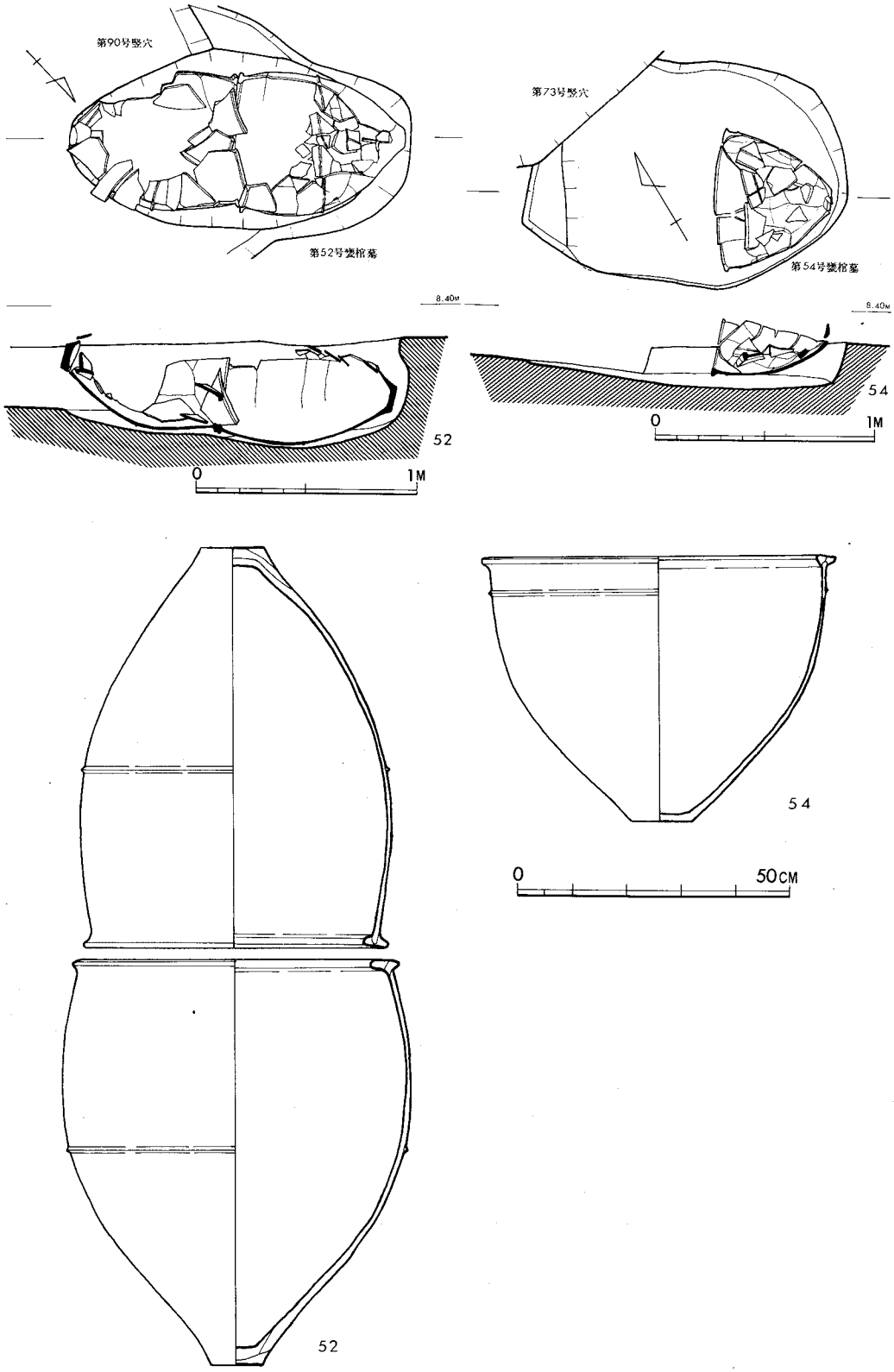


Fig.3・214　第54号甕棺墓および甕棺実測図

単棺か否かは不明。方向は東を向き、傾斜12°で埋置している。

棺は、大形の甕で、胴部のみ残存である。胴部に二条の台形状突帯を巡らす。器面があれているため調整は不明。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗赤褐色を呈するが一部焼成時の黒変。中期中葉～後葉であろう。

第52号甕棺墓（Fig.3･214, PL.XVⅢ－5）

第90号竪穴廃棄後の凹みを利用したと推定され、その北西側に横穴を掘り下甕を挿入したものである。棺は甕２個を接口させ、Ｓ－51°－Ｅの方向で、傾斜８°で埋置する。

上甕は、肥厚する「Ｔ」字形の口縁部が内傾し、わずかにふくらむ胴部へと続く。胴部中位には一条の三角突帯を巡らす。突帯貼付前に浅い沈線を施すが、突帯の貼付位置を示すものであろう。口縁周辺と突帯貼付部横なで調整。砂と石英粒を含み、焼成良好。淡褐色を呈するが外面の一部焼成時の黒変。内面の一部は灰褐色を呈する。口径55cm、器高74cm。

下甕は、口縁内側張り出しの発達が著しい「Ｔ」字形口縁を呈する甕で、胴部がゆるやかにふくらむ。胴部中位に一条の三角突帯が巡る。口縁周辺と、突帯貼付部は横なで調整。胎土に、砂・石英粒を含み、焼成良好。淡赤褐色を呈するが内面の一部黒褐色。口径59.8cm、器高75cm。中期前葉であろう。

第54号甕棺墓（Fig.3･214）

大半を削平されており、第73号竪穴を墓坑が切っている。非常に特異な甕棺墓で、大形の鉢のみの単棺である。いちおう成人墓に入れたが、あるいは小児墓かもしれない。方向をＮ－58°－Ｗに向け、12°の傾斜で埋置されていた。

棺は、肥厚した外傾する「Ｔ」字形口縁をもつ大形の鉢である。口縁下に一条の三角突帯が巡る。口縁周辺から、突帯貼付部まで横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。外面褐色、灰褐色を呈し、一部焼成時の黒変。内面灰褐色を呈する。口径65.4cm、器高49cm。中期中葉であろう。

第55号甕棺墓（Fig.3･215）

第33号竪穴廃棄後の凹みを利用して埋置している。上部に第24号甕棺墓があり、それよりは古い。大形の甕２個の口縁を下側では接しているが、口径が異なるため上側では上甕口縁の一部が下甕の中に入り込んでいる。この間隙は白色粘土を補損していたらしく、北側にその一部が残る。方向はＮ－83.5°－Ｗを向き、傾斜8.5°で埋置される。

上甕は、口縁が肥厚し外反する甕で、口縁下で一度すぼまり胴部がふくらむ。口唇部の刻目はない。口縁の肥厚部は刷毛目の後に貼付けている。その後、口縁周辺は横なで調整。外面は刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。赤褐色を呈するが、一部焼成時の黒変。口径49.8cm、胴部最大径54.8cm、器高67cm。

下甕は、肥厚して外反する口唇部上・下端にそれぞれ刻目を施す。肥厚部は刷毛目の後に貼

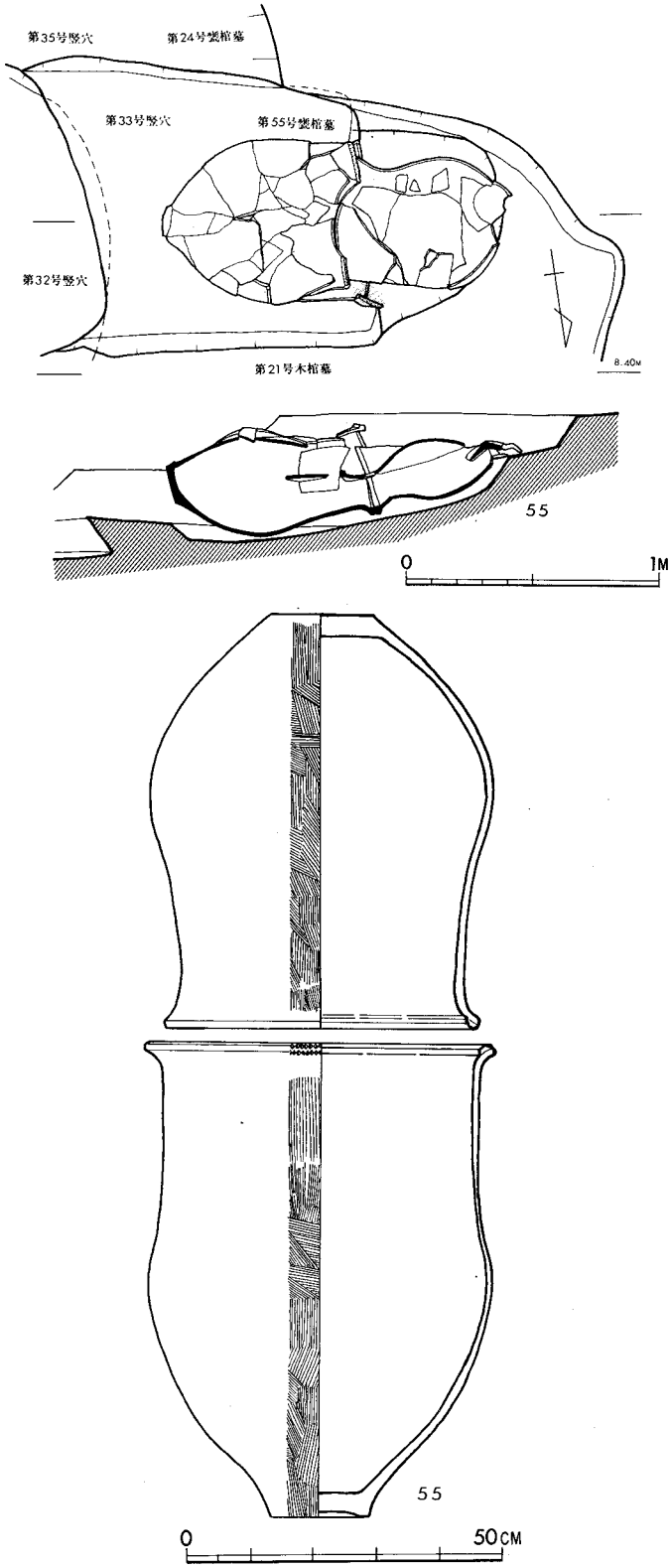


Fig.3・215　第55号甕棺墓および甕棺実測図

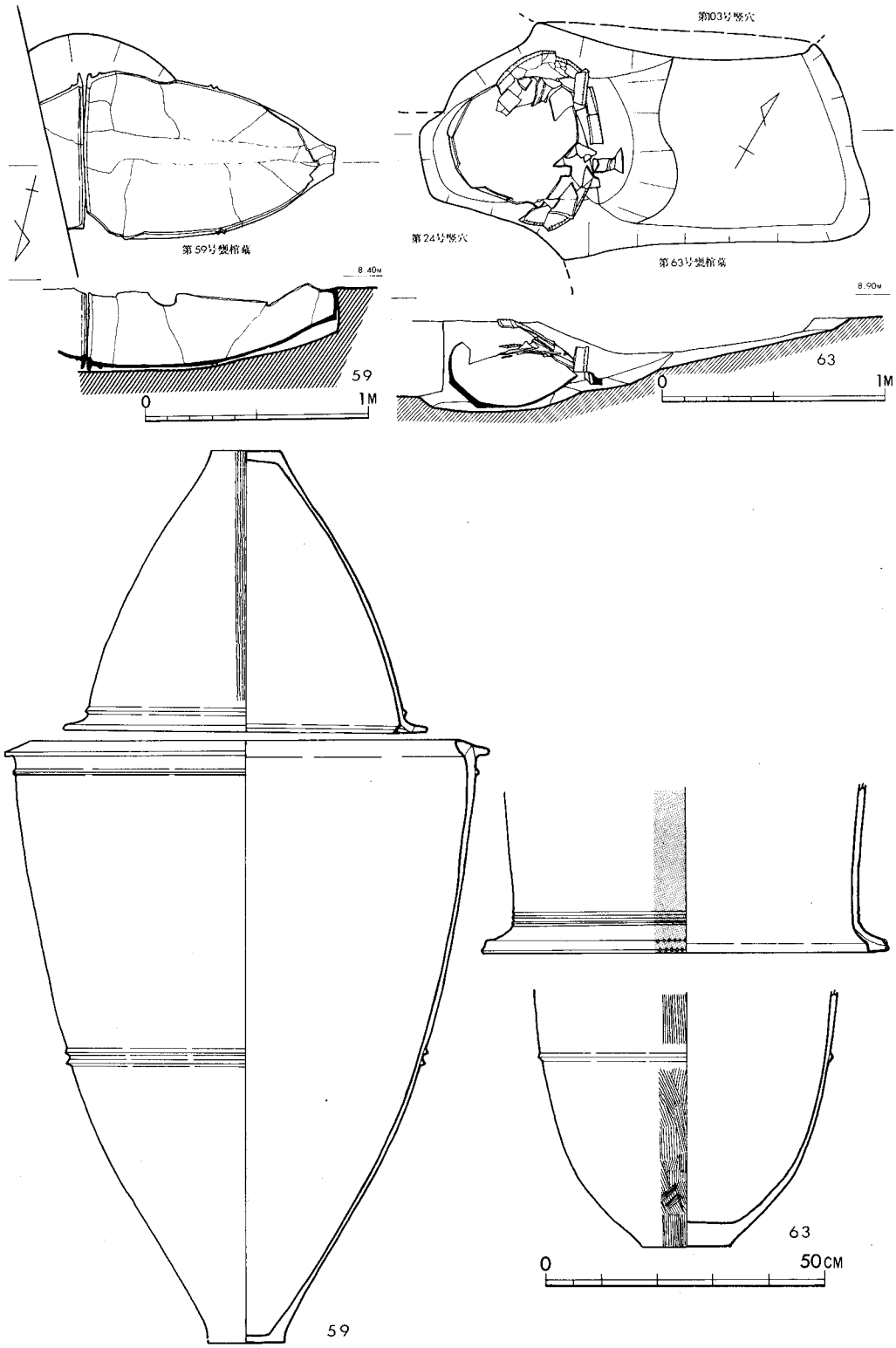


Fig.3·216　第59号・63号甕棺墓および甕棺実測図

付け。その後、口縁全体を横なで調整。口縁下がすぼまり、胴部がふくらみ上げ底の底部へと続く。外面は刷毛目調整。胎土に石英粒砂混、焼成良好。赤褐色を呈するが、一部焼成時の黒変。口径55.6cm、胴部最大径55cm、器高76.4cm。前期末である。

第59号甕棺墓（Fig.3･216）

大半を削平され、上甕の一部はブロック塀の下にあり、平面図は一部とれなかった。棺は上に鉢、下に甕を接口させているが口径が異なるために、上部に間隙ができる。欠失しているために確定的ではないが、おそらく粘土等で補塡したものであろう。N－76°－Eの方向を向き、２°の傾斜で埋置されている。

上甕は鉢で、逆「L」字というより鋤形口縁に近い。細いが外側張り出しが発達し、内側も三角形の張り出しをもつ。口縁下に一条の三角突帯を巡らす。口縁周辺と突帯貼付部は横なで調整。突帯以下の外面縦刷毛目調整。砂を混入するが胎土、焼成とも良好で赤褐色を呈し、底部の一部に焼成時の黒変がある。推定口径66cm、器高51.3cm。

下甕は、内側張り出し部が発達、肥厚し強く外傾する「T」字形口縁をもつ大形の甕で、口縁部を最大として、底部へとすぼまっていく。口縁下に一条の台形状突帯、胴部中位わずかに下寄りに二条の三角突帯を巡らす、口縁周辺と突帯貼付部は横なで調整。石英粒砂を含み、焼成良好。外面は黄褐色を呈するが、口縁下の突帯の下部と胴下半部の一部に焼成時の黒変。内面は淡赤褐色を呈する。中期中葉であろう。

第63号甕棺墓（Fig.3･216）

第24号竪穴と第103号竪穴の埋没後に営まれ、第44号土坑墓に墓坑の一部を切られている。上部の大半を削平されているため、上甕の下半部と、下甕の上半部を欠失している。棺は甕２個を、覆口させて、方向をN－59°－Eに向け、48°の傾斜で埋置している。

上甕は肥厚する口縁部が外反し、口縁下がすぼまる甕で、口縁外端上・下にそれぞれ刻目を施し、口縁直下に三条の沈線を巡らす。口縁周辺は横なで調整。外面には丹が塗られた痕跡が残る。胎土に砂粒を含み、焼成良好。灰白色を呈する。推定口径74cm。

下甕は胴下半部のみで、胴部には一条の三角突帯を施す。外面は刷毛目調整であるが、突帯は刷毛目の上に貼付けられ、その後に横なで調整。胎土には粗い砂粒を含むが、焼成は良好。赤褐色を呈し、一部焼成時の黒変。前期末である。　（沢）

Tab.3・6　第1区甕棺墓一覧

番号		方向	傾き	形状		時期
第1号甕棺墓	成人	S-27.5°-E	9.5°	接口	甕＋甕	中期中葉
第2号甕棺墓	〃	N-48°-E	11°	〃	〃	中期前葉
第3号甕棺墓	〃	S-12.5°-E	−4°	〃	〃	〃
第4号甕棺墓	〃	S-27°-E	5°	〃	〃	中期中葉
第5号甕棺墓	〃	N-15.5°-E	21°	単	甕	中期前葉
第6号甕棺墓	〃	S-18°-E	1.5°	接口	甕＋甕	〃
第7号甕棺墓	〃	S-9°-E	9.5°	〃	〃	〃
第8号甕棺墓	〃	?	?	?		中期中葉か
第9号甕棺墓	小児	N-75°-E	3°	接口	甕＋甕	中期前葉
第10号甕棺墓	成人	N-7°-W	3°	〃	〃	〃
第11号甕棺墓	小児	N-43.5°-W	11°	〃	〃	〃
第12号甕棺墓	〃	N-17.5°-W	14.5°	〃	〃	中期初頭
第13号甕棺墓	〃	N-39°-W	−2°	接口か	壺＋甕	中期前葉
第14号甕棺墓	〃	?	?	?		?
第15号甕棺墓	〃	南北S-N	2°	接口	甕＋甕	中期前葉
第16号甕棺墓	〃	N-4°-W	5°	呑口	壺＋甕	〃
第17号甕棺墓	成人	S-36°-E	5°	接口	甕＋甕	〃
第18号甕棺墓	小児	S-56°-E	4.5°	〃	鉢＋甕	中期中葉
第19号甕棺墓	〃	S-12°-W	?	?		〃
第20号甕棺墓	〃	S-29°-W	5°	?	甕	中期前葉
第21号甕棺墓	成人	S-68°-W	8°	接口	甕＋甕	〃
第22号甕棺墓	〃	S-2°-W	10°	〃	〃	〃
第23号甕棺墓	小児	N-11°-E	2°	〃	〃	〃
第24号甕棺墓	成人	N-20.5°-W	4°	口径同じ 接していない	〃	中期中葉
第25号甕棺墓	小児	S-53°-E	5°	接口	〃	〃
第26号甕棺墓	〃	S-12°-E	ほぼ水平	単？	甕	〃
第27号甕棺墓	〃	S-84.5°-E	19°	接口	甕＋甕	中期初頭
第28号甕棺墓	成人	N-1°-W	4.5°	〃	〃	中期前葉
第29号甕棺墓	小児	N-63°-E	ほぼ水平	〃	壺＋甕	中期中葉
第30号甕棺墓	成人	N-10°-W	7°	〃	甕＋甕	中期前葉
第31号甕棺墓	小児	S-50°-E	37°	〃	鉢＋甕	中期中葉
第32号甕棺墓	〃	S-42°-W	−15°	単	壺	中期前葉

番号		方向	傾き	形状		時期
第33号甕棺墓	小児	N-30.5°-E	ほぼ水平	接口	壺＋甕	中期前葉
第34号甕棺墓	〃	N-S	4°	〃	甕＋甕	〃
第35号甕棺墓	〃	S-3°-E	4°	〃	甕＋壺	〃
第36号甕棺墓	〃	S-42°-W	ほぼ水平	接口か	壺＋甕	中期中葉
第37号甕棺墓	〃	S-25°-E	2.5°	接口	〃	中期初頭
第38号甕棺墓	成人	N-89°-W ほぼ東西	2°	呑口	甕＋甕	前葉末
第39号甕棺墓	〃	S-6°-W	−8°	覆口	〃	〃
第40号甕棺墓	小児	S-37°-E	ほぼ水平	〃	甕＋壺	中期前葉
第41号甕棺墓	成人	S-6°-W	4°	接口	鉢＋甕	〃
第42号甕棺墓	小児	S-13.5°-E	3°	〃	甕＋甕	〃
第43号甕棺墓	〃	N-13°-W	ほぼ水平	〃	壺＋甕	〃
第44号甕棺墓	成人	N-19°-E	37°	覆口	〃	前期末
第45号甕棺墓	〃	S-64°-W	?	単	甕	中期中葉
第46号甕棺墓	小児	S-12.5°-W	5°	接口	甕＋甕	中期前葉
第47号甕棺墓	〃	S-17°-W	4°	覆口	壺＋甕	〃
第48号甕棺墓	成人	S-14°-E	5°	接口	鉢＋甕	中期中葉
第49号甕棺墓	小児	N-83°-E	倒立	単	壺	中期前葉？
第50号甕棺墓	成人	E-W ほぼ東西	?	単？	甕	中期中葉～後葉
第51号甕棺墓	小児	N-12.5°-W	ほぼ水平	接口	鉢＋壺	中期前葉
第52号甕棺墓	成人	S-51°-E	8°	〃	甕＋甕	同
第53号甕棺墓	小児	N-74.5°-E	?	離れている	〃	同
第54号甕棺墓	成人	N-58°-W	12°	単	鉢	中期中葉
第55号甕棺墓	〃	N-83.5°-W	8.5°	接口？	甕＋甕	前期末
第56号甕棺墓	小児	S-2°-E	2°	接口	〃	中期中葉
第57号甕棺墓	〃	S-4.5°-E	11°	〃	〃	中期前葉
第58号甕棺墓	〃	S-10°-E	4°	〃	〃	中期中葉
第59号甕棺墓	成人	N-76°-E	2°	〃	鉢＋甕	〃
第60号甕棺墓	小児	S-86.5°-E	68°	単？	壺	前期末
第61号甕棺墓	〃	S-61°-E	3°	接口	甕＋甕	中期前葉
第62号甕棺墓	〃	N-50°-E	6°	〃	〃	中期中葉
第63号甕棺墓	成人	N-59°-E	48°	覆口	〃	前期末

(3)　土坑墓・木棺墓

木棺墓・土坑墓は台地上ほぼ全面にわたって検出されたが、木棺墓は特に調査区中央部から北側にかけて、土坑墓は調査区東側・南側にかけて多くみいだされた。

木棺墓は津古内畑遺跡において、調査者の一人である柳田康雄氏がA—両側板の間に小口板がはいり、西側板は小口板より長くはみ出るもの、B—両側板が小口板で止められ、両小口板が両側板の外側幅と同じか、それ以上に長いもの、の2者に分類しているので、ここではその分け方によった〔西谷正編　1970〕。

第1号土坑墓（Fig.3・217）

第1号土坑墓は調査区南側に存在する。長径197cm、幅88cmの隅丸長方形の平面プランを有する。底は若干の舟底形を呈し南側の立ち上りは、やや急である。現存の深さは22cm。遺物は出土せず、時期不明。N—21°—Wに位置する。

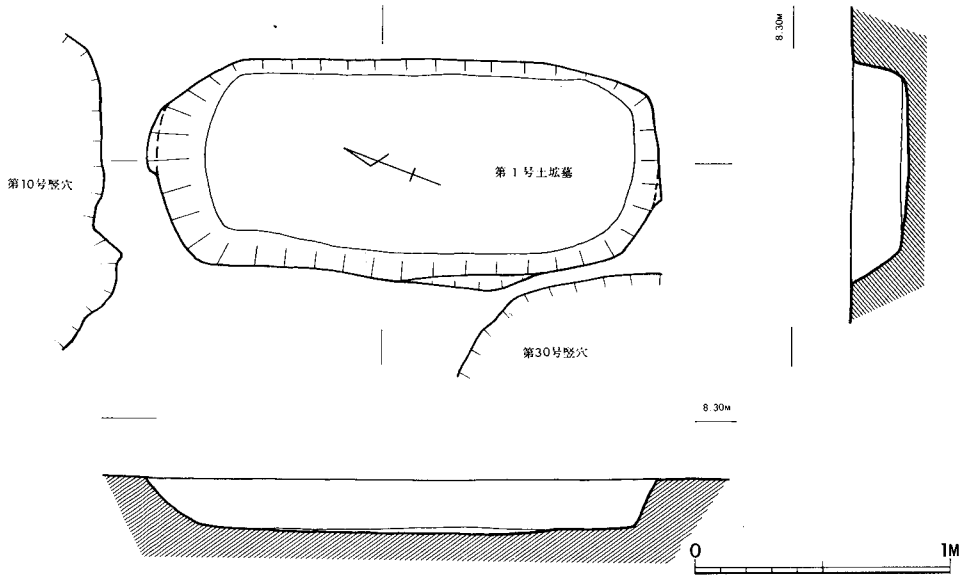


Fig.3・217　第1号土坑墓実測図

第2号木棺墓（Fig.3・218, PL.XX—1・2）

調査区中央より若干北側に存在する。長径231cm、幅155cm、現存の深さ18cmの墓坑の中央を掘り下げ、その中にA組み合せの木棺を埋置する。棺は長さ150cm、幅55cm、深さ36cmを計る。小口は西側ともに底部より29cmほど埋め込んでいた。棺材は約4cm程度の板材を用いていたと思われる。N—22°—Wに位置する。

埋土中より若干の弥生式土器片が出土した。1は外反する甕の口縁部で下端に刻目を施す。

横なで調整。2は甕の胴部で一条の三角突帯に刻目を施す。3は壺の肩部で削り出し状の三角突帯をもつ。ともに石英粒砂を胎土に含み、焼成良好。1は暗褐色、2は外面褐色・内面黄褐色、3は黒褐色を呈する。

以上の土器はいずれも板付II式の範疇に入り、この木棺墓の成立の時期は土器の示す時期以降と思われる。

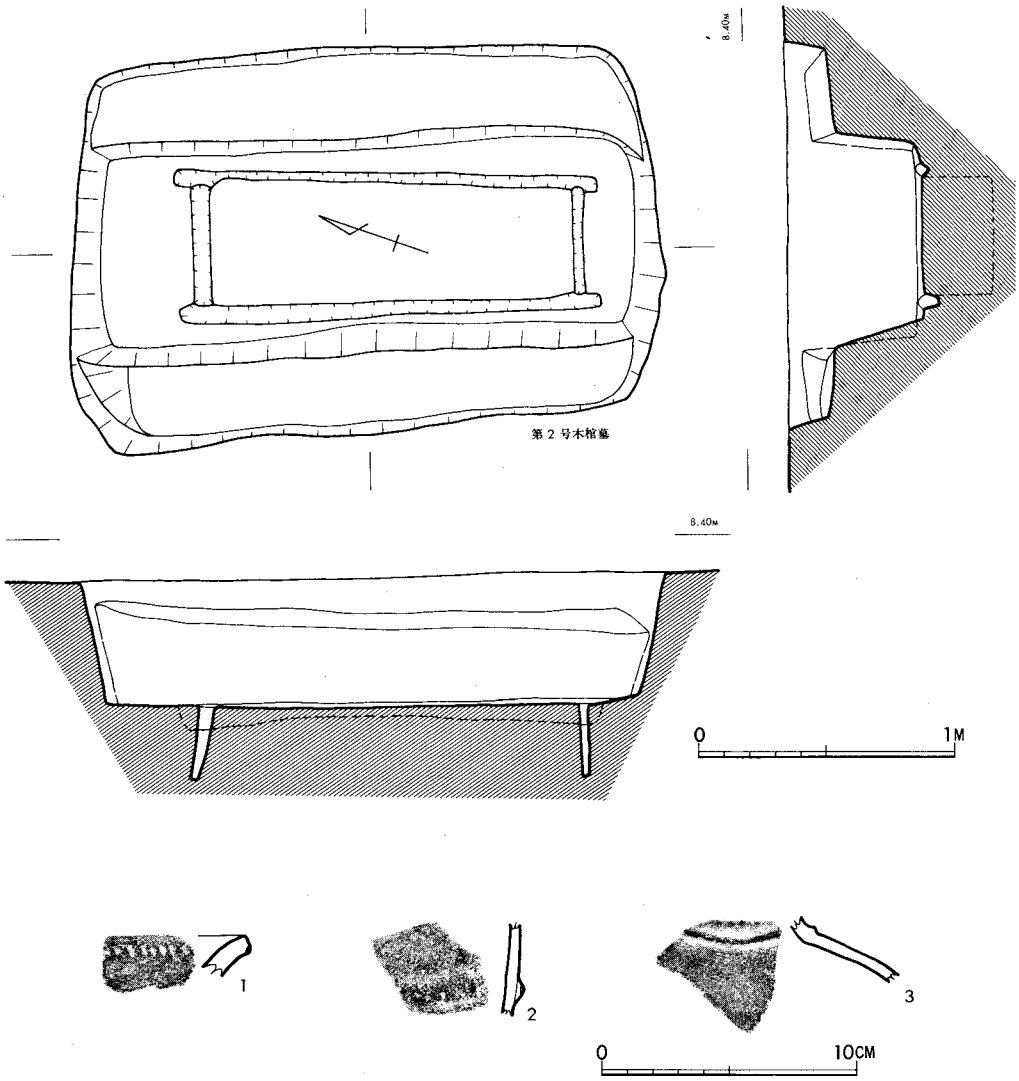


Fig.3・218　第2号木棺墓および出土土器実測図

第3号土坑墓（Fig.3・219, PL.XX－3）

調査区中央北側に存在する。小形の不整な長方形を呈する。N—57°—Eに長軸を置き、底面は北東側が高い。長径68cm、幅35cm、現存の深さは10cm。中央に不整形のピットが存在する。

底面からの深さ15cm。

第4号木棺墓（Fig.3·219, PL.XX−3）

調査区中央北側、第3号土坑墓の西側に存在する。長軸をN−3°−Eに置き、B組み合せ木棺墓と考えられる。墓坑は不明だが棺は長径96cm、幅38cm、現存の深さ15cm。小口は掘り方のみが検出されたが、北側のものは幅が短く、深い。南側のものは、幅、厚さとも大きいが浅い。北西壁の一部を後世のピットによって切られている。

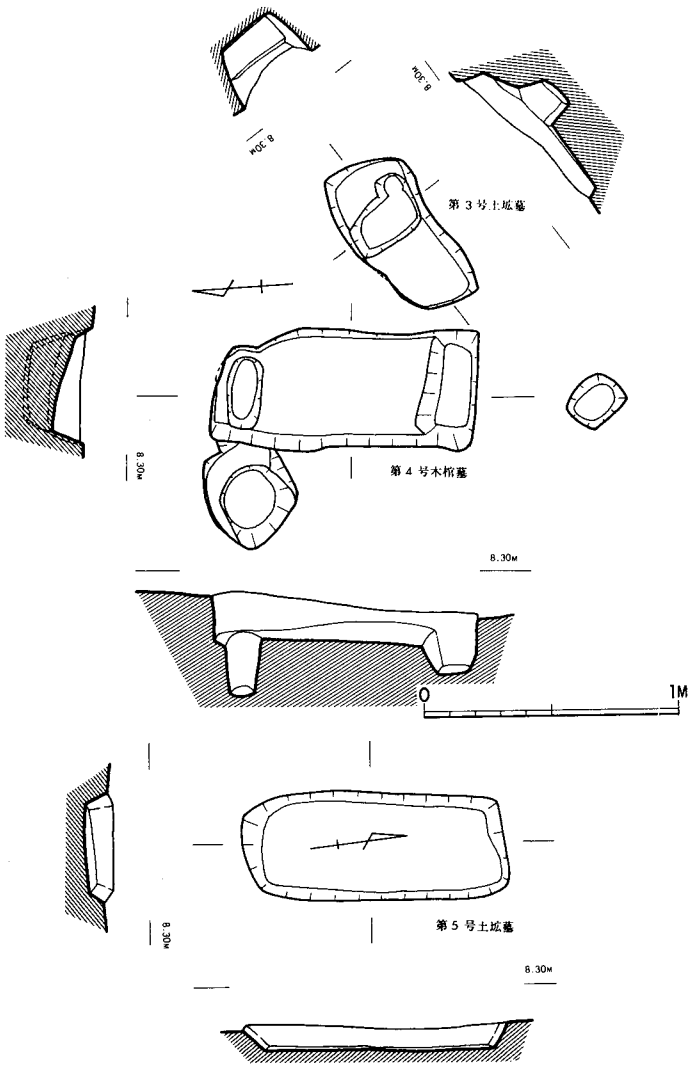


Fig.3·219　第3号土坑墓・4号木棺墓・5号土坑墓実測図

第５号土坑墓（Fig.3･219）

調査区中央北側に存在する。若干不整な長方形を呈する。長軸をN—7°—Eに置き、長径103cm、幅43cm、現存の深さ10cm。

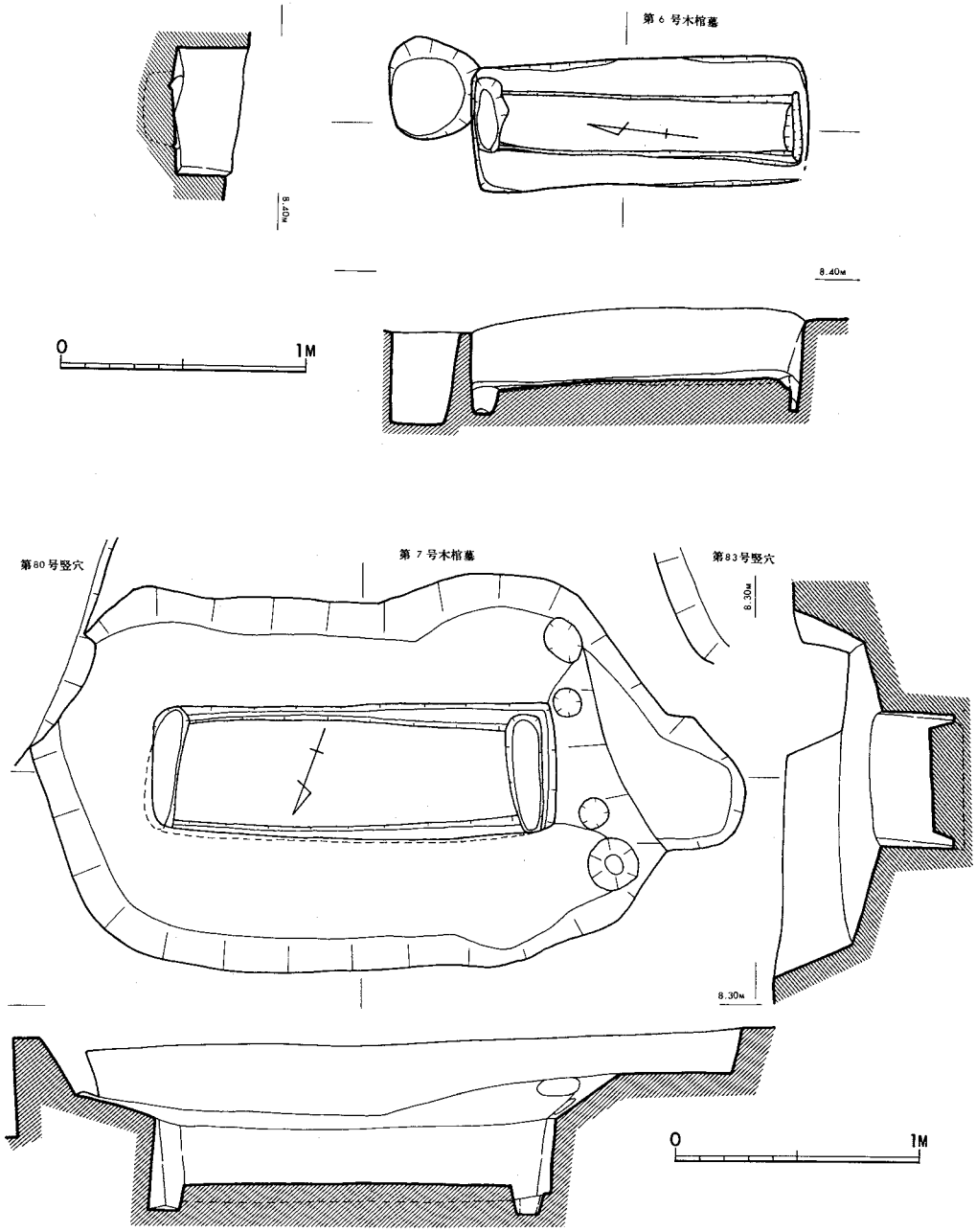


Fig.3･220　第６号・７号木棺墓実測図

第6号木棺墓（Fig.3・220，PL.XX－4）

調査区北側に存在する。長径138cm、幅52cm、現存の深さ29cmの長方形の掘り方の中に、長径133cm、幅25cmのB組み合せ木棺をN－6°－Wの位置に埋置している。棺材は南側小口痕から、小口板が4cm、両側板が2～3cmと推定される。南側の小口は、掘り方と思われるものはみつからず、あるいは打ち込んだものとも推定される。なお北側にある第6号木棺墓を切るピットからは、弥生中期中葉の丹塗り土器が出土しており、第6号木棺墓は中期中葉以前と考えられる。

第7号木棺墓（Fig.3・220）

調査区南東側に存在する。第80号竪穴を切って作られている。墓坑は長さ158cm、幅162cm、現存の深さ33cmの不整な長方形に近い。西側に後世のピットなどの攪乱がある。棺は、主軸をN—70.5°—Eに置くB組み合せ木棺で、長さ158cm、幅53cm、深さ25cmである。側板は内傾して設置されたらしい。側板の厚さ3～4cmと推定される。

第8号木棺墓（Fig.3・221）

調査区東側に存在する。検出されたのは西側小口だけである。東側小口は第24号竪穴の埋土中に設置されたらしく、検出できなかった。西側小口は、幅59cm、厚さ推定5cmの板材を利用したらしい。推定主軸N—84°—E。

第9号木棺墓（Fig.3・221，PL.XXI－1）

調査区北側に存在する。主軸をほぼ南北に置くB組み合せの小形の木棺墓で、両端に小口の掘り方が検出された。棺の大きさは長さ80cm、幅34cmで現存の深さは8cm、小口は南で24cm、北で28cm、底面より掘り込まれており、南小口の掘り方から板材の厚さは3～4cmと推定される。また小口板は両方とも内傾して埋置されたらしい。

第10号土坑墓（Fig.3・211）

調査区北側に存在する。北側が広くなり隅丸の長方形状を呈する。主軸N—3°—E、長さ162cm、幅60cm、現存の深さ34cm。

埋土中より若干の弥生式土器が出土した。1は外反する甕の口縁の下端に刻目を施し、横なで調整。2は壺の胴部で細い沈線で斜めと横に文様を巡らす。3は甕の底部で、若干の上げ底を呈する。ともに石英粒砂を含み、焼成良好。1は暗褐色、2は赤褐色、3は黄褐色を呈する。1、2は板付II式、3は夜臼式に比定される。ゆえにこの木棺墓は板付II式以後のものと思われる。

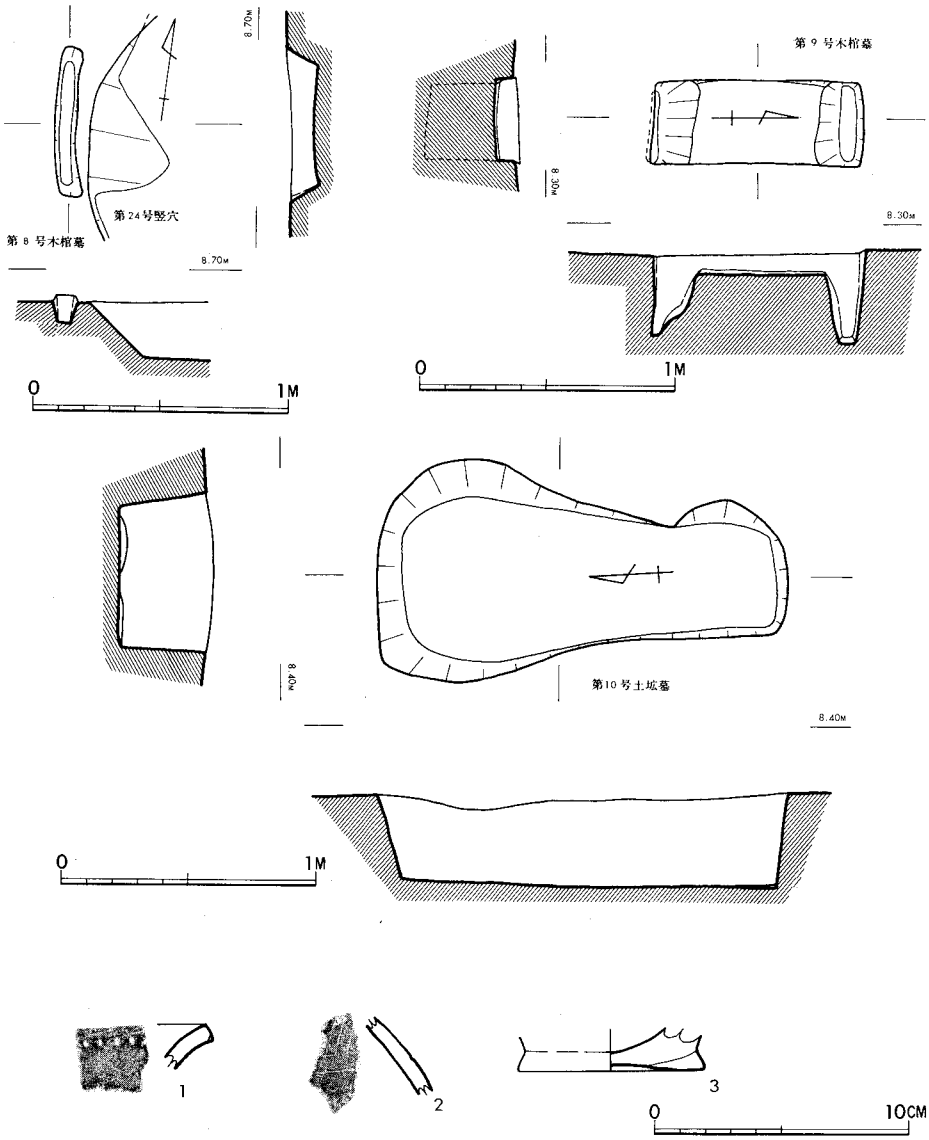


Fig.3･221　第８号・９号木棺墓・10号土坑墓および出土土器実測図

第11号木棺墓（Fig.3･222, PL.XXI－2）

調査区北側に存在する。長さ139cm、幅55cmの長方形の掘り方の中に、長さ123cm、幅27cmのＡ組み合せ木棺をＮ－9.5°－Ｗの位置に埋置する。南側に長方形の枕状の造り出しがある。底面も南側が高い所から、こちらが頭部と推定される。また５cm以下の板材を棺材として使用しているものと思われる。

第12号木棺墓（Fig.3･222）

調査区北側に存在する。北西端一部は調査区外のため未発掘。長さ244cm、幅163cm、現存の深さ30cmの墓坑の中に長さ142cm、幅48cm、深さ22cmのＢ組み合せ木棺をＮ－4.5°－Ｅの位置に埋置したものである。また棺と墓坑の間にもう一つ段がつけられているが、棺蓋を置くとするならば、やはりこの段より、下段の方とする方が妥当であろう。

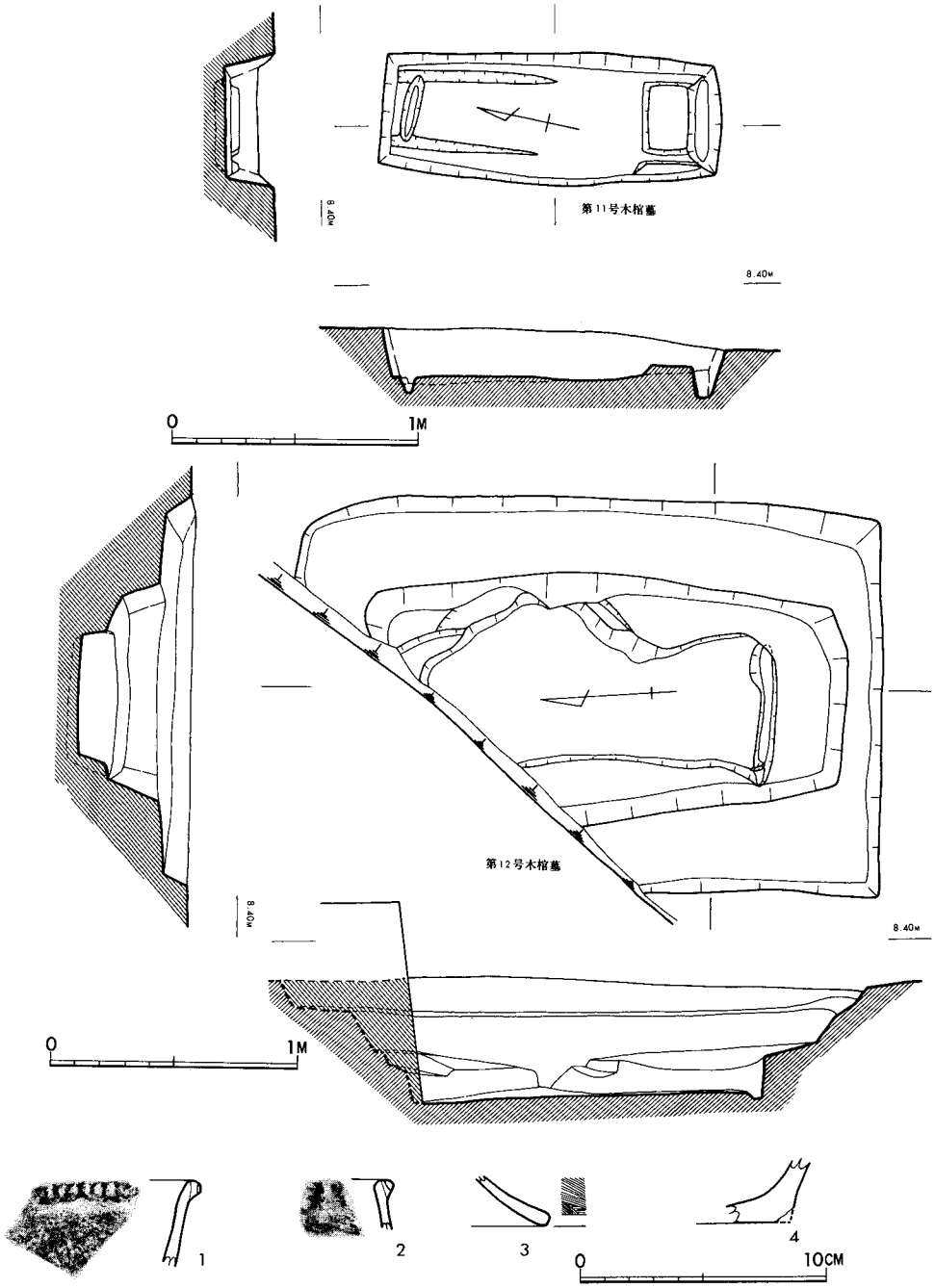


Fig.3･222　第11号・12号木棺墓および出土土器実測図

埋土中より、若干の弥生式土器が出土した。１、２は口縁部に刻目突帯をもつ夜臼式である。ともに石英粒砂を含み、焼成良好。１は暗黄褐色、２は赤褐色を呈する。３は高坏の脚部であろうか。外面は細い刷毛目調整。４は底部である。ともに石英粒砂を含み、焼成良好。３は暗褐色、４は黄褐色を呈する。これらは板付Ⅱ式の範疇に入るものと思われ、第12号木棺墓の上限を示すものであろう。

第13号木棺墓（Fig.3･223，PL.XXI－3）

調査区北側に存在する。ほとんど削平されているが、小口および側板の痕跡が残っている。主軸をN－1°－Eとほぼ南北に置き、長さ150cm、幅50cmのA組み合せ木棺である。板材の厚さは３～５cmのものを使用したらしい。

第14号木棺墓（Fig.3･224，PL.XXI－4）

調査区北側に存在する。上半部の大半を削平されている。長さ191cm、幅96cmの若干南側が広くなる掘り方の中に、長さ155cm、幅53cmのA組み合せ木棺をN－1°－Wのほぼ南北に埋置する。この木棺の棺材も４cm内外のものを使用していると推定される。

埋土中から若干の弥生式土器が出土している。１～３、５は夜臼式である。１は甕の口縁部、２・３は胴部、５は底部である。１の刻目は貝殻か櫛状のもので施されている。２・３には条痕がみられる。ともに石英粒砂混、焼成良好。１は突帯の付近は黒色、外面暗褐色、内面黄褐色。２は暗褐色、３は淡黒褐色。５は若干上げ底で、いわゆる三角貼付けを行っている。胎土、焼成は前と同様だが、暗黄褐色を呈する。３は外反する口縁に刻目を施す甕の口縁部で、石英粒砂を含み焼成良好。外面淡黄褐色、黄褐色を呈する。板付Ⅰ式の範疇に入ると思われる。第14号木棺墓は板付Ⅰ式の時期以後に埋置されたものと推定される。

第15号木棺墓（Fig.3･224，PL.XXI－5，XXIII－5）

調査区北側に存在する。長さ215cm、幅133cm現存の深さ20cmの墓坑中に、長さ155cm、幅76cmの掘り方がある。その中に、長さ137cm、幅55cm、深さ16cmのA組み合せ木棺をN－4.5°－Eの方向に埋置している。棺材は４cm内外の厚さのものを使用していたと推定される。

埋土中から若干の弥生式土器片が出土した。１は外反する口縁の下端に刻目を施す甕の口縁部で、石英粒砂を含み、焼成良好、黄褐色を呈する。２は外反する壺の口縁部で、砂を含み、焼成良好、褐色を呈する。ともに板付Ⅱ式に比定され、この木棺墓の上限を示すものであろう。

第16号木棺墓（Fig.3･224，PL.XXII－1）

調査区北側において検出された。墓坑はすでに削平されていて掘り方と棺の痕跡しか残っていなかった。堀り方は長さ158cm、幅90cmで、その中に長さ158cm、幅60cmのA組み合せ木棺をほぼ南北に埋置していた。掘り方と棺の長さが同じのため、側板の両端は両方とも掘り方の外にまでのびていた。棺材は３～５cmの厚さと推定される。

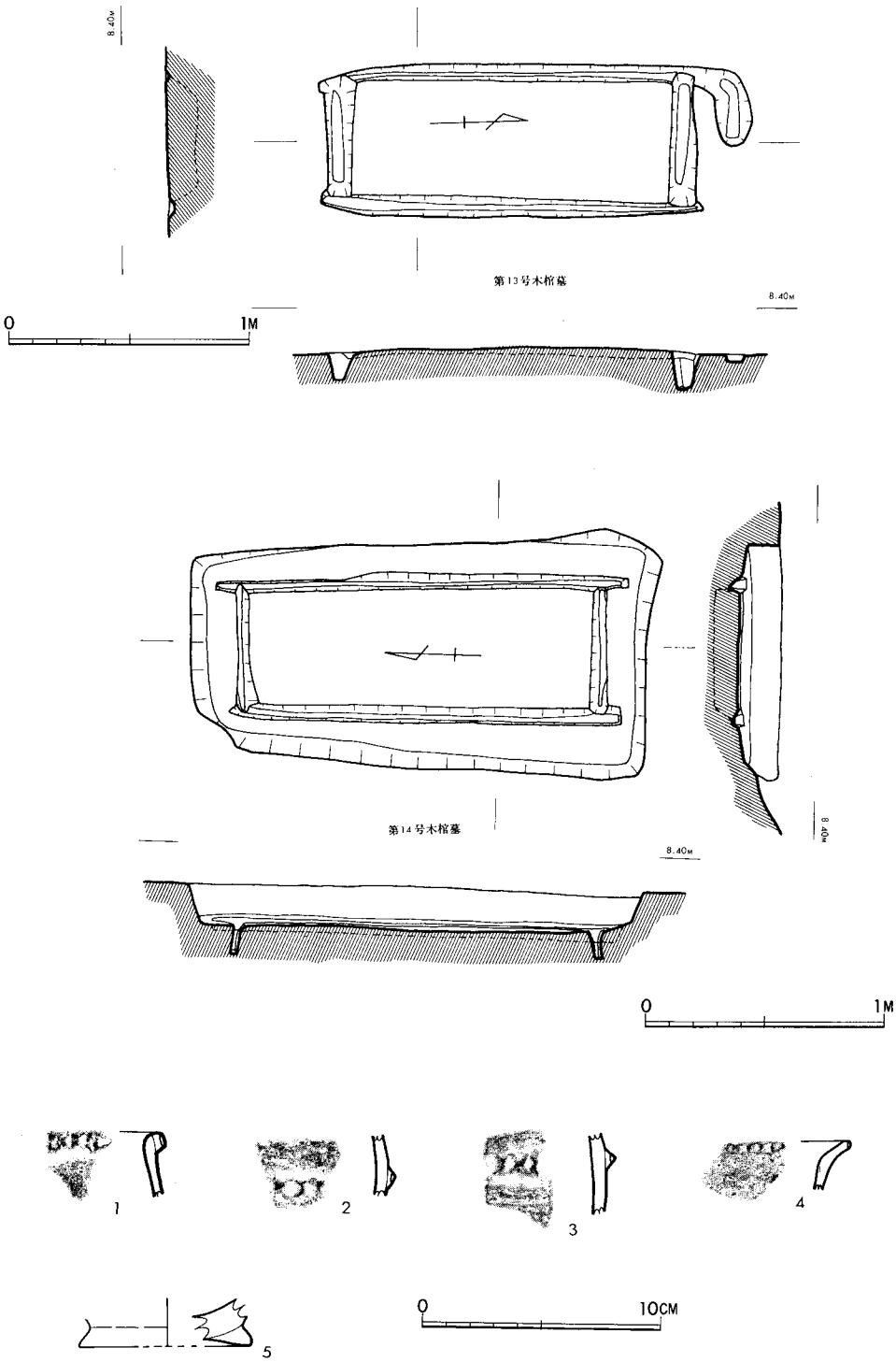


Fig.3・223　第13号・14号木棺墓および出土土器実測図

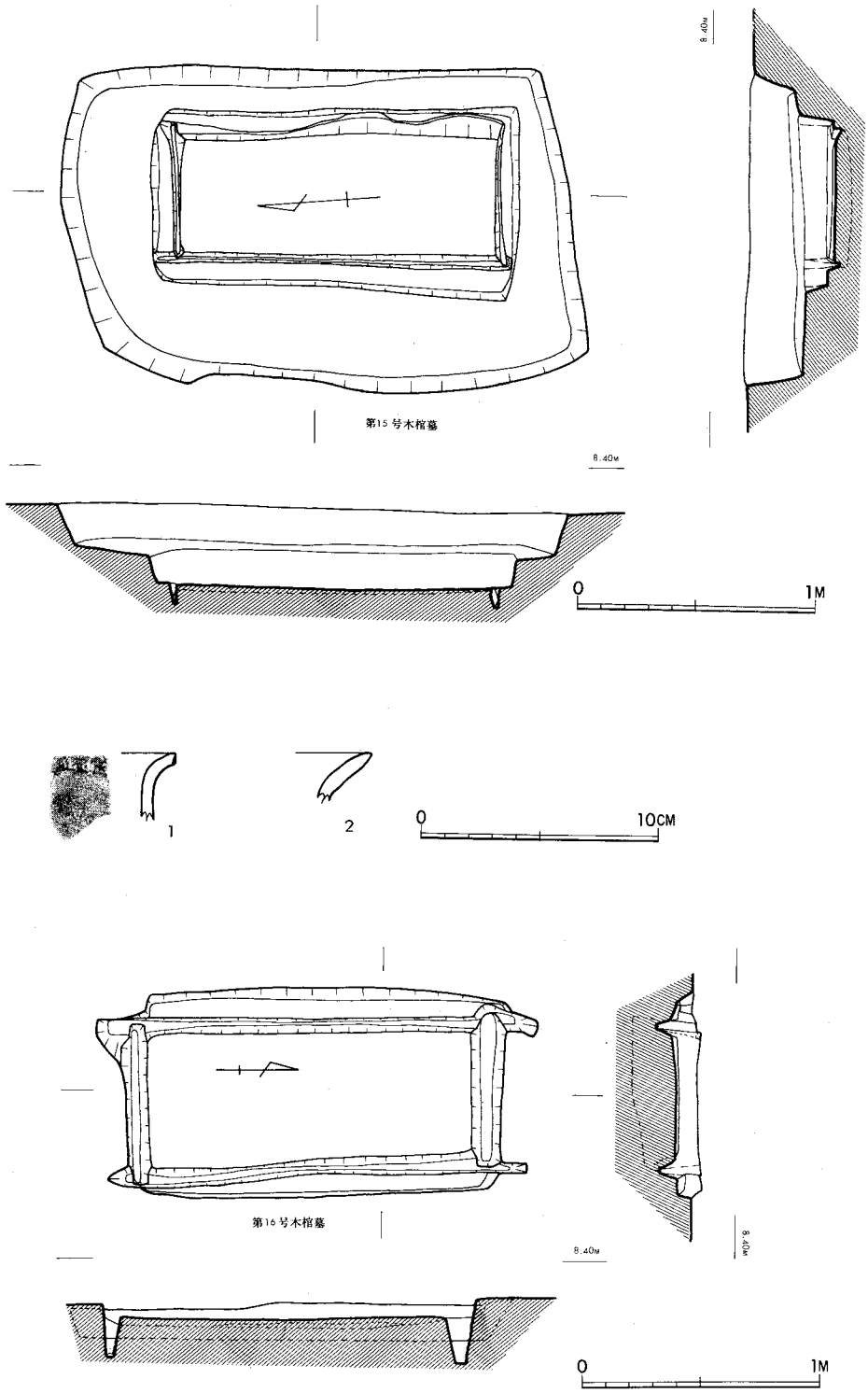


Fig.3・224　第15号・16号木棺墓および出土土器実測図

第17号木棺墓（Fig.3･225）

調査区北端近くで検出された。上半部をほとんど削平されている。また小口も南側のみ確認された。棺は主軸をN—12.5°—Eに向け、長さ123cm、幅41cmのＢ組み合せ木棺である。東側板は内傾しているが、西側板および南側小口は外傾していたと推定される。北側の小ピットは用途不明。

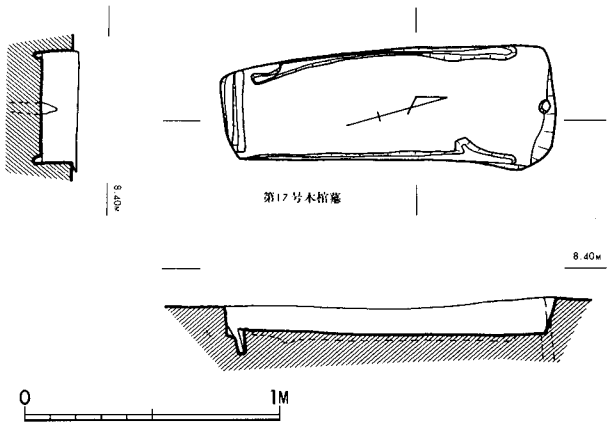


Fig.3･225　第17号木棺墓実測図

第18号土坑墓（Fig.3･226）

調査区中央西寄りに存在する。主軸をほぼ南北に向ける隅丸長方形を呈するが、北側は後世のピットによって切られている。また、南側も一部不整形の浅い落ち込みがある。長さ154cm、幅80cm、現存の深さ50cm。

埋土中から若干の土器片が出土した。１は口縁直下に断面三角形の刻目突帯をもつ夜臼式の甕で、外面は条痕調整。２・３は壺の口縁部で口縁の発達はあまりない。４は壺の肩部で、接合部が、内外面とも段を有している。２～４はともに板付Ｉ式に比定されよう。１～３は石英粒砂混、焼成良好。１～３は暗黄褐色、２は淡黒褐色を呈する。４は砂を含むが胎土、焼成とも良好。暗黄褐色を呈する。この土坑墓は、弥生前期初頭以後に掘られたものであろう。

第19号土坑墓（Fig.3･226）

調査区中央西寄りで検出された。第36号竪穴より新しい。主軸をN—10°—Wに向けた長方形を平面プランとしてもち、長さ142cm、幅62cm、現存の深さ47cmをはかる。南側壁上部は後世のピットによる攪乱がある。

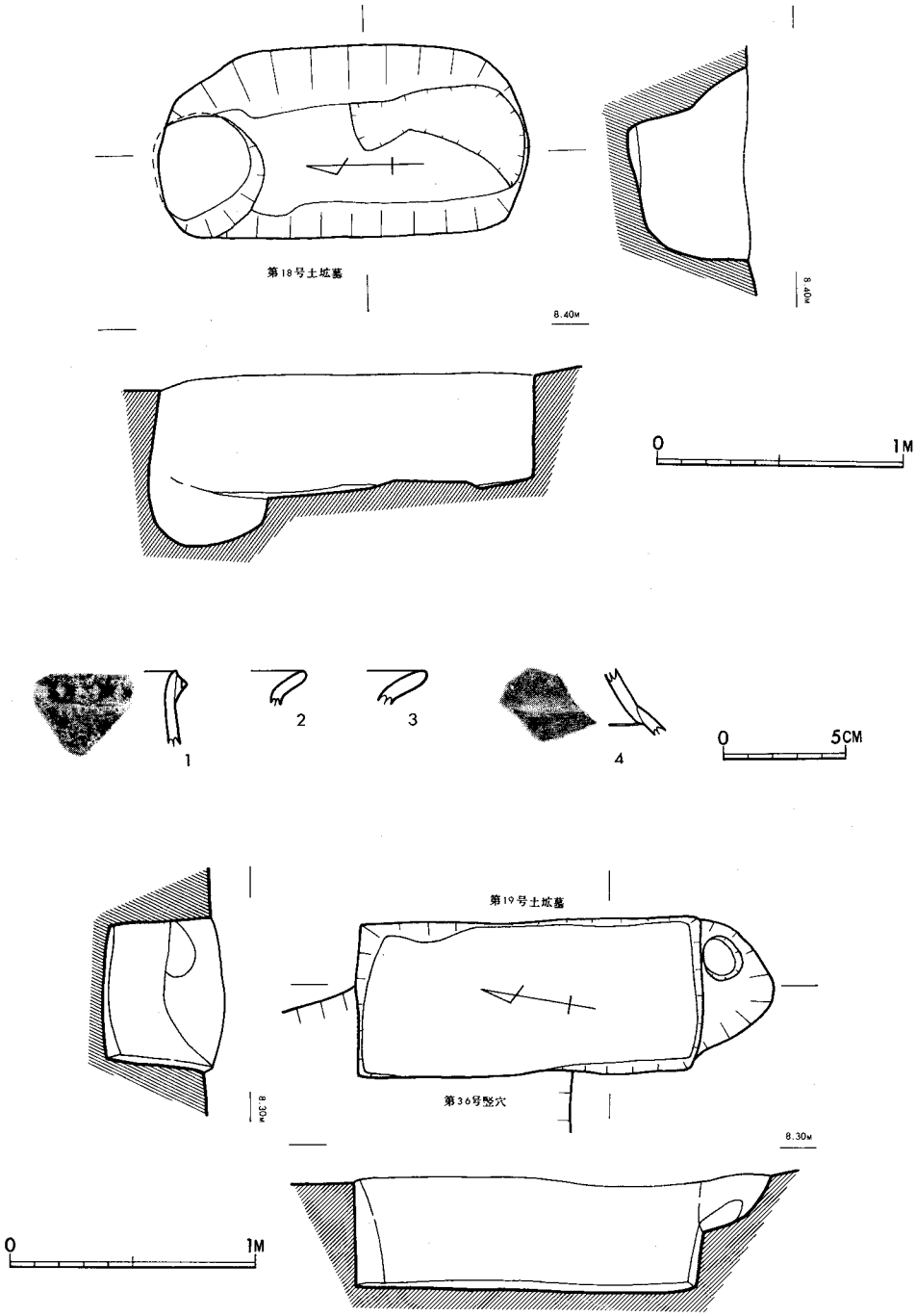


Fig.3·226　第18号・19号土坑墓および出土土器実測図

第20号木棺墓（Fig.3・227，PL.XIX－5，XXII－2）

調査区中央若干北東寄りに存在する。長さ194cm、幅106cm、現存の深さ34cmの長方形の墓坑中に掘り方を掘り、両端に小口の掘り方を設けたもので、B組み合せ木棺と推定される。棺は長さ125cm、幅48cm、深さ20cmで主軸をN—69°—Wに向ける。木口板、両側板とも内傾していたと考えられる。わずかに西側の方が幅広くなる。

埋土中から弥生式土器片数点が出土した。1は外反する口縁上部に貼付けを行って肥厚させ、その口縁上下両端に刻目を施した大形の甕で、外面横なで、内面には横刷毛目調整を行う。2は外反する口縁下端に刻目を施した甕である。3は内彎する口縁外面に断面三角形の刻目突帯を巡らし、内面にも若干の貼付けを行った甕で横なで調整を施す。4は外反する壺の口縁部である。5は底部で外面縦刷毛目調整。いずれも石英粒砂を含み、焼成良好。1・2は赤褐色、2・4は黄褐色、5は外面淡暗褐色、内面黄褐色を呈する。以上の土器はこの木棺墓の上

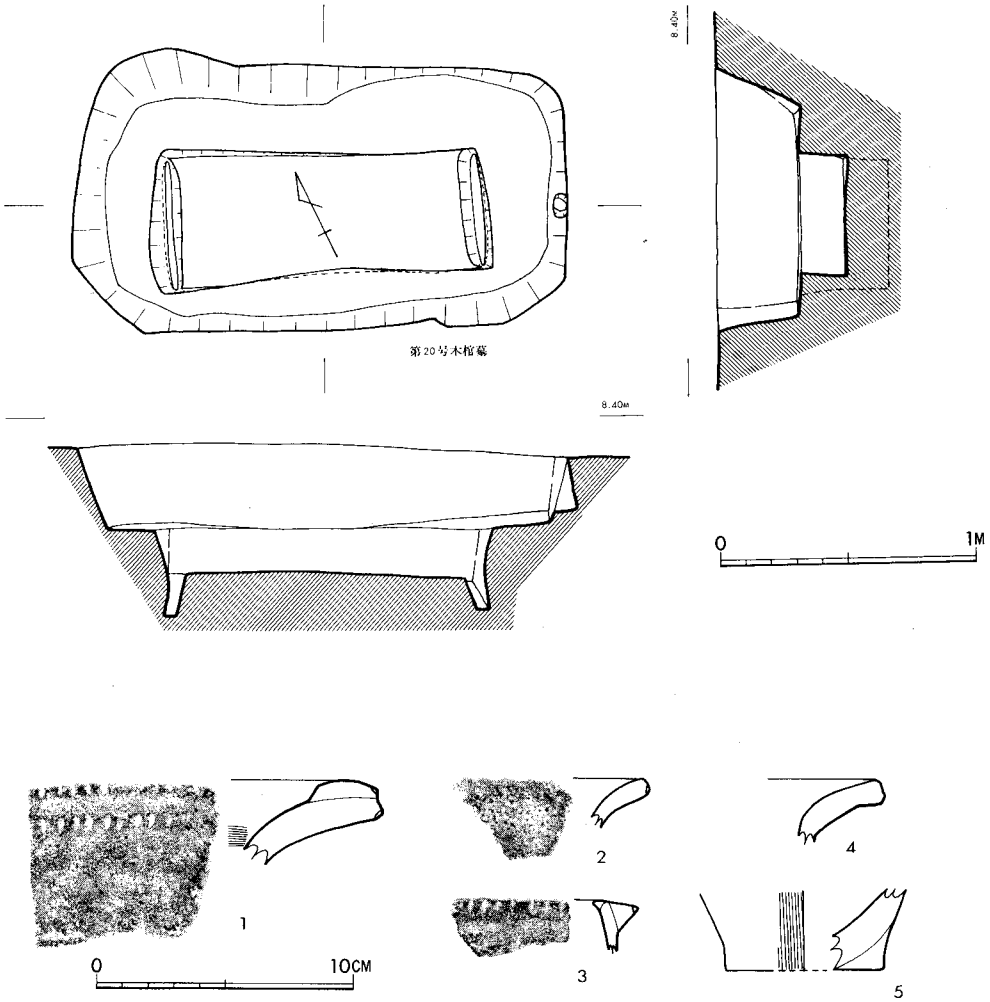


Fig.3・227　第20号木棺墓および出土土器実測図

限を示し、第20号木棺墓は弥生時代前期末以降のものであろうか。

第21号木棺墓（Fig.3･228，PL.XXII－4）

調査区中央北東寄りに所在する。第21号竪穴、第33号竪穴，第39号甕棺墓、第55号甕棺墓より新しい。墓坑は推定で長さ190cm、幅113cm、現存の深さ20cmで、その中にＢ組み合せ木棺を埋置する。掘り方が棺の大きさに従って掘られている。この点は第20号木棺墓と同じであるが、こちらは東側が若干幅広くなる。棺は長さ140cm、幅50cm、深さ33cmで、主軸はN―74°―Wに向ける。西側小口板は内傾していたと考えられる。

若干の土器片が埋土中より出土したが図示できるのは１片のみである。若干内傾する口縁で断面三角形の突帯を貼付けて巡らす。刻目はない。石英粒砂を含み、焼成良好、赤褐色を呈する。この木棺墓はこの土器と、前期の甕棺との切り合いにより、前期末より新しいものである。

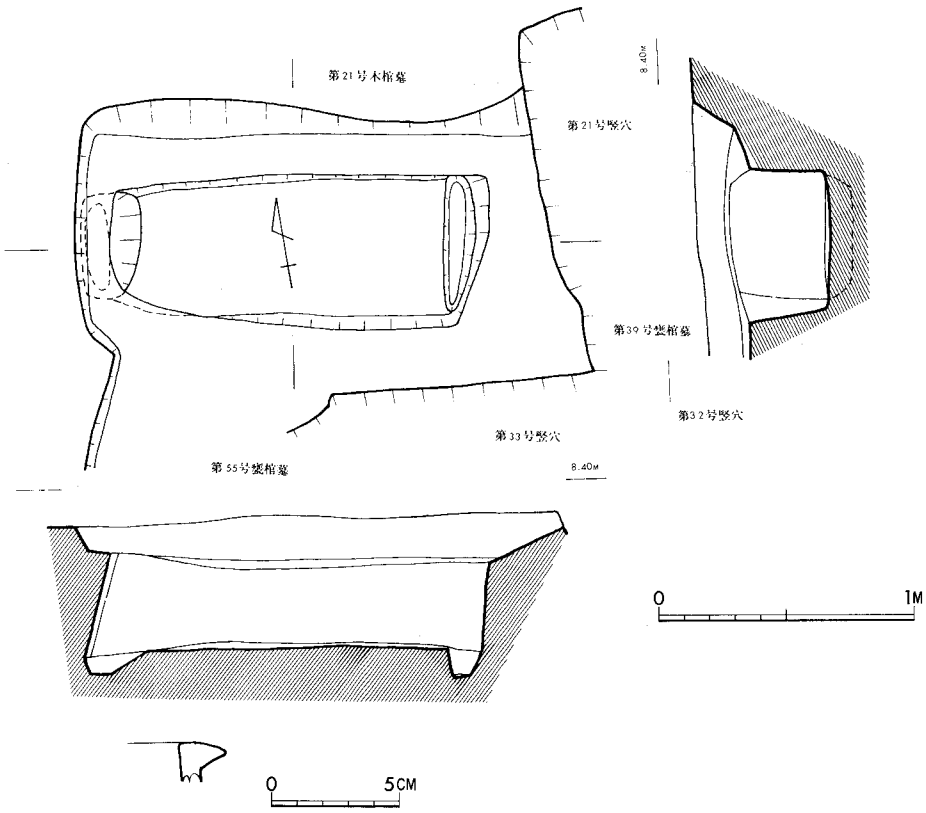


Fig.3･228　第21号木棺墓および出土土器実測図

第22号木棺墓（Fig.3・229）

調査区中央若干南寄りで検出された。長さ225cm、幅168cm、現存の深さ26cmの長方形の墓坑の中に木棺を埋置する掘り方である。木棺の痕跡は西側小口のみであるので、Ａ・Ｂいずれの組み合せか不明。棺は長さ160cm、幅43cm、深さ25cmと推定される。主軸はN－68°－Eを向く。墓坑西側に数個の後世のピットの攪乱がある。

埋土中に数個の弥生式土器が出土した。１は強く外反する口縁の下端に刻目を施す甕で、外面縦刷毛目、内面横なで調製。２も外反する口縁を持つ甕だが１ほど強くなく、刻目もない。３は外反する口縁をもつ大形の甕だが、口縁上部の貼付けが剝離している。口縁下端には刻

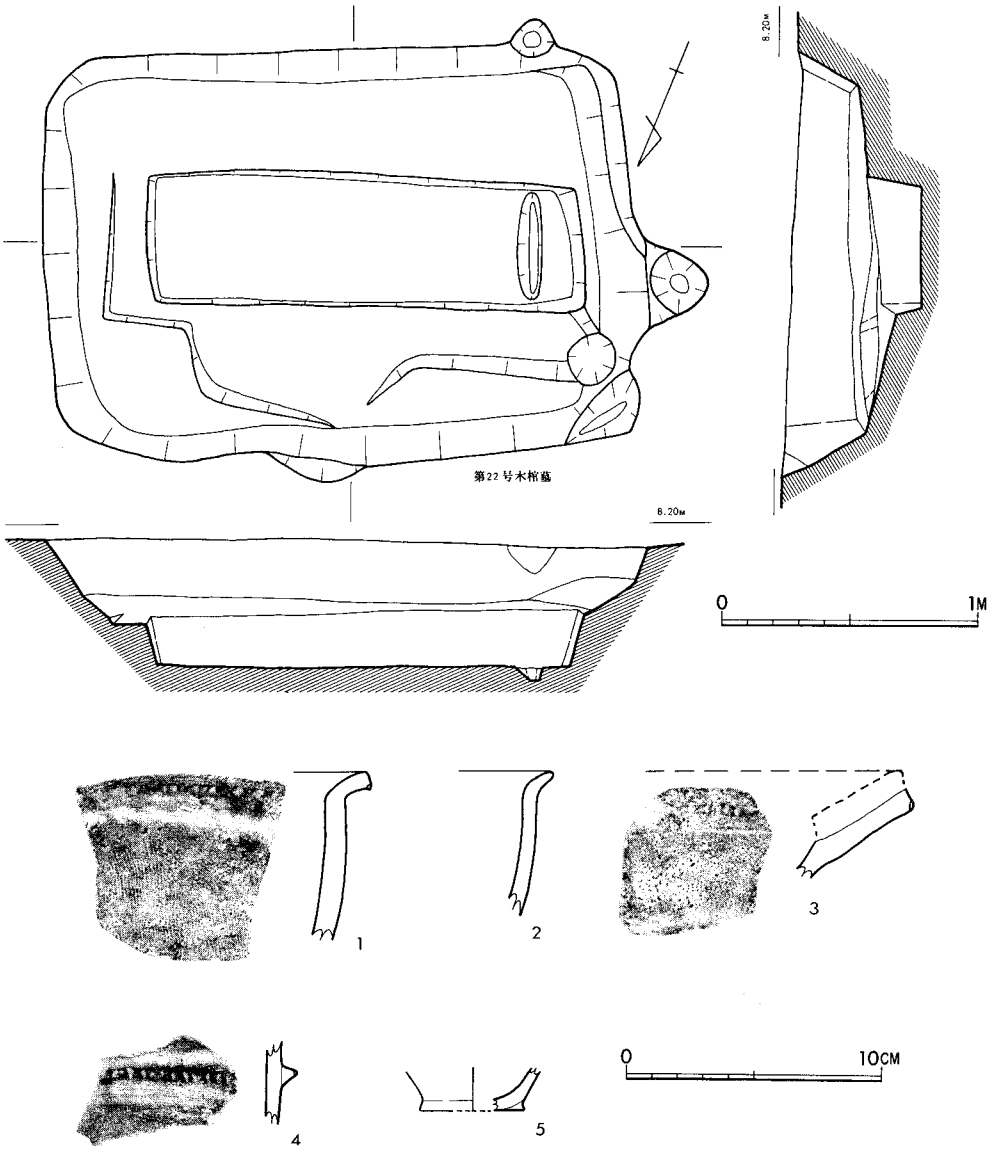


Fig.3・229　第22号木棺墓および出土土器実測図

目。横なで調整。４は甕の胴部で、断面が高い三角をなし刻目の小さな突帯をもつ。横なで調整。５は小形の壺の底部と思われる。いずれも石英粒砂混、焼成良好。１は外面赤褐色・内面黄褐色。２～４は黄褐色。５は外面黒褐色・内面黄褐色。これらはいずれも板付Ⅱ式の範疇に入るもので、この木棺墓は前期末以降の所産であろう。

第23号木棺墓（Fig.3･230，PL.XXⅡ－3）

調査区ほぼ中央に存在する。長さ281cm、幅187cm、現存の深さ33cmの墓坑は第11号竪穴を切っており、この竪穴より新しいことがわかる。側板痕は東側のみしか検出されなかったが、棺はＢ組み合せ木棺と推定され、長さ164cm、幅55cm、深さ12cm。主軸はＮ２°―Ｅを向く。

第24号木棺墓（Fig.3･231，PL.XXⅢ－2）

調査中央西寄りに存在する。調査された木棺墓としては最も南側にあたる。第44号竪穴・第53号竪穴を切っており、第58号甕棺墓に切られている。墓坑は，西壁と北壁の一部を後世のピットで切られ、また先述の竪穴、甕棺との切り合いで、南壁、東壁もはっきりしないが長さ116cm、幅109cm、現存の深さ25cmの長方形と推定される。墓坑中に棺に合わせて掘

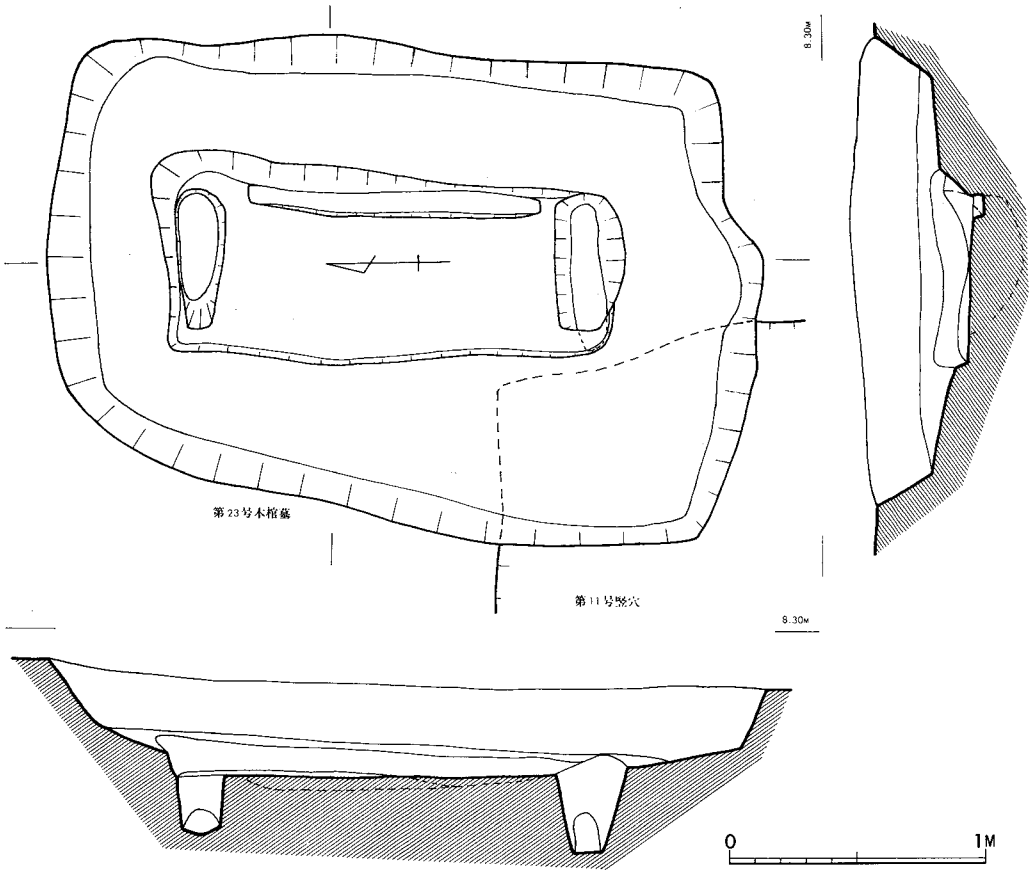


Fig.3･230　第23号木棺墓実測図

り方の壁に沿って置かれたと思われる。北小口は2ヶ所検出されたが、内側のものが外側に比べて若干浅い。どちらが使用されたか不明だが、長さが内側で112cm、外側で122cm、幅35cm、深さ27cmのB組み合せ木棺で、主軸はN—4°—Wを向く。木口痕は3個ともに掘り方を掘らず2～3cmの厚さの板材を打ち込んだ様な状態ではないかと考えられる。

棺の埋土中から若干の土器片が出土した。1・2はともに内傾する口縁部外側に刻目突帯をつけた甕である。4は肥厚し外反する壺の口縁部である。5は壺の肩部。3以外は石英粒砂を含むが胎土は良好。焼成はいずれも良好。2には煤付着。1・2は暗褐色、3は黄褐色、4は暗赤褐色、5は赤褐色。この木棺墓は前期中葉の竪穴を切り、中期中葉の甕棺墓から切られているところから、前期末～中期前葉の時期と推定される。

第25号木棺墓（Fig.3・232, PL.XXIII—4・5）

調査地北側で検出された。墓坑はもとより棺も上半部を削平されている。掘り方は長さ107cm、幅81cmの長方形で長軸がN－8°－Eを向いているが、棺はやや東にふれてN—11.5°—Eの方向に埋置されている。両小口の掘り方のみ検出されたため組み合せの形式はわからない。棺の大きさは長さ 149cm、幅48cm、北側小口の掘り方が深い。また掘り方の西壁北寄りの所に後世のピットの攪乱がある。

第26号木棺墓（Fig.3・232, PL.XX—6）

調査区東側で検出された。木棺の痕跡は西側小口の掘り方のみである。組み合せは不明。棺は長さ110cm、幅36cmで、主軸はN—82°—Eを向く。底面は東側が高い。

埋土中から一片の土器片が出土した。外反する口縁の下端に刻目を施し、横なで調整。口縁下外面は刷毛目調整。石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。板付II式の甕である。この木棺墓は板付II式以降のものであろう。

第27号土坑墓（Fig.3・232, PL.XIX—6）

調査区東側に存在する。主軸をN—73°—Eに向け、長さ126cm、幅51cm、現存の深さ47cmの長方形プランを持つ。

埋土中より弥生式土器の底部が出土した。若干の上げ底を呈し、石英粒砂を含み、焼成良好、黄褐色を呈する。

第28号土坑墓（Fig.3・233, PL.XIX—6）

調査区東側に存在する。長さ146cm、幅46cmの長方形プランで、主軸はN—70°—Eを向く。底面は東側が低い。

埋土中から玉と思われるものが出土した。これは結晶片岩を磨いたもので、勾玉の先端破片と推定される。

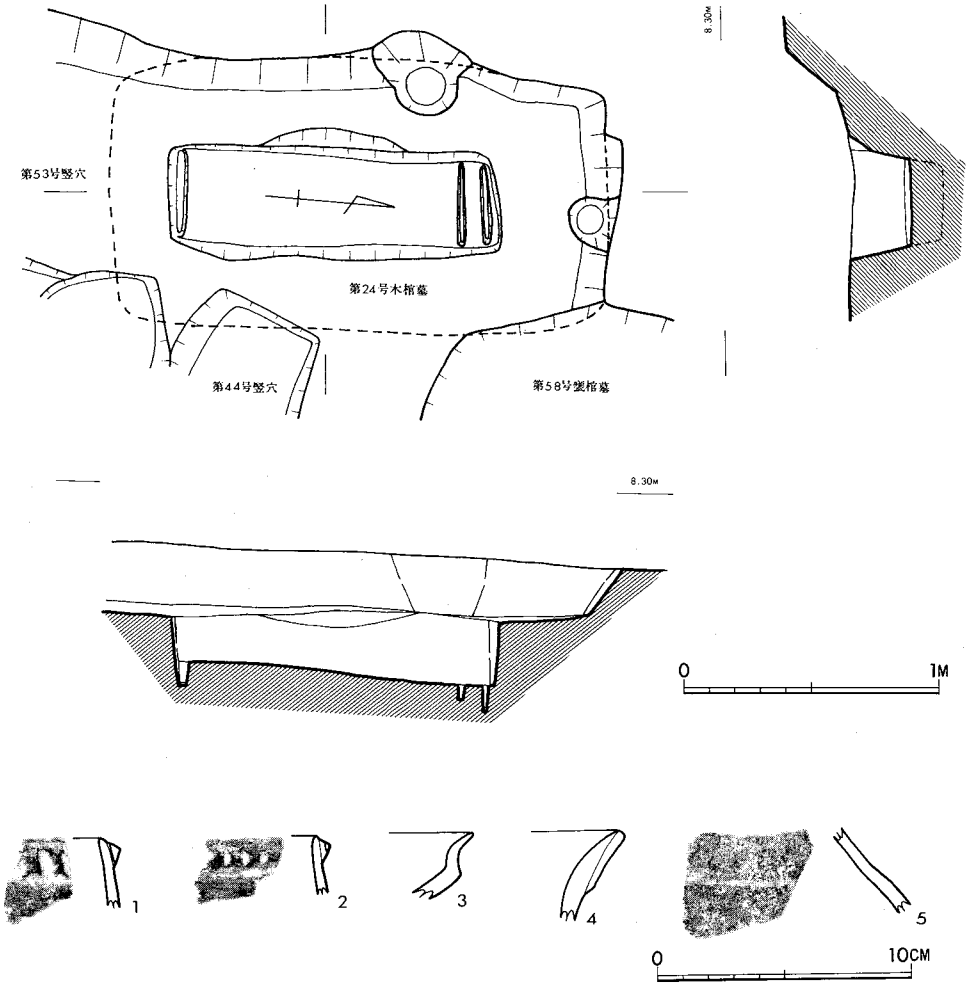


Fig.3・231　第24号木棺墓および出土土器実測図

第29号土坑墓（Fig.3・233）

調査区東側に存在する。第23号竪穴を切って作られている。長さ169cm、幅60cmの長方形プランで、主軸はN—76°—Eを向く。

第30号土坑墓（Fig.3・234）

調査区東側で検出された。ほとんど上半部を削平されており、北側の一部は未発掘である。長さ推定110cm、幅55cm。主軸はN—19°—Eを向く。

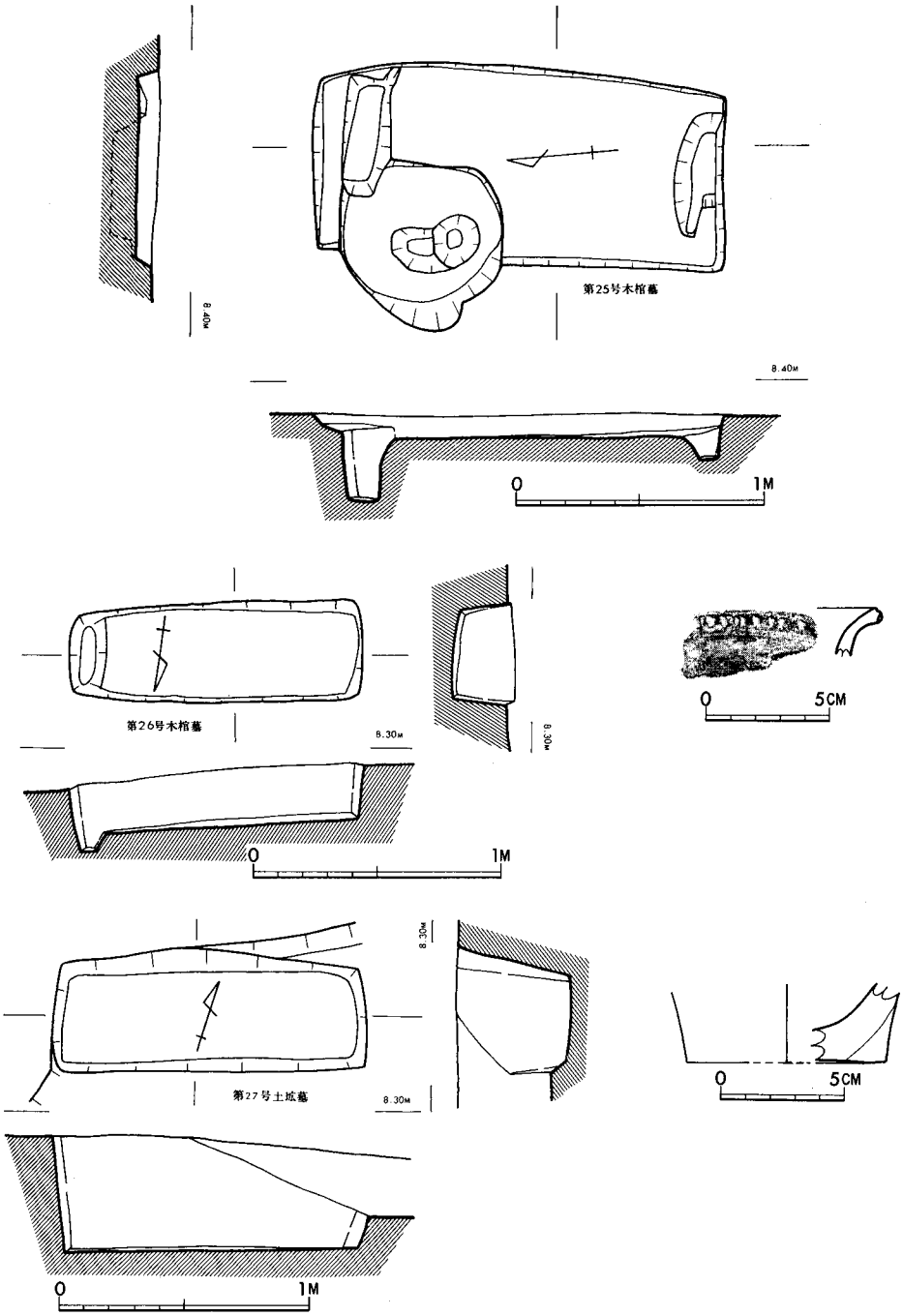


Fig.3・232　第25号・26号木棺墓・27号土坑墓および出土土器実測図

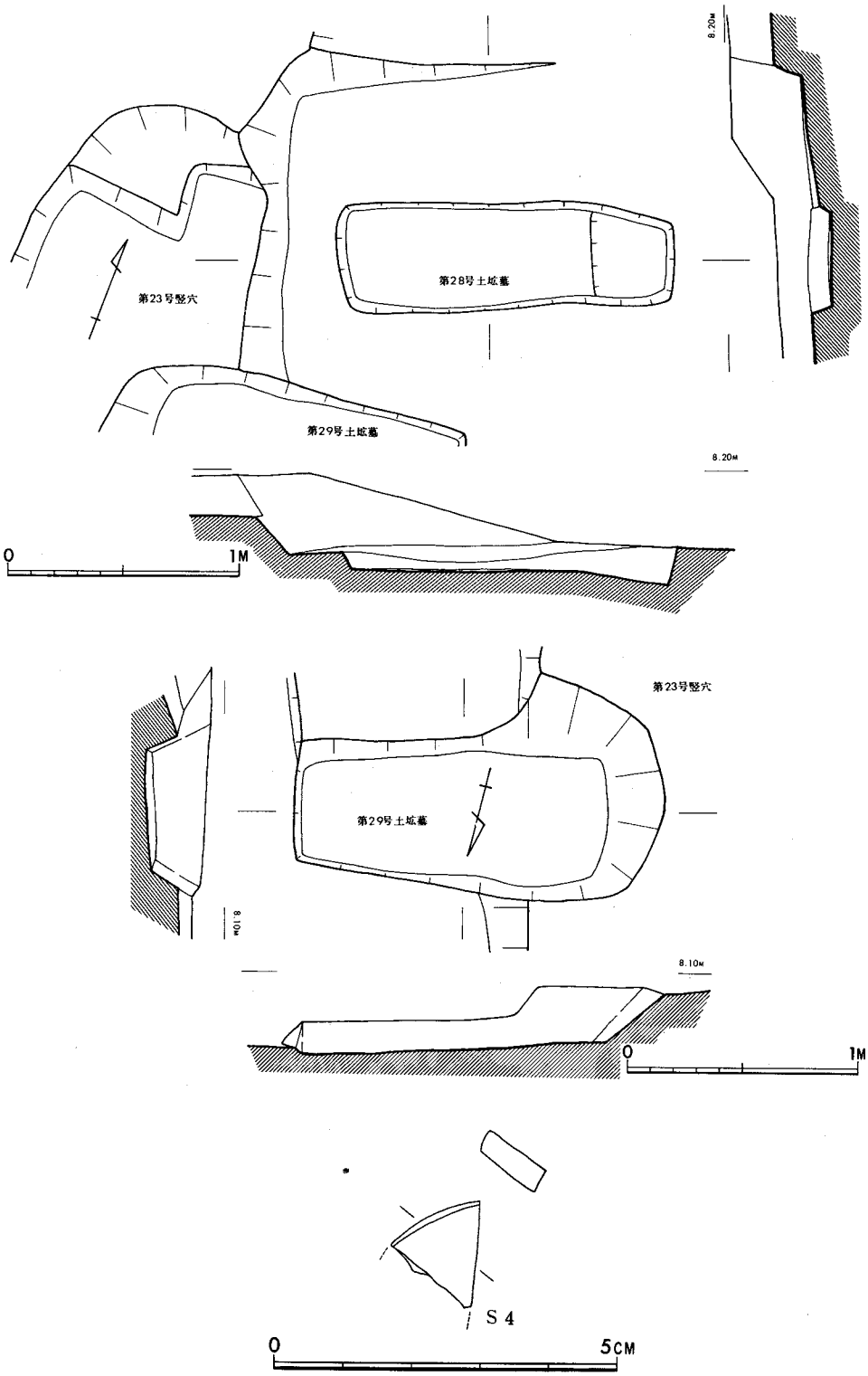


Fig.3・233　第28号・29号土坑墓実測図

第31号土坑墓（Fig.3・234）

調査区東側で検出された。ほとんど上半を削平されており、北東壁の一部未発掘。長さ100cm、幅50cmの隅丸長方形をなし、主軸はN—39°—E。南東壁西寄りに、直径28cmの自然石が存在した。

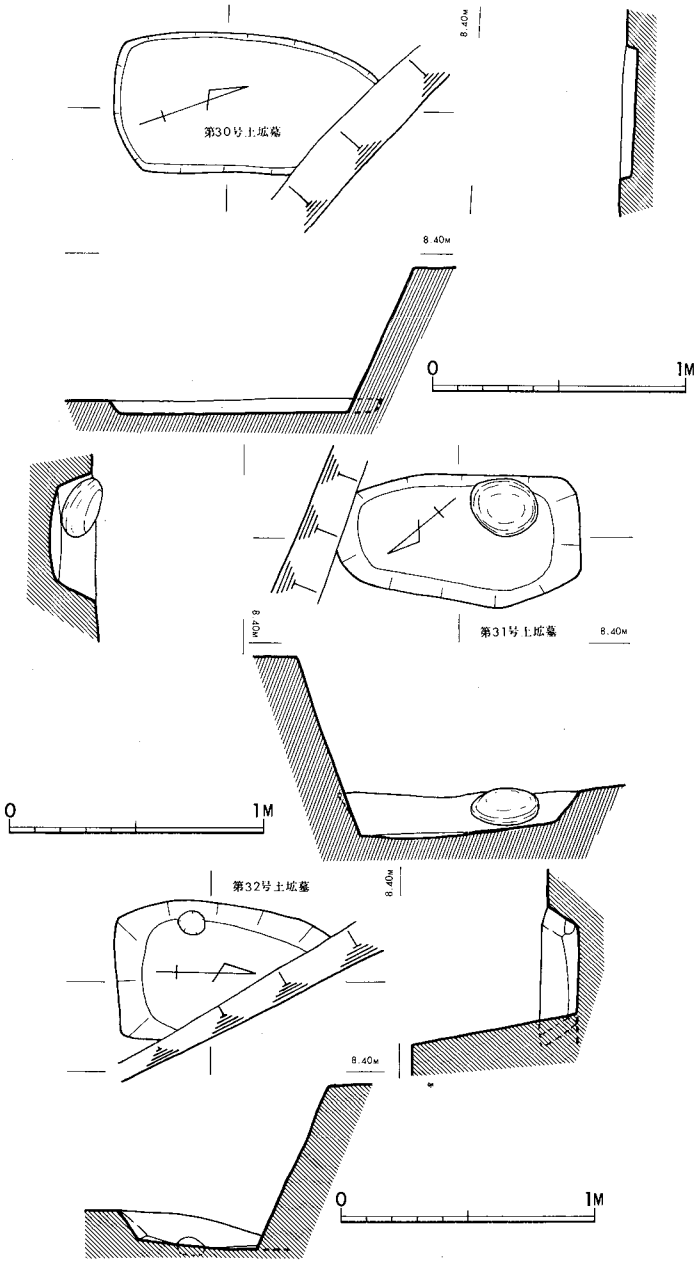


Fig.3・234　第30号・31号・32号土坑墓実測図

第32号土坑墓（Fig.3・234）

調査区東側に存在する。ほとんど上半を削平されている。北東の一部未発掘。推定長さ85cm、幅55cm。主軸はN—2°—Wを向く。西壁南寄りに後世のピットの攪乱がある。

第33号土坑墓（Fig.3・235）

調査区東側に存在する。上半をほとんど削平されているが、長さ107cm、幅67cm。主軸はN—22°—Eを向く。

第34号土坑墓（Fig.3・235）

調査区東側に存在する。上半をほとんど削平されている。長さ102cm、幅42cm。N—8°—Eに位置する。底面は南側が若干高くなっている。

第35号土坑墓（Fig.3・235）

調査東側に存在する。大部分削平されているが、長さ138cm、幅57cm。N—7°—Wに位置する。南側は若干幅がせまくなる。

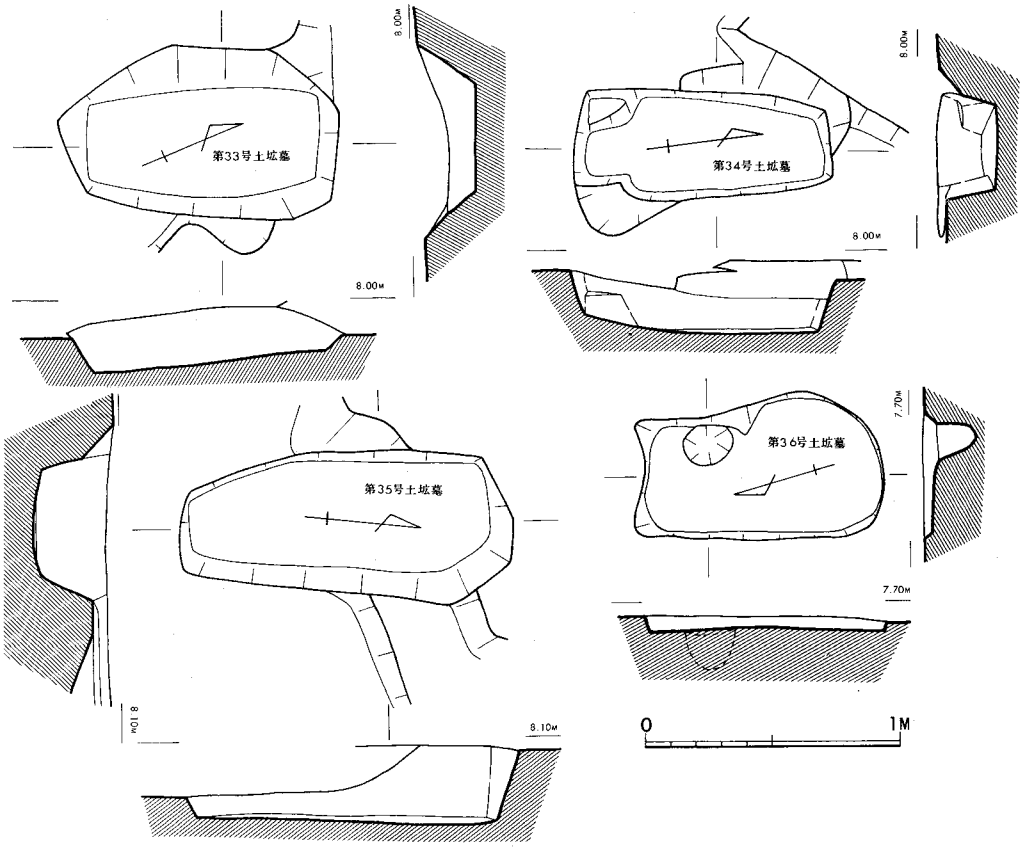


Fig.3・235　第33号・34号・35号・36号土坑墓実測図

第36号土坑墓（Fig.3・235）

調査区南側に存在する。大部分が削平された不整形で西壁際に後世のピットが存在する。長さ95cm、幅48cm。N—16°—Eの方向に位置する。

第37号土坑墓（Fig.3・236）

調査区南側に存在する。平面プランは、長楕円形である。長さ169cm、幅86cm。現存の深さ33cm。主軸はN—8°—W。

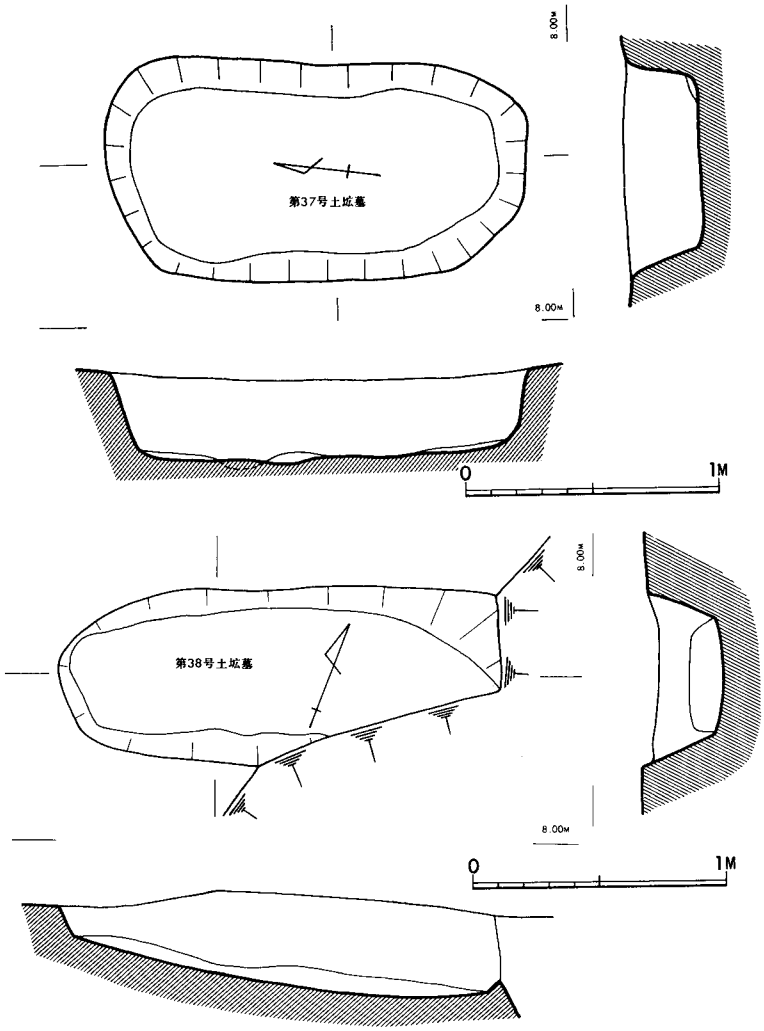


Fig.3・236　第37号・38号土坑墓実測図

第38号土坑墓（Fig.3･236）

調査区南側に存在する。東側を後世の大溝状の遺溝から切られている。長さ推定200㎝、幅70㎝、現存の深さ38㎝。底面は西側から東側へかけて低くなる。主軸はＮ－69°－Ｅ。

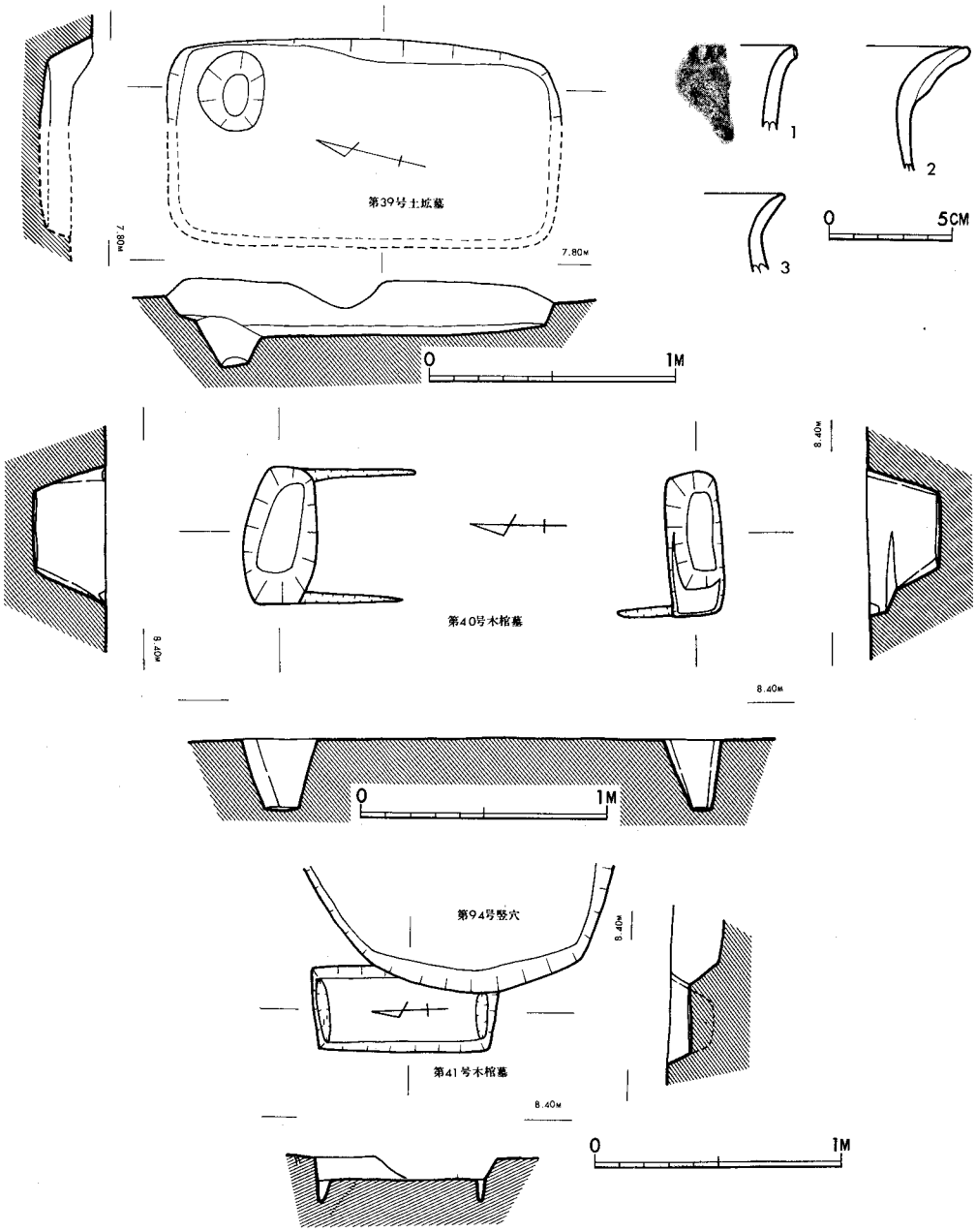


Fig.3･237　第39号土坑墓、40号・41号木棺墓および出土土器実測図

第39号土坑墓（Fig.3・237）

調査区南側に存在する。上半の大半と西半を削平されている。北隅にピットが存在する。長さ161cm。主軸はN—14°—W。

埋土中から若干の弥生式土器片が出土した。1は外反する口縁の端に刻目を施した甕である。2・3は壺の口縁部で、2は口縁が発達、肥厚している。3は外反するだけで口縁の発達はあまりない。ともに石英粒砂を含み、焼成良好。1は暗褐色、2は赤褐色、3は淡褐色。1は板付Ⅰ式、2・3は板付Ⅱ式と思われる。この土坑墓は弥生前期中葉以降のものであろう。

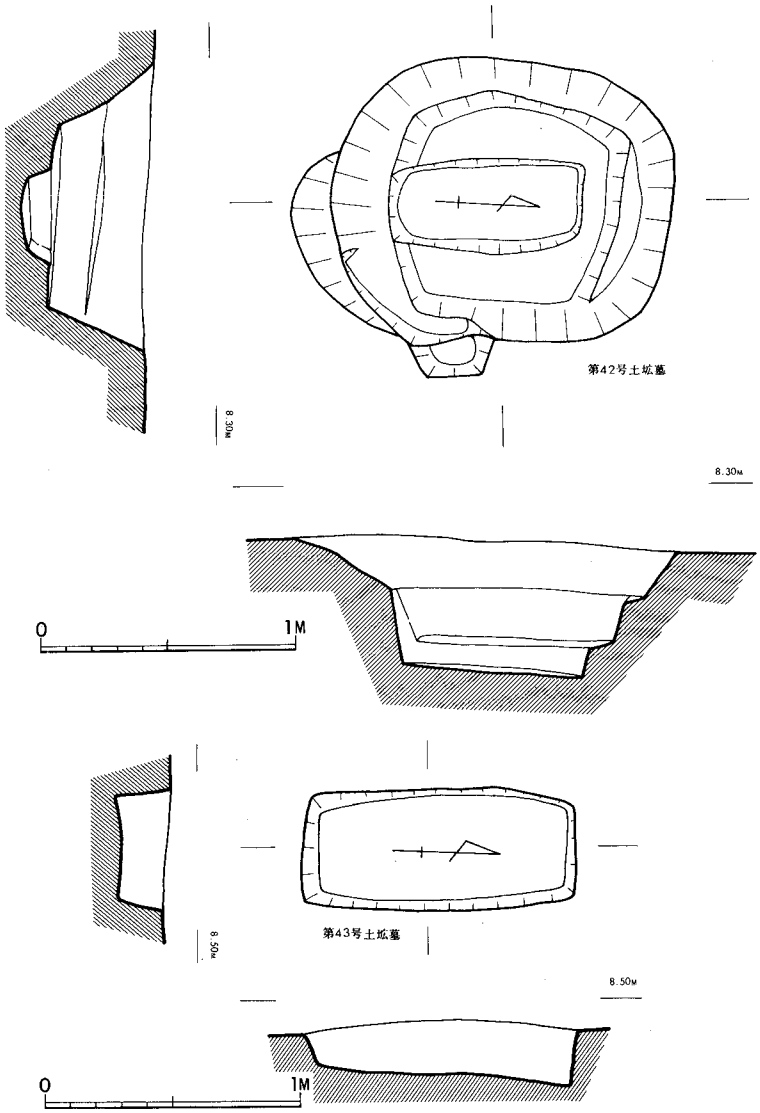


Fig.3・238　第42号・43号土坑墓実測図

第40号木棺墓（Fig.3･237）

調査区北側に存在する。大部分削平されており、小口の掘り方と側板痕の一部しか検出できなかった。組み合せはＡ・Ｂいずれとも考えられる。長さ192cm、幅57cm。主軸はＮ－1°－Ｗでほとんど南北を向く。

第41号木棺墓（Fig.3･238，PL.XXIII－3）

調査区北側に存在する。第94号竪穴を切って作られている。大部分が削平されているが、長さ68cm、幅26cmの小形のＢ組み合せ木棺である。主軸はＮ－3°－Ｅを向く。

第42号土坑墓（Fig.3･238）

調査区中央西側に存在する。二段掘りの墓坑は隅丸方形に近い形状をもつ。長さ135cm、幅112cm、現存の深さ38cm。主体部は長さ76cm、幅38cm、深さ12cmの長方形で主軸はＮ－4°－Ｗを向く。

第43号土坑墓（Fig.3･238）

調査区北側に存在する。大部分削平されているが、長さ108cm、幅48cmの長方形をなす。底面は北側および西側が若干低い。主軸はN－25°－Wを向く。

第44号土坑墓（Fig.3･239）

調査区東側に存在する。第104号竪穴を切って作られている。墓坑は一部しか残っていない。棺は長さ 118cm、幅60cm、深さ30cm、主軸はN－35°－Wを向く。底面は南東側が低い。

第45号土坑墓（Fig.3･239）

調査区東側に存在する。第105号竪穴埋没後に作られている。そのため北西側のみしか検出できなかった。長さ約92cm。主軸はN－54°－E。

第46号土坑墓（Fig.3･239）

調査区中央東寄りに存在する。第35号竪穴の埋没後に作られたものである。北側が広く南にいくに従ってせまくなる。長さ103cm、幅中央で48cm。主軸はＮ3°－Ｗを向く。

第47号土坑墓（Fig.3･240）

調査区中央北寄りに存在する。第47号竪穴、第48号竪穴埋没後に作られている。南側が広く、北へせまくなる。長さ95cm、幅中央部で58cm。Ｎ－4°－Ｅを向く。

第48号木棺墓（Fig.3･240）

調査区東側に存在する。第24号竪穴の埋土中にあるために墓坑は東側の一部しか確認できな

かった。棺は長さ137cm、幅32cm、深さ33cmのＢ組み合せ木棺で、主軸はN―71°―Eを向く。南壁西寄りに石があるが、木蓋の押さえに置いたものかもしれない。

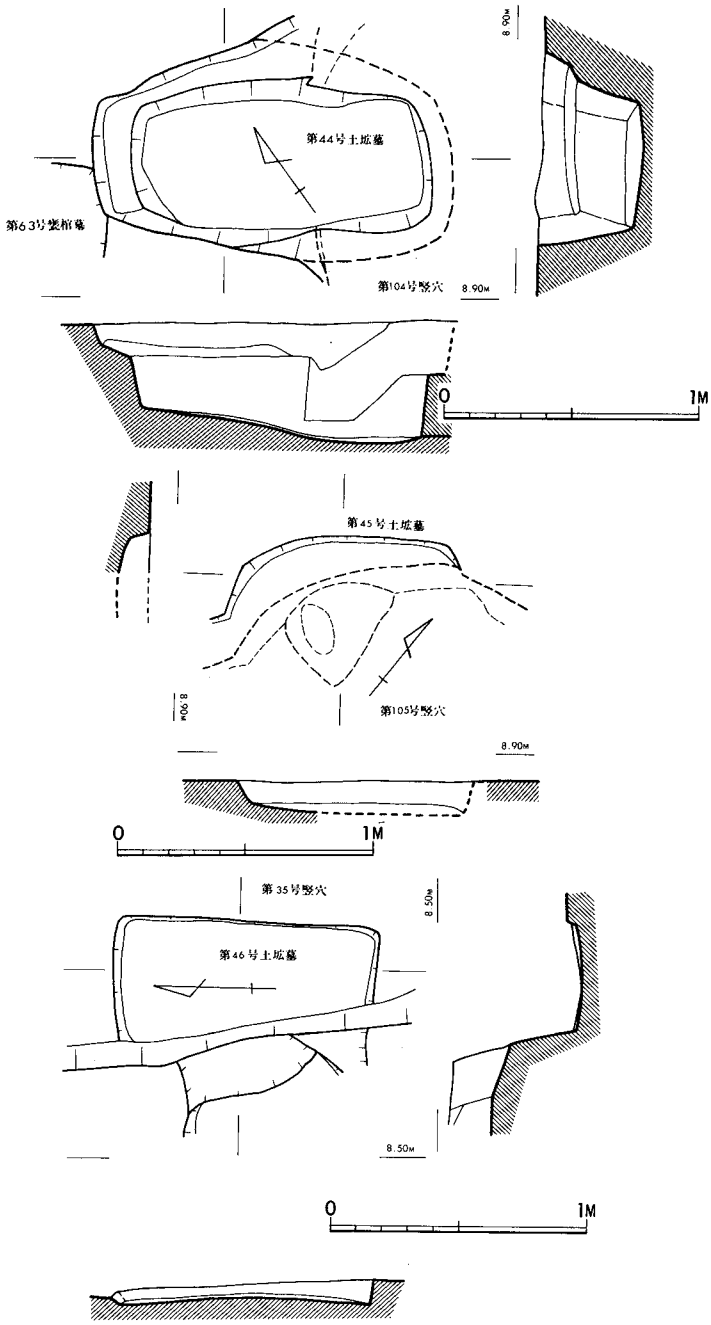


Fig.3・239　第44号・45号・46号土坑墓実測図

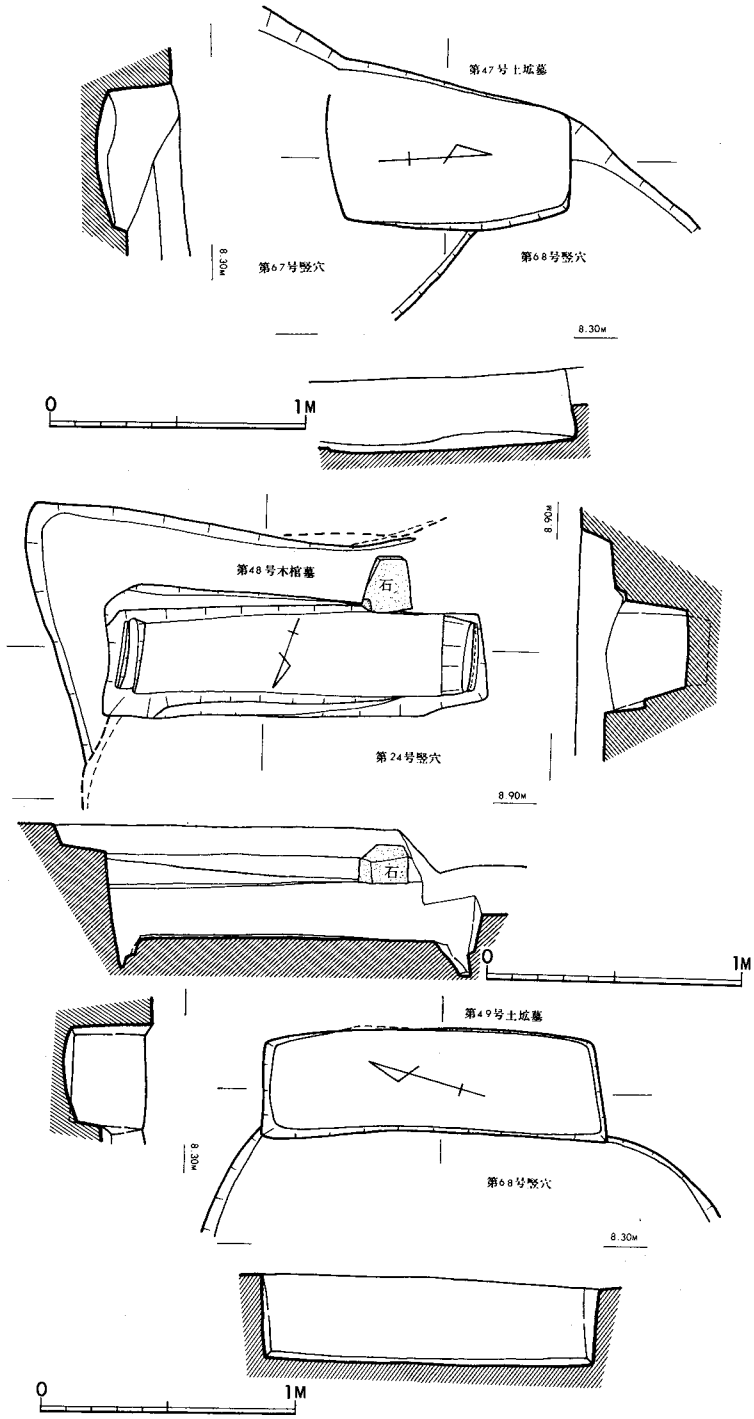


Fig.3·240　第47号土坑墓・48号木棺墓・49号土坑墓実測図

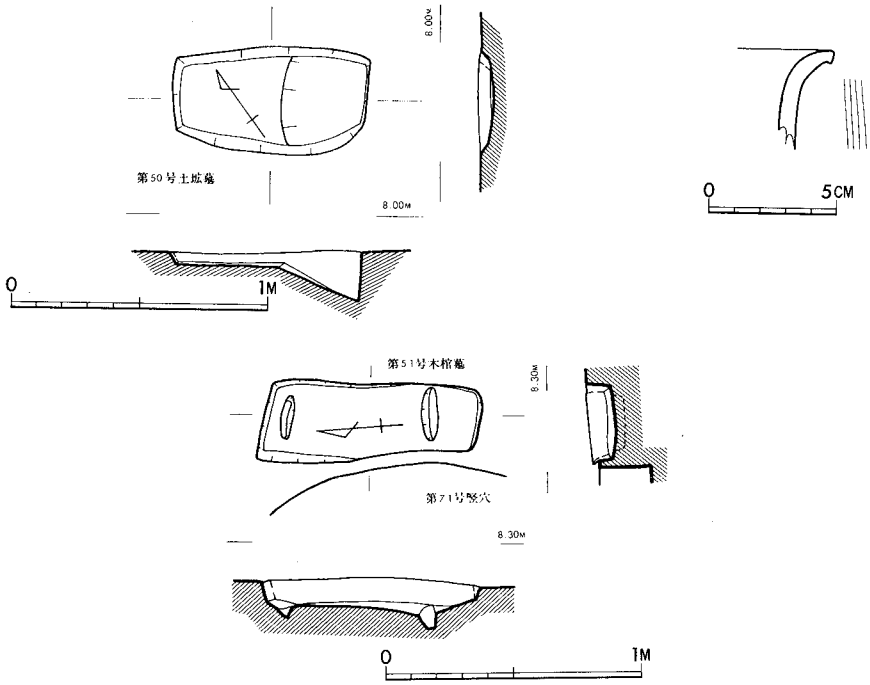


Fig.3・241　第50号土坑墓・51号木棺墓および出土土器実測図

第49号土坑墓（Fig.3・240）

調査区北側に位置する。第68号竪穴を切って作られている。ほぼ長方形で、長さ133cm、幅41cm、現存の深さ34cm。主軸はN—16°—Wを向く。

第50号土坑墓（Fig.3・241）

調査区最東部に存在する。大部分を削平されている。長さ77cm、幅43cmの若干不整な長方形をなす。主軸はN—54.5°—Wを向く。底面は南東部が低い。

埋土中より一片の土器片が出土した。甕で外反する口縁をもち、外面は刷毛目調整。上部は横なで調整。刻目はない。石英粒砂を含み、焼成良好、暗黄褐色を呈する。板付II式に比定され、この土坑墓の上限を示すものであろう。

第51号木棺墓（Fig.3・241）

調査区北側に位置する。大部分削平されている。長さ86cm、幅31cmの掘り方の中に、長さ60cm、幅18cmの組み合せ木棺がN—45°—Eの方向に埋置されている。　（沢）

Tab.3·7　第1区土坑墓・木棺墓一覧

番　号	方　向	棺部形状	墓坑大きさ(cm)	棺大きさ(cm)	備　考
第1号土坑墓	N-21°-W	隅丸長方形	不　明	88×169×？	
第2号木棺墓	N-22°-W	A組み合せ	155×231×18	55×150×36	前期末以後
第3号土坑墓	N-57°-E	長　方　形	不　明	35×68×？	中央にピット
第4号木棺墓	N-3°-E	B組み合せ	〃	38×96×？	
第5号土坑墓	N-7°-E	長　方　形	〃	43×103×？	
第6号木棺墓	N-6°-W	B組み合せ	〃	25×133×？	北側若干低い
第7号木棺墓	N-70.5°-E	〃	162×(265)×33	53×158×25	
第8号木棺墓	N-84°-E		不　明	59×？×？	西側木口のみ P－24より新しい。
第9号木棺墓	N-S	B組み合せ	〃	34×80×？	
第10号土坑墓	N-3°-E	隅丸長方形	〃	60×162×？	北側ふくらむ 板付II以後
第11号木棺墓	N-9.5°-W	A組み合せ	〃	27×123×？	南側に枕状に長方形のローム。
第12号木棺墓	N-4.5°-E	B組み合せ	163×244×30	48×142×22	
第13号木棺墓	N-1°-E	A組み合せ	不　明	55×150×？	
第14号木棺墓	N-1°-W	〃	〃	53×155×？	板付I以後
第15号木棺墓	N-4.5°-E	〃	133×215×20	55×137×16	板付IIより新しい。
第16号木棺墓	N-S	〃	不　明	60×158×？	
第17号木棺墓	N-12.5°-E	B組み合せ	〃	41×123×？	南側小口と側板のみ
第18号土坑墓	N-S	隅丸長方形	〃	80×154×？	北側に後世ピット 前期初以後
第19号土坑墓	N-10°-W	長　方　形	〃	62×142×？	P－36より新しい。
第20号木棺墓	N-69°-W	B組み合せ	106×194×34	48×125×20	前期末以後
第21号木棺墓	N-74°-W	〃	(113)×(190)×20	50×140×33	P－21・P－33，K－39・K－55より新しい？
第22号木棺墓	N-68°-E		168×225×26	43×150×25	木口西側のみ 亀ノ甲タイプより新しい。
第23号木棺墓	N-2°-E	B組み合せ	187×281×33	55×164×12	P－11より新しい
第24号木棺墓	N-4°-W	〃	109×116×25	35×112(122)×27	北側木口2個あり　板付IIより新しい。P　53・44を切る。K－58より切られる。
第25号木棺墓	N-11.5°-E	組み合せ	不　明	48×149×？	北側小口の方が深い。 後世ピットによって切られる。
第26号木棺墓	N-82°-E		〃	36×110×？	東側小口のみ、東側低い。 板付IIより新しい。
第27号土坑墓	N-73°-E	長　方　形	〃	51×126×？	
第28号土坑墓	N-70°-E	〃	〃	6×146×19？	東側低い。玉出土
第29号土坑墓	N-76°-E	〃	〃	60×169×？	
第30号土坑墓	N-19°-E	〃	〃	55×(110)×？	北側一部未掘
第31号土坑墓	N-39°-E	隅丸長方形	〃	50×100×？	石有り
第32号土坑墓	N-2°-W	長　方　形	〃	(55)×(95)×？	北東側一部未掘

番　号	方　向	棺部形状	墓坑大きさ(cm)	棺大きさ(cm)	備　考
第33号土坑墓	N-22°-E	長　方　形	不　明	67×107×？	南側低い
第34号土坑墓	N-8°-E	〃	〃	42×102×？	北側低い
第35号土坑墓	N-7°-W	〃	〃	57×130×？	
第36号土坑墓	N-16°-E	不　整　形	〃	48×95×？	東壁北寄りにピット。南側は丸味を帯びる。
第37号土坑墓	N-8°-W	隅丸長方形	〃	86×167×？	
第38号土坑墓	N-69°-E	〃	〃	70×200×？	西壁、南壁の一部切られる。
第39号土坑墓	N-14°-W	長方形？	〃	(83)×161×？	北側東寄りにピット。前期中以後
第40号木棺墓	N-1°-W	組み合せ	〃	57×192×？	木口と側板の一部
第41号木棺墓	N-3°-E	B組み合せ	〃	26×68×？	P－94より新しい
第42号土坑墓	N-4°-W	長　方　形	112×135×38	38×76×12	
第43号土坑墓	N-2.5°-W	〃	不　明	48×108×？	北側低い
第44号土坑墓	N-35°-W	〃	〃	65×118×30	P－104より新しい。南東側低い。
第45号土坑墓	N-54°-E	長方形？	〃	？×92×？	P－105より新しい
第46号土坑墓	N-3°-W	長　方　形	〃	48×103×？	P－35より新しい
第47号土坑墓	N-4°-E	〃	〃	58×95×？	P－67・68より新しい
第48号木棺墓	N-71°-E	B組み合せ	〃	32×137×33	P－24より新しい 南壁西寄りに石
第49号土坑墓	N-16°-W	長　方　形	〃	41×133×？	P－68より新しい
第50号土坑墓	N-54.5°-W	〃	〃	43×77×？	南東側が低い
第51号木棺墓	N-4.5°-E	A組み合せ	〃	18×60×？	

3　古墳時代以後の遺構と遺物

古墳時代以後の遺構としては住居址１、井戸状遺構２の他に柱穴状の小ピットや溝・杭などがある。柱穴状小ピットは建築址として確実にまとまるものはない。

(1)　住居址（Fig.3・242, PL.XII－1・2）

今回の調査で検出された全遺構中、唯一の住居址である。

プランは、東西に長く、主軸をＮ－60°－Ｅとする長方形である。東壁と北壁の一部に沿って１ヶ所、西壁に沿って１ヶ所ベッド状遺構を持つ。北西隅・北辺・南辺の一部を除き、壁に沿って溝がまわる。西辺にはそれを検出することができなかったが、恐らく存在していて、溝は全周していたものと思われる。

住居址の規模は、長辺約4.6m、短辺4.2ｍを計る。ベッド状遺構のうち、東壁と北壁の一部に沿った部分はＬ字形となり、床面からの高さ15cmを計る。また、もう一方は北西隅にピットを付設しているため、そこを除き西壁に沿って南北に長い長方形を呈する。床面からの現存高８cmを計り、この部分は、弥生時代の遺構の上に土を盛って造られている。ベッド状遺構にはそれぞれ１ヶ所ずつ不整形のピットが設けられており、いずれも土器を出土している。

柱穴と考えられるピットは、東西両ベッド状遺構に接し、ほぼ主軸線上に存在するものである。そのうちの東側のピットは、径30cmの円形で、深さは床面から36cmを計る。西側ピットは長径44cm、短径32cm、深さ53cmを計り、中から土錘が出土した。北西隅のピットは長径52cm、短径48cm、深さ40cmを計り、明確な形状を示すがその用途は不明である。また、北壁寄りにピットが集中し、他にも２～３のピットが存在するが、いずれも不明である。さらに、北壁から南方向に１ヶ所、南壁から北方向に２ヶ所溝が走るが、これらもその機能は判然としない。

遺物は、ベッド状遺構のピット内、西側柱穴内の他に、南壁に接した不整形ピット内、南壁寄りＬ字形ベッド状遺構裾部からそれぞれ土器を検出した。また埋土中、さらには住居址西辺外側からも土器が検出されており、いずれも住居址に伴なうものと考えられる。

床面はよく固められており、中央には長径100cm、短径75cm、最大厚10cmの熱を受けた部分がある。中心部に近い程、焼土は赤味を増しており、恐らく炉跡と思われる。

なお、西側部分には一部住居址と重複して、不整形の浅い竪穴が検出された。ここからは土器片、黒曜石剝片が、重複部のベッド状遺構中からも土器の底部が出土している。重複状態から見て、この遺構は住居址に先行し、遺物は弥生時代前期のものである。

出土土器（Fig.3・243、PL. XXVI）

土器の出土状況は、西側ベッド状遺構ピット内（１～２）、Ｌ字形ベット状遺構ピット内（３～５）、床面（６～10）、竪穴南辺外（11）、埋土（12～20）という具合に個々に固まっており、非常に不規則である。ピット内、床面出土のものはもちろん、他の土器も21を除きこの竪穴以外に当該時期の遺構がないことから、これに伴なうものと考えられる。出土土器は、全体的に

風化あるいは磨滅が著しい。その種別を示すと，壺・甕・高坏・器台・鉢・台付鉢である。

壺（1・3・4・8・11）　11を除きいずれも小型丸底壺である。1は横に張った半球形の胴部と外反する長い口縁を持つ。内面接合部寄り胴部は横なで。胎土は砂を含み良好。色調は黄褐色あるいは灰褐色。器面は風化が著しく整形は不明。3は球形の胴部に外反した口縁を持つ。接合部のくびれは鋭くない。胴部中央外面、接合部内面には指圧痕が残る。口縁部内面には、横・斜め方向、胴部外面下半は縦・斜め方向の刷毛目。胎土は石英粒砂を含み、良好。

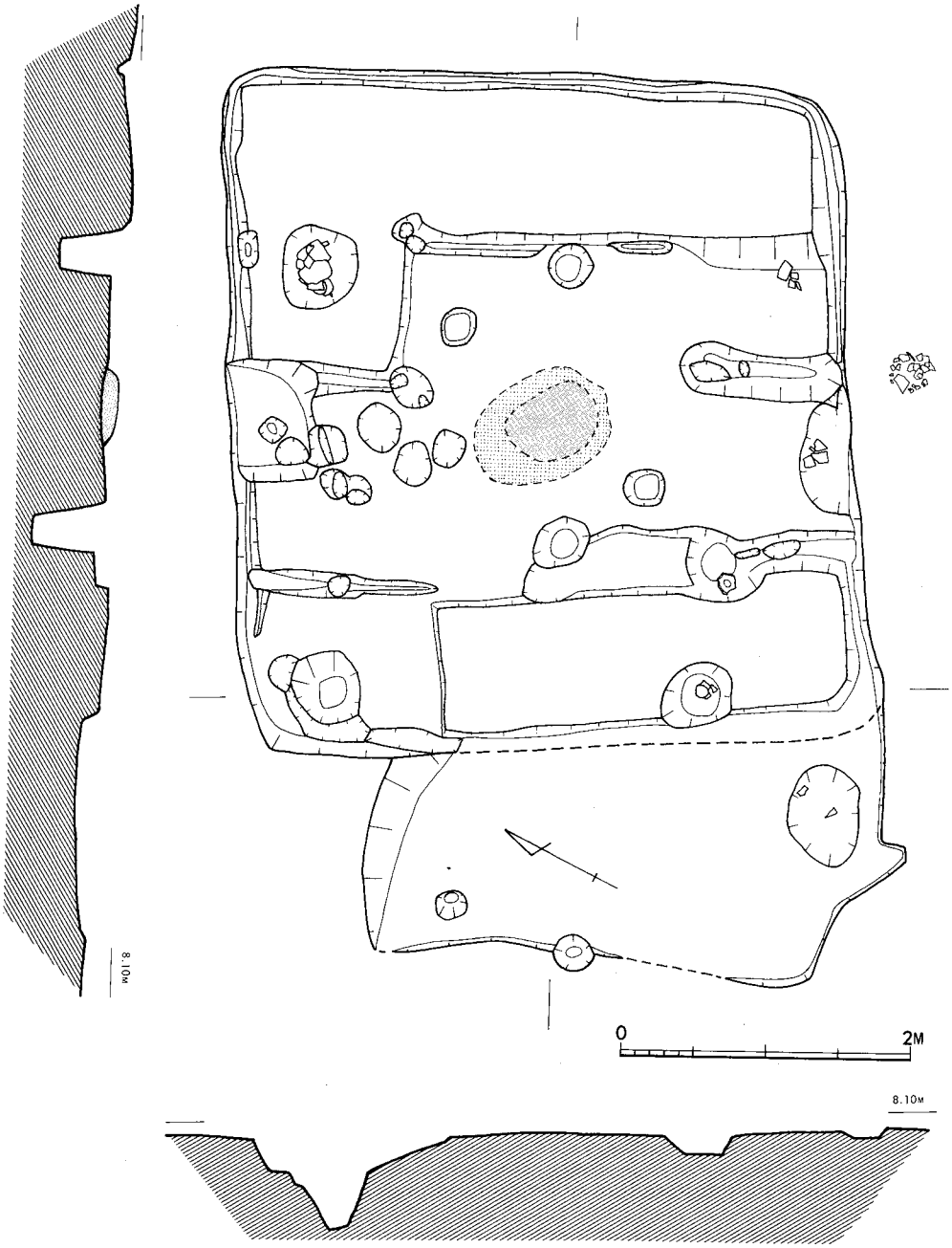


Fig.3・242　古墳時代住居址実測図

色調は黄褐色。４は３に比して接合部のくびれがさらにゆるく、口縁の立上りも垂直に近くなる。肥厚する底部は平底気味。内面底部近くには指圧痕、胴部外面下半にはひび割れが著しい。胎土は砂を含み、色調は一部黒変しているが全体として赤褐色。８はほぼ完全な球形の胴部と直立の短い口縁を持つ更に小形の壺である。断面は口縁から胴部へと次第に肥厚する。口縁部内面には斜め方向の刷毛目。胎土は砂を含み、良好。色調は赤褐色。11はあまり類例を見ない土器である。胴部をほとんど欠失しているが、恐らく球形を呈するものであろう。接合部には

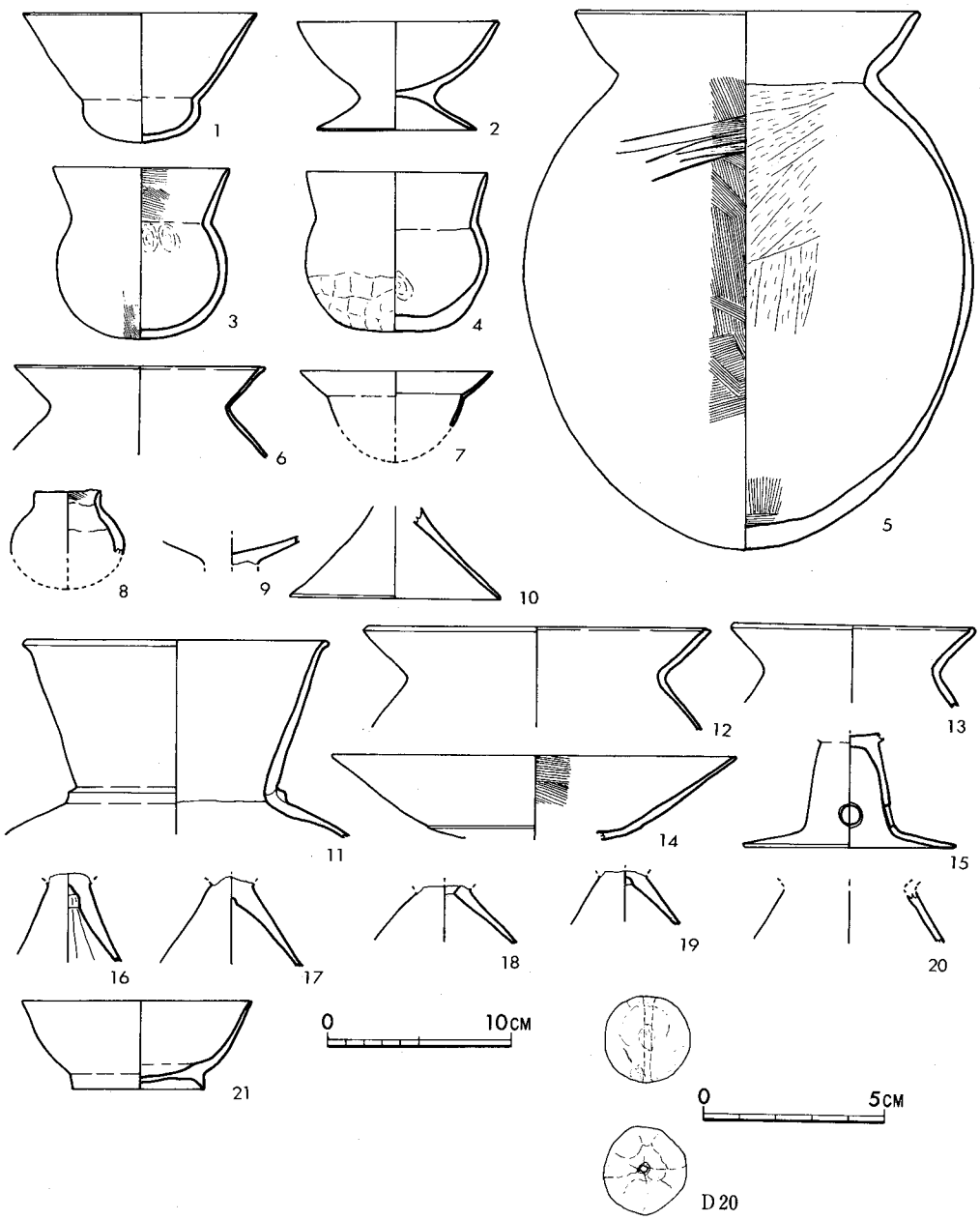


Fig 3 ・243　古墳時代住居址出土土器・土製品実測図

断面三角形の突帯が巡り、外反して直線的に伸びる頸部は先端で更に外反する口縁へと続く。胎土は若干の砂を含み、良好。色調は内面灰白色、外面褐色。なお、これらの壺はいずれも焼成良好である。

甕（5・6・12・13）　5は内彎気味の口縁と卵形の胴部を持つ。丸底を呈し、その断面は肥厚する。胴部外面には斜め方向の刷毛目。なだらかな肩部に数条の不規則な沈線が交錯する。内面は胴部上半が斜めあるいは縦方向の箆削り、底部に縦・横方向の刷毛目を残す。胎土石英粒砂を含み。良好。色調は胴部の一部が黒色、他は暗褐色。6・12・13は若干の差異は認められるがほぼ同様の器形である。6は薄手の土器で接合部で鋭く「く」の字形に屈曲する。口縁部先端はやや肥厚し、平坦な面を持つ。12は6より大形であるが、口縁部先端を除き、相似する。13は三者のうち最も小形で、接合部のくびれも前二者程鋭くはない。口縁部先端は短く内弯する。これら三者は、いずれも球形か卵形の胴部を持つと思われ、色調は淡褐色。胎土・焼成良好で、一致点が多い。6・12は器面の風化が著しい。

高坏（9・10・14～17・19）　9は坏底部のみで他は欠失している。色調は赤褐色。焼成良好。10は器台かとも思われるが、ここでは高坏としておく。直線的に伸びる脚部の断面は先細りである。色調は赤褐色。胎土に石英粒砂を含む。焼成良好。14は脚部を欠失。坏部は外面にゆるい稜を持ち、やや外反しながらゆるやかに伸びる。断面は口縁部先端に近い程薄い。内面上半に、横・斜め方向の刷毛目を残す。胎土は砂を含み、良好。色調は赤褐色。焼成良好。15は坏部を欠失。脚部は脹らみ気味の円筒部に、大きく屈折して開く裾部が付く。屈折部のやや上部に焼成前に穿った2孔が貫通する。焼成はやや甘く、胎土は良好。色調は褐色。器面は磨滅が著しい。16・17・19は脚部上半のみの破片である。16は17・19に比して開きが小さく、内面にはしぼり目が顕著である。16・17は胎土に石英粒砂を含む。いずれも色調は褐色。焼成良好。

器台（18・20）　18は脚部に小型の坏を接合したような形であろう。接合部に上下を貫通する焼成前の穿孔あり。焼成良好。色調は内面黒褐色、外面褐色。20は全体形が判然としないが、円筒形の中央部がくびれる形を呈する器台と推測する。色調は褐色。焼成良好。

鉢（7）　半球形の胴部に外反するやや長い口縁を付けたものである。器厚は薄い。色調は赤褐色。焼成はやや甘い。

台付鉢（2）　鉢と浅い坏の底部どうしを接合したような形である。胎土に石英粒砂を含む。色調、褐色。焼成はやや甘い。

高台付埦（21）　住居址の覆土上部から出土したもので、この住居址に伴うものではない。胎土には砂を含み、焼成はあまり良くない。暗赤褐色を呈する。

土錘（D50）　西側の柱穴と考えられるピットから出土したもので、直径約2.4cmの円形を呈し、上から下へ約2mmの穿孔がある。表面は指で調整している。胎土・焼成とも良好で、暗褐色を呈する。重量14.7g（PL.XXⅦ）。

以上の遺物は21を除いて古墳時代前期のものであり、5世紀初頭前後のものであろう。

（野尻雄三）

(2)　井戸状遺構（Fig.3･242, PL.XIII−2）

井戸状遺構は２ヶ所確認された。

第１号は調査区の南側に位置する。小形のもので、径約1.4m、深さは約１ｍで底径は約70cmである。第２号は第１号の北西にあり、第45号竪穴を切っている。径約2.7m、深さ約1.7m、底は不整形を呈する。いずれも木組みなどは存在せず、はたして井戸かどうか不明であるためめに井戸状遺構とした。

１号出土遺物（Fig.3･245）

ともに大形の須恵器の甕である。１は胴部上半、２は胴下半部であるが、別個体であろう。１は外面に小さな格子目状に、内面は青海波文が叩きで施される。２も内面は青海波文で外面は格子目だが、１より大きい。ともに胎土に若干の砂を含み、焼成は良好。青灰色を呈する。

第２号出土遺物（Fig.3･246）

１はいわゆる黒塗り土師器であろう。外面は器面磨耗のため淡暗褐色を呈するが、内面は黒塗り磨研されている。高台付椀であるが、高台は外に拡がる。胎土に砂を含み、焼成良好。２は瓦質の土師器で高台付椀の底部である。高台は外に拡がる。内面に煤らしきものの付着が認められる。胎土に砂を含み、焼成は良好。灰白色を呈する。３は土師器の皿で非常に浅く小さい。内面にはロクロ痕が残る。胎土に砂を含じ、焼成は良好。黄褐色を呈する。４も土師器の高台付椀の底部で、高台も先端を欠くが、外に拡がる。ロクロ痕が残り、内面には煤らしきものの付着がみられる。胎土に砂を含み、焼成は良好で淡暗褐色を呈する。５は土師器の椀の底部で高台は付かない。底面は篦切りで、内面にはロクロ痕がみられる。胎土に砂を含み、焼成は良好。暗灰白色を呈する。６も土師器で、外反する口縁をもつ。胎土に砂を含み、焼成は良好。淡暗褐色。７は瓦質の土器で、底部に焼成前の穿孔があることから甑と推定される。内外面とも刷毛状の痕がつく篦で調整している。外面には煤の付着を認める。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。暗褐色を呈する。８は須恵器の高台付椀の底部で、高台はすぼまる。胎土に砂を含み、焼成良好。灰色を呈する。９は須恵器の甕の頸部から胴上部にかけてのもので、かなり大型のものである。肩部以上はは内外面とも横なで調整。それ以下は外面が、叩きで小さな格子文状に、内面は青海波文。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。灰色を呈する。10も須恵器の肩部で、上部は内外面とも横なで調整。外面は格子目、内面は青海波文を施す。胎土に石英粒砂を含み焼成は良好。灰色を呈する。11は須恵器の甕の胴下半分で，外面は叩きで小さな格子目状に、内面は青海波文を施している。胎土には若干の石英粒砂を含み、焼成は良好。青灰色を呈する。12・13はふいご羽口である。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。灰褐色を呈するが、高熱を受けた形跡が歴然としている。

以上の遺物よりこの井戸状遺構は歴史時代のものと考えられる。なお井戸状遺構第２号から大形の動物の骨（牛か馬であろう）が若干出土したが、調査中に紛失したため未鑑定である。

（沢）

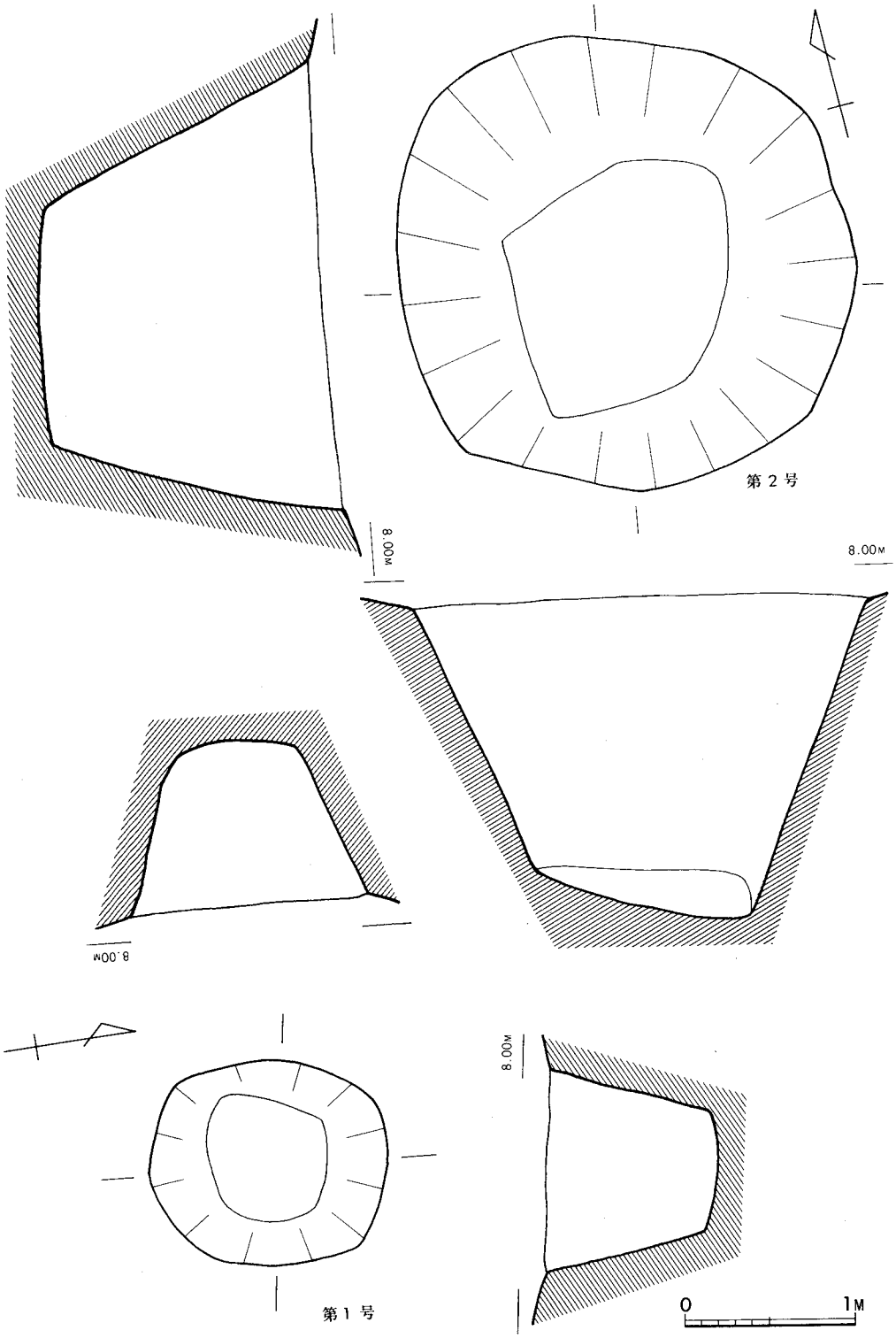


Fig.3・244　井戸状遺構実測図

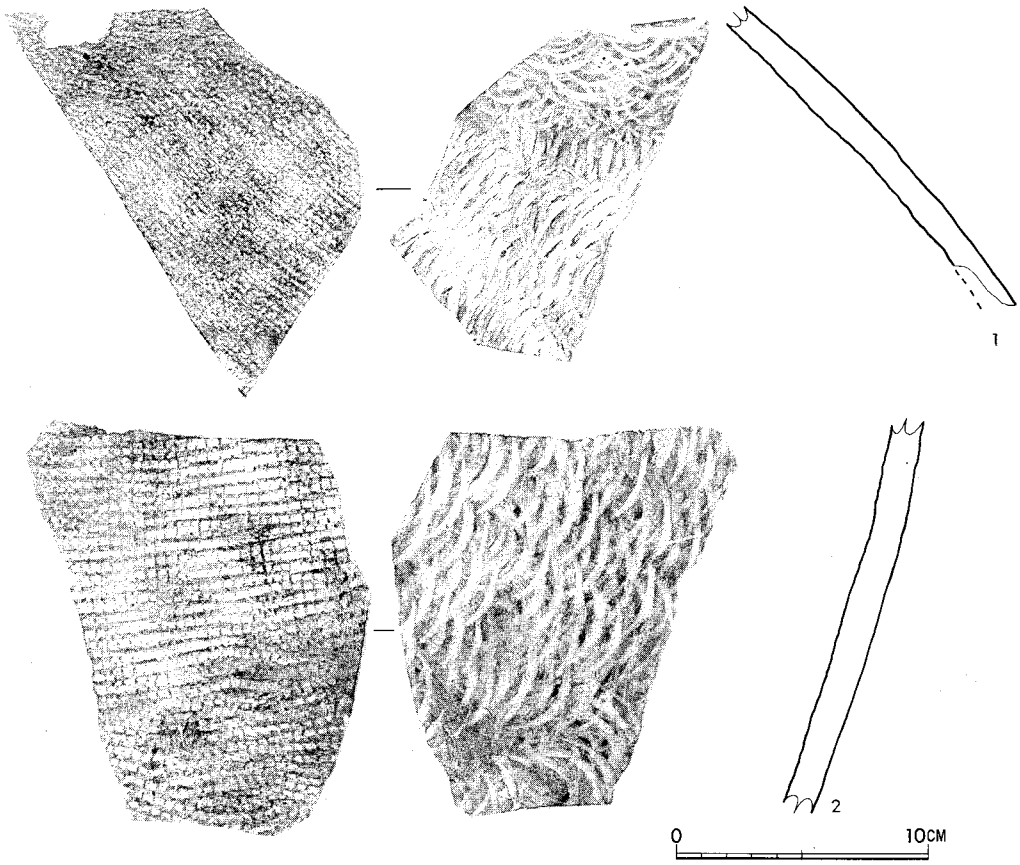


Fig.3・245　第１号井戸状遺構出土土器実測図

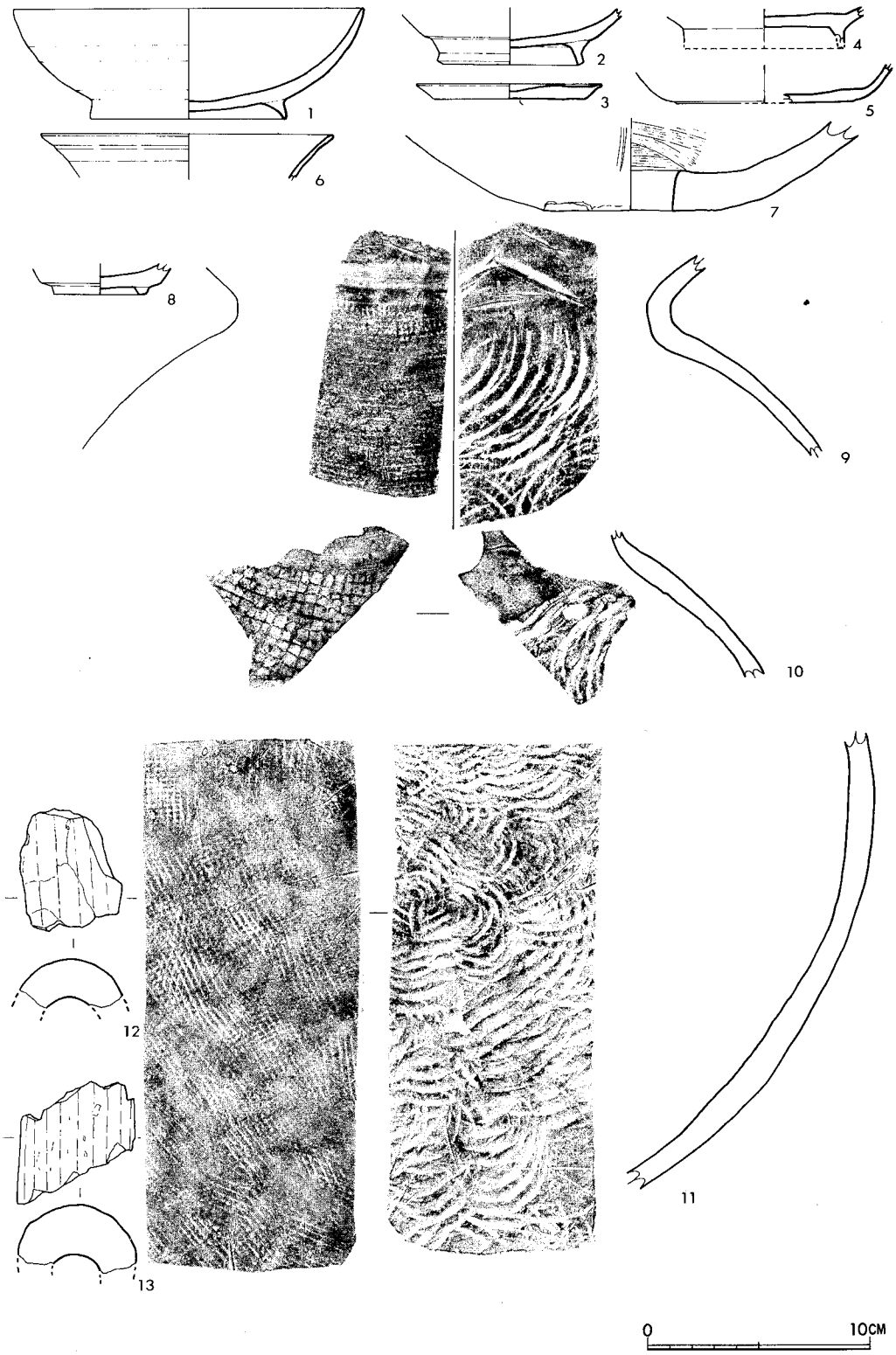


Fig. 3・246　第2号井戸状遺構出土遺物実測図

(3)　溝・柱穴・杭（**Fig.3･65**）

台地上の弥生時代遺構群にまじって、多くの柱穴とみられる小ピットが散在し、また南側に２本の溝がほぼ東西に走り、南側の台地切れめにそって杭列がある。

柱穴状の小ピットは台地西側に多く、東側には少ない。これは東側の台地をなすローム層の汚染がはなはだしく、検出が困難だったためとも思われる。これらの柱穴は20ｍ方眼の各区毎に番号を付し、その前にSPの記号と各区名を付した。たとえばSP－C16－24は、Ｃ－16区の24番目の柱穴状小ピットを指す。Fig.3･65には記述上必要なもののみに番号を付した。

柱穴は直径・深さはさまざまで、中には甕棺墓や竪穴を掘り抜いたものもある。そのほとんどすべては弥生時代もしくは古墳時代より新しいとみられる。

各柱穴相互のつながりはとらえがたい。わずかにＤ－16トレンチ東側の５つの柱穴（ＳＰ－Ｃ16－36・63・64・65・66）がほぼ一直線にならび、上面が約40×60cm・深さ10～20cmの楕円形をなし、その中にさらに直径約20cm・深さ10～15cmの柱穴を掘り込む点で形状が類似し、同一の建物のものと考えられるだけである。間隔はほぼ２ｍ。これに平行もしくは直交する柱穴は、はっきりしないが、Ｄ－16トレンチ内のＳＰ－Ｃ16－67・68・69がそれにあたるかとも思われる。

他の柱穴は、明確に建物の跡をたどりうるような配列を示さない。これらの柱穴の深さは、50cmをこえるものもあるが、20～30cm未満がもっとも多い。また浅い皿状で柱穴とはいえないものもある。これらの中から遺物の出土する例がある。

ＳＰ－Ｂ15－10は第59号甕棺墓を切り、中から土師器（Ｈ194）１点が出た。SP－Ｂ15－９は第100号竪穴内にあり、直径約70cm深さ約82cmを計る。中から瓦器質片口の破片（**Ｇ１･２**）、土師器底部（Ｈ193）各**１**点が出土した。ＳＰ－Ｂ16－８は第６号土坑墓の北側にある30×40cm・深さ45cmほどの柱穴で、中から弥生式土器が出た（Ｙ1201）。ＳＰ－Ｃ15－５は古墳時代住居址の北側にある。直径25cm・深さ約30cmで、中から打製石鏃（Ｓ5142）と弥生式土器小片が出た。ＳＰ－Ｃ16－29では黒曜石削片１点が出た。ＳＰ－Ｃ16－46は第 106号竪穴の東側にある直径35cmほどの皿状の穴（深さ20cmあまり）で、完形の瓦器椀１点が出た（**Ｇ３**）。

ＳＰ－Ｃ17－１は柱穴ではなく、１×1.2mほどの竪穴状のくぼみで、内部から弥生式土器小片が出土した（Ｙ1199）。ＳＰ－Ｃ17－11は第２号井戸の南に接してあり、直径55cm・深さ10数cmを計る。内部から石庖丁片（Ｓ5162）が出た。ＳＰ－Ｃ17－16では磨製石器小片１点が出た。ＳＰ－Ｃ17－31は第14号竪穴の南西側にある直径25cm前後・深さ18cmほどの柱穴で、中から弥生式土器底部１点（Ｙ1202）が出土した。ＳＰ－Ｃ17－34では黒曜石製石核・削片各１が出た。ＳＰ－Ｃ17－56は第41号甕棺墓を破壊して掘り込まれた柱穴で、内部から弥生式土器片と土師器片（Ｈ195・196）が出たが、その中にはこの甕棺墓の甕破片も混っている。

ＳＰ－Ｃ18－６からは土師器片が出た。ＳＰ－Ｃ18－13は直径30cmの浅い皿状のくぼみで、中には弥生式土器片数点が入っていた。ＳＰ－Ｃ18－18には弥生式土器小片が入っていた。ＳＰ－Ｃ18－19では黒曜石削片２点が出、ＳＰ－Ｃ18－35では弥生式土器（Ｙ1200）が出土した。

また柱穴とみられる穴に柱根や杭が残っている側が３例ある。ひとつはＤ－17ｂトレンチ東

側のＳＰ－Ｃ17－57である。中に径3.5cm・長さ45.3cmのマツの丸木杭が打ち込まれていた（W1013)。残存状態は良好で，さほど古いものとは思われない。南東側のＳＰ－Ｃ18－63にはシイ材による径7.5cmの丸木杭が残っていた（W1011)。残存状態は良くない。ＳＰ－Ｃ18－65には柱根が残っていた。直径11cm以上・現在長16cmのスギ材である。

南側の砂層にローム層が切られる部分には丸木杭が打ち込まれている。ローム層の落ち込み際に点々と13本打たれており、ロームの落ち込みとその南の砂層に示される流水と密接な関係のあることを示している。杭（W1001～09）は直径2.5～７cmのマツ、ユズリハの丸木杭である。いずれもローム層上に10cmあまり頭部を出した状態で出土し、残存状態はきわめてよい。発掘中にスコップがあたっても折れないほどで、今回出土した他の木製品にくらべ、とびぬけて丈夫である。したがって杭が打たれたのはきわめて近い時期とみられる。この杭列が砂層に示される水路と関係あるとすれば、水路の時期もごく最近とみられる。江戸時代に二日市から博多へ貢米を運ぶために掘られた新川（1750年頃完成、1763年頃には廃止）が板付付近を通るというので〔大野城市教育委員会1974〕、それとの関係も考えたが明らかではない。

このローム層落ち込みのすぐ北に２本の溝がある。いずれも幅80cm未満、深さはローム上面から10cmほどで、断面は皿状である。２本の溝の間隔は約４ｍ。北側の溝は第４～第８号竪穴を切り、南側の溝は第39号土坑墓を切り、さらにローム落ち込みの部分で切れている。時期は不明。

この他に、何の遺構もないローム層上面に、土器が単独で、あるいは数点まとまって出土したところがある（Fig.3･65の点線で囲んだ部分)。もっとも多く出たのはＳＰ－Ｃ17－１の西側で弥生式土器多数がまとまって出たところである。竪穴の側壁が失われたのかもしれない。他は数点の土器片がまとまっているだけである。台地削平の際にこのような状態になったのであろう。

なお、柱穴状小ピット出土の土器は第３節４の項で述べる。　　（後藤）

4　耕土層・包含層の遺物

以下にのべる遺物は台地上の耕土、その下のローム層上の包含層、甕棺墓や土坑墓埋土、ローム直上の無遺構部、柱穴状小ピットなど、各時代のものが混在している部分で出土したものである（一部に第2節3で扱わなかった沖積地のトレンチ・グリッドの耕土層とその下の混在層出土を含む）。

(1)　弥生式土器（Fig.3・247～3・250）

柱穴状小ピット出土のものと、耕土・包含層出土のものにわけてのべる。

柱穴状小ピット出土品のうち小片を除く4片についてのべる（Fig.3・247）。

Y1199は外反する口縁部が弧状になり、胴部において若干ふくらみをもちはじめたところで逆「く」の字状に反転する甕である。口縁端より下った位置と胴反転部に刻目突帯を巡らす。器面は内外とも、条痕で調整され、煤の付着が認められる。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。暗褐色を呈する。夜臼式である。ＳＰ－Ｃ17－１出土。

Y1200は外反する口縁部をもち、口縁下に一条の三角突帯を巡らす。口縁部から突帯貼付け部まで横なで調整。内面に指の押圧調整痕がある。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。板付II式であろう。ＳＰ－Ｃ18－35出土。

Y1201は逆「L」字状口縁をもち、口縁外端が下がる。内側張り出しも強く、口縁外端には刻目が施される。口縁部は横なで調整。丹塗り土器であり、胎土には石英粒砂を含み、焼成良好、赤褐色を呈する。中期中葉の土器であろう。ＳＰ－Ｂ16－８出土。

Y1202は若干上げ底を呈する甕の底部で、胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、赤褐色を呈する。ＳＰ－Ｃ17－31出土。

次に耕土層・包含層出土弥生式土器を器形別に説明する。

甕（Y1203～1217・1227～1235）　Y1203は若干内傾する口縁から、胴部接合部で逆「く」の字状に反転するが、その反転は強くない。口縁端に接してと、胴反転部の外側に刻目突帯がつけられる。外面は器面があれているため、調整は不明だが、内面は横の条痕調整。内面には煤の付着が認められる。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。外面黄白色、内面黒褐色を呈する。夜臼式である。Y1204～1208・Y1210～1216は外反する口縁部をもつ。Y1204は口縁端の縦幅一杯に刻目を施し、横なで調整。外面は刷毛目調整。Y1205は甑で、同様な刻目をつけ、外面と口縁部は刷毛目調整。内外に煤の付着が認められ、また火にかけられた痕跡が、器面のあれとなって残っている。底部の穿孔は焼成後のものである。Y1206～1208には刻目がつかない。Y1207は口縁部横なで調整。Y1209は直立する口縁部から、張りの強い胴部へとつながる器形らしく、特異なものである。口縁端には貝か櫛状の工具で刻目が施され、内面には接合の痕が残り、刷毛目調整。Y1204～1209はいずれも胎土に石英粒砂を含み焼成良好。暗褐色を呈するものが多いが、黄褐色（Y1209）赤褐色（Y1207）を呈するものもある。板付Ｉ式であろう。Y1210・1212～1216は口縁の下端に刻目を施すが、Y1211には刻目はつかない。Y1214・1216は

胴部にも一条の刻目突帯が巡る。口縁部は横なで調整が多く、Y1211・1213は外面刷毛目調整。Y1213は口縁部内側にも横刷毛目調整。Y1211～1213・1215は内側に指の押圧調整痕がみられる。Y1215は胴部外面に煤の付着が認められる。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。暗褐色を呈するものが多いが、赤褐色を呈する（Y1215）ものもある。板付II式であろう。Y1217は口縁端に接して高く、刻目の小さい突帯がつけられる。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。いわゆる亀ノ甲タイプであろう。Y1229～1235はいわゆる逆「L」字状口縁をもつ。Y1229は内傾し、内側の張り出しはない。横なで調整。Y1230は若干内側に張り出し部がつく。横なで調整を行い外面は縦刷毛目調整。煤の付着が認められる。Y1231は口縁上端が水平となり、内側張り出しも認められる。口縁下に一条の三角突帯が巡るが、低い。Y1232は口縁外端が下がり、口縁下の三角突帯は高い。横なで調整。Y1233も口縁はやや下がり気味で、内側張り出しは強い。Y1234はわずかに内傾し、内側張り出しも認められる。1235は口縁外端が下がり内側張り出しも強い。横なで調整。いずれも石英粒砂を含み、焼成は良好。黄褐色（Y1229・1231・1233・1234）、暗褐色（Y1230）、褐色（Y1232）、赤褐色（Y1235）を呈する。これらはY1229・1230が中期前葉、他は中期中葉であろう。

壺（Y1218～1225）　Y1218・1219は同じ様な器形をもつ。すなわち、短く外反した口縁部と漸次拡がって行く、頸部をもつ。Y1218には口縁下に一条の沈線が巡り、内部には整然とした貝殻条痕がつく。口縁部の外面沈線の位置までと内面の屈曲部まで丹塗り。Y1219は外面丹塗り。Y1218の外面箆みがき。ともに若干の石英粒砂を含み、焼成良好。丹塗りの部分は赤褐色だが、Y1218は暗褐色、Y1219の内面は黄褐色を呈する。夜臼式であろう。Y1220も丹塗り土器で、外反する口縁部である。Y1225は外反する口縁部で、外側に粘土を貼り付けて肥厚させる。Y1222・1223も外反する口縁部で、横なで調整。Y1223の口縁端は沈線状に凹む。Y1224は肩部で、接合部の両面に段がつく。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。赤褐色（Y1220）暗褐色（Y1221・1224）、黒褐色（1222）暗黄褐色（Y1223）を呈する。板付I～II式の

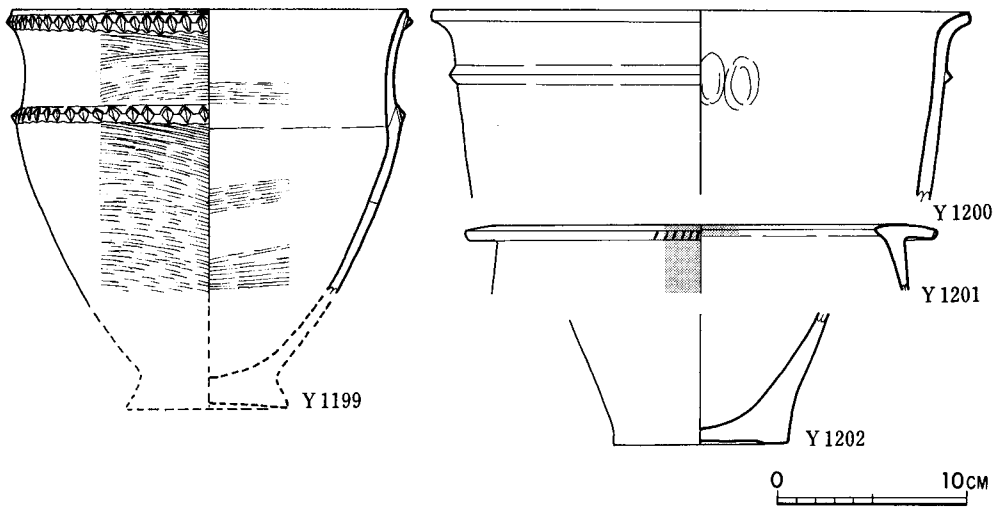


Fig. 3・247　台地上柱穴状小ピット出土弥生式土器実測図

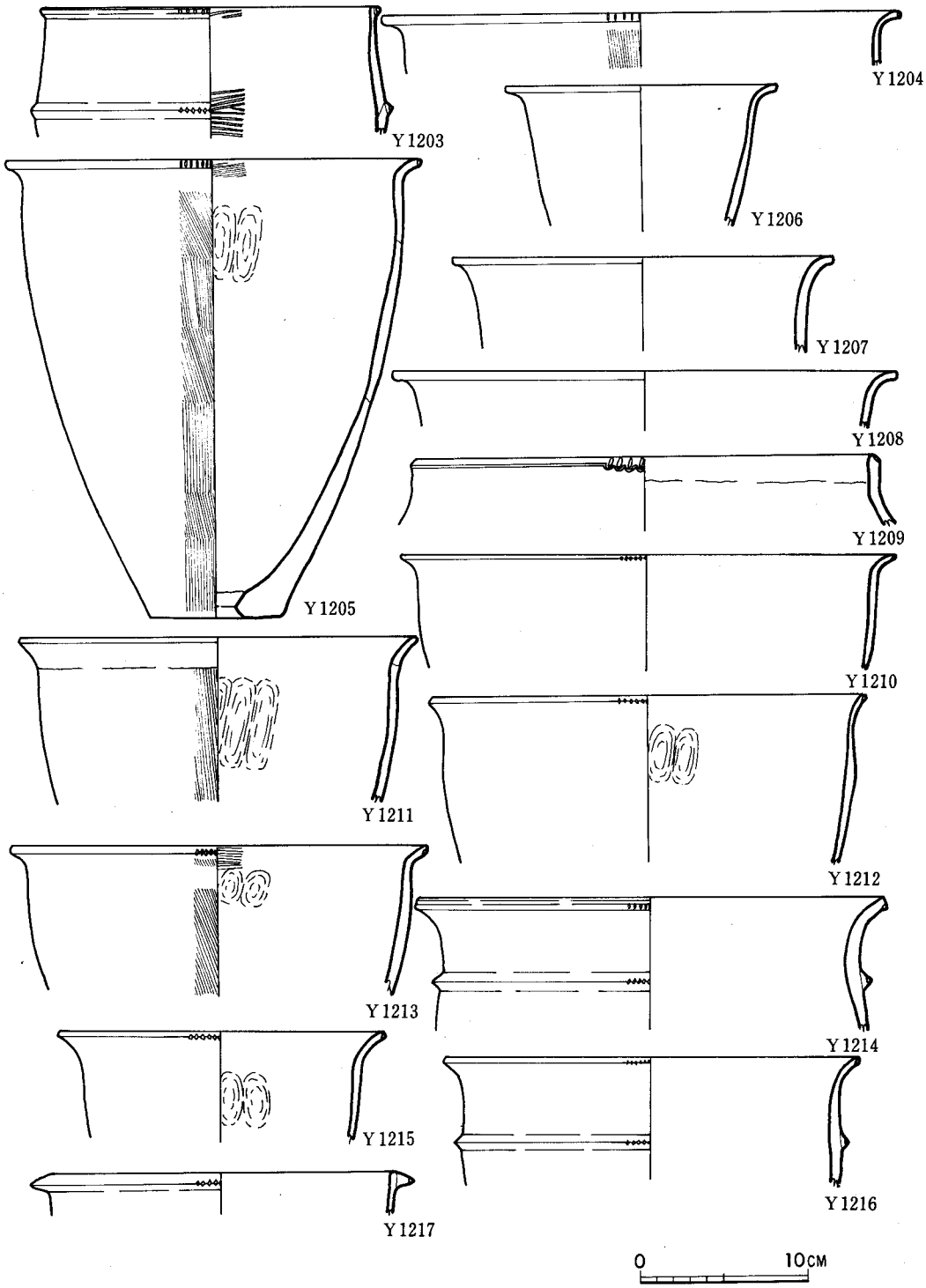


Fig.3・248　台地上包含層出土弥生式土器実測図(1)

ものであろう。Y1225はいわゆる鋤状口縁に近く、口縁部は外傾し、内側の張り出しも著るしい。横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。赤褐色を呈する。中期前葉～中葉のものであろうか。

浅鉢（Y1226）　胎土に若干の砂を含み、焼成良好。黄褐色を呈する。夜臼式であろう。

高坏　（Y1227・1228）　Y1227は坏部である。外反する口縁部から胴部で、逆「L」の字状に屈折する。横なで調整。Y1228は坏部と脚部の接合部で、そこに突帯がつけられる。いずれも石英粒砂を含み、焼成良好。淡褐色（Y1227）赤褐色（Y1228）を呈する。板付Ⅰ～Ⅱ式のものであろう。

底部（Y1236～1247）　Y1244・1247は壺、他は甕の底部であろう。Y1236～1241は断面三

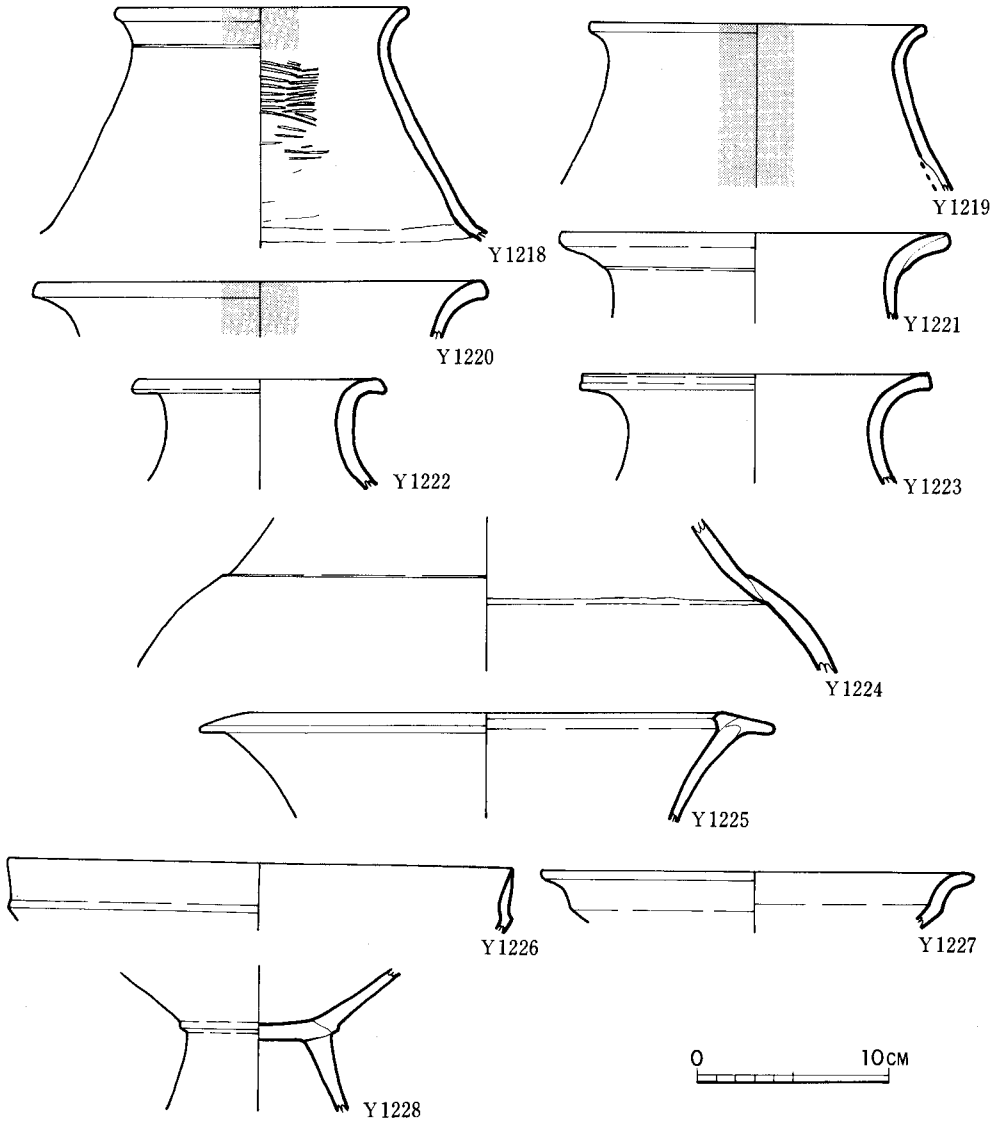


Fig.3·249　台地上包含層出土弥生式土器実測図(2)

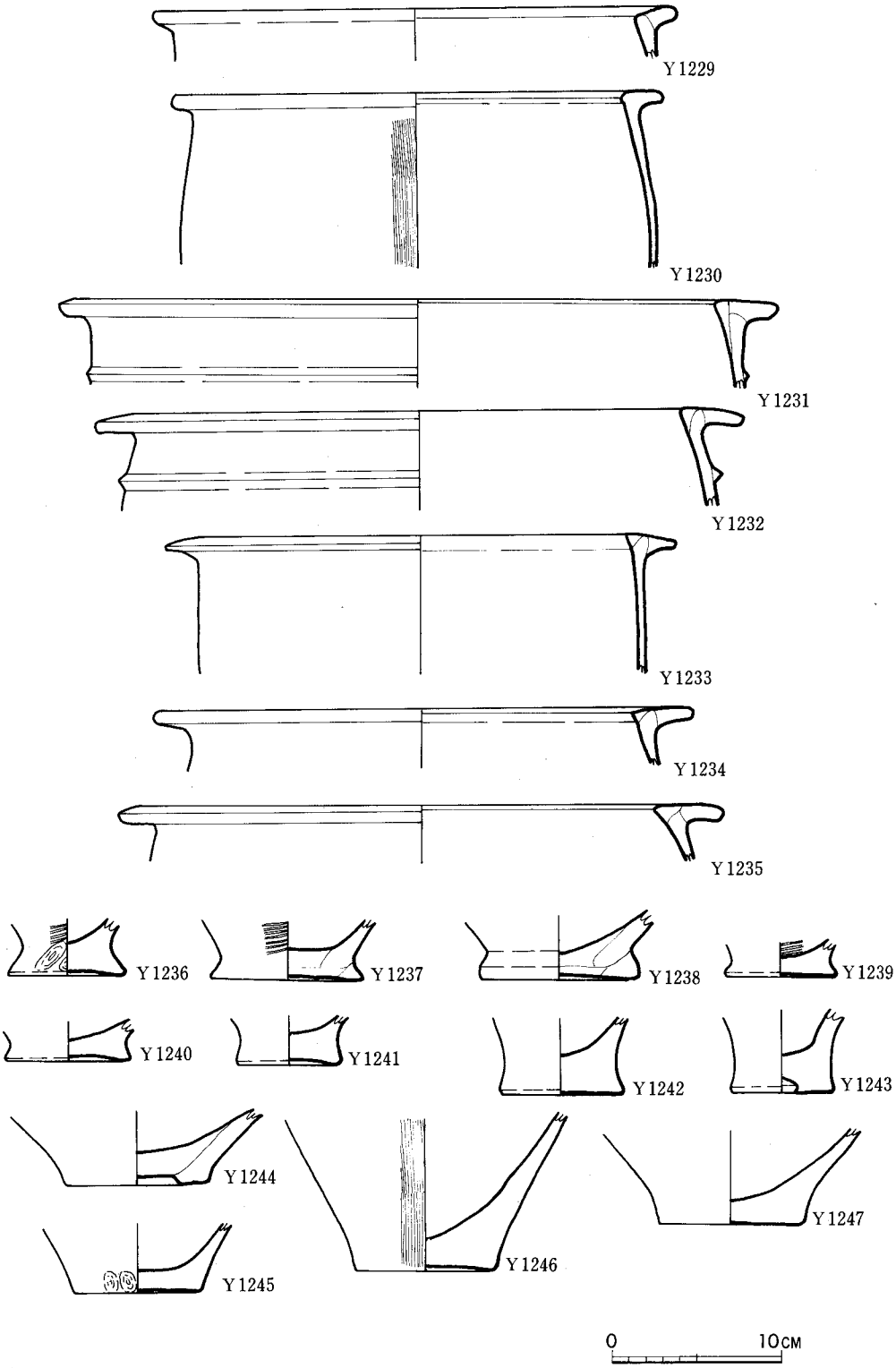


Fig.3·250　台地上包含層出土弥生式土器実測図(3)

角形の張り出しがつく。Y1236・1237は外面、Y1239は内面に条痕、Y1236の外面には指の押圧調整痕がつく。いずれも若干の上げ底を呈する。Y1242・1243は部厚い底部である。Y1245は底面中央に抉り込みを入れて上げ底状にする。Y1244も上げ底。Y1245は外面に指の押圧調整痕。Y1246は外面刷毛目調整。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。赤褐色、黒褐色（Y1236・1239・1244・1246)、黄褐色（Y1237・1242・1245・1247)、暗褐色(Y1228・1240・1243）を呈する。Y1236～1241は夜臼式、他は板付Ⅰ～Ⅱ式のものであろうか。　　（沢）

(2)　石製品（Fig.3・251～3・254、PL.XXVIII～XXXI、Tab.3・9、3・10）

台地上の耕作土層とその下のローム層上の砂質土層に包含されていた石製品、および台地上の遺構内に落ち込んだ状態で出土した石製品についてのべる。それらのほとんどすべては弥生時代のものとみてよい。

石庖丁（Fig.3・251）

S6815は頁岩製で、剝離加工・敲打によって石庖丁状に形づくっているが、半分欠損しているので紐孔穿孔状態等はわからない。石庖丁未製品。S6818は頁岩製で、外彎する片刃をもち、体面・刃部とも入念に研磨されている。S6899は頁岩製で背部、刃部とも外彎する杏仁形片刃石庖丁。紐孔は両側から穿孔され、体面、刃部とも入念に研磨されている。以上3点は耕土層出土。S6900は砂岩製の半月形石包丁。背部はやや外彎し、刃は外彎片刃で、紐孔は両側より穿孔され、体面は入念に研磨されている。側溝工事の際に採集。

S5162は柱穴状ピット（SP－C17－11）から出土した頁岩製の半月形石庖丁・直線の背部を持ち、刃は片刃であり、紐孔の穿孔状態は粗雑であるが体面・刃部は入念に研磨されている S7028は頁岩質の石材をもちいた大形石庖丁の破片で、刃は鋭くない。耕土下包含層出土。

石鎌（Fig.3・251）

S6816は頁岩製で、直線の両刃の刃部をもち、背部は二次加工によって調製され外彎し、刃部から体面にかけては入念に研磨されている。基部は欠損している。S6817は頁岩製で内彎する両刃の刃部をもち、刃部から体面にかけては入念に研磨されているが剝落している。2点とも耕土層出土。

石斧（Fig.3・251，3・252）

S5062は砂岩製で入念に研磨されているが、破片のため形状は分らない。S6801・6804・6805・6808は今山産出玄武岩製の太型蛤刃石斧で、体面は入念に研磨されているが、前3点は頭部片、1点は刃部片である。なお、S6805は、前述したS6602(Fig.3・54，D－16トレンチ出土)と同一個体である。S6802・6803・6806・6807・6812は砂岩製の蛤刃石斧である。S6802は敲打の後、全面研磨されているが、片方の側縁は欠損している。重さ460g。S6803は敲打によって整形され、胴部と頭部は研磨されているが、側縁は未研磨で刃部は欠損している。重さ530g。S6806は、頭部片で、敲打整形後裏面・側面のみ研磨されている。S6807は刃部片で、入念に研磨されているが、刃は磨耗が激しく使用によるものと考えられる。S6812は敲打整形後研磨しているが、刃部は欠損している。S6809(Fig.3・53)は砂岩製蛤刃石斧刃部片である。以上、耕土層出土。

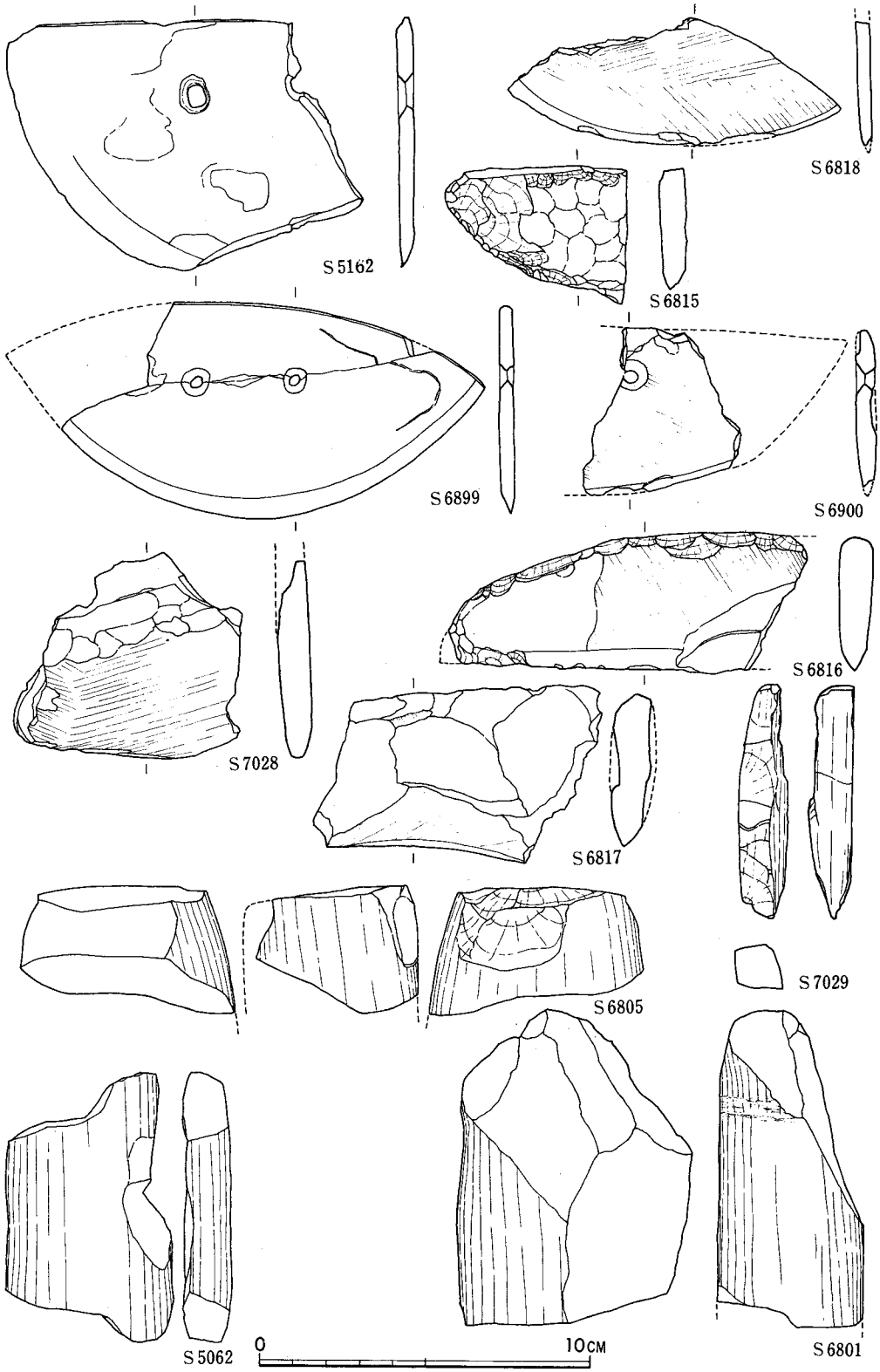


Fig.3·251　台地上包含層出土石器実測図(1)

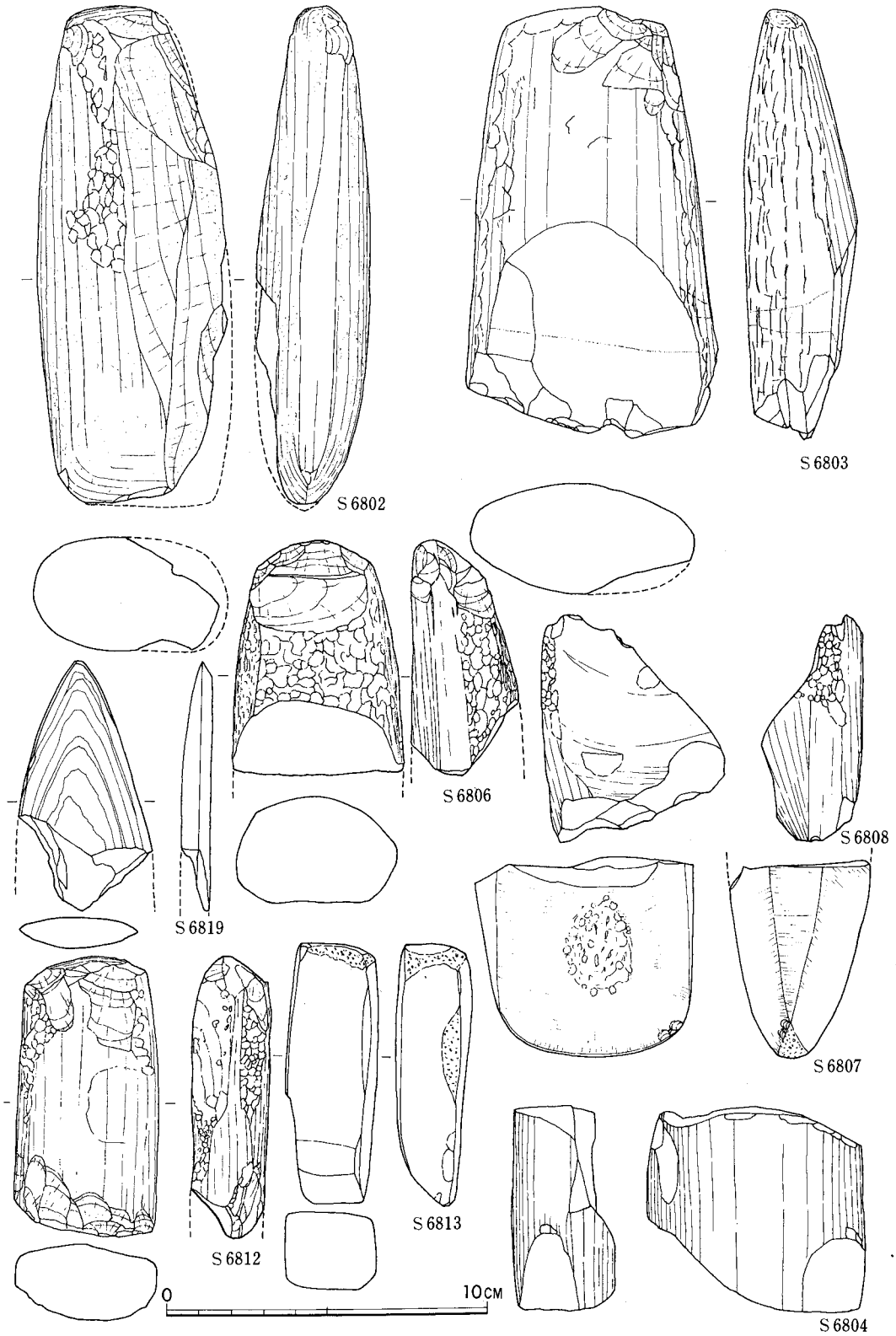


Fig.3·252　台地上包含層出土石器実測図(2)

方柱状片刃石斧（Fig.3･252）

Ｓ6813は粘板岩で表裏、刃部とも研磨されている。耕土層出土。Ｓ7029は頭部・側縁は研磨されているが、器面は剥離調整のままであり、未製品とも考えられる。耕土下包含層出土。

磨製石剣（Fig.3･252）

Ｓ6819は粘板岩製の石剣先端部で、鎬はなく、半分以上欠損しているため、形状はわからないが、前述した第２号竪穴出土のＳ2026と同様、幅広の短い茎を持つと考えられる。耕土層出土。

石鏃（Fig.3･253）

Ｓ5061はサヌカイト製の石鏃で横剥片に二次加工を加え整形している。第30号甕棺墓墓坑出土。Ｓ5063は黒曜石製で、基部は抉りが入る。小形であるが、入念な調整加工が行なわれている。第41号甕棺墓墓坑出土。Ｓ5142は黒曜石製の柳葉形石鏃で、表裏とも入念に調製加工が加えられている。柱穴状ピット（ＳＰ－Ｃ15－５）出土。Ｓ6820は黒曜石で、表裏とも入念に調製加工が加えられ、基部はやや内彎している。Ｓ7002は黒曜石製で、表面は入念に調整加工を加えているが、裏面には第一次剥離面が残り、基部は内彎している。右脚は欠損。耕土下包含層出土。

石錐（Fig.3･253）

Ｓ6973は黒曜石製の突錐で不定形剥片の基部を剥離加工によって打瘤を取りさり、二次加工を加えて錐部としている。耕土層出土。Ｓ7000は黒曜石製の突錐で、剥片の先端部に二次加工を加えて錐部としている。表面採集。

剥片石器（Fig.3･253）

Ｓ5126は黒曜石製の縦長剥片の片方の縁辺に使用痕が見られる。耕土層出土。

削器（サイド・スクレイパー）（Fig.3･253）

Ｓ5008は黒曜石製不定形剥片の先端部に表裏とも二次加工を加えてエッジとし、エッジは磨耗している。第20号土壙墓墓坑出土。Ｓ5078は黒曜石製不定形剥片の先端部に二次加工を加え鋭いエッジをつくり出しており、エッジは磨耗している。第50号甕棺墓墓坑出土。Ｓ5128は黒曜石製縦長剥片の縁辺に二次加工を加えエッジとしているが、先端部は欠損している。第17号土坑墓墓坑出土。Ｓ6970はサヌカイト製で、表裏とも粗い二次加工が加えられている。耕土層出土。Ｓ7012は黒曜石製不定形剥片に二次加工を加え、特に裏面の先端部は意識的に加工を加えているところから石鏃未製品の転用と考えられる。耕土下包含層出土。

掻器（エンドスクレンパー）（Fig.3･253）

Ｓ5151はサヌカイト製残核を表材として、表裏とも粗い二次加工を加えている。台地出土。Ｓ6983は、黒曜石の小角礫を素材として、平坦な裏面を生かして表面のみ刃潰し状の二次加工を加え鋭いエッジをつくっている。長さ37cm、幅25cm、厚さ１cm。耕土層出土。

礫器（チョピング・トウール）（Fig.3･253）

Ｓ5057は砂岩製で表裏とも粗い剥離によって円形に整形しており、円形打製石斧と呼ぶのが妥当であろう。第24号甕棺墓墓坑出土。Ｓ6883は玄武岩製両刃礫器で打面を残し、裏面は第一次剥離面のままで打瘤も残っているが、縁辺は粗い二次加工を加えエッジとし、エッジは磨耗

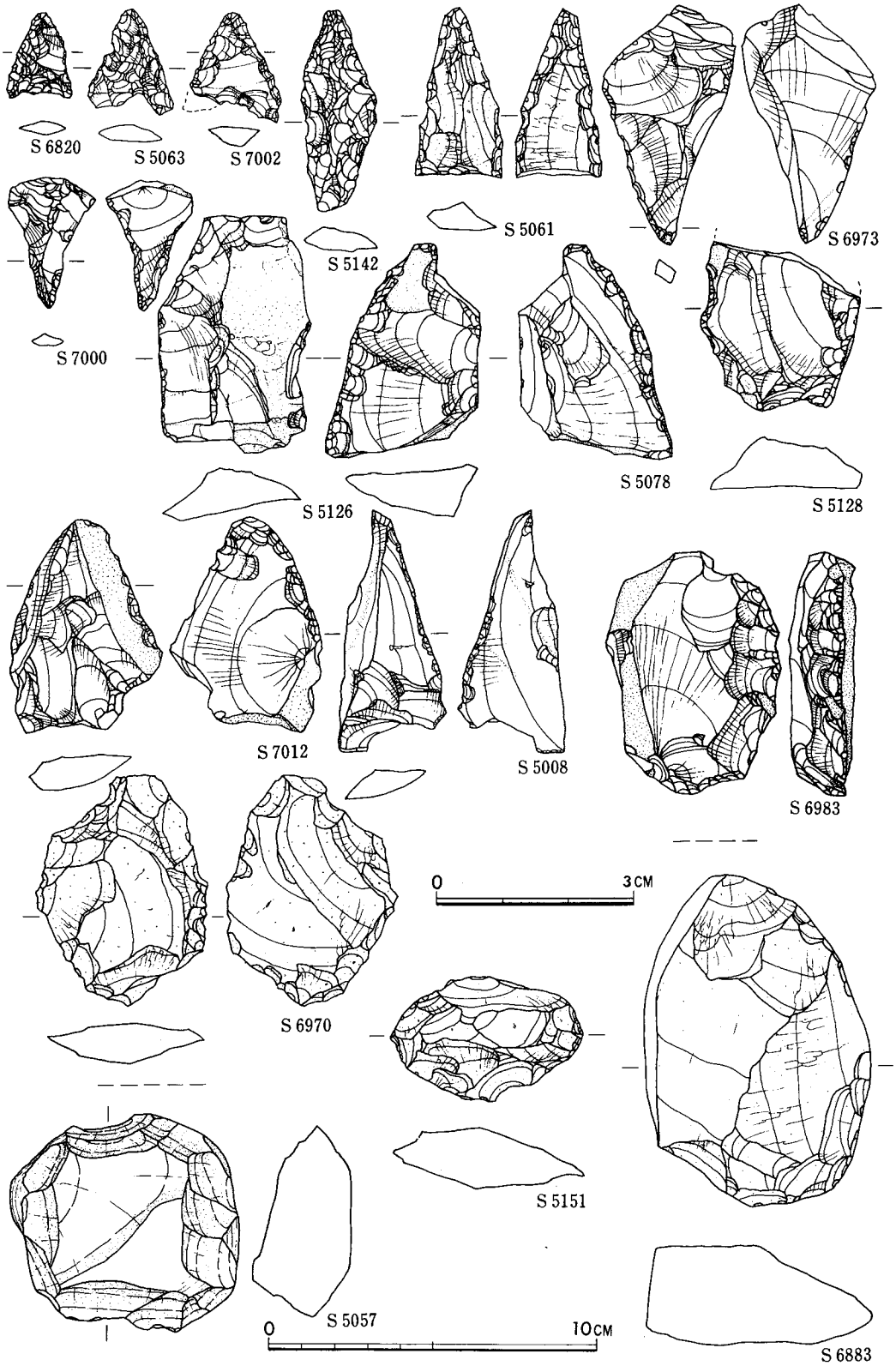


Fig.3·253　台地上包含層出土石器実測図(3)

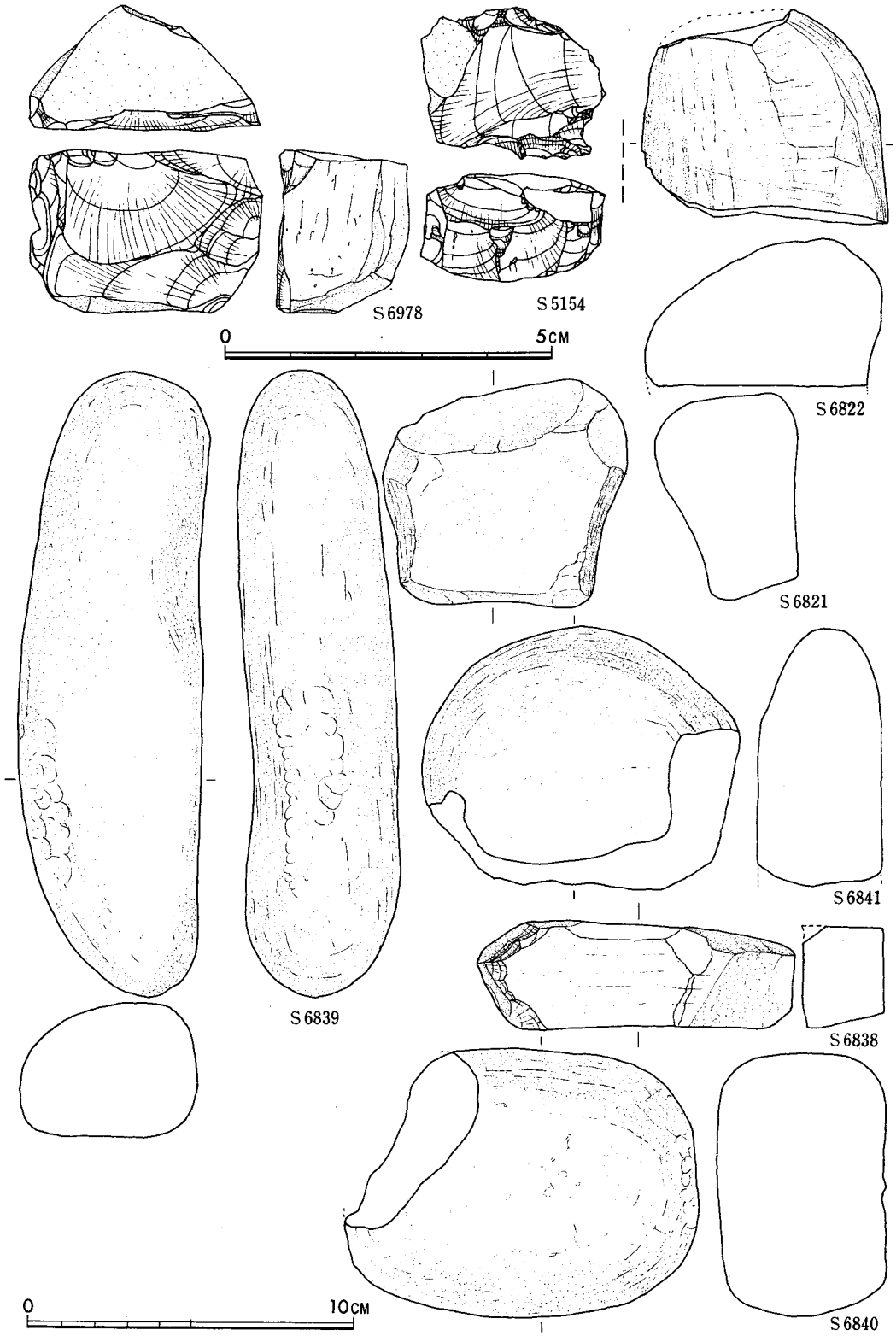


Fig. 3·254　台地上包含層出土石器実測図(4)

が甚しい。耕土層出土。

石核（コア）（Fig.3·254）

S5154は黒曜石の角礫を素材として、一部の自然面の他は剝片剝取を行ない、打面調整が行なわれている。剝出された剝片の長さは2cm内外で寸づまりのものである。ローム層直上出土。S6978は黒曜石の小角礫を素材とした不定形石核で、剝片剝離面は一面である。ローム層直上出土。

磨石（Fig.3·254）

S6822は変成岩製の楕円形礫で全面に磨擦痕があるが、表面は凹凸が甚しい。S6841は扁平の円礫の全面に磨痕があり約半分欠損している。2点とも耕土層出土。

敲石（Fig.3·254）

S6839は砂岩の棒状礫の全面に磨痕がみられ、側縁の一部に敲打痕があり、背にあたる部の上部は、若干窪んでおり、手ずれの痕跡とも思われる。耕土層出土。S6840は花崗岩の断面が隅丸方形の礫の全面に磨痕がみられ、上端は欠損しているが、下端には敲打痕がある。790g。

砥石（Fig.3·254）

S6838は油質頁岩製の仕上げ用の砥石で、皿面の砥面をもっている。しかし砥面の窪まりがない。油質頁岩製であることから、方柱状片刃石斧とした方が妥当かもしれない。耕土層出土。S6821は砂岩製で、5面の砥面がある。ローム層直上土。

（山口）

(3) 土師器・須恵器・瓦器・片口・瓦（Fig.3·255～3·260）

(a)土師器（Fig.3·255, 3·257）

高台付椀（H161～173）　H161は口縁部が外反する。高台は外に開く。胎土に砂を含み、焼成は良好。黒色。口径15.2cm、底径7.4cm、器高6.3cm。H162は小形だが、やはり口縁部は外反し、高台も外に拡がる。胎土に砂を含み、焼成は良好。黄褐色。口径11.6cm、底径7.6、器高4.1cm。H163～172は口縁部を欠く。高台はすべて外に拡がるが、先端の尖るもの（H164・167～169）がある。いずれも胎土に砂を含み、焼成は良好。黄白色（H163・169）、黄褐色（H164・167・168・170・172・173）、褐色（H165）、暗赤褐色（H166）、淡暗褐色（H171）を呈する。底径は推定も含めて、8.2cm（H163）、7.2cm（H164）、6cm（H165）、6.6cm（H166）、7cm（H167～169）、7.6cm（H170）、7.4cm（H171）、8.4cm（H172）である。

高台付皿（H174）　細く高い高台は内へすぼまる。胎土に砂を含み、焼成良好。赤褐色を呈する。口径12cm、底径5.6cm、器高2cm。

皿（H175・176）　H175は底面は箆削りで、板目がみられる。底面は丸味を帯びる。口径9.6cm、器高1.4cm。若干の石英粒砂を含み、焼成は良好。黄褐色。H176は推定口径10.8cm、器高1cm。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。暗黄褐色。

坏（H177～182・184～186）　H177は推定口径11.4cm、器高1.8cm。胎土に砂を含み、焼成は若干あまい。黄褐色。H178は推定口径15cm、器高2.4cm。胎土に砂を含み、焼成良好。黄褐

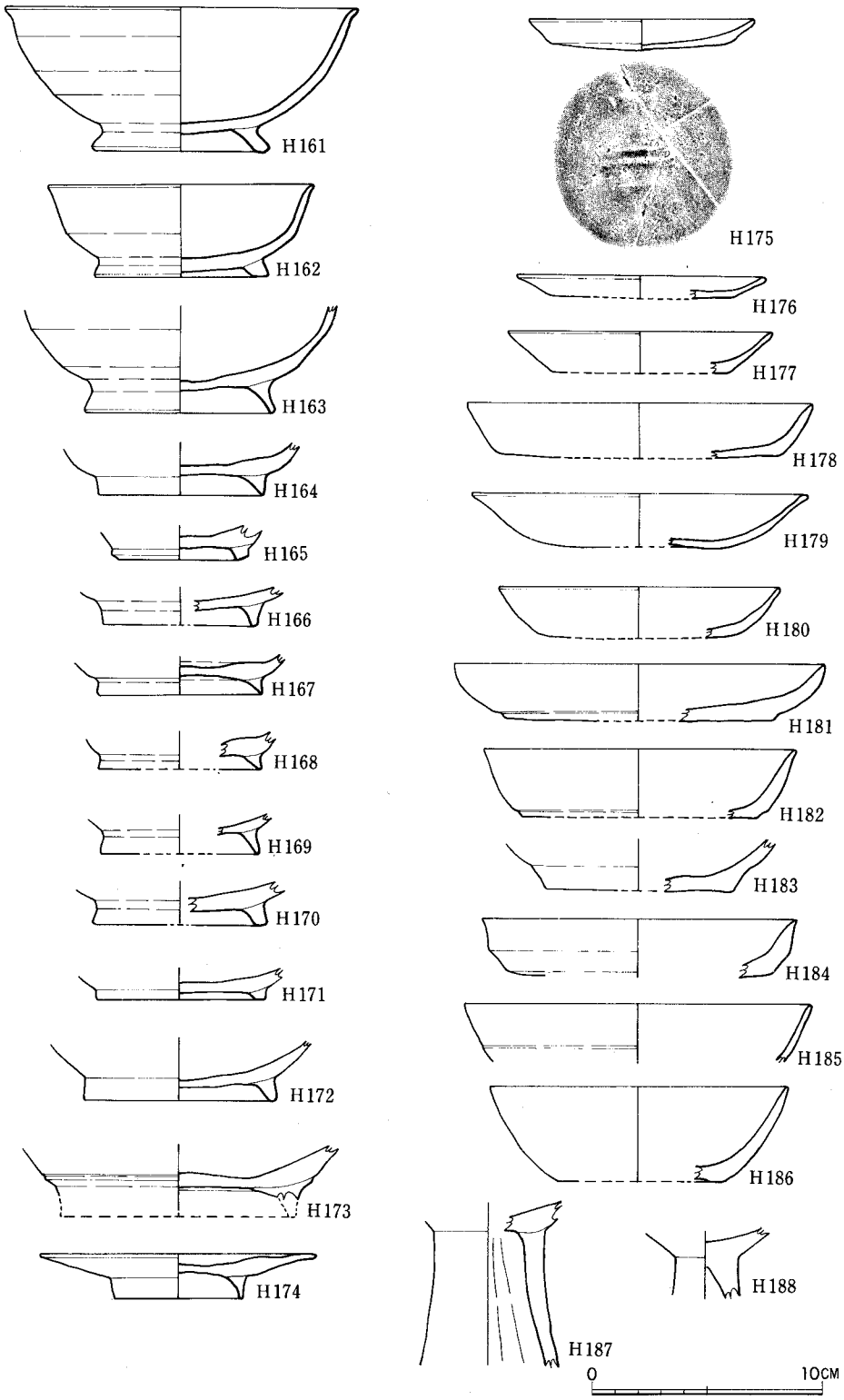


Fig.3·255　台地上包含層出土土師器実測図

色。Ｈ179は底部中央が凹むと思われる。推定口径14.6cm、器高2.3cm。胎土に石英粒砂を含み、焼成は若干あまい。淡褐色。Ｈ180は推定口径12.2cm、器高2.2cm。胎土に砂を含み、焼成は若干あまい。暗黄褐色を呈する。Ｈ181は底部に段を有する。胎土に砂を含み、焼成は良好。黄褐色。推定口径16.2cm、器高2.5cm。Ｈ182も底部に段をもつ。推定口径13.6cm、器高３cm。胎土に若干の砂を含み、焼成は良好。黄白色を呈する。Ｈ184は胎土に砂を含み、焼成良好。黄褐色を呈し、推定口径13.6cm。Ｈ185は体部に一本の沈線が入る。胎土に砂を含み、焼成良好。灰白色。Ｈ186は底部が低い高台状になっている。坏というより椀に近い。胎土に砂を含み、焼成は良好。黄褐色。推定口径13cm、器高4.2cm

底部（Ｈ183）　胎土に砂を含み、焼成良好。褐色を呈する。

高坏（Ｈ187・188）　ともに脚部である。Ｈ187 は内面にしぼり痕が残る。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。黄褐色。Ｈ188は器面のあれが激しい。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。赤褐色を呈する。

これらの土器は、Ｈ187・188を除いて、平安～鎌倉のものであろう。

柱穴状小ピット出土の土師器は数点ある。Ｈ193は糸切り底の坏の底部であろう。胎土には石英粒砂を混じ、焼成良好、黄褐色。底径5.2cm。第100号竪穴埋土に掘り込まれたＳＰ－Ｂ15－９出土。Ｈ194は高台付椀であるが、高台は欠失する。ロクロ痕が若干残っている。底面には、箆で細い「×」印をつける。胎土・焼成とも良好で、黄褐色を呈する。第59号甕棺墓を切るＳＰ－Ｂ15－10出土。Ｈ195は外反する口縁をもつ甕であるが、胴は長胴化するようである。口縁端から口縁内面は指の横なで調整。外面口縁部は横の刷毛目、それ以下は縦の刷毛目調整。胴部内面は横の箆削り、胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。外面暗褐色、内面黄褐色を呈する。第41号甕棺墓を切るＳＰ－Ｃ17－56出土。Ｈ196は椀であるが、高台が付くかどうか不明である。胎土には石英粒砂を混じ、焼成良好。褐色。これもＳＰ－Ｃ17－56出土。

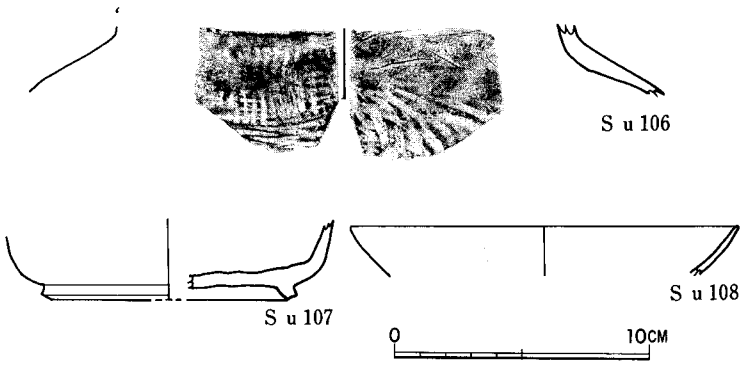


Fig.3·256　台地上包含層出土須恵器実測図

(b)須恵器（Fig.3·256, 3·258）

Ｓｕ106は甕の肩部である。外面には叩き目が施されるが、頸部付け根付近は、縦・横に施

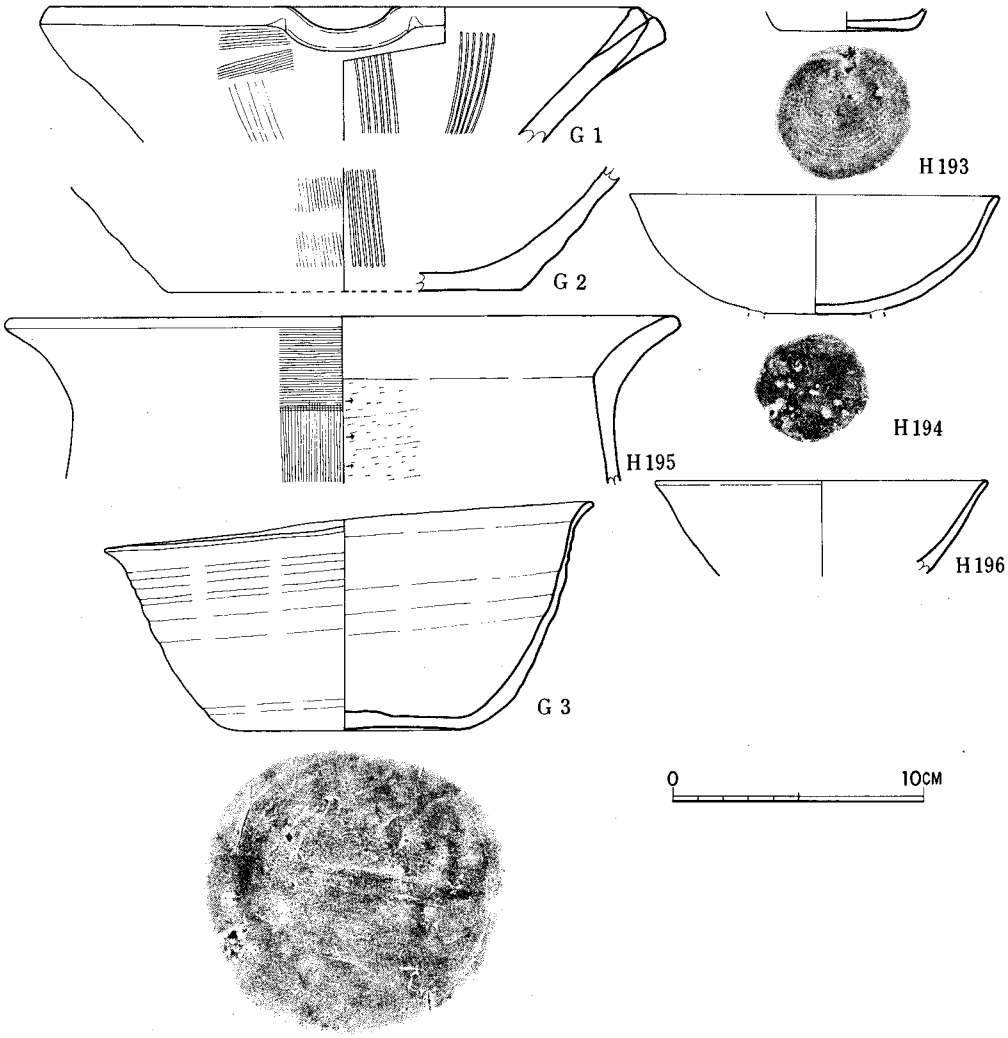


Fig. 3・257　台地上遺構埋土出土片口・土師器・瓦器実測図

され、格子目状となる。それ以下は横。内面には青海波文が施される。胎土に砂を含み、焼成は良好。青灰色を呈する。Su107は高台付椀で、高台は外に拡がる。内外面とも指の横なでがあり、ロクロの痕と思われる。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。青灰色を呈する。Su108は皿(盤)の口縁と思われる。胎土に砂を含み、焼成は良好。黄褐色を呈する。Su109は須恵器大甕の胴部で、外面は叩き目、内面は青海波文が施される。胎土・焼成ともに良好で、青灰色を呈する。第50号竪穴埋土上部攪乱層出土。

(c)瓦器 (Fig.3・259, PL.XXVI)

G3はSP－C16－46で出土。単独の出土で、完形品である。全体的に若干ゆがみをもち、器壁は薄い。口縁部は若干外反し、ロクロ痕のためか、内外面とも凹凸が甚しい。底面には箆切り

で、板目痕らしきものもみられるが、明瞭ではない。胎土は多量に砂粒を含み、焼成はあまり良くない。一部に焼成時の黒変があるが暗黄褐色を呈する。

(d)片口（Fig.3·257, 3·259）

Fig.3·257のＧ１・２は瓦器質の片口で、Ｇ１は口縁部、Ｇ２は底部であるが、ともに内面に６本単位の沈線が縦に入ることから摺鉢として利用されたものであろう。１は外面に斜め、２は縦の刷毛目調整。胎土には砂を混じ、焼成良好。灰褐色から黄褐色を呈する。ともにＳＰ－Ｂ15－９出土。Ｇ４～Ｇ６の３点は包含層で出土した。いずれも瓦器質のものである。Ｇ４は外反する口縁をもつ。口縁部の一ヶ所を押さえていわゆる注ぎ口をつける。内外面とも粗い横刷毛目で調整されるが、内面に３本単位の沈線が縦につけられる。あるいは摺鉢類か。胎土に砂を含み、焼成は良好。外面灰褐色、内面黄褐色を呈する。Ｇ５も外反する口縁部で、内外面とも

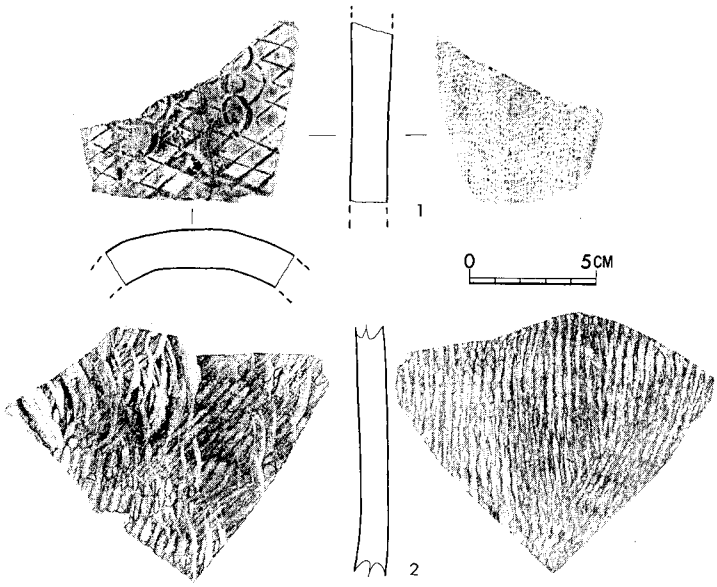


Fig.3·258　台地上遺構埋土出土瓦・須恵器実測図

刷毛目調整だが、縦の沈線は破片中にはみられない。胎土に砂を含み、焼成良好。灰褐色。Ｇ６も同様の器形であるが、刷毛目調整はなく、縦の沈線（４本以上の単位）がある。胎土に砂を含み、焼成は良好。黄褐色を呈する。

(e)瓦（Fig.3·258、3·260）

Fig.3·258の１は第50号竪穴埋土上部攪乱層出土。外面に斜格子目、内面に布目がつく。Fig.3·260の１は外面の叩き目は斜格子で、内面には布目がつけられる。２も内面は布目がつくが、外面は一部に間隔の広い格子目らしいものがつけられる。３は内面布目である。いずれも胎土に石英粒砂を混じており、焼成は良い。

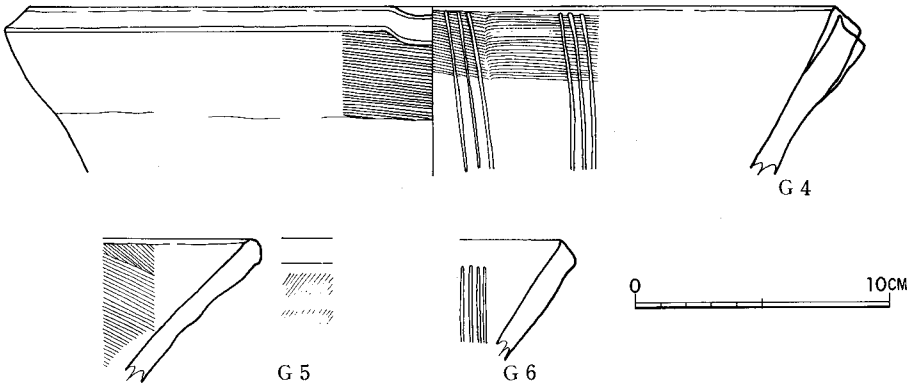


Fig.3·259　台地上包含層出土片口実測図

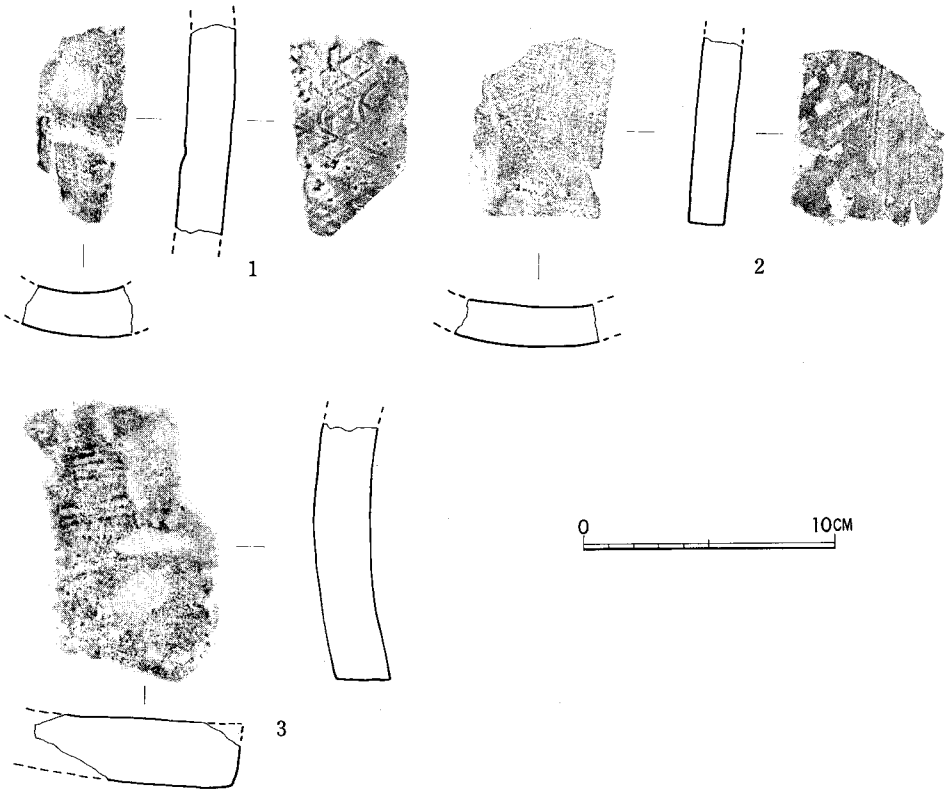


Fig.3·260　台地上包含層出土瓦実測図

(4) 陶磁器 (Fig. 3・261)

C102・103はいわゆる櫛抽き文を内面に描く。C102は外面にも一部縦の櫛抽きがみられるが図示できるほどではない。いわゆる「珠光青磁」と呼ばれるものであろう。釉は黄灰色ないし淡緑色で、胎土は淡灰色を呈する。C104は口縁部を欠くが、外面に蓮弁文を削り出している。底面には釉はかからない。釉は濃緑色、胎土は淡灰色を呈する。龍泉窯産のものであろう。C105は全面に釉がかかる。底面はやや尖り気味であり、釉は濃緑色、胎土は灰色を呈する。C106は青磁で、外面下部と底面には釉はかからない。釉は透明に近い緑色で、胎土が淡灰色のため、同様な色を呈する。C107もC106と同様であるが、高台は厚く低い。C108は白磁であるが、器面の磨耗が激しい。C109も白磁で、玉縁状の口縁をもつ。体部外面中部以下には釉は施されていない。釉は灰白色を呈し、内外面とも気泡が多い。横なで調整。

(5) 滑石製品 (Fig. 3・262, 3・263)

滑石製品は調査地全域で35点出土した。第2区で5、第3区で6点の他はすべて第1区出土である。

K1は石鍋である。口縁は内彎しており、口縁上端は平坦である。口縁下に高い台形の鍔が上反

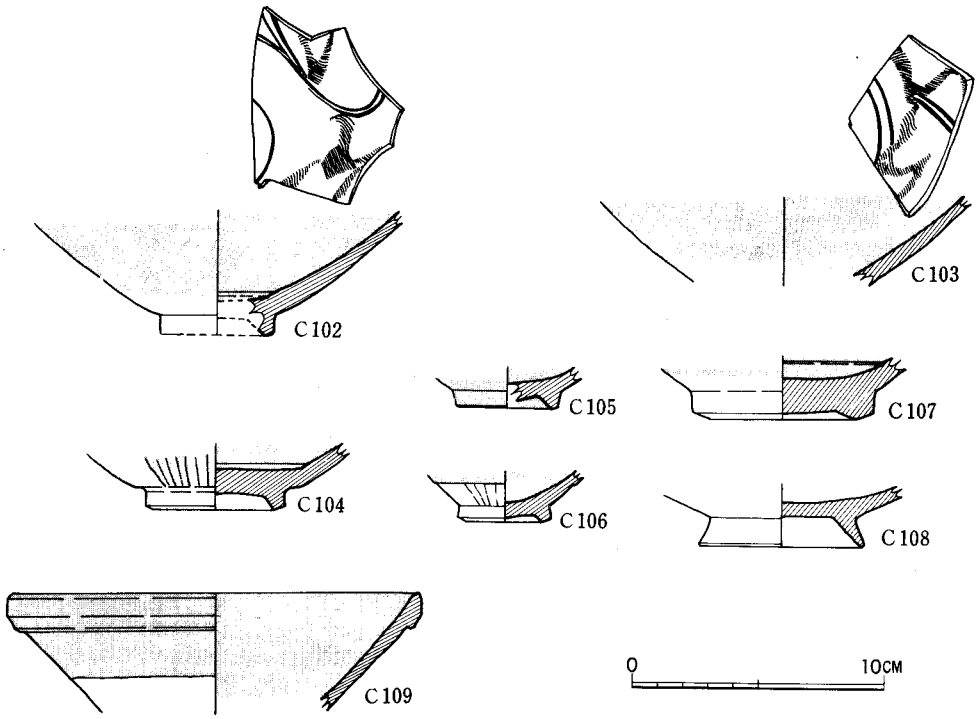


Fig. 3・261　台地上包含層出土陶磁器実測図

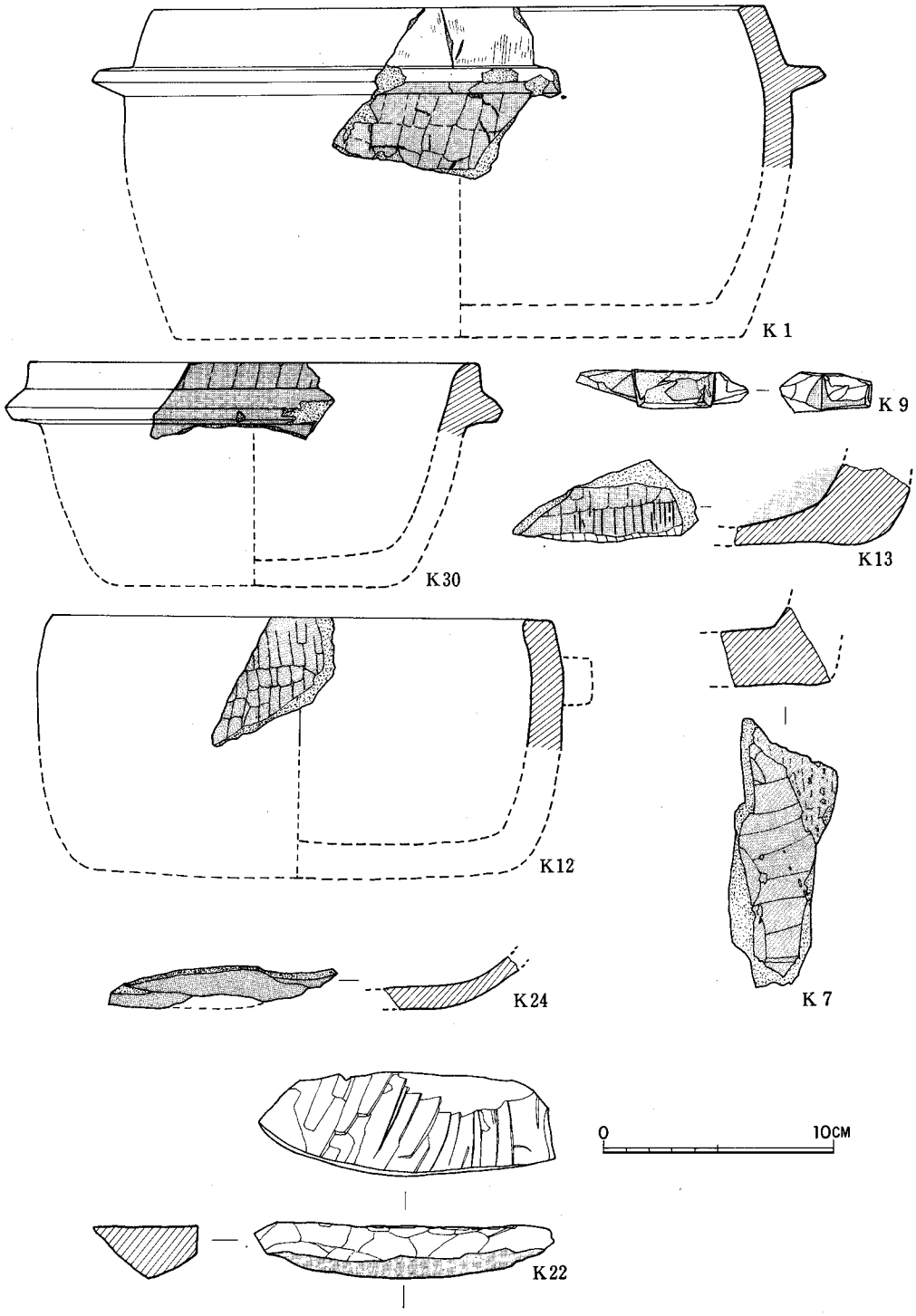


Fig.3·262　台地上包含層出土滑石製品実測図(1)

りにつく。鍔から上面と内面は磨研されており、外面の鍔以下は削り面がそのまま残されている。鍔以下には煤の付着が著しく内面は、煮沸のために色が変わる。K30も石鍋の口縁で，やはり口縁下に台形の高い鍔を有するが、鍔は下向きで、口縁も外開きとなる。口縁端はわずかに丸味を帯びる。外面は鍔以外は削り面をそのまま残し、内面は磨研されている。外面には煤の付着が著しく、内面は煮沸のため、変色している。K12も石鍋の口縁部であるが鍔はなく，おそらく後述のＫ９の様な造り出しによって竈に止めたと思われる。口縁部は内彎し、先端は平端である。外面は削り面を残すが、内面は磨研されている。外面には煤が厚く付着。内面は煮沸のため変色している。Ｋ９は石鍋の造り出し部である。外面には厚く煤が付着している。K13は石鍋の底部破片である。外面は削り面を認めるが底面は自然面を残す。底面近くには深く掻き傷を作る。内面の磨研も粗い。内外面とも煤が厚く付着しているが、一部割れた面にも付着していることから、破砕して石鍋として不用の後，何らかの理由で火に当ったものであろう。Ｋ７も同様に石鍋の底部である。底面はK13に比べ厚く、削り面を残す。底面には煤の付着が著しい。K24は薄手の石鍋の底部である。外面および底面には煤の付着が著しい。K22は石鍋の破片を他に転用しようとしたらしく、一部に煤が厚く付着するが上面は粗い削り面、側面はかなり丁寧な削りを行なっている。上面の一部には石鍋の内面であった名残りとして磨研面が

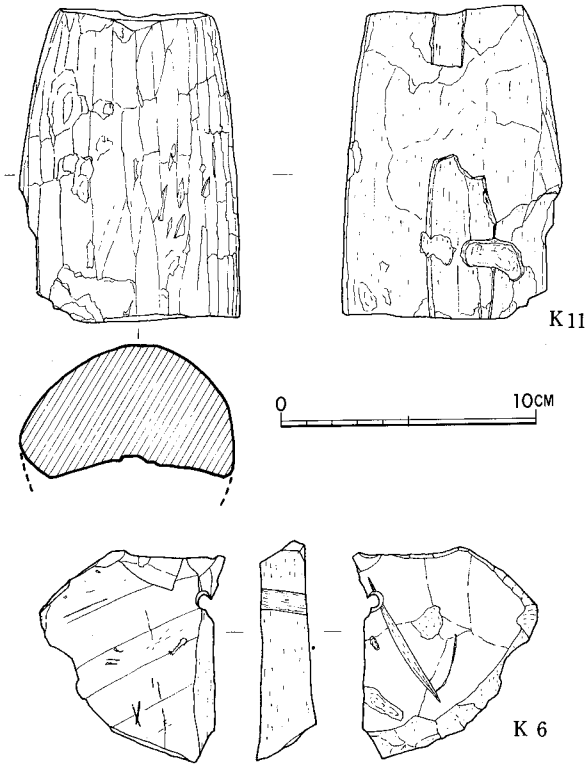


Fig.3·263　台地上包含層出土滑石製品実測図(2)

残る。K11は円筒状のものが半割したもので、上面と下面は磨研されているが、側面は削りの痕が顕著である。上下両側から穴をあけかけた痕跡があり、あるいはその時に割れたものであろう。何かのおもりでも作製しようとしたのだろうか。Ｋ６は、両面に削りの痕が明瞭に残り、一部に穿孔されている。

（沢）

第４節　第１区調査のまとめ

第１区の調査は東側の台地上と西側～北側の沖積層とで行われた。台地上には弥生時代前期の竪穴群、前期末～中期初とみられる土坑墓・木棺墓群、前期末～中期中葉の甕棺墓群があり、その後の遺構としては古墳時代住居址、中世とみられる井戸状遺構，柱穴状小ピット群がある。台地北側の沖積層との境には古墳時代のピット、中世のピットがある。

沖積層では、台地を形成するローム層がなくなり、その下の八女粘土層が次第に低くなって沖積層の基盤層をなす。沖積層の下位には弥生式土器の包含層があるが、台地周縁に限られ、台地からはなれるにつれてこの包含層は次第に失われる。弥生式土器包含層は，八女粘土層上の黒色粘質土層であり、その下位は弥生時代前期包含層となっている（Ｃ－14ａ・ｂ、Ｄ－17ｂ、Ｅ－17などのトレンチ・グリッド)。上位は中期以降の土器も含むが、後期の土器はほとんどない。これは台地上に中期中葉以降の弥生時代遺構が認められないことに対応しよう。その上は、土師器、須恵器、陶磁器なども含む層で削平された台地ローム層上から沖積層へとひろがっている。

台地西縁部の黒色粘質土層には細い溝がほぼ南北に走る。この溝の下底部はほぼ標高７ｍにあり、上端標高は7.4ｍ弱である。この溝は弥生時代前期のもので、人工的な溝というより、台地際を流れる自然流路ともみられる。その東側に小竪穴と杭列がある（Ｅ－17グリッド)。この杭列は先端部しか残っていないが、その打ち込み面は7.2ｍ前後になろう。また小竪穴も杭打ち込み面から掘られたとすれば、深さは60㎝あまりになる。さらに東の標高7.1～7.2ｍには横倒れになった矢板列(？)がある（Ｆ－17グリッド)。

こうしたことから、弥生時代前期における台地際の地表は東から西へ軽く傾斜し、標高7.4ｍ～7.2ｍと考えてよい。一方台地上の当時の標高は、遺構の現状から１ｍあまり削平されたとみて、標高９ｍ前後と推定され、当時の台地・沖積層の比高差は1.5ｍ以上であろう。

この沖積層には水田があったともみられる。Ｆ－17グリッドの花粉分析では地表下130ｍ(標高7.2ｍ前後）より稲花粉が増加するので（付編第３参照)、前期の水田があったことも予想されるが、遺構の面からの確証はない。もしあったにしても台地周縁のごく限られた場所であろう。Ｅ－17グリッドの小竪穴の性格は明らかでないが、炭化米の出土・沖積層にあることから、長崎県里田原遺跡の汀線状で検出された竪穴とも比較されよう〔長崎県教委1971〕。　（後藤）

台地上は、前述したように約１ｍ以上を削平されている。そのために遺構の残存状態は悪く、竪穴108、甕棺墓63、木棺墓・土拡墓51、古墳時代の住居址１、その他井戸状遺構２、柱穴状小ピット多数が存在していたが、この数字より多かったことが考えられる。

弥生初頭期から、この台地は生活用地として使用される。その時期の遺構としては竪穴があり、これは貯蔵穴として使用されていたらしい。住居址は発見されなかったが、これは削平さ

れてしまったのかもしれない。貯蔵穴は一部中期初頭まで下がると考えられるものもあるが、ほとんどは前期末までのものである(第７章第１節２参照)。

この竪穴の大部分が放棄された後に、この台地は墓地として利用された。土坑墓、木棺墓に時期の不明なものもあるが、竪穴と墓坑の切り合いはほとんど墓坑が新しいことから、共存したとは考えにくい。甕棺墓は前期末のものが最も古く、それも調査区西寄りに集中している。中期に入ると、甕棺墓は南側へ拡がり、中期前葉のものが最も多い。中期中葉になると数が少なくなるが、南北を含めて全面に拡がり、密度が薄くなる。木棺墓、土坑墓は時期不明のものが多いが、埋土中の土器などから若干さかのぼり得るものはあるにしても、前期末～中期初頭のものとみてさしつかえないであろう。墓地は、調査区西側の径15m程の無遺構地帯を取り巻くように、また一部は南北に直線的に分布している。無遺構地帯には竪穴も存在せず、あるいは旧台地の最高所であったのかもしれない。中原志外顕氏によると、東側を流れる古川の改修工事中にローム層がみられ、遺物も多量に出土したとのことで、台地はなお東側へと拡がり、墓地・竪穴なども同様に拡がると推察される。中期中葉以降にはこの墓地は完全にとだえる（第７章第１節３参照)。

古墳時代に入ると、再び生活用地として利用される。住居址は一軒のみであるが、これは斜面上にかかるもので、削平時に数軒は消失したものであろう。住居址は前期のもので、東西にベッド状遺構をもつこの時期特有のものである。同時期のものとしてＣ－14ａ･ｂトレンチの小ピット群がある。

Ｃ－14ａ･ｂトレンチおよびその間における小ピット群は古いものは５世紀初頭前後のもの(第１号ピット・第２号ピット)、新しいものは平安時代まで下がるもの（第17号ピット）がある。遺物の出土しないピットも多く存在したが、黒色粘質土層の上からこれらのピットが掘り込まれて、黒色粘質土層中では湧水のためもあり、遺物を確認し難い状態であったことにもよる。そのため黒色粘質土層中の出土の土師器などにより、直接に継続しているとは言えないが、かなりの長期間にわたり営まれたものとすることができよう。

板付周辺の板付５丁目10－５のＤ・Ｅ－９地点で，同様なピット２個が調査されている〔後藤・横山編1975〕。第１号は甕と小型丸底壺、第２号は高坏および小型丸底壺片が出土している。また同様の遺物は、福岡市西区牟多田遺跡〔島津編1974〕、同野方中原遺跡〔柳田編1974〕、東区多々良込田遺跡〔塩屋・折尾編1975〕、筑紫郡那珂川町恵子若山遺跡〔岩崎二郎編1975〕などで最近発見されており、かつて福岡市西区有田遺跡〔九州大学考古学研究室1968〕でなされた北九州における古式土師器の編年に対する検討も行われている〔高橋1975〕。ここでは詳述しないが、第１号・２号ピット出土の土器、および黒色粘質土層出土の土器は５世紀初頭前後のものとみてさしつかえないであろう。

このピットの性格であるが、板付Ｄ･Ｅ－９地点では祭祀遺構とされており、本遺跡でも、生活あるいは生産遺構には不適当な台地端の沖積地と接した地点に存在すること、破砕された土器の多いこと、小型丸底壺の多いこと、第１号ピットにおける小型丸底壺のミニチュアの存在、あるいは鹿角製刀子柄の存在などから、積極的にはいえないにしても一応、祭祀遺跡と考えて

おきたい。

古墳時代以降にも生活の場として利用されたらしいことが出土遺物によってわかる。しかし、この時期の遺構は井戸状遺構と柱穴状小ピットがあるのみで、井戸状遺構も井戸と確定する証拠は何もない。柱穴状小ピット群もほとんどまとまらず、この時期の遺構も削平の難にあった。

台地上では、先土器時代の遺物も出土しているが（第6章末尾補参照）、明確な包含層はとらえられない。　（沢）

Tab.3・8　第1区台地上出土弥生式土器挿図対照表

No.	出　土　位　置	Fig.
Y1199	SP－C17－1	3・247
Y1200	SP－C18－35	〃
Y1201	SP－B16－8	〃
Y1202	SP－C17－31	〃
Y1203～47	耕土・耕土下包含層	3・248～3・250

Tab.3・9　第1区台地上出土石器・石製品挿図対照表（除堅穴出土品）

No.	器　種	石　材	層　位	備　考	Fig.	PL.
S 5008	削　器	黒曜石	D 20 埋土		3・253	
S 5057	礫　器	砂　岩	K 24 埋土		〃	XXIX
S 5061	石　鏃	サヌカイト	K 30 埋土		〃	
S 5062	石　斧	砂　岩	包含層	胴部片	3・251	
S 5063	石　鏃	黒曜石	K 41 埋土		3・253	XXXIII
S 5078	削　器	〃	K 50 埋土		〃	XXXI
S 5126	剥片石器	〃	包含層		〃	
S 5128	削　器	〃	D 17 埋土		〃	
S 5142	石　鏃	〃	SP-C15-5埋土	柳葉形	〃	XXVIII
S 5151	掻　器	サヌカイト	包含層		〃	
S 5154	石　核	黒曜石	〃		3・254	XXVIII
S 5162	石　庖　丁	頁岩質砂岩	SP-C17-11埋土	半月形	3・251	XXIX
S 6801	太型蛤刃石斧	玄武岩	包含層	今山産出玄武岩，頭部片	〃	XXXI
S 6802	蛤刃石斧	砂　岩	〃	460 g	3・252	XXX
S 6803	〃	〃	〃	刃部欠損　530 g	〃	XXX
S 6804	太型蛤刃石斧	玄武岩	〃	今山産出玄武岩，胴部片	〃	
S 6805	〃	〃	〃	今山産出玄武岩，頭部片，S 6602と同一個体	3・251	XXX
S 6806	蛤刃石斧	砂　岩	〃	頭部片	3・252	XXX
S 6807	〃	〃	〃	刃部片	〃	XXX
S 6808	太型蛤刃石斧	玄武岩	〃	今山産出玄武岩，刃部片	〃	
S 6809	蛤刃石斧	砂　岩	〃	刃部片	3・253	XXX
S 6812	〃	〃	〃	刃部欠損	3・252	XXX
S 6813	方柱状片刃石斧	粘板岩	〃		〃	XXXI
S 6815	石庖丁未成品	頁岩質砂岩	〃		3・251	
S 6816	石　鎌	〃	〃	直線刃　基部欠損	〃	XXIX
S 6817	〃	〃	〃	内彎刃	〃	XXIX
S 6818	石　庖　丁	〃	〃	刃部片	〃	XXIX
S 6819	石　剣	粘板岩	〃		3・252	XXXI
S 6820	石　鏃	黒曜石	〃		3・253	XXVIII
S 6821	砥　石	砂　岩	〃		3・254	
S 6822	磨　石	変成岩	〃		〃	
S 6838	砥　石	油質頁岩	〃	方柱状片刃石斧？	〃	
S 6839	敲　石	砂　岩	〃		〃	
S 6840	〃	花崗岩	〃	一部欠損　790 g	〃	
S 6841	磨　石		〃		〃	
S 6883	礫　器	玄武岩	〃	両刃	3・253	XXIX
S 6899	石　庖　丁	頁岩質砂岩	〃	杏仁形	3・251	XXIX
S 6900	〃	頁岩質砂岩	表　採	半月形　側溝工事中出土	〃	
S 6970	削　器	サヌカイト	包含層		3・253	
S 6973	石　錐	黒曜石	〃	突錐	〃	XXVIII
S 6978	石　核	〃	〃		3・254	
S 6983	掻　器	〃	〃	長さ3.7cm　幅2.5cm　厚さ1cm	3・253	
S 7000	石　錐	〃	表　採	突錐	〃	XXVIII
S 7002	石　鏃	〃	表土下砂質土層	右脚欠損	〃	XXVIII
S 7012	削　器	〃	包含層		〃	
S 7028	石　庖　丁	頁岩質砂岩	〃	大形石庖丁刃部片	3・251	
S 7029	方柱状片刃石斧		〃	未成品	〃	XXXI

Dは土坑墓・木棺墓、Kは甕棺墓を示す。Tab.3・10についても同様

Tab.3·10　第1区台地上包含層・遺構埋土内出土石器数量表

	蛤石	刃斧	方柱状片刃石斧	石皿(頁岩質砂岩)	石鏃	石剣	打製石鏃		掻器		削器		剥片石器	石錐	石核		剥片		削片		磨石	敲石	砥石	その他
	玄武岩	その他					Ob	Sa	Ob	Sa	Ob	Sa			Ob	Sa	Ob	Sa	Ob	Sa				
D－2													2		1				5		1			
D－7													1						2					
D－8																			1					
D－10																			3					
D－12													1		1				3					円礫1
D－15																			2					
D－17	1										1													円礫2
D－18																1	2		4					
D－19													1						1					
D－20											1				2				3					
D－21													1		1				1					打製石器未成品(Ob)1
D－22															1				4					
D－23															1		1		1					
D－24	1																							
D－27																								原石(Ob)1
D－37																					1			円礫1　磨製石器小片1
D－39															1				2					
D－48																			3					
K－3																			3					
K－4																			1					
K－9																								加工礫1　磨製石器小片1
K－11																			2					
K－18																	1							
K－21															1									
K－24																								加工礫1
K－25																			1					
K－29																			3					
K－30								1																
K－31													1						1					
K－33	1																							
K－41							1								1				10					
K－48																			2					円礫2
K－50											1													
K－53											1								1					
K－54																			1					
K－58	2																		1					
住居址													1		1				10					
井戸状1号																								長円礫(煤付着)1
井戸状2号													1		1				3					台石1
SP-C15-5							1						1											
SP-C16-29																			1					
SP-C17-11				1																				
SP-C17-16																								磨製石器小片1
SP-C18-19																			2					
SP-C18-34																			1					
耕土・包含層※	4	13	2	5	2	1	4	1	1	2	2	1	17	2	20		23	1	65	1	4	3	2	磨製石器小片1、凹石1、礫9、礫器1、原石(Ob)2、小円礫25
合計	9	13	2	6	2	1	6	2	1	2	6	1	27	2	33	1	27	1	143	1	6	3	2	

※　C－13、C－14a·b、E－17、F－17以外の沖積層トレンチの耕土・包含層出土品も含む。

Tab.3·11　第１区出土土製品一覧

No.	種　類	トレンチ	層　位	Fig	PL	No.	種　類	トレンチ	層　位	Fig	PL
D 1	円盤状土製品	F－17	青色粘質土	3·58	XXIX	D 16	不明(円筒状？)	第43号堅穴			
D 2	投　弾	C－14a	第７層下位	3·135	XXIX	D 17	環状土製品	台地上包含層			
D 3	〃	第65号堅穴		3·138		D 19	投　弾	D－17b	第19層		
D 4	紡錘車	第68号堅穴		3·138		D 20	球形土製品(錘)	古墳時代住居址		3·243	XXVII
D 13	投　弾	C－14a	第７層下位			D 34	土器片利用円盤	C－14b		3·28	
D 14	紡錘車	第70号堅穴				D 35	〃	D－17b		3·58	
D 15	不　明	第92号堅穴外東南部				D 36	〃	C－14a		3·58	

Tab.3·12　第１区出土木製品・木材一覧

No.	トレンチ	層位・位置	種別	法量(cm)				時期	樹種	備考
				長	幅	厚	直径			
1001	台地南側	南側杭列	丸木杭	33.5			3.3	きわめて新しい	ユズリハ	残存状態きわめて良好
1002	〃	〃	〃	13.0			3.8	〃	未詳	〃
1003	〃	〃	〃	22.5			2.2	〃	マツ(二葉松)	〃
1004	〃	〃	〃	20.0			4.3	〃	マツ(二葉松)	〃
1005	〃	〃	〃	31.8			2.5	〃	マツ(二葉松)	〃
1006	〃	〃	〃	17.3			2.3	〃	マツ(二葉松)	〃
1007	〃	〃	〃					〃	マツ	〃　(小片)
1008	〃	〃	〃	29.8			3.2	〃	マツ	〃
1009	〃	〃	〃	29.4			＞7	〃	ユズリハ	〃
1010	台地上	SP－C18－65	柱根	16.0			＞11	?	スギ	
1011	〃	SP－C18－63	丸木杭	12.7			7.5	?	シイ	
1012	D－16	地山	〃	26.5			3.4	?	マツ(二葉松)	
1013	D－17b	SP－C17－57	〃	45.3			3.5	?	マツ(二葉松)	
1014	C－14	Pit 2内	木片					古墳・前	カシ	乾燥収縮
1015	E－17	小竪穴内	〃					弥・前初		〃
1016	F－12		矢板(?)	19.0	8.0	3.8		?		ひどくいたんでいる。
1017	F－15		木片					?	ユズリハ	乾燥収縮
1018	〃		〃					?		〃
1019	F－17	黒色粘質土	矢板状木					弥・前？	クスノキ	ひどくいたんでいる。
1020	〃	〃	矢板					〃？	クスノキ	〃
1021	〃	〃	〃					〃？	クスノキ	〃
1022	〃	〃	〃					〃？	クスノキ	〃
1023	〃	〃	杭状木片					〃？	ヒノキ	あて材？〃
1024	〃	?	杭(?)小片					〃？		〃
1025	〃	灰褐色粘質土	矢板状木	17.0	8.6	2.3		?	スギ	焼けている。
1026	H－12	青灰色粘質土	木片					弥？		乾燥収縮
1027	〃	〃	〃					〃？	つる性茎	〃
1028	〃	〃	〃					〃？		〃
1029	〃	暗灰色粘質土層	自然流木					弥・前？	ヤナギ	
1030	〃	〃	加工木(?)	9.5	3.5	1.1		〃？	カシ類	
1031	H－16	青灰色砂層	杭	26.6	2.7	1.8		弥より新？	スギ	
1032	〃	〃	角杭(?)	11.5	3.6	2.9		〃？	カシ	
1033	〃	〃	自然流木小片					〃？	スギ	
1034	〃	〃	〃					〃？	カシ	
1035	〃	ボーリング出土木	?					?	ヤマザクラ	

No.の前のWは省いた。
樹種は島倉巳三郎氏による（付編第５参照）

第　4　章

第　2　区　の　調　査

第1節　概　観

第２区は発掘地の東南側のＧ～Ｌ－19～29区の範囲である。第２区の東には環溝集落ののる板付台地が接している（PL. XXXII－１）。地表は標高8.5～8.6ｍである。環溝部分の台地地表は標高12ｍに近く、比高差は約３ｍである。

ここではＨ－19グリッド、Ｉ－19トレンチ、Ｊ－19トレンチ、Ｋ－19グリッド、Ｈ－21トレンチ、Ｉ－21グリッド、Ｉ－21トレンチ、Ｊ－22トレンチ、Ｈ－23トレンチ、Ｉ－23グリッド、Ｊ－23トレンチ、Ｋ－23・24グリッド、Ｇ－24トレンチ、Ｊ－24グリッド、Ｊ・Ｋ－25トレンチ(Ｊ－25・Ｋ－25両トレンチをつないだもので､個別にＪ－25トレンチ､Ｋ－25トレンチとよぶこともある)、Ｇ－25トレンチ、Ｈ－25グリッド、Ｈ－25トレンチ、Ｋ－24グリッド、Ｇ－26トレンチ、Ｉ－26トレンチ、Ｊ－26トレンチ、Ｌ－26トレンチ、Ｉ－27トレンチ、Ｉ－28グリッド、Ｊ－28トレンチを発掘した。発掘総面積は約 1,260㎡に達し、深さは１ｍ強から 2.5ｍである。なおＩ－19・Ｊ－19両トレンチは発掘中にトレンチ内が泥土状になり、壁が崩壊したために調査を放棄した（Fig.4･1)。

1.　層　位（Fig.4･2、4・3、PL.XLIV－１、Ｌ－1)

板付台地際のＧ－24・Ｇ－25両トレンチの東端部には、台地を構成する鳥栖ローム層がみられ、沖積層との境をなしている。鳥栖ローム層下の白色粘土層(八女粘土層)は沖積層下に入り込んでいるが、その末端部は確認していない。

台地に近いＧ・Ｈ・Ｉ列の各トレンチ・グリッドでは一部を除き地表下１～1.5ｍまでしか掘り下げていないので、耕作土層下の沖積層上位(標高約7.3～7.5ｍ以上)の各層しかわからない。沖積層上位は粘土・粘質土・砂土・砂質土・砂の複雑な自然堆積状態を示していて、下位の台地に近い部分では厚い砂層になる（ボーリングII－1･2、III－2･3)。Ｇ－24・26トレンチではその下に八女粘土層が認められた（Fig.4･3)。台地からはなれな場所における上位沖積層下の堆積状態はＨ－19、Ｊ－21、Ｊ－22、Ｊ－23、Ｊ・Ｋ－25、Ｊ－26の各トレンチ・グリッドによってある程度明らかになる。各トレンチ・グリッドではかなり深いところに黒色粘質土層が認められた。すなわちＨ－19・Ｋ－19両グリッドでは標高7.4ｍ以下に層厚20～30cmの黒灰色粘質土層があり、その下は黒灰色粗砂層になる（層厚20cmほど、下底標高7.2ｍ)。さらにその下にはかなり厚い別の黒色粘質土層がある。この黒色粘質土層は、Ｊラインにつづきｊ－21

トレンチ（層上面標高7.2m）J－22トレンチ（同じく7.3～7.4m）、J－23トレンチ（同じく7.3～7.4m）、J・K－25トレンチ（同じく7.25m）、J－26トレンチ（同じく7～7.2m）に認められる（Fig.4・2）。層厚は50～80cm、厚いところで1m近くになり、下底部標高は約6～6.7mである。その下は砂・礫層となる。この黒色粘質土層は、上位は褐色味をおびるが、下位は黒味をまし、漆黒色ともいえるほどに黒い。また上部から下部へ腐植の混入が多くなり、白色の砂・礫の混入の度合いもことなる。したがってこの層も厳密にいえば数層にわけられようが、肉眼では漸移的変化は認めえても、層をわけることは困難である。

この黒色粘質土層は，ボーリングII-1では標高7.32mから6.67mの間にあり、その下は混粘砂層となる。ボーリングIII-2・3では認められない（付編第9）。

この黒色粘質土層は、すでにのべた第1区台地西側にあるそれのつづきであろうが、肉眼的な印象・手ざわりはややことなるようである。第2区ではI-23グリッドからJ-26トレンチ東側を結ぶ線の東ではなくなるとみられる（ボーリングIII-2・3）。西側へゆくと急激に落ちているらしい。それはJ・K-25トレンチ西端から14mあまりのところの砂層下の標高5.9mで確認した（Fig.4・7）。この急激な落ち込みの西には相当厚く砂層が堆積していて、旧河川をなしている。

第2区にひろがる黒色粘質土層は、すでにのべたように腐植を含み、漆黒色をおび、白色の礫をときに含む。粘性が強く、第3区・第4区の黒色粘質土層とはことなるようである。第2区の層位の地質学的考察は付編第1を参照のこと。

なお、第2区はその大部分が保存されることになった。　　（後藤）

2.　遺構・遺物の分布（Fig.4・1）

台地際のG-24・25・26トレンチでは耕作土層の下に厚さ20～40cmにわたって、丹塗り土器片を含む多量の弥生式土器（前期～後期）が包含されている。これは以前に台地上から土を運んで客土した時に土とともにもたらされたものである。しかし客土の時期・土取りした場所（台地上のどこかであることは確実）はわからない。その下の台地際では弥生時代中期とみられる木器が出土している。出土した標高は7.4m前後で、台地のローム層沿いに溝があったとみられる。G-26トレンチではさらにその下の八女粘土層上の砂層で、板付II式壺形土器完形品等の前期土器片が出土している（標高7.2m前後）。

その西方のJ-22、J-23、J・K-25各トレンチでは、黒色粘質土層に打込まれた矢板列が出土した。矢板上端の標高は6.5～7.0mである。その時期は、周囲から出土した数片の土器がすべて夜臼式土器、板付I式土器であるから、前期はじめとみられる。その上には灰色粘土層や砂層が堆積し（これは西側へ深くなる）、旧河の存在を示している。そこから弥生時代中期の土器群が大量に出土し（出土位置は標高7～7.5m）、その時期の川の存在が認められる。また、J・K-25トレンチ西端では、この弥生時代中期河川の砂層上に多量の杭を打込んだ畦状の遺構が見出された。杭頂標高は7.6～7.8mにあり、出土土器から弥生時代後期と判断される。

この他にH－21トレンチでは標高7.5m前後の灰色粘質細砂層（Fig.4・3）に乱雑に打込まれた丸木杭群の下端部残片が検出され（須恵器片若干を伴なう）、H－23トレンチでは標高7.4m前後に流木が出土した。時期ははっきりしない。H－19トレンチでも地表下60～70cm（標高7.8mほど）の粘土層から杭頂が検出されたが、トレンチ壁崩壊のため全貌は明らかでない。

こうした遺構の上の各層、それにつづく無遺構部の各層および耕作土層からは時代のことなる土器、陶磁器片が混在して出土する。これらは包含層出土遺物として一括する。

以下各遺構と出土遺物について時期順にのべる。　（後藤）

第２節　遺構とそれにともなう遺物

1.　弥生時代前期の遺構と遺物

(1)　Ｊ－22トレンチの矢板列（Fig.4･4、ＰＬ、XXXII－2）

J-22トレンチ西壁から東へ4～4.5ｍのところに１列の矢板列が出土した。方向は北17°西で出土部分での長さは約２ｍである。矢板現存頂部の標高は6.7ｍ前後である。矢板頂部は黒色粘質土層（第７層、Fig.4･2－2）下部にあり、下端部は未確認だが漆黒色粘質土層（第12層、Fig4･2－2）下にまで到っていよう。

矢板は密に打たれておらず、間隔は10～30cmほどである。矢板の他に丸木杭も用いる（No.6・7・16）。また流木ともみられるものもある（No.2・13・14・17）。

矢板は作りがきゃしゃで、幅５～８cm、厚さ１～３cmである（そのまま埋めもどしたので、正確な数値、樹種は明らかでない）。残存状態はあまりよくない。

矢板列のすぐ西の矢板頂部より20cmほど上の位置で、夜臼式土器底部片１点が出土した（PL.ＬＩ、Y2427）。矢板周辺に他の遺物はない。

矢板列の東側には、黒色粘質土層下に厚さ10数cmの黒色混礫粘質土層（第９層、Fig.4･2－2）がつづいている（標高6.6ｍ前後）。これは後述するJ-23・J-25両トレンチの矢板列の東側

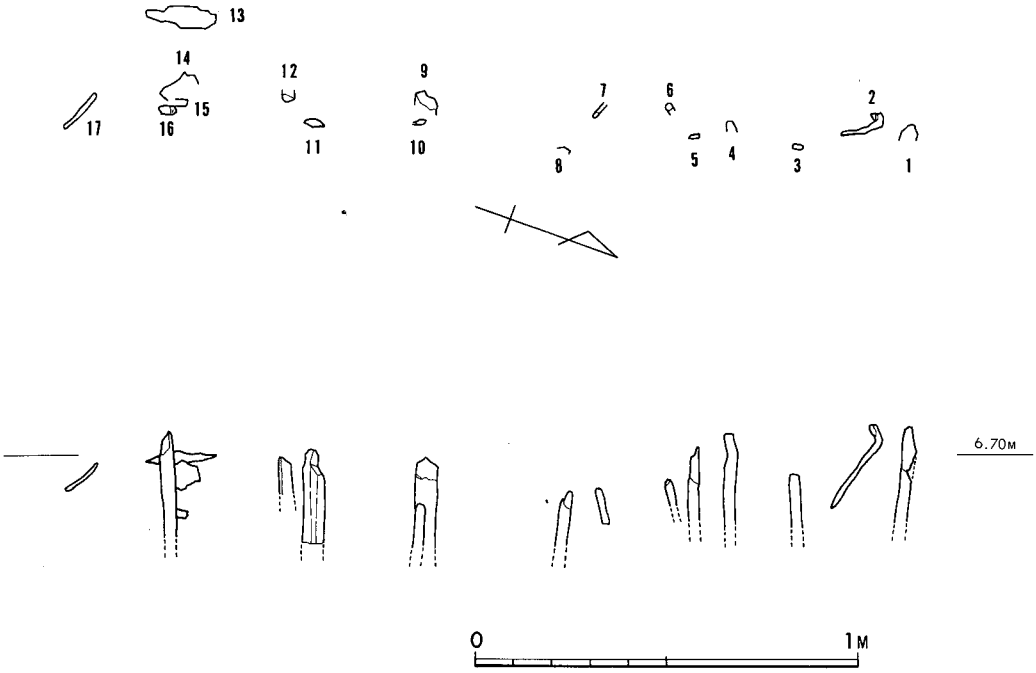


Fig.4･4　Ｊ－22トレンチ矢板列

にみられる粗砂層と同じ性格のもので、矢板列東側にあった水の流れを示すものであろう。この混礫粘質土層（第９層）は東側でやや高まり、その下に黒灰色砂層・礫層（第10・10′・11層）が堆積し流れの東岸を示すようである。この部分と矢板列間の幅は約６ｍである。矢板列の西側には矢板列によって区画された地表があったとみられ、その標高は6.7ｍよりやや高いと考えられる。

矢板列の方向は後述するJ-23・25両トレンチの矢板列とことなり、平面的な位置からみてもJ-23トレンチからJ-25トレンチへつながる矢板列にはつながらない。しかし、出土した深さ、矢板列際出土の土器片、矢板列東側の砂層の存在からみて、J-23・J-25両トレンチの矢板列と同じ時期に、同じ目的で設けられたものとみて誤りない。また矢板列東側の流れは、J-23・J-25両トレンチにつながるとみられる。

(2)　Ｊ－23トレンチの矢板列と柵状遺構（Fig.4･5、4･6、PL. XXXⅢ～XXXVⅡ）

J-23トレンチ東端から約15.5ｍに矢板列が出土した。矢板列の方向は北35°西で、出土した矢板列の長さは2.8ｍを計り、両端へさらにつづく。南側はJ-25トレンチの東側矢板列につながろう。打込まれた矢板は、出土部分で20本ほどである。それぞれの矢板上端部は腐って失われているとみられるが、現存頂部標高は6.85～6.6ｍにある。下端部は確認できたものは、標高約6.2ｍで、深いものはこれ以下になる。矢板は頂部が西側、下部が東側になるように傾いて打込まれている（水平面に対して55°～75°）。

出土した部分の南側では矢板列が２列になっている。すなわち東側に並ぶ矢板列の西側70～80cmにやや大きな矢板２本と小形の矢板３本が東側と同様の角度で打たれている。北側には続かないがその延長線上に丸木杭１本がある（W2115）。この２列の矢板列の間には、特に踏みかためたような状態は認められない。西側の矢板の現在頂部標高は東側の場合とかわらない。

矢板はやや密に打込まれているが、矢板相互の間には10～20cmの間隔がある。使用された矢板は幅10～15cm（もっとも広いものでも約20cm）、厚さ２～４cmほどのもので、規格は１点１点異なる。

矢板列の北西端部東側に接して、数点の矢板状の木が流木のように水平に埋没している。標高は6.5～6.6ｍである。

矢板列のすぐ西側の標高6.7～6.9ｍには、細く、ときに枝をつけたままの丸木や加工木、土器片が水平に散乱している。その範囲は矢板の西側1.5ｍまでで、矢板列および南端西側矢板列とそのつづきによって画される帯状部分とそのすぐ西に接する部分に限られている。

矢板列が打込まれているのは、灰黒～黒色粘質土層（第15層、Fig.4･2－３）の下部である。この層は上部はやや灰色味をおびるが、下部は漆黒色になり、腐植が多く混じっている。矢板列の東側には、矢板列に接して厚さ10cm前後の黒色粗砂層（第16層）が東へつづく。その標高は6.4～6.5ｍである。したがって矢板列東には流れがあったとみられる。

この流れの中の矢板列の東側約２ｍに柵状遺構がある。この遺構は２本の丸木杭（W2167とW2161に接した杭）を、北66°東の方向に約2.2ｍはなして垂直に打込み、その南東側に接して

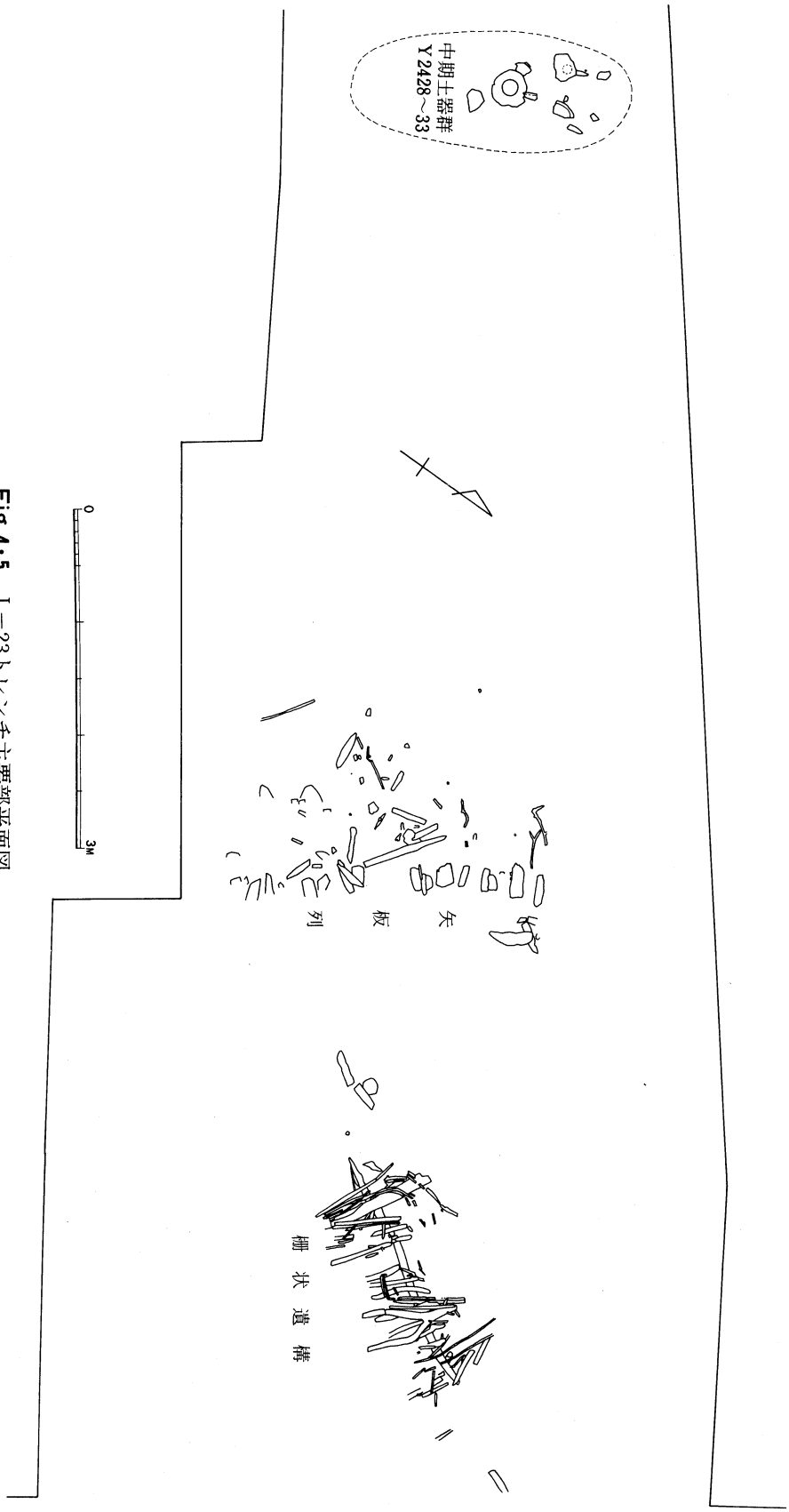


Fig.4・5　J－23トレンチ主要部平面図

長い丸木をおき（なんらかの方法で杭に固定したであろう)、これに板状の材、丸木、細い雑木等をのせ（東南側が低く、他端が高くなる）ている。これらの木の下端部は灰色砂層中に入り込んでいる。細木の間には、ワラや小枝がおかれた痕跡があり、一種のしがらみとなっている。この遺構の上面は標高6.3ｍほどで、全体は黒色粘質土層（第17層）に埋没している。こうした構造から、水は南東側から北西へ流れたとみられる。

柵状遺構のある水路の東側には砂層、粘土層のゆるい落ち込みがあって、これが水路東岸を示すとみられる。この東岸の黒灰色粘質土層（第19層)、帯黒灰色混粗砂土（第20層）には矢板状杭１本と丸木杭２本が打込まれている（杭頂標高6.5～6.6ｍ)。したがって水路幅は６ｍ前後と考えられる。この水路はJ-22トレンチのそれにつながろう。

この柵状遺構と矢板列は一連の施設と考えられる。矢板列の西側は、流木・土器片の出土状態から、６.7～6.8ｍが地表であり、東側の水路の底部は白～灰白色砂層上面で、標高5.9～6.0ｍほどであろう。この矢板列東側の水路中に柵状遺構が設けられている。この水路が埋没する過程で黒色粘質土層（第17層)、黒色粗砂層（第16層）が堆積したとみられる。

矢板列と柵状遺構との直接的関連は明らかではないが、矢板列の東側水路を流れる水を利用するための施設であろう。矢板列西側の6.7～6.8ｍとみられる当時の地表面は、遺構のあり方やや花粉分析結果（付編第３）からみて、水田面と考えられる。

矢板列・柵状遺構付近では数点の土器片が出土した。矢板列西側の流木群中には板付Ⅰ式甕形土器口縁部片１点（Ｙ2434）の他にこれと同一個体とみられる甕胴部片４片（Ｙ2435～37）が出土した。さらに柵状遺構のすぐ西側の砂層上（標高約６ｍ）からは夜臼式土器口縁部片１点（Ｙ2679）が出土した。これらの土器片から矢板列・柵状遺構の年代は弥生時代前期前葉とみなしてよい。

これらの遺構は最終的に灰黒色粘質土層（第15層の上位）によって埋められてしまい、その上を粗砂・粘土層がおおうが、西側では灰色粘土層がおおい、この中から弥生時代中期の土器群が出土する（標高７.５ｍ前後、Ｙ2428～33)。

J-23トレンチでは^{14}Cの測定を行った。資料は矢板列西側の南壁（トレンチ壁崩落のためFig. 4･2－３に示した土層断面より約１ｍ南側）で採取した黒色粘質土と矢板（W2116）である。その結果はTab.１･１に示した。

(3)　Ｊ・Ｋ－25トレンチの矢板列(Fig.4･7、4･8、4･9、PL.XXXVⅢ～XXXIX)

J-25トレンチ東端から約５ｍのところに１列の矢板列が出土した。またその西約6.6mにもこれに平行する矢板列が出た。前者を(東側)矢板列、後者を西側矢板列とよぶ。いずれも黒色粘質土層（第34層）に打たれている。

東側矢板列は、長さ約2.5ｍを調査した。方向は北38°西である。両端にさらにつづくが、とくに北西側の延長はほぼ一直線にのびてJ-23トレンチの矢板列につながると考えられる。出土部分の矢板は10数本で、部分的には密接して打込まれている。矢板列の前面（東 側)には10本ほどの丸木杭も打込まれている。矢板頂部の標高は6.8～7.0ｍである。下部は未確認だが、相

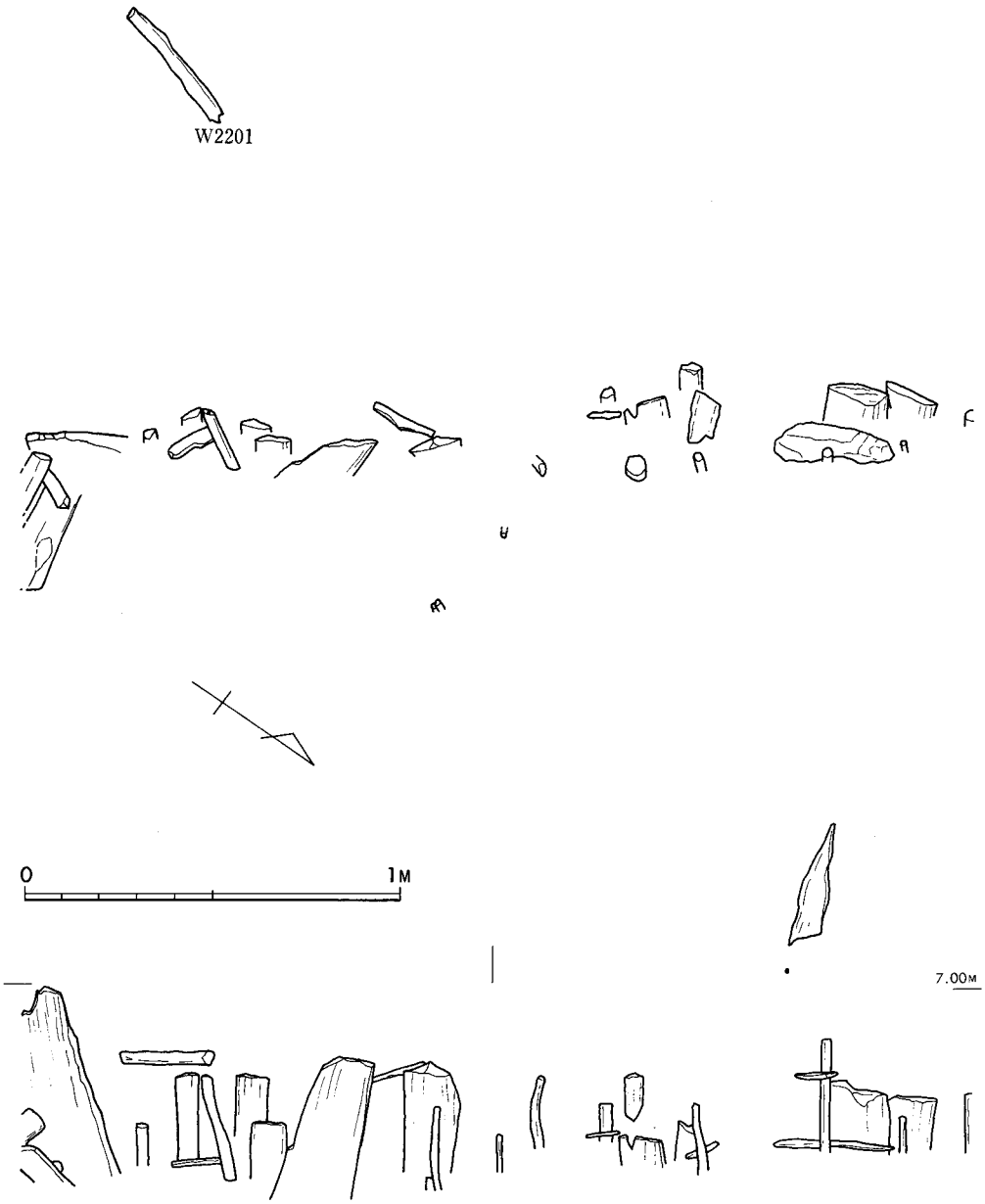


Fig.4・8　J・K－25トレンチ東側矢板列実測図

当深くなろう。矢板は頂部を西へ傾けて打たれている。個々の矢板は幅10数cm～20cm以上で、厚さも5cm近い（調査後埋めもどしたので細かな数値・樹種は不明）。

矢板列東側の黒色粘質土層の間には、J-22、J-23両トレンチと同様、薄い砂層（第24層）が入っていて水流の存在を示している（標高6.8 m前後）。この水の流れは矢板列同様、J-23トレンチ矢板列東側のそれにつながるものであろう。

東側矢板列の西約6.6 mに別の矢板列、すなわち西側矢板列がある。出土部分の矢板列の長

さは約3m、方向は北30°西で、東側矢板列にほぼ平行する。この矢板列は4本の矢板をきわめてまばらに打ったもので、矢板間は0.6～1.3mある。矢板間が1.3mほどのところには、丸木杭2本が打たれている。矢板頂部は標高7.0mにあり、下端は相当深くなる。

西側矢板例の東側0.8mのところには4本の丸木杭が打込まれ、それに接して板状の材（60cm×10数cm）が水平に埋没している。板材の位置は標高6.65mである。また東側矢板列の西側1mと2.7mのところにも板材が水平におかれていて、その位置は標高6.8mと6.65mである。

したがって、東側矢板列と西側矢板例の間の幅6.7mほどの部分は、矢板列使用当時には標高6.7～7.0mが地表をなしていたとみられ、矢板列のあり方、花粉分析結果から、ここが水田であったと考えられる。そして東側矢板列の東側に接して水路があり、この水路と矢板で画された水田とは密接な関係があったであろう。

西側矢板列の西方には東側と同様に黒色粘質土層がつづく。この層は西方へ次第に低くなり、J・K-25トレンチの中央部、西側矢板列の西方8mほどから急に低くなってゆく（Fig.4・7）。

J-25トレンチの矢板周辺からは、その時期を示すような遺物は出土していないが、J-23トレンチの矢板列につながることが確実であるから、弥生時代前期前葉とみてよい。

矢板列の打込まれた黒色粘質土層上位は、矢板列をおおい、その上を灰色砂層（第24層）・灰色砂質土（第17層）がおおい、それを切るように西方へ砂層（第8層・第18層等）が堆積する。この砂層は、西側矢板列西方では次第に低くなる黒色粘質土層に直接のっており、層中からは多量の弥生時代中期後葉の土器が出土している。（後藤）

(4)　J－26トレンチの矢板列（Fig.4・10、4・11、PL.XLIV）

このトレンチでも黒色粘質土層がみられた（Fig.4・2－4、第15層・16層）。黒色粘質土層は南側へ低くなって切れ、その上の砂層（第11層）が南側・西側へ次第に厚さを増しながら深く堆積している。この層の上面標高は7.2mほどで、確認した下面は6.4～6.5mである。

この黒色粘質土層の西端近くに矢板列が設けられていた。方向は北16°西で、出土した部分では長さ1.5mあり、北側へはまだつづくとみられるが、南端は黒色粘質土層の切れ目付近でとまり、それ以上はつづかない。

ここには矢板6本、杭14本が幅0.4～0.5mにわたって乱雑に打込まれている。矢板・杭頂の標高は6.6～7mにあり、下端部は6.7～6.5m以下にある。矢板にはW2226のように幅23cm、長さ35～36cm、厚さ10cm前後のものもあるが、他は幅10cm以下のもので、原木の表皮を残すものもある。杭は丸木杭で直径3cmほどのものが多い。中には先端部の焼けたものもある（W2223）。

この矢板、杭列の東約3.5mに6本の丸木杭が黒色粘質土層に打たれている。現存杭頂標高6.55～6.77mである。標高は矢板、杭列とほぼ同じであり、黒色粘質土中にあることから、矢板列と同時期の一連の杭群とみられるが、具体的な関係はわからない。

この黒色粘質土層をおおい、黒色粘質土層が切れる西・南側に深くなる砂層中には、流木とともに弥生時代中期後葉の土器群が出土している。矢板列はそれより早い時期のもので、J－22、

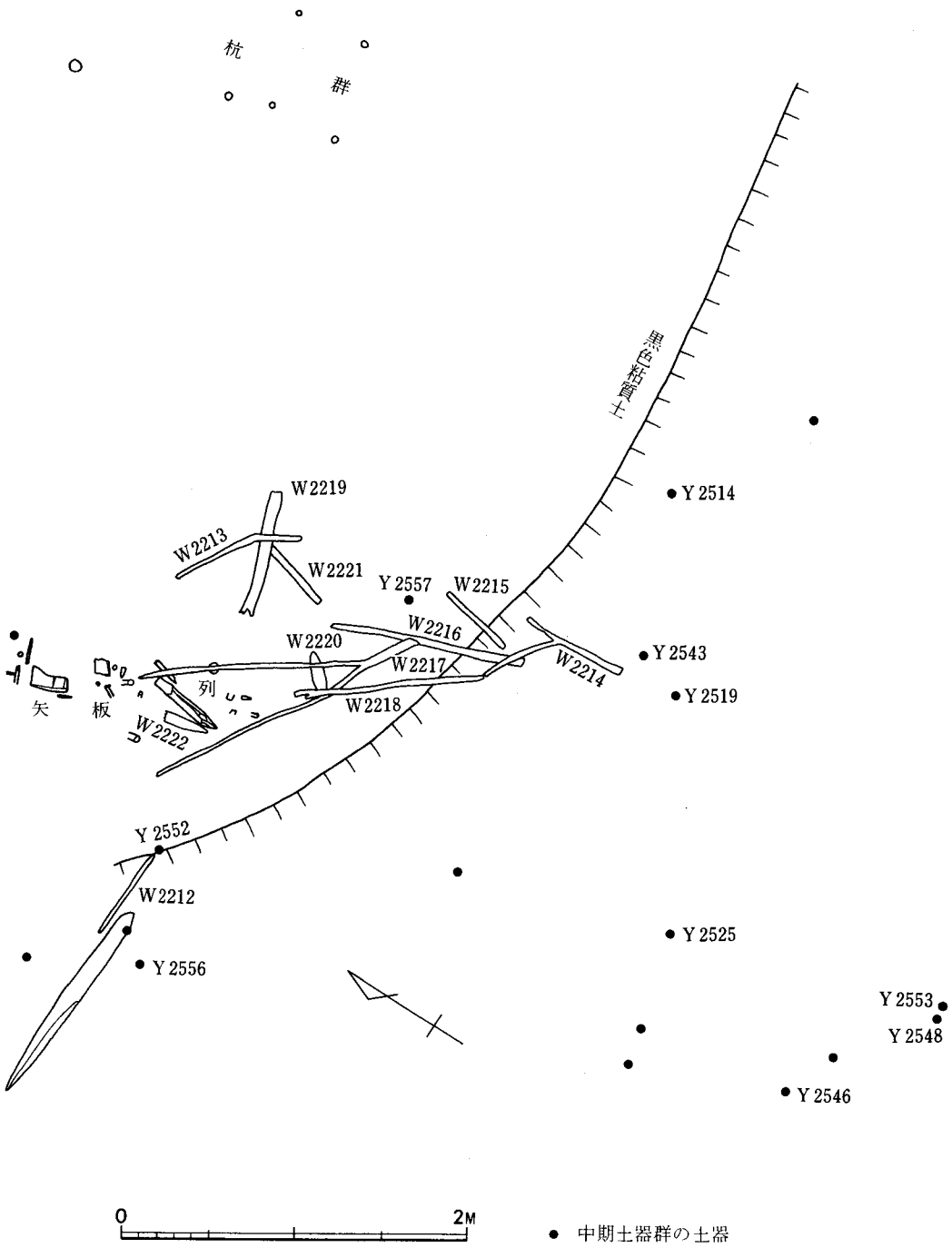


Fig.4·10　J－26トレンチ平面図

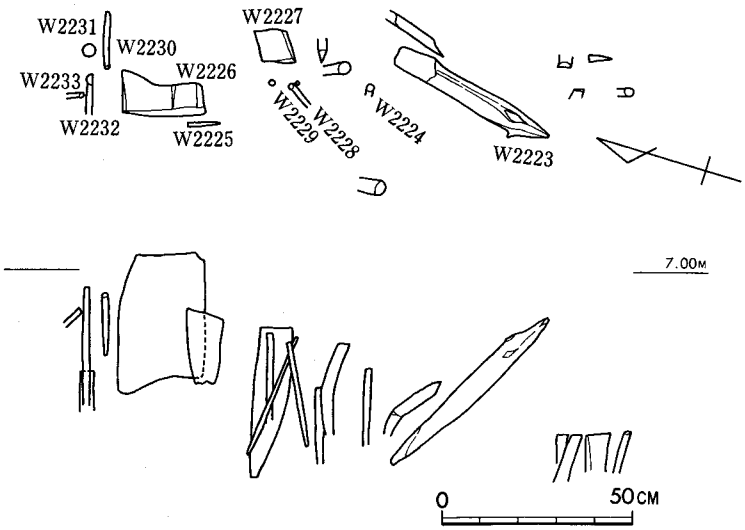


Fig.4·11　J－26トレンチ矢板・杭列実測図

J－23、J・K－25トレンチの矢板列と一連のものとみられ、弥生時代前期のはじめのものとみて誤りない　（横山）

(5)　J－21トレンチの杭（**Fig.4·2**）

J－21トレンチの黒色粘質土層（第7層）中からは、不規則に打込まれた6本の杭（W2106～2111）が出土した。2本1組で1ヵ所に接して打ったのが2ヵ所、1本ずつ打ったのが2ヵ所で、相互の距離は1.8～2.5mである。杭の現存頂部は6.7～7.0mで、下端は未確認である。

杭6本のうち2本が矢板状で、他は直径2～3cmの丸木杭である。打込まれていた土層、標高からみて、J－22・23・25・26各トレンチの矢板列と同時期のもので、関連あると考えられるが、その具体的な性格は明らかでない。　（横山）

上にのべたJ－21・22・23・25・26各トレンチの黒色粘質土層で出土した矢板列・杭列は、弥生時代前期前葉の水田に関連する遺構と考えられる。

黒色粘質土層は、J－26トレンチ内で切れるが、北西へつづき、その西端はJ・K－25トレンチの中央、K－23・24グリッド付近、J－22・21両トレンチ西方、K－19グリッド西方をつなぐ線であろう。黒色粘質土層の切れる西側には厚い砂層の堆積があって旧河川の存在を示し、この砂層の一部（部分的に灰色粘土にかわる）は黒色粘質土層をおおっている。黒色粘質土をおおう部分の砂層（つまり、旧河川東岸近く）には弥生時代中期後葉の土器が埋没していて、黒色粘質土層中の矢板・杭列がそれより古いことを示している。

矢板列は、J－22トレンチ、J－23トレンチ、J・K－25トレンチ、J－26トレンチで出土し、現存頂部が6.7～7.0mにある。J－23トレンチ、J・K－25トレンチの矢板列は一直線につながり、全長は少くとも35mになろう。J・K－25トレンチではこの矢板列に平行に別の矢板

列があり、その間の幅6.7ｍほど、標高6.8～7.0ｍが矢板列によって画された水田面であると想定される。この面はＪ－23トレンチとＪ－22トレンチの矢板列の西側の当時の地表面につながろう。また矢板列の東に接して、黒色粘質土層の間に粗砂層があって、水路の存在を示している。この水路の幅はＪ－22・23両トレンチの土層断面によれば約６ｍと推定される。この水路中に設けられた柵状の遺構（Ｊ－23トレンチ）は矢板列に画された水田面と水路とをつなげる機能を有するものであろう。

Ｊ－21トレンチの杭群・Ｊ－26トレンチの矢板・杭列も、この矢板列と密接な関係を有していたことはほぼ確実である。

これら矢板列に伴い時期判定の基礎となる遺物は、Ｊ－22トレンチとＪ－23トレンチで出土した数片の夜臼式土器片と板付Ｉ式土器片のみであるが、すでにのべた土層関係からの時期推定とあわせ、矢板列の時期が弥生時代前期前葉であることを示している。

水田面のひろがり、東側水路との関係、板付台地との地層的な関連等は発掘個所が限られているためにほとんど明らかでなく、前期はじめにおける水田経営の実態を把握するにはほど遠い。この地域は保存されることになったので、将来の調査をまちたい。　（後藤）

(6)　出土遺物

矢板列付近で出土した遺物は土器片のみであり、他は矢板列に用いられた矢板・杭だけである。出土状態についてはすでにのべたので、以下個々の遺物についてのべる。

a　土　　器（Ｙ2427・2434～2438・2676・2679、Fig.4·12、PL.L II）

Ｊ－22トレンチ矢板列付近出土の土器（Ｙ2427）は厚手の底をもつ甕の底部で、断面三角形に張り出す。底面は上げ底で、その部分は箆状の工具で削り取る。胎土には砂を含み、焼成は良い。灰褐色を呈する。夜臼式土器の底部である。

Ｊ－23トレンチ矢板付近出土の土器（Ｙ2434～Ｙ2438）　いずれも甕の破片で、同一個体であろう。Ｙ2434は口縁部で外反するいわゆる如意形口縁をもつ土器で、口縁端の縦一杯に刻目を施す。口縁部横なで調整。外面は縦、内面は口縁部横、それ以下は斜めの細い刷毛目調整。外面には煤の付着が認められる。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。黒褐色を呈する。板付Ｉ式である。

Ｊ－23トレンチ柵状遺構付近の出土土器（Ｙ2679）はほぼ直立する甕の口縁部で外端に刻目がつく。外面は箆状の工具で擦痕、内面は条痕。内面には箆状の工具の先で細い沈線状の線を巡らす。胎土は砂を含み、焼成は良好。暗褐色を呈する。夜臼式である。

柵状遺構付近出土とみられる土器片がもう１点ある。これは、初年度の調査時に柵状遺構のすぐ東に掘ったグリッドの黒色粘質土層下位で、木片（柵状遺構のものであろう）とともに出土した土器片（Ｙ2676）である。口縁部が短く外反し、胴部が逆「く」の字状に反転する浅鉢である。内外面とも箆磨研であるが、内面口縁下には一部条痕が残る。胎土・焼成とも良好で、黒褐色を呈する。夜臼式である。　（沢）

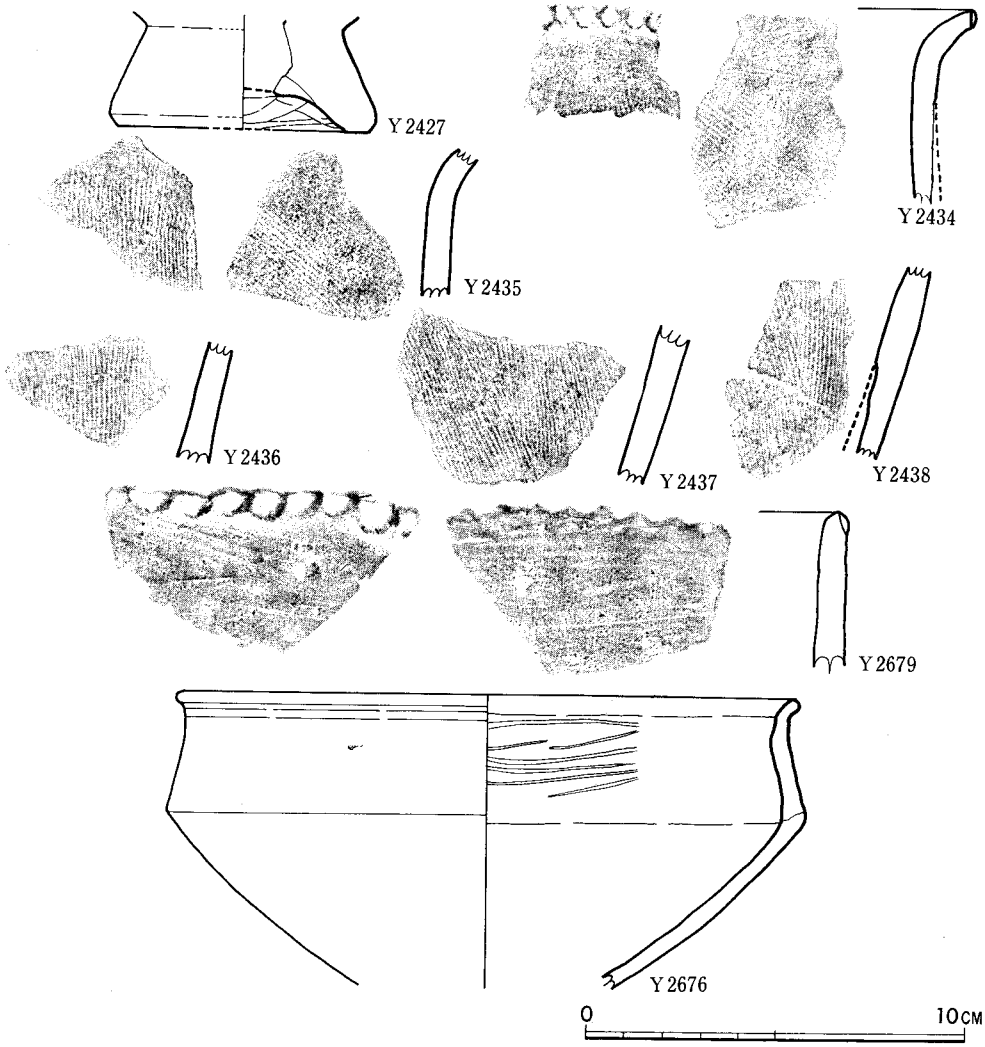


Fig.4·12　J－22トレンチ・J－23トレンチ矢板列付近出土土器実測図

b　木製品（Fig.4·13～4·15, PL.LXV, Tab.4·7）

矢板列とその周辺で出土した木製品は、自然流木を除くと、すべて矢板・杭である。

個々の説明の前に、今後の記述の前提となる本遺跡出土の杭・矢板の材のつくり方について、模式図にまとめておこう（Fig.4·13）。この模式図は、各区出土の杭・矢板の断面観察から帰納して、原木から材をどのように作ったかを模式化したものである。この模式図は、必ずしも材作製の順序を示したものではなく、原木のどの部分をとり、どう加工して材にしたかを示すにすぎない。

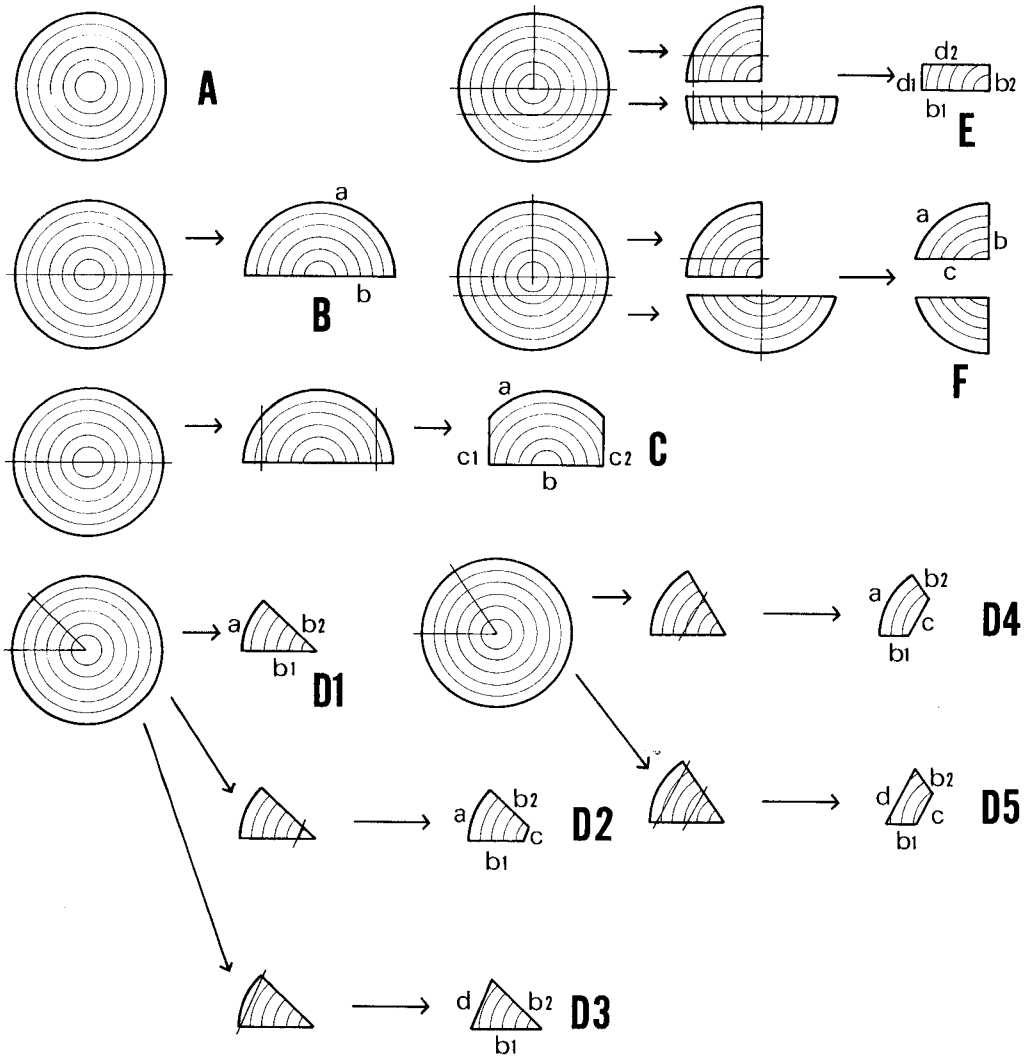


Fig.4·13 杭・矢板材製作方法模式図

Aは丸木杭である。やや細い原木をそのまま材とし、先端を削ってとがらせたもので、もっとも多い。Bは原木を半割して材をつくるものである。ただしBには、割り裂いた面、b面（裂面）が原木中心を通らず、片よるものがある。したがって、a面（原木面）が原木の半分以上もしくは、半分以下の2つの材ができ、それらを材とするものが少数ある。a面には木皮が残る場合もあるが、多くは木皮が失われた状態で出土する。

Cは半割した材の両縁をさらに裂くものである。個々の杭にあたった場合、D_4と区別できないこともあるが、D_4とことなり、b面に原木の芯部分が残る。c_1とc_2は2回めの裂面である。

Dは原木を縦にいくつかに裂き（最低4～5分割）、そのひとつを材とするもので、それ以後の加工により5つにわけられる。原木を分割した材は、断面が扇形になり、扇形頂部の内角

（以下裂角とよぶ）を測れば、原木を何分割したかを推定できる。また、b_1・b_2面の幅（原則的には同じ）から原木の直径も推定できる。D_2～D_5の場合も裂角は推定でき、D_2・D_4の場合も原木直径の推定は可能である。

D_1は分割したままの材を用いる。a面（原木面）とb_1・b_2（裂面）がある。

D_2はD_1の材の扇形頂部を裂いて除くもので、その裂面（c）が残る。

D_3はこれと反対に原木外面側（a面側）を除く材で、その裂面（d）が残る。D_2・D_3は裂角が相当鋭く薄いものが多い。a面・d面の幅はb_1・b_2面の幅より小さい。

D_4はD_2と同じであるが、裂角が大きく、c面の幅がb_1・b_2面の幅と同じか、大きい。

D_5はD_3と似ているが、裂角が大きく、扇形頂部側も裂いて除く点がことなる、これもb_1・b_2面の幅はc面の幅と同じか、小さい。

Eは断面長方形の材である。原木からの最初の裂面b_1・b_2と、そのあとのd_1・d_2がある。b_2面が、模式図に示したのより右側になるものがある。

Fはb面とc面のなす角がほぼ90°で、扇形の片縁がさらに裂かれている。b面が模式図に示したものよりも右側あるいは左側にある場合もある。材製作過程は種々の方法が想定される。

本遺跡出土の杭・矢板の材のほとんどは、以上のどれかに含まれる。

J－21トレンチの黒色粘質土層出土の杭は丸木杭5本と板状杭2本である。板状杭は厚さ2cmで、材断面は不明瞭である。

J－23トレンチの矢板列の矢板は、ほとんどすべてシイで作られている。また矢板列付近出土の加工木も多くがシイ材で、自然流木の中にヤナギやクスノキがみられる。

W2116は、^{14}C測定試料としたために樹種は不明。また材の加工方法も十分観察していない。厚さ 3.4cmほどの板材。出土後折れて、実測図に示したのは出土時の形状ではない。

W2125は材をD_3の方法で作り、さらに両側縁を削っている。両面は裂いたままである。厚さ2.3cm・幅7.7cm。

W2126も上と同じようにして作る。表面に削り面が残っているが、左側に一列につらなった5面の削り面以外は痕跡的である。

W2123は、両面と両側縁を削っているが、削り面は痕跡的に残っているだけである。上端は打ち込みの際につぶれている。厚さ1.7cmで、きわめて薄い。

W2127も同様に薄い板材である。両面に若干の削り痕がある。両端は失われている。以上は、いずれも下端部が出土後の湧水により折れて失われている。

W2120はD_2の方法で材をつくり、b_2面の原材面（a面）側を削っている。先端は4面とも削ってとがらせる。

これらの矢板は厚さが1～2cm代のものが多く、もっとも厚いものでも4.4cmにすぎない。幅は5.5cmから19.5cmまでで、規格性は認められない。樹種のほとんどがシイであるのは、意図的に選んだのか、同一原木から多くの矢板を作ったためであろう。

矢板列周辺からは自然流木の他に加工木が出土した（W2129～2152）。加工木の中には矢板列

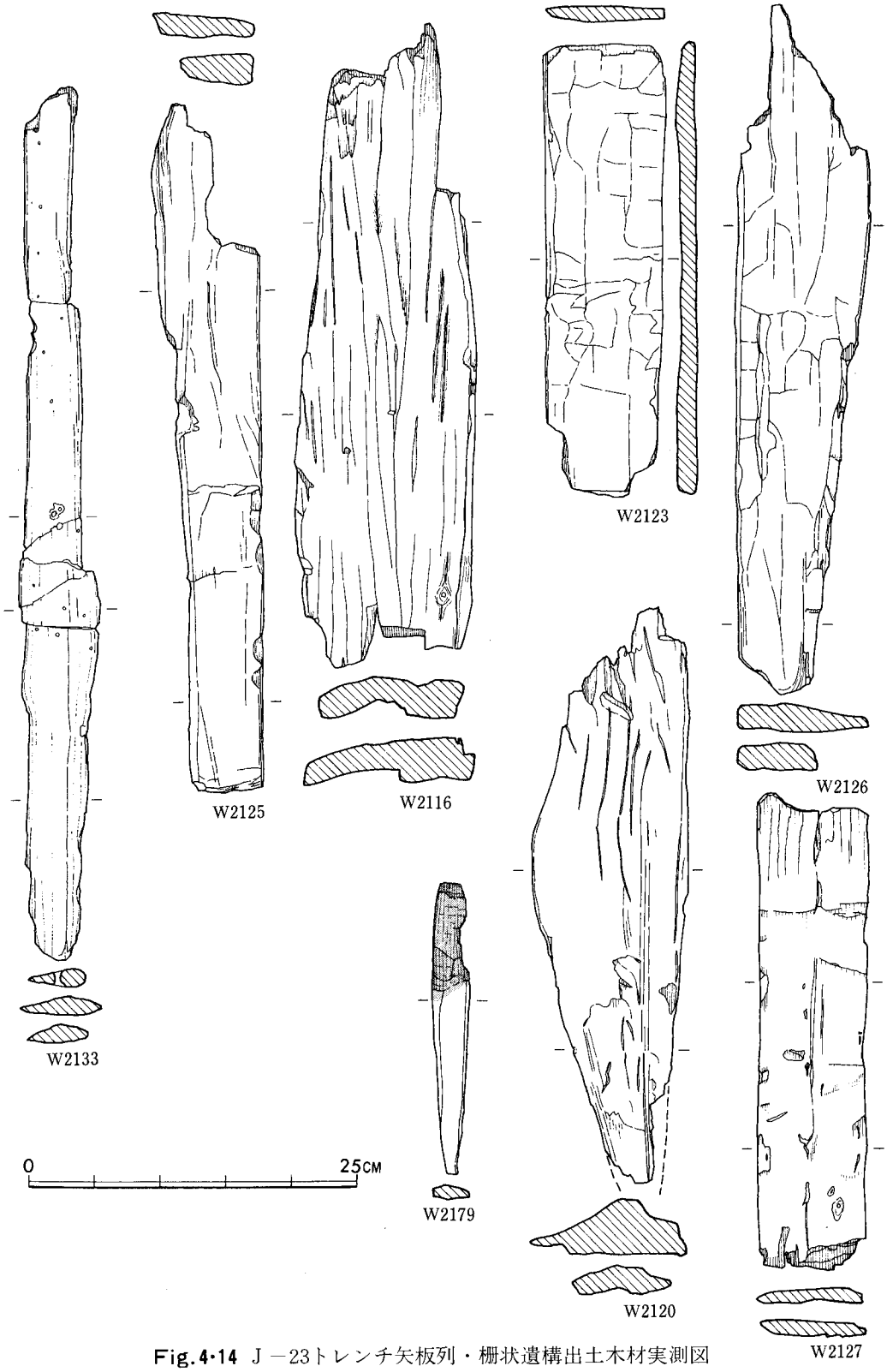


Fig.4·14 J－23トレンチ矢板列・柵状遺構出土木材実測図

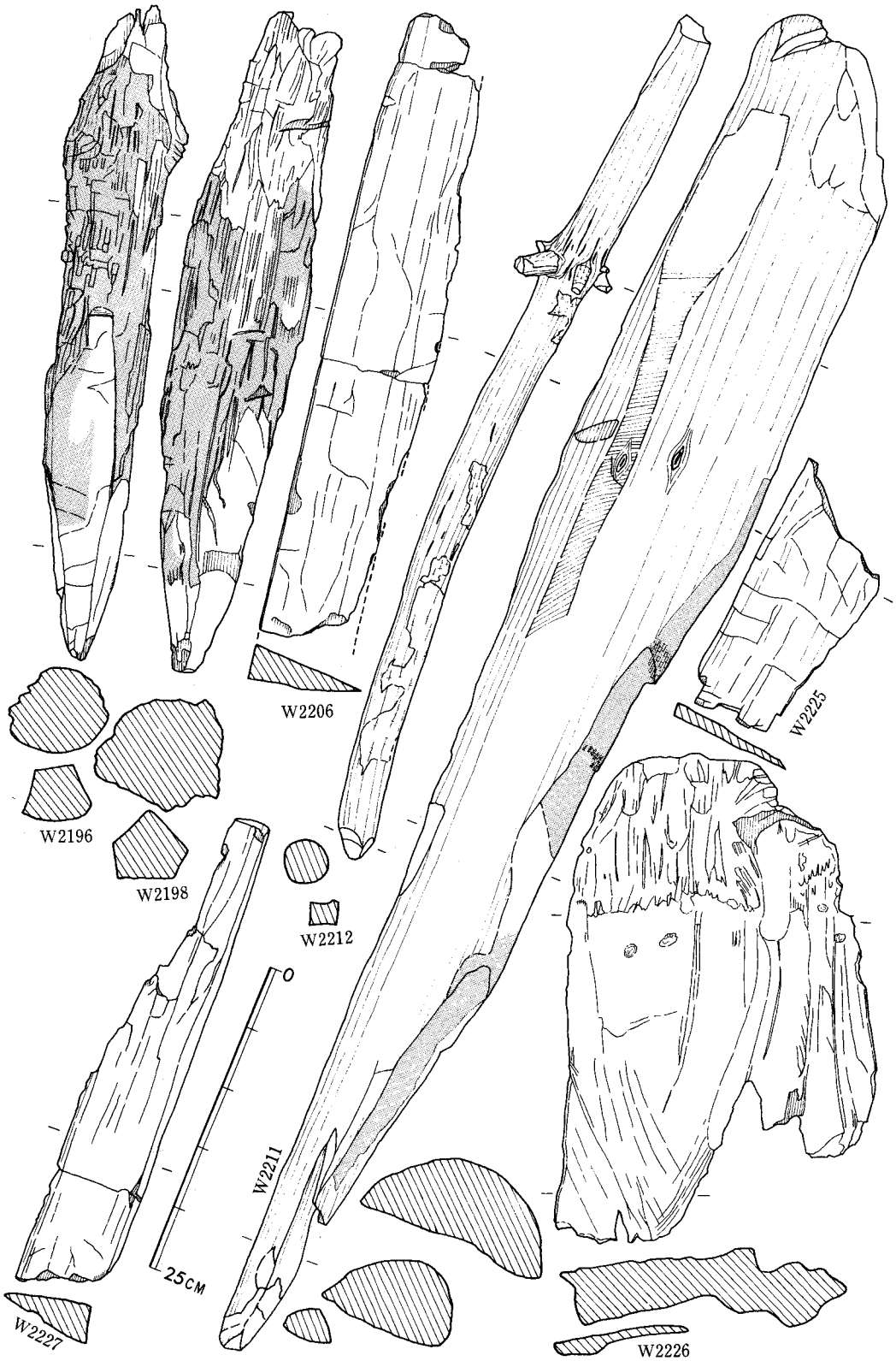


Fig.4·15 J・K—25トレンチ、J—26トレンチ矢板列・中期土器群出土矢板・杭実測図

からはずれた矢板とみられるものもある。その他の加工木は薄い板状のものである。

W2133はEの方法による板材である。側面は腐蝕がはなはだしい。表裏両面とも裂面のままで、削った痕跡はみられない。図示した面を下にして矢板列のすぐ西側で出土した。中央に貫通孔（径 0.5㎜）があり、出土時には、ここに細い丸木（長さ2～3cm）がつきささっていた。貫通孔は他に、上部割れ目の上下の左側と右側にあるが、針でさしたような小孔である。他に非貫通孔が両面にある。表面の非貫通孔は上端の左側に3個（その下の孔は貫通孔）、その下の左側から中央へ2個、上端右側に1個、中央貫通孔の上下に2個、その付近の右側に1個、その下の割れ目付近に、横に2列並んで6個ある。裏面は上端と、下側割れ目付近に1個ある。中央貫通孔付近の2個を除いて針でさしたような小孔である。何のための孔かはわからない。矢板列東側の柵状遺構には、加工木の他に伐っただけの自然木がしがらみに用いられている。自然木の樹種はアワブキ・ヤナギ・タブノキ・クスノキ・シイ・タイミンタチバナ・カシ・コナラ・ザイフリボク？等である。加工木には削り面のある丸木・板状木・角材等がある。樹種はアワブキ・タブノキ・カシ・シイ・ヒノキ・エゴノキ等。W2179はD_3の方法で材を作る際に出来る原木表面側の薄い板材を用いるもので、側縁はていねいに削っている。上部は焼けている(網目部分、以下の図でも網目部は焼けていることを示す)。長さ22.8cm・幅2.8cm厚さ1.0cm。

J－25トレンチの矢板はとりあげずに埋めもどした。出土時の観察によれば、J－23トレンチの場合と同様、薄く幅もまちまちである。東西両矢板列間の黒色粘質土層と東側矢板列際で出た板材と流木はカヤとクスである。

西側矢板列の矢板（W2206）は、上半が折れたのでとりあげた。D_1の方法で材をつくり、最大厚2.8cm、裂角は約20°である。原木面は少し削ったようである。両面は裂いただけで削り痕はない。直径20cmほどの原木から材をとったらしい。樹種はシイ。

J－26トレンチの矢板列には矢板の他に杭が打たれていた（W2223～33)。W2227は下端部を失っている。上端には打ち込みの際のつぶれが認められる。D_1の方法で材を作り、出土時には原木の皮が残っていた。裂いただけで、削り痕はない。裂角は約23°。原木の直径は16cmほどであろう。W2225もD_1の方法で材を作る。きわめて薄い。削り面はない。W2226はD_2の方法で材を作ったらしい。上部は腐蝕してボロボロになっている。

矢板・杭の樹種はカヤ・シイ・クスノキ・トチノキ・ヤナギで，シイがもっとも多い。

以上の前期の矢板列に用いられた矢板はD_1・D_2・D_3の方法で作られ、先端部を削ったであろう以外は、裂面をそのまま残すもので、薄手のものが多い。幅もさまざまで、矢板の規格性は認められない。樹種はシイが多い。　（後藤）

2　弥生時代中期の遺構と遺物

(1)　台地際の遺構と出土遺物

第2区東端のG列は、これまでたびたび調査された環溝遺跡ののる板付台地に接している。

ここに設けたＧ－24・Ｇ－25・Ｇ－26各トレンチでは、台地縁辺を示す地層と遺構が出土した。Ｇ－24・Ｇ－25両トレンチの東端部には台地を形成する鳥栖ローム層の落ち込みがみられ、Ｇ－26トレンチでは鳥栖ローム層下の八女粘土層が認められた。

台地際で出土した遺構・遺物は弥生時代中期のもので、もっとも深く掘り下げたＧ－26トレンチでは八女粘土層上の砂層から板付II式壺１個が出土している。（後藤）

ａ．Ｇ－24トレンチ（Fig.4・3－2，4・16，PL.XLV，XLVI－3）

耕土・褐灰色粘質土層（第４層）下の東端には鳥栖ローム層があり、西へゆるやかに落ちている。これが板付台地の西端である。ローム層上には数個のピットと溝状遺構がある。もっとも大きいものは、長径約130cm、短径約78cmの長方形で、長軸はＮ－22°－Ｗである。このピット内からは甕２点・器台１点の弥生式土器片が出土した。これらは弥生時代後期前葉のものと推定される。ピットの性格は明らかでない。このピットは東側で溝状遺構を切っている。トレンチ北壁際にも同様のピットがあるが、その西半はローム層の崩壊により失われている。遺物の出土はない。他のピットは柱穴状のものである。

台地西側の沖積層部分では、第４層と第５層（暗黄褐色粘質土層）に中期から後期にかけての弥生式土器が多量に包含されている。これは第１節２でのべた客土層である。その下には粘質土層（第６～第８層）があり、少量の遺物が含まれている。その下には砂層があり（第10・12～14・19層）、第14層は粘土を含む明褐色砂層（第17層）をおおう。この第17層中とその西の第14層中に多数の杭があり，その間に流木（加工木片も含む）、土器片等が埋没している。杭の現存頂部は標高 7.4～ 7.6ｍにある。遺物・流木も標高 7.3～ 7.5ｍ前後で出土した。これは次にのべるＧ－25トレンチの台地際の水路と同様の遺構とみられるが、杭の配置・土層断面からははっきり水路とは断定できない。また出土土器は弥生時代中期後葉～後期初頭のもので、Ｇ－25トレンチの中期中葉よりややおくれる。

これらの杭群の西側の砂層（第14層）中の標高7.45ｍからは又鋤片（W2001）も出土している。杭群と関係あるとみられる。これら杭群の部分を木器包含層とよぶ。

なおトレンチ中央部東側の一部を深く掘り下げたところ、ローム層下の八女粘土層（第21層）が西方へ低くなるのが確認された。（沢）

ｂ．Ｇ－25トレンチ（Fig.4・3－1、4・17、PL.XLVI～XLIX）

Ｇ－25トレンチ東端には板付台地を形成する鳥栖ローム層があらわれている。その末端部はほぼ南北にのびている。ローム層上面は標高8.3～8.1ｍで、縁辺部では7.9ｍほどになる。そこからほぼ垂直に落ち、部分的には内へえぐりこまれたようになっている。水流により削られたようにみえ、人工的に削られたともみられる。このローム層落ち込みの西には黒色粘質土（泥土といってよい、第８層）が幅２ｍほどで堆積していて、さらに西には砂層・粘質土層が厚く堆積している。この砂層・粘質土層は西へ低くなるような堆積状態を示している（９～12層）。これらの砂層上の耕土層以下の層（２・３・４・５・７層）は客土の際にはこばれた層で、多量の弥

生時代中期～後期を主とする土器片を含んでいる。これは前述のG－24トレンチ、後述のG－26トレンチと同様である。ローム層落込の西方の砂層には少量の弥生式土器片と石器が包含されている。また1～2本の杭もみられるが、時期は明らかでなく、流れ込みともみられる。

台地縁辺の西側2.5mの砂層中には矢板状杭4本(W2036・2043・2035・2033）がほぼ一直線に打ち込まれている。杭頂は標高7.7mほど、下端部は7.2m前後ないしそれ以下になる。この杭列とローム末端の間、幅2.5mほどには黒色粘質土（泥土）が堆積していて、台地際の水路の存在を示している。この中から木器、土器片が出土した。出土したのは標高7.4～7.7mほどのところである。

トレンチ南壁に太い丸太材が水路にほぼ直角におかれていて、その北側から、あたかもこの丸太材にせきとめられたような状態で木器等が出土した。

これら木器をせきとめている丸太材は全体を掘り出していないので、どのようなものか明らかでない。末端部のみを削って面取りをし、そのすぐ横に2cm角ほどの孔をあけて、小さな角材(W2032）をさし込んでいる。

出土した木器は、網枠(W2025)、フォーク状木器（W2026)、田下駄状木器（W2027)、異形木製品（W2031)、平鍬（W2037)、異形木器（W2038)、糸巻状木器(W2055）その他、加工痕がある材、角材等で、重なりあって出土した。これとやや離れて木椀片（W2039）が出土している。田下駄状木器の下からは、これに密着して稲束がひとつ出土した。これは穂の部分は失われ、一端をワラのようなもの（稲と同質）で結んだもので、現状は土圧で扁平になっているが、本来は手のひらでにぎれる太さだったとみられる(PL.LXII)。またこの木器群内からは10数片の弥生時代中期土器片が出土し、トレンチ北壁際の黒色粘質土層から打製石鏃1点（S1098）が出土した。

このように、台地縁辺下に幅2.5mほどの水路があり、その中にせきとめられた状態で木器が出土している。したがって水流は北から南へ流れたとも考えられる。ただ、水路西岸を画する杭W2036・2043は下端部が7.2～7.28mにあり、もっとも低い位置で出土した木器が標高7.3m強なので、水路を区画するにはやや不適当にみえる。水路西側には水路岸辺を示すような土層はみられず、厚く砂が堆積しているだけである。後に氾濫等で失われたのかもしれない。

木器出土部位より下部の砂層は掘り下げていないが、上位からは弥生時代前期の土器片が若干出土している（本章第**3**節**1**）。　　（後藤）

c. G－26トレンチ（Fig.4・3－3，4・18，PL.L）

G－26トレンチでは耕土下層（Fig.4・3－3，第2～第5層）に多量の弥生時代中期～後期の土器や鋳型(Ss8)、石器片等が包含されていた。この包含層は厚さ20～30cmで、すでにのべたように台地上から運んだ土による客土層で、包含される土器もその土とともに運ばれたものである。本トレンチ北側で、西にのばした幅1m・長さ10mのトレンチでの所見によれば、この包含層はこの細いトレンチ西端でほぼ消滅する。したがって第2区東端に幅10mほどにわたってこの包含層があり、上記G－24・G－25両トレンチの耕土下へひろがっていることがわかる。

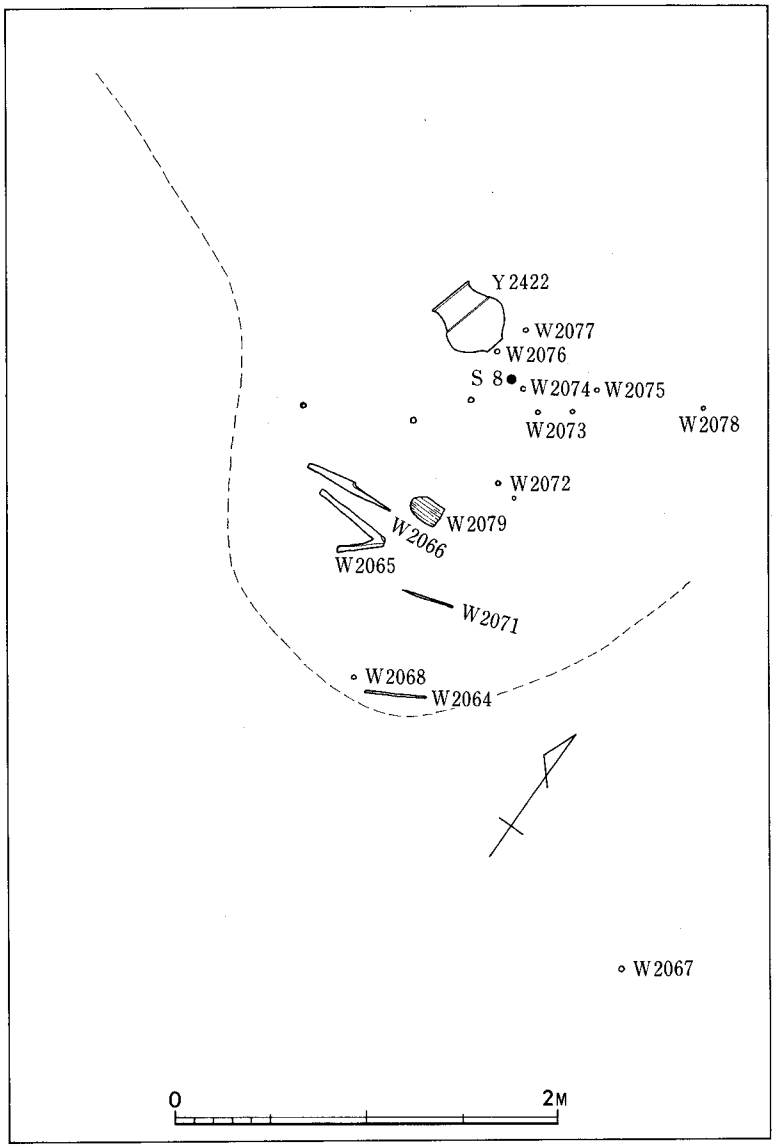


Fig.4・18　G－26トレンチ平面図

この包含層出土の遺物については第3節でのべる。

この下に砂質土層（第6層）があり、その下の砂質土・礫層（第7層・第12層）から杭・木器・土器等が出土した。この下は厚い粗砂・礫層（第20層）となり、この層は八女粘土層にのっている。八女粘土層はトレンチ北東から南・西・南西へゆるやかに、すなわち標高7.3mから6.9mへと下っている。八女粘土層上の粗砂・礫層の下部には鳥栖ロームの大きなブロックが入っている。なお八女粘土層はきわめて厚く、その中には大木が倒れ炭化したような黒色土層（第24層）があった。

杭・木器のある第7層・第12層上部は、トレンチ南西へはつづいていない。その範囲はFig.

4・14の破線で囲んだ部分である。ここに打たれた杭14本は角杭1本を除いてすべて径3cmほどの丸木杭である。現存杭頂の標高は7.75～7.8mにあり、下端部は7.6mほどである。杭は不規則に打たれ、1本（W2067）はとび離れていて、他の杭と一連のものか疑わしい。

この杭群の南側に接して、又鍬・石斧柄未成品（W2064・2065）、加工木、弥生式土器片が出土した。出土位置は標高7.4～7.8mである。これはG－25トレンチの木器群とほぼ同じである。

杭群は北東—南西方向に打たれているようにみえるが、溝などの遺構を示す土層も存在しない。そのために杭群の目的は明らかでなく、木器等の出土遺物との関係もはっきりしない。G－25トレンチ東端にみられたローム層の落ち込みは本トレンチには認められず、ローム縁辺はヨリ東に入り込んでいると考えられる。したがってG－25トレンチと本トレンチの木器包含層との関係も、出土土器からみてほぼ同時期（弥生中期）とみてよいが、明らかではない。

これら杭・木器層の下の砂層（第20層）からは大形の壺形土器（板付II式、Y2422）をはじめ若干の弥生時代前期土器片と石器が出土し、この砂層の堆積時期が弥生時代前期であったことを示している。出土土器については第3節1でふれる。

第20層の上にのり木器包含層の南～南西にある第8～第11層（砂層）でも若干の土器細片・石器が出ているが、時期は明らかでない。またトレンチ北東側の木器包含層と第20層との間の砂層（第14層）でも石器が出土している。

なお、本トレンチは、かって調査された環溝西側の弧状溝を横切る溝の延長線上にあり、もしこの溝が沖積層にまでつづくとすれば、興味ある問題を提供するが、今のところそれを具体的に語りうる材料はない。（横山）

d. G－24・G－25・G26トレンチの遺溝出土の遺物

上にのべたG－24・G－25・G－26各トレンチ出土の遺物は時期・遺構別に4つに大別される。すなわち、1）耕土層下の客土層中に包含された遺物、2)各トレンチの溝や杭群に伴う弥生時代中期の遺物（便宜上G－24トレンチ台地上ピットの土器も含む）、3)この下位層出土の弥生時代前期の遺物、4)その他包含層出土の遺物である。1)については第3節2で、3)については第3節1で、4)については第3節3でのべることとし、ここでは遺構に伴った2)についてのみのべることとする（木器包含層の遺物）。

i）土　器・土製品

イ　G－24トレンチ台地上ピット出土の土器・土製品（Y2141～43, D32・33, Fig. 4・19,PL.LII）

土器（Y2141～43）

Y2141・2142は甕である。Y2141は逆「L」字形口縁の外端が下がり、胴部がふくらむ。口縁部横なで調整で、胎土に石英粒砂を含み、焼成は良くない。暗褐色を呈する。中期中葉～後葉のものであろう。Y2142は「く」の字形口縁をもつ。内面は横、あるいは斜めになで調整。外面は縦刷毛目調整で、途中に横なで調整で刷毛目を消している。胎土に砂を含み、焼成は良好。暗褐色を呈する。後期前葉であろうか。Y2143は器台で上部を欠く。外面は縦刷毛目調

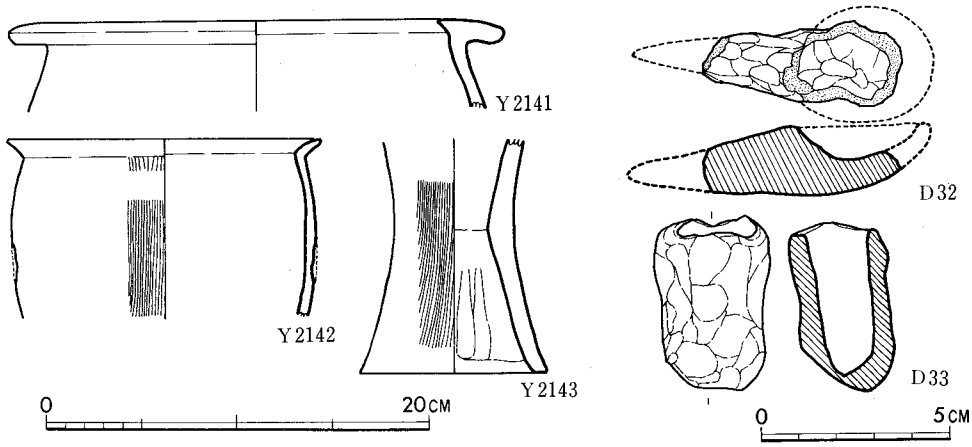


Fig.4·19　G－24トレンチ台地上竪穴出土土器・土製品実測図

整、内面はほぼ中央に稜がつき、その下は指で強くなで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良く、赤褐色を呈する。中期中葉～後期前葉のものであろう。

土製品（D32・33）

D32は匙形土製品で、匙部の側縁上部と、柄部の先端を欠失する。現長5.2cm、柄部長さ2.5cm。柄部は先端が細くなるが、断面は円形である。全体的に指で調整され、匙の中央部はわずかに凹む。胎土には砂を含み、焼成は良くない。黄白色を呈する。この匙形土製品は板付遺跡では1969年福岡市教育委の調査により、環溝内のT－V区攪乱層より出土している〔下条1970〕。この環溝内のものの時代は不明だが、D32は他の遺物からみて、後期前葉までのものと推定される。D33は小さな粘土塊の中を指で抉って中空にし、外面も指で強く調整している。胎土には砂を含み、焼成は良くない。暗灰色を呈する。この土製品が何かは不明である。

ロ　G－24トレンチ木器包含層出土の土器（Y2056・2096・2109・2135、Fig.4・53～4・55）

Y2056（Fig.4・53）は器台である。口縁部と脚裾部がほとんど同じ広さをもち、外面は粗い刷毛目調整で、内面にはしぼりの痕がある。焼成はあまりよくなく、暗褐色である。後期のものだろう。Y2109（Fig.4・54）はミニチュア土器の脚付鉢である。脚裾部を欠く。外面は指の調整、内面は箆で横に削るように調整。胎土は精良というほどではないが、悪くはない。焼成も良好で、暗褐色を呈する。Y2135（Fig.4・55）は壺の底部で、上げ底になる。胎土に砂を含み、焼成はあまりよくない。色は暗赤褐色。中期中葉～後葉であろう。Y2096(Fig.5・54）も壺の底部。焼成はあまりよくなく、褐色を呈する。中期中葉～後期であろう。この他に土製投弾片（D18）1点が出土した。

ハ　G－25トレンチ木器包含層出土の土器（Y2279～2296・2302、Fig.4・20、PL.L1）

甕（Y2279・2280・2284～2290）　Y2279は直立する口縁部の外端に刻目を施す。外面には煤の付着が認められる。Y2280は外反する如意形口縁の下端に刻目を施し、内面は横刷毛目調整。外面には煤の付着が認められる。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。淡褐色（Y

2279)、暗褐色（Ｙ2280）を呈する。前者は板付Ｉ式、後者は板付II式である。Ｙ2284～2290は中期の土器である。内側張り出しが強く、「Ｔ」字形口縁に近いもの（Ｙ2284～2286・2288）と、逆「Ｌ」字形口縁のもの（Ｙ2287・2289・2290）がある。Ｙ2284は上面が凹み、口縁部横なで調整。Ｙ2285も口縁の上面が凹み、口縁部横なで調整。外面上部は横刷毛目、それ以下は縦刷毛目調整。Ｙ2286は口縁内端が下がるが、上面はやはり凹む。口縁部横なで調整。外面は縦刷毛目調整。煤の付着も認められる。Ｙ2287は口縁上面が平面化する。口縁部横なで調整。Ｙ2287は口縁の内端が若干下がり、上面は凹む。口縁部横なで調整で、外面に煤付着。Ｙ2289は口縁の外端が下がる。口縁部横なで、外面縦刷毛目調整。外面に煤の付着が認められる。Ｙ2290は口縁下に一条の三角突帯が巡る。横なで調整。胎土は石英粒砂（Ｙ2284・2285・2289・2290)、砂（Ｙ2286～2288）を含み、焼成は良好。暗褐色(Ｙ2284・2286～2289)、赤褐色(Ｙ2285)、灰褐色（Ｙ2290）を呈する。これらの土器はＹ2284～2286・2288が中期前葉、他は中期中葉のものであろう。

壺（Ｙ2281～2283）　Ｙ2281は単純に外反する口縁部で口縁端が沈線状に凹む。外面横なで、内面横刷毛目調整。Ｙ2282・2283は外反する口縁の外面に粘土を貼付けて肥厚させたもので、横なで調整。胎土には、石英粒砂（Ｙ2281・2283)、砂（Ｙ2282）を含み、焼成は良い。暗褐色（Ｙ2281・2282)、褐色（Ｙ2283）を呈する。これらの土器はＹ2282・2283は板付II式、Ｙ2281は板付III式のものであろう。

鉢（Ｙ2291）　直立する口縁部をもち、口縁下に一条の三角突帯を有する。内面には櫛状に刷毛目調整。外面には煤の付着が認められる。胎土は石英粒砂を含み、焼成は良い。淡褐色を呈する。中期初頭～中葉のものであろう。

脚部（Ｙ2292）　高坏の脚部であろう。外面下部に横刷毛目調整で、その後丹塗り。内面は横なで調整。胎土は精良なもので、焼成は良く、灰褐色を呈する。中期前葉～中葉のものか。

器台（Ｙ2293）　器壁の厚い器台の裾部である。胎土には砂を含み、焼成良好。淡褐色を呈する。時期は不明だが、伴出遺物からみて、中期中葉のものと推定される。

底部（Ｙ2294～2296・Ｙ2302）　Ｙ2302を除いてすべて甕の底部である。Ｙ2294は底部に断面三角形の張り出し部を貼付けている。Ｙ2295は上げ底を呈する。外面縦刷毛目調整。内面には煤の付着が認められる。Ｙ2296は内外面ともに煤の付着が認められる。胎土に石英粒砂（Ｙ2294・2295)、砂（Ｙ2296）を含み、焼成は良い。暗褐色を呈する。Ｙ2294は夜臼式、Ｙ2295・2296はよくわからないが、中期前葉のものであろうか。Ｙ2302は壺の底部で外面丹塗り磨研。外面の底部近くは縦に箆なで調整。内面は指の押圧調整の後、箆状のもので横なで調整。このときになでが強すぎるために、痕が深くつくところがある。そのあと箆か板状の工具で斜めおよび縦になで調整。胎土・焼成ともに良く、暗褐色を呈する。中期中葉のものである。

ニ　Ｇ－26トレンチ木器包含層の土器（Ｙ2316～18・2345・2353・2362・2365・2367・2372・2272・2376・2390・2399・2407・2408・2413・2415～17・2421・2422　Fig. 4・21)

甕（Ｙ2316・2317・2345・2353・2362・2365・2367・2417・2421）

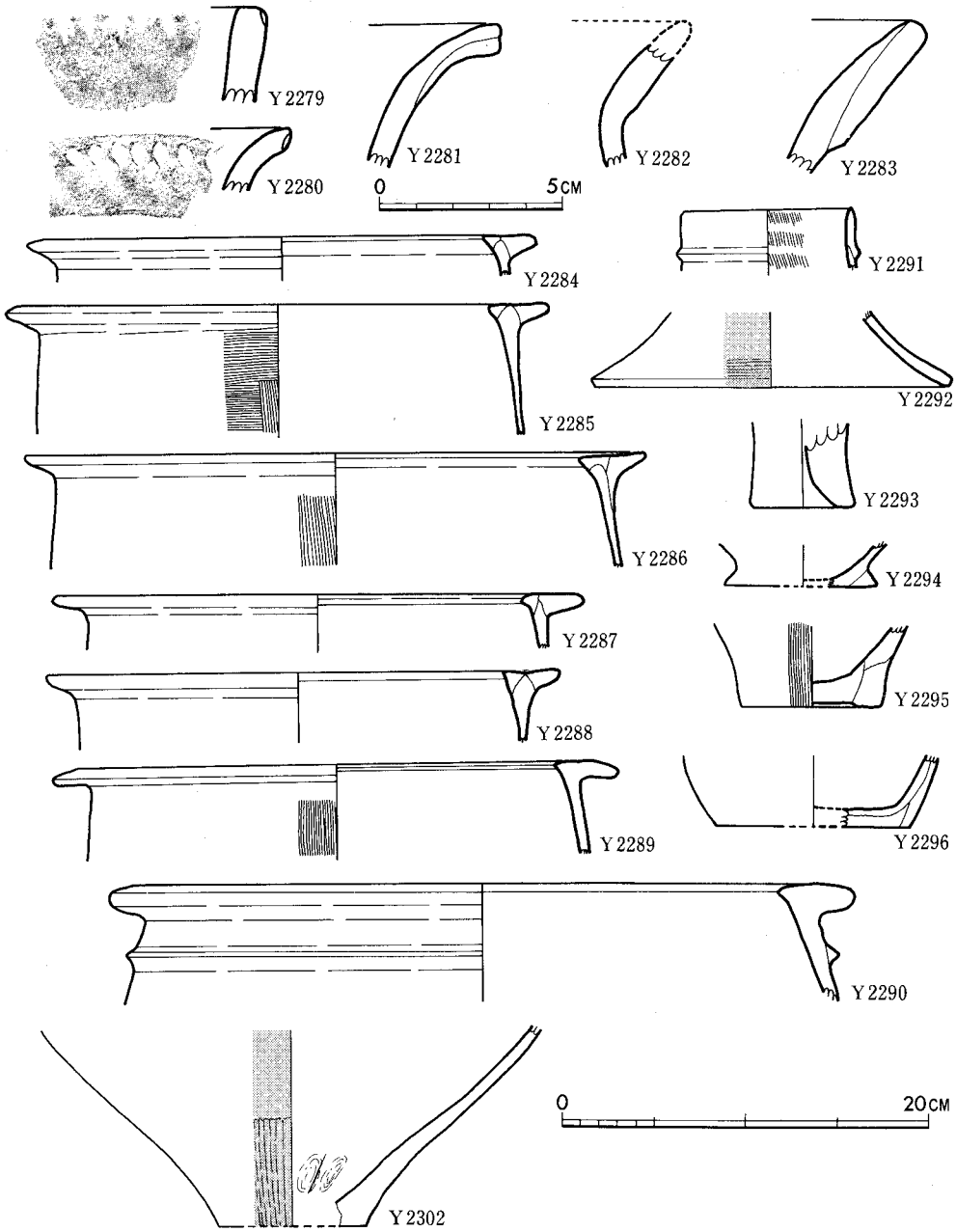


Fig.4·20　G－25トレンチ木器包含層土器実測図

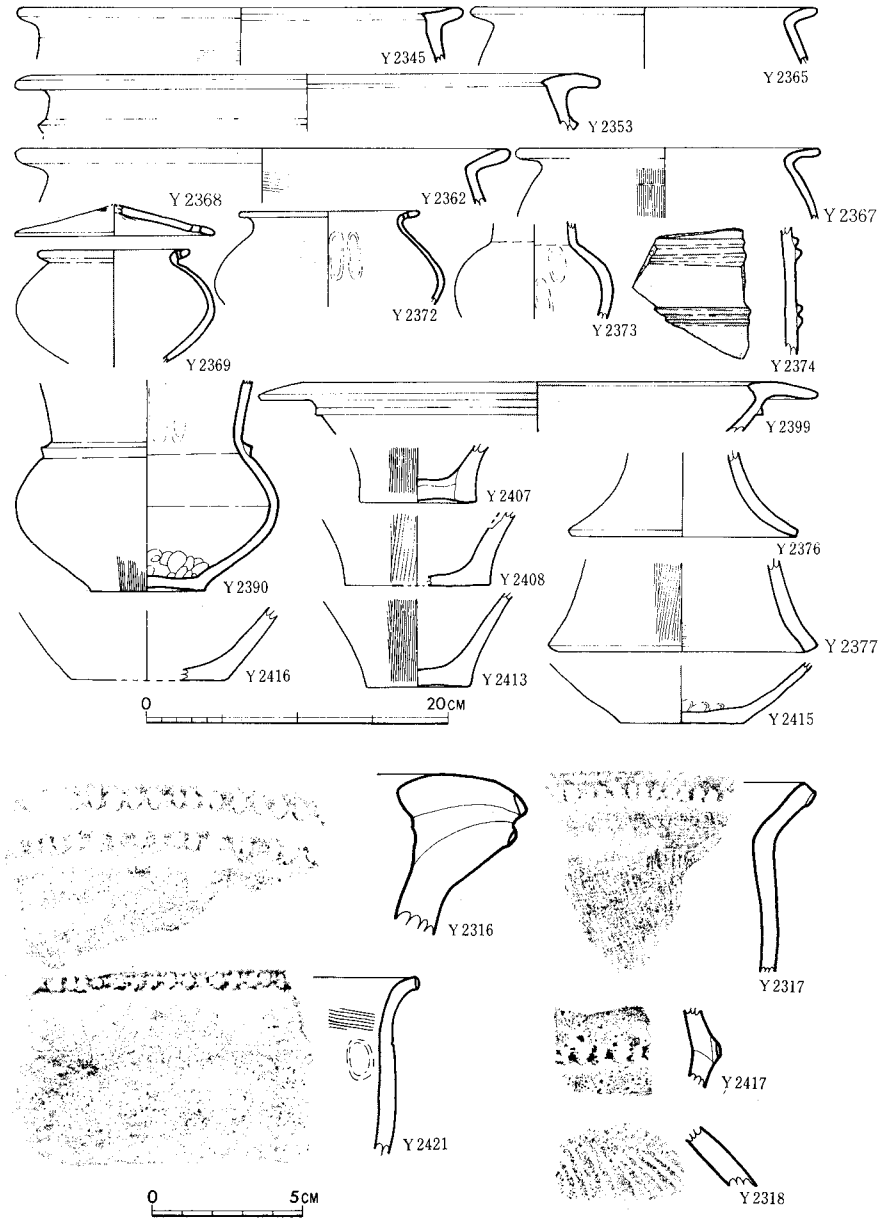


Fig. 4・21　G－26トレンチ木器包含層出土土器実測図

前期（Y 2316・2317・2417・2421）

Y 2316は甕棺の口縁部であろう。外反する口縁の上面に粘土を貼り付けて肥厚させ、その外側の上下両端に刻目を施す。横なで調整。胎土に石英粒砂を多量に含み、焼成も良くない。淡暗褐色。いわゆる金海式甕棺である。Y 2317は外反する口縁の先端が「コ」の字状になり、その下端に刻目が施される。外面は縦刷毛目調整で煤の付着も認められる。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。暗褐色。板付II式である。Y 2417は刻目突帯をもつ胴部破片で、胎土に石英

粒砂を含む。焼成は良く、暗褐色。夜臼式。Y2421は外反する口縁の外端縦一杯に刻目が施されるが口縁下に一条の沈線が巡る。口縁部は横なで調整。内面には斜めの刷毛目調整があり、指の押圧調整痕も残る。胎土に砂を含み、焼成は良好。褐色を呈する。板付II式。

中期前葉（Y2345）

口縁部外側張り出しは未発達で、わずかに張り出しのある内端が下がる。口縁上面は若干凹み、口縁部横なで調整。外面には横刷毛目調整で煤の付着も認められる。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。暗褐色。

中期後葉（Y2353・2362・2365・2367）

Y2353は逆「L」字状口縁の内端が下がる。外端も若干下がり、口縁下には一条の三角突帯をめぐらす。口縁部は横なで調整。外面には煤の付着が認められる。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。淡赤褐色を呈する。Y2362は「く」の字状口縁をもつ。外面には煤の付着が認められ、内面は斜めの刷毛目調整。口縁部は横なで調整。胎土には砂を含み、焼成は良好。淡褐色を呈する。Y2365も「く」の字状口縁をもつ。外面と口縁内面は丹塗り。胎土・焼成ともに良好で、淡褐色。Y2367も「く」の字状の口縁をもつ。口縁部は横なで調整で、外面は縦刷毛目調整で、一部に横刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。淡赤褐色。

壺（Y2318・2373・2374・2390）

Y2318は胴部破片で、いわゆる無軸羽状文を施す。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良くない。赤褐色を呈する。板付II式。Y2373は肩部から胴下半までの破片で、かなり小形のものである。胴部は球形を呈する。内面には指の押圧調整痕がある。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。赤褐色を呈する。前期のものか。Y2374も胴部破片で、2条づつ、計4条の断面蒲鉾形の突帯がある。全面に横なで調整が行われ、外面には丹塗りの痕跡が残る。胎土・焼成ともに非常に良く、褐色を呈する。中期後葉。Y2390は口縁部を欠く。頸部はわずかに外反し、頸部付け根には一条の三角突帯が巡らされる。底部は上げ底を呈する。外面は全体になで仕上げであるが、底部近くには縦の刷毛目調整が残る。内面の底部近くには指の押圧調整痕。頸部内面には指のなで上げ調整。胎土に砂を含み、焼成は良好。暗褐色を呈する。中期後葉。

蓋（Y2368）　無頸壺の蓋である。外面上部には刷毛目調整。内面はしぼりの痕が認められる。全面なで調整。小孔は焼成前穿孔。胎土・焼成ともに良好で、淡褐色。中期中葉～後葉のものであろう。

無頸壺（Y2369・2372）　いずれも「く」の字状の口縁をもつ。外面と口縁内部は丹塗り。小孔は焼成前の穿孔。Y2372の内面には指のなで上げ調整痕がある。いずれも胎土・焼成ともに良好。丹塗り部以外は暗褐色を呈する。中期後葉。

高坏（Y2376・2399）　Y2399は「鋤」状の口縁をもつ高坏の坏部で、口縁外端が下がる。口縁下に一条の三角突帯をめぐらし、内外面とも丹塗り。胎土に砂を含み、焼成は良好。淡褐色を呈する。中期中葉～後葉。Y2376は脚で、やはり外面は丹塗りである。胎土には砂を含み、焼成は良好。淡褐色を呈する。中期中葉～後葉。

器台（Y2377）　器台の下半部である。外面には縦刷毛目、内面裾部には横の刷毛目調整。

胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。茶褐色を呈する。中期のものであろう。

底部（**Y2407・2408・2413・2415・2416**）　Y2407・2408・2413は甕、他は壺である。いずれも外面に縦刷毛目調整で、Y2407・2413は上げ底を呈する。胎土には石英粒砂を含み、焼成は良好。赤褐色（Y2407）、淡褐色（Y2408）、暗褐色を呈する。Y2415は外面丹塗り磨研で、底部内面には指の押圧調整痕が残る。胎土・焼成ともに良好で、淡褐色。無頸壺か、袋状口縁の壺の底部であろう。Y2416は器面のあれが甚しいため調整不明。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。淡褐色を呈する。（沢）

ii）木製品（Fig.4・22～4・25、PL.LXIII～LXV、Tab.4・7）

G－24・G－25・G－26各トレンチの木器包含層出土の木製品について記す。まず、杭についてのべ、農具等の木器についてはその後に記す。

杭（Fig.4・22、PL.LXV）

G－24トレンチの木器包含層出土の杭（W2005～2014・2017～2023）はすべて直径 2.3～4.5cmの丸木杭である。樹種はアワブキ・ユズリハ・クヌギ・シイ・カシ・ゴンズイ・エゴノキと多彩である。W2012（PL.LXV）はカシで作った丸木杭で、直径 4.2cm、残長43cmで、先端部をていねいに削る。木皮がほとんど完全に残り、小枝を切りおとした跡がよく残っている。

G－25トレンチの木器を包含する水路の西縁に打たれていた杭（W2033・35・36）はいずれも板・角材を用いている。すべて樹種はシイである。W2035はD_4の方法で材を作ったもので、a面に樹皮が残っている。材の先端の両側縁（b_1・b_2面）を削ってとがらすが、a面は皮がはげただけの原材面、c面は裂面のままである。上端は腐蝕しているが、ほぼ本来の大きさを保っているよう。長さ44.8cm・幅8.5cm・厚さ4.4cm。裂角は推定58°、原材の直径は20～21cmであろう。W2036はD_5の方法で材を作る。b_1・b_2面先端を削る。削り面から判断して加工具の刃幅はb_1・b_2面幅（約4.5cm）より大きいとみられる。他の面は裂面のままである。W2033は板状のものである。W2036と35の間で出土した杭状のW2043は樹皮部分だけが残り、杭と断定してよいかどうかは不明。

G－26トレンチの木器包含層付近の杭（W2067・68・71・73～75）はほとんどすべてが直径3～4cmの丸木杭である。樹種はカシ・マツ・シイ・ユズリハ？・ヤナギである。

農具（Fig.4・23、4・24、PL.LXIII）

W2001はG－24トレンチ出土の二又鋤片である。全長47.7cm、厚さ2cm。刃部は長さ26cm・幅3cm・厚さ1.7～1.3cm。頭部から刃部にかけて側縁は削ってあるが、削痕は不明瞭である。刃部側縁は両面から削られ、断面三角形をなす。刃先端は使用によるらしく磨耗している。頭頂部は片面から斜めに削っており、現状がほぼもとの長さを示すとみられる。表裏面の削り痕は不明瞭。頭部に柄を入れる孔はないので、頭部に柄を結びつける鋤とみられる。現状はほぼ

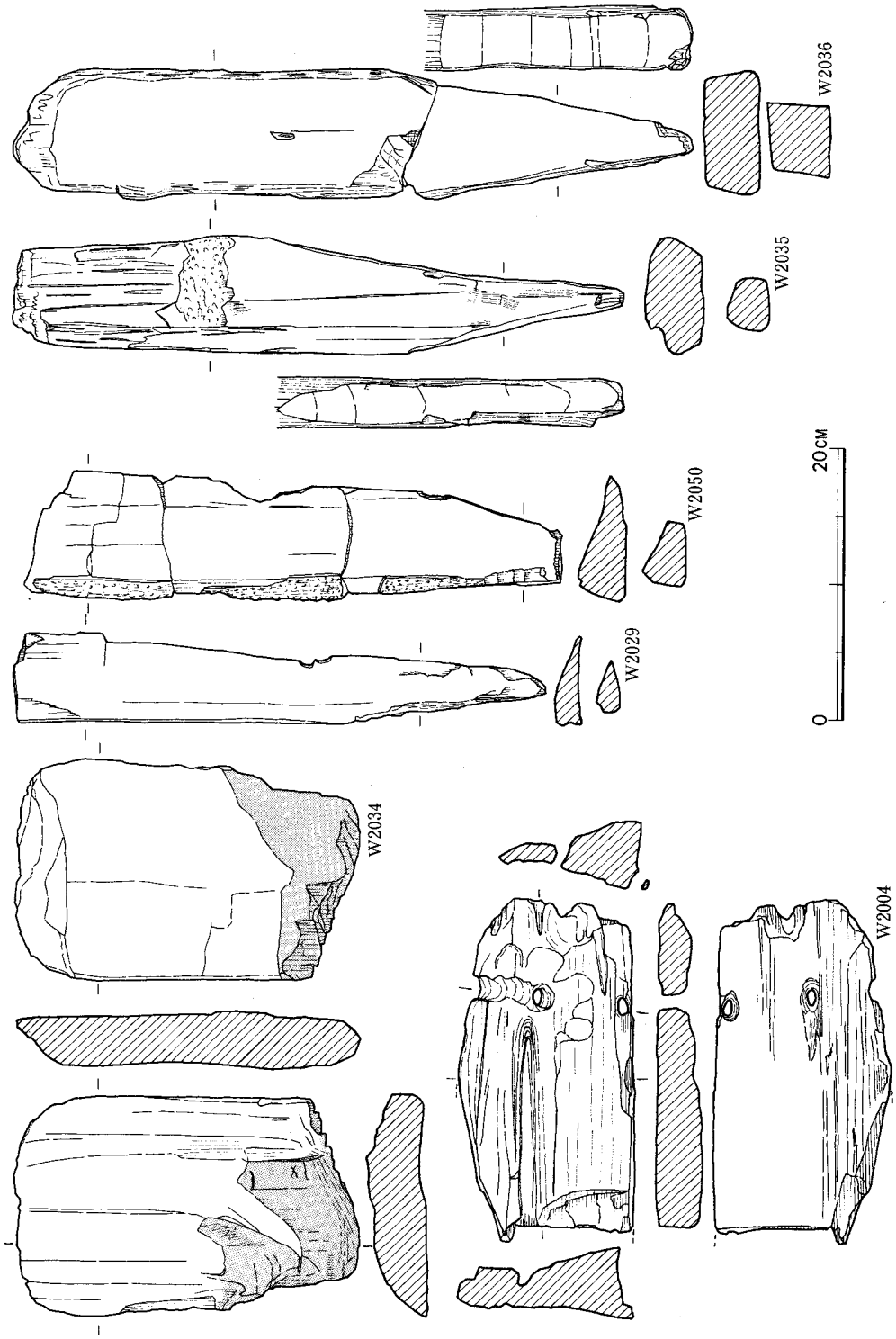


Fig.4·22　G－24トレンチ・G－25トレンチ木器包含層出土杭・材実測図

中心部で半折しているとみられ、頭部幅は6cm、刃部先端幅16cmと推定される。材は原木の中心部をはずれたところでとった板材である。樹種はカシ。

W2026はG－25トレンチ出土のフォーク状農具（三又鋤）である。一本の刃部先端を欠く。刃部から柄まで一木で作られている。全長83.5cm。柄部は長さ54cm、直径2.7cmほどの断面円形をなす。身部につながる部分では直径3×3.4cmになる。柄頂部に長さ2.1cm、幅1.9cm、厚さ 1.5cmの作り出し部を設け、中央に両面から直径5㎜ほどの孔をひとつあける。ここに別の木を横にとりつけたものであろう。身は全長29.5cmで、先端を三又につくる。中央刃部長は19cm。身部は柄と接する部分で厚さ 3.4cmで、そこから身部側6cmほどはほぼ同じ厚さで、その先は片面が次第に薄くなり刃部先端にいたる。刃が三つにわかれる部分の厚さ 2.9cm。また身部の片面は中央が厚く両側に薄くなり、側縁での厚さは2.3～2.5cmである。身と柄のつながる部分の身部左右には張り出しがつくられ、そこでの幅は11.5cm。その柄側の側縁は、身部のふくらむ側からノミ状工具で削られている。この張り出し部下の身幅は約8cmで、刃側へ少しずつひろくなり、刃端での幅は約13cmになる。

刃部は三又になり、中央の刃は断面長方形である。両側の刃の内側縁は両側から削られ断面三角形をなすが、磨耗して丸味をおびている。身部・刃部の両側縁は削られて平坦だが、削り痕はよく残っていない。

柄部は断面円形に仕上げられ、身部は一面は平坦に、片面は中央がふくらむように仕上げる。仕上げの削り面はかすかに残っているだけである。原木の中心をはずれたところでとった板材を用いている。カシ材。

W2037はG－25トレンチ出土の平鍬である。頂部側が失われている。現長14cm・厚さ 1.5cm最大幅8.7cm・刃部幅6.3cm。刃端から10.6cmのところに方形の柄孔がある。孔の幅約3cm・長さ 3.5cm以上。この孔は両面から斜めにあけられているが、片面からの傾斜が長い。その傾斜角約45°が柄をさし込む角度であろう。刃部側は薄くなり、幅もせまくなる。刃端は断面三角形をなす。全体に軽く彎曲している。刃部側の両側縁はそいだように細くなるが、加工痕は明らかでない。あるいは鉄や銅の鍬先をつけたのであろうか。両面の削り痕はよく残っていない。樹種はカシ。

W2027はG－25トレンチ出土の田下駄状木器である。22×18.4×1.5cmの板で作る。一端の中央に両面から2つの孔をあけ、他端の両縁近くに各々1つの孔を両面からあける。穿孔はきわめて雑である。片側の一面から長側縁へ斜めに削った跡がある。削り面は幅2.5～3.7cmで、加工具の刃幅を示している。それ以外の長両側縁は幅数cmの工具で上から押し切ったようにしてととのえ、短側縁は木目にそって裂いたままである。木目は短側縁方向に通り、他遺跡の田下駄とことなる。表・裏面に削り痕が残るが、削り作業の方向、工具の幅などはわからない。樹種はスギ。

W2064はG－26トレンチ出土の二又鍬片である。現長32cm・最大幅12.7cm・厚さ 1.6cm。腐蝕がはなはだしく加工痕はほとんど残っていない。頭部は幅 7.5cmから10cmで、頂部はやや丸くととのえる。頂部から6cmに方形の柄孔がある（7×4.4cm）。孔の傾斜は32～38°である。刃

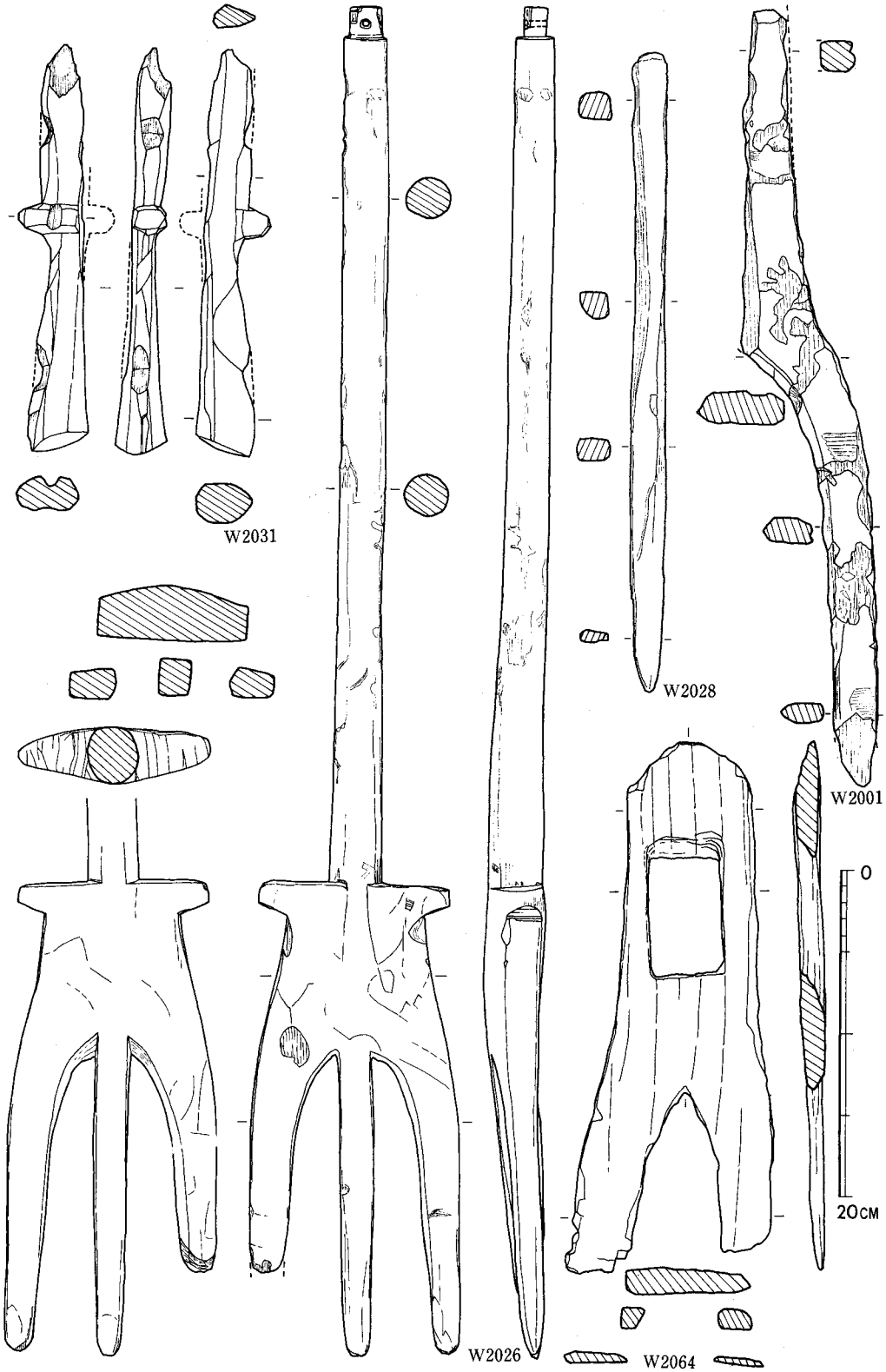


Fig.4·23　G－24・G－25・G－26トレンチ出土木製品実測図(1)

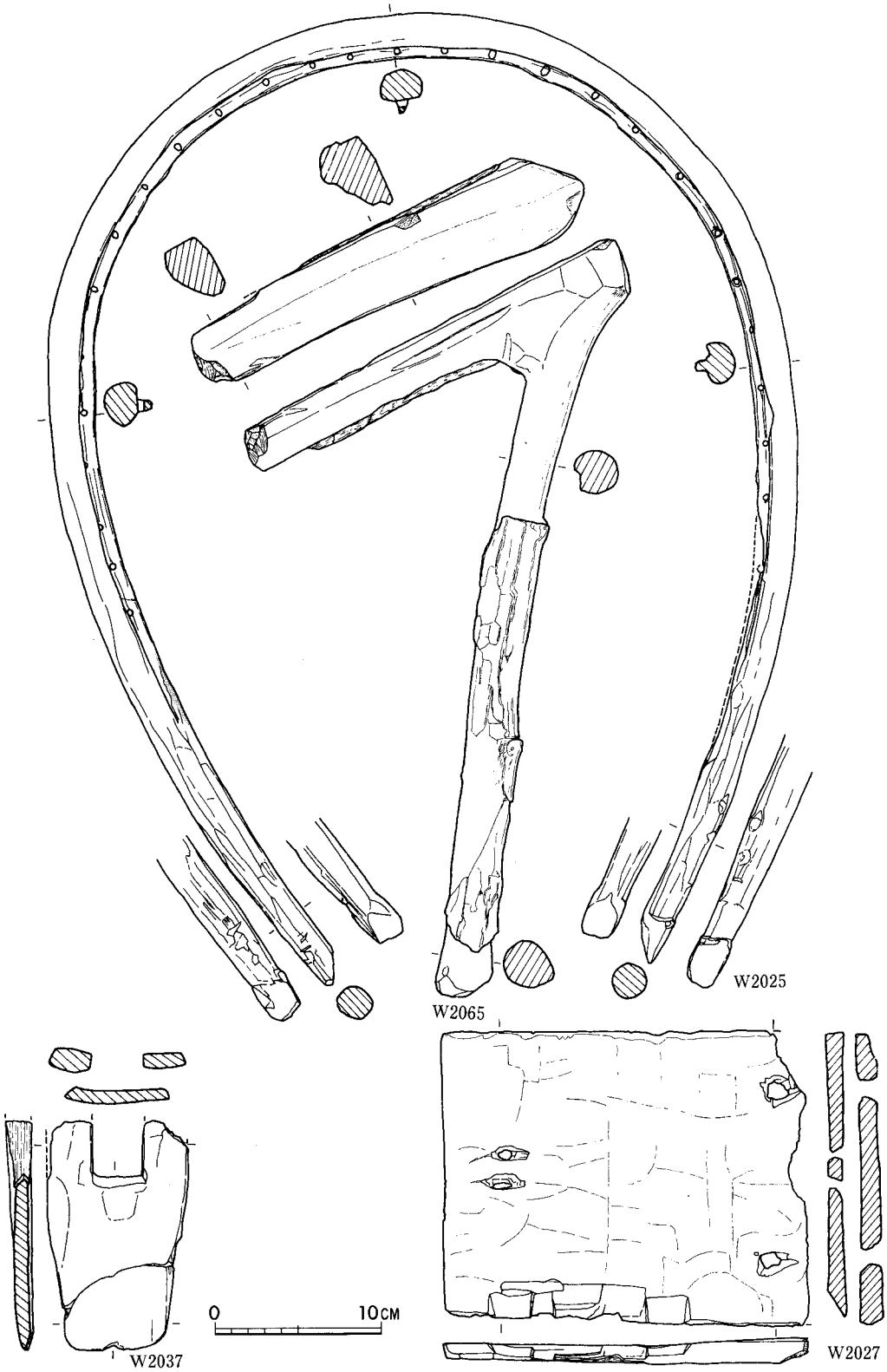


Fig.4・24　G－24・G－25・G－26トレンチ出土木製品実測図(2)

部は二又になり、刃幅４～３cm、厚さ 0.8cmほどである。刃部内側縁は両面から削られ、断面三角形とみられる。

その他の木製品（Fig.4・22～4・25，PL.LXIV）

W2025はＧ－25トレンチ出土の網枠である。直径 2.6～３cm、長さ約 147cmの丸木をまるく曲げ、内側の側面を削ってコ字形の突出部を作り出す。両端近くの20cmほどにはこれを作り出さない。この作り出し部は幅８㎜前後・厚さ５～８㎜、ここに直径３～５㎜の孔を28個あける。孔の間隔は2.3cm～4.5cm（３～3.5cmがもっとも多い）である。両端部近くの各々20cm近くの間は、全面をていねいに削って、直径２～ 2.3cmほどの断面円形に仕上げる。両端部は斜めにそいで、端部の長さ３cmほどを少し太く仕上げる。この少し太くした端部近くの細い部分には細紐をまいた跡がある（PL.XLIX－２）。両端の斜めにそいだ部分を柄にあて、両側から紐で縛ったのだろう。内側の小孔は網をとりつけた際にすれていて穿孔法は明らかでない。両端側の片面（図の裏面）は焼けている（PL.LXIV）。出土時には両端は密着していて、長径57cm・短径40cmほどの楕円形をなしていた。樹種は鑑定用の切片をとれず、不明。

W2031はＧ－25トレンチ出土の木製品である。木剣状のものの柄部のようであるが、本来の形状は不明。残長約25cmで、端部から13cmのところを太く作り出している。作り出し部から端部へ次第に太くなり（断面楕円形）、端部は斜めに切ってていねいに削り、少しふくらむ面をなす。この部分は3.5×2.5cm。つくり出し部近くでは2.2×1.5cmほどである。作り出し部は、5.5×2.5cmほどの大さと推定される（実測後、写真撮影までの間に、この部分はかなり損傷した）。その先の断面は一端がとがる長楕円形である（３×２cm）。木剣のようなものか。樹種はムクノキ。

W2028はＧ－25トレンチ出土の角材である。全長39.5cmの２cm角の材で、先端は薄くなり、

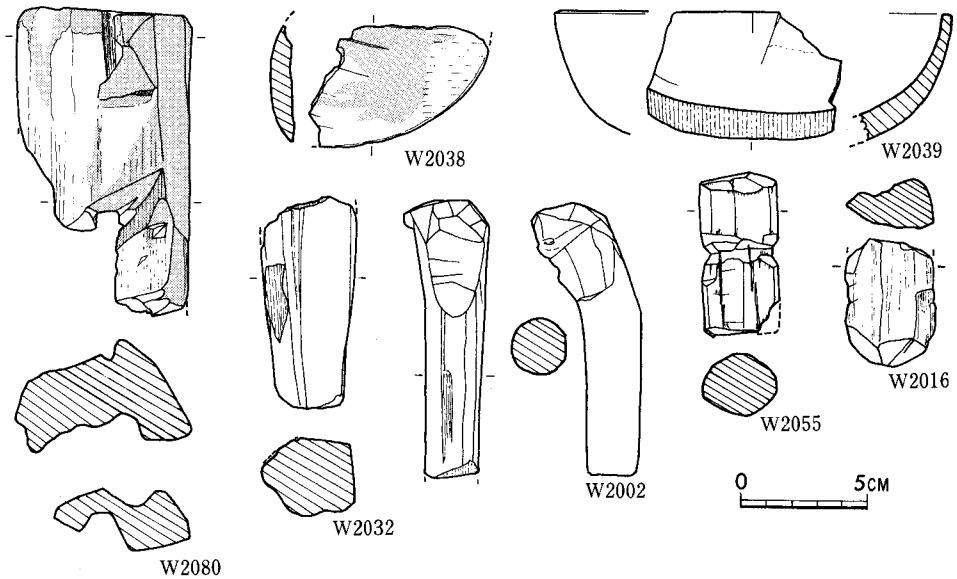


Fig.4・25　Ｇ－24・Ｇ－25・Ｇ－26トレンチ出土木製品実測図(3)

とがる。樹種はスギ。

W2065はG－26トレンチ出土の石斧柄未成品。枝付の材を用い、枝部分を柄にしている。柄には木皮が残っていて、その部分の直径は 3.4cmほど。皮の失われた部分で約3cmである。柄は長さ約38cmで、末端部は削ってととのえる。身部の上面は原木から割り裂いたままであり、反対面は未加工で木皮が残る。側面の片方は粗く裂いただけであるが、もう片方は裂いたあと軽く削っているようだ。柄と身の接合部はややていねいに加工し形をととのえている。身部先端は折れているが、身部残長約26cm、幅は先端が細く、 5.5～4cm、厚さは約 3.5cmである。身と柄のなす角度は約54°。身部の大部分が未加工の未成品である。樹種はクヌギの類である。

W2039はG－25トレンチ出土の木椀破片である。復元口径15.8cm、推定高約6cm。厚さは口縁部で 0.5cm、底近くで2cmである。木取りは横木取りで、樹種はヒノキ。

W2055はG－25トレンチ出土の糸巻状木器である。長さ16.5cm・断面径3×2.5cmに削ってととのえる。中央は両側より削って細くし（径2×2.5cm)。両端はていねいに削り、少しふくらむ。樹種はユズリハ。

W2002はG－24トレンチ出土の木製品。長さ10.9cmで丸木を用いる。一端がやや彎曲し、太くなる。この部分はていねいに削ってととのえる。他端側は若干削った部分があり、直径2cm。用途不詳。ユズリハとみられる。

W2016もG－24トレンチ出土。丸木を半割して先端を削る。残長5cm・幅 3.5cm・厚さ2cm。シイ。

W2038はG－25トレンチ出土の木製品。側縁が弧をなし、表面は丸くふくれていて、裏面は裂けたままである。表面はなめらかだが加工痕ははっきりせず、焼けている。図示した横方向に木目が走る。

W2032は、G－25トレンチの水路をふさぐように出土した大木の先端に加工された小孔に、垂直に挿入された状態で出土した加工木である。直径 4.5cmほどの丸木の一部を削って、角材状にしたもので、皮がはげた原木面も残っている。残長8.3cm・幅3.5cm・厚さ3cm。先端は細くなる。出土後、水槽に保管中に先端部が失われたもので、出土時の長さは12～13cmであった。樹種不詳。

W2080はG－26トレンチ出土の加工木である。残長12cm・幅7.1cm・厚さ4.5cm。原木を半割して、原木面側の片側（図の左側）をさらに裂き、反対側をていねいに削る。裏面は原木から裂いただけだが、一部を削っており、中央は木芯部が失われ凹入している。下端部に孔をあけるかのように割込んだ部分が残る。表面に焼けた部分が多い。樹種はシイ。

W2034はG－25トレンチ出土。D_1の方法で得た材の一面をさらに裂いて断面カマボコ状にととのえ、一端を斜めに削っている。他端は折れたようだが、この部分の表裏両面が焼けている。長さ24.9cm・幅16.2cm・厚さ 4.6cm。シイ。

W2004はG－24トレンチ出土。D_5の方法で材を作るが、角度が鋭く、薄いために、b_1・b_2面がかなり長い。腐蝕が甚しく、加工痕はほとんどわからない。表面の中央に木質が失われたくぼみが縦に入る。表面上端に横に並んで孔を3つあける。孔間は6.2cmと4.6cmである。表面

の中央の孔の周囲はヒトデ状にくぼみ、もうひとつの孔との間も、紐（縄）ですれたようにくぼんでいる。孔中も紐（縄）がすれたようになめらかになっている。孔に紐（縄）を通したことは確定であるが、用途不詳。樹種はクリ。

W2029はフォーク状木器下で出土した大きな板状材の先端部。他部はバラバラに折れてしまい実測不能。D_1の方法で得た薄い材である。裂面以外の加工痕はない。残長39cm・幅 6.5cm厚さ1.9cm。樹種はシイ。

W2050はD_1の方法で得た材で、G－25トレンチ出土。現長39.4cm・幅9.5cm・厚さ3.4cm。a面の反対側を削ってとがらせる。出土時にはこの上に小さい四角の板がはりついていた。木器出土の溝を画する杭の倒れたものであろうか。樹種はシイ。

以上にのべた木製品は、伴出土器からG－24トレンチとG－26トレンチ出土品が弥生時代中期後葉、G－25トレンチ出土品が弥生時代中期中葉とみられる。

（後藤）

iii）石器（Fig.4・76、4・77，PL. LXII）

木器包含層出土の石器は2点にすぎない。

S1098は先端部を欠失する石鏃で、基部の腸抉りが深く、脚部つけ根の両側に小さいノッチを施した特徴的な形態である。全体的に調整は丁寧で、特に脚部に著しい。素材は側辺に打点をもつ。凹基無茎式。重量1.4+αg。サヌカイト製。G－25トレンチ木器包含層の北側、ローム層落ち込み下端部出土。S1120は蛤刃石斧の胴部破片である。砂岩製。G－26トレンチの木器包含層で出土。

（横山）

(2)　旧河岸の遺構と遺物

すでに本節の1でふれたように、J－23、J・K－25、J－26トレンチでは弥生時代前期矢板列のある黒色粘質土層をおおい、さらに西にひろがる旧河川（砂層）の東側で弥生時代中期の土器が多量に出土した。層序のあり方からみて、黒色粘質土層の西側にあった旧河川の氾濫によって黒色粘質土層をもおおうように砂層が堆積し、弥生時代中期の旧河川東岸は、平面的にみれば矢板列のやや西側の上にあったことが推定できる。この岸近くの砂層（一部粘土層）中に多量の中期土器が埋没しているのである。以下その出土状態についてのべ、出土した遺物の個別的説明を行なおう。

a　J－23トレンチ（Fig.4・5，PL. XXXVI－3）

このトレンチでは矢板列の西方約7mの灰色粘土層中から弥生時代中期の土器が数個体分出土した。出土した位置は標高7.4～7.7mである。出土状態を図示した土器の他に、その南でも別に数個体の土器片が出土したが、トレンチ壁の崩落によって移動したために出土状態の実測はできなかった。J－23トレンチでは矢板列のある黒色粘質土層が西側でどのようになるかは、

トレンチ壁の崩壊のため追求できなかったが、この層の上にのる灰色粘質土層（Fig.4･2－3、第８層）が次第に深くなり（したがって黒色粘質土層上面は次第に低くなる）旧河川につながると考えられる。土器の出土した位置は、したがってはっきり旧河川と断定はできないが、出土した標高、平面的な位置から考えて、後述するＪ・Ｋ－25トレンチの旧河岸出土土器群と同じ性格のものと考えて大過なかろう。（後藤）

b　Ｊ・Ｋ－25トレンチ（Fig.4･7、4･9，PL.XXXIX－２、XL）

Ｊ・Ｋ－25トレンチでは、すでにのべたように矢板列を含む黒色粘質土層（Fig.４・７の第34層）がトレンチのほぼ中央で急激に落ちている。この落ち込みの西には砂礫層が厚く堆積し、さらに東側の黒色粘質土層をおおっているが、この砂礫層（第18層・14層・18層・25層）の東端は黒色粘質土層東側をおおう灰色砂・粗砂層（第24層）を削って、旧河東岸を示している。したがって黒色粘質土層が第24層におおわれたのちに、それを削って別の砂・礫層が堆積したものである。この砂層中の旧河岸辺近くに多量の弥生時代中期土器が含まれている。完形品が多く、丹塗土器の多いのが特長である。土器は標高7.6ｍ以下に包含されているが、旧河岸から遠い位置になると埋没位置が深くなり、旧河岸より12ｍほど離れたところで出土した丹塗無頸壺は標高7.0ｍで出土した。したがってこれら土器群の示す弥生時代中期後半の旧河川の河岸川底は標高7.0ｍ前後とみてよい。この標高は、後述する第３区で認められた同時期の旧河岸標高とほぼ同じである。

砂層東側の旧河岸上とみられるところには４本の杭が長さ１ｍ以上にわたり一列に打ち込まれていた（W2195～2198、Ｙ2197は出土後、トレンチにたまった水により倒れた）現存杭頂標高は7.9ｍ前後、下端部標高は7.4ｍ弱である。これらの杭は、旧河岸を形成する灰色砂・粗砂層（第24層）に打ち込まれ、下端は黒色粘質土層のやや上部にある。杭列がわずか４本の杭からなって短いために、砂層中の弥生式土器群と直接関係があると断定できない。しかし、出土した位置、標高、杭列の方向が旧河川岸辺とみられる第24層の西端縁に平行することから、砂層中弥生式土器群と関係のある旧河岸の杭列である可能性が多分にある。河岸の土器群は、岸より多く出土し、その出土状態は、旧河岸をなす第24層西縁とほぼ同じ方向に埋没している（Ｙ2473・74・78・71・80・77・76・72等）。その西側にも完形土器が埋没している（Ｙ2469・70・57・92）。東側で出土した甕形土器には小形壺が入っていた（Ｙ2475・53）。さらに東側の旧河岸から12ｍあまり離れたところでも無頸壺２個体が出土している。この他に砂層中から点々と土器片が出土している。（沢）

c　Ｊ－26トレンチ（Fig.4･10，PL.XLIV）

すでにのべたように黒色粘質土層は本トレンチの南・西側にはなくなり、厚く砂層が堆積ししている。この砂層（第11層）は黒色粘質土層にのる砂層（第12・13・14層）を切って堆積している。第11層が第12層～14層を切る部分が旧河岸と考えられる。

この岸辺の砂層（第11層）からＪ・Ｋ－25トレンチと同様多くの弥生時代中期の土器と流木

が出土した。土器が出土したのは標高6.2～7.7mの間で、流木（W2211～2222）は黒色粘質土層内の前期矢板・杭列の上部（標高6.6～7.6m）に密集していた。こうした土器・流木群の出土状態はJ・K－25トレンチの場合と同様、弥生時代中期後半の河岸における埋没とみてよい。

（横山）

このようにJ－23、J・K－25、J－26の各トレンチでは、黒色粘質土層上の堆積を切り、西方へ深く堆積する旧河川岸辺から中期後葉の土器群が出土した。J・K－25トレンチではこの河岸に打たれたとみられる短い杭列を検出している。

土器・流木が出土したのは、旧河岸近くでは7.7m以下7.5～7.4m前後で、旧河岸から離れるにつれ深いところからも出土し、もっとも深いものは標高6.2mに埋没していた。出土した土器は弥生時代中期後半のもので、当時の旧河底は岸近くでは標高7.0m前後、河岸標高は7.7m～7.8mとみられる。

土器の出土状態は旧河岸辺にそって埋没しており、完形品の多いこと、磨滅がほとんどないこと、量がきわめて多いことから、遠くから流れてきたものではなく、旧河岸から直接落ちたか、あるいはなんらかの目的で旧河へ沈められたとみるべきであろう。とくに後述する様に、甕形土器が少なく、壺形土器が多く、その中でも丹塗り土器・蓋の多いことは、ごく大まかな意味での「祭祀」に関係することを暗示し、旧河岸における祭祀行為を示唆する。

土器の出土する範囲は、J－23トレンチからJ－26トレンチにおよび、直線距離でも50～60mにおよぶ。さらに第2区南端外、Iライン上の道路側溝工事（1974年）に際して出土した若干の丹塗無頸壺をも同様の性格をもつものとすれば、長さ120～130mにわたる旧河岸に中期土器が埋没していることになる。

自然力による埋没とは考えられない出土状態からみて、当時の河岸における「祭祀」的行為についての興味ある問題を提起する。またすでにのべた台地縁辺での、ほぼ同時期の土器の出土（G－24・25・26トレンチ）からみれば、そこから西方Jラインまでの約70～80mの間の弥生時代中期後葉の地表が7.7～7.8mとみられ、しかもそれがほとんど砂層であることも、土地利用と関連する問題を提起する。しかしそうした問題に対する具体的な発掘結果は残念ながら得られなかった。

（後藤）

d　出土遺物

上にのべた弥生時代中期の旧河岸砂層出土の遺物は土器の他は流木だけであり、木製品としては、J・K－25トレンチの旧河岸に打たれた杭がある。

i）　土　器（Fig. 4・26～4・37）

J－23トレンチ出土土器（Y2428～30・39～42, Fig. 4・26、PL. LIV）

甕（Y2428・2429・2440） Y2428の逆「L」字状口縁部の内端は、わずかな張り出しと稜をもち、口縁上面は平坦を保つが、両端が少し下がる。外側口縁部下端から頸部へつながる部分は丸味をもっている。口縁部直下から胴部へは少しふくらみをもち、胴部以下は欠損している。

口縁部上面から外側器面には丹塗りを施している。口縁部内外には横なで、口縁部直下から胴部にかけては縦刷毛で調整して、その上から横なでを施している。器面は内側は暗褐色を呈し、口縁部上面から外側壁にかけて褐色を呈し、口縁部上面で一部に黒変を有する。胎土には砂粒を含むが良好であり、焼成は堅緻である。Y2429は逆「L」字状口縁部の上面が内傾し、内側の張り出しは目立たず、外側下端から丸味をもって外壁頸部につながる。内側貼り出しは稜を有する。口縁部から胴部にかけては、わずかにふくらみを見せ、胴部以下は欠損する。器面は内側口縁直下で、篦なでと思われる斜めに走る痕跡があり、外側は口縁直下より、粗い縦刷毛を有するが、摩滅が甚しく確認できない部分もある。全体に赤褐色を呈し、胎土は石英小粒を少量含むが良好であり、焼成は堅緻である。Y2440は底部で、平底である。器壁は外側に細い縦刷毛を施している。内側は黒褐色、外側は褐色を呈し、胎土中には石英粒砂を含むが多くなく、焼成は堅緻である。

壺（Y2430～2433・2439・2441・2442、PL.LIV） Y2430のゆるく外反して立ち上がる頸部につながる鋤状口縁部は、内側への貼り出しは弱く、上面はわずかな凹みをもって外傾する。頸部の立ち上がり部には断面三角形の突帯を一条貼り付けており、胴部は大きくふくらみ、下半部は欠損している。頸部と胴部との接合部は厚みをもつ。口縁部から頸部にかけて内外とも横なでを有する。全体に暗褐色を呈し、胎土中に砂粒を含むが良好であり、焼成も良好である。口縁部内径26.4cmを測る。Y2431も外反する頸部へつながる口縁部は鋤状を呈し、内側貼り出しもY2430より明確となり、口縁部上面はゆるく外傾する。口縁部外側の口唇部で少し凹みをもつ。頸部から胴部にかけて大きくふくらみ、胴上半部に断面三角形の突帯を一条巡らしている。胴下半部は欠損している。頸部には縦に沈線を8本づつ巡らしており、頸部立ち上がり部が少し厚みをもつ。口縁部から頸部にかけてと、突帯付近を横なで調整しており、突帯部より上の胴上半には篦による横の磨研を施している。全体に淡赤褐色を呈し、口縁部上面は黒変がある。胎土中に石英粒砂を混入する。焼成は良好である。口縁部内径23.4cmを測る。Y2432は頸部の上半部から欠損しているが、鋤先状口縁を有すると思われる。大きくふくらむ胴部最大径の直上には、断面三角形の突帯を一条巡らしており、突帯は鋭さに欠ける。胴下半部も欠損している。器壁内面は剝落が甚しい、突帯上下部分には横なでを有する。外側は暗褐色、内側は灰褐色を呈し、胎土中には石英粒砂を多く含むが、焼成は堅緻である。

Y2439は胴部以下を欠損しているが、弱く外反して立ち上がる頸部につながる口縁部は鋤状をなし、内側への貼り出しは明確となり、稜を有し、口縁部上面は平坦を保つが、内外端でわずかに下がる。外端口唇部で少し凹みを有する。頸部にはまばらな間隔と長さを持つ沈線を6本有する。口縁部上面から頸部外壁にかけては煤の付着を認め、頸部内壁には煤状の斑紋を認める。頸部下半部の一部には、篦による横の磨研を施している。全体に黒褐色を呈し、胎土中には石英粗粒砂を含むが良好であり、焼成は堅緻である。

Y2441は底部であり、わずかに上げ底気味となる。器面は内外とも荒れが激しい。全体に暗褐色を呈し、胎土中には石英粒砂の混入はほとんどなく、精度良好であり、焼成は堅緻である。Y2442も平底底部であるが、底面は不安定である。器面外側には研磨が認められる。内側は白

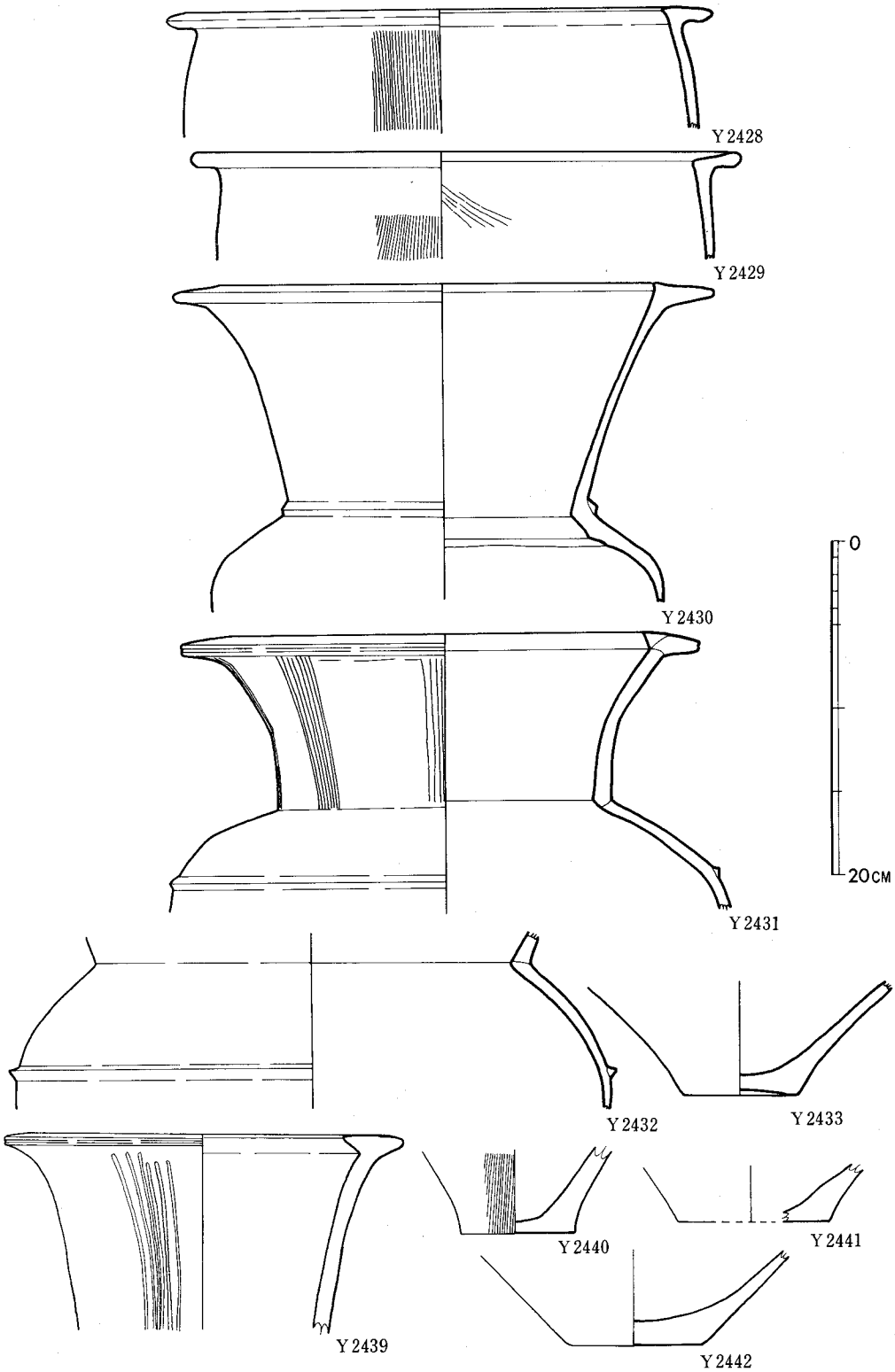


Fig.4・26　J－23トレンチ中期土器群出土土器実測図

灰色、外側は暗褐色を呈し、胎土中には少量の石英粒砂を含むが良好であり、焼成は堅緻である。

以上の特徴から、Y2428は中期中葉に、他は中期後葉に比定できる。

J・K－25トレンチ旧河川砂層出土土器（Fig.4・27～4・33、PL.LIV～LVIII）

甕（2443～2459・2462・2463・2567～2579・2620）　本層出土の土器は中期後葉を主体とするが、その前の時期の土器も出土している。Y2443～2445は中期前葉の土器である。Y2443・2445は、ほぼ直立する口縁端の外側に短い張り出し部を作る。ともに口縁部は横なで調整で、Y2445は外面縦刷毛目調整。Y2443は外面に煤の付着が認められる。Y2444は口縁部が「く」の字状に折れるが、短く、胴部外面には縦刷毛目、内面口縁下には横刷毛目調整。胎土に石英粒砂（Y2443・2445）、砂（Y2444）を含み、焼成良好。いずれも暗褐色を呈する。Y2567～2574・2578は逆「L」字状口縁をもつ。中には口縁内側の張り出しが強く「T」字形に近いものもある。口縁上面が凹むもの（Y2571・2572）、口縁外端が折れて下がるもの（Y2571・2574）、そのあまり強くないもの（Y2572）、口縁内端の下がるもの（Y2567～2569）、内端も下がるが、外端も折れて下がるもの（Y2570）、上面が平坦なもの（Y2573・2578）があり、いずれも口縁部は横なで調整。口縁下の横なでが強く稜のつくもの（Y2568・2570・2571・2573）もある。口縁下に「M」字状突帯（Y2574）、三角突帯（Y2578）を一条巡らすものがあり、外面に縦刷毛目調整（Y2567～2569・2571～2573・2578）、内面に横刷毛目調整（Y2570）を施す。Y2570は外面丹塗り磨研で、口縁内面も丹塗り。口縁上面には放射状に暗文を描き、口縁外唇には櫛状の工具で刻目を施す。口縁と突帯間には箆状の工具で細い波状沈線を描く。Y2573は外面に煤の付着が認められる。胎土には良好なもの（Y2572・2574）もあるが多量の砂粒を含み、焼成はY2568を除き良好。暗褐色（Y2567・2572）、暗黄褐色（Y2568～2571）、灰褐色（Y2573・2574）、黄褐色（Y2578）を呈する。これらはいずれも中期中葉のもので宝台Ⅰ式〔高倉1970〕に相当するものであるが、Y2567～2570は若干後出のものであろう。

Y2447・2575は逆「L」字状を呈する口縁外端の下方への折れが強い。胴の張りはあまり強くなく、若干長胴化する。Y2575は外面と口縁内面丹塗りで、口縁部に焼成前に穿孔がある。おそらく無頸壺と同様、片側2個が対となり、計4個の小孔をもつものであろう。Y2447は丹塗りは認められず、小孔の有無も不明。外面縦刷毛目調整。口縁部は横なで調整。胎土はY2447は砂を含み、Y2575は良好。中期中葉～後葉であろう。Y2577は逆「L」字状の口縁の内端が下がり「く」の字状に近くなる。内側張り出しも強く、明瞭な稜がつく。口縁部は横なで調整で、口縁下のなでは強く稜がつく。外面は刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。暗褐色。中期後葉のものであろう。

Y2446・2448～2459・2462・2463・2576・2579・2620は口縁部が「く」の字状を呈し、本層の中心をなす甕である。口縁部はいずれも横なで調整。口縁下のなでが強く、稜のつくもの（Y2455・2463）がある。胴部は張るものが多いが、Y2448のように張りのほとんどないもの、Y2446・2466のようにあまり強くないものもある。また内面口縁屈折部は稜がつかないものが

多いが、Y2454・2457のようにあまり明瞭ではないが認められるもの、Y2620のように明瞭なものも若干ある。口縁外面は縦あるいは斜めの刷毛目調整のものが多く、また粗いものが多い。Y2448・2453は口縁下外面に横刷毛目調整を施し、特にY2453は縦刷毛目の後に横刷毛目を施し、格子目状になっている。またY2446は口縁内面に横刷毛目、Y2450は胴部内面に斜めの刷毛目調整を施す。刷毛目調整のつかないもの（Y2462・2576・2579・2620）には丹塗りのものが多いが、これはこの時期に普遍的なものではなく、刷毛目調整と丹塗りを同器面に行う他遺跡の例もある。丹塗りは全面丹塗りのもの（Y2579・2620)、外面と内面の上部に施すもの（Y2576）もある。Y2462には丹塗りはみられない。外面に煤の付着するもの（Y2446・2448・2449・2451・2452・2458・2459・2463)、内外面とも煤が付着するもの（Y2453）もあり、Y2457は内面下半分に指の押圧調整痕がみられる。底部まであるものは大部分が平底だが、Y2456は若干の上げ底を呈する。胎土は砂を含むもの（Y2446・2449～2451・2453・2455～2458・2579）石英粒砂を含むもの（Y2448・2452・2454・2459・2462・2463)、良好なもの（Y2620）があり、焼成はすべて良好。暗褐色（Y2446・2449・2453・2454・2459・2462・2463)、暗赤褐色（Y2448)、淡暗褐色（Y2450・2455～2457)、黄褐色（Y2451・2458)、黒褐色（Y2452)、暗黄褐色（Y2579)、灰褐色（Y2620）を呈するが、一部焼成時の黒変のあるもの（Y2448・2450・2453）もある。

これらの土器は中期後葉のいわゆる宝台II式の甕であるが、宝台II式とI式の間にもう1型式存在すると考えられており〔高倉1970〕、Y2447・2448・2575・2577などが、あるいはこれに当たるかもしれない。

壺（Y2464・2465・2467～2472・2482）　本層出土の壺は時期的には二つに分けられる。ひとつはY2464のように内傾する口縁部の先端が短く外反するもので、胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。暗褐色を呈するが、器面が磨耗しているために器面調整は不明である。夜臼式のものであろうか。

Y2465～2472・2482は器形的にはバラエティがあるが、すべて同一の時期のものであろう。Y2465は胴部破片であるが、胴上半部に一条の複合三角文突帯、いわゆる「M」字形突帯を巡らす。口縁部は欠失するが、おそらく「鋤」形口縁を為すものであろう。突帯貼付け部は横なで調整。Y2467はいわゆる袋状口縁壺の口縁部と底部を欠くもので、外面は刷毛目調整の後丹塗り。頸部内面はしぼりの痕がみられ、その下に押圧なで上げ調整。Y2468も「鋤」形口縁をもつ丹塗り磨研の土器で、横なで調整。Y2469・2470はほとんど同様の器形をもつ。「鋤」形口縁の外端が下向する口縁部から頸部がしまり、肩部で稜をもって球形に近い胴部へと続く。ともに横なで調整で、Y2469は胴上半部に横なで調整の後に、細い箆状の工具で暗文を描く。Y2470は刷毛目調整の後、横なで調整を行っているが、刷毛目の残る所もある。ともに内面は指の押圧およびなで上げ調整痕が残る。Y2471は外反する口縁部は肥厚せず、いわゆる朝顔状の口縁部をもつが、中期前半のそれに比較して鋭さはない。肩部に一条の三角突帯を巡らし、底部は若干上げ底となる。横なで調整を行ない、内面には指の押圧およびなで上げ調整痕が残るが、胴部内部は若干上げ底。Y2482は「鋤」形口縁がわずかに内傾し、口縁下には一条の三角突帯

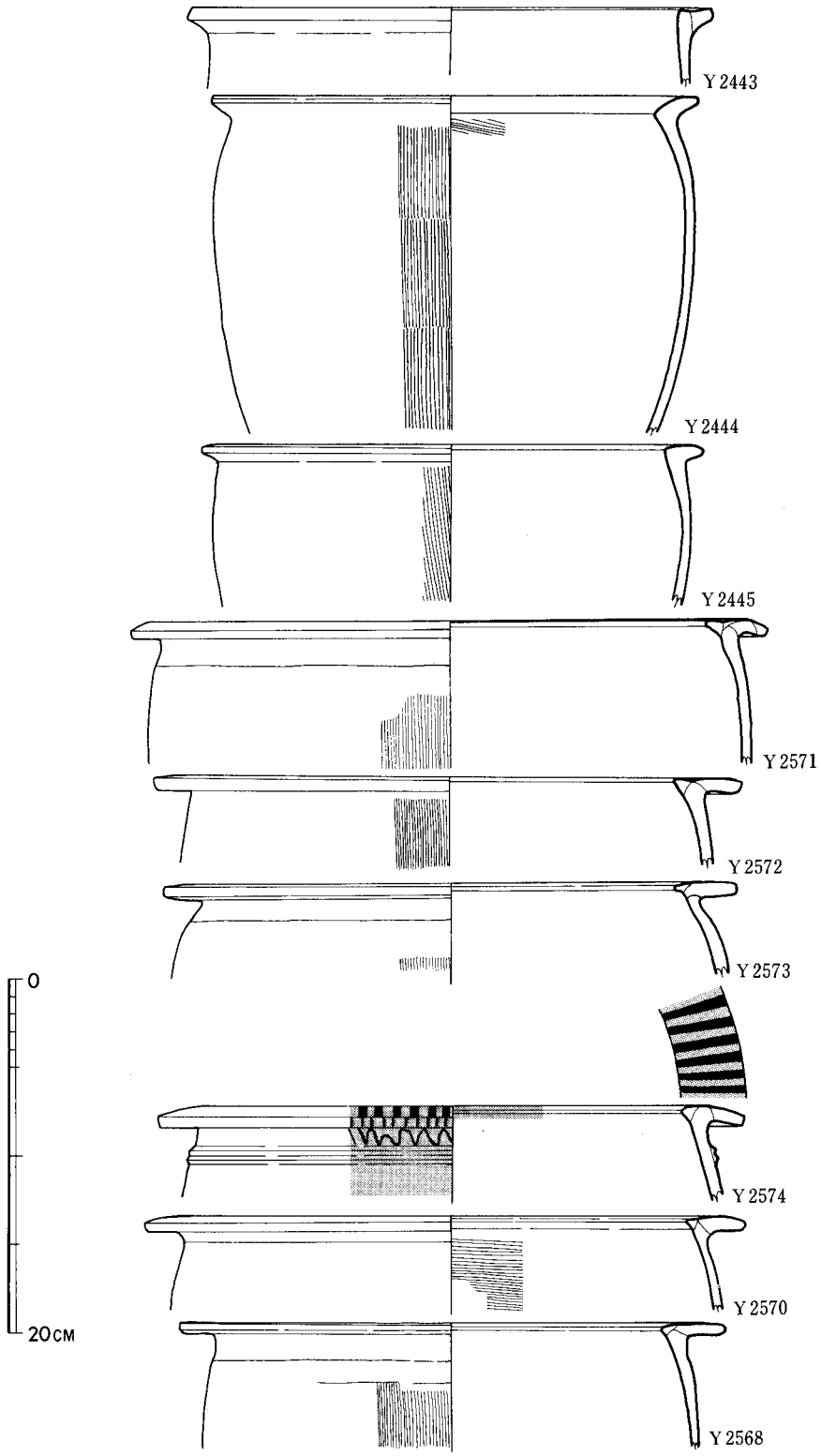


Fig.4·27　J・K－25トレンチ旧河川砂層出土土器実測図(1)

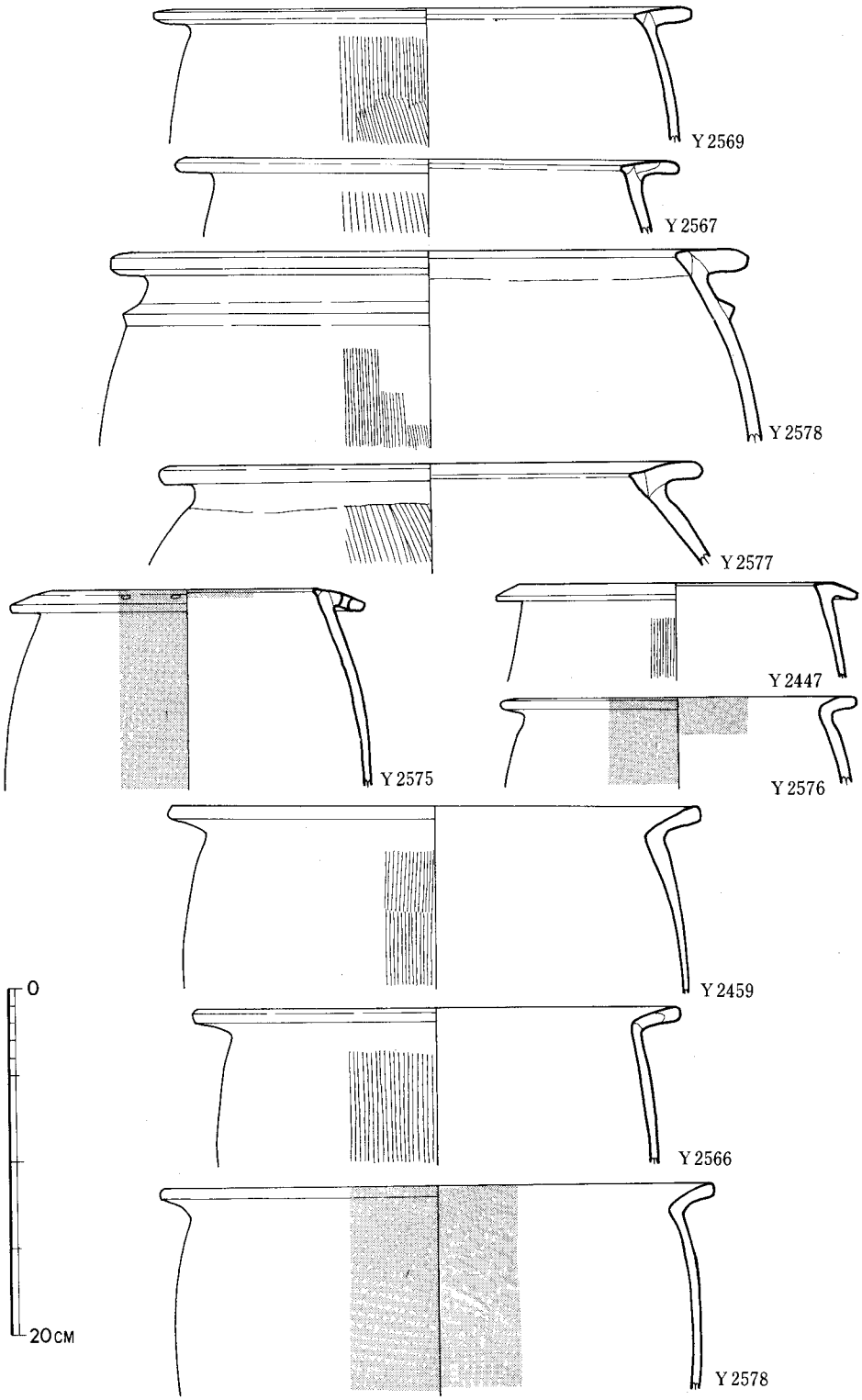


Fig.4・28　J・K−25トレンチ旧河川砂層出土土器実測図(2)

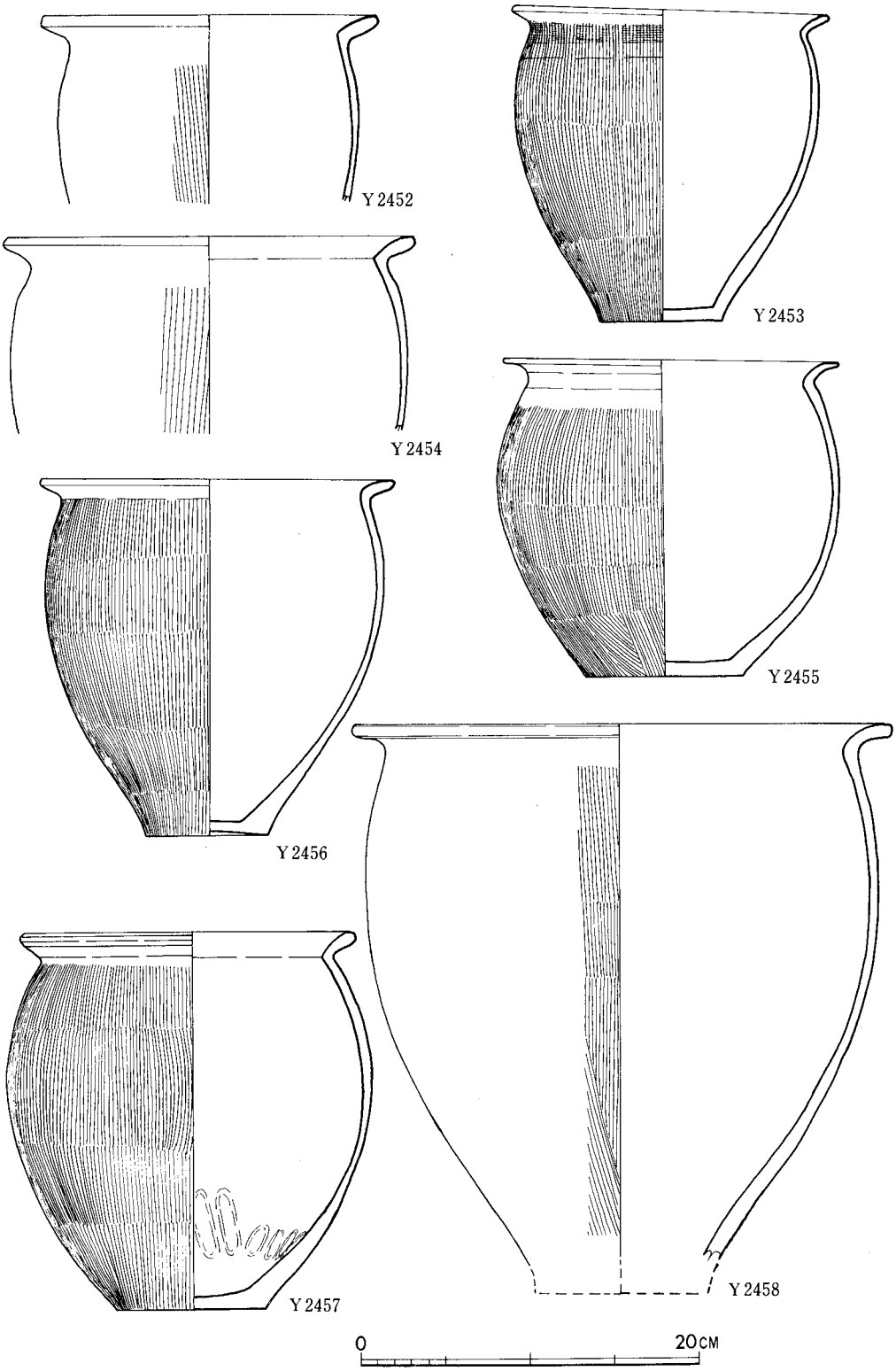


Fig. 4・29　J・K－25トレンチ旧河川砂層出土土器実測図(3)

が巡らされる。横なで調整。これらの土器は胎土に砂を含むものが多いが、石英粒砂が目だつもの（Y2470・2482）もあり、焼成は良い。暗褐色（Y2464）、淡暗褐色（Y2465・2467・2469・2470・2472）、淡黄褐色（Y2482）、黄褐色（Y2468）、赤褐色（Y2471）を呈する。これらの壺は弥生時代中期後葉、いわゆる宝台II式に比定できる。

小形壺（Y2473～2480）　口径10～12cm、器高11cm前後の小形の壺で、器形はY2471・Y2472を小さくしたような感じであるが、肩部の突帯はない。口縁内側に稜のつくもの（Y2473～2476・2480）とつかないもの（Y2477～2479）があり、Y2472に類似して頸部と胴部のある程度は区別できるもの（Y2473～2476）、Y2471に類似しているもの（Y2478）、頸部が退化しているもの（Y2477・2479・2480）がある。いずれも横なで調整で外面は縦刷毛目調整が基本的だが、口縁下に横刷毛目調整のもの（Y2475・2477）もある。内面はいずれも指の押圧およびなで上げ調整で、刷毛目調整のあるもの（Y2074・2477・2478）もある。Y2477の頸部内面にはしぼりの痕がつく、胎土には砂を含み、焼成は良好。暗褐色（Y2473～2475）、淡暗褐色（Y2476・2477・2479）、淡黄褐色（Y2478・2480）を呈し、いずれも底部近くに焼成時の黒変がある。これらの土器も中期後葉、いわゆる宝台II式に相当する。

高坏（Y2481）　いわゆる「鋤」形口縁をもつ高坏坏部である。外反する口縁の上部に粘土を貼付けて肥厚させたもので、口縁上端は平坦でなく、両側がたれ下がる。口縁外端は粘土接合部のために凹んでいる。内外面とも丹塗り磨研であり、横なで調整。胎土には精良な粘土を用いており、焼成良好。淡褐色を呈する。この土器も中期後葉のものであろう。

蓋（Y2484～2490・2613～2617）　いずれも無頸壺の蓋であろう。片側2個づつ計4個の小孔は焼成前のものであり、裾部は横なで調整。Y2484～2486・2488・2489・2614・2617は外面丹塗り磨研で、Y2488には一部内面にも丹がつくが、これはこぼれたものであろう。Y2490・2616はかなり大型のものである。Y2615には外面に横刷毛目調整がなされ、暗文風になる。Y2617は丹で放射状に暗文が描かれる。胎土は精良な胎土をもつもの（Y2485～2487・2613・2617）、砂（Y2484・2488・2490）、石英粒砂（Y2489）を含むものがあり、焼成は良い。暗褐色（Y2484～2487）、淡暗褐色（Y2488・2489）、黄褐色（Y2490・2615）灰褐色（Y2613・2614・2616・2617）を呈する。弥生中期後葉。

無頸壺（Y2491・2492・2618・2619・2621・2622）　Y2491・2492は外面丹塗り磨研で、口縁部は上面が平坦化せずに強く「く」の字状に屈折する。口縁部の片側に2個計4個の小孔は焼成前のもので、上記の蓋と器形的にセットをなすものであるが、本資料では組み合わない。胎土には精良な粘土を用い、焼成良好。暗褐色（Y2491）、褐色（Y2492）を呈する。

Y2618・2619も同様に「く」の字状に屈折する。丹塗りの痕は器面のあれのため不明だが、おそらくあったのであろう。Y2621・2622も口縁が「く」の字状に屈折するが、上端は平坦に近い。外面は丹塗り磨研。内面も口縁部は丹塗りで、一部内部にたれている。Y2622は外面のほぼ半分が、焼成時に黒変しており、他部の丹の赤色と好対象をなしている。いずれも胎土は良好なもので、焼成も良い。灰褐色を呈する。これらの土器も、実際に組み合う蓋は未発見である。いずれも中期後葉のものである。

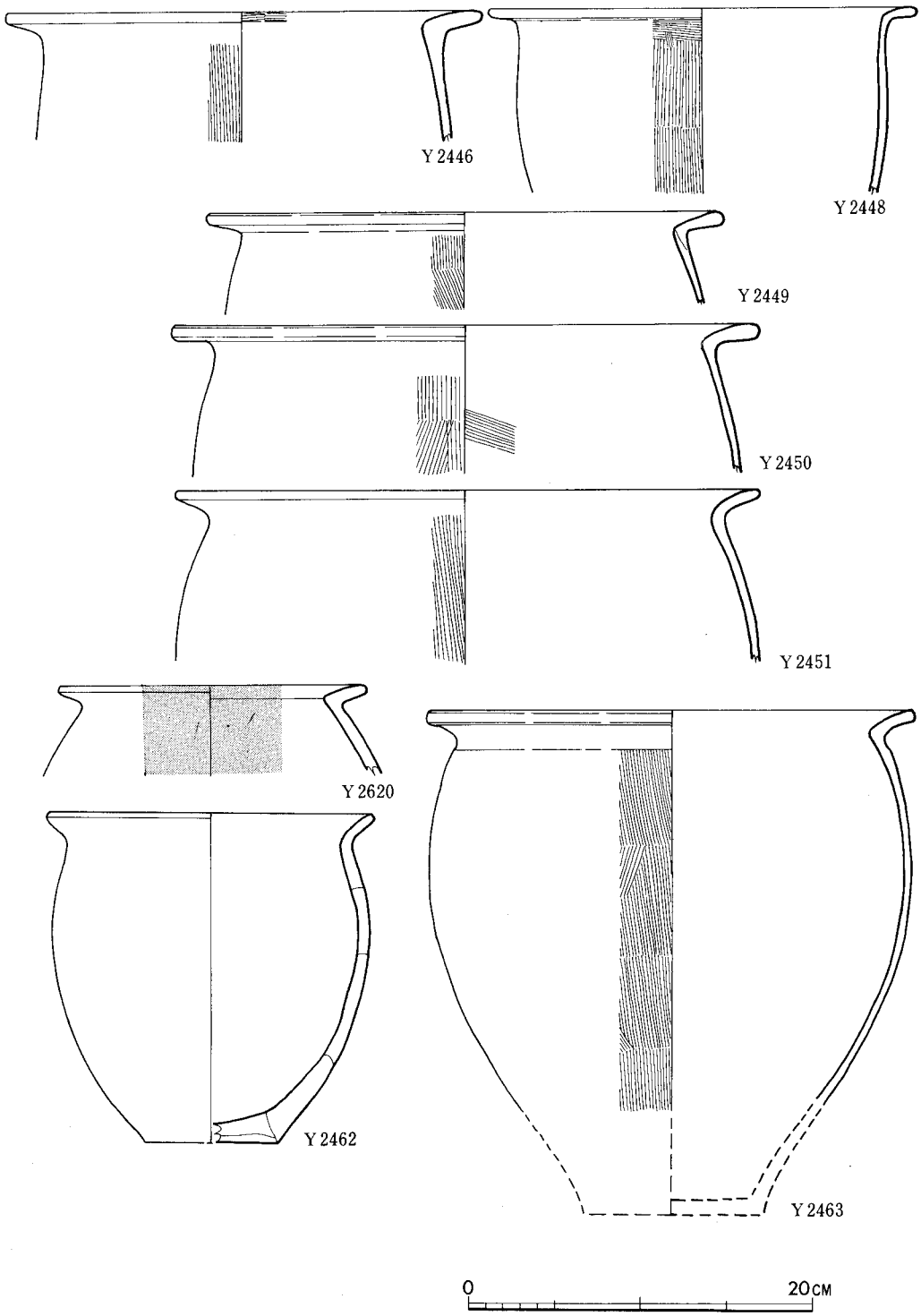


Fig.4・30　J・K－25トレンチ旧河川砂層出土土器実測図(4)

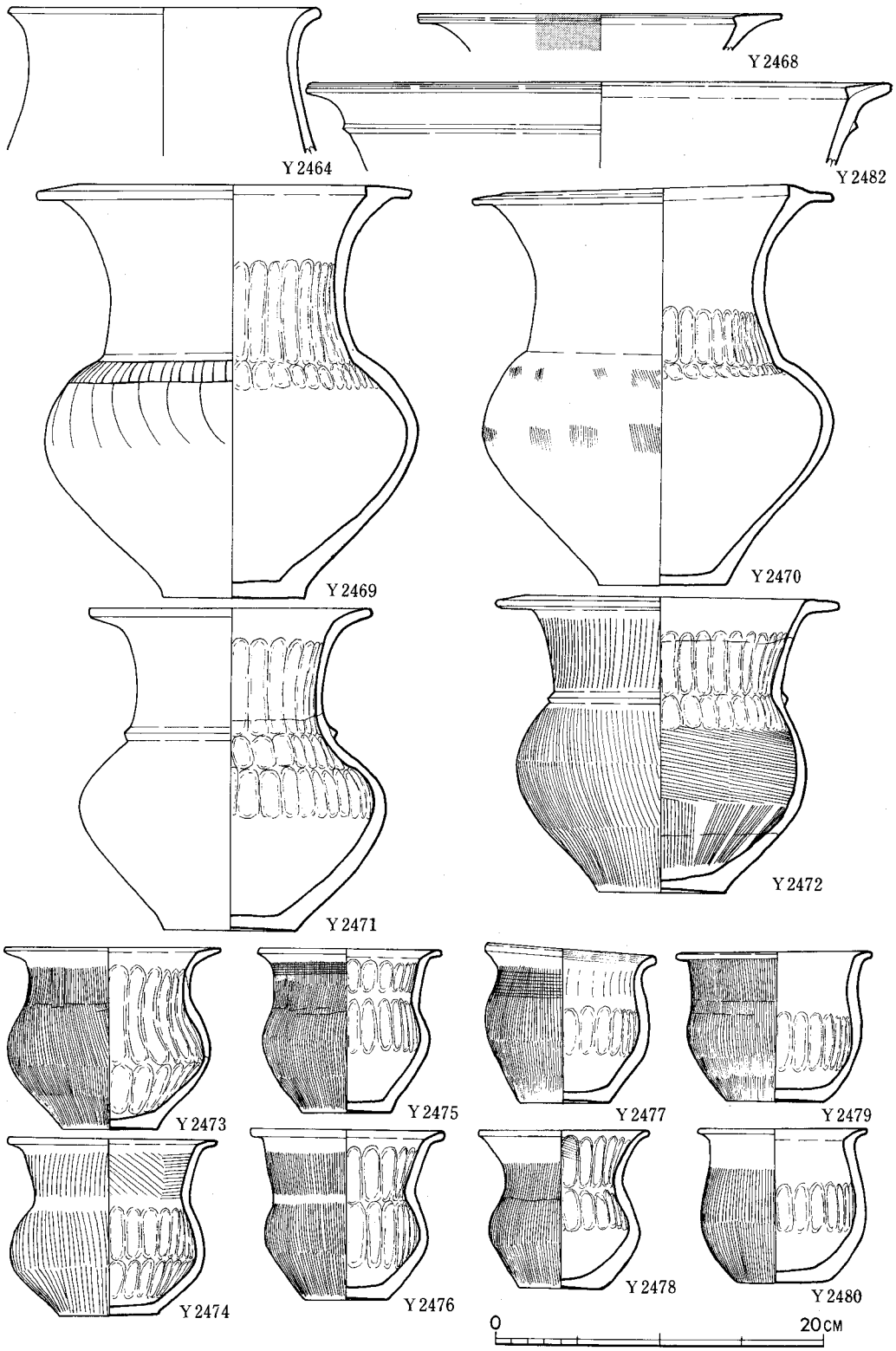


Fig.4・31　J・K－25トレンチ旧河川砂層出土土器実測図(5)

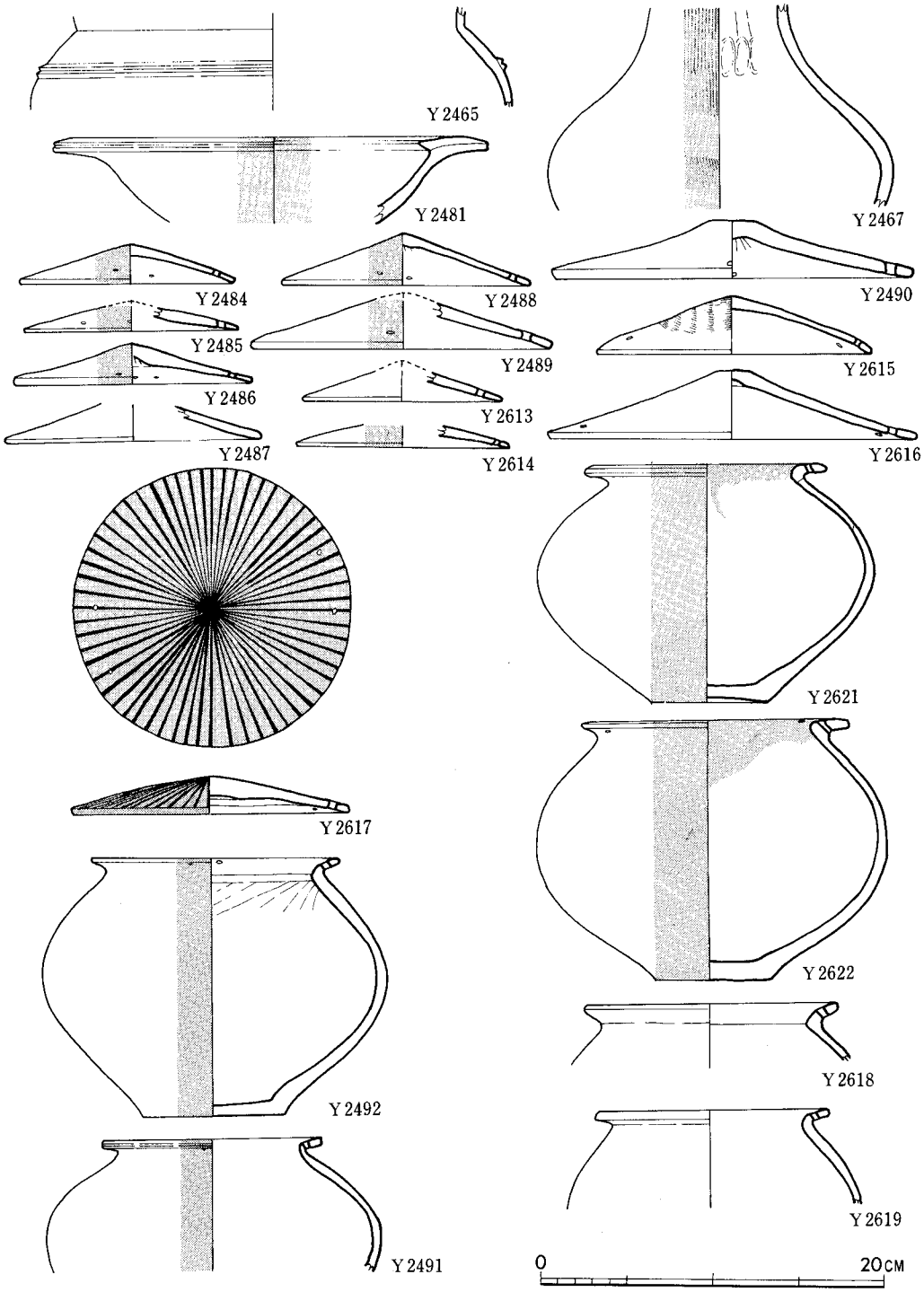


Fig.4・32　J・K－25トレンチ旧河川砂層出土土器実測図(6)

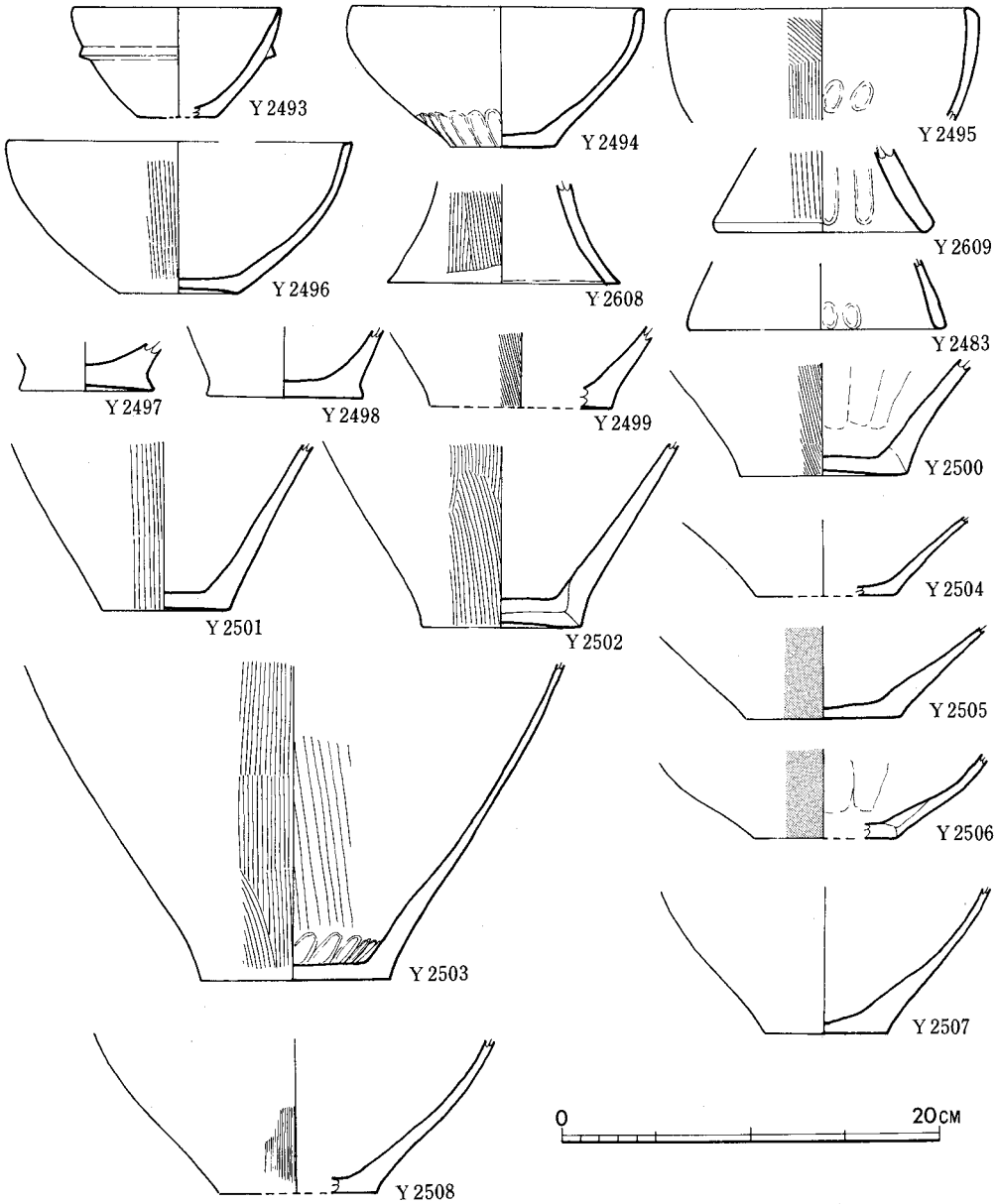


Fig.4・33　J・K—25トレンチ旧河川砂層出土土器実測図(7)

鉢（Y2493～2496）　Y2493は胴部に一条の三角突帯をもつ小形の鉢である。横なで調整。Y2494は横なで調整で、外面底部近くに指なで上げ調整。Y2495はわずかに内彎する口縁部をもつ。外面刷毛目、内面指の押圧調整。口縁周辺は横なで調整。Y2496は底部が上げ底となる。横なで調整で、外面縦刷毛目調整。これらは胎土に砂（Y2493)、石英粒砂（Y2494～2496）を混え、焼成は良好。黒色（Y2493)、淡赤褐色（Y2494)、淡暗褐色（Y2495・2496）を呈するが、Y2496には焼成時の黒変が一部にある。中期後葉。

器台（Y2483・2608・2609）　Y2483は器台の脚裾部であり、内面に指の押圧調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。淡暗褐色を呈する。Y2608・2609も同様に脚裾部である。Y2608は外面縦刷毛目調整。Y2609も外面に縦刷毛目調整で、内面には指のなで上げ調整。Y2609の方が器壁が厚い。ともに胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。暗褐色を呈する。いずれも中期後葉～後期のものであろう。

底部（Y2497～2508）　Y2504～2508は壺、他は甕である。上げ底のもの(Y2497・2499・2502)と、そうでないものがあり、外面に刷毛目調整のもの（Y2499～2502・2508)、内外面とも刷毛目調整で内底面に指の押圧痕の残るもの（Y2503）もある。Y2505・2506は外面丹塗り磨研であり、無頸壺、あるいは袋状口縁の壺の底部であろうか。Y2500・2506の内面には指のなで上げ調整。胎土は石英粒砂を含むものが多いが、精良な胎土をもつもの（Y2505・2506)、砂を含むもの（Y2507）があり、焼成は良い。暗褐色を呈するものが多く、暗赤褐色（2503)、淡暗褐色(Y2507)を呈するものもある。これらはY2497・2498以外は中期後葉のものである。

以上の土器のうち、中期後葉の一群は良好なセット関係を示し、宝台II式の好資料である。

J－26トレンチ出土土器（Fig.4・34～4・37, PL.LIV, LVI～LVIII）

いずれも黒色粘質土層につづく、旧河岸の砂層(第11層)からの出土であるが、Y2510～2514は砂層下部、Y2526・2527・2534は砂層の上部の出土である。

甕（Y2510～2514・2516～2521・2523～2528・2554）

中期前葉（Y2510～2514）　いずれも逆「L」字状口縁をもつ。内側張り出しはほとんどなく、外側の張り出しもあまり強くない。Y2510は口縁下に一条の沈線が巡る。口縁部横なで調整。外面は縦刷毛目、内面上部は横刷毛目調整。外面には煤の付着が認められる。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。黒褐色。Y2511は口縁部横なで、外面は縦刷毛目だが一部横刷毛目、内面は箆での調整。内面には煤の付着が認められる。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。暗褐色を呈する。Y2512は外面縦刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。暗褐色を呈する。Y2513も外面縦刷毛目調整。口縁部は横なで調整。胎土に石英粒を含み、焼成は良い。暗褐色。Y2514は口縁外端に櫛状の工具で縦に刻目が施され、口縁下には一条の三角突帯が巡る。口縁部と突帯貼付け部は横なで調整。外面は縦刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。暗褐色を呈する。

中期中葉（Y2516～2521）　いずれも逆「L」字状口縁をもつが、前葉のものに比較して、

内側の張り出しがみられ、また外側の張り出しも強い。Y2516は口縁外端が下がり、口縁部横なで調整。外面は縦刷毛目調整で、煤の付着が認められる。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良くない。赤褐色。Y2517も外端が若干下がる。外面は縦刷毛目調整。胎土・焼成ともに良好で暗褐色を呈する。Y2518は口縁上面は平坦で、口縁部横なで調整。外面縦刷毛目調整で、胎土に石英粒砂を含み、焼成は良くない。暗褐色を呈する。Y2519も外端が下がり、口縁部横なで調整。外面は縦刷毛目調整で、外面煤、内面炭化物の付着が認められる。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。暗褐色。Y2520も口縁外端が下がる。器面のあれが激しいために調整不明。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。灰褐色を呈する。Y2521も口縁外端が下がり、刻目が施される。口縁下に一条の「M」字状突帯を巡らす。器面のあれが甚しく、器面調整は不明だが内外面とも丹の痕がある。胎土・焼成とも良好で、褐色を呈する。

中期後葉（Y2524・2525・2528・2554・2557）　Y2524は「く」の字状口縁をもち、口縁部横なで調整。外面は縦刷毛目調整で、煤の付着が認められる。胎土は砂を含み、焼成は良くない。黒褐色を呈する。Y2525は逆「L」字状口縁の内端が下がり、「く」の字状に近くなる。胴部が張り、底部径も大きい。外面刷毛目調整の後、丹塗り。一部篦磨研。口縁部は横なで調整の後、内部上面まで丹塗り。外面口縁下には二条の沈線状の篦描きがある。内面底部近くは指の押圧調整。胎土・焼成ともに良好で、丹塗り部以外は灰褐色を呈する。Y2528も逆「L」字状口縁の内端が下がるが、外端も若干下がる。口縁外端には沈線状に凹みがある。器面のあれが激しいために調整は不明。胎土・焼成ともに良好で、暗褐色を呈する。Y2554はY2525と同様な器形の小形の胴部と思われるが、あるいは脚付き鉢かもしれない。一条の「M」字状突帯が巡る。突帯貼り付け部は横なで調整。外面は丹塗りで、縦に棒状の小さな工具で縦に強くなで、暗文を作る。内面は指のなで上げ調整。胎土・焼成ともに良好で、丹塗り部以外は暗褐色。Y2557もY2525と同様の器形の胴部以下である。外面は丹塗り磨研。胎土・焼成ともに良好で、丹塗り部以外は灰褐色を呈する。

後期（Y2526・2527）　ともに「く」の字状の口縁をもつ。Y2526は口縁部がわずかに内彎し跳ね上がり口縁に近い。口縁部は横なで調整。外面は縦刷毛目調整。胎土・焼成ともに良好で、暗褐色。Y2527は胴部が強く張り、最大径は口縁部より大きくなる。器面があれているために、調整は不明。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良くない。赤褐色を呈する。Y2526は後期前葉、Y2527はそれより新しくなるであろう。

壺（Y2529・2530・2532～2535・2549・2556）　Y2530は単純に開く口縁部をもつ。口縁外端は凹む。内外面とも丹塗り磨研で、外面には縦に篦状の工具で強くなでて暗文を作る。胎土・焼成とも良好で赤褐色を呈する。中期中葉。

中期後葉（Y2529・2532・2533・2535・2549・2556）　Y2529は「鋤」状口縁をもつ。口縁外端が下がり、口縁部横なで調整。器面があれているが、外面に丹の痕が残る。胎土・焼成ともに良好で灰褐色を呈する。Y2532は小型の土器でやはり「鋤」状口縁をもつ。口縁外端が下がり、頸部付け根に一条の三角突帯が巡る。器面のあれが甚しく、調整は不明。胎土は石英粒砂を含み、焼成はあまり良くない。灰褐色。Y2533は小形の異形の土器で口縁部を欠く。胴

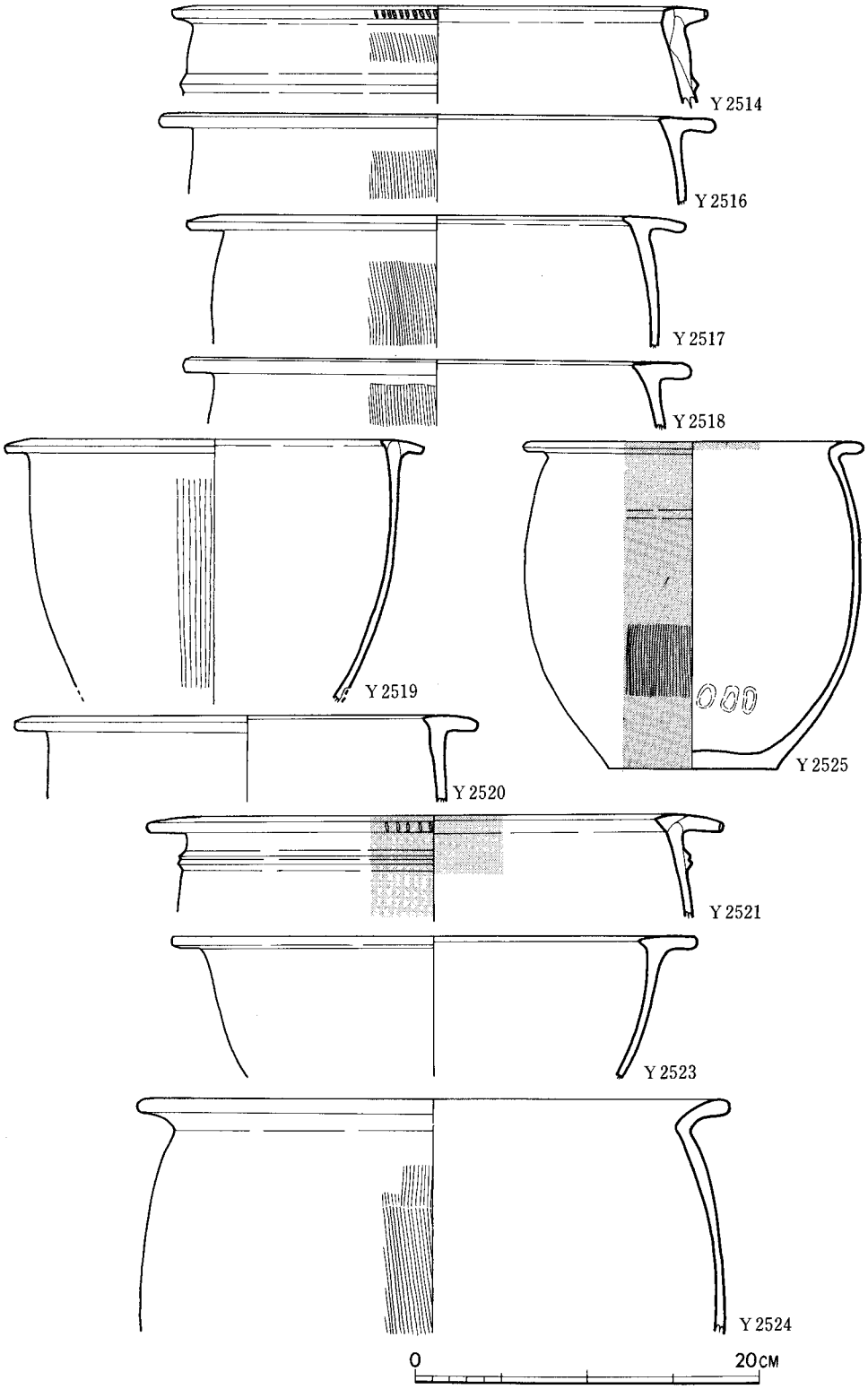


Fig. 4・34　J－26トレンチ旧河川砂層出土土器実測図(1)

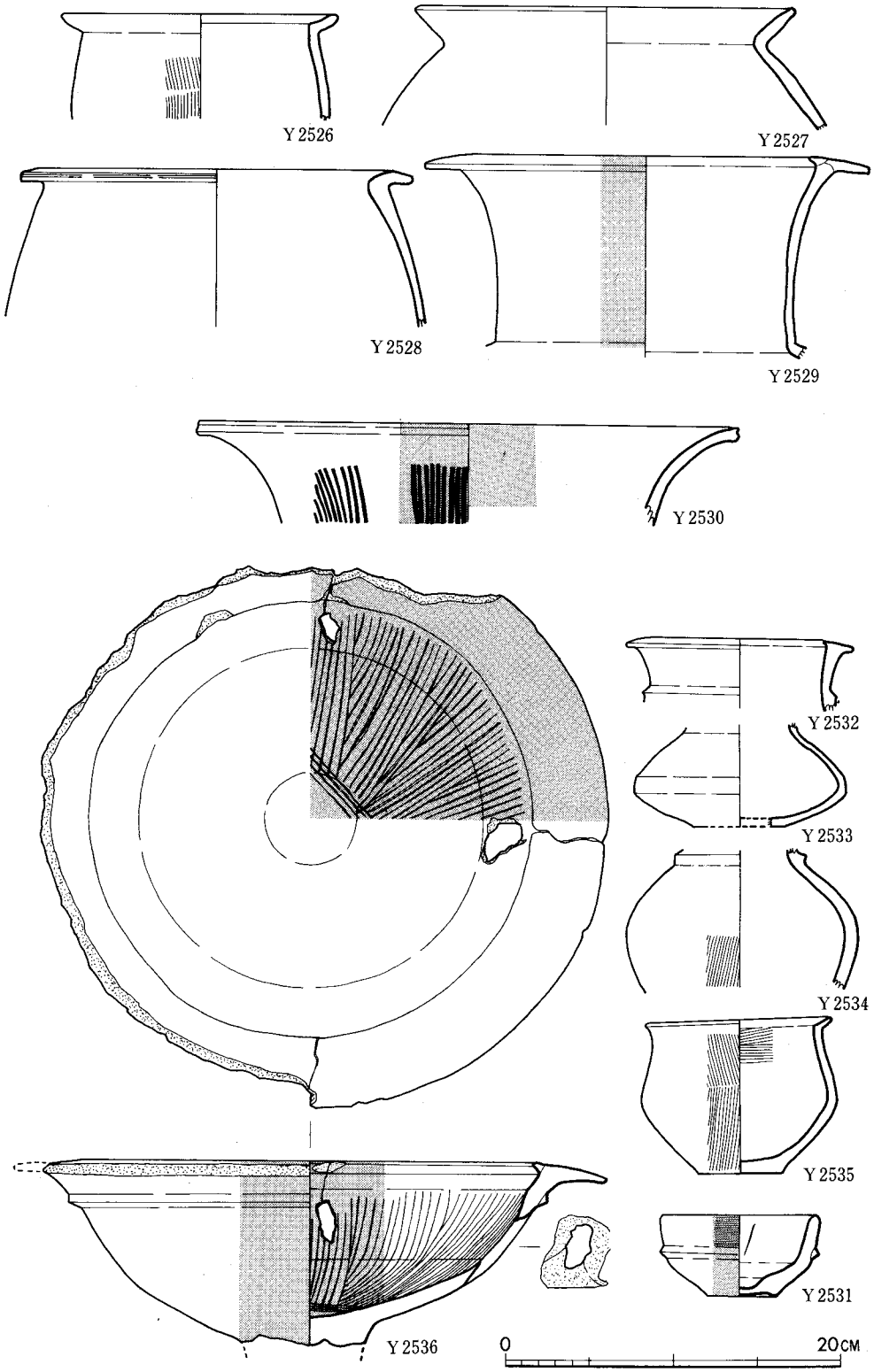


Fig.4・35　J－26トレンチ旧河川砂層および上位砂層出土土器実測図(2)

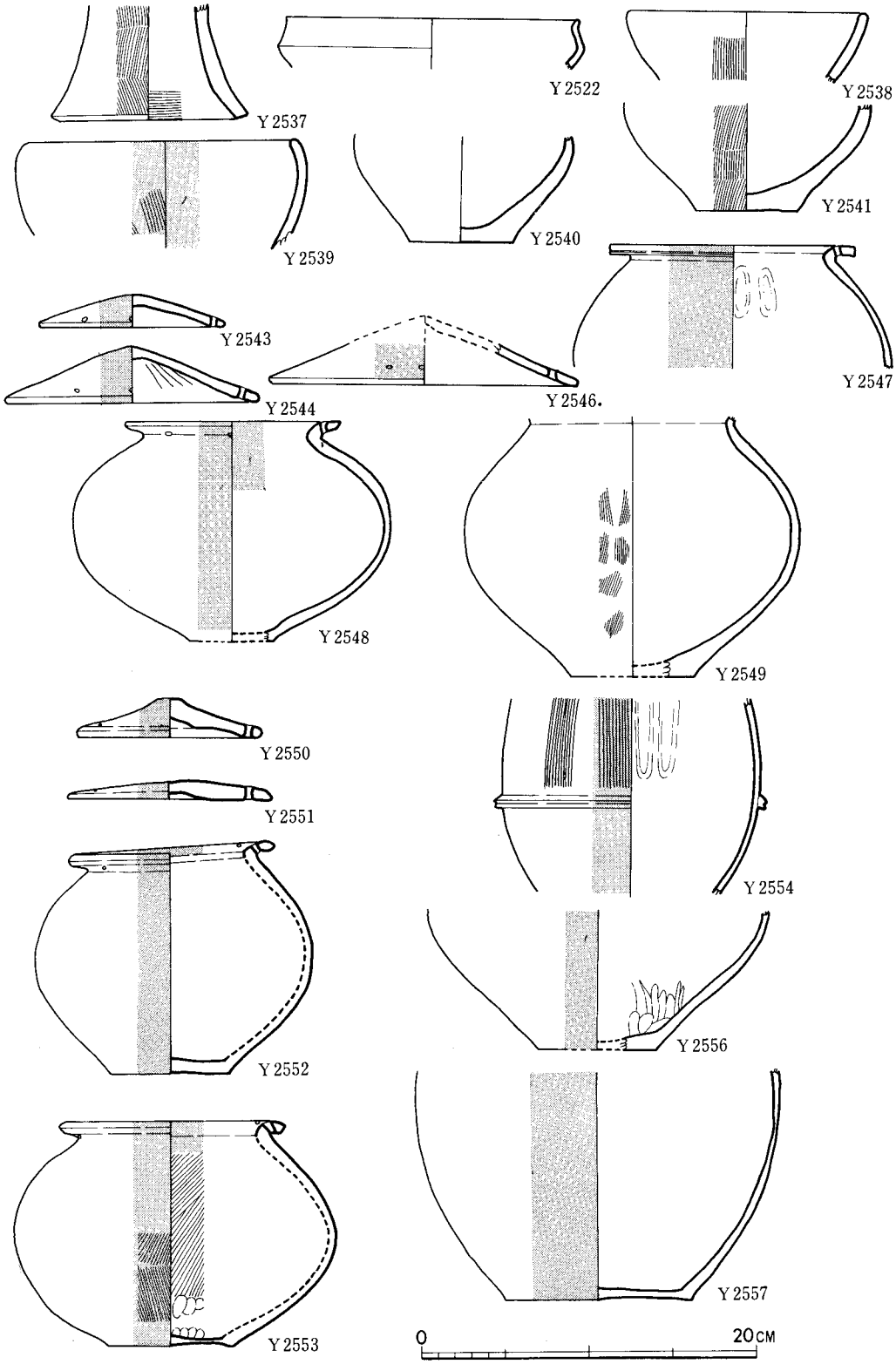


Fig.4・36　J－26トレンチ旧河川砂層出土土器実測図(3)

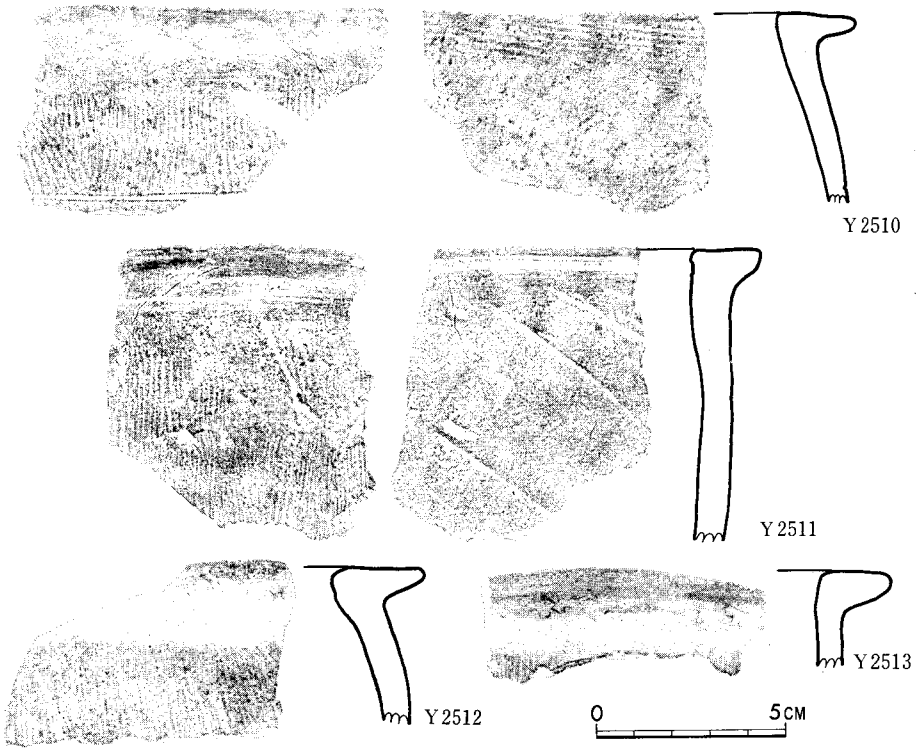


Fig.4·37　J－26トレンチ旧河川砂層出土土器実測図(4)

部はいわゆる算盤玉状を呈する。胎土に石英粒砂を含み、焼成はあまり良くない。淡褐色。Y2535も小形の土器で、J－25グリッド砂層中出土のY2473～2480と同様のものである。口縁は外反し「く」の字状を呈する。口縁部は横なで調整で、外面縦、内面上部は横の刷毛目調整。胎土に砂を含み、焼成は良好。褐色を呈する。Y2549は頸部以上を欠失する。胴部は球形を呈し、外面は刷毛目調整。胴上半はその後横なで調整。胎土に砂を含み、焼成は良くない。暗褐色。Y2556は袋状口縁の壺の底部であろう。外面は丹塗り磨研で、内面底部付近は指の押圧調整。胎土・焼成ともに良好で丹塗り部以外は褐色を呈する。

後期前葉（Y2534）　頸部以上と底部を欠く。頸部付け根に一条の三角突帯を巡らす。外面は縦刷毛目調整。胎土・焼成とも良好で褐色を呈する。

無頸壺（Y2547・2548・2552・2553）　Y2547は口縁部が「く」の字状に外反し、先端は平坦となる。口縁外端は沈線状に凹む。口縁部の穿孔は片側2個、計4個で焼成前。孔の間隔は3.9cm。外面と口縁上面は丹塗り磨研。胴上部内面には指のなで上げ調整痕がある。胎土・焼成ともに良好で、丹塗り部以外は灰褐色を呈する。Y2548も同様の口縁部をもつ。孔の間隔は4cm。口縁部は横なで調整。外面と内面胴上半部は丹塗りで、外面は箆磨研。胎土・焼成ともに良好で丹塗り部以外は灰褐色を呈する。Y2552も口縁部は「く」の字状に屈折する。穿孔は焼成前で孔の間隔は3.3cm。口縁部横なで調整。底部は若干上げ底。口縁部上面と外面は丹塗

り磨研。胎土に砂を含み、焼成良好。丹塗り部以外は淡灰褐色を呈する。Y2553も口縁が「く」の字状に屈折するが、口縁外端は若干下がる。口縁部横なで調整。孔は焼成前で間隔は 2.7cm。底部は上げ底で、外面は縦刷毛目調整のあと丹塗り磨研。口縁上面と胴内面上部は丹塗り、それ以下は斜めの刷毛目調整で、底部近くには指の押圧調整がある。胎土・焼成とも良好で、丹塗り部以外は灰褐色。これらの土器はいずれも中期後葉のものである。

蓋（Y2543・2544・2546・2550・2551）　いずれも無頸壺であろう。Y2543は外面丹塗りで、焼成前穿孔の小孔は間隔3cm。内面はしぼりの痕があり、裾面には横なでで調整。胎土・焼成ともに良好で、丹塗り部以外は褐色。Y2544は内外面とも丹塗りで、内面は箆の調整。外面は放射状に箆磨き。小孔の間隔は3.3cm。胎土・焼成ともに良好で、赤褐色。Y2546は大形の蓋で、外面丹塗りで箆磨研だが、裾端までは塗っていない。小孔の間隔は2.5cm。内面は横なで調整。胎土・焼成ともに良好で灰褐色を呈する。Y2550は器壁が厚い。外面は丹塗り磨研。内面は横なで調整。小孔の間隔は2.1cm。胎土・焼成ともに良好で、丹塗り部以外は灰褐色。Y2551も器壁が厚い。器高は低く、内面は指で押さえる。外面丹塗り磨研で、内面裾部は横なで調整。小孔の間隔は 2.2cm。胎土は砂を含むが、焼成は良好で、丹塗り部以外は灰褐色。これらも中期後葉のものであろう。

鉢（Y2523・2531・2538・2539・2685）　夜臼式土器（Y2685）　短く外反する口縁と、逆「く」の字状に反転する胴部をもつ。器面のあれが甚しいために、調整は不明。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。暗褐色。

中期中葉（Y2523）　逆「L」字状口縁をもつ鉢だが、甕に近い。器面があれているために調整不明。胎土は良好で、焼成も良い。白味を帯びた褐色を呈する。

中期後葉（Y2531・2538・2539）　Y2531は小形の鉢で、胴部に一条の三角突帯が巡る。底部は若干上げ底。外面の突帯より上部は横刷毛目調整で、その後丹塗り。内面は横なで調整。胎土に砂を含み、焼成は良好。淡褐色を呈する。Y2538は口縁部横なで調整。外面は縦刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成はあまり良くない。暗褐色。Y2539は内彎する口縁をもつ。内外面とも丹塗りだが、外面は刷毛目調整もみられる。胎土・焼成ともに良好で、赤褐色。

高坏（Y2536）　高坏の坏部である。「鋤」状口縁を有し、口縁外端が下がる。口縁下に一条の三角突帯を巡らす。内外面とも丹塗り磨研の土器で、内面には小さな棒状の工具か粗い櫛状の工具で強くなでて、放射状あるいは斜めに暗文を作る。内面には二ヶ所に接合痕が残る。この土器は脚部以下と口縁部外側張り出し部の大半を打ち欠かれ、また胴部に約90°の間隔で二ヶ所を内部から穿孔している。祭祀用のものであろう。胎土は若干の石英粒砂を含むが、精良な粘土であり、焼成は良い。赤褐色を呈する。中期中葉～後葉のものであろう。

器台（Y2537）　器台の下半部である。外面は縦刷毛目、内面は裾部横刷毛目調整で、しぼり痕もみられる。胎土・焼成とも良好で、褐色を呈する。

底部（Y2540・2541）　ともに壺か、鉢の底部であろう。Y2540は外面に煤の付着が認められる。胎土・焼成ともあまり良くなく、黒褐色を呈する。Y2541は外面に縦刷毛目調整。胎土・焼成ともにあまり良くなく、褐色を呈する。ともに後期前葉のものであろう。　（沢）

ii)　木製品（Fig.4･15, PL.LXV）

旧河川砂層中には弥生時代中期の土器とともに自然木・加工木が埋没していた。これらはJ・K－25トレンチとＪ－26トレンチで出土し、Ｊ－23トレンチでは検出されていない。

Ｊ・Ｋ－25トレンチでは、旧河岸に打たれていた杭（W2195～98）と流木（W2202・04・05・07～10）とである。旧河岸の杭はいずれもクリの太い丸木杭で、焼けている。W2196は残長51.5㎝・直径 7.6㎝で、先端部を削って三面をつけるが、他の一面は削らずに原材の表面をそのまま残す。削った部分も多少焼けているが、上部はひどく焼けて、表面から５～７㎜までは完全に炭化している。W2198は残長52.1㎝・直径 9.8㎝で、先端を削ってとがらす。削り面は多少焼けているだけだが、上部はひどく焼けている。これらの杭は原木のまま焼いてから、先端を削ったものらしく、削り面の稜は明瞭である。削り面が焼けているのは、原木を焼いた時に、内部まで及んだ炭化の痕跡であろう。

砂層中の流木には自然木の他に裂いて角材としたものも含まれている。

Ｊ－26トレンチでは多数の自然流木と少数の加工木が出土した（W2211～22・34～47)。自然流木の樹種はエノキ・イヌビワ・タブノキ・ヤナギ・シイ・ムクロジ・ウワズミザクラ・カシである。加工木の樹種はクリ・マツである。

W2211は直径16㎝ほどの丸木を半割した（Ｂの方法）材で作った矢板状の杭である。側縁の片側を長さ70数㎝にわたって、上から下へ削ってとがらす。削り面には焼けた部分がみえる。上端は本来の形状を示すと思われ、原材を伐ったあと、削って（下から上へ）ととのえてある。全長 113.7㎝・幅15㎝・厚さ 7.2㎝、樹種はクリ。

W2212は丸木杭で、上部に７本の小枝を伐り落した痕が残る。先端を削って四角にしている。木皮が一部に残る。樹種はマツ。　（後藤）

3　弥生時代後期の遺構と出土遺物

(1)　J・K－25トレンチの畦状遺構（Fig.4・39, PL.XLI～XLIII）

J・K－25トレンチ西部砂層中から、畦状遺構、およびそれとは時期を異にする杭列が、多量の土器・木器などの遺物と共に検出された。

畦状遺構は西壁に近い北壁中から出現し、やや東に湾曲し南壁にのびる複数の杭列とそれを覆う樹皮から成立っている。方向は北西から南である。西よりの2列の杭列（幅30～40cm）と100～140cmの間隔をもって東に位置する1列の杭列が対となり、この間に樹皮を敷きつめ、畦状遺構を構築している。いずれの列の杭も40～50cmの間隔をもって打ち込まれ、トレンチ北壁から南壁へと列をなすが、南壁近くに至ってその列は明確さを失っている。この遺構の一番西寄りの杭列中央部附近から、さらに一列の杭がやや西に張り出すようにして南壁まで延びている。この杭列の間隔はまちまちであるが、南壁近くでは10～20cmというかなり密接した状態を示している。この杭列がはじまる中央部附近から南壁に至る場所は、畦状遺構を作り出していた杭列が序々に不明確になってゆく場所でもあり、遺構中に土器・木器・木片などがはまり込んだように多数出土する。またこの杭列の南附近から、ほぼ西の方向に約50cmの間隔で2本の杭が打ち込まれている。わずか1m程で杭列とはいい難いが、この2本の杭列と畦状遺構が作り出す「入江」のような三角地区には、多くの木々が重り合って埋没している。

東―西断面を見ると、これらの遺構が灰白砂層上に存在し、各々の杭列間には砂混りの粘質土が堆積していることがわかる。多くの杭は頂部が西、先端が東という斜めの状態で灰白砂層の中に打ち込まれている。樹皮は杭列間の粘質土層の上、杭の頂部近くに敷かれているが、一部は杭の間にもぐり二重に敷いたようになる場所もある。また、畦状遺構から部分的に東側にはみ出る樹皮もある。断面b－b′附近からは多くの遺物の出土を見た。

畦状遺構の西側は、粗・微の差はあるがほとんど一面が砂層で、多くの木々がほぼ水平に横たわっている。三又鍬などの木製品、銅鏃などもここより検出された。

以上の状況から、この畦状遺構は西側に流れる〝河〟に対して、もともと北壁から延びる3列の杭列によって、汀線を画する役割をもって築かれたものと考えられる。しかしこの畦状遺構は南壁近くで一度「流れ」によって壊され、土器・木器などの流入を見たと思われる。それが南壁近くで杭列が不明瞭なのと、遺物の多い原因であろう。この事態に対処するために、西壁寄りに中央部から始まる新たな杭列を作り、畦状遺構の補強を計ったものと考えられる。畦状遺構から出土した土器は弥生時代中期後葉から後期前葉の器形形態を示し、流れ込みがあった事を考えれば、この遺構自体の時期が弥生時代後期前葉に比定できることを示唆している。

畦状遺構の東側に位置する杭列は、杭頂々標高が7.45m前後にあり、畦状遺構の杭頂 7.7～80mにくらべ、30～40cm低い位置にある。北壁附近には杭は見当らず、畦状遺構のほぼ中央部附近から南壁まで東南の方向に4mにわたり、8本の杭が50～ 100cmの不定間隔で打ち込まれている。この杭列と同標高の西側には、畦状遺構の下を掘らなかったこともあってほとんど遺

物を見ないが、東側には前述の旧河岸砂層出土土器群に含まれる土器片が出土する。しかし、その出土標高はこの杭列とほぼ同じものもあるが、それより深いものもあって、この杭列の時期が、旧河岸出土土器群と同じ中期後葉とはいえず、それより遅れるとみるべきである。畦状遺構より深く埋没しているこの杭列は、畦状遺構に先行することは明らかである。したがってこの杭列は、中期後葉の土器群を含む砂層が堆積したのちに設けられ、後期前葉の畦状遺構構築前に埋没したと考えられる。このことは、旧河川の埋没が急速に行われ、それにともない旧河岸が西方へ移動したことを示すと推定される。（浜石）

(2)　J・K－25トレンチ畦状遺構出土遺物

a　土　器（Fig.4・39、4・40、PL.LIX）

甕（Y2582～2592・2655～2658）　Y2655は口縁が丸味をもって外反し、口唇がやや肥厚している。口径は33.4cmで黄褐色を呈し、外面には煤の付着が見られる。胎土中には多量の砂粒を混え、口唇部付近に横なで、外面に縦刷毛で器面調整を施しているが、軟質で焼成そのものは良いとはいえない。中期後葉のものであろう。

Y2582～Y2592・Y2656～Y2658の土器はいずれも後期初頭から前葉にかけての時期に位置するものであるが、一概に「く」の字形口縁と云ってもその器形形態にはかなりの変化がみられる。

Y2582は「く」の字口縁下に三角突帯をまわすもので、内面外反する場所に明確な稜は見られず、胴部は丸味をもって張っている。胎土には砂粒を多く混え、焼成良く、灰褐色を呈する。外面突帯下に縦刷毛目、内面外反する部分に横刷毛目調整、その他はなでによる器面調整を施している。Y2583・2586・2588・2589は形態的に見て典型的な「く」の字口縁を持つ甕であるといえよう。Y2583は口縁上面が丸味をもつように外反し、その先端は平坦になっている。口唇には一条の凹みを巡らしている。胎土中には多くの砂粒を混え、それらは器表に浮び出ている。内面に軽いなでと斜の刷毛目による調整が見られるが、外面は煤が付着している。焼成は良好で灰褐色を呈する。Y2586は明確な稜をもって外反する端正な口縁を有する。内面口縁下と外面胴部にまばらな刷毛目調整を施しているが、内面の刷毛目はその上をなでて消している。外面は全体に厚い煤が付着する。1～3㎜の多量の砂粒を胎土中に混え、焼成は良好、煤の付着しない内面は平滑で灰褐色を呈する。Y2588は内面に明確な稜をもつものの、Y2583・2586のように口縁の外反の角度が大きくない。内外面とも刷毛目による器表調整があるが、外面には煤が付着している。胎土に砂粒を多く混え、焼成の良い赤褐色を呈する土器である。Y2589も余り大きくない角度で稜を作って外反する口縁をもち、口唇は丸味を滞びている。灰褐色の器表外面には粗い縦刷毛目、内面には稜の直上に斜の刷毛目、それより下部は方向不統一のなで調整を行なっている。砂粒の少ない胎土で、焼成は良好、堅緻な作りとなっている。

Y2584・2585・2587・2591・2592は、ほとんど張りをもたず直立している胴部から口縁部が外反したものである。口縁の外反の度も先にあげたふたつの類と較べ弱い。Y2584は口唇が肥

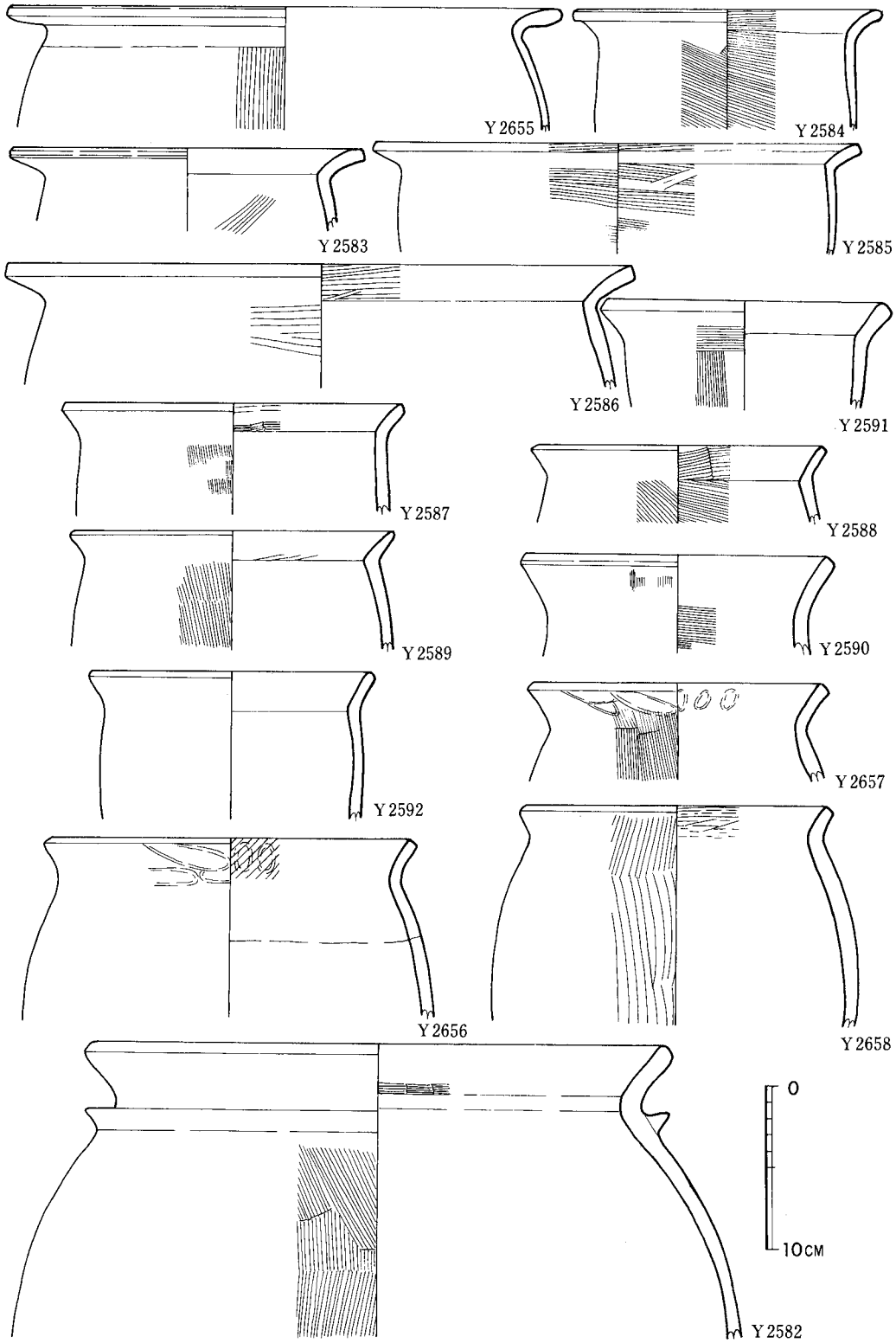


Fig.4・39　J・K－25トレンチ畦状遺構出土土器実測図(1)

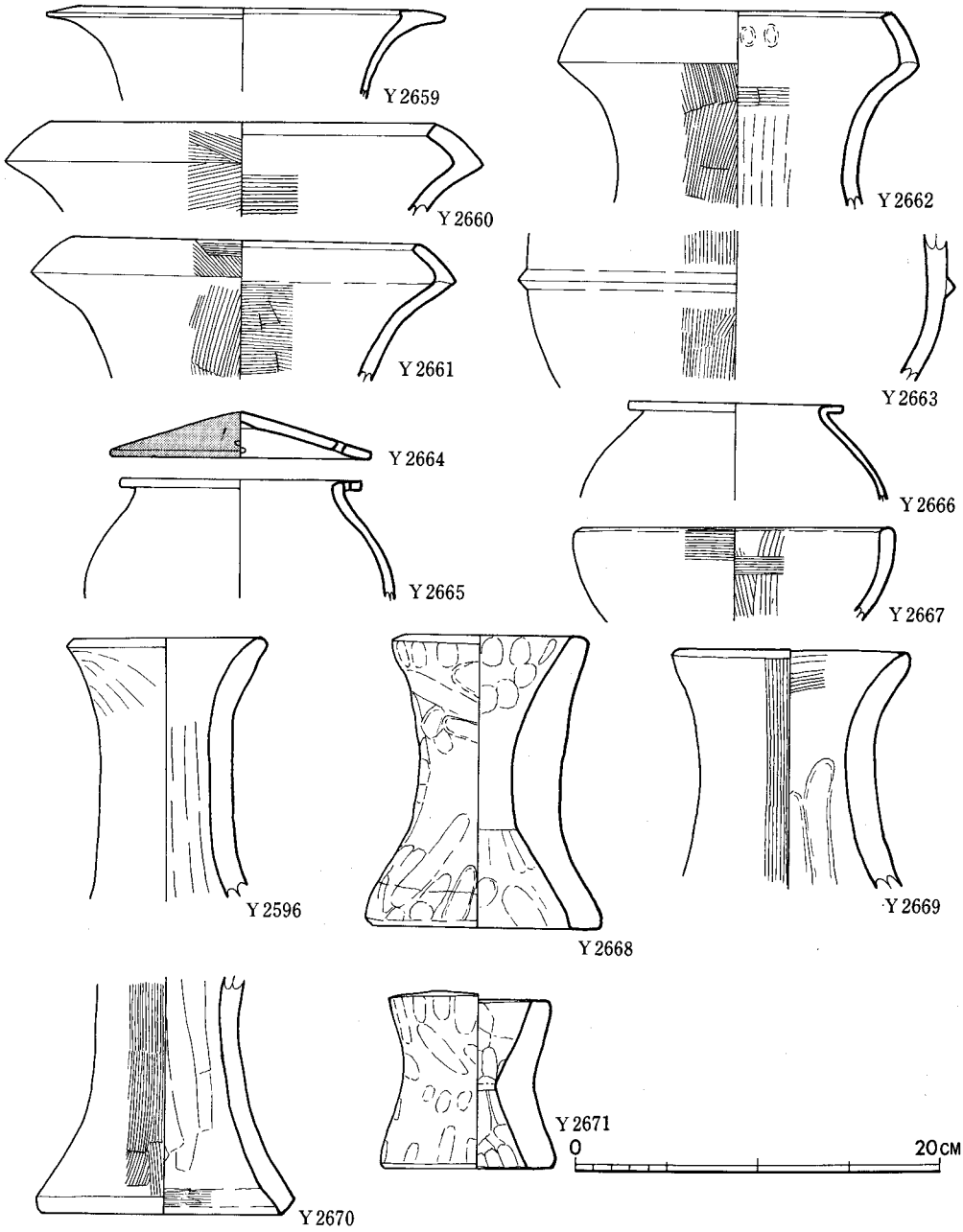


Fig.4・40　J・K－25トレンチ畦状遺構出土土器実測図(2)

厚し丸くなっており、外反部には明瞭な稜がない。内外面とも刷毛目で器面調整を行なっているが、外面には煤が付着している。多量の砂粒を混えた胎土で、焼成良好、赤褐色を呈する。Y2585は極めて薄い器壁の胴部から、はっきりとした稜をもって口縁が外反し、口唇上端は鋭角をなす。内外面とも刷毛目による調整を施しているが、内面外反した真上の部分は刷毛目をなで調整で消している。胎土には多量の砂粒を混え、焼成良好。外面は全面厚い煤に覆われ、内面は暗黄褐色をなす。Y2587は稜がはっきりとしないで外反する口縁を有する。外面には斜に刷毛目、口縁内面には粗い横刷毛目調整が施してあるが、器表面は凹凸が著しい。多量の砂粒を混えた胎土で、焼成不良、灰褐色を表わす。Y2591は胴部の一番張った所が口縁下にあり、底部に向ってすぼまると推定される。口縁外反部には明確な稜をもたない。煤の付着した外面には強い箆なでの下に細かいなで状の縦刷毛目が施される。内面はなで調整。灰褐色で焼成良好。胎土には砂粒を多く含む。Y2582は胴部内面がゆるやかな張りを示すが、ほとんど直立しているといえ、稜を持たず口縁が外反する。内・外面ともなでによる器面調整を行っている。胎土は少量の、それもほとんど1㎜以下の砂粒を混えただけの良質なもので、焼成良好である。外面には煤を付着しているが、全体的に暗灰褐色をなす。Y2590は、「く」の字口縁的な感じを想起させるものの、外反部がゆるやかな丸味をもち、口縁部と胴部の区別が判然としなくなっている。外面は剝落がひどく、一部縦刷毛目が残る。内面はなで状の横刷毛目で器面調整を行っている。灰褐色を呈し、焼成良好。胎土には砂粒を多く含む。Y2656からY2658は「く」の字口縁といわれるものであるが、ともに内面の折り返し部分には稜がつかず丸味をおびた感じになっている。Y2656とY2657は外内面とも口縁下に指による押圧調整を行い、その後横なで調整を施している。さらにY2656は内面のその部分に丹らしいものの痕跡が見られる。Y2658は外面に粗い刷毛目調整を行なっているが、器表は凸凹が著しい。それに対し内面は、口唇下に粗い刷毛目調整を施しているものの、その下の部分は箆なでにより平滑な状態になっている。Y2656とY2657が黄褐色、Y2658が暗褐色を呈し、3片とも胎土中にφ1～3㎜、大きいものではφ5～10㎜ほどの砂粒を多く含む。焼成はY2656が不良、残りは良好である。

壺（Y2659～2663）　Y2659は口縁が頸部から朝顔状に開く広口壺で、口縁そのものは内側わずかに張り出し、外側に向って若干傾いている。褐色の器表は磨滅が著しく、調整痕は見られない。胎土には砂粒を多く含み、焼成は不良である。この種の口縁は中期中葉の宝台Ⅰ式に見られるものであるが、この遺構にあっては時期的に少し下る可能性がある。Y2560・2661・2662の外側に稜をもつ袋状口縁をもつ壺は二重口縁壺と呼ばれる。いずれも灰褐色の器表をなし、刷毛目で内外面に調整を行なっている。このうちY2661は外面の折り返した口縁の上部に丹の痕跡が見られる。Y2662は内面口縁下に指の押圧調整痕があり、その上を細かい刷毛状のものでなでを施している。頸部内面にはしぼり痕らしいものがある。3片とも胎土に多くの砂粒を混え、焼成は良好である。Y2663は一条の三角突帯を巡した壺の胴部であり、縦刷毛目で外面を調整し、内面は下から上へ向って箆なでを行い、その上に縦なでを施している。砂粒を多く混えた胎土で、焼成は良く淡い灰褐色をなす。類例は少ないが、胎土・色調からみてあげたような袋状口縁をもつ壺形土器の胴部に当るものと考えられる。後期初頭の時期に位置づけ

られるものである。

無頸壺（Y2665・Y2666、PL.LIX）　Y2665は玉葱状に胴部が張り、短い口縁が外に反る。口縁には2.3cm離れて一対の穿孔がある。表面は剝落がひどく灰褐色を呈するが、外面口縁下に丹らしい痕跡が見られる。φ1～2㎜の砂粒を少し混えた胎土で焼成は良くない。Y2666は短い口縁上部が平坦で穿孔がない。精良な胎土を用いた焼成のよい壺で、内外面ともなで調整を施し、暗灰褐色をなす。中期中葉～後葉のものであろう。

蓋（Y2664、PL．LIX）　Y2664は無頸壺の蓋である。丹塗りの外面の傾斜に垂直に2孔が、約3.9cmの間隔をもって焼成前にあけられている。内面なで調整で頂部は押さえで凹みがみられる。精選された良質の胎土を用い、焼成もよく堅緻である。内面は灰褐色をなす。無頸壺と同時期であろう。

鉢（Y2667）　直立した口縁がゆるやかに平底の底部に収束してゆく浅鉢と考えられる。口径16.8cmを計り、外面口縁下はていねいな横なで調整。内面は深く粗い刷毛目調整後横なでを部分的に施し器面調整を行っている。多量の砂粒を混えた胎土で、焼成は良好、暗黄褐色を呈する。後期初頭に比定出来よう。

器台（Y2596・2668～2671、PL.LIX）　器台は表面調整法によって大まかに三つに分けられる。Y2668・2671に見られるように、指押えとなで調整によって手づくねの感じを与える器壁の厚さが一定しないものと、Y2669・2670に見られる外面に刷毛目調整を施し、壁厚がほぼ一定しているものと、そのどちらでもないもの（Y2596）がある。Y2596は外面はなで調整、内面にはしぼり痕が見られる。胎土は砂粒を含み、焼成良好、暗褐色を呈する。Y2668は器高16.2cm・上径10.6cm・下径16.4cmの灰褐色をなす器台である。ほぼ中位にくびれ部をもち上面に向っては厚みを減すようにゆっくりと外反し、下面に対しては、器壁が薄くなり稜をもって外反する。中央くびれ部内外面が、なでによって平滑になっているのを除けば、上部・下部とも指の押圧によって器面は凹凸の度が著しい。胎土中には砂粒を混え、焼成が良くないためかひび割れがはなはだしい。外面のくびれ部より少し上から、底部に向って焼成時のものとみられる黒変部がある。Y2691は器高9.6cm・上径8.6cm・下径11.8cmの小形の器台である。中にくびれ部があり、ほとんど同じ角度で上面に向ってやや薄く、下面に向ってはそれより厚く、ゆるい稜をもって外反する。内外面とも指による押えとなで調整が見られる。φ1cm以上のものも含め多量の砂粒を混え、焼きもよくない。そのため器表には指の調整による凹凸と内側にはひび割れが多く見られる。外面とも灰褐色をなす。Y2669は上部が残っているだけだが、くびれ部は上位にあり、器壁はほぼ一定の厚さを保っている。外面は粗い縦刷毛目、内面上端付近は粗い横刷毛目、くびれ部より下は指なでで器面調整を行っている。胎土にはφ4～7㎜の多量の砂粒を混え、焼成が悪いため、くすんだ黄褐色の器表にはひび割れが多い。

Y2670は器台の底部であるが、原形は中位にくびれをもった細手の器台をなすものであろう。ほぼ厚さの一定した器壁の表面には粗い縦刷毛目の調整が施され、凹凸のある面を作っている。内面はくびれ部下部より上部に向って箆なでが見られ、内面全体に横なで、特に下端には強い横なでによる調整が施されている。φ5㎜以上のものを含め多量の砂粒を含むが、焼成は良く、

赤味を帯びた褐色を呈する。この器台は外面にも部分的ではあるが煤の付着が見られる。この調整の違いによって明確な時期差があるとは考えられず、一応ここでは中期後葉から後期前葉にかけての時期に比定しよう。　（浜石）

b　銅鏃（Fig. 4・41、PL.LXII）

K－25トレンチ畦状遺構のやや西寄りで出土した。長さ3.8cm・最大幅0.9cm・厚さ0.35cm・茎の長さ 2.1cm・最大幅 0.7cm。鎬は直線ではない。茎の片面は凹んでいる。茎には樹皮状のものが巻かれており、すき間の無いことに疑問は残るが、箭に装着するためのものと推定される。この銅鏃は他の出土遺物より、弥生時代後期のものと考えられる。　（沢）

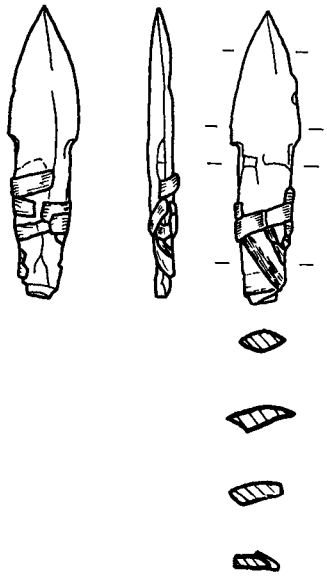


Fig.4・41　J・K－25トレンチ畦状遺構出土銅鏃実測図(1/1)

c　木製品（Fig.4・42～4・46、PL.LXIII～LXVI、Tab. 4・5）

畦状遺構出土の木製品は、遺構に用いられた杭と農耕具・生活用具にわけられる。

農具（Fig.4・42、4・43、PL. LXIII）

W2251は又鍬である。刃先端部は失われているが、ほぼ本来の大きさを示す。畦状遺構内に埋まっていたためか、片側の刃部はく字形に曲っている。現長58.7cm・最大幅13cm。頭部は、頂部が三角形になり、柄孔付近では 両縁がほぼ平行し、(幅 6.5cm～ 7.3cm)、 刃部近くで丸くふくらみ幅がひろがる。頂部から 7.2cmのところに方形の柄孔がある。柄孔部分に隆起はない。柄孔は約5×3.5cmで傾斜してあけられ、傾斜角は約58°である。頭部の厚さは中心線上で約2cm、両側へ少し薄くなり、側縁で1～ 1.3cmになる。側縁はていねいに削る。柄孔から 6.5cmのところで、刃はコ字形にわかれる。刃部幅は頭部側で4～5cm、中央部で4～ 4.5cm、先端部で3.7～4cmで、右側の方が幅がひろい。厚さは頭部側から先端部へ薄くなる（1.7～0.7cm)。刃の内側縁は両面から削り、断面三角形になる。刃部の片面には中央に稜があり、そこから両縁側へ傾斜し薄くなる。刃部上側の両縁にはV字形の抉り込みがある。その用途は不詳。表裏面とも

削り痕はよく残っていない。

W2252は三又鍬である。刃部のうち2本は一部しか残らないが、多り1本の刃部は本来の長さをほぼとどめていよう。残長44.3cm。頭部は細く(幅6.5cm前後)、頂部は丸く仕上げる。柄孔は 5.5× 3.4cmの方形。傾斜角は40～50°。頭部・刃部とも側縁は斜めにそいでいる。頭部の厚さは 2.3～ 2.4cm。刃部内側縁は両面から削って、断面三角形になる。長さ 2.1cm、幅 3.3～ 2.6cm・厚さ 1.5～ 1cm。削り痕はよく残っている。工具を動かした方向は必しも一定でない。刃部の両面には二列の削り痕があり、中央が軽い稜をなす。

W2253も三又鍬であるが、腐蝕がはなはだしい。全長42.8cm。頭部推定幅6cm。頂部は丸く仕上げ、頂部から 4.5cmに4.5×3cmの柄孔があく。傾斜角は約55°？。刃部両端幅推定約14cm。刃は、幅2～1.3cm、厚さ1～ 1.5cm。加工痕はほとんど残っていない。

W2411は鍬もしくは鋤の刃部先端破片であろう。片面は裂けて失われているが、加工痕はよく残っている。幅1.8cm・厚さ1.7cm以上・残長 5.1cm。

以上すべて樹種はカシ。

生活用具と用途不明木製品（Fig.4・42、4・43、PL.LXIV）

W2250は杵の破片である。残長36.1cm・直径 9.2cm。太い材を縦に4分割し、そのひとつから作ったものである。中央部が細くなる。(推定直径4～4.5cm)。ほぼ中央で折れたとみられ、全長は約70cmになろう。全体に腐蝕が甚しく、加工痕は不鮮明である。樹種はカシ。

W2282は直径7cmほどの丸木の一端に加工した用途不明木製品である。下端部を長さ約8cm・厚さ2cmほど裂いて除き、それによって生じたa面は刃幅のひろい（少くとも6cm以上）利器を、長軸に直角に押し下げて削りととのえる。b面は裂いたままで、その時に生じた隆起部を残す。c面は斜めに削り、(削り面が四つある）d面は垂直に削る。e面は軽く削り、縁をななめに削り落す。f面は利器を長軸に直角に何回も押し下げて削る。g面は上方から削って四面をなす。またg面の両縁も少し削る。その他の加工痕は、上方から斧のようなものを打ち込んだ痕が本体下部に2ヵ所、上部に1ヵ所ある。一部に木皮が残る。用途不詳。樹種はシイ。

その他にカシで作った木製品小片2点がある。W2412は残長10.6cm・幅5.7cm・厚さ0.6cmで、両面は裂いたままたが、両縁は削って丸味をもつ。W2413は残長 5.4cm・幅4cm・厚さ 1.4cmの板材で、両面と側縁をていねいに削っている。両者ともどのような木製品の一部なのか明らかでない。

杭（Fig.4・44～4・46、PL.LXV、LXVI）

杭は打込まれた状態で出土したものの他に、遺構周辺で倒れたものもあった。自然流木としたものの中には先端部の失われた丸木杭も含まれていよう。

杭には、最初から杭として作ったものと、建築材とみられる材を杭に転用したものがある。

W2302は丸木杭である。上部は腐蝕が進んでいるが、その下は木皮が残る。木皮部分の下は長さ60cmあまりにわたって削っている。上部の削り面は相当長く、削り面はきれいである。下

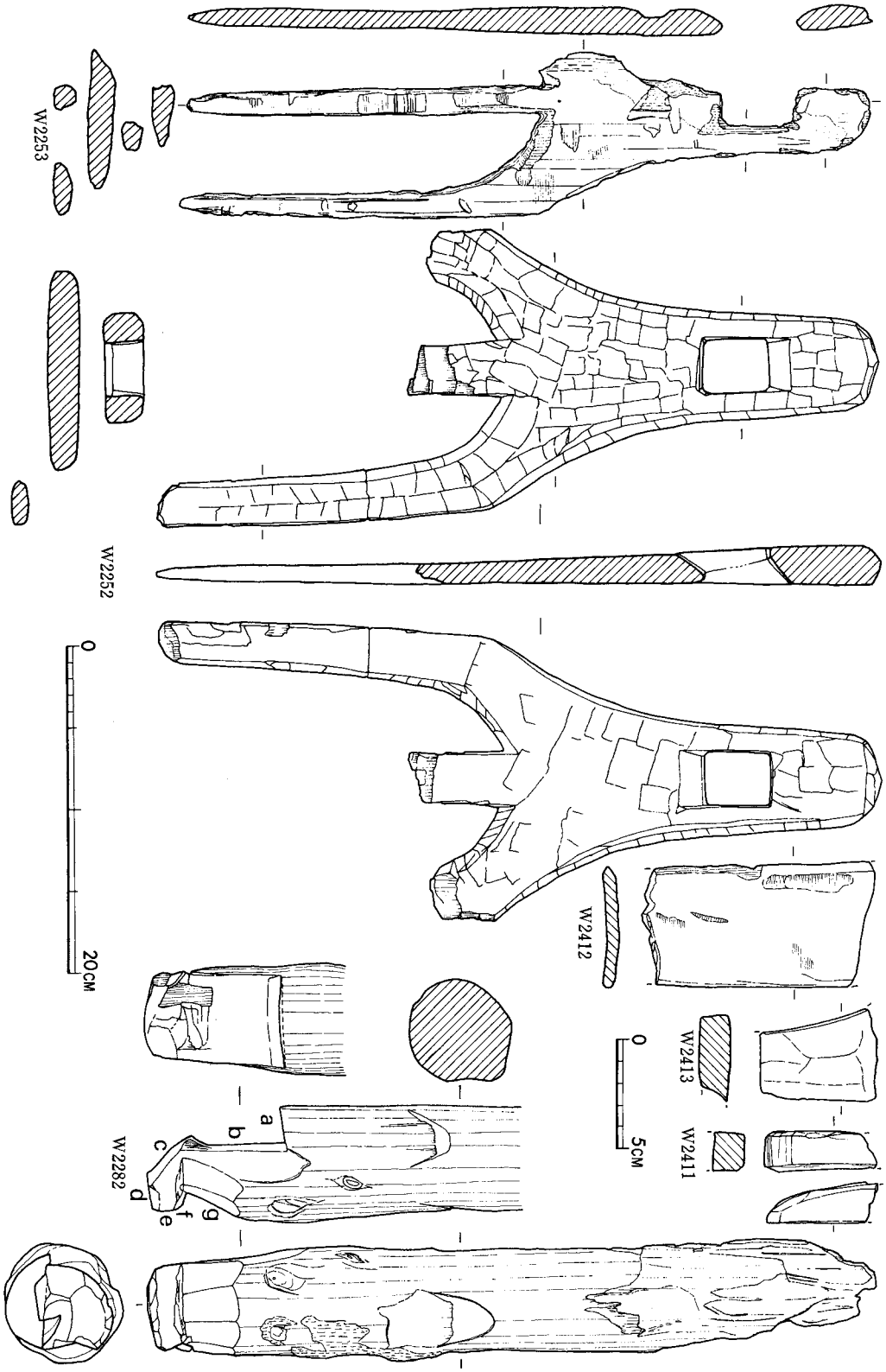


Fig.4・42　J・K−25トレンチ畦状遺構出土木製品実測図(1)

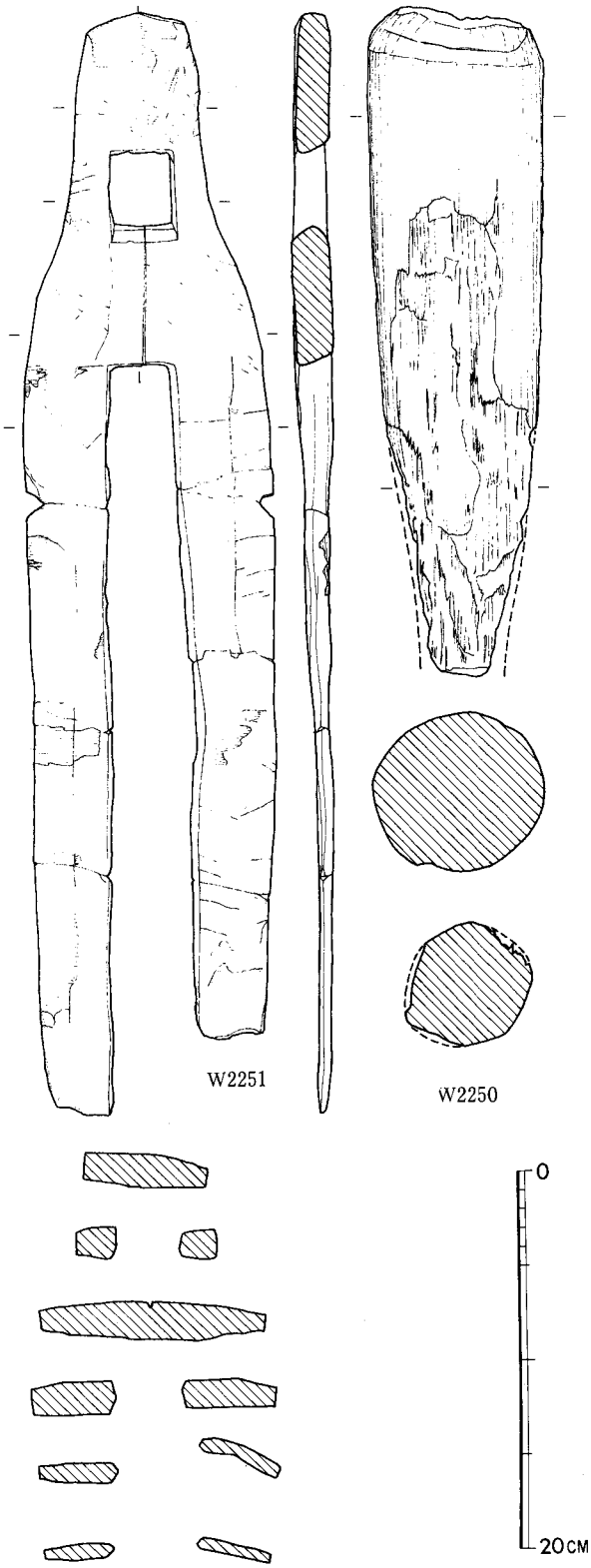


Fig.4・43　J・K－25トレンチ畦状遺構出土木製品実測図(2)

部はやや細く削ってとがらす。残長91.4cm・直径6.3～7.1cm、樹種不明。

W2317も丸木杭である。先端部のみ削りとがらせる。残長87.3cm・直径 8.5cm。樹種はアワブキ。

W2272は直径約 6.5cmの丸木を半割した材（Bの方法による）の先端を削る。先端削り面は三面あり、一面に原木面（a面）を残す。残長65.7cm・幅 6.4cm・厚さ 3.7cm。樹種はシイ。

W2257は直径約7cmの丸木からD_1の方法で得た材を用いる。ただし、多くのD_1方法で得た材の場合とことなり、裂角が140°ほどである。先端部は原材面（a面）側の両縁に二面の削り加工を施すだけでとがらせる。残長54.4cm・幅 5.9cm・厚さ 2.8cm。樹種はシイ。

W2258は直径約8.5cmの原木から、Cの方法で得た材のb面をさらに斜めに裂いたもので、断面が偏平六角形に近い。先端部を削り尖らせる。残長42.6cm・幅6.6cm・厚さ4.2cm。樹種はシイらしい。

W2406は畦状遺構の杭列下で出土した。太い丸木杭のようだが、削り痕は他の木製品の疑いを抱かせる。直径12.5×10.5cmで、上端は折損している。下部には上から下に加えられた削り痕が残っている。使用した利器は幅3cmほどである。杵の未成品のようにもみえる。残長50.3cm。樹種不明。

W2299はD_2の方法で得た材を用いる。ただし、原木面（a面）側はほとんどすべて削られている。先端部はa面とb_1面のみを削って尖がらせる。残長51cm・幅7cm・厚さ4cm・原木の推定直径30数cm。樹種はクリ。

W2297は丸木杭である。残長40.2cm・直径5.5cm。削り面には利器の刃が喰い込み、無理にひきはがした部分もある。樹種はカシ。

W2329は断面が2.9×2.6cmの角材で、杭かどうかは明らかでない。残長40cm。樹種はシイ。

これらの杭に用いられた樹種はシイ・ホオノキ・カキノキ・カシ・クリ・アワブキ・ヤマザクラ？・ユズリハ・ヤナギ・タブノキ？・ウワミズザクラで、シイが多い。

建築材とみられる加工木を杭に転用したものは14例出土した。これらは断面多角形の建築材を裂いて、先端を尖らせて杭に転用したもので、建築材としての加工面(原加工面)、杭転用のための裂面、杭としての加工面とがみられる。

W2405は柄と柄孔をもつ建築材を厚さ５cmほどにしたものである。上端にある柄は長さ４cm・幅 6.3cmである。転用のために裂いたので本来の厚さは不明。残存厚１cm弱。この左側縁に柄孔がある。幅４cm・奥行き 2.2cmである。上面には、下から上端へ向う原加工面がある。下端には、上から下へ杭としての削り痕がある。柄上端は杭として打ち込んだ際につぶれている。全長89.9cm・幅9.5cm・厚さ4.2cm・樹種はスギ。

W2417は断面が凸字形になる。建築材としての加工面は凸字形の頂部に残るだけである。手斧のようなものでていねいに削る。削り痕の長さは 3.5cmほどで一定している。この削り面の下側はもともと斜めに加工されている。先端部の杭としての加工痕も、かなり鋭い刃物で一気に削ったようだ。上端は腐蝕がはなはだしい。残長51.5cm・幅８cm・厚さ 5.8cm。樹種はスギ。

W2270はもとの建築材を四分割したとみられる。原加工面はきわめて端正で、加工面の幅は3.5cmと2.5cmであり、削り痕の長さは２～５cmである。各削り面は軽く凹入している。この削り面によって長い加工面が出来る。現在残るのは四面であるが、各面のなす角度は148°～150°である。先端部は粗く削って尖らす。残長82.9cm・幅7.4cm・厚さ5.7cm。樹種はスギ。

W2278も上と同様の原加工面を有する。原加工面相互のなす角度は約136°と147°である。先端部は粗雑に削り、尖らしてある。残長69.6cm・幅6.3cm・厚さ6.1cm。樹種はスギ。

W2254は建築材を四分割したものらしい。原加工面はきわめて端正で、面のなす角は約148°と139°である。原加工面の様相は上記のものと同じ。先端は全面を削ってとがらせる。残長75.2cm・幅6.9cm・厚さ6.1cm。樹種はスギ。

W2266は原加工面が２面残り、そのなす角は120°～130°である。杭として、先端を五回大きく削るが、一部原加工面も残る。残長64cm・幅5.5cm・厚さ4.7cm。樹種はスギ。

W2286は原加工面は２面あるが、その削り面はよく残っていない。原加工面のなす角度は120°ほどである。杭としての先端部は断面五角形で、裂面を一面残し、四面を削る。残長56.4cm・幅と厚さは 7.4cm。樹種はスギ。

W2290は原加工面が２面残り、約130°の角をなす。削り面の長さは１cmから 6.5cmまでである。裂くときに先端が細くなり、杭としての削り面は１ヵ所だけである。残長61.8cm・幅 5.1cm・厚さ 4.8cm。樹種はスギ。

W2263は原加工面３面が残り、そのなす角度は135°前後である。原加工面の削り面は幅約４cm・長さは１～５cmで、きわめて端正に施される。利器の刃部は幅４cm以上であろう。先端部は大形の利器で削られ、削り面は５面である。残長32.2cm・幅７cm・厚さ 5.7cm。樹種はスギ。

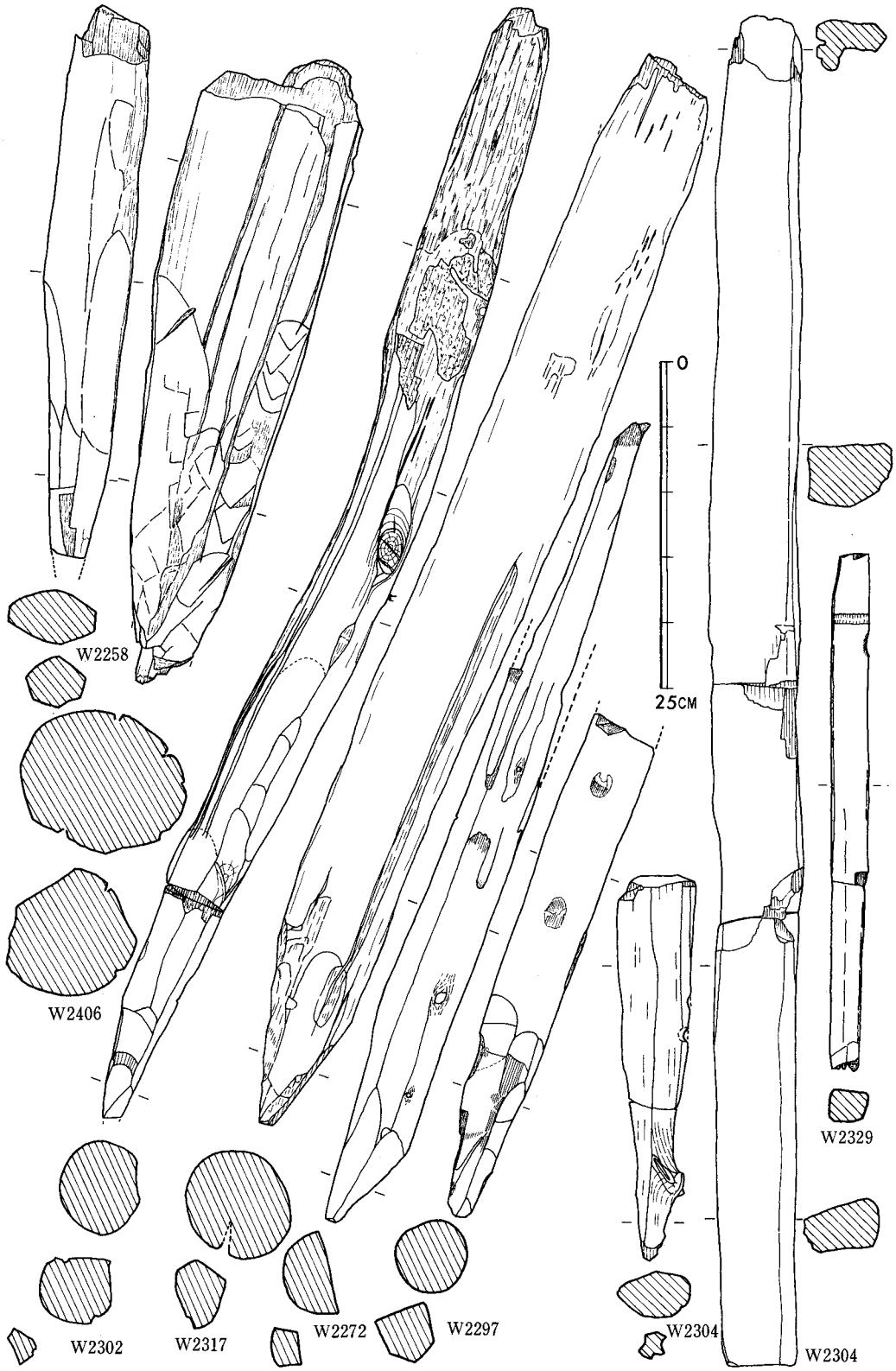


Fig.4・44　J・K－25トレンチ畦状遺構出土杭実測図(1)

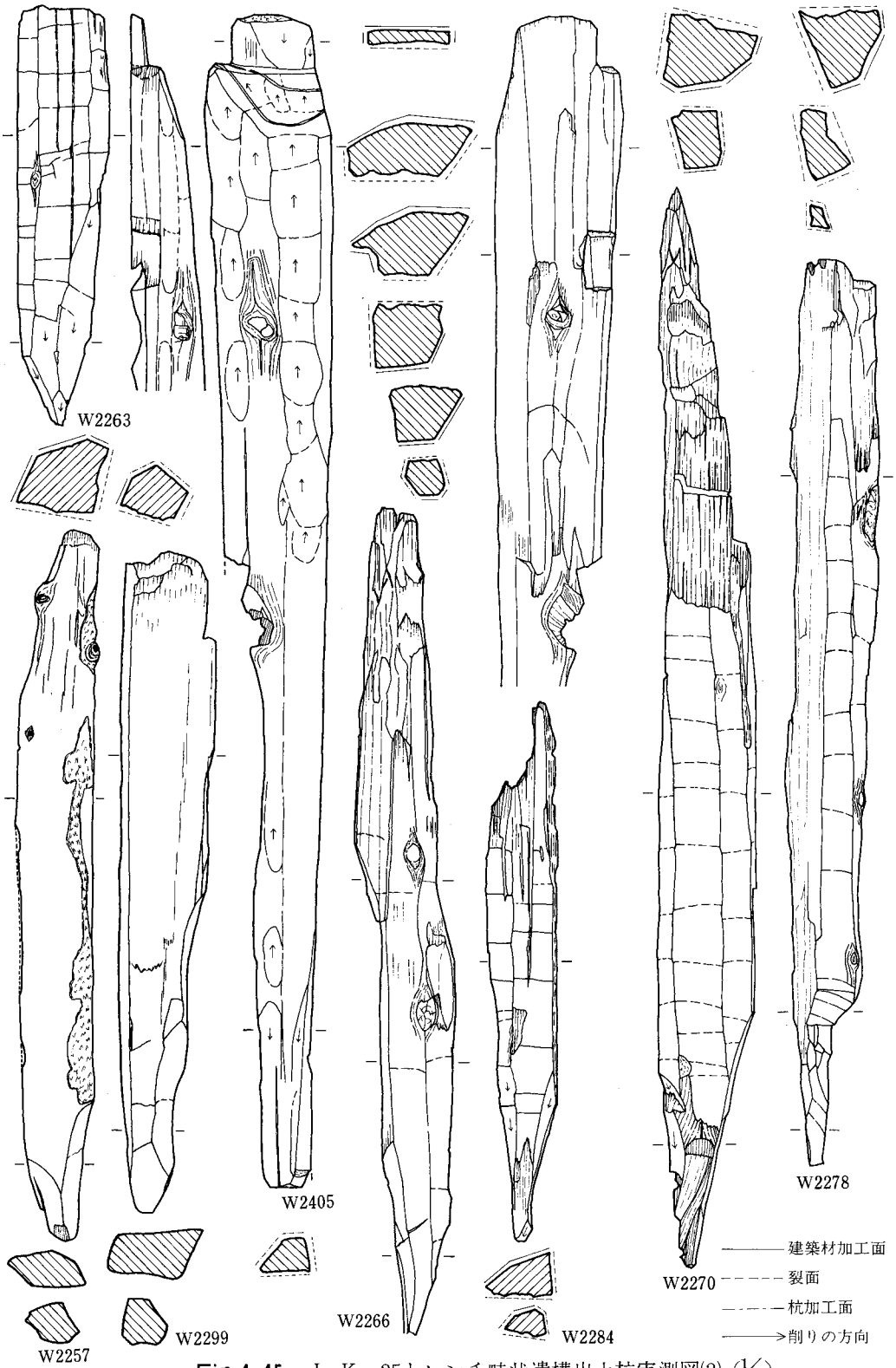


Fig. 4・45　J・K－25トレンチ畦状遺構出土杭実測図(2) (1/5)

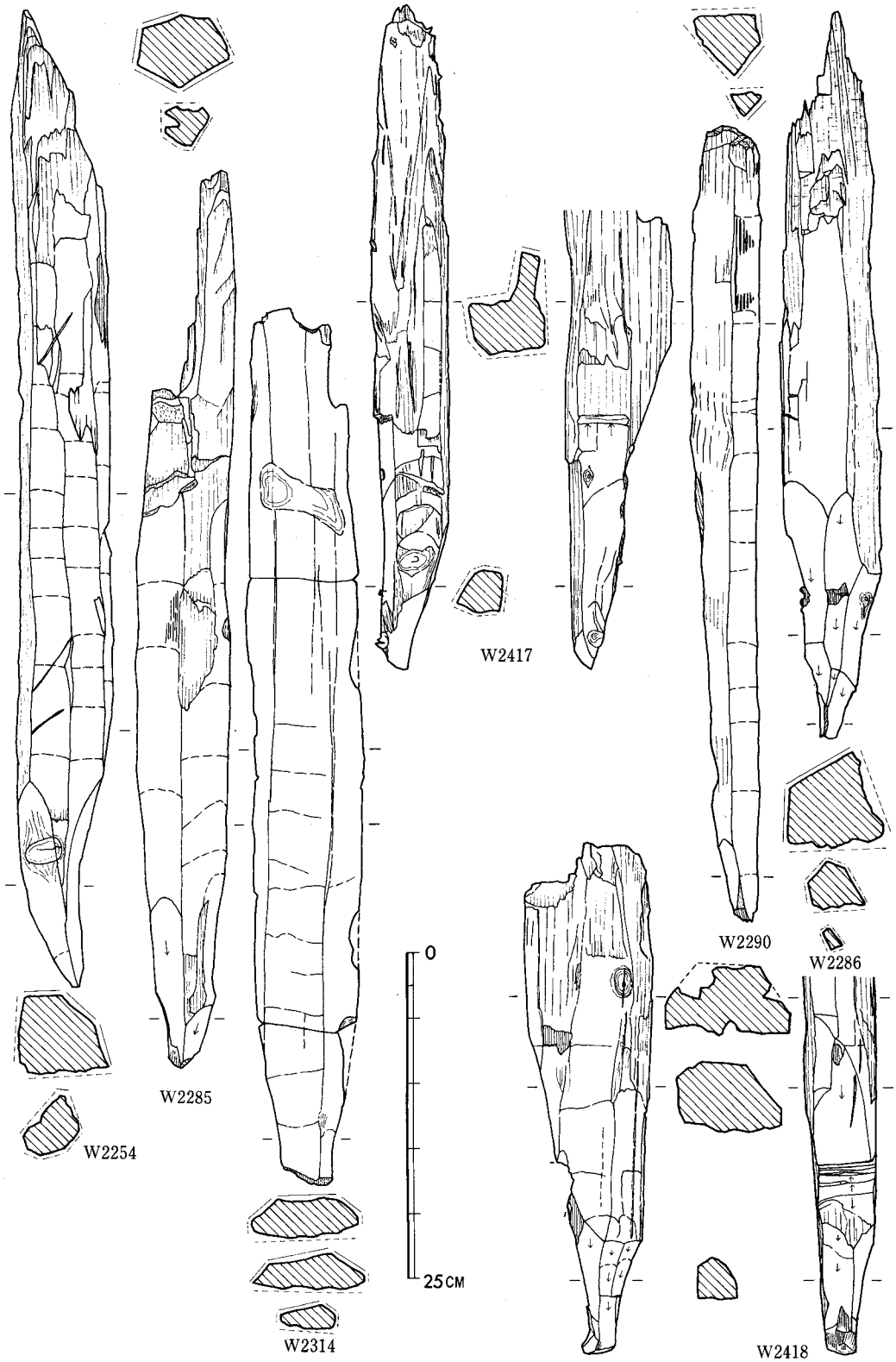


Fig.4·46　J・K－25トレンチ畦状遺構出土杭実測図(3)

W2284は原加工面が2面残っていて、そのなす角度は160°である。加工面の幅は3cm以上である。上と同様に面幅いっぱいのていねいな削り痕が残る。先端部は両側縁を削って尖らす。残長41.9cm・幅5.2cm・厚さ3.5cm。樹種はスギ。

W2418は原加工面が5面残っている。面幅は4～5cmだが、加工痕はよく残っていない。面のなす角度は120～130°と140～150°とである。断面の年輪から、直径10数cmの原木の周囲を裂いて断面八角形にととのえたものらしい。杭としての加工は上面と側縁に施されるが、裏面は裂面のまま残される。右側縁に、建築材として加工された抉り込みの跡がみえる。コ字形に抉り込んだのだろうが、その部分が杭加工の際に削りとられ、ごくわずかしか残っていない。

以上の杭のうちW2405を除く10例は、すべてスギを用い、原加工の様相が同じであり、原加工面のなす角度が、W2284の約160°を除くと120°から150°の間にあり、加工面の幅は 2.5cm・3cm・ 3.5cm・4cmで、一部のものは5cmをこえる。したがってこれらは同一の建築材から作られた杭と考えられる。ただし裂面が接合するものはない。もとの建築材は断面が6～12の多角形をなすのであろう。

W2285は原加工面が4面に残り、もとは厚さ約5cm・幅8～9cm？の5角形ないし6角形材とみられる。建築材ではないだろう。原加工面はかなりあれているが、削り面の長さは4～10cmでととのっていない。先端部は粗く削る。残長68.9cm・幅6.9cm・厚さ5.5cm。樹種はシイ。

W2314は原加工面が3面残る。面のなす角度は135°～140°で、面幅は約 4.5cm。原加工面の削り面の長さはまちまちだが、利器の刃幅は 4.5cm以上とみられる。先端部の両側を削って杭とする。残長67.4cm・幅8.3cm・厚さ2.8cm。樹種はシイ。

W2321は原木の周囲を裂いて、多角形の面取り加工を施した材を4分割して杭に転用したものである。原加工面の残りはよくないが、一面には利器を打ち込んで生じた浅い溝状のくぼみが11ヵ所残る。残長96cm・幅9cm・厚さ6cm。樹種不詳。

自然流木

この中には、流れてきた流木の他に丸木杭の先端部を失ったものも含まれていよう。樹種はサイカチ・カゴノキ？・ムクノキ・ムクロジ・アワブキ・エノキ・ヤナギ・シイ・ゴンズイ・カシ・クヌギ？・カマツカ・ユズリハ・エゴノキである。このうち杭にも用いられた樹種はアワブキ・ヤナギ・シイ・カシ・ユズリハだけで、他は自然流木としてのみ出土した樹種である。一方杭にはあるが、自然流木にはない樹種はホオノキ・カキノキ・クリ・ヤマザクラ？・タブノキ？・ウワミズザクラである。　（後藤）

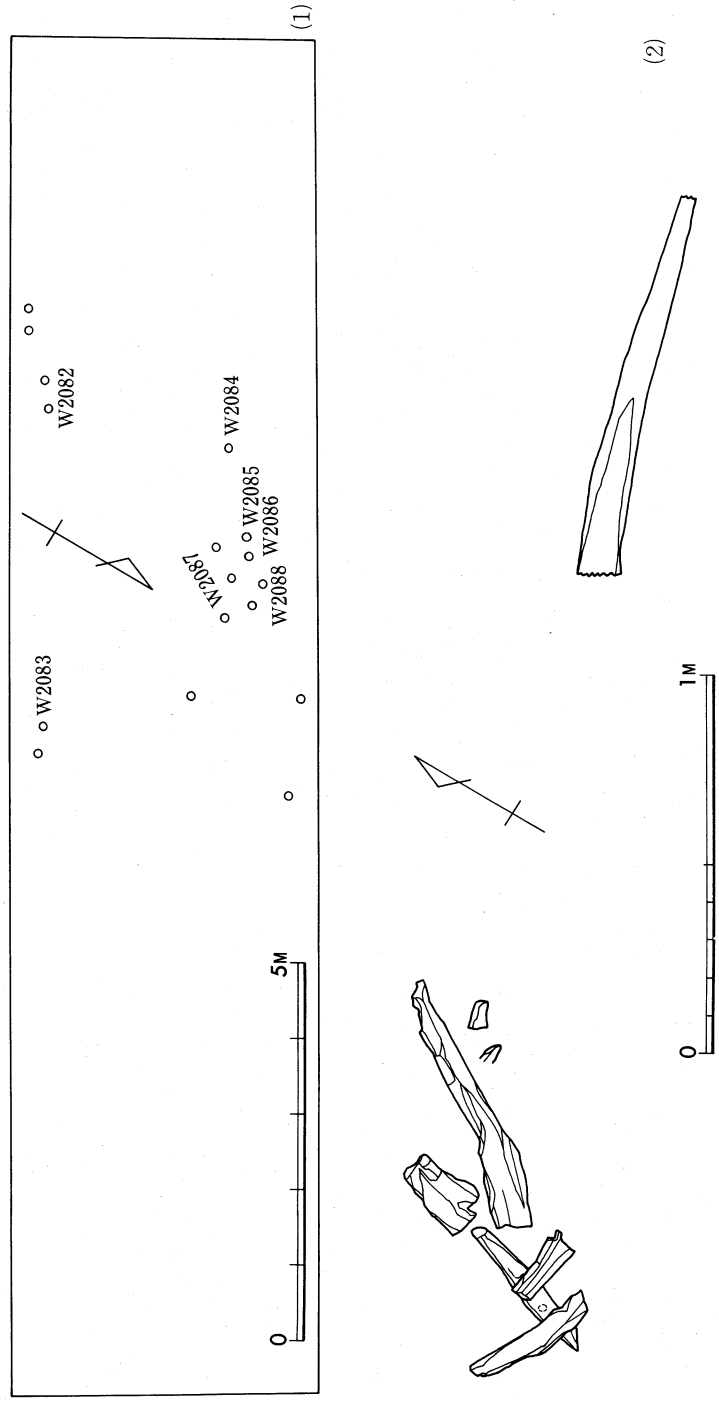


Fig. 4・47　Ｈ－21トレンチ平面図(1)・Ｈ－23トレンチ流木群実測図(2)

4　その他の遺構と出土遺物

(1)Ｈ－21トレンチの杭群 **(Fig.4・47)**

Ｈ－21トレンチでは、標高7.6～7.7ｍ以下にある灰色粘質細砂層（Fig.4・3－4、第７層）で杭群が検出された。杭は17本であり、トレンチの中央からやや西に不規則に打たれていて、はっきりした列をなさない。地層にも溝等の存在は認められず、杭群の性格は明らかでない。杭は直径２～４cmの丸木杭で、数本を除いて残存状態が悪い。杭の現存頂部標高は7.5～7.6ｍ、下端部は7.35ｍほどである。杭頂はもともとはもって高かったであろう。この杭群の時期は、杭群周辺から須恵器の細片が出土しているので、かなり新しいものとみられる。　（横山）

(2)Ｈ－23トレンチの流木群 **(Fig.4・47)**

遺構とはいえないが、Ｈ－23トレンチの西側では、黒色粘質土層（層上面標高 7.5ｍ）中で流木群が出土した。この黒色粘質土層は微砂を多量に含み、その下には黄灰色混砂土層（層上面標高 7.2ｍ）がある。流木（W2089～2102）はほぼ水平に埋没しており、出土標高は 7.2～7.6ｍである。流木は径10cm程度の自然木で、木質部の腐朽がはなはだしい。

伴出遺物はなく、時期決定は困難であるが、出土した黒色粘質土層がＪ－23トレンチの黒色粘質土層上位につながるとすれば、弥生時代前期より新しく、下限は、黒色粘質土層上の灰色微砂層（層上面標高８ｍ）がＪ－23トレンチの第８・10・11層につながるとすれば中期後葉となろう。　（横山）

(3)Ｈ－21トレンチとＨ－23トレンチ出土の杭・流木 **(Tab.4・5)**

Ｈ－21トレンチ出土の杭の樹種はエゴノキ・シイ・ユズリハである。直径２～４cm・残長は数cmのものが多く、W2088のみ23.5cmを計る。

Ｈ－23トレンチ出土の流木は、まったく加工痕がなく、すべてムクノキである。近くにあったのが倒れて埋没したものかもしれぬ。　（後藤）

第3節　包含層の出土遺物

上にのべてきた各遺構以外の各層から出土した遺物について、包含層出土の遺物として以下にのべる。これらの遺物は、出土位置によって一定のまとまりをもつものと、そうではなく、各時代の遺物が自然力によって混在して埋没したものとに大別される。前者の例は、G－25・26両トレンチの木器包含層下の砂層から出土した弥生時代前期の土器・石器、G－24・25・26各トレンチの耕土下の客土層から出土した弥生時代中～後期土器を中心とする遺物である。これらについてはそれぞれ項を設けてのべる。それ以外の遺物は、耕作土とその下の各層に攪乱状態で包含されていたもので、これについては種類ごとにまとめてのべる。ただし、J・K－25トレンチの耕土下砂層（遺構より上位）出土の弥生式土器片は数が多いので、それだけを一括してのべる。（後藤）

1　G－25・G－26トレンチの弥生時代前期包含層の遺物

G－25・G－26両トレンチでは弥生時代中期の木器包含層下に、前期の土器片を若干含む砂層がある。G－25トレンチでは、木器を含む黒色粘質土層下の砂層上位から、木器群調査にともなって土器片を採集した。G－26トレンチでは、木器包含層下にあり八女粘土層上に厚く堆積する砂層（第20層）から土器・石器が出土した。（後藤）

(1)土器（Fig.4・48）

G－25トレンチ出土

甕（Y2272・2273）　Y2272は内傾する口縁部の先端が如意形をなし、その端の縦一杯に刻目がつけられる。わずかにふくらみ気味の胴部屈曲部には段がつき、そこを貝殻腹縁状の工具で刻目状に押圧する。口縁部は横なで調整、器面内外とも刷毛目調整で、内部には指の押圧調整痕も残る。外面には煤が多量に付着する。Y2273は如意形口縁の下端に刻目を施す。口縁部は横なで調整で、外面には刷毛目調整もみられる。胎土は砂を含むが比較的良好なもの（Y2272）と、石英粒砂を含むもの(Y2273)とで、焼成は良い。暗赤褐色（Y2272)、暗褐色（Y2273)を呈する。板付II式であろう。

壺（Y2275）　小形の壺で、胴部上半と底部が残る。肩部と胴中央部にそれぞれ3本の平行横沈線が巡り、その間にやはり3本単位の複線八字形文が描かれる。底部はわずかに上げ底を呈する。全面横の箆磨きで、沈線間に丹の痕跡が残るが、本来は全面丹塗りと推定される。胎土に砂を含み、焼成は良好。暗灰褐色を呈する。板付I式のものであろう。

底部（Y2274・2276～2278）　Y2277・Y2278は壺、他は甕であろう。いずれもわずかに上げ底を呈する。Y2274は甑で、穿孔は焼成後。外面縦刷毛目調整。Y2276は断面三角形の張り出し部がつけられる。外面には条痕が認められる。Y2278は底面に木葉痕がみられ、外面箆磨

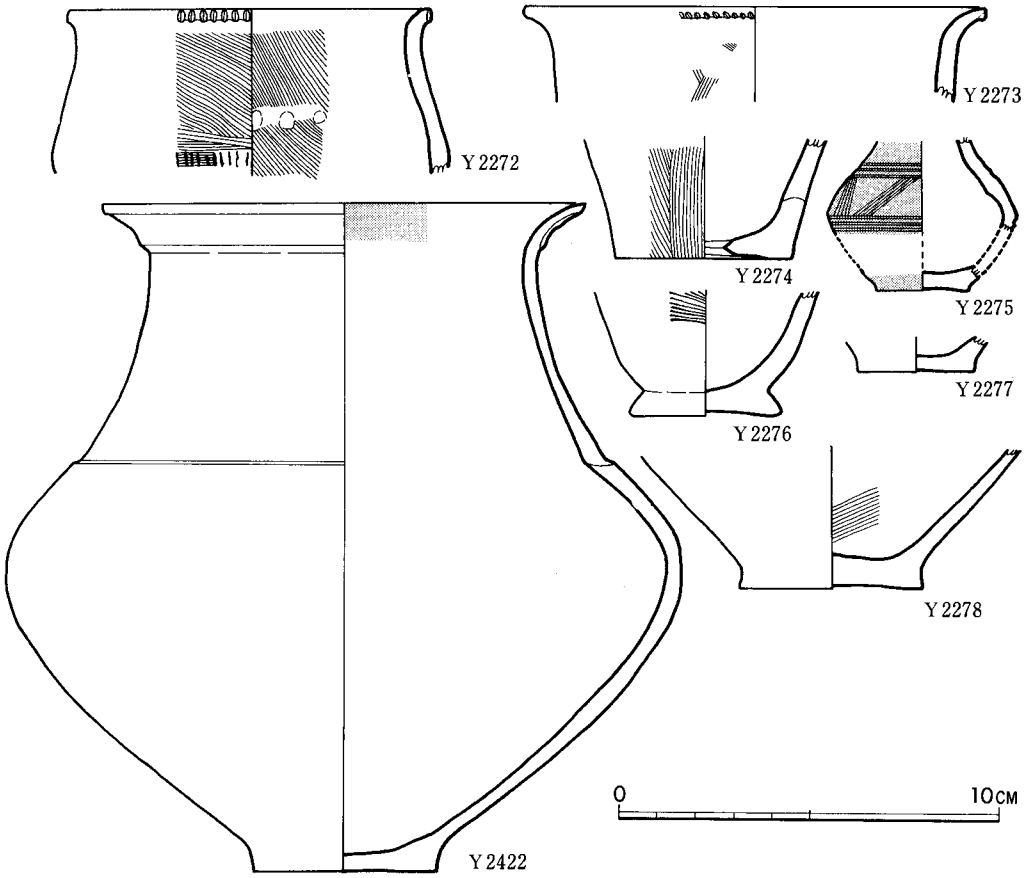


Fig.4·48　G－25トレンチ・G－26トレンチ木器包含層下出土土器実測図

き、内面は粗い刷毛目調整。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。褐色（Y2274)、暗褐色（Y2276)、黒褐色（Y2277)、灰褐色（Y2278）を呈する。Y2276は夜臼式、Y2274は板付I式、他は板付II式であろう。

G－26トレンチ出土（PL.LI）

Y2422は外反する口縁の外側に粘土を貼り付けて肥厚させる。そのために口縁下に段がつく。頸部は内傾し、肩部にも段がつけられる。胴部は張り、底部は平底である。全面を箆で磨研した優美な作りの壺である。口縁内面に一部丹の痕跡がある。外面の丹塗りは不明。胎土に石英粒砂を含み、焼成はもろい。褐色を呈するが、胴の一部に焼成時の黒斑がある。板付II式。

（沢）

(2)石器（PL.LXII）

いずれもG－26トレンチの出土である。S1122（Fig.4·73）は石庖丁破片で、直線の背部のみが残る。厚さは均一で研磨がていねいに施されている。頁岩質砂岩製。S1121（Fig.4·

77）はサヌカイト製の削器である。分厚く、ずんぐりした縦長剥片の両側縁に両側から再調整を加えて刃部を形成している。素材は自然面を打面としており、末端にもまた自然面を残している。重量70ｇ。Ｓ1128（Fig.4･77）は「石小刀」ともよぶべき若干内彎する刃部をもつ「鎌形」の打製石器である。基部は一部が欠損しているがほぼ完形に近い。背部及び内弯部分はいずれもていねいな剥離調整が加えられている。また図の網目を施した素材の大剥離面、その他の部分は、周辺部の再調整とは明らかに石質変化の点で相違がみられ、時期を異にする石器の再利用と考えられる。機能的には掻器のそれを持つものかも知れない。サヌカイト製。Ｓ1181（Fig.4･76）は基部がわずかに凹入する磨製石鏃で、両面とも軽くぼんでいる。仕上げは全体研磨ののちに基部・側縁の順になされたと考えられる。緑泥片岩製。第20層上位で出土した。

（横山・山口）

2　Ｇ－24・Ｇ－25・Ｇ－26トレンチ客土層の遺物

第２区の台地際にあたるＧ－24・Ｇ－25・Ｇ－26各トレンチの耕作土層下には、多量の遺物を含む層がある。この層が他所の遺物包含層の土をもってきて客土したものであることは、前述した（第１節２）。以下、この層で出土した遺物のうち、大部分をしめる弥生時代のものについてのべる。時期の降る少量の遺物については後述する。

(1)弥生式土器

Ｇ－24・Ｇ－25・Ｇ－26各トレンチごとにのべてゆく。

a　Ｇ－24トレンチ（Fig.4･49～4･56）

甕（Ｙ2001～2023・2069・2085・2678）

前期初頭の土器（Ｙ2678、Fig.4･56）　外反しながら外に開く口縁部から胴部で逆「く」の字状に反転する器形をもつ。口縁部と胴反転部に幅広い刻目突帯がつけられる。刻目は櫛状の工具を使用している。口縁部の突帯は口縁端から約１㎜ほど下がった位置につけられ、下向する斜面をもつ。外面には細い条痕、内面は刻目の工具と同じ櫛状の工具で横につけられる。内外面とも煤の付着が認められる。胎土には石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。夜臼式であろう。

中期前葉の土器（Ｙ2003）　若干内傾する口縁外側に粘土を貼付けて張り出し部を作る。内側にもわずかに張り出しを設ける。口縁上面は凹み、口縁部横なで調整。外面は粗い刷毛目調整で胎土に砂を含み、焼成良好。暗赤褐色を呈する。

中期中葉の土器（Ｙ2004～2009）　いずれも逆「Ｌ」字状口縁をもつが、Ｙ2009は「Ｔ」字状に近い。Ｙ2007・2008は口縁に焼成前の穿孔がある。Ｙ2009は口縁下に一条の三角突帯を巡らす。いずれも口縁部横なで調整。Ｙ2004～2006・2009は外面刷毛目調整。胎土は精良な粘土を用いるもの（Ｙ2008）、石英粒砂を含むもの（Ｙ2009）以外は砂を含み，焼成は良好。褐色（Ｙ

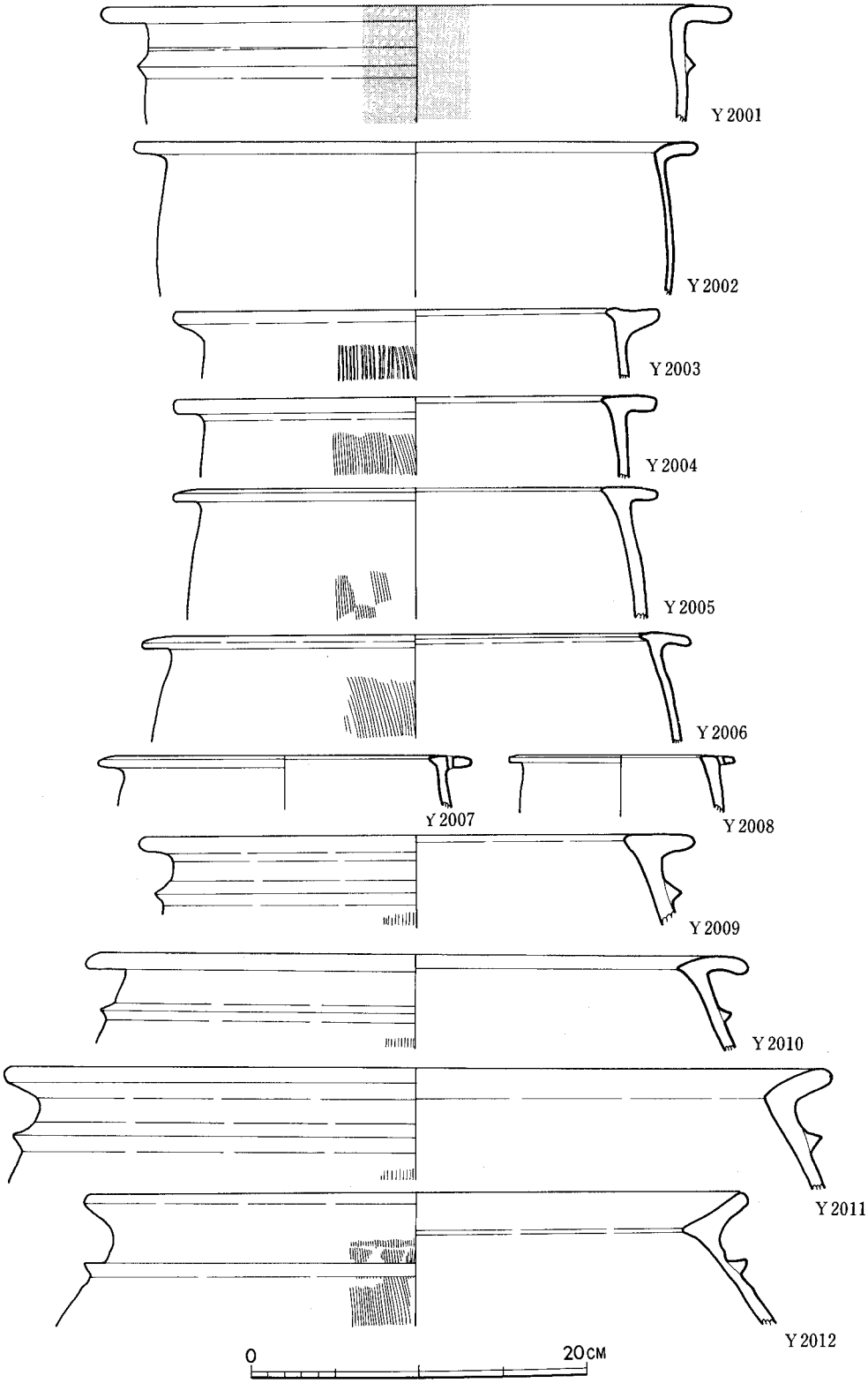


Fig.4・49　G－24トレンチ客土層出土土器実測図(1)

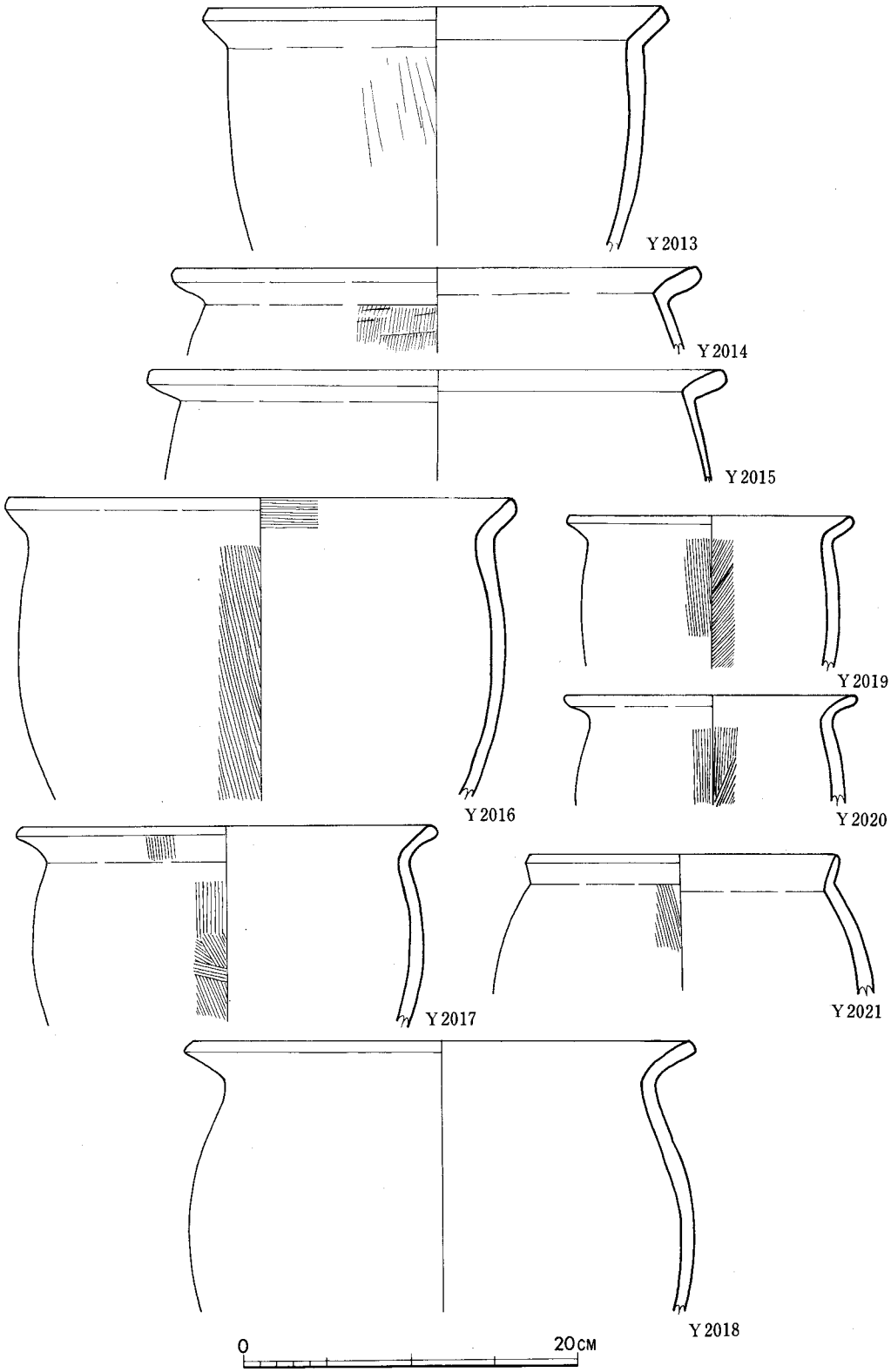


Fig.4・50　G－24トレンチ客土層出土土器実測図(2)

2004)、暗褐色（Y2005・2009)、黒褐色(Y2006)、灰褐色（Y2007)、赤褐色（Y2008)を呈する。

中期後葉の土器（Y2001・2002・2010・2011・2014・2015・2085）　逆「L」字状口縁であるが、内側張り出し部がないもの（Y2001)、逆「L」字状口縁の内端が下がり、「く」の字状口縁に近いもの（Y2002・2011)、内端の下がり方の小さいもの（Y2010)、「く」の字状口縁のもの（Y2014・2015）がある。Y2001・2010・2011の口縁下には一条の三角突帯が巡る。Y2085は単純に内傾する口縁下に「M」字形に近い、高い突帯が巡らされる。いずれも口縁部横なで調整で、Y2010・2011・2014は外面刷毛目調整。Y2001とY2085は外面と、内面口縁上部に丹塗り。胎土はY2001・2085が精良なものを用いる他は砂を混じる。焼成は良く、淡褐色（Y2001)、灰褐色（Y2010・2085)、褐色（Y2002・2011)、暗褐色（Y2014)、暗赤褐色（Y2015）を呈する。

後期前葉の土器（Y2012・2013・2016～2023）　いずれも「く」の字状に口縁が屈曲するものである。Y2012とY2023は口縁下に一条の三角突帯が巡る。内外面とも刷毛目調整のあるもの（Y2016・2019・2020)、外面に刷毛目調整のあるもの（Y2012・2013・2017・2018・2021・2022）があり、Y2013には外面に煤の付着が認められる。Y2022は口縁内面に丹の痕跡がある。胎土には砂を含むものが多いが、石英粒砂を含むもの（Y2017・2018・2021）もある。焼成は良く、暗赤褐色（Y2012・2021)、暗褐色（Y2013・2016・2023)、黒灰色(Y2017)、黒褐色(Y2018)、淡赤褐色（Y2019)、赤褐色（Y2020)、淡褐色（Y2022）を呈する。

後期中葉の土器（Y2069）　「く」の字状口縁をもち、外面と口縁内面丹塗り。内外面とも刷毛目調整で、口縁部は横なで調整。胎土は砂を含み、焼成は良い。灰白色を呈する。

壺（Y2024～2038、PL. LIII）

中期前葉の土器（Y2024）　単純に外反する口縁部をもち、その端は沈線状に凹む。頸部の付け根も沈線状となっている。内外面ともに丹塗り磨研の土器で、胎土に砂を含み、焼成良好。褐色を呈する。

中期中葉の土器（Y2026）　「鋤」状口縁をもつ土器で、口縁上面は平坦で、内外面とも丹塗り。口縁部は横なで調整。胎土は精良なものを用い、焼成良好。淡褐色を呈する。

中期後葉の土器（Y2025・2027～2030)、Y2025・2027・2028も「鋤」状口縁をもち、外端が下がる。Y2025はその外端に刻目を施し、口縁部横なで調整。内外とも丹塗り。Y2027は口縁部の外側張り出し部が退化してしまっており、口縁部横なで調整。頸部に一条の「M」字形突帯を巡らす。外面と内面の上部に丹塗り。Y2028は外面刷毛目調整の後、丹塗り。Y2029は頸部から胴上半部の破片であるが、口縁はやはり「鋤」状を呈すると推定される。外面丹塗り。Y2030も口縁部を欠失するが、いわゆる袋状口縁の壺であろう。口縁下に一条の三角突帯が巡る。底部は若干上げ底を呈する。外面は縦刷毛目調整の後丹塗り、内面はしぼりの痕が認められる。胎土は精良なものを用いたものが多いが、Y2029には若干の砂を混じる。淡褐色（Y2025・2028)、褐色（Y2027・2030)、淡赤褐色（Y2029）を呈し、焼成は良い。なお、Y2027は

この時期に入れたが、あるいは、中期前葉までさかのぼるものかもしれない。

後期前葉の土器（Y2031～2033・2036）　いずれも袋状口縁が退化した口縁部をもち、口縁の屈曲部に稜がつくが、その上部は内彎しており、口縁部横なで調整。内外面とも丹塗り。Y2032は口縁部の内外面に丹塗り。Y2033は外面に刷毛目調整がみられる。胎土はY2031が精良な粘土を用いている他は砂を含み、焼成は良い。赤褐色（Y2031）、暗褐色（Y2032）、灰褐色（Y2033）、灰白色（Y2036）を呈する。

後期中葉以降の土器（Y2034・2035・2037・2038）　Y2034・2035・2037は口縁が逆「く」の字状に反転する。袋状口縁の系統のものと推定される。屈曲部より上部は外彎しており、いわゆる二重口縁に近い。Y2034は口縁部横なで調整で、内外面とも刷毛目調整がみられる。Y2035は底部を若干欠くが、丸底を呈するものと思われる。口縁部の屈曲部と、頸部の付け根、胴下半分にそれぞれ一条の突帯が巡らされ、口縁部の突帯は斜めに、頸部と胴部の突帯は「×」字状に刻目が入れられる。Y2038は口縁が直立し、胴部のふくらむ小形の壺で、内外面とも篦での調整痕が顕著であり、外面には刷毛目調整もみられる。いずれも胎土は砂を含み、焼成はY2035以外は良い。淡赤褐色（Y2034・2035）赤褐色（Y2037・2038）を呈する。

高坏（Y2040～2050、PL. LIII）

Y2040は坏の口縁部で、「鋤」状口縁を呈する。上面と外端が少し凹み、口縁下に一条の三角突帯を巡らす。内外とも丹塗り。Y2041～2050は脚部である。Y2041は外面丹塗りで、内面にしぼりは認められない。Y2042は外面丹塗り、内面しぼり。Y2043・2044も同様。Y2045は外面と裾部の内面に丹塗りで、内面にはしぼり。裾部には横なで調整も認められる。Y2046も外面丹塗り。Y2047は外面丹塗りで内面しぼり。Y2049は外面は丹塗り磨研で内面に横刷毛目調整。裾部は横なで調整。裾の外端は凹む。Y2050も外面丹塗り磨研で、裾部の外端が凹む。胎土は精良なものを用いるもの（Y2040・2042・2043・2045・2049）と砂を含むもの（Y2041・2044・2046～2048・2050）があり、焼成は良好。淡赤褐色（Y2040）、赤褐色（Y2041・2043・2050）、灰白色（Y2042）、灰褐色（Y2044・2047・2048）、暗黄褐色（Y2045）、淡褐色（Y2046）、暗赤褐色（Y2049）を呈する。Y2040～2043は中期、他は後期のものであろう。

器台（Y2051～2062、PL. LII）

Y2051は外面は刷毛目調整で内面は指のなであげ。口縁近くは横なで調整。器壁は割合に厚い。Y2052は薄い器壁をもち、外面粗い刷毛目調整。Y2053は口縁部より脚裾部の方が開く。外面は粗い刷毛目調整で内面にはしぼりの痕が認められ、その部位に段がつく。Y2054は外面粗い刷毛目調整で、内面にはしぼりの痕がみられる。Y2055は上部を欠くが、器高の高いもので、外面は器面の磨耗のために調整は不明であるが、内面裾部近くには横刷毛目調整がある。Y2057も外面刷毛目調整。Y2058も外面刷毛目調整。Y2059は器面があれているため調整は不明。Y2060は厚い器壁をもち、外面刷毛目調整。Y2061は器壁が薄く、外面刷毛目調整で脚裾部には

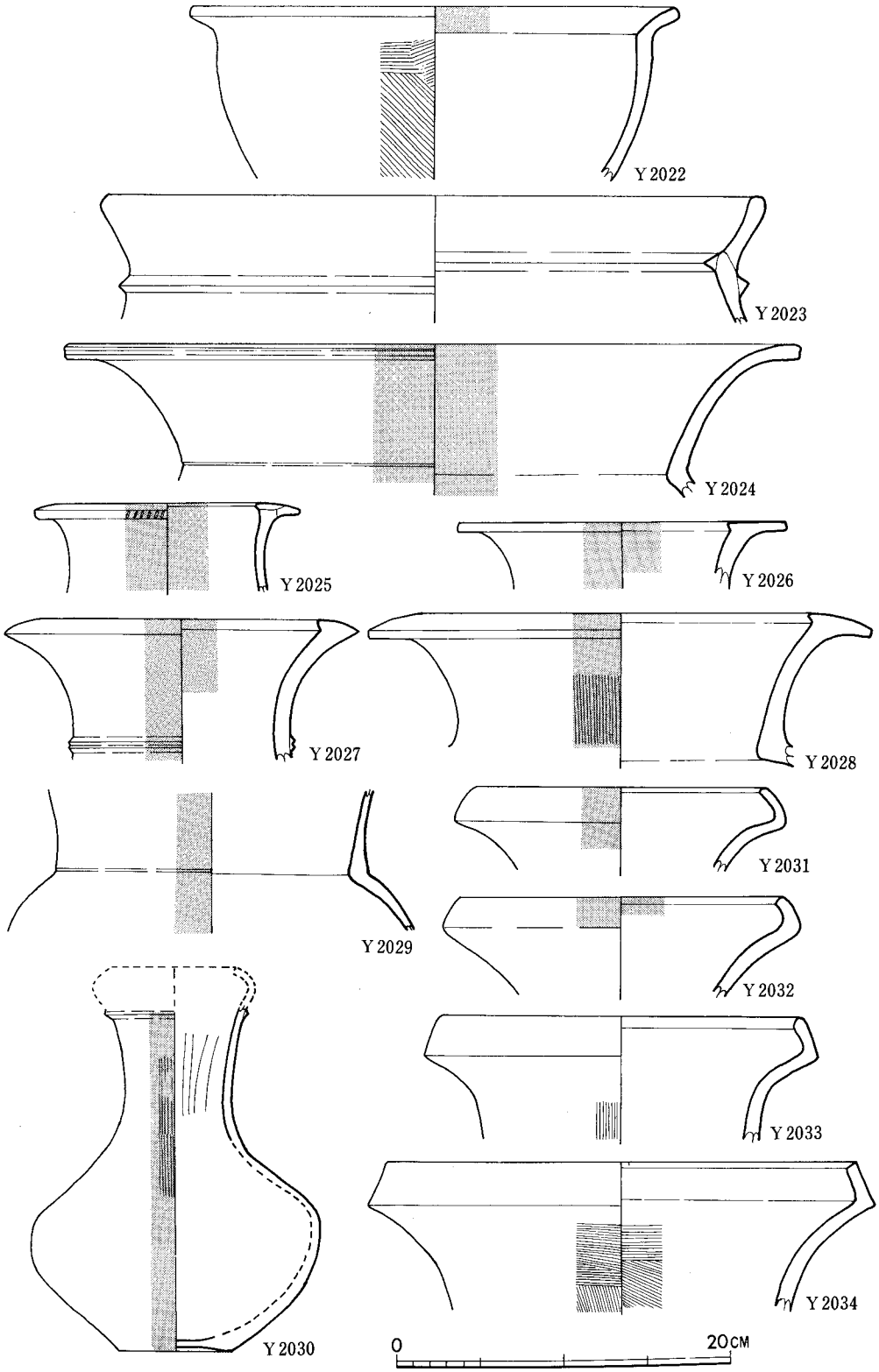


Fig.4・51　G－24トレンチ客土層出土土器実測図(3)

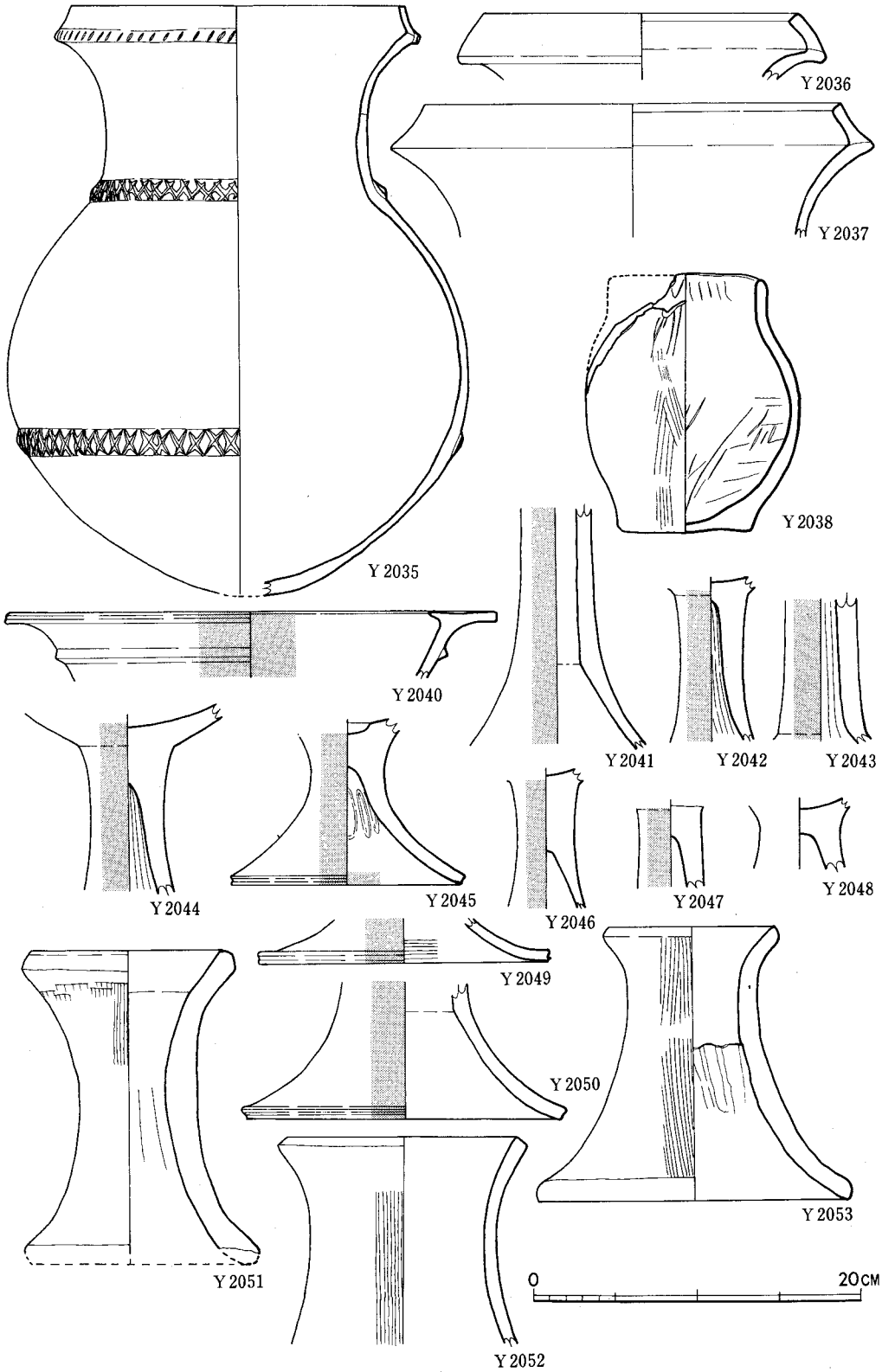


Fig.4・52　G－24トレンチ客土層出土土器実測図(4)

横なで調整。Y2062は器台としては作りの良いもので、外面なで調整で仕上げている。いずれも胎土に石英粒砂を含むが、Y2062は細砂を含みかなり精良な粘土を用いる。焼成は良好なもの（Y2054・2055・2057・2060・2062）とあまり良くないもの（Y2051～2053・2058・2059）があり、灰褐色（Y2051・2053～2055・2060）、暗黄褐色（Y2052）、暗褐色（Y2061）、淡灰色（Y2057・2058）、灰白色（Y2059）、褐色（Y2062）を呈する。Y2052・2061は中期、他は後期のものであろう。

蓋（Y2063～2068・2675）

Y2063は無頸壺、他は甕の蓋であろう。Y2063は外面なで、内面横刷毛目調整。現存の破片中には穿孔は認められない。Y2064はつまみ部の上面が若干凹む。外面は刷毛目調整で、内面にはしぼり。Y2065はつまみ部上面が平坦化しており、そこの器壁は薄くなる。内面に指の押圧調整。Y2066はつまみ部上面が凹む。外面縦、内面横刷毛目調整。Y2067もつまみ上面が凹むが、器面があれているため調整はわからない。Y2068は外面縦刷毛目調整で、内面は指の押圧およびなで調整で、その後箆状の工具で横なで。つまみ上面が凹み、そこにしぼりの痕がみられる。Y2675も同様であるが、内面の調整は不明。Y2063・2066の胎土は精良なものであるが、他は砂を含む。焼成は良く、褐色（Y2063）、淡赤褐色（Y2063・2064）、灰褐色（Y2065・2067・2068・2675）、赤褐色（Y2066）を呈する。これらは中期後葉～後期のものであろう。

無頸壺（Y2039・2070～2084）

口縁部が「く」の字状になるもの（Y2081～2083）と、その口縁が外端に屈折して、外端で平坦面をもつもの（Y2039・2070～2080・2084）がある。Y2039が丹塗りかどうかは器面があれているために不明である以外は、Y2071が全面、他は、外面と内面の口縁部が丹塗り磨研の土器である。片側2個ずつ計4個の焼成前の穿孔を有するのが普通であるが、Y2070～2073・2075・2077～2079・2081は破片中に穿孔は認められない。Y2074には横、Y2076は頸部に縦の刷毛目調整が外面にみられる。口縁部はいずれも横なで調整で、内面に指の押圧調整痕の認められるもの（Y2072・2073・2080・2084）もある。胎土は精良なもの（Y2070・2072～2077・2079・2080）と、砂を含むもの（Y2039・2071・2078・2081～2084）があり、焼成はY2039がよくないが、他は良好。淡褐色（Y2039・2072）、灰白色（Y2070・2071・2075・2076・2078・2080・2081・2084）、灰褐色（Y2073・2077・2079・2082）、茶褐色（Y2074）、淡赤褐色（Y2083）を呈する。中期後葉のものであろう。

鉢（Y2086・2087・2091・2097・2098・2107・2108・2110・2111、PL. LII、LIII）

Y2086はゆがんだコップ状を呈する。内外とも箆の調整で底部は若干の上げ底を呈する。Y2087は口縁部を欠失するが、若干外反すると思われ、あるいは壺であるかもしれない。なおこの土器中からは炭化米が発見されている。Y2091は単純に開く鉢形土器で、口縁は横なで、そ

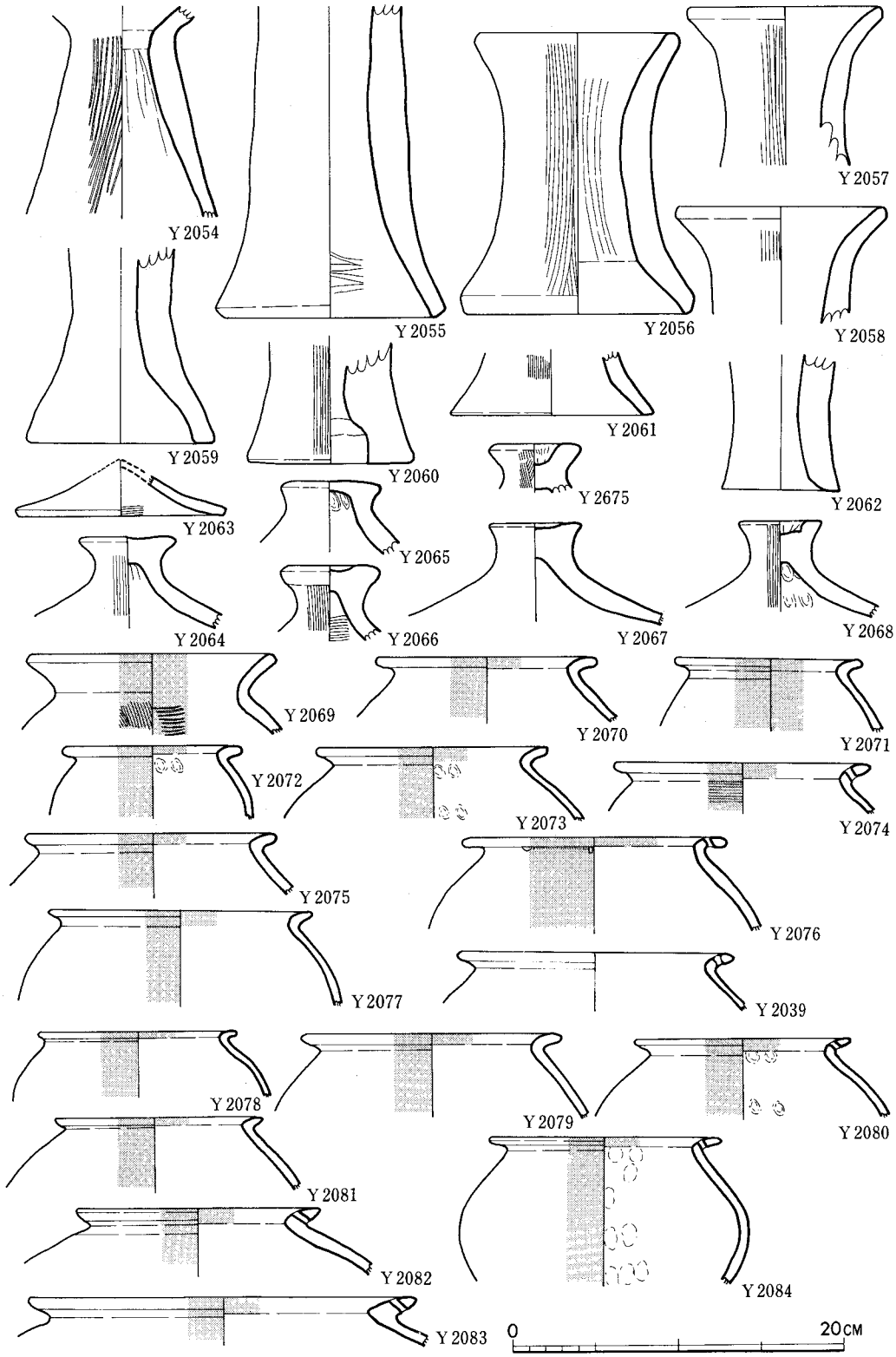


Fig.4・53　G－24トレンチ客土層出土土器実測図(5)（Y 2056は木器包含層出土）

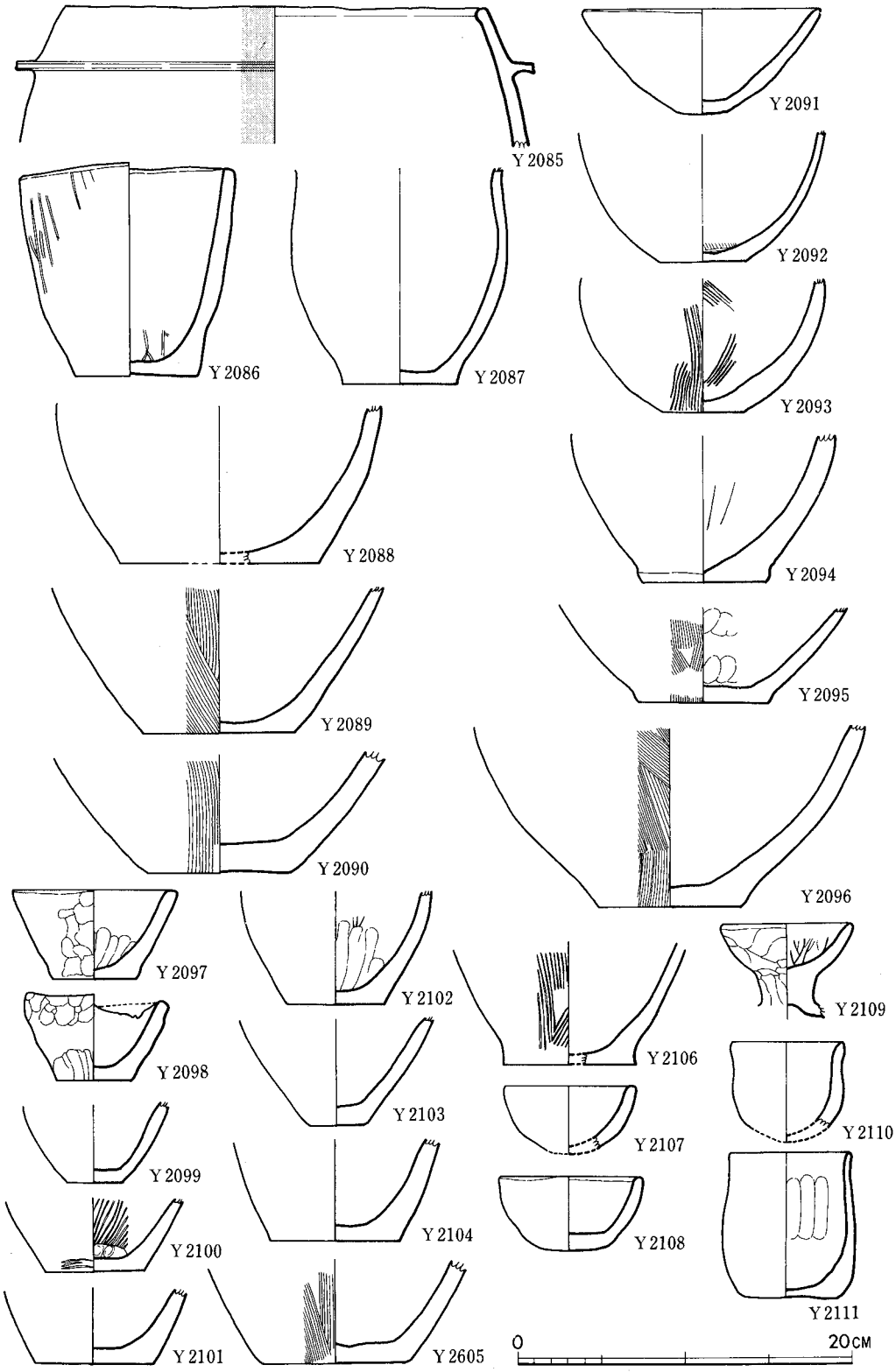


Fig.4·54　G－24トレンチ客土層出土土器実測図(6)（Y 2096・2109は木器包含層出土）

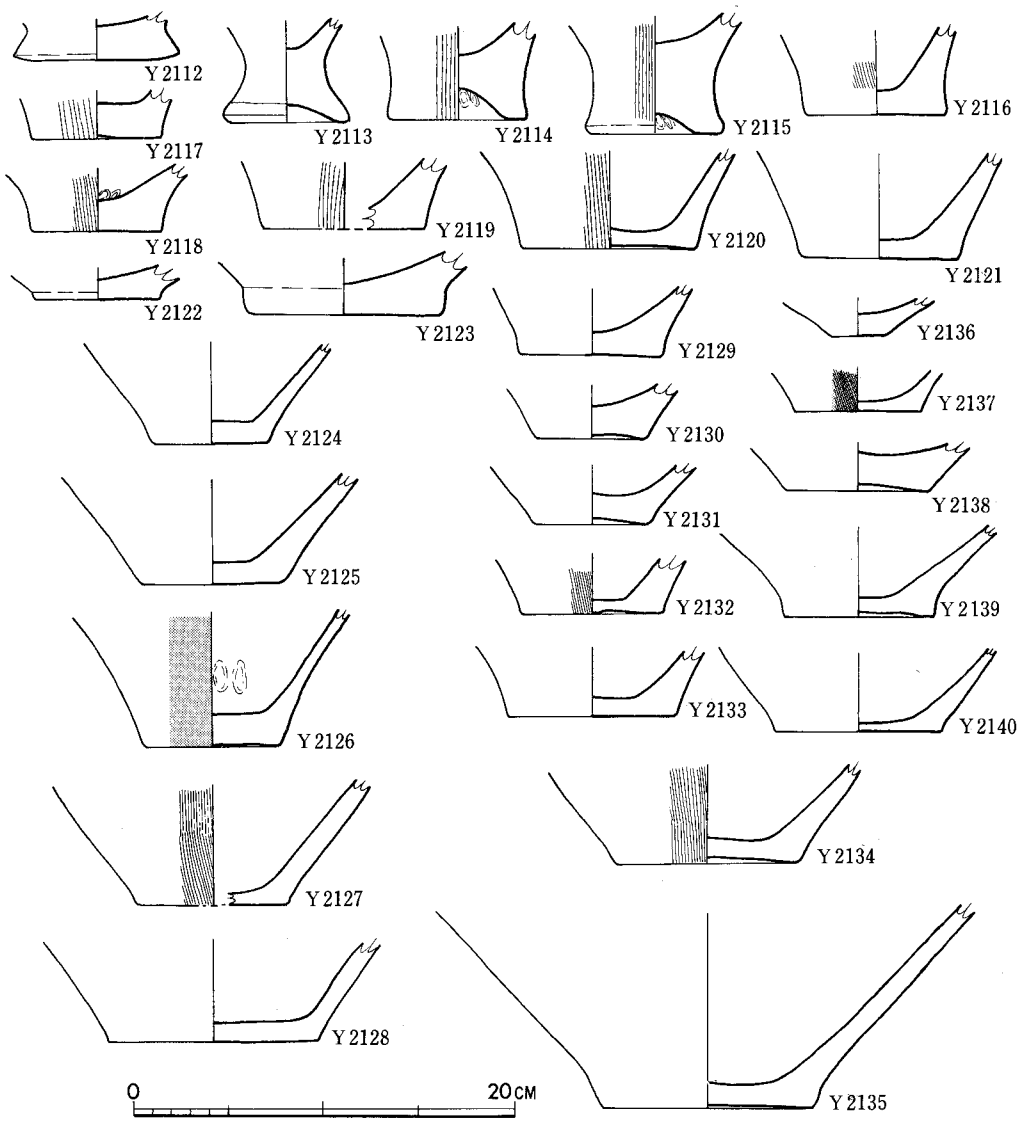


Fig.4・55　G－24トレンチ客土層出土土器実測図(7)（Y 2135は木器包含層出土）

れ以下は縦なで調整。Y2097・2098・2107・2108・2110・2111は小形の鉢でいわゆるミニチュア土器である。Y2097・2098は単純に開く口縁をもち、外面は指の調整。Y2098の底部近くは箆で削りとったように調整。Y2097の内面は指のなであげ調整。Y2107・2108は鉢というより椀に近い器形で口縁は内彎しながら開く。Y2107は内面横なで調整。Y2108の底部は若干丸味を帯びる。Y2110は口縁下がわずかにくびれ、口縁は若干外反する。胴部は球形に近く、底部は欠失するが丸味を帯びると考えられる。Y2111は外反するというより、ほぼ直立に近い器壁の薄い口縁部が、口縁下でわずかにくびれ、底部付近で器壁が厚くなり、底部は若干上げ底を呈する。内面には指のなで上げ調整。胎土にはそれぞれ砂(Y2086・2087・2110・2111)、石英粒砂（Y2091～2108）を含む。焼成は良いもの（Y2086・2087・2098・2111)、よくないもの(Y2091・2092・2107～2110）があり、黄褐色（Y2086)、暗褐色（Y2087・2097・2108・2110)、褐色（Y2091・2107)、灰白色（Y2098)、淡赤褐色（Y2111）を呈する。これらの土器は後期のものであろう。

底部（Y2088～2090・2092～2095・2099～2106・2112～2140)

Y2088・2092・2094・2102・2122・2123・2125・2128・2130・2131・2136・2138～2140は壺、他は甕であろう。Y2099はミニチュア土器の可能性がある。上げ底を呈するもの(Y2113～2115・2117・2120・2126・2129～2132・2134・2138・2139）があり、内外面とも刷毛目調整のあるもの（Y2093・2100)、外面に刷毛目調整のもの(Y2089・2190・2195・2196・2105・2106・2114～2120・2127・2132・2134・2137)、内面底部に刷毛目調整のもの(Y2092）がある。内面に指の押圧あるいはなであげ調整のあるもの（Y2095・2100・2102・2118・2126)、底面に指の押圧調整痕の残るもの（Y2141・2115)、箆で外面をなで調整や磨研しているもの（Y2088・2095・2138・2139)、内面に箆の調整のあるもの（Y2094）があり、煤の付着の認められるもの（Y2103・2106）がある。Y2126とY2137は外面丹塗り。胎土は石英粒砂を含むものが多く、精良な粘土を用いるもの（Y2126・2139)、砂を含むもの(Y2103・2104・2113・2114・2124・2127～2130・2133・2136～2138・2140）がある。焼成も良好なもの（Y2095・2103・2104・2113～2115・2117～2120・2126・2128・2130・2137～2140）とそうでないものがあり、淡黄褐色（Y2088・2121)、黒灰色（Y2089)、暗褐色(Y2090・2091・2105・2112・2113・2118・2120・2123・2127・2133・2134)、赤褐色（Y2093・2101・2116・2119・2130・2140)、黒褐色（Y2094・2100・2138)、褐色（Y2095・2117・2128・2131・2137・2139)、淡褐色（Y2099・2102・2114)、暗赤褐色（Y2103・2122・2124・2125・2129・2136)、黄褐色（Y2115)、灰白色(Y2126)、灰色（Y2132）を呈する。これらの土器はその特徴から、前期(Y2112・2122・2123)、中期前葉（Y2113～2115）で、他は中期中葉～後葉のものであろう。

土製品（D7・24～26・28・30、PL.LXI）　D24は匙形土製品の匙部破片であろう。柄接合部以外の縁辺を欠失する。G－24台地上ピット内出土のものと比較して大形である。胎土は砂を含み、焼成は良好。淡褐色を呈する。D25は用途不明の大形円盤状土製品である。図示された面は指で

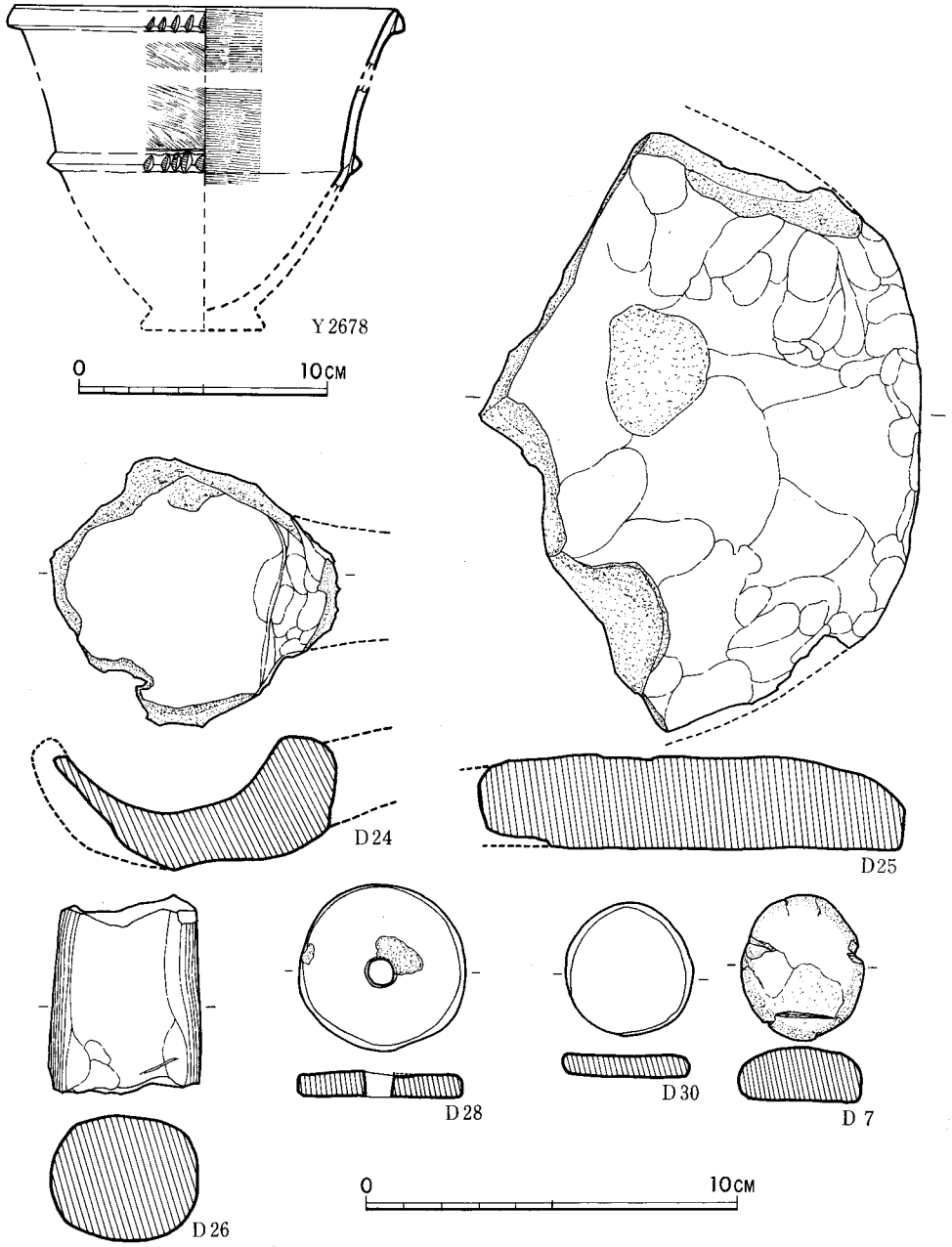


Fig.4・56　Ｇ－24トレンチ客土層出土土器・土製品実測図(8)

押さえたりしてかなり凹凸があるが、他の面は割合に平坦である。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。灰褐色を呈する。あるいは受け台の様なものででもあったのであろうか。D26はやや扁平な円形の断面をもち、現状は棒状を呈する。表面は磨耗しているがなで調整であろう。胎土は砂を含み、焼成は良い。淡褐色を呈する。支脚の破片であろうか。D28は土製紡錘車である。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。重量16.3g。D30は円盤状土製品で、土器片を利用し縁辺を打ち欠いた後研磨している。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。重量 7.5g。D7も円盤状土製品で、D30とちがい、手で握りしめて作ったものらしい。片面はほぼ平坦で、断面凸レンズ形に近い。ほぼ全面に粘土のひび割れがあり、一部には箆状のもので切痕らしいものをつけている。胎土は精良な粘土を用いており、焼成も良好。赤褐色を呈する。

b　G－25トレンチ（Fig.4・57～4・63）

甕（Y2144～2146・2148～2189・2236・2253・2297～2230）

夜臼式（Y2297・2298、Fig.4・63）

いずれも刻目突帯をもつ甕で、Y2297は口縁部、Y2298は胴部片である。Y2297の口縁部は内傾しながら外彎し、先端ではほぼ直立に近い状態となる。刻目突帯は口縁端に接して下向の斜面をもつ。刻目は大きく、外面は横位の条痕。外面には煤付着が顕著である。胎土・焼成ともに良好で暗褐色を呈する。Y2298は胴部反転部に刻目突帯を巡らすもので、内面に条痕、外面には媒の付着が認められる。胎土には石英粒砂を含み、焼成はよくない。黒色を呈する。

前期の土器（Y2144）　外反するいわゆる如意形口縁の端の縦一杯に刻目を施す。横なで調整を行い、内面は指の押圧調整。胎土に砂を含み、焼成は良い。褐色を呈する。弥生時代前期前葉板付Ⅰ式であろう。

中期前葉の土器（Y2146・2151・2152・2156・2157・2174）　いわゆる逆「L」字状口縁を呈するが、いずれも口縁の内側張り出しは未発達であり、外側張り出しも発達の弱いもの（Y2146)、ある程度発達するが、口縁上面が凹むもの（Y2151・Y2152・2156・2157・2174）があり、Y2157の口縁部は外側が下がる。横なで調整を行い、Y2156は外面刷毛目調整。Y2174は内面丹塗り。胎土には石英粒砂（Y2146・2156・2157)、砂（Y2151・Y2152・2174）を含み、焼成は良い。暗褐色（Y2156・2151・2152・2157)、灰白色（Y2156)、淡褐色（Y2174）を呈する。これらはいわゆる中期前葉城ノ越式のものであるが、Y2146以外はその中でも新しいものと考えられる。

中期中葉の土器（Y2145・2149・2150・2153～2155・2158～2173・2175）いわゆる逆「L」字状口縁（Y2145・2149・2150・2153・2158～2166・2169・2171～2173・2175）と、「T」字状口縁に近いもの（Y2154・2155・2167・2168・2170）がある。口縁下に一条の三角突帯（Y2153・2160・2172・2175)、複合三角突帯いわゆる「M」字形突帯（Y2159・2165）を巡らす

ものがある。器面調整はほとんどが、口縁部と突帯貼付け部を横なで調整。器表外面刷毛目調整のもの（Y2145・2150・2155・2156)、丹塗り磨研のもの（Y2164～2166・2175）があり、Y2168は外面に煤の付着が認められる。Y2159・2163・2166の穿孔は焼成前のものである。胎土は精良なもの（**Y2162・2173**)、砂を含むもの（Y2149・2150・2163～2167・2170～2172）以外は石英粒砂を混じる。焼成は良く、赤褐色(Y2145・2155・2169・2173)、暗褐色(Y2149・2150・2153・2168・2170)、褐色（Y2154・2158～2160・2172・2175)、黒褐色（Y2161)、淡黒褐色（Y2162)、淡褐色（Y2165～2167)、淡暗褐色（Y2171）を呈する。これらは中期中葉の土器で、いわゆる宝台Ⅰ式に比定できよう。

中期後葉の土器（Y2148・2176～2181・2184～2186・2253）Y2148・2176～2181は、逆「L」字状口縁をもつ。Y2176・2179以外は口縁部内端が下がり、「く」の字状口縁に近くなる。Y2176・2179も内端が若干下向の傾向をもつ。いずれも胴部が張り、Y2179以外は口縁下に一条の三角突帯を巡らすが、Y2181は「M」字形突帯が付けられる丹塗り磨研の土器である。いずれも口縁部と突帯粘付け部は横なで調整。Y2184～2186・2253は「く」の字状口縁をもつ。口縁部は横なで調整。外面刷毛目調整（Y2184・2186）のものがあり、Y2186には煤の付着が認められる。いずれも胎土には砂か石英粒砂を含み、焼成は良い。暗褐色(Y2148・2176・2177・2179・2184・2185)、淡褐色（Y2178・2180・2181)、赤褐色（Y2186・2253）を呈する。これらの土器は中期後葉宝台Ⅱ式に比定できよう。

後期前葉の土器（Y2182・2183・2187～2189・2236）　いずれも口縁部が「く」の字状を呈するが、Y2187以外はいわゆる跳ね上り口縁と称するものである。Y2187は口縁部の立ち上がりが中期後半のものより強い。Y2188とY2189には口縁下に一条の三角突帯が巡らされるが、Y2189のものは台形に近い。すべて口縁部と突帯貼付け部分は横なで調整。外面刷毛目調整のもの（Y2182・2187）もある。胎土には砂か石英粒砂を含み、焼成は良いが、Y2236はあまり良くない。淡褐色（Y2182)、赤褐色（Y2183・2188・2189・2236)、灰黒色（Y2187）を呈する。これらの土器は弥生時代後期前葉のもので、これまで高三潴式といわれていたものに相当する。

朝鮮系無文土器（Y2299・2300、Fig.4・63、PL.LⅢ）　Y2299は口縁外端に約1cm内外の断面楕円形の粘土紐を巻きつけ、内側から器壁上端をこれにかぶせるようにして、なでつけて付着する。一部に突帯の付着を強化するためか、下方になでつけた痕がある。口縁部は内傾する。胎土には砂粒が混じり、外面は暗褐色から黄褐色、内面は焼成時の黒変があり、黒色を呈する。焼成は良い。Y2300は口縁部粘土紐帯の破片であり、内側に器壁から剝落した痕が残る。断面は楕円形である。胎土には砂粒を若干混じ、焼成は良く、暗褐色を呈する。時期はよくわからないが、諸岡遺跡の例から前期末～中期初頭あたりのものであろうか〔後藤・横山1975〕。

壺（Y2147・2190～2205・2271）

中期前葉の土器（Y2193）　単純に外反する口縁部をもつ丹塗り磨研の土器である。外面には縦に暗文風の箆磨きがある。胎土に砂を含み、焼成良好。淡褐色を呈する。

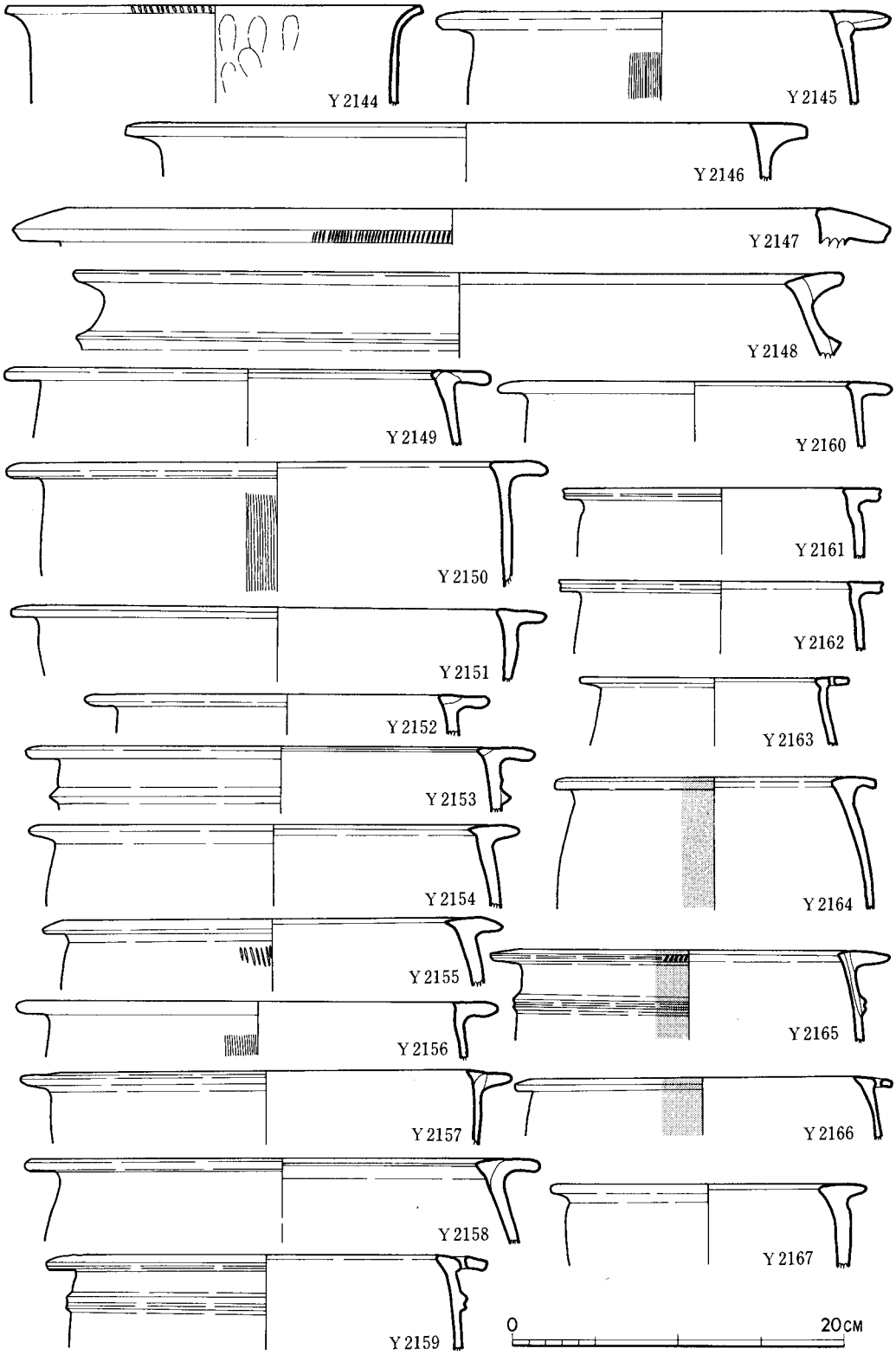


Fig.4・57　G－25トレンチ客土層出土土器実測図(1)

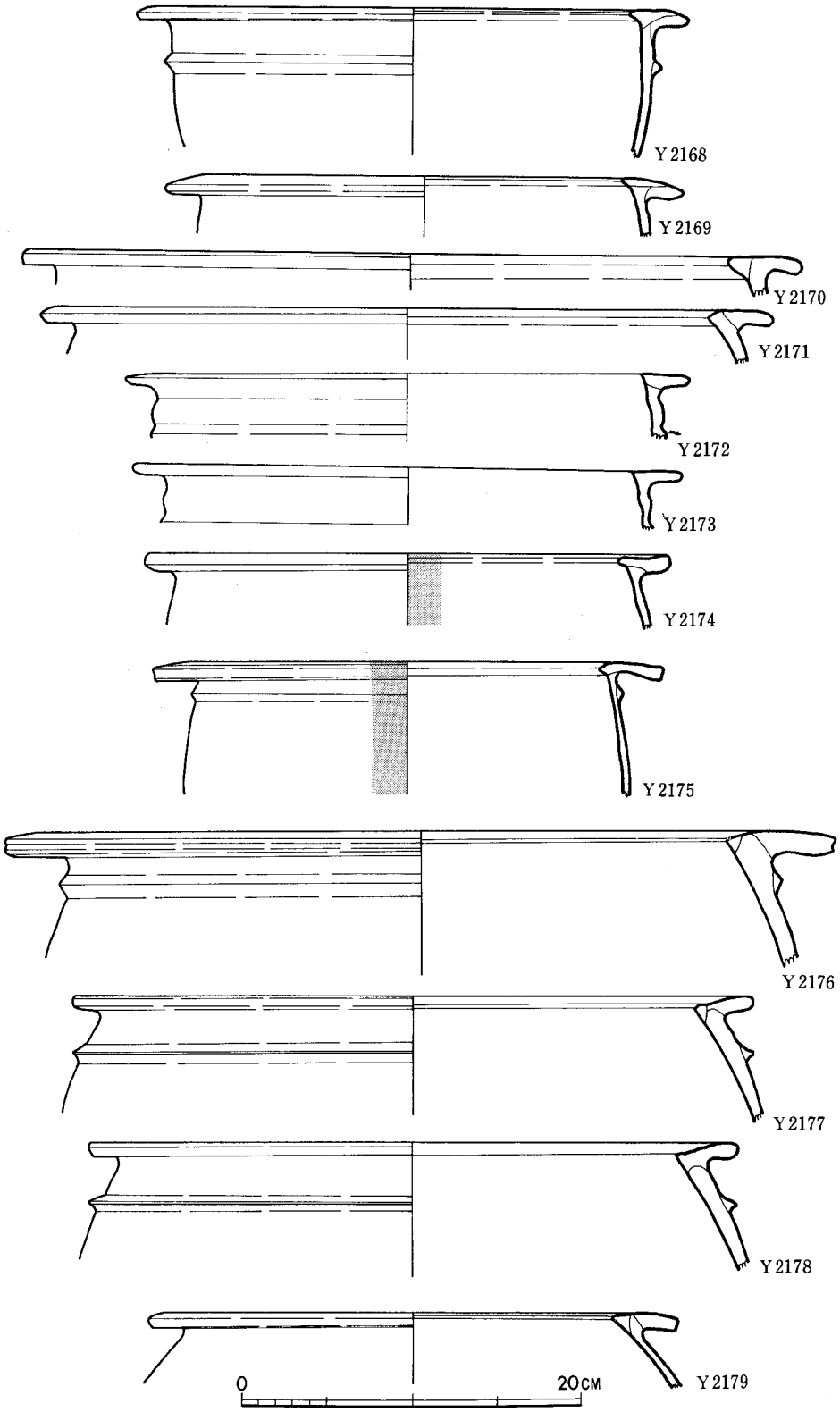


Fig.4·58　G－25トレンチ客土層出土土器実測図(2)

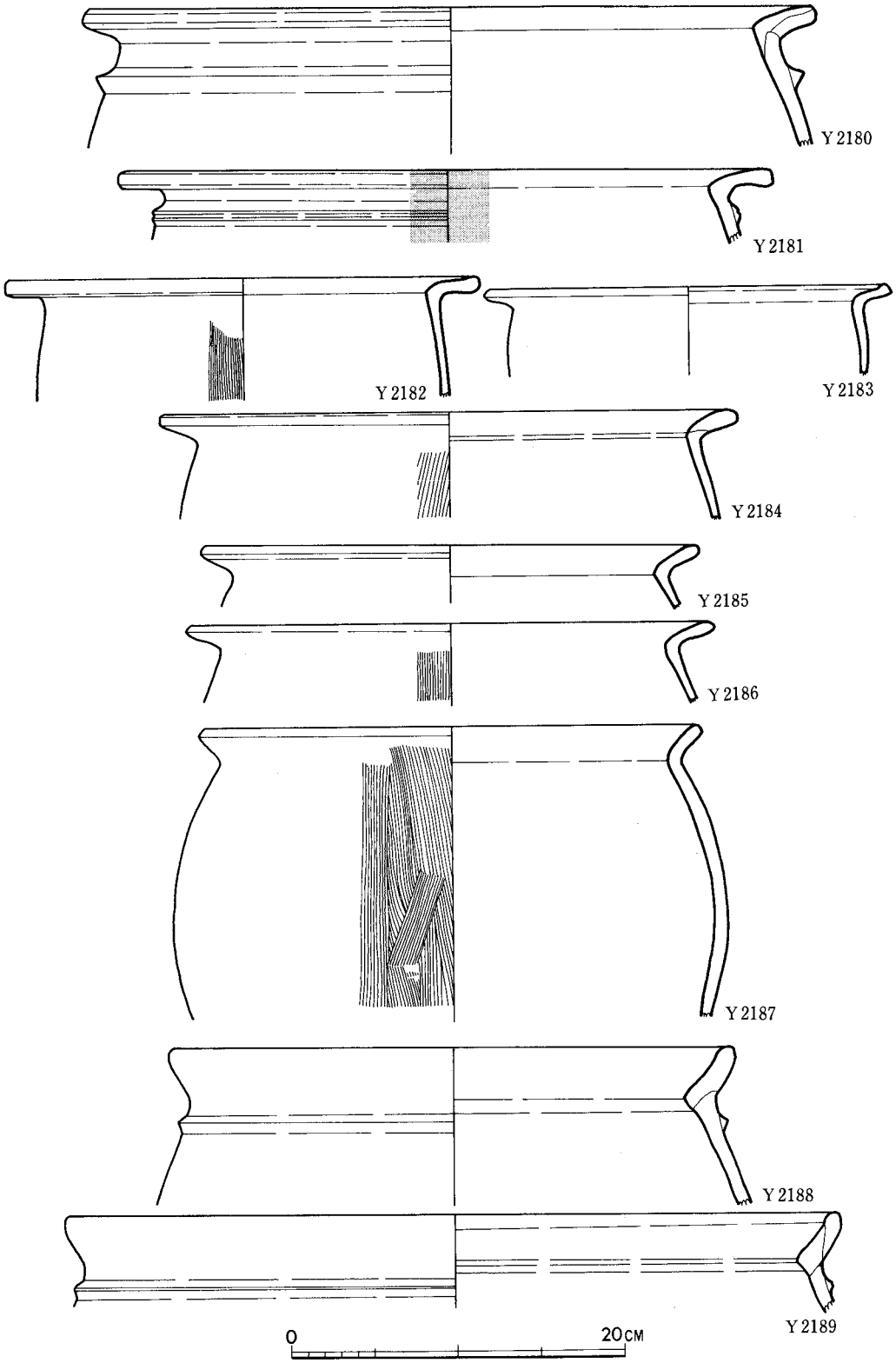


Fig.4・59　G－25トレンチ客土層出土土器実測図(3)

中期中葉の土器（Y2147・2191・2196・2198・2199）　Y2147は逆「L」字状に近い口縁部をもち、その外端に刻目がつけられる。外端が下がり、横なで調整。Y2191は特異な形状をもつ土器である。口縁部つまみ出しで、上面に凹みを作り、そこに浮文を貼付ける。Y2196は「鋤」状口縁をもつ丹塗り磨研の土器で外端に刻目を施す。横なで調整。Y2198は胴上半部片で外面丹塗り。頸部のつけ根に「M」字形突帯を巡らす。Y2199は胴下半部で、外面丹塗り。胴部に「M」字形突帯を巡らす。胎土は精良なもの（Y2147・2196）、石英粒砂を含むもの（Y2191）、砂を含むもの（Y2198・2199）があり、焼成は良い。淡褐色(Y2147・2196)、赤褐色（Y2191）、淡赤褐色（Y2198）、灰褐色（Y2199）を呈する。

中期後葉の土器（Y2190・2191・2194・2195・2197・2200～2202・2301）　Y2190は頸部つけ根に一条の三角突帯をもち、横なで調整。内面には指の押圧調整。口縁部を欠失するが「鋤」状口縁をもつと思われる。Y2192は「鋤」状口縁をもち、その口縁外端が若干下がり、沈線状に凹む。横なで調整。外面には縦刷毛目調整。Y2194は「鋤」状口縁であるが、頸部が直立しており、逆「L」字状に近い。外面刷毛目調整の後丹塗り。Y2195は口縁部を欠失するが、頸部つけ根に一条の三角突帯が巡る。外面刷毛目調整。口縁は「鋤」状と推定される。

Y2197は「鋤」状口縁の外端が下がり、頸部つけ根に一条の三角突帯が巡らされる。口縁上面には円形の浮文が貼付けられ丹塗り磨研の土器である。Y2200は小形の壺で短く外反する口縁部をもつ。横なで調整。外面刷毛目調整。Y2201も小形の壺で「鋤」状口縁をもつが、内端が若干下がる。外面に一部縦の刷毛目調整が認められる。内面には指のなで上げ調整痕。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好で、灰白色を呈する。Y2201・2202は袋状口縁の壺で外面丹塗り。ともに口縁下に一条、Y2201は頸部つけ根にも一条の三角突帯を巡らす。Y2201は内面にしぼりの痕がみられる。Y2271は胴部破片であるが、袋状口縁をもつと推定される。外面刷毛目調整の後丹塗り。胎土には精良なもの（Y2194・2202・2271）、砂を含むもの（Y2197）、石英粒砂を混じるもの(Y2190・2192・2195・2200・2201)があり、焼成はY2209が少しよくないが、他は良好。淡褐色（Y2190・2192・2194・2197）、褐色（Y2195・2200）、灰褐色(Y2201)、黄褐色（Y2209）、赤褐色（Y2271）を呈する。なおY2197はここでは中期後葉に比定したが、福岡県久保長崎例〔松岡・宮原1963〕では後期前葉の住居址に伴っており、あるいは時期が下がるものかもしれない。

後期の土器（Y2203～2205）　Y2203・2204は袋状口縁の土器である。Y2203は中期後葉のものに比較して、頸部の外反が強くなる。外面縦刷毛目、内面横刷毛目調整。口縁の外面に丹塗り。Y2204は袋状口縁の中央に稜がつけられる。横なで調整。Y2205は外反する口縁の内端が断面三角状に立ちあがり、外端はたれ下がる。横なで調整。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。褐色（Y2203）、淡褐色（Y2204・2205）を呈する。Y2203・2204は後期前葉の土器である。Y2205は福岡平野では稀な土器で、畿内・瀬戸内系のものであろう。

高坏（Y2206～2224、PL.LIII） Y2206～2210は坏部である。いずれも「鋤」状口縁をもちY2207以外は外端が下がる。Y2206は内端張り出し部がほとんどない。Y2208・2209は口縁下に一条

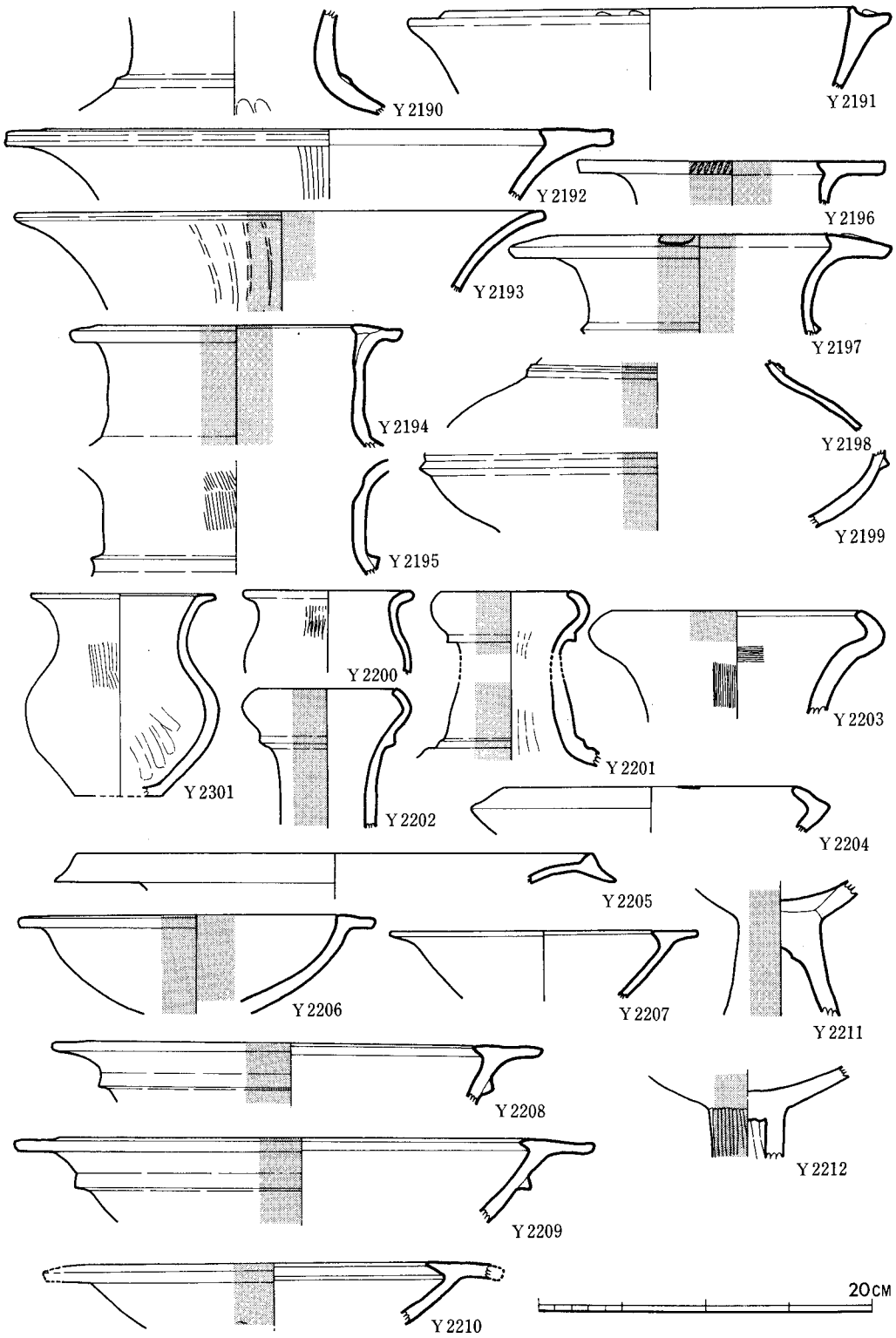


Fig.4・60　G－25トレンチ客土層出土土器実測図(4)

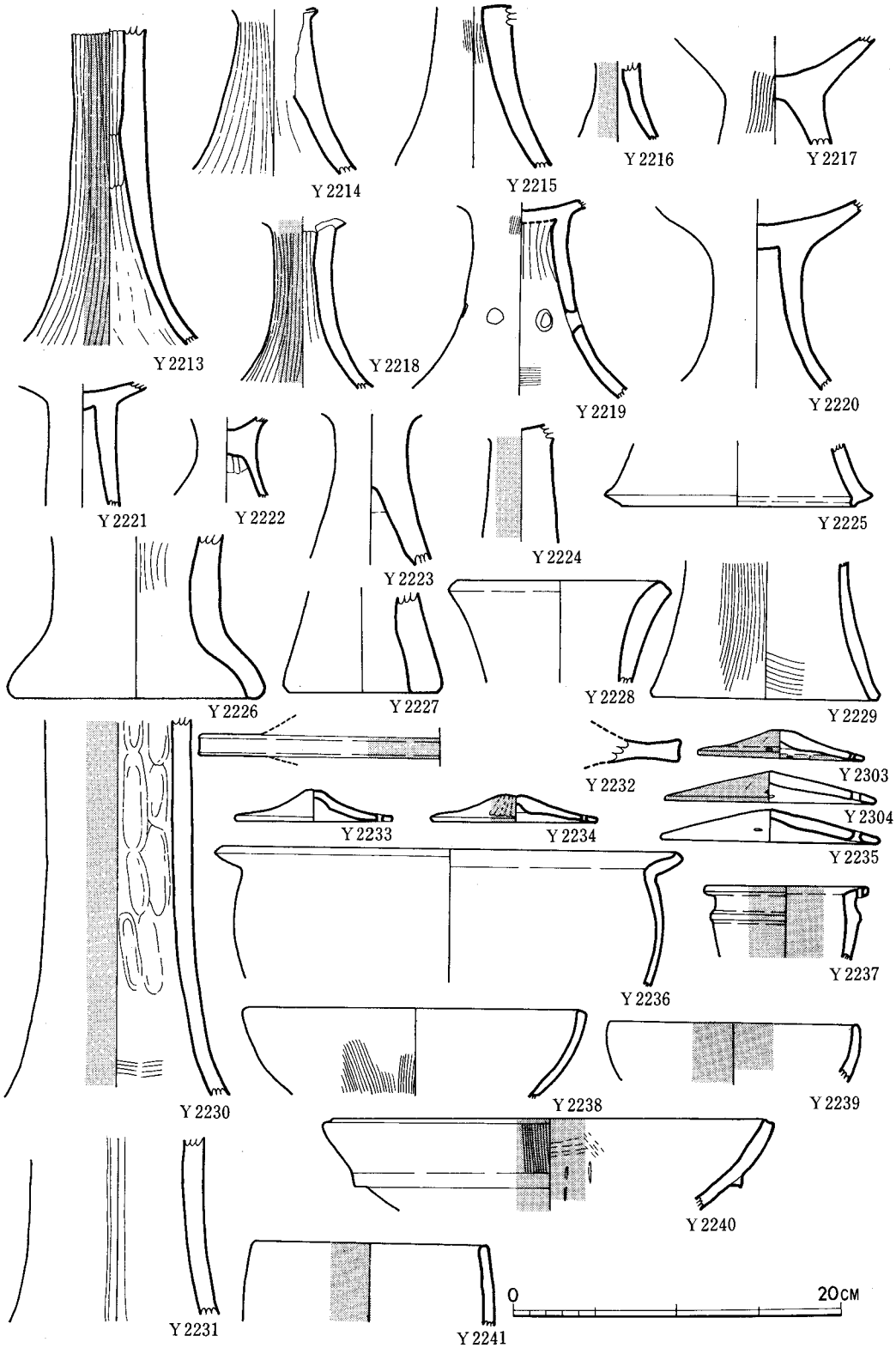


Fig.4・61　G－25トレンチ客土層出土土器実測図(5)

の三角突帯がつけられる。Y2206は全面、Y2208～2210は外面丹塗り。Y2211～2224は坏と脚の接合部および脚部である。Y2211～2213・2216・2218・2224は外面丹塗り。ほとんどがなで調整である。Y2212～2216・2218・2219・2222は内面にしぼりの痕がみられ、Y2217・2218は外面、Y2219は内外面とも刷毛目調整。Y2219は脚部に4個の円孔が焼成後に穿たれている。胎土は精良なもの（Y2206・2212・2213・2216・2219・2220）、砂を含むもの（Y2207・2210・2217・2218・2221・2223・2224）、石英粒砂を混じるもの（Y2221・2214・2215・2222）があり、焼成はY2215・2222があまり良くなく、他は良好。黄白色（Y2206・2211・2218）、淡褐色（Y2207～2210・2213・2216・2217・2222）、赤褐色（Y2212・2223・2224）、淡黒褐色（Y2214）、褐色（Y2215・2220）、灰褐色（Y2219・2221）を呈する。これらの高坏は、Y2206～2213は中期中葉～後葉、Y2214～2224は後期前葉のものであろう。

器台（Y2225～2229）　Y2225～2227・2229は脚裾部、Y2228は口縁部である。Y2225は裾部が内部につまみ出されており、横なで調整。あるいは高坏の脚部かもしれない。Y2226は内面しぼり。Y2229には内外面とも刷毛目調整。胎土は精良なもの（Y2225・2227）、と砂を含むもの（Y2226・2228・2229）があり、焼成は良好。褐色（Y2225・2228）、淡褐色（Y2226・2227）、暗褐色（Y2229）を呈する。Y2228・2229は中期、他は後期のものであろう。

大型器台（Y2230～2232）　Y2230・2231は脚部、Y2232は上部鍔の部分である。Y2230とY2232の外面は丹塗り。Y2230は内面下方に部分的に横刷毛目調整。内面上部は指による押圧調整痕。Y2231は胴部に幅の狭い切り込みが4ヶ所あると推定される。いずれも精良な胎土を用い、焼成良好。淡褐色（Y2230）灰褐色（Y2231・2232）を呈する。これらは中期後葉のものである。

鉢（Y2237～2241）　いずれも鉢であるが、Y2237は小形の甕、Y2239～2241は高坏、あるいは脚付きの鉢、あるいは埦の可能性がある。Y2237は外反する口縁部の内側が丸味を帯び口縁下外側に台形状の突帯が巡る。口縁部には焼成前と思われる穿孔がある。内外とも丹塗りで表面箆磨研。Y2238は外面刷毛目調整。口縁部は横なで調整。Y2239は内外とも丹塗り磨研の土器である。Y2240は口縁部端が凹む。口縁下に一条の三角突帯が巡り、外面刷毛目調整。内面は箆による調整痕が残る。内外とも丹塗り。Y2241は外面丹塗り。胎土は精良なもの（Y2237・2240・2241）、砂を含むもの（Y2238・2239）があり、焼成良好。灰白色（Y2237）、淡褐色（Y2238）、赤褐色（Y2239・2240）、褐色（Y2241）を呈する。これらはいずれも時期は判然としないが、中期後葉～後期前葉のものであろう。

蓋（Y2233～2235・2303・2304）　いずれも無頸壺かY2237のような土器の蓋だろう。穿孔は焼成前。Y2234は外面に縦に暗文風の箆調整。その後丹塗り。外面は外縁に沿って横刷毛目調整。Y2233・2235には丹塗りはみられない。Y2303は内面にも若干丹がみられる。いずれも胎

土は精良な粘土を用い、淡褐色を呈する。焼成はＹ2233以外は良好。これらは中期中葉～後葉のものであろう。

無頸壺（Ｙ2242～2252・2305・2306）　いずれも口縁部に穿孔を有する無頸壺であるが、Ｙ2242・2248・2250・2251・2306は破片中には穿孔は認められない。口縁部は、断面三角形の突帯を貼付け上面を平坦化するもの（Ｙ2242）、口縁内側が下がり、「く」の字状に近いもの（Ｙ2252）、外側への張り出しが強くなり、上面が平坦なもの（Ｙ2247・2305・2306）、口縁部がわずかに立ち上がり、上面が内傾化したもの（Ｙ2246・2250）、立ち上がりが強く「く」の字状になるが、外に向かって屈曲し、外端で平坦面をもつもの(Ｙ2243～2245・2248・2249・2251)に分けられる。穿孔はいずれも器面調整後で、丹塗りや焼成の前に行われる。Ｙ2242・2243・2247・2249・2306は内外とも、Ｙ2245・2246・2250・2252・2305は外面から口縁上面、Ｙ2248は外面から内面の上部まで、Ｙ2244は外面のみ丹塗り。口縁部は横なで調整のものが多いが、Ｙ2245は外面上部⅓は横位の､その下は縦位の刷毛目調整。胎土は精良な粘土を用いたものが多いが、砂を混じるもの（Ｙ2242・2248・2250・2252）もあり、焼成は良い。褐色（Ｙ2242・2243・2245・2251)、灰白色（Ｙ2244)、淡褐色（Ｙ2246～2249)、灰褐色（Ｙ2250･2252･2305･2306）を呈する。これらの土器は、Ｙ2242が中期前葉、Ｙ2247・2305・2306が中期中葉、他は中期後葉のものであるが、上記口縁部の分類順序で、後のものほど新しいものであろう。

底部（Ｙ2254～2270）　Ｙ2254・2261～2270は壺、他は甕であろう。Ｙ2255～2261・2267・2268は上げ底を呈する。Ｙ2263～2270は外面丹塗り。Ｙ2259は甑で、底面の穿孔は焼成後。器表内外面とも刷毛調整のもの（Ｙ2270)、外面刷毛目調整（Ｙ2257～2259・2264)、内面刷毛目調整のもの（Ｙ2265・2269)、内面に指の押圧調整痕の残るもの（Ｙ2263～2265・2267・2268）があり、Ｙ2265の外面は横の箆磨研。胎土は精良なもの（Ｙ2261・2266）もあるが、ほとんどは砂を含み、焼成はＹ2256を除き良好。灰褐色（Ｙ2254・2262)、淡褐色（Ｙ2255･2256･2259･2260・2263・2266・2268・2269)、褐色（Ｙ2257・2264)、赤褐色（Ｙ2258)、灰白色（Ｙ2261･2265・2270)、淡赤褐色（Ｙ2267）を呈する。Ｙ2255は中期初頭、Ｙ2257･2258は中期前葉、Ｙ2260は前期のもの、他は中期中葉～後期前葉のものであろう。

土製品（Ｄ10・21～23、Fig. 4・63）

Ｄ10は投弾である。片側半分を欠失している。胎土には石英粒砂を含み、焼成は良好。黒褐色～赤褐色である。Ｄ21・22は用途不明土製品である。Ｄ21は直径２cm・長さ３cm前後の棒状のもので両側から穿孔されているが貫通はしていない。胎土に若干の雲母と細砂を含み、焼成は良好。淡褐色を呈する。Ｄ22は断面が長径2.4cm・短径1.9cmの楕円形をなし現存の長さは約4.8cmで両端は折れている。胎土、焼成ともに良好で、淡褐色を帯びる。Ｄ23は把手状のもので両端を欠失する。断面は約1.5×1.2cmの不整な楕円形をなす。土製勾玉の可能性もある。胎土には砂を含み、焼成は良好。黒褐色だが、一部暗黄褐色。

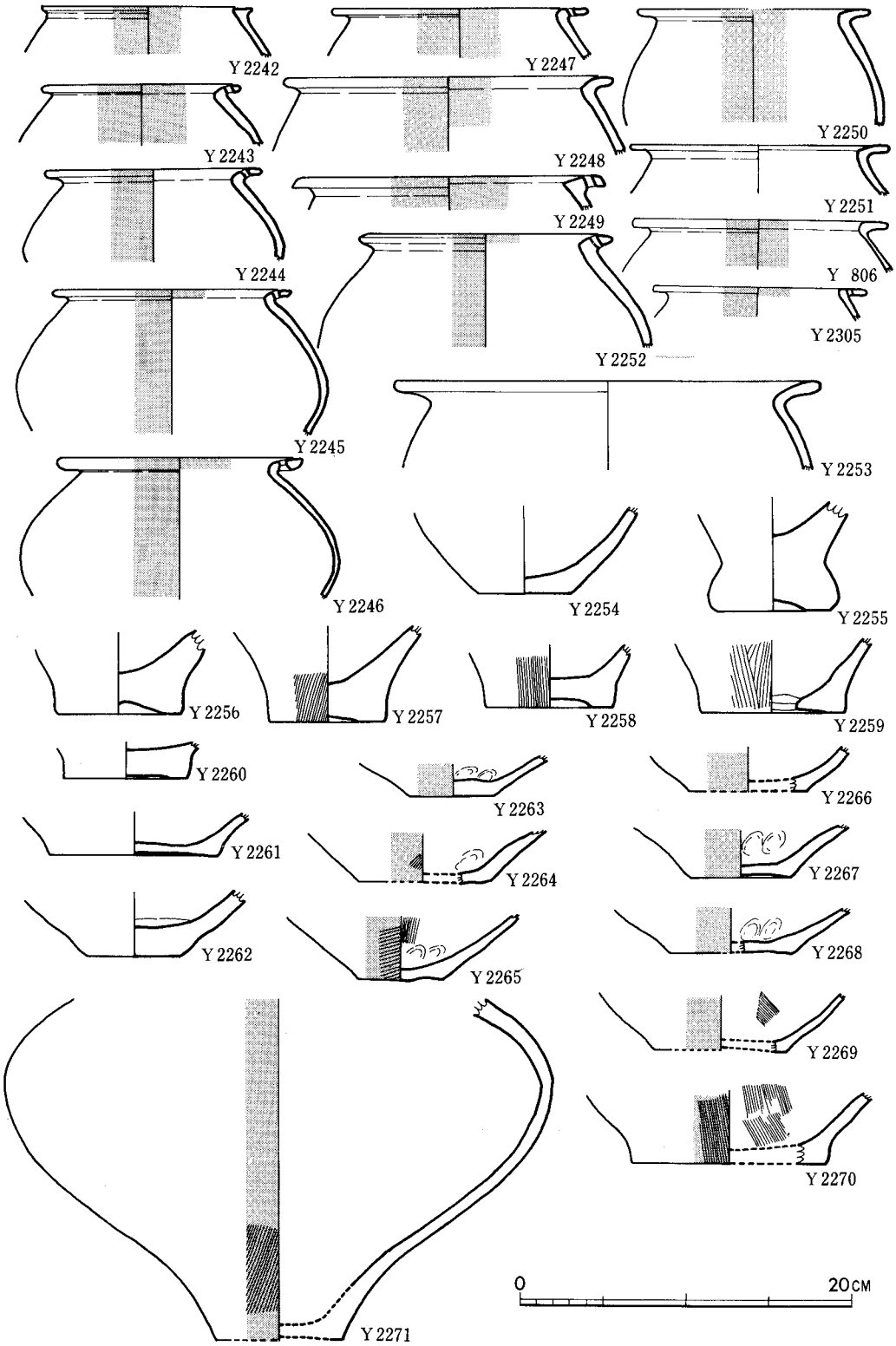


Fig.4・62　G－25トレンチ客土層出土土器実測図(6)

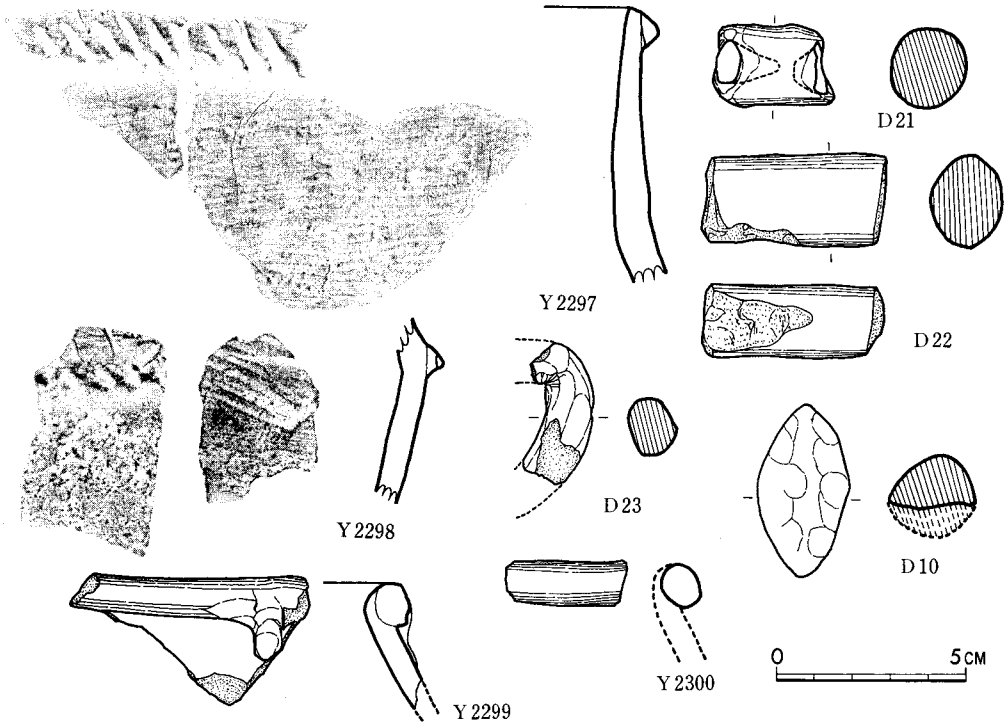


Fig. 4・63　G－25トレンチ客土層出土土器・土製品実測図(7)

c　G－26トレンチ (Fig. 4・64～4・67)

甕（Y2319～2325・2379～2387）

中期前葉（Y2379）　口縁外端が下がり気味の口縁部をもち、上面が凹む。内側張り出しも若干みられ、中期前葉でも新しいものである。口縁下外端は強い横なで調整がある。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。黄褐色を呈する。

中期中葉（Y2381～2383）　いずれも逆「L」字状口縁をもつ。Y2382は口縁部外端が下がり、胴部は張る。口縁部は横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。褐色を呈する。中期中葉でも新しい。Y2383は内側張り出しが強く、「T」字状に近くなる。口縁部は横なで調整で口縁下外面には強くなでた痕が残る。外面縦刷毛目調整。煤の付着が認められる。胎土は石英粒砂を含み、焼成は良くない。暗褐色。Y2381は丹塗り磨研の土器で、口縁下に一条の「M」字状突帯が巡る。口縁外端は沈線状に凹む。口縁外端が下がり、内面には強い横なで調整がある。胎土・焼成ともに良好である。

中期後葉（Y2319・2324・2325・2380・2384・2386・2387）　Y2324は口縁内外の張り出しが強く「T」字状となる。胴部も強く張る。口縁部横なで調整。口縁外端は沈線状に凹む。胎土は石英粒砂を含み、焼成は良い。甕棺であろう。褐色。Y2319は逆「L」字状口縁の内端が

下がり、「く」の字状に近くなる。口縁部は横なで調整。外面縦刷毛目調整で煤の付着も認められる。内面には接合の痕が残る。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。赤褐色を呈する。Y2387も「く」の字状に近い口縁をもつ。口縁部は横なで調整。外面は縦刷毛目調整。胎土に砂を含み、焼成は良い。黒褐色。Y2380は逆「L」字状口縁だが、内側張り出しがなく、下がる。胴部外面と内面上部は横刷毛目調整。外面には煤の付着も認められる。胎土・焼成ともに良好で、褐色を呈する。Y2384は「く」の字状口縁をもつ。口縁部横なで調整。口縁下外面には強い横なでの痕が残る。外面は縦刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良く、暗褐色を呈する。Y2325は内側張り出しが発達して「T」字状口縁となるが、内端が下がる。口縁外端は沈線状に凹む。胴部は強く張ると推定される。甕棺であろう。胎土に砂を含み、焼成は良い。褐色を呈する。Y2386は「く」の字状の口縁をもつ丹塗りの土器である。口縁部は横なで調整。外面に縦、内面口縁下に斜めの刷毛目調整。胎土は良好だが焼成はあまり良くない。淡黄褐色を呈する。

後期前葉（Y2320～2323・2385）　Y2385は「く」の字状に外反する口縁がわずかに内彎している。口縁下に一条の三角突帯が巡る。内外面とも煤の付着が認められる。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。暗褐色を呈する。甕棺か。Y2320は「く」の字状口縁をもち、胴部が張る。口縁反転部内面には稜がつく。口縁部は横なで調整で、外面縦刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。黄褐色を呈する。Y2321も同じく「く」の字状口縁をもち、内面に稜がつく。口縁部は横なで調整。外面は刷毛目調整。胎土に砂を含み、焼成は良好。黄褐色。Y2322も同様で、淡褐色を呈する。Y2323も「く」の字状を呈するが、口縁のたちあがりは強い。器面があれているために調整不明。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。淡褐色を呈する。

壺（Y2326～2331・2339・2388・2392）

中期前葉（Y2339）　単純に外反する口縁部をもつ。外面は丹塗りで、胎土には石英粒砂が含まれる。焼成は良く、丹塗り部以外は黄褐色を呈する。

中期中葉（Y2326・2388）「鋤」状口縁をもつ。口縁外端は下がり、口縁部横なで調整。胎土に砂を含み、焼成は良好。暗褐色。Y2388はやはり「鋤」状口縁をもち、口縁外側張り出しが強い。内端が若干下がり、外面と、内面上部まで、丹塗りの痕がある。胎土は石英粒砂を含み、焼成は良い。黄褐色を呈する。

中期後葉（Y2327・2328・2330・2389・2391・2392）　Y2327は「鋤」状口縁をもつが、外側張り出しは退化し、下向する。口縁部横なで調整。内面には指のなであげ調整。胎土に砂を含み、焼成良好。黄褐色。Y2328も同様の器形であるが、口縁外端は沈線状に凹む。胎土・焼成ともに良好で、褐色を呈する。Y2330・2391・2392は袋状の口縁をもつ壺である。Y2391は口縁下に一条の三角突帯を巡らし、外面は丹塗り。内面にも一部丹の痕跡があるが、塗布時に、流れ落ちたものであろう。胎土・焼成ともに良好で、丹塗り部以外は黄褐色を呈する。Y2392も同様に、口縁下に一条の三角突帯を巡らし、外面丹塗り。内面には横なで調整がみられる。胎土には砂を含み、焼成は良い。外面と内面上部は丹塗り。頸部内面には指のなであげ調整。

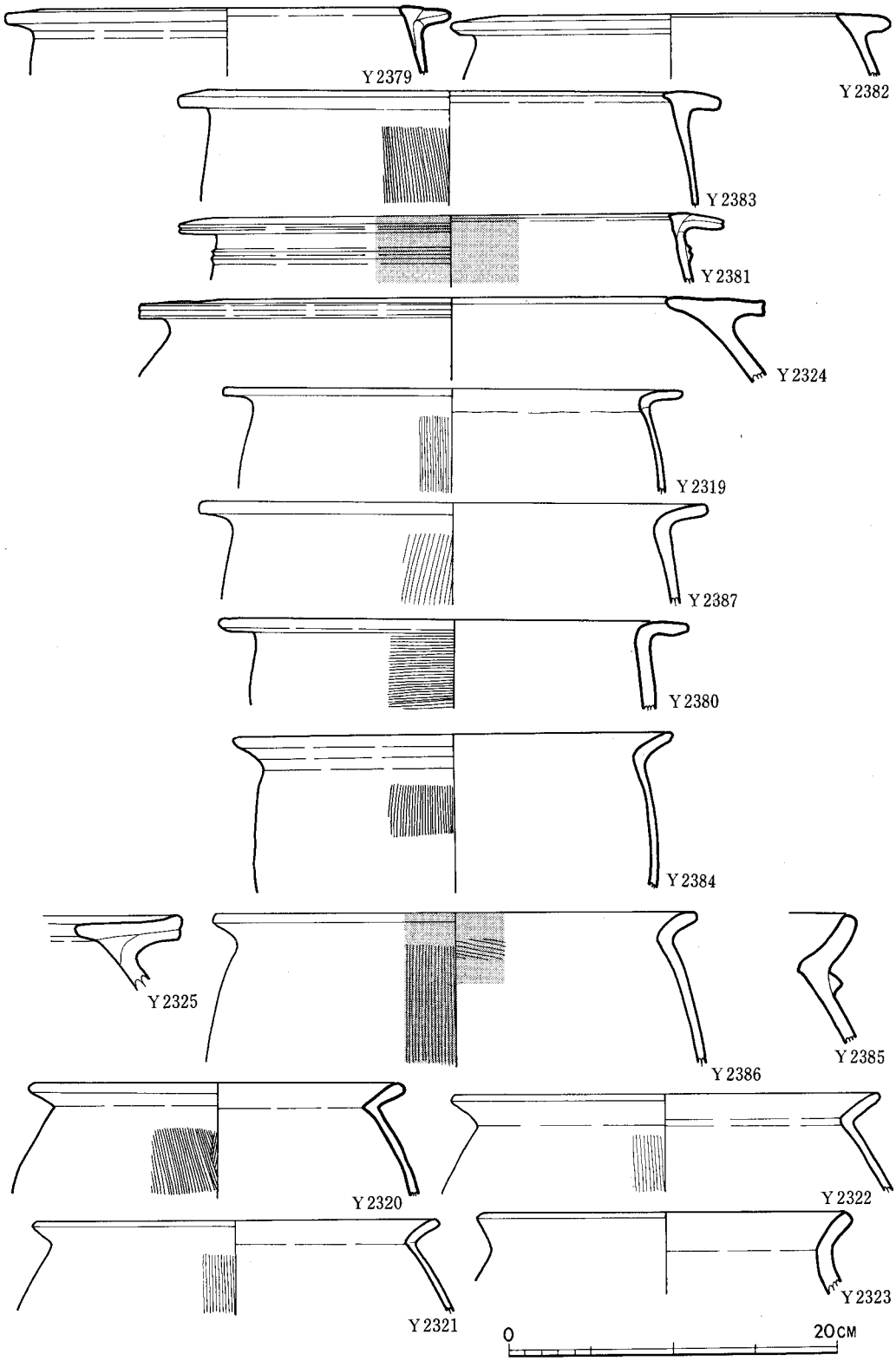


Fig.4・64　G－26トレンチ客土層出土土器実測図(1)

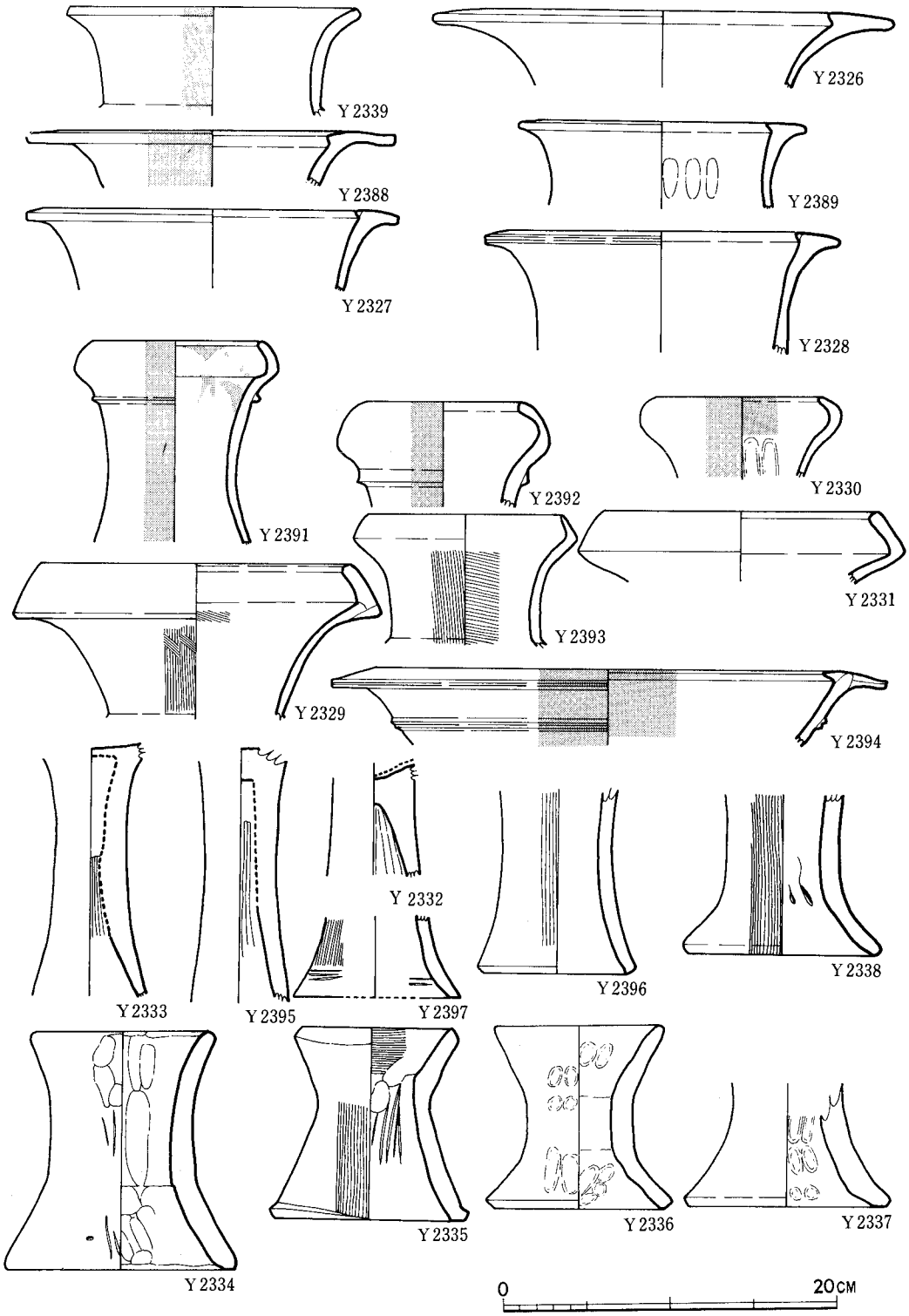


Fig.4·65　G－26トレンチ客土層出土土器実測図(2)

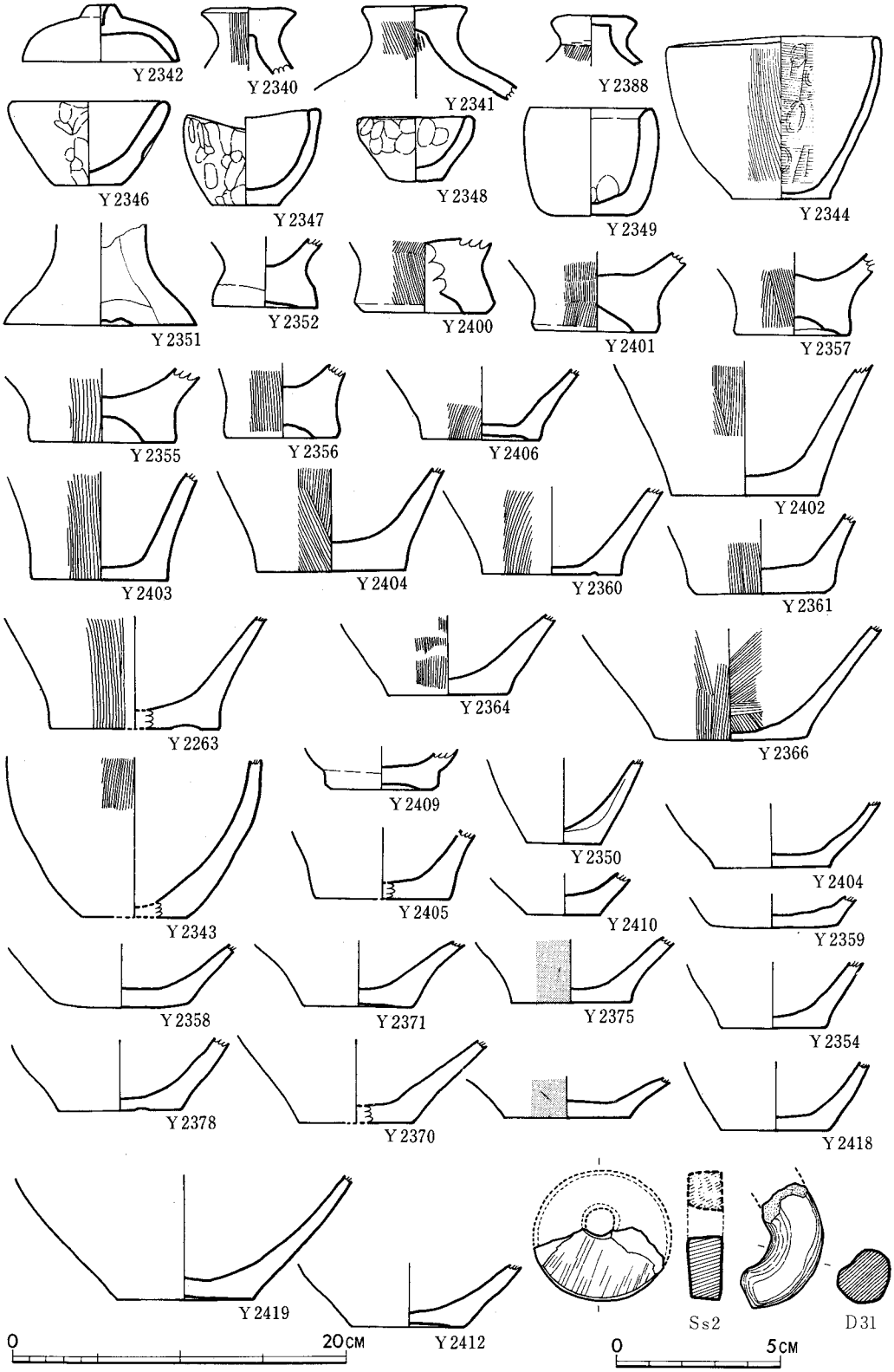


Fig. 4・66　G－26トレンチ客土層出土土器・土製品実測図(3)

胎土・焼成ともに良好で、淡褐色を呈する。

後期前葉（Ｙ2393）　外反する頸部が、あまり明瞭でない稜をもって屈曲し、二重口縁に近い口縁を形成する。頸部外面には縦刷毛目、内面には横刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。褐色を呈する。

後期中葉（Ｙ2331・2339）　Ｙ2331は逆「く」の字状に屈曲する口縁部をもち、二重口縁を形成する。屈曲部には明瞭に稜がつく。器面のあれが甚しいために調整は不明。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。黄褐色。Ｙ2329も外反する頸部が、明瞭に稜をもって逆「く」の字状に屈曲し、二重口縁を形成する。口縁部は横なで調整。頸部外面は縦の刷毛目調整だが一部斜めの刷毛目調整がある。内面には横刷毛目調整が一部にみられる。胎土には石英粒砂を含み、焼成は良好。淡暗褐色を呈する。

高坏（Ｙ2332・2333・2394・2395）　Ｙ2394は坏部である。外端が下向する「鋤」状口縁をもち、口縁下に一条の「Ｍ」字状突帯を巡らす。内外面ともに丹塗りで、口縁外端は凹む。胎土・焼成とも良好で、赤褐色。Ｙ2333は細長い脚部で、内面にしぼりがみられる。外面の調整は器面のあれが甚しいために不明。胎土には石英粒砂を含み、焼成は良い。褐色。Ｙ2395も同様の器形で、やはり内面にしぼりの痕がみられ、外面の調整は不明。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。赤褐色を呈する。Ｙ2332も脚部で、外面の調整は不明だが、内面にはしぼりの痕がみられる。胎土には砂を含み、焼成はあまり良くない。赤褐色を呈する。以上の土器は、中期中葉～後葉のものであろう。

器台（Ｙ2334～2338・2396・2397）

中期（Ｙ2396・2397）　いずれも器台の下半部である。Ｙ2396は外面縦刷毛目調整。内面裾部は若干凹む。胎土に砂を含み、焼成は良好。暗褐色を呈する。Ｙ2397も外面縦刷毛目調整で、裾部近くでは横刷毛目調整。胎土・焼成とも良好で、赤褐色を呈する。

後期（Ｙ2334～2338）　Ｙ2334は内外面とも指の調整痕が顕著である。外面裾部近くに一粒の籾痕がある。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。暗褐色を呈する。Ｙ2335は外面に縦刷毛目、内面上部には横刷毛目調整。内面には指の押圧調整痕や、箆による調整痕も認められる。胎土には石英粒砂を含み、焼成は良好。赤褐色を呈する。Ｙ2336は内外面とも指の調整痕が顕著である。胎土・焼成ともあまり良くなく、褐色を呈する。Ｙ2337は下半部であり、内面裾部に指の調整痕がみられる。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。暗赤褐色を呈する。Ｙ2338は外面縦刷毛目調整。内面には箆の調整痕も認められる。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。赤褐色を呈する。

蓋（Ｙ2340～2342・2398）　Ｙ2342以外は甕の蓋であろう。Ｙ2342は異形の蓋で、つまみ部上面は深く凹む。裾部は内彎しながら単純に開く。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。暗褐色。Ｙ2340は外面に縦刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良くない。灰褐色。Ｙ2341

も外面に斜めの刷毛目調整で、内面にはしぼりの痕が残る。つまみ部上面は若干凹む。胎土に砂を含み、焼成は良好。暗赤褐色。Y2348も外面縦刷毛目調整。胎土に砂を含み、焼成は良好。褐色を呈する。中期後葉～後期のものであろう。

鉢（Y2344・2346～2349）　Y2344を除いて、他は手捏ねの土器である。Y2344は、口縁部でわずかに内彎する。外面は縦の刷毛目調整。内面は指の押圧調整の後、横刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良くない。暗褐色を呈する。外面には一部煤の付着が認められる。Y2346は単純に口縁部が開く。内外面とも指の調整痕が顕著である。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良くない。褐色。Y2347はやや内彎しながら外へ開く口縁部をもつ。内外面とも指の調整痕が著しい。胎土には石英粒砂を含み、焼成は良好。褐色を呈する。Y2348はY2346と類似した器形をもつがやや小形のものである。内外面とも指の調整痕が著しい。胎土には石英粒砂を含み、焼成は良くない。褐色を呈する。Y2349は内彎するが、ほぼ直立に近い口縁部をもつ。内外面とも指の調整痕が顕著であるが、外面は器面のあれが甚しい。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良くない。暗褐色を呈する。いずれも中期後葉～後期のものであろう。

支脚（Y2351）　裾部が広がる支脚の下半部である。底面は中央は押さえて凹ませているが、工具は不明。外面は指で調整。胎土に砂を含み、焼成は良好。黄褐色を呈する。後期のものであろう。

底部（Y2343・2350・2352・2354～2361・2363・2364・2366・2370・2371・2375・2378・2400～2406・2409～2412・2414・2418・2419）　Y2343・2352・2355～2357・2360・2361・2363・2364・2366・2400～2404・2406は甕、他は壺の底部であろう。Y2352は底部が断面三角形に張り出す。上げ底を呈し、胎土に石英粒砂を混じる。焼成は良くなく、褐色を呈する。Y2355～2357・2400・2401は、いずれも上げ底の特徴的な器形をもつ。外面は縦刷毛目調整。煤の付着が認められるもの(Y2401)もある。胎土にはいずれも石英粒砂を含み、焼成は良好なもの（Y2356・2400・2401）とあまり良くないもの（Y2355・2357）がある。暗赤褐色(Y2355・2401)、赤褐色（Y2356・2357)、黒褐色（Y2400）を呈する。Y2406も上げ底である。外面には縦刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。暗赤褐色。Y2343・2360・2361・2363・2364・2366・2402～2404は外面に縦あるいは斜めの刷毛目調整。Y2366は内面にも斜めあるいは横の刷毛目調整。胎土は良好なもの（Y2360・2402～2404)、砂を含むもの（Y2361)、石英粒砂を含むもの(Y2343・2363・2364・2366)があり、焼成も良好なもの(Y2360・2363・2366・2402～2404)とそうでないもの(Y2343・2361・2364)がある。褐色(Y2343)、暗褐色（Y2360・2366・2402・2404)、赤褐色(Y2361)、黒褐色(Y2363・2364)、灰褐色（Y2403）を呈する。Y2371・2409・

壺はY2371・2409・2412・2419は上底、Y2375・2411は外面丹塗り。胎土に石英粒砂を含むもの（Y2350・2354・2359・2405・2411・2412・2409・2410）、精良なもの（Y2370・2375・2378・2414・2419）があり、焼成も良好（Y2370・2371・2375・2378・2411・2414・2419）とそうで

ないもの（Y2350・2354・2358・2359・2405・2409・2410・2412・2418）がある。それぞれ、暗褐色（Y2350・2358・2359・2370・2375・2409・2410・2412・2414・2418）、灰褐色（Y2354・2371・2405・2419）、褐色（Y2378・2411）を呈する。（沢）

土製品（D31）　勾玉状に屈曲する用途不明土製品。一端を欠失。断面形はほぼ円形。胎土に砂粒の混入多く褐色を呈する。（横山）

(2)　石　器・石製品（Fig.4・73～4・79、PL.LX～LXII）

G－24～26各トレンチの客土層では、弥生時代石器・石製品も出土した。以下種類ごとにのべる。

石庖丁（S1021・1023・1099・1105・1108・1134・1202・1203・1206・1215）

S1099は両端部をわずかに欠失するが、身幅が狭く、直線的な背部とゆるく外彎する刃部とを有する。刃部は両面より研ぎ出されて身部との間に稜をなしている。また片面には一個の非貫通穿孔痕を残す。重量60g。青味を帯びた小豆色凝灰岩。S1021は石庖丁未成品か。背・刃部にあたる個所には敲打状の細かい剝離を加えており、両面に体部研磨が進み、また片面の一部には刃付けと考えられる研磨が施されている。素材の片側には節理面を残し、堆積岩特有の剝離性の利用がうかがえる。頁岩製。S1023は直背外彎刃石庖丁の破片。砂岩製。以上3点はG－25トレンチ出土。

S1134は全体に磨滅が甚だしく穿孔一個を残すのみである。頁岩質。S1105は背部の一部分を残し、直線形になるものと考えられる。頁岩質石材製。S1108は背部は直線をなし、身幅の狭い半月形となろう。刃は両刃となり、穿孔は両面よりなされ、約2cm間隔。頁岩質石材製。以上はG－26トレンチ出土。S1215は直線形をなす背部に外彎する刃部をもつ半月形石庖丁。体部の研磨仕上げは良好で、刃部は両面から研ぎ出される。砂岩製。S1203も半月形であろう。小豆色凝灰岩製。S1202は背部がゆるく外彎しており、杏仁形となろう。刃付けは良好で両面ともに顕著な鎬を有する。砂岩製。S1206は剝落した体部残欠。頁岩製。以上はG－24トレンチ出土。

石鎌（S1127、Fig.4・74、PL.LX）

S1127は先端及び基部を欠失するが、完成品と考えられる。体部は研磨を加えており、均一な厚みをもつ。背部には敲打状の打裂を残す。刃部は直線的になると考えられ、不整な両面からの研ぎ出しで鎬をもっている。頁岩質砂岩製。G－26トレンチ出土。

蛤刃石斧（S1104・1106・1110～1112・1123・1129・1130・1153）

出土量は多いが、いずれも破損している。

S1112は全面に敲打痕を残す頭部に近い胴部破片。砂岩質。S1130は刃部に近い胴部破片。

わずかに敲打痕がみられるが、他は研磨されている。玄武岩製。S1104は刃部破片。刃部の仕上げの良好な小形品。玄武岩製。S1123は頭部破片。全体に研磨がいきとどき、断面形は円に近い。砂岩製。S1111は刃部に近い胴部破片。扁平な断面形をもち、体部の研磨がなされているが、側辺にはまだ敲打痕を残している。頁岩質石材を用いる。S1110は破片。残存部に研磨がみられる。玄武岩製。S1129・1106・1153も胴部破片。S1129が玄武岩製、S1106・1153は砂岩製。以上はG－26トレンチ出土。

S1207は刃部を欠失するが体部研磨のいきとどいた精良品。S1205は刃部片。胴部を大きくく欠損しているが、残存部分からはずんぐりした撥形を呈する前期タイプに類似している。体部中央には敲打痕を広く残し、側辺には直交する研磨が加えられている。いずれも砂岩製。以上はG－24トレンチ出土。

環状石斧（S1109、Fig.4・76、PL.LXI）

これは復元径15cm・復元孔径3cmの環状石斧破片である。約⅓程度を残しており、体部は剥落がはげしい。刃部は縁辺に沿って研ぎ出されて、かなりの鋭利さを保っているが、非常に扁平であり、全体的に量感に乏しい。孔は両面より穿たれている。砂岩製。G－26トレンチ出土。

ナイフ様石器（S1037、Fig.4・77、PL.LXII）

小形の縦長剥片を素材とし、主要剥離面側からの刃潰し加工によって基部を形成しているが、先端部を欠損する。剥離面の石質変化は非常に顕著であり、先土器時代遺品の可能性がある。黒曜石製。G－26トレンチ出土。

削器（S1107）

剥片の表面に広い自然面を有する不整形剥片の両側縁から末端にかけて二次加工を施す。黒曜石製。G－26トレンチ出土。

剥片石器（使用痕のある剥片）（S1017・1018・1192・1193）

S1017は不整形小形剥片の末端に二次加工を施し、使用痕がある。掻器か？。表側の末端には礫面を残す。小気泡の多い黒曜石製。S1018は剥片末端に近い一側縁に使用痕がある。打面は自然面であり、ずんぐりした形。サヌカイト製。これら2点はG－25トレンチ出土。S1192・1193は一側縁に使用痕のある不整形小形剥片である。G－26トレンチ出土。

砥石（S1103・1126・1201・1204）

S1103は両面に平坦な砥面をもっている。旧形はかなり大形の砥石であった事がうかがえるが、打剥によって失なわれている。きめの細かい砂岩製。S1126は扁平な小形礫を利用した砥石で、両面の平坦部が砥面として使用されている。褐色砂岩製。いずれもG－26トレンチ出土。S1204は両平坦面および側辺に砥面をもつ小形砥石。粗粒砂岩製。S1201は明瞭な段をなして直線的にのびる研磨された平坦部分を一端に有し、この部分の形成後におこった周辺の剥落面が砥石として使用されている。この2点はG－24トレンチ出土。

磨石（S1025・1124・1170）

S1025は半分を欠失するが、花崗岩の円礫を使用した磨石である。G－25トレンチ出土。S1124・1170はいずれも花崗岩円礫を利用したもので、破損がはなはだしいが、器面は平滑さを

保っている。G－26トレンチ出土。

凹石（S1119）

S1119は非常に脆い礫の平坦部両面に打痕によって形成される凹部をもっている。周辺は剝落が著しく、使用痕は観察し得ない。粗粒砂岩製。G－26トレンチ出土。

敲石（S1020）

扁平な円礫の一面を使用し、周辺には打痕が残る。安山岩製。G－25トレンチ出土。

小礫（S1028・1132）

S1028は砂岩の扁平円礫。G－25トレンチ出土。S1132は小形長円礫で、両端に打痕を残す。花崗岩でG－26トレンチで出土した。同じような小円礫は第2区の各層で出土している。花崗岩・砂岩が多い。

紡錘車（Ss2、Fig.4・66、PL.LXI）

小形の扁平紡錘車。推定直径4cm・同孔径1cm・厚さ1cm。結晶片岩製。G－26トレンチ出土。（横山）

鋳型（Ss8、9、Fig.4・67、PL.LXI）

Ss8は広形銅矛の鋳型破片。軟質の細粒砂岩製。鋳型面には広形銅矛の関に近い身部の型が彫り込まれている。脊部が残っていて、これを基準にすれば、彫り込み残存部での最大身幅は10～10.5cm、鋳型自体の幅は約16cmと推定される。彫り込み面の左側の鋳型面は破損後に砥石に利用され、縦～斜めの擦痕があり、この面は刃部内側の彫り込み面と同じ深さまですりへっ

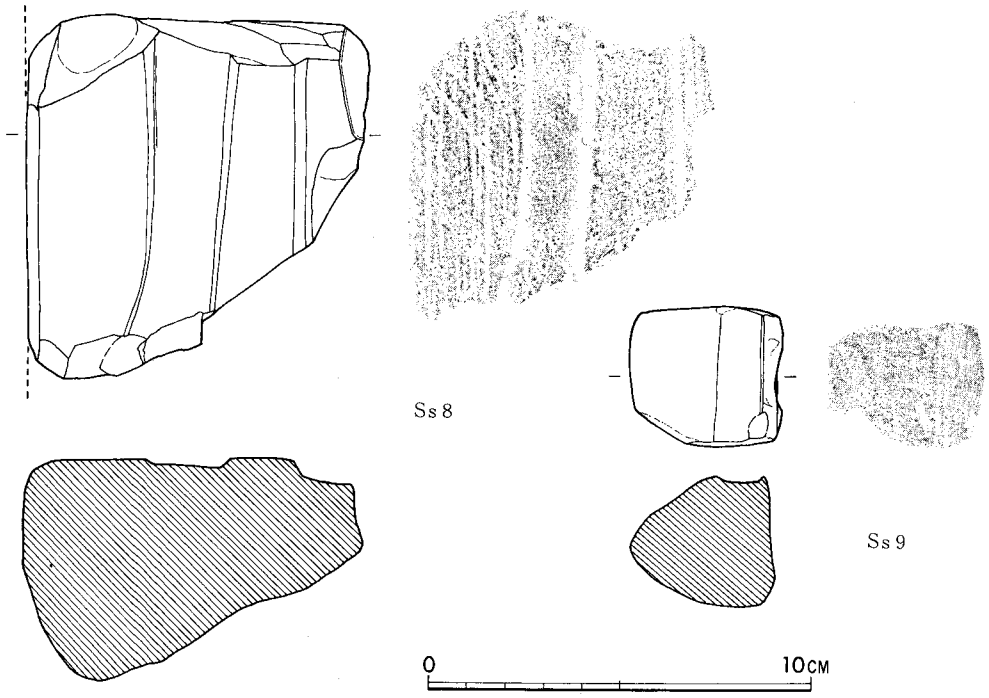


Fig.4・67　G－26トレンチ客土層出土鋳型実測図

ている。この面を基準とすれば彫り込みの深さは脊部で0.7cm・刃部外側で0.2cmとなり、本来はこれより0.1cmほど深かったろう。彫り込み面は熱のため黒変しており、この鋳型が実際に用いられたことを示している。なお側面も砥石に利用されている。現存長9.7cm・幅8.9cm・厚さ5.9cm。

Ｓｓ９も上と同じく白色細粒砂岩製の青銅器鋳型である。利器類の鋳型とみられ、現在ある彫り込み部は幅1.3cmほどで、利器の脊部であろう。後に砥石に利用され、鋳型面は斜めに相当すりへっている。現存長3.7cm・幅４cm・厚さ3.5cm。彫り込み部分は黒変し、実際に鋳型として用いたことを示す。（後藤）

３）金属器（Fig.4・68）

鉄斧１点だけである。Ｇ－26トレンチ出土。これは完形品である。刃部はわずかに弧状をなし、幅4.5cm・厚さ1.4cmを計る。刃部は袋部に向かってわずかに幅広くなるが、袋部に入ってゆるい段がつけられる。袋部は上部が最大幅となり５cm・短径も3.8cm、厚さは0.5cmで、刃部よりかなり薄くなる。鉄板の両端を折り返して袋部を作っている。全長は16cmを計る。重量約130ｇ。（沢）

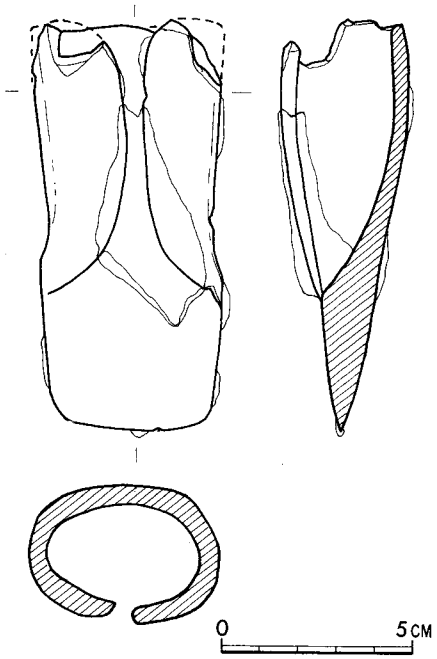


Fig.4・68　Ｇ－26トレンチ客土層出土鉄斧実測図

３　その他の包含層出土遺物

(1)　Ｊ・Ｋ－25トレンチ耕土下包含層出土弥生式土器（Fig.4・69～4・71）

耕土層と、旧河岸中期土器群・畦状遺構との間の砂・砂質土・粘質土層（Fig.4・7南壁の第８・18・20・26・25・28・30・15層ふきんより上）では、多くの弥生式土器片が出土した。それより新しい土器類はほとんど出ておらず、なんらかの意味のある包含層かともみられるが、明らかでない。両側のＪ－26、Ｊ－23トレンチでは同様の土器包含層は認められない。砂層のため下の中期土器群・畦状遺構と層序的にはっきりわけられず、部分的には下位の遺構に伴うものが入っているかもしれない。

甕（Y2460・2461・2580・2581）

いずれも外反する口縁部をもつ後期前葉のものである。口縁部はやや内彎しており、いわゆる跳ね上がり口縁である。胴部はやや膨らむもの（Y2580）もあるが、他は張りが弱い。外面に縦刷毛目を有する（Y2460・2580・2581）。いずれも口縁部は横なで調整。内面口縁下に明瞭な稜をもつ。Y2461はあるいは鉢かもしれない。Y2580は口縁下外面を指で強くなでているため、その部位に凹凸がつく。胎土は良好なもの（Y2580・2581）、石英粒砂を含むもの（Y2460・2461）があり、焼成はいずれも良い。暗褐色（Y2460・2461・2581）、灰褐色（Y2580）を呈する。

壺（Y2466・2593～2595）

Y2466はいわゆる「鋤」状口縁の外端が下向し、頸部付け根に一条の三角突帯を巡らす。胴上半部で屈曲し、いわゆる瓢形土器の退化したものであろう。口縁部は横なで調整で、外面刷毛目調整の後、丹塗り。胎土に砂を含み、焼成は良好。淡黄褐色を呈する。中期後葉のいわゆる宝台II式に比定できると思われるが、若干後出するものかもしれない。Y2593は頸部が上方に向かって開き、口縁上面がほぼ平坦で外に張り出し、いわゆる「鋤」状口縁を呈する。内面端も内に向かって少し張り出す。内外面ともていねいな横なで調整を施しており、外面口縁下は煤の付着が見られる。多量の砂粒を混えた胎土を用いているが、焼成は良好で、暗褐色を呈する。宝台I式に比定でき、中期中葉のものであろう。Y2594は二重口縁をもつ。口縁外面に稜をもって内向するが、内面には明瞭な稜はつかない。頸部付け根部には一条の三角突帯を有する。外面には刷毛目調整を施した後、丹を塗っている。内面も、横刷毛目調整がみられ、口縁部だけは丹を塗っている。多量の砂粒を混えた胎土で、焼成も余り良くない。暗黄褐色を呈する。後期前葉のものであろう。Y2595は口縁と底部を欠くが、強く張つた胴部と細い頸部をもつ。外面には丹塗り。頸部内面にはしぼり痕がみられ、その下に指の押圧調整痕が認められる。胎土は精選された良好なもので、焼成も堅緻である。中期後葉～終末の袋状口縁壺の胴部であろう。

鉢（Y2623～2630）

いずれも内彎しながら開く口縁部をもつが、直立に近いもの（Y2627～2629）とそうでないものがある。Y2623は内外面ともなでによる調整を施す。底部は平底になると思われる。胎土は多量の砂粒を含むが、焼成は堅緻で、暗褐色を呈する。Y2624は底部が丸底をなすと考えられる。内外面とも箆でなでて器面調整を行うが、強弱があるために、器面は凹凸が目だつ。胎土には多量の砂粒を含むが、焼成は良く、外面灰褐色、内面暗黄褐色を呈する。Y2625は口縁部が肥厚する。外面は箆なで、内面はなでと刷毛目によって器面調整されている。胎土に砂を含み、焼成良好。黄白色を呈する。Y2626は外面に縦刷毛目、内面口縁下に横刷毛目調整を施し、内面胴部は箆なで調整され、器面の凹凸が著しい。胎土に砂粒を含み、焼成は良い。暗黄褐色。Y2627は底部を欠くが平底になると思われ、いわゆる「コップ」形土器であろう。外面には縦刷毛目、内面は箆なで調整を行い、一部に指の押圧調整痕がある。胴中位に接合痕が残り、この下は器壁が薄くなる。多量の砂粒を胎土に含み、焼成は良好。外面暗黄褐色、内面灰

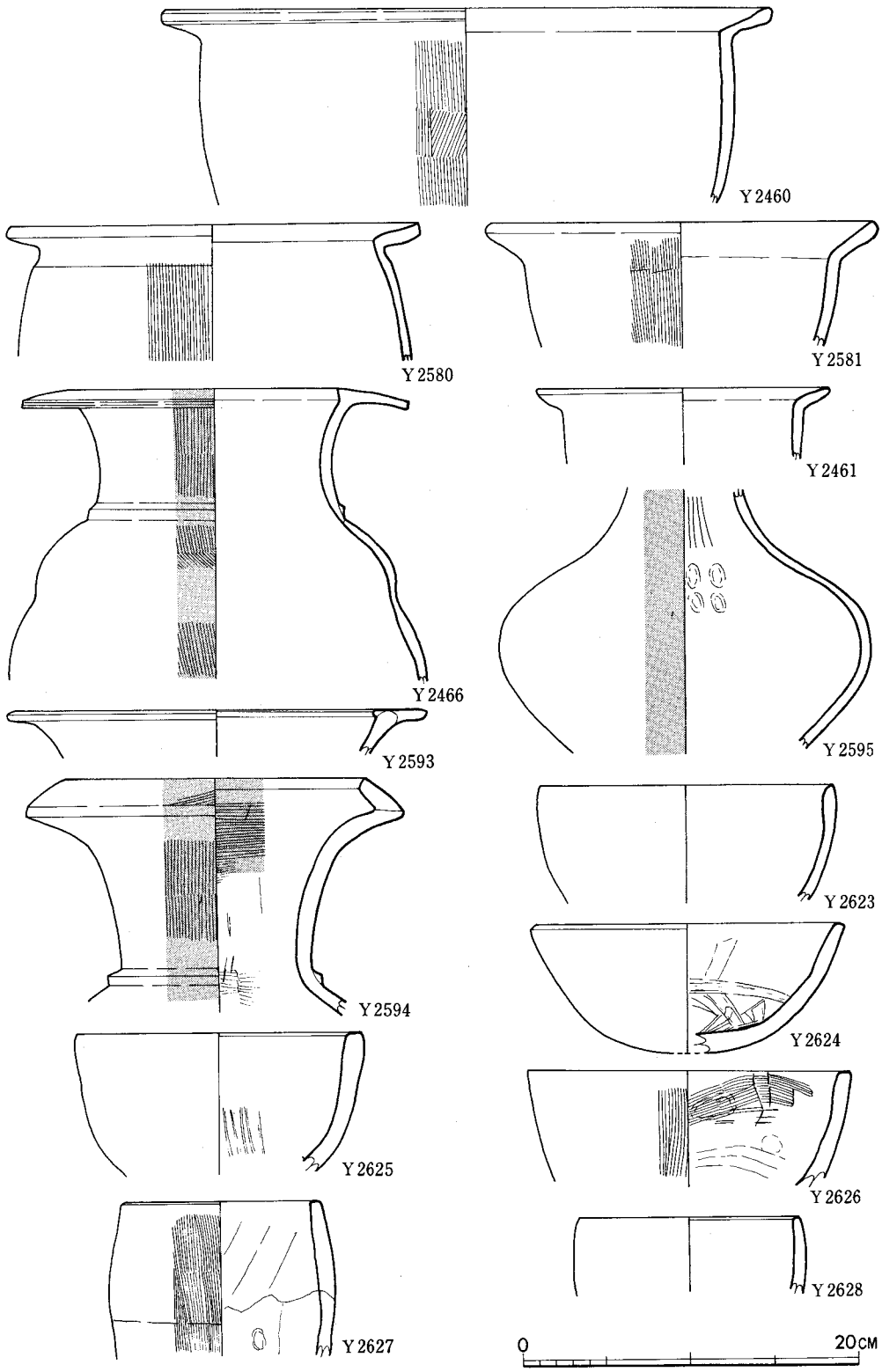


Fig. 4・69　J・K－25トレンチ耕土下包含層出土弥生式土器実測図(1)

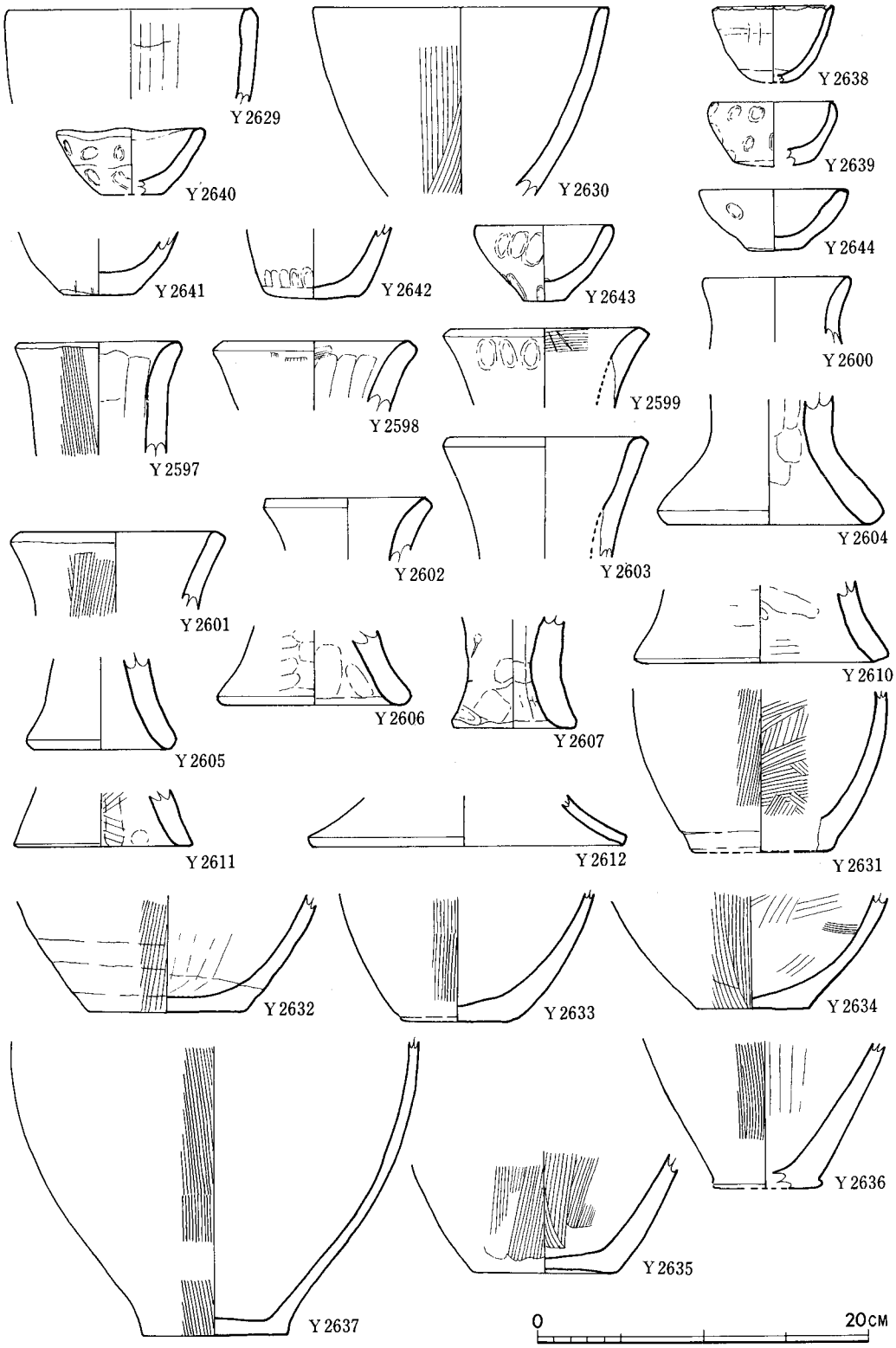


Fig. 4・70 J・K－25トレンチ耕土下包含層出土弥生式土器実測図(2)

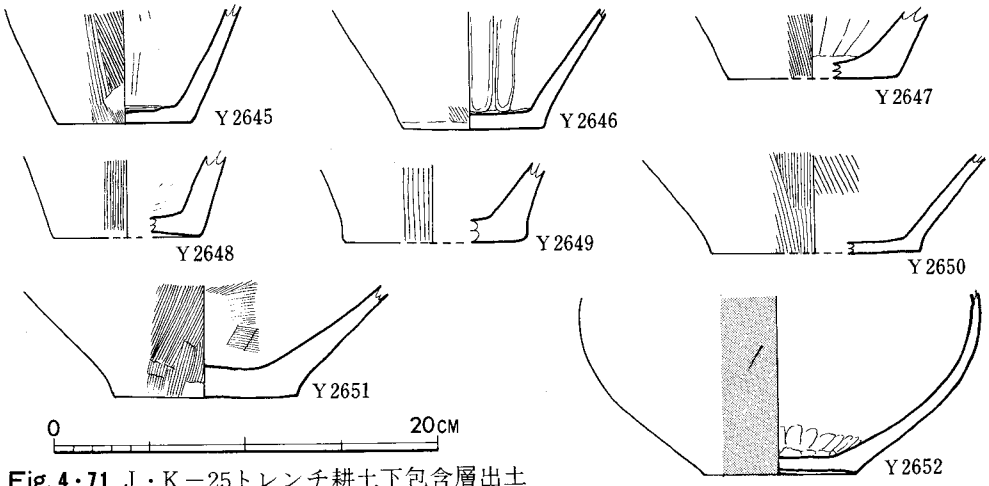


Fig. 4・71 J・K－25トレンチ耕土下包含層出土
弥生式土器実測図(3)

褐色を呈する。Y 2628・2629は内外面ともなで調整を行うが、器面の凹凸が甚しい。いずれも多量の砂を胎土に含み、焼成は良い。Y 2628は外面暗褐色、内面灰褐色。Y 2629は灰褐色を呈する。Y 2630は外面に縦刷毛目調整以外はなで調整によるが、器面は凹凸が目だつ。外面には煤の付着も認められる。胎土に多量の砂粒を混じ、焼成は良好。内面灰褐色。いずれも中期後葉～後期前葉のものであろう。

ミニチュア土器（Y 2638～2644）

いずれも鉢形のミニチュア土器である。Y 2638は丸底を呈し、外面は刷毛状の調整、内面はなで調整を行うが、器面は凹凸が甚しい。口唇部は内外面から交互に指で押圧しており、不規則な波状をなす。胎土は多量の砂粒を含み、焼成は良好。暗褐色。Y 2639は平底であるが、丸味をもつ。外面は指でおさえ、内面はなでにより調整。凹凸が甚しく、多量の砂粒を胎土に含み、焼成は堅緻。暗黄褐色を呈する。Y 2640・2641・2644は胎土・焼成などに類似点が多い。いずれも指の押圧調整で、器壁は凹凸が著しい。Y 2641は口縁部を欠失する。胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良くなく、剝落が著しい。底部付近は一部黒褐色を呈するが、他は灰褐色を呈する。Y 2642は口縁部を欠く。底部はわずかに丸味をもった平底。砂粒の混入が比較的少ない胎土で、焼成良好。外面暗褐色、内面暗黄褐色。Y 2643は内面底部になでによる段ができている。底部の径は 2.5cmで小さく、いくぶん不安定である。胎土は多くの砂粒を含み、焼成は良好。灰褐色を呈する。これらの土器は後期のものであろう。

器台（Y 2597～2607・2610・2611）

Y 2597～2607・2610・2611は器台の上部あるいは下部である。全体を示すものはなく、すべて部分的なものであるため、器形形態については、判然としない。器面調整法から見て区別するなら、Y 2597・2601のように刷毛目調整を行うもの、もしくはY 2600・2605のように内外面ともなで調整を行っているものは、概して器壁厚が一定であり、端正である。これに対し、Y 2604・2606・2607などに見られる指押えによる調整を施すものは、器壁が厚く凹凸が甚しい。

形も崩れている。だが、このいずれも胎土中に多くの砂粒を混えＹ2600を除けば焼成が悪くひび割れが著しい。器表面の色調はほとんど灰褐色か黄褐色を主としている。器面調整法における時期差は余り考えられず、一応これらの器台は中期中葉以降後期前葉までの時期の所産であると考えられる。

脚部（Ｙ2612）

Ｙ2612は高坏の脚底部と思われる。砂混りの胎土で焼成良好、淡黄褐色である。

底部（Ｙ2631～2637・2645～2652）

Ｙ2650～2652は壺形土器の底部と考えられる。残りは甕形土器もしくは鉢形土器の底部に当ると思われる。Ｙ2636・2648・2652がわずかに上げ底をなすのを除けば、底部の稜が明確でないもの（Ｙ2633）もあるが、他は一様に平底を呈する。またＹ2652を別にすれば、いずれの底部も外面に縦刷毛目、内面に刷毛目、箆なでの器面調整が見られる。Ｙ2632には輪積痕が明確に認められ、器表は凹凸が著しい。Ｙ2637は胎土に砂粒が少なく焼成の良い甕形土器であるが、その底部には籾痕がある。Ｙ2649の底部内面には炭化物の付着が見られる。Ｙ2652は外面丹塗磨研、精選された胎土を用い、焼成堅緻の玉葱状の胴をもつ底部だが、やや上げ底である所から無頸壺の可能性が強い。またＹ2651は焼成が少し異なり、丹が見られないが、胎土・色調・調整などＹ2594の二重口縁壺に類似し同一個体の可能性もある。Ｙ2637・Ｙ2652以外は胎土に砂粒を多く混える。壺形土器とみられる。底部は焼成良好だが、甕形と鉢形土器と考えられる底部は焼成不良のものが過半数を占める。器面色調は黄褐色、赤褐色、黒褐色のものが大多数である。底部のみでの時期決定は困難であるが、前述した壺、甕・鉢形土器の時期に伴うものと考えて差しつかえないであろう。　（沢・浜石）

(2)　その他の包含層出土弥生式土器（Fig. 4・72）

第2区出土の弥生式土器のうち、これまでに記した以外のもので、耕土層とその下の各層で、他の時代の遺物と混在して出土したものである。

Ｈ－25トレンチ砂層出土（Ｙ2423）　口縁部が「く」の字状を呈する無頸壺である。器面が磨耗しているため、丹塗りの有無および器面調整は不明。胎土に砂を含み、焼成はよくない。淡暗褐色を呈する。中期後葉。

Ｉ－26トレンチ耕土層出土（Ｙ2425）　壺の頸部である。付け根に二条の三角突帯を巡らし、横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成はよくない。淡褐色を呈する。

Ｊ－22トレンチ出土土器（Ｙ2424）　器台の下半部である。器面のあれが甚しい。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。褐色を呈する。

Ｋ－23・24グリッド青灰色砂層出土土器（Ｙ2563～2565）　Ｙ2563は無頸壺の口縁部で、口縁上面は平坦となる。器面のあれが甚しいため器面調整および丹塗りの有無は不明。胎土に砂を含み、焼成は良好。淡褐色を呈する。中期中葉。Ｙ2564・2565は甕の底部である。Ｙ2564は

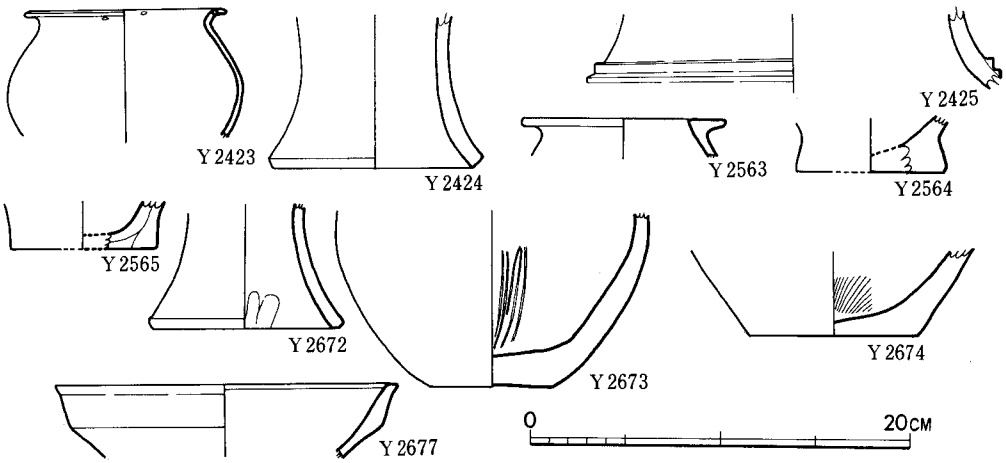


Fig. 4・72　第2区包含層出土弥生式土器実測図

胎土に砂を混じ焼成良好。淡赤褐色を呈する。Y 2565は胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。淡赤褐色。

L－26トレンチ出土（Y 2672～2674・2677）　Y 2672は器台の下半部である。内面裾部に指の押圧調整痕がある。胎土に石英粒砂を含み、焼成はあまり良くない。暗褐色。Y 2673は壺の底部であろう。内面に粗い刷毛目状の痕跡がある。胎土に石英粒砂を含み、焼成は不良。暗赤褐色。Y 2674は甕の底部で、内面に粗い刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。暗褐色。Y 2677は浅鉢か高坏の坏部と推定される。器面の調整はあれが甚しいために不明。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。黄褐色を呈する。（沢）

(3)　石器（Fig. 4・73～4・79、PL. LX～LXII、Tab. 45）

これまでに記した以外の、耕土層をはじめ、第2区各トレンチ・グリッドの遺構がなく、各時代の遺物が混在している各層出土の石器・石製品についてまとめて記す。

石庖丁（S 1001～1008・1100・1114・1133・1136・1301・1408）

S 1100は半欠ながら仕上げの良好な製品である。ていねいな研磨で均一な厚さになっており、刃部はそれほど幅広くない両刃である。小豆色凝灰岩製。S 1001は端部残欠で比較的小形のものであろう。暗紫色凝灰岩製。北東側砂層出土。S 1005・1002も背部・紐孔の一部を残して欠損が著しい。背部は直線的になろう。前者は灰白色頁岩・後者は細粒砂岩製。S 1007は残存部では身幅が狭く、器厚が刃部に向って大きくなる特徴をもっている。刃部は片刃に近い。灰色頁岩製。S 1003はていねいな研磨で仕上げられた良品で、刃部は両面からの研出しである。砂岩製。S 1006・1008・1004も残欠。いずれも背部が直線形となろう。S 1004は淡紫色凝灰岩製、他は頁岩製。G－25トレンチの木器包含層の西側（客土層の下）にひろがる砂層を中心と

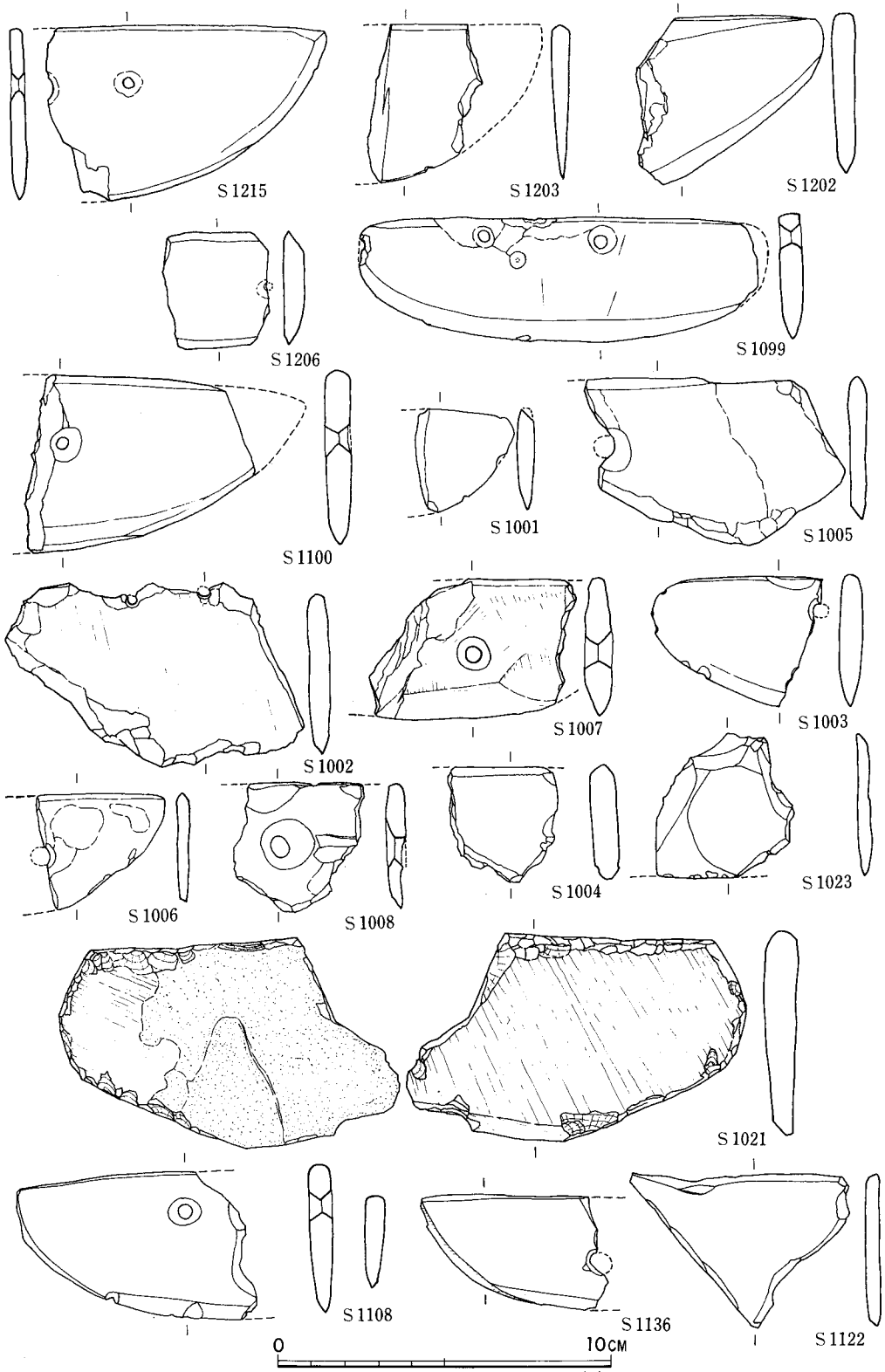


Fig. 4・73　第2区出土石器実測図(1)

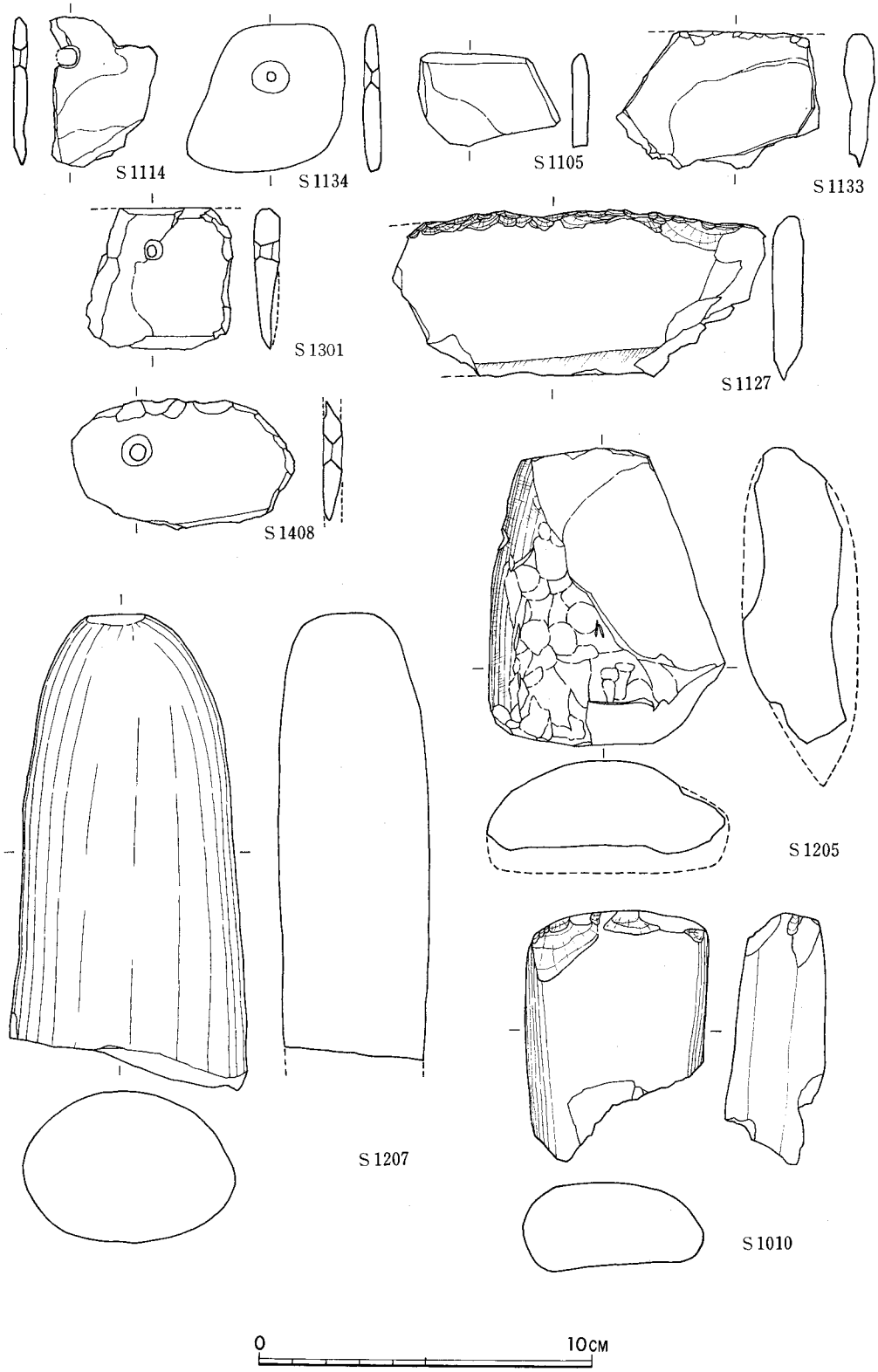


Fig. 4・74　第2区出土石器実測図(2)

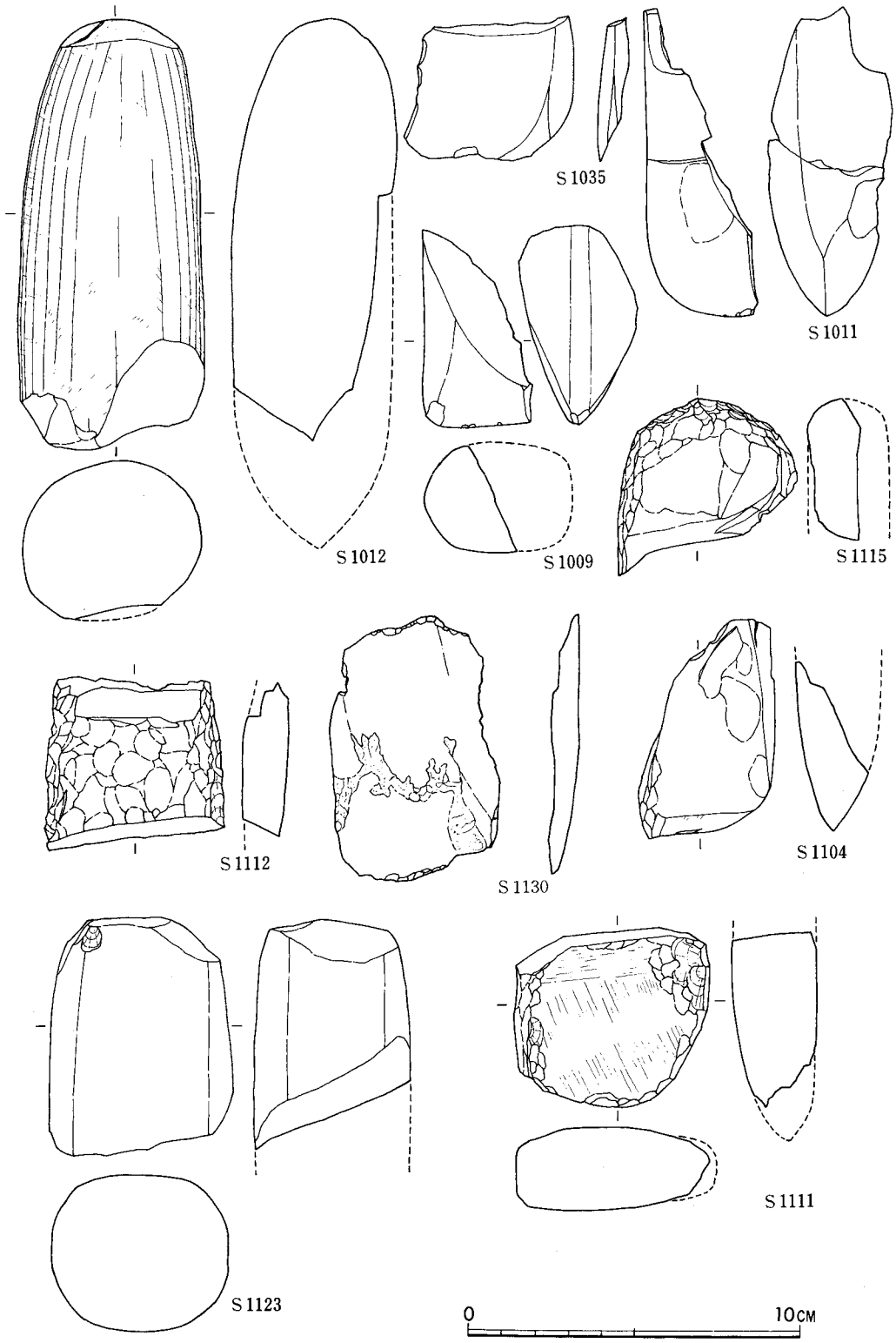


Fig. 4・75　第2区出土石器実測図(3)

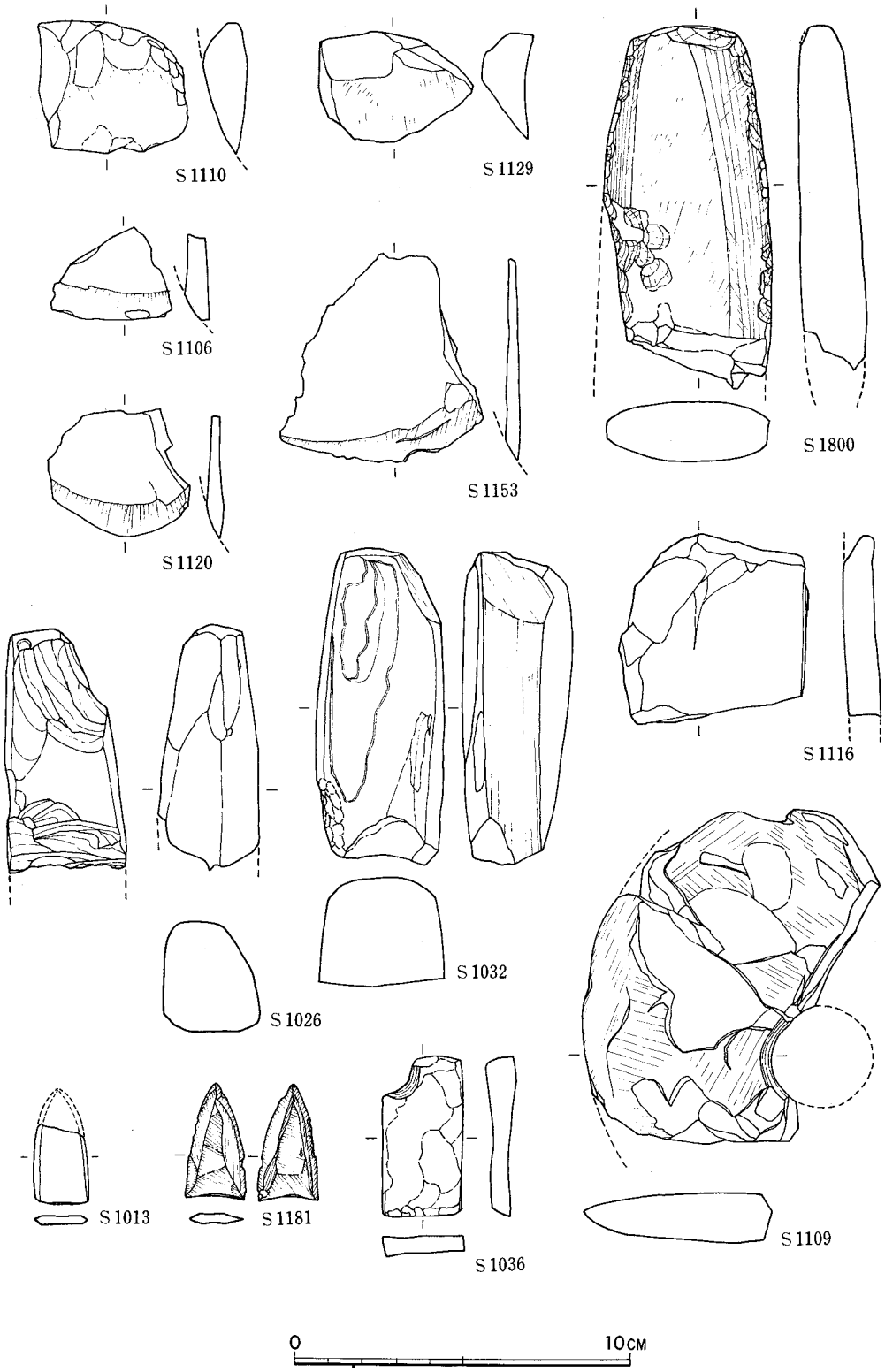


Fig. 4・76　第2区出土石器実測図(4)

する各層（Fig.4・3－1の第5・7～10層および第11・12層の中位以上）出土。

S1133・1136は石庖丁破片である。前者は直線的な背部のみが残る。頁岩質砂岩製。後者は半分を失う。刃部の一端は片刃状に研ぎ出されている。身幅のせまい半月形となろう。小豆色凝灰岩製。共にG－26トレンチ木器包含層と砂層（第20層）との間の粗砂層（第14層）ふきんの出土。層位関係から中期のものかもしれない。

S1114は石庖丁破片。刃部・背部ともに矢われている。全体に剝落がはなはだしい。頁岩質の石材。G－26トレンチの木器包含層につづく砂層（中期？）出土。S1301は欠損が大きいが刃部が直線形となる身幅の狭い形態であろう。研磨仕上げはていねいで、顕著な鎬をもつ両刃となっている。頁岩製。J－23トレンチ耕土層出土。S1408は石庖丁破片。研磨仕上げは良好。頁岩製。J・K－25トレンチ耕土層出土。

蛤刃石斧（S1009～1012・1035・1115・1116・1800）

S1010は頭部破片。側辺に細かい敲打痕を残す以外は全て平滑に研磨されている。断面形は片面が直線的になってあまり膨みを持たない。青色変成岩製。S1012は刃部を欠損しているがそれほど大形にはならないだろう。研磨は全体にいきとどいている。断面形はいずれも丸味をもち、刃部は分厚い蛤刃となろう。青色砂岩製。S1011・1009は刃部破片である。いずれも研磨は行きとどいている。砂岩製。以上はG－25トレンチ木器包含層西側砂層出土。

S1115は蛤刃石斧破片。顕著な敲打痕を残す頭部破片。砂岩製。S1116は両面から研磨を加え、ていねいに仕上げた扁平片刃石斧とみられる破片。G－26トレンチの木器包含層の南側につづく砂層（中期？）出土。

S1800は刃部付近を失った扁平磨製石斧である。頭部および側縁部には整形時の細かい敲打痕が残るが、他は良好な研磨が加えられ、側縁部は両側とも平坦である。砂岩製。I－26トレンチ耕土層。S1035は玄武岩製蛤刃石斧の刃部近くの胴片。

方柱状片刃石斧（S1026・1032）

S1026は頭部破片。欠損が著しい。S1032もまた頭部破片で刃部を欠失する。断面形は低いかまぼこ状をなし、一側辺には敲打痕を残している。いずれも粘板岩製。

磨製石鏃（S1013）

基部が直線的な形態をとる平基無茎式鏃である。先端部を欠失している。身は扁平であり、全体研磨後に両面から側辺に刃付を施す。灰白色頁岩製。

打製石鏃（S1015）

脚部の一方を欠失しているが、長さ 2.8cmをはかり、脚部のひろがるずんぐりした形態であり、腸抉りはそれほど顕著でない。側辺の仕上げにはかなり規則的な並列剝離がみられるが、全体的に粗雑である。素材の剝片は脚部に打点がある。黒曜石製。

削器（S1033）

凹凸の甚だしい礫面をもつ裂片の一側辺に調整を加え、削器に仕上げている。調整はていねいで鋭利な刃部をつくっている。重量70g。サヌカイト製。

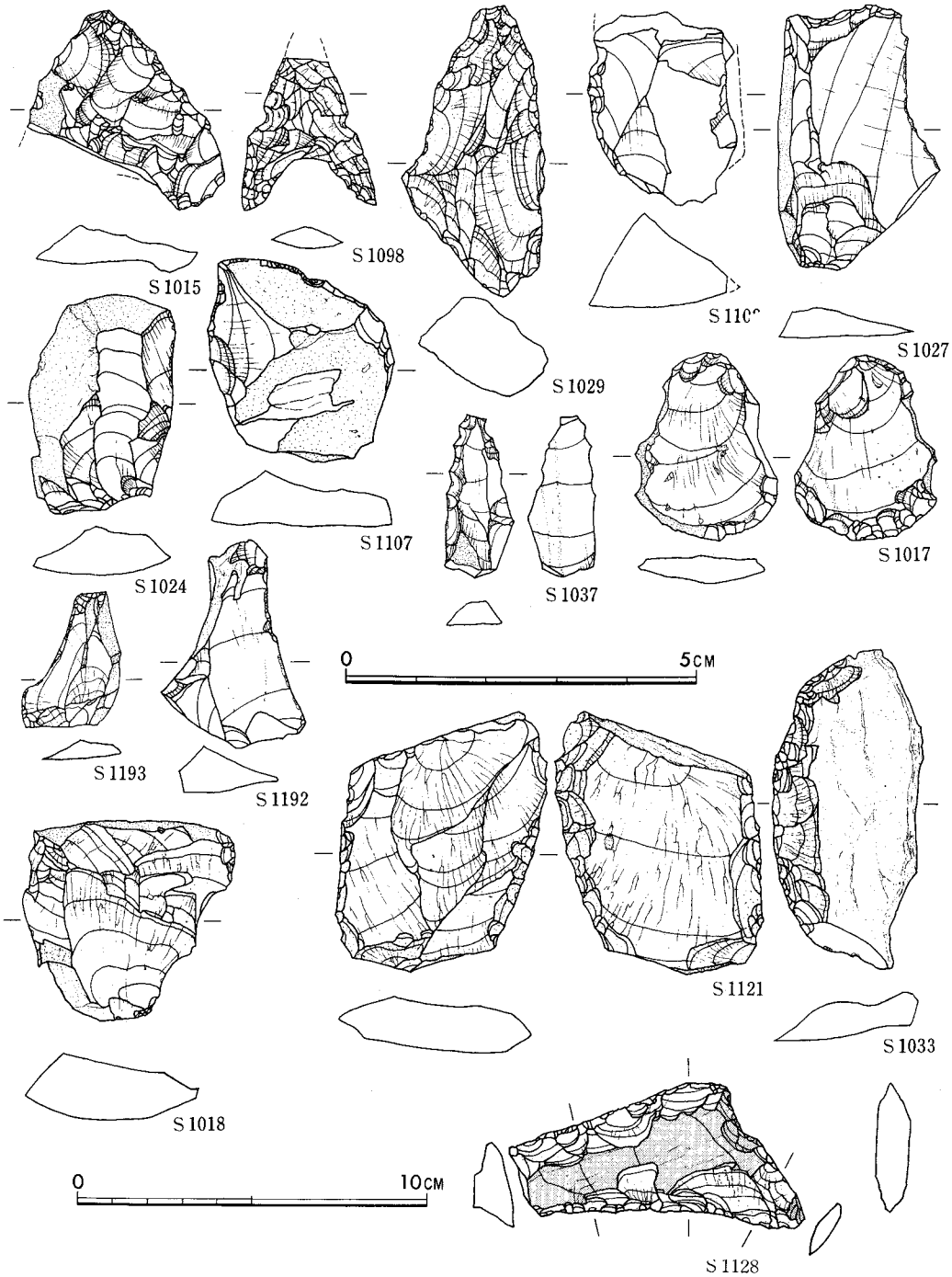


Fig. 4・77　第2区出土土器実測図(5)

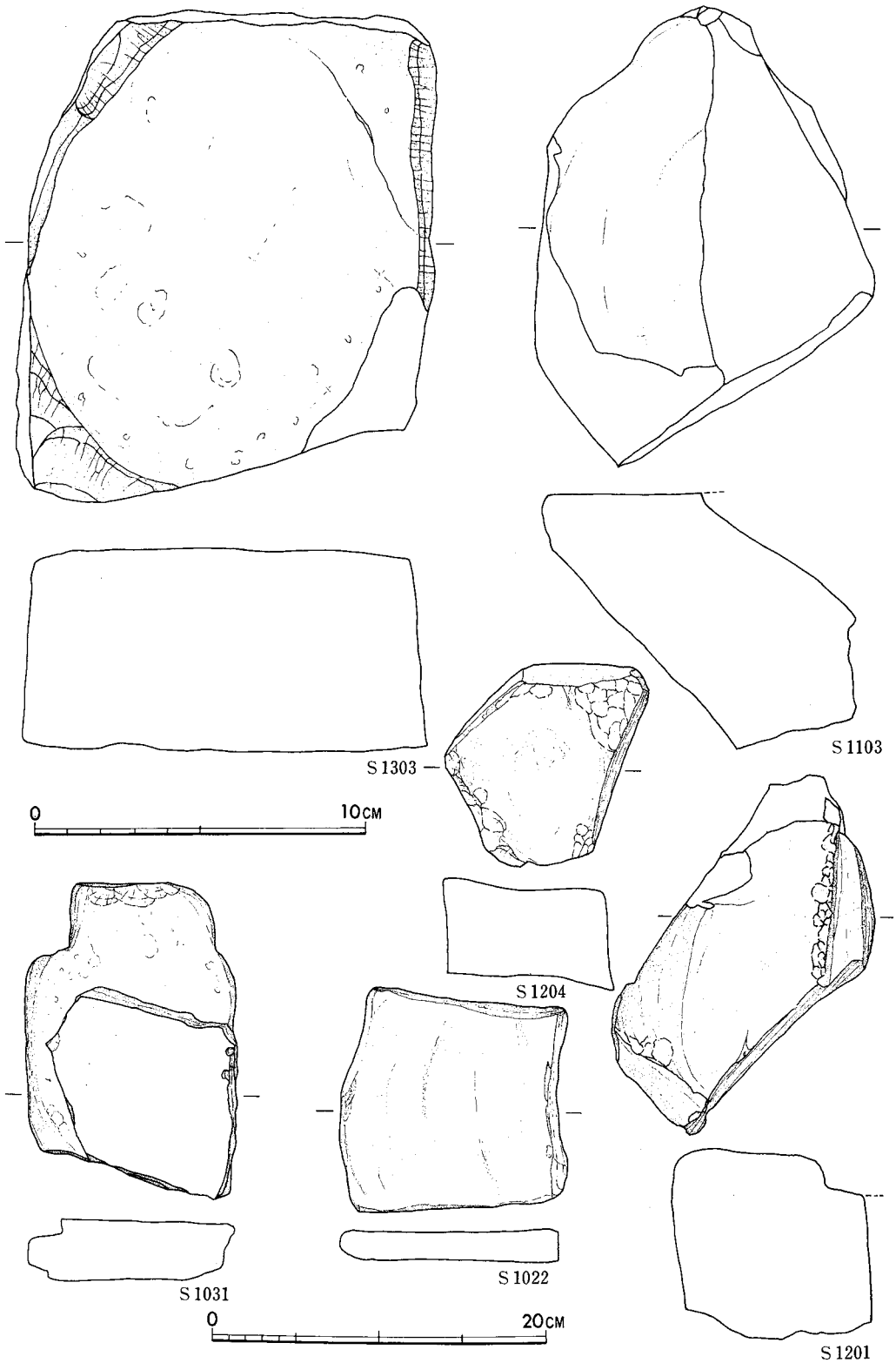


Fig. 4・78 第2区出土石器実測図(6)

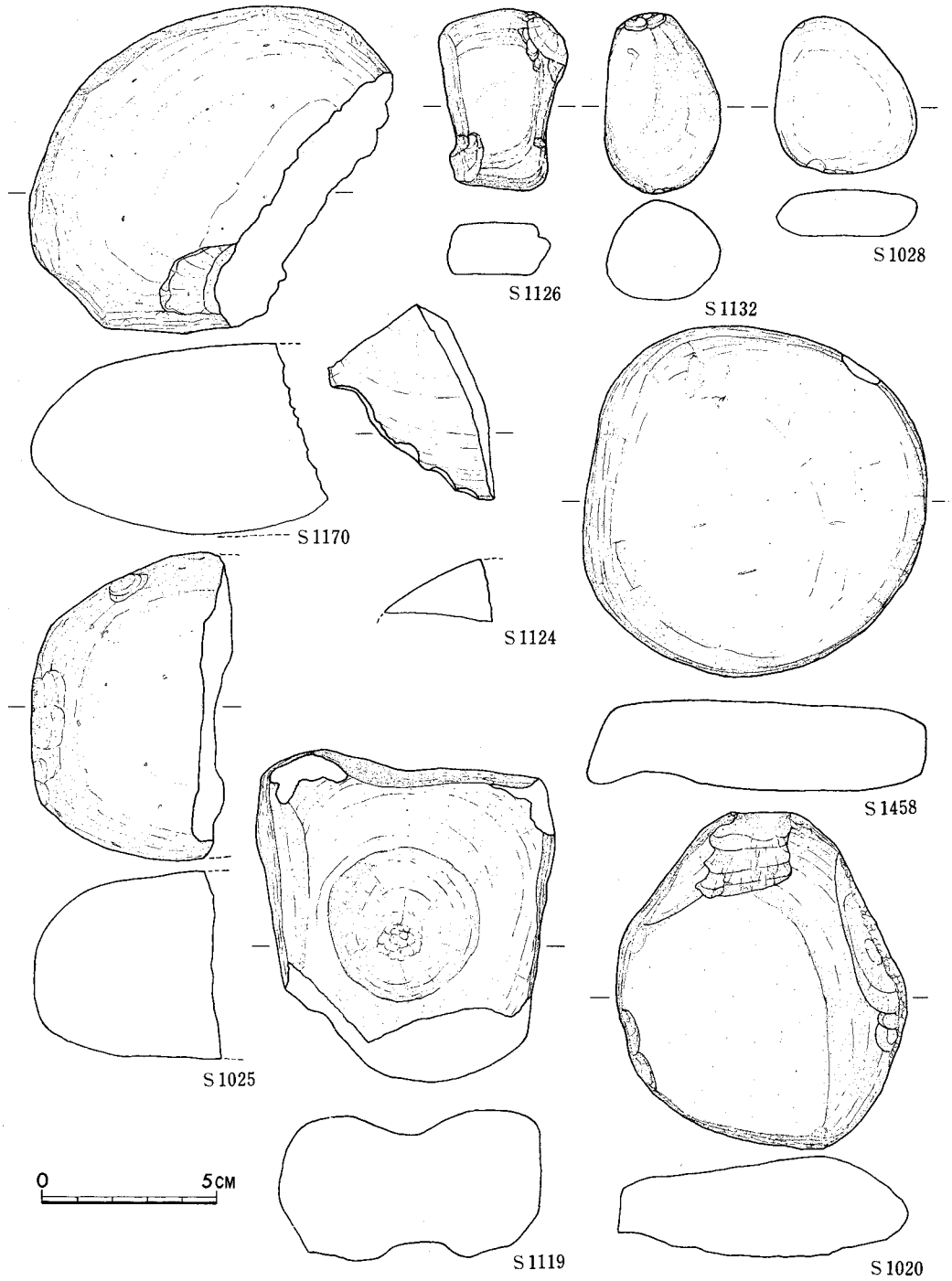


Fig. 4・79　第2区出土石器実測図(7)

掻器（Ｓ1027）

小形不定形剝片の一端に二次加工を施している。一部に原石面を残す。黒曜石製。

尖頭状石器（Ｓ1029）

鈍い尖頭部からのびる両側辺とこれに斜交する一辺をもつ打製石器。素材には第一次剝離面が全く残らない程よく調整が加えられている。微調整は特に尖頭部に近い両側辺および斜辺部に顕著であり、小さく連続する剝離は階段状となっている。また側辺部の断面は中央部の隆起する不整な紡錘形となる。サヌカイト製。

剝片石器（使用痕ある剝片）（Ｓ1024・1102）

Ｓ1024は小形不定形剝片の一側辺に使用痕が残る。片面に原石面がある。S1102は裏面の第一次剝離面側から一側縁部に細かい調整を加えるが、他の縁辺部は剝落して、全体を知りがたい。黒曜石製でＧ－26トレンチ耕土層出土。

砥石（Ｓ1022・1031・1036）

Ｓ1031は扁平な礫の片面を利用した大形砥石。砂岩製。Ｓ1036は小形の扁平砥石。一端には復元径1.4cmほどの一個の穿孔痕がみられ、磨製石器破片の転用が考えられる。砂岩製。

Ｓ1022は扁平な砂岩礫を利用した大形砥石。

その他

Ｓ1303は安定のよい花崗岩礫を用いた台石もしくは石皿である。Ｊ－23トレンチ耕土層出土。Ｓ1458は磨石で、硬質砂岩と思われる扁平礫の縁辺に研磨を加え、円盤状に仕上げ、さらに縁辺には打痕がみられる。Ｈ－25トレンチ耕土下包含層出土。

(4)　須恵器・陶磁器（Fig. 4・80）

各トレンチ・グリッドの耕土層・包含層で出土した。弥生式土器をはじめ各時代のものが混在している。土師器も出土したが少数であり、図示しうるものはないので、記述は省略する。

須恵器（Su201～206・208・210～212）

Su201は器高が低く、径の大きな蓋の破片である。内面はなでている。胎土は精選されており、焼成良好。淡灰色。Ｇ－25トレンチ耕土層。Su203は高台付埦であろう。内面になでがある。胎土は良好で、焼成良好、淡灰色。Ｇ－26トレンチ耕土層出土。Su204は赤焼きの坏身である。器面のあれが甚しい。胎土には石英粒を含むが、緻密であり、焼成は良好、暗赤褐色。Ｈ－25トレンチ砂層出土。Su205は高台付埦の底部である。高台は外に広がる。胎土・焼成とも良好で、灰色を呈する。Ｈ－25トレンチ砂層出土。Su206は坏の蓋で口縁部を欠く。擬宝珠形のつまみを有する。器面のあれが甚しい。胎土は精良なもので、焼成はあまり良くない。青灰色を呈する。Ｊ・Ｋ－25トレンチ耕土層出土。Su208は坏身の底部か。胎土に砂を含み、焼成

は良好。灰白色。K－23・24グリッド耕土層出土。Su210も同様である。Su211は高台付埦の底部で、高台は外に広がる。内面にロクロ痕が残り、底部は糸切り。胎土に若干の砂を含み、焼成は良好、青灰色を呈する。Su212も同様であるが、焼成はあまに良くない。灰色。いずれもJ・K－25トレンチ耕土層出土。（沢）

陶磁器（C201～221）

陶器（C205・206）　C 205は低く安定した高台をもつ陶器底部。胴部への移行点には一条の隆起線を有する。内面は7～8本単位の細い櫛描きがみられる。復元底径11.7cm。G－25客土層下砂層出土。**C206**は平底鉢の底部。内面には6本単位の太いかき目を有する。暗褐色を呈し、胎土に砂粒の混入多いが焼成は良好。摺鉢か。復元底径24.3cm。H－19トレンチ耕土層出土。

磁器（C201～204、207～221）　C201は青磁器底部。淡い草色を呈する。底部は外面端部を斜めに面取りする。碗、皿形以外の底部であろう。G－24トレンチ耕土層出土。C202は胴の立上りの顕著な青磁器。高台部は外面端部を面取りする。肉厚な体部は内面にゆるい稜をもつ凹線が水平にめぐっており、さらに上方に重なるものと思われる。淡い草色釉が底部外面を除くすべてに施されている。G－24トレンチ客土層出土。C203は垂直にのびる高台をもち、畳付部が細くなり水平である。灰白色釉を施す。復元底径4cm。G－25グリット耕土下砂層出土。C204は外面端部を斜めに面取りした低い高台をもつ白磁碗底部。肉厚で安定した感じをあたえる。灰白色釉を底部外面を除く全面に施す。復元底径 6.7cm。G－25グリット耕土下砂層出土。C207はC203と同様に垂直にのびる高台をもち畳付部は細く水平であり、やや大形となる。灰白色釉を底部外面を除く全面に施す。復元底径 5.9cm。H－25グリッド耕土下砂層出土。C208はC204と同様に外面端部を斜めに面取りする低い高台をもつ白磁碗底部。灰白色釉を底部外面を除く全面に施す。復元底径 5.4cm。I－25グリッド耕土層出土。

C209は小形の青磁器碗口縁部。ゆるく外反する口縁はそれほど特徴をもたない。全面に淡い草色釉を施す。復元口径10.8cm。C210は体部上半に草色をおびた淡い灰白色釉を施す磁器皿。胴部は立ち気味で短くすぐに口縁へ移行する。口縁部は幅広く、跳上げ状になり、端部に行くに従って薄くなる。体部内面中位は削り調整がみられ角張っている。また底部内面には別個体の一部が固着している。復元口径12.3cm。C211は白磁碗口縁部。内彎気味の口縁は端部が細かく外反して小さい平坦面をつくっている。施釉は丁寧で灰白色釉を全面に施す。復元口径21.6cm。これらはいずれもJ－21トレンチ耕土層出土。

C212は青磁皿底部。底部外面を除く全面に深い草色釉を施し、体部内面には精緻な陰刻の草花文様を配する。復元底径 3.6cm。C213は内外面ともに淡いブルーの釉を施した小形磁器碗。口縁部は直口し、施釉は均一である。露胎は白色を呈する。復元口径9cm。C214は低く丸味をもった高台をもつ磁器碗底部。内面はロクロ整形痕が著しく、底部外面をのぞく全面に灰白色釉を施す。露胎部は暗い赤褐色を呈する。復元底径 4.8cm。C215もまた非常に低く、畳付部の狭い高台をもつ磁器碗底部。体部外面は面取りの明瞭な稜を残している。外面には上

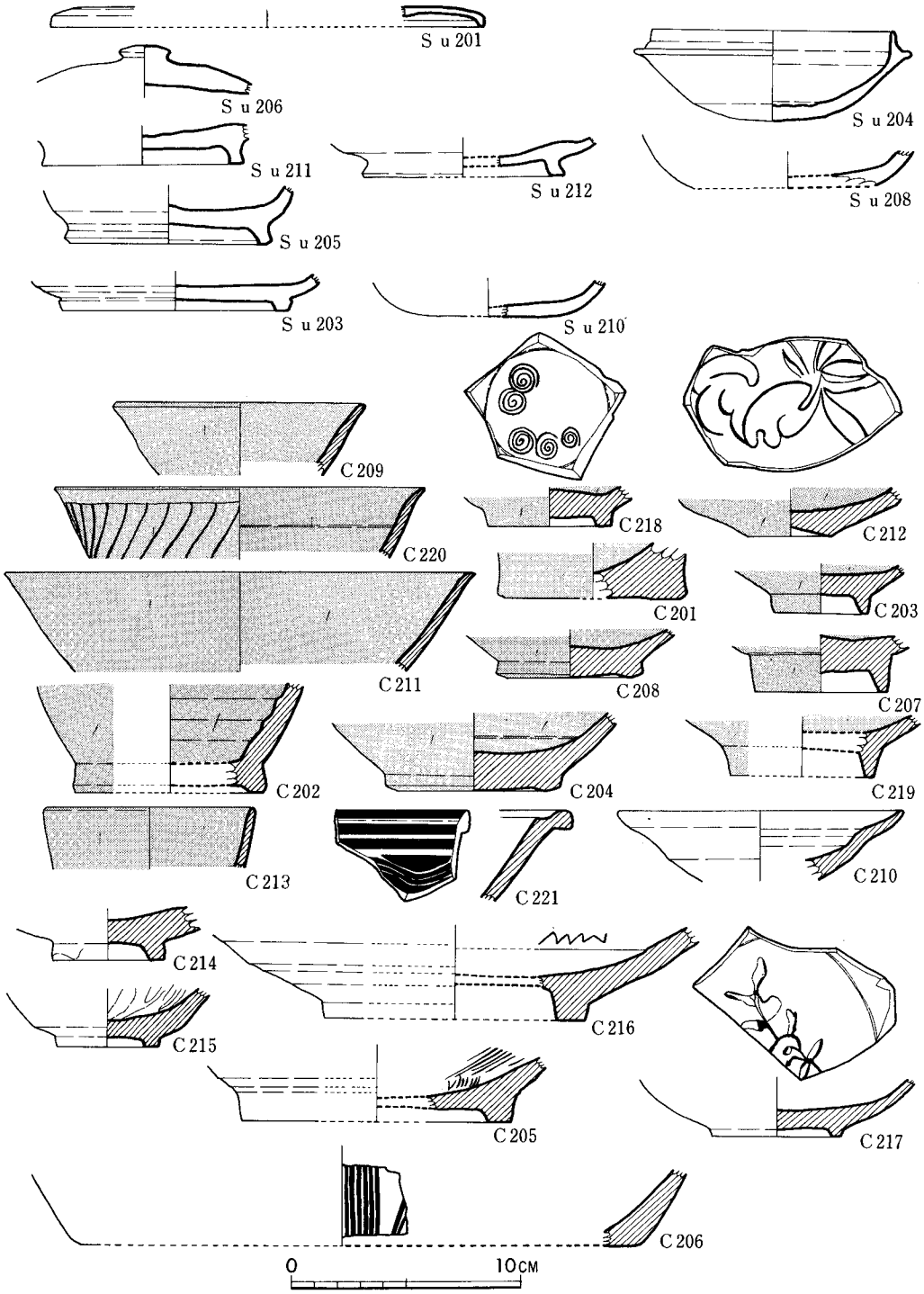


Fig. 4・80 第2区出土須恵器・陶磁器実測図

部に灰色をおびた緑色釉、また内面には緑色をおびた淡い褐色釉がかかり、釉薬の濃淡が斑らとなっている。復元底径 4.4cm。Ｃ216は大形の磁器碗底部。肉厚の体部および高台部に比べて底部厚は薄い。体部外面には細かい面取りを残しており、内面と外面の一部には緑色をおびた褐色釉を施こし、露胎部は暗い小豆色を呈する。また内面は見込みよりわずかに上った位置に施釉前に描かれた山形線刻文がみられ、重ね焼きのために器面の一部剝脱がある。復元底径 11.4cm。これらはいずれもＪ－23トレンチ耕土層出土。

Ｃ217は磁器底部。見込みに花文様の染付を施している。高台は低く水平であり、全面に白色釉を施す整った作品である。復元底径 5.6cm。Ｊ－24グリッド耕土層出土。Ｃ218は見込みに施釉前に５個の渦文がスタンプされている。高台は低く垂直で、畳付は水平である。底部外面をのぞく外面に淡いブルーの釉薬をかけている。復元底径 5.4cm。Ｊ－26トレンチ灰褐色粘質土層（第８層）出土。Ｃ219はＣ207と同様に丈が高く端部が細くなる高台を持つ白磁碗底部。底部外面をのぞく全面に灰白色釉を施す。復元底径 6.3cm。Ｊ－26トレンチ粘質土層（第８層）出土。Ｃ220は青磁器碗口縁部。内彎気味にひらく胴部は口縁で小さく外反し、端部が薄くなる。体部内面には一条の沈線文、外面は口唇よりやや下った位置からほぼ１cm間で縦に細沈線を配している。内外面ともに黄色味をおびた灰色釉を施す。復元口径16cm。Ｋ－25トレンチ耕土層出土。Ｃ221は濃い褐色釉を施した磁器。口縁は内面がおさえによって窪んで端部が丸くなる。施釉は薄く、外面では帯状、波状の文様で飾られている。Ｋ－23・24グリッド耕土層

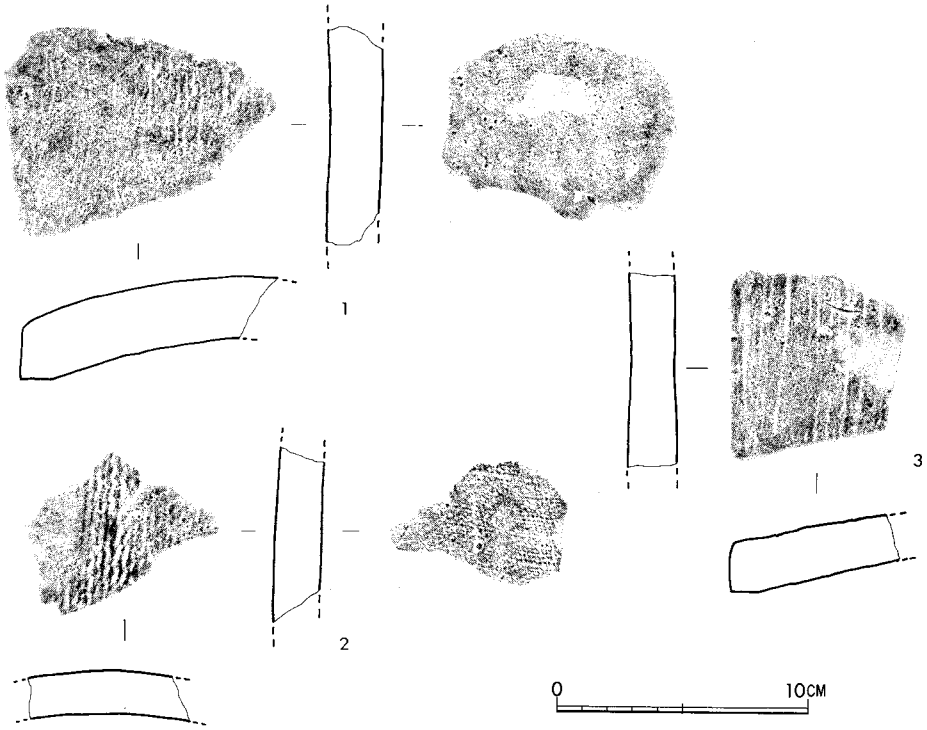


Fig. 4・81　Ｇ－24トレンチ客土層出土瓦実測図

出土。

第２区出土の陶磁器類は量的にそれほど多くはないが磁器類のうちには近世以降の国産品が含まれているものと考えられる。青白磁類について亀井明徳氏の分類〔亀井1973〕に従えば、Ｃ212－青磁Ｃ群皿、Ｃ220－青磁Ｅ群埦、Ｃ200・207・211・219－白磁埦Ｉ類、Ｃ204・208－白磁埦II類にいずれも相当しよう。（横山）

(5)　瓦（Fig. 4・81）

Ｇ－24トレンチ客土層で瓦破片が出土している。

１～３とも表面には縄目文を施す。１・２の内面には布目の圧痕がある。いずれも胎土に砂や石英粒砂を含み、焼成は良好。１・２は黄白色、３は暗褐色を呈する。（沢）

第４節　第２区調査のまとめ

第２区は環溝遺跡の西に接してひろがる地域であり、環溝部分の集落にともなう生産の場のあったことが予想された。

台地に接する部分（Ｇライン）では、弥生時代前期の包含層はＧ－25・Ｇ－26両トレンチの中期の木器包含層下の砂層であり、自然堆積とみるべきであろうが、具体的には明らかではない。台地西端部の西方約70mのところに弥生時代前期の矢板列が出土し、当時の水田の一端を把握しえた。これは第２章第１節でのべたように、再堆積したとみられる黒色粘質土層内に見出された。矢板列の西側に水田面があり（標高７ｍ前後）、その東側には幅６ｍほどの水路とみられる堆積と、そこに設けられた柵状の遺構があった。水田面とみられる部分の東西幅は、Ｊ・Ｋ－25トレンチの東・西両矢板列の間が約6.7ｍあってその一端をしりうる（第７章第１節１）。

前期の時期に、この矢板列と台地との間がどのような状態だったかは、Ｇラインでの砂層以外にきめ手がない。ボーリング結果によっても砂層のひろがりが推定されるだけであるが、この砂層が矢板列と並存していた流れなのか、砂層に示される流れによって黒色粘質土層が流されたのかなど、当時の自然環境をはっきり判断することはできない。そのために、夜臼式・板付Ｉ式土器を出す前期前葉の矢板列を検出はしたが、それがどのような自然状態の中に設けられていたのか、台地の環溝（夜臼式・板付Ｉ式以後は埋没しはじめる〔森・岡崎1961〕）との具体的なつづき方は十分には明らかにしえなかった（第７章第１節１）。

この矢板列の上は、黒灰～暗灰色粘土におおわれ、それを切るように中期の河川が流れていたことが、Ｊ・Ｋ－25トレンチ、Ｊ－26トレンチで確認された。この河川は、前期にはさらに

西側の低い位置を流れていたと考えられるが、確認はできない。この旧河川を示す砂層中の標高約 7.5m以下には、多量の中期後葉を主とする土器が包含されている。その中には丹塗土器が多く、中期における河岸での「祭祀」的行為のあったことを暗示すると推測した。

中期中葉～後葉にかけて、台地際には前期の包含層（砂層）上に杭が打たれている。G－25トレンチでは水路の存在を示し、G－24・G－26両トレンチでは杭群の目的は明らかでないが、やはり水路に関係があろう。その中には泥土状の黒色粘質土が堆積し、木器が出土する。その出土標高は 7.5m前後で、中期河岸での土器群出土標高とほぼ同じである。これは前期前葉から中期中葉以後にいたるまでの間に50cm以上の堆積のあったことを示し、沖積地での氾濫を物語っている。

西側の旧河川はさらに埋没し、中期土器群の埋没する旧河岸西方には、後期前葉になると畦状遺構が設けられた。その目的・機能ははっきりしないが、やはり旧河川岸に関係があろう。

J・K－25トレンチで、前期前葉の遺構、中期後葉の土器群、後期前葉の畦状遺構が、少しずつ西へよりながらも層位的に検出されたことは、板付遺跡における沖積層の変遷、そしてその利用を考える上での基礎資料となろう。

Gラインの台地際耕土下の客土層からは多量の中期後葉～後期中葉を主とする土器が出土し、その中から銅矛鋳型が出土した。出土状態からその時期を確定しえないが、板付遺跡における青銅器鋳造を示すものである。

中期の旧河岸出土の土器群は、中期後葉の宝台II式〔高倉1970〕の良好な組合せを示す資料であり、畦状遺構出土土器群も後期前葉のよい資料である。

木製品のうち、農耕具は中期中葉～後期前葉のものが出土した。平鍬や丸鍬のようなものが少なく、刃部が又状になった鍬や鋤だけで、本遺跡における農具のひとつの面を示している。この他に網枠・石斧柄未成品・木椀片・杵片等が出土している。矢板・杭・自然流木なども多い。それらの多くは樹種を明らかにしえた（Tab. 4・7）。

石器は時期の明らかな遺構出土品は少ない。遺構の性質上当然と思われる。

その他に須恵器・陶磁器片なども出土しているが、時期的に限定しうる層からの出土でなく、弥生式土器片などとともに混在して出土する。　（後藤）

Tab.4·1　第2区出土弥生式土器挿図対照表

No.	種類	トレンチ	層位	Fig.	PL.	No.	種類	トレンチ	層位	Fig.	PL.
Y2001	甕口縁	G—24	客土層	4 49		2059	器台	G—24	客土層	4·53	
2002	〃	〃	〃	〃		2060	〃	〃	〃	〃	
2003	〃	〃	〃	〃		2061	〃	〃	〃	〃	
2004	〃	〃	〃	〃		2062	〃	〃	〃	〃	
2005	〃	〃	〃	〃		2063	蓋	〃	〃	〃	
2006	〃	〃	〃	〃		2064	〃	〃	〃	〃	
2007	〃	〃	〃	〃		2065	〃	〃	〃	〃	
2008	〃	〃	〃	〃		2066	〃	〃	〃	〃	
2009	〃	〃	〃	〃		2067	〃	〃	〃	〃	
2010	〃	〃	〃	〃		2068	〃	〃	〃	〃	
2011	〃	〃	〃	〃		2069	甕口縁	〃	〃	〃	
2012	〃	〃	〃	〃		2070	無頸壺口縁	〃	〃	〃	
2013	〃	〃	〃	4·50		2071	〃	〃	〃	〃	
2014	〃	〃	〃	〃		2072	〃	〃	〃	〃	
2015	〃	〃	〃	〃		2073	〃	〃	〃	〃	
2016	〃	〃	〃	〃		2074	〃	〃	〃	〃	
2017	〃	〃	〃	〃		2075	〃	〃	〃	〃	
2018	〃	〃	〃	〃		2076	〃	〃	〃	〃	
2019	〃	〃	〃	〃		2077	〃	〃	〃	〃	
2020	〃	〃	〃	〃		2078	〃	〃	〃	〃	
2021	〃	〃	〃	〃		2079	〃	〃	〃	〃	
2022	〃	〃	〃	4·51		2070	〃	〃	〃	〃	
2023	〃	〃	〃	〃		2081	〃	〃	〃	〃	
2024	壺口縁	〃	〃	〃		2082	〃	〃	〃	〃	
2025	〃	〃	〃	〃		2083	〃	〃	〃	〃	
2026	〃	〃	〃	〃		2084	〃	〃	〃	〃	
2027	〃	〃	〃	〃		2085	甕口縁	〃	〃	4·54	
2028	〃	〃	〃	〃		2086	鉢	〃	〃	〃	L II
2029	壺胴部	〃	〃	〃		2087	鉢口縁	〃	〃	〃	〃
2030	〃	〃	〃	〃	L III	2088	壺底部	〃	〃	〃	
2031	壺口縁	〃	〃	〃		2089	甕底部	〃	〃	〃	
2032	〃	〃	〃	〃		2090	〃	〃	〃	〃	
2033	〃	〃	〃	〃		2091	鉢	〃	〃	〃	
2034	〃	〃	〃	〃		2092	壺底部	〃	〃	〃	
2035	壺	〃	〃	4·52	L III	2093	甕(?)底部	〃	〃	〃	
2036	壺口縁	〃	〃	〃		2094	壺底部	〃	〃	〃	
2037	〃	〃	〃	〃		2095	甕底部	〃	〃	〃	
2038	壺	〃	〃	〃	L III	2096	〃	〃	木器包含層	〃	
2039	無頸壺口縁	〃	〃	4·53		2097	鉢(手づくね)	〃	客土層	〃	
2040	高坏々部	〃	〃	4·52		2098	〃	〃	〃	〃	L II
2041	高坏脚部	〃	〃	〃		2099	甕(?)底部	〃	〃	〃	
2042	〃	〃	〃	〃		2100	甕底部	〃	〃	〃	
2043	〃	〃	〃	〃		2101	甕(?)底部	〃	〃	〃	
2044	〃	〃	〃	〃		2102	壺底部	〃	〃	〃	
2045	〃	〃	〃	〃	L III	2103	甕(?)底部	〃	〃	〃	
2046	〃	〃	〃	〃		2104	甕底部	〃	〃	〃	
2047	〃	〃	〃	〃		2105	〃	〃	〃	〃	
2048	〃	〃	〃	〃		2106	〃	〃	〃	〃	
2049	〃	〃	〃	〃		2107	鉢(手づくね)	〃	〃	〃	
2050	〃	〃	〃	〃		2108	〃	〃	〃	〃	
2051	器台	〃	〃	〃		2109	脚付鉢(手づくね)	〃	木器包含層	〃	
2052	〃	〃	〃	〃		2110	鉢(手づくね)	〃	客土層	〃	
2053	〃	〃	〃	〃		2111	鉢	〃	〃	〃	L III
2054	〃	〃	〃	4·53		2112	甕底部	〃	〃	4·55	
2055	〃	〃	〃	〃		2113	〃	〃	〃	〃	
2056	〃	〃	木器包含層	〃	L II	2114	〃	〃	〃	〃	
2057	〃	〃	客土層	〃		2115	〃	〃	〃	〃	
2058	〃	〃	〃	〃		2116	〃	〃	〃	〃	

No.	種類	トンンチ	層位	Fig.	PL.	No.	種類	トレンチ	層位	Fig.	PL.
2117	甕底部	G—24	客土層	4·55		2177	甕口縁	G—25	客土層	4·58	
2118	〃	〃	〃	〃		2178	〃	〃	〃	〃	
2119	〃	〃	〃	〃		2179	〃	〃	〃	〃	
2120	〃	〃	〃	〃		2180	〃	〃	〃	4·59	
2121	〃	〃	〃	〃		2181	〃	〃	〃	〃	
2122	壺底部	〃	〃	〃		2182	〃	〃	〃	〃	
2123	〃	〃	〃	〃		2183	〃	〃	〃	〃	
2124	甕(?)底部	〃	〃	〃		2184	〃	〃	〃	〃	
2125	壺底部	〃	〃	〃		2185	〃	〃	〃	〃	
2126	甕(?)底部	〃	〃	〃		2186	〃	〃	〃	〃	
2127	甕底部	〃	〃	〃		2187	〃	〃	〃	〃	
2128	壺底部	〃	〃	〃		2188	〃	〃	〃	〃	
2129	甕底部	〃	〃	〃		2189	〃	〃	〃	〃	
2130	壺底部	〃	〃	〃		2190	壺肩・頸部	〃	〃	4·60	
2131	〃	〃	〃	〃		2191	壺口縁	〃	〃	〃	
2132	甕底部	〃	〃	〃		2192	〃	〃	〃	〃	
2133	〃	〃	〃	〃		2193	〃	〃	〃	〃	
2134	〃	〃	〃	〃		2194	〃	〃	〃	〃	
2135	壺底部	〃	木器包含層	〃		2195	壺頸部	〃	〃	〃	
2136	〃	〃	客土層	〃		2196	壺口縁	〃	〃	〃	
2137	甕底部	〃	〃	〃		2197	〃	〃	〃	〃	
2138	壺底部	〃	〃	〃		2198	壺胴部	〃	〃	〃	
2139	〃	〃	〃	〃		2199	〃	〃	〃	〃	
2140	〃	〃	〃	〃		2200	小形壺口縁	〃	〃	〃	
2141	甕口縁	〃	台地上竪穴	4·19		2201	壺口縁	〃	〃	〃	
2142	〃	〃	〃	〃	LII	2202	〃	〃	〃	〃	
2143	器台	〃	〃	〃	〃	2203	〃	〃	〃	〃	
2144	甕口縁	G—25	客土層	4·57		2204	〃	〃	〃	〃	
2145	〃	〃	〃	〃		2205	〃	〃	〃	〃	
2146	〃	〃	〃	〃		2206	高坏坏部	〃	〃	〃	
2147	壺口縁	〃	〃	〃		2207	〃	〃	〃	〃	
2148	甕口縁	〃	〃	〃		2208	〃	〃	〃	〃	
2149	〃	〃	〃	〃		2209	〃	〃	〃	〃	
2150	〃	〃	〃	〃		2210	〃	〃	〃	〃	
2151	〃	〃	〃	〃		2211	高坏脚部	〃	〃	〃	
2152	〃	〃	〃	〃		2212	〃	〃	〃	4·61	
2153	〃	〃	〃	〃		2213	〃	〃	〃	〃	
2154	〃	〃	〃	〃		2214	〃	〃	〃	〃	
2155	〃	〃	〃	〃		2215	〃	〃	〃	〃	
2156	〃	〃	〃	〃		2216	〃	〃	〃	〃	
2157	〃	〃	〃	〃		2217	〃	〃	〃	〃	
2158	〃	〃	〃	〃		2218	〃	〃	〃	〃	
2159	〃	〃	〃	〃		2219	〃	〃	〃	〃	
2160	〃	〃	〃	〃		2220	〃	〃	〃	〃	
2161	〃	〃	〃	〃		2221	〃	〃	〃	〃	
2162	〃	〃	〃	〃		2222	〃	〃	〃	〃	
2163	〃	〃	〃	〃		2223	〃	〃	〃	〃	
2164	〃	〃	〃	〃		2224	〃	〃	〃	〃	
2165	〃	〃	〃	〃		2225	器台	〃	〃	〃	
2166	〃	〃	〃	〃		2226	〃	〃	〃	〃	
2167	〃	〃	〃	〃		2227	〃	〃	〃	〃	
2168	〃	〃	〃	4·58		2228	〃	〃	〃	〃	
2169	〃	〃	〃	〃		2239	〃	〃	〃	〃	
2170	〃	〃	〃	〃		2230	大型器台	〃	〃	〃	
2171	〃	〃	〃	〃		2231	〃	〃	〃	〃	
2172	〃	〃	〃	〃		2232	〃	〃	〃	〃	
2173	〃	〃	〃	〃		2233	蓋	〃	〃	〃	
2174	〃	〃	〃	〃		2234	〃	〃	〃	〃	
2175	〃	〃	〃	〃		2235	〃	〃	〃	〃	
2176	〃	〃	〃	〃		2236	甕口縁	〃	〃	〃	

No.	種類	トレンチ	層位	Fig.	PL.	No.	種類	トレンチ	層位	Fig.	PL.
2237	鉢(小形壺)口縁	G—25	客土層	4·61		2297	甕口縁	G—25	客土層	4·63	
2238	鉢口縁	〃	〃	〃		2298	甕胴部	〃	〃	〃	
2239	〃	〃	〃	〃		2299	甕口縁	〃	〃	〃	LIII
2240	〃	〃	〃	〃		2300	〃	〃	〃	〃	
2241	〃	〃	〃	〃		2301	小形壺	〃	〃	4·60	
2242	無頸壺口縁	〃	〃	4·62		2302	壺底部	〃	木器包含層	4·20	
2243	〃	〃	〃	〃		2303	蓋	〃	客土層	4·61	
2244	〃	〃	〃	〃		2304	〃	〃	〃	〃	
2245	〃	〃	〃	〃		2305	無頸壺	〃	〃	4·62	
2246	〃	〃	包含層	〃		2306	〃	〃	〃	〃	
2247	〃	〃	〃	〃		Y2307～2315　(欠番)					
2248	〃	〃	〃	〃		2316	甕口縁	G—26	木器包含層	4·21	
2249	〃	〃	〃	〃		2317	〃	〃	〃	〃	
2250	〃	〃	〃	〃		2318	壺胴部	〃	〃	〃	
2251	〃	〃	〃	〃		2319	甕口縁	〃	客土層	4·64	
2252	〃	〃	〃	〃		2320	〃	〃	〃	〃	
2253	甕口縁	〃	〃	〃		2321	〃	〃	〃	〃	
2254	壺底部	〃	〃	〃		2322	〃	〃	〃	〃	
2255	甕底部	〃	〃	〃		2323	〃	〃	〃	〃	
2256	〃	〃	〃	〃		2324	〃 〃	〃	〃	〃	
2257	〃	〃	〃	〃		2325	〃 〃	〃	〃	〃	
2258	〃	〃	〃	〃		2326	壺口縁	〃	〃	4·65	
2259	〃	〃	〃	〃		2327	〃	〃	〃	〃	
2260	〃	〃	〃	〃		2328	〃	〃	〃	〃	
2261	壺底部	〃	〃	〃		2329	〃	〃	〃	〃	
2262	〃	〃	〃	〃		2330	〃	〃	〃	〃	
2263	〃	〃	〃	〃		2331	〃	〃	〃	〃	
2264	〃	〃	〃	〃		2332	高坏脚部	〃	〃	〃	
2265	〃	〃	〃	〃		2333	〃	〃	〃	〃	
2266	〃	〃	〃	〃		2334	器台	〃	〃	〃	
2267	〃	〃	〃	〃		2335	〃	〃	〃	〃	
2268	〃	〃	〃	〃		2336	〃	〃	〃	〃	
2269	〃	〃	〃	〃		2337	〃	〃	〃	〃	
2270	〃	〃	〃	〃		2338	〃	〃	〃	〃	
2271	〃	〃	〃	〃		2339	壺口縁	〃	〃	〃	
2272	甕口縁	〃	木器包含層下	4·48		2340	蓋	〃	〃	4·66	
2273	〃	〃	〃	〃		2341	〃	〃	〃	〃	
2274	甕底部	〃	〃	〃		2342	〃	〃	〃	〃	
2275	壺胴～底部	〃	〃	〃		2343	甕底部	〃	〃	〃	
2276	甕底部	〃	〃	〃		2344	鉢	〃	〃	〃	
2277	壺底部	〃	〃	〃		2345	甕口縁	〃	木器包含層	4·21	
2278	〃	〃	〃	〃		2346	鉢(手づくね)	〃	客土層	4·66	
2279	甕口縁	〃	木器包含層	4·20		2347	〃	〃	〃	〃	
2280	〃	〃	〃	〃		2348	〃	〃	〃	〃	
2281	壺口縁	〃	〃	〃		2349	〃	〃	〃	〃	
2282	〃	〃	〃	〃		2350	壺底部	〃	〃	〃	
2283	〃	〃	〃	〃		2351	支脚	〃	〃	〃	
2284	甕口縁	〃	〃	〃	LI	2352	甕底部	〃	〃	〃	
2285	〃	〃	〃	〃	〃	2353	甕口縁	〃	木器包含層	4·21	
2286	〃	〃	〃	〃	〃	2354	壺底部	〃	客土層	4·66	
2287	〃	〃	〃	〃	〃	2355	甕底部	〃	〃	〃	
2288	〃	〃	〃	〃	〃	2356	〃	〃	〃	〃	
2289	〃	〃	〃	〃	〃	2357	〃	〃	〃	〃	
2290	〃	〃	〃	〃		2358	壺底部	〃	〃	〃	
2291	鉢口縁	〃	〃	〃		2359	〃	〃	〃	〃	
2292	脚部	〃	〃	〃		2360	甕底部	〃	〃	〃	
2293	器台	〃	〃	〃		2361	〃	〃	〃	〃	
2294	甕底部	〃	〃	〃		2362	甕口縁	〃	木器包含層	4·21	
2295	〃	〃	〃	〃		2363	甕底部	〃	客土層	4·66	
2296	壺底部	〃	〃	〃		2364	〃	〃	〃	〃	

No.	種類	トレンチ	層位	Fig.	PL.
2365	甕口縁	G—26	木器包含層	4・21	
2366	甕底部	〃	客土層	4・66	
2367	甕口縁	〃	木器包含層	4・21	
2368	蓋	〃	〃	〃	
2369	無頸壺	〃	〃	〃	
2370	壺底部	〃	客土層	4・66	
2371	〃	〃	〃	〃	
2372	無頸壺	〃	木器包含層	4・21	
2373	壺胴部	〃	〃	〃	
2374	〃	〃	〃	〃	
2375	壺底部	〃	客土層	4・66	
2376	脚部	〃	木器包含層	4・21	
2377	器台	〃	〃	〃	
2378	壺底部	〃	客土層	4・66	
2379	甕口縁	〃	〃	4・64	
2380	〃	〃	〃	〃	
2381	〃	〃	〃	〃	
2382	〃	〃	〃	〃	
2383	〃	〃	〃	〃	
2384	〃	〃	〃	〃	
2385	〃	〃	〃	〃	
2386	〃	〃	〃	〃	
2387	〃	〃	〃	〃	
2388	壺口縁	〃	〃	4・65	
2389	〃	〃	〃	〃	
2390	壺胴~底部	〃	木器包含層	4・21	
2391	壺口縁	〃	客土層	4・65	
2392	〃	〃	〃	〃	
2393	〃	〃	〃	〃	
2394	高坏坏部	〃	〃	〃	
2395	高坏脚部	〃	〃	〃	
2396	器台	〃	〃	〃	
2397	〃	〃	〃	〃	
2398	蓋	〃	〃	4・66	
2399	高坏坏部	〃	木器包含層	4・21	
2400	甕底部	〃	客土層	4・66	
2401	〃	〃	〃	〃	
2402	〃	〃	〃	〃	
2403	〃	〃	〃	〃	
2404	〃	〃	〃	〃	
2405	壺底部	〃	〃	〃	
2406	甕底部	〃	〃	〃	
2407	〃	〃	木器包含層	4・21	
2408	〃	〃	〃	〃	
2409	壺底部	〃	客土層	4・66	
2410	〃	〃	〃	〃	
2411	〃	〃	〃	〃	
2412	〃	〃	〃	〃	
2413	甕底部	〃	木器包含層	4・21	
2414	壺底部	〃	客土層	4・66	
2415	〃	〃	木器包含層	4・21	
2416	〃	〃	客土層	〃	
2417	甕胴部	〃	木器包含層	〃	
2418	壺底部	〃	〃	4・66	
2419	〃	〃	〃	〃	
Y2420	（欠番）				
2421	甕口縁部	〃	木器包含層	4・21	
2422	壺	〃	木器包含層下	4・48	LI
2423	無頸壺	H—25	包含層	4・72	
2424	器台	J—22	〃	〃	

No.	種類	トレンチ	層位	Fig.	PL.
2425	壺頸部	I—26	耕土層	4・72	
2426	（欠番）				
2427	甕底部	J—22	矢板列	4・12	LI
2428	甕口縁	J—23	旧河川粘土層	4・26	
2429	〃	〃	〃	〃	
2430	壺口縁	〃	〃	〃	LIV
2431	〃	〃	〃	〃	〃
2432	壺胴部	〃	〃	〃	
2433	壺底部	〃	〃	〃	
2434	甕口縁	〃	矢板列	4・12	LI
2435	甕胴部	〃	〃	〃	〃
2436	〃	〃	〃	〃	〃
2437	〃	〃	〃	〃	〃
2438	〃	〃	〃	〃	〃
2439	壺口縁	〃	旧河川粘土層	4・26	
2440	甕底部	〃	〃	〃	
2441	壺底部	〃	〃	〃	
2442	〃	〃	〃	〃	
2443	甕口縁	J・K—25	旧河川砂層	4・27	
2444	〃	〃	〃	〃	
2445	〃	〃	〃	〃	
2446	〃	〃	〃	4・30	
2447	〃	〃	〃	4・28	
2448	〃	〃	〃	4・30	
2449	〃	〃	〃	〃	
2450	〃	〃	〃	〃	
2451	〃	〃	〃	〃	
2452	〃	〃	〃	4・29	
2453	甕	〃	〃	〃	LV
2454	甕口縁	〃	〃	〃	
2455	甕	〃	〃	〃	
2456	〃	〃	〃	〃	LV
2457	〃	〃	〃	〃	〃
2458	〃	〃	〃	〃	
2459	甕口縁	〃	〃	4・28	
2460	〃	〃	包含層	4・69	
2461	〃	〃	〃	〃	
2462	甕	〃	旧河川砂層	4・30	
2463	〃	〃	〃	〃	
2464	壺口縁	〃	〃	4・31	
2465	壺胴部	〃	〃	4・32	
2466	壺口縁部	〃	包含層	4・69	
2467	壺胴部	〃	旧河川砂層	4・32	
2468	壺口縁	〃	〃	4・31	
2469	壺	〃	〃	〃	LIV
2470	〃	〃	〃	〃	〃
2471	〃	〃	〃	〃	〃
2472	〃	〃	〃	〃	LVI
2473	小形壺	〃	〃	〃	〃
2474	〃	〃	〃	〃	〃
2475	〃	〃	〃	〃	〃
2476	〃	〃	〃	〃	
2477	〃	〃	〃	〃	LV
2478	〃	〃	〃	〃	LVI
2479	〃	〃	〃	〃	LV
2480	〃	〃	〃	〃	〃
2481	高坏坏部	J—25	〃	4・32	
2482	壺口縁	〃	〃	4・31	
2483	器台	〃	〃	4・33	
2484	蓋	〃	〃	4・32	

No.	種類	トレンチ	層位	Fig.	PL.
2485	蓋	J—25	旧河川砂層	4・32	
2486	〃	〃	〃	〃	
2487	〃	〃	〃	〃	
2488	〃	〃	〃	〃	LVII
2489	〃	〃	〃	〃	
2490	〃	〃	〃	〃	
2491	無頸壺	〃	〃	4・32	
2492	〃	〃	〃	〃	LVII
2493	鉢	〃	〃	4・33	
2494	〃	〃	〃	〃	LIV
2495	〃	〃	〃	〃	
2496	〃	〃	〃	〃	LIV
2497	甕底部	〃	〃	〃	
2498	〃	〃	〃	〃	
2499	〃	〃	〃	〃	
2500	〃	〃	〃	〃	
2501	〃	〃	〃	〃	
2502	〃	〃	〃	〃	
2503	〃	〃	〃	〃	
2504	壺底部	〃	〃	〃	
2505	〃	〃	〃	〃	
2506	〃	〃	〃	〃	
2507	〃	〃	〃	〃	
2508	〃	〃	〃	〃	
2509	(欠番)				
2510	甕口縁	J—26	旧河川砂層下部	4・37	
2511	〃	〃	〃	〃	
2512	〃	〃	〃	〃	
2513	〃	〃	〃	〃	
2514	〃	〃	旧河川砂層	4・34	
2515	(欠番)				
2516	甕口縁	J—26	旧河川砂層	4・34	
2517	〃	〃	〃	〃	
2518	〃	〃	〃	〃	
2519	〃	〃	〃	〃	
2520	〃	〃	〃	〃	
2521	〃	〃	〃	〃	
2522	鉢口縁	〃	〃	4・36	
2523	〃	〃	〃	4・34	
2524	甕口縁	〃	〃	〃	
2525	甕	〃	〃	〃	
2526	甕口縁	〃	〃	4・35	
2527	〃	〃	〃	〃	
2528	〃	〃	〃	〃	
2529	壺口縁	〃	〃	〃	LIV
2530	〃	〃	〃	〃	
2531	鉢	〃	〃	〃	
2532	壺口縁	〃	〃	〃	
2533	壺胴部	〃	〃	〃	
2534	〃	〃	〃	〃	
2535	小形壺	〃	〃	〃	LVI
2536	高坏々部	〃	〃	〃	LVII
2537	器台	〃	〃	4・36	
2538	鉢	〃	〃	〃	
2539	鉢	〃	〃	〃	
2540	壺底部	〃	〃	〃	
2541	甕底部	〃	〃	〃	
2542	(欠番)				
2543	蓋	J—26	旧河川砂層	4・36	
2544	〃	〃	〃	〃	

No.	種類	トレンチ	層位	Fig.	PL.
2545	(欠番)				
2546	蓋	J—26	旧河川砂層	4・36	
2547	無頸壺	〃	〃	〃	
2548	〃	〃	〃	〃	
2549	壺	〃	〃	〃	
2550	蓋	〃	〃	〃	LVII
2551	〃	〃	〃	〃	〃
2552	無頸壺	〃	〃	〃	LVIII
2553	〃	〃	〃	〃	〃
2554	甕胴部	〃	〃	〃	
2555	(欠番)				
2556	甕胴部	J—26	旧河川砂層	4・36	
2557	〃	〃	〃	〃	
Y2558～Y2562	(欠番)				
2563	無頸壺	K-23・24	包含層	4・72	
2564	甕底部	〃	〃	〃	
2565	〃	〃	〃	〃	
2566	甕口縁	JK—25	旧河川砂層	4・28	
2567	〃	〃	〃	〃	
2568	〃	〃	〃	4・27	
2569	〃	〃	〃	4・28	
2570	〃	〃	〃	4・27	
2571	〃	〃	〃	〃	
2572	〃	〃	〃	〃	
2573	〃	〃	〃	〃	
2574	〃	〃	〃	〃	
2575	〃	〃	〃	4・28	
2576	〃	〃	〃	〃	
2577	〃	〃	〃	〃	
2578	〃	〃	〃	〃	
2579	〃	〃	〃	〃	
2580	〃	〃	包含層	4・69	
2581	甕(鉢)口縁	〃	〃	〃	
2582	甕口縁	〃	畦状遺構	4・39	
2583	〃	〃	〃	〃	
2584	〃	〃	〃	〃	
2585	〃	〃	〃	〃	
2585	〃	〃	〃	〃	
2587	〃	〃	〃	〃	
2588	〃	〃	〃	〃	
2589	〃	〃	〃	〃	
2590	〃	〃	〃	〃	
2591	〃	〃	〃	〃	
2592	〃	〃	〃	〃	
2593	壺口縁	〃	包含層	4・69	
2594	〃	〃	〃	〃	
2595	壺胴部	〃	〃	〃	
2596	器台	〃	畦状遺構	4・40	
2597	〃	〃	包含層	4・70	
2598	〃	〃	〃	〃	
2599	〃	〃	〃	〃	
2600	〃	〃	〃	〃	
2601	〃	〃	〃	〃	
2602	〃	〃	〃	〃	
2603	〃	〃	〃	〃	
2604	〃	〃	〃	〃	
2605	〃	〃	〃	〃	
2606	〃	〃	〃	〃	
2607	〃	〃	〃	〃	
2608	〃	〃	旧河川砂層	4・33	

No.	種類	トレンチ	層位	Fig.	PL.	No.	種類	トレンチ	層位	Fig.	PL.
2609	器台	J・K—25	旧河川砂層	4・33		2644	鉢(手づくね)	J・K—25	包含層	4・70	
2610	〃	〃	〃	4・70		2645	甕底部	〃	〃	4・71	
2611	〃	〃	〃	〃		2646	〃	〃	〃	〃	
2612	脚部	〃	〃	〃		2647	〃	〃	〃	〃	
2613	蓋	〃	旧河川砂層	4・32		2648	〃	〃	〃	〃	
2614	〃	〃	〃	〃		2649	〃	〃	〃	〃	
2615	〃	〃	〃	〃	LVII	2650	〃	〃	〃	〃	
2616	〃	〃	〃	〃	〃	2651	〃	〃	〃	〃	
2617	〃	〃	〃	〃	〃	2652	壺底部	〃	〃	〃	
2618	無頸壺	〃	〃	〃		2653～2654	(欠番)				
2619	〃	〃	〃	〃		2655	甕口縁部	J・K—25	畦状遺構	4・39	LIX
2620	甕口縁	〃	〃	4・30		2656	〃	〃	〃	〃	〃
2621	無頸壺	〃	〃	4・32	LVIII	2657	〃	〃	〃	〃	〃
2622	〃	〃	〃	〃	LVII	2658	〃	〃	〃	〃	〃
2623	鉢	〃	〃	4・69		2659	壺底部	〃	〃	4・40	
2624	〃	〃	〃	〃		2660	〃	〃	〃	〃	
2625	〃	〃	〃	〃		2661	壺口縁	〃	〃	〃	
2626	〃	〃	〃	〃		2662	〃	〃	〃	〃	
2627	〃	〃	〃	〃		2663	胴部	〃	〃	〃	
2628	〃	〃	〃	〃		2664	蓋	〃	〃	〃	LIX
2629	〃	〃	〃	4・70		2665	無頸壺	〃	〃	〃	〃
2630	〃	〃	〃	〃		2666	〃	〃	〃	〃	〃
2631	甕底部	〃	〃	〃		2667	鉢	〃	〃	〃	
2632	〃	〃	〃	〃		2668	器台	〃	〃	〃	LIX
2633	〃	〃	〃	〃		2669	〃	〃	〃	〃	
2634	〃	〃	〃	〃		2670	〃	〃	〃	〃	LIX
2635	〃	〃	〃	〃		2671	〃	〃	〃	〃	〃
2636	〃	〃	〃	〃		2672	〃	L—26	包含層	4・72	
2637	〃	〃	〃	〃		2673	甕(壺?)底部	〃	〃	〃	
2638	鉢(手づくね)	〃	〃	〃		2674	壺底部	〃	〃	〃	
2639	〃	〃	〃	〃		2675	蓋	G—24	客土層	4・53	
2640	〃	〃	〃	〃		2676	鉢口縁	J—23	矢板列	4・12	
2641	〃	〃	〃	〃		2677	〃	L—26	包含層	4・72	
2642	〃	〃	〃	〃		2678	甕	G—24	客土層	4・56	
2643	〃	〃	〃	〃		2679	甕口縁	J—23	矢板列	4・12	LI

Tab.4・2　第2区出土石器・石製品挿図対照表

No.	器種	石材	トレンチ	層位	備考	Fig.	PL.
S 1001	石庖丁	凝灰岩	G－25	木器包含層西側砂層		4・73	
S 1002	〃	砂岩	〃	〃		4・73	
S 1003	〃	〃	〃	〃		4・73	LX
S 1004	〃	凝灰岩	〃	〃		4・73	
S 1005	〃	頁岩	〃	〃		4・73	
S 1006	〃	〃	〃	〃		4・73	
S 1007	〃	〃	〃	〃		4・73	LX
S 1008	〃	〃	〃	〃		4・73	
S 1009	蛤刃石斧	砂岩	〃	〃	刃部片	4・75	LX
S 1010	〃	変成岩	〃	〃	頭部片	4・74	LX
S 1011	〃	砂岩	〃	〃	刃部片	4・75	LX
S 1012	〃	〃	〃	〃	刃部欠損	4・75	LX
S 1013	磨製石鏃	頁岩	〃	〃	先端部欠損	4・76	LXII
S 1015	石鏃	黒曜石	〃	〃	左脚欠損	4・77	〃
S 1017	剝片石器	〃	〃	客土層	掻器か？	4・77	LXII
S 1018	〃	サヌカイト	〃	〃		4・77	
S 1020	敲石	安山岩	〃	〃		4・79	
S 1021	石庖丁	頁岩	〃	〃	未成品	4・73	
S 1022	砥石	砂岩	〃	耕土層		4・78	

No.	器種	石材	トレンチ	層位	備考	Fig.	PL.
S 1023	石鉋丁	砂岩	G－25	客土層		4·73	
S 1024	剝片石器	黒曜石	〃	木器包含層西側砂層		4·77	
S 1025	磨石	花崗岩	〃	客土層		4·79	
S 1026	方柱状片刃石斧	粘板岩	〃	木器包含層西側砂層		4·76	LX
S 1027	掻器	黒曜石	〃	〃		4·77	LXII
S 1028	小礫	砂岩	〃	客土層	投弾	4·79	
S 1029	尖頭状石器	サヌカイト	〃	木器包含層西側砂層		4·77	LXII
S 1031	砥石	砂岩	〃	〃		4·78	
S 1032	方柱状片刃石斧	粘板岩	〃	〃		4·76	LX
S 1033	削器	サヌカイト	〃	〃		4·77	
S 1035	蛤刃石斧	玄武岩	〃	耕土層		4·75	
S 1036	砥石	砂岩	〃	木器包含層西側砂層		4·76	LXII
S 1037	ナイフ様石器	黒曜石	〃	客土層		4·77	LXII
S 1098	石鏃	サヌカイト	〃	木器包含層	凹基無茎式	4·77	LXII
S 1099	石鉋丁	凝灰岩	〃	客土層	重さ60g　半月形	4·73	LX
S 1100	〃	〃	〃	木器包含層西側砂層	半月形	4·73	LX
S 1102	剝片石器	黒曜石	G－26	耕土層		4·77	
S 1103	砥石	砂岩	〃	客土層	石皿？	4·78	
S 1104	蛤刃石斧	玄武岩	〃	〃	刃部片	4·75	
S 1105	石鉋丁	頁岩質砂岩	〃	〃		4·74	
S 1106	蛤刃石斧	砂岩	〃	〃		4·76	
S 1107	削器	黒曜石	〃	〃		4·77	
S 1108	石鉋丁	頁岩	〃	〃	半月形	4·73	LX
S 1109	環状石斧	砂岩	〃	〃	推定径14cm　口径3cm　厚さ1.4cm	4·76	LXI
S 1110	蛤刃石斧	玄武岩	〃	〃	刃部片	4·76	
S 1111	〃	砂岩	〃	〃	〃	4·75	
S 1112	〃	〃	〃	〃	胴部片	4·75	
S 1114	石鉋丁	頁岩質砂岩	〃	第8～11層		4·74	
S 1115	蛤刃石斧	砂岩	〃	〃	頭部片	4·75	
S 1116	石斧		〃	〃		4·76	
S 1119	凹石		〃	客土層	表裏にくぼみあり	4·79	
S 1120	蛤刃石斧	砂岩	〃	木器包含層		4·76	
S 1121	削器	サヌカイト	〃	第20層最下部		4·77	LXII
S 1122	石鉋丁	砂岩	〃	〃		4·73	
S 1123	蛤刃石斧	〃	〃	客土層		4·75	LX
S 1124	磨石	花崗岩	〃	〃		4·79	
S 1126	砥石		〃	〃		4·79	
S 1127	石鎌	砂岩	〃	〃		4·74	
S 1128	石小刀	サヌカイト	〃	第20層最下部	掻器再利用	4·77	LXII
S 1129	蛤刃石斧	玄武岩	〃	客土層	刃部片	4·76	
S 1130	〃	〃	〃	〃		4·75	
S 1132	小礫	花崗岩	〃	〃		4·79	
S 1133	石鉋丁	頁岩質砂岩	〃	第14層	未成品	4·74	
S 1134	〃	頁岩	〃	客土層		4·74	
S 1136	〃	凝灰岩	〃	第14層	半月形	4·73	LX
S 1153	蛤刃石斧	砂岩	〃	客土層		4·76	
S 1170	磨石	花崗岩	〃	〃		4·79	
S 1181	磨製石鏃	緑泥変岩	〃	第20層上部		4·76	LXII
S 1192	剝片石器	黒曜石	〃	客土層		4·77	
S 1193	〃	〃	〃	〃		4·77	
S 1201	砥石	砂岩	G－24	〃		4·78	
S 1202	石鉋丁	〃	〃	〃	半月形	4·73	LX
S 1203	〃	輝緑凝灰岩	〃	〃	〃	4·73	
S 1204	砥石	砂岩	〃	〃		4·78	
S 1205	蛤刃石斧	〃	〃	〃		4·74	
S 1206	石鉋丁	頁岩	〃	〃		4·73	
S 1207	蛤刃石斧	砂岩	〃	〃	刃部欠損	4·74	LX
S 1215	石鉋丁	〃	〃	〃	半月形	4·73	LX
S 1301	〃	凝灰岩	J－23	耕土層		4·74	
S 1303	台石	花崗岩？	〃	〃	石皿？	4·78	

Tab.4・3　第2区出土石器数量表

トレンチ	層	蛤刃石斧 堆積岩	蛤刃石斧 玄武岩	方柱状片刃石斧	環状石斧	石鉋 頁岩質砂岩	石鉋 凝灰岩	石鎌	磨製石鏃	打製石鏃(ob)	削器 ob	削器 sa	石小刀	剥片石器(ob)	原石(ob)	石核(ob)	剥片 ob	剥片 sa	削片(ob)	磨石	凹石	砥石	その他
G－24	耕土・包含層															1	3		4				
	客土層	1				3	1							1		1						1	礫1
	木器層	1																				1	礫3
G－25	耕土層		1								1					1	1		4			2	
	客土層					2	1							4	2	11	18	1	11	1	1	1	ナイフ様石器1、小円礫1
	木器層西側砂層	4		2		10	2		1	1		1		1	1	1	1	2				4	掻器(ob)1、尖頭状石器(sa)1
	木器層									1												1	
G－26	耕土層					2								1		8							
	客土層	5	4		1	4		1			1	2		7	1		10		3	2	1	6	敲石？1
	第8～11層	2				1								7			7		2				小円礫2
	木器層	1														1	3						
	第14層	1				1	1									1	5		1				
	第20層					1			1			1	1			1	1		1				
H－21	包含層																1					1	
H－25	耕土層	1												2		1	1		1				
	耕土下砂層																1		2	1			礫1
I－20	耕土層																		1				小円礫2
I－26	耕土層																			1			扁平石斧1
J－21	包含層																1						
J－22	包含層													1									
J－23	耕土層					1	1										1		1			1	台石？2、小円礫2
	包含層																						小円礫2
J－24	耕土層																		1				
J・K－25	耕土層					1											2						
	包含層																2					1	
	砂層下部													1			1						
J－26	包含層																						敲石1
	旧河砂層															1	2						
K－23・24	耕土層														1				1				
L－26	包含層																						
計		16	5	2	1	26	6	1	2	2	2	4	1	25	5	28	63	3	33	5	2	19	

obは黒曜石、saはサヌカイト

No.	器種	石材	トレンチ	層位	備考	Fig.	PL.
S1408	石鉋丁	頁岩	K－25	耕土		4・74	
S1458	磨石	硬質砂岩	H－25	耕土	抱含層	4・79	LXI
S1800	扁平磨製石斧	砂岩	I－26	耕土	層	4・76	
Ss2	紡錘車	結晶片岩	G－26	客土	層	4・67	LXI
Ss8	銅鉾鋳型	砂岩	〃	〃	破片 重さ550g	〃	〃
Ss9	鋳型	〃	〃	〃	銅鉾鋳型 砥石として再利用	〃	〃

Tab.4・4　第2区出土土製品一覧

No.	種類	トレンチ・グリット	層位	Fig.	PL.	No.	種類	トレンチ・グリット	層位	Fig.	PL
D6	投弾	G－24	包含層			D24	匙形土製品	G－24	客土層		
D7	円盤	〃	客土層	4・56	LXI	D25	大形円盤	〃	〃	4・56	
D8	〃	G－25	〃			D26	不明（棒状）	〃	〃	〃	
D9	紡錘車	〃	〃			D27	円盤	G－25	〃		
D10	投弾	〃	〃	4・63		D28	紡錘車	G－24	〃	4・56	LXI
D11	投弾	〃	〃			D29	〃	〃	〃	4・66	〃
D12	塼？	〃	〃			D30	土器片利用円盤	〃	〃	4・19	〃
D18	投弾	G－24	木器包含器			D31	不明（勾玉状）	G－26	〃	4・66	
D21	不明（棒状）	G－25	客土層	4・63		D32	匙形土製品	G－24	台地上ピット	4・19	LXII
D22	〃（〃）	〃	〃	〃		D33	不明	〃	〃	〃	
D23	〃（把手状）	〃	〃	〃							

Tab.4・5　第2区出土木製品・木材一覧

No.	トレンチ	層位・位置	種別	法量				時期	材質	Fig.	PL.	備考
				長	幅	厚	直径					
2001	G－24	木器包含層	二又鋤片	47.7		2.0		弥・中・後葉	カシ	4・23	LXIII	
2002	〃	〃	異形木製品	10.9			2.2	〃	ユズリハ？	4・23	LXIV	
2003	〃	〃	自然木？	15.0	4.0	3.0		〃	スギ			
2004	〃	〃	異形木製品	24.0	13.0	5.5		〃	クリ	4・22		有孔
2005	〃	〃	丸木杭	22.5			2.3	〃	アワブキ			
2006	〃	〃	〃	40.0			4.5	〃	アワブキ			
2007	〃	〃	〃	17.5			4.0	〃	ユズリハ型			
2008	〃	〃	〃	17.0			3.8	〃	クヌギの類			
2009	〃	〃	〃	25.0			4.2	〃	シイ			
2010	〃	〃	〃					〃	カシ			アラカシ型
2011	〃	〃	〃				4.5	〃	カシ			
2012	〃	〃	〃	43.0			4.2	〃	カシ		LXV	
2013	〃	〃	〃	16.0			4.5	〃	ゴンズイ			
2014	〃	〃	〃	20.0			3.0	〃	エゴノキ			
2015	〃	〃	杭または流木					〃	エノキ			小片
2016	〃	〃	加工木	5.1	3.5	1.9		〃	シイ	4・23		
2017	〃	〃	丸木杭	24.0			3.0	〃	シイ			
2018	〃	〃	〃	15.0			3.8	〃	シイ			
2019	〃	〃	〃					〃	アワブキ			小片
2020	〃	〃	〃	10.0			2.5	〃	エゴノキ			
2021	〃	〃	〃	15.5			3.0	〃	ユズリハ			
2022	〃	〃	〃	16.0			3.0	〃	シイ			
2023	〃	〃	〃				3.5	〃	カシ			小片
2024	〃	〃	板状破片		8.0	1.8		〃	サイカチ			
2025	G－25	〃	網枠					弥・中・中葉		4・24	LXIV	鑑定せず
2026	〃	〃	フォーク状木器	83.5				〃	カシ	4・23	LXIII	
2027	〃	〃	田下駄状木器	22.0	1.8	1.5		〃	スギ	4・24	LXIII	
2028	〃	〃	細角材	39.5	2.0	2.0		〃	スギ	4・23		
2029	〃	〃	板状木	39.0	6.5	1.9		〃	シイ	4・22		
2030	〃	〃	杭(?)	28.0	4.5	3.5		〃	シイ			
2031	〃	〃	異形木器片	25.0				〃	ムクノキ	4・23	LXIV	
2032	〃	〃	丸木杭	8.3	3.5	3.0		〃		4・23	LXIV	
2033	〃	〃	板状加工木	28.9	14.2	2.7		〃	シイ			
2034	〃	〃	〃	24.9	16.2	4.6		〃	シイ	4・22		
2035	〃	〃	矢板状杭	44.8	8.5	4.4		〃	シイ	4・22	LXV	
2036	〃	〃	〃	49.6	9.1	4.0		〃	シイ	4・23	LXV	
2037	〃	〃	平鍬	14.1	8.5	1.5～1.0		〃	カシ	4・24	LXIII	
2038	〃	〃	異形木器片	7..2		0.9		〃	カシ	4・23		
2039	〃	〃	木椀					〃	ヒノキ	4・23	LXIV	
2040	〃	〃	加工木	28.4	7.8	4.7		〃	クリ			

No.	トレンチ	層位・位置	種　別	法量 長	幅	厚	直径	時期	材　質	Fig.	PL.	備　考
2041	G－25	木器包含層	流　木	78.0			12.5	弥·中·中葉	クスノキ			
2042	〃	〃	〃	91.0			4.0～3.0	〃	カマツカ？			
2043	〃	〃	矢板状杭					〃				樹　皮
2044	〃	〃	丸木杭	46.5			4.8×3.8	〃	アワブキ			
2045	〃	〃	板状木製品					〃				
2046	〃	〃	木製品片	8.0	5.7	1.8		〃	カ　シ			
2047	〃	〃	〃	12.0	3.5	1.8		〃	カ　シ			
2048	〃	〃	杭残片	12.0				〃				
2049	〃	〃	加工小木片					〃				鑑定せず
2050	〃	〃	矢板状杭	39.4	9.5	3.4		〃	シ　イ	4·22		
2051	〃	〃	角　材	6.5	2.7	2.4		〃	ムクロジ			
2052	〃	〃	矢板状杭(?)小片	4.5	10.0	3.0		〃	ムクロジ			
2053	〃	〃	丸木杭	6.5			2.5	〃	ユズリハ			
2054	〃	〃	〃	15.0			4.2×3.8	〃	イヌビワ			
2055	〃	〃	糸巻状木器	6.5			3.1	〃	ユズリハ	4·23	LXIV	
2056	〃	〃	板状加工木	23.4+2	3.6	0.9		〃	ク　リ			
2057	〃	〃	〃	16.8	3.2	1.5		〃	カ　シ			
2058	〃	〃	〃	7.4	2.1	0.3		〃	シ　イ			
2059	〃	〃	加工木	17.3	6.8	2.9		〃	アワブキ			
2060	〃	〃	流　木	38.0			7.0	〃	カツラ？			
2061	〃	〃	〃	19.0			2.0×1.5	〃	シ　イ			
2062	〃	〃	加工木	7.0	4.0	2.8		〃	シ　イ			
2063	〃	〃	〃	10.3	6.7	3.1		〃	クスノキ			
2064	G－26	〃	二又鍬					弥·中·後葉	カシ　シ	4·23	LXIII	
2065	〃	〃	石斧柄未成品					〃	クヌギの類	4·24	LXIV	
2066	〃	〃	板状加工品	2.8	4.5	0.3～0.6		〃	ス　ギ			
2067	〃	〃	丸木杭	19.0			4.5	〃	カ　シ			
2068	〃	〃	〃 (片)	20.0	5.0	1.0		〃	マツ(二葉松)			
2069	〃	〃	流　木(?)					〃	チシヤノキ			L字形で斧柄の様な形
2070	〃	〃	丸木杭	22.8			3.0	〃	シ　イ			
2071	〃	〃	〃	22.2			4.4×3.8	〃	シ　イ			
2072	〃	〃	加工小木(?)	7.0	4.2	1.7		〃	カ　シ			
2073	〃	〃	丸木杭(?)	14.7			3.7×3.3	〃	ユズリハ？			
2074	〃	〃	〃 (?)	15.3			3.2×2.8	〃	？			
2075	〃	〃	〃 (?)	13.5			3.0×2.2	〃	ヤナギ			
2076	〃	〃	角　杭(?)	9.6	3.1	2.2		〃	？			保存不良
2077	〃	〃	流　木	8.3			3.0×2.0	〃	ヤナギ？			
2078	〃	〃	〃	13.0			5.7×4.3	〃	クスノキ			
2079	〃	〃	加工木	19.8	12.9	5.5		〃	ムクロジ			
2080	〃	〃	〃	12.0	7.1	4.5		〃	シ　イ	4·23		
2081	〃	〃	〃	11.4	7.4	1.3		〃	ス　ギ			
2082	H－21	杭　群	丸木杭	13.3			2.3	？	エゴノキ			
2083	〃	〃	〃					〃	シ　イ			小　片
2084	〃	〃	〃					〃	ユズリハ			〃
2085	〃	〃	丸木杭(?)	6.0			3.0	〃	ユズリハ			
2086	〃	〃	〃					〃	シ　イ			小　片
2087	〃	〃	〃					〃	シ　イ			〃
2088	〃	〃	〃	23.5			4.0	〃	ユズリハ			
2089	H－23	黒色粘質土層	流木(自然木)					〃	ムクノキ			
2090	〃	〃	〃	30.0	9.0	5.5		〃	〃			
2091	〃	〃	〃	70.0	13.0	8.0		〃	〃			
2092	〃	〃	〃	36.0			7.0×5.5	〃	〃			
2093	〃	〃	〃	29.0			5.2	〃	〃			
2094	〃	〃	〃					〃	〃			
2095	〃	〃	〃	34.5				〃	〃			
2096	〃	〃	〃	36.0			5.5	〃	〃			
2097	〃	〃	〃	40.0			5.0	〃	〃			
2098	〃	〃	〃	38.0			4.8	〃	〃			
2099	〃	〃	〃	25.0	7.0	4.0		〃	〃			

No.	トレンチ	層位・位置	種　別	法量 長	幅	厚	直径	時期	材　質	Fig.	PL.	備　考
2100	H－23	黒色粘質土層	流木(自然木)	18.5			4.0	?	ムクノキ			
2101	〃	〃	〃					〃	〃			
2102	〃	〃	〃					〃	〃			
2103	I－23	〃	自然木	6.6			1.7	〃	カゴノキ?			
2104	〃		〃					〃	カ　シ			
2105	〃		矢　板	32.0	12.0	1.3		〃	クスノキ			乾燥変形
2106	J－21	黒色粘質土層	板状杭	42.2	4.5	2.0		弥・前	シ　イ			
2107	〃	〃	丸木杭	30.0			1.5	〃	サカキ?			
2108	〃	〃	板状杭	16.3	6.5	2.0		〃	クスノキ			
2109	〃	〃	丸木杭	8.0			2.3	〃	サカキ?			2107と同質 乾燥変形
2110	〃	〃	〃					〃	?			小　片
2111	〃	〃	〃	8.0			2.5	〃				2109と同質
2112	J－23	矢板列	矢板状杭	42.0	7.0	1.5		〃	シ　イ			
2113	〃	〃	流木(杭か)	18.0	7.5	5.3		〃	クヌギ			
2114	〃	〃	丸木杭	43.5			2.5	〃	針葉材			
2115	〃	〃	〃	28.0			2.6×2.4	〃	ヤナギ?			
2116	〃	〃	矢　板	50.3	13.2	3.4		〃	——	4·14		2120±90B.P. (Gak 4556)
2117	〃	〃	〃	34.0	5.8	3.5		〃	シ　イ			
2118	〃	〃	丸木杭	23.5			2.5	〃	〃			
2119	〃	〃	矢　板	17.0	6.2	3.5		〃	〃			先端部
2120	〃	〃	〃	44.9	12.1	4.4		〃	〃	4·14		
2121	〃	〃	〃	37.3	11.5	3.1		〃	〃			
2122	〃	〃	〃	40.0	9.0	1.5		〃	〃 ?			
2123	〃	〃	〃	35.2	9.6	1.7		〃	〃	4·14		
2124	〃	〃	〃	34.0	5.5	2.0		〃	〃			
2125	〃	〃	〃	53.7	7.7	2.3		〃	〃	4·14		
2126	〃	〃	〃	55.4	10.0	2.1		〃	〃	4·14		
2127	〃	〃	〃	37.3	8.2	1.3		〃	〃	4·14		
2128	〃	〃	〃	29.0	19.5	4.0		〃	クスノキ			
2129	〃	矢板列付近	流　木	35.0	9.0	3.3		〃	カヤノキ			
2130	〃	〃	〃	10.3			2.2	〃	ヤナギ			
2131	〃	〃	板状木小片	4.6	3.8	0.8		〃	シ　イ			
2132	〃	〃	矢　板(?)	27.2	6.5	1.9		〃	〃			
2133	〃	〃	板状加工木	68.6	6.3	1.6		〃	〃	4·14		小孔あり
2134	〃	〃	〃					〃	〃			
2135	〃	〃	流木(加工)	17.0	3.5	2.0		〃	カシ類			
2136	〃	〃	〃	26.5	4.0	0.8		〃	クスノキ			
2137	〃	〃	〃	34.0	6.0	2.7		〃	〃			
2138	〃	〃	板状加工木	13.4	8.3	1.0		〃	シ　イ			小孔あり
2139	〃	〃	矢板状木	18.5	10.5	1.1		〃	〃			
2140	〃	〃	流　木					〃	クスノキ			
2141	〃	〃	〃					〃	〃			
2142	〃	〃	〃					〃	シ　イ			
2143	〃	〃	矢　板	29.5	6.0	3.8		〃	〃			
2144	〃	〃	矢板状	7.5	8.8	1.4		〃	〃			
2145	〃	〃	流　木					〃	〃			
2146	〃	〃	〃	9.0			3.2×2.8	〃	ユシアブラ?			
2147	〃	〃	〃	7.0			1.5	〃	ヤナギ			
2148	〃	〃	〃	7.0			1.8	〃	シ　イ?			
2149	〃	〃	〃	6.3			1.7	〃	ヤナギ			
2150	〃	〃	〃	10.8			1.6	〃	カ　シ			
2151	〃	〃	〃	6.0			1.5	〃	ヤナギ			
2152	〃	〃	〃	4.8			1.1	〃	〃			
2153	〃	柵状遺構	自然木					〃	カ　シ			
2154	〃	〃	加工木	10.5			3.5	〃	アワブキ			
2155	〃	〃	自然木	37.4			4.2×2.7	〃	?			乾燥収縮
2156	〃	〃	〃	14.5			2.6	〃	アワブキ			
2157	〃	〃	〃	10.0			2.4×2.2	〃	ヤナギ			
2158	〃	〃	〃				2.1×2.6	〃	〃			

No.	トレンチ	層位・位置	種　別	法量 長	幅	厚	直径	時期	材　質	Fig.	PL.	備　考
2159	J－23	柵状遺構	自然木	9.5			2.2	弥・前	ヤナギ			
2160	〃	〃	〃	42.0			3.2×2.5	〃	シイ?			
2161	〃	〃	丸木				2.3	〃	ナナカマド?			
2162	〃	〃	〃	29.1			2.8×2.3	〃	タブノキ			
2163	〃	〃	〃				1.5×0.8	〃	クスノキ科			
2164	〃	〃	自然木				2.5×1.3	〃	タブノキ			
2165	〃	〃	〃	31.5	7.5	6.5		〃	カシ			
2166	〃	〃	加工木	25.5	7.0	3.5~4.0		〃				
2167	〃	〃	丸木杭	35.5			5.5	〃	タブノキ			
2168	〃	〃	板状木	41.0	5.5	3.0		〃	カシ			
2169	〃	〃	自然木	28.5			4.0	〃	アワブキ			
2170	〃	〃	〃	15.0			5.5	〃	シイ			
2171	〃	〃	〃				2.5	〃	アワブキ			
2172	〃	〃	〃	16.3			2.5×1.8	〃	ヤナギ			
2173	〃	〃	〃	11.5			1.5	〃	〃			
2174	〃	〃	丸木	33.0			1.6	〃	シイ			
2175	〃	〃	自然木	14.5			4.0	〃	ザイフリボク?			
2176	〃	〃	〃	17.3			2.6×2.3	〃	?			
2177	〃	〃	〃	11.7			1.0	〃	ヤナギ			
2178	〃	〃	角材	13.4	3.2	2.0		〃	シイ			
2179	〃	〃	板状木	22.8	2.8	1.0		〃	ヒノキ	4·14		
2180	〃	〃	〃	25.0				〃	カシ			
2181	〃	〃	〃	14.5	4.2	2.1		〃	〃			
2182	〃	〃	丸木杭					〃	アワブキ			
2183	〃	〃	自然木片			2.0		〃	ヤナギ			
2184	〃	〃	〃			2.0		〃	ムクノキ?			
2185	〃	〃	〃	22.0				〃	エゴノキ			
2186	〃	〃	丸木杭	18.0			3.5	〃	〃			
2187	〃	〃	自然木片	37.5			4.0	〃	タイミンタチバナ			
2188	〃	〃	〃	16.0			6.0	〃	カシ			
2189	〃	〃	〃	19.5			1.8	〃	コナラ			
2190	〃	〃	〃	11.0			1.0	〃	ヤナギ?			
2191	〃	〃	〃	10.0			1.5	〃	ヤナギ			
2192	〃	〃	〃	9.0			1.0	〃	〃			
2193	〃	〃	〃	5.0			1.3	〃	〃			
2194	〃	〃	板材	36.3	7.4	1.1		〃	シイ			
2195	J－25	旧河岸	丸木杭	29.0			6.0	弥・中?				
2196	〃	〃	〃	51.5			7.6	〃	クリ	4·15	LXV	
2197	〃	〃	〃					〃	〃			
2198	〃	〃	〃	52.1			9.8	〃	〃	4·15		
2199	〃	矢板列西墨色粘質土層	板材	41.5	10.0	3.0		弥・前	カヤ			
2200	〃	〃	〃	27.5	9.0	3.0		〃	クス			
2201	〃	矢板列東例横	流木	41.0			4.2	〃	?			
2202	〃	砂層	角杭	39.0	5.0	3.0		弥・中	アワブキ			
2203	〃	黒粘層	丸木杭(?)	9.0			3.5	弥・前	コナラ			
2204	〃	砂層	流木	45.0			5.0	弥・中				
2205	〃	〃	角杭	22.0	4.0	2.8		〃	クリ			
2206	〃	西側矢板列	矢板	49.8	8.9	2.8		弥・前	シイ	4·15		
2207	〃	砂層	流木				10.0	弥・中	ヤナギ			
2208	〃	〃	〃				8.0	〃	〃			
2209	〃	〃	〃	34.0			4.5	〃	ユズリハ			
2210	〃	〃	丸木杭	18.0			6.0	〃	タブノキ?			
2211	J－26	〃	矢板状杭	113.7	15.0	7.2		弥・中	クリ	4·15	LXV	
2212	〃	〃	丸木杭	70.2			3.5	〃	マツ(二葉松)	4·15		
2213	〃	〃	流木					〃	エノキ			
2214	〃	〃	〃				3.0~8.0	〃	イヌビワ			
2215	〃	〃	〃					〃	〃			
2216	〃	〃	〃				4.0	〃	タブノキ			
2217	〃	〃	〃					〃	〃			

No.	トレンチ	層位・位置	種　別	法量 長	幅	厚	直径	時期	材　質	Fig.	PL.	備　考
2218	J－26	砂　層	流　木				3.0	弥・中	タブノキ			
2219	〃	〃	〃					〃	ヤナギ			
2220	〃	〃	板状木	22.0	8.5	3.0		〃	クリ			
2221	〃	〃	流　木					〃	ヤナギ			
2222	〃	〃	杭(？)					〃				小孔あり
2223	〃	矢板列	丸木杭	60.0			7.5	弥・前	カヤ			
2224	〃	〃	〃	10.0			2.3	〃	シイ			
2225	〃	〃	矢　板	21.1	10.0	1.1		〃	〃	4・15		
2226	〃	〃	〃	38.4	23.8	5.0		〃	クスノキ	4・15		
2227	〃	〃	〃	40.0	7.1	2.9		〃	シイ	4・15		
2228	〃	〃	丸木杭(?)	11.0			2.0	〃	〃			
2229	〃	〃	〃　(?)	12.0			2.5	〃	〃			
2230	〃	〃	〃	21.0			2.5	〃	〃			
2231	〃	〃	〃	13.5			2.5	〃	トチノキ			
2232	〃	〃	角　杭(?)	30.0			2.5	〃	シイ			
2233	〃	〃	丸木杭	24.0			1.8	〃	ヤナギ			
2234	〃	砂　層	流　木	13.0				弥・中	?			
2235	〃	〃	〃					〃	シイ			
2236	〃	〃	〃	3.0			1.2	〃	ムクロジ			
2237	〃	〃	〃					〃	ウワミズザクラ			
2238	〃	〃	〃					〃	タブノキ			
2239	〃	〃	〃					〃	エノキ			
2240	〃	〃	〃					〃	イヌビワ			
2241	〃	〃	〃					〃				樹　皮
2242	〃	〃	〃					〃	ヤナギ			
2243	〃	〃	〃					〃	カシ			
2244	〃	〃	〃					〃	ヤナギ			
2245	〃	〃	〃					〃	〃			
2246	〃	〃	〃					〃	〃			
2247	〃	〃	〃					〃	〃			
2248	K-23・24	青灰砂層	〃	33.0	3.0	2.0		?	エノキ?			
2249	〃	〃	〃	64.0			2.5～3.5	〃				
2250	K－25	畦状遺構 西方粗砂層	キ　ネ	36.1			9.2	弥・後 ・前葉	カ　シ	4・43	LXIV	
2251	〃	畦状遺構内	二又鍬	58.7				〃	〃	4・43	LXIII	
2252	〃	〃	三又鍬	44.3				〃	〃	4・42	LXIII	
2253	〃	〃	〃	42.8				〃	〃	4・42	LXIII	
2254	〃	〃 西側杭列	角　杭	75.2	6.9	6.1		〃	ス　ギ	4・46	LXVI	建築材転用
2255	〃	畦状遺構内	丸木杭	20.5			4.5	〃	シ　イ			
2256	〃	〃	〃	32.5			3.7	〃	〃			
2257	〃	〃	杭	54.4	5.9	2.8		〃	〃	4・45		
2258	〃	〃	角　杭	42.6	6.6	4.2		〃	〃　?	4・44		
2259	〃	〃	丸木杭	44.0			5.5～6.0	〃	ホオノキ			
2260	〃	〃	杭	67.0	5.5	3.5		〃	シ　イ			
2261	〃	〃	丸木杭	53.5			5.7×4.5	〃	カキノキ			
2262	〃	〃	〃	34.0			4.5×5.0	〃	シ　イ			
2263	〃	〃	角　杭	32.2	7.0	5.7		〃	ス　ギ	4・45	LXVI	
2264	〃	〃	丸木杭	32.0			5.5×5.0	〃	シ　イ			
2265	〃	〃	杭	50.0	6.0	3.3		〃	〃			
2266	〃	〃	〃	64.0	5.5	4.3～4.7		〃	ス　ギ	4・45	LXV	建築材転用
2267	〃	〃	丸木杭	50.0			5.5	〃	カ　シ			
2268	〃	〃	〃	43.0			5.5×5.0	〃	シ　イ			
2269	〃	〃	〃	31.5			4.2	〃	〃		LXVI	
2270	〃	〃	角　杭	82.9	7.4	5.7		〃	ス　ギ	4・45	LXVI	建築材転用
2271	〃	〃	杭	33.5	5.5	2.5		〃	シ　イ			
2272	〃	〃	〃	65.7	6.4	3.7		〃	〃	4・44	LXV	
2273	〃	〃	(角) 杭	29.0	8.0	4.5		〃	クリ			
2274	〃	〃	杭	67.0	6.5～7.0	4.0		〃	シ　イ			
2275	〃	〃	〃	53.0	6.0	3.5		〃	カ　シ			
2276	〃	〃	丸木杭	65.0			4.5	〃	シ　イ			

No.	トレンチ	層位・位置	種　別	法量 長	幅	厚	直径	時期	材　質	Fig.	PL.	備　考
2277	K－25	畦状遺構内	杭	44.0				弥・後・前葉	シ　イ			
2278	〃	〃	角　杭	69.6	6.3	6.1		〃	ス　ギ	4·45	LXVI	建築材
2279	〃	〃	丸木杭	47.5			5.5	〃	シ　イ			
2280	〃	〃	〃	72.5			6.0	〃	アワブキ			
2281	〃	畦状遺構内 西側杭列	流　木				1.5	〃				
2282	〃	〃	丸木杭	44.8			6.3	〃	シ　イ	4·42	LXIV	
2283	〃	〃	〃	93.0			6.3	〃	〃			
2284	〃	〃	角　杭	41.9	5.2	3.5		〃	ス　ギ	4·45	LXVI	建築材転用
2285	〃	〃	〃	68.9	6.9	5.5		〃	シ　イ	4·46	LXVI	〃
2286	〃	〃	〃	56.4	7.4	7.4		〃	ス　ギ	4·46	LXVI	〃
2287	〃	〃	〃	69.0	6.0	4.0		〃	ク　リ			
2288	〃	〃	割　杭	41.0	7.5	4.5		〃	シ　イ			
2289	〃	〃	丸木杭	47.5			5.3	〃	〃			
2290	〃	〃	角　杭	61.8	5.1	4.8		〃	ス　ギ	4·46	LXV	建築材転用
2291	〃	〃	丸木杭	66.0			6.6	〃	ク　リ			
2292	〃	〃	角　杭	54.0	9.0	6.0		〃	〃			建築材転用
2293	〃	〃	丸木杭	94.0			5.0	〃	カ　シ			
2294	〃	〃	杭	58.0	5.5	3.0		〃	ヤマザクラ？			
2295	〃	〃	丸木杭	73.5			6.7×6.2	〃	シ　イ			
2296	〃	〃	角　杭(?)	22.0				〃	ス　ギ			
2297	〃	〃	丸木杭	40.2			5.5	〃	カ　シ	4·44		
2298	〃	〃	割　杭	51.0	4.8	3.5		〃	シ　イ			
2299	〃	〃	角　杭	51.0	7.0	4.0		〃	ク　リ	4·45	LXV	
2300	〃		丸木杭	38.3			4.3	〃	カ　シ			
2301	〃	〃	〃	36.0			4.6	〃	シ　イ			
2302	〃	〃	杭	91.4			6.3～7.1	〃	？	4·44		
2303	〃	西例杭列	板状木	35.5	5.3	1.7		〃	シ　イ			
2304	〃	〃	角柱状木	1.4.5	6.4	4.9		〃	〃	4·44		
2305	〃	〃	板状木	72.5	8.0	1.8		〃	〃			
2306	〃	〃	角柱状加工木					〃	カキノキ			
2307	〃	〃	加工木	44.0				〃	シ　イ			
2308	〃	〃	自然木				1.8	〃	サイカチ			
2309	〃	〃	角　杭(?)	85.5	4.5	3.0～3.5		〃	ク　リ			乾燥収縮
2310	〃	〃	自然木	44.0			12.0×9.0	〃	カゴノキ？			
2311	〃	〃	〃	27.0			9.0	〃	ムクノキ			
2312	〃	〃	加工木	88.0			5.0～6.0	〃	ホオノキ			
2313	〃	〃	角　杭	56.5	6.5	5.0		〃	シ　イ			乾燥収縮
2314	〃	〃	〃	67.4	8.3	2.8		〃	〃	4·46		建築材転用
2315	〃	〃	〃	55.5	7.3	3.5		〃	カ　シ？			
2316	〃	〃	自然木				3.0	〃				Prunus
2317	〃	〃	丸木杭	87.3			8.5	〃	アワブキ	4·44	LXV	
2318	〃	〃	角　杭	52.0	8.0	5.0		〃	ユズリハ			
2319	〃	〃	自然木？	94.0			6.0	〃	ムクロジ			
2320	〃	〃	自然木				3.5×4.6	〃				
2321	〃	〃	角　材	96.0	9.0	6.0		〃			LXVI	建築材転用
2322	〃	〃	割　杭	76.5	5.5	5.4		〃	ユズリハ			
2323	〃	〃	自然木				2.5×3.2	〃	アワブキ			
2324	〃	〃	〃				3.0×2.5	〃	〃			
2325	〃	〃	角　杭(?)	25.0	4.0	2.1		〃				
2326	〃	〃	自然木	67.0				〃	エ　ノ　キ			
2327	〃	〃	〃				5.0	〃	〃			
2328	〃	〃	杭(？)	18.5	6.0	3.0		〃	シ　イ	4·44		
2329	〃	〃	〃	40.0	2.9	2.6		〃	〃			
2330	〃	〃	自然木				2.0	〃				つる茎
2331	〃	〃	〃				2.2	〃	ヤ　ナ　ギ			
2332	〃	〃	〃	24.0			2.2×3.0	〃	アワブキ			
2333	〃	〃	〃				2.0	〃	シ　イ？			収　縮
2334	〃	〃	角　材	44.0	2.6	2.6		〃	〃			
2335	〃	〃	丸木杭	45.5			5.0	〃	カ　シ			

No.	トレンチ	層位・位置	種　別	法量 長	幅	厚	直径	時期	材　質	Fig.	PL.	備　考
2336	K－25	西側杭列	丸木杭(?)	68.0			4.5～5.0	弥・後・前葉	シ　イ?			
2337	〃	〃	自然木	31.0	7.0	3.5		〃	サイカチ			
2338	〃	〃	角　材	56.5	2.4	1.8		〃	ユズリハ			
2339	〃	〃	自然木				1.6	〃	アワブキ			
2340	〃	〃	〃	70～80			1.8	〃	ゴンズイ?			
2341	〃	〃	〃				6.0	〃	サイカチ			
2342	〃	〃	〃				5.0×4.0	〃	〃			
2343	〃	〃	〃	40.0			5.3×4.8	〃	カ　シ			
2344	〃	〃	〃					〃	シ　イ			
2345	〃	〃	加工木	47.0	5.0	2.6		〃	?			
2346	〃	〃	〃	42.5	3.5	3.5		〃	ク　リ?			
2347	〃	〃	自然木				1.8	〃	ヤナギ			
2348	〃	〃	〃				6.0	〃	クヌギ?			
2349	〃	〃	加工木	136.0			5.0	〃	ク　リ			
2350	〃	〃	自然木					〃	カ　シ			
2351	〃	〃	〃				2.0	〃	〃			
2352	〃	〃	〃					〃	ムクノキ			
2353	〃	〃	〃				1.3	〃				つる茎
2354	〃	〃	〃				2.3	〃	カマツカ?			
2355	〃	〃	〃				6.5	〃	?			
2356	〃	〃	〃				4.0	〃	ユズリハ			
2357	〃	〃	〃				3.8	〃	エノキ			
2358	〃	〃	板状加工木	10.0	7.0	1.2		〃	〃			
2359	〃	〃	加工木					〃	ヤナギ			小　片
2360	〃	〃	割　杭	20.5				〃	シ　イ			
2361	〃	〃	丸木杭	29.5			6.5	〃	ヤナギ			
2362	〃	〃	〃	30.5			3.5	〃	タブノキ?			
2363	〃	〃	丸木半割木	57.0	5.0	3.5		〃	シ　イ			
2364	〃	〃	自然木				2.8	〃	〃			
2365	〃	〃	〃				2.0	〃	〃			
2366	〃	〃	〃				1.3	〃	〃			
2367	〃	〃	〃				1.5	〃	ヤナギ			
2368	〃	〃	〃				1.5×1.2	〃	シ　イ			
2369	〃	〃	〃				0.8	〃	ヤナギ			
2370	〃	〃	〃				0.8	〃	?			
2371	〃	〃	半割加工木	25.5	12.0			〃	シ　イ			
2372	〃	〃	加工木	32.5			5.4	〃	カキノキ			
2373	〃	〃	〃	23.0	7.5	5.0		〃	ス　ギ			
2374	〃	〃	自然木	20.0			3.0	〃	シ　イ			
2375	〃	〃	角柱状(？)木	9.5	3.2	1.2		〃	〃			
2376	〃	〃	板状加工木	7.0	3.3	0.8		〃	ユズリハ			
2377	〃	〃	自然木				2.3×2.0	〃				
2378	〃	〃	〃				1.8×1.2	〃	カ　シ			
2379	〃	〃	〃				1.5×1.4	〃	サイカチ			
2380	〃	〃	〃				1.1	〃				乾燥収縮
2381	〃	〃	丸木杭(?)	38.0			5.0	〃	シ　イ			
2382	〃	〃	加工木(?)					〃	クヌギ類			やけている
2383	〃	〃	自然木				5.0×4.0	〃	カ　シ			
2384	〃	〃	〃				4.5	〃	〃			
2385	〃	〃	〃				4.5	〃	カ　シ?			中空木
2386	〃	〃	自然木加工木	13.0	3.5	2.4		〃	シ　イ?			
2387	〃	〃	自然木				5.5	〃	ユズリハ			
2388	〃	〃	加工木				4.5	〃	?			
2389	〃	〃	自然木				3.3	〃	アワブキ			乾燥収縮
2390	〃	〃	〃				4.5	〃	カ　シ			
2391	〃	〃	丸木杭				5.0	〃	〃			
2392	〃	〃	板状加工木(?)	12.5	6.0	2.5		〃				
2393	〃	〃	加工木					〃	ス　ギ			小　片
2394	〃	〃	加工丸木	42.0			3.0	〃	タブノキ?			

No.	トレンチ	層位・位置	種　別	法量 長	幅	厚	直径	時期	材　質	Fig.	PL.	備　考
2395	K－25	西側杭列	自然木				3.5×3.0	弥・後・前築	エノキ？			
2396	〃	〃	〃				2.3	〃	？			
2397	〃	〃	〃				0.7×1.0	〃	エノキ			
2398	〃	〃	〃				2.0	〃	エゴノキ？			
2399	〃	〃	〃				3.0	〃	カマツカ			
2400	〃	〃	〃				2.0	〃	？			
2401	〃	〃	〃				1.5	〃	？			
2402	〃	〃	〃				1.5	〃	エノキ			
2403	〃	〃	角　杭	25.0	5.9	4.0		〃	シイ			
2404	〃	〃	丸木杭	42.5			3.9	〃	ウワミズザクラ			
2405	〃	〃	角　杭	89.9	9.5	4.2		〃	スギ	4·45	LXVI	建築材転用
2406	〃	西側杭列杭列下	丸木杭	50.3			1 12.6	〃		4·44		
2407	〃	アゼ状遺構内南壁セクション	割　杭	24.0	5.5	3.5～4.0		〃	クリ			
2408	〃	東側砂層	自然木	53.0			3.0～4.0	〃	ユズリハ？			
2409	〃	東側白色粗砂	〃	28.0				〃	ヤナギ			
2410	〃	東側砂層	〃					〃				材鑑定せず
2411	〃	西側青灰粘質砂層	木器（鍬？）先端小片	5.1	1.8	1.7		〃	カシ	4·42		
2412	〃	〃	板状加工木	10.6	5.7	0.6		〃	〃	4·42		
2413	〃	〃	〃	5.4	4.0	1.4		〃	〃	4·42	LXIV	
2414	〃	〃	〃	9.8	4.8	1.8		〃				
2415	〃	〃	〃	10.6	5.0	1.2		〃	クスノキ			
2416	〃	アゼ状遺構内の杭（浮遊）	角　杭	32.5	7.5	5.0		〃	シイ			
2417	〃	〃	〃	51.5	8.0	5.8		〃	スギ	4·46	LXV	建築材転用
2418	〃	〃	〃	39.5	9.6	5.4		〃	〃	4·46	LXVI	建築材転用
2419	〃	〃	杭	31.5	3.0	2.4		〃	シイ			
2420	〃	〃	割　杭	48.5			4.0～5.0	〃	カシ			

No.の前のWは省略。

樹種は島倉巳三郎氏による（付編第5参照）

第 5 章

第 3 区 の 調 査

第1節 概 観

第３区は発掘地の南西部一帯で、Ｍ～Ｖ－17～31区にあたる。地表は南東側がもっとも高く標高8.6ｍほどで、北・西方へ次第に低くなり、北西側では 8.1ｍ前後になる（地図２）。発掘総面積は約2400m²に達する。

1 層 位（Fig.5･4～5･8、PL.LXXII－1、LXXXI－2、LXXXII－1）

第３区の東側には厚い砂層がひろがり、旧河川を示している。その西側には黒色粘質土層がひろがり、その間に旧河川支流とみられる粘土・砂の堆積が帯状に入りこんでいる。（Fig.5・9）。

旧河川の砂層が厚く堆積している部分は、耕作土層下に氾濫による砂質土・砂・粘質土・粘土が自然堆積をなしている。地表下１ｍほどまでは、上位にマンガン・鉄分が沈着し、下位にも鉄分が沈着し、赤褐色味をおびることが多い。しかし地表下約１ｍ以下になると砂・粘土層は白・灰・青灰味をおびた色調になる。地表下１ｍほどまでの各層には弥生時代以降の各時代の土器・陶器片等が混在していて、各層は時代的に分離できない。それ以下の砂層にもまれに土器片が包含されるが、上位に限られる。旧河川砂層は、ボーリング調査結果によれば地表下５～６ｍ（標高２～３ｍ）以下の風化花崗岩までつづいている（ボーリングＩ－10～13、II－4、付編第９）。

黒色粘質土層はこの砂層の西側にひろがっている。その上面標高は、各トレンチ、グリット断面をもとに推定復元するとFig.5･9のようになる。上面標高は7.5～7.0ｍにある。この黒色粘質土の堆積する部分の層序はＱ－23グリットに典型的にあらわれている（Fig.5･7）。すなわち耕作土層下に何枚かの砂・砂質土・粘土等がほぼ水平に堆積し、これらの層にはマンガンや鉄分が沈着し、全体に赤褐色をおびる。鉄分は高師小僧となって黒色粘質土層上位に入りこんでいることもある。黒色粘質土層の層厚は場所によりことなるが、最大で50cm前後である。この黒色粘質土層下は青灰色の粘土や、青味・緑味・白味をおびた固い粗砂・礫層となる。Ｒ－22ｃトレンチ南側（Fig.5･8）、Ｓ－22bトレンチ東側では黒色粘質土層は耕作土層下すぐにあらわれている。黒色粘質土層は腐植を多く含み、粘質をおびるが、塊を割ればさほどの粘着力を示さずに割れる。かわかせばきわめて固くなる。出土したばかりの時は漆黒色を帯び、水分を含んでいるためになめらかな光沢をもつ。溝や杭の遺構は、この黒色粘質土層に掘りこ

まれ、また打ち込まれている。遺構のある部分では黒色粘質土層上には、砂、粘土の薄い層が複雑に堆積しているが、その上は耕土層まで数枚の層が堆積している（Fig. 5・4 ～ 5・7）。たとえば、P－20a～c各トレンチでは耕作土層下に黒褐色砂質土・黄褐灰色土・褐色砂質土が水平に薄層をなし、その下は砂・礫・粘土が溝に落ち込むように堆積している（Fig. 5・5）。溝の埋土とその直上層あたりでは弥生式土器片のみが出土し、その上は耕土層に至るまで弥生時代以降の土器片等が包含されている。黒色土層中には縄文式土器以外の遺物は含まれていない。

Q－22区から西方へ旧河川からの支流（本来的に支流であったかどうかは明らかでない）を示す砂層の堆積が黒色粘質土層をおしわけるように入りこんでいる。この砂層（所によっては粘土層）は黒色粘質土層とそれ以下の層も削って堆積しており、相当深いと思われるが、下底部は確認できなかった（Fig.5・8）。支流を示す砂層はR－22区でさらに二つにわかれる。ひとつは南方向へ、他は西～西北方向へ向う。南へ向う支流はS－24区から西南へぬけるようだが、発掘区域外のため確定できない。なお、S－29グリッドでは黒色粘質土層がなく、標高7.5m前後に砂層があり、それ以下は暗青灰色粘土、さらに標高6m以下が青灰色粘・砂層となり、旧河川支流と関係があるかもしれない。また南へ向う支流はS－23区北西からさらに小支流を西へ出すようだが確実でない。一方西～西北へ向う支流はかなり幅が広いが、R－19区・R－20区から先はどうなるかはっきりしない。T－17トレンチに出た黒色粘質土の落ち込みにつづくことはほぼ確定と思われる。それをたしかめるにT－18グリッドを調査したが、耕土を剝いだ後豪雨のためこの一帯が冠水し、第4区が市営住宅建設のための盛土がされており、排水不能になったのでT－18グリッド周辺の調査を断念せざるをえなかった。層位の地質学的分析は付編第1を参照のこと。

（後藤）

2　遺構と遺物の分布（Fig.5・1～5・3）

第3区で出土した遺構は黒色粘質土層にほりこまれた溝とその内外に打たれた杭群および旧河川河岸に設けられた堰状遺構である。遺構群は大きく三つにわけられる。ひとつはO－19区・P－19区・P－20区・Q－19区・Q－20区にある東北側の一群（Fig.5・1）、もう一つはQ－21区・Q－22区・Q－23区・P－23区にある東南側の一群（Fig.5・2）であり、残りは西側のR－22区を中心とする一群（Fig.5・3）である。

東北側では旧河川の砂層と黒色粘質土層の境に堰状遺構が2か所あった（第2号遺構：P－20aトレンチ、第3号遺構：P－19aトレンチ）。黒色粘質土層内には溝が多数あり、方向はまちまちで、相互に切りあっている（第1～31号溝）。これらの溝の中と、溝ぞいに多くの杭が打ち込まれ、また溝内には杭で横木をとめた柵状遺構がある（第4～第8号遺構）。溝は複雑に入り組み、切りあっている。切りあい関係から溝相互の前後関係をたしかめることは困難であり、またとなりあうトレンチでは溝の連続・不連続を判断しえぬことがある。溝出土の遺物は少量の弥生式土器片である。また堰状遺構とその周辺の旧河川砂層中にも弥生式土器片が少量散らばり、多くの自然流木が散乱している。

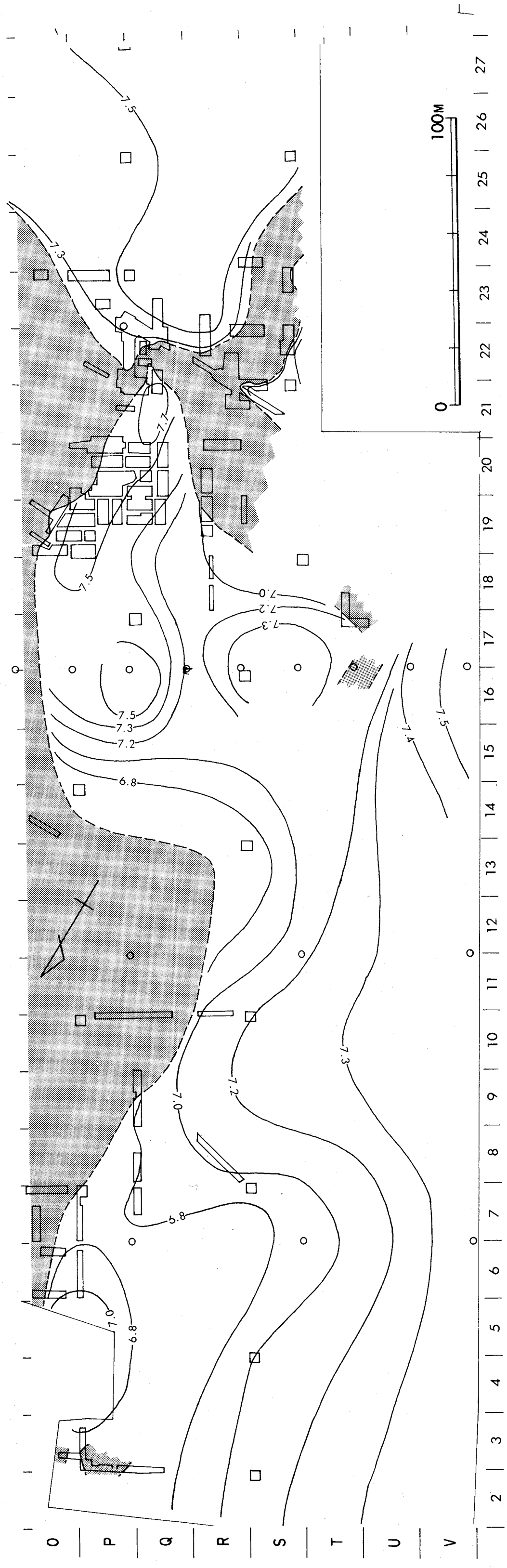


Fig.5・9　第3区・第4区黒色粘質土層上面推定等高線図
（網の部分が旧河川の砂層、○はボーリング地点）

南東側では、旧河川とその支流の分岐点に第1号堰状遺構（Q－21トレンチ）があり、黒色粘質土層中に細い構（第32～41号溝）が走り、その内部と周辺に杭列や遺構（第9号遺構：Q－22・Q－22dトレンチ)がある。旧河川や支流の砂層内には弥生式土器片や流木・木器が黒色粘質土層際や第1号遺構周辺に散乱している（Q－21トレンチ、Q－22cトレンチ)。

西側では（Fig. 5・3）、支流がさらに分岐するR－22aトレンチ中央部の砂層中に多くの杭が乱雑に打込まれ、太い流木が横たわっていた。またその周辺には弥生式土器の大きな破片を含む若干の破片が出土した。この杭群は、砂層のために湧水がはげしく十分にそのひろがり、性格をとらえられなかった。R－19bトレンチでは、支流岸辺にあたる黒色粘質土層と砂層中に数本の杭が打込まれていた。R－20aトレンチでも砂層中に流木が南東～北西方向に横たわっていた。支流岸辺を確認するために掘った7つのトレンチのうち、R－22cトレンチでは黒色粘質土層に掘り込まれた不整形小竪穴2個所が出土した。R－21b・S－22a・S－23・S－24の各トレンチでは、岸辺の砂・粘土層中に杭・流木を検出した。とくにS－22aトレンチでは黒色土層上面と砂層中および砂層中に崩落した黒色土層下からは、弥生式土器片若干が出土した。

第3区出土の遺物は、旧河川河岸の砂層や遺構周辺から木製品・流木・弥生式土器片が出土し、また黒色粘質土に掘られた溝からも木製品・杭・流木・弥生式土器片等が出土している。一方、黒色粘質土層より上の各層・旧河川砂層上の各層・耕作土層からは、各時代の土器・陶磁片・石器片等が混在して出土し、時期的な層序の区分は不可能であった。これらの遺物は包含層出土遺物として一括する。黒色粘質土層中からは縄文式土器と破片が少量出土している。

ところで、第3区にひろがる黒色粘質土層は、(Fig.5・9)、弥生時代には地表をなしていたと考えられる。この層に溝が掘られ、また旧河川砂層との境には堰状の遺構が3個所設けられている（第1～第3号遺構)。

P－19、Q－19・20区へ舌状につき出した黒色粘質土層は、O－16区・P－16区までやや高い平坦地を形成している。またS－16グリッド、ボーリングI－17・18付近にも高まりがあり、ボーリングI－20・21付近から西へも高くなっている。これらの高い部分の間に谷状の低い部分がある。すなわち、ボーリングI－16を中心に南東～北西へひとつの低地があり、またボーリングI－19では黒色粘質土層がなく、そこからS－13グリッド方向へ低い部分がつづく。第4区のS－13グリッド周辺は旧河川からつづく低地となっていて、それは上記2つの谷状低地へつながっている。これらの低地部分は弥生時代には低湿地をなしていたとみられる。

したがって、O－19、P－19・20、Q－19・20各区付近の溝等の遺構群は、旧河川沿いの黒色粘質土の高い部分に設けられたとみられ、O－16・17・18、P－16・17・18、Q－16・17・18区へもひろがっていたかもしれない。

南側の黒色粘質土層は、標高 7.5mほどの高い平坦地となってひろがっているが、発掘した範囲では旧河岸近くに溝があったにすぎない。　（後藤）

第２節　遺　構

１　旧河岸の堰状遺構

旧河川と黒色粘質土層の境、すなわち旧河岸の砂層中で堰状の遺構３ヵ所を発掘した。それらは南から北へ、Ｑ－21トレンチ、Ｐ－20aトレンチ、Ｐ－19aトレンチにあり、各々第１号、第２号、第３号遺構とよぶ。

(1)第１号遺構（Fig.5･10、PL.LXXV～LXXVIII）

この遺構はＱ－21トレンチにあり、あとでこれとつなげたＱ－22dトレンチ北側砂層出土の流木・木器はこの遺構によってせきとめられ埋没したとみられる。

第１号遺構は、１～1.8ｍ間隔でほぼ東西におかれた直径約30㎝長さ5.3ｍと5.5ｍの丸太材（W3220・W3221）２本を杭で固定している。南側の丸太材（W3221）は少くとも15本以上の長さ１～1.5ｍほどの杭を川下にあたる北側に30°ほどの角度で打込み、その反対側（南側、川上側）には数本の杭をほぼ垂直に打込んでいる。これらの杭はほとんどが丸木杭である（直径５～９㎝、W3222～3237)。北側の川下側の杭には横木をおき、また小枝（W3238)、ワラのようなものをのせ、なんらかの方法で固定して、しがらみとした痕跡が残っている。北側の丸太（W3220）も同様にして固定し、しがらみを作っていたようだ。この遺構は灰色の砂・粗砂（Fig.5･７の土層図の第13層以下）に埋没していた。丸太の10㎝あまり下からは灰色の粘土層となり、杭先端は粘土層中に深く打込まれていて、先端部の標高は約 6.5ｍである。丸太材上面は、W3220は7.3ｍほど、W3221は7.5ないし 7.0ｍで東側が低くなっている。この丸太材の西端部は旧河岸とみられる黒色粘質土層（Fig.5･7の第16層）に接している。

第１号遺構の南東側のＱ－22dトレンチ北側に黒色粘質土層がある。この黒色粘質土層の縁辺は南南西から北北東へのび、W3221東端から３ｍのところで急激に南東へまがっている。この黒色粘質土層と、さきにふれた丸太西端の黒色粘質土層との間の砂層が、旧河川と接する支流である。すなわち、第１号遺構は旧河川とその支流の合流点に位置していて、支流から本流へ流れ込む水流をせきとめる役割を果したとみられる。しかしここで水をせきとめる目的は明らかでない。Ｑ－22a・Ｑ－22dトレンチ等の黒色粘質土層には、この大規模な堰によってせきとめられた水を流すほどの溝はみられず、Ｑ－22eトレンチから黒色粘質土層に入る第34・35号溝（Fig.5･2）がそれに当るかもしれないが、幅・深さとも小さすぎる。

第１号遺構の南側の砂層中からは、この遺構でせきとめられたことを示すように、流木・木器・土器片（弥生式土器のみ）が散乱し、Ｑ－22dトレンチ北側黒色粘質土層際の砂層には、ほぼ南北に流木・木器が埋没していて、水流の方向を示している。これら流木・木器・土器片の出土した位置は標高7.0～7.4ｍである。この出土位置と、遺構の丸太の下底部の標高から、この遺構が作り用いられていた頃の川床の標高は 7.0ｍとみられる。これらの遺物は、多量の

流木（W3241～3260、W3307～3311）の他に、木器3点（W3218・W3261・W3288）、弥生式土器片190片あまりである（Y3089～96、Y3103・05・11～18・20・21）後述するこれらの土器片から第1号遺構の時期は弥生時代中期後葉と判断される。

第1号遺構に用いられた木材の樹種は丸太材（W3220・3221）がムクノキで、これを固定する杭（W3222～32）は、クリ・シイ・ユズリハ(?)・カシ・リョウブ・クヌギである。

(2)第2号遺構（Fig.5·11、PL.LXX、LXXI）

第2号遺構はP－20aトレンチで出土した。初年度（71年度）に2×20mのトレンチを掘り、遺構を検出し、翌年度（72年度）に両側を幅6mに拡げた。トレンチ西側の黒色粘質土層とその東側の砂層に多数の杭が打込まれ、丸太がおかれている。杭列は8列あり、東から第1～第8杭列と名付けた。第1・第2杭列は旧河川砂層にあり、各々1本の丸太を固定するように打たれている。第3杭列は黒色粘質土層と砂層の境に打たれ、北側のP－20bトレンチの旧河川岸につづいている。この杭列にも、丸太1本がおかれている。第4～8杭列は、黒色粘質土層内の溝内、溝際に打込まれている。

杭列の方向と長さは、第1杭列が16本からなり東南東－西北西で、約3m。第2杭列は20本ほどからなり南東－北西で3m以上。第3杭列は70～80本からなり、やや蛇行するが南南東－北北西方向で、8～9mある。第4杭列もやや蛇行し第3杭列にほぼ平行し約50本からなり、P－20bトレンチの第19号溝へつづき長さ約8.5m。第5杭列・第6杭列は第4杭列にほぼ平行し、20本あまりからなり長さはともに約3mである。第7杭列は黒色粘質土層際に打込まれている。第8杭列は7本の杭からなり長さ1mほどで、第1～7杭列とやや性格をことにするようだ。第3～第6杭列はほぼ平行し、各々の杭列間は70～80cmほどである。

黒色粘質土層と砂層の境は、Q－21トレンチ、P－21トレンチからほぼまっすぐにつづくとみられ、本トレンチからさらにP－20bトレンチ東側、P－20cトレンチ北東端をへて、第3号遺構のあるP－19aトレンチへとつづく。旧河川内に打たれた第1杭列(W3077～82）は、径約40cm？・長さ約1.8mの丸太(丸太内部はくさって失われ、下側の木皮だけが残っている）の川下側に接していて、この丸太を固定している。川上側には1本だけ杭が打たれていた。川下側の杭列には、しがらみがあったとも思われるが、はっきりした痕跡はない。杭列は黒色粘質土層側へのび、約1.5×1.1mの島状に残る黒色粘質土層に接している。丸太上面は黒色粘質土側が高く（標高7.53m）、砂層側へ低く（標高7.38m）おかれ、その下には砂の他に粘土が堆積している。杭列各杭は、頂部が7.45～7.15mにあり、下端部は6.65m～6.85mにある。

第2杭列は第1杭列の上流側0.7～1.5mにある。この杭列は西端が第3杭列に接していて、砂層内の丸太（長さ2m以上、直径20cmほど）の川下側へとつづき、丸太を固定している。この部分には横にわたされた木もあり、しがらみを作っていたことはほぼ確実である。丸太の川上側にも2～3本の杭が打込まれている。丸太は、黒色粘質土層側が高く（標高 7.4m）、砂層側へ低くなっている（標高7.25m）。杭の頭部は7.45～7.25mほどで、杭先端部は標高 6.5～6.23mにあり、砂層に深く打ち込まれている。第2杭列丸太の南側砂層中（標高7.05m）から弥生

式土器片２点が出土している（Ｙ3068・3069)。また第１杭列北側の流木の出土位置も考えあわせれば、第１・第２杭列が用いられていた時期の川床は 7.0ｍ前後とみられ、第１号遺構の場合とほぼ同じである。

第３杭列は、旧河岸際の黒色粘質土層にあり、Ｐ－20bトレンチまでつづいている。この杭列にも、第１・第２杭列に近い部分の杭列東に接して長さ 1.8ｍ、直径15～20cmの丸太が黒色粘質土際に平行におかれている。丸太上面は標高7.4～7.25ｍである。丸太の東側すなわち砂層側には１～２本の杭があるだけである。その反対側の丸太の西側に接して第３杭列の杭の一部が密に打たれている。この部分より南の杭列は、旧河岸際のすぐ内側の溝（これは第19号溝につながろう）際に打たれている。丸太の北側では杭列は旧河岸に打たれている。丸太の部分で黒色粘質土層は切れていて、旧河川から流れこむ水をせきとめるように丸太材がおかれている。したがって、第１杭列、第２杭列につくられた堰の水はこの部分でとめられてしまうことになって、第３杭列とその中の丸太材は、第１・第２杭列より遅れ、水の流入口をふさぐ護岸のための施設ともみられる。しかし、第１・２・３杭列の丸太材は同時に一定の機能を果していたのかもしれない。発掘時の所見からは、第１～３杭列の丸太材の機能、相互の関係を完全に明らかにすることはできなかった。第３杭列の現存杭頂は7.45～7.15ｍにあるが、丸太材部分の方が、北岸護岸杭よりやや低い（ただし、杭頂が本来の高さを示すわけでないから、もともと低かったと断定はできない)。杭下端部は標高 6.5ｍ前後にあって、相当深い。

第３杭列の西側にある第４杭列はＰ－20bトレンチの第19号溝内からのびている。Ｐ－20ａトレンチ内のこの杭列の西側では第19号溝の西側壁とみられる立ちあがりははっきりしないが、第５杭列の線がそれを示しているようである。すなわち、第６杭列のある溝との境を補強するために打たれたのが第５杭列とみられる。これが、第５杭列が北側につづいていない理由であろう。第４杭列は、第19号溝とそれにつづく溝内に打たれていたとみられ、第３杭列丸太材部より入った水が第19号溝を北→北西へ流れ込む際になんらかの役割を果したのであろう。現存する杭頂標高は7.45～7.25ｍにあり、杭下端は 6.5ｍほどに達する。第５杭列は、現存杭頂7.75～7.5ｍで杭下端部は6.6ｍほどにある。第５杭列内には、標高 7.4ｍ付近に弥生式土器片（Ｙ3067）が出土した。

第６杭列は第19号溝につづくとみられる溝の西側の溝内にあり、この溝は第20・21・22・24号溝へとつづくようだが、はっきりしない。この杭列では不定形の板状の材（75×15cm、W3121）を横にして立て、その前後に数本の杭を打って固定している。その目的は明らかでない。この杭列も溝中に打たれていて、しかも短い。この杭列のある溝の西際の黒色粘質土層部分には護岸のためとみられる杭が打たれている（第７杭列)。杭頂の標高は第５杭列とさしてかわらない。

第８杭列は24号溝を横切るように打たれている。

これら杭列に用いられた杭は丸木杭の他にやや太い丸木を半割した杭、角柱状にととのえた杭などである。

第２号遺構は、旧河岸に設けられた丸太材を用いた堰状遺構と、杭列からなっている。すべ

てが同時に機能していたかどうかは決定しえないが、たとえ時間差があっても短いであろう。砂層中の堰状遺構部から入った水は第19号溝を流れたとみられる。第6杭列のある溝はこの堰や第1～第5杭列とは別のもので、P－20aトレンチ南側の道路下あたりで旧河川につながる可能性もある。黒色粘質土層内の杭列・溝内からはY3067の他に若干の弥生式土器片しか出土しなかったが、旧河川砂層中の標高7～7.4mあたりからは20片あまりの弥生式土器片が出土した（Y3059・63～65・68・69)。後述するように出土土器片から、この第2号遺構の時期は弥生時代中期後葉とみられる。

この遺構に用いられた杭の樹種は、すべてを取りあげ、鑑定したわけではないが、樹種の判明したのは次のとおりである。第1杭列ではアワブキ・クリ各2、タブノキ・ユズリハ各1、第2杭列ではシイ4、クリ2、カシ・ユズリハ各1である。第3杭列ではシイ6、ユズリハ・カシ各1で、シイ多い。第4杭列ではシイ3、クリ・ユズリハ各2、アワブキ・タブノキ各1、第5杭列ではクリとアワブキが各2、シイ1である。第6杭列はシイ2、モチノキ・カキノキ各2である。

(3)第3号遺構（Fig.5・12、5・2、PL.LXVII、LXVIII）

第3号遺構はP－19aトレンチにある堰状遺構である。

P－20a・bトレンチにみられたほぼ南南東－北北西方向の旧河岸はP－20cトレンチからP－19aトレンチへ、北北東－南南西へと方向をかえO－19b・cトレンチへとつづく。P－19aトレンチ南西側の旧河岸には第1号溝がつながり、そのすぐ北側に第3号遺構がある。長さ 2.2m、直径15～20cmの丸太材が一端を旧河川岸辺黒色粘質土層上におき、他端を砂層中に出している。丸太材の方向はほぼ北西－南東である。この丸太材の川下側には12本の杭が、川上側には4本の杭が垂直に打ちこまれ、これらの杭によって丸太材を固定している。川下側の杭間には細い横木がわたされ、しがらみを作っている。丸太材はほぼ水平におかれ、上面の標高は 7.3～7.4mである。杭の現存頂部標高は 7.5mないしそれよりやや低い。杭先端部がどこまで打込まれているかは確認していない。

この遺構の周辺、とくに川上側の砂層中には自然木・加工木が散乱し（W3021～36・43～48・52～57）また30片近い弥生式土器片が出土した（Y3032～36・39・41・42)。遺構の杭の間からは、しがらみにひっかかった状態で弥生式土器片（Y3040）が出土している。土器片・流木の出土状態から、この遺構周辺の当時の川床は 7.0mあたりとみられる。また出土土器片から、第3号遺構の時代は弥生時代中期後葉とみられる。

この堰でせきとめられた水流は、第1号溝に流れ込んだのであろう。この遺構に打込まれていた杭のうち樹種のわかるものは、クリ5・シイ1である（W3037～42)。

以上の第1～第3号遺構はいずれも旧河川岸辺に設けられた堰で弥生時代中期後葉のものである。第2・3号遺構は黒色粘質土層に掘られた溝に川から水をとり入れるための構築物であり、第1号遺構は支流が本流に出るところに位置し、支流の水をせきとめるためのものともみられる。

旧河川はたびたびのべたように砂が厚く堆積していて、そのひろがりも大きい。これら遺構が作られ、用いられていた当時の川が、砂層のひろがりと同じ規模だったとは考えられず、第１～３号遺構付近では、断定はできないけれど、幅10ｍ未満の流れであったと思われる。そうでなければ、これら遺構は水のとり入れのために、水位を多少なりとも上昇させる機能を十分に果しえないからである。ただそれを具体的に示すような結果は砂層中に掘ったトレンチ（Ｐ－22トレンチ・Ｐ－20aトレンチ東側・Ｏ－19aトレンチ・Ｏ－19cトレンチ）では確認できなかった。いずれにせよ標高 7.0ｍ前後に河床を有するさほど深くない川が黒色粘質土層にそって流れていたのである。

この旧河川の流れを示す砂層中に埋没した土器片はいずれも弥生式土器片で、かなりの量が出土している（Ｙ3010・11：Ｏ－19aトレンチ、Ｙ3012：Ｏ－19cトレンチ、Ｙ3019・3021～27：Ｏ－19fトレンチ、Ｙ3070・71：Ｐ－20bトレンチ、Ｙ3073・74：Ｐ－20cトレンチ)。後に記述するこれらの土器から、旧河川に設けられていた第１～３号遺構はいずれも弥生時代中期後葉のものとみてよい。この３遺構が、同時に設けられていたのか、多少の時間差があるのかを、判断すべき材料はない。この点はこれからのべる黒色粘質土層内の溝・杭列についてもいえることである。　（後藤）

2　溝と杭列

上にのべた堰状遺構と旧河川に接してひろがる黒色粘質土層には多数の溝があり（第１号～第41号溝）その内外に杭が打たれている。さらに溝中には杭・横木による小規模な遺構がある（第４～９号遺構)。

(1)北東側の溝と遺構(１)

第２号・３号遺構のある東北部では旧河岸をなす黒色粘質土層と砂層との境は蛇行しながら南から北へつづいている（Fig.5･1、5･11、5･13)。黒色粘質土層は、場所によって表面の標高がことなるが7.4～7.5ｍであり、Ｏ－19ｅトレンチ西側のせまい範囲とＱ－20ａトレンチの南側で 7.7ｍになる。層厚はもっとも厚い場合でも50cmほどで大体30～40cmである。この層は、旧河川際では次第に低くなってゆき、きわめてなめらかに砂層にかわってゆく（Ｏ－19ａ・ｂ・ｃ・ｆ各トレンチ)。しかし、Ｐ－19ａトレンチの第３号遺構付近から第２号遺構さらに第１号遺構にかけては急激におちて砂層にかわっている。これに掘り込まれた溝は、ほとんどの場合この黒色粘質土層下の粘土層・粗砂層を切っている。

０－19区、Ｐ－19区の各トレンチには第１～第18号の18本の溝がみられた（Fig.5･13、PL.LXVI11、LXIX)。

第１号溝と第４・第５号遺構（Fig.5･13～5･15、PL.LXVIII）

第１号溝はＰ－19ａトレンチの第３号遺構の南西約３ｍのところで旧河川につながり、ほぼ

北北西方向にのび、P－19dトレンチ内で東北東へまがり、O－19fトレンチをとおって旧河川に再びつながる。全長約34m、幅はP－19aトレンチの旧河川から入ったところで約2m、ついでやや幅が広くなるが、P－19cトレンチからは1～1.5mほどになる。水流はP－19aトレンチからO－19fトレンチへと流れる。溝の断面をみると（Fig.5・4）黒色粘質土層上の層（暗灰色や黒褐色の粘土層）を切っていて、溝上端部の標高は7.9mほどである。溝断面はU字形をなして、溝底の標高は 7.0m前後である。断面からは黒色粘質土層上の層から掘り込まれているようにみえるが、これは溝が次第に埋没し、黒色粘質土層上にも粘土層が堆積する過程で、なお溝状の凹地として水が流れていたことを示すものとみられる。

この第1号溝内には、P－19bトレンチとP－19dトレンチに2ヵ所の遺構がみられた。P－19dトレンチ内の第4号遺構（Fig.5・14）は、第15号溝と第1号溝との接点付近にあって第1号溝を横切るように5本の角杭を打っている。杭の現存頂部は7.45m前後であり、杭下端部は 7.0m以下にある。この杭列の上流側の灰色微砂層中には流木（加工木も含む）が埋っている。その標高は 7.4m前後である。

第5号遺構はP－19bトレンチの、第1号溝と第3号溝との接合点にある（Fig.5・15)。水流の下手側に溝と直角に7本ほどの杭を打込み、その上手に接して長さ60cmの角材（W3059）を横においている。横木の標高は 7.4mである。この付近には多くの杭が溝内に打込まれ（現存杭頂標高7.2～7.4m)、多数の流木（W3058・60～63）が埋没している（標高7.4m前後)。

これらの遺構が第1号溝の機能とどのようなかかわりをもつかは十分明らかではない。第5号遺構は、第3号遺構から第2号溝へと水を流し込むための堰であり、第4号遺構は、第15号溝へ水を流すための堰であるかもしれない。

第1号溝内には他に若干の流木が埋没し、弥生式土器片も出土している。旧河川からの入口に近いP－19a・bトレンチ内では特に多く、P－19aトレンチでは溝の上端外の黒色粘質土層直上からも流木が出土している。土器は必ずしも溝底にあるのでなく、溝内埋土（砂層・粘土層）中に散らばっていた。P－19bトレンチで5片（Y3050・51)、P－19dトレンチで6片（Y3056)、O－19fトレンチで9片（Y3028・29）出土している。またO－19fトレンチ西壁の第1号溝内埋土中の標高7.2mのところから木製又鍬片（W3018）が出土し、第16号溝が分岐する付近でも加工木（W3019）が出土した。

出土した土器は弥生時代前期末～中期後葉のもので、第1号溝の時期は中期後葉とみられる。

第2号・3号・12号溝（Fig.5・11、PL.LXVIII）

第2号溝はP－19a・b両トレンチ間で第1号溝につながり、P－19b・O－19e両トレンチを経てO－19fトレンチで第1号溝に再びつながる。すなわち、L字形の第1号溝の対角線をなすように走る。この溝の上端も黒色粘質土層上の黒褐色ないし暗褐色粘土層にあり、溝底は7.1m前後にある。P－19aトレンチの第1号溝との合流点での断面をみると第1号溝が埋没してから作られた溝とみられるが、こうした砂・粘土層の堆積から直ちに前後関係を判断してよいかどうかは明らかでない（Fig.5・4)。この溝は全長約18m、幅70～80cmを計る。この溝

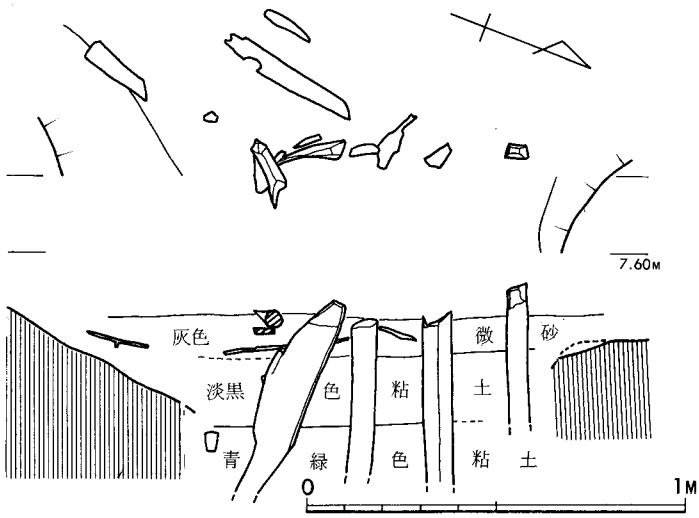


Fig.5・14　第４号遺構（Ｐ－19ｄトレンチ）実測図

の埋土中からは若干の流木（W3011～17）が出土し、そのうち何点かは若干の加工痕がある。Ｐ－19ｂトレンチの第１号溝との合流点近くでは数本の杭が溝中に打込まれている。土器片も数点出土したが、溝の時期を直接明示するものかどうかわからない（Ｙ3014～3016)。

第３号溝は第５号遺構付近で第１号溝につながり、その４ｍほど北で第２号溝につながる。幅は約60～70cm、溝底の標高は約 7.3ｍである。第２号溝との前後関係は明確ではない。

12号溝はＯ－19ｃトレンチの第11号溝のすぐそばからはじまり、北西方向へのび、Ｏ－19ｅトレンチで第２号溝と交わり、Ｏ－19ｆトレンチで第１号溝につながる。第１・２号溝との前後関係は明らかでない。

全長約10ｍ、幅40cm前後で、溝底の標高は7.2～7.3ｍの黒色粘質土層内にある。流木、土器片等の遺物はまったくない。Ｏ－19ｃトレンチ内では、溝の西壁に小さい柱穴状の浅い穴がある。Ｏ－19ｄトレンチ内の第12号溝と第２号溝の間の黒色粘質土層内には２本の丸木杭が打込まれている。

第４～７・12・18号溝（Fig.5・13)

第５号溝はＰ－19ａトレンチで第１号溝から南西方向に入り、Ｐ－19ｅ・Ｐ－19ｆトレンチの第17号溝へとつづき、その末端部はほとんど溝の形状をなさなくなっている。全長約12ｍ、幅２～2.5ｍ、溝底が黒色粘質土層内にあり（標高約7.1ｍ)、黒色粘質土層上面からの深さは20～30cmあまりである。この溝のＰ－19ｅトレンチ東壁付近では、Ｐ－20ｃトレンチからのびる第23号溝が交わり、それはさらにＰ－19ｂトレンチの第６・第７号溝と第１号溝との交点近くまでのび、さらに第３号溝につながるようにみえる。第５号溝・第17号溝はきわめて浅く、埋土内からの遺物の出土はなかった。

第６号溝はＰ－19ｂトレンチで第１号溝につながり、溝底は 7.1ｍ、深さ約30cmの小溝であ

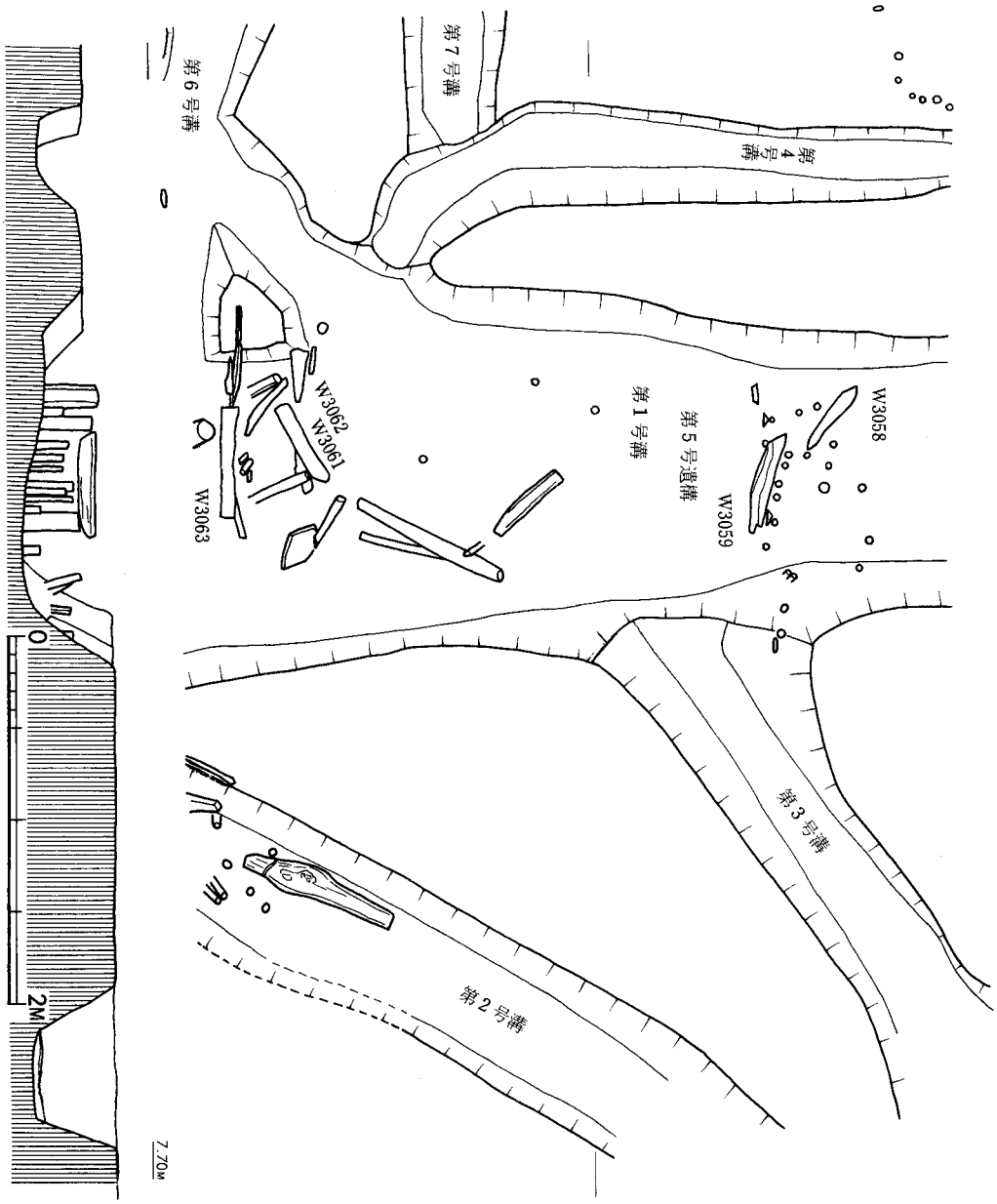


Fig.5・15　第5号遺構、第1～4・6・7号溝（P－19bトレンチ）実測図

る。この溝が第1号溝につながる部分に、先にのべたように第23号溝のつづきがのびているようである。

第7号溝は第6号溝の北側約80cmのところにあり、溝底標高 7.2mほどにある深さ10cmあまりの小溝である。この溝は第4号溝が第1号溝に接する付近で、第4号溝と接している。

第6号・第7号両溝は、いずれも遺物を出土していない。この2つの溝のいずれかが、P－19e・fトレンチの第18号溝につながると思われる。

第18号溝は第17号溝に平行する幅10cm未満の小溝で、溝底は標高 7.2mの黒色粘質土層内にあり、深さは20～30cmである。この溝からも遺物は出土していない。

第４号溝は、Ｐ－19ｂトレンチ内で第１号溝に接し、第１号溝とほぼ平行してＰ－19ｃ・ｄトレンチへのびている。発掘部分での全長約15ｍ、幅40cm前後、溝底は黒色粘質土層中にあって標高約 7.1ｍである。Ｐ－19ｄトレンチでは、この溝のすぐ西側に柱穴状の小さい穴があった。溝内からの遺物の出土はない。

第８・９・10号溝（Fig.5・13）

これらはＰ－19ａトレンチの第３号遺構のそばにある小溝である。いずれも旧河川につながっているが、その反対側は第８号溝が第１号溝につながっている（あるいは切られている）以外はあいまいである。第８号溝の溝底は黒色粘質土層内にあって、標高7.35ｍ前後。

第９号溝は第８号溝の西側がさらに低くなった溝で、溝底（標高7.15ｍ）は黒色粘質土層内にある。これら両溝では遺物の出土はない。

第10号溝は第３号遺構の丸太材西北端に接する幅30cmほどの溝で、ごくわずかしか残っていない。溝底は黒色粘質土層内にあって、標高は7.05ｍほどである。この溝の埋土をなす砂層からは夜臼式土器片８片と押型文土器片１片が出土した（Ｙ3166～70、Ｊ13)。

第３区の遺構出土の夜臼式土器片はこれだけであり、他に包含層出土の夜臼式土器片も数片にすぎない。押型文土器片は、Ｏ－19ｂ・ｃトレンチ、Ｏ－19ｄトレンチの黒色粘質土層出土のそれと一連のものであろう。

こうした土器片から第10号溝は夜臼式土器の時期のものであり、第８・５号溝も、第３号遺構や第１・２号溝に先だつ時期のものとも思われるが、その全体的つながり、性格は明らかでない。

第11号・第13～16号溝（Fig.5・13）

第11号溝はＯ－19ｃトレンチ内にあり、一端は旧河川の砂層につながる。長さ約３ｍ、幅40cm前後、溝底標高7.2ｍほどで、方向、大きさは第８～10号溝に近い。

第13・14号溝はＰ－19ｄトレンチ内にある幅20～40cmのごく浅い溝で、第14号溝は第13号溝につながり、後者は第１号溝につながる。溝底は標高7.3～7.4ｍの黒色粘質土層内にある。そのつづきはＯ－19ｆトレンチ、Ｏ－19ｅトレンチ内には検出されなかった。溝というより、溝状のくぼみといった方がよい。

第15号溝、第16号溝はいずれも第１号溝から分岐して、西北側へのびるが、そのつづきは未調査である。溝底は第１号溝と同じである。

以上にのべたＯ－19区・Ｐ－19区の溝は、第13号・14号溝を除くと、第４・６～第12号溝は、幅もせまく、浅い小溝であり（いずれも溝底は黒色粘質土層内にある)、他の第１～５・第15・16号溝は黒色粘質土層下の粘土・礫砂層に溝底があり（したがって溝底を明確にとらえられないことがある)、溝内から流木が出土し、杭による遺構がある。第１・２号溝では弥生式土器片が出土する。これらの溝相互の間には若干の時間差があると思われるが、第３号遺構と同じく弥

生時代中期後葉の範囲内にあろう。

もっとも大きな第1号溝は、第3号遺構の堰と関係があり、それによって送られた水を流すためのものとみられる。この溝はL字形に曲って再び旧河川につながり、旧河岸とのなす長方形部分は、ほぼ16×12mのひろがをなす。この部分が水田面だという証拠は全くないが、可能性はある。また旧河岸でなく第12号溝がこの長方形のひろがりの一辺をなし、排水に用いられたとしても（この溝は一端が黒色粘質土層内で終っている)、そのひろがりは16×9mほどになる。

第2号溝はこの長方形のひろがりの対角線を横切るように設けられている。この溝はP－19aトレンチ北壁の断面（Fig.5・5）だけからみれば、第1号溝よりおくれるようだが、その機能は明らかでない。

第4・6・7号溝は小さく、性格・機能は明らかでない。第1号溝との前後関係も不明である。第8～10号溝は第1号溝や第3号遺構に切られていると思われ、出土土器からも第1号溝・第3号遺構に先行するとみられる。

(2)北東側の溝と遺構(2)・(Fig.5・1、5・11、PL.LXXI～LXXIII)

P－20区・Q－20区には先の第2号遺構と関連あるとみられる溝・遺構がある。

第2号遺構からのびる第19号溝はP－20bトレンチからP－20cトレンチへとつづくが、次第にはっきりしなくなる。これにほぼ平行する21号溝は、P－20b・cトレンチからQ－20dトレンチ、Q－19aトレンチへとつづく。第20号溝は第2号遺構付近からP－19bトレンチにつづき、第19号溝につながる。

第2号遺構西側の第24号溝のつながりは不明瞭である。第27号溝は第24号溝につながるとみられ、Q－20bトレンチからQ－20cトレンチ、Q－20fトレンチへつづき、途中で第28号溝がわかれている。Q－20dトレンチにある第28号溝もQ－19aトレンチで西へまがって、その先ははっきりしない。第24号溝につながるとみられる。第26号溝は、Q－20aトレンチでは溝の南壁しか明確でなく、Q－20eトレンチで第25溝へつながるらしいが、第31号溝との関係は明らかでない。

第22号溝も第24号溝付近からはじまり、P－20bトレンチをへて第21号溝と交叉する。この溝は、平面的にみれば、第19号溝から北へのびる第23号溝につながるようにみられるが、確定できない。

第19号溝と第6号遺構（Fig.5・1、5・11、PL.LXXII、LXXIII）

第19号溝はP－20aトレンチの第2号遺構部分からはじまる。すでにのべたように、この溝は第2号遺構第4杭列のあり方からみて、第2号遺構部分より南へもつづいているようにもみえるが、十分明らかでない。北側へはP－20bトレンチへとつづき、P－20b・cトレンチ間で西へまがり、そこに第6号遺構が設けられ、さらにQ－20dトレンチ、Q－19a・bトレンチ方向へつづくようである。幅は第6号遺構までは約1～1.5m、第6号遺構より西では幅が広くなるが、

これは黒色粘質土層中の溝の東壁が緩慢な傾斜を示し、断面がゆるい皿状を示すためであり、Q－20d、Q－19a・bトレンチでは壁はほとんど失われている（Fig.5・5－2、Fig.5・6－1）。わずかに杭列の存在から溝のつづきを想定しうるにすぎない。したがって第6号遺構のすぐ西で幅3.5ｍあまりにひろがるが、その先の溝幅はわからない。溝底は黒色粘質土層の下底部近くにある。第6号遺構までは黒色粘質土層上面からの深さは20～40cmで溝底標高は7.25ｍほど、P－20ｃトレンチでは標高7.2ｍほどになる。

この溝はP－20a・bトレンチでは旧河川近くにあり、旧河川砂層との間はわずか40～50cmほどで、黒色粘質土の溝東壁の崩れた部分もある（P－20bトレンチ北壁付近）。そのために旧河川際の黒色粘質土に杭列が打込まれ、護岸的役割を果している。

溝が西へ曲ると再び、溝内や溝西壁に杭が打込まれている。とくに第20号溝との交点付近には、溝を横切るように打込まれている。その西側の溝幅が急にひろがる付近（そこはまた第22号溝と第23号溝が交わるところでもある）に第6号遺構がある。

第6号遺構は溝を横切るように杭を打込み、それに接して水流の上流側に長さ1.6ｍの角材（W3169）を横におき、さらに数本の杭（W3139～43）をその上流側に打って横木を固定している。杭部分にしがらみの痕跡はない。横木上面の標高は7.25ｍほどである。この遺構の付近には他にも多数の杭が打込まれているが、とくに第6号遺構の西側1ｍほどのところには、多くの杭（W3145～55）が溝を横切るように打たれている。これらの杭は丸木杭・割杭・角杭等さまざまで、かなり太いものもある。杭下端は灰色粘土層内にあり標高6.5ｍ付近に達している。また第6号遺構付近の水流上流側にはとくに多くの流木（その多くは丸木や若干の加工をした丸木）が散乱している（標高7.2～7.3ｍ）。

第6号遺構とその周辺に打たれた杭の樹種は、シイ・クリ・スギ・カシ・ユズリハで、シイがもっとも多く、クリがこれに次ぐ。

この第6号遺構の機能は水流をせきとめるためのものと思われるが、せきとめられた水がどの方向へ流れるのかははっきりしない。第22号溝方向とすれば、水流は逆流することになるし、第23号溝方向とすれば、遺構はもう少し西側にならなければならない。

第6号遺構の西方では前述のように、溝は輪郭が不明瞭になるが、第21号溝にほぼ平行する溝の西南壁とみられるところに杭が多数打込まれている（Q－20dトレンチ、Q－19a・bトレンチ）（Fig.5・1、5・16、5・17、PL.LXXIV）。これらの杭は、第21号溝との間がせまいために溝壁を護るために打込まれたものとみられる。杭頂は7.1～7.3ｍ、杭下端は6.5ｍ前後である。これらの杭はほとんどが丸木杭で、割杭はきわめて少なく第6号遺構付近の杭ほど太くもない。溝内からは流木以外の出土はない。

P－20cトレンチ南壁にあらわれた第19号溝西側の黒色粘質土層と、その付近の溝際に打込まれた丸木杭2本の^{14}C測定年代はTab.1・1に示した。

第20号溝（Fig.5・11）

この溝は第2号遺構付近からP－20bトレンチをへて第19号溝につづく。幅30～40cm、深さ

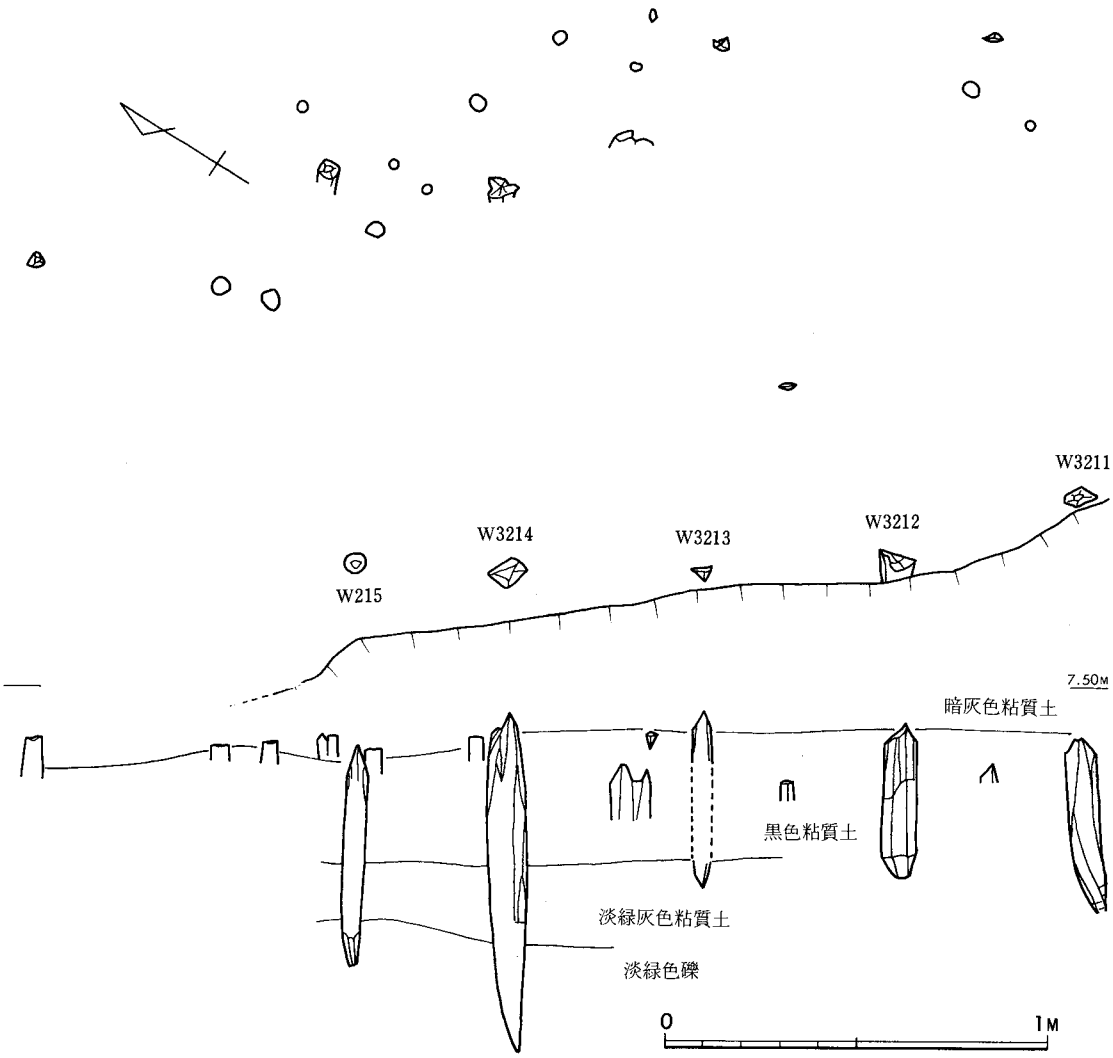


Fig. 5・16　Q－20ｄトレンチ第21号溝東側杭列実測図

約35cmを計り、溝底標高7.2～7.25mである。埋土のあり方（Fig.5・5－2）からみて第19号溝に先行するとみられる。この溝の北端は第19号溝につながるが、本来はさらにのびてP－20cトレンチ北壁東端断面の小溝につながるのかもしれないが、その間の黒色粘質土層には溝のつづきと認めうる溝はない。溝内に杭の打込みはなく、遺構もない。

第21・22号溝と第7号・8号遺構

第21号溝は第19号溝と平行につづいている。その南端は第2号遺構付近にあるが、断面土層（Fig.5・5－1）は20・21・22号溝が混在したようになっていて、不明瞭である。南端では幅70～80cmであるが、P－20bトレンチ北端付近で幅がひろがり（幅1.5ｍほど）、同時に西方へ曲り、第22号溝と交叉し（その付近の幅約1.3ｍ）、Q－20dトレンチをへて、Q－19aトレン

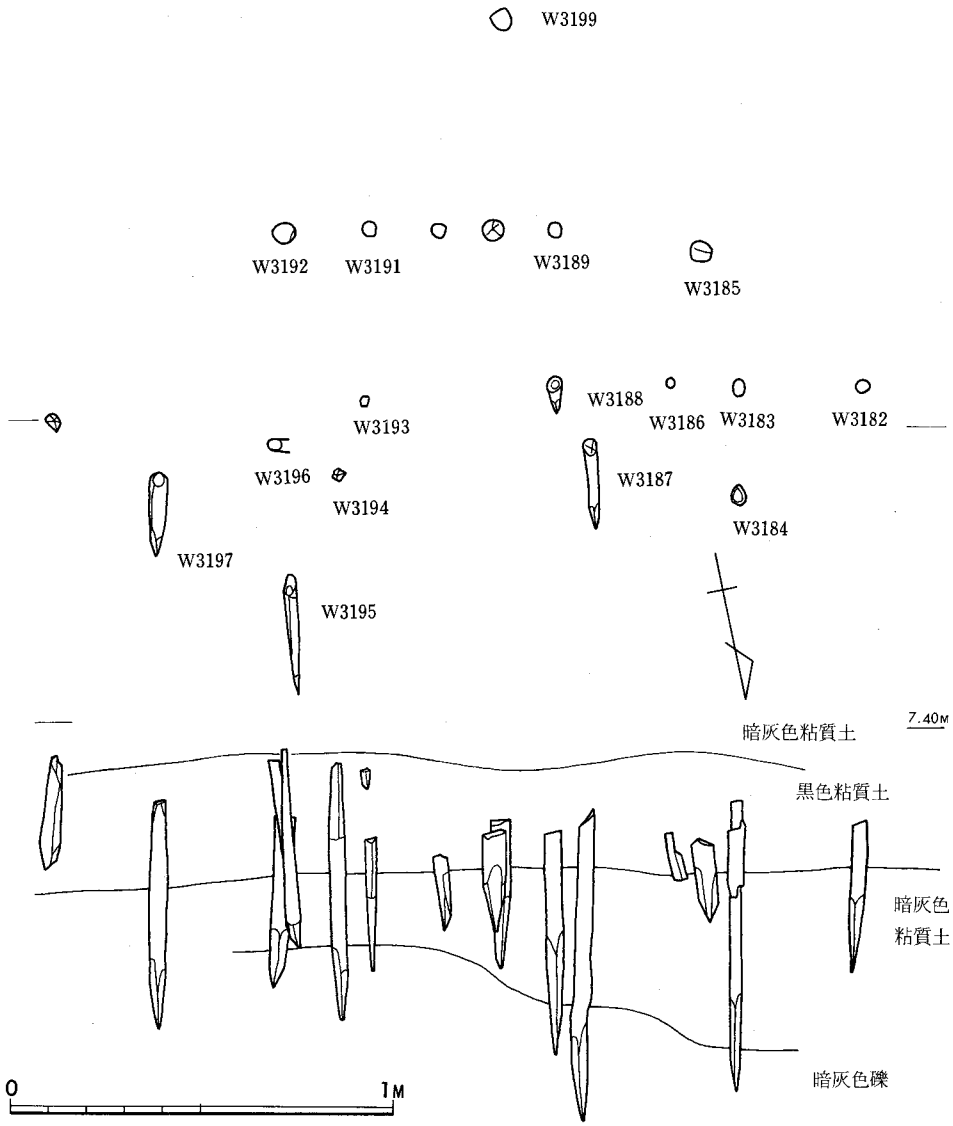


Fig.5・17　Q－19ｂトレンチ第21号溝東側杭列実測図

チでさらに西南西側へ曲り、Q－19ｃトレンチへつづく。Q－19ｃトレンチでは溝の輪郭はあいまいになり、その先へどうつづくかはわからない（Q－19ｃトレンチでは黒色粘質土層上面が急に低くなり7.25ｍほどになる)。溝底は黒色粘質土層下に達し標高は7.1～7.0ｍ以下にある。

第22号溝は、第24号溝につながり、P－20bトレンチを通り、西向する第21号溝と交叉して第19号溝につながる。幅60～80cm、溝底標高は7.25ｍ前後である。土層断面（Fig.5・5－2）からみて第21号溝よりあとのものであろう。

第21・22号溝交点には第7号遺構と第8号遺構がある。いずれも第22号溝壁と同方向につま

り、第21号溝を横切るように長さ70cmほどの角材の横木（W3137・W3138）をおき、第22号溝内部側に杭を打って固定している。横木上面標高は7.45m（第７号遺構）・7.35m（第８号遺構）にある。この付近の黒色粘質土層上面は7.5～7.6mである。この２つの遺構は、第21号構が廃絶したあとに用いられた第22号溝の溝壁を補強するためのものであろう。すなわち第21号溝の埋土が砂・粘土であるために、第21号溝を横切る第22号溝の壁はこの部分で弱く、横木と杭によって補強したと考えるのが妥当である。

第22号溝内には、これ以外に杭は打たれておらず、遺物の出土はなかった。

第21号溝では、第８号遺構の東側約80cmにも横木（W3136）があり（標高7.45m付近）周囲に杭が打たれている。杭の多くは溝壁際にあり、壁を補強するためのものとみられる。また第７号遺構の西方の溝壁際にも多数の杭が打込まれている。Q－20d・Q－20a・bトレンチ内の第21号溝北東壁外には杭が多数打込まれている。Q－20dトレンチ内では割杭・角杭が多く、他のトレンチでは丸木杭が多い。これは前述したように第19号溝との間に打込まれたもので、両溝間がせまいために補強するためのものとみられる。

第21号溝でも遺物は出土していない。

第23号溝

これは第６号遺構付近で第19号溝につながり、北へのびる小溝である。溝幅60～70cm、深さ10～20cm（溝底標高7.2ｍ）を計る。この溝はP－19eトレンチ南壁にそのつづきとみられる断面があらわれているが、その先は第17号溝のゆるい傾斜のために明瞭でない。しかしその方向からみてP－19bトレンチの第６号溝の接点付近にあらわれ、第１号溝につづくとみられる。

溝内と付近には若干の杭が打たれ、溝内からは流木１点の他に太形蛤刃石斧（Ｓ72）が出土した（PL.LXXII－３）。

第24～30号溝

第24号溝は第２号遺構の第８杭列付近である。他の溝とのつながりがはっきりしないので、１個の溝としたが第27号溝の東端部ともみられる。この溝から南へ小溝第25号溝が入っているが、その全体ははっきりせず、第26号溝につながるらしい。

第27号溝は第24号溝から西方へのびる。第24号溝につながる付近のQ－20bトレンチ内に若干の丸木杭（W3209）が打たれている。杭頂部は標高7.25mほどである。この杭の部分には北東へ小溝らしい落ち込みがあるが（底面の標高約7.1ｍ）、その全体は明らかでない。第27号溝はQ－20cグリッドからQ－20eトレンチへとのびる。途中のQ－20cグリッドでは北西へ第28号溝を分岐させる。

第27号溝の幅は一定せずQ－20bトレンチでは最高3.5m、Q－20cグリッドでは１mほどになり、Q－20fトレンチでは２mほどである。溝底は標高約6.5mで、黒色粘質土層上面からの深さは約90cmで、きわめて深い（Fig.5・6－３）。

第28号溝は、Q－20cトレンチで第27号溝から分岐し、第21号溝にほぼ平行しQ－20dトレン

チからQ－19a・cトレンチ方向へのびているが、Q－19cトレンチ内では溝の輪郭もあいまいになる。溝幅は1.2～1.5ｍほどで、溝底は標高約7.2ｍである。溝内や付近に杭は打たれていない。Q－19aトレンチの溝内埋土内から石庖丁小片（Ｓ４）が出土している（Fig.5･36)。

第26号溝はQ－20aトレンチ内の北側にある黒色粘質土の落ち込みであるが、第24・25・27・29・31号溝との関係は、トレンチ内の湧水が激しく泥湿地状になってしまったために確認できなかった。このトレンチ内の黒色粘質土層上面は標高7.6～7.7ｍ(層厚20cm強)で、他より高い。この下には灰黒色粘質土層が堆積し、溝はこれを深くえぐりこんでいる。黒色粘質土落込みに直角方向に９本の丸木杭が打込まれている（杭頂標高7.3～7.4ｍ、W3200～07)。この杭の付近で第25・27号溝につながるとみられる。杭の樹種はシイ４、ユズリハ・クスノキ・ゴンズイ・クリ各１である。

この西方につづくのが第29号溝で、Q－20e・fトレンチへのびている。溝底は確認できなかったが、第27号溝と同様相当深いとみられる（Fig.5･6－2、3)。杭列などはなく、遺物も出土していない。

第30号溝は幅45cm前後、深さ20cmほど（溝底標高7.2ｍ）で、第29号溝と第27号溝をつなぐように走っている。

第31号溝は、Q－20eトレンチを東西に横切るように走り、幅0.4～１ｍ、深さ7.5cmほど（溝底標高7.2ｍ）である。この溝の南側で黒色粘質土層は50cm近く落込んでいる。第26号溝方向へつながるようだか、確認できない。溝内から遺物の出土はない。

P－20区・Q－20区・Q－19区には上述のように多くの溝が走っている。その多くは平面的には第２号遺構と関係があるとみられる。しかし溝のすべてが同時に存在したとは考えられない。第21号・22号溝は、交叉した部分の第７・８号遺構のあり方から第21号溝の方が古いと考えられる。これはP－20bトレンチ北壁の土層断面（Fig.5・5－2）からもうかがえる。また同じ土層断面から19号溝は21号溝よりおくれると判断される。しかし他の溝の前後関係は判断できない。第28・21号溝の関係も土層だけからは判断しえない（Fig.5･6－1)。

いくつかの溝の間に前後関係を認め得たにしても、相互の時間的へだたりはさほど大きいものではなく、すべての溝は第２号遺構付近出土土器片が示す弥生時代中期後葉の中におさまり、おくれるにしても弥生時代後期初めまでであろう。　（後藤）

(3)　南東側の溝と遺構（Fig.5･2、5･7、5･18、PL.LXXIV～LXXX)

Q－21・22・23区、P－22・23区では、旧河川と支流との合流点にある第１号遺構付近から旧河川岸は東南東へのび、P－23ａトレンチ東側を通って、N－25グリッドとN－24・25トレンチの間へのびている。

N－24・25トレンチの南端の砂層中には４本の丸木杭が打込まれていた（現存杭頂標高7.7～7.9ｍ）が、きわめて新しい時代のものと思われる。

第１号遺構付近で旧河川に合流する支流は、N－23ｂトレンチでは、耕地整理前の用水路際

に打たれた杭列（現代のもの、杭頂7.9～8.2m）下の砂層に２列の杭列があった。杭列間は約２m、杭列方向は北北西－南南東、現在杭頂の標高7.1～7.4m。砂層中に溝等の痕跡はなかった。旧河川中の杭とみられ、出土した標高からみて弥生時代かとも考えられるが、確実でない。

旧河川支流は、Q－22a・bトレンチへ舌状にのびる黒色粘質土層と、Q－22dトレンチ北端からQ－22e・Q－22cトレンチへとのびる黒色粘質土層を両岸として西へのびている。Q－22c・d・eトレンチで旧河支流の岸をなす黒色粘質土層中には第32～41号の溝と第９号遺構がある。

第34・35号溝と第９号遺構（Fig.5・2、5・18、5・19、PL.LXXIX、LXXX－1）

両溝ともQ－22eトレンチで旧河川支流につながる。第35号溝はQ－22dトレンチ南側へのび、さらに東南側へ曲って第34号溝と交叉しているが、その先は不明瞭である。幅は60～70cm、溝底は標高7.1～7.2mで、黒色粘質土層上面からの深さは10～15cm前後と浅い。溝の北壁際には数本の杭が打たれ、また第35号溝との交点の南側にも杭が打たれている。杭頂の標高は7.2～7.3mほどにある。Q－22eトレンチ内の旧河支流にこの溝がつながる付近の溝壁際と砂層中には杭が打たれ、流木が散乱している。

第34号溝はQ－22eトレンチとQ－22dトレンチ南側で蛇行しながら第35号溝を横切り、P－23bトレンチ・P－23aトレンチへとつづく。溝底は黒色粘質土層下の灰色粘土層に達し、その標高は7.1～7.2m、P－23aトレンチ南壁では溝底が黒色粘質土層内にあり7.3mほどになる。黒色粘質土層上面からの深さは約10～20cmで浅い。この溝が第35号溝と交わる付近には多くの杭が打込まれ、北側の溝壁には横木がならんでいる（第９号遺構）。また丸太材や小さい流木が散乱している。第35号溝と交わる所から北東側の北側溝壁際には長さ50～80cmの丸太材３本を横において、それらを杭で固定し、溝壁の補強としている。南側溝際にも多数の杭が打込まれている。これらの杭は丸木杭の他に割杭もある。杭頂は7.2～7.3mで、杭先端部は標高6.5m付近にまで達している。この第９号遺構は第34号溝の溝壁を補強するためのものと考えられ、第７・８号遺構と同じ性格のものと考えられる。したがって、第34号溝が第35号溝より遅れて用いられたことが明らかである。第９号遺構に打たれた杭の樹種は、アワブキ・カシ・シイ・タブノキ・クリで、シイがもっとも多い。P－23a・bトレンチでは第34号溝の内外に杭は打たれていない。この溝からは土器と木器が出土した。木器は第９号遺構内にあり溝底の灰色粘質土層に垂直につきたった状態で出土した三又鍬（W3289）と、P－23aトレンチ内の第34号溝出土の小形木製品（W3171）である。

土器はQ－22dトレンチ内では、三又鍬のすぐそばで弥生式土器鉢（Y3110）、それから約３mはなれて弥生式土器胴部片（Y3119）が出土し、P－23aトレンチ内で弥生式土器片（Y3122）が出土した。またQ－22dトレンチ内の第34号溝付近の黒色粘質土層直上で数片の弥生式土器片（Y3101・3107）が出土している。これらの弥生式土器片は中期中葉以前のものだが、第１号遺構との位置関係から、第34号・35号溝の年代は弥生時代中期後葉とみておく。

第36～38号溝（Fig.5・2）

この３つの溝は第１号遺構と第９号遺構間のＱ－22ｄトレンチ内黒色粘質土層にある。幅0.5～1ｍほど、溝底の標高は7.25ｍ前後、黒色粘質土層上面からの深さは15cmほどで浅い。

第36号・第37号溝はＱ－22ｄ・ｅ両トレンチ間で旧河川支流につながるようである。第36号溝の溝壁際に多数の丸木杭と若干の角杭が打込まれている。第38号溝は第１号遺構南東部で旧河川砂層につながり、第38号溝につづく。第37・38号溝付近に杭列はない。遺物も出土しなかった。

第32・33号溝（Fig.5・2）

これらはＱ－23ｂトレンチ内の黒色粘質土層にある小溝である。幅は50～70cm。このトレンチで黒色粘質土層は南西方向へ高くなっていて、第32号溝も西側では溝底が標高7.5ｍ、東端の第33号溝と交わる付近で7.2ｍほどで、いずれも黒色粘質土層上面からの深さは15～20cmである。

第39・40・41号溝（Fig.5・19）

いずれもＰ－23ａトレンチ内にある。第39号溝は同トレンチ東側にあり、一端はふさがっている。幅40～50cm、黒色粘質土層上面からの深さは10cmほどで、溝底標高は7.34ｍである。第40号溝はＰ－23aトレンチを横切って南東－北西にのびる。幅50～80cm、黒色粘質土層上面からの深さは15～30cm、溝底標高7.1～7.28ｍ。

第41号溝もＰ－23ａトレンチを横切っている。東側溝壁は黒色粘質土層の落込みが明瞭だが、西側は不明瞭で杭列によって確認しうるにすぎない。溝底標高は7.1ｍ前後である。西側の溝壁沿いに杭が打たれている。この溝の西側へ黒色粘質土層は次第に下ってゆき、旧河川砂層につながるとみられる。Ｐ－23ａトレンチ西端で、黒色粘質土層上面標高は6.8ｍである。

第39～40号溝内から遺物は出土していない。なお、第39号溝の南側、Ｐ－23ａトレンチ西南端に直径1.2

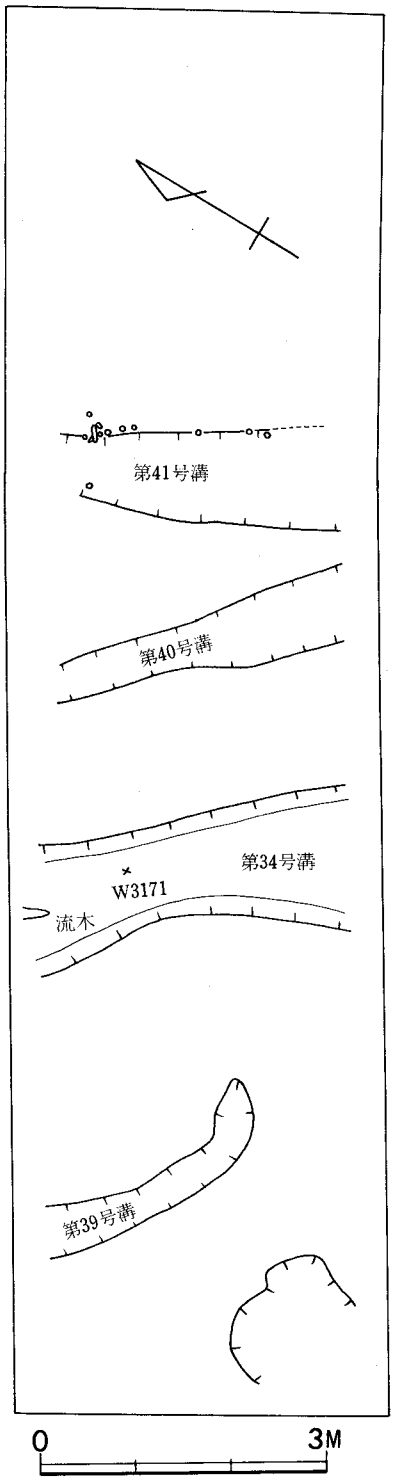


Fig.5・19　Ｐ－23ａトレンチ平面図

～1.3mの不整円形竪穴(?)がある。底部標高は7.2mである。竪穴状のへこみか、溝の端部かはわからない。遺物は出土していない。

旧河川支流の砂層中には、黒色粘質土層際に流木が散乱している（Q－22c・e両トレンチ)。その出土位置は標高7～7.3mである。またQ－22bトレンチでは黒色粘質土層近くに丸木杭2本が打込まれていた。杭頂標高は7.3mと7.45mである。

以上の第32～41号溝は、杭を打込んでない第32・33・37・38・39・40号の小溝と、杭を打ってある第34・35・36・41号溝とで機能は異なるとみられるが、前者は自然の流路とみられ、実際に用いられたかどうかは明らかでない。溝相互の前後関係はあっても、その時期は弥生時代中期後葉とみてよいだろう。（後藤）

(4)　西側の旧河川支流（Fig.5・3、5・20～5・22、PL.LXXX-2、LXXXI、LXXXII）

R－22区を中心とする第3区西側には、支流岸辺を示す黒色粘質土層の落込みと、それに沿う砂層・粘土層中から杭・流木が出土している。溝は検出していない。

旧河川支流はR－22aトレンチ（Fig.5・3）で南側と西側の2つにわかれる。この分岐点にあたるR－22aトレンチ中央部には多くの杭が打込まれている。R－22aトレンチ西側とS－21bトレンチに黒色粘質土層が舌状にのびて、支流を二手にわけている。この黒色粘質土層上面は標高約7.3mであり、これにつづく旧支流中の標高7.1～7.2m以下には暗灰色粘土層がある。この粘土層はR－22aトレンチの黒色粘質土層沿いからR－21トレンチへひろがり、北側～北西側へ低くなっている（R－21トレンチ北側では標高7.0m以下)。一方これをおおう砂層はR－22aトレンチでは東側へ次第に深くなり、その下に暗灰色粘質土層がつづく。R－22トレンチでは砂層がきわめて深いようである。

R－22aトレンチの杭群はこの砂層から下の粘土層へ打込まれていて、現存杭頂は標高7.15m以下にある。杭は30本あまりを確認したが、その大部分が丸木杭で、割杭が若干ある。その付近には板状の（加工はしていない）流木や丸太状流木が埋っている。杭群はきわめて乱雑に打たれているようだが、トレンチ壁の崩壊と湧水のため、十分にそのひろがりをとらえることができなかった。

これら杭・流木群のすぐ西側の暗灰色粘土層内から完形の鉢と壺形土器各1点が出土した(Y3131・3132)。出土した位置の標高は7.0～7.1m前後である。この土器は弥生時代中期後葉のもので、杭群とともに埋没したとみられ、杭群の年代を示すと考えられる。

R－22aトレンチにつながるS－21bトレンチでは黒色粘質土層とそれにつづく砂層があって、南方向の旧支流西岸をなしている。この岸辺の砂層中に丸木杭1本が打込まれ、流木が少数出土した（W3320)。流木の出土標高は約7.15mである。またこの砂層中から11片の弥生式土器片が出土し（Y3137・3147・48)、黒色粘質土層直上からも弥生式土器（甕形）の破片3点が出土した。

S－21bトレンチにあらわれた支流の岸辺はS－22aトレンチ・S－23トレンチにたどるこ

ることができる。

Ｓ－22ａトレンチ（Fig.5･20）では北西側に黒色粘質土層があらわれる。層上面標高は7.3～7.5m、層厚は20cmほどである。この層は旧支流の砂層中に多量に崩落している。岸辺の砂層には４本の丸木杭（W3318）が打込まれている（現在杭頂標高6.9～7.05m、下端部標高6.6～6.7m）。また数点の流木が出土した（W3319）。流木出土の標高は6.9～7.2mである。この砂層中と崩落した黒色粘質土層中、および黒色粘質土層直上から弥生式土器片16片が出土した（Y3138・40～42）。これらも弥生時代中期後葉のものである。

Ｓ－23トレンチでは南西側に黒色粘質土層と、それにつづく砂層があった。砂層中には自然流木が数点出土した（W3321～23）。このトレンチでも黒色粘質土層直上と、旧支流に崩落した黒色粘質土層内から弥生式土器片が10数点出土した（Y3152～55）。

Ｓ－22ａトレンチとＳ－23トレンチの間で、黒色粘質土層は南西方向へ入り込み、すでにのべたように、これが別の支流になる可能性もある。

前述した岸辺の対岸にあたる岸辺はＲ－22ｃ・Ｓ－22ｂ・Ｓ－24トレンチで認められた。

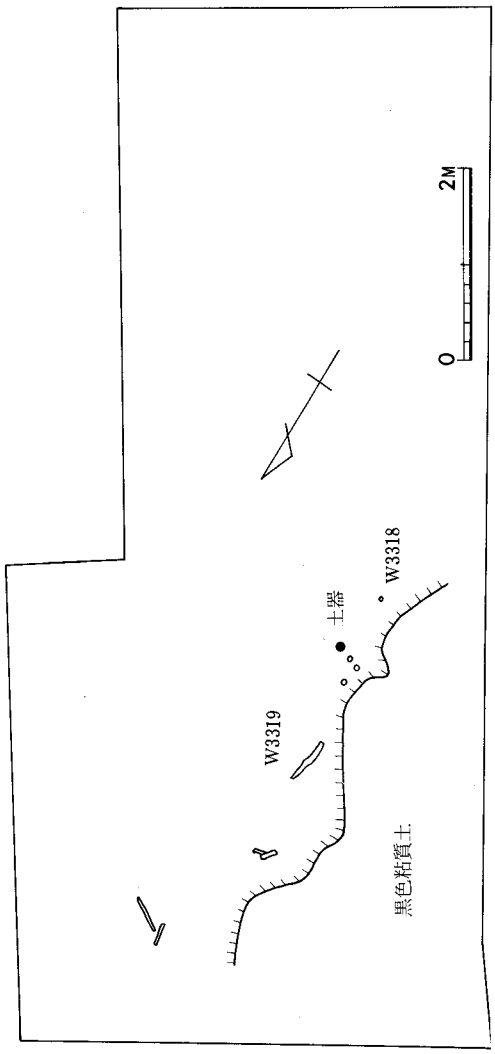


Fig.5･20　Ｓ－22ａトレンチ平面図

Ｒ－22ｃトレンチ(Fig.5･21、PL.LXXXII)では、北端で黒色粘質土の落込み（岸辺）が出た。黒色粘質土層上面は南側では標高7.7mほどで、地表下50～60cmにあらわれる。北へ次第に低くなり、途中やや急激に段状に低くなっている。この段状の落ち込みの北側に小竪穴２つがある。ひとつはトレンチ西壁にかかっているが、もうひとつはそれに接し、平面形は長楕円形（1.5×0.6m）である。黒色粘質土層上面からの深さは35cmほどで、底面の標高は7.05mほどである。内部に遺物がなく時代は不明。北端岸辺における黒色粘質土層の落ち込み上端は標高7.15m前後である。西側にやや突出した部分がある。これは黒色粘質土層の崩落かもしれない。黒色粘質土直上で弥生式土器小片１点が出土している。

Ｓ－22bトレンチ（PL.LXXXII－11）では、黒色粘質土層上面は、東端部で標高約7.4mで西方へ低くなる。途中にはＲ－22cトレンチにみられたと同様の黒色粘質土層の落ち込みがあり、岸辺

の落ち込み部分での標高は7.0mほどになる。本トレンチで黒色粘質土層は20cmほどで薄く、下は青灰色粘土となる。旧支流岸辺では黒色粘質土層とその下の青灰色粘土が削られ、黒色粘質土層が旧河支流へ崩落している(標高6.5m以下まで)。旧支流内には上部に粗砂～礫が堆積し、下部（標高7.1m以下）は暗灰色粘質土となる。この粘質土層は黒色粘質土層上を厚さ10～20cmほどおおい旧支流内につづいている。上部の粗砂・礫中には弥生式土器片6片の他に土師器、須恵器小片6片含まれている。その下の暗灰色粘質土直上からは弥生式土器片2点が出土した（Y3144)。これも弥生時代中期後葉のものである。

S－24トレンチ（Fig.5･22、PL.LXXXI－2）でも、S－22bトレンチと同様の黒色粘質土の落込みがみられる。東側では黒色粘質土層上面は標高7.35m、旧河支流岸辺で7.2mほどである。黒色粘質土層は、その下の青灰色粘質土とともに急激に落ち、旧支流内には黒色粘質土層上の暗灰～灰色粘土が入り込み、厚く堆積している。その下部(標高約6.2m）には粗砂層があり標高5.9～6.7mには流木が埋没している。流木付近からは弥生式土器片が2点出土した（Y3157)。また黒色粘質土層上の灰色粘質土層内からは弥生式土器片3片が出土した（Y3158)。

このように、南へつづく旧支流は、幅が13～20mある。岸辺の堆積はS－22a・S－23トレンチ側は砂・礫であるのに対し、S－22b・S－24トレンチ側では粘土・粘質土となっていて対照的である。これは水の流れ方のちがいを示すとみられ、この13～20mの幅全体に一時に水が流れていたのでなく、この幅の中に小水流が流路を変えながら流れていたと考えられる。また流れの深さも必ずしも同一でなかったとみられる。しかし出土する土器片からみて、その時期は弥生時代中期後葉に限られるとみられる。

R－22aトレンチの北側では、R－19bトレンチで支流の岸辺が認められた（PL.LXXX－2)。R－19a・bトレンチにあらわれた黒色粘質土層上面は

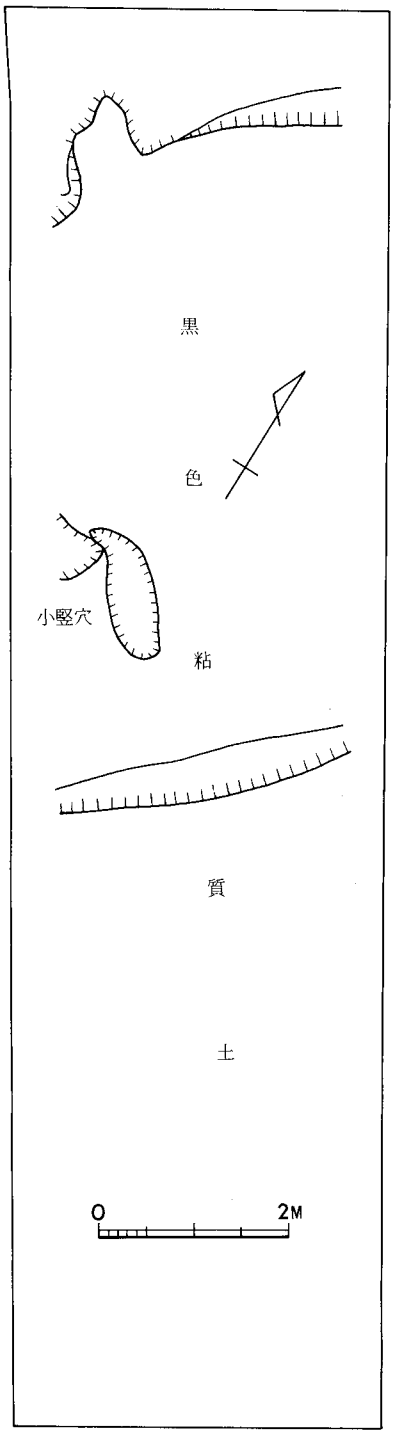


Fig.5･21　R－22cトレンチ平面図

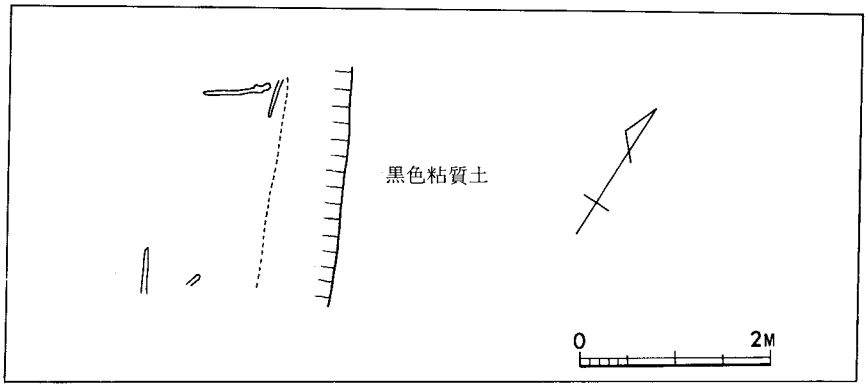


Fig.5・22　S－24トレンチ平面図

標高6.9～7.0mである。旧支流内には黒色粘質土層上からつづく灰～暗灰色砂・礫が堆積し、その下の標高6.7m以下には青灰色粘土層があり、急激な落込みを示す。R－19bトレンチの旧支流岸の支流内には杭が3本打込まれ（杭頂標高6.6～6.7m）、黒色粘質土層内にも標高6.8m前後に杭の下端部が検出された。黒色粘質土層直上から弥生式土器底部片1点（Y3127）が出土している。

このトレンチの南側のR－20bトレンチでは標高7m以下には北側に砂・礫層が堆積し、南側では暗灰色粘土が厚くなる。これらの層内では遺物は出土していない。

R－20aトレンチ（PLL.XXXI－1）では、標高7.5m以下に砂・粘土が堆積し、6.3m以下に白色粗砂・礫層がある。トレンチ東端の標高7.0m前後の砂層中には多数の流木が、ほぼ南東－北西方面に埋没していた。この方向が水流の方向を示すとみられる。流木のある砂層には土器等の遺物は出土していない。

R－18トレンチでは標高7.0m以下に厚さ20cm未満の薄い黒色粘質土層がある。またS－19トレンチでは標高7.3m以下に青灰色粗砂層が厚く堆積し、旧河川支流であることを示している。

R－19bトレンチにあらわれた旧支流岸のつづきとみられる黒色粘質土の落込みはT－17トレンチにみられる。T－18グリッドはすでにのべたように完掘できなかった。

T－17トレンチ（Fig.5・8-3）はL字形に設けたが、その北側に黒色粘質土層があらわれた。上面標高は7.15mで、層厚は20cm弱と薄い。その下の粘質土とともに落ちていて、旧河支流内には灰色砂質土が堆積している。黒色粘質土層とその付近からは遺物の出土はない。旧支流内とみられる褐色土（第8層）下部ないし灰色砂質土（第9層）上部から土師器が出土している（H310～12）。

（後藤）

3　縄文式土器の出土状態（Fig.5・23、PL.LXIX－2・3）

第3区の黒色粘質土層内から縄文時代早期の土器片が出土している。明確な遺構はないが、出土状態についてここでのべておく。個々の破片についての説明は本章第3節2(1)に記す。

O－19b・cトレンチでは、黒色粘質土層が東へややつき出し、第11号溝・第12号溝がある。この付近で作業員が偶然黒色粘質土層を誤って掘り込んで、最初に縄文式土器が出土した。それにひきつづき付近の黒色粘質土層内を調査して、第11号溝沿いに多数の破片が出土した。これは押型文を施した尖底土器（J1、PL.LXIX－3）で、その少し北の第12号溝のそばで無文尖底土器1個体分が出土した（J12、Fig.5・23、PL.LXIX－2）。出土した位置は黒色粘質土層上面から10cm未満下で、標高は7.3m～7.4mである。

O－19dトレンチの第2号溝東側の黒色粘質土層内でも数点出土している。出土した位置は黒色粘質土層の上位である。黒色粘質土層は細かにみれば、上位がやや軟質で、下位は堅い。この軟質の部分に縄文式土器は包含されていた。

P－19aトレンチの第10号溝では、夜臼式土器片とともに押型文土器片1片が出土した。

P－20cトレンチの第19号溝内埋土からも1片出土している。位置は第6号遺構の東約2mほどのところである。

P－23bトレンチでは黒色粘質土層上面から数cm～10cmほど下位から多くの縄文式土器片出土した。

Q－23bトレンチの北側でも出土し、第32号溝内からも1片出土している。Q－23トレンチでも1片出土した。

またR－22cトレンチでも若干出土している。

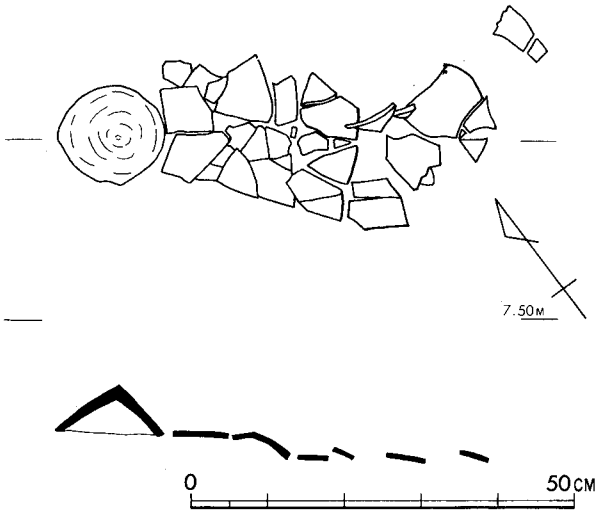


Fig.5・23　縄文時代早期土器（J1）出土状態実測図

これらの縄文式土器とともに、黒色粘質土層からはサヌカイト製の石錐（Ｓ36）・掻器（Ｓ37）各１点（Ｐ－23ｂトレンチ）と剝片１点（Ｐ－23ａトレンチ）が出土している。

これら縄文式土器はいずれも早期のもので、黒色粘質土層内に包含されていた。湧水で黒色粘質土層が泥状になるために、すべてのトレンチの黒色粘質土層内を調査できなかったので、出土したトレンチは限られている。しかし、その範囲は南北80ｍ、東西40ｍに及び、完全に調査したならば、相当数の破片が出土したとみられる。

出土した縄文式土器はほとんど磨滅しておらず、水流によって運ばれたとは考えられない。またＱ－19ｂ・ｃトレンチで出土した無文尖底土器は、復元はできなかったが、１個体がそのままつぶれた状態で出土した（Fig.5･23)。

これらの点と出土範囲のひろさからみて、これらの土器片は原位置を保っていることは確実である。縄文時代早期には、この黒色粘質土層の現在よりやや下部が地表で、人々がなんらかの目的でここにいたことがわかる。おそらく傍の川（旧河川）がその目的のひとつであったろう。当時の川と縄文式土器片の出土位置との比高差は、ただちに判断できないが、第２区Ｊ－23トレンチにみられる黒色粘質土層から考え、水流は６ｍ以下にあり、比高差は1.5ｍ以上であったとみておく。

その後、水位の上昇とともに泥湿地と化して、黒色粘質土層が形成されたのであろう。なお、すでにふれたようにＰ－20ｃトレンチでの黒色粘質土層の^{14}C 年代測定結果は、こうした縄文時代早期土器の出土と関連させて興味ぶかい。　（後藤）

第3節　遺　物

1.　遺構出土の遺物

以上にのべた各遺構・溝・旧河川砂層出土の遺物は、弥生式土器・木製品・石器である。

(1)弥生式土器（Fig.5・24～5・27）

0－19ａトレンチ出土の土器（Ｙ3010・3011）

いずれも旧河川砂層出土である。Ｙ3010は「く」の字状口縁が内彎し、いわゆるはね上がり口縁の系統の甕である。口縁下に一条の三角突帯を巡らす。器面があれているために調整は不明。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。黄白色を呈する。後期前葉のものであろう。Ｙ3011は甕の底部で、胎土に砂を含み、焼成は良好。暗褐色を呈する。

0－19ｂ・ｃトレンチ出土の土器（Ｙ3012）

旧河川砂層中の出土である。逆「Ｌ」字状の口縁をもつ甕であるが、内側張り出しはみられず、外側張り出しも弱い。口縁外面は指および刷毛目での横なで調整。胴部外面は縦刷毛目調整で煤の付着が認められる。内面は箆なで調整。胎土には砂を含み、焼成良好。褐色～暗褐色を呈する。中期前葉のものであろう。

0－19ｄトレンチ出土土器（Ｙ3014・3015、PL.LXXXIII）

Ｙ3014は第２号溝直上、Ｙ3015は第２号溝内の出土である。Ｙ3014は逆「Ｌ」字状口縁をもつ甕で、内側張り出しはなく、外側張り出しも未発達である。横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良くない。黄褐色を呈する。中期前葉のものであろう。Ｙ3015は甕の底部で、胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。褐色を呈する。

0－19ｅトレンチ出土土器（Ｙ3016、PL.LXXXIII）

第２号溝出土である。壺の頸部から胴上半部にかけての破片で、付け根直上の頸部は内傾し、肩部は張る。横なで調整を行なう。胎土には細砂を含み、焼成は非常に良い。黄褐色を呈する。前期のものであろうか。

0－19ｆトレンチ出土土器（Ｙ3019・3021～3029、PL.LXXXIII）

Ｙ3019・3021～3027は旧河川砂層中、Ｙ3028・3029は第１号溝内の出土である。

Ｙ3019は「く」の字状口縁をもつ甕で、口縁外面は横なで調整、内面は横刷毛目調整。胴部外面は縦刷毛目調整で、煤の付着が認められる。口縁内面下には稜がつく。胎土に石英粒砂を含み焼成は良い。黒褐色～暗褐色を呈する。後期前葉。Ｙ3021も同じく「く」の字状口縁をもつ甕で、口縁外面は横刷毛目調整の後、斜めの刷毛目、胴部外面は縦刷毛目、内面は横刷毛目調整を行なう。口縁の上部は横なで調整。外面には煤の付着も認められる。口縁内面下は箆状

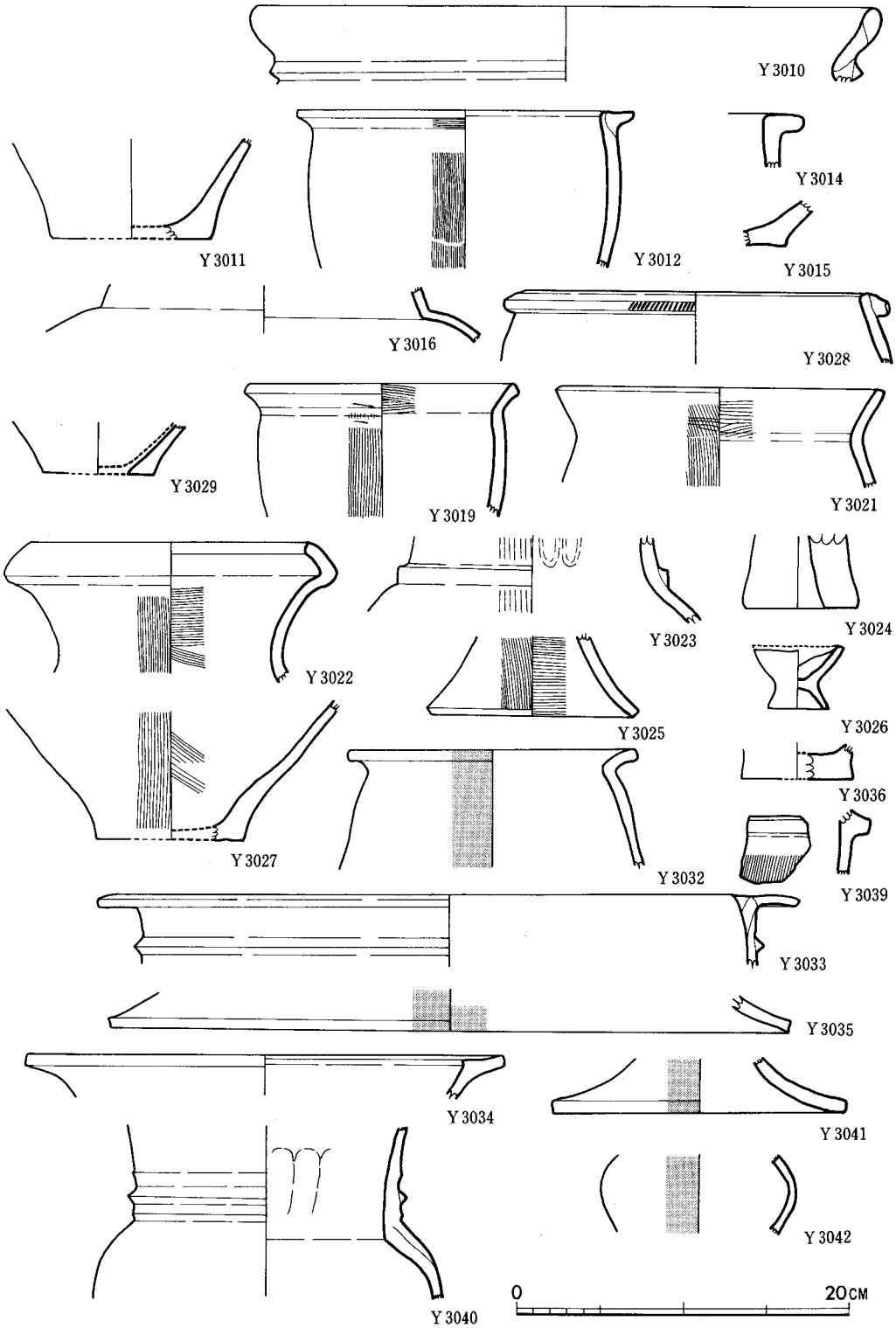


Fig.5·24　第3区遺構・旧河川出土弥生式土器実測図(1)

の工具でなでられ二本の稜がつくが、一部では一本のみとなる。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良くない。暗褐色を呈する。後期前葉。Y3022は袋状口縁をもつ壺であるが、外面に稜がつき二重口縁に近くなる。口縁部は横なで調整。頸部外面は縦刷毛目、内面は横刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。暗褐色を呈する。後期前葉。Y3023は壺の頸部付け根に一条の三角突帯が巡る。縦刷毛目調整を行なった後に突帯を貼り付けて、その上を横なでして接着を強化している。頸部内面には指のなで上げ調整痕が残る。胎土に石英粒砂を含み、焼成はあまり良くない。黄褐色を呈する。後期前葉のY3022の壺の様な口縁をもつと推定される。Y3074は器台で、小形であるが器壁が厚い。全面横あるいは斜めになでて調整。胎土に石英粒砂を混じ、焼成は良くない。黄褐色を呈する。Y3025も器台であるが、Y3024に比べ器壁が薄い。外面縦刷毛目、内面は横刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。灰褐色を呈する部分が多い。この器台はY3024が後期、Y3025は中期の可能性が強い。Y3026はミニチュアの脚付鉢である。外面は磨滅が激しく、調整は不明だが、鉢内面は縦なで調整。胎土には石英粒砂を含み、焼成は良くない。黄褐色を呈する。第2区G－24トレンチの例からみて後期前葉のものであろう。Y3027は甕の底部で外面縦刷毛目、内面は一部に斜め刷毛目調整。胎土には石英粒砂を含み、焼成は良好。暗褐色を呈する。後期前葉。

Y3028は内傾する口縁部の外端に上面が下向する台形に近い刻目突帯を巡らす。口縁部横なで調整。胎土には石英粒砂を含み、焼成は良い。暗褐色を呈する。前期末～中期初頭のものであろう。Y3029は甕の底部である。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。暗褐色。

P－19aトレンチ出土土器（Y3032～3036・3039～3042・3166～3170、PL.LXXXIII）

第3号遺構内および付近の砂層出土土器（Y3032～3036・3039～3042）　Y3039・3042は、遺構の杭間および下部からの出土である。Y3032は「く」の字状口縁をもつ甕で、外面丹塗り。器面のあれが甚しい。胎土には砂を含み、焼成は良い。暗褐色を呈する。中期終末～後期初頭。Y3033は逆「L」字状口縁をもつ甕で、口縁下に一条の三角突帯を巡らす。横なで調整を行ない、胎土には砂を含む。焼成はあまり良くなく、赤褐色を呈する。中期中葉。Y3034は「鋤」状口縁をもつ高坏の口縁部である。口縁部は内端が下がり、横なで調整。胎土には砂を含み、焼成良好。褐色を呈する。中期後葉。Y3035は高坏の脚部と推定され、内外面とも丹塗り磨研。胎土、焼成とも良好で褐色を呈する。Y3036は甕の底部で、底面に木葉痕がつく。胎土には石英粒砂を含み、焼成は良い。褐色を呈する。前期のものであろう。

Y3039は「コ」の字状突帯をもつ甕の胴部破片で、外面縦刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。中期後葉。Y3040は壺で、口縁部と胴下半部を欠く。頸部付け根直上に一条の三角突帯が巡るが突帯貼り付け時に上下を強く横なでしたために、その部分が凹み、稜がつく。内外面とも横なで調整。頸部内面には指のなで上げ調整痕が認められる。胎土・焼成とも良好で、暗褐色を呈する。欠失した口縁部は「鋤」状をなすと推定され、中期後葉のものであろう。Y3041は高坏の脚部で、外面丹塗り。胎土は精良な粘土を用い、焼成も良い。淡灰褐色。Y3042は丹塗り壺の胴部である。小形のもので、胴部は球形を呈する。外面

箆磨研。おそらく無頸壺の胴部であろう。胎土は精良な粘土を用い、焼成も良い。暗黄褐色を呈する。これらの土器も中期後葉のものであろう。

これらの点から、第３号遺構は中期後葉の時期に比定しても、まちがいはないであろう。

第10号溝内出土土器（Ｙ3666～Ｙ3170）

Ｙ3166は壺、他は甕の口縁部である。Ｙ3166は内傾し、外彎する口縁の先端がほぼ直立に近い。横なで調整。胎土、焼成ともに良く、暗褐色を呈する。Ｙ3167～Ｙ3170は口縁部に刻目突帯をもつ。突帯は口縁端から下がった位置につけられるもの（Ｙ3168・3170)、口縁端に接してつけられ、下向の斜面をもつもの（Ｙ3667)、口縁より高く、上端に覆い被さるようにつけられるもの（Ｙ3169）がある。口縁の傾きも底部に向かって、単純にすぼまるもの（Ｙ3167・3168）と、内傾するもの（Ｙ3169・3170）がある。Ｙ3168は外面条痕が認められ、横なで調整もある。胎土には砂を含み、焼成は良い。Ｙ3169が黒色を呈する以外は、暗褐色。これらはいずれも夜臼式のものであり、他の土器がないため、第９号溝は、夜臼式の時期のものとみてもさしつかえないであろう。

Ｐ－19ｂトレンチ出土土器（Ｙ3044・3045・3048・3049～3051）

南西隅黒土直上の土器（Ｙ3044・3045・3048・3049）

Ｙ3044は「鋤」状口縁をもつ高坏の口縁片である。全面丹塗りで胎土に粗砂を含み、焼成は良くない。赤褐色を呈する。中期中葉～後葉のものであろう。**Ｙ3045**は、外面丹塗り磨研の壺の胴部で、おそらく無頸の壺であろう。胎土に砂を含み、焼成良好。褐色を呈する。中期後葉か。**Ｙ3048・3049**は甕の底部であろう。ともに外面縦刷毛目調整。胎土には石英粒砂を含み、焼成は良い。暗褐色を呈する。いずれも中期のものであろう。

第１号溝出土土器（Ｙ3050・3051）

Ｙ3050は「鋤」状口縁をもつ壺である。口縁上面は平坦で、外側張り出しはあまり強くない。横なで調整。胎土・焼成ともに良好で、暗褐色を呈する。中期前葉か。Ｙ3051は壺の底部である。胎土に粗砂を含み、焼成はあまり良くない。明褐色を呈する。

Ｐ－19ｄトレンチ出土土器（Ｙ3056）

第１号溝内出土である。高坏の坏と脚の接合部で、外面は縦刷毛目調整。胎土には石英粒砂を含み、焼成良好。褐色を呈する。中期後葉か。

第１号溝は０－19ｆトレンチ、Ｐ－19ｂトレンチ、Ｐ－19ｄトレンチで遺物が出土しており、前期末から中期前葉の遺物が多いが、溝の時期はＰ－19ｄトレンチ出土のＹ3056から、中期後葉のものと思われる。

Ｐ－20ａトレンチ出土土器（Ｙ3059・3063～3065・3067～3069）

いずれも第２号遺構内と、周辺の旧河川砂層中出土の土器である。Ｙ3059は「く」の字状口縁をもつ甕で、横なで調整。口縁下内面には稜がつく。胎土には石英粒砂を含み、焼成良好。

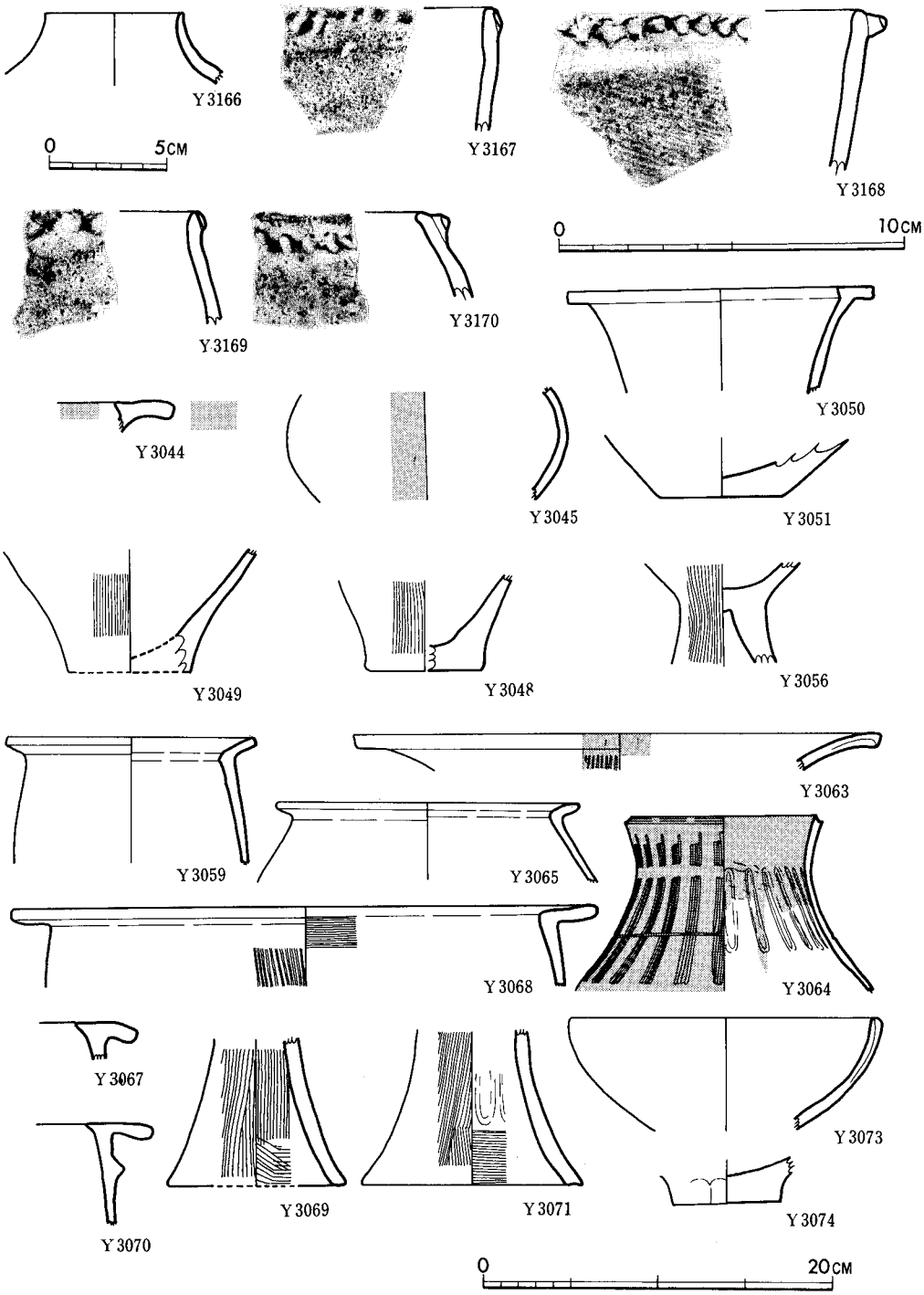


Fig.5・25　第3区遺構・溝・旧河川出土弥生式土器実測図(2)

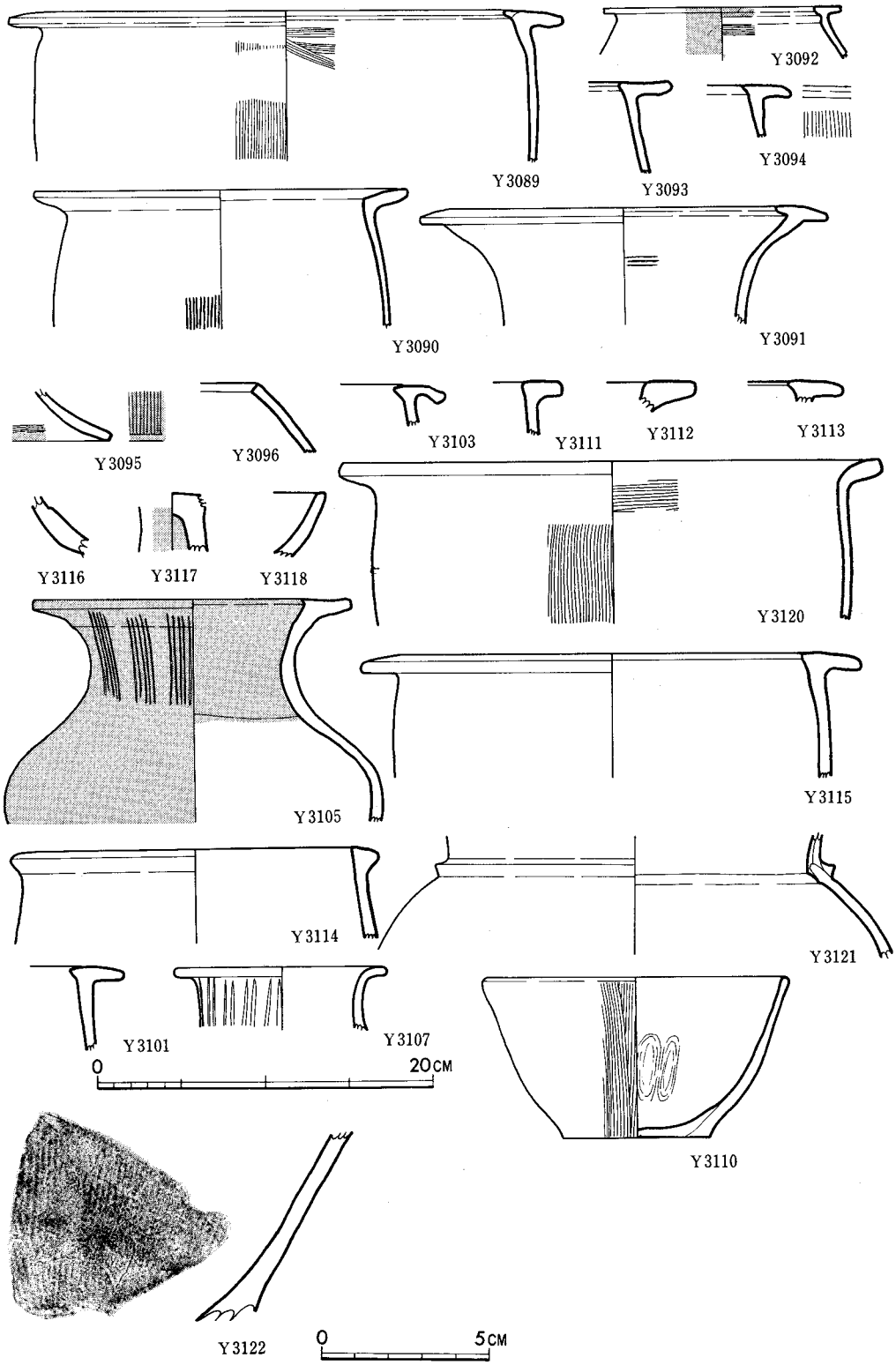


Fig.5・26　第3区遺構・旧河川出土弥生式土器実測図(3)

暗赤褐色を呈する。中期後葉～後期初頭。Y3063は単純に開く壺の口縁部で、丹塗り磨研。口縁端は少し凹む。外面は縦に、小さな棒状の工具でなでて、暗文風にする。胎土・焼成ともに非常に良く、赤褐色を呈する。中期前葉～中葉。Y3064は無頸の壺で、内傾する頸部が外彎しながら、口縁部では外反する。口縁部は凹む。口縁部の内外は横なで調整。外面は縦に暗文風に小さな棒状の工具でなでがあり、頸部の一番細い部位と肩部には横なで調整があり、その縦なでが消えている。また頸部下半には一条の沈線が巡る。内面には指のなで上げ調整。外面は全面、内面は頸部中央まで丹塗りで、内面はその丹が下にたれ落ちた痕がある。胎土・焼成ともに良好で、丹塗り部以外は暗褐色を呈する。中期後葉。Y3065は無頸壺で、口縁が「く」の字状になるが、口縁端上面で平坦面を作る。外面は器面のあれが甚しいために丹塗りかどうか、また調整も不明。胎土には石英粒砂を含み、焼成はあまり良くない。暗黄褐色を呈する。中期後葉。

Y3067は逆「L」字状口縁の甕の破片で、口縁外端は下がる。横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。赤褐色を呈する。中期中葉。Y3068は内側張り出しのない逆「L」字状口縁の甕の内端が下がり、「く」の字状に近くなる。横なで調整。外面は縦刷毛目調整。内面横刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。黒色を呈する。中期後葉。Y3069は器台の下半部である。外面は縦刷毛目、内面も裾部以外は縦、裾部は斜めと横の刷毛目調整。胎土は良好で、焼成は良く、赤褐色を呈する。中期の器台である。

以上の土器より、第2号遺構は中期後葉で、あるいは後期初頭にかかるかもしれない。

P－20bトレンチ出土土器（Y3070・3071、PL.LXXXIII）

旧河川中出土の土器である。Y3070は逆「L」字状口縁をもつ甕で、口縁上面は水平である。口縁下に一条の三角突帯を巡らし、口縁部と突帯貼り付け部は横なで調整。外面には煤の付着が認められる。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。暗赤褐色を呈する。中期中葉。Y3071は器台の下半部で、裾端は凹む。外面は斜めおよび縦の刷毛目、内面裾部には横の刷毛目調整。内面には指の調整痕もみられる。胎土に砂を含み、焼成は良好。暗褐色を呈する。中期のものである。

P－20cトレンチ出土土器（Y3073・3074）

いずれも東北隅の旧河川岸の出土である。Y3073は鉢で、内彎しながら単純に開く口縁をもち、横なで調整。外面には媒の付着が認められる。胎土には石英粒砂を含み、焼成は良好。暗褐色を呈する。中期後葉～後期前葉。Y3074は壺の底部で、指で押さえた痕がある。内面に媒の付着も認められる。石英粒砂を含み、焼成は良好。灰褐色を呈する。

Q－21トレンチ出土土器（Y3089～3096、PL.LXXXIII）

いずれも第1号遺構付近の砂層出土である。Y3089は逆「L」字状というより、「T」字状口縁に近くなる。口縁上面は外傾しており、口縁部横なで調整。胴部外面は縦刷毛目調整をして

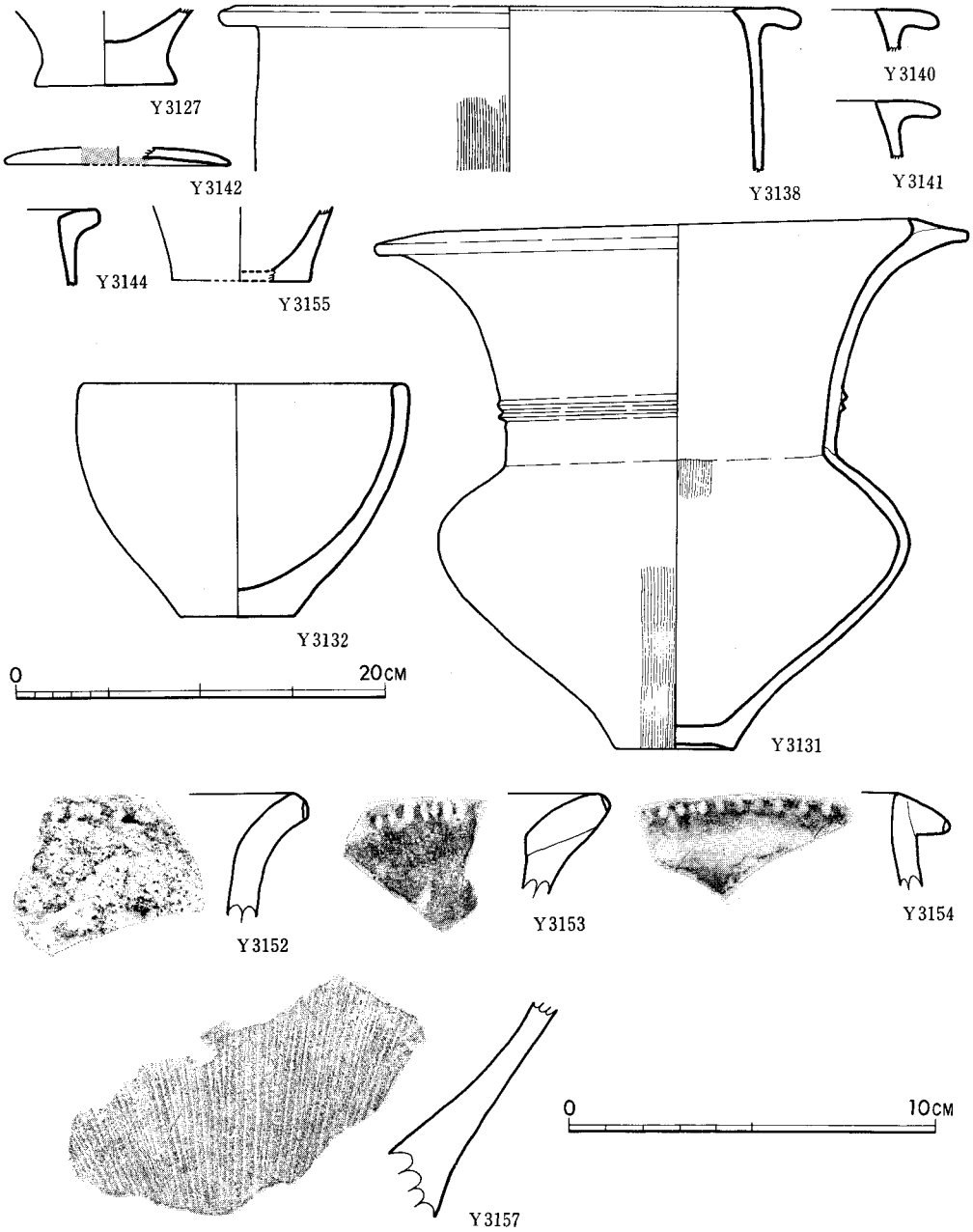


Fig.5・27　第3区遺構・旧河川出土弥生式土器実測図(4)

おり、上部ではその後横なでで一部刷毛目を消している。内面も一部斜めおよび横刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。暗褐色を呈する。中期中葉。Y3090は逆「L」字状を呈する口縁の内端が下がり、「く」の字状に近くなる。口縁部には横なで調整。外面には刷毛目調整。内外面ともに煤の付着が認められる。胎土には石英粒砂を含み、焼成は良い。灰褐色を呈する。中期後葉。Y3091は壺で、「鋤」状口縁の内側張り出しが強く、「T」字状に近く、外端が

下がる。横なで調整。内面には横の刷毛目が一部にある。胎土に砂を含み、焼成は良好。暗褐色を呈する。中期中葉～後葉。Y3092は無頸壺の口縁部で、外面と口縁内側は丹塗り。口縁上面は水平で、内側張り出しも認められる。口縁下内面には横刷毛目調整。口縁部は横なで調整。胎土には砂を含み、焼成は良好。灰褐色を呈する。中期中葉。Y3093は逆「L」字状を呈する甕の口縁部で、上面はわずかに凹む。横なで調整。胎土には石英粒砂を含み、焼成はあまり良くない。黄褐色を呈する。中期中葉。Y3094も逆「L」字状の口縁をもつ甕であるが、口縁外端が若干下がる。横なで調整で胴部は縦刷毛目調整。胎土に砂を含み、焼成はあまり良くない。暗褐色。中期中葉。Y3095は高坏の脚裾部で、外面と内面裾部は丹塗り。外面縦刷毛、内面裾部横刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。黄褐色を呈する。中期後葉か。Y3096は無頸の壺の口縁部で、単純に内傾している。胎土に砂を含み、焼成は良い。黄褐色を呈する。中期中葉～後葉。

Q－22dトレンチ北側砂層出土土器（Y3103・3105・3111～3118・3120・3121、PL.LXX LXXXIII、LXXXIV）

いずれも第1号遺構付近の旧河川中の出土である。

Y3103は逆「L」字状の甕の口縁で外端が下がる。外面に煤が付着している。胎土に砂を含み、焼成はあまり良くない。黒褐色を呈する。中期中葉。Y3105は「鋤」状口縁をもつ壺で、上面はわずかに凹む。口縁下外面も横なでが強く、若干凹み、低い突帯状に稜がつく。外面と内面の頸部以上は丹塗り磨研。頸部外面には小さな棒状の工具で縦に五本単位の暗文を施している。頸部外面には稜がつかず、内面には接合痕が残る。胎土は精良な粘土を用い、焼成は良い。丹塗り部以外は暗褐色を呈する。中期後葉。Y3111は逆「L」字状を呈する甕の口縁で、内側張り出しはなく、外側張り出しも弱い。横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。暗褐色を呈する。中期前葉。

Y3112は「鋤」状口縁壺で、内側張り出しはなく、外側もあまり強くない。横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。黒褐色を呈する。中期前葉。Y3113は逆「L」字状口縁の甕で、横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色。中期中葉。Y3114は内傾する口縁の外端に接して、断面蒲鉾形の突帯を貼り付ける甕である。器面のあれが甚しく調整不明。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良くない。暗褐色を呈する。前期終末～中期初頭。Y3115は逆「L」字状口縁をもつ甕で、外端が下がる。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良くない。褐色を呈する。中期中葉。Y3116は壺の肩部で、外面に段を有する。石英粒砂を含み、焼成は良くない。暗褐色。前期のものか。Y3117は高坏の脚部で、内外とも丹塗り、胎土に砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。中期のものであろう。Y3118は鉢の口縁部である。胎土は良好だが、焼成は良くなく、暗褐色を呈する。中期のものか。Y3120は「く」の字状口縁をもつ甕で、口縁部横なで調整。外面胴部は縦刷毛目、内面口縁下は横刷毛目調整。胎土に砂を含み、焼成はあまり良くなく黒灰色を呈する。中期後葉。Y3121は壺の頸部から胴上半部にかけての破片で、頸部付け根に一条の三角突帯が巡る。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良くない。暗褐色を呈す

る。中期後葉か。

以上、第１号遺構は、Ｑ－21トレンチおよびＱ－22ｄトレンチ出土の土器が、中期後葉を降るものがなく、この時期に比定しても良いと思われる。

Ｑ－22ｄトレンチ第34号溝出土土器（Ｙ3101・3107・3110・3119・3122）

Ｙ3119は溝内、Ｙ3101・3107は溝の付近出土である。Ｙ3101は逆「Ｌ」字状を呈する甕の口縁部で、外端がわずかに下がる。石英粒砂を胎土に混じ、焼成は良い。褐色を呈する。中期中葉。Ｙ3107は口縁部が短かく強く外反する壺で、篦磨研調整。頸部外面には、小さな棒状の工具で縦になでおろして暗文を作る。胎土に砂を含み、焼成は良好。暗褐色を呈する。前期～中期初頭のものか。Ｙ3110は第９号遺構内の三又鍬付近出土の鉢である。単純に外に開き、底部は平底。口縁部の内外は横なで調整。外面には縦の刷毛目調整で内面には指の押圧なで上げ調整痕が残る。胎土は若干の石英粒砂を含むが良好で、焼成も良い。暗褐色を呈するが一部焼成時の黒変がある。Ｙ3119は図示していないが、甕の胴部小片で、外面縦刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。外面に媒の付着が認められ、暗褐色を呈する。中期のものであろう。

Ｐ－23ａトレンチ第34号溝出土土器（Ｙ3122）

Ｙ3122は甕の底部付近破片で外面刷毛目調整。煤の付着も認められる。胎土に砂を含み、焼成は良好。褐色を呈する。中期のものであろう。

第34号溝では中期中葉以前の遺物しか出土していないが、第１号遺構や、それの存在する旧河川などから、中期後葉のものと推定される。

Ｒ－19ｂトレンチ出土土器（Ｙ3127）

黒色粘質土層直上出土である。甕の底部で、断面三角形の張り出しがつく。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。赤褐色を呈する。夜臼式の底部と思われ、流れこみであろう。

Ｓ－21ｂトレンチ出土土器（Ｙ3137・3147・3148）

Ｙ3137は甕の底部である。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。淡赤褐色を呈する。Ｙ3147は逆「Ｌ」字状口縁をもつ甕で、外側張り出しは弱い。横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。淡赤褐色を呈する。中期前葉～中葉。Ｙ3148も逆「Ｌ」字状口縁の甕で、口縁内端が下がる。横なで調整。胎土に砂を含む。焼成は良く、赤褐色を呈する。中期後葉。

Ｓ－22ａトレンチ出土土器（Ｙ3138・3140～3142）

いずれも黒色粘質土層直上出土である。Ｙ3138は逆「Ｌ」字状口縁の甕で、口縁部横なで調整。口縁外端は下がる。胴部外面は縦刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。外面に煤の付着が認められ、褐色を呈する。中期中葉。Ｙ3140・3141も同じく逆「Ｌ」字状口縁の甕で、外端が下がる。口縁部横なで調整。胎土には石英粒砂を含み、焼成良好。薄い赤褐色を呈

する。中期中葉。Y3142は無頸壺の蓋で、破片中には穿孔はない。全面丹塗りで、胎土・焼成とも良好。褐色を呈する。中期中葉～後葉。

S－22bトレンチ出土土器（Y3144）

黒色粘質土層直上出土である。逆「L」字状を呈する甕で、内端が下がる。内側張り出しはなく、外側も未発達。横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良くない。灰褐色を呈する。中期前葉。

S－23 トレンチ出土土器（Y3152～3155）

黒色粘質土層直上と崩落黒色粘質土層出土。Y3152はいわゆる如意形口縁をもつ甕で、口縁下端に刻目がつく。横なで調整。胎土に砂を含み、焼成はあまり良くない。褐色を呈する。板付II式である。Y3153は肥厚し外反する甕の口縁部で、外端に刻目、口縁内面に段を有する。横なで調整。胎土に砂を含み、焼成は良好。赤褐色を呈する。板付II～III式であろう。Y3154は内傾する口縁の外端に接して下向する斜面をもつ刻目突帯を貼り付ける。横なで調整。外面は細い刷毛目調整もみられる。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。赤褐色を呈する。いわゆる亀ノ甲式であろう。Y3155は甕の底部。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。薄い赤褐色を呈する。

S－24 トレンチ出土土器（Y3157）

黒色粘質土層が落ち込んだ旧河川と推定される暗灰色粘質土層の下部から出土した。甕の底部付近の破片で、外面縦刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。中期のものであろう。

R－22aトレンチ出土土器（Y3131・3132、PL.LXXXIV）

杭列付近の出土である。Y3131は「鋤」状口縁をもつ壺で、外端が下がる。頸部の下部に二条の三角突帯を巡らす。胴部最大径は口縁径より小さい。底部は上げ底を呈する。口縁部は器面があれているため調整は不明だが、頸部中央から胴上半部まで横なで調整。それ以下は細い縦刷毛目調整。内面も胴上半に細い縦刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。暗褐色を呈するが、胴下半部に一部焼成時の黒変がある。Y3132は内彎しながら単純にたちあがる口縁をもつ鉢で、口縁部横なで調整。胎土に石英粒砂を混じ、焼成良好。淡褐色を呈するが、全体の$\frac{1}{3}$ほど焼成時の黒変がある。これらの土器は中葉後葉のものである。　（沢）

なお、Q－22dトレンチの第1号遺構付近の砂層では土製紡錘車1点が出土している。（D5 Fig.5・47）。

円形に整形後、周縁をなでる。穿孔は片面からなされ、他面の中央部はもりあがる。胎土に砂粒を含み、焼成良好、灰褐色。　（横山）

(2)　木製品・木材（Fig.5・28～5・35、PL.LXXXVI～LXXXVIII）

第３区の旧河砂層・溝・遺構では若干の木器の他に多量の杭・流木が出土した。その大部分は弥生時代中期後半のものである。出土したものすべてをとりあげたわけではないが、300点あまりについて樹種を鑑定した（Tab.5・7）。

農具（Fig.5・28、PL.LXXXVI）

農具は３点出土した。

W3288はＱ－22ｄトレンチ北側の黒色粘質土層沿いの旧河砂層中に流木とともに埋没していた。第１号遺構の近くである。三又鍬で、刃は中央の１本だけ残る。腐蝕がはなはだしく、加工痕は明瞭でない。厚さ約２cmの板材から作ったとみられる。全長約56.5cm、刃部長34～35cmを計る。頭頂部から 9.5cmにある柄孔は長方形で、６×４cm程度と推定される。柄をさしこむ角度は柄孔の破損のため明らかでない。柄孔付近の幅は８cmほどと推定され、柄孔と側縁の間は約２cmである。唯一残存する中央の刃の断面は1.7×2.0cmの方形で、両側の刃も同様に細かったろう。刃部先端は使用によりある程度磨滅しているようだが、確認できない。左右刃部の幅は15cm未満と推定される。樹種はカシ。

W3289は第34号溝内の第９号遺溝で出土した三又鍬、あるいは鋤である。中央の刃を欠く。残長50.5cm、両側刃部間の幅16.5cm。刃部長34～35cm。刃部の外側縁はていねいに削られ、明瞭なかどをなす。内側縁は両面から斜めに削り、断面三角形となる。この三角形をなす面は、一面はひろく、他面はせまい。先端部は使用によるらしく丸くなっている。刃部の厚さは1.8～～ 1.5cm、幅は５～２cmで、先端部が細くなる。頭部は少ししか残っておらず、両面・側縁とも風化が甚しい。柄孔の有無は判断できない。頭頂部はかなりせまく、現存部での推定幅は約７cmである。柄孔のある鍬でなく、別に作った柄を刃に平行につける鋤の可能性が強い。樹種はカシ。

W3018は0-19ｆトレンチ西壁の第１号溝内埋土中で出土した。頭部で二つに折れている。刃部はごくわずかしか残っていない。両面・側面に加工痕が明瞭に残っている。折損部で接合しないので、正確な残存長は出せないが、46cm前後であろう。幅の広い刃をもつ二又鍬とみられる。刃部残長11cm・幅5.5～4.5cm・厚さ 1.2cm。刃部・頭部とも側縁は頭部側からていねいに削られ、明瞭な角をなす。刃部内側縁のつけ根部分は両面から斜めに削られているが、その下は一面からそぎ落したようになり三角形をなす。頭部残長は35cm前後である。頭部の側縁はほぼまっすぐで、刃近くでやや外方へひろがり、厚さも刃部近くで急に薄くなる。頭部推定長37cm・推定幅11cm・厚さ２cm。頂部から39cmのところに長方形の柄孔がある。柄孔の大きさは９×５cmほどと推定される。柄孔の側縁はていねいな削りで、しっかりした平坦面をつくる。柄の挿入角度は40°～43°である。頭頂部は三角形に突出するとみられる。表裏両面に細い加工痕がある。加工痕から、この農具の最終仕上げに用いられた削り具は幅２cm前後と推定される。加工の方向は頭頂部を上として、上から下あるいは斜め上から斜め下である。樹種はカシ。

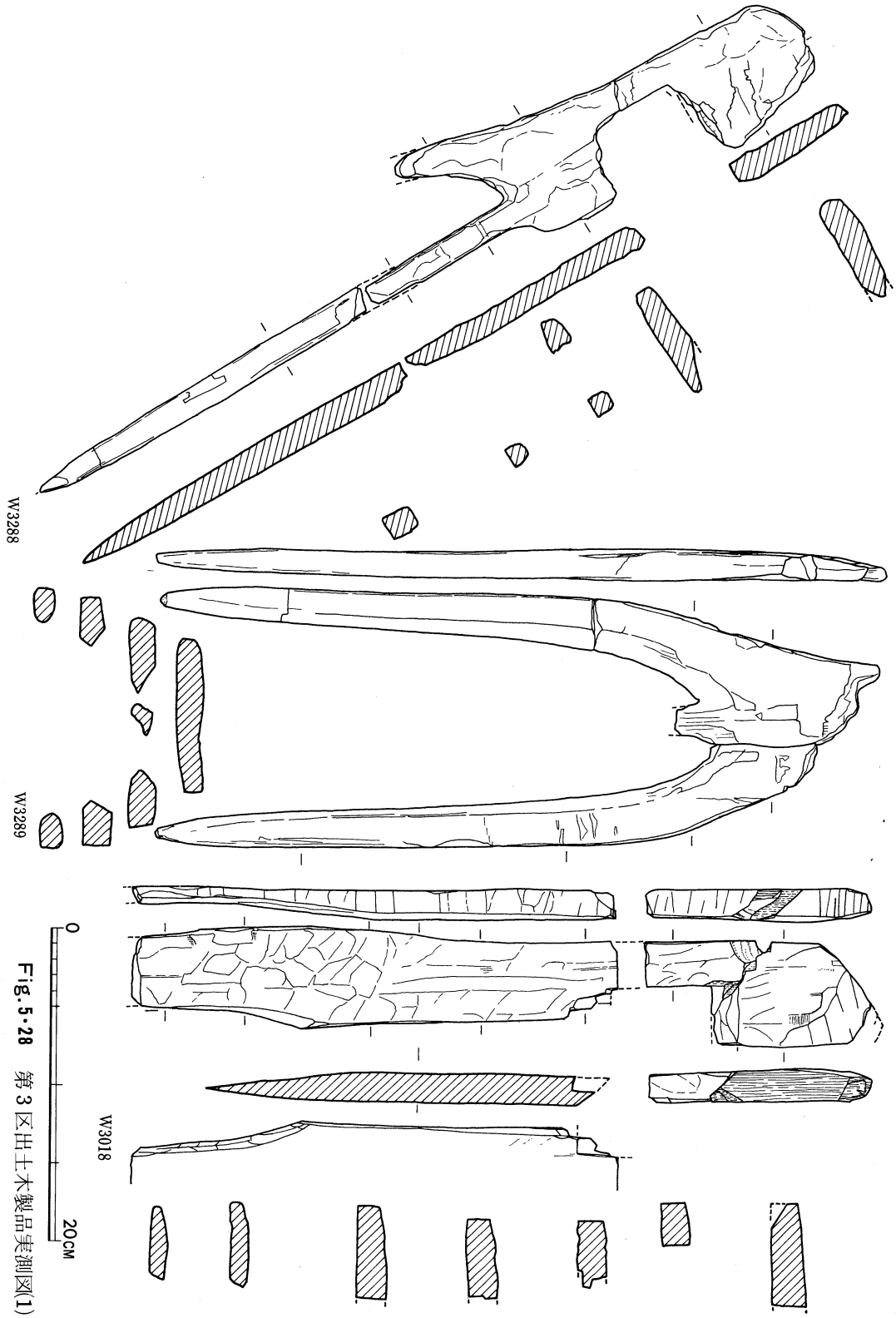


Fig.5・28　第3区出土木製品実測図(1)

用途不明木製品（Fig.5･29、PL.LXXXVI、LXXXVII）

W3171はＰ－23ａトレンチ第34号溝内出土。直径 3.5～４cmの細い木を半割し、その一端にＶ字形の抉り込みを入れる。断面はかまぼこ形で、ふくらむ面には刃痕が２か所あるが、他の加工痕は風化により失われている。

反対側の平坦面も半割するときの裂面のままとみられる。Ｖ字形の抉り込みは頂部の両面から刃物を打ち込んで截ち伐って作り、両側縁も多少削られている。抉り込み両側に突出した部分の断面は五角形をなす。また、片方の突出部の上面は抉り込みを入れたあと平坦に削られている。抉り込みの反対端は斜めにそぎおとしている。長さ19cm・幅 3.8cm・厚さ２cm。用途と材質は不明。

W3218は第１号遺構近くの砂層で出土した。長さ51cm・幅13.5cm・厚さ 3.5cmの長方形板材に２つの長方形孔をあけている。長辺のひとつは中央に１cmほど凸出した部分があり、凸出部の幅は９cmほどとみられる。両短辺は木目に直交して伐ったためか、凸凹がある。孔は7～7.5cm× 4.5cmほどで、互に８cmほど離れている。右側の孔は右端から10～10.5cmはなれ、凸出部のある長辺から５cmほどはなれている。左側の孔は左端から17cmほどはなれ、突出部のある長辺から６cmほどはなれている。したがって孔は突出部のある長辺の反対側と右端に片寄っている。加工痕はよく残っていないが、両面ともたち割っただけの面に、ごく簡単な加工を施したとみられる。孔もきわめて粗雑にあけられている。用途不明。樹種カキノキ。

W3216も第１号遺構近くで出土した。半折しているらしい。最大幅17cm・厚さ13cmほどの丸太材を若干ととのえ、片側をやや凹入させて安定をよくし、一端を斜めに削りおとし（加工痕は残っていない）、中央に孔をあける。この孔の最終的仕上げは両面からノミ状の工具をほぼ垂直に押し下げて削っている。削り痕は年輪に直角に力を加えるためか、ひどく乱雑で、なめらかさはまったくない。相当苦心して削ったものと思われる。孔の断面は外側がひろく、内部がせまくなっている。内部のせまい部分での幅は８cmほどである。長さは折損のため不明。孔の最終仕上げの工具は幅２cm前後であろう。この孔の断面は年輪がよく残っている。孔部分と一端を斜めに削った部分以外の加工痕は明瞭でない。先端部に一部、焼けて黒く炭化した部分がある。現存長36.5cm・幅17cm・厚さ13cm。用途不明。樹種はチシャノキ（？）である。

杭（Fig.5･30～5･35、PL.LXXXVI～LXXXVIII）

出土した杭の総数は莫大な量に達するが、取りあげたのはその一部である。杭が打ち込まれた砂層・粘土層下位は固くしまり、上部しかとりあげられなかった杭もある。調査中に折れ、湧水に浮いて出土位置がわからなくなったものもある。杭材のつくり方については Fig.4･13の模式図参照のこと。

Ｐ－20ａトレンチ第２号遺構出土の杭（Fig.5･30、5･31、PL.LXXXVI～LXXXVIII）

第１杭列のW3080はD_4の方法で作った材を用いる。先端部は両側縁（b_1・b_2面）のみを削る。ａ面は木皮がはがれただけで、ｃ面は裂いたまま。残長31.8cm・幅 6.6cm・厚さ４cm。樹種ク

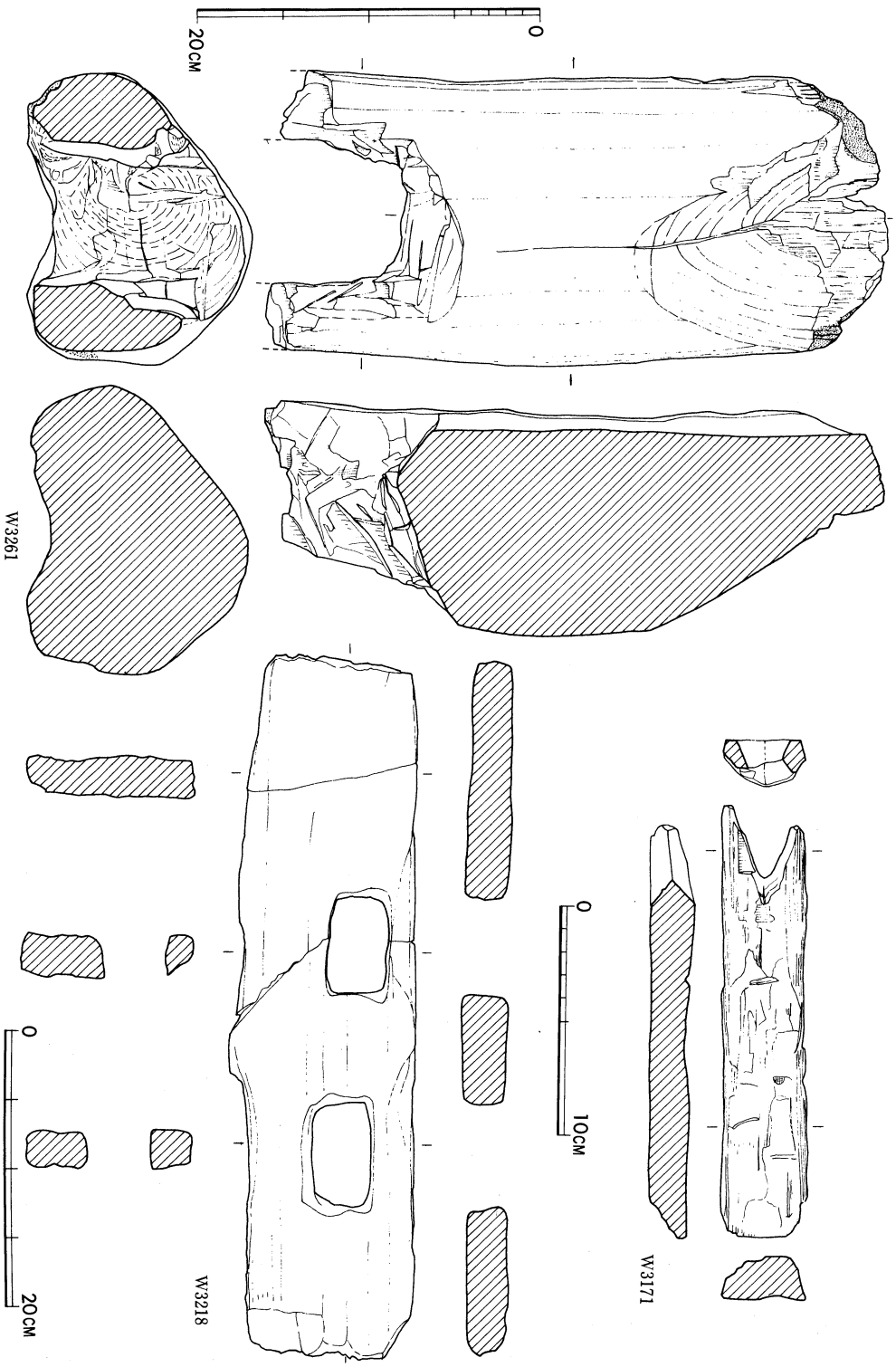


Fig.5・29　第3区出土木製品実測図(2)

り。

第2杭列のW3087はD_2の方法で得た材を用いる。先端部はa面とb_1面とのなす稜、b_2面とc面のなす稜の部分を削ってとがらせる。他は裂面・木皮がはげただけの面である。裂角は約26°、原木の直径32cm前後と推定される。残長 107cm・幅 8.5cm・厚さ 6.4cm。樹種はシイ。

W3088はEの方法で得た材を用いる。先端部はD_1面を大きく削って弧状にし、d_2とb_1面とをほんの少し削りとがらす。上部はd_2面を削ってととのえたらしいが、加工痕はよく残っていない。残長64.6cm・幅 9.2cm・厚さ 3.4cm。樹種はシイ。

第3杭列のW3095はD_1の方法で作った材を用いる。先端の削りは、b_1・b_2面のなす稜を長く削り、削り面幅は5～ 2.5cmである。その他b_1・b_2とa面の先端部を削る。a面には木皮がよく残っている。頂部は原状をとどめ、截ち伐ったままと思われる。原材は直径24cmほど、裂角は35°前後。残長83cm・幅11.6cm・厚さ7cm。樹種はシイ。

W3096はEの方法で得た厚い材を用いる。先端部はb_2・d_1面を削りとがらせる。b_1面にも少し削った痕がみえる。頂部は全周にV字形の抉りが施される。その加工痕は杭先端側から斜めに利器を打ち込み、剝ぎとるようにしてV字形の溝をつくる。杭頂部側からの利器の打ち込みは少ない。この杭は丸太材の南端部に打たれていて、このV字形溝に紐をかけて丸太材を固定したのかもしれない。残長63.2cm・幅14cm・厚さ 6.2cm。樹種はシイ。

第4杭列のW3101はD_2の方法で作った材を用い、先端部はa面とb_2面とc面とを削ってとがらせる。a面は木皮が剝げただけである。残長32.8cm・幅 8.8cm・厚さ 5.5cm。原木は直径25cmくらい。裂角は37°くらいか。樹種はシイ。

第4杭列のW3109は丸木杭である。先端部は腐蝕がすすんでいて、加工痕は不明瞭である。頂部には大きな削り面が2面あり、断面の片側が三角形になる。フシの部分はていねいに削ってある。残長97.3cm・直径 9.8～10cm。樹種不詳。

W3112はD_2の方法で材を作るが、c面は幅がきわめてせまい。先端部は全面を削っている。原木は直径約19cmで、裂角は55°・残長79.9cm・幅7.6cm・厚さ 6.9cm・樹種はクリ。

W3113は丸木杭で、先端は断面が四角になるように削る。頂部側に木皮が残る。残長91.2cm・直径 4.1cm。樹種はアワブキ。

第6杭列のW3115はD_5の方法で材を作る。先端部はb_1・b_2・c各面を斜めに削り落し、d面は裂面のまま残し、断面五角形に仕上げる。その上はb_1面に先端から頂部方向へ利器を動かして細い加工を加え、平坦にしている。この加工面は頂部側から先端部側へ施している。残長43.9cm・幅 5.8cm・厚さ 4.8cm。樹種はシイ。

W3121は第6杭列に横にたてられていた板材である。表面は板材を作るときの裂面のままであるが、側面のひとつ（図の左側側面）の一部に軽い削り痕がある。出土したあと下端が折れて失なわれた。やや彎曲している。

以上の第2号遺構出土杭は全部で41本をとりあげた。そのうち丸木杭は15本で、他は原木をさまざまにたち割った材から作った杭である。丸木杭の樹種はユズリハ4・アワブキ3・タブ

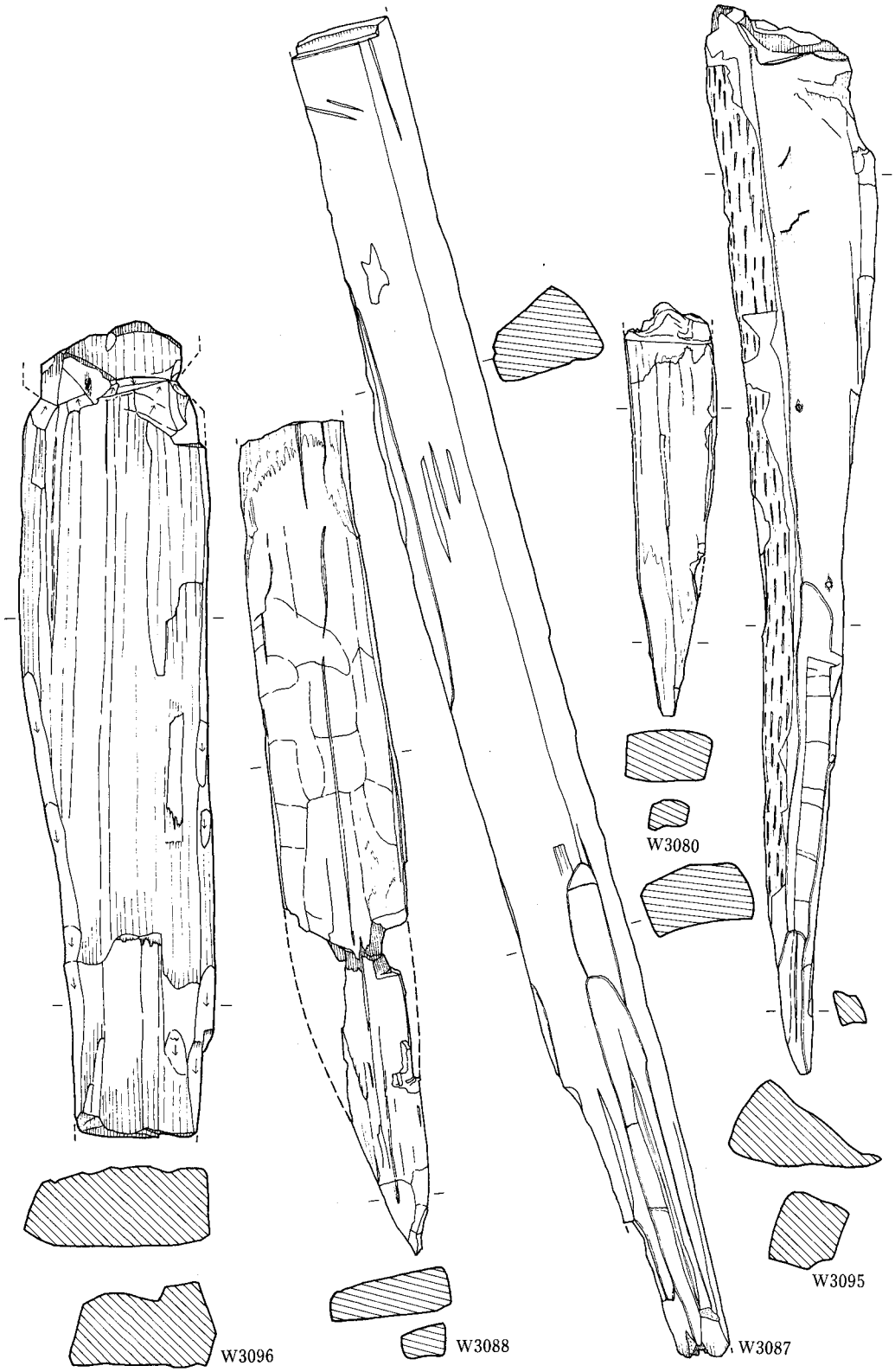


Fig.5・30　第3区出土木製品実測図(3)（P－20aトレンチ第2号遺構の杭①）（縮尺はFig.5・31と同じ）

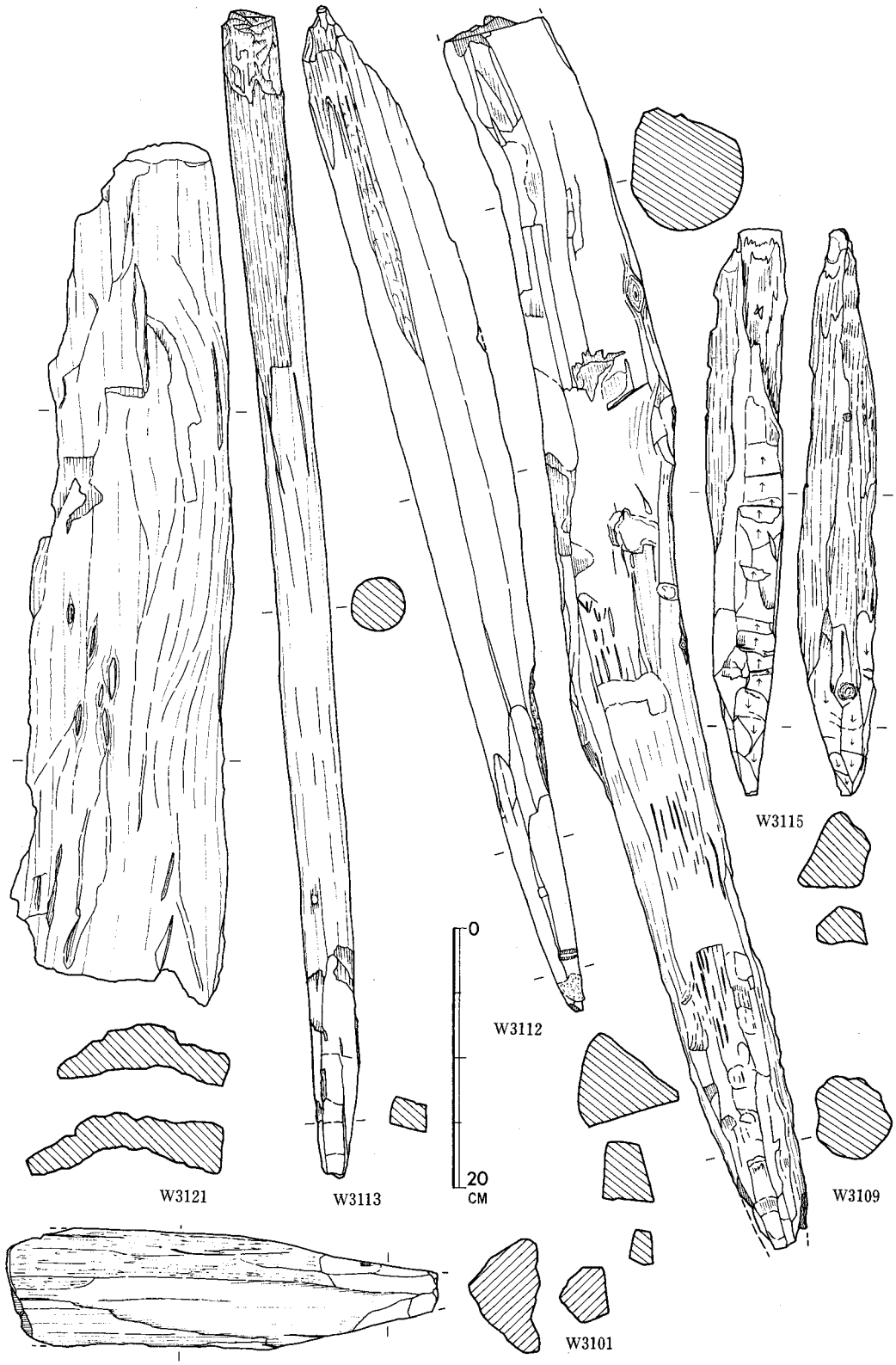


Fig.5・31　第３区出土木製品実測図(4)（Ｐ－20ａトレンチ第２号遺構の杭②）

ノキとカシが各2、シイ・モチノキ・カキノキ各1である。それ以外の杭の樹種はシイ15・クリ8・アワブキ2・ユズリハ1である。クリは丸木杭には用いられない。丸木杭・角杭を通じてシイがもっとも多い。杭の残長のもっとも大きいのは丸木杭では、W3109の97.3cm、角杭はW3087の 107cmである。

P－20bトレンチの杭は折れて浮きあがった杭（W3122～3128）以外とりあげていない。東側の旧河川砂層出土の流木中には板状のものや丸木杭片とみられるものも含まれている。

P－20b・P－20c両トレンチ間で出土した木のうち、とりあげたのは4点である。W3135は第7号遺構の丸木杭である。W3138は第7号遺構の横木に用いられ、長さ78cm・幅と厚さが約10cmの角材である。樹種はシイ。

W3136と37は第8号遺構の横木に用いられた角材である。これらの横木に用いられた角材は、原木を裂いて作り、それ以上の加工痕はない。

P－20cトレンチの第19号溝と第6号遺構出土杭（W3139～55・57～68）（Fig.5・32～5・34、PL.LXXXVI～LXXXVIII）

W3139はD_2の方法で材を作り、先端部のc・b_2・aの各面を削ってとがらせる。b_2面の上部の中央に大きな削り面がある。残長66.5cm・幅13.5cm・厚さ 4.2cm。樹種はシイ。

W3140は直径13cmほどの丸木の片側を幅8cmほど裂いて除いた材を用いる。したがって材をとる方法はBに近い。先端は削って断面7角になるが、一面は裂いた面のままである。削った部分は長さ45cmほどになる。残長89.3cm・幅12.2cm・厚さ10cm。樹種はクリ。

W3141はD_1の方法で材を作り、a面とb_2面のなす稜の部分とa・b_1・b_2各面を削ってとがらせる。原木の直径は推定35cm以上。残存長84cm・幅16.1cm・厚さ10.7cm。樹種はスギ。

W3143はD_1もしくはD_3の方法で材を作り、b_2面とa（もしくはd）面のなす稜部分を斜めに裂いて除いて断面偏四角形にととのえる。そのあとa（もしくはd）面とb_2・b_1両面のなす稜を削って断面を五角形にする。そのあとb_1面とa（もしくはd）面部分をさらに削ってとがらせる。またb_2面の中央部も3回ほど削る。残長64.3cm・幅 9.1cm・厚さ 4.9cm。樹種はシイ。

W3144は丸木杭で、先端は四角に削り、削り面相互の間に木皮が残る。上部もほぼ完全に木皮が残る。残長65.2cm・直径5cm。樹種はカシ。

W3145も丸木杭である。木皮は失われている。先端部の加工はきれいでない。刃物を何回も打ち込んで、食い込んだ部分がいくつもある（図の→部分）。残長45.9cm・直径 8.1cm。樹種未鑑定。

W3147はD_2の方法で作った材を用いる。a面に木皮は残らない。先端部はc面を長さ33cmにわたって削り、削り面3面、年輪がきれいに出ている。b_1・b_2面にも幅のせまい削り面がある。a面は残る。原木直径は24～25cmか。裂角約40°。残長94.1cm・幅9.3cm・厚さ7cm。樹種はスギ。

W3149はD_3の方法で材を作り、先端部は断面六角形に削る。原木は直径19～20cm、裂角は40°ほどである。残長82.5cm・幅13.1cm・厚さ8.3cm。樹種はシイ。

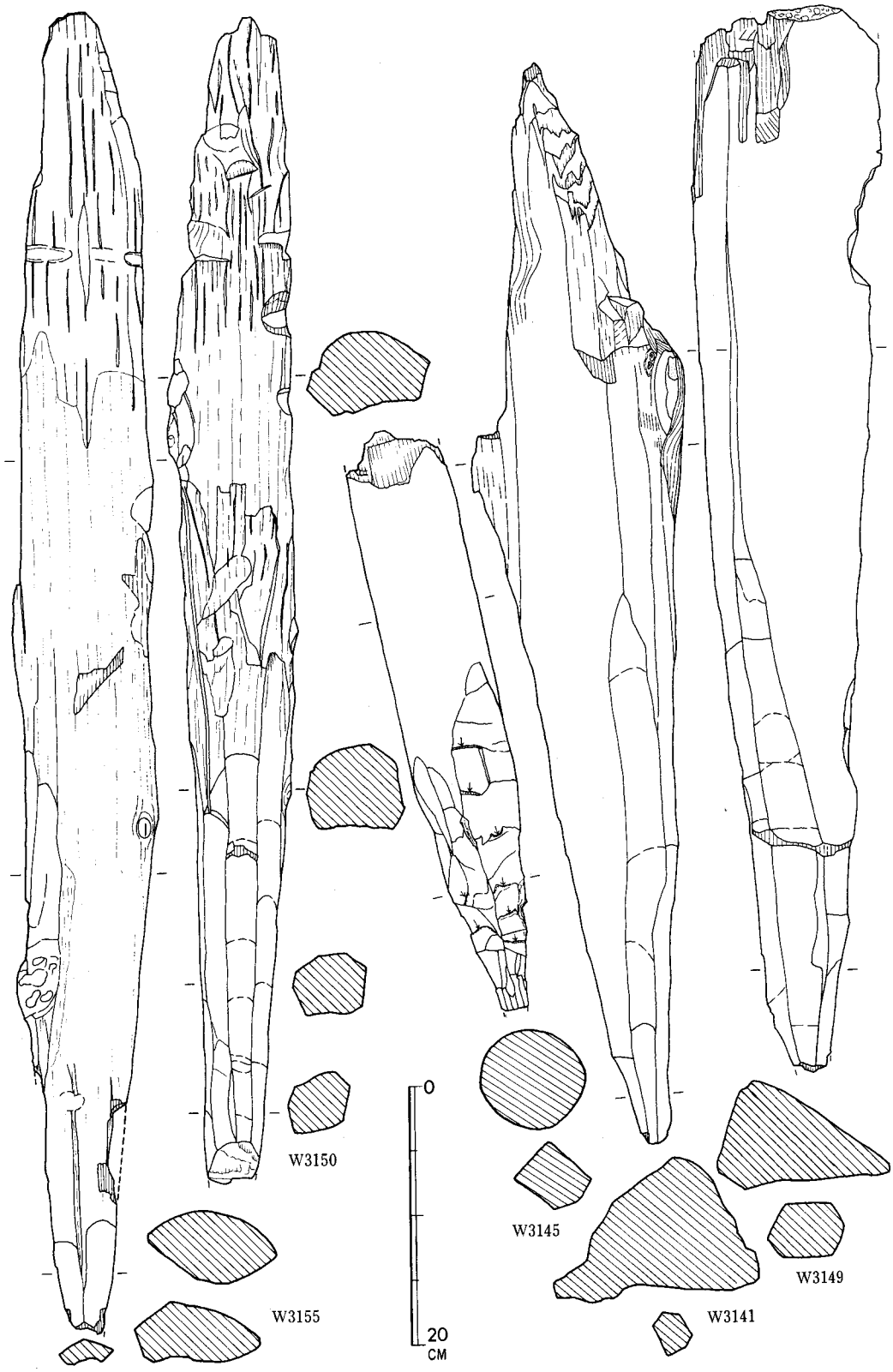


Fig.5・32　第3区出土木製品実測図(3)（P－20cトレンチ第19号溝・第6号遺構の杭①）

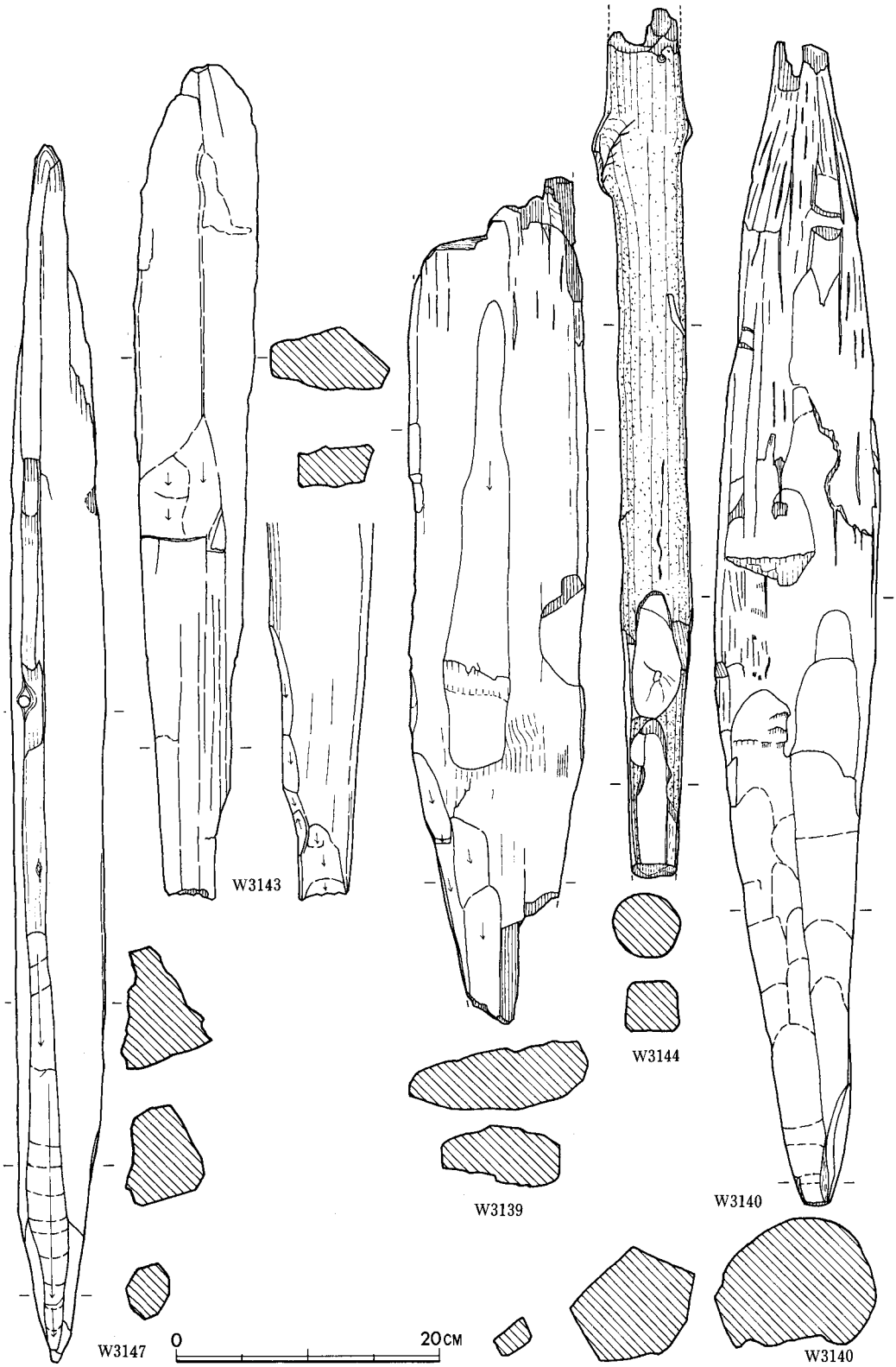


Fig.5・33　第3区出土木製品実測図(6)（P－20cトレンチ第19号溝・第6号遺構の杭②）

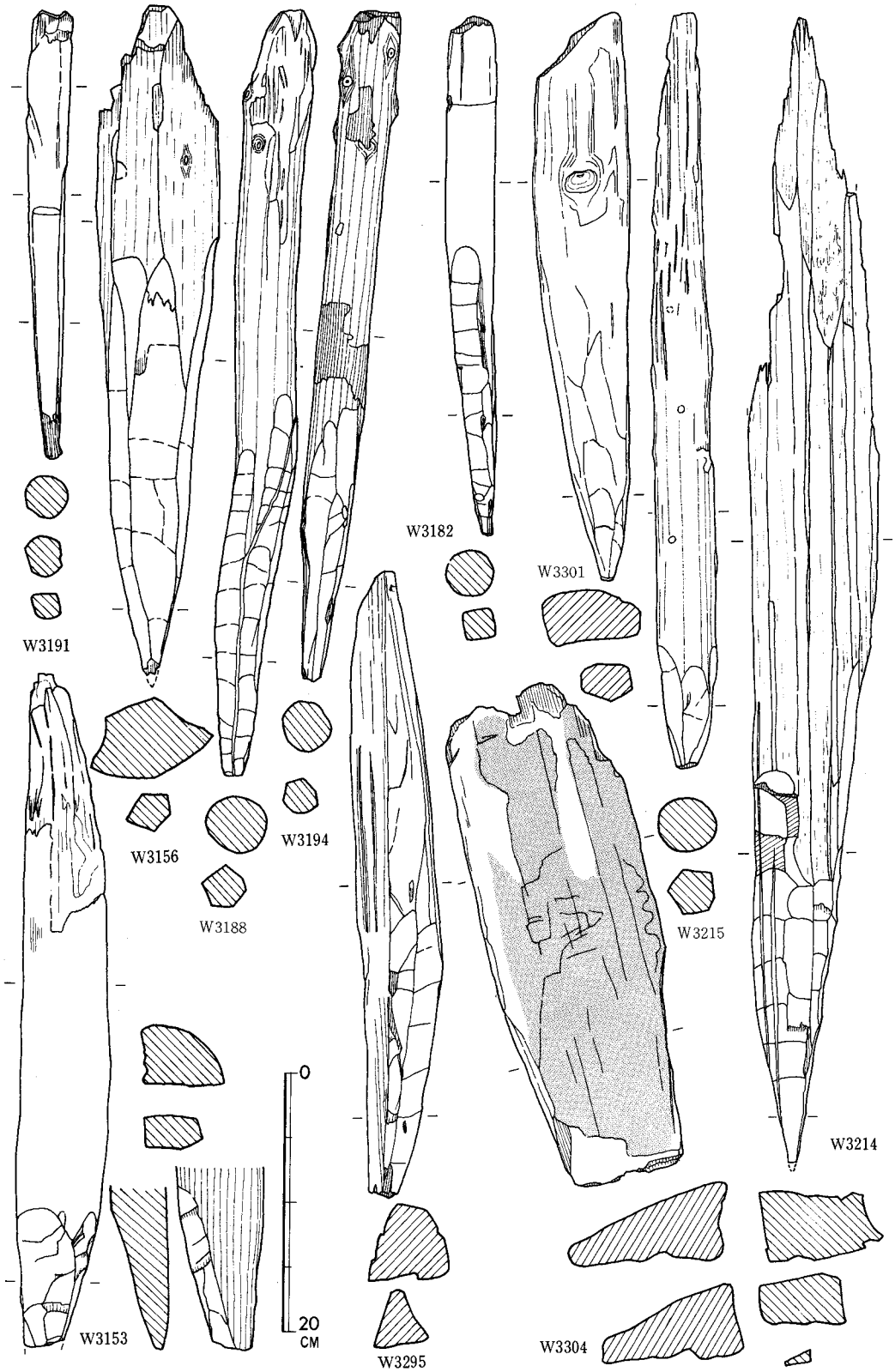


Fig.5・34　第３区出土木製品実測図(7)（Ｐ－20ｃトレンチ第19号溝・第６号遺構の杭①、Ｑ－20ｄ・Ｑ－19ｂトレンチ第21号溝東側杭、Ｑ－22ｄトレンチ第34号溝・第９号遺構の杭①）

W3150はCの方法で作った材を用い、先端はかなり長く削ってとがらせる。原木の直径は11～12cmと推定される。残長90.4cm・幅9.5cm・厚さ6.3cm。樹種はクリ。

W3153はFの方法で得た材を用いる。先端部の加工は粗い。残長52cm・幅6.8cm・厚さ4.3cm。樹種はクリ。

W3155は、しいていえばBの方法で材を作り、それのb面の両側をさらに斜めに裂いた材を用いる。あるいはD_1の方法で裂いた際にうまくいかず扁平になったものか。原木の直径は12.5cmほどと推定される。先端部の加工はa面にだけあり、削り面2面が残る。先端部のやや上の左側の削り面はフシの部分を平坦にするためのものであろう。残長102.4cm・幅10cm・厚さ5.7cm。樹種はクリ。

W3156はD_4の方法で材を作る。先端部の加工はc・d_1・d_2の面に施し、長さ30数cmになる。a面の加工は先端部のごくわずかの部分に施す。先端部断面は五角形である。原木の直径は14～15cm。裂角は約75°。残長52.1cm・幅 9.3cm・厚さ 6.2cm。樹種はスギ。これは第23号溝横に打たれていた。

P－20cトレンチ南壁際の第19号溝に打たれていた2本の丸木杭（W3158・3161）は、^{14}C測定試料とした。樹種不明。それぞれ2110±100B.P.(Gak.4,549)・1920±80B.P.(Gak.4,550)の値が出ている（Tab.1・1)。

これらの杭のうち丸木杭は少なく、それ以外の杭が多い。とりあげたものの中では丸木杭9本・割杭等18本である。樹種はシイ・スギが両者に共通し、カシ・ユズリハ各1は丸木杭、クリ7は割杭等にのみ用いられる。両者あわせてシイ10本・クリ7本が多い。

Q－20d・Q－19a・Q－19bトレンチの第21号溝東側の杭（W3180～99・3210～17、Fig. 5・34、PL.LXXXVI～LXXXVII)

W3214はD_2の方法で作った材を用いる。c面は年輪にそって割れ、弧状に凹入している。先端部加工は、まず大まかに削ってから、細かく削り、最初の削り面が残っている（図の斜線を施した削り面)。また利器が食い込んだ痕跡も3か所残る。a面に施される削り面は先端部の20cmほどである。他の削り面はかなり上から始まる。残長89.1cm・幅 9.6cm・厚さ 5.4cm。樹種はスギ。

W3215は直径 4.5cmの丸木杭で、先端部を断面六角形になるように削る。残長58.4cm。樹種ムクノキ。W3182も直径 3.7cmの丸木杭。先端部を長さ20数cmにわたり削り、断面は四角になる。残長40.4cmで、樹種はヤナギ。

W3188も直径 4.3cmの丸木杭。先端部はていねいな削り加工で、断面六角形に仕上げる。加工は先端側の30cmあまりにわたり施される。残長60cm。樹種はユズリハ。W3191は直径 3.2cmの細い丸木杭。削り面は鋭い利器で一気に長く施されている。先端部の3面は削られ、一面は原木の面のままである。残長34.9cm。樹種はタブノキらしい。W3194も丸木杭。先端に細い加工で4つの削り面をつくり、一面だけはもとの面を残す。木皮が部分的に残る。残長52.7cm・直径4cm。樹種はゴンズイ。

第21号溝東側には80数本の杭が打ち込まれていたが、とりあげたのは上記のものを含め28本である。そのうち20本は丸木杭で、残り８本が割杭などである。前者の樹種は12種類に及び、カシ３本がもっとも多い樹種である。割杭などはクリ６の他はシイ・スギ各１にすぎない。すでにのべたように、Ｑ－20ｄトレンチの第21号溝東壁際に割杭・角杭が多く、それ以外ではほとんどすべてが丸木杭である。

Ｑ－20ａトレンチ第26号溝内の杭（W3200～07、Fig.5･35）

８本出土し、丸木杭４本、割・角杭が３本、不明１本である。樹種はシイ４、ユズリハ・ゴンズイ・クスノキ・クリ各１である。

W3201はD_1の方法で材を作り、B_1・B_2両面のなす稜部分を削り、またb_1面のａ面側をも削る。ａ面は先端部分のみ削り、b_2面は裂面のまま残す。原木の推定直径20cm、裂角43°。残存長51.5cm・幅25cm・厚さ 5.0cm。樹種はシイ。W3203は直径８cm・残存長65.2cmの丸木杭。先端の削り痕は全長50数cmにおよぶ。樹種はシイ。W3204はD_3の方法で得た材だが、ｄ面かb_2面に対しほぼ直角になり、またb_1・ｄ面のなす稜も削り落している。加工は先端部に施される。残長61.4cm・幅 5.4cm・厚さ 4.2cm。樹種はクスノキ。

第１号遺構に用いられた材（W3219～38、Fig.5 ・35）

第１号遺構の２本の丸太材（W3220・21）は、枝を切り落している。両端を截ち伐ったはずだが、その痕跡は明瞭でない。樹種は両方ともムクノキである。これらの丸太を固定する杭は大部分が丸木杭で、角杭・割杭はきわめて少ない。樹種は角杭・割杭はクリとシイで、丸木杭はシイ４・ユズリハ？３・カシ１・リョウブ２・クヌギ２である。W3232は残長77.3cm・直径8.4cmで、先端部にのみ加工を施す。丸木杭は直径が５～９cmで、太い。

第１号遺構周囲で出土した流木中には、杭の折れたとみられるものがある（W3239・40･42･45・48～51)。またＱ－22ｄトレンチ北側の第１号遺構東南側砂層中出土の流木の中にも杭がある（W3307～11)。これらにも丸木杭が多い。

Ｑ－22ｄトレンチ第９号遺構・第34号溝・第35号溝出土杭(W3290～3306、Fig.5･34、5･35)

W3294は、第35号溝と交わる第34号溝際におかれた横木で、直径10cmあまりの丸太材である。一端は腐蝕して截ち伐り痕は明らかでない。他端は斜めに伐り、削った痕が残る。本体部分に２か所に幅６cm・長さ６cmほどの削り痕があり、そのうちひとつは少し焼けている。また枝を切り落した痕もみえる。長さ61.3cm。樹種はカシ。

W3295はD_5の方法で得た材で作った杭である。ｃ面とb_1面とを削ってとがらせる。残長48.5cm・幅 6.3cm・厚さ６cm。樹種はシイ。第９号遺構出土。

W3300はD_1の方法で得た材を用いた杭である。先端部の加工はａ面とb_1面のつくる稜の部分に施される。また先端から約25cm上のａ面左側に細い削り面がある。この周囲はあとではがれていて、この削り面が先端にまでつづいていたかどうかははっきりしない。原木の直径は約20

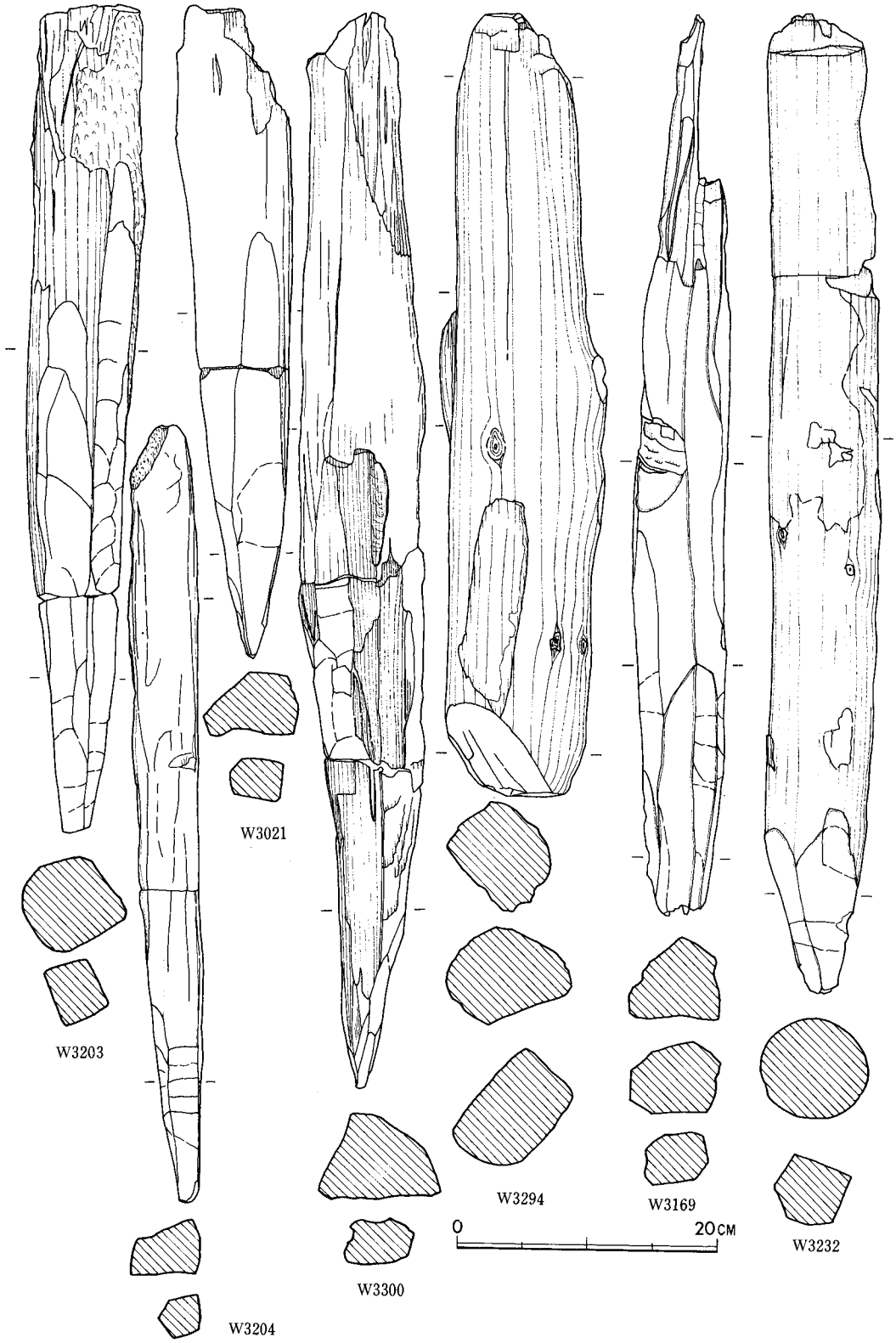


Fig.5・35　第3区出土木製品(8)（Q－22dトレンチ第34号溝・第9号遺構の杭②、P－23aトレンチ第41号溝の杭、Q－20aトレンチ第26号溝の杭、Q－21トレンチ第1号遺構の杭）

cmと推定される。裂角は約63°。残長84cm・幅 9.4cm・厚さ 6.7cm。樹種はクリ。

W3301はD_5の方法で作った材の側縁（b_1・b_2面）に加工を施したものである。ｃ・ｄ面も削ったらしいが、不明瞭である。残長 441cm・幅 7.5cm・厚さ 4.3cm。樹種はクリ。以上２点は第34号溝に打たれていた。

W3304は第35号溝際に打たれた杭である。D_4の方法で材を作り、その両側縁（b_1・b_2面）のみを削る。ａ面側は広く焼けている。残長38.6cm・幅13.4cm・厚さ 5.8cm。樹種はシイ。

第９号遺構の杭は、丸木杭が多く、角杭は少ない。樹種はアワブキ・クスノキ・シイ・タブノキである。第34号溝と第35号溝の溝際に打たれた杭の丸木杭と角杭・割杭との数量は前者がやはり多い。ただとりあげたものは角杭・割杭が多いので、樹種もシイ・クリ以外のものは明らかでない。

Ｐ－23ａトレンチ第41号溝際の杭（W3169～70・72～79、Fig.5・35）

第41号溝の東壁に打ち込まれていた杭は13本である。うち10本をとりあげた。丸木杭６本に割杭・板状杭４本である。W3169は丸木の全周を割り裂いて除いた材を用いる。先端部の加工は長く、全周に及ぶ。先端加工部の上に、利器を打ち込んで剝した痕がある。残長70.6cm・幅68cm。樹種はクリ。

その他の丸木杭はクリ・カキノキ・シイ・アワブキで作られ、割杭・板状杭はシイ・カシ製である。

以下に、図示しなかったものについて簡単にのべる。

Ｐ－19ａトレンチの第３号遺構

この遺構の丸太材はとりあげていない。丸太材を固定する杭は約15本ある。そのうち丸木杭は４本である（W3078・41・42・49)。直径６～８cmで太い。他は原木をさまざまに割った角杭・板状杭・割杭である。いずれも樹種はクリとシイである。この遺構付近の砂層では多くの流木が出土したが、その中には丸木杭・割杭片とみられるものもまじっている。流木の樹種はカシ・タブノキ・ユズリハ・ヤナギ・シイ・エノキ・チシャノキ・カキノキなどで、シイ・ヤナギが多い。

第１号溝と第５号遺構（W3018・58～63）

ほとんどとりあげていない。第５号遺構の横木に用いられていたのはクリを粗く割った材で、付近から出土した加工木はクリとカシ？である。

第２号溝（W3010～17）

１号溝との境付近に打ち込まれた杭はいずれも丸木杭（カシ・アワブキ・シイ）である。

その他の杭・流木についてはTab.5・7を参照されたい。　（後藤）

(3) 石器（Fig.5・33）

遺構出土の石器は以下のとおりである。

S72はP－20ｃトレンチの第23号溝内出土の太形蛤刃石斧（刃部欠矢）。体部の刃付近ではわずかに整形時の剝離痕を残し、全体に研磨がみられる。頭部の剝離は使用によるものであろう。現重量1190ｇ。玄武岩製で、今山産である。

S５は気泡の多い黒曜石製で、表裏とも入念に二次加工を加え、基部には抉りが入っている。凹基無茎式鏃。Q－22ｄトレンチ北側の、第１号遺構付近砂層出土。

S４はQ－20ｄトレンチの第28号溝内埋土出土。剝落がはなはだしく全体を知りえないが、石庖丁背部破片と考えられる。

S14は砂岩製砥石。砥面は一面だが、くぼみはない。O－19ｂトレンチの旧河砂層出土。

旧河砂層からは黒曜石製石核１（Q－22ｄトレンチ）、黒曜石剝片５（O－19ａ・P－19ａ・Q－22ｄトレンチ）、サヌカイト剝片２（P－19ａ・Q－22ｄトレンチ）、黒曜石削片１（O－19ｂトレンチ）、サヌカイト削片２（O－19ａトレンチ）が出土し、P－19ａトレンチの第１号溝からは黒曜石削片１が出ている。

この他に溝内から小円礫が２点出土している。この２点は人為的な埋没の可能性もあるので、ここにふれておく。

S３の円礫は先端部に打痕があり、投弾として使用されたのかもしれない。重さ50ｇ。O－19ｂトレンチ内の旧河砂層出土。S２の小円礫は、表面が研磨？されており、周縁に打痕がみられる。P－19ｂトレンチ内の第４号溝出土。　（横山・山口）

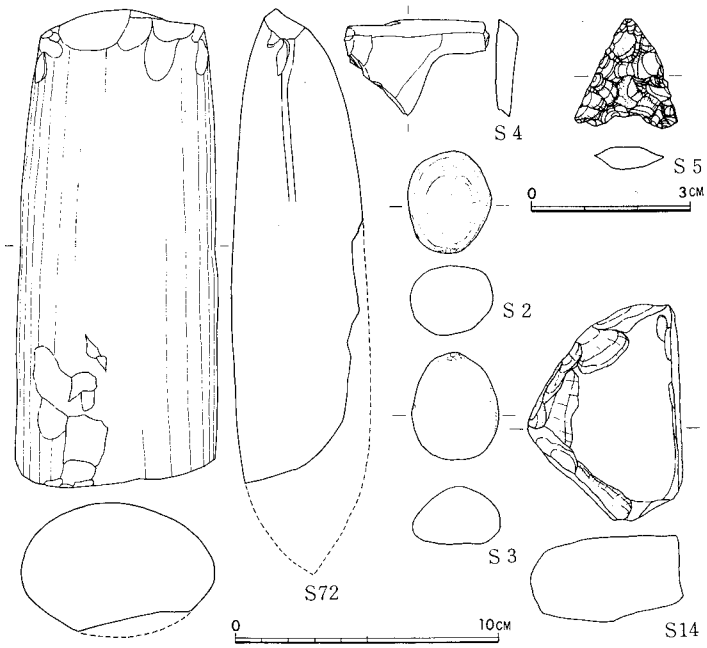


Fig.5・36　第３区遺構出土石器実測図

2.　その他の遺物

弥生時代遺構のある黒色粘質土層より上の耕土層までの各層と、旧河川砂層の旧河岸辺から離れた部分およびその上の耕土層までの各層からは、時代を異にする遺物が混在して出土した。これらは包含層出土遺物として一括して以下にのべる。また黒色粘質土層内出土の縄文式土器についても以下にのべる。

(1)　縄文式土器と石器（Fig. 5・37～5・41、PL. LXXXIV、Tab. 5・1）

弥生時代遺構の掘り込まれた黒色粘質土層内から縄文式土器片と石器が出土している（本章第２節４）。以下に個別的にのべる。

土　器

Ｊ１は山形押型文を施した尖底の深鉢である。外面は口縁端から約３cm下まで無文で放置し、それ以下に横位の山形文を施す。底部には木の葉を押しつけたような痕が残る。内面は口縁下に棒状の工具で深い縦の条痕をつけ、それ以下約４cm程は横位の山形文を施す。施文原体は内面の施文幅から４cm程度の長さであろう。内面口縁下の縦の条痕は、施文原体によって施されたにしては細く深すぎるため、他の工具を考えるべきである。製作方法は破片の割れ方より、巻き上げと考えられる。胎土には砂を含み、焼成はあまり良くない。暗褐色を呈するが、胴部中央より下は褐色。

Ｊ２～11はこの土器と同一個体と考えられるが、内面には施文されておらず、口縁部から約４cmの部位より下のものであろう。いずれもＯ－19ｃトレンチ黒色粘質土層出土。

Ｊ12は無文の大形の深鉢で砲弾形を呈する。外面には煤の付着が認められ、底部付近にはＪ１と同様に木の葉を押しつけた様な痕が残る。内面は横位の擦痕がみられる。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。暗褐色を呈する。Ｏ－19ｃトレンチ黒色粘質土層出土。

Ｊ13は深鉢の口縁部で、口縁下外面に約１cmの幅で横位に山形押型文を施す。胎土に石英粒や砂を含み、焼成は良い。暗褐色を呈する。Ｐ－19ａトレンチ第10号溝内出土。

Ｊ14は小形の深鉢と思われるが、内面口縁下のいわゆる原体条痕以外には破片中には文様はみられない。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良くない。暗褐色、Ｏ－19ｄトレンチ黒色粘質土層出土。

Ｊ16は楕円押型文を施した深鉢の胴部である。楕円の長径は約４㎜、幅は約２㎜。胎土は若干の砂を含み、焼成は良い。淡褐色を呈する。Ｏ－19ｃトレンチ黒色粘質土層出土。

Ｊ17は楕円押型文を施した深鉢の口縁部である。器面のあれが甚しいためにはっきりしないが、外面は口縁下約１cm程を無文で放置し、それ以下に長径約４㎜、幅約２㎜の楕円押型文を施す。内面も口縁下約２cm程を無文に残し、それ以下約２cm程に外面とは異なる原体でやはり楕円押型文を配している。胎土に石英粒砂を含み、焼成はあまり良くない。暗褐色を呈する。Ｐ－20ｃトレンチ第19号溝内出土。

Ｊ18～23は、おそらく同一個体と考えられるが接合はしなかった。Ｊ18は口縁部で、外面は

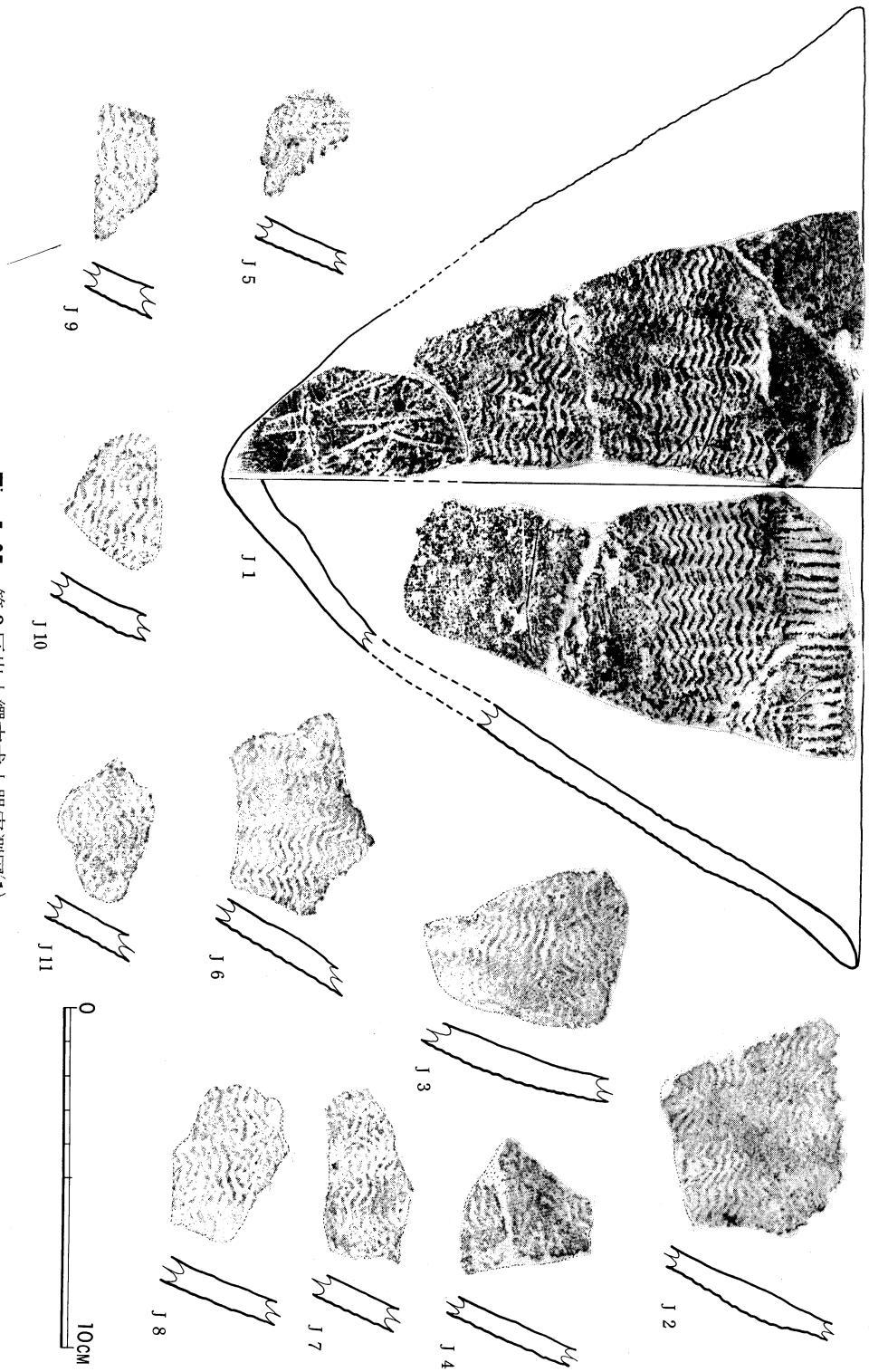


Fig.5・37　第3区出土縄文式土器実測図(1)

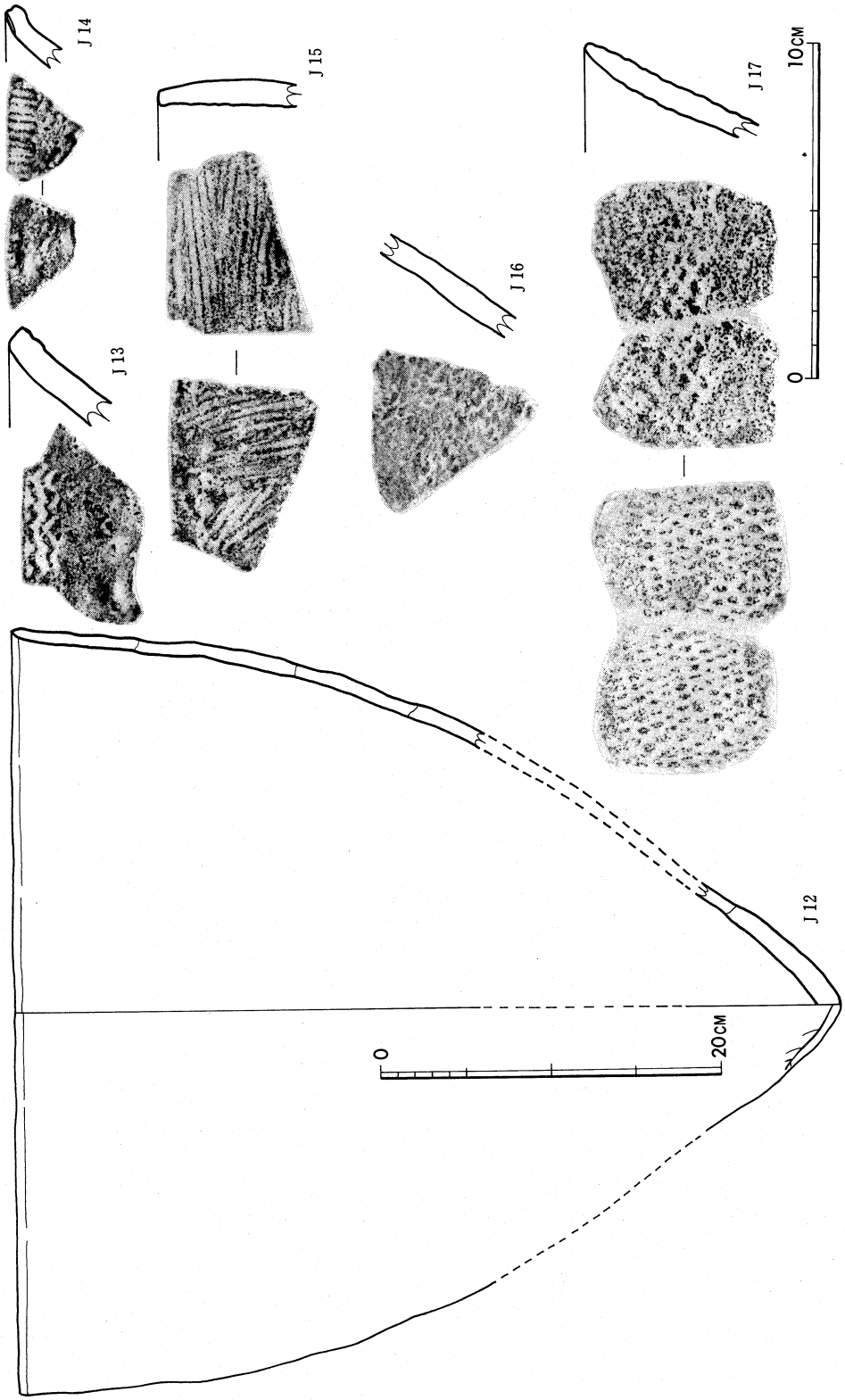


Fig.5・38 第3区出土縄文式土器実測図(2)

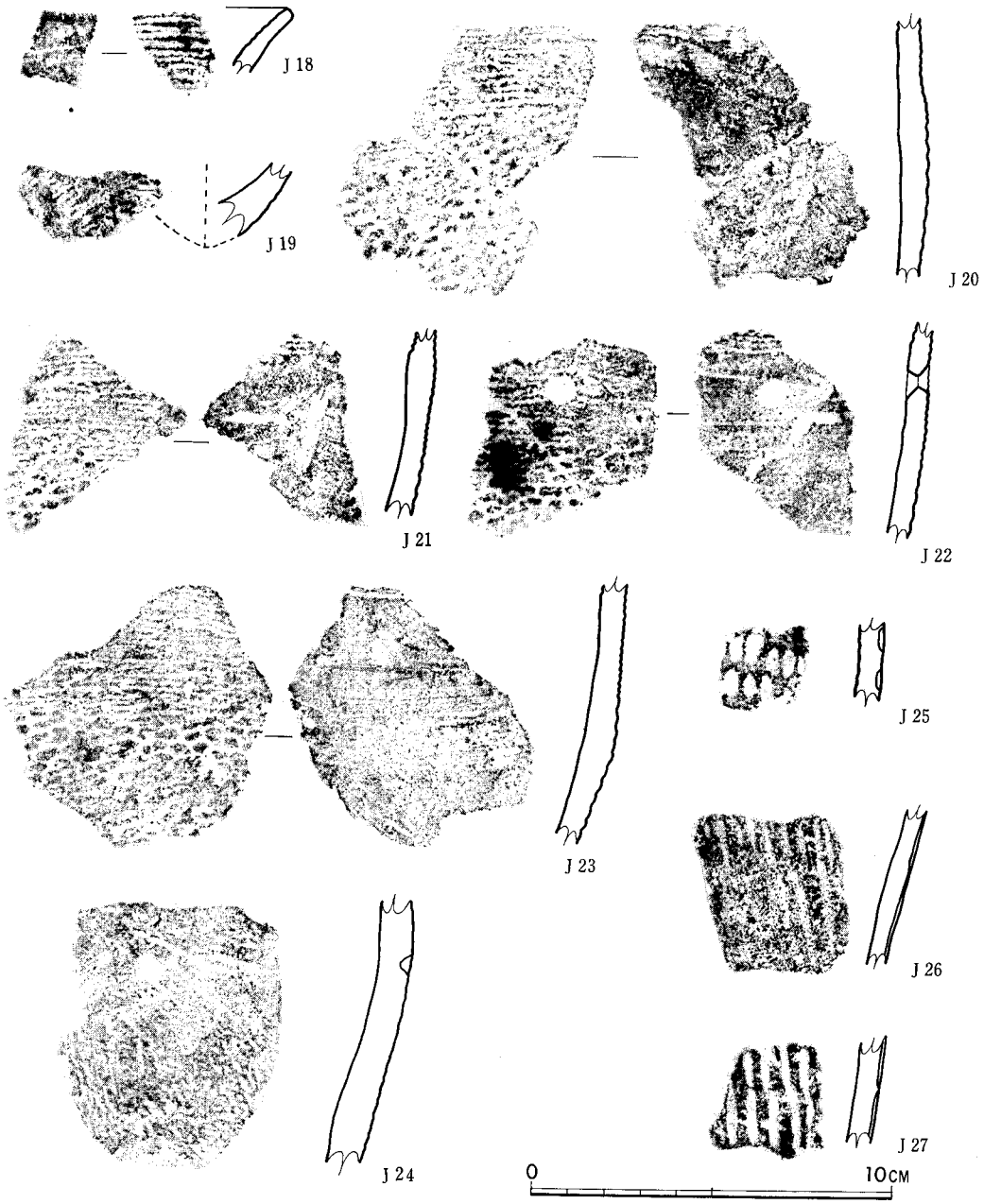


Fig.5・39　第3区出土縄文式土器実測図(3)

無文で放置されるが、内面は横位の細い撚糸文。J 19は底部で、斜位の撚糸文。J 20～23は胴部片で、外面は上部が横位の細い撚糸で、それ以下は長径約6㎜、幅約3㎜の楕円押型文を施す。内面は上部に横位の細い撚糸があり、これはJ 18の内面と同様のものである。それ以下は横、斜めの撚痕がある。J 22には直径約7㎜の小孔が両側から焼成後に穿たれている。これ

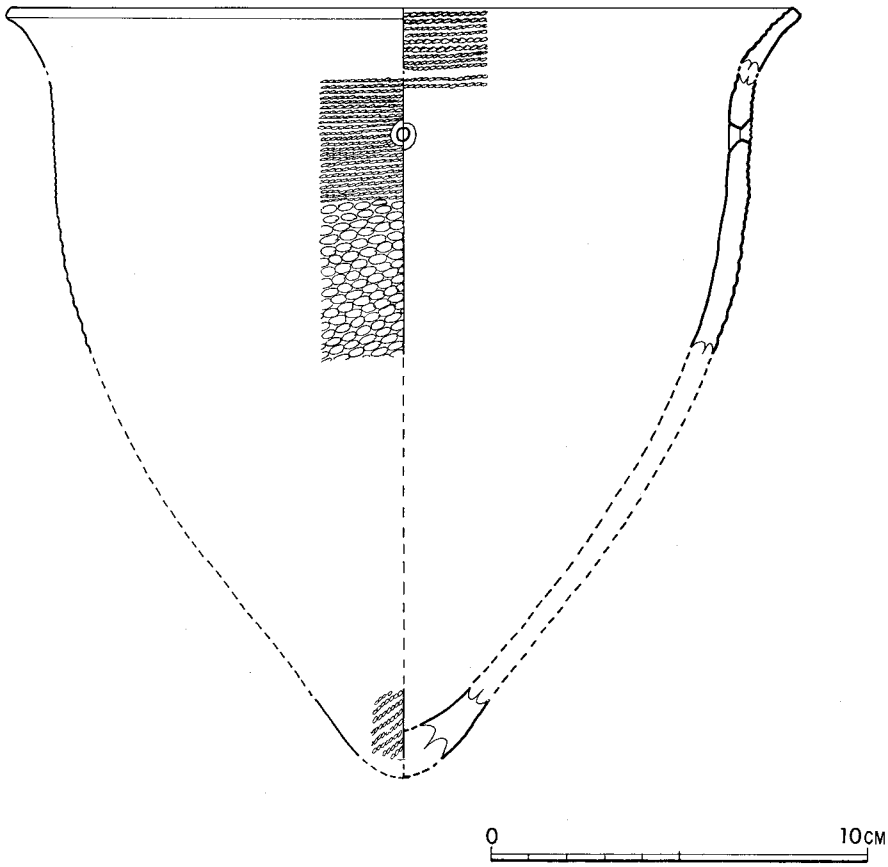


Fig.5・40　第3区出土縄文式土器（Ｊ18～Ｊ23）推定復元図

らの土器の推定復元図はFig.5・40のようになると考えられる。胎土に砂を含み、焼成は良好。暗褐色を呈する。外面に煤の付着も認められる。Ｏ－19ｄトレンチ黒色粘質土層出土。

Ｊ24も深鉢の胴部で、外面には不規則に撚糸文が施される。直径約５㎜程の小孔が外側から穿孔されかかっているが、内側からはなく、貫通していない。胎土には砂を含むが、金雲母が目立ち、焼成はあまり良くない。暗褐色から黒褐色を呈する。Ｐ－23ｂトレンチ黒色粘質土層出土。

以上の土器は縄文早期のものであり、北九州では編年は確立していないが、大分県の例〔賀川1970〕からみて稲荷山遺跡出土の土器と類似点がみられる。Ｊ18以下は器形的には稲荷山と類似しているが、推定復元ではあり、また、撚糸文と楕円押型文の複合する文様をもつことから、時期的には下がるかもしれないが、類例のないため、不明である。

Ｊ15はほぼ直立する口縁をもつ。外面は斜め・縦の条痕、内面は横の条痕を施す。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良くない。暗褐色を呈する。Ｐ－23ｂトレンチ黒色粘質土層出土。

Ｊ25は外面に二列の刺突文が施されている。内面は横位の条痕。胎土は石英粒を含み、焼成はもろい。暗褐色を呈する。Ｑ－23ｂトレンチ第32号溝内出土。

J26・J27はともに縦に短沈線が施されている。胎土に砂を含み、焼成は良い。暗褐色を呈する。ともにP－23bトレンチ黒色粘質土層出土。

これらの土器は縄文時代前期のものと推定される。（沢）

石器（**Fig.5・41、PL.LXXXV**）

S36はP－23bトレンチの黒色粘質土層より押型文土器に共伴した突錐である。不定形のサヌカイトの剥片の先端部を利用し、表裏とも入念な二次加工で尖頭部をつくっている。打面は未加工のままで、剥片の周縁はほぼ全面に二次加工が行なわれていて、錐としての用途と同時に刺突具としての用途も考えられる。S37（PL.LXXXV）は、サヌカイト製の小剥片の一辺に刃潰し状の二次加工を加えている掻器である。長さ2cm、幅2cm、厚さ0.5cm。P－23bトレンチ黒色粘質土層出土。

他に同時期のものとして、サヌカイトの縦長剥片（S50）が出土している。（山口）

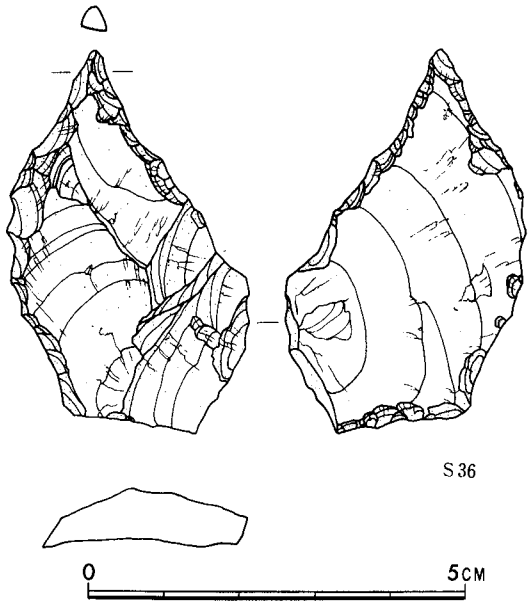


Fig.5・41　P－23bトレンチ黒色土層出土石錐実測図

(2)　弥生式土器（**Fig5・36～5・38、Tab.5・2**）

耕作土層と、その下の各層（黒色粘質土層とそのつづきの旧河川砂層より上）出土の弥生式土器についてのべる。他の時代の土器・陶磁器片等と混在している。

N－23グリッド出土土器（Y3001～3004）

Y3001～3003は壺の口縁部である。Y3001は単純に開く口縁をもつ。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。暗褐色を呈する。中期前葉か。Y3002は内傾し、口縁部が短く外反する。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。淡暗褐色を呈する。夜臼式であろう。Y3003は袋状を呈する口縁をもつ。口縁外側は斜め、頸部外面は縦、内面は横刷毛目調整。口縁の外面屈曲部と内面は横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。淡褐色を呈する。後期前葉。Y3004は甕の底部。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。赤褐色を呈する。

Ｎ－23ｂトレンチ出土土器（Ｙ3005）

Ｙ3005は外反しながら単純に開く壺の口縁部で、横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良く、茶褐色を呈する。中期前葉～中葉。

Ｏ－19ａトレンチ出土土器（Ｙ3006～3008）

いずれも甕である。Ｙ3006はわずかに外反する口縁の端一杯に刻目が施される。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。暗黄褐色を呈する。Ｙ3007は逆「Ｌ」字状を呈する口縁をもつが、内側張り出しはなく、外側も強くない。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。暗茶褐色を呈する。中期前葉。Ｙ3008は口縁端を欠失するが「く」の字状口縁をもつ。内外面とも刷毛目調整。胎土は砂を混じ、焼成は良好。暗褐色を呈する。後期。

Ｏ－19ｄトレンチ出土土器（Ｙ3013）

壺の底部で、若干上げ底となる。胎土に砂を含み、焼成は良好。灰褐色を呈する。前期のものか。

Ｏ－19ｆトレンチ出土土器（Ｙ3017・3018・3020）

Ｙ3017は「く」の字状口縁の甕で、内外面とも刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。煤が付着しており、黒色を呈する。後期前葉。Ｙ3018は鉢の口縁部で、内外とも刷毛目調整。胎土は砂を含み、焼成は良好。暗褐色を呈する。後期のものか。Ｙ3020は「く」の字状の口縁をもつ甕で、口縁下に一条の三角突帯を巡らす。胴部の張りは強い。口縁部横なで調整。石英粒砂を胎土に含み、焼成はあまり良くない。淡褐色を呈する。後期前葉。

Ｏ－23トレンチ出土土器（Ｙ3030）

外反する口縁をもつ甕で、上下両端に刻目を施す。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。暗褐色を呈する。前期末。

Ｐ－19ａトレンチ出土土器（Ｙ3031・3037・3038）

Ｙ3031は逆「Ｌ」字状口縁をもつ甕で、内端が下がる。外側張り出しはあまり強くなく、内側張り出しも小さい。口縁部は横なで調整で、胴部外面は縦刷毛目調整。胎土に砂を含み、焼成は良い。褐色を呈する。中期前葉。Ｙ3037・3038は甕の底部であろう。Ｙ3037の外面は縦刷毛目調整。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。暗赤褐色を呈する。

Ｐ－19ｂトレンチ出土土器（Ｙ3043・3046・3047）

Ｙ3043は逆「Ｌ」字状の口縁をもつ甕で、口縁の発達は弱く、胎土に砂を含む。焼成は良くなく、淡黄褐色を呈する。中期前葉。Ｙ3046は壺の口縁部で、横なで調整。口縁部は外反し、外面に小さな段がつく。胎土・焼成とも良好で、黄褐色を呈する。前期後葉か。Ｙ3047は器台

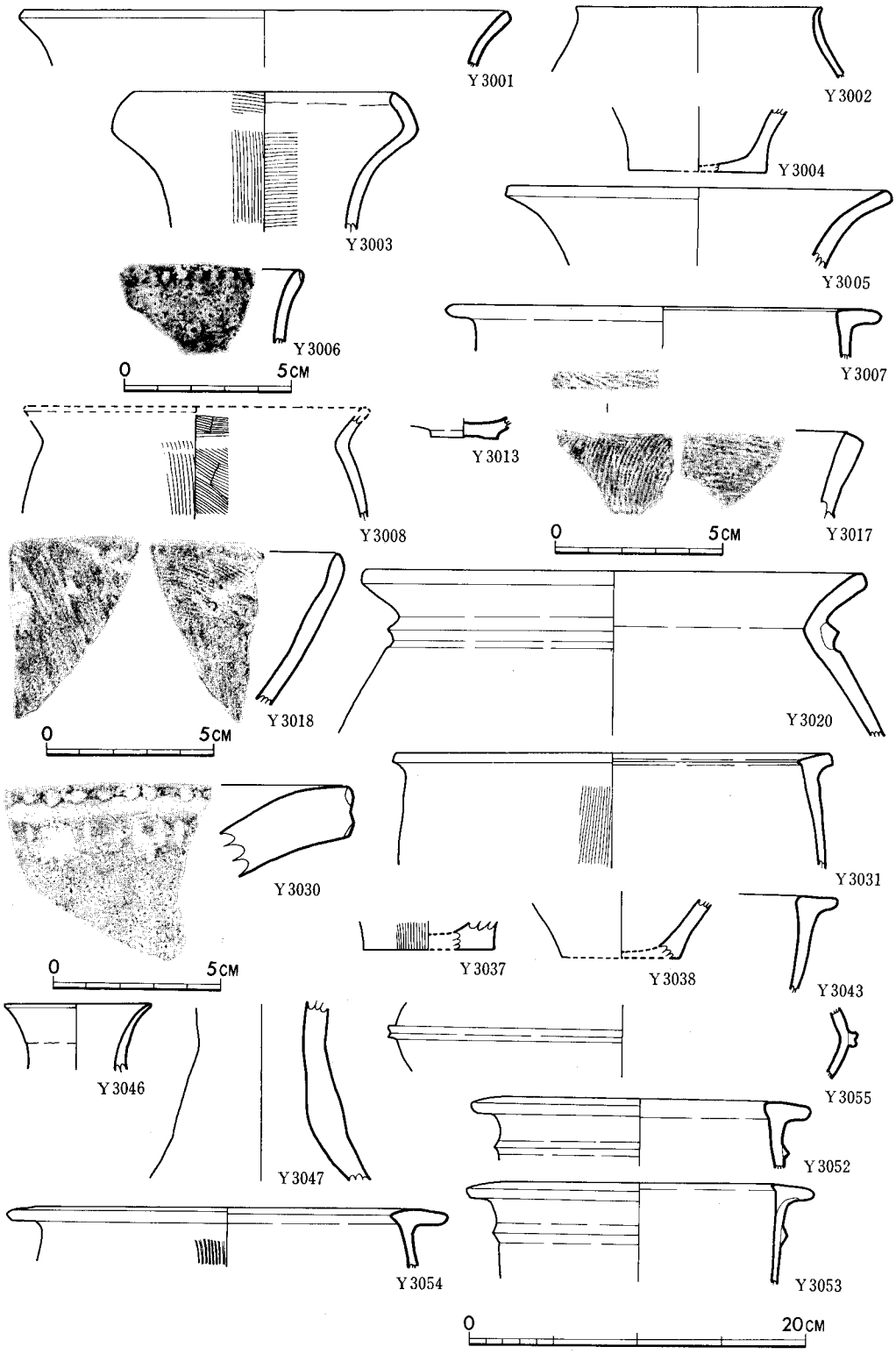


Fig.5・42　第3区包含層出土弥生式土器実測図(1)

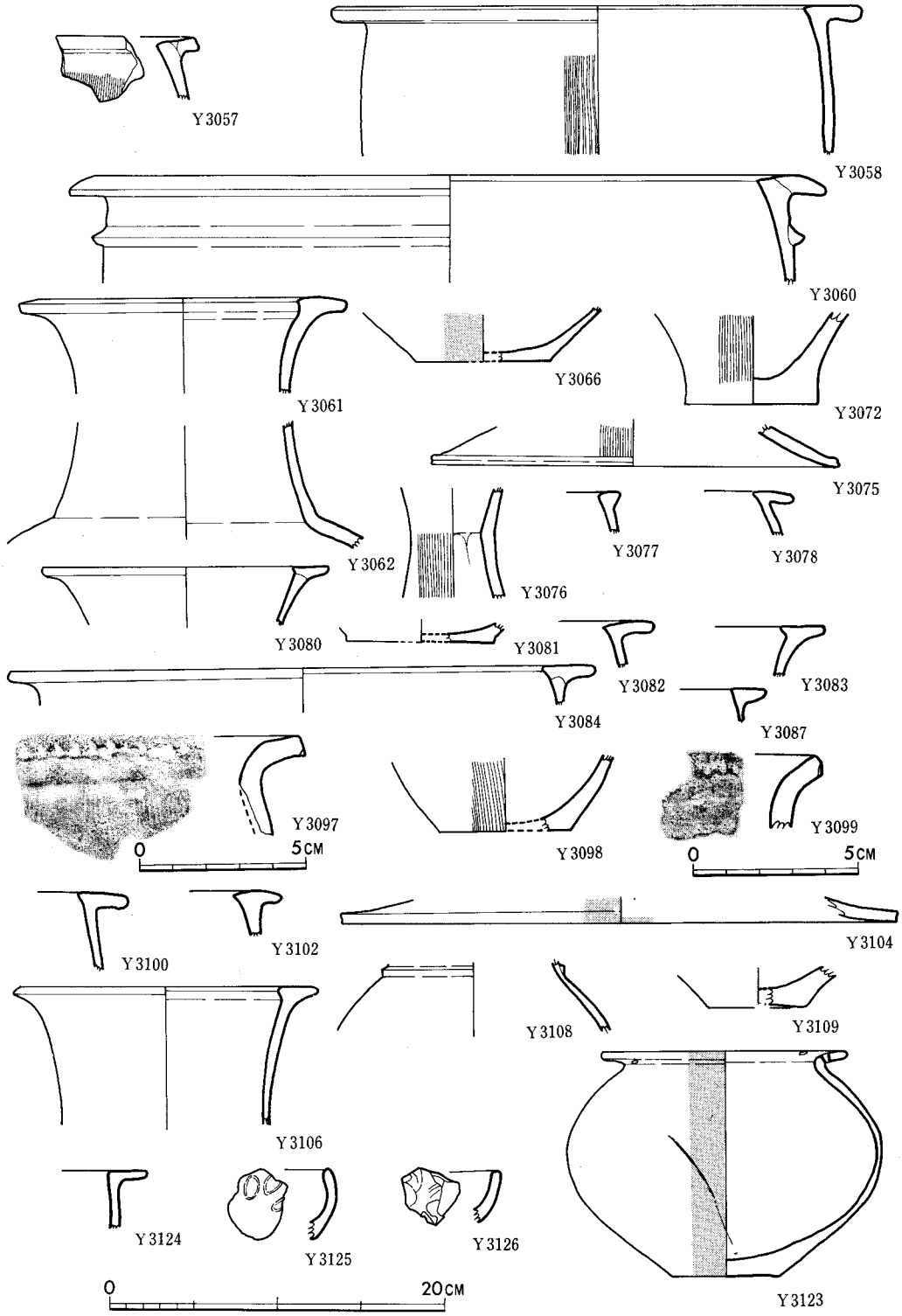


Fig.5・43　第３区包含層出土弥生式土器実測図(2)

で、器壁は厚い。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良くない。暗赤褐色を呈する。後期のものか。

P－19dトレンチ出土土器（Y3052～3055）

Y3052～3054は逆「L」字状口縁をもつ甕で、Y3052・3053は口縁下に一条の三角突帯を巡らす。ともに外端が下がるが、Y3052の方が胴が張る。ともに横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良くない。暗灰褐色を呈する。中期中葉。Y3054は内外両端が下がる。口縁部横なで調整で、胴部外面は縦刷目調整。外面に煤の付着が認められる。胎土は石英粒砂を含み、褐色を呈する。焼成は良い。中期中葉。Y3055は胴中央部に「M」字状突帯を巡らす壺で、胎土に砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。中期中葉。

P－20aトレンチ出土土器（Y3057・3058・3060～3062・3066）

Y3057・3058・3060は逆「く」字状口縁をもつ甕である。Y3057は内端が下がり、外側張り出し部も未発達である。外面刷毛目調整。口縁部は横なで調整。胎土に砂を含み、焼成良好。淡暗褐色を呈する。中期前葉。Y3058は口縁上面が平坦となる。口縁部は横なで調整。胴部外面は縦刷毛目調整。胎土は砂を含み、焼成は良い。暗赤褐色を呈する。中期中葉。Y3060は口縁の内外両端が下がる。口縁下に一条の三角突帯を巡らす。口縁部と突帯貼り付け部は横なで調整。一部外面に煤の付着が認められる。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。暗褐色を呈する。中期中葉。Y3061は「鋤」状口縁をもつ壺で、外端が若干下がる。横なで調整を行なうが、口縁上面に煤の付着が認められる。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。淡赤褐色を呈する。中期後葉。Y3062は壺の頸部から胴部上半部破片で、横なで調整。胎土に砂を含み、焼成はあまり良くない。黄褐色を呈する。中期後葉。Y3066は壺の底部で外面丹塗り。胎土・焼成ともに良好で、赤褐色を呈する。無頸壺の底部であろう。

P－20bトレンチ出土土器（Y3072）

甕の底部である。外面縦刷毛目調整で、煤の付着も認められる。胎土に砂を含み、焼成良好。灰褐色を呈する。

P－22トレンチ出土土器（Y3075）

高坏の脚裾部である。外面には縦刷毛目調整。胎土に砂を含み、焼成良好。淡褐色を呈する。

P－23トレンチ出土土器（Y3076）

器台の破片である。外面は刷毛目調整。内面は指のなで上げ調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。赤褐色を呈する。中期のものか。

Q－17トレンチ出土土器（Y3077・3078）

Y3077は内傾する口縁外端に粘土帯を貼り付けた甕で、器面があれているため調整は不明。

胎土に砂を含み、焼成は良好。黄褐色を呈する。中期初頭。Y3078は逆「L」字状口縁をもつ甕で、口縁外端が下がる。胴部は張るが、器面調整は不明。胎土に砂を含み、焼成良好。黄褐色を呈する。中期中葉～後葉。

Q－19トレンチ出土土器（Y3080・3081）

Y3080は「鋤」状口縁をもつ壺で、横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。淡褐色を呈する。中期後葉。Y3081は壺の底部で、若干の砂を胎土に混じ、焼成良好。淡褐色を呈する。

Q－20aトレンチ出土土器（Y3082～3084）

Y3082は逆「L」字状口縁をもつ甕で、内端の下降傾向がみられる。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。黄褐色を呈する。中期中葉～後葉。Y3083は「鋤」状口縁をもつ壺で、横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。赤褐色を呈する。中期後葉。Y3084は逆「L」字状口縁だが、内側張り出しが強く「T」字形に近い。胎土に砂を含み、焼成良好。赤褐色を呈する。中期中葉。

Q－20cトレンチ出土土器（Y3087）

逆「L」字状の甕の口縁で、器面のあれが甚しい。胎土は石英粒砂を含み、焼成は良くない。黄褐色を呈する。中期前葉か。

Q－20dトレンチ出土土器（Y3097）

強く外反する口縁部とわずかに張る胴部をもつ。口縁下端に刻目を施し、外面は縦刷毛目調整。口縁部は横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。白味のかかった褐色を呈する。板付II式である。

Q－22aトレンチ出土土器（Y3098）

甕の底部である。外面は縦刷毛目調整。胎土には砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。中期後葉か。

Q－22dトレンチ出土土器（Y3099・3110・3100・3104・3106・3108・3109）

Y3099は外反する口縁をもつ甕で、口縁下端に刻目をもつ。胎土に砂を含み、焼成は良好。暗褐色を呈する。板付II式。Y3100は逆「L」字状の甕の口縁部で、器面があれているため調整はわからない。口縁部の外端は少し下がる。胎土は砂を混じ、焼成は良い。褐色を呈する。中期中葉。Y3102は逆「L」字状口縁の内側張り出しが強く「T」字状に近い。内外端とも下がる。器面のあれが甚しく、調整は不明。胎土に砂を含み、焼成は良くない。赤褐色を呈する。中期中葉。Y3104は高坏の脚裾部で内外とも丹塗り。胎土・焼成とも良好。赤褐色を呈する。

中期中葉か。Y3106は「鋤」状口縁をもつ壺で、器面があれているために調整は不明。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。暗褐色を呈する。中期後葉か。Y3108は壺の肩部で、頸部付け根に一条の三角突帯が巡る。胎土に石英粒砂を含み、焼成はあまり良くない。黄褐色を呈する。中期後葉。Y3109は壺の底部で、胎土に石英粒砂を含み、焼成は良くない。灰褐色を呈する。

Q－23ａトレンチ出土土器（Y3123）

「く」の字状口縁をもつ無頸壺である。口縁部にはそれぞれ2個計4個の穿孔がある。胎土は砂を含むが、焼成は良い。黄褐色を呈する。中期後葉。

R－19ｂトレンチ出土土器（Y3124～3126）

Y3124は逆「L」字状を呈する甕の口縁部で横なで調整。内側張り出しはない。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。赤褐色を呈する。中期前葉～中葉。Y3125・3126は手捏ねの鉢である。ともに指で調整した痕が残る。胎土は石英粒砂を含み、赤褐色を呈する。Y3125は焼成は良くないが、Y3126は良い。後期のものであろう。

R－20ａトレンチ出土土器（Y3128）

甕の底部である。器面があれているため調整は不明。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良くない。黒褐色を呈する。

R－21トレンチ出土土器（Y3129）

器台の下半部である。外面には指のなで上げ、内面には縦の細い刷毛目調整。胎土・焼成とも良好で、灰褐色を呈する。

R－22ｂトレンチ出土土器（Y3133）

器台の下半部である。外面は指のなであげ調整で、裾部近くに一部指の押圧調整痕が残る。胎土は砂を含み、焼成は少し弱い。黄褐色を呈する。

R－22ｃトレンチ出土土器（Y3134～3136）

Y3134は逆「L」字状の口縁をもつ甕で、内外両端とも下がる。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良くなく、赤褐色を呈する。中期中葉～後葉。Y3135も口縁外側張り出し部を欠失するが、逆「L」字状の口縁と推定される。口縁下に一条の三角突帯が巡り、胴部は張る。口縁部と突帯貼り付け部は横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良くなく、灰褐色を呈する。中期中葉～後葉。Y3136は甕の底部である。石英粒砂を胎土に混じ、焼成は良くない。暗褐色を呈する。

Ｓ－22ａトレンチ出土土器（Ｙ3143）

器台の下半部である。裾部は一部断面図のように上が凹み、球状を呈する部位がある。外面は斜めに刷毛目調整。内面には炭化物の付着が認められる。胎土に砂を混じ、焼成はあまり良くない。赤褐色を呈する。後期のものか。

Ｓ－22ｂトレンチ出土土器（Ｙ3145・3146・3149～3151）

Ｙ3145は器台の裾部である。内面に煤の付着がみられる。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良くない。赤褐色を呈する。中期のものであろう。Ｙ3146も逆「Ｌ」字状口縁の甕であるが、Ｙ3145に比べ両側張り出しは発達する。横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。淡赤褐色を呈する。中期中葉。Ｙ3149は外端が下向する「鋤」状口縁をもつ壺で、口縁部横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。淡褐色を呈する。中期後葉。Ｙ3150は甕の底部で、高台状の高い上げ底を呈する。外面縦刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。赤褐色。中期初頭～前葉。Ｙ3151も甕の底部で、内面に炭化物が認められる。胎土に砂を含み、焼成は良い。赤褐色を呈する。

Ｓ－23トレンチ出土土器（Ｙ3156）

甕の底部である。外面縦刷毛目調整。胎土に砂を含み、焼成良好。赤褐色を呈する。

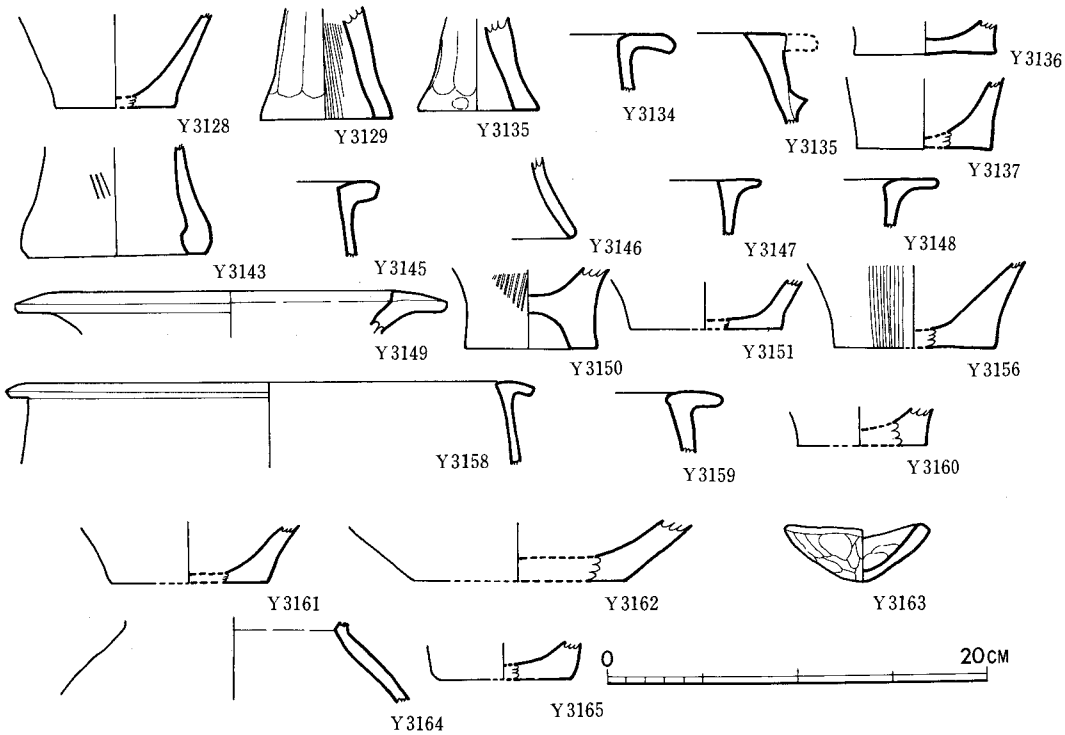


Fig.5・44 第３区包含層出土弥生式土器実測図(3)

S－24トレンチ出土土器（Y3158）

逆「L」字状口縁をもつ甕で、口縁外端が下がる。横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成はあまり良くない。赤褐色を呈する。中期中葉。

S－25トレンチ出土土器（Y3159～3162）

Y3159は逆「L」字状口縁の甕である。器面のあれが甚しいため調整は不明。石英粒砂を胎土に含み、焼成は良い。赤褐色を呈する。中期中葉。Y3160は甕の底部である。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。赤褐色。Y3161は壺の底部。胎土に砂を含み、焼成は良い。暗赤褐色。Y3162も壺の底部でY3161より大形である。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。黄褐色を呈する。

T－17トレンチ出土土器（Y3163）

手捏ねの鉢である。底は尖底に近くなる。口縁は円形を呈さず楕円形となる。内外面とも指の調整痕が目立つ。胎土は砂を含み、焼成は良い。淡灰褐色を呈する。後期のものであろう。

U－29トレンチ出土土器（Y3164・3165）

Y3164は壺の胴上半部。石英粒砂を胎土に含む。焼成は良く、淡褐色を呈する。Y3165は甕の底部。胎土に砂を含み、焼成は良い。暗褐色を呈する。　（沢）

(3)土師器（Fig.5・39、5・40）

T－17トレンチ出土の土師器（310～312）以外はすべて耕作土層と包含層上位の出土である。T－17トレンチのものは灰色砂質土（第9層）の最上部である。

高坏（H308・311・312）

H308は脚部のみであり、柱状部の外側上半部分が接口部で、上面には接合のための刻目を有する。砂粒を混入し、焼成良好。暗褐色を呈する。S－25トレンチ出土。H311は坏部のみで、口縁部と脚部を欠く。胎土には細砂を混入するが精良であり、焼成も良い。外側は赤褐色、内側は黄褐色を呈する。T－17トレンチ出土。H312は口縁部と裾部を欠くが、柱状部から裾部に向かって大きく開いている。裾部の付け根部分には、焼成前の穿孔を4つもっている。柱状部外側は縦なで、裾部内側には篦削り痕がある。砂粒を混入し、焼成は良好。淡褐色を呈する。T－17トレンチ出土。

小型丸底壺（H307）

底部を少し欠くが、口縁部は外方へ立ち上がり、球形の胴部へつづく。口縁部と胴部との内側接合部に出っ張りをもつ。胴部内面は指のなで整形、器表面は磨滅しているが、丹塗りの跡がある。石英粒を主とする砂粒を含み、焼成は良好。淡褐色。S－21aグリッド耕土層。

甕（H310・313）

H310は球形の胴部をもち、口縁部と底部を欠く。胴部上半を横なでし、最大径より少し上に一本の沈線をまわす。器壁は刷毛目調整を施し、煤の付着が認められる。器壁内側には斜めの篦削りを施す。石英粒を主とする砂粒を含み、焼成は良好。淡褐色を呈する。T－17トレンチ出土。H－313は甕の口縁部片で、胴との接合部は若干肥厚する。器表外面は、刷毛目調整と全体に横なで調整を施し、内側は粗い刷毛目を横、あるいは斜めに施し、それ以下に篦削りを有する。外面は淡褐色、内面には一部黒斑がある。胎土に石英砂粒を含む。焼成は堅緻である。Q－20dトレンチ出土。

脚（H303）

脚付鉢の脚部と思われる。脚部の内外とも黄白色を呈し、受身部分は褐色である。胎土中には石英粒を主とする砂粒を多く含むが、焼成は良好である。P－20cトレンチ出土。

以上の土師器は、古墳時代前期に位置づけられよう。

皿・坏類（H301・302・304～306・309）

H301・304～306は糸切りの底部をもつ。H301は胎土に若干の砂を混じ、焼成は良い。黄褐色を呈する。O－23aトレンチ出土。H304は体部にロクロの痕が残る。胎土に砂を含み、焼成は良い。淡褐色を呈する。Q－22aトレンチ出土。H305は胎土・焼成とも良好で、黄褐色を呈する。Q－23aトレンチ出土。H306は胎土・焼成とも良く、明褐色を呈する。R－20aトレンチ出土。H302は皿である。胎土に砂を含み、焼成はややあまい。黄褐色を呈する。O－25トレンチ出土。H309は胎土に砂を含み、焼成良好。淡褐色を呈する。S－19トレンチ出土。　（原）

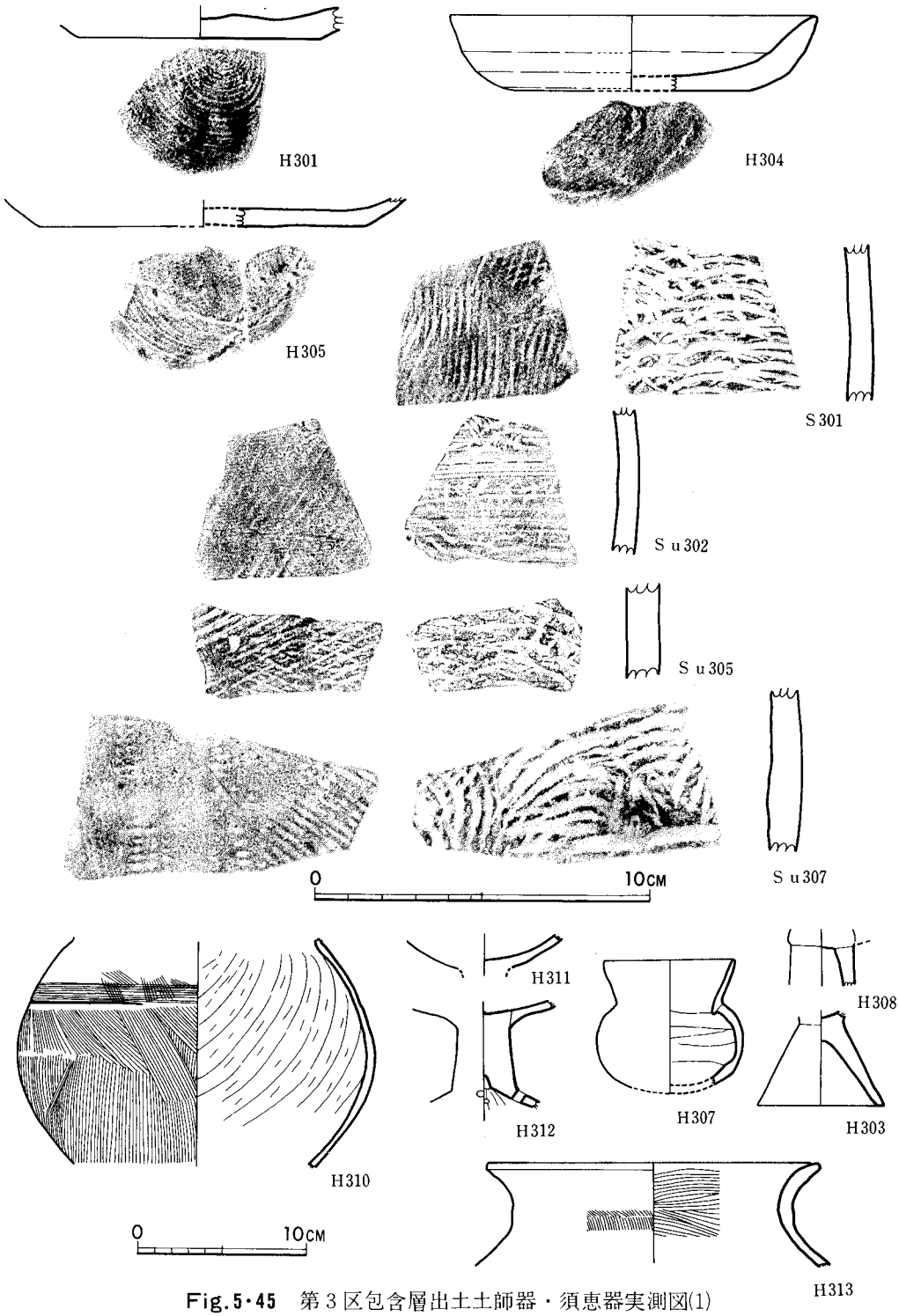


Fig.5・45　第3区包含層出土土師器・須恵器実測図(1)

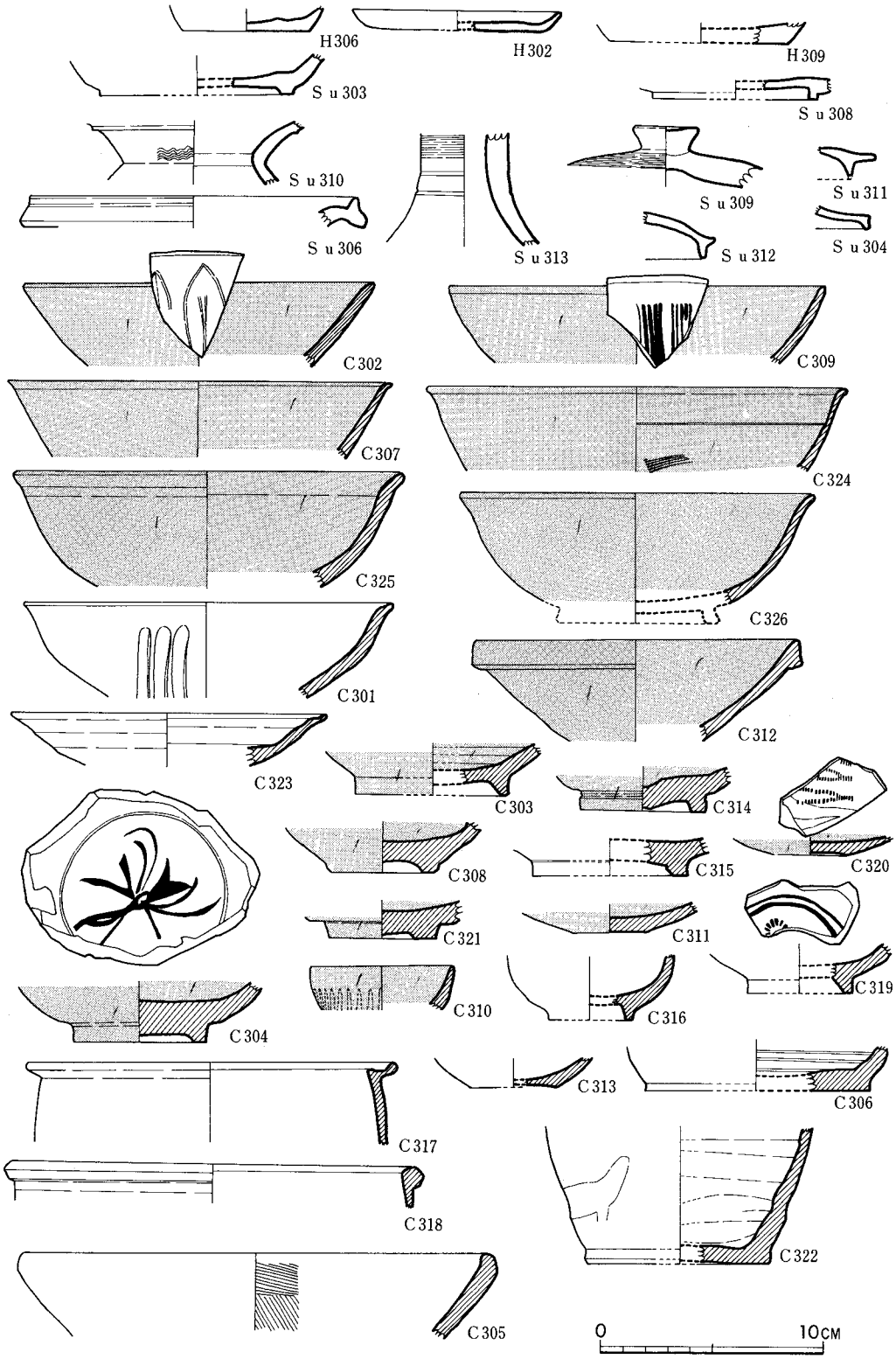


Fig.5・46　第3区包含層出土土師器・須恵器・陶磁器実測図(2)

(4)　須恵器（Fig.5・39、5・40）

Su301・302・305・307は甕の胴部で内外に叩き目がある。Su301・302はN－23トレンチ、Su305はO－25トレンチ、Su307はQ－17トレンチ出土。Su303とSu308は高台付埦である。Su303はN－23トレンチ出土。Su308はQ－19cトレンチ出土。Su310は甕の頸部で頸部付け根上部に櫛描きの波状文が巡らされる。Q－22aトレンチ出土。Su306は甕口縁部。Q－22aトレンチ出土。Su313は高坏の脚部であろう。胴部に二本の沈線が巡る。R－22cトレンチ出土。Su309は蓋のつまみ部である。Q－20dトレンチ出土。Su311・312はともに坏蓋であり、R－19bトレンチ出土。Su304は高坏の脚部と思われる。N－25トレンチ出土。　（沢）

(5)　陶磁器（Fig.5・40）

陶器（C305・318・322）

C305は鉢の口縁部である。器色は黄褐色を呈し、胎土には砂粒をかなり混入。焼成良好。内外面の口唇部付近は横なで調整。内面は櫛状工具による横・斜位の調整。口径20.6cm。Q－19トレンチ耕作土層出土。C318は鉢形の施釉陶器である。口縁下端は箆削りで稜をもっており、内外面とも横なで調整。外面および内面一部に濃い褐色の施釉がみられる。露胎部分は灰色。胎土に細砂混入。焼成は非常に堅緻。口径18cm。R－22aトレンチ耕土層出土。C322は鉢形施釉陶器底部である。底部はややあげ底気味である。外面は指による強い縦横の撫で調整。内面は横位の撫でで、凹凸が著しい。内外面ともに濃い褐色釉が施される。胎土・焼成ともに良好。底径14.3cm。S－22bトレンチ出土。

磁器（C301～304・306～317・319～321・323～326）

C301は磁器碗である。内面および外面上半に濃い褐色釉が施され、いずれも細かい氷裂が著しい。外面には口縁端よりやや下った位置から下方に箆状工具によってなでおろした3本の凹線状文が施されている。口径16.5cm。O－20fトレンチ耕作土層出土。C302は青磁器碗である。内外面ともに青味をおびた淡い草色釉がかかる。器面には氷裂がほとんどなく平滑である。外面には先端の尖る鎬葉文を口縁よりやや下った部分以下に配する。釉は比較的厚くかかり、器壁は淡い灰色を呈する。口径15.6cm。P－23aトレンチ出土。C303は磁器碗底部である。高台部をのぞく内外面に白色釉が施されている。高台は比較的高く、畳付が狭い。底径6.7cm。Q－19bトレンチ出土。C304は青磁器碗底部である。内外面とも高台部をのぞいて深い草色釉が施されている。内面見込みには草花文が陰刻されている。造りの丁寧な精良品である。口径5.6cm、Q－20eトレンチ出土。

C306は磁器碗底部である。内外とも濃い褐色釉を施している。底部は糸切りはなし。底径10cm。P－22トレンチ耕作土層出土。C307は白磁器碗口縁部である。直線的にのびる胴は口縁部でわずかに外反して小さい平坦面をなしている。内外面ともに淡い灰色釉を施しており、いずれも細かい氷裂が著しい。口径17.3cm。Q－22bトレンチ耕作土層出土。C308は青磁器碗底部であ

る。低く丸みをもった高台をもち、胴部は底部に近く屈曲するものと思われる。内面にのみ枯れた草色釉を施し、外面にはみられない。また底部内面には重ね焼きのためか別個体底部の一部が固着している。底径4.5cm。Q－22bトレンチ耕作土層出土。C309は内彎気味の口縁をもつ青磁器である。内外面ともにくすんだ草色釉を施している。外面には口縁よりやや下った部分以下に10本単位の猫描き櫛目文が描かれている。口径16.8cm。Q－22dトレンチ包含層出土。C310は小形の磁器碗口縁部である。内外面ともに淡い草色釉を施す。外面には口縁端より１cm程下った部分以下にカンナ振りによるものかと思われる短直線の連続がみられる。口径6.3cm。Q－22dトレンチ耕作土層出土。C311は青磁器皿底部である。底部よりやや上った位置に帯状に淡い草色の釉が施されるのみで他にはかからない。底径3.3cm。

C312は白磁器碗口縁部である。内面および外面中位以上に淡い草色釉を施す。口縁は折返しの玉縁状となる。体部内面には施釉前の横位沈線が１本みられる。釉の厚くかかった精良品である。口径14.4cm。Q－22トレンチ耕作土層出土。C313は磁器碗底部。底部をのぞき内外面ともに黄褐色釉を施し、氷裂の状態となっている。底径4.0cm。R－22aトレンチ耕作土層出土。C314は青磁器碗底部である。内面には淡い草色釉が施されており、外面にはかからない。高台は低く、畳付が幅広い。また体部との境界には沈線２本がひかれている。底径5.6cm。R－20bトレンチ耕作土層出土。C315は磁器碗底部。内面はくすんだ朱色と深い草色釉との斑文となっている。低く、畳付の幅広い高台は内面端部を斜めに面取りしている。また外面は胴部との境に小さい一本の隆起した段がみられる。底径6.9cm。R－20bトレンチ耕作土層出土。C316は小形の磁器碗である。高台畳付部をのぞいて内外面とも黒味をおびた濃い褐色釉を施す。焼成は非常に堅緻。底径3.8cm。R－20bトレンチ耕作土層出土。C317は磁器甕口縁部。口縁は端部が跳ね上げとなっており、胴部外面には口縁直下より櫛目状文が縦に断続して施文されている。外面深紅色釉、内面は白色釉を施した後に濃い褐色釉を掛けている。口径16.4cm。R－21トレンチ耕作土層出土。

C319は磁器碗底部である。内外面ともに白色釉を施し、内面は２本の同心円文および花文を施している。底径4.7cm。S－21bトレンチ耕作土層出土。C320は青磁器皿底部。底部はあげ底。底部をのぞく内外面に淡い草色釉を施す。内面には櫛描きの電光状文が配されている。底径3.3cm。S－22bトレンチ耕作土層出土。C321は磁器碗底部。内面に褐色味をおびた黒色釉を施す。高台は低く、畳付の幅が非常に広く稜角的である。底径4.8cm。S－22bトレンチ耕作土層出土。C323は磁器皿口縁部である。やや白味をおびた灰色釉が内外面に施されている。外面は胴部中位に削りがみられ、内面は凹凸が著しく特に口縁部付近は跳ね上げ状となっている。口径14.3cm。R－20aトレンチ耕作土層出土。C324は白磁器碗口縁部である。内外面ともに白色に近い淡い草色釉を施している。口縁部は端部の近くで小さく外反して若干肥厚しており、C307と類似している。体部内面には一条の細い沈線と横位の櫛描文が描かれている。口径18.8cm。S－25グリッド耕作土層出土。C325は青磁器碗口縁部である。内外面ともに淡い草色釉を施す。口縁部は端部の近くで小さく外反し、直下がやや窪む。施釉の丁寧さとともに全体が肉厚の感じをうける。口径17.3cm。S－25グリッド耕作土層出土。C326は青磁器碗口縁部。C325と同様

に淡い草色釉を施しており、肉厚な感じをうける。口径15.8cm。S－25グリッド耕作土層出土。

以上第3区出土陶磁器の個々について説明したが、今、亀井明徳氏の分類〔亀井1973〕に従って、これらを分類すれば、C307・324が白磁埦I類、C312が同II類にあたり、C302・308が青磁A群碗I類、C309が青磁B群碗、C311・320が同群皿、C304が青磁C群碗にそれぞれ相当しよう。　（横山）

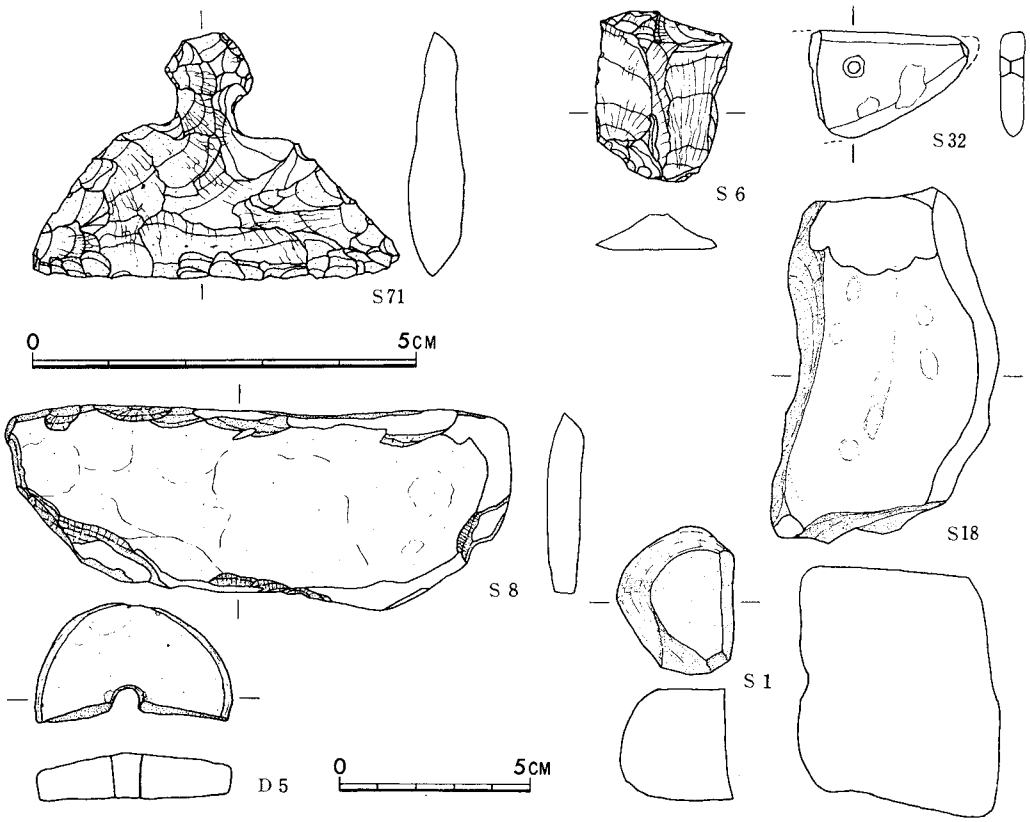


Fig.5・47　第3区包含層出土石器・土製品実測図（S71は第4区出土）

(6) 石　器 (Fig.5・47～5・48、PL.LXXXV、Tab.5・3、5・4)

石庖丁

S８は頁岩質の石材をもちい、剝離加工によって直線状の背部・外彎する刃部をつくり出し、器面には敲打を施こし、半月形に整形しているが、研磨は行なわれていない。石庖丁未製品。Q－19bトレンチ耕土下包含層出土。S32は頁岩質砂岩製の半月形石庖丁。直線的な背部を持ち、刃部は両刃で外彎する。紐孔は両面から穿孔され、器面は研磨されている。半分欠損している。S－22bトレンチ包含層出土。

剝片石器

S６はサヌカイトの縦長剝片の両側縁に使用痕がみられる。Q－22dトレンチ包含層出土。

砥石

S１は砂岩製で、砥面はややくぼみ、側面は研磨されている。R－18トレンチ耕作土層出土。

S18はR－22トレンチ耕作土層出土。粒子の荒い砂岩製で、砥面は二面ある。側面には浅い溝状の磨痕がみられる。　（横山）

(7) 滑石製品 (Fig. 5.48)

K19は石鍋破片で箍状把手部分と考えられる。滑石製。O－19fトレンチ黒土上砂層出土。K33は撥形をした用途不明の滑石製品。表裏ともに剝落部分が多いが、片面および両側辺部分には研磨がのこり、縁辺部分はいずれも円味をもっている。P－20トレンチ耕作土層出土。　（横山）

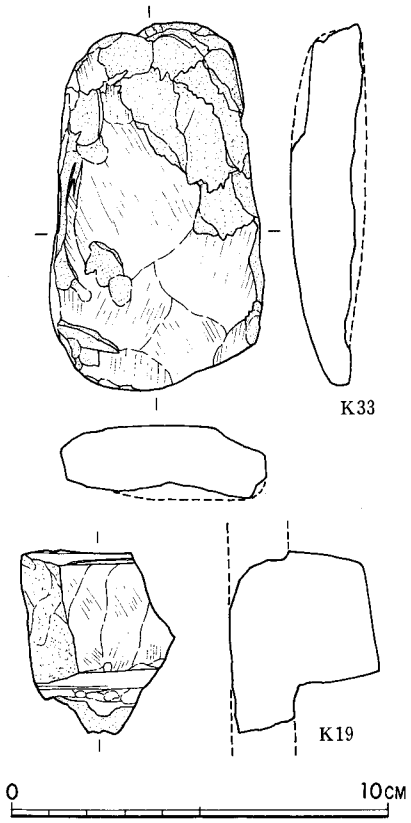


Fig.5・48　第3区出土滑石製品実測図

第4節　第3区調査のまとめ

第3区東側には旧河川を示す砂層があり、その西側には黒色粘質土層がひろがる。この黒色粘質土層はかなり古く形成された安定した層であり（第2章第1節、付篇第1）、旧河川近くの層内には縄文時代早•前期の土器が原位置を保って包含されている。この黒色粘質土層を切って、旧河支流が走り、これがさらに二つにわかれている。この旧河川と支流の岸辺の砂層・粘土層には流木や弥生式土器片が埋没している。

旧河川河岸には堰とみられる遺構（第1～3号遺構）があり、黒色粘質土層には多数の溝が走る。

溝は大小さまざまで、方向も多様であり、無秩序に交叉する部分もある。隣りあうトレンチで、つながりが不明瞭になる場合もあった。

溝中に杭・横木による施設を設けるもの、溝中・溝際に杭列のあるもの、それらのまったくないものがある。最後のものには、幅がせまく、浅いものがある。それらは単なる自然の流路であって、他の溝と性格がことなるとみられる（第4号・11号・13号・14号・6号・7号・18号・32号・33号・37号・38号・39号・40号溝）。

溝中の遺構は、堰状のもの（第4～6号遺構）と交叉する部分の溝壁を補強するためのもの（第7～9号遺構）とにわけられる。前者は溝の分岐点にあり、水流の方向をかえるためのものであろう。

溝中・溝際の杭列は第1号・19号・21号・23号・26号・27号・34～36号・41号溝で認められた。これらの杭列は、第5～9号遺構付近に乱雑に打たれ、各遺構に関連するものと、溝壁を補強するためとみられるもの（第19号・21号・35号・36号・41号）、さらに溝を横切り堰のような機能とみられるもの（第26号・27号）とにわけられる。

旧河川岸辺の第1～3号遺構は、丸太材を杭で固定した堰とみるべきものである。第1号遺構は旧河川の本流と支流との合流点にあり、支流から本流への水流をせきとめる役割のものであろう。第2・第3号溝は溝と旧河川との接点に設けられ、溝に水を導くための施設とみられる。

これらの遺構内と付近の砂層中および溝中出土の土器片は、弥生時代前期～後期初頭のものであるが、遺構・溝の時期が中期後葉（下限は後期初頭？）にあることを示している。溝相互には切りあいが認められ、旧河岸の3つの遺構相互の間に多少の時間差はあろうが、これらの溝・遺構が弥生時代中期後葉に作られ、用いられていたことは確実である（前述のように第8～10号溝はそれより古い）。

これらの溝・遺構の機能は、その立地、木製農具の出土、そしてなによりも溝であり堰であること自体から、水田経営に関連するとみるべきであろう。しかし水田面とはっきり指摘しうる面的ひろがりは確認できなかった。しいていえば第1号溝と旧河岸もしくは、第12号溝で画された長方形部分をあげうるにすぎない。また南東側では第34号溝と旧河岸の間のやや低い帯状部分を指摘できる。いずれにせよ、矢板等により区画された水田面は存在しない。

当時の地表をなしていたとみられる黒色粘質土層上面はFig.5･9にみるように、ひろい平坦面をなしておらず、秩序正しく区画された水田面には適さないように思われる。むしろ、こうしたせまく、部分的に泥湿地となっている低地の地形に応じて、川から水をひき込んで稲作を行ったとも考えられる。南側では上にふれたように第34号溝付近で稲作を行ったのかもしれない。支流北側では第２・３号遺構によって引き入れられた水の排水のための溝がQ・Rライン16～18区あたりにあるのかもしれないが(R－19bトレンチの杭はそうした溝に関係するのかもしれない)、調査できなかった。

旧河川支流はR－22aトレンチ中央で２つにわかれ、そこには杭群があった。そのひろがりを十分明らかにしえなかったが、支流内の水流を制御するためのものであろう。具体的なことはわからない。また旧河支流の岸辺では若干の流木・弥生式土器片が出土している。

これらの遺構・流木等のあり方からみて、当時の岸辺の川床は、すでにのべたように標高7.0m付近にあったとみられる。また水面の標高は、第１～３号遺構上面から考えて、7.4m前後とみられる。

黒色粘質土層上の各層には陶磁器をも含む各時代の遺物が混在していて、何回もの氾濫をうかがわせる。

遺構に伴う遺物は弥生式土器片が大部分で、石器はきわめて少ない。多量に出土した杭は、樹種が多様で、出土部位毎の樹種の傾向性は認められない。

黒色粘質土層内から出土した縄文式土器は、ここが当時の人々によって用いられていたことを示すとともに、福岡平野の縄文時代遺跡のあり方を考える上で、重要な資料となろう。(後藤)

Tab. 5·1　第3区出土縄文式土器一覧

No.	種類	トレンチ	層位	Fig.	No.	種類	トレンチ	層位	Fig.
J1	尖底山形押型文	O－19c	黒色粘質土層	5·37	J15	条痕口縁部	P－23b	黒色粘質土層	5·38
2	J1と同一個体か	〃	〃	〃	16	楕円押型文胴部	O－20c	〃	〃
3	〃	〃	〃	〃	17	〃 口縁部	P－20c	第19号溝内	〃
4	〃	〃	〃	〃	18	撚糸文口縁部	O－19d	黒色粘質土層	5·39
5	〃	〃	〃	〃	19	〃 底部	〃	〃	〃
6	〃	〃	〃	〃	20	〃 胴部J18·J19と同一個体	〃	〃	〃
7	〃	〃	〃	〃	21	〃	〃	〃	〃
8	〃	〃	〃	〃	22	〃	〃	〃	〃
9	〃	〃	〃	〃	23	〃	〃	〃	〃
10	〃	〃	〃	〃	24	撚紋胴部	P－23	〃	〃
11	〃	〃	〃	〃	25	刺突文胴部	Q－23b	第32号溝内	〃
12	無文尖底土器	〃	〃	5·38	26	短沈線土器胴部	P－23b	黒色粘質土層	〃
13	山形押型文口縁部	P－19a	第10号溝内	〃	27	〃	P－23b	〃	〃
14	原体条痕口縁部	P－19d	黒色粘質土層	〃					

Tab. 5·2　第3区出土弥生式土器挿図対照表

No.	種類	トレンチ	層位位	Fig.	PL.	No.	種類	トレンチ	層位	Fig.	PL.
3001	壺口縁	N－23	包含層	5·42		3041	脚	P－19a	第3号遺構	5·24	
3002	〃	〃	〃	〃		3042	壺胴部	〃	〃	〃	
3003	〃	〃	〃	〃		3043	甕口縁	P－19b	包含層	5·42	
3004	甕底部	〃	〃	〃		3044	高坏口縁	〃	南西隅黒色粘質土層直上	5·25	
3005	壺口縁	N－23b	〃	〃		3045	壺胴部	〃	〃	〃	
3006	甕口縁	O－19a	〃	〃		3046	壺口縁	〃	包含層	5·42	
3007	〃	〃	〃	〃		3047	器台	〃	〃	〃	
3008	甕頸部	〃	〃	〃		3048	甕底部	〃	南西隅黒色粘質土層直上	5·25	
3009	（欠番）					3049	〃	〃	〃	〃	
3010	甕口縁	〃	旧河川砂層	5·24		3050	壺口縁	P－19b	第1号溝	〃	
3011	甕底部	〃	〃	〃		3051	壺底部	〃	〃	〃	
3012	甕口縁	O－19b·c	〃	〃		3052	甕口縁	P－19d	包含層	5·42	
3013	壺底部	O－19d	包含層	5·42		3053	〃	〃	〃	〃	
3014	甕口縁	〃	第2号溝	5·24		3054	〃	〃	〃	〃	
3015	甕底部	〃	〃	〃	LXXXIII	3055	壺胴部	〃	〃	〃	
3016	壺頸部	O－19e	〃	〃	〃	3056	高坏脚部	〃	第1号溝	5·25	
3017	甕口縁	O－19f	包含層	5·42		3057	甕口縁	P－20a	包含層	5·43	
3018	鉢	〃	〃	〃		3058	〃	〃	〃	〃	
3019	甕口縁	〃	旧河川砂層	5·24		3059	〃	〃	第2号遺構付近	5·25	
3020	〃	〃	包含層	5·42		3060	〃	〃	包含層	5·43	
3021	〃	〃	旧河川砂層	5·24		3061	壺口縁	〃	〃	〃	
3022	壺口縁	〃	〃	〃		3062	壺頸部	〃	〃	〃	
3023	壺頸部	〃	〃	〃		3063	壺口縁	〃	第2号遺構付近	5·25	
3024	器台	〃	〃	〃		3064	〃	〃	〃	〃	
3025	〃	〃	〃	〃		3065	無頸壺	〃	〃	〃	
3026	脚付鉢小形土器	〃	〃	〃		3066	壺底部	〃	包含層	5·43	
3027	甕底部	〃	〃	〃		3067	甕口縁	〃	第2号遺構付近	5·25	
3028	甕口縁	〃	第1号溝	5·24	LXXXIII	3068	〃	〃	〃	〃	
3029	甕底部	〃	〃	〃	〃	3069	器台	〃	〃	〃	
3030	甕口縁	O－23	包含層	5·42		3070	甕口縁	P－20b	旧河川砂層	〃	LXXXIII
3031	〃	P－19a	〃	〃		3071	器台	〃	〃	〃	〃
3032	〃	〃	第3号遺構	5·24		3072	甕底部	〃	包含層	5·43	
3033	〃	〃	〃	〃		3073	鉢	P－20-c	旧河川砂層	5·25	
3034	高坏口縁	〃	〃	〃		3074	壺底部	〃	〃	〃	
3035	脚部	〃	〃	〃		3075	脚	P－22	耕土層	5·43	
3036	壺底部	〃	〃	〃		3076	器台	P－23	包含層	〃	
3037	甕底部	〃	包含層	5·42		3077	甕口縁	Q－17	〃	〃	
3038	〃	〃	〃	〃		3078	〃	〃	〃	〃	
3039	甕胴部	〃	第3号遺構	5·24		3079	（欠番）				
3040	壺頸部	〃	〃	〃	LXXXIII	3080	壺口縁	Q－19	包含層	5·43	

No.	種類	トレンチ	層位	Fig.	PL.
3081	壺底部	Q－19	包含層	5·43	
3082	甕口縁	Q－20a	〃	〃	
3083	壺口縁	〃	〃	〃	
3084	甕口縁	〃	〃	〃	
3085	（欠番）				
3086	（〃）				
3087	甕口縁	Q－20c	包含層	5·43	
3088	（欠番）				
3089	甕口縁	Q－21	第1号遺構周辺	5·26	LXXXIII
3090	〃	〃	〃	〃	
3091	壺口縁	〃	〃	〃	
3092	無頸壺	〃	〃	〃	
3093	甕口縁	〃	〃	〃	LXXXIII
3094	〃	〃	〃	〃	〃
3095	脚部	〃	〃	〃	
3096	無頸壺	〃	〃	〃	
3097	甕口縁	Q－20b	包含層	5·43	
3098	甕底部	Q－22d	〃	〃	
3099	甕口縁	Q－22d	〃	〃	
3100	〃	〃	〃	〃	
3101	〃	〃	第34号溝付近	5·26	
3102	甕口縁	〃	包含層	5·43	
3103	〃	〃	第1号遺構付近	5·26	
3104	脚部	〃	包含層	5·43	
3105	壺口縁	〃	第1号遺構付近	5·26	LXXXIII
3106	〃	〃	包含層	5·43	
3107	〃	〃	第34号溝付近	5·26	
3108	壺胴部	〃	包含層	5·43	
3109	壺底部	〃	〃	〃	
3110	鉢	〃	第9号遺構	5·26	
3111	甕口縁	〃	第1号遺構付近	〃	
3112	壺口縁	〃	〃	〃	
3113	甕口縁	〃	〃	〃	
3114	〃	〃	〃	〃	LXXXIII
3115	〃	〃	〃	〃	〃
3116	壺頸部	〃	〃	〃	
3117	高坏脚部	〃	〃	〃	
3118	鉢	〃	〃	〃	
3119	胴部片	〃	第34号溝	（図示せず）	
3120	甕口縁	〃	第1号遺構付近	5·26	
3121	壺頸部	〃	〃	〃	LXXXIII
3122	甕底部	P－23	第34号溝	〃	
3123	無頸壺	Q－23a	包含層	5·43	
3124	甕口縁	R－19b	〃	〃	
3125	鉢	〃	〃	〃	
3126	鉢	R－19b	包含層	5·43	
3127	甕底部	〃	黒色粘質土層直上	5·27	
3128	〃	R－20a	包含層	5·44	
3129	器台	R－21	〃	〃	
3130	（欠番）				
3131	壺	R－22a	杭列付近	5·27	LXXXIII
3132	鉢	〃	〃	〃	〃
3133	器台	R－22b	包含層	5·44	
3134	甕口縁	R－22c	〃	〃	
3135	〃	〃	〃	〃	
3136	甕底部	〃	〃	〃	
3137	〃	S－21b	旧河川砂層	〃	
3138	甕口縁	S－22a	黒色粘質土層直上	5·27	LXXXIII
3139	（欠番）				
3140	甕口縁	S－22a	黒色粘質土層直上	5·27	
3141	〃	〃	〃	〃	
3142	蓋	〃	〃	〃	
3143	器台	〃	包含層	5·44	
3144	甕口縁	S－22b	黒色粘質土層直上	5·27	
3145	器台	〃	包含層	5·44	
3146	甕口縁	〃	〃	〃	
3147	〃	S－21b	旧河川砂層	〃	
3148	〃	〃	〃	〃	
3149	壺口縁	S－22b	包含層	〃	
3150	甕底部	〃	〃	〃	
3151	〃	〃	〃	〃	
3152	甕口縁	S－23	黒色粘質土層直上	5·27	
3153	〃	S－23	〃	〃	
3154	〃	〃	〃	〃	
3155	甕底部	〃	〃	〃	
3156	〃	〃	包含層	5·44	
3157	〃	S－24	旧河川砂層下部	5·27	
3158	甕口縁	〃	包含層	5·44	
3159	〃	S－25	〃	〃	
3160	甕底部	〃	〃	〃	
3161	壺底部	〃	〃	〃	
3162	〃	〃	〃	〃	
3163	鉢形	T－17	〃	〃	
3164	壺肩部	U－29	〃	〃	
3165	底部	〃	〃	〃	
3166	壺口縁	P－19a	第10号溝	5·25	
3167	甕口縁	〃	〃	〃	
3168	〃	〃	〃	〃	LXXXIII
3169	〃	〃	〃	〃	〃
3170	〃	〃	〃	〃	〃

Tab. 5·3　第3区出土石器・土製品挿図対照表

No.	器種	石材	トレンチ	層位	備考	Fig.	PL.
S 1	砥石	砂岩	R－8	耕土層	投弾	5·47	
S 2	小円礫		P－19b	第4号溝	投弾？	5·36	
S 3	〃		O－19f	旧河川砂層	〃	〃	
S 4	石庖丁	頁岩質砂岩	Q－20d	第28号溝		〃	
S 5	石鏃	黒曜石	Q－22d	旧河川砂層		〃	LXXXV
S 6	剥片	サヌカイト	Q－22a	包含層		5·47	
S 7	ナイフ形石器	黒曜石	R－22	耕土層	先土器時代	6·13	LXXXV
S 8	石庖丁	頁岩質砂岩	Q－19b	包含層	未成品	5·47	〃
S 14	砥石	砂岩	O－19b	〃		5·36	
S 18	礫	〃	R－22	耕土層	砥石に利用？	5·47	

No.	器種	石材	トレンチ	層位	備考	Fig.	PL.
S32	石鏃	頁岩質砂岩	S－22b	包含層		5·47	LXXXV
S36	石錐	サヌカイト	P－23b	黒色粘質土層	縄文時代	5·41	LXXXV
S37	掻器	〃	P－23b	黒色粘質土層	〃		LXXXV
S72	蛤刃石斧	玄武岩	P－20c	第23号溝	刃部欠、今山産	5·36	LXXXV
D5	紡錘車	土製	Q－22d	旧河川砂層	半欠	5·47	LXXXV

Tab. 5·4　第3区出土石器数量表

トレンチ	層	蛤刃石斧	石鏃	打製石鍬 Ob	剥片石器 Ob	剥片石器 Sa	石核 Ob	剥片 Ob	剥片 Sa	剥片 他	削片 Ob	削片 Sa	原石 Ob	磨製石器小片	砥石	小円礫	その他・備考
N－25	包含層														1	1	
O－19a	旧河砂層							1				2					
O－19b	〃										1				1	1	
O－19f	包含層												1				
P－19a	第1号溝										1						
	旧河砂層							1	1								
P－19b	第4号溝															1	
P－20c	第23号溝	1※															※玄武岩製
P－23a	黒色粘質土層																サヌカイト剥片（縄文時代）
P－23b	〃																サヌカイト錐・掻器・剥片各1（縄文時代）
Q－19b	包含層		1※														※頁岩質砂岩、未成品
Q－20d	第28号溝		1※														※頁岩質砂岩
Q－21	包含層										1						
Q－22a	〃										2			1		1	
	第35号溝							1			1						
	黒色粘質土層																サヌカイト剥片（縄文時代）
Q－22d	包含層							2									
	旧河砂層			1		1	1	3	1								
Q－23a	耕土層										1	1					
R－19b	包含層						1	1									
R－20a	〃										1						
R－22a	耕土層							2			1				1		
R－22c	包含層				1												
S－21a	耕土層							1									
S－21b	包含層									1			1				
S－22a	耕土層										1						
S－22b	耕土・包含層		1※				1				7						※頁岩質砂岩
S－25	包含層							1						2			
不詳																	ナイフ形石器1、細石核1（先土器時代）
計		1	3	1	1	1	3	14	2	1	16	3	2	3	3	4	

Tab. 5·5　第3区出土木製品・木材一覧

No.	トレンチ	層位・位置	種別	法量 長	法量 幅	法量 厚	法量 直径	時期	材質	Fig.	PL.	備考
3001	N－19		自然流木					弥？	シイ？			
3002	〃		〃					〃〃	〃			
3003	N－23		流木					〃〃	ユズリハ			
3004	〃		〃					〃〃	シイ			
3005	N-23b		上部杭						アワブキ			きわめて新しい
3006	〃		〃						ムクロジ			〃
3007	〃		下部杭					弥？	シイ			
3008	O-19a	旧河川砂層	流木（板状）	19.5	9.0	2.7		弥·中·後葉	－			
3009	O-19b	〃	加工木(小片)					〃	ヒノキ			樹脂細胞不明
3010	O-19d	第2号溝	丸木	16.5			4.5	〃	エノキ			
3011	〃	〃	加工木		6.5	2.1		〃	シイ			

No.	トレンチ	層位・位置	種別	法量 長	幅	厚	直径	時期	材質	Fig.	PL.	備考
3012	O-19d	第2号溝	丸木杭	30.0		5	3.0	弥・中・後葉	カシ			
3013	〃	〃	〃	61.0			4.5～5.0	〃	〃			
3014	〃	〃	〃	32.5			5.0	〃	アワブキ			
3015	〃	〃	〃	43.0			5.2～4.0	〃	シイ			
3016	〃	〃	自然木?	20.0			5.5×6.0	〃	〃			
3017	O-19e	〃	自然木					〃	—			乾燥収縮
3018	O-19f	第1号溝	鍬破片					〃	カシ	5・28	LXXXVI	
3019	〃	第16号溝	加工木片	19.0	11.0	5.5		〃	シイ			
3020	P-19a	第3号遺構	丸木杭	30.2			6.0	〃	カシ			浮遊
3021	〃	第9号遺構	丸木杭か	23.0			5.0	〃	?			
3022	〃	〃	〃	21.0			5.0	〃	シイ			
3023	〃	第3号遺構	自然木	16.5			5.0	〃	カシ			
3024	〃	〃	割杭	27.5	5.0	4.0		〃	タブノキ?			
3025	〃	〃	杭(小片)	17.0			2.2×1.6	〃	ウワミズザクラ			
3026	〃	第3号遺構付近砂層	自然流木	14.3			1.8	〃	ユズリハ			
3027	〃	〃	〃	15.6			1.4	〃	ヤナギ?			
3028	〃	〃	〃	16.6	4.5	3.4		〃	—			
3029	〃	〃	〃	19.0			3.0	〃	ユズリハ			
3030	〃	〃	〃	9.3			1.8×1.5	〃	カシ			
3031	〃	〃	〃	20.2			2.5	〃	ヤナギ			
3032	〃	〃	〃	4.6			4.0×3.4	〃	—			
3033	〃	〃	流木(丸木杭)	10.8			4.5×3.2	〃	シイ			
3034	〃	〃	自然流木				3.7	〃	ヤナギ			
3035	〃	〃	〃	15.0			2.5	〃	?			
3036	〃	〃	〃	13.5			5.3	〃	ヤナギ			
3037	〃	第3号遺構	角杭	34.5	8.0	4.1		〃	クリ			折損、下部はない
3038	〃	〃	丸木杭	20.2			7.6×6.0	〃	〃 ?			〃
3039	〃	〃	角杭	22.0	6.3	4.8		〃	〃			〃
3040	〃	〃	板状杭					〃	シイ			
3041	〃	〃	丸木杭	13.5			7.0	〃	クリ?			折損、下部はない
3042	〃	〃	〃	32.6			6.0×6.7	〃	〃			
3043	〃	第3号遺構付近砂層	自然流木					〃	〃 ?			
3044	〃	〃	〃					〃	シイ			
3045	〃	〃	〃					〃	〃			
3046	〃	〃	〃					〃	〃			
3047	〃	〃	〃					〃	エノキ			
3048	〃	〃	流木(丸木杭)	20.0			5.0	〃	?			
3049	〃	第3号遺構	丸木杭	18.5			5.5	〃	カキノキ			折損、下部はない
3050	〃	第3号遺構付近砂層	〃	11.0			5.0	〃	クリ			〃
3051	〃	〃	〃	13.0				〃	〃			〃
3052	〃	〃	自然流木	12.0			4.3	〃	チシヤノキ			
3053	〃	〃	〃	25.0			7.0×6.5	〃	カシ			
3054	〃	〃	〃	8.0			5.0	〃	カキノキ			
3055	〃	〃	〃	10.0			1.7	〃				つる茎
3056	〃	〃	流木(杭?)					〃	カキノキ			
3057	〃	〃	自然流木	27.5			2.3	〃	エノキ			
3058	P-19b	第1号溝	加工木(半割)	43.7	6.0	2.9		〃				樹皮
3059	〃	第5号遺構	流木	50.5	12.2	7.0		〃	クリ			
3060	〃	第1号溝	加工木	45.1	10.2	6.3		〃	〃			
3061	〃	〃	〃	39.5			8.2×6.3	〃	カシ?			
3062	〃	〃	自然木?	13.0			7.0	〃	〃 ?			
3063	〃	〃	加工木	60.2	7.2	2.9		〃	シイ?			小孔あり
3064	P-20a	東側砂層	加工木片	29.0	9.0	7.0		〃	ケヤキ			
3065	〃	〃	角杭(?)片	29.0	5.0	3.0		〃	クリ			
3066	〃	〃	加工木片	15.0	3.0	2.5		〃	〃			
3067	〃	〃	〃	15.0	6.5	5.0		〃	カシ?			
3068	〃	〃	自然木				6.0	〃	ムクノキ			
3069	〃	〃	〃				6.0×7.0	〃	ヤマモモ			
3070	〃	〃	〃					〃	?			根の部分

No.	トレンチ	層位・位置	種別	法量 長	幅	厚	直径	時期	材質	Fig.	PL.	備考
3071	P－20a	東側砂層	自然木				3.2×2.0	弥・中・後葉	クスノキ			
3072	〃	〃	〃				4.3	〃	ウツギ			
3073	〃	〃	〃				2.0	〃	サイカチ			
3074	〃	〃	〃				1.6	〃	?			
3075	〃	〃	〃				2.0	〃	ヤナギ			
3076	〃	〃	角杭	38.0	4.5	3.5		〃	クリ			
3077	〃	第1杭列	丸木杭	74.0			7.0～7.5	〃	アワブキ			
3078	〃	〃	〃	32.0			7.0	〃	〃			
3079	〃	〃	角杭	29.0	8.5	5.0		〃	クリ			
3080	〃	〃	〃	31.8	6.6	4.0		〃	〃	5·30		
3081	〃	〃	丸木杭	41.8			4.8	〃	タブノキ			
3082	〃	〃	〃	37.5			4.8	〃	ユズリハ			
3083	〃	第2杭列	角杭	91.0	9.1	6.2		〃	クリ			
3084	〃	〃	〃	70.0	9.0	6.0		〃	〃			
3085	〃	〃	丸木杭	93.0			4.5	〃	カシ			
3086	〃	〃	割杭	68.5	8.0	3.5～4.0		〃	ユズリハ			
3087	〃	〃	角杭	107.0	8.5	6.4		〃	シイ	5·30	LXXXVIII	
3088	〃	〃	板状杭	64.6	9.2	3.4		〃	〃	5·30		
3089	〃	〃	割杭	71.0	8.0	5.0		〃	〃			
3090	〃	〃	丸木杭	33.7		6.2×5.9		〃	〃			
3091	〃	第3杭列	〃	55.8		24.0		〃	ユズリハ			
3092	〃	〃	角杭	53.5	12.5	6.1		〃	シイ			
3093	〃	〃	〃	45.6	7.0	6.5		〃	〃			
3094	〃	〃	板状杭	23.0	14.0	6.0		〃	〃			
3095	〃	〃	角杭	83.0	11.6	7.0		〃	〃	5·30	LXXXVII	
3096	〃	〃	〃	63.2	14.0	6.2		〃	〃	5·30	LXXXVI	
3097	〃	〃	〃	23.0	8.0	6.0		〃	〃			
3098	〃	〃	丸木杭	59.0			7.0	〃	カシ			
3099	〃	第4杭列	割杭	71.0	6.5	5.0		〃	クリ			
3100	〃	〃	角杭	24.9	6.6	5.3		〃	シイ			
3101	〃	〃	〃	32.8	8.8	5.5		〃	〃	5·31		
3102	〃	〃	〃	86.5	7.0	6.5		〃	〃			
3103	〃	〃	丸木杭	19.5			4.5	〃	ユズリハ			
3104	〃	〃	割杭	33.5	7.0	4.0		〃	アワブキ			
3105	〃	〃	丸木杭	38.8			7.4	〃	ユズリハ			
3106	〃	〃	〃	40.5			6.8	〃	タブノキ			
3107	〃	〃	角杭	41.0	5.5	4.5		〃	クリ			
3108	〃	第5杭列	〃	44.5	7.2	5.0		〃	〃			
3109	〃	〃	丸木杭	97.3			9.8	〃	－	5·31	LXXXVIII	
3110	〃	〃	割杭	64.0	8.0	4.0		〃	アワブキ			
3111	〃	〃	角杭	28.5	8.2	5.6		〃	シイ			
3112	〃	〃	〃	79.9	7.6	6.9		〃	クリ	5·31	LXXXVII	
3113	〃	〃	丸木杭	91.2			4.1	〃	アワブキ	5·31		
3114	〃	第6杭列	板状杭	24.2	11.0	4.2		〃	シイ			
3115	〃	〃	角杭	43.9	5.8	4.8		〃	〃	5·31	LXXXVII	
3116	〃	〃	丸木杭	24.0			4.5	〃	モチノキ			
3117	〃	〃	〃	56.0			6.7	〃	カキノキ			
3118	〃	東側砂層	流木					〃	－			杭か
3119	〃	〃	〃	14.0			6.0	〃	エノキ			〃
3120	〃	〃	〃					〃	シイ			
3121	〃	第6杭列	板	66.8	15.1	3.0		〃	クスノキ	5·31	LXXXVI	
3122	P－20b		丸木杭	16.0			3.8	〃	アワブキ			
3123	〃		半割杭	29.0	5.0	2.5		〃	?			収縮材
3124	〃		丸木杭	14.3			3.8	〃	アオダモ			
3125	〃	東側砂層	流木	35.5			5.0	〃	アオダモ?			
3126	〃	〃	〃	26.5			4.8	〃	カマツカ			
3127	〃	〃	〃	21.0	7.5	3.0		〃	クリ			板状
3128	〃	〃	〃					〃	シイ			小片
3129	〃	〃	〃	21.0	7.3	3.6		〃	〃			

No.	トレンチ	層位・位置	種　別	法量 長	幅	厚	直径	時期	材　質	Fig.	PL.	備　考
3130	P−20b	東側砂層	流　木	16.0	9.7	4.3		弥・中・後葉	シ　イ？			裂いてある、収縮材
3231	〃	〃	〃				2.5×3.0	〃	アオダモ？			自然木
3132	〃	〃	〃	14.0			4.5	〃	シ　イ			丸木杭？
3133	〃	〃	〃				2.5	〃	？			自然木、収縮材
3134	〃	〃	〃	11.5			4.5	〃	アオダモ？			丸木杭？
3135	P20b〜c	第7号遺構	丸木杭	32.0			4.8	〃	ユズリハ			
3136	〃	第8号遺構	横　木	52.0	6.5	4.0		〃	−			
3137	〃	〃	〃	34.2	8.5	3.3		〃	シ　イ			
3138	〃	第7号遺構	〃	78.0	10.0			〃	〃			
3139	P−20c	第6号遺構	板状杭	66.5	13.5	4.2		〃	〃	5・33	LXXXVI	
3140	〃	〃	割　杭	89.3	12.2	10.0		〃	ク　リ	5・33	LXXXVIII	
3141	〃	〃	角　杭	84.0	16.1	10.7		〃	ス　ギ	5・32	LXXXVII	
3142	〃	〃	割　杭	58.0	9.0	6.0		〃	ク　リ			
3143	〃	〃	角状杭	64.3	9.1	4.9		〃	シ　イ	5・33		
3144	〃	〃	丸木杭	65.2			5.0	〃	カ　シ	5・33		
3145	〃	〃	〃	45.9			8.1	〃	−	5・32	LXXXVII	
3146	〃	〃	角　杭	50.2	6.8	5.0		〃	シ　イ			
3147	〃	〃	割　杭	94.1	9.3	7.0		〃	ス　ギ	5・33	LXXXVIII	
3148	〃	〃	角　杭	36.5	10.0	5.4		〃	シ　イ			
3149	〃	〃	割　杭	82.5	13.1	8.3		〃	〃	5・32	LXXXVII	
3150	〃	第19号溝	〃	90.4	9.5	6.3		〃	ク　リ	5・32	LXXXVIII	
3151	〃	〃	角　杭	21.7	5.5	5.5		〃	シ　イ		LXXXVII	
3152	〃	〃	〃	42.2	7.6	6.0		〃	〃			
3153	〃	〃	割　杭	52.0	6.8	4.3		〃	ク　リ	5・34	LXXXVII	
3154	〃	〃	丸木杭	62.8			6.5	〃	ス　ギ			
3155	〃	〃	板状杭	102.4	10.0	5.7		〃	ク　リ	5・32	LXXXVIII	
3156	〃	第23号溝	角　杭	52.1	9.3	6.2		〃	ス　ギ	5・34	LXXXVII	
3157	〃	第19号溝	丸木杭	15.0			5.5	〃	シ　イ			
3158	〃	〃	〃	29.0			5.0×4.0	〃	−			2110±100B. P. (Gak 4549)
3159	〃	〃	〃	25.5			4.0	〃	シ　イ			
3160	〃	〃	〃	22.5			2.7	〃	ユズリハ			
3161	〃	〃	〃					〃	−			1920±80B. P. (Gak 4550)
3162	〃	〃	〃					〃	シ　イ			
3163	(欠番)											
3164	P−20c	第6号遺構	横　木		8.0	4.0		弥・中・後葉	シ　イ			とりあげ前に破損
3165	〃	第19号溝	割　杭	68.0	9.5	4.3		〃	−			折れて浮遊
3166	〃	〃	角　杭	31.0	7.0	5.0		〃	ク　リ			〃
3167	〃	〃	〃	36.5	8.0	4.5〜5.0		〃	〃			〃
3168	〃	〃	板状杭	68.0	13.5	4.0		〃	−			〃
3169	P−23	第41号溝際	角　杭	70.6	7.0	6.8		〃	ク　リ	5・35	LXXXVII	
3170	〃	〃	丸木杭	52.0			6.0	〃	〃			
3171	〃	第34号溝	木　器	18.8	3.7	2.0		〃	−	5・29	LXXXVII	
3172	〃	第41号溝際	丸木杭	22.0			3.0	〃	？			
3173	〃	〃	〃	40.2			5.0×5.5	〃	？			
3174	〃	〃	〃	23.3			3.0×2.7	〃	カキノキ			
3175	〃	〃	〃	14.0			5.0	〃	シ　イ			
3176	〃	〃	〃	26.8			6.5	〃	アワブキ			
3177	〃	〃	割　杭	21.0	5.1	2.9		〃	シ　イ			
3178	〃	〃	板状杭	39.9	9.5	3.8		〃	〃			
3179	〃	〃	〃	50.5	15.1	4.7		〃	カ　シ			
3180	Q-19a	第21号溝東側	丸木杭	17.0				〃	ゴンズイ			
3181	〃	〃	〃	8.0			5.5	〃	カ　シ			
3182	Q-19b	〃	〃	40.4			3.7	〃	ヤナギ	5・34	LXXXVII	
3183	〃	〃	〃	67.0			4.0	〃	〃			
3184	〃	〃	〃	15.0			4.0	〃	リョウブ			
3185	〃	〃	〃	21.5			5.5	〃	〃			
3186	〃	〃	〃	13.0			2.5	〃	−			
3187	〃	〃	〃	68.0			4.0	〃	ウツギ？			
3188	〃	〃	〃	60.0			4.3	〃	ユズリハ	5・34	LXXXVI	

No.	トレンチ	層位・位置	種別	法量 長	幅	厚	直径	時期	材質	Fig	PL	備考
3189	Q-19 b	第21号溝東側	丸木杭	16.0			3.5	弥・中・後葉	シイ			
3190	〃	〃	〃	24.0			6.0	〃	カシ			
3191	〃	〃	〃	34.9			3.2	〃	タブノキ？	5・34		
3192	〃	〃	〃	43.0			6.0	〃	カシ			
3193	〃	〃	〃(小片)					〃	シイ			
3194	〃	〃	〃	52.7			4.0	〃	ゴンズイ	5・34		
3195	〃	〃	〃					〃	タイミンタチバナ			
3196	〃	〃	〃	32.5			3.5	〃	アワブキ			
3197	〃	〃	〃	51.5			4.0	〃	タイミンタチバナ?			
3198	〃	〃	板状杭	28.5	5.5	2.6		〃	シイ			
3199	〃	〃	丸木杭	33.0			5.5	〃	ヤマモモ			
3200	Q-20 a	第26号溝内	杭(先端のみ)	16.5			7.0	〃	シイ			
3201	〃	〃	杭(割り)	51.5	7.5	5.0		〃	〃	5・35		
3202	〃	〃	丸木杭	40.5			4.0	〃	ユズリハ			
3203	〃	〃	〃	65.2			8.0	〃	シイ	5・35		
3204	〃	〃	角杭	61.4	5.4	4.2		〃	クスノキ	5・35		
3205	〃	〃	丸木杭	56.0			3.6	〃	ゴンズイ			
3206	〃	〃	〃	41.7			7.0	〃	シイ			
3207	〃	〃	角杭	13.5	2.5	2.2		〃	クリ			
3208	(欠番)											
3209	Q-20 b	第27号溝	丸木杭	39.0			7.0	弥・中・後葉	アワブキ			
3210	Q-20 d	第21号溝東側	矢板状杭	39.6	9.0	2.8		〃	クリ			
3211	〃	〃	角杭？	35.0	8.0	5.0		〃	クリ？			
3212	〃	〃	杭(半割)	37.0	9.8	6.5		〃	クリ			
3213	〃	〃	角杭	11.0	3.4	2.5		〃	〃			
3214	〃	〃	〃	89.1	9.6	5.4		〃	スギ	5・34	LXXXVII	
3215	〃	〃	丸木杭	58.4			4.5	〃	ムクノキ	5・34		
3216	〃	〃	矢板状杭	20.4	5.9	2.6		〃	クリ			
3217	〃	〃	角杭	51.0	4.4	2.7		〃	〃			
3218	Q－21	第1号遺構付近	木器	51.2	12.1	3.1		〃	カキノキ	5・29	LXXXVI	
3219	〃	〃	材	50.0	3.5	3.0		〃	カシ			浮遊
3220	〃	第1号遺構	丸太 1				30.0	〃	ムクノキ			
3221	〃	〃	丸太 2				30.0	〃	〃			
3222	〃	〃	板状杭	81.0	11.0	4.0		〃	クリ			
3223	〃	〃	丸木杭	43.5			5.5×6.0	〃	シイ			
3224	〃	〃	〃	48.0			6.0	〃	〃			
3225	〃	〃	〃	87.0			8.0	〃	〃			
3226	〃	〃	〃	89.0			5.0×5.5	〃	ユズリハ？			
3227	〃	〃	〃	150.0			8.0×9.0	〃	ユズリハ？			
3228	〃	〃	〃	122.0			5.5×6.0	〃	カシ			
3229	〃	〃	〃	144.0				〃	ユズリハ			
3230	〃	〃	〃	143.5				〃	シイ			
3231	〃	〃	〃	55.0			8.5	〃	リヨウブ			
3232	〃	〃	〃	77.3			8.4	〃	〃	5・35		
3233	〃	〃	角杭	91.5	11.5	8.0		〃	クリ			
3234	〃	〃	丸木杭	106.5			7.0～5.0	〃	－			樹皮
3235	〃	〃	〃	135.0			6.0	〃	クヌギ			
3236	〃	〃	〃	81.5			6.0	〃	〃			
3237	〃	〃	矢板状杭	49.0	7.0	2.5		〃	シイ			
3238	〃	〃	しがらみ小木					〃				ことなるもの6片あり
3239	〃	第1号遺構付近	丸木杭	49.0			7.0	〃	クヌギ			
3240	〃	〃	〃	60.6			6.0	〃	〃			
3241	〃	〃	自然流木				4.5	〃	シイ			
3242	〃	〃	流木(タテ割り)	50.3	5.8	5.2		〃	カシ			
3243	〃	〃	自然流木				6.5	〃	ヤマモモ			
3244	〃	〃	流木(小片)					〃	コナラ			
3245	〃	〃	流木(角杭)	32.5	7.0	5.0		〃	シイ			
3246	〃	〃	流木(自然木)	34.0			6.0	〃	〃			
3247	〃	〃	流木(〃)				5.5	〃	ヤナギ			

No.	トレンチ	層位・位置	種　別	法量 長	幅	厚	直径	時期	材　質	Fig.	PL.	備　考
3248	Q－21	第１号遺構付近	丸木杭	26.0			6.5	弥・中・後葉	タブノキ			浮遊
3249	〃	〃	流木(半割杭?)	23.5	6.5	3.0		〃	カシ			〃
3250	〃	〃	丸木杭	24.0			3.7	〃	クリ			〃
3251	〃	〃	流木(半割杭?)	35.0				〃	〃			
3252	〃	〃	自然流木				3.5	〃	?			
3253	〃	〃	〃				4.0×3.5	〃	クリ			
3254	〃	〃	〃				4.0×3.0	〃	リョウブ			
3255	〃	〃	〃				3.8×3.3	〃	アワブキ			
3256	〃	〃	〃				3.3	〃	エノキ			
3257	〃	〃	〃				3.7×4.1	〃	クリ			
3258	〃	〃	〃				2.8×2.3	〃	ソヨゴ			
3259	〃	〃	〃				1.7	〃	ヤナギ			
3260	〃	〃	〃				2.0	〃	クヌギ			
3261	〃	〃	木　器	36.7	16.9	13.0		〃	チシャノキ?	5·29	LXXXVI	
3262	Q－22	第34号溝付近	丸木杭(片)	18.0			6.0	〃	クリ			
3263	〃	〃	〃	15.5			4.5	〃	〃			
3264	〃	〃	〃	16.5			3.5	〃	〃			
3266	Q-22b	旧河川砂層	流木(板状杭?)	8.0	4.5	1.5		〃	エゴノキ?			
3266	〃	〃	丸木杭	24.0			3.8	〃				
3267	〃	〃	流　木				1.5	〃	グミ?			
3268	〃	〃	丸木杭	12.2			3.7	〃	カマツカ?			
3269	〃	〃	流木(丸木杭?)				3.5	〃	ホソバタブ			
3270	Q-22c	〃	自然流木					〃	ヤナギ			
3271	〃	〃	〃				2.0～2.5	〃	〃			
3272	〃	〃	〃					〃	タブノキ			一部やけている
3273	〃	〃	〃				1.5	〃	ヤナギ			
3274	〃	〃	〃				4.0	〃	〃			
3275	〃	〃	〃					〃	シイ			
3276	〃	〃	〃				6.5×7.0	〃	ヤナギ			
3277	〃	〃	〃	150.0			7.0	〃	〃			
3278	〃	〃	〃					〃	〃			
3279	〃	〃	〃					〃	〃			
3280	〃	〃	〃	48.0			9.0	〃	〃			
3281	〃	〃	〃	50.0			6.0×7.0	〃	〃			
3282	〃	〃	〃				4.0	〃	〃			
3283	〃	〃	〃					〃	サイカチ?			
3284	〃	〃	〃				3.0×4.0	〃	クヌギ			
3285	〃	〃	〃	29.0			2.7	〃	ヤナギ			
3286	〃	〃	〃	47.2			4.2	〃	シイ			
3287	〃	〃	〃	32.0			4.0×4.8	〃	ヤナギ			
3288	Q-22 d	北側砂層	又　鍬					〃	カシ	5·28	LXXXVI	
3289	〃	第９号遺構	三又鍬					〃	〃	5·28	LXXXVI	
3290	〃	〃	丸木杭	70.0			4.0	〃				
3291	〃	〃	〃	15.0			2.5	〃	アワブキ			
3292	〃	〃	〃	17.5			2.5	〃	〃			
3293	〃	〃	〃					〃	クスノキ			
3294	〃	〃	丸太材	61.3			7.7×9.7	〃	カシ	5·35	LXXXVI	
3295	〃	〃	角　杭	48.5	6.3	6.0		〃	シイ	5·34		
3296	〃	〃	丸木杭	60.0			6.0	〃	タブノキ			
3297	〃	〃	〃	34.5			6.0	〃	シイ			
3298	〃	〃	〃	51.5			4.5	〃	アワブキ			
3299	〃	第34号溝	板状杭	16.5	5.8	1.9		〃	シイ			
3300	〃	〃	角杭(タテ割)	84.0	9.4	6.7		〃	クリ	5·35		
3301	〃	〃	〃	44.1	7.5	4.3		〃	〃	5·34		
3302	〃	第９号遺構	〃	51.5	7.2	6.5		〃	シイ			
3303	〃	第34号溝	〃	47.0	7.0	6.5		〃	〃			
3304	〃	第35号溝	〃	38.6	13.4	5.8		〃	〃	5·34		
3305	〃	〃	〃	55.0	9.0	4.5		〃	?			
3306	〃	〃	丸木杭	66.0			6.5×4.8	〃	シイ			

No.	トレンチ	層位・位置	種　別	法量				時期	材　質	Fig.	PL.	備　考
				長	幅	厚	直径					
3307	Q-22d	北側砂層	丸木杭	20.0			4.0×4.3	弥中・後葉	シ　イ			
3308	〃	〃	〃	31.0			4.0×5.4	〃	〃			
3309	〃	〃	〃	34.5			4.0×3.2	〃	カキノキ			
3310	〃	〃	板状杭	68.5	7.0	3.0		〃	ク　リ			
3311	〃	〃	丸木杭	41.5			4.7×4.3	〃	ユズリハ			
3312	R−19b	砂　層	〃	34.0			7.0	〃	シ　イ			
3313	〃	〃	〃	44.0			5.0~6.0	〃	クスノキ			
3314	〃	〃	杭(小片)					〃	〃			
3315	R−22	〃	自然流木					〃	ケヤキ			
3316	〃	〃	杭	11.0	5.0	4.2		〃	カ　シ			
3317	〃	〃	自然流木	42.0				〃	マツ(二葉松)			
3318	S−22a	〃	丸木杭	30.0			4.0	〃	イヌガヤ			
3319	〃	〃	自然流木	50.0				〃	エノキ			
3320	S−21b	〃	加工木(流木)	132.0	8.0	6.5		〃	シ　イ			
3321	S−23	〃	流　木					〃	サイカチ?			
3322	〃	〃	流木(矢板状)	62.0	14.5	3.0		〃	ク　リ			
3323	〃	〃	流木(角材状)	13.5	4.8	2.6		〃	〃			

No.の前のWは省略。
樹種は島倉巳三郎氏による。

第 6 章

第 4 区 の 調 査

第1節 概 観

第4区は発掘地の北西部分にあり、J～V－1～16区の範囲である。地表高は東南部(約8.25m）から北西方向へ次第に低くなり、北西端では7.6mほどである（地図2、Fig.6･1）

発掘したトレンチ・グリッドは、J－9（6×3m)、J－16・17(3.5×4m)、K－8（17×4m)、K－13（20×3m)、K－16（15×3.5m)、M－8a（4×4m)、M－8b（3×3m)、M－8c（9×2m)、M－8d（9×3m)、M－9a（3×3m)、M－9b（10×2m)、M－11・M－14・M－17（各々4×4m)、N－8（20×3m)、N－14（2×15m)、0－3（2×8m)、0－6a（3×12m)、0－6b（3×9m)、0－7a（15×3m)、0－7b（13×3m)、0－14（2×12m)、P－3a（15×2～4m)、P－3b（2×26m)、P－6（2×17m)、P－7（19×2～4m)、P－10・P－14（各々4×4m)、P・Q－10（2×27m)、Q－7（3×10m)、Q－8（3×10m)、Q－9a・9b（3×20m)、R－8（2×21m)、R－10（2×13m)、S－2・4・7・10・13・16（各々4×4m）で、発掘総面積1176.5m²に及ぶ。ボーリング調査はⅣ－3～7・Ⅴ－1～4の計9か所で行った。

この区では少数のトレンチ・グリッドで杭列・溝が認められた。（後藤）

1 層 位 (Fig.6･2、PL.LXXXIX、XC)

第3区にあった旧河川のつづきがこの区にも残っている。旧河川の東側ではM－8とM－9区の各グリッド・K－8トレンチ・J－9トレンチ付近に黒色粘質土層があり、その上面標高は約7.1mである(K－8トレンチ・M－8aグリッドの第7層)。この層の西側には旧河川の深い砂層堆積がある。黒色粘質土層と旧河川砂層との境は、M－8b・M－9bトレンチでは黒色粘質土層が次第に低くなって砂層に移るが、K－8トレンチ北端・M－8cトレンチ北端・M－11グリッドでは黒色粘質土が急激に落ち込んでいる。黒色粘質土層下は暗黄灰色砂や黄灰褐色～青灰色粘質土となる(Fig6・2のK－8トレンチ・M－8aグリッドの第8・第9層)。この黒色粘質土層はJ－9・10、K－8～10、M－8～11区付近にのみ分布するようである。その南側のK－13トレンチやJ－16・17グリッドでは黒色粘質土層はなく、暗灰色粘土の厚い堆積である。これら黒色粘質土層・暗灰色粘土層の上は耕作土層まで砂層・砂質土層・粘質土層が複雑に堆積していて、各時代の遺物を少数包含している。

旧河川内にあたるN－8トレンチ、P－10グリッド、P・Q－10トレンチ、N－14トレンチ、

O－14トレンチ、M－14グリッド、M－17グリッドでは表土下に厚い砂層がある。

旧河川の西側には全面に黒色粘質土層がひろがっている。(Fig.6・2のO－6a・P－7トレンチ)。これは第3区にみられた黒色粘質土層のつづきである。この層の上面標高を推定すればFig.5・9のようになる。旧河川に近い東側では標高6.5～6.8mであり、西側へ高くなり、諸岡川に近い部分では7.4～7.5m以上になっている（ボーリングⅠ－21・Ⅳ－7・Ⅴ－4）。S－13グリッド付近からボーリングⅠ－16方向へと、ボーリングⅠ－19、T－17トレンチ方向の両方向に黒色粘質土が谷状に低くなったところがあり、この部分は旧河川の支流があったか、旧河川につらなる泥湿地であったと推定される。これについてはすでにふれた（第5章第1節1）。その北側8～10ラインでは北東方向へ黒色粘質土層が尾根状に高くなっている。

旧河岸近くのP－4・5区付近は少し高くなっていて、P－7トレンチからQ－2～6区は、谷状になっている。そしてP－3bトレンチの中央より東側では黒色土がなくなり砂層・粘土層にかわっている（Fig.6・2、P－3bトレンチ北壁)。第4区の旧河川西側遺構はこのP－4・5区付近の黒色粘質土の高まりの周囲に限られている。

この西側の黒色粘質土層の上は耕作土層まで氾濫原を示す砂・粘質土の堆積でおおわれていて、包含遺物は各時代のものが混在している。　（後藤）

2　遺構・遺物の分布（Fig.6・1）

旧河川の東側ではM－8a・b・c、M－9a・bの各トレンチ・グリッドに1列の杭列が検出された。旧河川の西側ではO－6a・6b・O－7b、P－7トレンチに溝と杭群が、P－3a・3b、O－3トレンチに杭列と黒色粘質土を切る溝状の砂層があった。

第4区で出土した遺物は、他の区にくらべるときわめて少ない。旧河川の砂層中には弥生式土器片から江戸時代の陶器片までが混在しており、層位的な分離はできない。この点は耕作土層以下、黒色粘質土層上の各層出土の遺物についても同様で、氾濫により各時代の遺物が埋没していることが明らかである。黒色粘質土層直上および層内からは遺物は検出されていない。旧河川の岸辺に相当する黒色粘質土層際の砂層中からは若干の流木が出土している（M－11グリッド・P－7トレンチ)。　（後藤）

第2節　遺　構

1　M－8・9区の杭列（Fig.6・3）

M－8a・8b・8c・8d、M－9a・9bの各グリッド・トレンチでは黒色粘質土層に打ち込んだ杭列が検出された。M－8dトレンチのほぼ中央部で黒色粘質土層は急激に落ち込んで砂層になる。この落ち込み際には杭が1本打ち込まれている。それから約6mはなれたM－8bグリッド北端

からM－9bトレンチまで、ほぼ北北西～南南東方向にやや蛇行しながら1列の杭列があり、総計42本の丸木杭（径3～4cm）が黒色粘質土層に打ち込まれている。検出した杭列全長は約18mである。各杭の上端はすでに失われているが、現存上端は標高7～7.2mにあり、黒色粘質土層上にわずかに頭を出している程度である。下端は7～6.7mにある。杭が打ち込まれた黒色粘質土層は北側で急に落ちるが、西側と南西側へはゆるやかに低くなる（M－8d・M－9bトレンチ）。杭列のある各トレンチ・グリッド内で黒色粘質土層には溝その他の掘り込みはなく、杭列の性格は明らかでない。また杭列の周辺から遺物は出土せず、その時期は明らかでない。

この杭列の打ち込まれた黒色粘質土は、第4区西側にひろがる黒色粘質土にくらべ粘質が弱く、パサパサしており、その形成が第4区西側から第3区にひろがる黒色粘質土層、第2区・第1区の弥生時代前期の遺物・遺構を包含する黒色粘質土とは明らかにことなっている。また杭列が打ち込まれた当時の地表標高は黒色粘質土上面とほぼ同じ7.1m前後とみられる。杭のつくり方も第2・3区の弥生時代の杭とはことなるようにみられ、残りもよい。こうした点から、この杭列は歴史時代のものであり、P－3区・P－6区付近の杭列・溝に前後する時期と推定できよう。（後藤）

2　O－6区・P－7区の杭列と溝（Fig.6・4）

O－6a・6b、O－7b、P－7トレンチで溝と杭列が検出された。O－6aトレンチでは地表下0.6～0.8m（標高7～7.2m）の黒色粘質土層中にほぼ南北方向の溝状遺構3本と、トレンチ西側によって、これら溝にほぼ直交する杭列を検出した。

溝状遺構は西から第1号溝（幅0.4m・深さ約10cm、下底部標高約7m）・第2号溝（幅1.4～2.2m・深さ20cm強、下底部標高6.8m以下）・第3号溝（幅0.9～1.2m・深さ30cm、下底部標高6.9m以下）である。第3号溝の東側1～1.2mからは砂層となっている。これらの溝は、人為的に掘ったというより自然に生じた小流路ともみられる。第2号溝の底と黒色粘質土上面からは黒色瓦器質土器2個体が出土した（G403・404）。

杭列は、トレンチ西側の第2号溝内に集中し、溝を斜めに横切って7本、溝の東側に1本が検出された。杭はいずれも直径3～4cmの丸木杭である。残存する杭頂部の高さは6.7～7mである。自然の流路を何らかの目的で利用するために杭を打ったと思われるが、溝の全体的拡がりを追求しえなかったため、溝・杭列の機能ははっきりしない。O－6bトレンチでは、西側で黒色粘質土と褐色粗砂層との境界が検出され、東側は礫を含む砂層となっている。また北側土層断面にはO－6aトレンチにみられたのと同様の小溝が黒色粘質土中に数本みられ、同トレンチの溝状遺構とつながると思われるが、平面的に明確な形態をとっていない。O－6a・6bトレンチ西側のP－6トレンチの黒色粘質土層には、これら溝のつづきもしくは関連あるとみられる溝等の遺構はない。P－7トレンチ（Fig.6・4）の南端には黒色粘質土と旧河川砂層の境があらわれ、砂層中に若干の自然流木が出土した。本トレンチの黒色粘質土（Fig.6・2のP－7トレンチ第17層）には不規則に4本の丸木杭が打ち込まれ、また北側の黒色粘質土層上には流木数

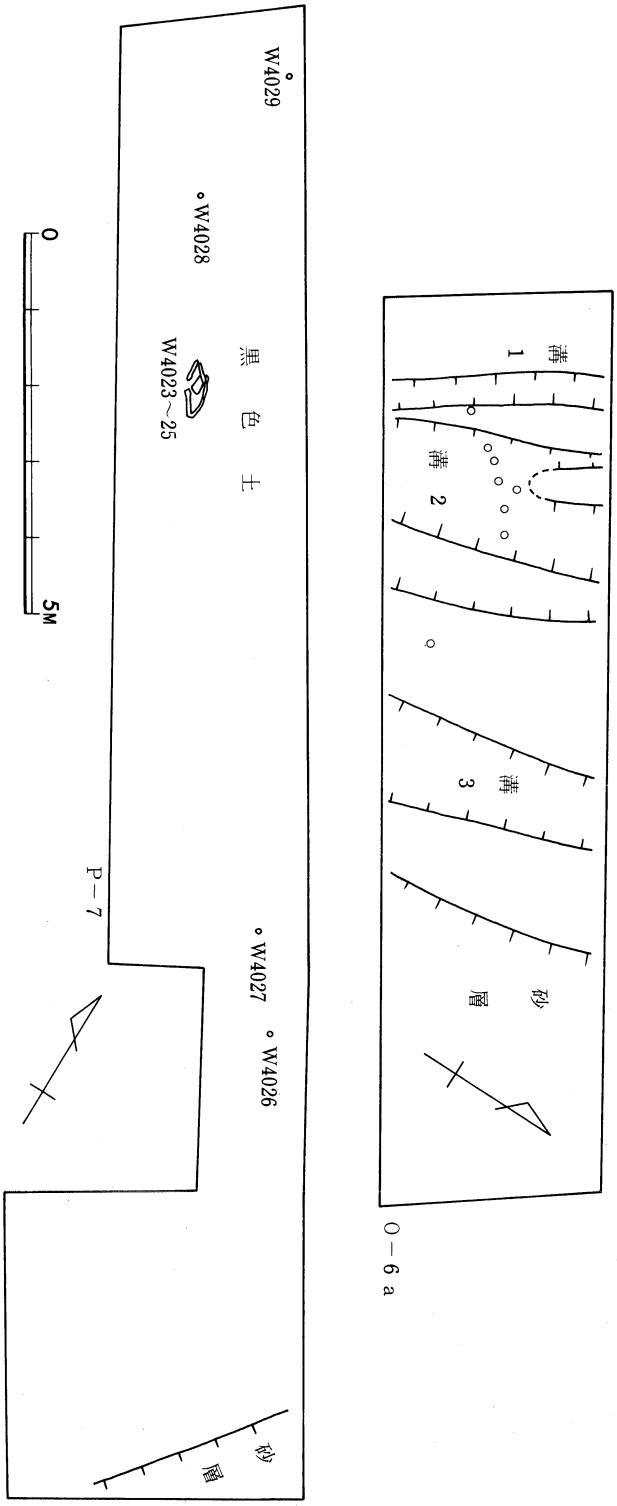


Fig.6・4　O－6aトレンチ・P－7トレンチ平面図

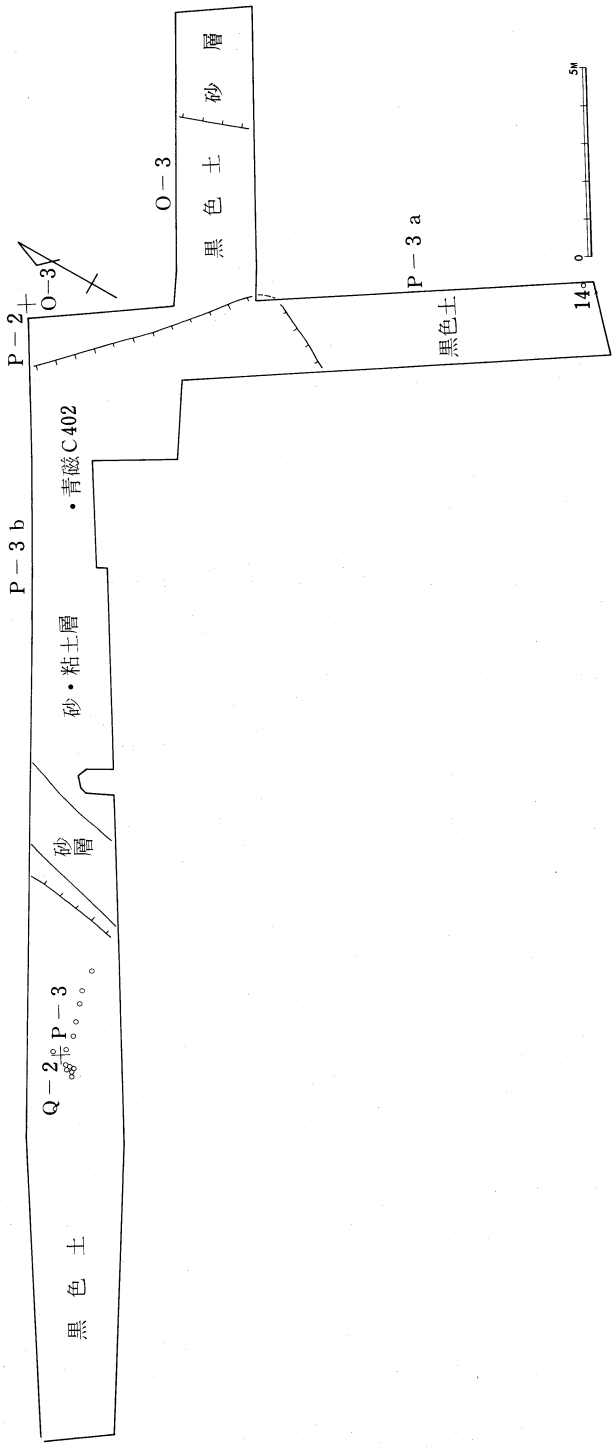


Fig.6·5　P－3a・3bトレンチ・O－3トレンチ平面図

本がまとまっていた（W4023～4029）。黒色粘質土層上面は平坦で、溝などの遺構はない。杭頂部の標高は6.7～6.8m、黒色土層上面は標高6.5～6.7mである。

O－7bトレンチ北端の旧河川砂層中にも2本の丸木杭が打ちこまれていた。この杭は標高7.1m以下の黄褐色粗砂層上に頭部を出している。（横山）

3　P－3区の杭列と溝状遺構（Fig.6・5、PL.XC）

L字形に設けたP－3aトレンチとP－3bトレンチおよびその東にのばしたO－3トレンチで、溝状遺構と杭列を検出した。

P－3aトレンチでは南端の黒色粘質土層に丸木杭1本が打込まれていた。1本だけのため遺構としての拡がりはつかめない。残存杭頂の標高は6.98mである。P－3bトレンチではトレンチ中央部の黒色粘質土中に13本の杭がほぼ東西に長さ3mにわたって打込まれていた。杭は直径2～3cmの丸木杭で、残存する杭頂の標高は6.5～6.7mにある。

溝状遺構はP－3bトレンチの東側にあり、黒色粘質土を切っている。北壁付近で幅約14mをはかる。溝内には褐～黄褐色粗砂が堆積し、同層内から青磁器1個が出土した（C402、Fig.6・8）。

杭列と溝の関係については、発掘した範囲だけからは積極的に両者の関連性に言及できない。溝としたものは人為性を欠く自然な流路らしく、先にふれたQ－3・4・5・6区の黒色粘質土の谷状おちこみと密接な関係があろう。杭列は自然流路をなんらかの目的に利用するために設けられたとみられよう。いずれにしろ溝状遺構の時期は、出土青磁器から平安末～鎌倉初期と考えられ、O－6a・6bトレンチの杭列・溝と時期を同じくし、一連のものとみられる。

O－3トレンチ東側では黒色粘質土が切れ、砂層になる。この砂層が溝なのか、O－6a・6bトレンチ東側砂層につながる旧河川を示すのかは不明である。（横山）

第3節　遺　物

1　弥生式土器（Fig.6・6、6・7）

弥生式土器は耕作土とその下の黒色粘質土層までの各層および旧河川の砂層から出土した。すべて流れ込みの土器で、古墳時代以後の土器等と混在して出土した。

J－16・17グリッド出土の土器（Y4001・02）

Y4001は甕、Y4002は壺の底部であろう。Y4001は外面を箆で強く調整しており、稜がつく。内面は指のなで上げ調整。ともに石英粒砂を含み、焼成良好。赤褐色（Y4001）、淡褐色（Y4002）を呈する。

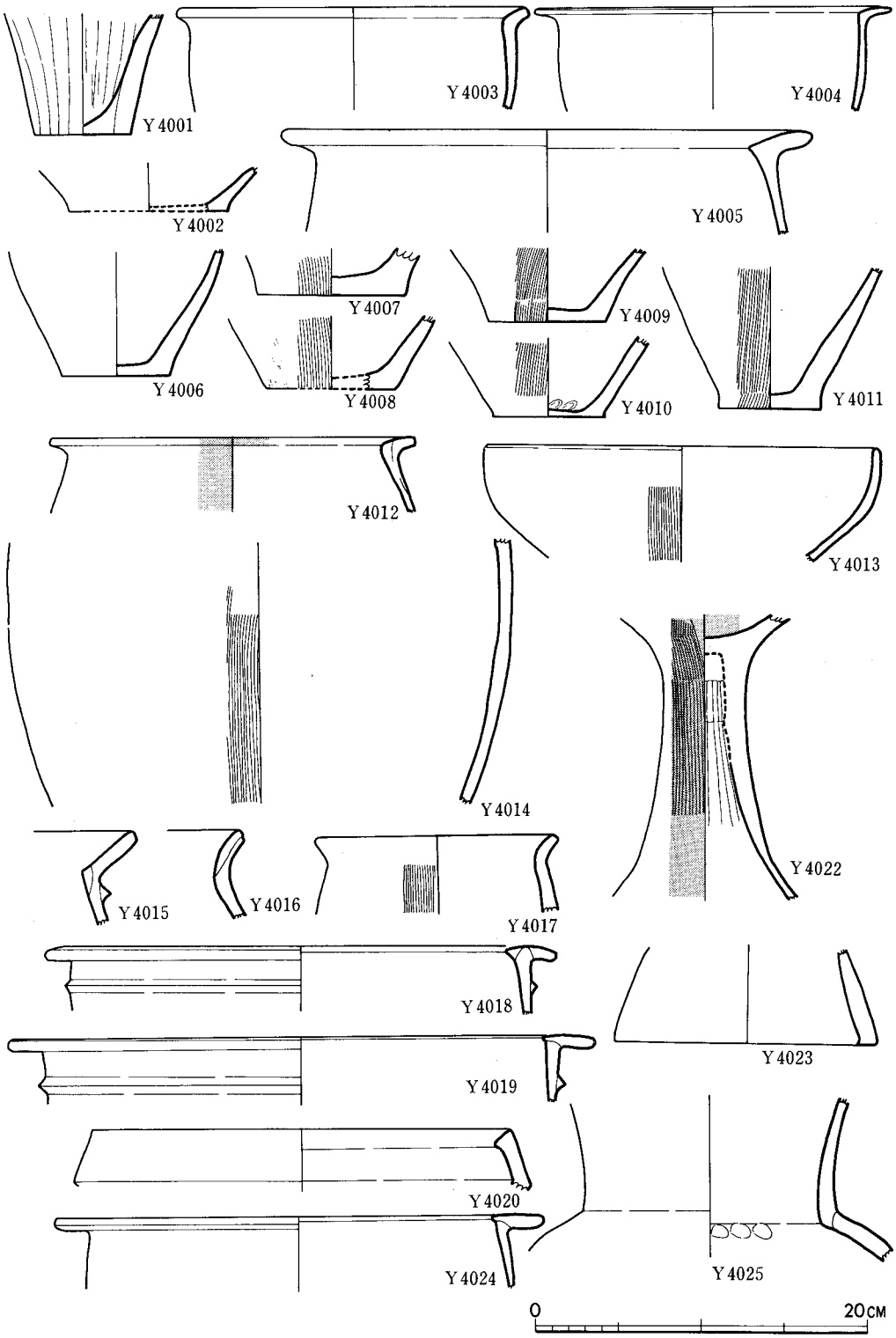


Fig.6・6　第4区出土弥生式土器実測図(1)

K－16トレンチ出土の土器（Y4003～4011）

Y4003は甕、他は底部であるがほとんど甕の底部であろう。甕はいずれも器面があれているために調整は不明。Y4003は短く外反する口縁部をもち、内面には稜がつく。Y4004は逆「L」字状口縁に近いが、内側張り出しの発達はなく、内端が若干下がる。Y4005も同様であるが、内側張り出しも、内端の下がりもY4004より強い。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成は良くない。黄褐色（Y4003）、褐色（Y4004）、赤褐色（Y4005）を呈する。Y4003は前期末～中期初頭、他は中期後葉のものであろう。底部はY4006以外は外面縦刷毛目調整。Y4010は内面底に指の押圧調整、Y4011は外面に煤の付着が認められる。胎土には石英粒砂(4006～08・10)、砂（Y4009・11）を含み、焼成は良いもの(Y4006・4011)とそうでないものがある。褐色（Y4006)、赤褐色（Y4007)、灰褐色（Y4008)、黒褐色（Y4009)、暗褐色（Y4010・Y4011）を呈する。中期のものであろう。

M－11グリッド出土の土器（Y4012）

外面および口縁部の内面が丹塗り磨研の甕である。口縁部は「く」の字形をなし、胴部がふくらむ。胎土に砂を含み、焼成良好、淡褐色を呈する。中期後葉。

M－14グリッド出土の土器（Y4013）

内彎する口縁部が先端で直立に近くなる。口縁部横なで調整で、外面は縦刷毛目調整。胎土には砂を含み、焼成良好。黄褐色を呈する。後期のものであろう。

M－17グリッド出土の土器（Y4014）

甕の胴部である。外面に縦刷毛目調整。内面には煤の付着が認められる。中期のものか。

N－14トレンチ出土の土器（Y4015～4020・4022・4023）

Y4015・4017～4019は甕である。Y4015は「く」の字状口縁をもち、口縁下に一条の三角突帯を巡らす。横なで調整。Y4017も短い「く」の字状口縁をもち、外面縦刷毛目調整。口縁部は横なで調整。Y4018・4019は逆「く」字状口縁をもち、外端が下がる。ともに口縁下に一条の三角突帯をもち、口縁部と突帯貼付け部は横なで調整。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。Y4018が暗褐色以外は、淡暗褐色を呈する。Y4015・4017は後期前葉、Y4018・4019は中期中葉の土器である。Y4016・4020は壺である。Y4016は内彎しながら上方が外反する口縁部をもち、横なで調整。Y4020は袋状口縁の系統を引き、二重口縁に近い形状をもつ。横なで調整。ともに胎土に石英粒砂を含み、焼成はY4020は良いが、Y4016はあまい。淡暗褐色（Y4016)、黒褐色（Y4020）を呈する。Y4016は夜臼式、Y4020は後期中葉以降のものと推定される。Y4022は丹塗りの高坏の坏と脚の接合部で、坏の内面にも丹塗り。外面は刷毛目調整で、内面にはしぼりの痕がみられる。胎土は精良な粘土を用い、焼成良好、褐色を呈する。中期後葉のものであろう。Y4023は器台の裾部である。胎土に砂を含み、焼成良好。

淡褐色を呈する。中期のものであろう。

Ｏ－14トレンチ出土の土器（Ｙ4024・Ｙ4025）

Ｙ4024は甕で逆「Ｌ」字状の口縁をもつ。Ｙ4025は壺の頸部から胴上半部で、外面は箆の磨研、内面頸部のつけ根に指の押圧調整痕。胎土にいずれも石英粒砂を含み、焼成は良好。淡暗褐色（Ｙ4024)、淡赤褐色（Ｙ4025）を呈する。Ｙ4024は中期中葉、Ｙ4025は中期後葉。

Ｐ－７トレンチ出土の土器（Ｙ4026～Ｙ4028）

Ｙ4026は壺の頸部からその付け根までの破片であり、付け根には一条の三角突帯が巡る。その突帯上に斜めに刻目が入れられる。Ｙ4027は甕の底部である。Ｙ4028は壺の底部。いずれも胎土に石英砂粒を含み、焼成良好。赤褐色（Ｙ4026・Ｙ4027)、暗褐色（Ｙ4028）を呈する。Ｙ4028は中期、Ｙ4027は前期のものであろう。

Ｐ－10グリッド出土の土器（Ｙ4029）

Ｙ4029は袋状口縁の系統を引く二重口縁に近い壺の口縁部である。他のものに比較して短く直線的になる。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、赤褐色を呈する。後期中葉以降のものであろう。

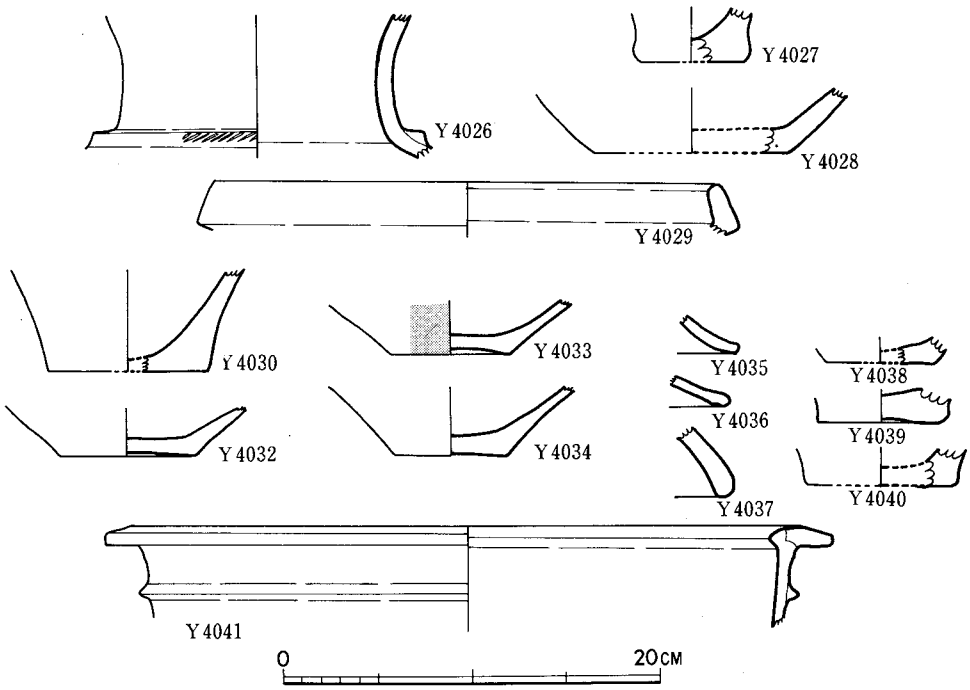


Fig.6・7　第４区出土弥生式土器実測図(2)

Q－7トレンチ出土の土器（Y4030）

甕の底部である。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、褐色を呈する。器面があれているために調整は不明。中期のものか。

Q－9a・9bトレンチ出土の土器（Y4032～4034）

いずれも壺の底部で、上げ底を呈する。Y4033の外面は丹塗り。胎土に石英粒砂（Y4032)、砂（Y4033）を含み、焼成良好。淡黄褐色（Y4032)、褐色（Y4033）を呈する。いずれも中期後葉であろう。Y4034は壺の底部で上げ底を呈する。胎土に砂を含み、焼成良好。淡褐色を呈する。中期後葉。

S－10グリッド出土の土器（Y4035・4036）

ともに蓋の裾部か高坏の脚部であろう。Y4036の裾内部には凹みがある。胎土は石英粒砂を混じ（Y4035)、精良な粘土を用いる（Y4036)。焼成はともに良好、赤褐色（Y4035)、淡暗褐色（Y4036）を呈する。中期後葉～後期のものであろうか。

S－16グリッド出土の土器（Y4037～4041）

Y4037は器台の裾部である。Y4038は壺、Y4039・4040は甕の底部であろう。Y4039は上げ底を呈する。Y4041は逆「L」字状口縁をもち、内外端ともに下がる。口縁下に一条の三角突帯をめぐらし、口縁部と突帯貼付け部は横なで調整。胴部がすぼまるところから、甕というより鉢に近いものかもしれない。胎土はY4038が砂を含む以外は石英粒砂を混じる。焼成はいずれも良く、淡赤褐色（Y4037・4041)、淡褐色（Y4038)、暗灰褐色（Y4039)、赤褐色（Y4040）を呈する。Y4039・4040は前期、他は中期、特にY4041は中期中葉～後葉のものであろう。

（沢）

2　土師器・須恵器・瓦器・青磁器（Fig.6・8、6・9）

(1)　遺構出土の瓦器・青磁器（Fig.6・8）

O－6aトレンチ第2号溝出土瓦器（G403）と黒色粘質土層直上出土瓦器（G404）

G403は、黒色瓦器質土器である。器面は内外とも横なで調整を施す。底部は巻き上げ手法をのこす。胎土は非常に均質で精良である。焼成は軟弱であまり良くない。器高3.8cm、口径14.3cm。溝埋土上層（黄灰色砂質土層）出土。G404も同様の黒色瓦器質土器である。内外とも横なで調整。内面は褐色を呈する。胎土は均質で精良であり、焼成はあまり良くない。口径14.4cm。これらの瓦器質土器は平安末より鎌倉初期に比定されよう。

P－3bトレンチ溝状遺構内砂層出土青磁器（C402）

これは淡い草色釉のかかった高台付碗である。低い高台はたたみ付が幅広く、底部もまた部厚い。龍泉窯系のものと思われる。復元口径5.25cm、器高5.4cm。（横山）

(2)　包含層出土の土師器・須恵器・瓦器・青磁器（**Fig.6・9**）

土師器　H401は器色が暗褐～灰褐色を呈する土師質坏底部。全体にていねいなつくりで胎土、焼成とも良好。O－7bトレンチ耕土層出土。H402はN－14トレンチ旧河川砂層出土の高坏部である。外反する口縁部が、胴部で屈曲する。器面があれているために調整は不明。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好、淡暗褐色を呈する。土師器の最古式に属するものであろう。H403はQ－9トレンチ出土。外反する口縁部をもつ甕である。口縁部内は横なで調整で外面は縦刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、赤褐色を呈する。4世紀末～5世紀初頭のものであろう。（沢）

須恵器　Su401は甕形底部。M－11グリッド耕土層出土。Su402は底部を欠く坏。O－6aトレンチ出土。Su403は坏底部。まるみをもった高台は低くいびつである。O－6bトレンチ灰褐色砂質土層出土。Su404は長頸壺口縁部。口唇を欠失するが中位に2本の沈線が施される。P－3aトレンチ暗灰色粘質土層出土。Su405・406は甕形底部。P－7トレンチ砂層およびP－14トレンチ耕土層出土。Su407・408は杯蓋。前者は扁平で低いつまみを天井部に有し、後者はこれをもたず頂部がややくぼんでいる。P－14グリッド耕土層およびQ－7トレンチ黒色粘質土上の砂層出土。Su409は坏身。高あがりは低く内傾化の著しい小形品。Q－9表土層出土。Su

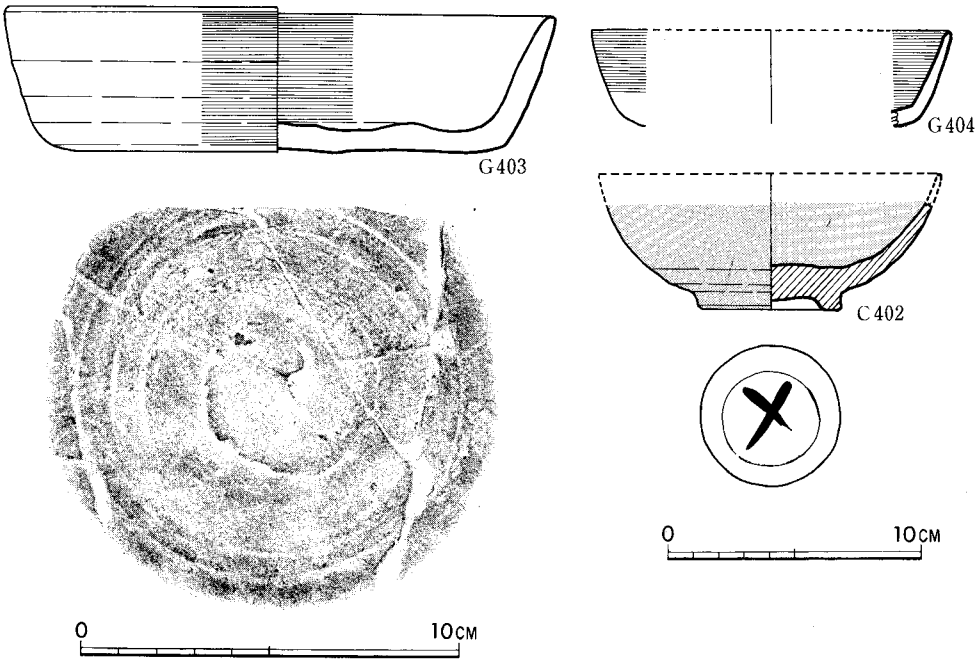


Fig.6・8　第4区溝出土瓦器・青磁器実測図

410・411は胴部破片。外面には格子目、平行の叩き調整、内面には青海波文がみられる。いずれもS－14グリッド耕土層出土。以上の須恵器はいずれも器色が灰～暗灰色を呈し、焼成は悪くない。

瓦器　G401は坏口縁部。器色は暗い褐色～褐色で内外面ともに横方向の箆みがきが加えられている。また体部内面には4本内外の横位沈線状文がみられる。胎土は精成され、焼成ともに良好。O－6bトレンチ黒色土層上の砂質土層出土。

青磁器　C401はP－3aトレンチ耕土層出土の青磁器底部である。内面は褐色がかった灰色釉・外面は淡い灰色釉が施される。高台の畳付上部は箆削りによって稜をもっている。口径7.8cm。

（横山）

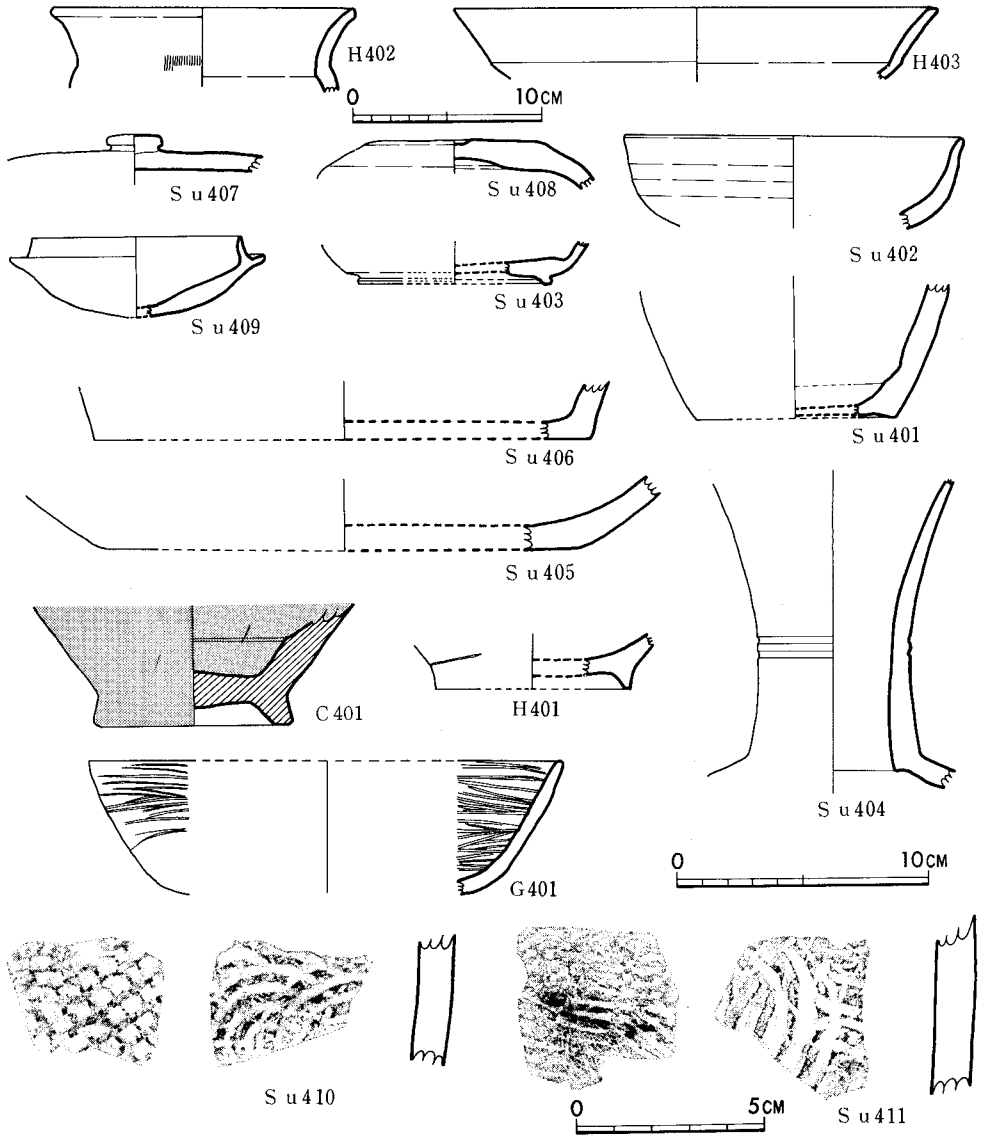


Fig.6・9　第4区出土土師器・須恵器・瓦器・青磁器実測図

3　木製品・木材（Fig.6・10、Teb.）

第４区出土の木製品は丸木杭だけである。直径３～６cmほどの丸木の先端部を削っている。削り面は平坦で、かなり鋭利な刃物で削ったものと考えられる。それぞれの削り面は上方から下へ刃物を何回か打ちおろして削り、ほぼ平坦面をなす。木皮がよく残るものもあり、色調も、第２区・第３区の弥生時代杭より明るく鮮明で、木質もまだしっかりしているものが多い。代表的な丸木杭３本を図示した。樹種はTab. 6・2にまとめた。（後藤）

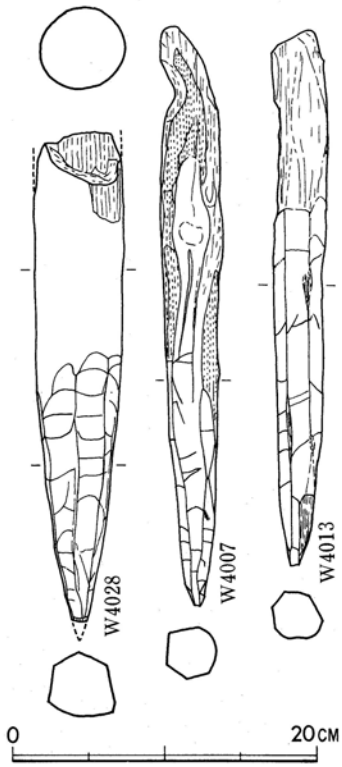


Fig.6・10　第４区出土杭

4　石器・その他（Fig.5.47）

第４区出土の石器はきわめて少ない。図示しうるものはＰ－3aトレンチ耕土層出土の石匙（Ｓ71）だけである。これはサヌカイト製の横形石匙で、表裏とも入念な二次加工を加え整形し、刃は両刃で特に入念に加工し鋭いエッジをつくり出しており、つまみも両側より深い抉り（ノッチ）をいれてつくっている。（山口）

Ｏ－14トレンチの旧河川の砂層中からは入れ歯が出土した（Fig.6・11）。これは橙色の歯茎（ゴム製）に御歯黒の歯２本（焼きものを黒く染めたもの）をつけたものである。片側が折れて失われている。明治～大正頃のものという。

Ｐ－７トレンチの南側の耕土層で寛永通宝１点が出土している（Fig6・12）。（後藤）

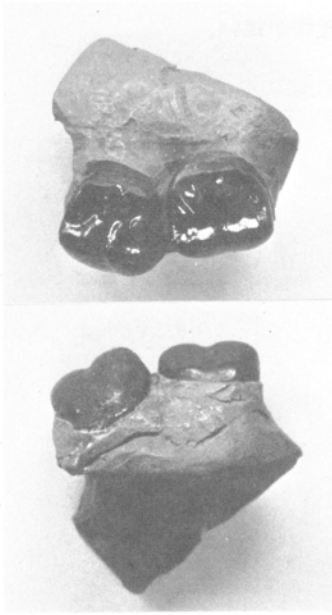


Fig.6・11　入歯（約1.5倍）

Fig.6・12　Ｐ－７トレンチ耕土層出土
寛永通宝拓影

第４節　第４区調査のまとめ

本区の調査は、発掘面積に比し遺構の検出も少なく、遺構分布の確認にとどまった。Ｍ－８区、Ｐ－６～７区、Ｐ－３区周辺で出土した遺構は、さらに発掘面積を拡大して、ひろがり・性格・時期の確認をすべきであったが、市営住宅建設計画実施がこの区からはじめられたこともあって、予備調査で終ったのは残念である。

Ｍ－８・９区の各トレンチ出土の杭列は、そのひろがり、性格は全く不明で、時期を推定しうる遺物も出土していない。すでにふれたようにこの付近の黒色粘質土は、旧河川西側に広がる黒色粘質土とややことなり、また分布範囲もせまいように思われる。

Ｐ－６・７・３区付近の溝・杭列は旧河川岸辺にあり、なんらかの水利施設とみられるが、その機能は明らかでない。時期は、２片の瓦器と１片の青磁器から平安末～鎌倉初期と推定しうるにとどまる。この水利施設が、さらに西方に高さをましつつひろがる黒色粘質土層とどのようなかかわりがあるのかは明らかにしえなかった。

それ以外のところでは遺構は検出できなかったが、Ｓ－13グリッドの南・西側には遺構の存在は十分予想しえるし、それとＴ－17トレンチやボーリングＩ－19の黒色粘質土の切れめとの関係等が問題となるが、もはやそれを明らかにする術はない。

出土した遺物は耕作土とその下の砂・砂質土・粘質土の互層に包含されていて、その量も多くない。このたびの調査が目的とした弥生時代生産遺構の確認という点からすれば、第４区には弥生時代遺構の存在は認められず、弥生時代には人為の加わらない湿地として残されていた可能性が強い。

（後藤）

Tab. 6·1　第4区出土土師器・須恵器・瓦器・陶磁器挿図対照表

No.	器種種類	トレンチ グリット	層位	Fig.	No.	器種種類	トレンチ グリット	層位	Fig.
H401	坏底部	O－7b	耕土層	6·9	Su408	坏蓋	Q－7	黒色粘質土層上砂層	6·9
H402	高坏坏部	N－14	包含層	〃	Su409	坏	Q－9	耕土層	〃
H403	甕口縁部	Q－9	〃	〃	Su410	胴部破片	S－14	〃	〃
Su401	甕底部	M－11	耕土層	〃	Su411	〃	〃	〃	〃
Su402	坏口縁部	O－6a	包含層	〃	G401	坏口縁部	O－6b	包含層	〃
Su403	坏底部	O－6b	灰褐色砂質土層	〃	G402	(欠番)			
Su404	長頸壺口縁部	P－3a	暗灰色粘質土層	〃	G403	坏	O－6a	溝埋土上層	6·8
Su405	甕底部	P－7	砂層	〃	G404	〃	〃	黒色粘質土層直上	〃
Su406	〃	P－14	耕土層	〃	C401	磁器底部	P－3a	耕土層	6·9
Su407	坏蓋	〃	〃	〃	C402	青磁碗	P－3b	溝状砂層	6·8

Tab. 6·2　第4区出土木製品・木材一覧

No.	トレンチ	層位・位置	種類	大きさ(cm) 長	幅	厚	直径	時期	樹種	Fig.	備考
W4001	M－8	黒色粘質土層	丸木杭	22.5			3	不明			
W4002	〃	〃	〃					〃	ムクノキ?		
W4003	〃	〃	〃	19				〃	ユズリハ		破損甚
W4004	〃	〃	〃	24			3	〃	〃		
W4005	〃	〃	〃	18.6			3	〃	カマツカ?		
W4006	〃	〃	〃	26			3	〃			
W4007	M－8a	〃	〃	38.9			3.4	〃	ユズリハ	6·10	
W4008	〃	〃	〃	30.5			3.5	〃	マツ(二葉松)		
W4009	〃	〃	〃	23.5			3.3	〃	ユズリハ?		
W4010	〃	〃	〃	34			3～3.5	〃	ユズリハ		
W4011	〃	〃	〃	36.5			3.5	〃	〃		
W4012	〃	〃	〃	25			3	〃	ユズリハ		
W4013	M－9a	〃	〃	35.8			3.3	〃	ユズリハ?	6·10	
W4015	〃	〃	〃	32			3.5	〃	ユズリハ?		
W4016	〃	〃	〃	11.5			2.5	〃	〃		
W4017	〃	〃	〃	24.5			3	〃			
W4018	〃	〃	〃	19			3	〃	?		
W4019	〃	〃	〃	27			3.5	〃	ユズリハ(?)		
W4020	M－9b	〃	〃	17			2～3.5	〃	ユズリハ		破損甚
W4021	〃	〃	〃	33			3	〃	〃		
W4022	M－11	砂層	自然流木	22			5	〃	マツ(二葉松)		
W4023	P－7	砂層下粘質土層	自然流木	61			3	〃	ヤナギ		
W4024	〃	〃	加工木片					〃	カシ?		板状小片
W4025	〃	〃	自然流木	17			4	〃			
W4026	〃	黒色粘質土層	丸木杭	24			4	〃	ユズリハ		
W4027	〃	〃	〃	48			3.5	〃	?		
W4028	〃	〃	〃	32.8			5.9	〃	アワブキ	6·10	
W4029	〃	〃	〃	13.5			5×3.3	〃	ユズリハ?		

W4014は欠番

樹種は島倉巳三郎氏による。

補　先土器時代の遺物 (Fig.6・13)

上述した第１～第３区では先土器時代の石器が４点出土している。本来の包含状態は明らかでない。個々の石器について以下にのべる。

細石核（Ｓ1818）黒曜石の角礫を利用した石核で、打面は調整加工が行われており、細石刃の剥離は中央部で終っている。裏面には自然面が残る。円錐形細石核で、全体に磨滅している。２区出土。

台形石器（Ｓ3309）　黒曜石製剥片を利用し、折面と先端部を刃潰し加工によって切断し、三角形に仕上げている。刃部には刃こぼれがみられ、片方の耳は破損している。第１区台地上の第55号竪穴埋土中から出土していて、弥生時代に鏃等に再利用された可能性もある。

ナイフ形石器　Ｓ７は黒曜石製の縦長剥片を利用し、基部にのみ刃潰し加工が行われている。刃部には刃こぼれがみられる。第３区Ｒ－22トレンチ出土で、全体に磨滅している。Ｓ7049もＳ７と同様に黒曜石製縦長剥片を素材とし、自然皮が残る縁辺に刃潰し加工を加え、さらに刃部にはこまかい二次加工が加えられている。Ｓ７・Ｓ7049は、刺突具としての意味をもたず、刃器として使用されたナイフ形石器である。第１区台地上出土。

以上４点の先土器時代遺物は、いずれも良好な状態で出土していない。1973・74年両年の諸岡遺跡の調査〔横山1974、後藤・横山1975〕で、新期上部ローム層(註)からナイフ形石器と台形石器が共伴するナイフ形石器文化最終末期の文化層が確認されているので、板付台地にもほぼ同時期の文化層の存在が予想されるが、今後の調査をまちたい。　（山口）

註　諸岡遺跡の報告書では鳥栖ローム層として扱ったが、古川博恭氏に「新期上部ローム層」との教示を得たので、ここで訂正する。

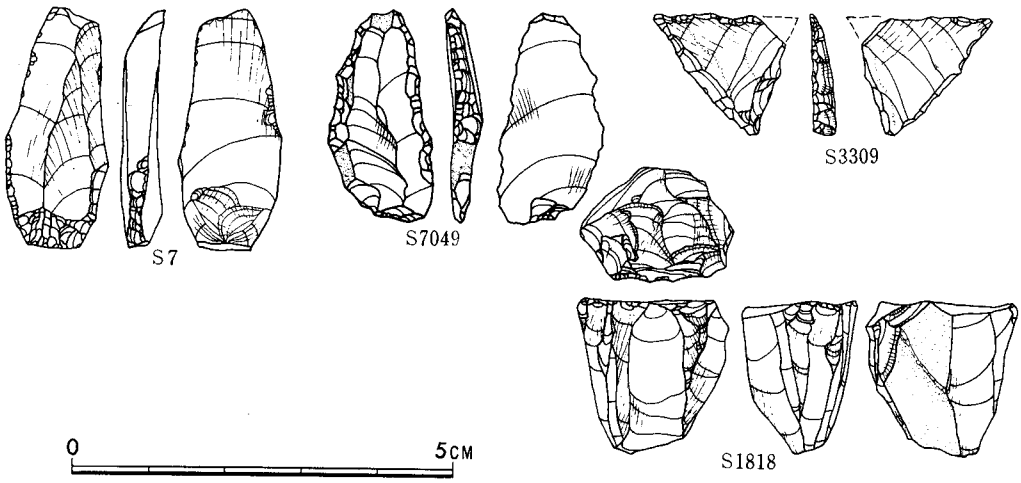


Fig.6・13　先土器時代石器実測図

第 7 章
調 査 のま と め

今回の調査で出土した遺構と遺物のうち、弥生時代のものに限って簡単にまとめておこう。

第1節 遺 構

出土した遺構は、生産遺構・生活遺構・墓址にわけられる。

1 生産遺構

沖積地に遺存する各遺構は、沖積地で行われた生産活動に関連する施設と考えられる。これらの施設は当時の自然条件——地形の変遷——と密接な関連があり、その制約のもとにあったであろう。

当時の板付台地の東には御笠川が、現在とは流路が多少ことなっていたにしても流れており、西側にはすでにのべたように諸岡川の旧河とみられる河川が流れ、両河川と台地の間には、弥生時代以前の沼地を埋めて形成された湿地がひろがっていたであろう。板付台地はこれらの両河川と湿地にかこまれた独立台地であり、その上に環溝が営まれ、集落・墓地が形成されていた。

御笠川の影響下にあった東側は別にして、西側には、これまで旧河川とよんでいた川が弥生時代以前から流れており、海退と氾濫堆積物によって周囲の沼地は埋積されつつあった。旧河川は、現在は最大幅100mにも及ぶ厚い砂層として残っているが、旧河の流れはここを細い流れとして、あるいは一筋に、あるいは幾筋かにわかれて流れ、ときには氾濫を起したであろう。遺構の出土標高からみて、弥生時代中期後葉には、その西岸の河床は標高７ｍ前後だったとみられ、前期にはそれより低く、第２区の矢板列からみて河川水面は７ｍ以下だったと推定される。後期前葉にいたれば、その水面標高は7.8m近くまで上ったと思われる。こうした数値は発掘に基く推定値ではあるが、大勢に誤りはなかろう。さらに推定すれば、弥生時代前期前葉の地表高は７ｍ弱、中期中葉のそれは約7.5m、後期前葉の地表高は7.8m強で、それぞれの間の堆積物の厚さは50cm近かったと思われる。このような厚い堆積をもたらす氾濫によって、生産施設が多大の被害をこうむったことは想像に難くない。たびたびの氾濫を受ける台地周辺の沖積地は、それ以前の沼地が埋積された湿潤な土地であったろう。

弥生時代の板付台地の標高は、現在より１ｍ近く高かったと推定されるが、そうすれば環溝部分では13m近く、その北側では10～９ｍと考えられる。したがって前期前葉での第２区沖積地と環溝部分との比高は６ｍ近く、第１区の台地近くの地表高は7.2～7.4ｍで、台地北端部との比高は２ｍ近かったろう。

前期前葉の生産遺構は第2区の矢板列である。ここに水田が営まれていたとみられる。この水田面と推定される部分のひろがりは正確には把握できなかったが、幅は矢板列とその西方の旧河東岸とにかこまれた10m弱、南北のひろがりは矢板列の存在する部分からみて80mないしそれ以上であろう。矢板列の東側には幅6m前後の自然水路があり、そこに矢板列に関係する柵状遺構が設けられていた。この矢板列・自然水路との間がどのような状態だったかは明らかでないが、G－24・25・26各トレンチの木器包含層下の砂層にみられるように、ひとたび出水すれば砂や粘土が厚く堆積するような低湿地（沼地？）だったと思われ、自然のままに放置されていたのではないだろうか。一方西側には河川があり、その対岸（西岸）には古くから形成された安定した地表（第3～第4区の黒色粘質土層）があったが、そこは前期にはまだ人の手は及んでいなかった（第3区10号溝で夜臼式土器が出ているが、その時期の遺構面はない）。

したがって矢板列が設けられていたのは、それ以前の沼地に堆積した黒色粘質土層で、河川と湿原のような低地にかこまれた島状の部分で、台地縁辺から70～80m離れていたとみられる。湿田であったことはほぼ確実である。

第1区の台地のすぐ西側には、杭列と矢板列とがあり（E－17グリッド・F－17グリッド）その出土状態や土器の包含状態からみて前期の水田の可能性が強いが、ここも第2区と同様、台地縁辺部の沼地を埋積した黒色粘質土層の一部を利用した湿田と考えてよいだろう。花粉分析結果もそうした推定を導く。

こうした第1区・第2区のあり方からみて、当時にあっては、それ以前にあった沼地を埋めて形成された島状の部分や台地縁辺の部分（いずれも小面積で、周囲は湿地であり、これらの部分もかなり湿潤であったろう。こうした位置はグライ化しているという—付編第2）が台地の周囲に点々とあって、それらの場所が小規模な水田に用いられていたとみるのが妥当であろう。

その後、中期中葉にいたるまでの生産に関する遺構は、調査の範囲内では見出されていない。包含層出土土器も、この間のものはやや少なく、遺構の不在に対応するごとくである。

中期中葉以後になると、旧河川の西岸、板付台地からみて旧河対岸にも生産施設が設けられる（第3区）。岸辺に堰があり、それに導かれる水を流すための水路が走る。これらの溝の周囲には水田と断定できるような施設はない。溝の全体的なひろがりは発掘では明らかにしえなかったが、溝は旧河岸辺の黒色粘質土層の低くなった部分（第3区東南側）や、旧河とその支流にはさまれた黒色粘質土層の舌状部（第3区東北側）にある（標高7.5m以下）。そこに水田があったのではないかと考えられるが、0－19eトレンチの第2号溝埋土の花粉分析で、20%のイネ花粉が検出され、水田周辺の水路の堆積物という結果以外に、直接的な確証はえられない。

もしこれらの水路が水田に関連があるにしても、水路のみがあって田を画するようななんらの痕跡もなく、堰状の施設を岸辺に設けて水をひいた点を除けば、自然の流路に多少の手を加えて利用したとみられ、かなり粗笨なものと考えられる。したがってその水田も、水を導入する必要はあっても平常はやや湿潤な状態であり、そこに特別の区画を設けぬまま水田を経営していたと想定せざるをえない。しかし、黒色粘質土層中の縄文式土器が、当初の埋没状態のままで出土したことから、ここが水田として深く耕作されなかった可能性も強い。

第３区に水田の存在を想定しえたにしても、第２区の前期前葉の矢板列に画された水田との間に、技術・経営・労働のあり方にどのような差異があるのか、さらにそこに弥生時代社会の段階的な差異をよみとれるかどうかは困難な課題である。第１区や第２区に中期中葉以後の水田とみられるものがないために、前期にはほとんど人の手の及ばなかった旧河西岸の遺構をもって、ただちに経営規模の拡大を問題にすることはできない。むしろあちこちに点在する小面積の可耕地に設けられた水田がひきつづき営まれていたとみるべきであろう。

第３区の遺構とほぼ同時期に、旧河東岸は台地西縁から約80ｍのところにあった。この河岸には丹塗土器を含む多量の土器が埋没している。台地縁辺部には木器を包含する水路とみられる杭群があり、台地から旧河東岸までの間は生産地となりうる状態でなかったかとも思われるが、そこには砂・粘土が堆積するのみで、保存地区となって十分な調査をひかえたこともあるが、中期後葉の水田あるいはそれに関連するとみられる遺構は痕跡すら検出していない。

Ｊ・Ｋ－25トレンチ西端にある後期前葉とみられる畦状遺構は、旧河岸に面するように設けられている。この遺構の東側、台地までの間が当時どのような状態であったか、そしてどのように利用されあるいはされていなかったかは明らかでない。この畦状遺構についてもその性格は判断しえない。

今回の調査で明らかにされた生産遺構は、点的にとらえられただけであり、その全体的なひろがり、規模・経営の実態・技術等を明らかにし、台地上の集落のひろがりと変遷（これも現状では点的にしかわからない）と関連づけ、さらに弥生時代の推移の中に位置づけることは容易ではない。

生産遺構に関連する成果は、板付遺跡の沖積地の実態をある程度明らかにし、土地利用の一端を把握しえたことであり、夜臼式土器・板付Ｉ式土器を伴う前期前葉の水田とみられる矢板列を検出しえた点にあろう。（後藤）

２　生活遺構（Fig.7.1）

生活遺構としては、第１区台地上の竪穴群をあげうるだけである。

竪穴は計108個発見された。これらの竪穴は壁が袋状をなすものと、垂直に立ち上がるものとがある。今までの研究から、これらはいずれも貯蔵穴として利用されたものと判断される。本遺跡の場合、上部をかなり削平されており、本来の形状を残すものは少ない。そのために、遺物も他遺跡の貯蔵穴ほど完形品の出土は多くない。一応時期判定できるものは、やや不確実なものを含めても前期前葉22、前期中葉32、前期後葉23、中期初頭４となり、この竪穴群のほとんどが、前期のものであることが知られる。

平面プランは方形・長方形・円形・隅丸長方形・不整形など各種がある。前期前葉の時期のものは第82号竪穴を除き、円形はほとんどみあたらない。前期中葉以降は各形とも存在するが、中期初頭とみられる４個には方形や長方形はみられない。基本的には方形から円形へという平面プランの変遷は認めうる。

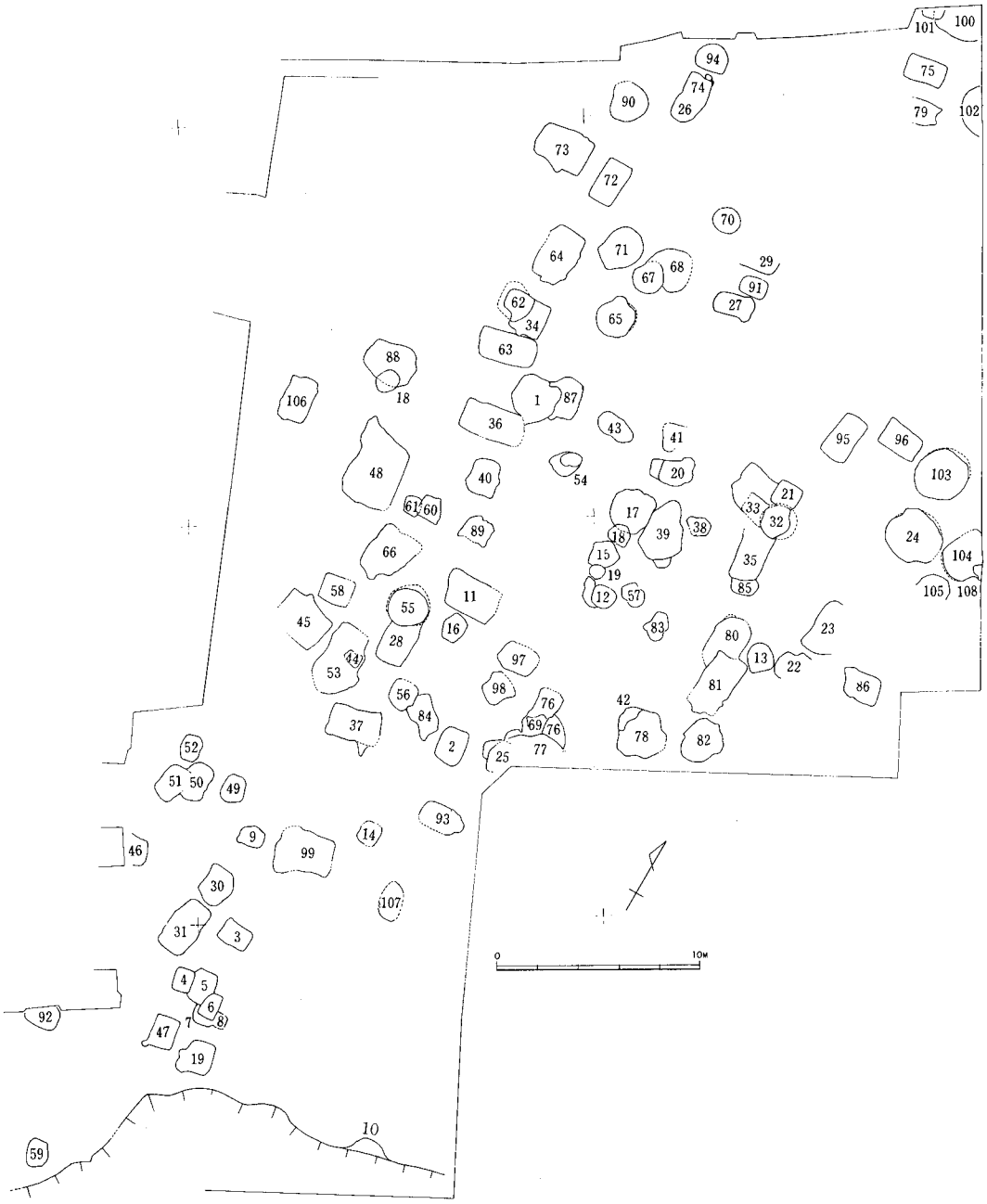


Fig. 7・1　第1区台地上竪穴分布図

これら竪穴は調査した台地上のほぼ全面に分布するが、墓地の項でも述べるように、調査区北東部の径約15ｍほどの範囲には竪穴も墓址も存在しておらず、この空白地が何らかの意味をもつものと推定される。また、長方形プランをもつ竪穴は、ほとんど壁が直立に近いものであるが、長軸を南北あるいは東西に近く位置している。その他、前期中葉以降に現われる大形の円形竪穴は壁が袋状をなすものが多く、分布は調査区の北東側から東側へかけて顕著であり、東側の未掘地までさらに拡がると考えられる。

第81号竪穴のように、内部に柱穴状の小ピットをもつものがあり、あるいは水などの流入を防ぐための覆屋施設の存在を推定してもよいかもしれない。少くとも内部に柱穴状のピットをもつものは、壁が直立するものが多く、他遺跡では袋状の竪穴中央に柱穴状のピットをもつものが存在するが、本遺跡では壁が袋状をなすものにはみられない。おそらく津古内畑の第19号竪穴〔西谷1970〕のように蓋を覆せる施設をもっていたものと思われる。蓋はおそらく木蓋で板状のものの組み合せででもあったのであろう。

いずれにせよ、この第１区の低台地は前期前葉から、貯蔵穴としての竪穴が営まれ、その貯蔵穴が一部を残してほとんど埋没した後に墓地として利用されたものである。北部九州地方では、貯蔵穴としての竪穴は、中期初頭を下限にして、それ以降にみられず、おそらく高床式の倉庫が登場するだろうといわれ、この点は本遺跡でも同じであろうが、この貯蔵穴としての竪穴を営んだ人々の集落跡がどこであるかということは、今後の調査に待ちたいと思う。

なお、板付台地においての貯蔵穴としての竪穴は、この第１区台地、環溝の周辺〔森・岡崎1961〕、南側台地のＦ－９ａ地点〔後藤・横山1975〕の三ヶ所で認められている。

３　墓　地 (Fig.7.2、7.3)

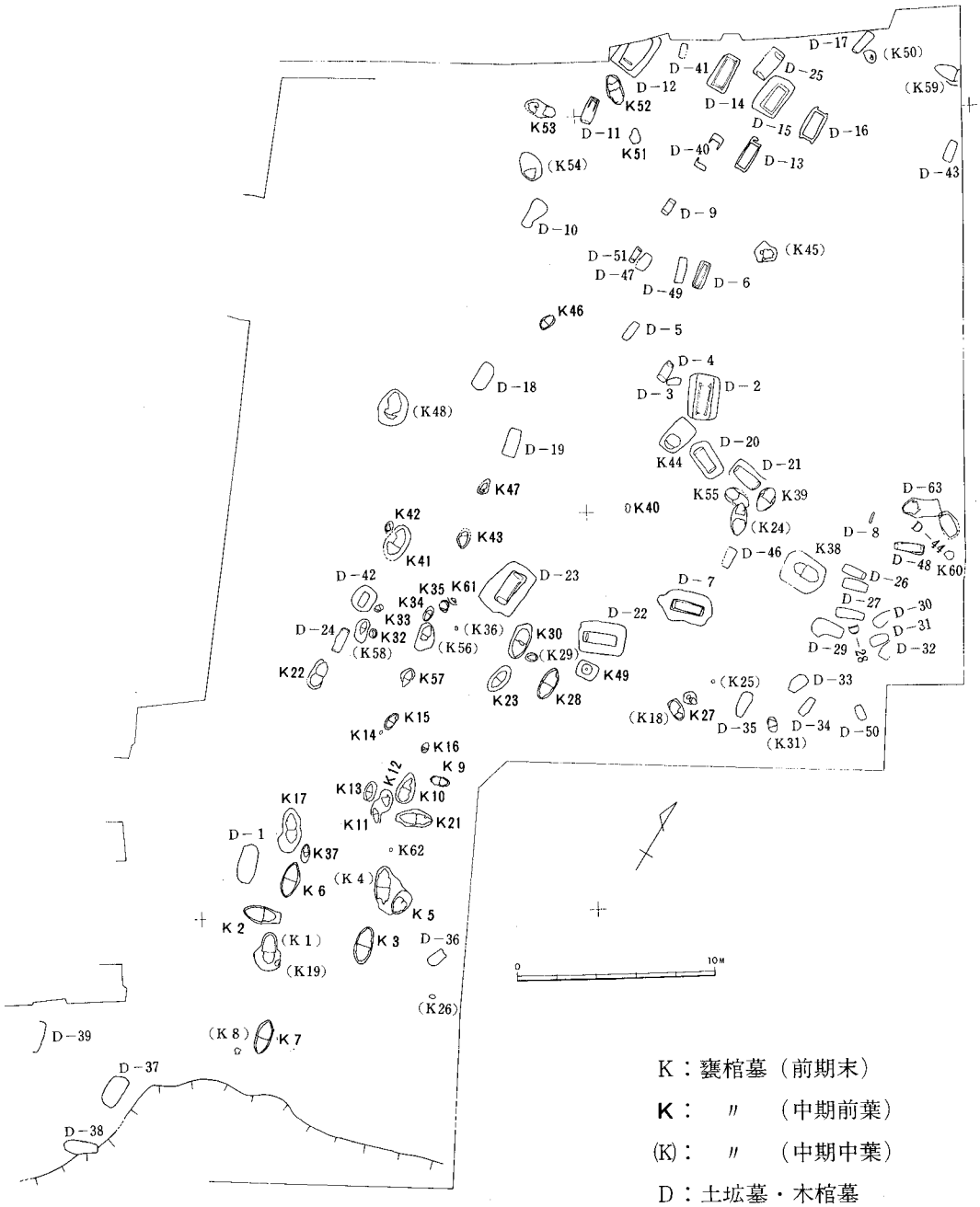
墓地は第１区台地上に営まれていた。その内訳は、甕棺墓63基・木棺墓24基・土壙墓27基、計114基である。

甕棺墓

甕棺墓は、前期末から中期中葉までの63基である。内訳は成人用27基・小児用36基で、小児用甕棺墓が57％を占める。この率は金隈遺跡における約59.5％と類似し〔折尾1970・1971〕、小児用が過半数を占める。

時期別にみると、前期末６基（成人５・小児用１）、中期前葉38基（成人用13・小児用25）、中期中葉19基（成人用９・小児用10）となる。前期末に成人用が多いのは、この時期に甕棺としての大形棺が出現するが、主体となる葬制はまだ土壙墓・木棺墓であったためであろう。

甕棺墓のみの分布からみると、前期末の６基はすべて調査地中央東側に位置する。60・63号の存在から、分布は東側にのびると推定される。主軸の方向（Tab.3.6に示した方向は調査者が下甕と判断したものの口縁の方向を示すもので、被葬者の頭部方向ではない。以下にのべる方向は主軸であり、単なる向きにすぎない）は、６基中３基がほぼ東西になるが、数が少ない



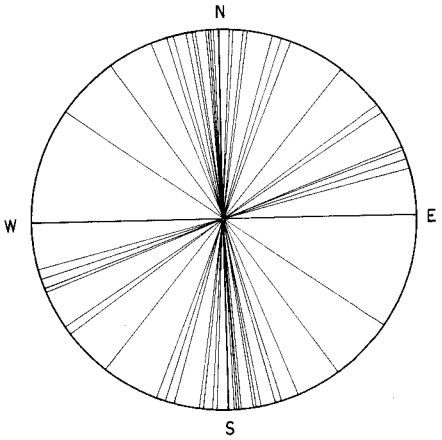
K：甕棺墓（前期末）

K：　〃　（中期前葉）

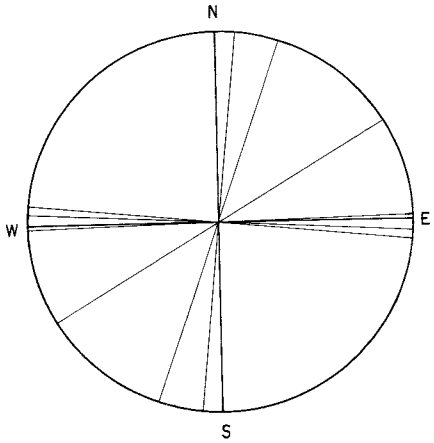
(K)：　〃　（中期中葉）

D：土坑墓・木棺墓

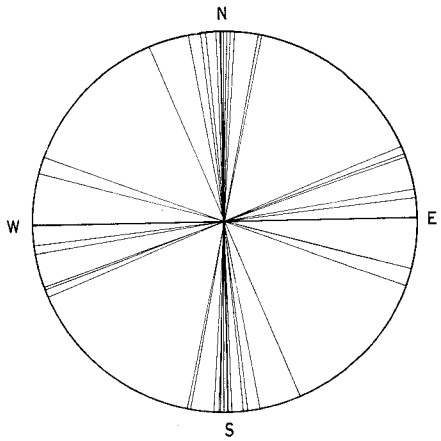
Fig. 7・2　第1区台地上墓地分布図



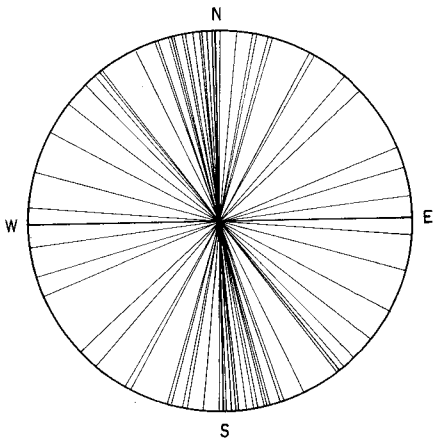
土　坑　墓



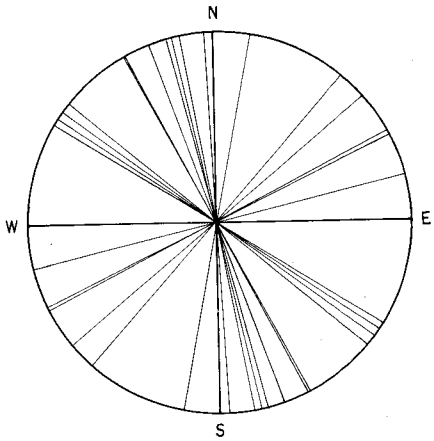
甕棺墓（前期末）



木　棺　墓



甕棺墓（中期中葉）



甕棺墓（中期前葉）

Fig. 7・3　第１区台地上墓地長軸方位図

ので これだけでは何ともいえない。

中期前葉になると、墓地は南へひろがるが、46号のように西へ、51～53号のように北西側へひろがる例もある。この時期の墓地は前期末の墓地とはまったく重複しない。同時期の成人墓どおしの切り合いはなく、3号と20号・17号と37号・41号と42号のような成人墓と小児墓の切りあいがあるだけである。小児墓どおしでは11号と12号の墓坑が切りあうが、12号が古い。

中期前葉は、この墓地のもっとも盛行した時代で、明確に群をなすもの（51～53号）もあるが、他は判然としない。あるいはこの51～53号を含む未掘部分と他のものとの2群になるかもしれない。主軸方向はFig.7・3のように南北方向がやや多いが、各方向があって、方向から何かを語ることはできない。

中期中葉にいたるとやや少なくなり、19基であるが、全域にひろがり、群集する状態ではない。この時期になると4号の墓坑が中期前葉の5号の墓坑を切り、成人墓の1号墓坑中に小児墓の19号が埋置されている。この他に24号が前期末の55号直上に埋置されているが、55号を破壊してはいない。

この時期の主軸方向は3つに分けられる。A：N－12°－EからN－27°－Wの範囲の1・4・19・24・26・48・56・58号、B：N－49°ないし58°－Wの範囲の18・25・31・54号、C：N－90°ないし138.5°－Wの範囲の29・36・45・50・59・62号である。これらの甕棺墓は、A類の1・4・19号、56・58号、B類の18・25・31号、C類の50・59号、29・62号のように近接するものもあり、あるいは血縁を紐帯とする単一家族墓的な要素を示すのかもしれない。

この甕棺墓地は、中期中葉でも新しい時期で後葉としてもよいような50号を最後にまったく放棄されてしまう。

以上のようにこの墓地は、個々には若干の例外もあるが、前代の墓域をつつみこむように展開する。このパターンは、伯玄社遺跡〔松岡・亀井1968〕、金隅遺跡〔折尾1970・1971〕に類似し、またきわだった副葬品ももたず「血縁的共同体の家族墓的性格を示すもの」〔高倉1973 c〕といえよう。

木棺墓・土坑墓

木棺墓は計24基である。内訳はA組み合せ7基、B組み合せ12基、不明5基となる。

主軸方向は3つにわけられる。A：N－12.5°－E からN－22°－W の範囲のもので、大部分がこれに入る。ほとんどが調査区北側に集中し、中央部には11・24号の2基しかない。B：N－96°ないし112°－Wの範囲のもので、7・8・22・26・48号の5基である、A類とほぼ直交する方向をもち、東西方向に近い。B類は調査区の東側にのみ分布する。C：N－69°ないし74°－Wの範囲で、20・21号のみである。位置・主軸方向ともA・B両類の中間に入る。またA類のうちもっとも西に主軸がふれる2号と、C類のうちもっとも東に主軸がふれる8号などは、第3章第4節でのべた径15mの無遺構地帯をとりかこむように分布する。この中には第48号木棺墓、第63号甕棺墓、第6・13・16・17号木棺墓なども含まれ、この空地が何らかの意味をもっていたと推定される。またA類の方向は、この低台地の尾根方向に近いと考えられる。

土坑墓は27基ある。ほとんどが長方形だが、隅丸長方形（１・10・18・31・37・38号）や不整形のもの（36号）もある。

主軸方向は大部分がＮ－８°－ＥからＮ－21°－Ｗの範囲に入る。それに入らぬものは３・27～31・33・36・38・44・45・50号だが、これらは３・36・38号を除いて調査地東側に集中する。土坑墓の大部分は木棺墓と同じく主軸が南北方向のものが多く、やはり台地の尾根方向に平行する。

これらの木棺墓・土坑墓はたがいに切りあわず、さして長くない時間内に営まれたと推定される。

なお28号土坑墓埋土中から、滑石製の勾玉らしい破片が出土している。滑石製勾玉は、環溝東北部の環溝内夜臼式・板付Ⅰ式土器の層で出土しているが〔下條1970〕、28号出土品は、環溝出土例ほど厚くなく仕上げもていねいである。

板付遺跡の墓地は、第１区以外に３ヵ所がしられている（地図６）。

１　板付田端遺跡

1916年の地下げ中に発見された〔中山1917ａ〕。現地は約２アールの広さで、水田面より３ｍほど高い円墳状の隆起を示していて、明治時代にはその上に地緑天神社があった。現在の通津寺の東南側で環溝外にあたる。森・岡崎〔1961〕では、当時の公民館に近接した東側に比定しているが、中山氏によれば、現地は「陸地測量部地圖中神祠符號の記入せられた２地點」〔中山1917ａ〕で、「此地を再巡せしに、銅鉾銅剣所出の塚地が殆んど全く其形を失ひ稲田と化し居り去り」〔中山1918ａ〕という。明治34年発行２万分の１地図（地図３）の神社所在地で、その後水田になったところは、公民館東よりさらに小道をはさんだ東側、現県道の西側にあたり、現在植木畑となっているところであり(森・岡崎〔1961〕推定地の東側)、ここが田端遺跡である可能性が強い。

ここでは三ヵ所の甕棺墓より銅矛３口、銅剣３口の細形銅利器が発見された。中山氏採集の土器片をみると、甕棺は前期末～中期中葉のものがある。その中に銅銹・朱の付着したものがあり、これが前期末のものであるから、銅剣・銅矛はその時期のものと推定されている。中山〔1917ａ〕には甕棺墓は６基以上出土したという。(なお通津寺南の県道が南に移されて、この地を通るので1976年度に調査する。これによって詳細が判明するかもしれない)

２　環溝北西側の墓地

環溝西側の第14号竪穴を切って中期の甕棺が出土した〔森・岡崎1961〕。今回の調査では、この地点に近接する第２区の客土層とその下の包含層から中期中葉～後期前葉の甕棺破片が出土した。その後1975年の調査〔1976年３月に報告書刊行予定〕では、環溝北側約50ｍのＧ－５ａ地点で、甕棺墓42基、木棺墓11基、土坑墓13基が出土し、環溝西側14号竪穴上の甕棺墓を南限とするであろう墓地の存在がしられた。調査されたものは前期初頭から中期中葉までだが、沖積地第２区包含層出土の甕棺片もこの墓地からの流入の可能性が強く、この墓地は後期前葉までつづくと考えられる。

３　Ｄ・Ｅ－９地点

1974年の緊急調査で、台地南端のＤ・Ｅ－９地点で前期後葉とみられる木棺墓１基が見出され、その北東側の台地南西側Ｆ－９ａ地点でも袋状竪穴埋土から前期末の甕棺らしい破片が出土した〔後藤・横山1975〕。こうしたことから台地南側にも前期からの墓地の存在がしられる。

以上の墓地は、台地北端の第１区の墓地をも含め、すべて前期からはじまっており、田端遺跡とＧ－５ａ地点とは、その位置からみて環溝内に居住した人々の墓地と考えられる。生活址は第１区でも前期初頭からはじまっているが、台地上では前期初頭の墓は見出されていない（Ｇ－５ａ地点には夜臼式土器を出す竪穴に切られた土坑墓があり、初頭に位置するかもしれない）。前期末になると板付台地上には４ヵ所の墓地が存在する。このうち重要な副葬品をもつのは田端遺跡だけで、他の３ヵ所では今のところ副葬品はしられていない。いずれの墓地も完掘していないが、現在しられた材料から推定すれば、前期初頭に生活をはじめた人々は環溝内に住居を営み、環溝北西側のＧ－５ａ地点を中心とするところに最初の墓地を設けたが、台地北端部にもただちに生活を開始したとみられる（第１区）。その後台地南端部にも生活地をひろげ（Ｆ－９ａ地点）、台地南端と北端にも墓地が設けられたが、環溝東南側の田端遺跡との間には顕著な差が認められる。したがって板付台地上ではすでに前期末には、優位性をもつ者の墓地とそうでない者の墓地とが併在していたのである。しかし、村落内で優位だった田端遺跡に葬られた人々とその集団も、中期にいたれば他の村落・集団（たとえば須玖岡本などに示される）に従属するにいたったことは、板付台地上のその後の墓地からみても明らかである。（沢）

第2節　遺　　物

1　弥生式土器（Fig.7・4）

本遺跡は弥生時代全般にわたっており、遺物量に差はあるが、土器は後期の一部を除いて各時期のものが出土している。

しかしながら、第1区台地上の遺構は上部の大半を削平されており、また他の遺物も明確に一時期のものがセットとしてとらえられる様な状態ではなかった。その中で第2区J・K－25トレンチ内の旧河川砂層中出土のものは完形品も多く、より古い時期の混入はあるにせよ、中期終末期の良好なセットと考えられ、それに後続する同トレンチ畦状遺構出土の後期初頭の土器と層位的にも分離しえた。ここでは、この中期河川内出土の一群の土器についてのべておこう。

北九州の弥生中期土器はすでに1935年から須玖出土の土器を標式として須玖式の名称が与えられ〔森本1935〕、以後の研究もそれを踏襲している〔小田1972～1973〕。

中期後葉の土器はいままでに須玖II式〔杉原1955・1960〕、中期第六式〔森1955〕、御床式〔森1966〕、須玖III式〔岡崎1971〕等の名称でよばれていた。

1969年に福岡市教育委員会が行った宝台遺跡の調査で、中期中葉から終末にかけて良好な資料が出土し、それぞれ宝台I式、II式と命名された〔高倉1970〕。従来の須玖式という名称は、北九州地方の弥生式土器編年が甕棺を中心として行われており、甕棺の型式名を日常用の土器に転用させたにすぎず、また須玖遺跡そのものが甕棺墓地であるために土器編年の型式名としては不適当のようである。また、御床式という名称も、それが、糸島郡の遺跡であり、編年の地域差をなくすためにも、福岡平野における型式名としては福岡平野部の遺跡に求めるべきであろう。森・岡崎〔1961〕では板付遺跡出土のこの時期のものを板付IV式としているが板付III式が中期前葉であり、IV式は中期中葉をも含めたものであり、混乱をまねくおそれがある。したがってここでは中期中葉を宝台I式、中期終末を宝台II式と呼ぶことにしたい。

ところで宝台遺跡における宝台I式とII式の間にはもう一型式存在すると考えられており〔高倉1970〕、本遺跡でもそれにあたる土器が出土している。しかし、これはセットとして出土しているものではなく、J－26トレンチの旧河川砂層出土の土器や、Gライン各トレンチの客土層出土の土器の一部である。

宝台I式では甕の口縁部は逆「L」字状および「T」字状をなし、口縁上面は平坦か、外に向って下向する。口縁下に一条の三角突帯や「M」字状突帯をもつものがある。胴部は口縁部径以上に張るものは少ない。壺はいわゆる「鋤」状口縁をもつが、板付では類例が少ない。無頸壺の出現もこの前後であろう。無頸壺の口縁は古いものは口縁外側に断面三角形を貼り付けたようなものであり、上端が平坦である。高坏も「鋤」状口縁をもち、口縁下に突帯をもつものもある。脚部は細く高くなり、優美なものが多い。器台も器壁が薄手で、作りのよいものである。

中期後葉では甕は逆「L」字状口縁をもつものもあるが、「く」の字状になる傾向を示しはじめる。口縁内端の張り出しがなくなるものが多くなる。丹塗りの甕の一部には口縁が外側に強く下向する例もある。口縁下に突帯をもつものは、割合大形の甕に限られる傾向がある。胴部は口縁径より張るものも現われる。壺も板付では少いが、やはり「鋤」状口縁をもち、口縁外端が下向するようである。無頸壺も口縁が「く」の字状を呈しはじめるが、口縁端ではわずかながら平坦面をもつ。高坏は変化に乏しいが、脚部が低くなるものもある。中期中葉にはあまりみられない刷毛目調整を消さずに丹塗りを行う手法も、この時期から目立ちはじめる。今回の調査では良好な例はないが、袋状口縁の壺や、大形の筒形土器の出現もこの時期のものであろう。

中期終末宝台II式では、甕は完全に「く」の字状口縁を呈しているが、口縁内端に稜がつくものは少ない。口縁部にいわゆる跳ねあがり口縁に近くなるものも若干存在する。口縁下の突帯は大形の甕にしかつかないようである。壺はやはり「鋤」状口縁をもつが、外端の下向が強くなる。胴部の張りはあまり強くなく口縁に比べて小さい傾向をもつ。J・K－25トレンチではこれを模したような小形の壺があるが、これは1975年度調査のG－5a地点の井戸址からも出土している。なお壺の一部には、痕跡的にしか「鋤」状口縁は残らず、そのまま外へ開き、先端近くで外へわずかに折れている例もある。無頸壺は口縁部が完全に「く」の字状を呈する。無頸壺はこの時期で姿を消す。この蓋は中葉も終末もほとんど変わらない。袋状口縁の壺は前時期に比べて、突帯などの装飾が少なくなり、ずんぐりとした器形となる。鉢の小形のものには胴部に突帯を巡らすものもある。高坏はあまり変わらないが、「鋤」状口縁の退化が良く認められる。大形の筒形土器もこの時期で姿を消すようである。

後期初頭では、甕の口縁は直立に近いものや、完全に跳ねあがり口縁をもつものがある。器面調整では、前時期と比較して、刷毛目調整が粗くなる。壺は出土例が少なく、はっきりしないが、鹿部東町遺跡の例〔高倉1973b〕にも「鋤」状口縁の外端の下向きが強いものがあり、この時期までは残るものであろう。袋状口縁の壺が多くなるが、口縁部外側に稜をもって角張ってくる。鉢はあまり変わらない。高坏の脚はかなり低くなる。器台は器壁が厚くなり、作りも指の調整痕が残るなどかなり粗雑な感じを与えるものになる。

以上に述べた特長からみて、J・K－25トレンチ旧河川砂層出土の土器は弥生中期終末の良好な資料といえよう。しかし出土状態そのものが特殊なものであり、その前後の時期の土器もセット関係を知るには限界がある。ここでは、板付遺跡において福岡平野の編年を行いうる可能性を示すだけにとどめ、今後の台地上の調査や、よりよいタイプ・サイトの発見までは、宝台I式・II式の名称を使用すべきことを提唱しておきたい。

その他の時期のものは、前述のように台地上出土のものは遺構残存状態が良好でなく、沖積地包含層出土品も厳密な層区分を示すものがなく、編年のための資料としては不適当である。

第1区の沖積層で多量に出土した夜臼式土器も、同じ層から前期末の土器もかなり出土し、それらを包含する黒色粘質土層が弥生時代前期の包含層とはいえても、各型式の分類・認定はこれまでの研究にもとづかざるをえない。

夜臼式土器については、1975年に調査した諸岡丘陵東麓の水田（諸岡遺跡Ｆ地点）で興味ある資料が得られた（近く報告の予定）。調査は小規模で出土土器も多くない。出土土器は、一部に若干考察の余地はあるものの、ほとんどが夜臼式土器で、明らかに黒川式の新しいものから導かれるものがあり、夜臼式土器の単純包含層の可能性が強い。ただし諸岡丘陵では、それに続くとみられる板付Ｉ式土器やそれに伴なう夜臼式土器の発見は現在のところない。板付遺跡の夜臼式土器は諸岡遺跡Ｆ地点のそれとはことなっており、より新しい様相を示し、ほとんどすべてが板付Ｉ式土器と共伴する。このことから、板付遺跡での生活の開始期は夜臼式土器と板付Ｉ式土器の共伴期に求めるのが妥当であろう。

なお、第２区Ｇ－25トレンチでは、口縁外側に粘土紐をまきつける朝鮮系無文土器片が２点出土している。諸岡遺跡では前期終末の竪穴で多量に出土したが〔後藤・横山1975〕、本遺跡の例は客土層出土で、時期を特定しえない。（沢）

2．石　器

今回出土した石器類について、既出土資料を援用して、若干の考察を加えたい。

出土石器のうち弥生時代のものとみられるものを、器種別、出土地別に示せばTab.７・１のようになる。これによれば総量は約1500点であるが、このうちには石器と呼べない削片なども含んでおり、実数はもっと少ない。

器種ではナイフ形石器、台形石器といった先土器時代に属するものや縄文時代のものを除けば、弥生時代に属する石製品は大別して①工具、②収穫具、③石製利器、④その他に分類される。

工　具

工具は蛤刃石斧、方柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、扁平磨製石斧、穿孔用石器である。

蛤刃石器は77点出土している。これらはいずれも使用による折損によって小片となっているものが多く、１点が１個体とは速断できないが、現地での使用頻度の高さを示すものとして興味深い。破片は刃部のみならず、頭部の破損例がある。石材は砂岩質の岩石を主体とする堆積岩製のもの（48点）と福岡市今山遺跡産玄武岩を素材とするもの（29点）とがある。今山産太型蛤刃石斧の製作は前期末にはじまるとはいえ〔下条1972、1973〕、その生産・流通の主要な時期は中期であり、板付遺跡における前期蛤刃石斧に使用された主要な石材が頁岩質砂岩であることから〔森・岡崎1961〕、玄武岩製石斧の大量移入は中期を中心におこなわれたものと思われる。

蛤刃石斧は使用による破損が著しく、完形品を多く残さないが、使用石材の種類によって形態、法量のちがいがみとめられる。頁岩質砂岩を主とするもの（第１類）は全体に小形で、身の厚さの比較的薄い形態である。ずんぐりした撥形（Ｓ6113・6803等—1a類）と、身幅が狭く平行な側辺をもつもの（Ｓ6802・6812等—1b類）があり、それぞれ大小が区別される。1a類の

大形（S6803）では推定長15cm前後・幅8cm・厚さ36cm・重量 530g以上であり、同小形（S6113）では推定長9.5cm・幅6.2cm・厚さ3.8cm・重量240g以上である。1b類の大形（S6802）は長さ15.8cm・幅6cm・厚さ3.6cm・重量460g以上で、同小形は推定長10cm内外・幅4.4cm・厚さ2.4cm・重量190g以上である。この第1類は比較的残りの良い上記資料から判断して、重量は 800gを越えないであろう。また1a類は環溝遺跡の調査では夜臼式・板付Ⅰ式土器に伴っており、一応前期前葉と考えてよく〔森・岡崎1961〕、1b類も前期を中心とした時期の所産であろう。

第2類は玄武岩使用のものである。これも完形品はなく、第3区出土例（S72）は推定長21cm・幅7.6cm・推定厚5.2cm・重量1190g以上である。今山産石斧の平均的法量について下條氏が、長さ20～22cm、幅7～8cm、厚さ4～6cm（5cm台が最多）、1kgを越えるものが多い、と指摘しているのに適合しよう〔下條1975c〕。また第1区の前期層では同石材を使用した小形の頭部破片（S6016、E－17グリッド）が出土しており、今山産と区別される。

方柱状片刃石斧・扁平片刃石斧はいずれも蛤刃石斧より出土量は少なく、完形品に乏しい。方柱状片刃石斧では前期に位置づけられる資料が第1区で2点（S6014・6307）出土し、扁平片刃石斧の1点（S6005）も同様である。石材では粘板岩・砂岩・変成岩を使用している。かつて出土した例では、方柱状片刃石斧に環溝北東部の環状溝D_5（夜臼式・板付Ⅰ式層）出土の例がある〔下條1970〕。扁平片刃石斧では環溝西側の弧状溝4区（夜臼式・板付Ⅰ式層と板付Ⅳ式層）出土の4例〔森・岡崎1961〕、環溝北東部の環状溝D_5（夜臼式・板付Ⅰ式層）および袋状竪穴（P_{10}）出土の1例があって〔下條1970〕、いずれも砂岩質の石材を使用し、時期的には前期前葉～中期に及ぶ。しかも未製品が見出されていることから集落内の製作になるものと考えられる。しかしこれらの原材の供給地の所在は不明である。

扁平磨製石斧は2点ある（S1800・6119）。S6119は前期の所産であろう。いずれも刃部を欠失し、厚さは薄く量感に乏しい。朝倉郡夜須町沼尻遺跡では前期～中・後期の甕棺墓地において両刃の類似品が採集されているが時期を限定できない。〔高山1969〕。環溝西側の弧状溝4区（夜臼式・板付Ⅰ式層）に扁平な有孔石斧が出土しており、報告者はこれに「アックス様」の使用法を想定しているが〔森・岡崎1961〕、孔部は緊縛を確実にするためのものであろう。今回出土品にも同様の機能を想定できる。

穿孔用石器と考えられるものは3点出土した。いずれも砂岩を使用し、本体が円棒状と扁平なものとがある。鹿児島県高橋貝塚では前期の出土例がしられており〔河口1963、1965〕、本例も出土状態からみて前期の所産であろう。

収穫具

収穫用石器としては石庖丁と石鎌があり、いずれもほとんどが破損している。

石庖丁は使用石材の上で、頁岩質砂岩製品（51点）と凝灰岩製品（7点）とにわけられ、比率は7：1である。頁岩質砂岩製のものには未成品が出土しており、打裂段階で破損したもの（S6608・6815、第1区）、打製後の穿孔のための敲打を残すもの（S6713、第1区）、打裂後

Tab. 7·1　弥生時代出土石器数量一覧

区	出土位置・層	蛤刃斧石		方柱状片刃石斧	扁平片刃石斧	扁平磨製石斧	環状石斧	石庖丁		石鎌	石剣	磨製石鏃	石槍	打製石鏃		掻器			削器		石錐	穿孔用石器	剥片石器	石核		剥片			削片		原石	磨石	敲石	砥石	凹石
		玄武岩	その他					頁岩質砂岩	凝灰岩					黒曜石	サヌカイト	黒曜石	サヌカイト	その他	黒曜石	サヌカイト				黒曜石	サヌカイト	黒曜石	サヌカイト	その他	黒曜石	サヌカイト					
1	耕土層・包含層・遺構埋土	9	13	2				7		2	1		1	8	3	2	3		8	1	3		29	37	1	29	1	1	152	2	3	6	3	10	
	弥生時代竪穴	5		1	1			2			1			4		2				1	1	3	14	48	2	36			203	5	4	5	4	20	
	沖積地弥生時代層	9	19	4	1	1		13		2		2	1	4	1	3	2	1	2	2	1		22	83		61	1		192		1	8		29	
	小計	23	32	7	2	1		22		4	2	2	2	16	4	7	5	1	10	4	5	3	65	168	3	126	2	1	547	7	8	19	7	59	
2	耕土層・包含層	1	5	2		1		14	4			1		1				1	1	1			5	4		13	2		11		3	2	1	9	
	客土層	4	6				1	9	2	1									1	2			12	8		3	1		4		2	3	1	8	2
	弥生時代層		5					3	1			1		1						1			8	12		28			14					2	
	小計	5	16	2		1	1	26	7	1		2		2				1	2	4			25	28		63	3		33		5	5	2	19	2
3	耕土層・包含層							2															1	2		7		1	14	1	2			2	
	弥生時代層（溝・旧河川）	1						1						1									1	1		7	2		3	2				1	
	小計	1						3						1									2	3		14	2	1	17	3	2			3	
4	耕土層・包含層																1									2			2					2	
計		29	48	9	2	2	1	51	7	5	2	4	2	19	4	7	6	2	12	8	5	3	92	199	3	205	7	2	599	10	15	24	9	83	2

の体部研磨・刃付けがはじまっているが未穿孔のもの（S6734、第1区、S1021、第2区）等があって、集落内での製作になると考えてよい〔下條1975b〕。

凝灰岩製品は飯塚市立岩遺跡産と考えられ、第2区の台地際（G－24・25・26トレンチ）でのみ出土し、出土地点に片寄りを示している。環溝部の調査では、板付Ⅰ式層には含まれず、板付Ⅳ式層に多く〔森・岡崎1961〕、立岩産の磨製石器類の周辺地域への搬出が中期初頭以後に開始されたとみられるので〔下條1975c〕、今回の出土品も中期に位置づけられよう。これらは石庖丁全体の比率からいえばそれほど大きくない。

石鎌は5点出土している。石庖丁にくらべ、収穫具としてはそれほどポピュラーな石器とは思われない。形態の上からは、刃部が直線形と内彎形とに区別される。いずれも欠損がはなはだしい。石材は頁岩質砂岩である。第1区出土品のうち2例（S6003・6006）は前期に属する。また環溝部の調査では板付Ⅳ式土層出土のものに内彎刃の例があり、中期まで存続することがしられる。これまでに出土した3例〔森・岡崎1961、下條1970〕も、すべて同種の石材を用いる。頁岩質砂岩製石庖丁と同様に、集落内で製作されたと考えられる。弥生時代の石鎌については藤田等氏の研究があり〔藤田1964〕、その後の出土例を加えて地名表を付した（Tab.7・2）。

石製利器

石製利器には磨製石剣・磨製石鏃・環状石斧・各種打製石器がある。

磨製石剣は2点出土している。1点は切先先端部で、両面に鎬を有するが、断面は丸味をもった紡錘形である（S6819）。他は身部をほとんど欠失する柄部（S2026）である。全体に細身で、中央に鎬が走る。これは前期の所産である。これまでに石剣は、環溝部の夜臼式・板付Ⅰ式層で2点、台地南端のD・E－9地点で1点出土している〔森・岡崎1961、後藤・横山1975〕。

磨製石鏃は4点出土しており、有茎で中心に鎬を有するもの（S6767・6037）と扁平で無茎のもの（S1013・1181）とがある。前者は前期に位置づけられ、後者は弥生中期土器を主とする客土層出土と、包含層（砂層）の出土である。既出土例中には未成品が含まれている〔下條1970〕。石材は粘板岩・頁岩・変成岩で、現地製作の可能性もある。

環状石斧は第2区客土層で1点出土した。機能的には武器と考えられる。板付遺跡でははじめての出土例である。ここでは弥生時代環状石斧の地名表を付すにとどめる（Tad.7・3）。

打製石器は、先土器・縄文時代の出土品を除けば、原石・石核・剥片・削片・石鏃・石槍・掻器・削器・石錐・石小刀・使用痕のある剥片（剥片石器とよぶ）等である。

原石は第1区で8点、第2区で5点、第3区で2点、計15点出土した。すべて漆黒色の黒曜石で長さ4cm・幅2.5～3cm・厚さ3cm程度の小角礫で、自然面がある。流理構造は褶曲状を呈する。このような肉眼的特徴からすれば、これらの原石は伊万里市腰岳産黒曜石に類し、彼の地から供給されたと考えられるが、同地産出の平均的礫と比較して小形である〔清水1972〕。第1区出土のうち1点は第1区E－17グリット前期包含層、4点は前期竪穴出土であり、同期の移入がしられる。

石核は202点出土している。その約85％の171点は第1区で出土する。石材は黒曜石とサヌカ

イトがあり、黒曜石は前記の原石と同種のもので、全体の約98%、199点を占め、残り３点がサヌカイトである。第１区の竪穴群(弥生前期)で50点を出土し、うち48点が黒曜石である。この点は、剥片・削片の石材比率と一致する。黒曜石・サヌカイトとも角礫の平坦な自然面を打面として剥離する場合がもっとも多く、まれに比較的大形の裂片を使用したものがある。石核は打面調整を施すことなく（このことは原石の大きさに関連するかもしれない)、したがって任意に剥離された剥片は定形石器製作にあたってはかなりの選択作業を要したと考えられる。黒曜石石核のうちには剥離作業１～２回ほどで放棄されたものが少量あり、大きさは拇指頭程度から若干小さい例があり、重量30～50ｇであって、使用石材の最小の単位であろう。黒曜石石核から復元した原石（原材）の大きさは、先にのべた原石とほぼ同じものが多い。しかし、剥片や主要剥離面を広く残す石器の中にはこのような石核からは得られない大形のものを混じており、素材としてはさらに大きな礫があったと考えられる。サヌカイトの原石は、残核からみれば黒曜石のそれよりかなり大形である。

剥片は214点出土している。第１区が129点、第２区の台地際を中心に66点である。石材別にみれば黒曜石205点、サヌカイト7点、その他２点で、出土地点別と石材別の比は石核の場合とほぼ等しい。黒曜石製剥片は、4.2×2.5×0.5cmもしくは3.5×2×0.5cm程度の大きさを中心としているが、全体の構成では後者に近いものが多いようだ。またすべての黒曜石・サヌカイト製剥片は、頭部・側辺部・末端部のいずれかに礫面を残しており、頭部（打面）に残る例が最も多い。そしてこれらは同時に側辺部・末端部に礫面が残り、整ったものには連続剥離を示す剥離痕がある。打面幅は0.5cm程度のものが平均的である。

削片は第１・第２区を通じて609点出土した。第１区554点、第２区33点であり、石材別では全体の98%の599点を黒曜石が占め、サヌカイトは10点にすぎない。その比率は石核･剥片のそれに近い。

打製石器製作を示す原石・石核・剥片・削片は、第１区を中心に出土し、前期における打製石器の多量の製作を物語る。中期以降では断片的な資料によって製作がしられるだけである。

打製石鏃は１～３区を通じて23点出土した。石材は黒曜石とサヌカイトである。基部の形態から分ければ凹基無茎式（13点)、平基無茎式（２点)、凸基無茎式（２点）で、凹基式が多く、環溝調査でも同様の結果を得ている。出土状態からどの形態も前期を中心に用いられたようだ。

石槍はサヌカイト製２点が出土している。Ｓ6321は前期の所産とみられ、環溝西側の弧状溝第４区、第22号竪穴などで柳葉形のものがあり〔森・岡崎1961〕、同時期と考えてよい。

掻器・削器類は第１～２区を通じて35点出土し、サヌカイト製14点、黒曜石製19点である。

掻器は15点出土し、６点がサヌカイト製である。第１区例（Ｓ6749・6570）では、ずんぐりした剥片末端に裏面側から調整により刃部を形成しており、前期とみてよい。削器は20点あり、黒曜石12点である。素材はいずれも礫面を有する不定形剥片であり、側辺の一辺あるいは両縁に調整を加えて仕上げており、主要剥離面を広く残す。第１区例（Ｓ6004）は前期である。

石錐は第１区で５点出土している。いずれも黒曜石製で、剥片頭部がつまみとなり、主要剥離面を残すので、先端部断面は三角形になる。Ｓ3501・6011は前期のものだろう。

石小刀は1点あり、サヌカイト製で前期とみられる。環溝の夜臼式・板付Ⅰ式層では「鎌形打製石器」とされる砂岩・サヌカイト製の類似品が3点出土している〔森・岡崎1961〕。前期の所産であろう。

剥片を素材とする石器の中には、定形化した石器以外のものが少なくない。剥片縁辺の各所に細かい2次加工を施したもの・身の厚い尖頭状石器（第2区S1029等）、縁辺に使用による刃こぼれのある剥片が第1～3区で92点出土している（剥片石器）。2次加工を加えた剥片は使用痕のある剥片とともに不定形石器の大半を占め、これらは掻器・削器などの定形化した石器の機能をもち、量的にこれを補なうものと考えられる。特に第1区沖積層の黒色粘質土層・台地上竪穴出土のものは前期に位置づけられよう。

その他

砥石（83点）は第1区と、第2区台地際に集中して出土し、中粒の砂岩・花崗岩礫製が多い。

小円礫は第2区例（S1132）のような大きさの円礫である。第1～3区で115点出土している。小郡市津古内畑遺跡第18号袋状竪穴例で推定されているように、武器としての「石弾」の可能性もある〔西谷1970〕。

磨石・敲石・凹石・台石・残い凹部をもつ石皿がある。これらも砂岩・花崗岩利用のものが多い。他に花崗岩・砂岩・変成岩の円礫・角礫が多数出土している。

石錘は浅い紐かけ溝を有する滑石製のものと、肩平円礫の長軸両端を打ち欠いたもの、5点が出土しているにすぎない。

石製品には第2区出土の青銅器鋳型2点と紡錘車がある。紡錘車は円盤形で、頁岩質と結晶片岩製のものがある。土製品も多い。

鋳型のうち1点は中広銅矛とみられ、鋳造時の黒斑を有し、集落内の青銅器生産の存在を物語る。なお、今回出土した金属器としては、第2区客土層出土の鉄斧と畦状遺構出土の銅鏃（後期前葉）各1点がある。これらに関連して、弥生時代の青銅器鋳型と銅鏃の地名表を付した（Tab. 7・4、7・5）。

以上、今回の調査で出土した弥生時代石器について概観した。主要な生産用具とされる大陸系磨製石器類やこれとともに用いられる各種打製石器（縄文系といえよう）の多くは、基本的には集落内で生産されたと考えられる。しかし打製石器類の素材である黒曜石・サヌカイトや、磨製石器の石材としての頁岩質砂岩の確保は、他地域との交易や産出地での採取によらねばならず、その実態の解明が課題となる。

中期以降になると、今山産太型蛤刃石斧や立岩産石庖丁のように規格性をもつ製品が数多く外部から移入されている。この点は北部九州の他の遺跡と同様であり〔下條1973、1975a・b〕、さらに板付遺跡における実態を個別的に把握することが課題となろう。　（横山）

3　木製品

木製品の出土量は多いが、大部分は杭で、生産・生活用具は少ない。これらの多くは時期を判定しうる遺構とその周辺で出土した。大部分が弥生時代のもので、残りはそれより新しいとみられるが、時代を正確に判定しえない。

出土した木製品・木材は極力とりあげるようにしたが、固い砂層に打ち込まれた杭などはとりあげることができず、また保存地区（第２区）では実測・写真撮影後埋めもどしたものもある。とりあげて登録したのは第１区35点、第２区420点、第３区323点、第４区29点、計807点である。この他にラベルがとれたり消えたため出土トレンチがわからなくなり登録しなかったものが数十点ある。登録したものの大部分は樹種を鑑定した。

出土木材は、1）生産・生活用具としての木製品、2）さまざまな施設に用いるための矢板・杭など、3）用途不明の木製品と加工品小片、4）自然木（未加工のまま施設に用いたもの、折れた丸木杭とみられるもの、純然たる自然流木など）に大別できる。

生産・生活用具のうちもっとも多いのは農耕具で、農耕具らしい細片を除けば10点あり、すべてカシを用いて作られる。いずれも中期中葉～後期前葉のものである。内訳は又鍬６・又鋤２・鋤か鍬か不明１・平鍬１で、刃部が又状のものが９点を占める。

鋤はW2001と2026であり、鍬か鋤か不明のもの（W3289）は鋤だろうと判断した（第５章）。W2026は刃部から柄部までを一木で作り、柄端に横棒をつけて把部とする。W2001は柄を別に結びつける着柄鋤らしく、W3289も同様であろう。刃部はW2026とW3289が三又、W2001は二又になる。刃長はW2026が約19cmで身部の約２倍、W2001が約26cm、W3289が34～35cmで、刃部断面は、W2001は扁平で、W3289は正方形に近く細い。W2026は中央の刃は、断面正方形に近く、両縁の刃は長方形に近い。

鍬６点はいずれも又状の刃部をもち身部に方形の柄孔がある。柄の挿入角度は、判明するものすべてが傾斜をもち、直角のものはない。木製鍬の柄の挿入角は、鋭角と鈍角それぞれの場合があるという〔黒崎1970〕。今回出土の鍬類は、柄孔の観察からはいずれとも判断できないが、鋭角になると思われる。刃部は二又と三又の両者がある。二又になるもの３点（W2064・2251・3018）の刃部はいずれも幅がひろく（４～５cm）、扁平である。刃長はW2251が原状を示すとみられ、長さ40cm前後で、全長の約67％を占める。他の２点もかなり長大だったろう。

三又になるもの３点（W2252・2253・3288）は刃部形態から２つにわけられる。W2252は刃部断面が長方形で先端部まで幅広い（幅３cm）。刃長は20～22cmで、身部とほぼ同じ長さである。これに対しW2253とW3288は刃部断面が正方形に近く（幅1.5～２cm）、刃長はW2253が約35cmで身部長とほぼ同じく、W3288は約35cmで全長の約62％を占める。

このように形態区分はできるが、そこに時期的な差・あるいは使用目的の差を認めることは困難である。

このように先端が又状になるものがほとんどすべてで、広鍬や狭鍬あるいは又状になっていない鋤などは１点もない。今回出土した農耕具が当時用いられていたもののすべての種類とは

考えられず、他の種類も存在したと思われるが、破片すら出土していない。

出土した又状の農耕具は、湿田の深耕に適し、生産遺構の項でのべたような自然条件のもとで用いるのにふさわしかったにしても、それだけで十分とは思えない。

北部九州では最近木製農耕具の出土例が増加している。佐賀県の土生遺跡・久蘇遺跡〔佐賀県立博物館1972、佐賀県教育委員会1973〕、長崎県里田原遺跡〔長崎県教育委員会1972・1974・1975〕、福岡県鹿部東町遺跡〔高倉1973〕、福岡市湯納遺跡〔栗原1973、福岡県教育委員会1972・1973〕、福岡市鶴町遺跡、福岡市四箇遺跡などで弥生時代農耕具が出土し、大分県安国寺遺跡〔九州文化綜合研究所1958〕や丹生川遺跡（富木・佐藤・杉崎1962、大分県教委1964）でもかつて出土したことがある。

鹿部東町遺跡では中期初頭の城ノ越式土器の層から柄を着装したままの平鍬（狭鍬）1・平鍬未成品2・着柄鋤身部1・鋤把部片1が出土しているが、刃部が又状のものはない。佐賀県土生遺跡では中期前葉とみられる板鍬（狭鍬）・二又鍬・三又鍬・鋤柄片・鋤（又状でない）などが出土している。二又鍬・三又鍬などは全長44cmほどで、刃部は扁平で幅がある。久蘇遺跡では広鍬が出土している。その1点は黒崎氏が「広鍬d類」〔黒崎1970〕とするものに近い。時期は土師器・弥生式土器混在のため特定できないという。長崎県里田原遺跡では中期初頭の木製農耕具が多数出土している。広鍬類が多く、又状の鍬・鋤、又状にならない着柄鋤などがある。又状のものは少ないという。福岡市湯納遺跡では弥生時代終末から古墳時代にかけての農耕具が出土した。鍬は立木の幹と枝を利用した合わせ鍬1（弥生後期）・平鍬8（弥生後期～古墳～平安時代）・二又鍬3（古墳時代）・三又鍬2、鋤はスコップ状のもの8（1は古墳時代、7は弥生後期）である〔栗原1973〕。鶴町遺跡では弥生時代（時期を限定できない）の二又鋤・三又鍬・二又鍬・狭鍬・平鍬が出土しており、狭鍬1点は板付II式土器の層の出土だという〔福岡市教育委員会調査〕。大分県安国寺遺跡では平鍬の他に又鍬も出土している。

以上のように北部九州の各遺跡出土の農耕具は種々のものがあるので今回出土した板付遺跡の農耕具も、用いられた農耕具の一部の種類とみるべきだろう。むろん、前にのべたような土地の状態が、又状の農耕具をヨリ多く必要としたともいえよう。

これらの農耕具はいずれも遺構部分で出土し、W2026・2251を除いて破損が甚しい。使用時に破損して打ち棄てられたとみられ、それが用いられた場所は出土位置からさほどへだたってはいないであろう。

今回の調査では未成品は出土していない。農耕具の生産が集落内で自給的に行われたのかどうかは重要な問題ではあるが、未成品の不在が直ちに他からの供給を示すものではない。調査地が用具生産の場ではないからである。

この他の農具と考えられるものは田下駄状木製品（W2027）である。田下駄としてはやや小さすぎる感もある。

生活用具としては網枠（W2025）、椀（W2039）、糸巻状木製品（W2055）、石斧柄未成品（W2065）、剣状木製品（W2031）、柄状木製品（W2002）、杵（W2250）などがある。いずれも中期中葉～後期前葉に属する。

用途が明らかでない木製品も多い。加工品の小片となったものを除けばW3261・3218・3171などは用途がはっきりしない。W3261は里田原遺跡出土の「構築材」に大きさ・形態が近い。

杭・矢板類は多数出土した。矢板は、第２区の前期矢板列に用いられていたものの他はきわめて少なく、板状杭とよぶべきものが他の杭とともに用いられていた。

前期の矢板はＪ－23トレンチとＪ－26トレンチのものをとりあげた。いずれも薄い板状のもので、１本１本に規格性はみられない。樹種はシイが大部分である。

杭は、丸木の先端をとがらせた丸木杭、原木を裂いた材で作った割杭・角杭・板状杭などがある。杭の樹種はとくに限定されておらず、杭に用いられた樹種は30種類におよぶ。その中でもマツ・スギ・クリ・カシ・シイ・ユズリハ・アワブキが多用される。マツ・カシ・ユズリハはほとんど丸木杭に用いられ、スギは割杭に多く用いられ、クリ・シイなどは両方に用いられる。同一の遺構に用いられた樹種は雑多であるが、その中でもシイが多く用いられる。これらの原木は遺跡の台地上や旧河の周辺に生育していたもので、一定の樹種を選ぶことなく、手ごろのものを杭に加工したのだろう。

杭の中には、建築材とみられるていねいに加工した多面体の柱状のものを裂いて杭に転用したものがＪ・Ｋ－25トレンチの畦状遺構で出た。ほとんどがスギを用いている。

流木類は、流水や氾濫ではこばれ埋没したもので、一部には丸木杭の先端の折れたものをも含んでいよう。樹種は30種あまりになる。ヤナギがとびぬけて多く、カシ・シイ・ムクノキ・サイカチも多い。ヤナギは河岸に多かったのであろうか。　（後藤）

第3節　板付遺跡—あとがきにかえて—

板付台地はほぼ北北西～南南東方向にのびる長さ約650m・幅約200m未満の独立低台地である。台地東方を流れる御笠川は向きを西にかえて台地北端をかすめる。諸岡川は台地の約300m西方を台地とほぼ平行に流れ御笠川に合流する。諸岡川は弥生時代には現状より東側を流れ、東岸は台地から100m以内にあったろう。

台地上は平坦でなく、高低がある（地図6）。台地北端（今回調査の第1区）は標高8.5mで、その南G－5a地点まではほぼ同じ標高である（部分的に盛土されているが、盛土下の旧水田面の高さ）。G－5a地点のすぐ南で一段高くなり（9.5m）、通津寺境内では11.8mになる。その南はふたたび低くなり、県道付近で9.5m前後となり、その南の台地南端部は12mの高まりをなし（現状は畑）、南端部沖積層の畑（標高10m弱）へつづく。G－5a地点より北側は少くとも1mは削平されており、その南も1m近く削平されていると予想されるが、台地上はもともと南と北の2ヵ所が高くなっていたろう。

これまでに調査された台地上の遺構分布は次のとおりである（地図6）。

1.北端部（第1区）　竪穴（貯蔵穴）群（前期～中期初）、甕棺墓・木棺墓・土坑墓よりなる墓地（前期末～中期中葉）

2.G－5a地点　甕棺墓・木棺墓・土坑墓よりなる墓地（前期初～中期中葉）、竪穴（貯蔵穴？）（前期）、井戸（中期後葉）

3.通津寺とそのまわり　環溝（前期）

①西側（1～5区）　竪穴（貯蔵穴）群（前期）、井戸（中期後葉）、甕棺墓（中期中葉——G－5a地点の墓地の南端を示そう）　〔森・岡崎1961〕

②北東側　方形住居址（中期中葉以降）、竪穴（貯蔵穴？）（前期？）、井戸（中期後葉）、溝（環溝とは別）、環溝内の小貝塚（前期後葉）〔下條1970〕

③南側　竪穴（貯蔵穴）（前期）〔県教委調査〕

4.田端遺跡　甕棺墓地（前期末～中期中葉）〔中山1917a〕

5.F－9a地点　竪穴（貯蔵穴）（前期後葉）、竪穴（終末および不詳）〔後藤・横山1975〕

6.D・E－9地点　溝（前期）、木棺墓（前期）〔後藤・横山1975〕

この他に江戸時代末に銅矛5本が出土しているが、正確な地点は明らかでない（付編第10）。

環溝は数回の調査で、長径110m・短径80mのほぼ楕円形をなすことが明らかになった。溝は幅2～4mで断面はU字形・V字形をなす。溝底面の標高は北東部の小貝塚のあるところで8.75m、10区で9.04mである。1～4区は森・岡崎〔1961〕第3図から推定すれば8～9mだろうが、正確には不明。この環溝は夜臼式・板付I式土器の時期に作られ用いられたが、板付II式の時期にはすでに埋没しはじめ、中期にはほぼ埋めつくされたと考えられている。

環溝の内外には貯蔵穴と考えられる竪穴が多数ある。中には環溝に切られ、環溝に先行するものもあるが、竪穴はすべて弥生時代前期初頭から前期末の時期とみてよい。これと同時期の

貯蔵穴用竪穴は第１区、Ｇ－5a地点、Ｆ－9a地点にもあり、全部で150あまりがしられている。第１区のものは前期初頭～中期初頭で、Ｆ－9a地点のものは前期後葉に属す。すなわち生活遺構は環溝部分と台地北端部にまず形成され、ついで前期後葉には台地南端にもひろがった。南端部には、前期に台地と沖積地とを画するような溝があり（Ｄ・Ｅ－９地点)、第１区西側にも同様の溝がある。前期の住居地は少くとも環溝内には存在するとみられるが、現在は発見されていない。

墓地を見ると、Ｇ－5a地点に夜臼式土器を出す竪穴に切られた土坑墓があり、前期初頭とみられる。前期末になると環溝北西側（Ｇ－5a地点)、田端遺跡、南端部（Ｄ・Ｅ－９地点)、北端部（第１区）にも墓地が形成される。南端部は明らかでないが、その他の墓地は中期中葉までつづき、沖積層出土甕棺破片からみて、Ｇ－5a地点の墓地は後期はじめまでつづいた可能性もある。これらの墓地のうち田端遺跡のみが銅利器を副葬し、他は副葬品をもたず、そのあり方は高倉氏のいう伯玄社・金隈型である〔高倉1973ｃ〕。

中期以降の生活址は前期ほど明らかでない。環溝部（１～４区・北東部）とＧ－5a地点に中期後葉の井戸があり、環溝北東部の方形住居址は中期後葉以降とみられる。中期前葉の生活遺構はみつかっていない。これまでの調査でも、中期初頭～前葉の土器の出土量は他時期にくらべると少ない。この時期の出土土器量の少なさと生活遺構の未発見は意味ありげだが、調査地の偏りとみておきたい。墓をみると、北端部（第１区）とＧ－5a地点では中期前葉がもっとも多く、中期前葉における〝板付集落〟の衰微は考えられないからである。

板付遺跡は前期初頭から後期まで、弥生時代の全期間存続していたことは、遺構のあり方、土器の出土から否定できない（北端部の第１区では後期の遺構はなく、後期土器も数片しか出土しておらず、中期中葉の甕棺墓地廃絶後、古墳時代にいたるまで空白地であったかもしれない)。

墓地の変遷からみると、この〝集落〟は前期末には舶載の細形銅利器を副葬するような階層を生み出したが、それも後代にはつづかず、福岡平野に形成されていった「小国家」を「支配」する集団の翼下に入っていったろう。ただ、今回出土した銅矛鋳型や江戸時代末に出土したと伝えられる銅矛５口などは、その後の〝板付集落〟のあり方を考える上で無視することはできない。

台地をとりまく沖積地にはすでにのべたように前期前葉、中期中葉～後期前葉の遺構が残っていた。第２区の矢板列は環溝と同時で、環溝内に居住した人々によって経営された水田であっただろう。台地上に前期末～中期中葉の墓地を残した人々と直接つながる沖積層の施設はみられないが、中期中葉～後期前葉の、台地際の水路や旧河の土器群・畦状遺構が、台地上と沖積地とを結びつける。

台地東側の沖積地の様相は今のところ明らかでないが、御笠川の氾濫原に生産の場のあったことは想像に難くない（環溝東側の台地と沖積地の境では、道路側溝の改修工事で多くの土器が出土している)。そのあり方は、今回の調査でしられた様相とさして変ることはないだろう。

今回の調査は、当初の目的を十分満たすものではなく、そのための手がかりを得たにとどまる。とはいえ、われわれは板付遺跡の個別的な変遷を叙述し、弥生時代像を一層豊かにしうるだけの、ささやかではあるが、多面的な材料を手にしたといえるであろう。

板付遺跡の台地上は古くからの村があり、現在は多くの家々が建ち並んでいる。沖積地も埋めたてられ、住宅・店舗・アパートが建っている。今回の調査地も、現在は全面に市営住宅の高層アパートが建ち並び、台地北端部は小学校校庭となり、数年前とは様相が一変した。第2区の一部が幸い保存地区となった。環溝部分では保存のために土地の買上げが少しずつ行われ、将来は環溝部と第2区保存地とをあわせ史跡公園とする計画がすすめられている。遺跡地とその周辺の空地に対しては今後も調査を継続し、板付遺跡の全貌を少しでも明らかにする努力がつづけられるはずである。

（後藤）

Tab. 7・2　弥生時代石鎌出土遺跡地名表（横山邦継作製）

No.	出土地	形式	刃方向	全長(cm)	石材	時期	出土状態	備考	文献
1	福岡県福岡市博多区板付	内弯	右刃	?	?	中期	板付Ⅳ式層		①②
2	〃　〃　〃　〃	直?	?	?	?	中期?	表面採集		〃
3	〃　〃　〃　〃	内弯	右刃	?	頁岩質砂岩	前期?	Ⅴ－Ⅳ区攪乱層内		③
4	〃　〃　〃　〃	直?	?	?	砂岩	前期	E-17トレンチ包含層内		
5	〃　〃　〃　〃	直	両刃	?	〃	〃	〃		
6	〃　〃　〃　〃	〃	〃	?		?	G-26トレンチ表採		
7	〃　〃　〃　〃	〃	右刃?	?	頁岩質	?	第1区台地上表土		
8	〃　〃　〃　〃	内弯	両刃?	?	〃	?	〃		
9	〃　〃　那珂川蓑橋下	〃	右刃	20	緑泥片岩	?	表面採集		①
10	〃　〃　博多区比恵	内弯?	右刃	?	硬砂岩	中期?			①
11	〃　〃　南区弥永	内弯	?	13.7＋α	頁岩質砂岩	前期?	板付Ⅰ・Ⅱ式混在層	未製品	⑧
12	〃　〃　西区飯倉鶴町				硬砂岩		前～後期溝内	市教委調査	
13	〃　〃　〃　戸切壱岐小学校	直?	?	?	堆積岩		包含層	〃	
14	〃　粕屋郡古賀町鹿部	直	?	10.7＋α	シルト岩	中期前半?	F－5Ⅲ層	未製品?	⑫
15	〃　〃　〃　〃	〃	両刃	14.7＋α	粘板岩	?	北トレンチ6		〃
16	〃　〃　〃　〃	内弯	左刃?	?	〃	中期前半?	N－5Ⅲ層		〃
17	〃　〃　〃　〃	直?	両刃	10.5＋α	?	?	表面採集		〃
18	〃　〃　〃　〃	?	?	?	粘板岩	?	北トレンチ1・Ⅰ層		〃
19	〃　筑紫郡小郡町大字三沢	?	?	?	?	?	?	県教委調査	㉘
20	〃　宗像郡神興村	内弯?	?	?	?	中期	石庖丁等伴出	未製品	①
21	〃　三井郡小郡町津古内畑	直	両刃	9.0＋α		中期柳園以前			⑪
22	〃　〃　太刀洗町旧飛行場	内弯	〃	28					①⑬⑭
23	〃　嘉穂郡筑穂町上穂波古賀橋	直?	右刃	?					①⑤
24	〃　〃　庄内町東佐与	?	?	?					①②
25	〃　飯塚市立岩	直?	右刃	?	変成岩				①⑤
26	〃　〃　〃	直	〃	13.5	小豆色凝灰岩		表面採集		①⑤
27	〃　〃　〃	内弯	〃	?	安山岩?				①⑤
28	〃　〃　〃	内弯・抉	〃	20.5	?				①②⑤
29	〃　〃　〃	内弯	両刃?	25	小豆色凝灰岩		表面採集	未製品	①⑤
30	〃　〃　〃	〃	?	?	〃		〃	未製品?	①②⑤
31	〃　〃　〃	〃	?	?	〃				①⑤
32	〃　〃　〃　焼ノ正	内弯・抉	両刃	?	〃		表面採集		①⑤⑦

No.	出土地	形式	刃方向	全長(cm)	石材	時期	出土状態	備考	文献
33	福岡県飯塚市立岩焼ノ正	内弯？抉	右刃？	?	小豆色凝灰岩		表面採集		①⑤⑦
34	〃　〃　〃　堀田	内弯	両刃	?	〃		〃		①⑤
35	〃　〃　〃　〃	内弯・抉	右刃	?	〃		〃		①⑤
36	〃　〃　〃　〃	内弯	左刃	?	〃	前期末？	薬包含ピットより出土		①⑤
37	〃　〃　〃　〃	内弯？	?	?	〃		表面採集	未製品	①⑤
38	〃　〃　〃　浦の谷	内弯	?	?	〃		〃	〃	①⑤
39	〃　〃　〃　〃	直？	右刃	?	青色粘板岩		〃		①
40	〃　〃　〃　甘木山	内弯？	?	?	小豆色凝灰岩		〃	未製品	①②⑤
41	〃　〃　〃　夫婦岩	内弯・抉	右刃		〃				①⑤⑦
42	〃　〃　鶴三緒焼穴	直・抉	〃	21？	?				①②⑤
43	〃　〃　東蒲田	内弯？	右刃？		?				①
44	〃　〃　川島八幡社裏	直？			小豆色凝灰岩		表面採集	未製品	①⑤
45	〃　〃　周辺	?	?					未製品？	①⑤
46	〃　田川市伊田町糒上の原	内弯・抉	右刃						①
47	〃　田川郡赤池町草場	内弯・抉？	両刃		凝灰岩か		表面採集		⑥
48	〃　鞍手郡鞍手町殿原	直	左刃	24＋α	砂岩		殿原古墳群中より		⑥
49	〃　直方市感田学行常			17.5	頁岩			未製品	⑥
50	〃　〃　〃　〃　字	内弯・抉	右刃	15＋α	〃		弥生包含層		⑥
51	〃　〃　〃　上原								⑩
52	〃　北九州市八幡区香月町町原				頁岩	前期末～中期初頭	表面採集	未製品	⑨
53	〃　〃　〃　〃　〃							〃	⑨
54	〃　〃〃　〃　〃　〃						P－14号内	〃	⑨
55	〃　〃　〃　〃　〃						P－23号内	〃	⑨
56	〃　〃　〃　〃　〃						〃	〃	⑨
57	〃　〃　〃　〃　〃						P－38号内	〃	⑨
58	〃　〃　〃　〃　〃						〃	〃	⑨
59	佐賀県唐津市宇木鶴崎								①
	〃　〃　柏崎	内弯	両刃		粘板岩		遠賀川～須玖式出土		①
60	〃　神崎郡三田川村吉野ヶ里	内弯？	〃		硬砂岩	中期	〃		①
61	〃　〃　〃　田手	内弯	右刃	15？					①
62	〃　佐賀市金立町大門	内弯・抉	左刃	25？	安山岩	中期	竪穴中須玖式と共伴		①⑭
63	〃　東松浦郡鎮西町波戸柳元	?	?	?			石庖丁伴出		①
64	〃　〃　〃　〃　鳥ノ巣					中期			⑮
65	鹿児島県日置郡金峰町高橋	内弯	左刃？		硬砂岩	中期？	包含層出土		①⑯⑰
66	〃　〃　〃　〃		?		硬砂岩？	〃	〃		①⑯⑰
67	〃　〃　〃　〃	内弯	左刃		硬砂岩	〃	〃		①⑯⑰
68	〃　川内市五代町	〃	両刃	28	安山岩	〃			①
69	山口県下関市吉見下上宮の尾	〃	〃		小豆色凝灰岩		表面採集		①⑱
70	〃　〃　勝山形山	内弯・抉	右刃	23.5		中期	蛤刃石斧伴出		①⑱
71	〃　〃　綾羅木郷	直？	左刃		凝灰岩		表面採集		①
72	〃　〃　〃　〃					第Ⅱ様式	溝内		㉑
73	〃　〃　〃　〃	直	両刃？	14.0		〃	竪穴5621号内		⑳
74	〃　〃　〃　〃	内弯	?				〃　？	未製品	⑲
75	〃　〃　伊倉	直？	両刃	?			A地区下層		㉒
76	〃　〃　〃	内弯	?	?	輝緑凝灰岩		〃	未製品	㉒
77	〃　〃　〃	直・抉	両刃	21＋α	粘板岩	中期初頭	第22号土坑		㉒
78	〃　豊浦郡豊田町川棚田島ヶ丘	内弯	右刃			前期末	溝中より前期末土器共伴		①
79	鳥取県米子市陰田	〃	〃	21？	硬砂岩	中期(?)			①
80	岡山県都窪郡高松町大字加茂惣瓜字高田	〃	両刃？			前期末～中期初	高田式土器共伴	打製品	④
81	高知県中村市入田	〃			硬砂岩～粘板岩	前期			㉓
82	愛媛県松山市周辺	〃	内刃	12		?			①
83	愛知県名古屋市北区西志賀	内弯？	左刃？						①㉔
84	福岡市南区井尻栄町	?	?	?	?	?	?	?	
85	福岡県柳川市西蒲池	?	?	?	?	?	有剣、抉入石斧、凹石弥生中期土器多し		㉕
86	北九州市大字馬場山	?	?	?	硅質細粒砂岩	中期	第34号遺構		㉖
87	〃　〃	内弯？	?	?	〃	中期前半	溝状遺構Ⅶ	未製品	㉖
88	福岡市南区上長尾宝台	直	両刃	?	?	?	表土層		㉗

抉は抉入の略

①藤田等（1964）　大陸系石器―とくに石鎌について―　日本考古学の諸問題
②森貞次郎（1942）　古期弥生式文化に於ける立岩文化期の意義　古代文化13－7
③下條信行（1970）　板付遺跡調査報告　福岡市埋蔵文化財調査報告書8
④日本考古学協会（1972）　日本農耕文化の生成
⑤嘉穂地方史―先史編―（1973）
⑥牛嶋英俊（1974）　遠賀川中流域の磨製石鎌　九州考古学49・50
⑦中山平次郎（1924）　飯塚市付近の遺跡より出土せる石鎌並びにその系統の遺物に就いて　考古学5－4
⑧折尾学・塩屋勝利（1975）　山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告　福岡市埋蔵文化財調査報告書32
⑨北九州市遺跡調査会刊（1973）　原遺跡
⑩直方市教育委員会（1969）　感田上原遺跡発掘調査概報
⑪西谷正他（1970）　津古内畑遺跡―福岡県三井郡小郡町津古所在遺跡調査概報
⑫高倉洋彰（1973）　鹿部山―福岡県粕屋郡古賀町所在遺跡群の調査報告
⑬水野清一・小林行雄（1959）　いしがま　考古学辞典
⑭七田忠志（1936）　北九州の石鎌・其の二新例に就いて　考古学7－8
⑮唐津市史編纂委員会（1962）　唐津市史
⑯河口貞徳（1963）　鹿児島県高橋貝塚発掘概要　九州考古学18
⑰河口貞徳（1965）　鹿児島県高橋貝塚　考古学集刊　3－2
⑱下関市史編修委員会（1962）　下関市史　原始―中世
⑲伊東照雄他（1971）　下関市綾羅木郷台地遺跡調査概報9（1）
⑳伊東照雄他（1971）　下関市綾羅木郷台地遺跡調査概報9（1）　GⅡ、GⅢ、GⅣ、HⅢ、VⅡ地点（1970、1.10～1970.7.10）
㉑伊東照雄他（1971）　下関市綾羅木郷台地遺跡調査概報9（2）　FⅧ、FⅨ、FⅩ、FⅪ、FⅫ、HⅥ、HⅤ、VⅠ
㉒森江直紹他（1973）　伊倉遺跡　山口県埋蔵文化財報告16
㉓岡本健二（1968）　新に発見された高知県窪川町の銅鉾・銅才の新資料　高知県史考古編
㉔紅村弘（1963）　東海の先史遺跡
㉕鏡山猛（1941）　日本原始集落の研究　歴史16－3
㉖北九州市埋蔵文化財調査会（1975）　馬場山遺跡
㉗高倉洋彰（1970）　宝台遺跡　日本住宅公団
㉘西谷正（1971.9）　福岡県三沢所在遺跡予備調査概要　福岡県教育委員会

Tab.7・3　弥生時代環状石斧出土地名表（山口譲治作製）

No.	遺跡	所在地	時期	備考	文献
1	板付	福岡県福岡市博多区板付	弥		
2	都地	〃　〃　西区		金武小学校蔵	
3	釜蓋	〃　大野城市釜蓋			
4	津古内畑	〃　小郡市	弥・前	完形　片刃	
5	三沢	〃　小郡市	〃		①
6	北牟田				
7	三雲	福岡市糸島郡前原町三雲			
8	大和町	〃　粕屋郡古賀町	弥・中		
9	甘木山	〃　飯塚市川島・甘木	〃		②
10	上野	宮崎県西臼杵郡高千穂町上野		南九州短大蔵	
11	三納	〃　西都市		宮崎県立博物館蔵	
12	田代	〃　東臼杵郡西郷村田代			③
13	富子ノ瀬	熊本県本渡市亀場町亀川			④
14	陣の内	長崎県大村市乾馬場郷陣の内			⑤
15	下田	〃　松浦市星鹿町下田		松浦高校蔵	
16	豆酘中学校	〃　下県郡厳町町豆酘中学校		下條信行氏教示	
17	柏崎東方貝塚	佐賀県唐津市柏崎	弥	完形　高倉洋章氏教示	
18	片島	大分県大野郡大野町片島		清水宗昭氏教示	
19	津留	〃　〃　清川村津留		完形　三重東高校蔵	
20	熊夫	〃　東国崎郡武蔵町熊夫	弥・中	清水宗昭氏教示	
21	打井川	高知県大江町	弥	完形	⑥
22	大谷池	愛媛県小松市	弥・中	完形	⑦
23	津吉	〃	〃	完形	⑦
24	紫雲出	香川県三豊郡詫間町	弥	2個有り	⑧
25	土取	徳島県三好郡三好町昼間土取	〃	2個有り	⑨

No.	遺　跡	所　在　地	時　期	備　考	文献
26	城　山	徳島県	弥	完　形	⑩
27	綾羅木	山口県下関市	〃		
28	瀬　田	〃　萩市		完　形　萩郷土館蔵	
29	亀　山	広島県深安郡神辺町道ノ上岡山神社境内	弥・前～中	2個あり	⑪
30	ザ　ブ	〃　福山市津之郷町	弥		⑫
31	佐太前	島根県八束郡鹿島町名分	弥・前		⑬
32	便木山	岡山県赤磐郡山陽町河本便木山	弥？		⑭
33	東高月	〃　〃　山陽町	弥		⑮
34	淵　徳	〃　邑久郡邑久町豊原	弥・中	完　形	⑯
35	久米廃寺	〃　久米町宮尾	弥・中～後		⑰
36	藤井谷	鳥取県倉吉市志津		完　形	
37	青　島	〃　鳥取市高住町青島	弥		⑱
38	佐　津	兵庫県城崎郡香住町佐津		完　形　片刃	⑲
39	寺　内	〃　養父郡和田山町	弥・中？	完　形	⑳
40	辻　井	〃　姫路市	弥？		㉑
41	伯母野山	神戸市灘区篠原伯母野山	弥・中		㉒
42	勝岡山	〃　〃　灘区篠原本町勝岡山	弥		㉓
43	安　満	大阪府高槻市	弥・前？	未製品2個有り	㉔
44	天神山	〃　高槻市	弥・中		㉕
45	山　畑	〃　枚岡市三条町	〃		㉖
46	四ノ辻	〃　枚岡市額田町四辻	〃		㉗
47	瓜生堂	〃　東大阪市	〃		㉘
48	池　上	〃　和泉市池上町	〃	10個有り、縁はあらく加工、土製品有り	㉙㉚㉛
49	唐　古	奈良県磯城郡田原本町唐古	弥	刃部に使用痕有り	㉜
50	上ノ尾	和歌山県日高郡南部川村晩稲	弥？	刃部に刃こぼれがある	㉝
51	森　本	京都府乙訓郡向日町森本下森本	弥・中～後	孔中に木柄の装着痕	㉞
52	大田黒田	和歌山県和歌山市北大田南黒田・中黒田	弥・中		㉟
53	重　竹	岐阜県関市下有地重竹	弥？		㊱
54	西志賀	愛知県名古屋市北区貝田町	弥・前～中		㊱
55	水神平	〃　宝飯郡一宮村上長山水神平			
56	六　供	長野県		完　形	㊲
57	武　津	〃			㊳
58	栃木沢	〃			㊳
59	駒ヶ原	〃　上伊那郡宮田村駒ヶ原	弥		㊴
60	横　前	〃　上伊那郡中川村横前	〃		㊴
61	牧ヶ原	〃　〃　中川村牧ヶ原	〃		㊴
62	山田竹垣外	〃　〃　高遠町山田竹垣外	〃		㊴
63	引　持	〃　〃　高遠町引持	〃		㊴
64	宮　県	〃　伊那市	〃		㊴
65	下毛良	〃　〃　下毛良	〃		㊴
66	長岡社宮地	〃　上伊那郡箕輪町東箕輪	〃		㊴
67	山ノ根	〃　伊那市			㊵
68	長　岡	〃　上伊那郡箕輪町長岡	弥		㊴
69	宮　平	〃　北佐久郡			㊶
70	山口沢	〃			㊳
71	埴原田	〃			㊳
72	北大塩	〃			㊳
73	下高井	〃　下高井郡日野村間山			㊷
74	吉野屋	新潟県南蒲原郡栄町	弥	完　形　未製品有り	㊸
75	下畑王作	〃　佐渡郡畑野町下畑	〃		㊹
76	寸　嵐	神奈川県津久井郡寸嵐	〃	完　形	㊺
77	三殿台	〃　横浜市	〃	完　形	
78	仙　波	栃木県葛生町	〃		㊻
79	成興野	山形県松山町	〃		㊼
80	向　山	〃　村山市向山4290の11	弥・後	完　形	㊼
81	上竹野	〃　最上郡大蔵村上竹野	弥・中	3個有り	㊼
82	川　代	〃　東田川郡羽黒町川代	〃	2個有り、完形	㊼
83	山　崎	〃　〃　立川町山崎	弥・後		㊼
84	玉　川	〃　〃　羽黒町玉川	弥		㊼

①西谷正（1971）　福岡県三沢所在予備調査概要
②浜田信也（1973）　甘木山遺跡　嘉穂地方史　先史編
③石川恒太郎（1964）　西郷村史
④山崎純男（1972）　天草地方の始源文化の一側面　熊本史学
⑤長崎県教育委員会（1962）　長崎県遺跡地名表
⑥岡本健児（1968）　高知県史　考古編
⑦愛媛県立美術館（1973）　伊予の弥生展　図録
⑧小林行雄・佐原真（1964）　紫雲出
⑨柳田俊雄他（1973）　土取遺跡調査報告
⑩徳島県立博物館（1973）　原始古代の徳島
⑪潮見浩・松崎寿和（1962）　広島県亀山遺跡調査報告　広島大学文学部紀要
⑫中田昭（1974）　昭和48年度における広島の埋蔵文化財の現状について　芸備2
⑬東森市良（1966）　島根県の前期弥生式土器　菅田考古8
⑭神原英郎（1971）　便木山遺跡調査報告
⑮岡山県立博物館（1974）　岡山県の原始・古代
⑯小林行雄（1941）　考古学概説
⑰栗野克巳（1973）　中国縦貫自動車道建設に伴なう発掘調査
⑱鳥取県立博物館（1963）　考古資料　鳥取県立博物館所蔵目録9
⑲渡辺誠（1971）　兵庫県城崎郡香住町の縄文時代遺物　古代文化23－4
⑳櫃本誠一（1974）　城の山・池田古墳
㉑辻井遺跡発掘調査団（1971）　辻井遺跡発掘調査報告書
㉒若林泰・斉藤英二（1963）　伯母野山弥生遺跡
㉓石野博信（1967）　兵庫県弥生時代遺跡要項Ⅰ
㉔高槻市史編纂委員会（1973）　安満遺跡　高槻市史6
㉕高槻市史編纂委員会（1973）　天神山遺跡　高槻市史6
㉖藤井直正・都出比呂志（1966）　原史・古代の枚岡
㉗小林行雄（1958）　大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡　弥生土器集成資料編1
㉘田代克巳他（1972）　瓜生堂遺跡Ⅱ
㉙第2阪和国道内遺跡調査会（1969）　M地区の調査　池上・四ツ池遺跡
㉚第2阪和国道内遺跡調査会（1970）　池上・四ツ池
㉛第2阪和国道内遺跡発掘調査報告書（1971）
㉜末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎（1943）　大和唐古弥生式遺跡の研究
㉝西川裕・山本賢（1964）　日高郡南部川村村出土の環状石斧　熊野路考古4
㉞吉本堯俊・北山惇・浪貝毅（1970）　森本遺跡発掘調査概報
㉟森浩一・白石太一郎（1969）　南近畿における前・中期弥生式土器の一様相　考古学ジャーナル33
㊱紅村弘（1963）　東海の先史遺跡
㊲八幡一郎（1930）　環状石斧類　考古学1－2
㊳鳥居龍蔵（1924）　諏訪史1
㊴林茂樹（1966）　上伊那の考古学的調査
㊵大沢和夫・宮沢恒之（1974）　山ノ根遺跡　日本考古学年報25
㊶八幡一郎（1934）　北佐久郡の考古学的調査
㊷長野県教育委員会（1953）　下高井
㊸京都大学（1970）　京大考古学資料目録
㊹本間嘉晴他（1972）　下畑作遺跡第1次緊急調査概要
㊺町田郷土資料館（1974）　石の系譜展図録
㊻平沢一久（1959）　栃木県葛生町仙波弥生祭祀遺跡　日本考古学協会第24回総会研究発表要旨
㊼犬飼安太郎他（1969）　山形県史　考古資料

〔本表作製にあたり、木下修氏（福岡県教育委員会文化課）の協力を得た。〕

Tab. 7・4　弥生時代銅鏃出土地名表（山口譲治作製）

No.	遺跡	所在地	時期	備考	文献
1	板付	福岡県福岡市博多区板付２丁目	弥・後		
2		〃　〃　大字比恵池田	弥	包含層出土	①
3	峯堂	〃　朝倉郡須町大字東小田字峯堂	〃	甕棺内出土、２個出土	①
4	門田	〃　春日市	〃	井上裕弘氏教示	
5		宮崎県西臼杵郡高千穂町浅ヶ部	〃		②
6		〃　東臼杵郡東郷村大字山陰字鶴ノ内	〃？		②
7		〃　日向市富高	〃		②
8		東諸県郡富町木脇	〃		②
9	原の辻	長崎県壱岐郡芦辺町原の辻	弥・中～後	包含層出土、有茎式	③
10	唐神	〃　〃　勝本町立石仲触カラカミ	〃		
11	根獅子	〃　平戸市根獅子町根獅子免		人骨刺突	④
12	本分貝塚	佐賀県	弥・中		
13	詫田(西分)貝塚	〃　神崎郡千代田町詫田西分	弥・後	貝塚	⑤
14	三津永田	〃　〃　東背振村三津永田	弥？		⑥
15		広島県広島市戸坂町西山			
16		〃　福山市赤坂町			
17	上東	岡山県倉敷市	弥・中	有茎式 包含層、住居址（古墳時代初期）出土	⑦
18	向木見	〃　〃　児島向木見	弥・後	有茎式	⑧
19		〃　〃　玉島富平松	弥・中？	有茎式	⑨
20	矢板・山	〃　岡山市矢板山	弥		⑩
21	波来浜	島根県	弥・後～古墳初	有茎式、１・２号墳出土	⑪
22		愛媛県松山市祝谷町		有茎式	⑫
23		〃　越智郡吉海町大黒			
24	松帆古津跡	兵庫県三原郡西淡町松帆			
25	松帆中御堂	〃　〃　〃			
26	松帆戎神社北	〃　〃　〃			
27	松帆	〃　〃　〃			
28	加茂				
29	田能	〃　尼崎市田能中ノ坪	弥・後	有茎式、土坑出土	⑬
30	会下山	〃　芦屋市三条町会下山			⑭
31	売布神社境内	〃　宝塚市小浜米吉売布神社内	弥？		⑭
32	五ケ山				
33	池上	大阪府和泉市池上町			
34	芝坊主山				
35	船橋				
36	勝部	〃　豊中市大字勝部	弥・中	有茎式	⑮
37	国府兎塚				
38	国府				
39	瓜破	〃　東住吉区瓜破西之町			
40	鷹塚山	〃　枚方市伊賀町鷹塚山	弥・後		⑯
41	東奈良	〃　茨木市東奈良町沢良宜西	弥		⑰
42	浜詰	京都府			
43	函石浜	〃　熊野郡久美浜町湊宮函石浜	弥	有茎式	⑱
44	森本	〃　向日市森本	弥		⑲
45	加太大谷川	和歌山県和歌山市加太	弥	有茎式	⑳
46		〃　田辺市芳養町田川谷水鳥山			
47	唐古	奈良県磯城郡田原本町唐古鍵			㉑
48	橿原	〃　橿原市畝傍町	弥・中？	有茎式	
49	醍醐池	〃　〃　醍醐	弥・後？	〃	
50	藤原宮跡	〃　〃　四分町	弥		㉒
51	柳本	〃　天理市柳本町			㉓
52	櫟本	〃　〃　櫟本町			㉓
53	石上	〃　〃　石上町			㉓
54	三島	〃　〃　三島町			㉓
55	榛原高塚	〃　宇陀郡榛原町高塚	弥・中～後		㉔
56		滋賀県長浜市鴨田			

No.	遺跡	所在地	時期	備考	文献
57	大中の湖南	滋賀県近江八幡市大中の湖南			㉕
58		三重県鳥羽市賢			
59	原目山	福井県福井市原目町北平	弥終末～古墳初期		㉖
60	下安原	石川県金沢市下安原町	弥・後		㉗
61	朝日貝塚	富山県氷見			
62		岐阜県美濃加茂市大田町乞食市	弥	有茎式、無茎式	㉘
63	埋田	愛知県津島市	弥？	有茎式	㉙
64	三晴台	〃　名古屋市	弥	無茎式	㉚
65		〃　〃　瑞穂区牧町	〃		㉛
66	高蔵貝塚	〃　〃　熱田区外土居町沢土			㉜
67	西志賀貝塚	〃　〃　北区貝田町西志賀	弥	無茎式	㉜
68	中山藤原	〃　渥美市渥美町中山字藤原	弥	〃	㉜
69	中山清水	〃　〃　中山字清水	弥？	有茎式	㉜
70	中山大森	〃　〃　中山字大森	弥？	〃	㉜
71	大久保	〃　渥美郡田原町大久保藤尾山	弥？	〃	㉜
72	保美貝塚	〃　〃　渥美町福江字保美	弥・後	無茎式	㉝
73	欠山貝塚	〃　宝飯郡小坂井町欠山	弥	有茎式	㉞
74	二夕子	〃　碧海郡桜井町二夕子	弥		㉜
75		〃　西尾市平坂町中畑字清水	弥？		㉜
76	朝日遺跡群検見塚	〃　西春日郡清洲町朝日	弥・中～後		㉟㊱
77	石動道下	長野県中野市日野区間山	弥・後		
78	田溝池	〃　松本市岡田田溝池			
79		〃　下伊那郡神稲村伴野原太郎垣外			㊲
80	灰塚	〃　更埴市灰塚	弥・後	有茎式	㊳
81		静岡県駿東郡清水町徳倉矢崎			
82	諏訪の前	神奈川県小田原市府川諏の前	弥・後	有茎式	㊴㊵
83	そとごう	〃　横浜市戸塚区上柏尾町	弥・後	住居址出土	㊶
84	神庭	〃　川崎市中原町井田	弥・後		㊷
85	霞ヶ関	埼玉県川越市上戸16－1	弥・後	住居址出土	㊸

①坂本真鈴（1969）　夜須町大字東小田字峯堂の甕棺　埋もれていた朝倉文化
②石川恒太郎（1968）　宮崎県の考古学
③鳩田忠正（1944）　長崎県壱岐郡田河村原ノ辻遺跡の研究　日本文化史研究
④金関文夫（1950）　根獅子人骨について（予報）　平戸学術調査報告
⑤橋口達也（1971）　佐賀県背振南麓における弥生社会の発展　九州考古学41～44合併号
⑥金関大夫・坪井清足・金関怒（1972）　佐賀県三津永田遺跡　日本農耕文化の生成
⑦伊藤晃・柳瀬昭彦・池畑耕一他（1974）　上東遺跡の調査　山陽新幹線建設に伴う調査II（岡山以西）　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書2
⑧高橋護（1960）　児島市向木見遺跡発見の二・三の遺物　考古学手帖12
⑨藤田憲司（1973）　倉敷玉島富平村発見の銅鏃　倉敷考古館研究集報9
⑩水内昌康（1958）　備前矢板山出土の2個の銅鏃　古代吉備2
⑪宇野栄（1973）　波来浜遺跡発掘調査報告書
⑫樋口清之（1926）　伊豫に於けるアイヌ系土器発見の二遺跡　考古学雑誌16－10
⑬須崎元一他（1967）　田能遺跡概報
⑭石野博信他（1959）　会下山遺跡　芦屋市史
⑮鳥越憲三郎・藤井直正・萩田昭次・江谷寛・瀬川芳則（1972）　勝部遺跡
⑯瀬川芳則他（1968）　鷹塚山弥生遺跡調査概要報告
⑰兼康保明（1973）　東奈良遺跡　日本考古学年報24
⑱梅原末治（1920）　港村函石濱石器時代の遺跡　京都府史蹟勝地調査會報告第二冊
⑲吉本堯俊・北山惇・浪貝毅（1970）　森本遺跡発掘調査概報
⑳森浩一（1967）　和歌山市加太大谷川遺跡の銅鏃と銅釣針　古代学研究
㉑森本六爾（1924）　大和に於ける史前の遺跡（2）　考古学雑誌14－11
㉒西村康（1973）　藤原宮跡（第3次下層）日本考古学年報24
㉓京都大学（1970）　京大考古学資料目録
㉔河上邦彦（1974）　榛原高塚遺跡　日本考古学年報24
㉕水野正好（1968）　大中の湖南遺跡
㉖甘粕健（1967）　福井市原目山古墳群の調査　日本考古学協会第33回総会研究発表要旨

㉗橋本澄夫（1973）　下安原遺跡　日本考古学年報24
㉘林魁一（1930）　美濃國に於ける彌生式土器及び其の遺跡　考古学１－５・６
㉙津島市史編纂委員会（1968）　埋田遺跡発掘調査報告
㉚見晴台遺跡発掘調査会（1973）　見晴台遺跡第11次発掘調査の記録
㉛小栗鉄次郎（1932）　銅鏃・鉄鏃を出した名古屋市瑞穂区東牧の弥生式遺跡　愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告10
㉜紅村弘（1963）　東海の先史遺跡
㉝斉藤専吉（1924）　銅鏃の新発見　考古学雑誌14－７
㉞久永春男・芳賀陽（1963）　欠山遺跡　瓜郷所収
㉟紅村弘他（1972）　朝日遺跡群予備調査報告
㊱長谷部学（1974）　朝日遺跡群検見塚地点遺跡　日本考古学年報25
㊲永峯光一（1952）　長野県下伊那郡神稲村出土の銅鏃　信濃４－７
㊳増田精一・湯川悦夫（1971）　下条・灰塚
㊴杉山博久（1969）　小田原市・諏訪の前遺跡出土の弥生時代銅鏃と鉄器　考古学ジャーナル30
㊵杉山博久・湯川悦夫（1971）　小田原市諏訪の前遺跡　小田原市郷土文化館研究報告
㊶鈴木敏弘（1972）　そとごう
㊷関俊彦・大三輪竜彦（1973）　東神庭遺跡
㊸昼間孝次（1974）　霞ヶ関遺跡　日本考古学年報25

Tad.7.5　弥生時代鋳型出土遺跡地各表（沢皇臣作製）

No.	遺跡	地名	種類	材質	備考	文献
1	板付	福岡県福岡市博多区板付２丁目	広形銅矛２	砂岩	後期	
2	那珂八幡	〃　那珂宮園那珂八幡	広形銅戈	〃	両面使用	①②
3	井尻	〃　〃　南区井尻熊野権現付近	銅矛２	〃(?)		③④
4	五十川	〃　〃　五十川妙楽寺境内	〃			⑤①
5	高宮神社	〃　〃　高宮高宮神社付近(？)	銅矛４・銅戈１		後期？	⑥①
6	多田羅	〃　東区多田羅字大牟田	広形銅戈１・銅釧１	砂岩〃	後期〃	⑦
7	(伝)多田羅	〃　〃　〃	銅戈	砂岩		⑧
8	勝馬	〃　〃　志賀勝馬字裏	銅剣	〃	中期	⑨
9	弥永原	〃　南区大字警弥郷字原	ガラス勾玉	粘土	後期	⑩
10	月隈(？)	〃　博多区月隈(？)	銅矛(？)			⑥
11	須玖岡本皇后峯	〃　春日市須玖岡本皇后峯(カミサンデンバンジャクデン)	銅矛２	砂岩		③⑪
12	〃　D地点吉村源次郎宅地(当時)	〃　〃	銅矛	〃		⑥⑪
13	〃　吉村百太郎宅地(当時)	〃　〃	〃	〃		⑫⑪
14	〃　エイダ	〃　〃　エイダ	銅剣か矛,２石で１箱			⑪
15	〃　吉村良吉宅地(当時)	〃　〃	銅剣２			⑪
16	〃　熊野神社後方	〃　〃	銅矛			⑪
17	〃　吉村政吉宅地(当時)	〃　〃	〃			⑬⑪
18	〃　某地点	〃　〃	〃			⑪
19	〃	〃　〃	銅戈1,銅釧1,刀子1？			⑪
20	春日	〃　春日	銅矛		春日市中央公民館	
21	大南	〃　大倉字大南	銅戈		後期住居址中より	⑭
22	久保長崎	〃　粕屋郡古賀町大字久保字長崎	〃	砂岩	両面後期住居址中より	⑮
23	焼ノ正	〃　飯塚市大字立岩字焼ノ正	〃	〃		①⑯
24	鑓溝	〃　糸島郡前原町大字三雲字鑓溝	〃		後期	⑥
25	三雲川端	〃　〃　川端	銅矛			①
26	三雲	〃　〃	〃			①
27	吉木	〃　遠賀郡岡垣町大字吉木	銅戈１不明１			⑥
28	中原前	〃　朝倉郡夜須町東小田中原前	銅戈			⑰
29	大宰府(？)	〃　筑紫郡大宰府町	銅矛(？)			⑱⑥
30	西石動	佐賀県神埼郡東背振村石動字土石動	銅戈		両面使用	①
31	櫟ノ木	〃　佐賀市久保泉町大字上和泉字櫟木	〃			⑲
32	秋葉(？)	大分県大野郡三重町秋葉	戈か剣			⑳
33	名古山	兵庫県姫路市名古山	銅鐸	砂岩	中期	㉑
34	田能	〃　尼ヶ崎市田能	銅剣	〃	〃	㉒
35	東奈良	大阪府茨木市東奈良	銅鐸４、戈形祭器１、ガラス勾玉	〃		㉓
36	下ノ方	福岡県飯塚市立岩下ノ方				⑯
37	亀甲	〃　〃　片島亀甲				⑯㉔

①水野清一・樋口隆康・岡崎敬（1958）対馬
②渡辺文吉（1969）那珂八幡雑考　郷土の歴史を語ろう資料第４集　那珂公民館
③青柳種信　筑前国続風土記拾遺
④中山平次郎（1924）井尻の弥生式遺跡　考古学雑誌14－12
⑤中山平次郎（1929）銅鉾鎔笵の新資料　史前学雑誌１－３
⑥高橋健自（1925）銅鉾・銅剣の研究
⑦森貞次郎（1963）福岡県香椎出土の銅釧鎔笵を中心として　考古学集刊２－１
⑧福岡市立歴史資料館（1975）弥生時代の対外交渉展解説目録
⑨森貞次郎・渡辺正気（1958）福岡県志賀島発見の細形銅剣鎔笵　九州考古学３・４
⑩夕刊フクニチ新聞社（1972）奴国展（図録）
⑪浜田耕作・島田貞彦・梅原末治（1930）筑前須珂史前遺跡の研究　京都帝国大学文学部考古学研究報告第11冊
⑫八木奨三郎（1908）両筑の遺物遺跡　国学院雑誌14－７
⑬森本六爾（1929）日本青銅器時代地名表
⑭福岡県教育庁管理部文化課（1974）教育福岡　文化行政特集　昭和49年11・12月号
⑮松岡史・宮原種生（1973）久保長崎遺跡　福間バイパス関係埋蔵文化財調査報告
⑯児島隆人・藤田等編（1973）嘉穂地方史先史篇
⑰松本憲明（1966）福岡県夜須町出土の銅第鎔笵　考古学雑誌52－２
⑱矢野一貞（1853）筑後将士軍談　筑後国史
⑲埋蔵文化財擦覧（1959）
⑳伊東東（1932）豊後国における青銅器関係の新資料　考古学２－１
㉑梅原末治（1960）新出土の銅鐸の鎔笵其他古代学研究25
㉒尼崎市田能遺跡発掘調査委員会（1967）田能遺跡概報
㉓佐原真・金関恕編（1975）古代史発掘４　稲作の始まり
㉔児島隆人（1934）遠賀川上流の弥生式遺跡地に就て　上代文化11・12号

文　献

青柳種信 a　柳園古器畧考（文政５年～６年に成立）
――― b　筑前國續風土記拾遺（文久年間に成立）
板付遺跡保存会（1968）板付遺跡　福岡
板橋旺爾（1973）奴国発掘　東京
岩崎二郎(編)（1975）恵子若山遺跡　東洋開発株式会社　福岡
大分県教育委員会（1964）丹生川遺跡の調査　大分県文化財調査報告書第10集　大分
大野城市教育委員会（1974）大野城市の文化財　第６集　新川特集　大野城
岡崎敬（1971）日本考古学の方法　古代の日本９　東京
小田富士雄（1972～1973）入門講座弥生土器―九州―　考古学ジャーナル76・77・79・82～84　東京
折尾学(編)（1970）福岡市金隈遺跡第一次調査概報　福岡市埋蔵文化財調査報告書第７集　福岡
――　（1971）福岡市金隈遺跡第二次調査概報　福岡市埋蔵文化財調査報告書第17集　福岡
鏡山猛（1936～1937）太宰府の遺跡と条坊(一)・(二)　史淵第16輯・第17輯　九州考古学論攷（1972）所収
――（1939）我が古代社会に於ける甕棺葬　史淵第21輯　福岡　九州考古学論攷（1972）所収
――（1941～1942）原始箱式棺の姿相(一)・(二)　史淵第25輯・27輯　福岡　九州考古学論攷（1972）所収
――（1952～54）甕棺累考(一)・(二)・(三)　史淵第53輯・55輯・62輯　福岡　九州考古学論攷（1972）所収
――（1953 a）石蓋土壙に関する覚書　史淵第56輯　福岡　九州考古学論攷（1972）所収
――（1953 b）高塚古墳の源流　史淵第58輯　福岡　九州考古学論攷（1972）所収
――（1956～59）環溝住居阯小論(一)～(四)　史淵第67輯・68合輯・71輯・74輯・78輯　福岡　九州考古学論攷（1972）所収
――（1964）弥生期の水田区画について(上)・(中)・(下)　史淵第92輯・95輯・96輯　福岡　九州考古学論攷（1972）所収
賀川光夫(編)（1970）稲荷山遺跡緊急発掘調査　大分県文化財調査報告第20・21合輯　大分
亀井明徳（1973）九州出土の宋・元代陶磁器の分析――太宰府出土品を中心として――考古学雑誌第58巻第４号　東京
河口貞徳（1963）鹿児島県高橋貝塚発掘概報　九州考古学18　福岡
―――（1965）鹿児島県高橋貝塚　考古学集刊第３巻２号　東京
九州大学考古学研究室（1966）北部九州（唐津市）先史集落遺跡の合同調査　九州考古学29・30　福岡
――――――――（1968）有田遺跡　福岡市埋蔵文化財調査報告書第２集　福岡
九州文化総合研究所（1958）大分県国東町安国寺弥生式遺跡の調査　東京
栗原和彦（1973）湯納遺跡（中間報告会資料）　福岡
黒崎直（1970）木製農耕具の性格と弥生社会の動向　考古学研究第16巻第３号　岡山
後藤直（1972）板付水田遺跡の発掘調査　ふるさとの自然と歴史16　福岡
――・横山邦継(編)（1975）板付周辺遺跡調査報告書(2)　福岡市埋蔵文化財調査報告書第31集　福岡
佐賀県教育委員会（1973）土生・久蘇遺跡　佐賀県文化財調査報告書第25集　佐賀
佐賀県立博物館（1972）土生・久蘇遺跡展―原始農耕社会を探る―　佐賀
塩谷勝利・折尾学(編)（1975）山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告　福岡市埋蔵文化財調査報告書第32集　福岡
島津義昭(編)（1974）牟多田遺跡――福岡市西区大字野方字牟多田壱岐中学校造成地区調査報告――　福岡市埋蔵文化財調査報告書第27集　福岡
清水宗昭（1972）石材からみた九州先土器時代の問題――(1)剥片石器原石の分布――　速見考古第２・３号
下條信行（1970）福岡市板付遺跡調査報告　福岡市埋蔵文化財調査報告書第８集　福岡
――（1972）九州考古学の諸問題Ⅲ弥生時代　考古学研究第19巻第１号　岡山
――（1973）今山遺跡(1)――石斧製作の開始期と遺跡の現状について――　福岡市立歴史資料館調査研究報告１　福岡
――（1975 a）石器の製作と技術　稲作の始まり（古代史発掘４）　東京
――（1975 b）未製石器よりみた弥生時代前期の生産体制　九州考古学の諸問題　東京
――（1975 c）北九州における弥生時代の石器生産　考古学研究第22巻第１号　岡山
杉原荘介（1955）弥生文化　日本考古学講座４　東京
―――（1960）農業の発生と文化の変革　世界考古学大系２　東京
高倉洋彰(編)（1970）宝台遺跡――福岡市上長尾所在弥生時代集落遺跡――　日本住宅公団　福岡
―――（1973 a）弥生時代祭祀の一形態――甕棺墓地における土器祭祀を中心として――　古代文化第25巻第１号　京都
―――(編)（1973 b）鹿部山遺跡　日本住宅公団　福岡
―――（1973 c）墳墓からみた弥生時代社会の発展過程　考古学研究第20巻第２号　岡山
―――（1975）弥生時代の集団組成　九州考古学の諸問題　東京
高橋健自（1925）銅鉾・銅剣の研究　東京
高橋徹（1975）恵子若山遺跡の性格　恵子若山遺跡所収　福岡

高山明編（1969）埋もれていた朝倉文化　甘木
筑紫野史学研究会（1972）見捨てられた春住遺跡——縄文晩期終末へのアプローチ——　筑紫野史学研究会会報第２集　福岡
富木隆・佐藤暁・杉崎重臣（1962）丹生川　大分大学学芸学部総合調査報告　大分
那珂公民館（1966）郷土の歴史を語ろう　資料第１集　福岡
長崎県教育委員会（1972）里田原遺跡（図録）　長崎県文化財調査報告書第14集　長崎
———（1974）　里田原遺跡　長崎県文化財調査報告書第21集　長崎
———（1975）　里田原遺跡展——弥生工人のむら——　長崎
中山平次郎（1916）　筑前国筑紫郡雑飼隈遺跡近傍の堅穴　考古学雑誌第７巻３号　東京
———（1917ａ）銅鉾・銅剣の新資料　考古学雑誌第７巻７号　東京
———（1917ｂ）九州北部に於ける先史原史両時代中間期の遺物に就て　考古学雑誌第７巻10号・11号　第８巻１号・３号　東京
———（1918ａ）銅鉾銅剣並に石剣発見地の遺物(上)・(下)　考古学雑誌第８巻８号・９号　東京
———（1918ｂ）銅鉾銅剣発見地の遺物追加(上)・(下)　考古学雑誌第８巻10号・11号　東京
———（1920）　大甕を発見せる古代遺跡(一)～(三)　考古学雑誌第11巻１号・２号・４号　東京
———（1923）　焼米を出せる堅穴址　考古学雑誌第14巻１号　東京
———（1924ａ）井尻の弥生式遺跡　考古学雑誌第14巻12号　東京
———（1924ｂ）地禄天神社銅鉾・銅剣　福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第１輯　福岡
———（1927ａ）須玖岡本の遺物　考古学雑誌第17巻８号・９号　東京
———（1927ｂ）井尻及寺福童の甕棺　考古学雑誌第17巻12号　東京
———（1929）　銅鉾鐏范の新資料　史前学雑誌第１巻第３号　東京
———（1931）　雑飼隈駅付近に発見せる石蓋土壙と無蓋土壙　考古学雑誌第21巻９号　東京
西谷正編(編)（1970）津古内畑遺跡——福岡県三井郡小郡町津古所在遺跡発掘調査概要——　小郡市教育委員会　小郡
浜田耕作・島田貞彦・梅原末治（1930）筑前須玖岡本遺跡の研究　京都帝国大学考古学研究報告11　京都
橋口達也・折尾学（1973）小児骨に伴ったゴホウラ製貝輪——福岡市金隈出土 146号甕棺の調査——　九州考古学47　福岡
浜田信也・酒井仁夫(編)（1971）中・寺尾遺跡——福岡県筑紫郡大野町中所在甕棺・土壙墓群発掘調査報告——大野町の文化財第３集　大野城
原田大六（1954）日本古墳文化——那国王の環境——　東京
福岡県教育委員会（1963）福岡県須玖・岡本遺跡調査概報　福岡県文化財調査報告書第29集　福岡
———（1965）福岡県弥永原遺跡調査概要　福岡県文化財調査報告書第32集　福岡
———（1972）湯納遺跡　教育福岡11月号　福岡
———（1973）湯納遺跡　教育福岡11月号　福岡
———（1971）福岡市埋蔵文化財遺跡地名表総集編　福岡市埋蔵文化財調査報告書第12集　福岡
福岡市立歴史資料館（1973）展示品図録(I)　福岡
藤田等（1964）大陸系石器——とくに石鎌について——　日本考古学の諸問題　岡山
別府大学考古学研究室（1971）持田ヶ浦古墳群－１・２号調査報告－　福岡市埋蔵文化財調査報告書第16集　福岡
松岡史・亀井勇（1968）福岡県伯玄社遺跡調査概報　福岡県文化財調査報告書第36集　福岡
———・宮原種生（1973）久保長崎遺跡　福間バイパス関係埋蔵文化財調査報告　福岡県教育委員会　福岡
三島格（1968）弥生時代における南海産貝使用の腕輪　日本民族と南方文化　金関丈夫博士古稀記念論文集　東京
———・後藤直（1973）福岡市板付水田遺跡　日本考古学年報24（1971年版）　東京
三野章（1967）福岡市弥永原遺跡調査概要　福岡市住宅供給公社　福岡
水野清一・樋口隆康・岡崎敬（1953）対馬　東亜考古学叢刊乙種第６冊　東京
宮小路賀宏・柳田康雄(編)（1969）一の谷遺跡——筑紫郡春日町大字一の谷所在甕棺墓等の調査——　春日町文化財調査報告書第２集　春日
宮竹公民館（1966）日佐のむかし
森貞次郎（1955）北九州　日本考古学講座４弥生文化　東京
———（1961）福岡県夜臼遺跡　日本農耕文化の生成　東京
———（1966）九州　日本の考古学第３巻　東京
———（1968）弥生時代における細形銅剣の流入について　日本民族と南方文化　東京
———・岡崎敬（1961）福岡県板付遺跡　日本農耕文化の生成　東京
森本六爾（1935）考古学　歴史教育講座第二輯　東京
柳田純孝(編)（1974）野方中原遺跡　福岡市埋蔵文化財調査報告書第30集　福岡
山崎茂孝・桜井康治（1967）伯玄社遺跡調査研究報告——土壙墓と木棺墓——　大濠高校考古学同好会　福岡
山崎純男(編)（1974）宝満尾遺跡　福岡市埋蔵文化財調査報告書第26集　福岡
横山邦継(編)（1974）板付周辺遺跡調査報告書(1)　福岡市埋蔵文化財調査報告書第29集　福岡
渡辺文吉（1969）那珂八幡雑考　郷土の歴史を語ろう資料第４集　那珂公民館　福岡